愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第108集

水　入　遺　跡

第１分冊

旧石器時代～平安時代編

2005

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

カラー図版 1

水入遺跡遠景（南から）

平成 11 年 12 月初旬の状況。写真手前の調査区（99A 区）では、古墳時代中期に掘られた大溝がひときわ大きくみえる。大溝の周辺にある無数の遺構を示す白線は、縄文時代から江戸時代の初め頃まで幾多の人々がそこで生活を営んだ痕跡である。99A 区の北側（写真では奥）にある貯水池（99D 区：撮影時点では調査終了）一帯には東西方向にのびる谷地形がある。その名残りが宝蔵川であった。そしてさらにその北側には、奈良～平安時代前半の集落が広がっていた。遺跡最北部では後期旧石器が多数出土した。

写真右手の大河は矢作川で、ちょうど丘陵地帯から平野部へ抜け出る位置にあたる。川を挟んで左が豊田市、右が岡崎市である。水入遺跡の北～西端を画する青い一条の流れが明治用水である。この水が現代の碧海台地をうるおしている。明治用水の左手にみえる森が糟目春日神社である。『延喜式』式内社のひとつでもある。ただし、この位置に社地が移転したのは近代で、それまでは水入遺跡の北側（写真で矢作川と明治用水が接する辺り）にあり、洪水にたびたび襲われていたという。

カラー図版 2

99A 区大溝（99ASD01）全景（南西から）

前頁写真と同じ日の 99A 区である。大溝両側の遺構がやや希薄になる帯状の範囲がある。ここに大溝開削時に造られた土塁があり、北隣の 99B 区では、その下から弥生時代末期の竪穴建物跡が確認された。2 つある土橋は土層観察のためのベルト。それとは別に大溝の底に土橋状の高まりがいくつか見られる。これら土橋状の高まりによってつくられた窪地が大溝の開削目的を想定する鍵となった。なお、写真手前側の大溝底部からは石製模造品や木製刀形といった祭祀具が集中的に出土した。

カラー図版3

古墳時代中期の土器

大溝や段丘崖には大量の須恵器や土師器が投棄されていた。そのほとんどは日常生活用の調理具・貯蔵具・供膳具であるが、ミニチュア土器や小型壺は、集中して出土する傾向にあり、それらは祭祀の場で用いられたものと考えられる。

須恵器は猿投窯で須恵器が生産され始めた頃のものである。よく焼きしまった白っぽい焼き上がりから、名古屋市東部の東山地区からもたらされたものと考えられる。これら須恵器とともに尾張東部地域から伝播し西三河地域に定着したのが椀状杯部高杯である。それ以前は杯部が直線的な形態の有稜杯部高杯であった。須恵器の登場は土師器の形状変化に影響した。

土師器は西三河地域の地域色をよく表わす。ハケ調整の甕が少なく、指ナデ調整の甕が主体である。また、尾張（平野）地域に由来するＳ字状口縁台付甕や宇田型甕は全くない。西三河地域のなかでも特に碧海郡域では、土器作りにあたって新しい外来の要素を次々と取り入れるにも関わらず、指ナデ調整に代表される製作技術が失われることはなかった。

カラー図版 4

古代集落の景観

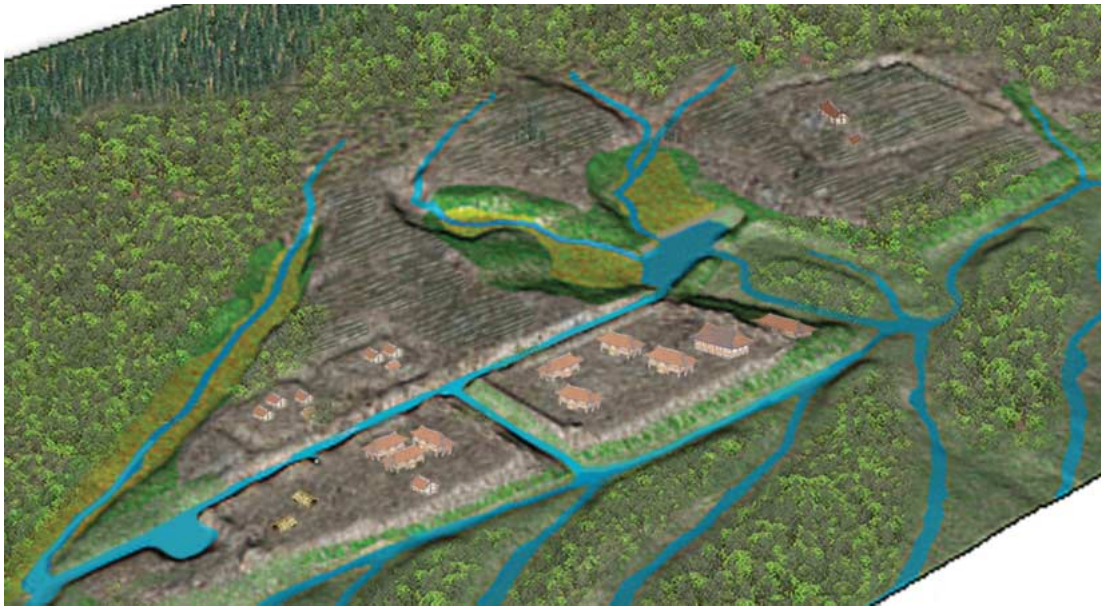
98D 区の竪穴建物と掘立柱建物。主な掘立柱建物の柱位置に人が立っている。水入遺跡では 8 世紀前半に急速な集落域の拡大がみられる。

98D 区 SK241 出土の青磁椀

水入遺跡における鎌倉時代は墓場の時代であった。300 基以上の土坑墓が造られた。墓穴には円形と方形があり、円形土坑墓からは灰釉系陶器（山茶椀）が出土する程度であるが、方形土坑墓からは青磁椀や刀子などが出土した。被葬者の性格に関わるとみられる。

戦国時代の土塁と溝に囲まれた掘立柱建物群（南西から）

戦国時代には、埋もれかかっていた大溝の上部を改作して幅約10mにおよぶ運河として再生する。大溝にそって築かれた土塁の内側には太い柱が据えられたと考えられる掘立柱建物が複数建てられる。川湊とその管理や物資保管に関わる施設と考えられる。



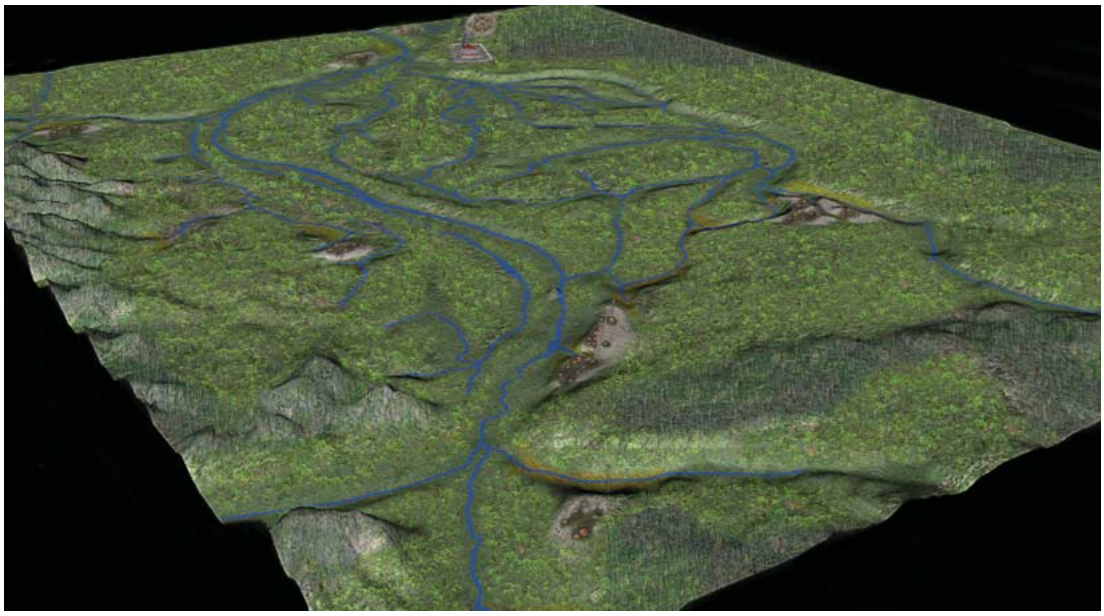
南東からみた戦国時代の水入遺跡の景観（想定復元）

上写真の建物群を復元。大溝と土塁に囲まれた建物は大型であるが、その西に位置するごく一般的な大きさの屋敷地区画には小さな掘立柱建物が建てられる。

カラー図版 6

南からみた古墳時代中期の碧海郡北部の景観（想定復元）

矢作川は網の目のように低地部を流れ、現在の岡崎市中心部西方で合流する。確認されている集落のほとんどは台地・丘陵地縁辺に立地するが、今後は低地部での発見も予想される。水入遺跡はこの絵では一番奥になる。この地域の特徴として大型の前方後円墳がなく、直径 20 ～ 30m の円墳が単独で台地縁辺に立地する。



北東からみた奈良時代前半の碧海郡北部の景観（想定復元）

手前に大きくみえる集落が水入遺跡。右手に神明遺跡がみえ、遠く矢作川が収束する地点に北野廃寺の伽藍がみえる。

序

西三河地方の大河である矢作川をのぞむ平野には、広大な水田地帯が広がり、この地方の農業生産力の強さを感じさせます。しかしここに至るまでに、水といかにして良好な関係を築くかという課題に苦闘した、営々たる過去の人々の努力がありました。

広大な水田地帯の下に眠る遺跡こそ、その証だといえます。

ここに、豊田市南部に位置する水入遺跡の発掘調査報告書を刊行いたします。遺跡は矢作川を真横にみる立地にあり、まさに人々と水が深く関わる場所でした。そして約２万年前の後期旧石器時代から近代までの長い間にわたる、人々の営みの痕跡が折り重なるようにして確認されました。全長 200m 以上の古墳時代の大溝、200 棟以上の奈良・平安時代の竪穴建物、300 基以上の鎌倉・室町時代の土坑墓など、時代ごとに性格は異なるものの、多数の遺構そして遺物が確認されました。特に古墳時代の大溝は、間接的に矢作川の水を灌漑に供する目的で掘削され、付近の水田を潤したと考えられます。そして大溝による灌漑がきっかけとなって周辺集落が拡大し、やがてはこの地方における外来文化を取り入れる拠点へ成長したとみられます。このように古墳時代だけをみてもさまざまな歴史を示してくれます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまでにご協力いただきました関係各機関・個人そして地域の方々に厚くお礼申し上げますとともに、本書によって地域史がより一層厚みのあるものとなり、ひいては文化財保護の一助となることを祈念いたしたいと思います。

平成 17 年 8 月

財団法人　愛知県教育サービスセンター

理事長　古池庸男

例　言

1. 本書は、愛知県豊田市渡刈町西糟目・大屋敷に所在する水入遺跡（遺跡番号 67-475）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、第二東海自動車道豊田東インターチェンジ建設にともなう事前調査として、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、財団法人愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。
3. 調査期間は平成 10（1998）年 10 月から平成 12 年 3 月までで、調査面積は平成 10 年度が 11600m² で平成 11 年度が 56250m² で、総計 67850m² である。
4. 調査担当者は、赤塚次郎（主査、現主任主査）、佐藤公保（主査、現愛知県立惟信高等学校）、川井　啓介（調査研究員、現愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室）、、木川正夫（同）、鈴木達也（調査研究員、現愛知県立日進西高等学校）小嶋廣也（調査研究員、現愛知県立知立南高等学校）、鈴木　裕（調査研究員、現碧南市立碧南中学校）、竹内　睦（調査研究員、現東海市立加木屋南小学校）、皆見秀久（調査研究員、現愛知県立安城南高等学校）、花井伸（調査研究員、現三好町立三好中学校）、中野良法（調査研究員、現愛知県立大府東高等学校）、洲嵜和宏（調査研究員、現愛知県立西春高等学校）、成瀬友弘（調査研究員、現愛知県立豊野高等学校）、池本正明（調査研究員、現主査）、酒井俊彦（同）、永井邦仁（調査研究員）である。
5. 発掘調査にあたっては次の各機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課（現生涯学習課文化財保護室）、愛知県埋蔵文化財調査センター、豊田市教育委員会、日本道路公団、豊田市渡刈町
6. 遺構の航空測量は株式会社パスコが実施した。
7. 本書の作成にかかる整理作業は平成 13（2001）年度を川井が、平成 14（2002）年度～平成 16（2004）年度を永井が担当し、調査研究補助員・整理補助員がこれを補佐した。
8. 遺物の写真撮影は金子知久氏（有限会社写真工房遊）と福岡栄氏に、一部の遺構実測図トレースは株式会社パスコに、遺物実測図トレースは株式会社セビアスに委託した。
9. 本書は 3 分冊構成で、第 1 分冊が序章～第 6 章古代、第 2 分冊が第 7 章鎌倉時代～第 11 章考察、第 3 分冊が写真図版と遺構基本図からなる。
9. 本書の執筆は第 2 章第 2 節を川添和暁（調査研究員）、第 7 ～ 9 章と第 11 章第 5 節を川井、第 10 章第 1 節を鬼頭剛（調査研究員）同第 4 節を鈴木正貴（主任）が担当し、第 10 章第 7 節を森勇一氏（愛知県立津島高等学校）、 第 10 章第 6 節を藤根久氏・今村美智子（株式会社パレオ・ラボ）、第 10 章第 5 節を植田弥生氏・佐々木由香氏・松葉礼子氏（同）、第 10 章第 8 節を新山雅広氏（同）が執筆した。上記以外は永井が執筆した。
10. 本書の編集は第 7 ～ 9 章を川井がおこなったが、総括編集は永井がおこなった。
11. 本書の作成に至るまでにで次の各機関・各位のご指導とご協力をいただいた。
長屋康二　白石浩之　鈴木康二　森　泰通　渡辺　誠　畑　大介　八賀　晋　城ヶ谷和広
山中　章　齋藤基生　鈴木忠司　安達厚三　水野裕之　伊藤正人　江崎　武　太田多津雄
海津正倫　森　勇一　楯崎彰一　麻生　優　伊藤秋男　小幡早苗　木戸美紀　伊藤久美子
都築暢也　松井直樹　北村和宏　岡安雅彦　天野博之　松井孝宗　鈴木昭彦　鈴木とよ江
加納俊介　荒井信貴　鵜飼堅証　藤沢良佑　赤羽一郎　山中敏史　杉浦裕幸　荻野繁春
大庭康時　豊田市教育委員会　西尾市教育委員会　安城市教育委員会　刈谷市教育委員会
岡崎市教育委員会
12. 本書で使用する遺構の略記号は基本的には以下の通り対応するが若干異同がある。
SA…柵・塀、SB…竪穴建物、SD…溝、SE…井戸、SK…土坑（墓）、P…土坑・柱穴、SX…その他（土塁など）・自然地形
13. 調査に使用した座標は、国土交通省告示に定められた国土座標（平面直角座標）第7系に基づくものであり、海抜標高は T.P.（東京湾平均海面高度）による。ただし表記については旧標準「日本測地系」による。
14. 本書における土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
15. 発掘調査の記録（実測図・写真など）は財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
16. 発掘調査で出土した遺物は愛知県埋蔵文化財調査センター（愛知県海部郡弥富町前ケ須新田字野方 802-24　電話 0567-67-4164）で保管している。

総　目　次

第１分冊

第１章　序説

第２章　旧石器時代から縄文時代の石器

第３章　縄文時代の遺構と遺物

第４章　弥生時代末期の遺構と遺物

第５章　古墳時代中期の遺構と遺物

第６章　奈良時代から平安時代の遺構と遺物

第２分冊

第７章　鎌倉時代の遺構・遺物

第８章　戦国時代から江戸時代前半の遺構・遺物

第９章　江戸時代後半の遺構・遺物

第10章　環境・年代・胎土の科学分析

第11章　考察

抄録

第３分冊

写真図版　遺構

写真図版　遺物

遺構基本図

第 1 分冊目次

第１章　序説
第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　1
第２節　試掘調査と調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　3
第３節　遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　8
第４節　基本土層と時期区分・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　14
第２章　旧石器時代から縄文時代の石器
第１節　調査の方法と土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　16
第２節　旧石器・縄文時代の石器・・・・・・・・・・・・・・・・（川添）　19
第３章　縄文時代の遺構と遺物
第１節　縄文時代草創期から早期の遺構・・・・・・・・・・・・・（永井）　53
第２節　縄文時代中期後葉から後期前葉の遺構と遺物・・・・・・・（永井）　55
第３節　縄文時代後期から晩期の遺構と遺物・・・・・・・・・・・（永井）　62
第４節　小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　63
第４章　弥生時代末期の遺構と遺物
第１節　概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　65
第２節　竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　65
第３節　大溝東土塁下層の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　69
第４節　小結・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　74
第５章　古墳時代中期の遺構と遺物
第１節　概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　75
第２節　大溝と段丘崖・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　76
第３節　竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　90
第４節　掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）　96
第５節　古墳時代中期の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）103
第６節　古墳時代中期の木製品・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）164
第７節　古墳時代の石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）172
第６章　奈良時代から平安時代の遺構と遺物
第１節　概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）175
第２節　古代における大溝と段丘崖の状況・・・・・・・・・・・・（永井）177
第３節　遺跡中央の谷地形・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）213
第４節　竪穴建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）217
第５節　掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）367
第６節　その他の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・（永井）377

第１分冊挿図目次

第 1 図　水入遺跡の位置と豊田市南部で調査が実施された遺跡の位置図　1
第 2 図　試掘調査で出土した土器・陶器実測図　3
第 3 図　水入遺跡試掘調査地点図　4
第 4 図　西三河地域の地質分類図　9
第 5 図　水入遺跡周辺の遺跡分布図　12
第 6 図　99A 区調査区北壁土層断面図　14
第 7 図　土器・陶磁器による時期区分　15
第 8 図　99J 区石器・円礫出土地点分布図　17
第 9 図　99J 区窪地の推定範囲図　18
第 10 図　99J・K 区旧石器・縄文時代石器出土地点分布図　20
第 11 図　99J・K 区旧石器・縄文時代石器器種ごと出土地点分布図　21
第 12 図　旧石器 A 群接合資料出土地点分布図　22
第 13 図　旧石器 A 群出土地点分布図　23
第 14 図　旧石器 A 群接合資料出土地点分布図　24
第 15 図　旧石器 B 群出土地点分布図　27
第 16 図　旧石器 C 群出土地点分布図　29
第 17 図　水入遺跡出土石器実測図（1）　38
第 18 図　水入遺跡出土石器実測図（2）　39
第 19 図　水入遺跡出土石器実測図（3）　40
第 20 図　水入遺跡出土石器実測図（4）　41
第 21 図　水入遺跡出土石器実測図（5）　42
第 22 図　水入遺跡出土石器実測図（6）　43
第 23 図　水入遺跡出土石器実測図（7）　44
第 24 図　水入遺跡出土石器実測図（8）　45
第 25 図　水入遺跡出土石器実測図（9）　46
第 26 図　水入遺跡出土石器実測図（10）　47
第 27 図　水入遺跡出土石器実測図（11）　48
第 28 図　水入遺跡出土石器実測図（12）　49
第 29 図　水入遺跡出土石器実測図（13）　50
第 30 図　水入遺跡出土石器実測図（14）　51
第 31 図　水入遺跡出土石器実測図（15）　52
第 32 図　98C・99B・C 区縄文時代早期焼土坑分布図　53
第 33 図　99B・99C 区縄文時代草創期～早期の焼土坑平面・土層断面図　54
第 34 図　99D 区縄文時代竪穴建物配置図　55
第 35 図　99DSB15 平面・断面図　56
第 36 図　99DSB15 出土土器実測図　57
第 37 図　99DSB16 平面・断面図　58
第 38 図　99DSB30 平面・断面図　59
第 39 図　99DSB35 平面・断面図　59
第 40 図　99KSB1075 平面・断面図と出土土器実測図　60
第 41 図　縄文時代中期の出土土器実測図　61
第 42 図　99ESK175 の平面・断面図と出土土器実測図　62
第 43 図　99JSK109 平面および掘形断面図　63
第 44 図　縄文時代後・晩期の出土土器実測図　63
第 45 図　縄文時代草創期～早期の焼土坑分布図　64
第 46 図　縄文時代中期の集落構成図　64
第 47 図　99BSB3001 平面・土層断面図と出土遺物実測図　66
第 48 図　99BSB3012 平面・土層断面図と出土遺物実測図　67
第 49 図　99BSB3013・3014 平面・土層断面図　67
第 50 図　99BSB3015 平面・土層断面図　68
第 51 図　99BSB3018 ～ 3020 平面・土層断面図　68
第 52 図　99BSB3018・SK3031 ～ 3033 平面・土層断面図　69
第 53 図　99A 黒色層出土土器実測図　70
第 54 図　99BSX02 出土土器実測図（1）　71
第 55 図　99A 黒色層出土土器実測図（2）　72
第 56 図　99BSD01・SX06・SX8002・P4000 出土土器実測図　73
第 57 図　弥生時代末期の竪穴建物配置図　74
第 58 図　水入遺跡古墳時代中期主要遺構配置図　75
第 59 図　大溝概略図　76
第 60 図　大溝・土塁・船着場遺構（古代）遺構全体図　77
第 61 図　大溝断面図（縦断面、横断面）　79
第 62 図　大溝（98B2SD01）土層断面図　80
第 63 図　大溝（99ASD01）土層断面図　80
第 64 図　大溝（99BSD01 南ベルト）土層断面図　81
第 65 図　大溝（99BSD01 中央ベルト）土層断面図　81
第 66 図　大溝（99BSD01 北ベルト）土層断面図　82
第 67 図　大溝（99CSD01 調査区南壁）土層断面図　82
第 68 図　98C 区調査区北壁土層断面図　84
第 69 図　段丘崖（98C2SX01）全体図　85
第 70 図　段丘崖（98C2SX01 中央ベルト）土層断面図　85
第 71 図　段丘崖（98C2SX01 調査区南壁）土層断面図　86
第 72 図　段丘崖（98C2SX01 南ベルト）土層断面図　87
第 73 図　段丘崖（98C2SX01 調査区北壁）土層断面図　87
第 74 図　98C2SB01 平面・土層断面図　90
第 75 図　98C2SB01 炭化材出土状況図　91
第 76 図　99BSB01 平面・土層断面図　92
第 77 図　99BSB01 柱穴想定図　93
第 78 図　99BSB12・13 平面・土層断面図　94
第 79 図　99KSB1071 平面・土層断面図　95
第 80 図　大屋敷地区古墳時代主要遺構配置図　96
第 81 図　98B2・C2 区掘立柱建物平面図　97
第 82 図　99A 区掘立柱建物平面図　98
第 83 図　99B 区掘立柱建物平面図（1）　100

第 84 図　99B 区掘立柱建物平面図（2）　101
第 85 図　99C 区掘立柱建物平面図・土層断面図　102
第 86 図　水入遺跡出土古墳時代中期土器主要器種分類図　103
第 87 図　大溝最下層出土土師器実測図　105
第 88 図　98B2SD01 出土土師器実測図　106
第 89 図　98B2SD01 出土土器実測図（1）　107
第 90 図　98B2SD01 出土土師器実測図（2）　108
第 91 図　98B2SD01 出土土器実測図（3）　109
第 92 図　99ASD01 出土土器実測図（1）　110
第 93 図　99ASD01 出土土器実測図（2）　111
第 94 図　99ASD01 出土土器実測図（3）　112
第 95 図　99ASD01 出土土器実測図（4）　113
第 96 図　99ASD01 出土土器実測図（5）　114
第 97 図　99ASD01 出土土器実測図（6）　115
第 98 図　482 脚部内面布目拓影　116
第 99 図　99BSD01 出土土器実測図（1）　117
第 100 図　99BSD01 出土土器実測図（2）　118
第 101 図　99BSD01 出土土器実測図（3）　119
第 102 図　99BSD01 出土土器実測図（4）　120
第 103 図　99BSD01 出土土器実測図（5）　121
第 104 図　99BSD01 出土土器実測図（6）　122
第 105 図　99BSD01 出土土器実測図（7）　123
第 106 図　99BSD01 出土土器実測図（8）　124
第 107 図　99BSD01 出土土器実測図（9）　125
第 108 図　99BSD01 出土土器実測図（10）　126
第 109 図　99BSD01 出土土器実測図（11）　127
第 110 図　99BSD01 出土土器実測図（12）　128
第 111 図　630 脚部内面布目拓影　129
第 112 図　99CSD01 出土土器実測図（1）　130
第 113 図　99CSD01 出土土器実測図（2）　131
第 114 図　99CSX13 出土土器実測図（1）　132
第 115 図　99CSX13 出土土器実測図（2）　133
第 116 図　98C2SX01 下黒色層出土土器実測図（1）　134
第 117 図　98C2SX01 下黒色層出土土師器実測図（2）　135
第 118 図　98C2SX01 下黒色層出土土師器実測図（3）　136
第 119 図　98C2SX01 出土土器実測図（1）　137
第 120 図　98C2SX01 出土土器実測図（2）　139
第 121 図　98C2SX01 出土土器実測図（3）　140
第 122 図　98C2SX01 出土土器実測図（4）　141
第 123 図　98C2SX01 出土土器実測図（5）　142
第 124 図　98C2SX01 出土土器実測図（6）　143
第 125 図　98C2SX01 出土土器実測図（7）　144
第 126 図　98C2SX01 出土土器実測図（8）　145
第 127 図　98C2SX01 出土土器実測図（9）　146
第 128 図　98C2SX01 出土土器実測図（10）　147
第 129 図　98C2SX01 出土土器実測図（11）　148
第 130 図　99ASX01 出土土器実測図（1）　149
第 131 図　99ASX01 出土土器実測図（2）　150
第 132 図　99ASX01 出土土器実測図（3）　151
第 133 図　99ASX01 出土土器実測図（4）　152
第 134 図　99ASX01 出土土器実測図（5）　153
第 135 図　99BSX02 出土土器実測図　154
第 136 図　98C2SB01 出土土師器実測図　154
第 137 図　99BSB01 出土土器実測図（1）　155
第 138 図　99BSB01 出土土器実測図（2）　156
第 139 図　99BSB01 出土土器実測図（3）　157
第 140 図　99BP130010 出土土器実測図　157
第 141 図　99BSB01 床面土坑・ピット出土土器実測図　158
第 142 図　99KSB1071 出土土器実測図（1）　159
第 143 図　99KSB1071 出土土器実測図（2）　160
第 144 図　99K 区土坑出土土器実測図　160
第 145 図　99ASK2005 平面・断面図と
98B2・C2・99A 区土坑出土土器実測図　161
第 146 図　99BSK10 平面・土層断面図と出土土器実測図　162
第 147 図　99A・B 区土坑その他出土土器実測図　162
第 148 図　99C・D・K 区土坑その他出土土器実測図　163
第 159 図　水入遺跡古墳時代主要木製品出土地点分布図　165
第 150 図　水入遺跡出土木製品実測図（1）　166
第 151 図　水入遺跡出土木製品実測図（2）　167
第 152 図　水入遺跡出土木製品実測図（3）　168
第 153 図　水入遺跡出土木製品実測図（4）　169
第 154 図　水入遺跡出土木製品実測図（5）　170
第 155 図　水入遺跡出土木製品実測図（6）　171
第 156 図　水入遺跡出土石製模造品出土地点分布図　172
第 157 図　水入遺跡出土石製模造品実測図　173
第 158 図　水入遺跡出土臼玉・管玉実測図　174
第 159 図　古代主要遺構配置図　175
第 160 図　水入遺跡出土の古代の土器主要器種　176
第 161 図　99BSD01 南ベルト土層断面図　177
第 162 図　98B2SD01 出土遺物実測図（1）　179
第 163 図　98B2SD01 出土遺物実測図（2）　180
第 164 図　99ASD01 出土遺物実測図（1）　181
第 165 図　1311 底部外面拓影　182
第 166 図　99ASD01 出土遺物実測図（2）　182
第 167 図　99ASD01 出土遺物実測図（3）　183
第 168 図　99ASD01 出土遺物実測図（4）　184
第 169 図　99ASD01 出土遺物実測図（5）　185
第 170 図　99ASD01 出土遺物実測図（6）　186
第 171 図　99ASD01 出土遺物実測図（7）　187
第 172 図　99ASD01 出土遺物実測図（8）　188
第 173 図　99ASD01 出土遺物実測図（9）　189
第 174 図　99ASD01 出土砥石実測図　190
第 175 図　99BSD01 出土遺物実測図（1）　191
第 176 図　99BSD01 出土遺物実測図（2）　193
第 177 図　99BSD01 出土遺物実測図（3）　194
第 178 図　99BSD01 出土遺物実測図（4）　195
第 179 図　99BSD01 出土遺物実測図（5）　196
第 180 図　99CSD01 出土遺物実測図　197
第 181 図　99ASX02 出土土器実測図（1）　198
第 182 図　99ASX02 出土土器実測図（2）　199

第 183 図　99A 区瓦塔出土地点分布図　199
第 184 図　99A 区出土瓦塔実測図　200
第 185 図　99BSX02 出土遺物実測図　201
第 186 図　98B2SX01 平面・断面図　202
第 187 図　98B2 区墨書土器出土分布図　203
第 188 図　98B2SX01 出土土器実測図（1）　204
第 189 図　98B2SX01 出土土器実測図（2）　205
第 190 図　99ASX01 土層断面図　206
第 191 図　99ASX01 出土土器実測図　207
第 192 図　98C2SX01 出土土器実測図（1）　208
第 193 図　98C2SX01 出土土器実測図（2）　209
第 194 図　98C2SX01 出土土器実測図（3）　210
第 195 図　98C2SX01 出土土器実測図（4）　211
第 196 図　98C2SX01 出土土器実測図（5）　212
第 197 図　99CSX01 出土遺物実測図　213
第 198 図　99DSX01 出土遺物実測図（1）　214
第 199 図　99DSX01 出土遺物実測図（2）　215
第 200 図　99DSX01・02 出土土器実測図　216
第 201 図　大屋敷地区古代竪穴建物・掘立柱建物配置図　217
第 202 図　98B2SB01・02 平面図　218
第 203 図　98B2SB03 ～ 05 平面図　218
第 204 図　99ASB01 平面・断面図と出土遺物実測図　219
第 205 図　99ASB02 平面・断面図と出土遺物実測図　221
第 206 図　99ASB03 平面・断面図と出土遺物実測図　222
第 207 図　99ASB04・05 平面・断面図　223
第 208 図　99ASB06 平面・断面図　224
第 209 図　99ASB04・05・06 出土遺物実測図　225
第 210 図　99ASB08 平面・断面図と出土遺物実測図　226
第 211 図　99ASB09・SB10 平面・断面図と出土遺物実測図　227
第 212 図　99ASB10 出土遺物実測図　228
第 213 図　99ASB11 平面・断面図と出土遺物実測図　229
第 214 図　99ASB12 平面・断面図　230
第 215 図　99ASB13・14・15・16 平面図　230
第 216 図　99ASB13・14・15・16 断面図　231
第 217 図　99ASB13・14 出土遺物実測図　231
第 218 図　99ASB15・16 出土遺物実測図　232
第 219 図　99ASB17 平面・断面図と出土遺物実測図　233
第 220 図　99BSB02 平面図　234
第 221 図　99BSB03 平面・断面図　234
第 222 図　99BSB04・06・14 平面・断面図　235
第 223 図　99BSB04 出土遺物実測図　236
第 224 図　99BSB06・14 出土遺物実測図　237
第 225 図　99BSB05・08 平面・断面図　238
第 226 図　99BSB07 平面図　239
第 227 図　99BSB11 平面図　239
第 228 図　99BSB09・10 平面図　240
第 229 図　99BSB16 平面図　241
第 230 図　99BSX3001 出土遺物実測図　241
第 231 図　99BSX3001 平面図　242
第 232 図　99BSB3010・3011・SK3014 平面・断面図　243
第 233 図　99BSB3010・3011・SK3014・3013 出土遺物実測図　244
第 234 図　99BSB8001 平面・断面図と出土遺物実測図　245
第 235 図　下糟目地区古代主要遺構配置図　246
第 236 図　下糟目 A 地区古代主要遺構配置図　247
第 237 図　99DSB01・02 平面・断面図　248
第 238 図　99DSB03・05・06 平面・断面図と出土遺物実測図　249
第 239 図　99DSB04・07・09 平面図　250
第 240 図　99DSB04・07・09 断面図と出土遺物実測図　251
第 241 図　99DSB10・11 平面・断面図　252
第 242 図　99DSB10・12 出土遺物実測図　253
第 243 図　99DSB11 出土遺物実測図　254
第 244 図　99ASB13・14 平面・断面図　255
第 245 図　99DSB17・19 平面図と出土遺物実測図　256
第 246 図　99DSB18 平面・断面図と出土遺物実測図　257
第 247 図　99DSB20・21 平面・断面図　258
第 248 図　99DSB20・21 断面図　259
第 249 図　99DSB20・21・SK89 出土遺物実測図　260
第 250 図　99DSK88・90・91・95 出土遺物実測図　261
第 251 図　99DSB22・23・27 平面図と出土遺物実測図　262
第 252 図　99DSB24 平面・断面図　262
第 253 図　99DSB25 平面・断面図と出土遺物実測図　263
第 254 図　99DSB26・29 平面・断面図と出土遺物実測図　264
第 255 図　99DSB28 平面図　265
第 256 図　99DSB31・32・33 平面図と出土遺物実測図　265
第 257 図　98DSB01 平面・断面図　266
第 258 図　98DSB01 出土遺物実測図　267
第 259 図　98DSB02 平面・断面図と出土遺物実測図　267
第 260 図　98DSB05 平面・断面図　268
第 261 図　98DSB05 出土遺物実測図　269
第 262 図　98DSK1022 平面図　269
第 263 図　98DSB06 平面・断面図と出土遺物実測図　270
第 264 図　98DSB08 平面・断面図　271
第 265 図　98DSB08 出土遺物実測図　272
第 266 図　98DSB10 平面図　273
第 267 図　98DSB15 平面図　273
第 268 図　98DSB14 平面・断面図と出土遺物実測図　274
第 269 図　98DSB16 平面・断面図　275
第 270 図　98DSB16 出土遺物実測図　276
第 271 図　98DSB18・19 平面・断面図　277
第 272 図　98DSB20 平面・断面図と出土遺物実測図　278
第 273 図　98DSB22・23・24・25 平面・断面図　279
第 274 図　98DSB26 平面・断面図　280
第 275 図　98DSB26 出土遺物実測図　281
第 276 図　98DSB27・28・29・30・31 平面図　282
第 277 図　98DSB27・28・29・30・31 断面図　283
第 278 図　98DSB27・28・29 出土遺物実測図　284

第 279 図　98DSB34・35・36 平面図　285
第 280 図　98DSB34・35・36 断面図と出土遺物実測図　286
第 281 図　98DSB37・45 平面・断面図　287
第 282 図　98DSB37 出土遺物実測図　288
第 283 図　98DSB38 出土遺物実測図　289
第 284 図　98DSB39 平面・断面図と出土遺物実測図　290
第 285 図　98DSB40・41・42 平面・断面図　291
第 286 図　98DSB44・50 平面・断面図と出土遺物実測図　292
第 287 図　98DSB47 平面・断面図と出土遺物実測図　293
第 288 図　98DSB51・53 平面・断面図　294
第 289 図　98DSB43 平面図　295
第 290 図　98DSB48・49 平面図と出土遺物実測図　295
第 291 図　98DSB54 平面・断面図と出土遺物実測図　295
第 292 図　99ASB55・56 平面・断面図と出土遺物実測図　296
第 293 図　98DSB57 平面・断面図と出土遺物実測図　297
第 294 図　98DSB64 平面・断面図と出土遺物実測図　297
第 295 図　99ASB59 平面・断面図と出土遺物実測図　298
第 296 図　98DSB62・63 平面・断面図と出土遺物実測図　299
第 297 図　98DSB66 平面・断面図と出土遺物実測図　300
第 298 図　98DSB67 平面・断面図　301
第 299 図　98DSB67 出土遺物実測図　302
第 300 図　98DSB70・71・72・84 平面図　303
第 301 図　98DSB70・72・84 断面図　304
第 302 図　98DSB70・71 出土遺物実測図　305
第 303 図　98DSB74 平面・断面図と出土遺物実測図　306
第 304 図　98DSB76・77・80・81・99・100 平面・断面図　307
第 305 図　98DSB76・80 出土遺物実測図　308
第 306 図　98DSB77・78・97・98 平面・断面図と出土遺物実測図　308
第 307 図　98DSB79 平面・断面図　309
第 308 図　98DSB79 出土遺物実測図　310
第 309 図　98DSB83 平面・断面図と出土遺物実測図　311
第 310 図　98DSB85・86・87・88 平面・断面図　312
第 311 図　98DSB87・90・85・86・88 出土遺物実測図　313
第 312 図　98DSB86・87・90・91 平面・断面図　314
第 313 図　98DSB89・96 平面・断面図と出土遺物実測図　315
第 314 図　98DSB92 平面図と出土遺物実測図　316
第 315 図　98DSB93 平面・断面図　316
第 316 図　98DSB94 平面・断面図と出土遺物実測図　317
第 317 図　98DSK356 平面図　317
第 318 図　99ESB01 平面・断面図と出土遺物実測図　318
第 319 図　99ESB02 平面・断面図　319
第 320 図　99ESB02 出土遺物実測図　320
第 321 図　下糟目 A 地区北部古代主要遺構配置図　320
第 322 図　99GSB01 平面・断面図と出土遺物実測図　321
第 323 図　99GSB11 平面・断面図と出土遺物実測図　322
第 324 図　99GSB19 平面・断面図と出土遺物実測図　323
第 325 図　99GSB21 平面・断面図と出土遺物実測図　324
第 326 図　99GSB22 平面・断面図と出土遺物実測図　325
第 327 図　99GSB24 平面・断面図と出土遺物実測図　326
第 328 図　99GSB25 平面・断面図　327
第 329 図　99GSB28（98DSB95）出土遺物実測図　327
第 330 図　99GSB26 ～ 28（98DSB95）平面・断面図　328
第 331 図　99GSB29 平面・断面図　329
第 332 図　99GSB31・32 平面図　330
第 333 図　99GSB35 平面・断面図　331
第 334 図　99GSB36 平面図　332
第 335 図　99GSB10 平面図　332
第 336 図　99GSB37 平面図　332
第 337 図　99GSB38 平面図　333
第 338 図　99HSB01 平面・断面図　333
第 339 図　下糟目 B 地区（99Kb 区）古代主要遺構配置図　334
第 340 図　99JSB01 平面・断面図　334
第 341 図　99KSB1001 平面・断面図と出土遺物実測図　335
第 342 図　99GSB1002 平面・断面図と出土遺物実測図　336
第 343 図　99KSB1003・1004 平面・断面図　337
第 344 図　99KSB1003 出土遺物実測図　338
第 345 図　99KSB1009 平面図　338
第 346 図　99KSB1005 平面・断面図と出土遺物実測図　339
第 347 図　99KSB1006 平面・断面図と出土遺物実測図　340
第 348 図　99KSB1007・1008・1016・1017 平面図　341
第 349 図　99KSB1007・1008・1016・1017 断面図と出土遺物実測図　342
第 350 図　99KSB1010 平面・断面図と出土遺物実測図　343
第 351 図　99KSB1011 平面・断面図　344
第 352 図　99KSB1012 平面・断面図と出土遺物実測図　345
第 353 図　99KSB1013・1014・1087 平面・断面図と出土遺物実測図　346
第 354 図　99KSB1015 平面図と出土遺物実測図　347
第 355 図　99KSB1018 平面・断面図　348
第 356 図　99KSB1024・1028・1082 平面図　349
第 357 図　99KSB1027 平面図　349
第 358 図　99KSB1030 平面・断面図と出土遺物実測図　350
第 359 図　99KSB1031・1033・1034 平面・断面図と出土遺物実測図　351
第 360 図　99KSB1037 平面・断面図と出土遺物実測図　352
第 361 図　99KSB1039・1041 平面・断面図と出土遺物実測図　353
第 362 図　99KSB1045 平面図と出土遺物実測図　354
第 363 図　99KSB1046・1047 平面・断面図と出土遺物実測図　355
第 364 図　99KSB1051・1052・1086 平面・断面図と出土遺物実測図　356
第 365 図　98DSB1054 平面・断面図と出土遺物実測図　357
第 366 図　98DSB1055・1057 平面・断面図と出土遺物実測図　358
第 367 図　99KSB1059 平面・断面図　359
第 368 図　99KSB1064 平面・断面図と出土遺物実測図　360

第 369 図　99KSB1064・1065・1066・1067・1068 平面・断面図　361
第 370 図　99KSB1065・1066 出土遺物実測図　362
第 371 図　99KSB1069・1070 平面・断面図と出土遺物実測図　363
第 372 図　99KSB1072 平面・断面図と出土遺物実測図　364
第 373 図　99KSB1073 平面・断面図と出土遺物実測図　364
第 374 図　99KSB1074 平面・断面図と出土遺物実測図　365
第 375 図　99KSB1085 平面・断面図と出土遺物実測図　366
第 376 図　99KSB1075 出土遺物実測図　366
第 377 図　98B2・99A 区掘立柱建物平面図と 99ASH35 柱掘形断面図　368
第 378 図　99A・99B 区掘立柱建物平面図　369
第 379 図　99D 区掘立柱建物平面図　371
第 380 図　98D 区掘立柱建物平面図（1）　373
第 381 図　98D 区掘立柱建物平面図（2）　374
第 382 図　98D・99E・99G・99H 区掘立柱建物平面図と出土遺物実測図　375
第 383 図　99I・99K 区掘立柱建物平面図　376
第 384 図　98B2SD02・03 平面・断面図　377
第 385 図　98B2SD02・03・11 出土遺物実測図　378
第 386 図　98B2SK02・03・15 断面図　378
第 387 図　98B2 区土坑・ピット出土土器実測図　379
第 388 図　98D 区掘立柱建物平面図　380
第 389 図　99ASD23 平面図と出土土器実測図　380
第 390 図　99A 区土坑・溝・その他出土土器実測図　381
第 391 図　99B 区土坑・ピット・SX01 出土土器実測図　382
第 392 図　99BSX05・06 断面図と出土遺物実測図　383
第 393 図　99BSX8001 ～ 8003・その他・99CSK17 出土遺物実測図　383
第 394 図　99CSX02 平面・断面図と出土土器実測図　384
第 395 図　99CSX06 出土土器実測図　384
第 396 図　99D 区土坑・ピット出土土器実測図　385
第 397 図　99DSD05 平面図　386
第 398 図　99DSD01・03・05 出土遺物実測図　386
第 399 図　99D 区検出面・98DSK67・460 出土遺物実測図　387
第 400 図　98DSK475 出土遺物実測図　387
第 401 図　98D 区土坑出土遺物実測図　389
第 402 図　98D 区土坑・ピット・その他出土遺物実測図　390
第 403 図　99ESK475 平面・断面図と出土土器実測図　391
第 404 図　99E 区土坑出土土器実測図　391
第 405 図　99G 区土坑出土遺物実測図　392
第 406 図　99JSD24 出土遺物実測図　393
第 407 図　99K 区土坑・その他出土遺物実測図　393

第 1 分冊表目次

第 1 表　水入遺跡調査工程表　2
第 2 表　水入遺跡周辺の遺跡一覧　13
第 3 表　石器観察一覧（1）　31
第 4 表　石器観察一覧（2）　32
第 5 表　石器観察一覧（3）　33
第 6 表　石器観察一覧（4）　34
第 7 表　石器組成一覧　35
第 8 表　石器石材一覧（1）　35

第１章　序説

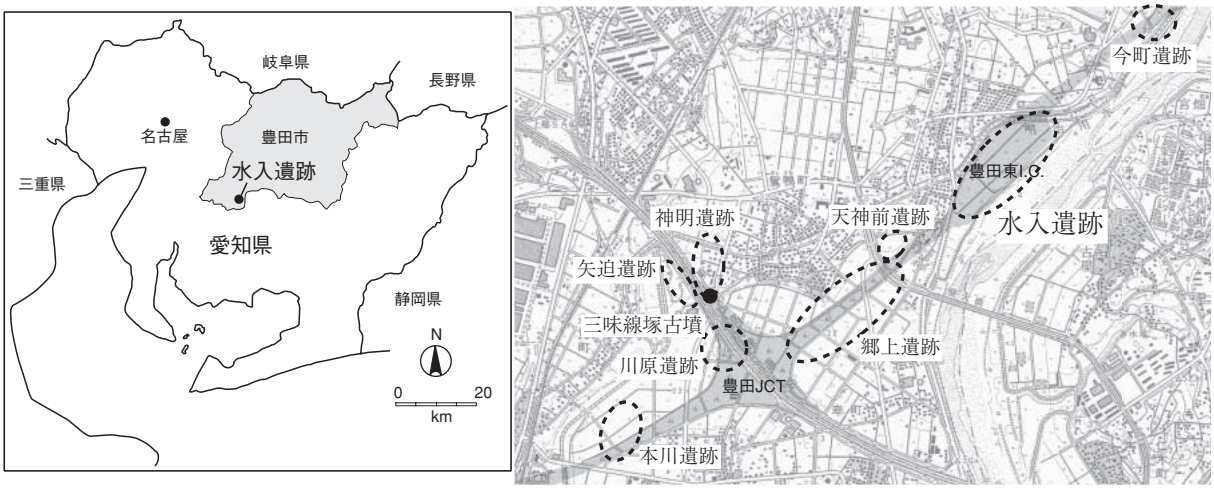
第１節　調査に至る経緯

（１）豊田市南部地域における埋蔵文化財調査

豊田市は愛知県のほぼ中央部に位置する面積約918km²、人口約39万人の都市である(平成17年現在)。自動車産業を中心に工業都市としての発展がめざましい。その豊田市南部地域には東名高速自動車道が横断し、交通の大動脈として産業発展に寄与してきた。そして近年、この東名高速道路と当該地域で交差する新たな高速道路（第二東海自動車道）の建設が計画された。

この高速道路建設に伴って、これまであまり埋蔵文化財調査が実施されてこなかった豊田市南部地域においてもその対策が急務となり、遺跡の有無確認の段階から着手されることとなった。その実務は愛知県教育委員会文化財課（現・生涯学習課文化財保護室）と豊田市教育委員会文化財課によって進められた。結果、建設予定地となる低地部に南から本川・川原・郷上・天神前・水入・今町の各遺跡がリストアップされ、加えて台地上の矢迫・神明遺跡と三味線塚古墳への対策が必要となった。このうち神明遺跡と三味線塚古墳については豊田市教育委員会が発掘調査を実施し、それ以外の遺跡については(財)愛知県埋蔵文化財センター（当時、現・(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター）が範囲確認調査から実施することとなった。

本格的な発掘調査は平成９年度から開始され、平成12年度の今町遺跡を最後に終了した。この間当センターでは総面積143000m²を発掘調査し、平成13年度刊行の天神前遺跡の報告書を皮切りに順次その成果を公表してきた。その内容は弥生時代を中心とする川原遺跡や古墳時代中期から江戸時代前半までの各時代遺構が複合する本川・郷上遺跡など、多彩な様相が示され、これまで希薄にとらえられがちであった当該地域の物質文化そして歴史が次々と明らかにされてきた。本書はその最終刊行にあたる。



第１図　水入遺跡の位置（左）と豊田市南部で調査が実施された遺跡の位置図（右）

（2）豊田東 I.C. 建設工事に伴う遺跡調査

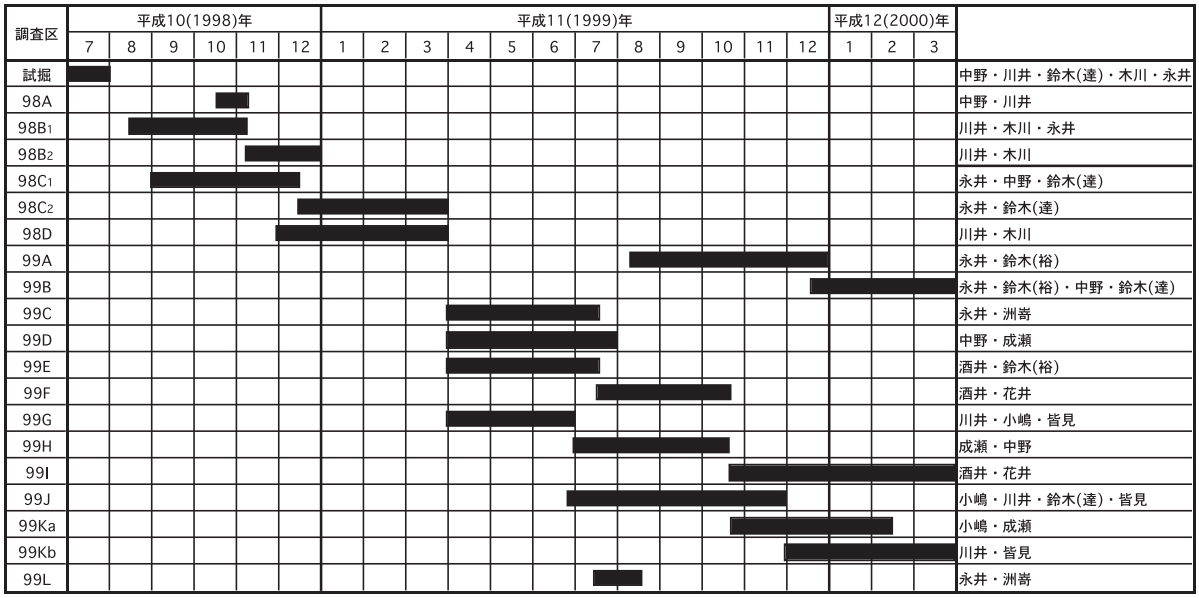
水入遺跡は豊田市渡刈町字大屋敷と下糟目に所在する。本来ならば大屋敷・下糟目遺跡となるところであるが、この両地目からなる矢作川右岸堤防際の一帯が通称で「水入」とされていたことに由来する。文字通り矢作川氾濫時にはあふれた水を逃がす場所となっていたようである。

当該地には豊田東 I.C. の建設が計画された。その面積は約 10 万 m² にも及ぶものであった。水入遺跡の有無確認調査は愛知県教育委員会と豊田市教育委員会が合同で平成 9 年度に実施した。その結果遺跡西半分は台地が占めることや中央部に矢作川に直交する谷地形があることなどが確認され、中世以降を中心とする遺物が確認された。それを受け当センターは平成10年度に範囲確認調査を実施し、引き続き98A ～ D 区、99A ～ J 区を設定して本調査を開始したが、平成 11 年度に入ってから新たな調査必要地点が生じ、99K・L 区を追加設定した。調査は平成 12 年 3 月に終了した。

この間平成 11 年 3 月 21 日には豊田市教育委員会と合同で周辺遺跡を含めた成果報告会を鶯鴨町公民館で実施し、同日午後98C2・98D区で現地説明会を開いた。雨天にも関わらず約450名の参加者があった。平成 11 年 12 月 4 日には 99A 区において現地説明会を実施し約 500 名の参加を得、平成 12 年 3 月 4 日には豊田東 I.C. 工事事務所にて渡刈町民への成果報告会を開催した。名古屋市博物館歴史セミナーや渡刈町親子歴史散策などの見学会にも対応した。また平成11年度8月に豊田市美術館で開催された平成11 年度埋蔵文化財展では多数の出土遺物を出展するなど、早期の成果公表にも努めた。

室内整理作業は、発掘調査終了後平成 13 ～ 16 年度にかけておこなった。遺物の総量は P-27 コンテナで約 550 箱で土器・陶磁器だけでなく石器も多数あった。また前者も古墳時代、古代、中世、戦国時代とそれぞれに豊富な量と種類があった。そこでまず平成13年度は川井啓介が担当し、遺構に関わる基本的な記録の整理と鎌倉時代～江戸時代の出土遺物の整理作業を進めた。次いで平成 14 ～ 16 年度は永井邦仁が担当し、縄文時代～平安時代の遺物の整理作業を進めた。石器については川添和暁がこれを引き受けた。作業は遺物の分類、接合、実測などのデータ採取を中心とし、それら記録類のデジタルデータ化や写真撮影、CG 作成、保存処理、胎土分析などは外部委託によった。

第 1 表　水入遺跡調査工程表



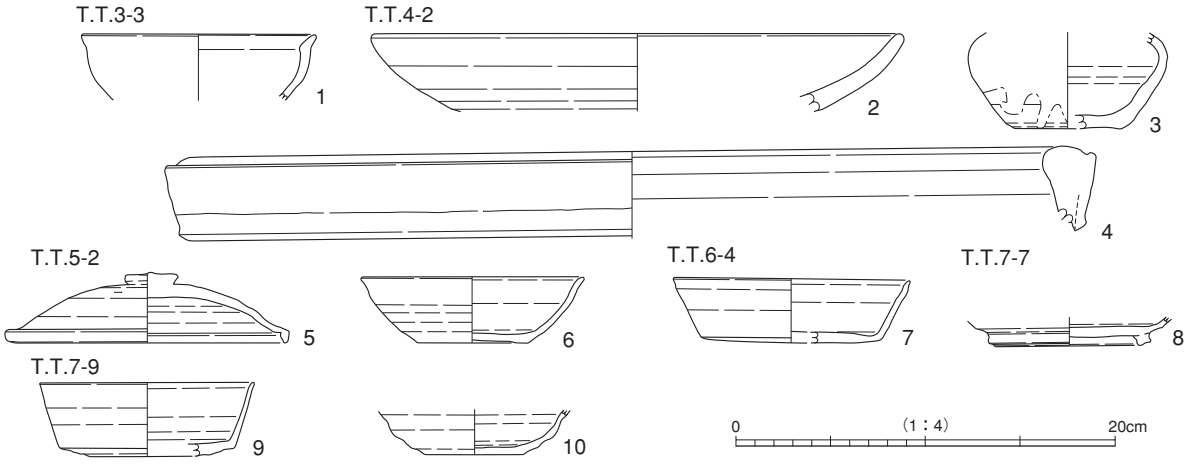
第２節　試掘調査

（１）試掘調査の概要

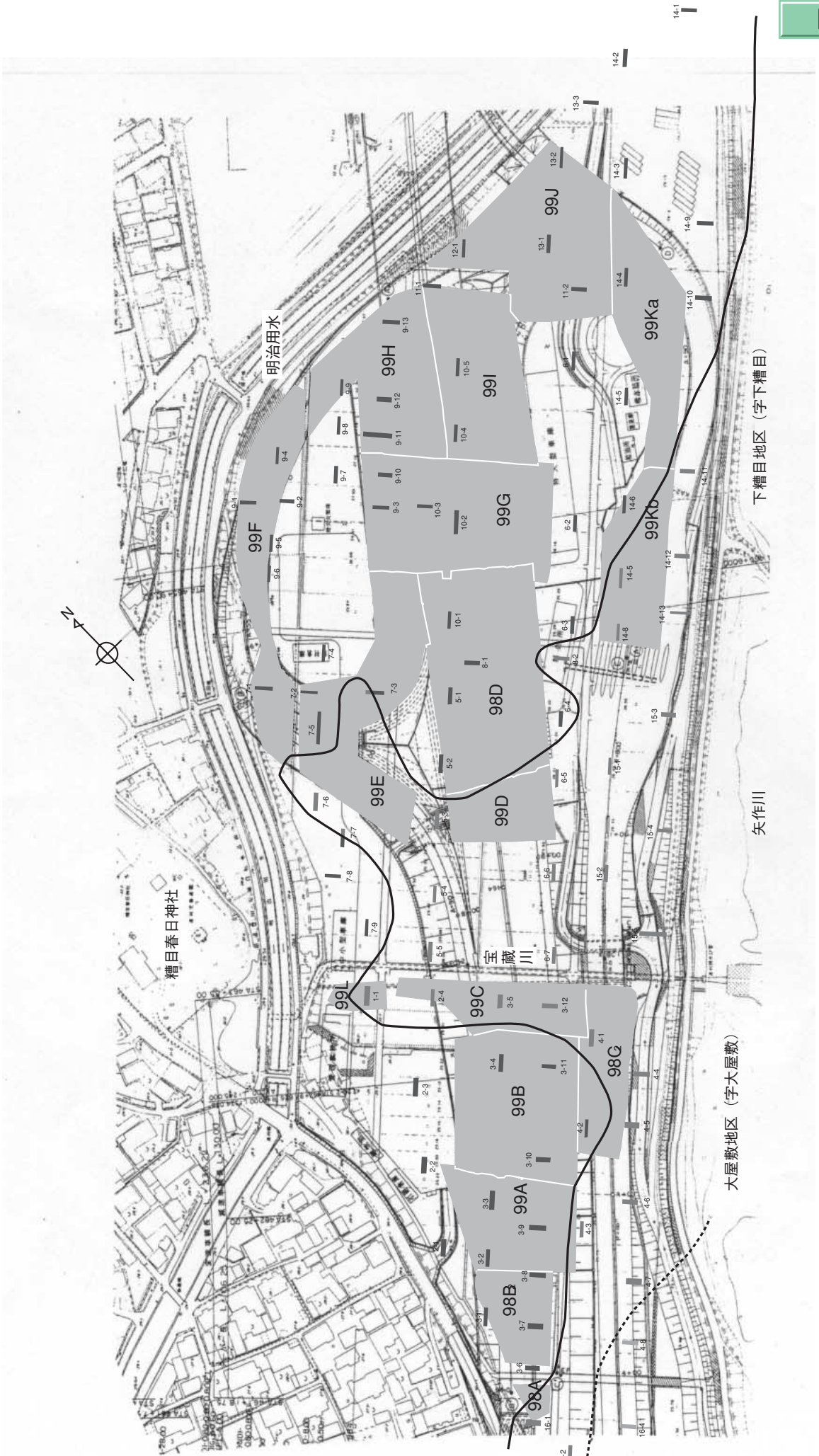
調査地点の設定　(財)愛知県埋蔵文化財センター（当時）は、平成10年７月から８月にかけて水入遺跡の範囲確認を目的とする試掘調査を実施した。調査は幅約２m×５m規模のトレンチによる土層および遺構検出面の確認と遺構・遺物の分布状況の把握を目標とするものであった。それまでの愛知県教育委員会文化財課と豊田市教育委員会による試掘調査によって遺跡北部は概ね碧海台地が占め、南部は台地が落ち込んで沖積地になるであろうという見通しがたてられていた。トレンチは、矢作川と平行になる北東から南西方向に、川よりに１本と台地奥部よりに１本の計２本の基本ラインを設定し、それらライン上に約40～50mおきに配置した。トレンチ掘削はバックホウによったが限界があった。

試掘調査の結果　まず、トレンチ調査によって確認された碧海台地は第３図に示したラインのとおり遺跡北部の大部分と遺跡南部の一部であった。遺跡中央部には、その北部と南部を寸断するようなかたちで小さな谷地形が入ることが確認され、糟目春日神社付近から矢作川に流れ込む宝蔵川がその名残りであることが推察された。また遺跡北端部では表土中から石器が出土し、旧石器時代の遺構・遺物の存在も予感させた。またＴ５―２を中心とする碧海台地上では奈良時代後半の須恵器（第２図―５・６）が出土し、竪穴建物跡を検出した。また、多くのトレンチで中世から戦国時代の陶器が出土し、古代から中世に続く集落遺跡の可能性が考えられたのである。

表土は、遺跡北部では１mにも満たないトレンチがある一方、遺跡南部になると表土下の青灰色砂質土層が数m以上の厚さで堆積していることが確認された。そしてこの青灰色土層のかなり下部からも中世陶器が出土するため、この土層の成因時期と遺構検出面の確認が問題となったのである。しかしながらバックホウによる掘削は４m程度が限界で、かつ激しい湧水によりさらなる下層の状況を把握することは不可能であった。結果的に遺跡南部では、落ち込んだ碧海台地の上面での遺構検出は不可能と判断し、その上に厚く堆積した沖積層中に遺構検出面を設定することにした。ところが後節（第１章第４節）で示すとおり、青灰色土層は江戸時代以降の矢作川洪水によるものであったことが本調査の過程で明かとなり、調査の仕切り直しを余儀無くされたのである。



第２図　試掘調査で出土した土器・陶器実測図



第３図　水入遺跡試掘調査地点図

（２）調査区ごとの概要

98B・98B2区　平成10年８月20日より調査を開始した。調査面積は2700m²である。重機によって耕作土とその下厚さ約0.5mの洪水による堆積と考えられる砂層を除去すると、黒褐色の粘質土層があらわれて水田畦畔の高まりが認められたので、面的に広げて遺構確認をおこなった。結果畦畔による水田区画や方形土坑が確認された。水田面からの出土遺物から中世以降のものと判断された。航空測量を実施した後この水田面を掘削し、約２～３ｍ掘り下げたところで、段丘面（地山）があらわれ、多数の遺構が残存していることが確認された。ここに至って範囲確認調査で推定された段丘面の範囲はさらに南側に広がっていることが認識され、地山を確認面とする発掘調査が続行された。調査区の西端には南北にのびる大溝がありそこから古墳時代中期以降の土師器が多数出土し同じ層から木製品の出土をみた。また大溝の東側に接して周縁が階段状に加工された窪地状遺構があり、さらにその南側に掘立柱建物２棟が並ぶ。本調査区は南端に向かって緩い下り傾斜となっており、東西溝（98B2SD02）から南側では建物遺構は確認されず、集落域の可能性は低い。調査は12月21日に終了した。

98C・98C2区　平成10年９月１日より調査を開始した。調査区は当初半月形とし1500m²であった。98B区よりもはるかに厚い砂層の堆積があり、それを除去した時点で、東西方向に延びる溝２本が確認された。この溝の南側では畦畔が確認された。溝および水田面からは近世後期～明治時代の常滑産土管や陶磁器・下駄が出土した。99C区であきらかになった水田面と洪水の回数（10回以上）を考慮すると98B区水田との連続性を確定することはできないが、近世半ば～明治時代の範囲で営まれていた水田であることが想定された。ここで航空測量を実施。そして２本の溝がその間に溝掘削以前からあった土塁に由来していることが考えられたため水田面から下方へと掘り下げるとともに土塁の検出を行った。結果この土塁は、調査区西端で検出された段丘面とその崖面から矢作川側の河川堆積による砂層(98C2SX01上層)上部を戦国時代～近世初頭に整地した面を基底としていることが判明した。土塁のみで航空測量を実施。その後砂層砂層を掘り下げて崖面の検出を進めたところ、矢作川とほぼ平行に崖面が北東―南西方向に延びることが確実となったので、調査区範囲を当初段階より変更し、北東方向に拡張した。崖下からは98B2区大溝（98B2SD01）と同様に古墳時代中期の土師器と木製品が多量に出土した。この段階で段丘面上の遺構とともに航空測量を実施。土師器は祭祀用ミニチュアが目立ち、滑石製模造品の出土もありここを矢作川に関わる祭祀遺跡の可能性が予想された。崖下の堆積層はさらに深まる様相を呈したが、法面とした調査区壁と崖面の狭小な範囲を激しい湧水の中で掘削することとなり、古墳時代中期初めと考えられる下黒色層の掘削し、その下層に顕著な遺物の出土がないことを見届けたうえでここを限界として調査を終了した。時に平成11年４月７日である。

98D区　平成10年11月25日に調査を開始した。調査区は長方形で約5500m²である。段丘面を遺構確認面とした。古代～中世の建物遺構が中心と予想されていたが、直径１ｍ前後の円形土坑が多数検出され、中世の土坑墓群の存在もあきらかになった。また100棟以上確認された竪穴建物のうちには、中世の遺物が出土するものがあり、いわゆる中世竪穴状遺構が墓域の中に散在する景観が想定された。また、調査区のほぼ中央部に一辺55～70mの戦国時代の陶器や獣骨が出土する方形区画溝が確認され、墓域の時代の後に一般集落とはやや様相を異にする土地利用がなされたものと推定された。

（3）平成11年度の調査経過

99A区　平成11年8月11日に調査を開始した。調査区は台形で約3000m²である。段丘面を遺構確認面とし、98B2区・99C区で確認された大溝の中間部分の検出が期待された。表土除去の途中で大溝の東西両脇に土塁が併行することが判明し、それを残しながらの作業となった。また表土層とほぼ共通する大溝1層（戦国時代以降の堆積）も重機で掘削した。1層堆積以前に大溝を拡幅する大がかりな改修があったことが判明した。大溝以外では17棟の竪穴建物遺構の他おびただしい数のピットが検出され、調査区南東隅では段丘崖（98C2区SX01の続き）が確認され、本調査中最も濃密な遺構の展開をみた。なお12月4日には本遺跡で2回目となる現地説明会を実施し、大溝やそこから出土した古墳時代遺物を中心に公開した。一般市民約450名の参加があった。

99B区　99A区の補足調査と併行して平成11年12月15日より調査を開始した。調査区は長方形で約5200m²である。99A区同様の重機による表土除去をおこなった。調査区のほぼ中央を最高地点として東南北の書く方向に緩い傾斜面となる。東と南側傾斜面では濃密な遺構群が検出されたが、北側斜面はそれに比べてやや希薄であった。大溝と直角に交差する戦国時代の大溝やその両脇に大きな掘形の掘立柱建物が確認され、大溝の改修とともに大規模な施設の構築がなされたことが判明した。

99C区　遺跡中央の谷地形に北面する調査区である調査面積は3500m²である。調査区の北部では谷地形の南側の肩が検出された（99CSX01）。上部は緩やかな傾斜で戦国時代までの遺物が出土する。下層からは古墳時代の土器が若干出土する程度で、集落域からはやや離れた箇所という印象があった。谷地形は斜めに調査区を横切るが、その調査区外へはずれたあたりから南北方向に延びる大溝（99CSD01）が確認された。規模からみて98B2SD01の延長であり、実際古墳時代中期を中心とする土器・木製品の大量出土がみられた。ほぼ関係の須恵器甕や把手付椀、双孔円盤型石製模造品2点が出土し、ここでも祭祀後の廃棄が予想された。そして大溝東側の段丘面上では、古墳時代の掘立柱建物の他土器が出土しない内面がよく焼けた楕円形土坑が多数検出され、炭素年代測定で縄文時代草創期～早期と判明した。

99D区　98D区の南側に延長する形で設定された調査区で調査面積は1600m²である。調査区北部は98D区同様の遺構確認状況であったが、南部は遺跡中央の谷地形の北斜面が検出された。99C区同様上部からは戦国時代以降の土器・陶器・木製品が出土したが、下層からは引き続き平安時代を中心とする土器の出土が相次ぎ、対照的であった。竪穴建物の時期的な分布も考慮すると、奈良～平安時代にかけて台地上のより高位地点から谷地形に近づいていくかたちで集落域が移動していると想定された。ところで特記すべきなのが縄文時代の竪穴建物群で、そのうち1棟からは埋甕の残存が確認された。縄文時代中期末段階の集落に関わる重要な資料が得られた。

99E区　98D区西側に設定された道路予定地どおりのやや複雑な形状で面積は5000m²である。調査区の南端では99D区でみられた谷地形の延長が検出され、谷地形が奥に入り込む過程でいくつか枝別れしていることが確認された。また98D区に接する地点では古代の竪穴建物が確認された。

99F区　遺跡北部の最も高位な段丘面を確認面とした。調査面積は6250m²である。耕作地化のために旧地形が削られ、元々希薄であったろうが遺構・遺物の検出はひじょうに少なかった。ただ、確認面からは後期旧石器時代のナイフ形石器が出土したので段丘面に対してトレンチ調査をおこなったが、この中

からは該当する石器の出土はなかった。

99G区　98D区を北東側に接して設定された調査区で、調査面積は4500m²である。ほぼ全面が平坦面で、98D区と同様の遺構・遺物が確認されるが、同区より台地の奥まった位置になるためその分布はより希薄であった。

99H区　99G区の北側に設定された面積6750m²の調査区である。より高位な段丘面であったと考えられ、耕作地化にともなって大きく削られており、遺構・遺物の検出は少なかった。99E・F・H区あたりが各時代遺構分布の西～北限となる。

99I区　99G・H区の東側に設定された面積6250m²の調査区である。より矢作川に近い位置にあるので古代集落の広がりが想定されたが、むしろ中世集落にかかわる成果の方が目立った。土坑墓やそれより時代が下る掘立柱建物を確認した。付近からは鉄滓や炭化材や多量の焼土が出土し、鋳造作業がおこなわれていたことを推察できた。

99J区　遺跡の北東端に位置する調査区で調査面積は6850m²である。試掘調査段階から石器が出土し、旧石器時代の遺構・遺物が主対象となることが早くから予想されていた。段丘面を確認面とした当初の調査では、遺構は希薄であったが、調査区北辺で袋状貯蔵穴が確認され、覆土の精査からドングリの貯蔵穴であったことが判明した。その後段丘を掘り下げて旧石器時代に関わる調査をすすめ、後期旧石器や多数の剥片を検出したが、これらはより高位の地点からの流入の可能性が高いと判断された。

99L区　99C区の西側に急遽設定された細長い調査区である。調査面積は500m²であるが、調査区壁に法面をつけて掘り下げたので、地表面から3 m掘り下げて検出できた段丘面は50m²にすぎない。しかしこの段丘面が調査区の西端にて北西方向へ下り、この地点から明治用水・糟目春日神社のあたりにかけて小谷地形が入っていることが確認できた。この谷地形は99C区の谷地形（99CSX01）に続くもので、矢作川に注ぐ宝蔵川の旧河道に相当し、付近の地形復元に重要なデータをもたらした。

水入遺跡発掘調査参加者および整理作業スタッフ

発掘調査補助員　渡辺周子、石田優子、藤田恵理子、秋田直子、土倉崇子
発掘作業員　石原　博、加納敬司、成田美弥子、成瀬良秋、平岩録太郎、伊東すま子、三浦　一、森ゆき子、刑部守彦、原田三七夫、柴田郁男、大嶋智子、成瀬敏雄、木津ミイ、川崎　克、宮里朱美、墨谷里枝、阿知波春江、牧岡みる子、葛原道子、原田美千代、砂田万里子、稲垣千里、青山タカ子、倉田依史子、中根好子、木津一男、清水幸市、箭田光子、長谷川隆三、那須昌俊、小林和子、岩田かよ子、木村明子、馬場沢代、古川シゲ子、神崎沢子、緒方敬吾、篠田　忍、市川アサノ、深見喜美代、倉橋峯子、山田吉之、成島陽太郎、田境治美、伊藤登代子、落合秀吉、酒井由美子、西村幸千代、坂田和江、生駒京子、青山　勝、大山民代、春原武史、木村和彦、中根　明、栗原幹夫、金子りつよ、渋谷小百合、阿辺山ヤエ子、長谷川章、石川明子、知崎千加子、阿部治己、安本佳代子、矢田　直、矢田ヨシエ、加藤徳裕、村瀬　功、兵藤春枝、小島金男、兵藤光男、尾嶋朝子、成瀬香寿美、河合美江、中島和子、衣笠晃輝、鈴木金之、児嶋金光、曽根静枝、伊東加代子、錦見　悟、中根　好、清水秀子、田辺久義、野場義和、深津登紀江、高尾孝重、中村敏子、武田節子、仲野シン、平尾伸一、湯浅施津子、山崎育子、木林千賀子、福島和人、出　久代、橋本たつ子、愛甲みき代、萬谷　盟、山田鉞郎、佐藤君子、神津博光、森　安夫、山下和夫、伊藤良子、伊藤さだ子、市原泰子、只野国雄、谷口千春、高橋是行、西澤八太郎、清水利幸、冨永　平、川端ムツ子、田村ヤエ子、近藤甲子代、永井明子、内林啓子、冨谷和夫、勝田末子、深津祐一、鈴木　武、村松賢子、浅井　守、小島富美子、柏原清子、野田末子、石川恵美子、尾崎　操、長坂徳次、鈴木　達、岩間弘樹、稲垣保夫、塚本かつ江、松下公子、大木さだみ、清水多賀子、三浦綾子、隈本日出子、瀬戸川さつき、仲野和毅、鈴木　稔、天野槻子、甲斐茂生、入江幸代、永瀬昇司、鈴木春美、勝田吉紀、服部佳弥、矢頭恵子、山田英和、小芦三男、長谷川敬一、石川鎮夫、柴田隆義、成瀬光代、長田さき代、七原せき、大塚みて子、田中文吉、近藤仙司、長谷川クニ子、加藤六助、成田喜八郎、宇野小夜子、川澄佐智子、浜島喜代美、三輪森彦、久野　悟、七ツ村清吉、小沢幸雄、大野千代子、平原未知
調査研究補助員　平野晶子、水野多栄、小嶋そのみ　（遺構データの整理、図版作成）
整理補助員　黒川陽子、水野留加、鈴木加代子、横川尚美、祖父江久栄、野中栄子、真崎千恵子、奥本真由美、川名詳子、近藤文子　（遺物分類、接合、復元、実測図作成、収納）

第 3 節　遺跡の環境

（1）地理的環境

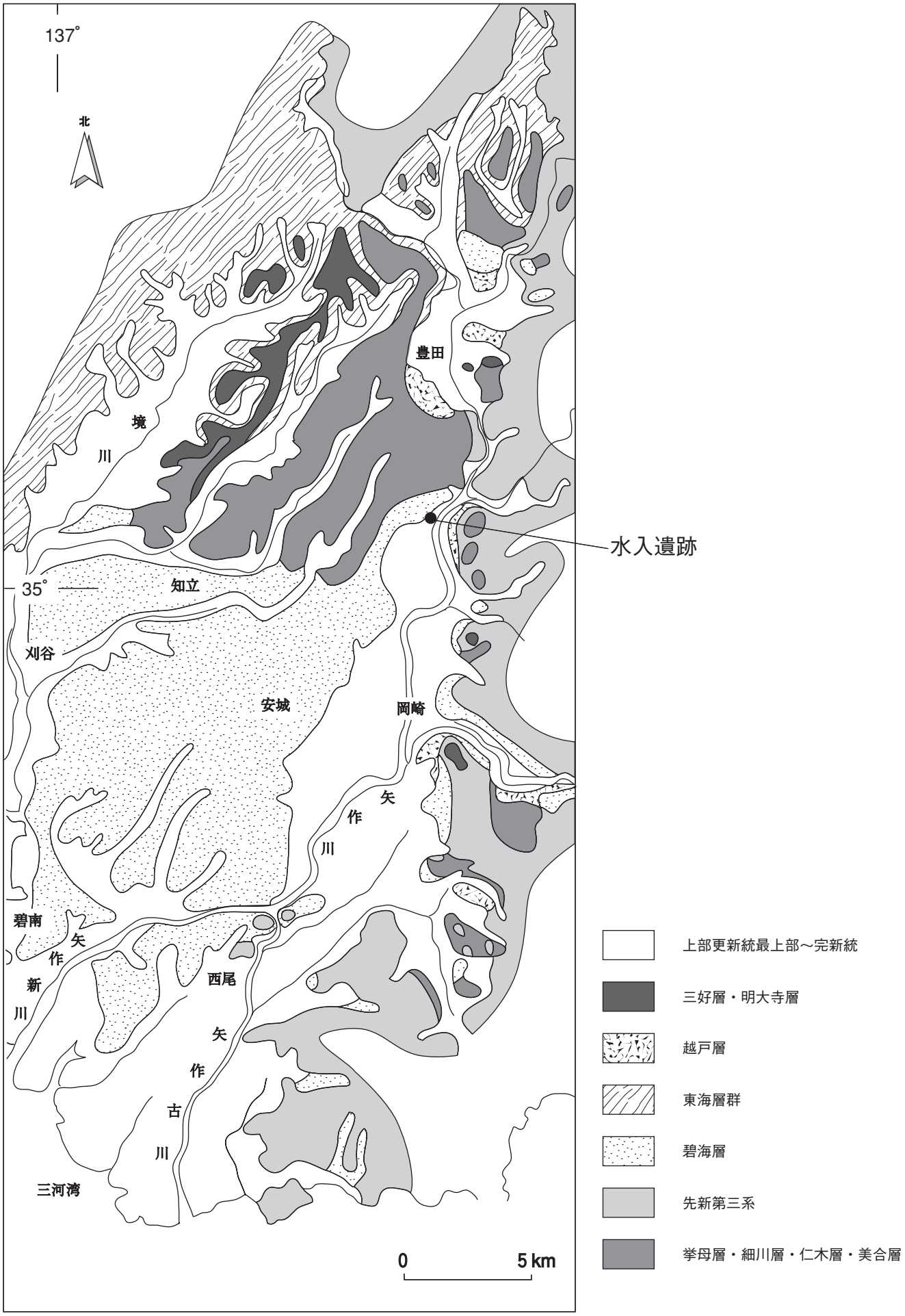
愛知県豊田市　豊田市は愛知県のほぼ中央、一般に西三河地域と呼ばれる矢作川流域に位置する。かつての東・西加茂郡の一部と碧海郡北部を占めていたが、平成 17（2005）年 4 月には東加茂郡・北設楽郡の町・村を編入合併して県内最大面積の市となった。したがって現在の豊田市は山間部が主体を占めているが、市中心部は周囲を丘陵地に囲まれた挙母盆地にあり、その南には碧海台地と矢作川がつくりだした沖積低地（三河平野または岡崎平野と呼称される）が広がる。今や自動車工業都市のイメージが強い同市であるが、林業や農業あるいは水産業の基盤にも恵まれた環境にある。

矢作川　矢作川は東海地方における大河川のひとつである。その流路は長野県浪合村と平谷村境に源流を発し、西三河地域を南北に縦断し三河湾に注ぎ込むまでの全長約 117km である。その流域の地形は水入遺跡の北側（河口から約 40km 地点）で大きく変化する。すなわち水入遺跡から上流部は山間部・丘陵部を開削するようにして縫い、一方そこから中・下流部は沖積地帯に自然堤防をつくりながら流下する。また顕著な扇状地や三角州を形成しないという特徴がある。なお最下流部では慶長 10（1605）年の付け替え工事まで矢作古川が本流となっていた。

現在は水入遺跡の地点から沖積地帯の東縁を大築堤に挟まれて流下する。しかしその途中には縄文時代後～晩期とみられる埋没林や、その西岸の畝部東町には樹齢 1000 年とされるケヤキの大木がある他、丘陵の末端となる岩盤が露出する地点があって、自然に形成された流路とはいいがたい（建設省豊田土木事務所 1992）。この流路の西方には大小の微高地が形成されていることから、むしろ微高地の間を網の目のようにいくつにも分流していた状況が想定される。自然堤防と後背湿地の組み合わさった低地は、水害のリスクは負うものの水資源の豊かな生活空間となりうる。

碧海台地　矢作川沿いの地質は新第三系瀬戸層群（中新統～鮮新統）、三好層（中部更新統）、挙母層（同）、碧海層（上部更新統）、越戸層と第一礫層（最上部更新統）、完新統に区分されている（町田他 1962、牧野内・小井上 1988）。このうち碧海層がつくる平坦な中位段丘面（碧海面）が矢作川中・下流域の右岸に大きく広がり、碧海台地と通称される。そして台地と低地の境に発達した段丘崖によって区分される。台地・崖・低地の 3 要素が矢作川流域の景観を構成するといってもよい。

加えて矢作川や碧海台地の西側を流れる境川・猿渡川の各支流は台地に小さな開析谷をつくながら低地へ流れ出る。開析谷は逢妻川のように長大なものもあれば、水入遺跡で確認された旧宝蔵川に伴うような短小なもの、あるいはごく小さな窪地状ものまである。これら開析谷は人々の生活すなわち遺跡形成にさまざまな影響を与えた。例えば豊田市神明遺跡は全長約 1 km の開析谷の入口に立地するが、その最奥部には古墳時代後期の高岡古墳群があって両者の関わりが注目される。開析谷の入口に立地する点では安城市御用地遺跡や別郷廃寺（いずれも奈良時代）もあげられる。また水入遺跡では遺跡中央の開析谷が古墳時代～古代集落の境界のようなはたらきをしていたことがあきらかとなった。このような大・中河川に比較的近い開析谷が多数点在する地形は尾張地方の地形とは大きく異なる。このことから古墳群の形成をみても明らかなように、異質な地域社会を形成する要因のひとつになったと考えられる。



第 4 図　西三河地域の地質分類図（服部編 2001 より転載）

（２）歴史的環境

古代の郡界　水入遺跡の立地する豊田市南東部地域（上郷地区）は、矢作川を境として岡崎市北西部に接している。この市境はおおよそ古代の碧海郡と額田郡の境と目される。さらに豊田市中北部から三好町などが該当する古代の賀茂郡と碧海郡の境界もこの近くにあったとされ、江戸時代の郡界を参考にすると、水入遺跡のすぐ北側から矢作川支流の郡界川に至る東西方向にその境界があったと考えられる。

碧海郡北部と南部　さて矢作川は、丘陵地と台地を縫うように南流して賀茂郡内を抜けると広大な沖積地帯に至る。この沖積地帯を大きく占めるのがまさに碧海郡なのであるが、郡域を東西に貫く古代東海道のやや北側で北部と南部に分けることが可能である。具体的には東海道のやや北側、碧海台地東縁にある北野廃寺跡（41）と現・岡崎市市街地のあるやや高い沖積地の西端にある大門遺跡（127）を結ぶラインである。特に水入遺跡の地点から西側に後退しつつあった碧海台地の縁辺が、再び東側に張り出して半島状となるその最も東端に北野廃寺があることに注目されよう。一方東岸の大門遺跡周辺の沖積地が安定した市街地として現在あるのも、江戸時代に西岸よりも高く構築された堤防による働きが大きいのではあるが、大門遺跡や味噌粕岩遺跡（128）井ノ口遺跡（129）の存在から、弥生時代以降は比較的安定した状態であったと推定される。したがって、東西両側から比較的安定した高位の地形が張り出すかたちとなり、それによって水入遺跡の地点から広がりをみせた低地部はここで一旦収束する。結果、そこに胃袋のような形状の低地部を見いだすことができる。本節で記述する遺跡のほとんどはその縁辺に立地するのだが、今後低地中央部での遺跡発見も考えられ注意を要する。

ところで水入遺跡では、後期旧石器時代から近世までの遺構・遺物が確認されている。したがってその歴史的環境も各時代別に整理して以下に概観する。

後期旧石器時代　水入遺跡から北方向に70ｍのより高位の碧海台地上には、後期旧石器時代に属するナイフ型石器が出土する大明神Ａ遺跡（15）がある。また矢作川の対岸、干地遺跡（66）でも旧石器の出土をみている。いずれも石器の出土のみで生活跡の検出はないが、矢作川流域において、後期旧石器が比較的多く確認されている地域のひとつであり、今後注目される遺跡である。

縄文時代　縄文時代の遺跡としては、水入遺跡北側の西糟目遺跡（14）、大明神Ａ・Ｂ遺跡（15・16）、今町遺跡（６）がある。今町遺跡では中～晩期の土器が若干出土し、後期前葉には円形の竪穴建物があったことが確認された。大明神Ａ遺跡は晩期の遺物も採集されている。

弥生時代　沖積低地上に立地する川原遺跡（30）では弥生時代中期の集落が確認され、石製銅鐸舌が出土した。集落が廃絶した弥生時代末の同地には方形墳丘墓が造られた。やや下流に位置する本川遺跡（34）でも同じ頃に竪穴建物を中心とする集落が形成され、一部掘立柱建物もみられる。一方台地上の神明遺跡（24）では弥生時代中期（尾張地方の高蔵式期併行）に集落が開始するが、弥生時代後・末期の台地縁辺における集落形成は沖積低地に比べると低調である。

古墳時代　前期は弥生時代とさほど変わらない低地部中心の集落景観であったと考えられるが、水入遺跡の周辺、鴛鴨・渡刈町域では中期になると集落の数や規模が飛躍的に増大する傾向にある。台地上の神明遺跡・沖積地上の天神前遺跡（22）・郷上遺跡（31）・本川遺跡では、竪穴建物を中心とする集落が展開する。水入遺跡も含めてこれら集落群のうち神明遺跡・本川遺跡がやや先行すると考えられ、一方、

郷上遺跡で確認された集落は5世紀末～6世紀代に最盛期があると想定される。そして6世紀後半になると、神明遺跡と小谷を挟む矢迫遺跡（23）で、朝鮮半島の建築技術と関わりの深い大壁建物で構成される集落が出現する。当該期の古墳は神明遺跡付近に三味線塚古墳（26）、本川遺跡背後の台地縁辺に車塚古墳（33）などの円墳がわずかながら知られ、水入遺跡の背後には規模不明ながら渡刈富士塚古墳（19）、鳥刈塚古墳（８）がある。しかしこれらはほとんど5世紀代と推定され、5世紀末～6世紀代に増加する横穴式石室古墳は矢作川東岸の丘陵地に造られる。

奈良・平安時代　7世紀代になると再び集落の数が増加する。神明遺跡などの台地縁辺が特に顕著で、碧海郡南部では小針遺跡のような多くの掘立柱建物が確認された事例もある。ただこれら集落のうち、神明遺跡や今町遺跡のように奈良時代半ばに集落の縮小傾向が認められるものがある一方で、低地部の郷上遺跡のように7世紀後半を境に一旦縮小し、奈良時代後半以降に再び増加する事例もある。矢作川東岸台地上の於御所遺跡（75）・生平遺跡（97）でも平安時代以降の集落が主体で、平安時代を通じてより水（川）に近い場所を居住域とする傾向がうかがえる。

鎌倉・室町・戦国時代　中世集落は、郷上遺跡などのように低地部を中心に屋敷地区画とその内側に掘立柱建物で構成されるものの他に台地上の神明遺跡でも掘立柱建物が確認されている。これらが時期によって移動したものかどうかは検討が必要だが、集落の多様な立地はこの時代も変わらなかったとみられる。そのような中で水入遺跡では土坑墓群が広範に展開する特異な空間となっていたようで、集落と墓域および階層性との関わりについて今後問題となってこよう。一方政治的な場である城は、神明遺跡の近くに15世紀半ばに築かれたとみられる鴛鴨松平氏の居城であった鴛鴨城跡（29）があるほか、上野城跡（35）がある。本川遺跡東隣にある隣松寺は鴛鴨松平氏の菩提寺でもある。また水入遺跡の対岸には室町幕府の要職にあった細川氏や仁木氏の出自があり、細川城山城跡（53）の周辺にある短冊状地割は、町屋的景観があったものと推察される。

江戸時代　17世紀代には上郷地区南方台地上の開拓が進み、鷺蔵池などが築かれる一方で低地部は度重なる洪水にみまわれた。宝暦年間（1751～1763年）の洪水は最も苛烈で、この頃から台地縁辺への移住が進行した。例えば郷上遺跡では該期の遺構・遺物を境にして集落の営みはほぼ消えてしまう。現在の鴛鴨・渡刈町は台地上に展開するが、この時期の洪水で低地部から移住した伝承をもっている。しかし洪水の後は耕作地への復旧がなされ、現在ある台地上の集落と低地部の水田を中心とする景観はこの頃に形成された。また現在ある矢作川堤防の原型は江戸時代に築かれたが、水入遺跡がある字大屋敷・下糟目の一帯は遺跡名が示すように増水時には水を逃がす場所であったらしい。

明治時代以降　碧海台地を潤す明治用水は明治13（1880）年に完成した。その取水口は遺跡から約2 km矢作川上流に位置し、用水はおよそ中位段丘の縁辺をはしる。遺跡西隣の糟目春日神社は『文徳天皇実録』に仁寿元（851）年に三河国10社のひとつ（「糟目」）として従五位下に叙せられたことが記されている。大正2（1913）年までは遺跡北側の鳥刈塚古墳付近に所在したが度重なる洪水から逃れるため現地に移転したという。また遺跡北側には三河鉄道（後に名古屋鉄道）挙母線がのび矢作川を渡っていたが、昭和48（1973）年に廃止された。

第５図　水入遺跡周辺の遺跡分布図（国土地理院発行１：25,000 豊田南部に加筆）

第２表　水入遺跡周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地
1	河合遺跡	豊田市	48	琴平３号墳	豊田市	95	天神山第２号墳	岡崎市
2	豊田大塚古墳	豊田市	49	琴平２号墳	豊田市	96	天神山第３号墳	岡崎市
3	小猿投遺跡	豊田市	50	琴平４号墳	豊田市	97	生平遺跡	岡崎市
4	池ノ表古墳	豊田市	51	琴平５号墳	豊田市	98	東山第１号墳	岡崎市
5	薬師山古墳	豊田市	52	雨戸古墳	岡崎市	99	東山第２号墳	岡崎市
6	今町遺跡	豊田市	53	細川城山城跡	岡崎市	100	東山第３号墳	岡崎市
7	雁戸遺跡	豊田市	54	権水古墳	岡崎市	101	東山第４号墳	岡崎市
8	鳥狩塚古墳	豊田市	55	長原古墳	岡崎市	102	鐘鋳畑古墳	岡崎市
9	高岡１号墳	豊田市	56	古村積神社古墳	岡崎市	103	中ノ坂第１号墳	岡崎市
10	高岡２号墳	豊田市	57	仲門町遺跡	岡崎市	104	中ノ坂第２号墳	岡崎市
11	高岡３号墳	豊田市	58	石田第１号墳	岡崎市	105	中ノ坂第３号墳	岡崎市
12	高岡遺跡	豊田市	59	石田第2号墳	岡崎市	106	中ノ坂第４号墳	岡崎市
13	西糟目古墳	豊田市	60	石田東遺跡	岡崎市	107	中ノ坂第５号墳	岡崎市
14	西糟目遺跡	豊田市	61	上平古墳	岡崎市	108	中ノ坂第６号墳	岡崎市
15	大明神A遺跡	豊田市	62	岩御堂遺跡	岡崎市	109	中ノ坂第７号墳	岡崎市
16	大明神B遺跡	豊田市	63	窪地古墳	岡崎市	110	中ノ坂第８号墳	岡崎市
17	北田遺跡	豊田市	64	細川城跡	岡崎市	111	中ノ坂第９号墳	岡崎市
18	水入遺跡	豊田市	65	しんぞう塚古墳	岡崎市	112	御用田遺跡	岡崎市
19	渡刈富士塚古墳	豊田市	66	千地遺跡	岡崎市	113	蔵前古墳	岡崎市
20	小狭間遺跡	豊田市	67	仁木八幡宮遺跡	岡崎市	114	前田遺跡	岡崎市
21	上郷中塚状遺構	豊田市	68	八反田遺跡	岡崎市	115	御用田南遺跡	岡崎市
22	天神前遺跡	豊田市	69	年重遺跡	岡崎市	116	御用田第1号墳	岡崎市
23	矢迫遺跡	豊田市	70	年重古墳	岡崎市	117	御用田第2号墳	岡崎市
24	神明遺跡	豊田市	71	八反田古墳	岡崎市	118	下山田第１号墳	岡崎市
25	神明瓦窯	豊田市	72	東郷遺跡	岡崎市	119	下山田第２号墳	岡崎市
26	三味線塚古墳	豊田市	73	車塚遺跡	岡崎市	120	下山田第３号墳	岡崎市
27	鴛鴨町元屋敷遺跡	豊田市	74	八ツ木古墳	岡崎市	121	西阿知和城跡	岡崎市
28	安福寺遺跡	豊田市	75	於御所遺跡	岡崎市	122	於新造古墳	岡崎市
29	鴛鴨城跡	豊田市	76	車塚第１号墳	岡崎市	123	北山第１号墳	岡崎市
30	川原遺跡	豊田市	77	車塚第２号墳	岡崎市	124	北山第２号墳	岡崎市
31	郷上遺跡	豊田市	78	車塚第３号墳	岡崎市	125	北山第３号墳	岡崎市
32	大清水遺跡	豊田市	79	於御所南遺跡	岡崎市	126	矢作川河床遺跡	岡崎市
33	車塚古墳	豊田市	80	岩津新城跡	岡崎市	127	大門遺跡	岡崎市
34	本川遺跡	豊田市	81	若一王子神社遺跡	岡崎市	128	味噌粕岩遺跡	岡崎市
35	上野城跡	豊田市	82	岩津大膳城跡	岡崎市	129	井ノ口遺跡	岡崎市
36	上野下村城跡	豊田市	83	岩津第１号墳	岡崎市	130	西池ノ入第１号墳	岡崎市
37	国江城跡	豊田市	84	岩津第２号墳	岡崎市	131	西池ノ入第２号墳	岡崎市
38	高正館跡	豊田市	85	岩津第３号墳	岡崎市	132	西池ノ入第３号墳	岡崎市
39	東郷１号墳	岡崎市	86	岩津第４号墳	岡崎市	133	西池ノ入第４号墳	岡崎市
40	東郷２号墳	岡崎市	87	岩津第５号墳	岡崎市	134	西池ノ入第５号墳	岡崎市
41	北野廃寺跡	岡崎市	88	岩津第６号墳	岡崎市	135	百々城跡	岡崎市
42	猿投塚古墳	岡崎市	89	岩津城跡	岡崎市	136	東池ノ入第１号墳	岡崎市
43	荒山１号墳	豊田市	90	天神山第５号墳	岡崎市	137	東池ノ入第２号墳	岡崎市
44	荒山２号墳	豊田市	91	天神山第７号墳	岡崎市	138	東池ノ入第3号墳	岡崎市
45	梅垣内古墳	豊田市	92	天神山第８号墳	岡崎市	139	松橋第１号墳	岡崎市
46	上ケ塚古墳	豊田市	93	天神山第９号墳	岡崎市	140	松橋第２号墳	岡崎市
47	琴平１号墳	豊田市	94	天神山第１号墳	岡崎市			

第 4 節　基本土層と時期区分

（1）基本土層

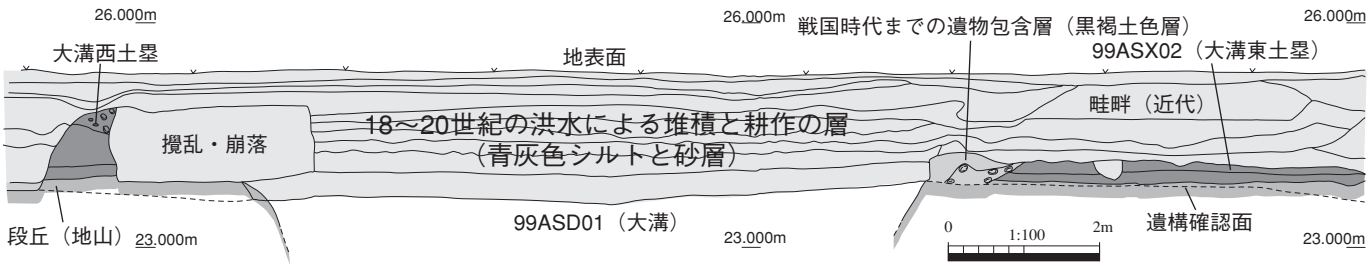
遺構確認面としての段丘面　先述したとおり水入遺跡は段丘面上に立地する遺跡である。したがって遺構の検出～確認作業の面の一つにこの段丘面を充てることになる。しかし当然ながらこの段丘面に対しても削平がなされるわけで、段丘面の検出が即旧地形の検出ということにはならない。その点については大屋敷地区における戦国時代末～近世初頭の屋敷地区画整備に伴う整地（第 8 章）や下糟目地区北部における近世後半～近代の耕作地化による削平（第 9 章）といった顕著な造作痕跡、すなわち歴史的事象として把握しているが、中世以前のそれについては見えにくいというのが現実である。とはいえ集落の展開に微地形が関わることはいうまでもなく、本書では等高線などから極力微地形の検出に心がけた。

遺物包含層　大屋敷地区～下糟目地区南部においては段丘面直上に黒褐色粘質土層が厚さ約 10～50cm 堆積する。この土層からは近世初頭以前の遺物が出土するので、近世以降耕作地化が進行する以前の旧表土と考えることができる。ただし一部の戦国時代土塁はこの層の上に構築されており、その場合出土遺物は中世以前に限られる。

青灰色シルトおよび粗粒砂層　黒褐色土層の上に厚く堆積するのが近世～近代の洪水による堆積砂層である。耕作土たる表土はこのごく表層である。砂層は遺跡南部にゆくほど厚くなり 98B2 区では地表面から約 3m も堆積する。99C 区などでの観察によると粗粒砂層と青灰色シルト層の互層になっており、洪水による前者堆積ののちに田畑として復旧した後者の層の繰り返しになっているとみられ、十数回以上の繰り返しが観察できる箇所もあるという（註）。洪水回数はともかく、これだけの厚さの堆積が観察できたのは付近一帯の発掘調査の中でも水入遺跡だけで、遺跡南側に堤防を設けて遊水池にしていたこととも関係するとみられる。

遺構覆土にみる時期差　水入遺跡では遺構の覆土も多様である。青灰色シルトや中粒砂は近世以降に由来するのは上記のとおりであるが、例えば古代の竪穴建物跡の覆土と中世土坑墓の覆土は黒褐色シルトの含有はほぼ同じであるが前者が地山削り出しによる黄褐色シルトブロック・粒を多く含む点に差異がみられる。とりわけ特徴的なのが平安時代に該当するとみられる覆土で、大溝などで若干みられる程度であるがきわめて黒色の度合いが強い。当該期は建物が散在することが調査の結果判明しており、畑作に関わる可能性もあろう。矢作川流域全体で検討すべき事項であると思われる。

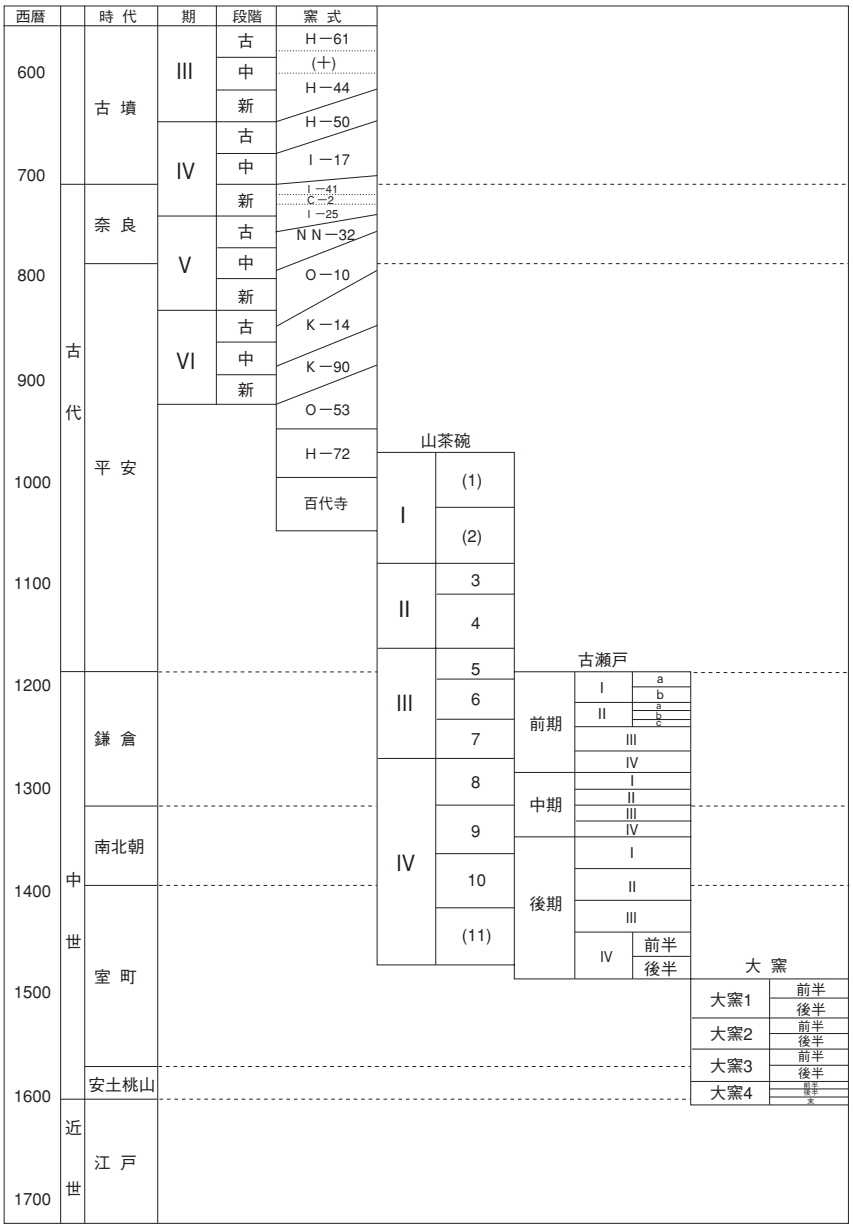
（註）小野映介氏（当時立命館大学大学院）の教示による。



第 6 図　99A 区調査区北壁土層断面図

（2）時代と時期区分

時代区分　本書では、出土遺物から導かれる相対年代を主体に遺構年代およびそれら暦年代を判断し記述する。当然ながら遺物が出土しない遺構も多数あるわけで、こういった無遺物遺構の年代については遺構の形状や堆積土層の相互比較から判断することになる。ともあれその記述にあたっては、客観性を重視して一般的に用いられる時代区分の用語を避ける表現もまま見受けられるが、本書が調査成果の一般への普及という役目を負っている以上、一般的な時代区分用語を用いるのが充当であると考える。ただ時代区分として完璧な共通認識があるわけではないし、本来一遺跡に刻まれた歴史は一般的な時代区分とは関係なく画期をもっている点はわすれてはならない。そのためには時代区分をさらにいくつかの時期に区分して遺跡固有の画期をより適格に表現する必要がある。



第７図　土器・陶磁器による時期区分（片山 2004 より転載）

時期区分　水入遺跡に関わる時代のうち、縄文時代は草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の６期区分とし、古墳時代は前期・中期・後期の３期区分とする。古代は飛鳥・奈良・平安時代とし概ね７～11世紀をあてるが、平安時代は前期・中期・後期として９・10・11世紀を対応させる。中世鎌倉時代は13世紀代を中心とするが考古遺物との関連から前は12世紀、後は14世紀を含めた概念で使用する。同様に戦国時代は16世紀代を占めるが15世紀代も含んで捉えている。近世江戸時代初頭までが遺構・遺物の主体であるがおよそ17世紀前半を江戸時代初頭と考えている。

編年表　本書で依拠する土器･陶器の編年については各章を参照されたい。第7図はそれらを暦年代ベースで一覧にしたもので、合わせて参照されたい。

第２章　旧石器時代から縄文時代の石器

第１節　調査の方法と土層

（１）旧石器時代調査の契機

99Ｊ区を設定した遺跡北東隅部では、調査時点で明治用水を境にして遺跡北側のより高位の段丘面との間に約５ｍの段差が生じていた。ただこれは、明治用水と矢作川西堤防に囲まれた通称「水入」の範囲内における江戸時代以降とくに近現代の削平による結果であって、旧地形をある程度反映しているものの、99H区での機械による大規模な削平痕跡状況を考慮すると、より高位の段丘面との間には緩やかな傾斜面があったものと推測される。

さて、より高位な段丘面およびその北方では旧石器を含む石器が出土する大明神Ａ遺跡などが知られている。また99Ｊ区該当地点での試掘調査では旧石器が若干出土していた。したがって段丘面を掘り下げての調査が予想された。そこで他の調査区と同様に段丘面を確認面（検１）とする調査をまず行ない、その後段丘面を掘り下げて（検２・3）の調査を実施することとした。

調査進行によって段丘面の様相が少しずつ判明した。検１確認面で知りうるその様相は、名古屋大学教授海津正倫氏によると99Ｊ区中央に「白色系の粘土層」がみられ、その周囲は碧海面と推定される赤褐色の粘土層がみられるという。つまり調査区中央部に窪地のある景観が想定されるだが、問題は、その窪地への堆積が後期旧石器時代となるのかあるいは縄文時代まで下るのかという点にあった。ただ時期は不問にして、この時点ですでに窪地を中心とする石器出土の偏在傾向が看取でき、段丘面下調査のポイントがほぼ決まりつつあった。

（２）段丘面下部調査の方法

調査はまず、検１での調査と併行して、調査区中央の窪地に対して複数のトレンチを入れることから始めた。トレンチは段丘面下部の礫層まで掘削し、それによって窪地の規模を把握した。窪地は直径約18mの円形皿状である。ただこの窪地は閉じた空間ではないようで、北東方向すなわち矢作川方向に向かって開いていたとみられる（第９図）。土層は、黄褐色の上層と浅黄色（灰白色に近い）の下層の２層に区分された。上層は土壌化が進んだ分暗い色調となる。一方下層は砂質が強くなりやがて円礫が多く混じるようになる。第８図のように出土した礫（石器も含まれる）を標高ごとに分けると、標高25.80～25.00mの円礫は地形に関係なく分布するが、24.80m以下の円礫はリング状に分布するのがわかる。すなわちこのリング状分布こそが窪地の縁辺にあたり、調査では標高24.00m以下は掘削しなかったため窪地のより底に近い円礫は検出されなかったのである。

したがって、洪水などでもともと形成されていた円礫を多く含む層の窪地に土砂が流れ込んだことが

「白色系の粘土」堆積の成因となったと考えられる。トレンチからは33（トレンチ２）などの石器が出土したが、いずれも窪地堆積層からの出土である。

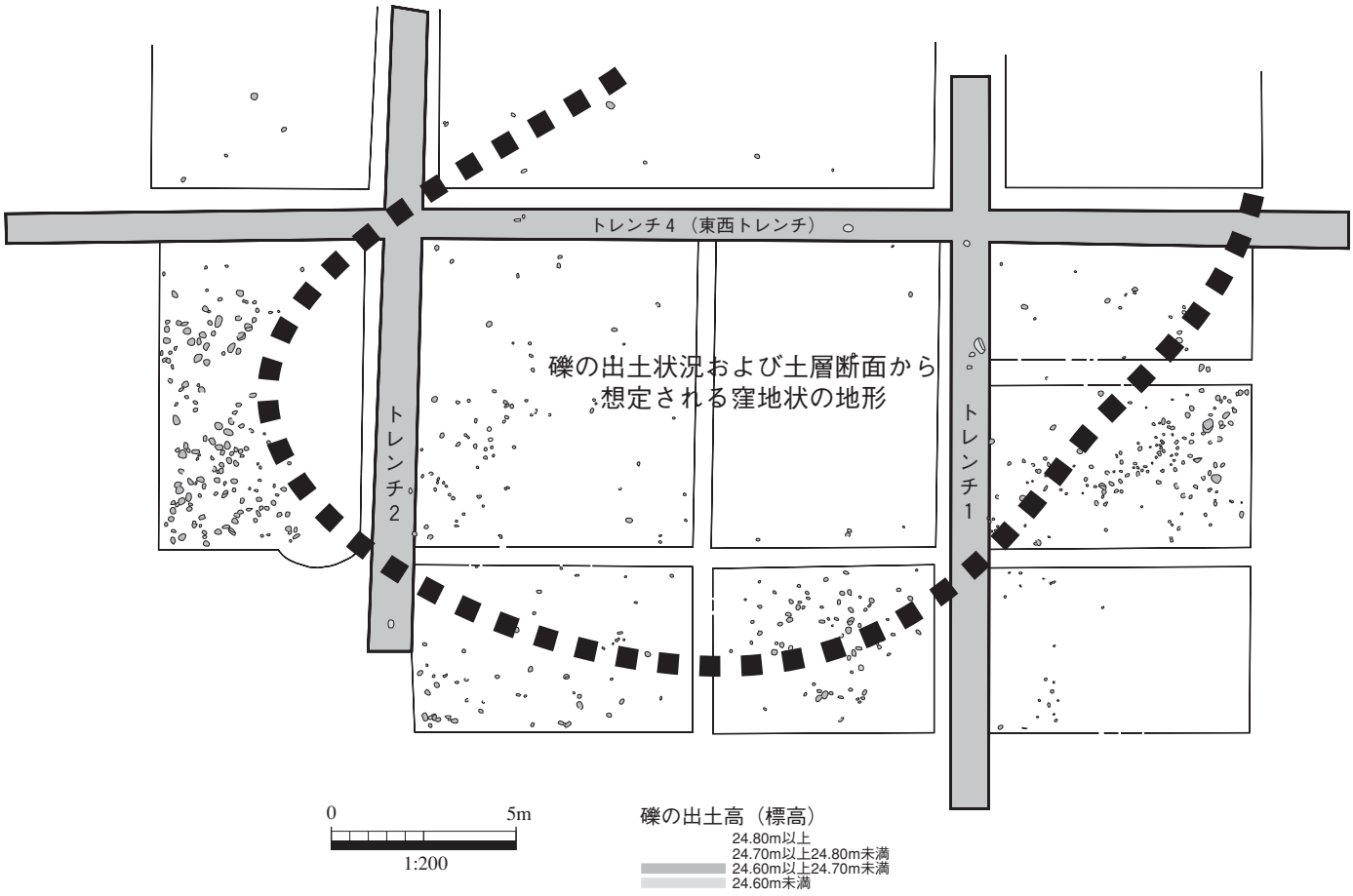
次いでグリッドにそって掘り下げをおこなった。窪地のある調査区中央のトレンチ４（東西トレンチ）から南側の17グリッド分は全て掘り下げた（窪地エリア）。またトレンチ４より北側では20グリッド分の範囲で千鳥模様状に掘り下げた（北側エリア）。北側エリアでは、段丘下部の礫層は小規模な凹凸が各

第８図　99J区石器・円礫出土地点分布図

所にあって一部は遺構確認面に露出していたが、ほとんどの箇所で厚さ約10cmの赤褐色粘土層がみられた。ただこの赤褐色粘土層からは石器およびその可能性のある礫の出土はほとんどなかった。現場で判断できないものも含めて礫は出土地点を記録した上で採り上げた。

写真　99J トレンチ２西壁土層断面（部分）

発掘現場では、麻生優氏、鈴木忠司氏らの視察を受けて、いわゆる石器の集中ブロックは認められず、石器がやや離れた地点からのこの窪地への流れ込んだものと判断した。ただ、第10図にもあるように、窪地の南側で石器の集中があるのも事実である（A群の一部）。調査から持ち帰った石器・礫は洗浄時にある程度選別し、その後整理作業の中で川添調査研究員によってさらに選別をおこなった。99J区以外の調査区でも石器・礫が出土したが、これらも同様に選別を実施した。この中には形態的に明らかに縄文時代に該当するものや縄文時代の竪穴建物から出土したものもあり、本来ならば第３章で提示すべきではある。しかしながら大多数の石器は旧石器時代か縄文時代か判じがたいものであり、遺構外から出土した事例が多いことも、今回本章で旧石器と縄文の石器を一括して報告する理由の一つでもある（永井邦仁）。



第９図　99J 区窪地の推定範囲図

第 2 節　旧石器時代・縄文時代の石器

(1) はじめに

水入遺跡からは、99J 区・99Kb 区を中心として、後期旧石器時代の石器が出土している。旧石器時代の石器と考えられるものは、この調査区のみならず、99F 区・99H 区など、水入遺跡の北側にあたる地点でも若干出土している。99K 区では縄文時代の遺構も検出されており、一部、旧石器時代の石器群と縄文時代の石器群との峻別が難しいものも含まれている。ここでは、可能な限り時代ごとに峻別して報告するが、難しいものは「縄文時代の石器」に含める。

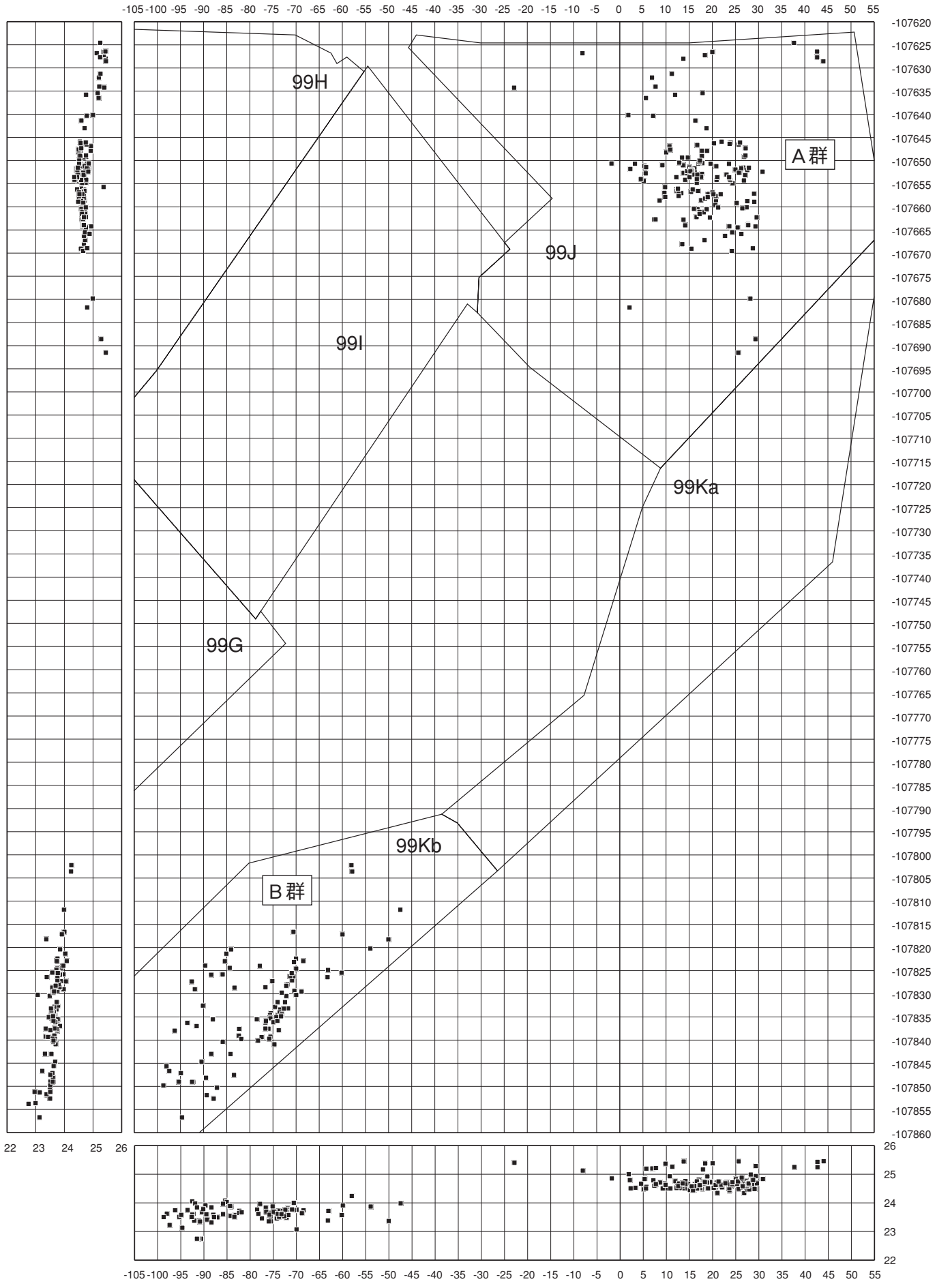
(2) 分析の方法

ここでは遺物整理の方法について記しておく。詳細な分析は、後期旧石器時代の石器群がまとまって出土した 99Kb 区・99J 区の資料を中心に行った。まず、遺跡調査の段階で地点による取上げを行うことができた資料について、ドットマップを作成した（第 10 図）。ドットマップの平面図では、99J 区で 1 か所、99Kb 区でも 1 か所の石器集中地区が見られた。その上で、地点による取上げができなかった遺物についても、出土グリッドなどの検討から、出土状況をおおよそ把握した。また、99F 区の東端から 99H 区の西半分の区域でも、後期旧石器時代の定型的な石器が若干出土している。これらの出土区域を大きく 1 か所にまとめる。以上のことから、99J 区の集中地区の石器群を「旧石器 A 群」、99K 区のそれを「旧石器 B 群」、99F 区の東端から 99H 区にかけてのそれを「旧石器 C 群」と呼称する（第 11 図）。次に、これらの資料に関して、使用石材の分類を実施した。チャートに関しては、「色調」・「光沢」・「節理」・「不純物」の状況から、138 種類に細別した（第 3・4 表）。その上で、遺物の接合関係を検討した。この分析を通じて非定形の剥片・石核類に関しても、後期旧石器時代と縄文時代の資料とに分類を行った。

(3) 後期旧石器時代の石器

1. 旧石器 A 群（18 ～ 68・118 ～ 132・134 ～ 150・158）

A 群からは 300 点ほどの石器が出土した。ドットマップの側面側を観察すると、石器群の出土は薄い皿状を呈している。A 群の出土はこの皿状の凹みに沿っていたものと考えられる（第 10 図）。また、平面分布の状況を詳細に見ると、遺物の分布が「濃密な部分」と、それをとりまく「散発的な部分」とが存在する。「濃密な部分」では、掻器・削器などがみられるものの、剥片・石核の分布がかなり濃厚であり、チャート・溶結凝灰岩の接合資料もこの「濃密な部分」内に集中する（第 12・13 図）。チャートの接合資料は 6 点見つかっている（第 10 図）。28 は剥片 2 点と掻器との接合例である。合わせた剥片の長さは現存で約 7cm になる。47 は約 6cm 角ほどの大きさの原石を割った状態のものである。31・54 も現存で最大長約 6cm のものであり、一面に礫風化面を残すものである。溶結凝灰岩の接合資料も 6 点確認できた（第 12 図）。現存長 5cm 以下のものが主体で、チャートの接合資料よりも若干法量的に小さい傾向にある。一方、A 群内での製品の分布はこれら剥片・石核類とは相違が見られる（第 14 図）。「濃密な部分」ばかりではなく、むしろその周囲の「散発的な部分」に多く見られるのが特徴である。143・145・

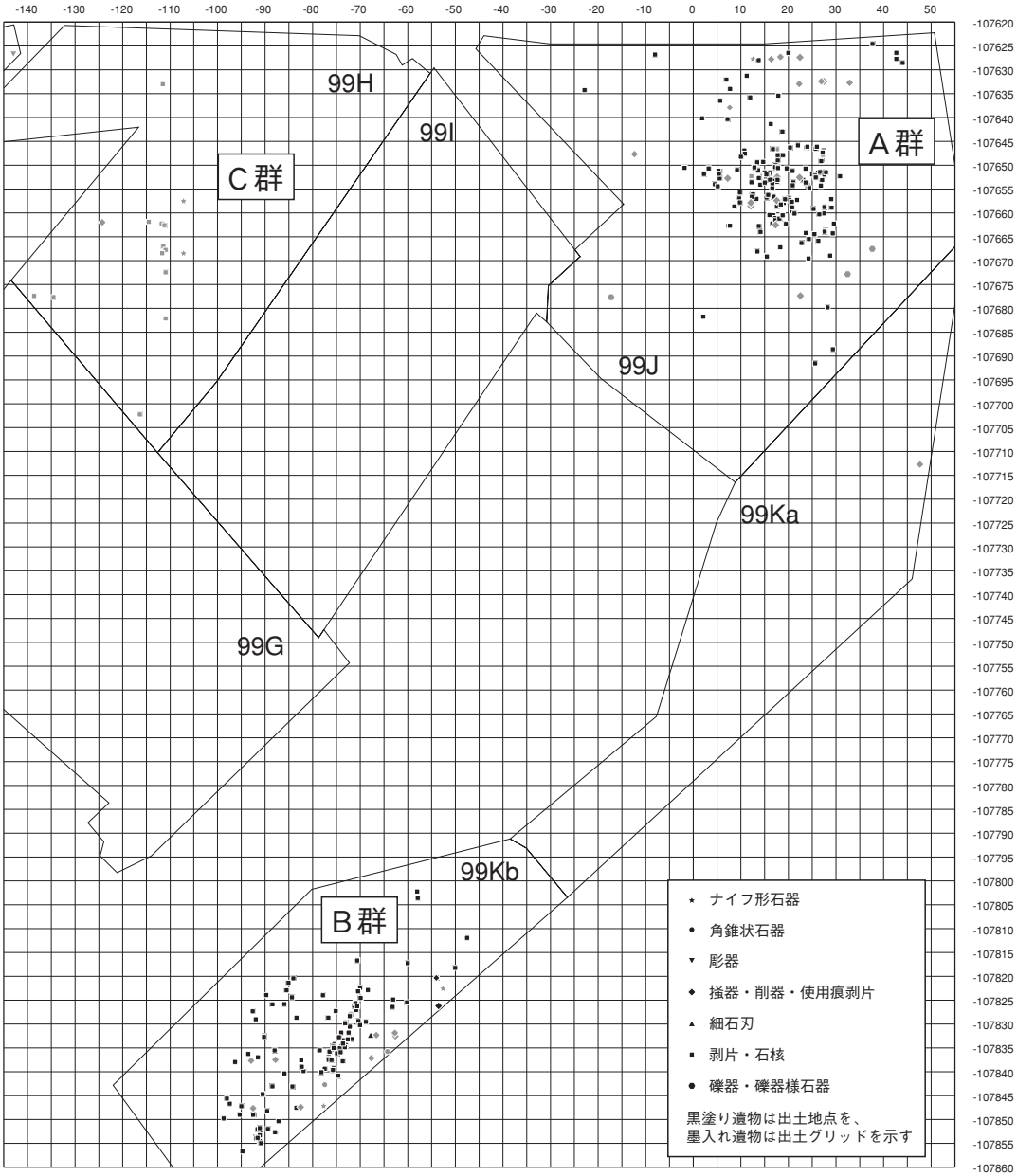


第 10 図　99J・K 区旧石器・縄文時代石器出土地点分布図

149 などの礫器もしく礫器様石器は「散発的な部分」の南側に多く見られる。以下、器種ごとに報告する。

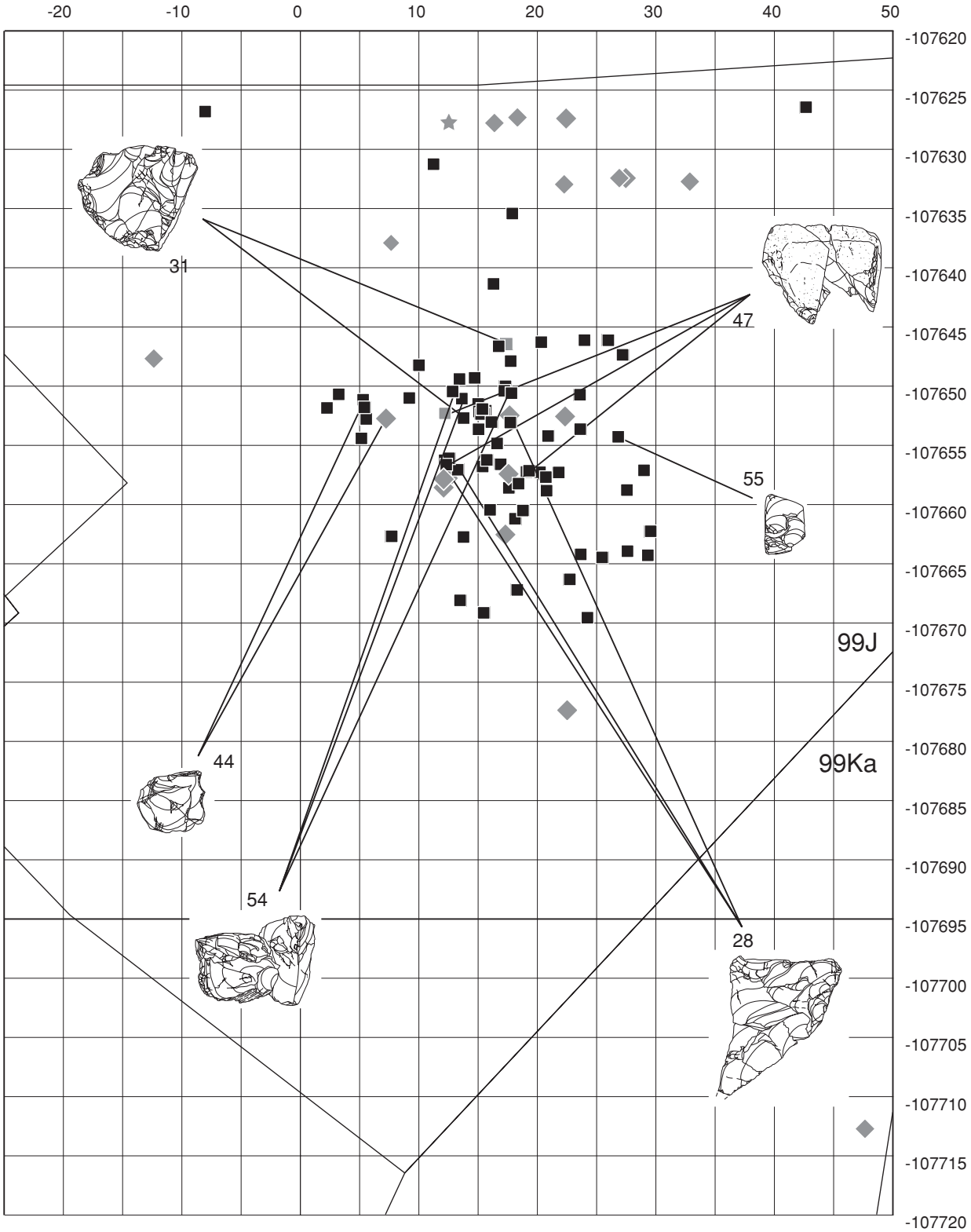
ナイフ形石器（18・118） 118 は縦長剥片の打点側を先端側にし、基部の両側片に微細な調整が加えられているものである。石材はチャート 98 で、この石材はほかの器種にはみられない。18 は打点側の表面および側辺に調整が加えられているものである。ナイフ形石器の可能性も考えられる。溶結凝灰岩製。

掻器・削器・使用痕剥片（19 ～ 28-1・40・44-1・67・119・121・123 ～ 128・132・158） 使用によると考えられる剥離がみられるものである。19・20 は急な角度を呈する掻器、21・22・119 は鋭い刃部の削器、それ以外は鋭い剥片縁辺部に使用によると思われる微細剥離がみられる使用痕剥片である。19・20・44-1 は横長剥片の側辺に使用による微細剥離が集中して見られるものである。21・40 は横長剥片の端部全面に調整もしくは微細剥離があるものである。23 ～ 26・119・121・123 ～ 128・132・158 は縦長



第 11 図　99J・K 区旧石器・縄文時代石器器種ごと出土地点分布図

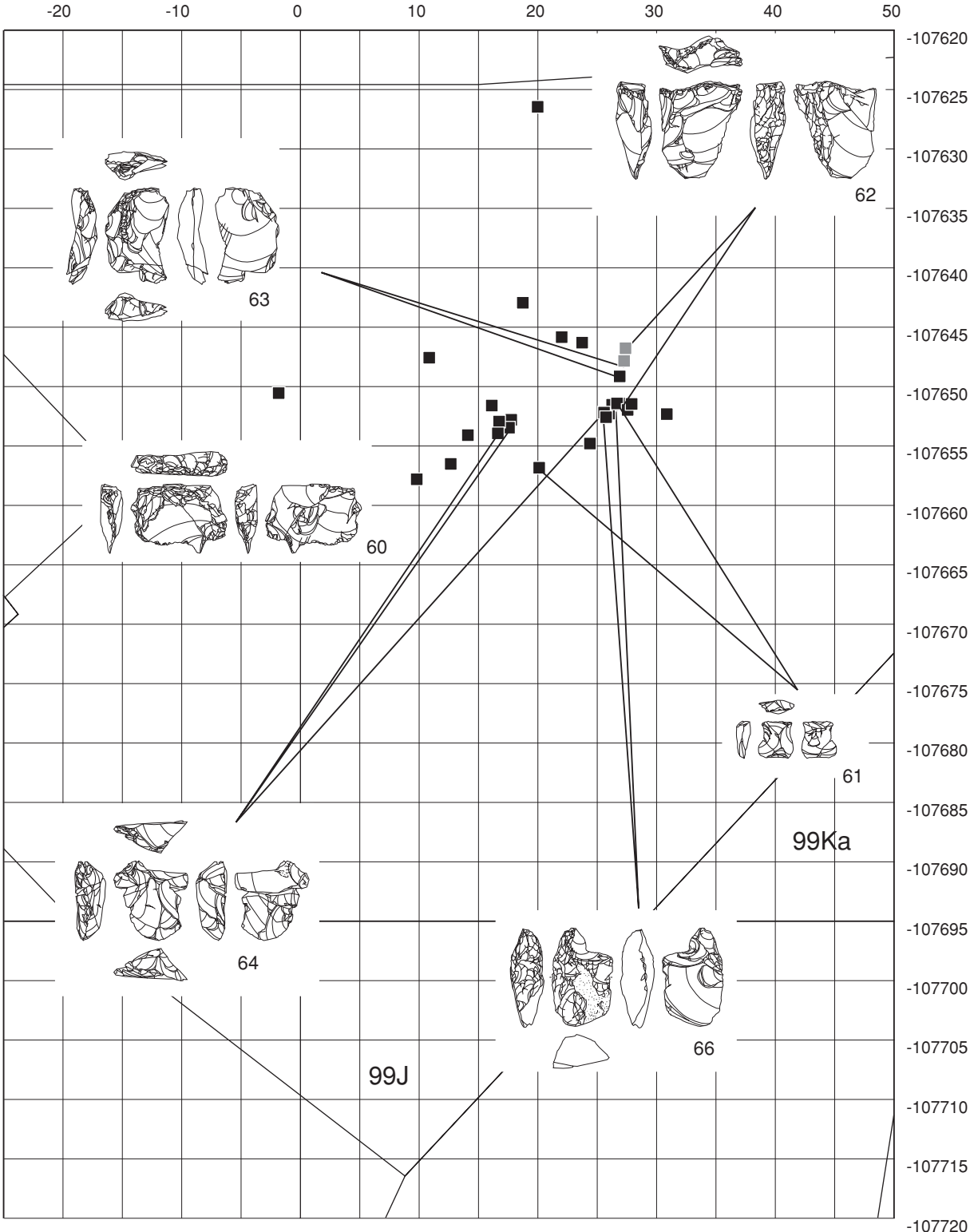
剥片の側辺に微細剥離が見られるものである。67 は縦長剥片の端部に微細剥離が見られるものである。28-1 は板状の石核と考えられるものである。一辺に使用によると考えられる微細剥離が見られる。剥片作出が終了した後に使用されたと考えられる。すべてチャート製である。19 のチャート 20、24 のチャート 32、40 のチャート 17、123 のチャート 109、124 のチャート 114、125 のチャート 60、126 のチャート



第 12 図　旧石器 A 群接合資料出土地点分布図

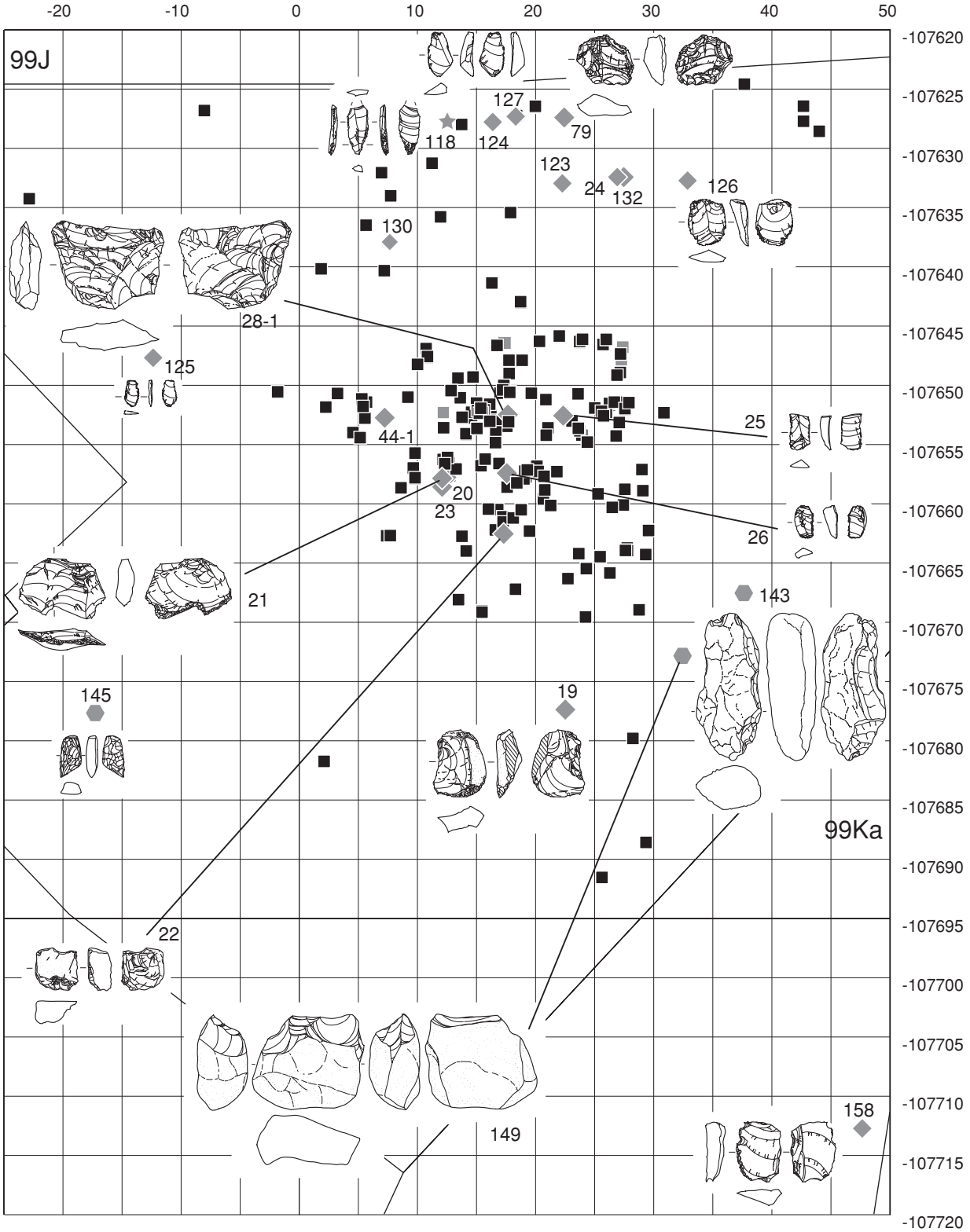
105、127 のチャート 99、128 のチャート 115、158 のチャート 67 は、この石器それぞれ 1 点のみで、ほかの器種にはみられない。

石刃（33・34） 33 は打点部分を調整された石核から、連続して縦長剥片が作出された様子が窺えられる。石材はチャート 2 で、この石材の石器はこれ 1 点のみである。34 も連続して作出された縦長剥片の可能性がある。石材はチャート 30 で、この石材の石器もこれ 1 点のみである。



第 13 図　旧石器 A 群出土地点分布図

剥片類・石核類　上記以外の剥片類・石核類を一括した。これらは一様ではなく、石器製作上のさまざまな段階のもの（器種）を含んでいる。なお、長さ1cm未満の剥片については「微細剥片」として区別した。ここでは、図化した資料をもとに石材別に報告する。石材（細別）分類を行いながら図化を行っていないものもあるが、それに関しては遺物一覧表を参照されたい。



第14図　旧石器A群接合資料出土地点分布図

チャート1（37～39・137～139） 剥片（37・39・137～139）と石核（38）が見られる。剥片はすべて縦長剥片で、貝殻状もしくは長楕円形の剥片が多い。39は打点を調整するために作出された剥片かもしれない。一方、38で作出された剥片は横長剥片のようである。横長剥片を素材としたものに掻器が1点ある（21）。チャート1は「土岐石」と呼ばれる深緑色を呈する石材である。

チャート3（30～32） 剥片（31-2・32）と石核（30・31-1）とがある。30は方向をそろえて縦長剥片を作出する一方で、打点を変えて横長剥片をも作出している。31は打点を上下に転位させながら縦長剥片を作出しており、打点側でも打点部調整を兼ねて縦長剥片を作出している。32はやや横長気味の剥片である。

チャート4（35・36・134） 剥片（134）と石核（35・36）とがある。35は打面を回転させながら縦長剥片を作出している。頭部の調整も行ったようである。36は大きくは2方向から剥片の作出を行っている。縦長剥片を主に作出していたようである。

チャート15（41） 石核1点のみである。45は打面を各方向に転位させながら、縦長剥片およびやや横長の貝殻状剥片を作出する。

チャート16（1～44） 剥片（41・43・44）・石核（42）・微細剥片がある。41・43は縦長剥片で、表面には周囲から剥片が作出（もしくは調整）される。44はやや横長の貝殻状剥片である。42は周囲から主に横長剥片が作出されている。

チャート18（46） 石核1点のみである。46は打面を転位して別の場所で剥片作出を行っている。作出される剥片は、やや大型で横長の貝殻状剥片である。

チャート19（28・29） 剥片（28-2・28-3・29）・石核（28-1）・微細剥片がある。28は、原石から粗割りされた状態のもので、これを石核としさらに剥片を作出したものと考えられる。29は打面を調整・作出ために作出された剥片である。

チャート23（47） 剥片と石核（47）がある。47は打面を転位しながら原石から剥片作出が行われたようで、途中で破砕した様子がうかがえる。

チャート24（48・49） 剥片のみである。48は縦長剥片、49は横長剥片である。48の作出では打点を90度転位させているようである。

チャート26（52） 剥片1点のみである。やや縦長の斜行する剥片である。

チャート27（53・54） 剥片と石核が見られる。54は打面を転位させながら剥片の作出を行っている。作出される剥片は縦長剥片が主体である。

チャート28（50・51） 剥片が見られる。50・51は両者とも斜方向気味の縦長剥片である。その他微細剥離が見られる剥片(25)もある。

チャート34（55・56） 剥片・石核・原石がある。55・56は作出される剥片は小型になると考えられるが、56では打面を転位させながら、剥片を複数作出されている。縦長剥片・横長剥片の両者が作出されたか。

チャート42(59) 剥片(59)・微細剥片がある。59は斜方向気味の縦長剥片である。

チャート43(58) 剥片1点のみである。59は斜方向気味の横長剥片である。

チャート44(57)　剥片1点のみである。縦長剥片で、表面には同方向の剥離痕がみられる。

チャート58(135)　石核が見られる。135は板状の石核で、各方向に打面転位を行い剥片の作出が行われている。その他、この石材には使用痕剥片(132)が見られる。

チャート104(131)　石核1点のみである。131は表裏同一方向から縦長剥片を作出している。

チャート107(136)　剥片もしくは板状の石核と思われるものが1点のみである。表面には打面を90度転位させて剥片を作出している様子がみられる。

チャート110(130)　横長剥片1点のみである。

溶結凝灰岩(60～66・122・129・141・142)　剥片(61～65・66-2・122・129・142)・石核(60・66-1・141)がある。打面を転位させ、縦長剥片や貝殻状剥片を作出している。60は板状の石核で、

凝灰岩(140)　剥片・石核が出土したが、ここでは石核のみ報告する。140は5 cm角ほどの礫の一端から、表裏交互に剥離を行い、剥片を作出している。作出された剥片は、貝殻状剥片と思われる。

下呂石(68)　剥片・石核の計2点出土したが、ここでは石核のみ図化した。68は礫風化面の状態から角礫出自のものと考えられる。図示しなかった別の剥片は同様に円礫出自のものである。石核の周囲　に対し同一方向から剥片が作出されている。作出された剥片は縦長剥片と考えられる。

石英(水晶)(120)　剥片2点が出土したうちの1点のみを図化した。縦長剥片であり、表面には調整および微細剥離が見られる。この微細剥離は使用によるものの可能性もある。

礫器もしくは礫器様石器(143～150)　これまでのチャート・溶結凝灰岩などの剥片石器群とは別に、ホルンフェルスを石材とした石器群がまとまって出土している。143は表裏両面とも側辺部のみに調整を加えているものである。144は薄く剥れた原石に端部を片面側からのみ調整を加え刃部としている。145は断面形状台形の棒状を呈するもので、全面にわたり調整が加えられている。他の石器とは調整のあり方が異なることから、時期がより新しいものかもしれない。146は薄く剥れた原石の縁辺部に使用によると思われる敲打あるいは剥離痕の見られるものである。147は表面の風化がより著しく調整の状態の観察が難しいものの、表面のあり方や断面形状などから敲打具などの可能性が考えられる。148・149は平面形状方形を呈するもので、148は片側から、149は両側から調整が加えられているものである。150は両面に調整が加えられているもので、大型剥片の石核の可能性もある。

2. 旧石器B群(69～117)

99Kb区に見られた石器群で、総数100点弱が確認された。その他、縄文期との峻別が難しいものが160点ほど見られる。平面分布の状況を見ると、石器群が集中している部分が2ヶ所存在する。この部分を構成するものは、剥片・石核類が中心であり、製品は分布の集中部から若干はずれた、周囲から出土している傾向がある(図6)。B群では、石器の接合関係は見られなかった。以下、器種別に報告する。

ナイフ形石器(69・113)　69は横長の素材剥片を使用し、基部の両側辺に調整が見られるものである。一側辺は素材剥片作出による凹凸を調整し、もう一側辺は素材剥片からの切断を意図したものと考えられる。使用石材はチャート75である。113は縦長の素材剥片の打点側を先端部側に使用している。基部および先端部の同一側辺のみに調整を加えて、刃潰しを行っている。黒曜石製。

角錐状石器（70）　70は横長剥片を使用し、基部および側辺に調整が見られるものである。69同様に一

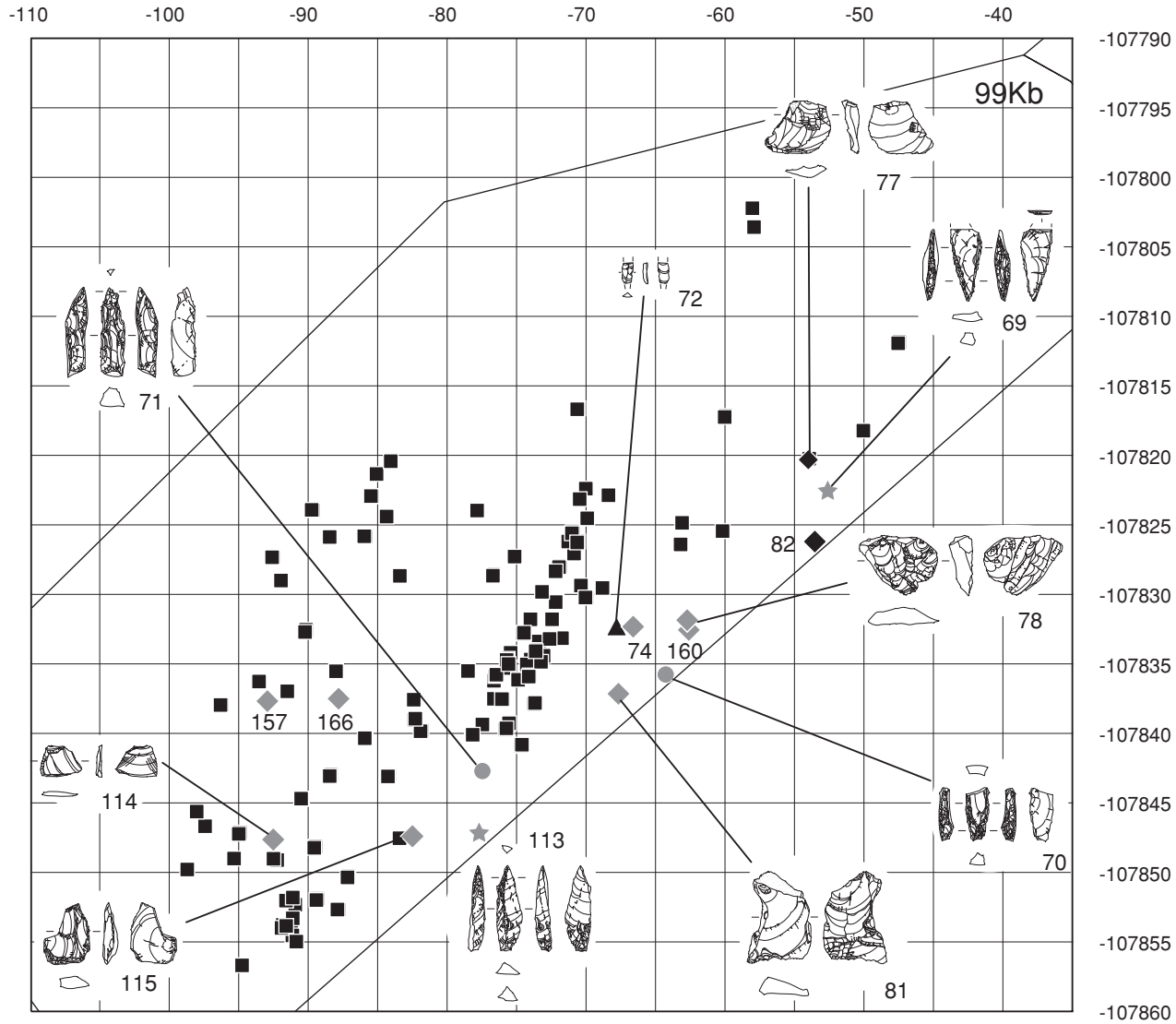
側辺は素材剥片作出による凹凸を調整し、もう一側辺は素材剥片からの切断を意図したものと考えられる。使用石材はチャート70で、この石材使用の石器は他には見られない。

不明製品（71） 71は横長剥片を使用し、表面全体に調整が施されているものである。先端部は突状である。断面形状が台形状を呈する。石材はチャート76で、この石材使用の石器は他には見られない。

細石刃（72） 1点のみ出土した。これに対応する細石核は見られなかった。石材はチャート73で、この石材使用の石器は他には見られない。

掻器・削器・使用痕剥片（73・74・76～84・114・115） 74・79・115は急な角度を呈する掻器、73・76は鋭い刃部の削器、それ以外は鋭い剥片縁辺部に使用によると思われる微細剥離がみられる使用痕剥片である。74・82～84は縦長剥片の側辺、73・77・78・114・115は横長剥片の側辺、80・81は縦長剥片の端辺、79は調整の見られる剥片の一端に、それぞれ使用によると思われる微細剥離がある。使用石材はチャート・溶結凝灰岩・サヌカイト・黒曜石である。73のチャート80、82のチャート57、115のチャート56、および80のサヌカイトはこの石器のみで、他には見られない。

剥片類・石核類 上記以外の剥片類・石核類を一括しており、石器製作上のさまざまな段階のもの（器



第15図　旧石器B群出土地点分布図

種）を含んでいるのは、A群同様である。ここでも、図化した資料をもとに石材別に報告する。

チャート46（117） 石核1点のみで、これに対応する剥片類・製品は見られない。117は一辺約5cm程度の原石から剥片を作出しているものである。90度あるいは180度に打面転位を行いつつ、縦長・横長気味の貝殻状剥片を連続して作出したものと考えられる。

チャート47（85） 剥片類・石核類(85)がある。85では主に縦長剥片の作出が行われたようである。対になる面同士では作出方向が同一となっており、隣接する面では180度に打面の転位を行っている。この石材を使用した製品には77があるが、85から作出された剥片を素材とはしていない。

チャート49（116） 剥片1点のみである。それまで作出していた方向から90度転位させ、作出された剥片である。剥片作出前に打面が調整された可能性がある。

チャート58（86） 剥片類(86)・石核類がある。86はやや縦長気味の剥片を作出後、若干の調整を加えるものである。

チャート59（87） 石核1点のみである。87は板状の石核で、打面を転位させながら、横長の貝殻状剥片を作出する。

チャート63（88） 石核1点のみである。縦長剥片の作出を主としているが、打面を転位させて横長気味の貝殻状剥片も作出される。

チャート66（91・92） 剥片が2点見られる。91・92ともに平面形状が逆三角形を呈する剥片である。92では、対向する辺に礫風化面が残されており、原石は長さ約4cm、幅約3cmであったと考えられる。

チャート67（89・90） 剥片類・石核類がある。89はそれまで作出していた方向から90度打面を転位して作出された縦長剥片である。90も縦長剥片。チャート67を使用した石器には81もある。

チャート69（96） 剥片1点のみである。96は縦長剥片であり、表面には各方向から剥離がなされる。

チャート71（95） 石核1点のみである。

チャート77（94） 石核1点のみである。90度あるいは180度に打面の転位をし、縦長剥片を作出する。

チャート78（97） 石核1点のみである。90度あるいは180度に打面の転位をし、横長気味の貝殻状剥片を作出する。

チャート79（99） 石核1点のみである。縦長剥片・横長剥片の作出もおこなう。

チャート84（103・104） 剥片のみである。103・104はともに縦長剥片である。

チャート90（98） 剥片がある。98は縦長剥片で、また78もこの石材を使用する。

チャート92（100） 石核1点のみである。板状の石核で、打面を転位させながら縦長剥片・横長剥片を作出する。

チャート137（101・102） 剥片がある。その他、76も同一石材を使用する。

溶結凝灰岩（105～107） 剥片がある。また84もこの石材を使用する。

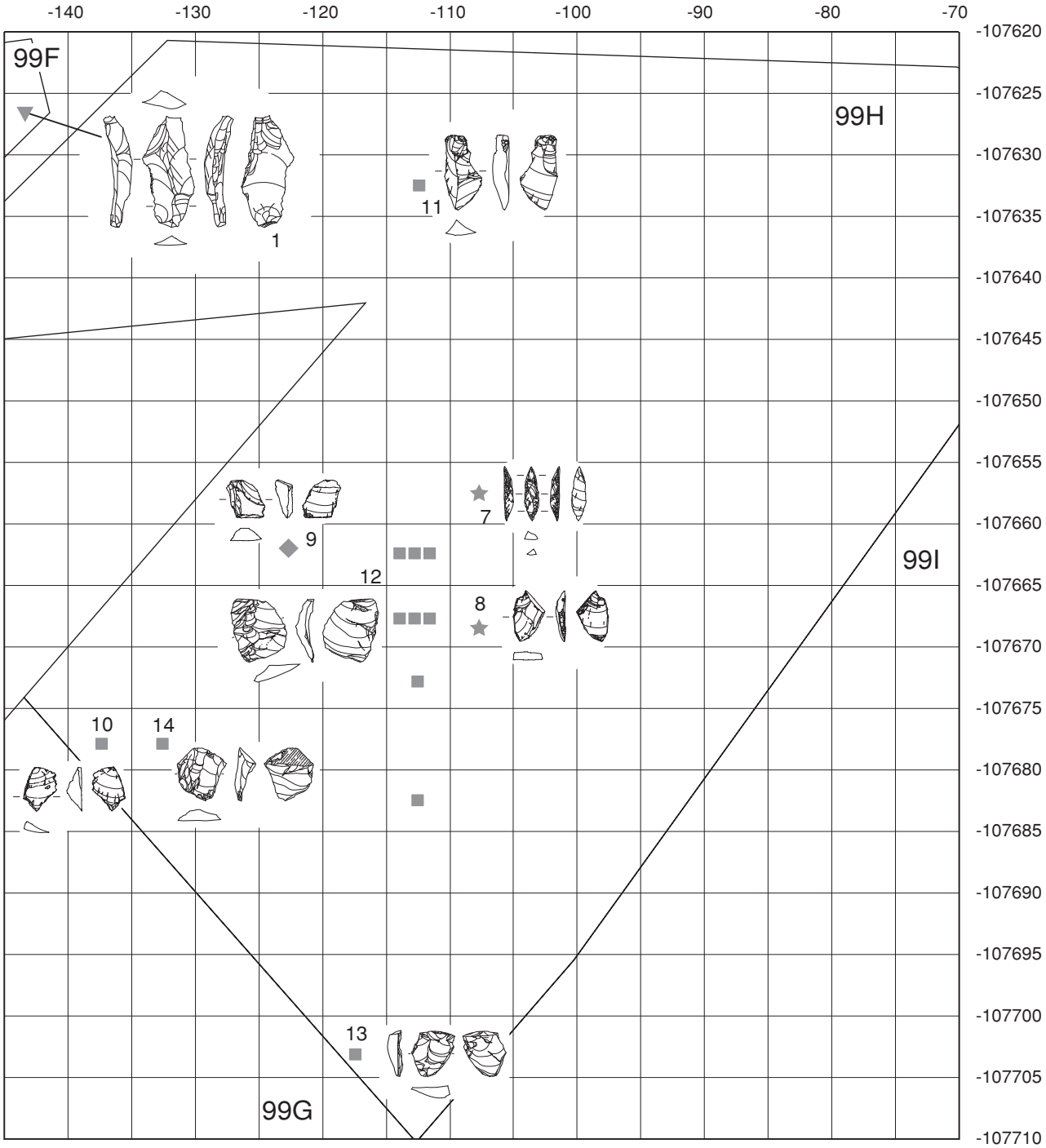
下呂石（108） 石核1点のみである。打面を各方向に転位させながら、縦長・横長気味の貝殻状剥片が作出されている。角礫である。

黒曜石（109・110・112） 剥片（110）・石核（109・112）がある。110は横長の貝殻状剥片である。109・112は最長2.5cm程度とチャート・溶結凝灰岩に比べて小型である。109・112は打面を転位させながら、

縦長・横長気味の貝殻状剥片を作出する。112の横長剥片作出は、縦長剥片作出のための打面調整の可能性もある。

3. 旧石器C群（1～4・7～16）

99F区から99H区にかけて見られた石器群で、総数10点強が確認された。剥片は若干あるものの製品の割合が高く、一方石核は存在しない（第16図）。使用石材の共通性はあまり見られないなか、チャート65では剥片と製品の両者がややまとまって見られる。接合資料は見られなかった。また、ここではホルンフェルスを石材とする礫器および礫器様石器が出土しているが、付近で打製石斧も出土しており、



第16図　旧石器C群出土地点分布図

縄文期の石器との峻別が難しいため、ここでは除外する。以下、器種別に報告する。

ナイフ形石器（7・8） 7は縦長剥片の打点側を先端部側にして作られている。基部には片側側辺を中心として細かい調整が施されている。8はいわゆる「切出形」を呈するものである。縦長剥片の打点側を上にした場合、片側側辺に細かい調整が施されているものである。特に8の石材はチャート65で、後述する剥片類と同質の石材が使用されている。

彫器(1) 縦長剥片を素材剥片とし、剥片端部側に調整が施されている。側辺には使用によると思われる微細剥離が連続してみられる。

使用痕剥片（4・9） 4は縦長剥片の斜辺に、9は縦長剥片の側辺に、使用による微細剥離がみられる。

剥片類（2・3・10～14） 2は溶結凝灰岩製の剥片で、側辺に調整が施されているものである。その他はチャート製で、縦長剥片である。12～14はチャート65で、8と同質の石材である。

4. 各群の種別構成

旧石器A・B・C群ともに、概ねIII期に属すると考えられるが、一部時期が新しくなるものも存在する。まず各群について若干のまとめを行い、その上で各群間の関係について検討する。

旧石器A群で定形的な石器はナイフ形石器の1点のみであり、製品としては掻器・削器、そして使用痕剥片が主体となる。一方この群ではチャート・溶結凝灰岩で接合資料がいくつか確認されている。石核も多く存在していることから、当地で石器製作が行われていたのは間違いないであろう。石材の搬入については、チャートと溶結凝灰岩とでは違いが見られる。チャートでは、31・47・46・54のように礫の一面に風化面を全面に残すものが見られ、原石の状態もしくは分割された状態でもより原石に近い状態での搬入が想定できる。しかし、ナイフ形石器や掻器・削器の一部の使用石材はこれら剥片・石核の石材とは異なる石材によることから、一部製品状態での搬入の可能性がある。一方、溶結凝灰岩は原石の状態というよりもむしろ分割された状態が想定できる。また、矢作川近辺で採取可能と考えられるホルンフェルスを使用した礫器あるいは礫器様石器も製品の状態でまとまって存在する。なお、作出された剥片には、縦長剥片・横長剥片・貝殻状剥片などがある、33などの石刃以外、厳格な形での剥片作出の意図を強くは見受けられない。

旧石器B群では、掻器・削器などもみられるものの、ナイフ形石器・角錐状石器など定形的な石器が散見される。石核・剥片類も出土していることから、当地でも石器製作がなされていると考えられる。しかし、石材分類の結果、上記の定形的な石器の石材には対応しないようである。また、一点のみであるが細石刃が存在することから、時期の新しくなるものも含まれている可能性はある。これに対応する細石核はここでは見られなかった。また、剥片・石核類は多く出土しているものの、同一石材として分類できるものは少なく、石核1点のみや、剥片少数など、ほぼ単体でしか存在していないようである。以上のことから、製品は搬入され、またここで作出された剥片類などの多くは群外に持ち出された可能性が考えられる。

旧石器C群は、他の群に比べ数量が極めて少ない。しかし、ナイフ形石器・彫器・使用痕剥片など「製品」もしくは「使用された」剥片の割合が高い。チャート65のみは当地で剥片の作出が行われている以外は、群外からの搬入が考えられる。

第３表　石器石材分類表（1）

石材1	石材2	色調大分類	色調	光沢	節理	不純物	備考
チャート	1	緑	深緑	やや明瞭	少ない	少ない	土岐石
チャート	2	緑	7.5Y4/2 灰オリーブ	やや明瞭	少ない	砂粒状のものを若干含む	縦長剥片1点のみ
チャート	3	赤	10R4/2 灰赤	やや鈍い	少ない	少ない	石核・剥片(接合)
チャート	4	赤	10R2/3 極暗赤褐	明瞭	所々層状に見られる	少ない	石核
チャート	5	赤	10R5/2 灰赤・5BG6/1 青灰	鈍い	層状に見られる	少ない	
チャート	6	赤	2.5YR4/4 にぶい赤褐	やや明瞭	少ない	少ない	
チャート	7	赤	2.5YR5/2 灰赤・5Y4/1灰	やや明瞭	多い	少ない	
チャート	8	赤	10R3/2 暗赤褐・N4/1灰	やや鈍い	多い	少ない	ツール含む
チャート	9	赤	10R4/2 灰赤	鈍い	多い	少ない	原石・微細剥片
チャート	10	赤	10R6/2 灰赤	鈍い	多い	少ない	
チャート	11	赤	7.5R3/2 暗赤褐	やや明瞭	多い	少ない	
チャート	12	赤	7.5R3/3 暗赤褐・10YR7/6 明黄褐	やや明瞭	多い	少ない	
チャート	13	褐	10YR6/4 にぶい黄橙	鈍い	多い	少ない	
チャート	14	褐	10YR6/3 にぶい黄橙	鈍い	多い	少ない	
チャート	15	褐	10YR3/4 暗褐	やや鈍い	少ない	少ない	石核
チャート	16	黒・灰	10YR1.7/1 黒	やや鈍い	多い	少ない	石核・剥片・ツール(接合)
チャート	17	黒・灰	N2/1 黒・N8/1 灰白	やや鈍い	少ない	少ない	石核
チャート	18	黒・灰	N4/1 灰	鈍い	少ない	少ない	石核
チャート	19	黒・灰	N3/1 暗灰・N5/1 灰	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	石核・剥片
チャート	20	黒・灰	N3/1 暗灰	明瞭	少ない	少ない	ツール
チャート	21	黒・灰	N4/1 灰・2.5Y7/4 浅黄	やや鈍い	多い	少ない	石核?・微細剥片・ツール
チャート	22	黒・灰	N3/1 暗灰	明瞭	所々層状に見られる	少ない	
チャート	23	黒・灰	N4/1 灰	鈍い	所々層状に見られる	少ない	接合資料
チャート	24	黒・灰	N3/1 暗灰	やや明瞭	少ない	砂粒状のものが所々に見られる	
チャート	25	黒・灰	N4/1 灰	鈍い	少ない	少ない	ツール含む
チャート	26	黒・灰	N3/1 暗灰・N 4/1灰	鈍い	少ない	少ない	
チャート	27	黒・灰	N4/1 灰・2.5Y6/3 にぶい黄	やや明瞭	少ない	少ない	石核・剥片(接合)
チャート	28	黒・灰	N5/1 灰	やや明瞭	少ない	少ない	
チャート	29	黒・灰	10YR2/1 黒	明瞭	少ない	少ない	
チャート	30	黒・灰	N5/1 灰	鈍い	少ない	少ない	ツールのみ
チャート	31	黒・灰	N4/1 灰・N5/1 灰	鈍い	少ない	少ない	
チャート	32	灰・緑	5GY5/1 灰オリーブ	明瞭	少ない	少ない	ツールのみ
チャート	33	黒・灰	N6/1 灰・N4/1 灰	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	
チャート	34	黒・灰	N4/1 灰・5Y7/4 浅黄	やや明瞭	少ない	少ない	剥片(接合)
チャート	35	黒・灰	5Y4/1 灰	鈍い	少ない	少ない	石核
チャート	36	黒・灰	N4/1 灰・10YR7/6 明黄褐	鈍い	所々層状に見られる	少ない	石核
チャート	37	黒・灰	N6/1 灰	鈍い	所々層状に見られる	少ない	
チャート	38	灰・緑	7.5GY6/1 オリーブ灰	鈍い	少ない	少ない	
チャート	39	灰・緑	5GY4/1 暗オリーブ灰・2.5Y6/4 にぶい黄	やや明瞭	少ない	少ない	ツール
チャート	40	黒・灰	N5/1 灰・5PB3/1 暗青灰	明瞭	少ない	少ない	
チャート	41	灰・緑	5GY5/1 灰オリーブ	不明瞭	少ない	少ない	
チャート	42	黒・灰	N6/1 灰	やや鈍い	所々層状に見られる	少ない	
チャート	43	灰・緑	5GY7/1 明オリーブ灰	鈍い	少ない	少ない	
チャート	44	灰・緑	5GY5/1 灰オリーブ・7.5R3/4 暗赤	やや明瞭	少ない	少ない	
チャート	45	灰・緑	2.5GY7/1 明オリーブ灰	やや明瞭	少ない	少ない	
チャート	46	赤	2.5YR4/2 灰赤・10Y8/1 灰白	やや鈍い	少ない	少ない	石核
チャート	47	赤	2.5YR3/3 暗赤褐	やや明瞭	少ない	少ない	
チャート	48	赤	2.5YR4/2 灰赤	鈍い	少ない	少ない	石核
チャート	49	褐	10YR7/6 明黄褐	やや鈍い	若干見られる	少ない	
チャート	50	黒・灰	N3/1 暗灰・N 4/1灰	やや鈍い	少ない	砂粒状に若干見られる	
チャート	51	黒・灰	N5/1 灰・N7/1 灰白	やや明瞭	所々層状に見られる(鉄分)	少ない	石核・剥片
チャート	52	黒・灰	5B6/1 青灰・10YR7/3 にぶい黄橙	鈍い	所々層状に見られる(鉄分)	少ない	石核
チャート	53	黒・灰	N7/1 灰白・N3/1 暗灰	やや鈍い	少ない	少ない	石核・剥片
チャート	54	灰・緑	7.5GY8/1 明緑灰・N6/1 灰	やや明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	55	灰・緑	2.5GY7/1 明オリーブ灰	やや明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	56	灰・緑	2.5GY6/1 灰・5YR4/2 灰褐	鈍い	少ない	少ない	ツール
チャート	57	赤	2.5YR3/3 暗赤褐	やや明瞭	少ない	少ない	ツール
チャート	58	赤	2.5YR2/2 極暗赤褐	明瞭	少ない	少ない	石核・剥片
チャート	59	赤	10R4/3 赤褐	不明瞭	若干見られる	砂粒状に若干見られる	剥片
チャート	60	赤	2.5YR6/6 橙・2.5YR5/8 明赤褐	やや明瞭	少ない	砂粒状に若干見られる	ツール
チャート	61	赤	10R3/4 暗赤	やや鈍い	少ない	少ない	
チャート	62	褐	10YR8/3 浅黄橙	鈍い	少ない	少ない	剥片
チャート	63	褐	5Y7/3 浅黄	鈍い	少ない	少ない	石核
チャート	64	褐	10YR6/8 明黄褐	鈍い	少ない	少ない	ツール
チャート	65	黒・灰	N5/1 灰・5BP4/1 暗青灰	やや明瞭	少ない	少ない	ツール・剥片・微細剥片
チャート	66	黒・灰	N3/1 暗灰	明瞭	少ない	少ない	石核・剥片
チャート	67	黒・灰	N5/1 灰・N4/1灰	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	石核・剥片
チャート	68	黒・灰	5G2/1 緑黒	やや明瞭	少ない	少ない	剥片

第４表　石器石材分類表（2）

石材1	石材2	色調大分類	色調	光沢	節理	不純物	備考
チャート	69	灰・緑	10G6/1 緑灰・5BP3/1 暗青灰	明瞭	所々層状に見られる	少ない	石核
チャート	70	灰・緑	N5/1 灰・2.5GY5/1 オリーブ灰	やや明瞭	少ない	少ない	剥片・微細剥片
チャート	71	黒・灰	5BP3/1 暗青灰・5B6/1 青灰	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	石核
チャート	72	黒・灰	N4/1 灰・N5/1 灰	不明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	73	黒・灰	N3/1 暗灰・5Y8/1 灰白	やや明瞭	少ない	少ない	ツール
チャート	74	黒・灰	N3/1 暗灰・N2/1 黒	明瞭	少ない	少ない	ツール
チャート	75	黒・灰	N4/1 灰・N5/1 灰	やや鈍い	少ない	少ない	ツール
チャート	76	灰・緑	7.5GY4/1 暗緑灰	やや鈍い	少ない	少ない	ツール
チャート	77	黒・灰	N7/1 灰白・N2/1 黒	やや鈍い	所々層状に見られる	砂粒状のものが所々に見られる	石核
チャート	78	黒・灰	N5/1 灰・7.5Y8/1 灰白	やや鈍い	所々層状に見られる	少ない	石核
チャート	79	灰・緑	10G6/1 緑灰・5P3/1 暗紫灰	やや明瞭	少ない	少ない	石核
チャート	80	灰・緑	2.5GY5/1 オリーブ灰・N4/1 灰	鈍い	少ない	少ない	剥片
チャート	81	黒・灰	N2/1 黒・N4/1 灰	やや鈍い	所々層状に見られる	少ない	石核
チャート	82	灰・緑	10GY4/1 暗緑灰	やや明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	83	灰・緑	10GY6/1 緑灰	明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	84	灰・緑	5BG5/1 青灰	不明瞭	所々層状に見られる	少ない	剥片
チャート	85	灰・緑	5B5/1 青灰	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	剥片
チャート	86	灰・緑	5B4/1 青灰・5BP6/1 青灰	不明瞭	所々層状に見られる	少ない	剥片
チャート	87	黒・灰	N3/1 暗灰・N 4/1灰・N7/1 灰白	不明瞭	少ない	砂粒状のものが所々に見られる	剥片・微細剥片
チャート	88	黒・灰	7.5Y5/1 灰	不明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	89	黒・灰	N6/1 灰	不明瞭	所々層状に見られる	少ない	剥片
チャート	90	灰・緑	10GY4/1 暗緑灰	明瞭	所々層状に見られる	少ない	ツール・剥片
チャート	91	黒・灰	N4/1 灰	不明瞭	所々層状に見られる	少ない	石核・剥片
チャート	92	灰・緑	5GY6/1 オリーブ灰・N6/1 灰	不明瞭	少ない	少ない	石核
チャート	93	灰・緑	7.5Y7/1 灰白	不明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	94	灰・緑	10Y7/2 灰白	やや鈍い	少ない	少ない	石核
チャート	95	赤	2.5YR2/4 極暗赤褐	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	石核
チャート	96	赤	2.5YR3/3 暗赤褐	やや鈍い	少ない	少ない	剥片
チャート	97	赤	2.5YR2/2 極暗赤褐・5Y6/1 灰	明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	98	赤	2.5YR2/2 極暗赤褐・5YR2/1 黒褐	やや明瞭	少ない	少ない	ツール
チャート	99	赤	5YR2/2 黒褐・10GY6/1 緑灰	やや鈍い	少ない	少ない	ツール
チャート	100	黒・灰	N3/1 暗灰・N7/1 灰白	明瞭	所々層状に見られる	少ない	石核・剥片
チャート	101	黒・灰	N3/1 暗灰・7.5Y7/1 灰白	やや明瞭	所々層状に見られる	砂粒状に若干見られる	石核
チャート	102	黒・灰	5B2/1 青黒	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	
チャート	103	黒・灰	5B1.7/1 青黒	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	剥片
チャート	104	黒・灰	N3/1 暗灰	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	石核
チャート	105	黒・灰	N2/1 黒・N3/1 暗灰	やや明瞭	少ない	少ない	ツール
チャート	106	黒・灰	N3/1 暗灰・N 4/1灰	やや鈍い	少ない	少ない	剥片
チャート	107	黒・灰	N4/1 灰・N5/1 灰	やや明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	108	黒・灰	N4/1 灰	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	石核
チャート	109	灰・緑	5GY4/1 暗オリーブ灰	やや鈍い	少ない	少ない	ツール
チャート	110	黒・灰	2.5Y3/1 黒褐	鈍い	所々層状に見られる	少ない	ツール
チャート	111	黒・灰	N7/1 灰白	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	剥片
チャート	112	黒・灰	5Y6/1 灰	やや鈍い	少ない	少ない	剥片
チャート	113	灰・緑	7.5GY6/1 オリーブ灰	鈍い	少ない	少ない	剥片
チャート	114	黒・灰	N5/1 灰・N6/1 灰	明瞭	少ない	少ない	ツール
チャート	115	黒・灰	N4/1 灰・N5/1 灰	鈍い	少ない	砂粒状に若干見られる	ツール
チャート	116	黒・灰	N4/1 灰	やや鈍い	少ない	少ない	剥片
チャート	117	灰・緑	7.5GY8/1 明緑灰・7.5Y8/1 灰白	鈍い	少ない	少ない	剥片
チャート	118	黒・灰	7.5Y4/1 灰・N4/1 灰	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	剥片
チャート	119	灰・緑	7.5GY7/1 明緑灰・5GY8/1 灰白	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	剥片
チャート	120	褐	2.5Y6/4 にぶい黄・N5/1 灰	やや鈍い	少ない	少ない	石核
チャート	121	灰・緑	2.5GY5/1 オリーブ灰・10YR5/6 黄褐	やや明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	122	黒・灰	N5/1 灰	やや明瞭	少ない	少ない	石核
チャート	123	黒・灰	N5/1 灰・N6/1 灰	やや明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	124	灰・緑	7.5GY5/1 緑灰	やや明瞭	所々層状に見られる	少ない	剥片
チャート	125	黒・灰	N5/1 灰・N6/1 灰	やや鈍い	少ない	少ない	ツール
チャート	126	灰・緑	10Y5/2 オリーブ灰	明瞭	少ない	少ない	ツール
チャート	127	黒・灰	10Y5/1 灰	やや鈍い	所々層状に見られる	少ない	石核
チャート	128	褐	5Y5/2 灰オリーブ・5Y5/1 灰	やや鈍い	少ない	少ない	石核
チャート	129	灰・緑	7.5Y6/2 灰オリーブ・7.5Y7/2 灰白	明瞭	少ない	少ない	ツール
チャート	130	黒・灰	N3/1 暗灰・N7/1 灰白	やや明瞭	少ない	少ない	石核
チャート	131	黒・灰	N2/1 黒	明瞭	少ない	少ない	ツール
チャート	132	灰・緑	2.5GY8/1 灰白	やや明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	133	黒・灰	N5/1 灰・N4/1灰	やや明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	134	黒・灰	N4/1灰・N3/1 灰	明瞭	少ない	少ない	微細剥片
チャート	135	黒・灰	N6/1 灰・5YR4/2 灰褐	やや明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	136	黒・灰	5Y2/1 黒褐	不明瞭	少ない	少ない	剥片
チャート	137	褐	10YR3/4 暗褐	鈍い	少ない	少ない	剥片
チャート	138	黒・灰	N3/1 暗灰	鈍い	少ない	少ない	剥片

第５表　石材別出土石器一覧表（1）

石材		旧石器A						旧石器B						旧石器C					
石材1	石材2	製品	剥片	微細剥片	石核	原石	接合資料	製品	剥片	微細剥片	石核	原石	接合資料	製品	剥片	微細剥片	石核	原石	接合資料
チャート	1	1	7		1														
チャート	2	1																	
チャート	3		2		2		●		1										
チャート	4		2		2														
チャート	5		1																
チャート	6			1															
チャート	7		1																
チャート	8	1				1		1			1								
チャート	9			2		5													
チャート	10				1														
チャート	11	1	1	2															
チャート	12		1	1		1													
チャート	13					2													
チャート	14					1													
チャート	15				1														
チャート	16	1	2	2	5		●												
チャート	17	1									1								
チャート	18				1														
チャート	19	1	5	1	1		●												
チャート	20	1																	
チャート	21	1	1	3	5														
チャート	22				1														
チャート	23		3		2		●												
チャート	24		3																
チャート	25	3																	
チャート	26	1																	
チャート	27	1	2		1		●												
チャート	28	1	3																
チャート	29								1										
チャート	30	1																	
チャート	31	1																	
チャート	32	1																	
チャート	33																		
チャート	34		3		1	1	●												
チャート	35				1														
チャート	36		1																
チャート	37				1														
チャート	38		1	1															
チャート	39	1		1															
チャート	40																		
チャート	41																		
チャート	42		3	1															
チャート	43		1																
チャート	44		1																
チャート	45		1																
チャート	46										1								
チャート	47							1	2		2								
チャート	48																		
チャート	49								1										
チャート	50																		
チャート	51																		
チャート	52																		
チャート	53																		
チャート	54								1										
チャート	55																		
チャート	56							1											
チャート	57							2											
チャート	58	1			1			1	1		2								
チャート	59								1										
チャート	60	1						1											
チャート	61								1										
チャート	62								1										
チャート	63										1								
チャート	64																		
チャート	65													1	3				
チャート	66								1		1								
チャート	67							1	3		1								
チャート	68								1										
チャート	69										1								
チャート	70								2	1									
チャート	71										1								
チャート	72								1										
チャート	73							1											

第６表　石材別出土石器一覧表（2）

石材		旧石器A						旧石器B						旧石器C					
石材1	石材2	製品	剥片	微細剥片	石核	原石	接合資料	製品	剥片	微細剥片	石核	原石	接合資料	製品	剥片	微細剥片	石核	原石	接合資料
チャート	74							1											
チャート	75							2	1										
チャート	76							1											
チャート	77										1								
チャート	78										1								
チャート	79										1								
チャート	80								1										
チャート	81								1		1								
チャート	82							1											
チャート	83								2										
チャート	84								2										
チャート	85								3										
チャート	86								1										
チャート	87	1							2	1	1								
チャート	88								1										
チャート	89								1										
チャート	90							1	1										
チャート	91								2		1								
チャート	92										1								
チャート	93																		
チャート	94										1								
チャート	95																		
チャート	96																		
チャート	97																		
チャート	98	1																	
チャート	99	1																	
チャート	100																		
チャート	101																		
チャート	102																		
チャート	103																		
チャート	104				1														
チャート	105	1																	
チャート	106																		
チャート	107		1																
チャート	108																		
チャート	109	1																	
チャート	110	1																	
チャート	111																		
チャート	112																		
チャート	113																		
チャート	114	1																	
チャート	115	1																	
チャート	116																		
チャート	117																		
チャート	118																		
チャート	119																		
チャート	120																		
チャート	121																		
チャート	122										1								
チャート	123							1											
チャート	124																		
チャート	125																		
チャート	126							1											
チャート	127																		
チャート	128										1								
チャート	129													1					
チャート	130																		
チャート	131													1					
チャート	132																		
チャート	133																		
チャート	134																		
チャート	135														1				
チャート	136														1				
チャート	137								3										
チャート	138								1										
黒曜石					1			3	11										
下呂石			2								1								
サヌカイト?								1											
安山岩			1																
溶結凝灰岩		3	30		4		●	2	15					2	1				
凝灰岩			4		2				7		1								
泥質凝灰岩									7										
石英					2				1										
泥岩				1															
ホルンフェルス		9	1					5	2										

以上のことを踏まえて、各群の関係について検討する。まず使用石材と接合関係についてである。第７表は各群における項目ごとの確認点数を示し、第８表では各群の使用石材について器種に関係なく列挙した。使用石材のうちで2群以上に共通しているものは、チャートでは3・8・17・58・60・87、それに細別を行わなかった黒曜石・下呂石・溶結凝灰岩・凝灰岩・石英のみである。共通して存在するとしてもそのあり方は散発的である。また、接合資料はA群内でのみしか確認できず、群を越えた接合関係は確認できなかった。従って、A・B・C群間には強い有機的関係は見られず、それぞれが異なる事情により形成された石器群である可能性が考えられる。A・B・C群では、作業を行う「場」としての質的差がみられるのは、上述の通りである。しかし、使用石材の共通性が少ないことから、群形成に時期差が存在している可能性も考えられる。

第７表　石器組成一覧表

	旧石器Ａ群	旧石器Ｂ群	旧石器Ｃ群
ナイフ形石器	1	2	2
角錐状石器		1	
不明石器		1	
彫器			1
掻器	2	3	
削器	3	2	
使用痕剥片	17	9	2
石刃	2		
細石刃		1	
剥片類	●	●	●
石核類	●	●	
チャート原石	●		
礫器もしくは礫器様石器	15	?	?

第８表　群別石器石材一覧表（1）

石器群	石器石材
旧石器A	チャート(1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・30・31・32・34・35・36・37・38・39・42・43・44・45・58・60・87・98・99・104・105・107・109・110・114・115・その他チャート)・黒曜石・下呂石(円礫・角礫)・石英・安山岩・溶結凝灰岩・凝灰岩・泥岩・ホルンフェルス
旧石器B	チャート(3・8・17・29・46・47・49・54・56・57・58・59・60・61・62・63・66・67・68・69・70・71・72・73・74・75・76・77・78・79・80・81・82・83・84・85・86・87・88・89・90・91・92・94・122・123・126・128・137・138・その他チャート)・黒曜石・下呂石(角礫)・サヌカイト・石英・溶結凝灰岩・凝灰岩・泥質凝灰岩・ホルンフェルス
旧石器C	チャート(65・129・131・135・136・その他チャート)・溶結凝灰岩・ホルンフェルス
縄文	チャート(33・48・50・51・52・53・96・125・127・その他チャート)・黒曜石・下呂石・サヌカイト・安山岩・アプライト・花崗岩・細粒花崗岩・凝灰岩・泥質凝灰岩・緑色凝灰岩・凝灰質砂岩・濃飛流紋岩・斑れい岩・結晶片岩・ホルンフェルス
石器群不詳(チャートのみ)	チャート(55・95・97・100・101・103・106・108・111・113・116・117・118・120・121・124・130・132・133・134)

（４）縄文時代の石器・石製品

上記以外の石器群をここで報告する。石器の出土状況は、遺構検出時や古代以降の後世の遺構内から出土している場合が多く、石器が良好な状態で出土している縄文期の遺構は、希少である。まず遺構内出土事例を提示し、その他の石器については器種ごとに報告する。

1. 遺構内出土石器

99Kb区SB1075出土石器（186～197）　縄文時代後期とされる住居跡から一括して出土した石器群である。186はスクレイパー、187・188・191・194・195は剥片類、189・190・192・193は石核、196は打

製石斧、197は礫器様石器である。この遺構周辺は旧石器B群と重なっていることから、両者峻別のためにチャートの細別分類を行っている。チャート33・51・52・53・125では剥片類と石核が出土しており、193などから、原石かもしくは粗割りでも原石により近い状態からの石器製作が想定される。また、この遺構では黒曜石がまとまって見られる。189のように小さいながらも石核があり、187・188のような剥片類、186のような製品の存在から、当地での製作が想定される。

99D区SB15出土石器（198・199） 縄文時代中期末とされる竪穴建物跡から出土したものである。198は石錐、199は横長の剥片類である。

2．その他出土石器

有舌尖頭器（151） 1点のみの出土である。両面ともに、深く中央部にまで入る剥離が連続して施されている。基部は若干欠失。安山岩製。

石鏃（133・152～156・200～218） 27点出土した。有茎鏃（218）が1点みられる以外は、すべて無茎鏃である。無茎鏃には、平基のもの（133・154～156・204・212）と、凹基のもの（152・153・200～203・205～211・213～217）とがある。154・202・204などは、素材剥片の周囲のみに調整を加えたのみのいわゆる「剥片鏃」である。204は縁辺が鋸歯状を呈する。218は平面形が五角形状を呈するものである。使用石材はチャートが最も多く、下呂石・サヌカイト・安山岩・黒曜石が続く。

石錐（219） 198と合わせて2点のみの出土である。頭部の作り出しが明瞭に見られないもので、先端部には使用によると思われる微細剥離がある。チャート製。

石匙（220） 1点のみである。横長の石匙で、両面ともに剥離調整が加えられている。凝灰岩製。

スクレイパー類・使用痕剥片（157・161～164・221～242） 刃部調整の見られるスクレイパー類（221～225）と、刃部調整は見られず使用による微細剥離のみの使用痕剥片（157・161～164・226～242）とがある。縦長剥片・横長剥片・貝殻状の剥片など、多様な剥片を使用し、端部・側辺・および周囲など刃部の付き方も多様である。チャート・黒曜石・溶結凝灰岩が使用されている。

楔形石器（250～252） 両端に階段状剥離が発達しているもののみを「楔形石器」とした。250・252は短軸方向、251は長軸方向の両端に見られる。ここに提示した3点のみである。黒曜石・溶結凝灰岩・チャートが各1点ずつである。

打製石斧（5・6・16・179・269～283・288） 35点出土した。平面形態が撥形を呈するもの（179・269～272・288）と、短冊形を呈するもの（5・6・16・273～283）とがある。礫の風化面が片面のみに残されているもの（271・273など）と、両面に残されているもの（279・280）とがある。後者はもともと扁平な原石を利用し、石核側を石器として利用している。ホルンフェルスが多用され、泥質凝灰岩・下呂石も若干見られる。

刃器・使用痕のある大型剥片（180・181・284～287・289～294） 284～287は刃部調整の見られるいわゆる「刃器」である。284・285は礫風化部分を片側に残している。180・181・289～294は、剥片の側辺もしくは端部に使用によると考えられる微細剥離が残されているものである。

礫器様石器（15・17・182・183・295～303） 295～299は全面に剥離あるいは敲打が見られるものである。大型剥片石器の石核も含まれるかもしれない。300は細長い礫素材に調整が施されているもので

ある。301 ～ 303 は長楕円形の礫素材もしくは剥片の縁辺に敲打痕が見られるものである。使用石材はホルンフェルスが主体であり、若干凝灰質泥岩もある。

磨製石斧（185・311 ～ 316） 9 点出土したうちの 7 点を図化した。185・311 ～ 314 は側面に面を取る「定角式」である。315・316 は断面形状が扁平な楕円形のものである。311・315・316 には、一部敲打調整の痕が残されている。法量では、残存長ではあるが5cm以下となると考えられる「小型」のものと（185・311・312・135）、より大きなもの（313・314・316）とに分けられる。使用石材には、蛇紋岩・濃飛流紋岩・緑色凝灰岩・凝灰質砂岩・安山岩がある。

礫石錘（184・304 ～ 309） 10点出土したうちの7点を図化した。扁平な礫素材の長軸の両端に対となった剥離が見られるもので、一部には両極打撃によるものもあるかもしれない。重量は 20 ～ 50g が 3 点、60 ～ 100g が 2 点、100 ～ 150g が 3 点、150g 以上が 2 点である。使用石材は、凝灰質砂岩・ホルンフェルス・結晶片岩・斑れい岩・細粒花崗岩・アプライトである。

切目石錘（310） 1 点のみである。扁平な礫素材を利用し、長軸の両端に対となった溝が見られるものである。溝の施される前に、礫石錘のような剥離が行われた痕跡がある。細粒花崗岩製。

磨石・敲石（317 ～ 319） 3 点出土し、すべて図化した。317 は円礫素材の端部と平面部に敲打痕が見られるものである。318 は長楕円形の礫素材の平面部および側面に敲打痕が残されているものである。319 は扁平な礫素材の側面と平面に磨痕が見られるものである。すべて花崗岩製。

石皿（320・321） 3 点出土したうち 2 点を図化した。長径 3 ～ 5cm ほどの凹みが数ヶ所見られ、ここが作業を行った場所と考えられる。すべて花崗岩製。

2. 石製品

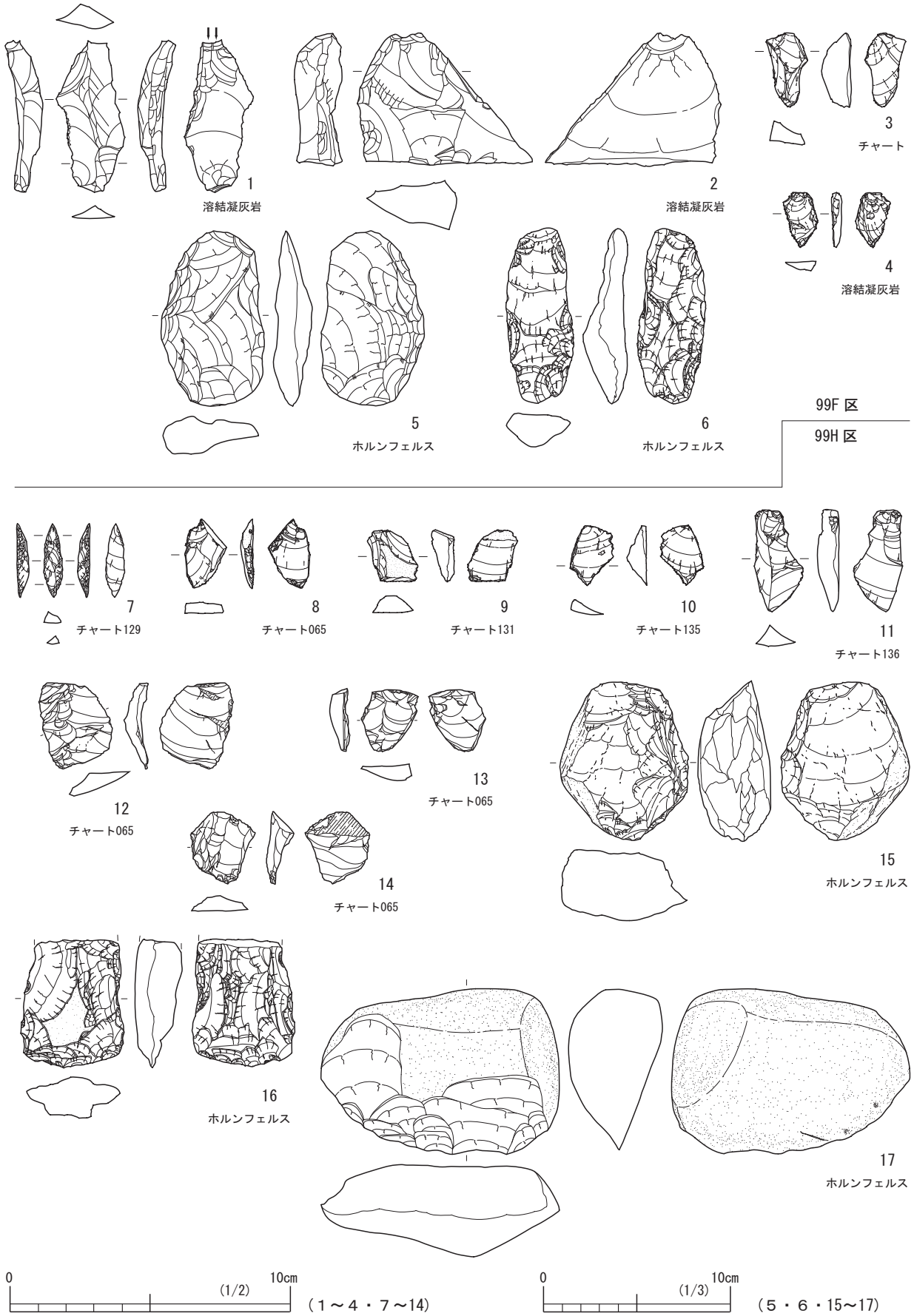
石棒類（322 ～ 324） 323 は小型石棒類である。表面には敲打調整痕が残されており、両端は切断されたような欠失が見られる。322・324 はやや太めのものである。石棒類ではないかもしれないが、全面に研磨調整が見られる石製品である。細粒花崗岩や結晶片岩が使われている。

その他（325・326） 325 は円礫素材の端部に溝が入れられているものである。326 は石棒類の一部と考えられる。上下両端は破断面となっており、両端それぞれに縦横方向への溝が入れられている。

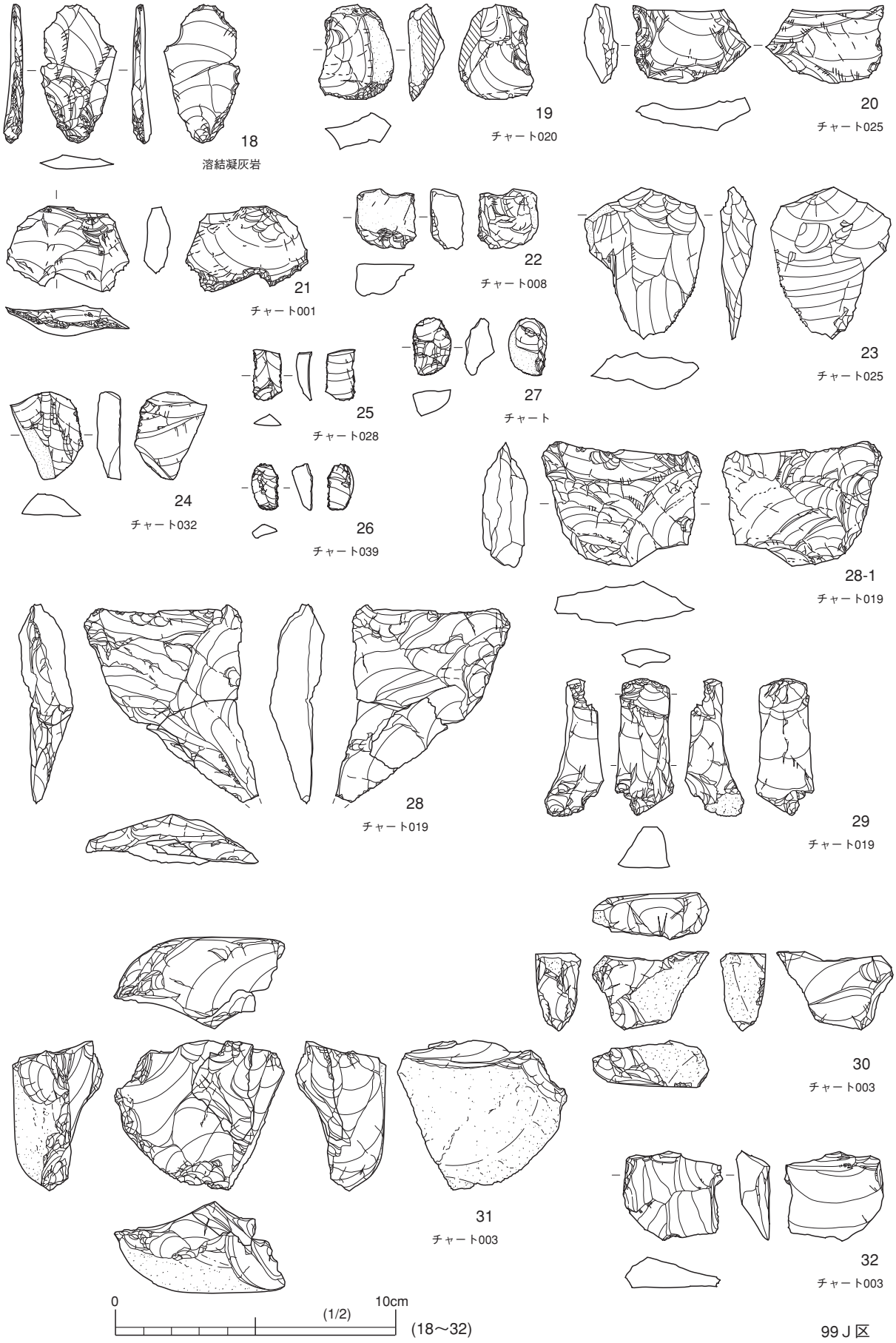
3. まとめ

縄文時代の石器・石製品として全調査区を概観した。そのなかでも 99Kb 区から出土した石器群は、器種構成および器種の形態などから、より古相を示しているようである。この調査区では、縄文時代早期の遺構群が展開しており、石器群もそれに対応しているものと考えられる。

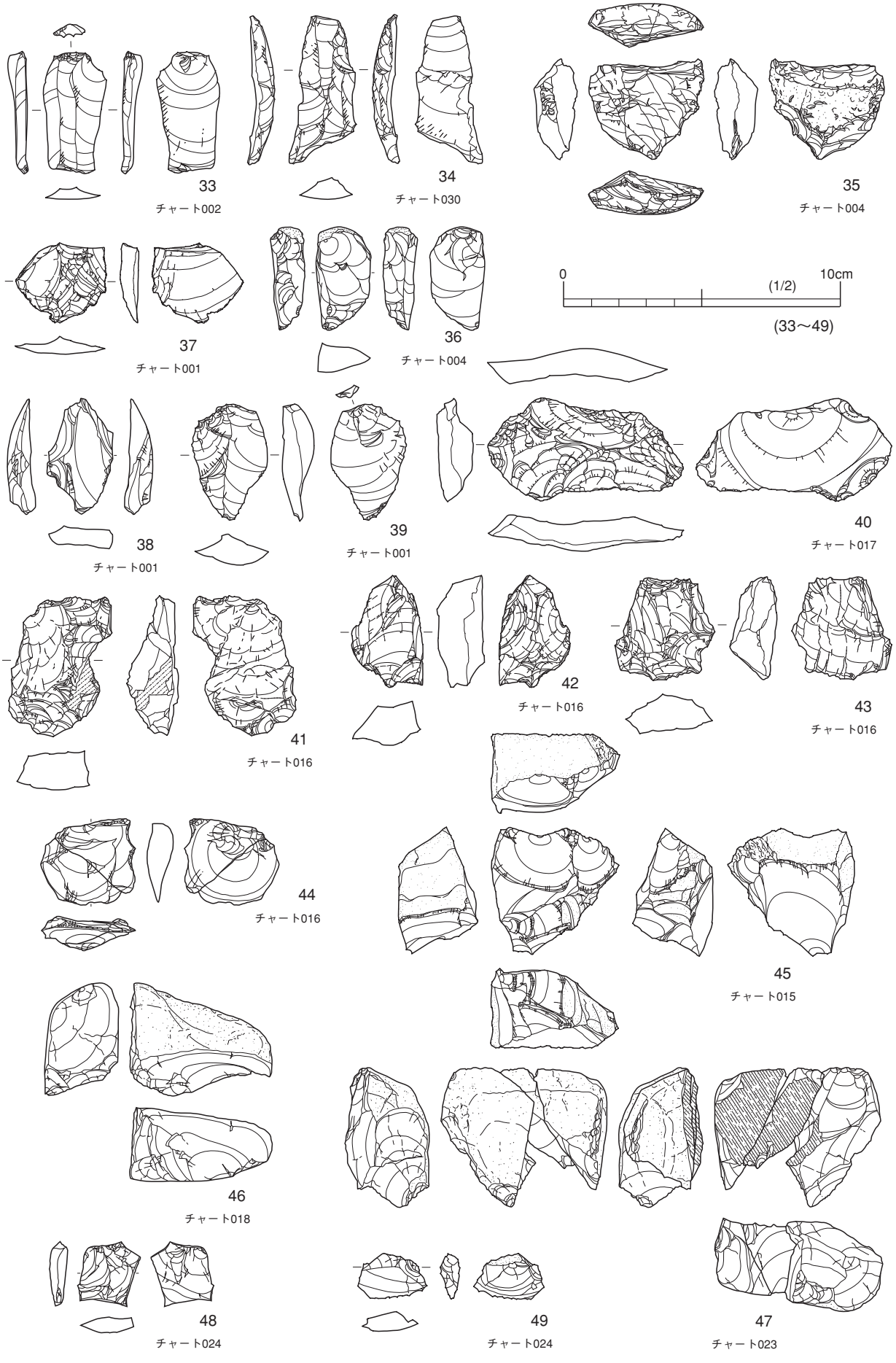
また、後期旧石器時代との対比で石材利用について見ると、黒曜石の利用頻度が高くなることとサヌカイトの利用が見られることが注目できる。その一方で、溶結凝灰岩の利用の減少は顕著である。黒曜石については、99Kb 区 SB1075 で石核・剥片・製品と、まとまった出土が注目される。（川添和暁）



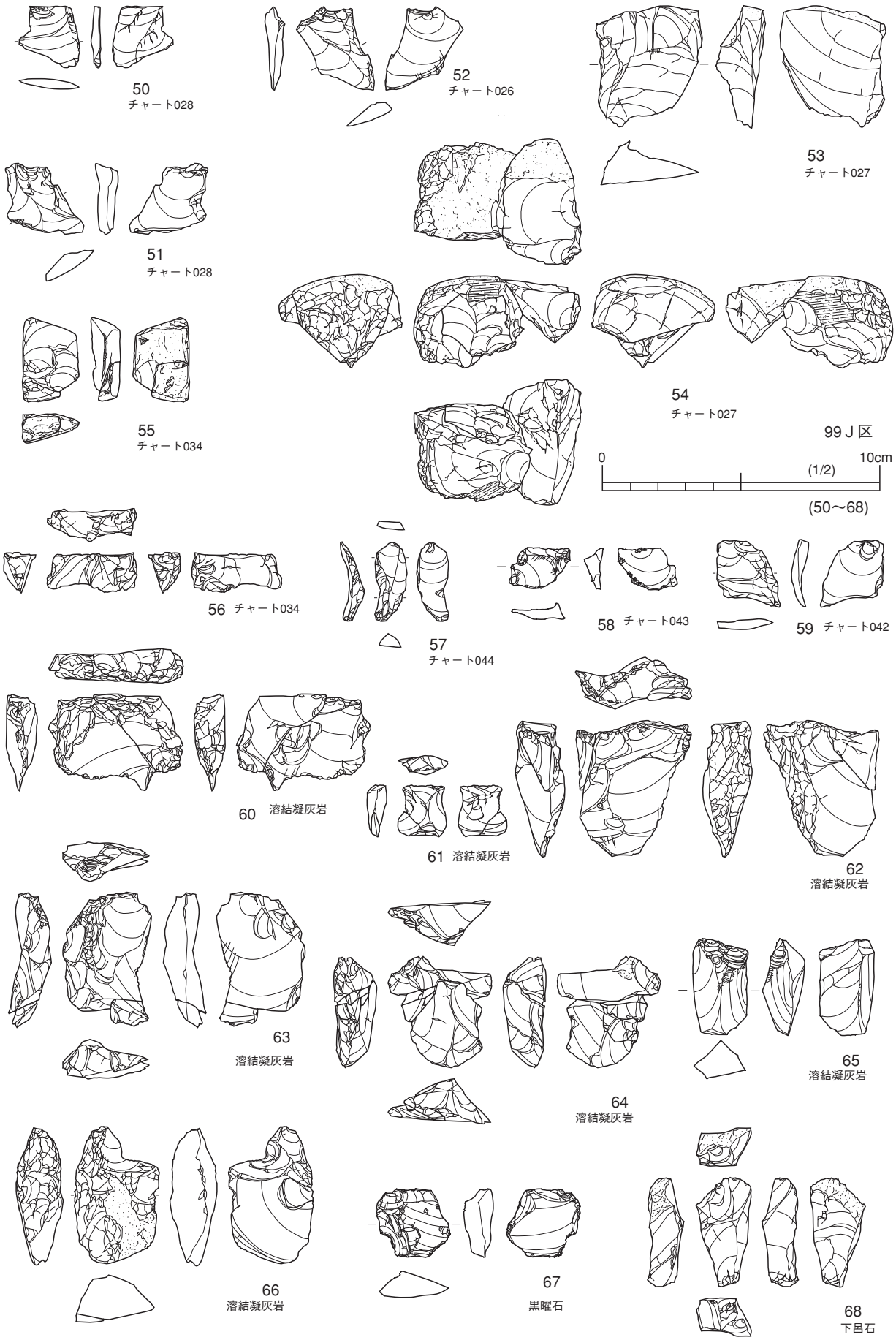
第17図　水入遺跡出土石器実測図（1）



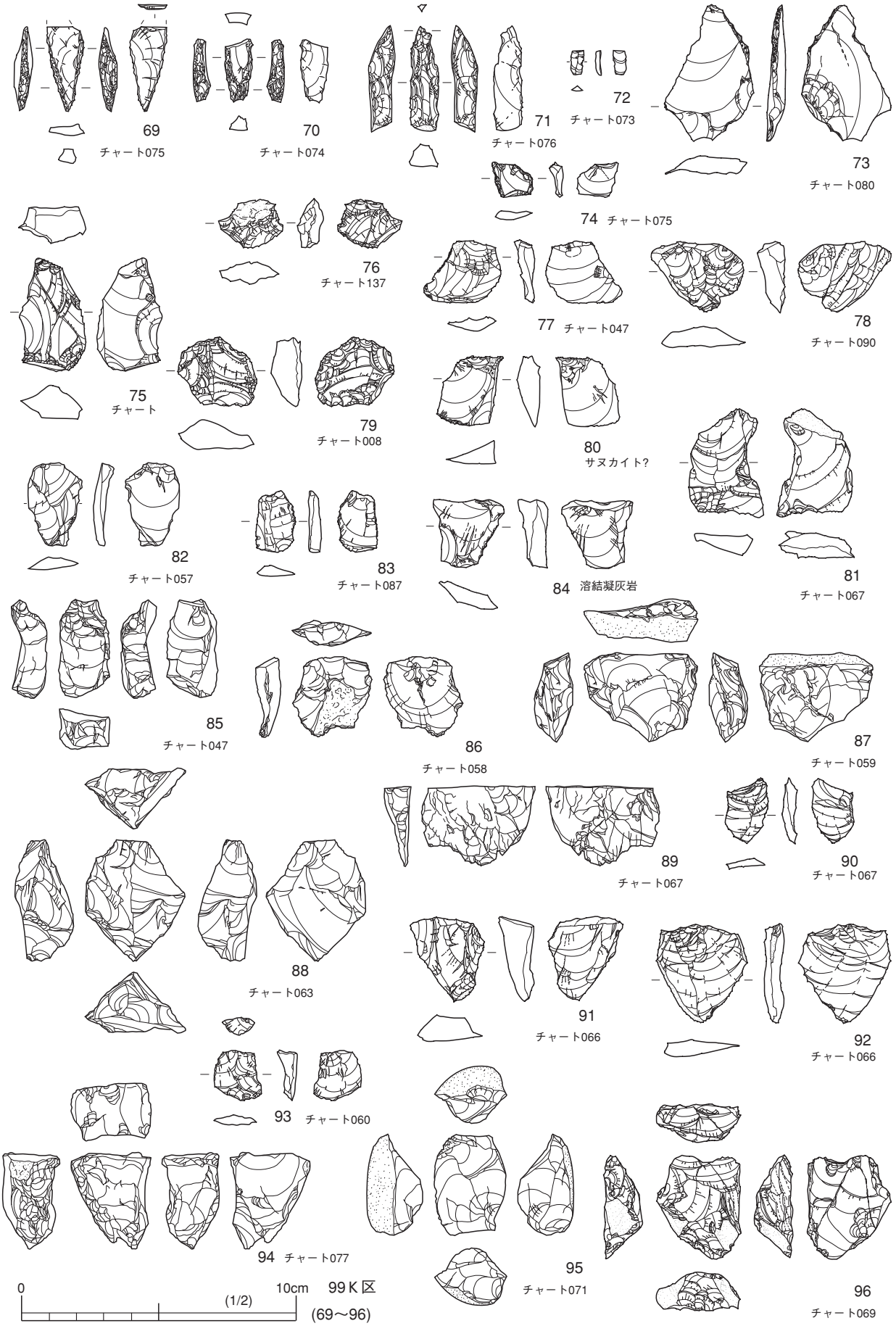
第 18 図　水入遺跡出土石器実測図（2）



第 19 図　水入遺跡出土石器実測図（3）

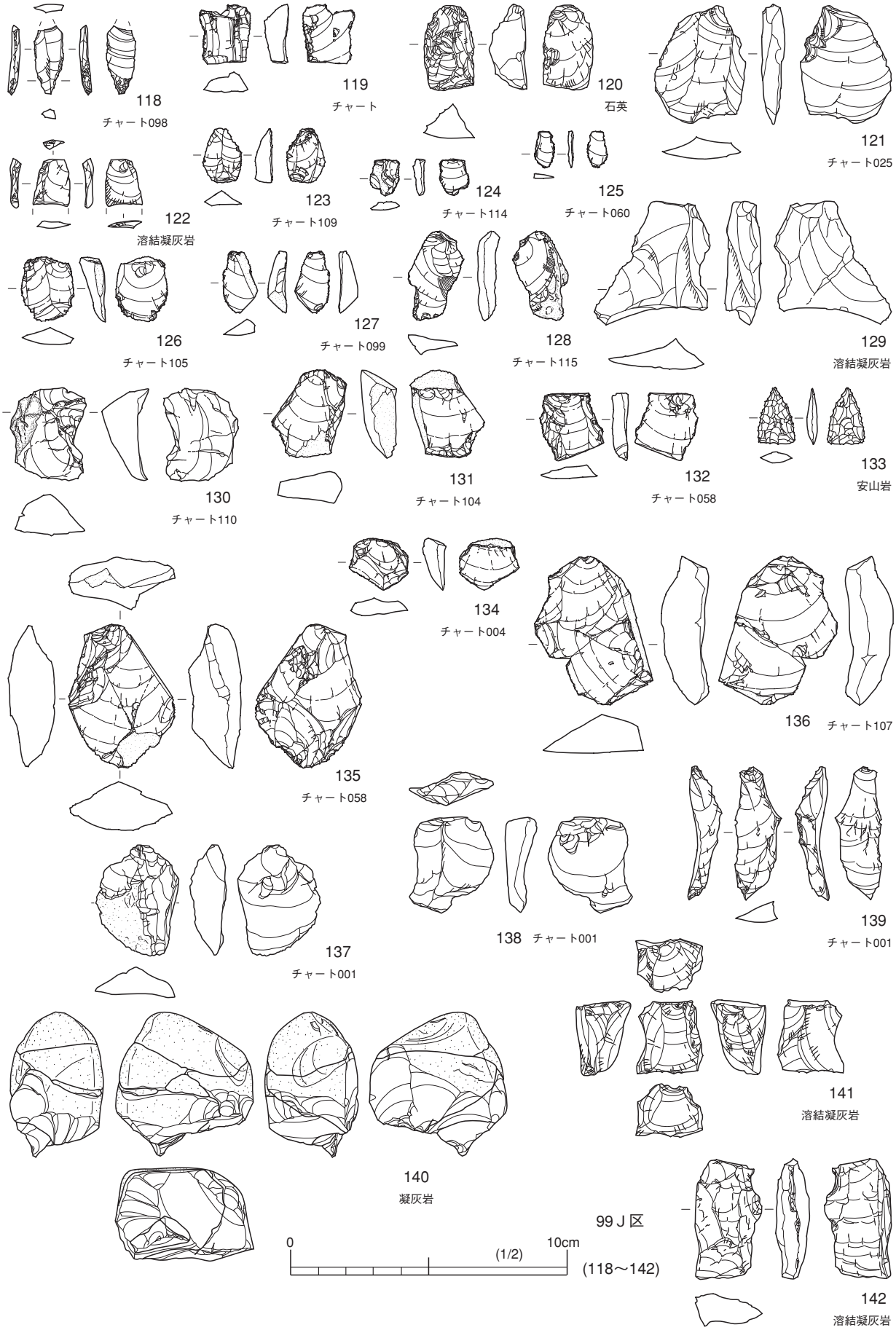


第 20 図　水入遺跡出土石器実測図（4）

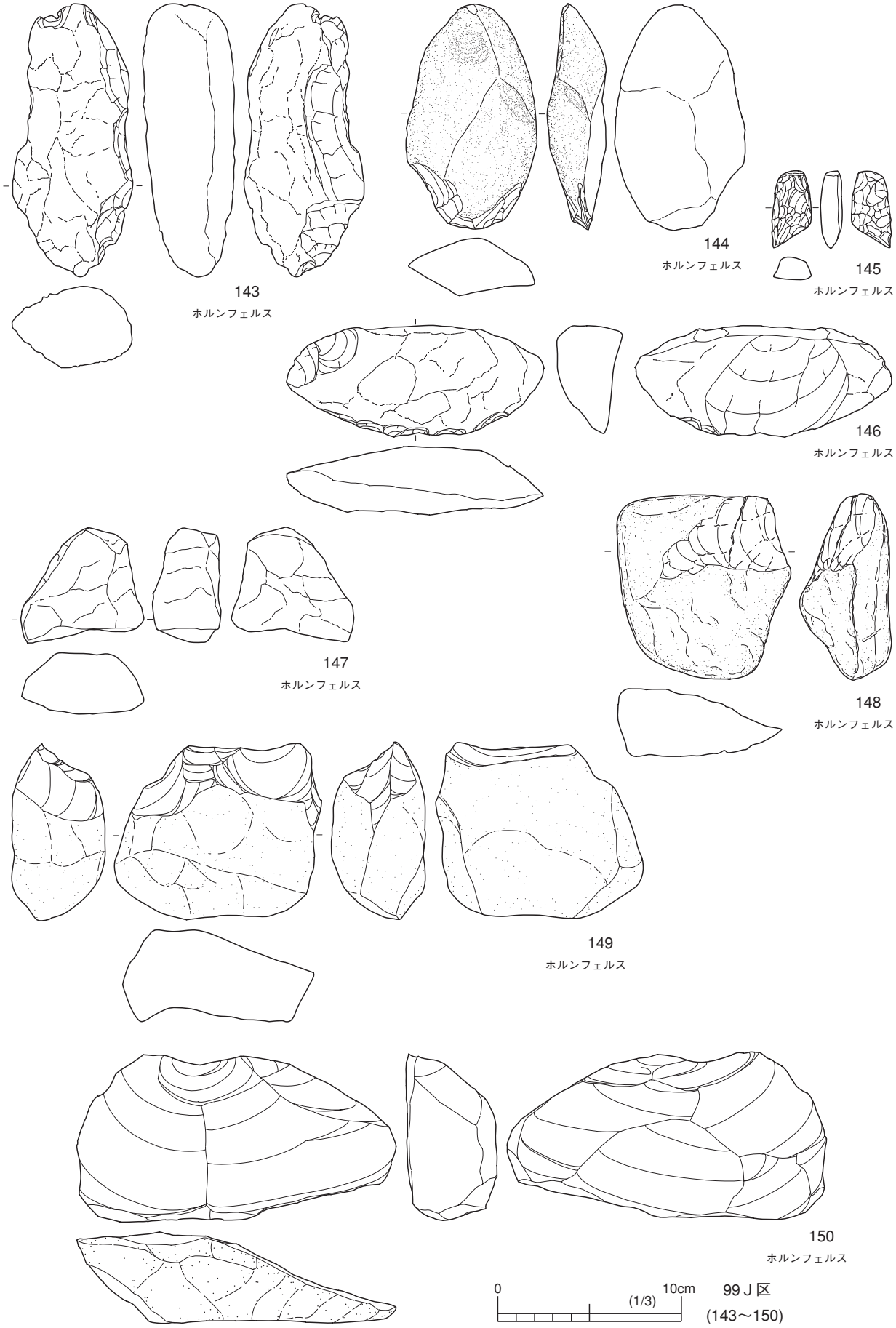


第21図　水入遺跡出土石器実測図（5）

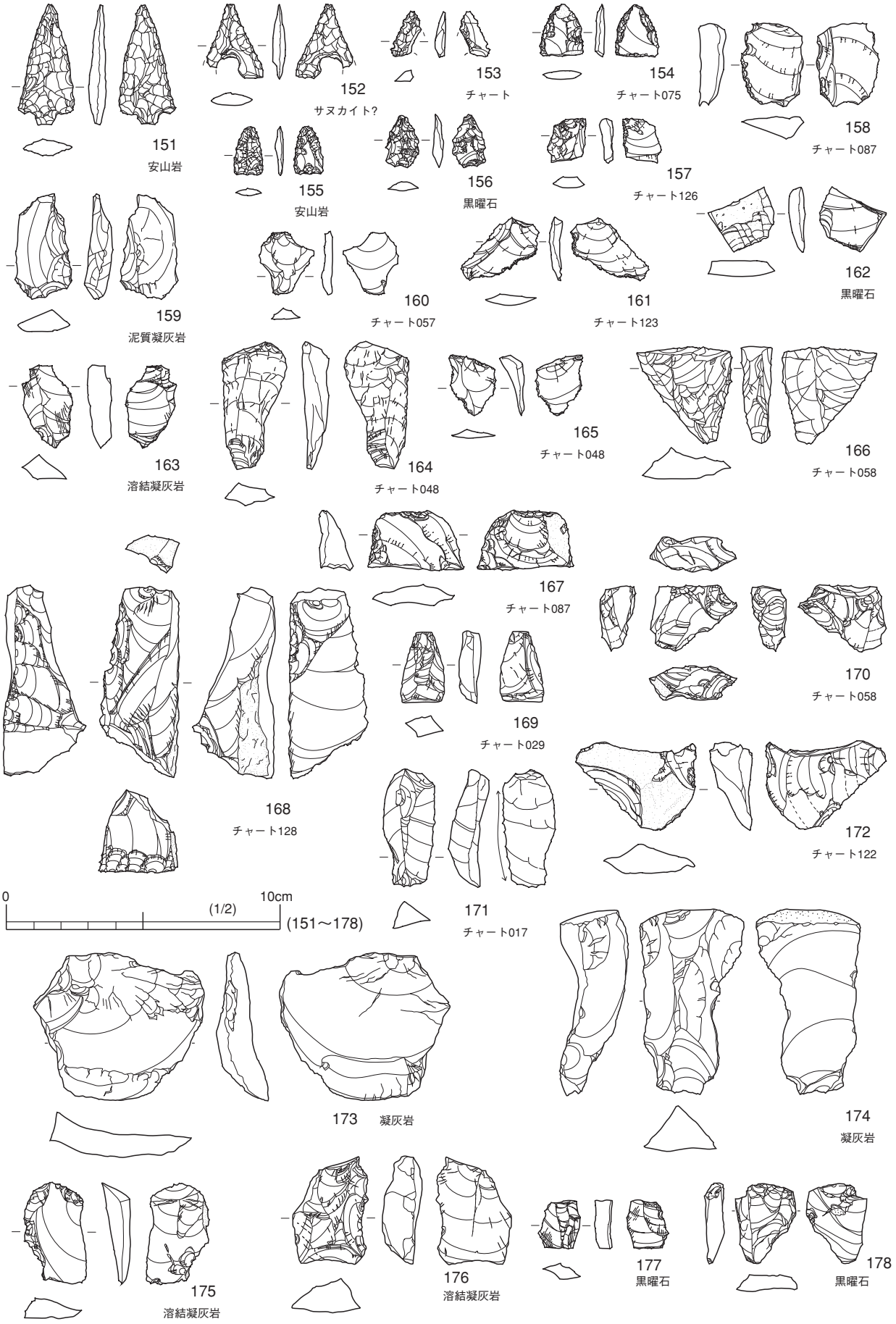
第 22 図　水入遺跡出土石器実測図（6）



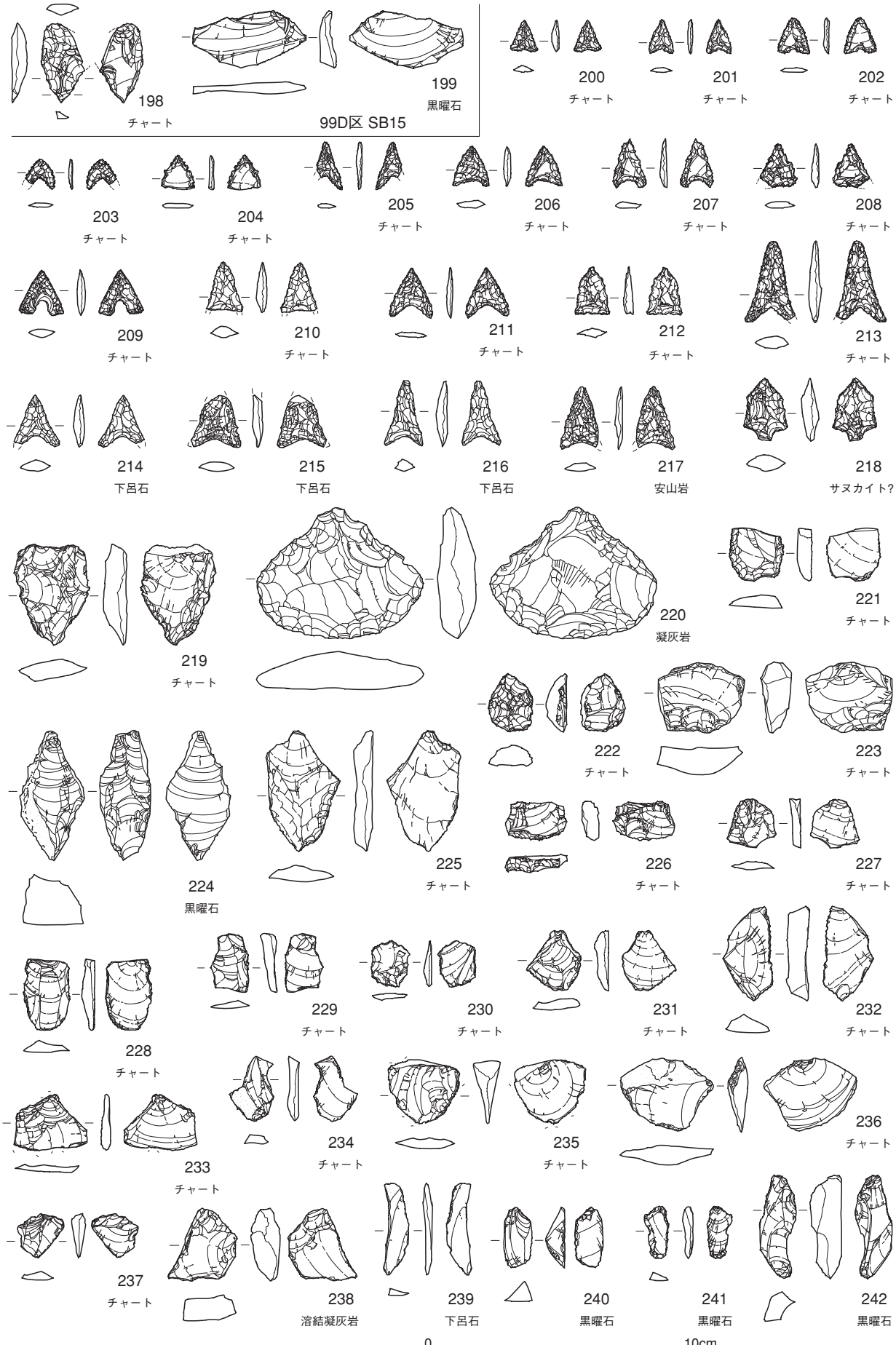
第 23 図　水入遺跡出土石器実測図（7）



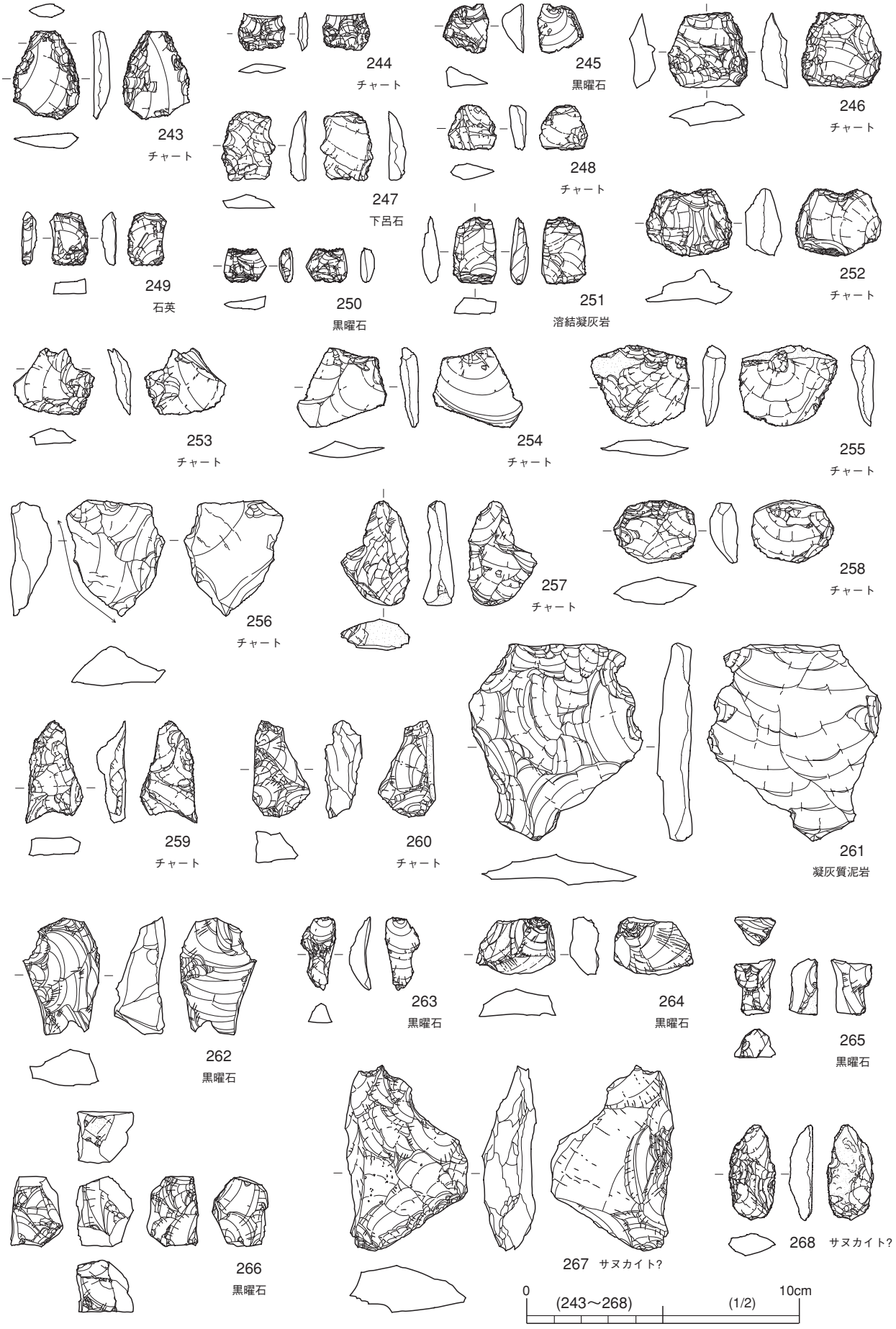
第 24 図　水入遺跡出土石器実測図（8）



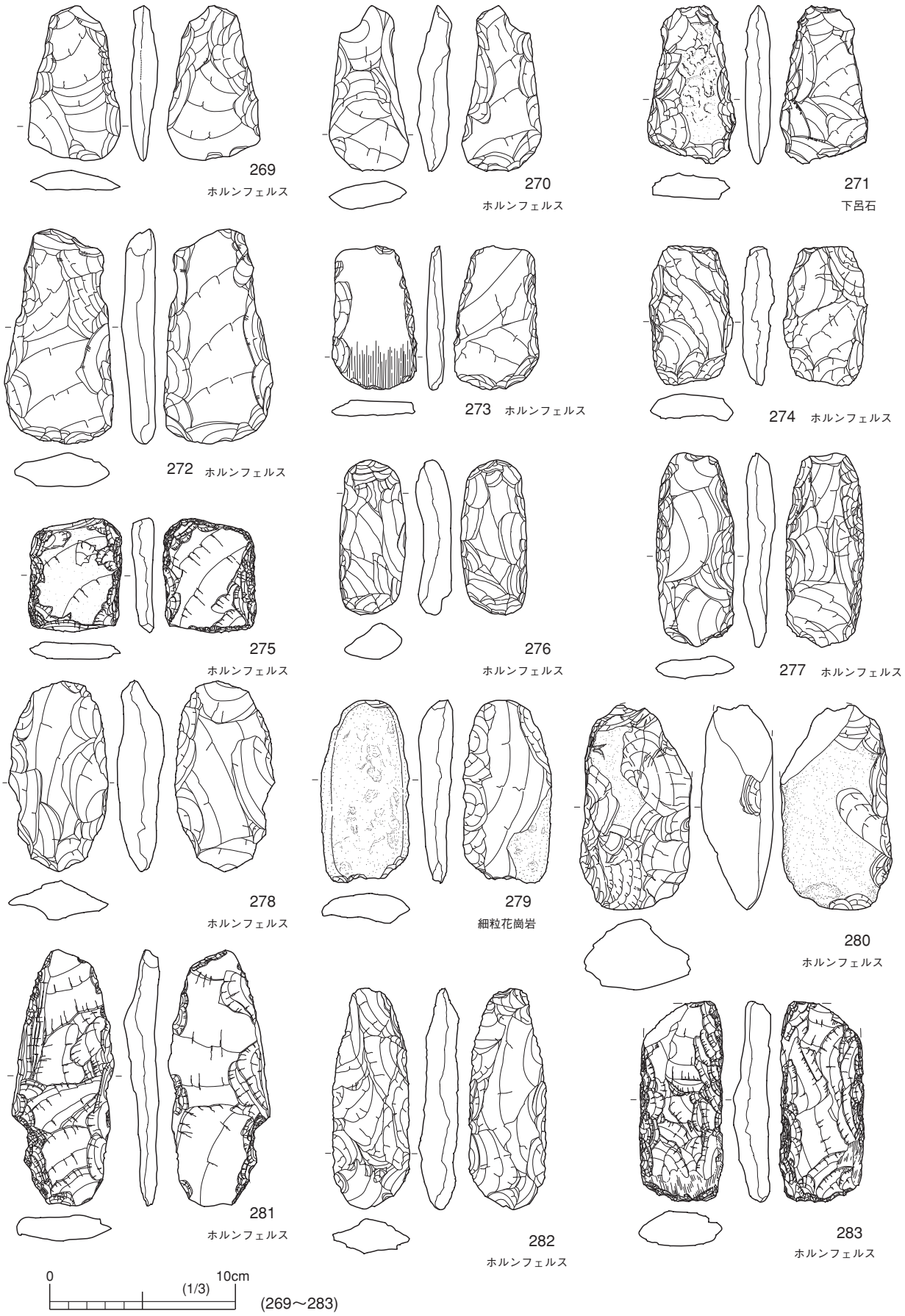
第 25 図　水入遺跡出土石器実測図（9）



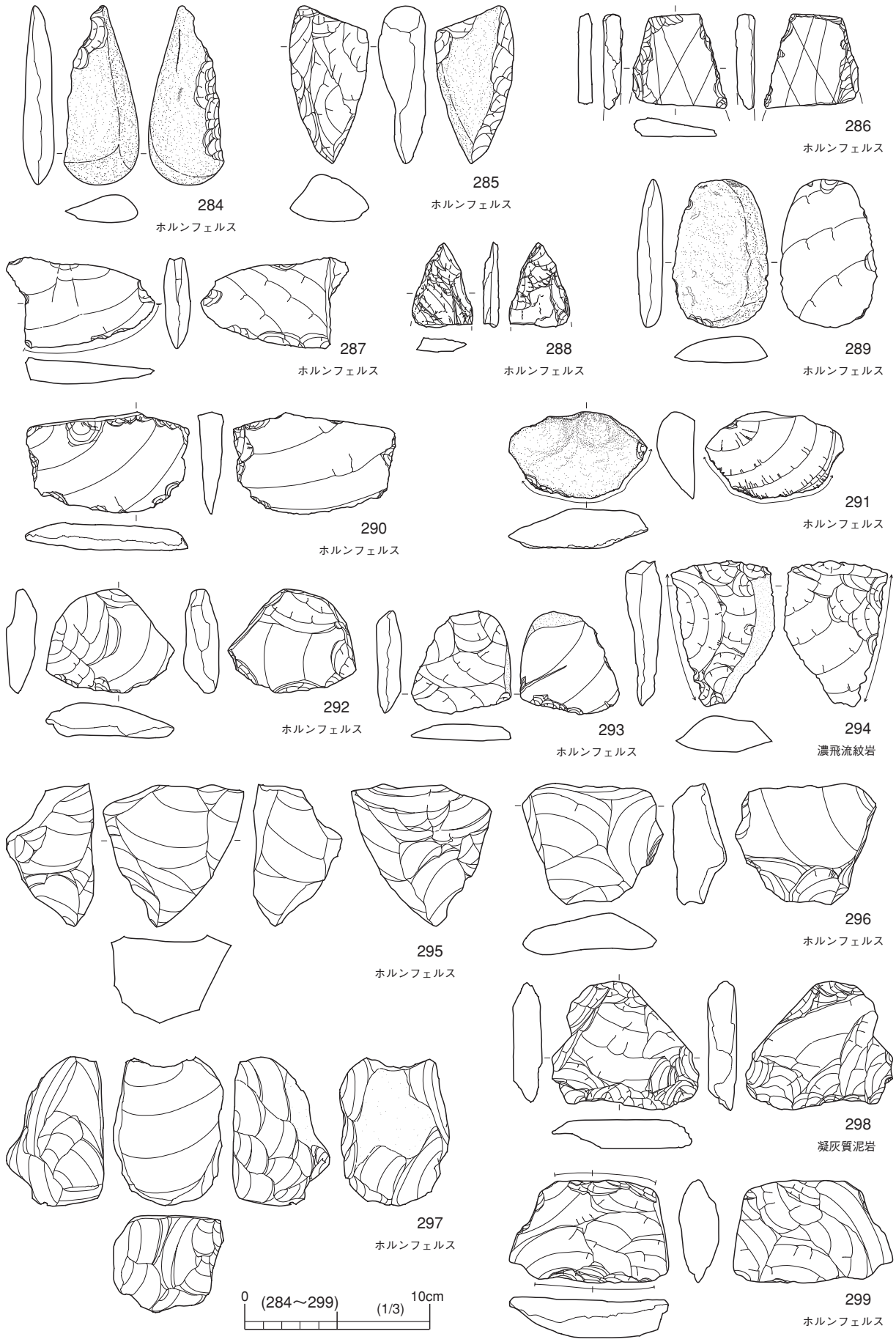
第 26 図　水入遺跡出土石器実測図（10）



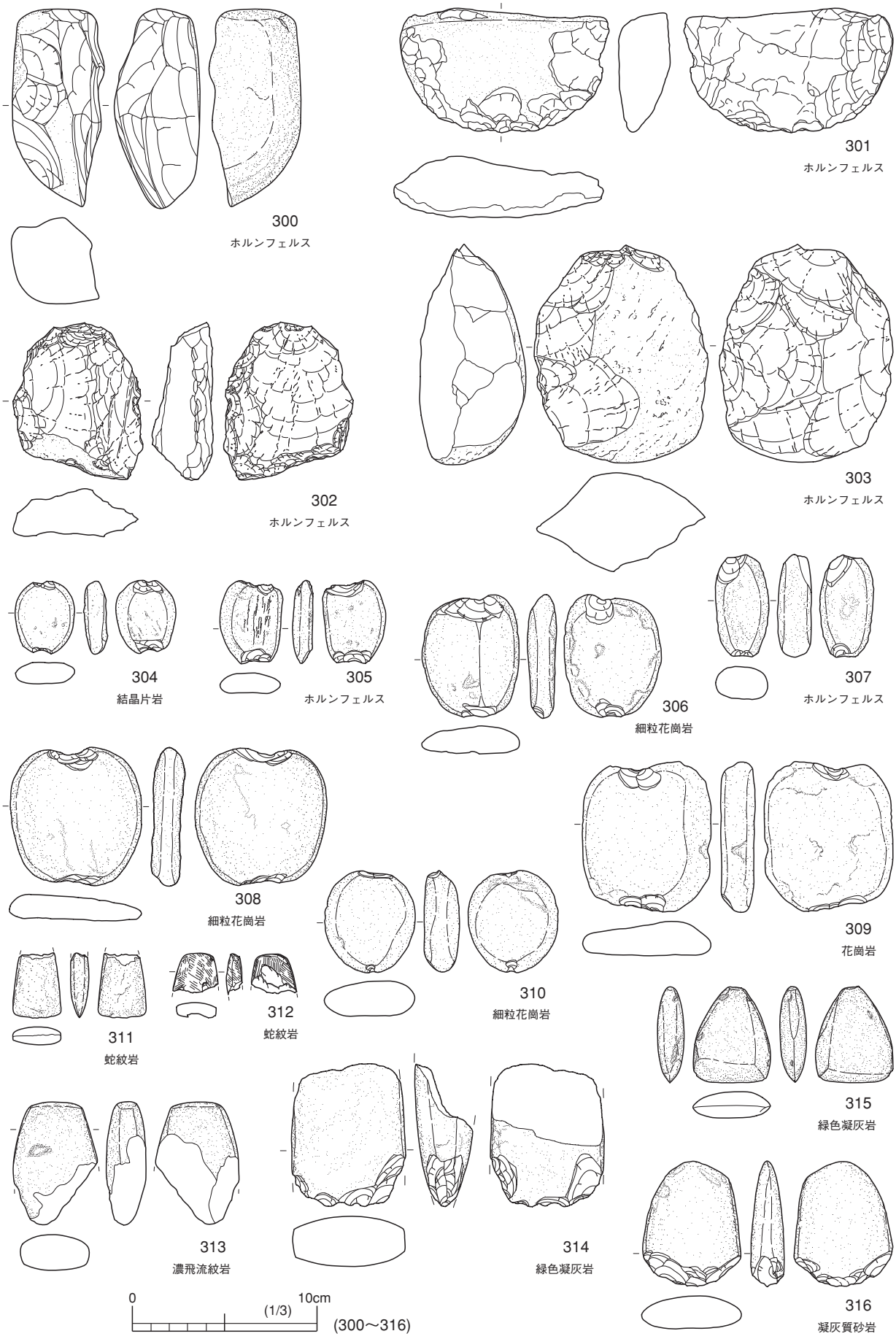
第 27 図　水入遺跡出土石器実測図（11）



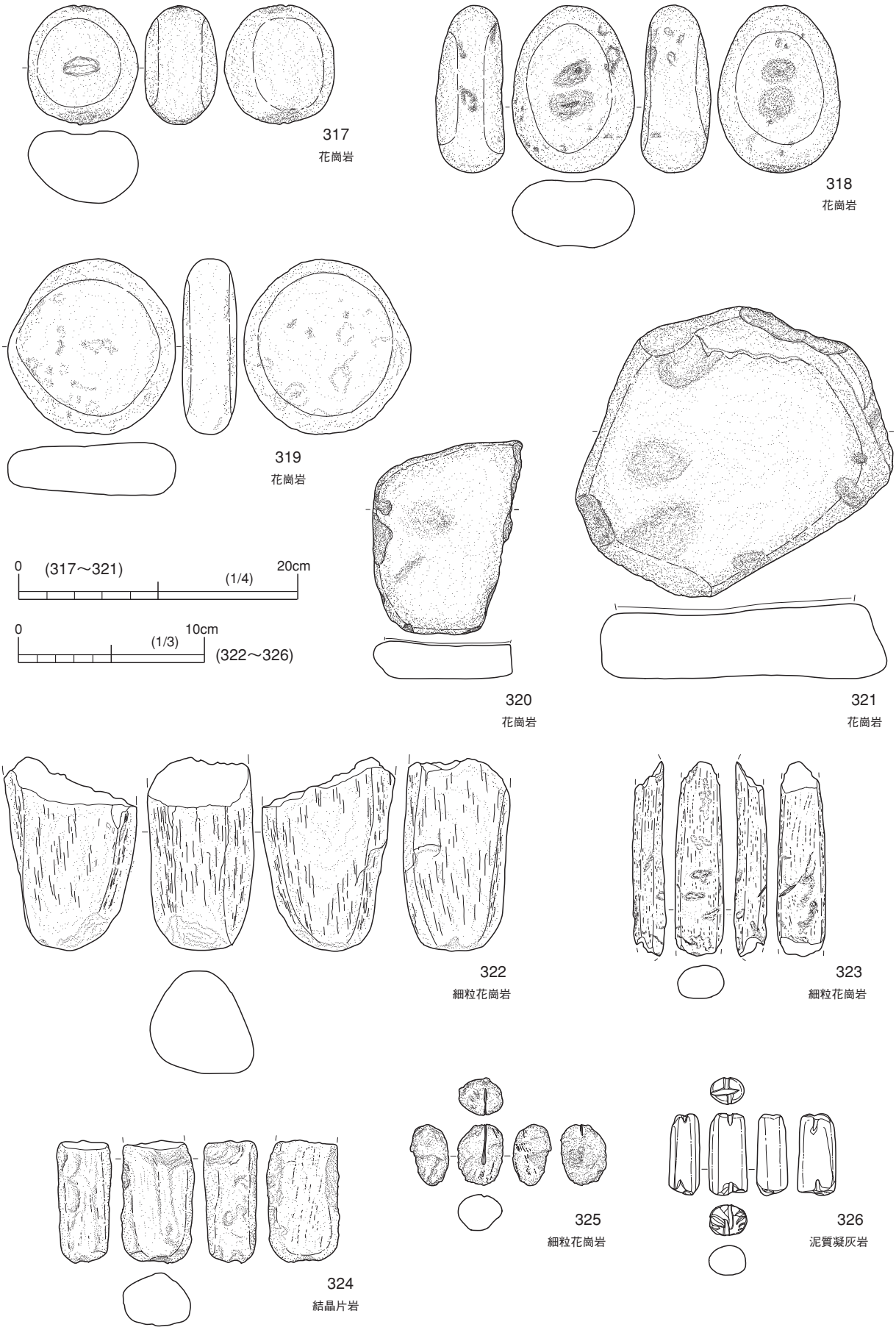
第 28 図　水入遺跡出土石器実測図（12）



第 29 図　水入遺跡出土石器実測図（13）



第 30 図　水入遺跡出土石器実測図（14）



第 31 図　水入遺跡出土石器実測図（15）

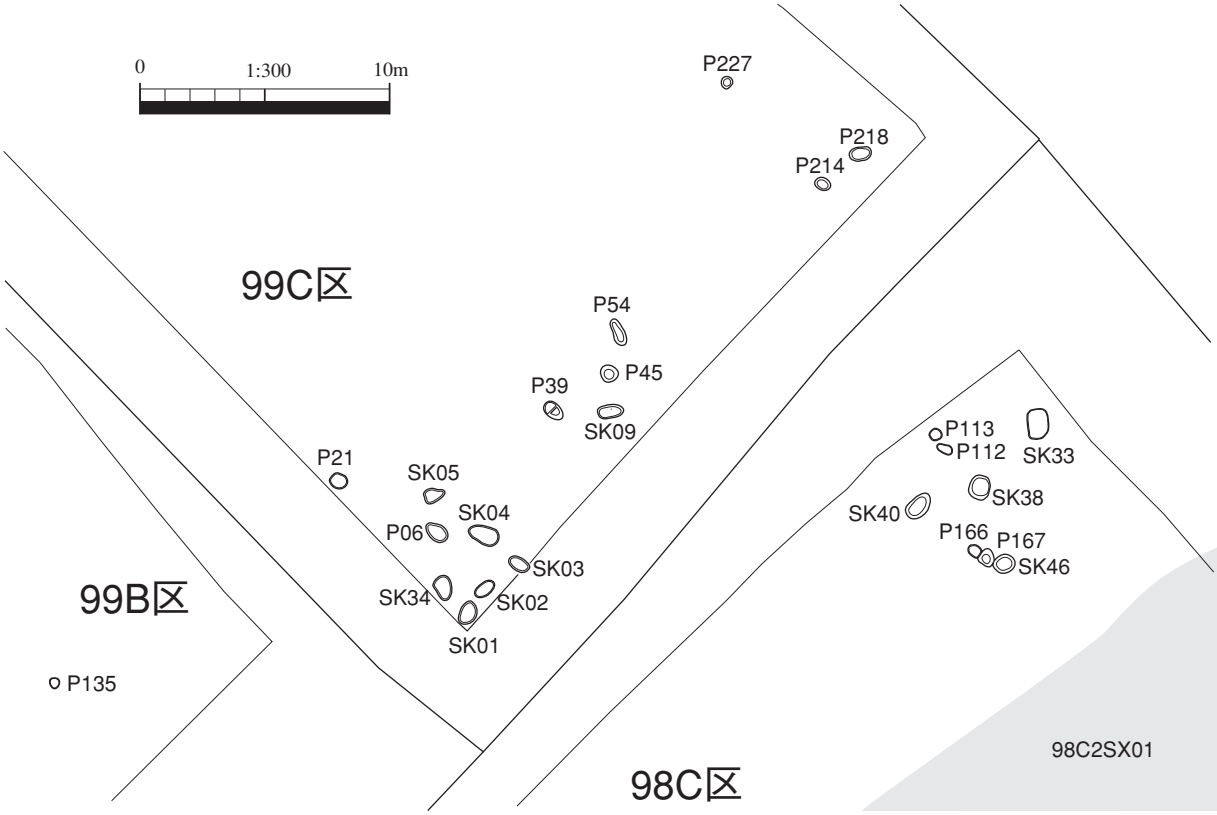
第 3 章　縄文時代の遺構と遺物

第 1 節　草創期から早期

（1）焼土坑群

大屋敷地区の 99B・99C・98C2 区にかけて、土坑の底部・壁面が強い熱で焼け赤色化した土坑が 24 基確認された。確認されたエリアは遺跡中央部の谷地形の入り口にあたり、一部は段丘崖面近くにも広がっている。一部を除き遺構確認面で赤色の底部が検出されており、後の削平によって上部がほとんど失われたものと考えられる。土坑の平面形は楕円形および円形であるが、このような状況を考慮すると、楕円形に近い形が本来の形状であったと推察される。

99CSK09　比較的残存状況が良い土坑である。長軸 93cm、短軸 47cm の楕円形で、深さは 18cm ある。底面はほぼ平らであるが、長軸の一端に向かって緩く上り傾斜になっている。底面および壁面は地山が焼けて赤変硬化する。底に 3 cm ほどの炭化物主体の層が堆積する。その上面から長径 20cm の円礫が出土したが被熱していなかった。炭化物層から採取した炭化物で炭素年代測定を実施したところ、暦年代で紀元前約 8500 年前という数値が得られた（第 10 章第 2 節参照）。

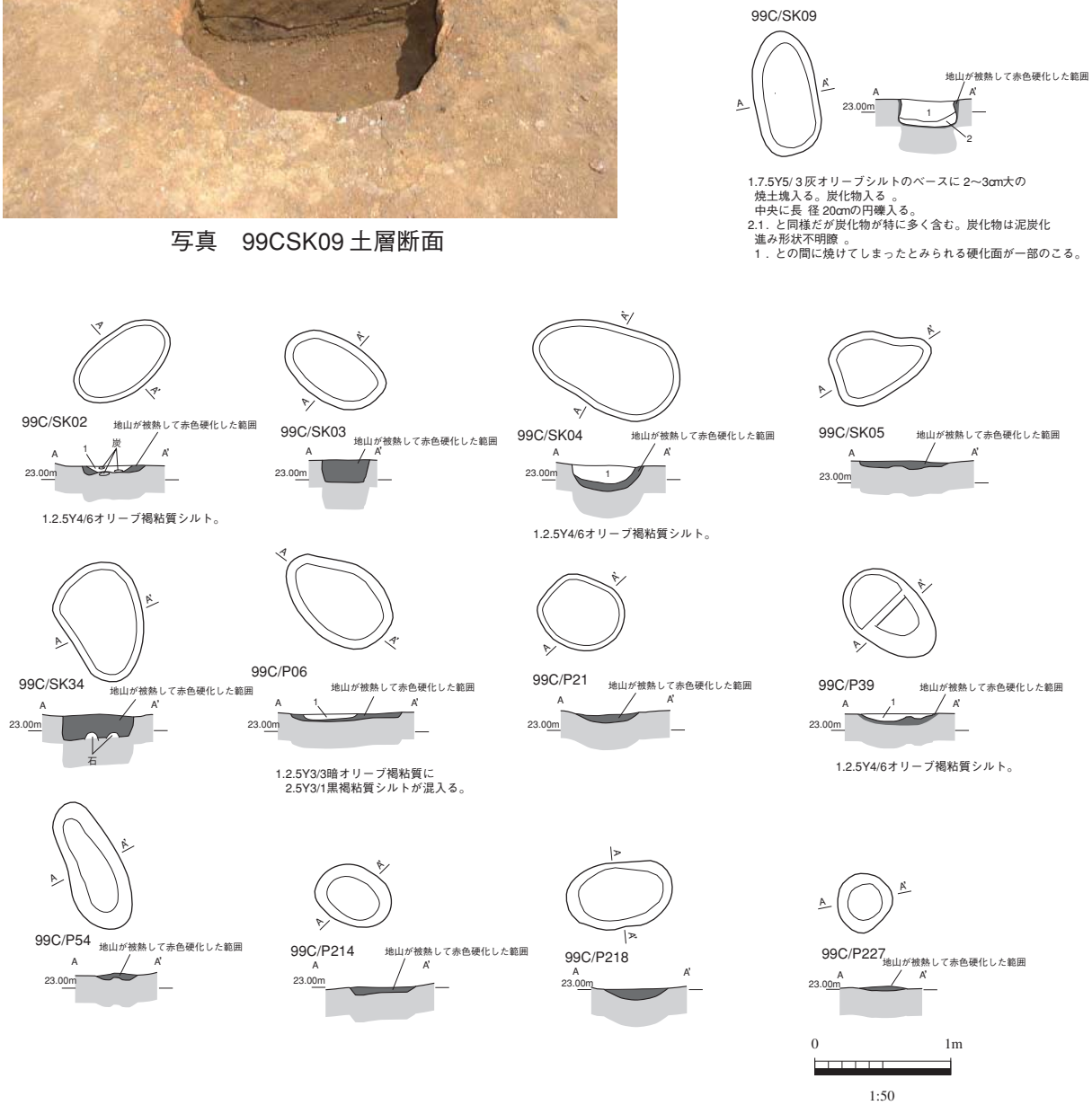


第 32 図　98C・99B・99C 区縄文時代早期焼土坑分布図(1:300)

99BP135　焼土坑分布の中心からややはずれて確認された。直径33cm深さ３cmで、底部は焼けて硬化している。99CSK09同様に炭素年代測定を実施したところ、暦年代で紀元前約8600年前という数値が得られた。

２基の土坑で確認された年代からこれらの焼土坑群が縄文時代草創期～早期にかけてつくられたものである可能性が高まった。遺物の出土はなかったものの、当該期の資料として今後検討される必要があろう。

写真　99CSK09 土層断面



第 33 図　99B・99C 区縄紋時代草創期～早期の焼土坑平面・土層断面図

第２節　縄文時代中期後葉から後期前葉の遺構と遺物

（１）竪穴建物

99DSB15（99DSB15a・b）　調査区ほぼ中央に位置し、古代の竪穴建物などとはあまり重複しない。検出された平面形は崩れた隅丸正方形であったが、床面中央で炉が２基（炉Ａ・Ｂ）重複していることや、４つあるとみられる柱穴がそれぞれ２時期分あるとみられることから、SB15a･bの重複によって不整な形状となったと考えられる。ただしそれぞれの平面形を割り出すまでには至らなかった。

覆土層（１～４層）と炉の覆土層（5～７層）のうち、SB15aに相当するのが縁辺部にのこる２層と炉の覆土６・７層で、SB15bに相当するのが１・４層と炉の覆土５層である。３層は後の掘り込みとみられる。周溝は南東側で確認されたが、これはSB15aに属する。壁面立ち上がりの傾斜は45～50°である。柱穴は４つと考えられる。

SB15aの炉Ｂは長軸64cm、短軸52cm、深さ29cmである。炉の底面などに粘質土を貼り付けたとみられ、被熱した粘質土の下に黒褐色の被熱していない層（炉の土層断面図７層）がある。SB15bの炉Ａは長軸48cm、短軸30cm、深さ12cmである。一度埋まった炉Ｂと一部重複する位置に掘削される。

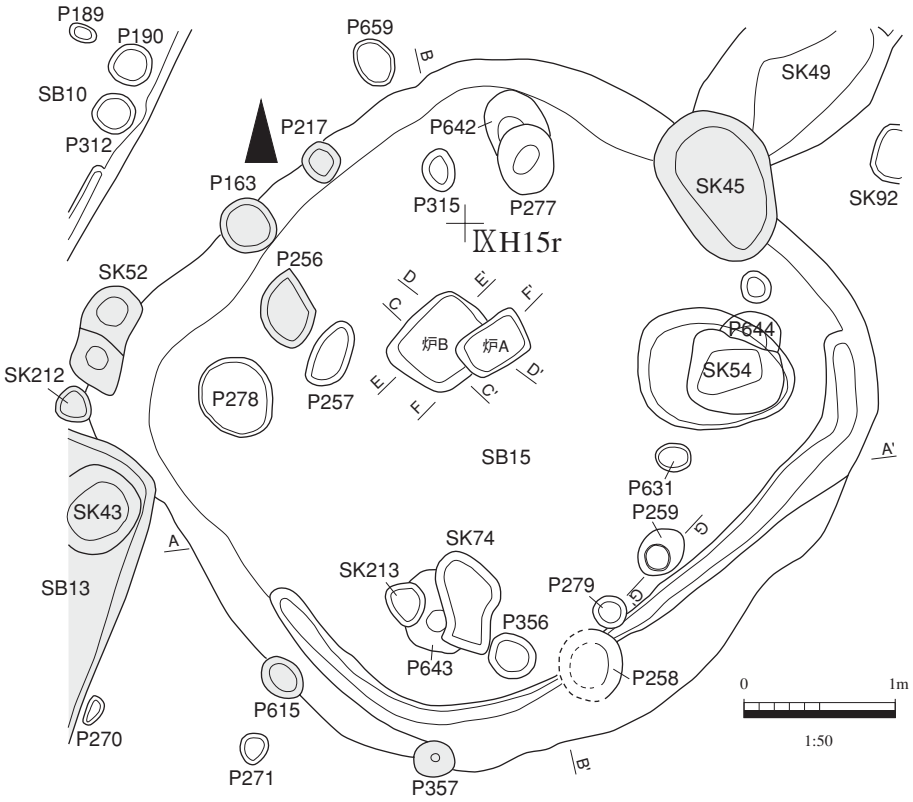
南東壁際の床面にて確認された99DP259は直径33cm深さ14cmの規模であるが、この覆土層の上端付近にて輪切り状になった土器が出土した。残存状況が劣悪で直径18cmであること以外はほとんど情報がない。状況からSB15bの掘削bによって上部が削り取られた深鉢と考えられ、SB15aに伴う埋甕の可能性が高い。

遺物はP259以外の覆土層から深鉢が出土している（11～15）。残存状況は良くないが、口縁部と胴部であろう。いずれも貼付文である。時期は縄文時代中期後葉、関東地方の編年で加曽利ＥⅣ式とみられる。

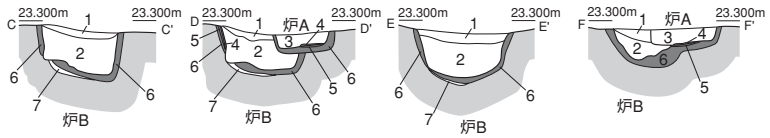
99DSB16　99DSB15の南西８ｍに位置する。重複はなく１時期のみである。平面形はやや不整な円形で、南北4.1m、東西3.8m、確認面からの深さ20cmで、壁面立ち上がりの傾斜は50°である。周溝は東側に若干みられる程度である。柱穴は４つと想定される。竪穴を掘削後貼床（４層）をし、その上で床面中央に炉の掘形を掘削し地山粘質土を詰めて炉としている。長軸58cm、短軸49cm深さ17cmの規模で、覆土層からは直径20～25cmの円礫が６点出土した。炉壁などに使用されたものではなさそうである。

覆土層（２層）は単一層である。

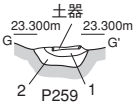
第34図　99D区縄紋時代竪穴建物配置図



1 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロックを含む）。
2 7.5YR4/3褐色粘質シルトと7.5YR4/2灰褐色粘質シルトの斑土。
3 10YR4/1褐灰色粘質シルト（炭化物を少量含む）。
4 7.5YR4/3褐色粘質シルト（7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロック含む）。
5 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（焼土ブロックを若干、10YR5/1褐灰色シルトブロックを多少含む）。
6 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロックを多少含む）。
7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
8 2.5YR3/6暗赤褐色。地山の被熱部分。

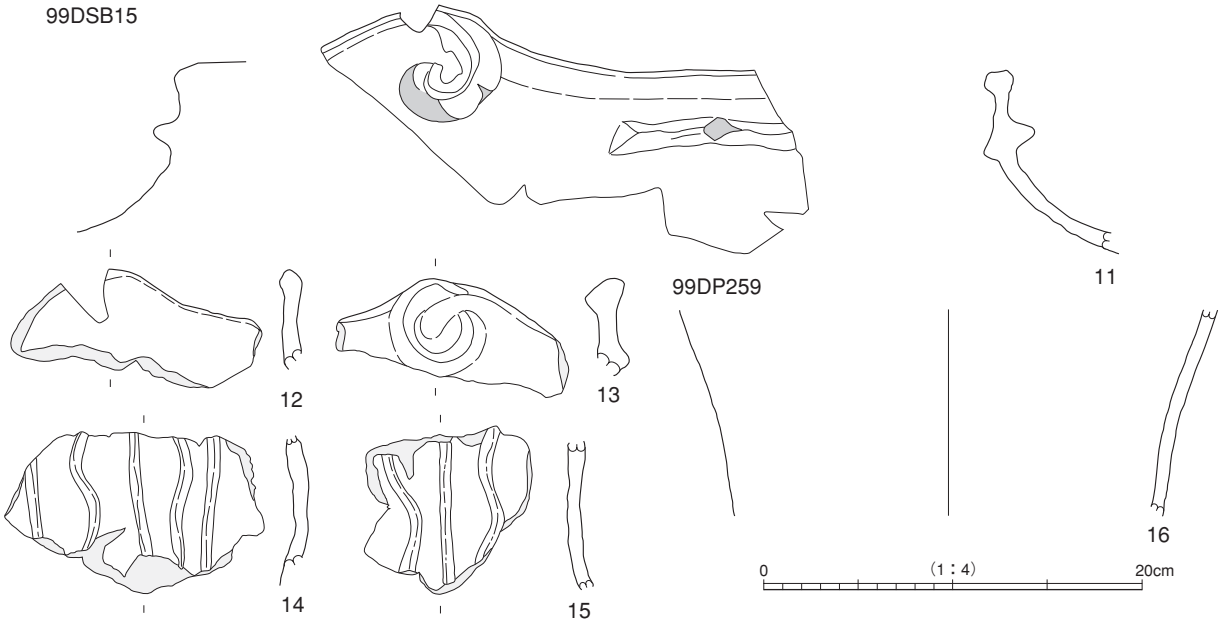


1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロックを多少含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（焼土ブロックを若干、10YR5/1褐灰色シルトブロックを多少含む）。
4 10YR3/1黒褐色（被熱）。
5 10YR6/2灰黄褐色（被熱）。
6 2.5YR3/6暗赤褐色（被熱）。
7 7.5YR3/1黒褐色粘質シルト。



1 2.5YR3/2暗赤褐色粘質シルト
2 2.5YR4/6黄褐色粘質シルト

第 35 図　99DSB15 平面・断面図



第 36 図　99DSB15 出土土器実測図

99DSB30　99DSB16 から東 5.2m に位置する。古代の竪穴建物（99DSB29・31）やピットが上に重なる。平面形はやや不整な円形とみられる。土層の観察から同じ場所での建て替えはなかったと考えられる。南北 3.3m 以上、確認面からの深さ 10cm である。周溝や柱穴、炉は見いだせなかった。覆土層（1 層）は 1 層で、遺物はなかった。

99DSB35　99DSB30 から東南東に約 6m に位置する。調査区東壁により半分しか確認しえていないが、平面形はやや不整な円形とみられる。土層などの観察から同じ場所での建て替えはなかったと考えられる。東トレンチ（T03）と同方向軸の長さは 4.1m である。壁面立ち上がりの傾斜は 35° である。周溝や柱穴、炉は見いだせなかった。覆土層（5 層）は 1 層で、遺物はなかった。

99KSB1075　調査区東壁近くは段丘面が矢作川に向かって緩い傾斜となり、黒褐色土層の堆積が認められた。その上面で一部遺構を確認することにしたがきわめて不明瞭で、周辺状況から古代の竪穴建物群が検出されるという想定で、遺構平面形の確認作業をすすめた。この 99KSB1075 もそのひとつで、検出時には方形を想定していたが、最終的に円形の縄文時代竪穴建物と確認されたものである。円形プランは土層から想定でき、約 4m の正円形と考えられる（第 40 図）。深さは 20cm で、壁面の立ち上がりは緩い。床面は一部貼床がなされ（12・14 層）、その上から炉が掘削される。なお顕著な柱穴は確認できなかった。炉は想定される円形平面の中央よりやや西へずれた位置にある。掘った炉穴の縁に長軸 50 ～ 60cm の円礫 2 個を L 字形に組み、その対面はやや小さい礫を配して石囲炉とする。炉床（9 層）は赤く焼ける。

遺物は炉内とその周辺から土器片が散った状態で出土した。口縁に突起のある深鉢である。土器から、当該建物が縄文時代後期初頭と位置づけられる。

（2）土坑

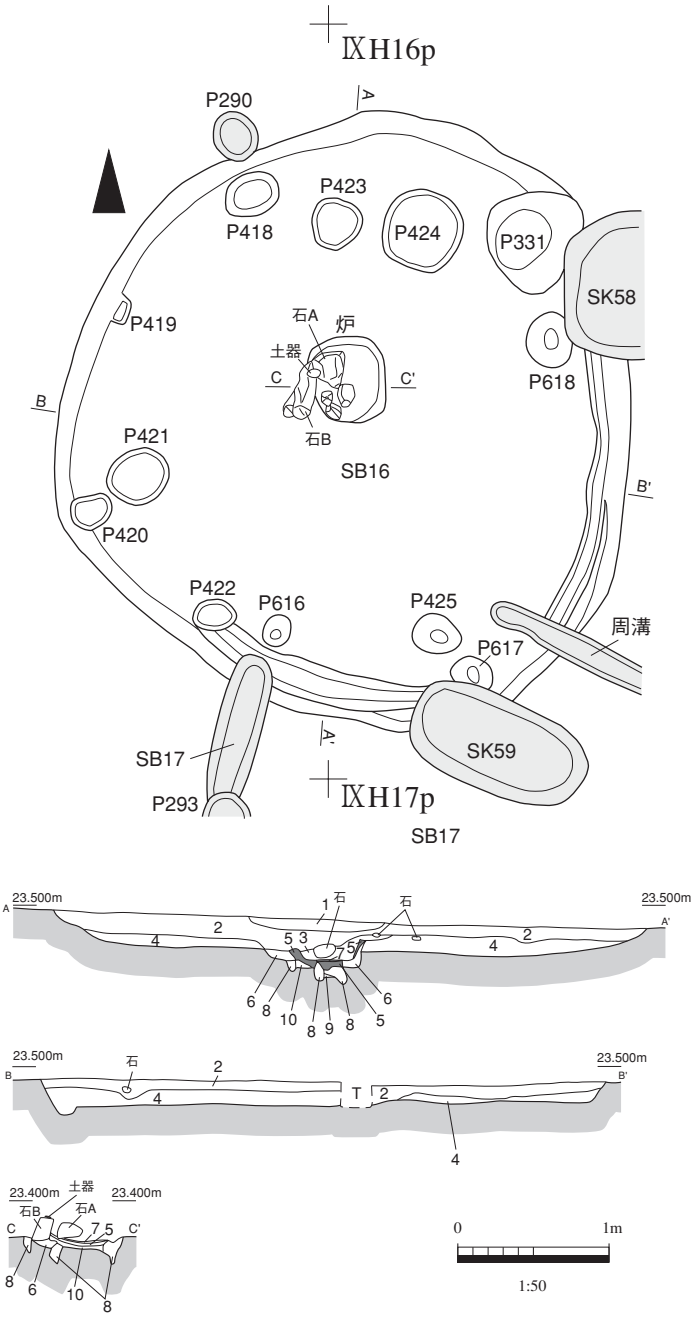
98CSK42　段丘崖（98C2SX01）の縁から西 6m に位置する。長径 0.9m 短径 0.75m 深さ 56cm である。覆土は炭化物（最大で 1cm と目立つ）が多く入る。小片となった深鉢が出土した（22 ～ 29）。摺消し縄文

で中期末とみられる。なお、SK42周辺からは焼土が入るピット7基が確認されたが遺物はなく、草創期～早期のものと判断した。

99BSK16　調査区北東部に位置する。戦国時代掘立柱建物柱穴に一部壊される。平面形は長方形と推定され、長径0.3m以上短径0.42m深さ58cmである。SK16に先行するSK18同様ほとんど遺物がないが、中期末とみられる鉢の口縁が出土した。

99BSK23　調査区北東部に位置する。平面形は崩れた台形で、長径1.2m短径1.1m深さ52cmの比較的明瞭な底部がある。土器は覆土の半ばほどから集まって出土した。深鉢口縁部で貼付紋である。

99BSK180　調査区北東部に位置する。平面形はくずれた長方形で、長径1.7m短径1.2m深さ30cmの比較的明瞭な底部がある。深鉢口縁部が出土した。装飾の多い中期後半に所属するものと思われる。

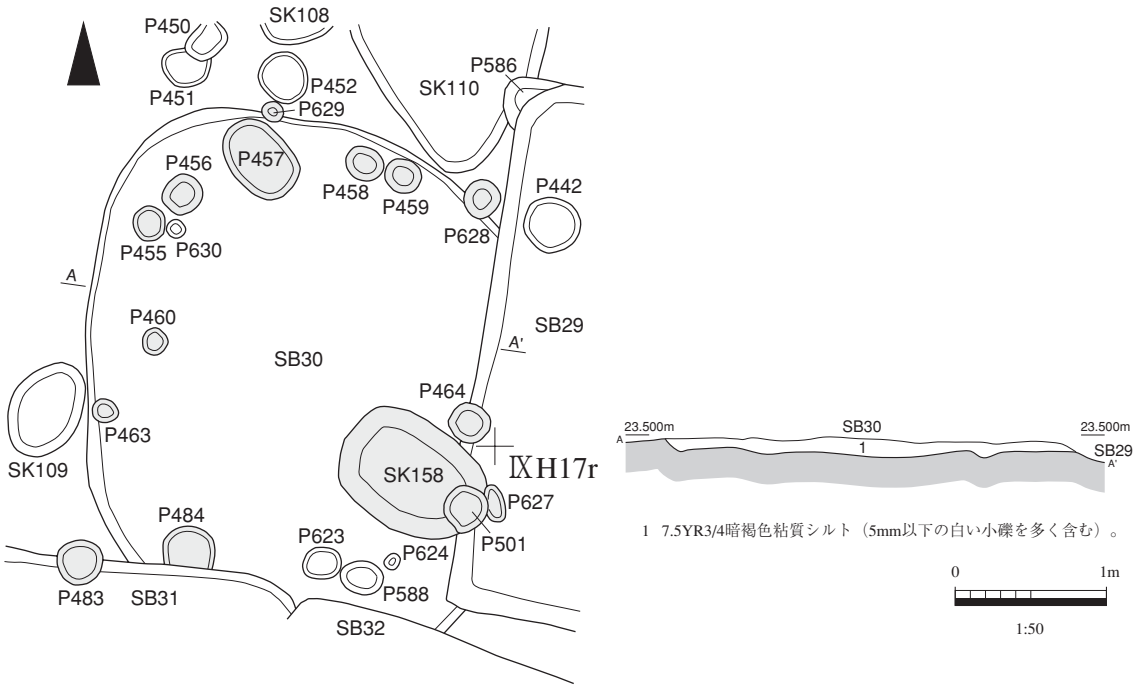


1　5Y4/1灰色シルト。
2　10YR3/2黒褐色シルト（5mm以下の礫・焼土ブロック・炭化物を若干含む）。
3　10YR3/2黒褐色シルト（5mm以下の礫を多量に含む）。
4　7.5YR4/2灰褐色シルト。
5　2.5YR4/6赤褐色シルト（被熱）。
6　7.5YR4/3褐色粘質シルト。
7　7.5YR7/4にぶい橙色（被熱）。
8　10YR4/1褐灰色粘質シルトと5YR4/3にぶい赤褐色粘質シルトと5YR2/2黒褐色粘質シルトの斑土。
9　2.5YR5/4にぶい赤褐色粘質シルト。
10　10YR4/1褐灰色粘質シルトと2.5YR5/4にぶい赤褐色粘質シルトの斑土。

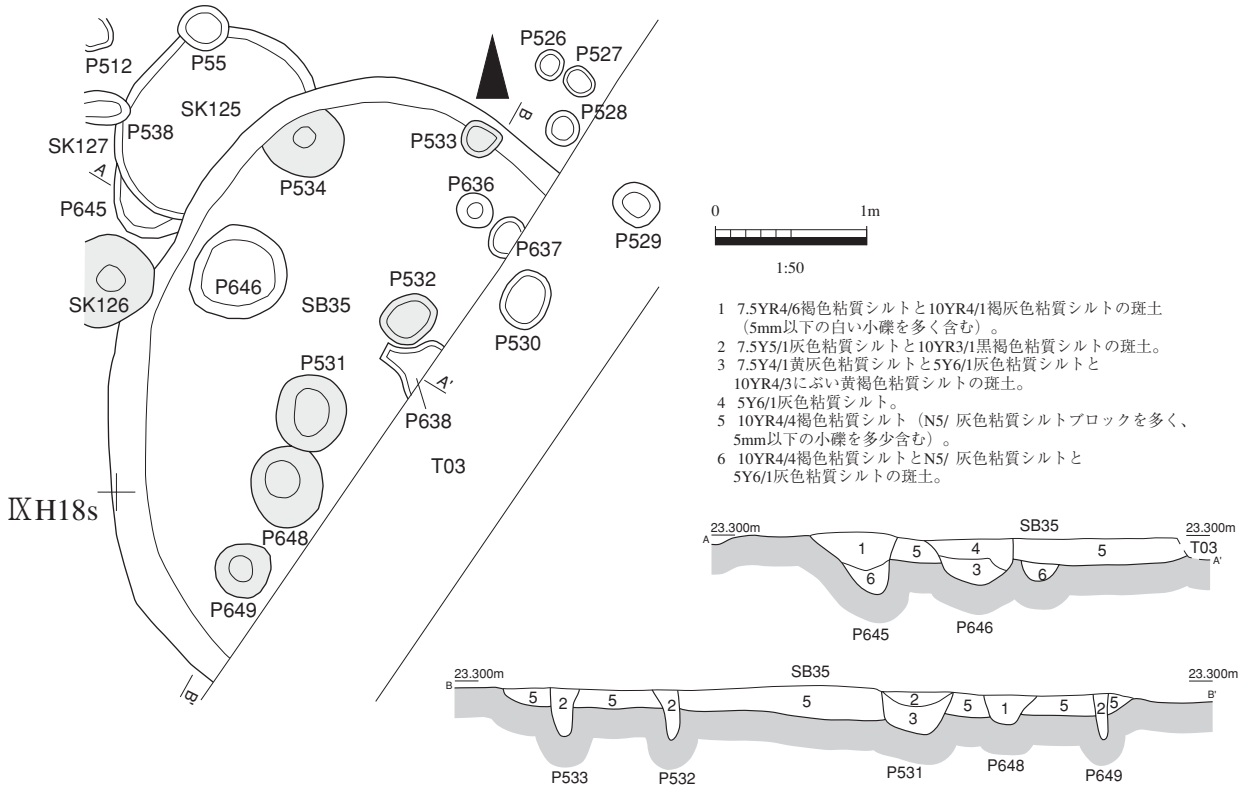
第37図　99DSB16平面・断面図

（3）その他

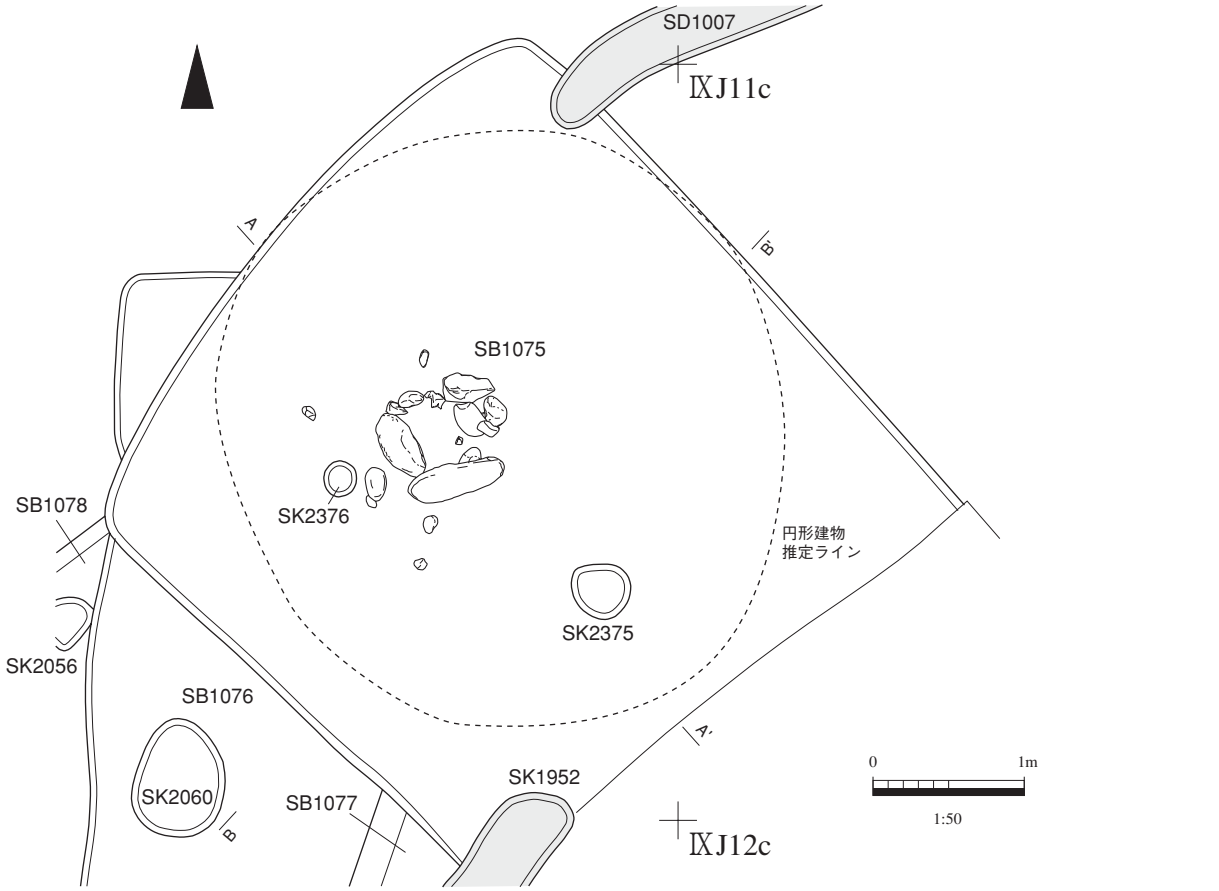
以上の他検出面や後代の遺物に混じって出土した当該期の土器が若干ある。41は99DSB35南西の表土層中から出土した無紋の深鉢だが中期末～後期初頭である。38～40は98D区での出土で中期の深鉢である。特徴的な装飾突起などから抽出できた。38は99DSB09から出土した。先述の竪穴建物から北へやや奥まった地点での出土であるが、ごく少量でもあり、集落域は段丘縁辺に限られるであろう。42～44は99K区検出時に出土した。貼付文の上から連続刺突文を施す。45・46は古代の竪穴建物覆土に混入。これらは中期末と考えられる。

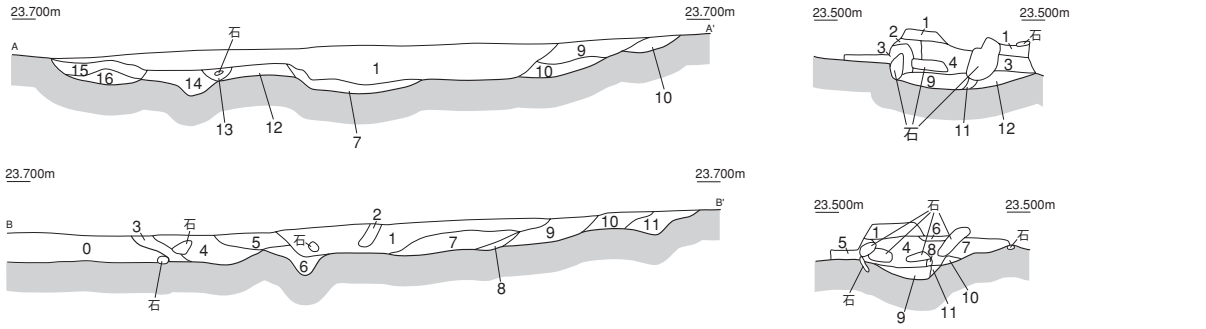


第 38 図　99DSB30 平面・断面図



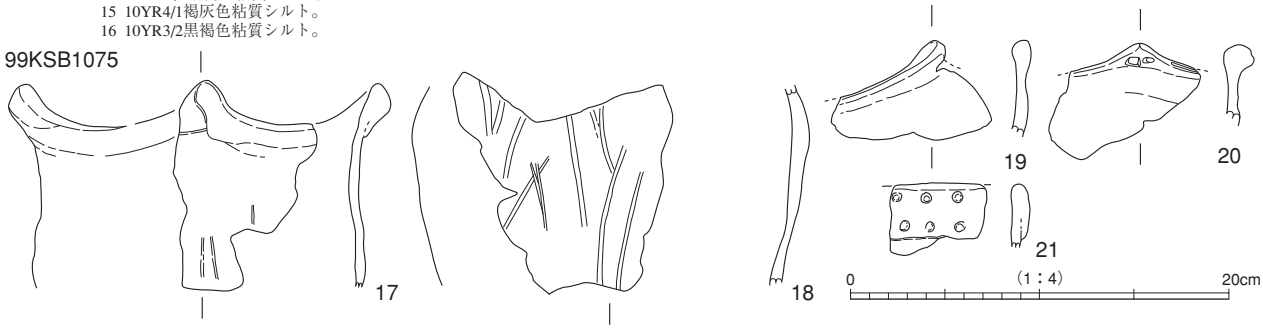
第 39 図　99DSB35 平面・断面図



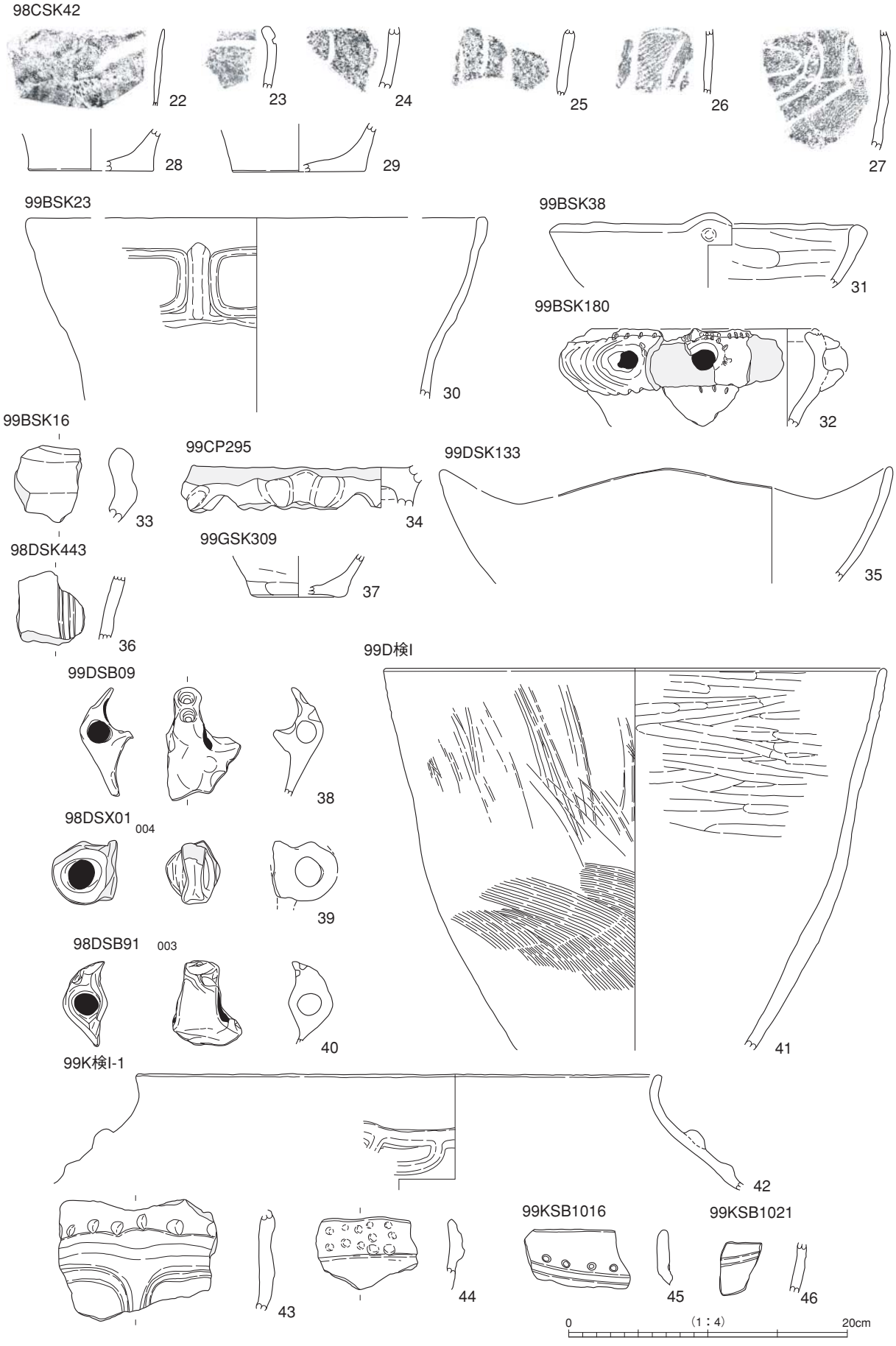


0 7.5YR4/3褐色粘質シルト。縄文時代の遺物包含層。
1 10YR3/2黒褐色粘質シルト。
2 5Y3/1オリーブ黒色シルト（植物又は小動物による撹乱痕の可能性あり）。
3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土。
4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
5 10YR4/1褐灰色粘質シルト。
6 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト。
7 7.5YR2/4暗褐色粘質シルト。
8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
9 10YR3/1黒褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
10 10YR4/1褐灰色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
11 7.5YR4/1褐灰色粘質シルト。
12 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
13 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
14 7.5YR2/4暗褐色粘質シルト。
15 10YR4/1褐灰色粘質シルト。
16 10YR3/2黒褐色粘質シルト。

1 SB1075の上層埋土。
2 10YR4/1褐灰色粘質シルト。
3 2より明るいが、色調・土色は同じ。
4 7.5YR5/2灰褐色粘質シルト。
5 SB1075下層の層位埋土と同じ。
6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
7 7.5YR4/1褐灰色粘質シルト。
8 5YR4/4にぶい赤褐色の焼土塊。
9 5YR4/4にぶい赤褐色及び10YR5/4にぶい。
褐色に変色した炉床にあたり、
被熱による硬化面が皿状に広がる。
10 8と同じ焼土塊と7の斑土。
11 7.5YR4/1褐灰色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
12 色調は同じだが、11より明るい。



第 40 図　99KSB1075 平面・断面図と出土土器実測図



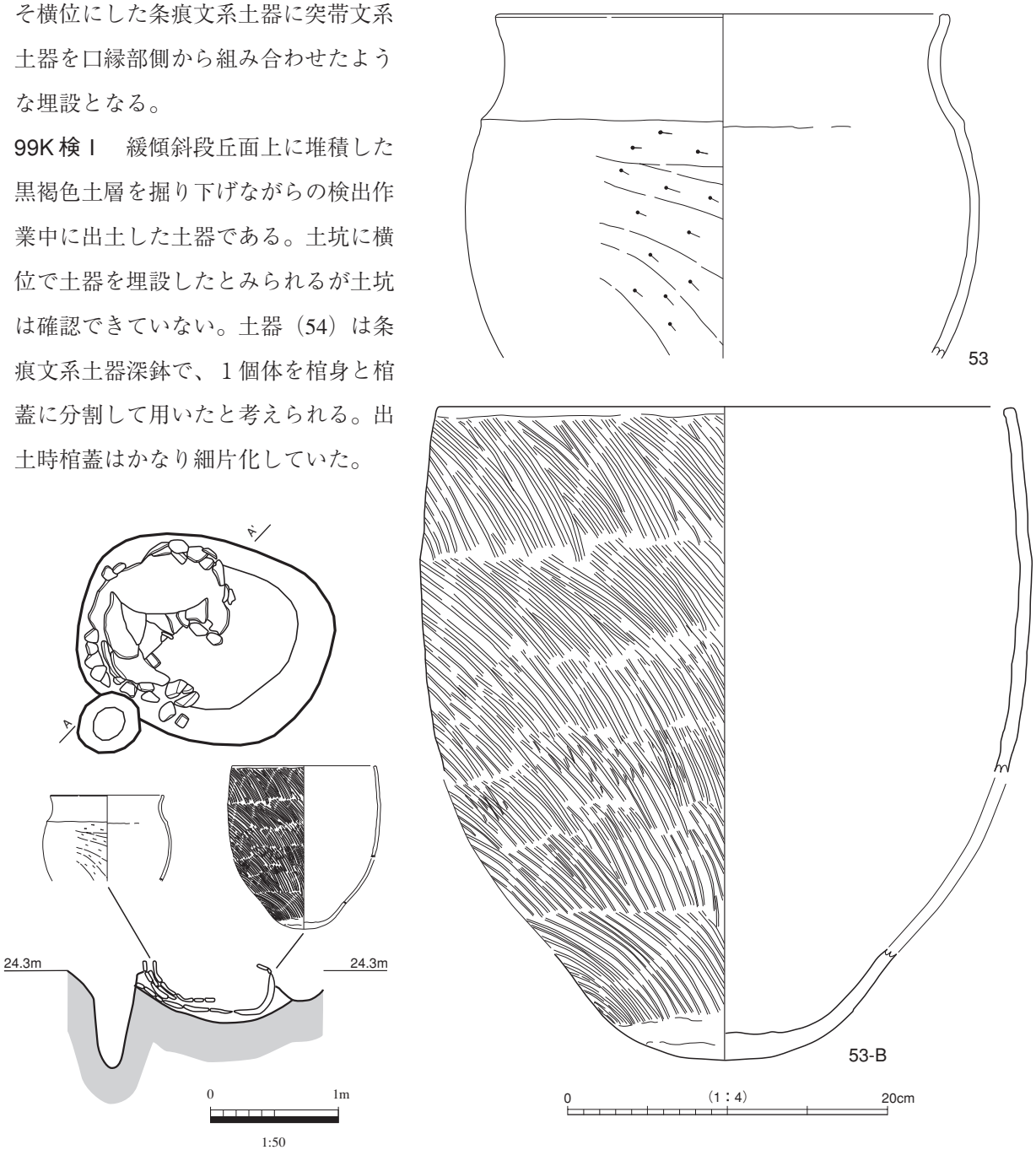
第 41 図　縄文時代中期の出土土器実測図

第３節　縄文時代後期から晩期の遺構と遺物

下糟目地区の99Ｅ・Ｋ区では縄文時代晩期となる土器棺墓が２基確認された。

99ESK175　調査区南端を遺跡中央の谷から派生した小谷（谷Ａ、後述）の北斜面が横切るが、その上り切った地点で確認された。平面形が隅丸長方形で長径2.0m短径1.6m深さ40cmの土坑に２個体の土器を埋設した土器棺墓である。上半部となる土器（53-A）は突帯文系土器深鉢で、型式は西之山式で底部を欠く。一方下半部には条痕文系土器深鉢を用いる。図上で器形を復元できたものの埋設時にはいくつかの破片になっていた可能性もある。墓の上部は削平され土器も欠損部分が多いと思われるが、おおよそ横位にした条痕文系土器に突帯文系土器を口縁部側から組み合わせたような埋設となる。

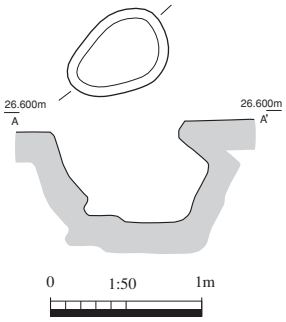
99K検Ⅰ　緩傾斜段丘面上に堆積した黒褐色土層を掘り下げながらの検出作業中に出土した土器である。土坑に横位で土器を埋設したとみられるが土坑は確認できていない。土器（54）は条痕文系土器深鉢で、１個体を棺身と棺蓋に分割して用いたと考えられる。出土時棺蓋はかなり細片化していた。



第42図　99ESK175の平面・断面図と出土土器実測図

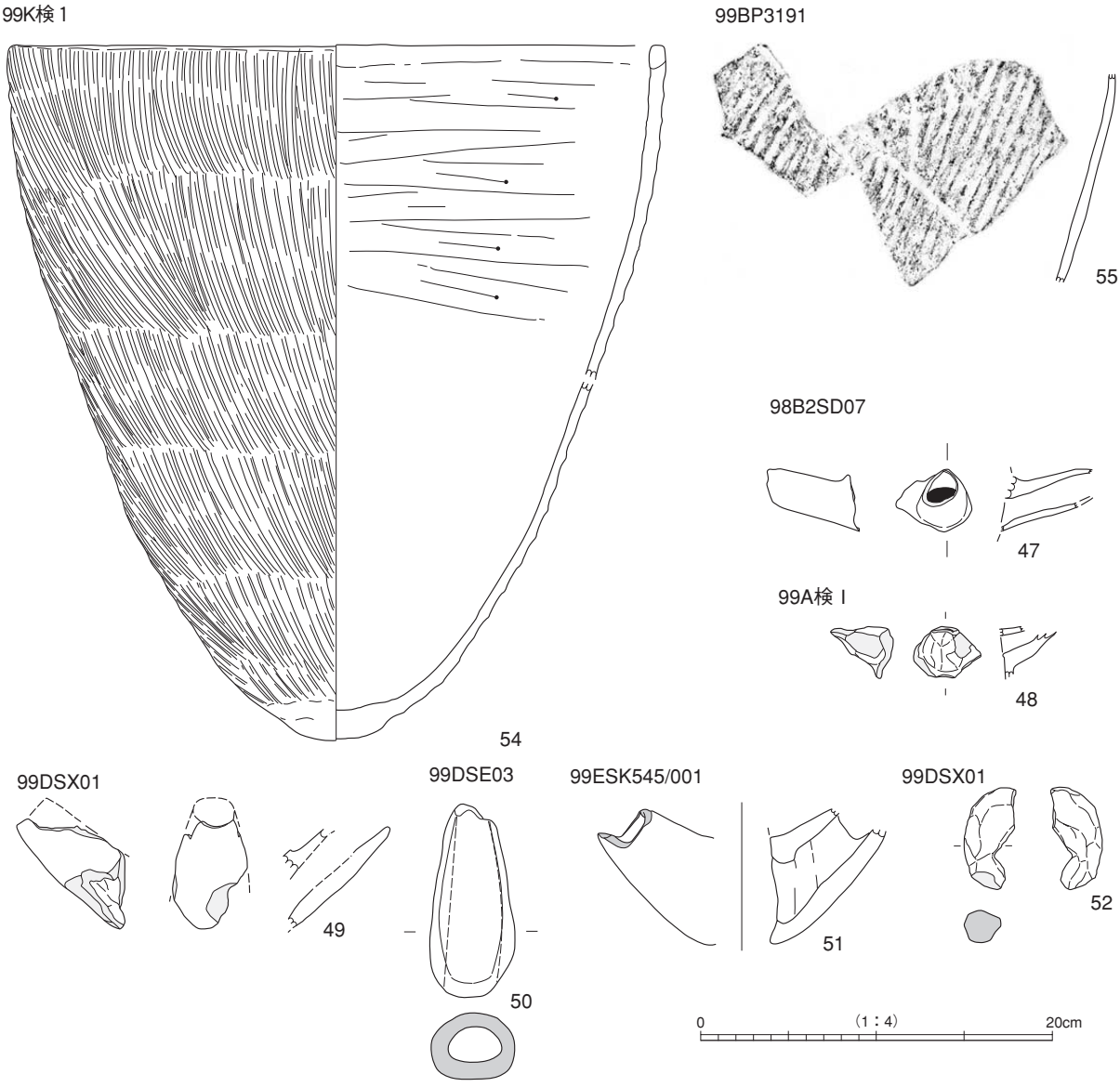
第 4 節　小結

ドングリ貯蔵穴99JSK109　縄文時代と推定されるが所属時期が不明な遺構がある。99 J 区北壁際で確認された99JSK109である。確認された平面形は卵形で長径0.73m短径0.53mであったが、半分を掘削したところ上窄まりの袋状であることが判明し、貯蔵穴の可能性が出てきた。そこで覆土のサンプルを採取し名古屋大学教授（当時）渡辺誠氏に鑑定を依頼した。結果はドングリの殻斗が一定量確認されたとのことでドングリ貯蔵穴の可能性が高くなった。このような袋状土坑は遺跡内では本例のみである。



第 43 図　99JSK109 平面および掘形断面図

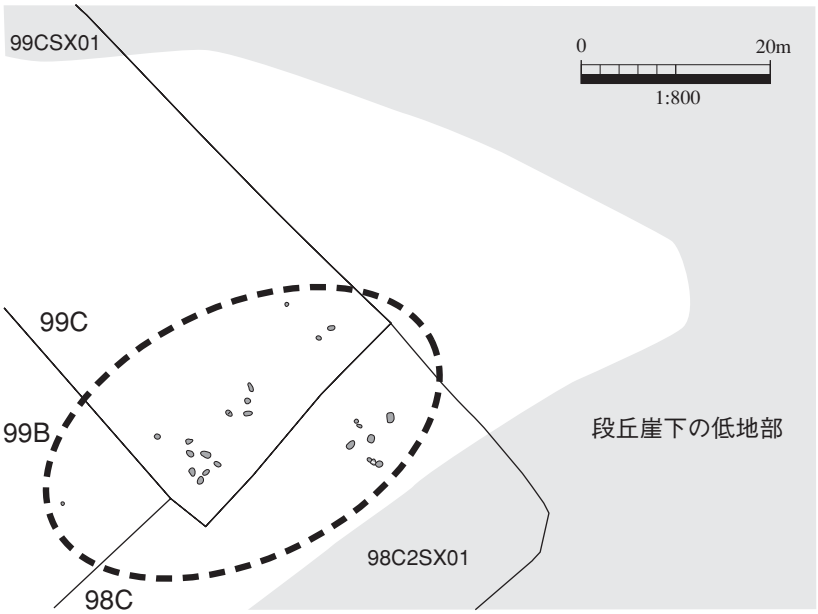
縄文時代各期の展開　本章では水入遺跡における縄文時代各期の集落・墓域に関わる事項を解説した。ここで遺跡周辺も含めた状況を概括してまとめと



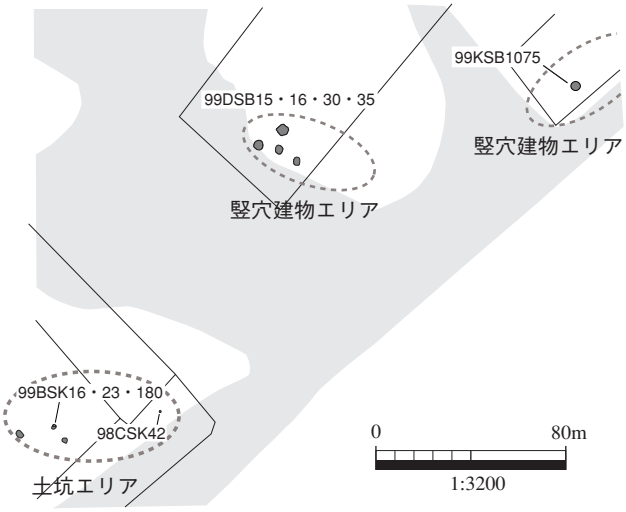
第 44 図　縄文時代後・晩期の出土土器実測図

したい。

確認されたのは（1）草創期～早期の焼土坑群、（2）縄文時代中期末～後期初頭の集落、（3）縄文時代末期の土器棺墓数基である。このうち（1）は先述したように遺跡中央の谷に面する段丘面上直径約40mを範囲に限られるが（第45図）、この群が集落域に対してどのような位置づけになるのかは不明である。同様な遺構は愛知県小牧市浜井場遺跡や三重県内で確認されており、検討も始まっている（小濱2004）。本例では構造不明・無遺物だった点が残念であるが、加速器による炭素年代測定の手法を用いて所属時期を割り出すことができた。このようにして類例を増やすことも有効であると思われる。



第45図　縄文時代草創期～早期の焼土坑分布図



第46図　縄文時代中期の集落構成図

（2）は、古代集落の立地とほぼ重複する。矢作川中流域での該期集落は豊田市・舟塚遺跡を初めとして多数確認されているが、東日本でみられるような多数の竪穴建物跡が重複する事例はない。水入遺跡の場合、段丘縁辺のしかも遺跡中央の谷に面した集落立地は、日常生活域としての水場との適度な距離から生じたものであったろう。おそらく谷底や矢作川寄りの低地部に作業空間を想定できようが、今回は発掘調査対象地外であった。ただ今回注目しておきたいのは、竪穴建物が立地するのは谷北側の東～南斜面（99D・K区）であり、谷南側の98C・99B区では土坑が確認されたにとどまる点である。これら土坑は砕片となった土器が炭化物とともに若干出たという以外に何ら情報がなく性格は不明とせざるをえない。居住域と谷で区分される一帯として、土坑墓という視点も含めて今後検討の対象としたい。

（3）は（2）よりさらに散漫な分布をみせる。立地としては台地縁辺という共通項をもつが、群構成とならない点が特徴であろう。当該期の遺物で特徴的な注口土器は大屋敷地区でも出土しており、集落も含めてどのような景観が復元されるかが今後の課題でもある。

第４章　弥生時代末期の遺構と遺物

第１節　概観

本章では、弥生時代末期に大屋敷地区で展開した集落の遺構・遺物について記述する。当該地区では大溝などの調査時に弥生時代に遡る遺物の混入が若干認められていたが、最終調査区（99B 区）に至ってようやくその遺構を確認することができた。竪穴建物からなる集落が99B 区北半部に展開する。当該期遺構の最大のポイントは古墳時代大溝開削に伴う土塁下から確認されたことで、土塁下層出土土器は大溝開削時期の判定にも関わる。

第２節　竪穴建物

（１）遺構各説

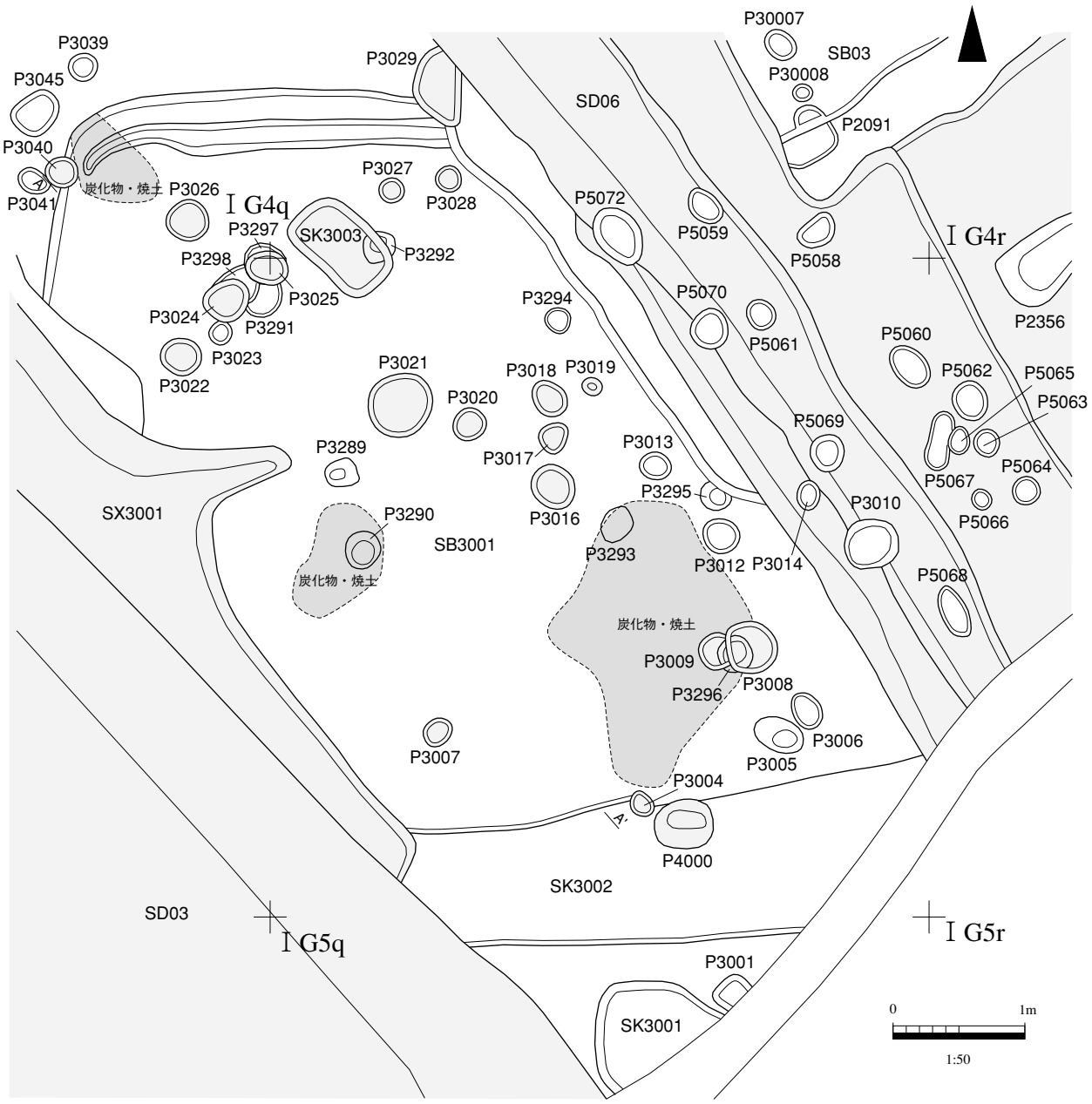
99BSB3001　戦国時代以降に構築された土塁（99BSX01）の下層にて確認された竪穴建物である。土塁に伴って掘削されたとみられる溝（SD03・SD06）などによって両側から大きく侵食されるかたちで残存していた。北西隅を中心とする北・西壁および南壁が残っており、これらから東西軸6.75m、南北軸5.65mの東西にやや長い長方形の平面形であることが推定された。西辺はほぼグリッド北を向いている。確認面からの深さは26cmである。北壁のみで周溝が伴うのが認められた。壁面の立ち上がりは80°である。ほぼ全面に貼床がなされたとみられる（４層）がその上面はあまり硬化していない。床面では炉などの顕著な施設は確認されていない。なお柱穴を特定するには至っていない。

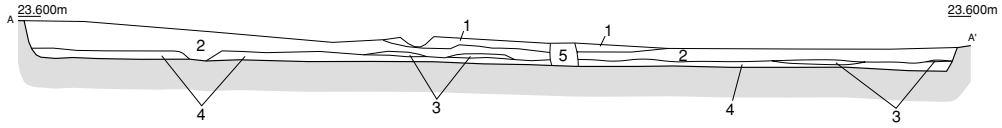
覆土は１・２層があるが、概ね黒褐色土からなる単一層である。床面全面を覆う４層は貼床と考えられるが、顕著な硬化面はなかった。ただ４層と覆土層の間に炭化材小片の集積する層（３層）が各所でみられることから、建物廃絶時に４層上面が床面として機能していた可能性は高い。

遺物は覆土層からの出土がほとんどで、貼床内（４層）からの出土はほとんどなかった。高杯（57・58・61）、壺（60 ～ 62）、台付甕（63）の小片が出土した。なお 59 は甕底としたが縄文土器の紋様部分の可能性もある。これらの時期は 57 を基準にすると川原上層Ⅲ式に該当すると考えられる。

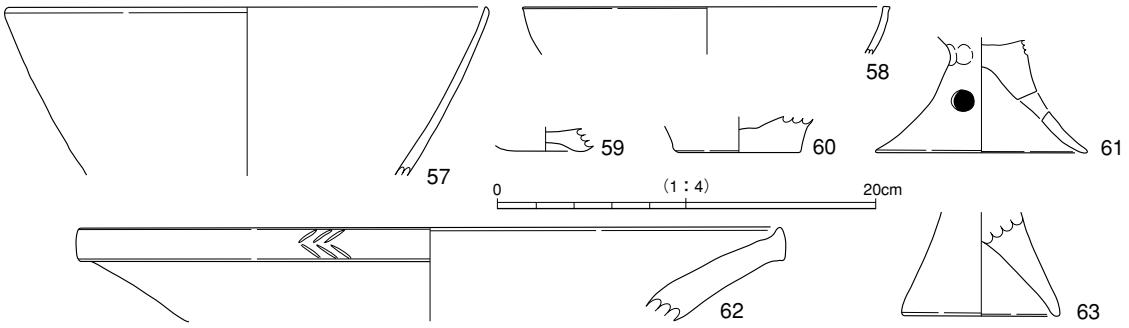
99BSB3012　大溝東側土塁（99BSX02）の下層で確認された。溝（99BSD06）に南半分を壊される。西辺はグリッド北から36°西へ振れる。平面形は隅丸正方形と推定され、北西辺3.0m、確認面からの深さ10cm である。周溝・柱穴は認められなかった。

覆土は１・２層があるがあまり大差なく、黒褐色土が少なく地山土が多いことから貼床の可能性も考





1 10YR3/1黒褐色粘質シルト。地山粒、礫なし。炭化物若干含む。焼土なし。
2 10YR3/1黒褐色粘質シルト。地山粒混じる。炭化物含む。焼土わずかに含む。
3 N2/ 黒色　炭化物。炭化材の小片多数占める。
4 10YR3/1黒褐色粘質シルト。地山ブロック（3～6cm大）多く、均一に混じる。貼り床のようであるが硬化面はない。炭化物、焼土なし。
5 7.5YR2/1黒色シルト。地山粒わずかに入る。



第 47 図　99BSB3001 平面・土層断面図と出土遺物実測図

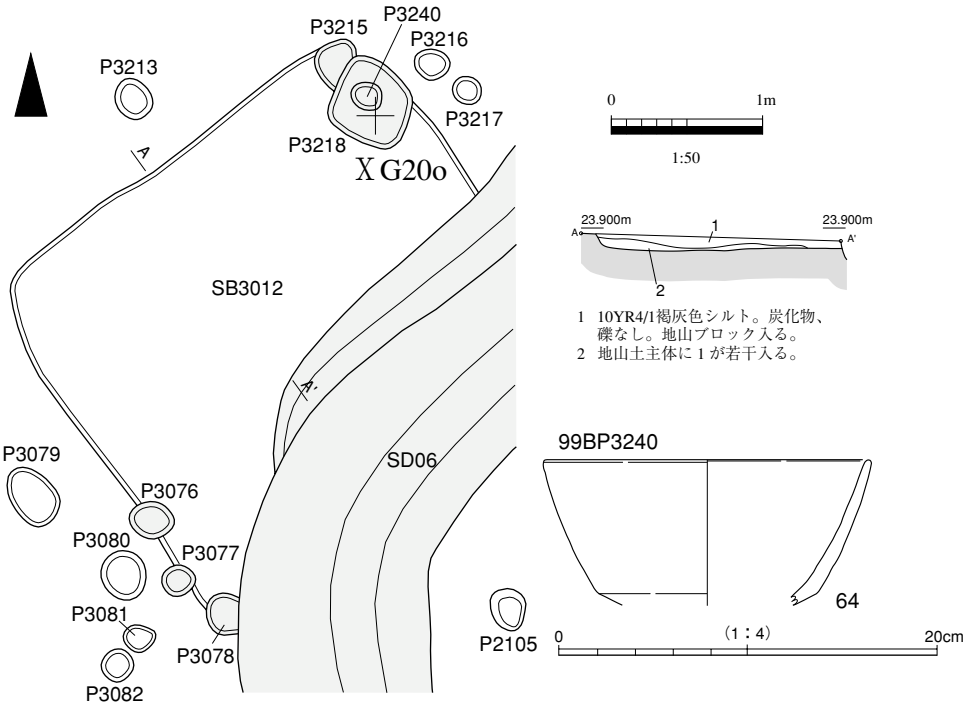
えられよう。覆土層からの出土遺物はなかった。ただSB3012の北隅にあるP3240からは有段高杯片（64）が出土した。

99BSB3013・3014

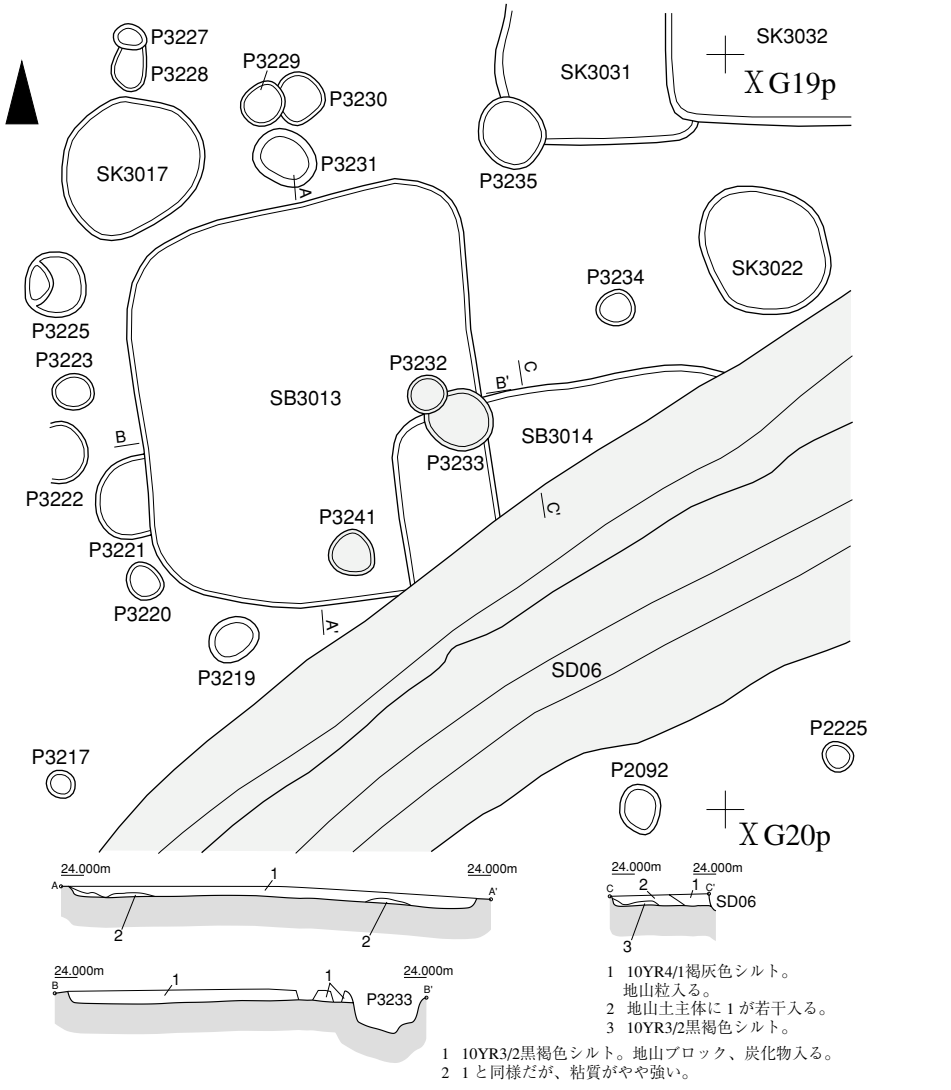
99BSB3012の北東側に位置する。確認状況はSB3012と同じで、SB3014は99BSD06にその大半が壊される。SB3013の西辺はグリッド北から西へ8°振れる。平面形はややくずれた隅丸正方形で、西辺長2.25m、確認面からの深さ7cmである。SB3014は北辺（2.2m）しか残存していないがSB3013とほぼ同じ建物の向きおよび規模が想定される。

覆土層はほぼ単一層で、一気に埋め戻されたともみられる。遺物の出土はなかった。

99BSB3015　調査区北壁近くで確認された。確認状況はSB3012と同じで、中世以降の整地によって大溝東土塁（99BSX02）が切り崩された際に、北西隅を中心とする北・西辺のみを残して大半が失われている。西辺はグリッド北から東へ12°振れる。平面形は角の明瞭な方形で、西辺長4.3m以上である。周溝はなく、床面で



第48図　99BSB3012平面・土層断面図と出土遺物実測図



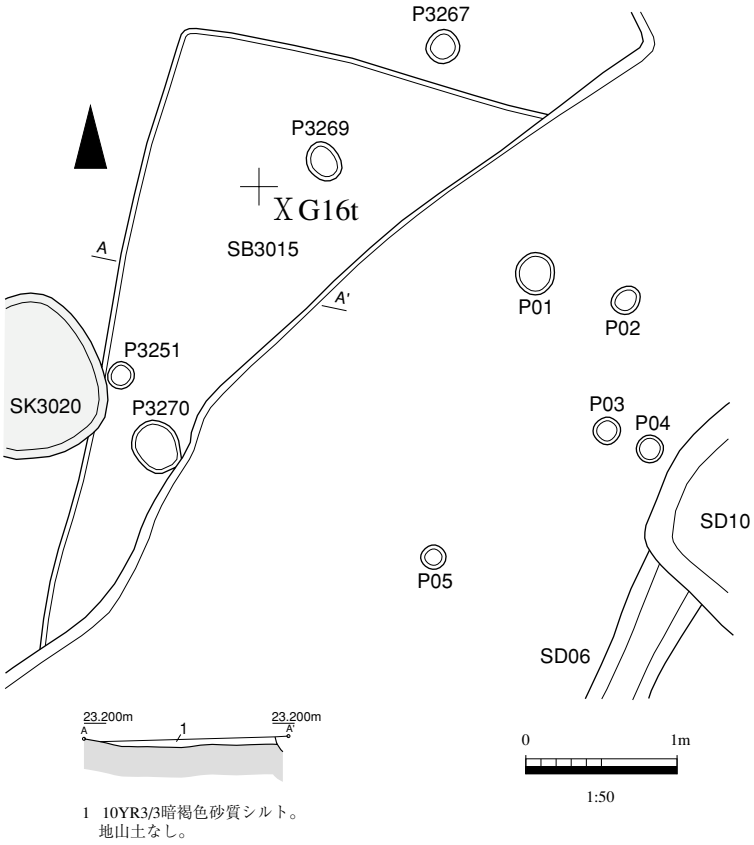
第49図　S99BB3013・3014平面・土層断面図

ピットがみえるがこの建物の柱穴かどうかは不明である。出土遺物はなかった、

99BSB3016　99BSB3015 西側に位置する。確認状況はSB3015と同じで、こちらは拡張後の大溝（99BSD01）によって大半が失われており、おそらくその開削時にも一部削られていた可能性が高い。その平面形の角が明瞭な点はSB3015と類似する。SB3016は東辺（2.0m以上）が中心に残っており、それはグリッド北から25°東へ振れる。覆土層はSB3015と似ており、出土遺物はなかった。

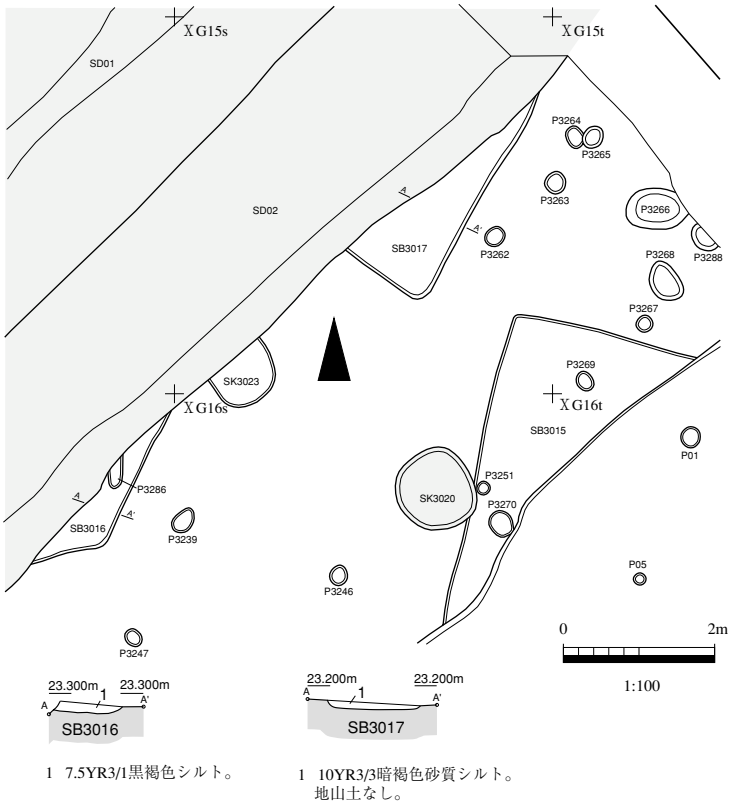
99BSB3017　確認状況は99BSB3012と同じで、拡幅後の大溝（99BSD01）によってその大半が失われる。残った東辺（3.2m以上）はグリッド北から東へ40°振れる。平面形は隅丸方形と推定される。確認面からの深さ10cmである。一連の土塁下層で確認された竪穴建物のうち比較的明瞭な周溝が認められた。覆土層（１層）は黒褐色土であるが、周溝には黒褐色土は混入しない。出土遺物はなかった。

99BSK3031・3032・3033　一辺が２～３ｍの方形土坑であるが、平らな底面であるため竪穴建物の可能性も考えられる。いずれもほぼグリッド北に添う。深さは5cm前後である。出土遺物はなかった。



1　10YR3/3暗褐色砂質シルト。
　地山土なし。

第 50 図　99BSB3015 平面・土層断面図



1　7.5YR3/1黒褐色シルト。

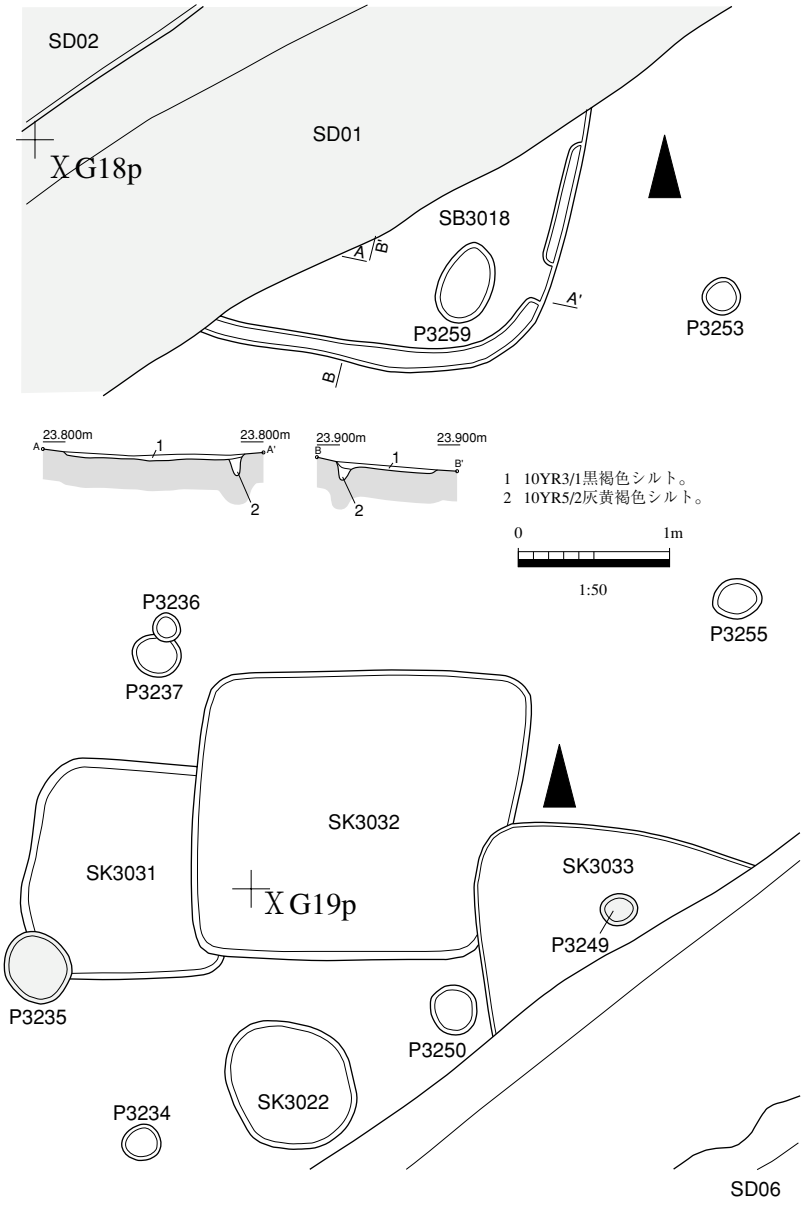
1　10YR3/3暗褐色砂質シルト。
　地山土なし。

第 51 図　99BSB3018 ～ 3020 平面・土層断面図(1:100)

第３節　その他出土土器

（１）古墳時代大溝東土塁下層出土土器

古墳時代中期に開削された大溝両脇の土塁は開削時の表土上に構築されている。したがってその下層は大溝開削以前の包含層ということになる。この包含層については99A区調査時には99A黒色層と呼び、99B区調査時には東土塁（99BSX02）２層と呼称した。その厚さは約20cmあり、色調は黒褐色である。特徴は炭化物が少しみられた点と旧表土であったためかしまりがなかった点である。



第52図　99BSB3018・SK3031～3033平面・土層断面図

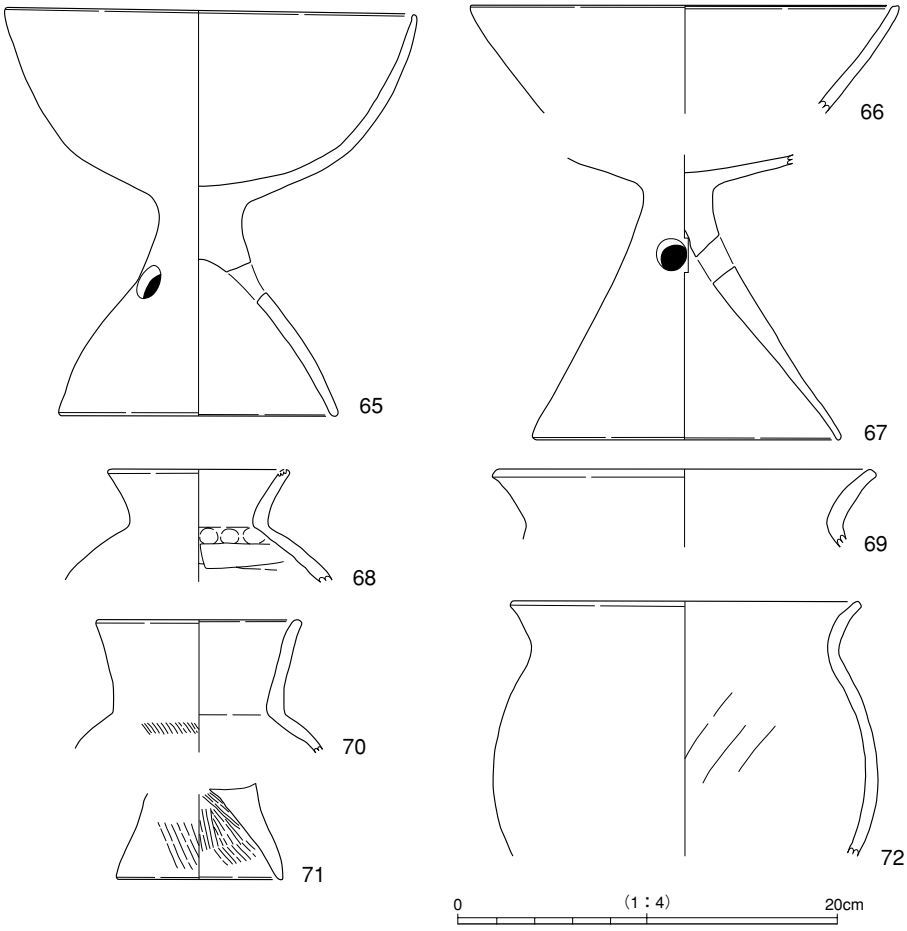
99A黒色層　土塁が明瞭に遺っていた調査区中央部から北側で確認できた。ほとんどは無遺物層であったが、調査区北壁近くのグリッド（IG7f）で土器が集中的に出土した。しかも包含層上面、土塁の黄褐色粘質土層との境であった。ほとんど破片と化していたが、一部の高杯（65）や甕（72）などは比較的まとまっていた。この地点に建物などの遺構があった可能性も考えられたが確認できなかった。ただ、土塁下層の中では比較的多くの浅いピットや土坑が見つかっている。

高杯（65）は大きな椀型杯部と内湾する脚部が特徴である。67は杯部が深くなるとみられる有段高杯であるが脚部は外反する。65を考慮すると、川原上層Ⅲ式２段階（赤塚2001）でも短脚化が進む後半期であろう。

99BSX02　99B区での大溝（SD01）東土塁およびその下層出土土器である。SX02は、調査区南半部ではかなり削平されており下の包含層の状況についても不明であったが、調査区北半部では比較的良好な状況であり、出土土器も多かった。したがって99A黒色層との連続性については遺構からは言及できない。

土器の出土状況は99A黒色層と似ており、包含層下部からはあまり出土しない。器種は高杯・壺・甕

である。高杯は杯部の深い有段高杯（73 ～ 75、77 ～ 82）がある。76は土塁上部を覆う中世までの包含層から出土しており古墳時代であろう。壺（83 ～ 92）では広口壺（83 ～ 88）と加飾壺（91・92）がある。甕は口縁が外反するもの（93など）、内湾するもの（98・102）、さらにやや有段傾向のあるもの（107）がある他、直線的で先細りする傾向のもの（97・99・101）がみられる。器面はハケ目調整が中心であろう。器種構成やその形態から、川原上層Ⅲ式２段階を中心として一部が１段階に遡ると考えられる。



第 53 図　99A 黒色層出土土器実測図

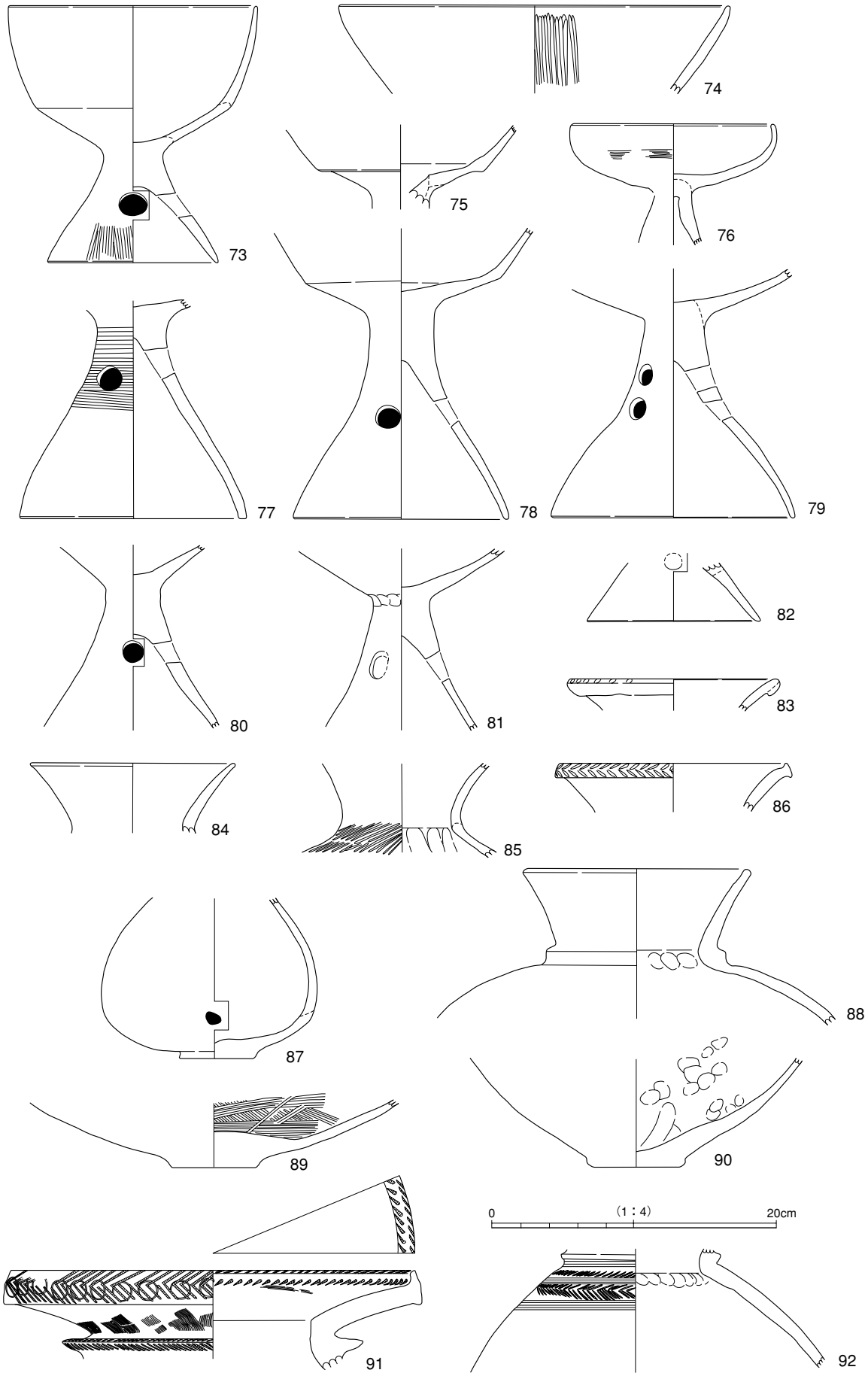
（２）大溝出土土器

古墳時代中期の土器に混じって出土したものがある。大溝が当該期の集落跡を横切ったことによるとみられる。同様に段丘崖や竪穴建物でもごくわずか出土した。99ASD01・98C2SX01・99BSB01出土品についてはそれぞれの項で提示するが、99BSD01だけは特に集成した。ただし大溝最下層出土品については大溝開削時期にもかかわるので別途図を参照されたい。

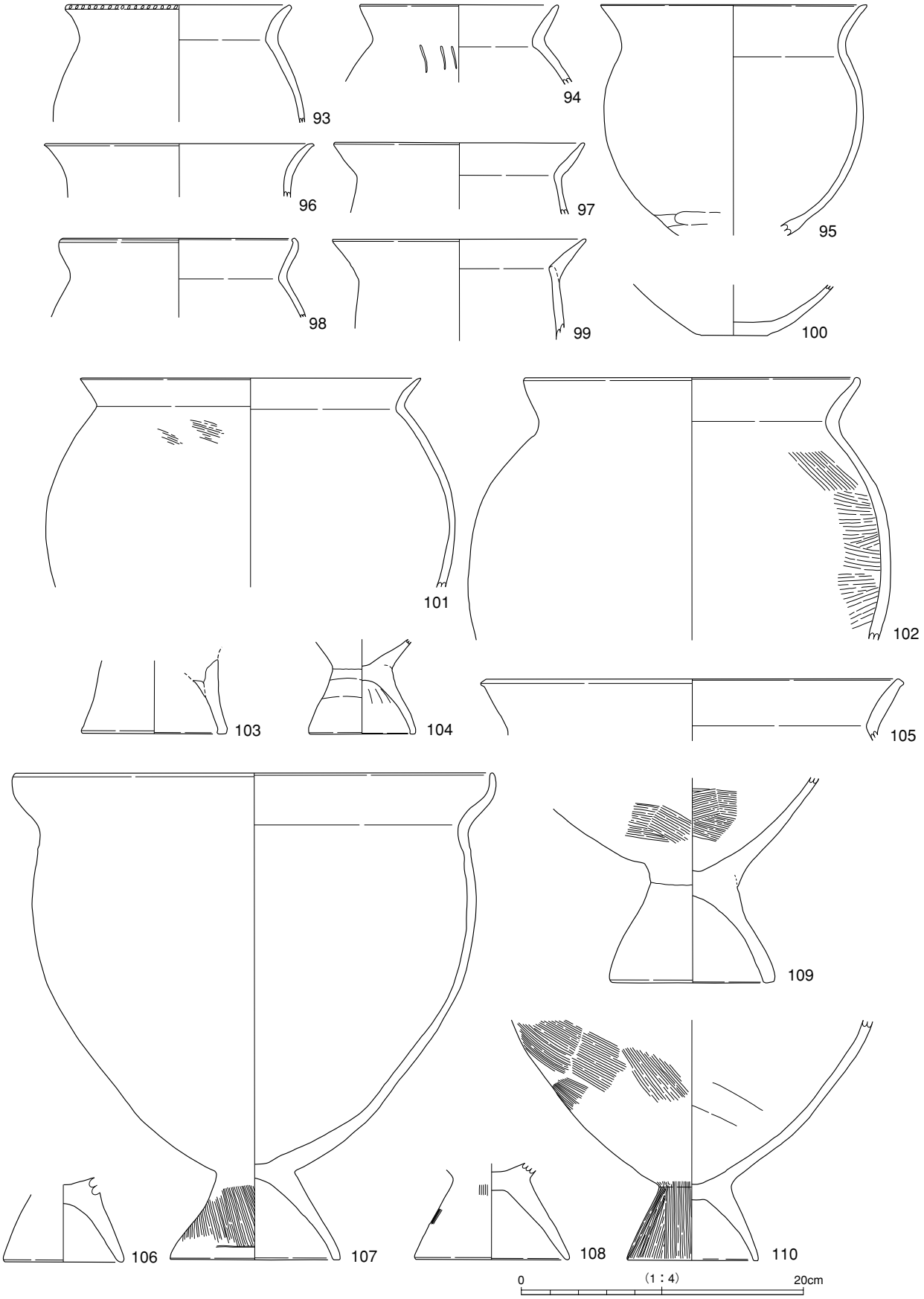
99BSD01・SX8002　112は有段傾向のある壺で外面縦磨き。113は広口壺で口縁が波状となる。122は大溝に西側から合流する近世以降の溝（99BSX8002）で出土した。凹線による加飾壺である。

99BSX06　99BSD01東土塁（99BSX02）に対して掘られた古代の土坑で、当該期の遺物が混入する。高杯（117・118）と甕（119 ～ 121）がある。121は比較的残存状況が良かった。

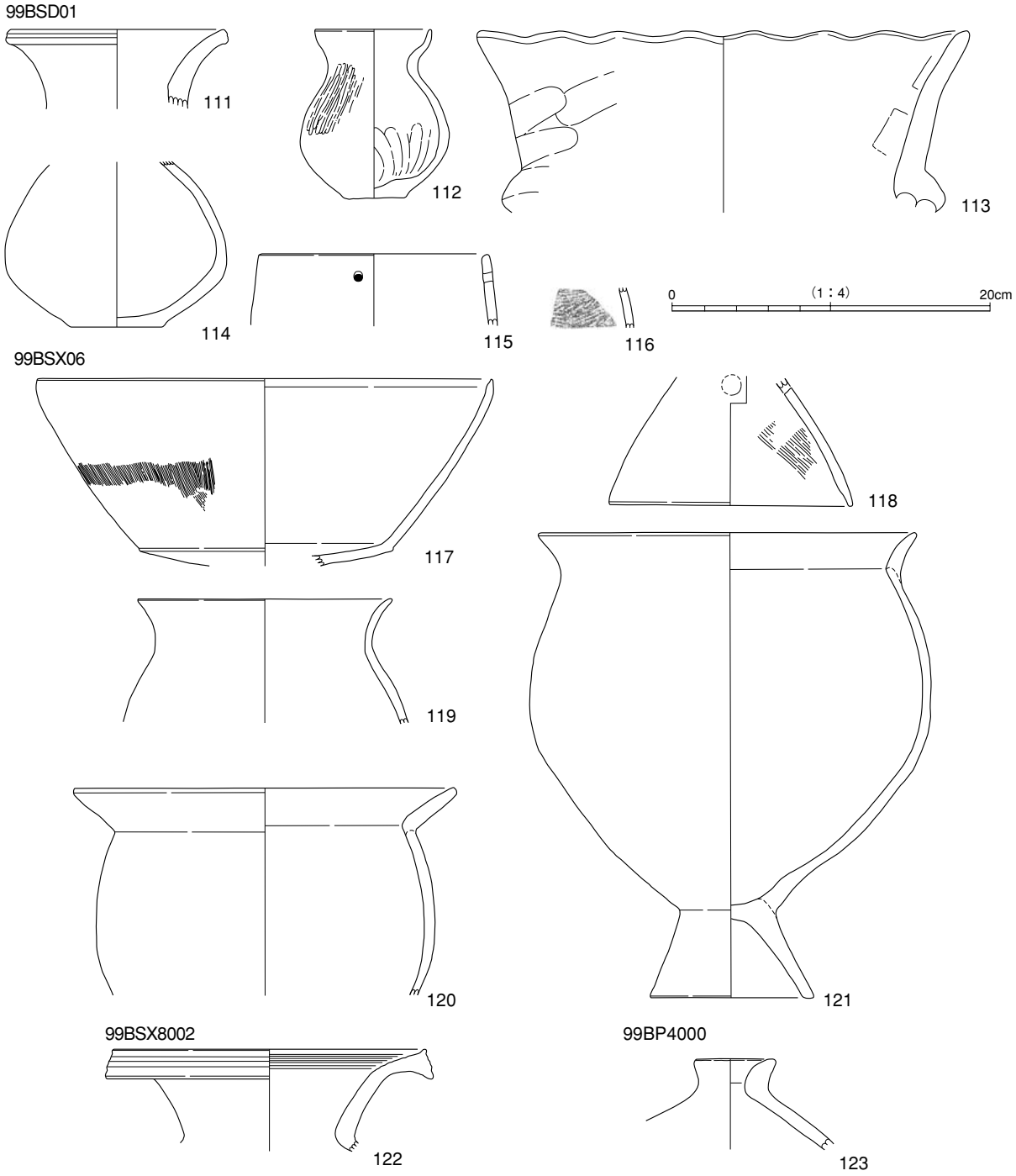
99BP4000　99BSB3001南側で出土した。内外面指ナデ調整。台付甕のような形状であるが底部中央に焼成前の穿孔がある。砂粒の多い胎土は当該期土器に最も類似する。



第 54 図　99BSX02 出土土器実測図（1）



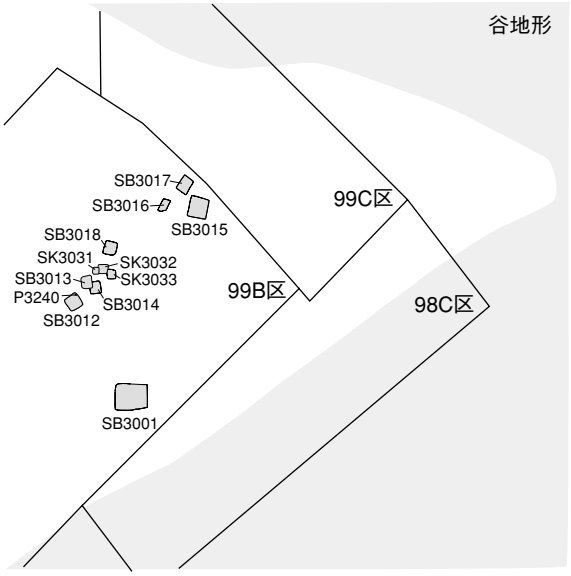
第 55 図　99A 黒色層出土土器実測図（２）



第 56 図　99BSD01・SX06・SX8002・P4000 出土土器実測図

第４節　小結

遺構・遺物の分布　本章で提示した弥生時代末期の集落は、古墳時代中期以降の集落などの分布に比べて著しい偏在性を示している。縄文時代となる遺構・遺物の分布状況とさほど変わらない印象がある。このことから、当該期集落の建設にあたっても、後代ほど水入遺跡の環境を面的に開墾することがなかったとも考えられる。土器の分布も同様でしかも時間的に川原上層Ⅲ式という一時期にほぼ限定できそうであることから、以上の見解と符合する。



第 57 図　弥生時代末期の竪穴建物配置図

しかしながら集落は、大屋敷地区の最高所～南方向への緩傾斜に立地しており、高さ日当たりともに良好な場所を選んでいる。また、縄文時代中期末～後期の集落が中央の谷地形を中心に水場を取り込むような展開をしていたのに対し、あえてそのエリアを避けたような格好になっている。加えて各建物が、段丘崖線の方向とは関係なくほぼ南北方向を主軸に据えている点も見逃せない。このあたりに集落を建設した人々の意図が見え隠れしているようである。

建物遺構の残存状況から　第２節でも述べたように、当該期の竪穴建物の遺構はほぼ全て古墳時代大溝（98B2・99A・99B・99CSD01）や戦国時代大溝（99BSD03）の開削に伴ってできた土塁の下層で確認されている。特に古墳時代大溝東側土塁下層では土塁構築直前の表土が残存し、その下部にて竪穴建物が確認された。その確認標高はそこからはずれた場所で確認された古墳時代中期の竪穴建物99BSB01のそれよりも約 20cm 高い。遺構確認面上の遺物包含層の状況から戦国時代以降の整地が大屋敷地区ほぼ全域で想定されることから、土塁にかからない箇所の削平によってかなりの遺構が失われた可能性が考えられる。99BSB3001 は深さ 30cm とやや深めだがそれ以外は５～10cm 程度で浅い。このことが遺構の滅失に関係しているといえよう。したがって 99BSB01 周辺にも集落が広がっていた可能性は高い。

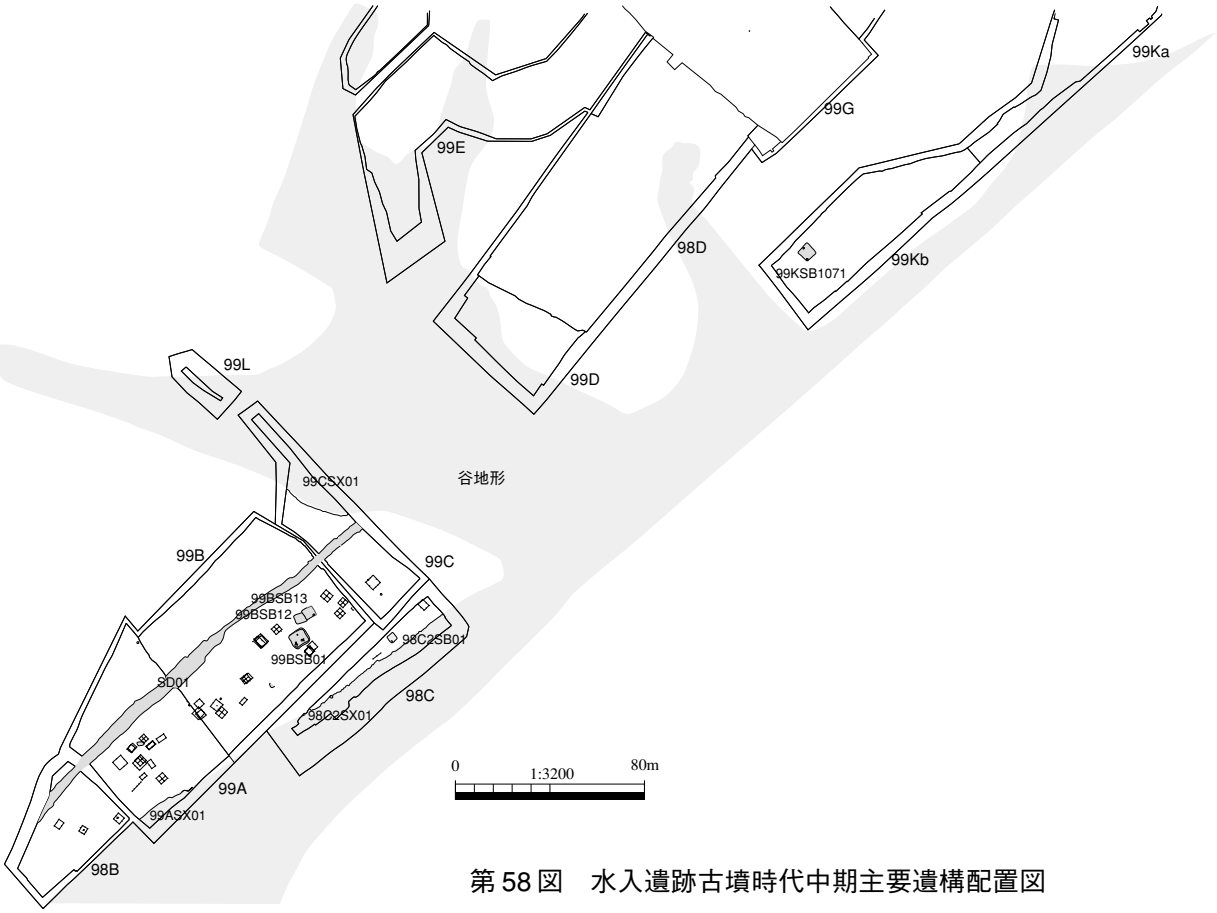
99A黒色層土器群の性格　ところが以上の集落から南西55mの地点でも当該期の土器群が認められる地点がある。99A黒色層土器群は細片化したものがほとんどであったが接合でほぼ完形に復元できるものもある。この土器群も土塁下層という条件で残存したものと思われるが、明確にこれに伴う遺構が確認できず土器群の器種構成に偏りがないことから、その性格を推測するに至っていない。この地点にも集落の存在を考えるべきなのであろうか。

第５章　古墳時代中期の遺構と遺物

第１節 概観

本章では古墳時代中期、概ね５～６世紀代の遺構と遺物について解説する。ただ該当する遺構数に比べて膨大な量のしかもさまざまな材質（土・木・石）の遺物が出土しているので、他章とは構成を変え、遺構と遺物（遺物は材質別）に分けて遺物は後節（第５節以降）で提示する。

さて、古墳時代中期の遺構は、大屋敷地区と下糟目地区のごく一部に展開する。したがって遺構数は古代以降のそれと比べて少ないが、各遺構の規模の点で見ると群を抜いて巨大な遺構が含まれており、かつそこへ廃棄された遺物の量は定量的なデータはとれてないが実に多い。まず大屋敷地区では、矢作川に面した南北方向にのびる段丘崖とそれに平行する大溝がある。そしてそれらに挟まれた空間に竪穴建物と掘立柱建物が展開し、大溝以西では若干の遺物が出土するものの遺構はない。また下糟目地区で確定的なものは段丘崖近くに竪穴建物１棟があるのみである（99K区）。したがって当該期遺構の主体は大屋敷地区の段丘崖～大溝間に限定される。



第 58 図　水入遺跡古墳時代中期主要遺構配置図

第２節　大溝と段丘崖

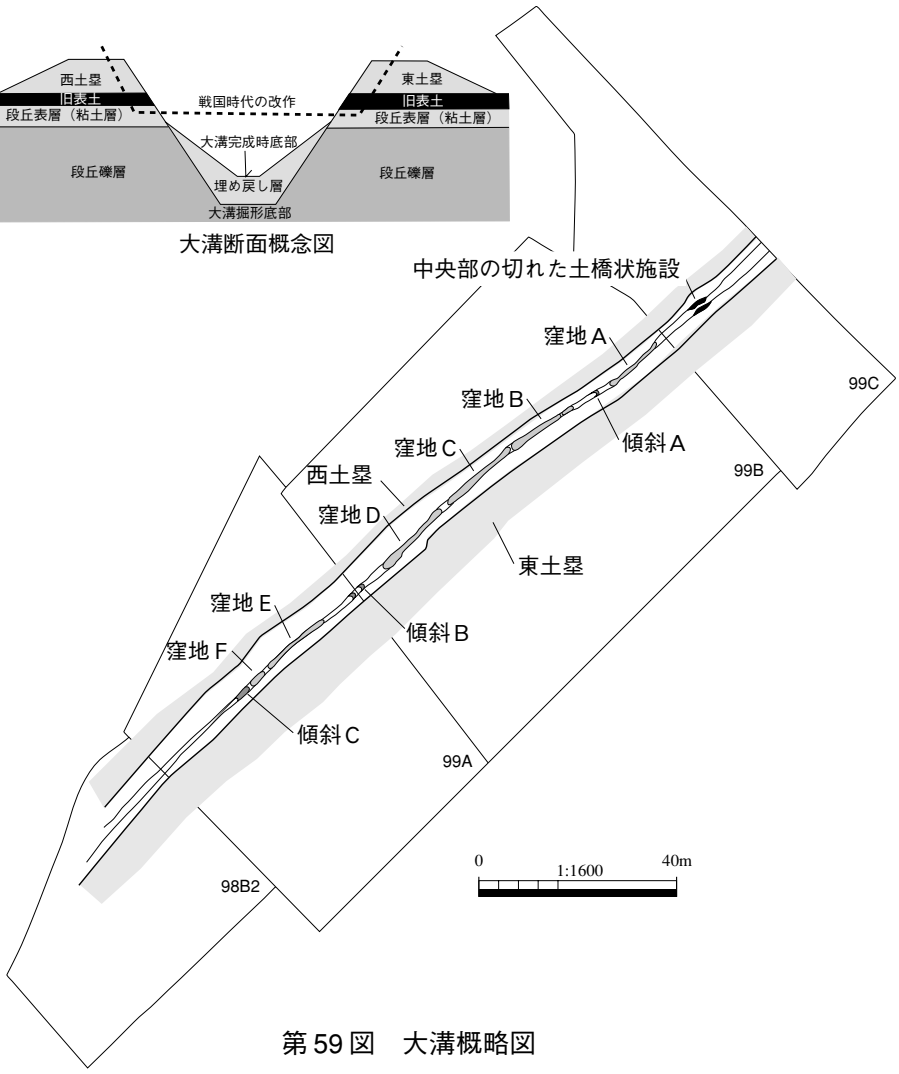
（１）大溝

大溝の規模　矢作川およびそれに面する段丘崖とほぼ平行に北東から南西方向へのびる、段丘面を掘削して築造された直線的な溝である。確認されたのは98B2・99A・99B・99C区で、その全長は196mになる。その両端は調査区外となるが、地形との関連でみると北端は遺跡中央の谷地形に抜け、南端は、南西から西方向へと向きを変えた段丘崖を抜けて沖積地帯へ至ると想定される。この想定によれば大溝の全長は約220m以上の長さとなる。

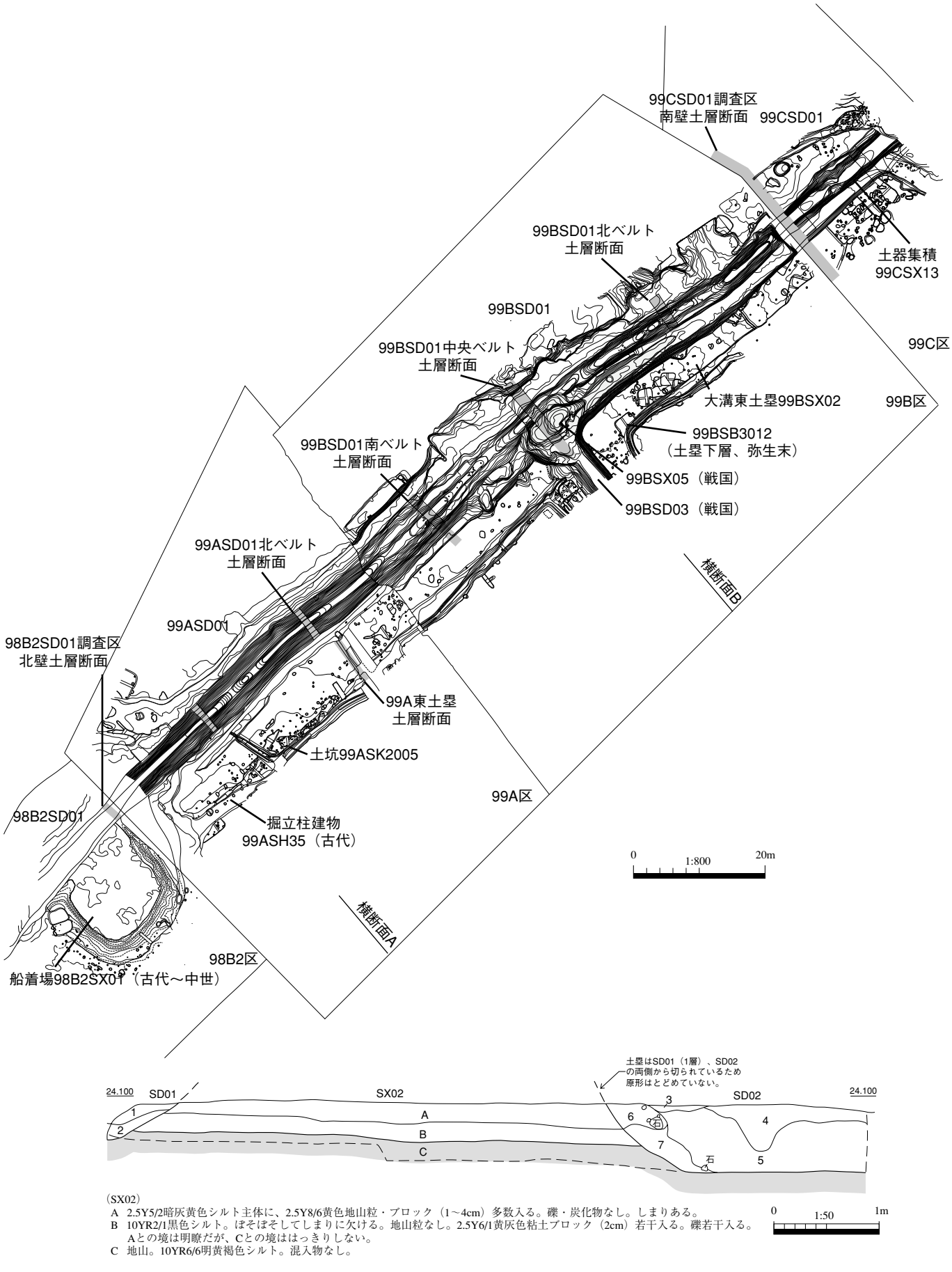
大溝は当初98B2区で確認された。このときは確認面で幅3.6m深さ2.4mの断面Ｖ字形で、須恵器が出土する上層と木質（木製品を含む）が多く土師器のみが出土する下層に区分できた。しかし99C区の調査以降、当初確認された大溝（以下、古墳時代大溝）の東西両側に平行する土塁があること、さらに古墳時代大溝の上に戦国時代に掘り返された幅10.3mの断面逆台形の大溝（以下、戦国時代大溝）が重複していることが判明した。つまり戦国時代大溝が古墳時代大溝の上部を壊しており、古墳時代大溝の形状や規模は正確にはわからないことになる。したがって本章では特に断らない限り、大溝の深さは残存土塁の頂部からとする。幅については戦国時代大溝底面で確認された幅以上とするが、東西両土塁が残存している場合はその間の幅以下ということになる。

大溝断面概念図

大溝が掘削された大屋敷地区の段丘面は、中世以降の広範囲にわたる削平によって調査時点ではかなり平坦化していた。しかし遡って古墳時代以前に限ってみると、99B区、その中でも竪穴建物99BSB01がある地点を最高地点として南へ緩い傾斜となり、反対に99BSB01から北方は遺跡中央の谷地形に向かう傾斜となる。当然ながら全体に矢作川



第59図　大溝概略図



（SX02）
A　2.5Y5/2暗灰黄色シルト主体に、2.5Y8/6黄色地山粒・ブロック（1～4cm）多数入る。礫・炭化物なし。しまりある。
B　10YR2/1黒色シルト。ぼそぼそしてしまりに欠ける。地山粒なし。2.5Y6/1黄灰色粘土ブロック（2cm）若干入る。礫若干入る。
　Aとの境は明瞭だが、Cとの境ははっきりしない。
C　地山。10YR6/6明黄褐色シルト。混入物なし。

第 60 図　大溝・土塁・船着場（古代）遺構全体図

方向へも傾斜する。大溝はその最高地点付近で細くくびれ幅約2.8mとなり緩く「く」の字に屈曲する。またその深さも最も浅くなる（約3.5m）。したがってそこから南西へ144m北東方向へ52mのそれぞれ緩い傾斜となる。

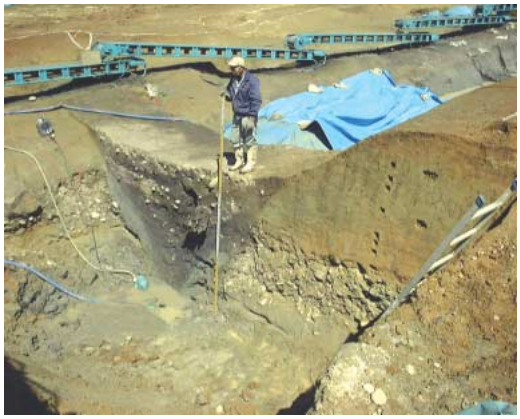


写真　99BSD01南ベルト土層断面

大溝の掘形　ところで上記の大溝の深さは段丘礫層を掘り込んだ底部までの深さを示している。しかしこれは大溝が機能していた時点の底部ではない。後述するように、掘った後に下半部を粘土で埋め戻し成形したうえで水路として完成させているからである。すなわち掘形底部と完成時底部の2つが存在する。なお掘形底部での標高は各土層断面でほぼ一定（標高約20.3m）している。掘形断面はV字形で弥生時代の環濠に近い。

段丘表層の粘土層は乾燥すると硬く、逆に水分を含むと強い粘質となり掘削しにくい。沖積地の砂層に比べて格段に重労働であったと推測される。そして粘土層下は粗粒砂層と礫層がほぼ交互に続く。礫層は礫の大小で分層でき最大径約20cmの礫が主体になる層もある。このような礫層を掘削する場合、掘るというよりも礫を取り外すようにして掘り下げたとも考えられる。これら礫層掘削で生じた大量の礫は上層の粘質土とは区分されている。というのは、大溝両側の土塁構築土（後述）には全くと言っていいほど礫が混じらないからである。したがって、段丘表層の掘削→土塁構築→段丘礫層掘削という工程が考えられる。しかし区分された大量の礫がその後どのように処理されたのかは不明である。古墳時代中期以降の大溝堆積層には円礫が混入しており、大溝完成以降もその近辺に円礫が多く所在したことを示している。ただそれがどのようなかたちであったかは想像がつかない。

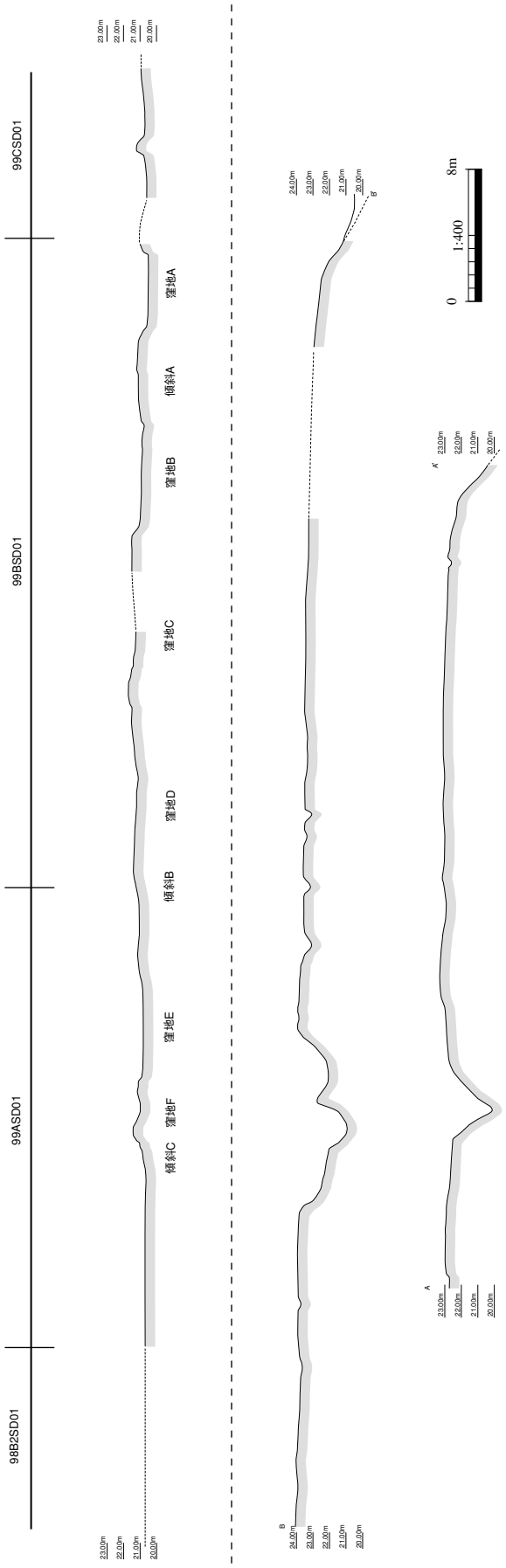
発掘調査時もそうであったように、礫層には地下水脈が通っているので水位が上昇すれば自ずと北西高位側からの出水が激しくなる。出水の強弱は季節にもよるが、いずれにせよ矢作川側の礫層露出面から南東低位方向へと水は引いていくので礫層掘削時に大量の水が溜まることはなかったと考えられる。

東西の土塁　粘質土は大溝両脇に土塁状に積み上げられた。その下には大溝開削直前となる黒色の旧表土が残存し、そこから弥生時代末の土器が出土した。土塁は中世以降の区画溝などでだいぶ削られていたが、東土塁で底面幅4.3m高さ33cm以上あったと考えられる（第60図）。それに対して西土塁は残存部分が少なかったが、底面幅は4.4m高さ50cm以上の規模と考えられる。

大溝の完成　上記の工程で掘り上がった掘形下部、礫層露出面に対して粘質土を東西両肩から流し込む（大溝第9層）。この粘質土は土塁構築土と同じく礫や土器片の混入は少なく、ここでも掘削時に粘質土と礫が的確に区分されていたことを示している。第9層については発掘調査で部分的に掘削したのみであるが、99A・B・C区のいずれの地点においても同様の傾向は看取される。また下方では黒色土と混じって暗灰色の濁った色調をしているが、上方あるいは側壁では混じり気が少なく、水分による還元作用で、地山本来の色調である赤褐色または黄褐色から明緑色と変化した色調となっている。これは遺構確認面の状態と同一であり、大溝の調査開始当初はこの粘質土の検出をもって大溝の掘形と判断してしまったほど地山との違和感が全くなかった。

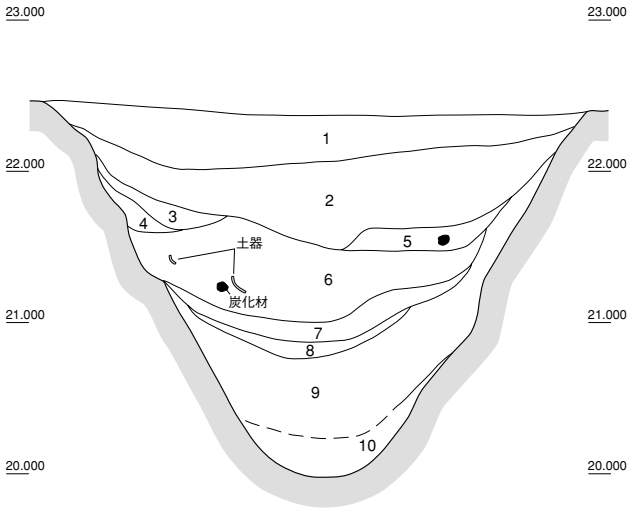
第9層は最大で厚さ150cmであり、地山面からの深さでみると掘形のおよそ1/2を埋め戻したことになる。ただし側壁に関しては、上方へいくにつれて急速に層厚は薄くなり、段丘表層と礫層の境付近では数cmほどになる。このような状態にするには粘質土を単に流し込むという作業だけでは不可能で、建物の壁土を塗布するように付加していったものと推測される。しかし粘質土塗布を直接示す痕跡は見出せていない。粘質土の流し込み作業の手順をみると、ほとんどの土層観察箇所にて両肩から一気に流し込んだ様相がみてとれる。しかし99BSD01南ベルトのように両壁面をまずカバーするように流し込みその後中央部にできた溝状の窪みに流し込む例もある。

連続する桝状の底部　粘質土を流し込み左右の礫層露出面をカバーすることで大溝はほぼ完成に至った。しかしそれは全体を通じて均一な形状ではなく、所々で土橋状の土手によって底部を仕切ったり、段差をもたせたりしたものであった。第61図左は大溝第9層上面、すなわち大溝完成時の底面ラインでその縦断面を示したものである。これをみればわかるように、大溝の底面は標高約20.5～21.5mの範囲で凹凸しているのである。このうち凸になる箇所は土橋状の高まりとなって周囲より約50cm高くなる。これでみると99B区中央部は旧地形同様に最高所となっていて南北両方向に下る。次いで99A区中央部にある土橋状の高まりが目立つ。一方99B区から北側となる99C区にも同様の高まりがあるが、99B～99A区間が高低差1.0mに対し99B～99C区間では高低差0.7mになる点が注目される。これら以外にも小さな土橋状高まりや、99B区南端～99A区間には北が高く南に低い段差がある。これら土橋状高まりの間は当然窪地になるため水が溜まる。このような窪地は6箇所認められ、北から窪地A～Fとした。



第61図　大溝断面図（左：縦断面、中：横断面A、右：横断面B、地山面にて）

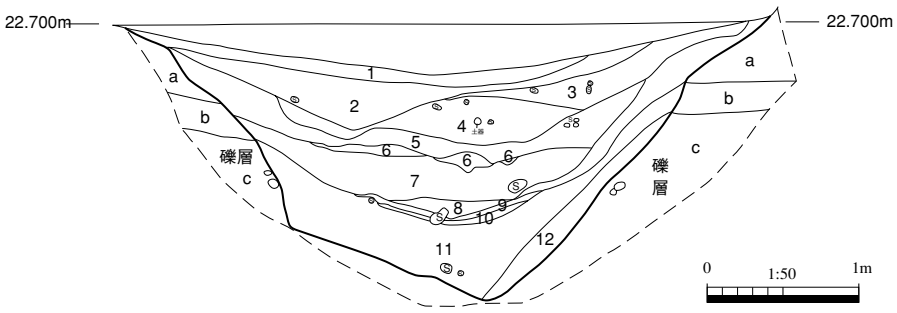
99B区の最高所に位置するのが窪地Cで、その東北端に顕著な土橋状土手を挟んで高低差約60cmの窪地Bに至る。窪地B東北端付近には高低差10cm程度のやや小さな土手がありこれで仕切られた北側に長さ4.0mの小さな窪地がある。ここではこの小窪地も窪地Bに含める。そして窪地B東北端から0.8mの箇所に北高南低の傾斜Aがある。見方によってはこの傾斜から南側で窪地Bとすることもできる。そして傾斜A北側にやや幅広（上幅2.0m）の土手があり窪地Aに至る。この窪地は長さ4.3mで底面がほぼ水平となっているのが特徴である。99C区に入ると調査区中央に下幅3.8m高低差90cmの中央部で途切れた土橋状土手がある。この土手は大溝両側壁から土饅頭状に粘質土が盛りつけられ中央部を幅約60cmの溝状に開けた状態で検出された。なお、この土手に何らかの構築物を設置した痕



1 10YR3/1黒褐色粘質土
2 2.5YR6/1黄灰色粗粒砂（ラミナ状）に径5cm～10cm程度の円礫が南肩部に多くみられる
3 10YR5/1褐灰色粘質土と粗粒砂（2層と同じ）を多く含む
4 10YR6/1褐灰色粘土
5 10YR5/1灰褐色粘質土（炭化材の影響で炭化物を多く含む）
6 10YR4/2灰黄褐色シルト（植物遺体を大量に含む）
7 10YR5/1褐灰色粘質土（この層位から出土遺物の量が減少、ほとんどなし）
8 2.5Y7/1灰白色細粒砂と2.5Y6/1黄灰色細粒砂のラミナ状堆積
9 10YR6/1褐灰色粘土（粗粒砂を多く含む）
10 2.5Y5/1黄灰色粗粒砂（径5cm前後の円礫を多く含む）

湧水、地山の崩落により掘削不能（但、溝底のレベルは重機により掘削、確認）

第62図　大溝（98B2SD01）土層断面図

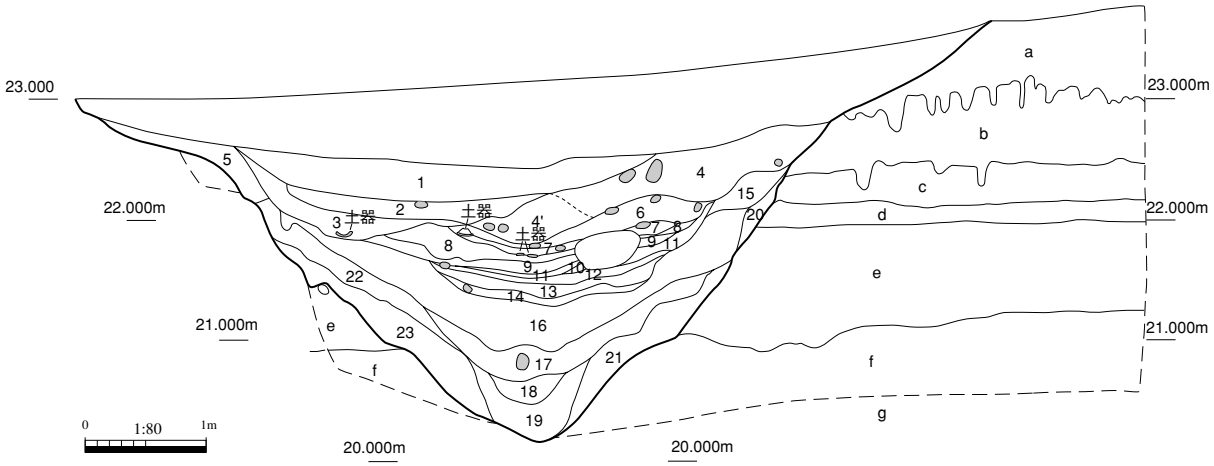


土層説明（大溝）
1 10YR3/1黒褐色粘質シルト、ラミナなし、10cm大の円礫入る、粘性とくに強い
2 10YR3/1黒シルト 炭化物を中心とした黒色物から成る、ラミナ形成→流水あり
3 2.5Y4/1黄灰シルト主体に細粒砂混じる、ラミナなし、5cm大円礫若干入る
4 2.5Y4/1黄灰細粒～極細粒砂混合、ラミナはみえない、5～10cm大円礫多く入る
5 5BG4/1暗青灰シルトに粗粒砂若干入る、ラミナなし、東側より5cm大円礫流れ込む、炭化物多く含む
6 5の下部で極粗粒砂が混入、レンズ状堆積、円礫なし、植物質・炭化物入る
7 7.5YR2/2暗オリーブ灰シルト粗粒砂若干入る他、11が溶け出している様が判別できる
7' 基本は7で20cm以下円礫多く含む、東側からの流れ込みか
8 5Y4/1灰シルト砂質強いラミナ形成せず混入物なし
9 5GY7/1明オリーブ灰と5GY3/1暗オリーブ灰シルト～細粒砂のラミナ、植物質なし、→流水あり
10 N2/黒 炭化した植物質層、ラミナなし粗粒砂、小円礫若干入る
11 N5/灰粘質シルト、底付近で20cm以下円礫入る、5GY7/1 明オリーブ灰地山粒(2cm)多く見られる
とくに東反部で炭化物多く入る傾向ラミナなし
12 5GY7/1明オリーブ灰粘質シルト～粘土、粒状の集積でラミナなし、混入物なし

土層構成
第2層　1
第3層　2
第4層　3,4
第5層　5
第6層　6,7,8
第7層　9,10
第8層　11
第9層　12

土層説明（段丘）
a 段丘粘土層。11、12のベースとなる。この上方に段丘形成土がのるが、これとの境は凹凸はげしい。氷期の堆積か？
b 段丘砂層。
c 段丘礫層。下方に砂層ある。

第63図　大溝（99ASD01）土層断面図

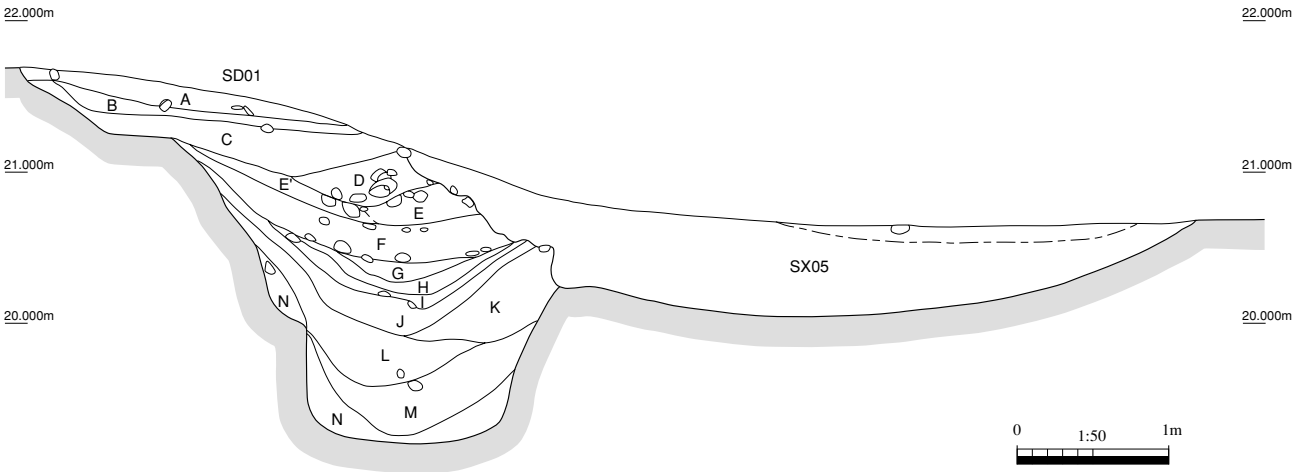


土層説明（大溝）
1 10YR3/1オリーブ黒粘質シルト10cm以下の円礫入る、下半部は0.5cm以下小礫、粗粒砂入る
2 10YR2/1黒粘質シルト3cm以下円礫若干入る、不明瞭ながらラミナあるもよう、炭化物多い
3 10Y4/1灰砂質シルト主体に粗粒砂～1cm以下の円礫入る、地山粒若干入る
4 5Y5/2灰オリーブ砂質シルト細粒～粗粒砂多く入る、2cm以下円礫入る、炭化物あり、
(4')には7.5Y4/1灰粘質シルトに粗粒砂入る
5 5Y5/3灰オリーブ粘質シルト1cm大地山粒多く入る、円礫なし、粗粒砂若干入る、地山主体に流れ込み
6 10Y4/1灰粘質シルト主体、粗粒砂多く入る、下方に粗粒砂多い傾向、10cm以下円礫入る、炭化物粒・土器片多い
7 10G5/1緑灰粘質シルト、粗粒砂若干入る、礫なし、炭化物若干
8 2.5Y7/2灰黄粗粒～中粒砂、西よりレンズ状堆積、その他の部分で5Y4/1砂質シルト、礫なし
9 5GY3/1暗オリーブ灰粘質シルト主体、細～粗粒砂若干入る、植物質入る、円礫わずかにあり
10 N2/ 黒 炭化すすんだ植物質多く集積
11 2.5GY5/1オリーブ灰砂質シルト粗粒砂～5cm円礫多く入る、東側からの流れ込み
12 2.5GY4/1暗オリーブ灰砂質シルト、礫・炭化物入らず、ラミナなし
13 2.5GY7/1明オリーブ灰と2.5GY3/1暗オリーブ灰細粒砂～シルトのラミナ、炭化物なし、流水は北から南へ
14 N2/ 黒 炭化すすんだ植物質の層、下部で5cm以下の円礫入る
15 7.5Y5/2灰オリーブ粘質シルト、粗粒砂入る、礫なし
16 10BG4/1暗青灰粘質シルト主体に粗粒砂10cm以下の円礫入る、粗粒砂は多い、ラミナなし、炭化物粒入る
17 10BG5/1青灰粘土～粘質シルト砂質少ない、2cm以下円礫1点、炭化物粒多い
18 7.5GY5/1緑灰粘土～砂質シルト、粗粒砂、炭化物粒入る
19 7.5GY5/1緑灰粘質シルト、砂質少ない、炭化物は東側で多い傾向
20 2.5GY5/1オリーブ灰粘質シルト、地山粒若干みえる
21 5G7/1明緑灰粘土、粒・ブロック状はみえない、礫なし
22 5G7/1明緑灰粘土＆暗青灰粘土が粒・ブロック状に混入、礫なし
23 5G7/1明緑灰粘土、粒・ブロック状はみえない、礫なし

土層説明（段丘）
a 10YR6/4にぶい黄褐色シルト＋砂層。
b 5GY /1明オリーブ灰色粘土層。
c 10YR6/6明黄褐色中粒砂層。
d 10YR6/6明黄褐色粗粒砂層。
e 礫層。
f 10YR7/1灰白色粗粒砂層。
g 礫層。

（土層構成）
第2層 1
第3層 2
第4層 3,4,5
第 5層 6
第6層 7,8,9,10,11
第7層 12,13
第8層 14
第9層 15,16,17,18,19

第 64 図　大溝（99BSD01 南ベルト）土層断面図



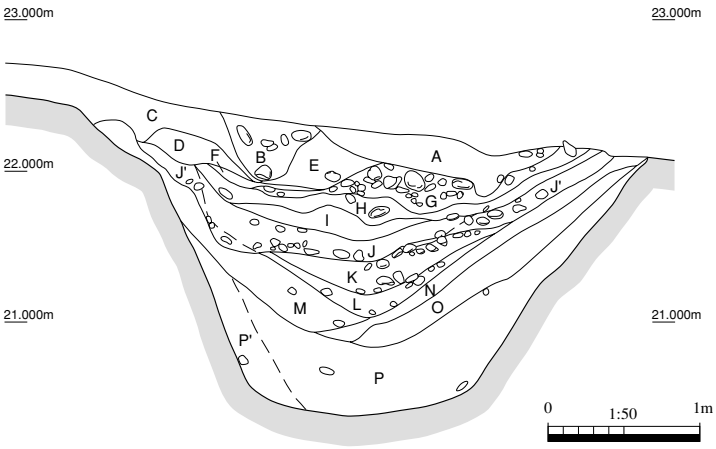
（土層観察）
A 5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト。小礫・粗粒砂多く、10cm以下円礫若干含む
B 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト。砂質ほとんどなく、小円礫若干入る。炭化物みえる
C 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト。Bに比してやや砂質あり。小円礫若干入る。炭化物あり
D 5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト。粗粒砂、炭化物粒（0.5cm）、25cm以下円礫入る。地山土なし
E N3/ 暗灰色砂質シルト。植物質あり。炭化物入る。砂質少ない。円礫（10cm）入る。地山土なし
E' Eで10cm以下円礫集中する
F 5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト。植物質多い。10cm以下円礫若干入る。地山土なし
G 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂質シルト。礫・地山土・炭化物など混入なし。ラミナみえず
H 2.5GY4/1暗オリーブ灰色と2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルトのラミナ。礫・地山土なし
I N2/ 黒色。泥炭化すすんだ植物質の集積。5cm円礫若干あり
J N4/ 灰色粘土。地山粒（1cm）入る。炭化物粒多い。小礫若干
K N5/ 灰色粘土。J に比してやや粗粒砂多く、地山粒少ない。小円礫若干。植物質若干あり
L N5/ 灰色粘土。礫わずかにあり。炭化物入る。地山粒は不明瞭ながらあるもよう
M N4/ 灰色粘土。炭化物多く入る。J ～Lに比して礫やや多い。粗粒砂多い
N 5G7/1明緑灰色粘土。地山粘土主体で粒・ブロック状にはみえないが炭化物入っているのがみえる。礫ほとんどなし

（土層構成）
第2層 A
第3層 B
第4層 C
第5層 D・E?
第6層 E?・F
第7層 G・H
第8層 I
第9層 J・K・L・M

第 65 図　大溝（99BSD01 中央ベルト）土層断面図

跡は認められなかった。

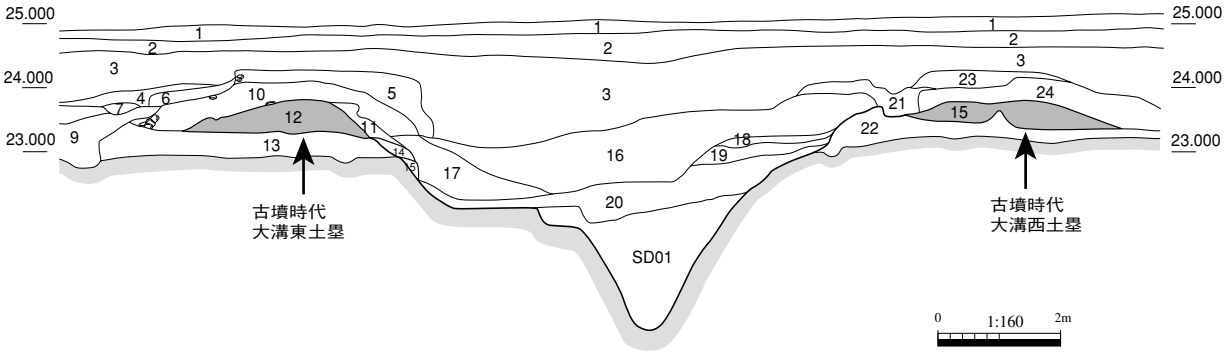
さて窪地Cから南側に転じると、その南西端に上幅1.1mの土手があり、長さ9.6mの窪地Dに至る。窪地D北半分は全体に北高南低の傾斜で、99BSD01南ベルト付近に長さ3.3mの水平面がある。窪地D南西端は高低差約10cmとわずかながら上幅0.3mの土手があってその南側は高低差40cmの傾斜面となっている。これを傾斜Bとする。そして99ASD01北ベルト付近にて再び傾斜面となるがこれが窪地Eの北東端である。窪地Eは長さ5.6mで水平な底面である。その南西端は高低差約20cm、上幅0.6mの土手である。窪地Eに接して窪地Fがある。窪地Fは長さ1.2mと小規模で、特徴としては底面の標高が窪地E



（土層観察）
A 7.5Y4/1灰色砂質シルト。礫・地山粒なし
B Aベースに10～15cm大円礫多数入る
C 7.5Y6/3オリーブ黄色に黄褐色地山粒（1cm）多く入る。
5～10cm円礫若干入る
D 5Y3/1オリーブ黒色シルト。1cm大小礫多数。大円礫はない
E 7.5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト。細粒砂・円礫若干入る。
炭化物粒みえる
F 2.5GY3/1オリーブ黒色砂質シルト。粗粒砂入る。粘性強い。円礫なし
G 7.5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト主体。3～20cm円礫がぎっしり詰まる
H 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質シルトに10GY7/1明緑灰色地山粒～
ブロック（3cm）入る。円礫若干、炭化物粒多い
I N3/ 暗灰色砂質シルト。粘性強い。粗粒砂入る。
西側では木質・炭化物あり
J 2.5Y3/1黒褐色砂質シルト。やや砂質強め。円礫入る。植物質多い。
J' は礫やや多い
K 2.5GY8/1灰白色極細粒砂～シルトのラミナ。J・Lから円礫が入り
こむような状況。流水は北から南へ
L N2/ 黒色。炭化した植物質が泥状に集積。円礫若干入る
M N4/ 灰色粘土主体に粗粒砂若干入る。炭化物粒みえる。円礫若干入る
N N4/ 灰色粘土に粗粒砂入る。地山粒（1～2cm）入る。東側からの流れこみ。
O 5G7/1明緑灰色地山粘土粒主体。若干N4/ 灰色粘土粒入る
P N5/ 灰色粘土主体に粗粒砂入る。M～Oに比して円礫・小礫多い。
P' は明緑灰色粘土割合高い

（土層構成）
第2層 A・B?
第3層 該当なし
第4層 B?・C・D・E・F・G・H?
第5層 H?・I
第6層 J
第7層 K
第8層 L
第9層 M・N・O・P

第66図　大溝（99BSD01北ベルト）土層断面図



1 2.5YR3/2黒褐シルト粗粒砂、小礫あり、1960年以降の耕作土
2 1と2.5YR4/6小礫（花崗岩）が混合、1耕作土の休土
3 5B5/1青灰シルトと粗粒砂のラミナ、
2回以上の洪水と水田復旧の繰り返しの痕である
4 7.5YR8/3浅黄橙 細粒砂
5 7.5YR4/2灰褐シルト主体に砂混じる、円礫若干有り。
土塁の上に盛られている
6 5同様 流出したものか、遺物有り（N04～6）
7 7.5YR3/1黒褐シルト 溝に相当
8 5BG4/1暗青灰 粘質シルト、植物質有りSD05に該当
9 2.5GY3/1暗オリーブ灰 シルト主体に円礫多く混入
10 5Y3/2オリーブ黒 シルト細粒砂に円礫混じる
11 5Y4/2灰オリーブ シルト＋粗粒砂
12 2.5Y6/6明黄褐 地山粒＋ブロック主体 黒色土若干
（古墳時代大溝SD01開削時の土塁）
13 2.5YR2/1黒シルト 土塁構築前期までの包含属
14 12同様だが礫入る
15 13同様だが礫入る
16 5BG4/1暗青灰 粘質シルト
17 16同様だが地山粒や礫有り
18 14同様
19 15同様
20 2.5Y4/2暗灰黄 粘質シルト主体SD01 1層に相当
21 7同様
22 13同様
23 5同様
24 10同様
25 12同様

第67図　大溝（99CSD01調査区南壁）土層断面図

より約 10cm 高いことが挙げられる。そして窪地 F 南西端に高低差 40cm 上幅 0.5m の顕著な土手がありその土手の南西側は長さ 2.0m 高低差約 60cm の傾斜 C となる。ここから下流へはほぼ水平な底面が続くが 98B2 区については湧水が激しく詳細は把握できていない。

以上のように大溝の底面は、枡が連続して配置されたような構造になっており、大溝の水位が下がってもこれら枡に水が溜まる仕組みになっていた。大溝完成時の水位・水量ははっきりとしないが、窪地 C から南方下流では枡のオーヴァーフロー分が次の枡へと流下する様子が想定できよう。このような構造をわざわざ造った目的は後で考察する。

大溝の土層　大溝掘形内の堆積土層を大きく第 1 ～第 9 層に区分した。このうち 9 層は上述したように大溝底部を完成させるための人為的な埋め戻し層である。残る第 1 ～第 8 層は完成後～近世の堆積層で、時期を概略を示すと次のようになる。第 1 層は戦国時代～江戸時代中期、第 2 層は鎌倉・室町時代、第 3 層は平安時代、第 4 層は奈良時代、第 5 層は古墳時代中期後半～後期、第 6 ～ 8 層は古墳時代中期前半である。各層の規模は地点によってさまざまであるがほぼ大溝全体で確認される。本書では基本的に以上の層名で記述する。本節では古墳時代にかかる第 5 ～ 8 層について解説する。

第 7・8 層　第 9 層直上に位置し、大溝完成後の流水している間に堆積した層である。第 8 層は黒色で植物質細片が主体である。その上の第 7 層は明灰色系のシルト～細粒砂層で、黒色植物質細片とのラミナ構造となっている。砂層は流水によって形成され、その縞構造の観察から 99A・B 区では北→南方向へのゆっくりとした流水が想定される。砂・植物質細片以外には円礫が若干みられる程度である。当該層から出土した遺物はごく少量で、これら状況から流水は比較的清浄な水であったと推測されよう。ただ注目されるのは第 7 層上面から第 6 層下部にかけて、祭祀用具である石製模造品が多数出土している点である。このことは流水中に土器を含む祭祀具を投下する行為があったことを想定せしめる。

なお 99BSD01 中央ベルトから南側では、第 7・8 層の層厚は合わせて最大 5 cm と薄いが、最高所より北側の 99BSD01 北ベルトでは特に第 7 層が厚く、合わせて最大 30cm となる。当該箇所は窪地 B と傾斜 A との間で、窪地が深い分砂の堆積が多くなったものと思われる。

第 6 層　黒褐色シルトを主体とする層である。ラミナ構造はみられないが、水が澱んだ状態であった可能性は残される。植物質を多く含み、自然状態の樹木や木製品の遺存が顕著である。また水辺の植物であるジュズの種子が壺の中に入り込んだ事例も多々みられる。これは第5層より上層では粘質が強く、結果的に下層をパックするような状態になったためで、この時期だけ木製品の廃棄がなされたという証左にはならない。しかし一方で自然木の大量出土は、段丘崖下の堆積層（98C2SX01）でも後述するが、意図的・集中的な廃棄を想定する必要があるだろう。その目的は伐採後不要になった樹木各部分を廃棄することにあったと考えられ、それは樹木の枝部分に限らず根元近くの大きなパーツも分別なく廃棄されていることからもいえる。この結果水流は閉ざされ、当初段階の大溝機能は大きく低下したと考えられる。しかし当該層からの土器出土量は第 5 層ほど顕著ではなく、土器の廃棄場所として積極的に選ばれたようではなさそうである。

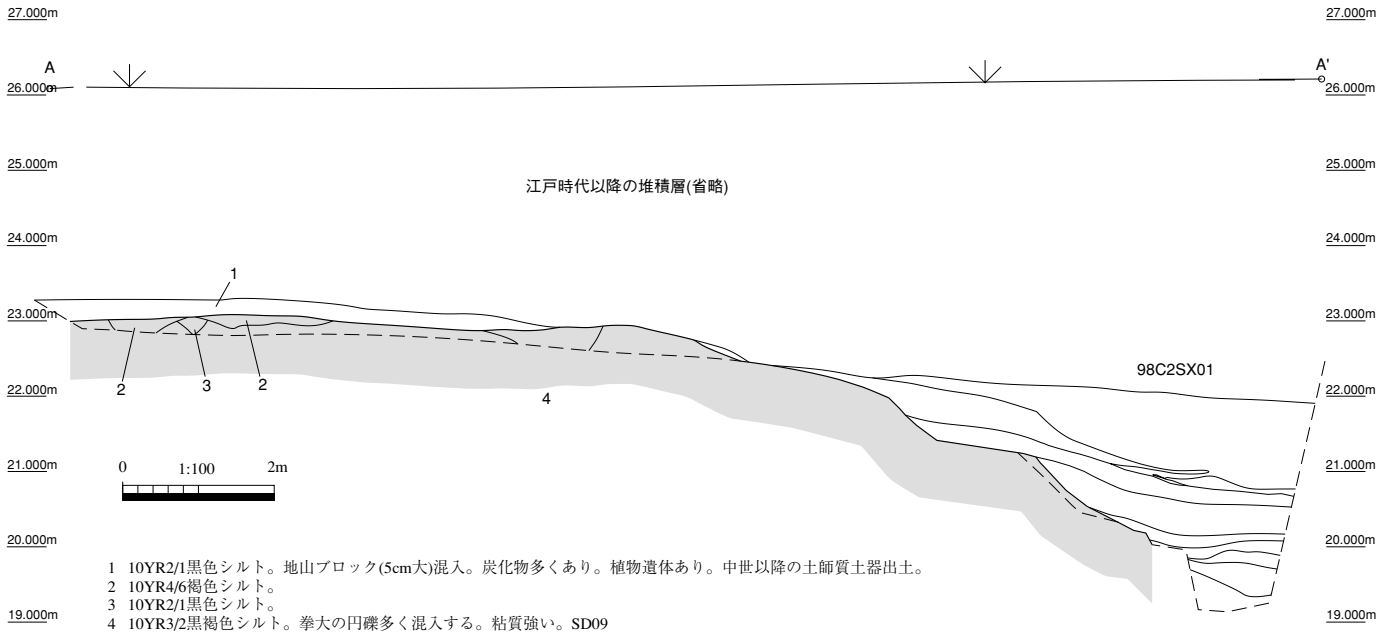
注目すべき点が 2 つある。ひとつは第 7 層以下との関係である。特に 99BSD01 北ベルト J 層で明瞭に確認されたのだが、掘り返しをおこなった痕跡が認められる。掘り返しはそれまで緩い「U」字形であっ

た底部を底幅約1.5～2.0mの平坦面へと変えるものであった。第7層以下の大溝が機能していた段階と第6層との間には形状の改変を伴う断絶があったことがうかがえる。2つめは、矢作川の洪水によってもたらされたと考えられる粗粒砂のレンズ状堆積である。99ASD01北ベルトと99BSD01南ベルトで確認されており、いずれも第6層上部あるいは第5層との境界付近でみられる。つまり木質の堆積の後に洪水が大溝まで流れ込んだのである。この洪水については上流の遺跡である豊田市梅坪遺跡の環濠を完全に埋没させた洪水と時期が近く、一連のものであった可能性も考えられる。

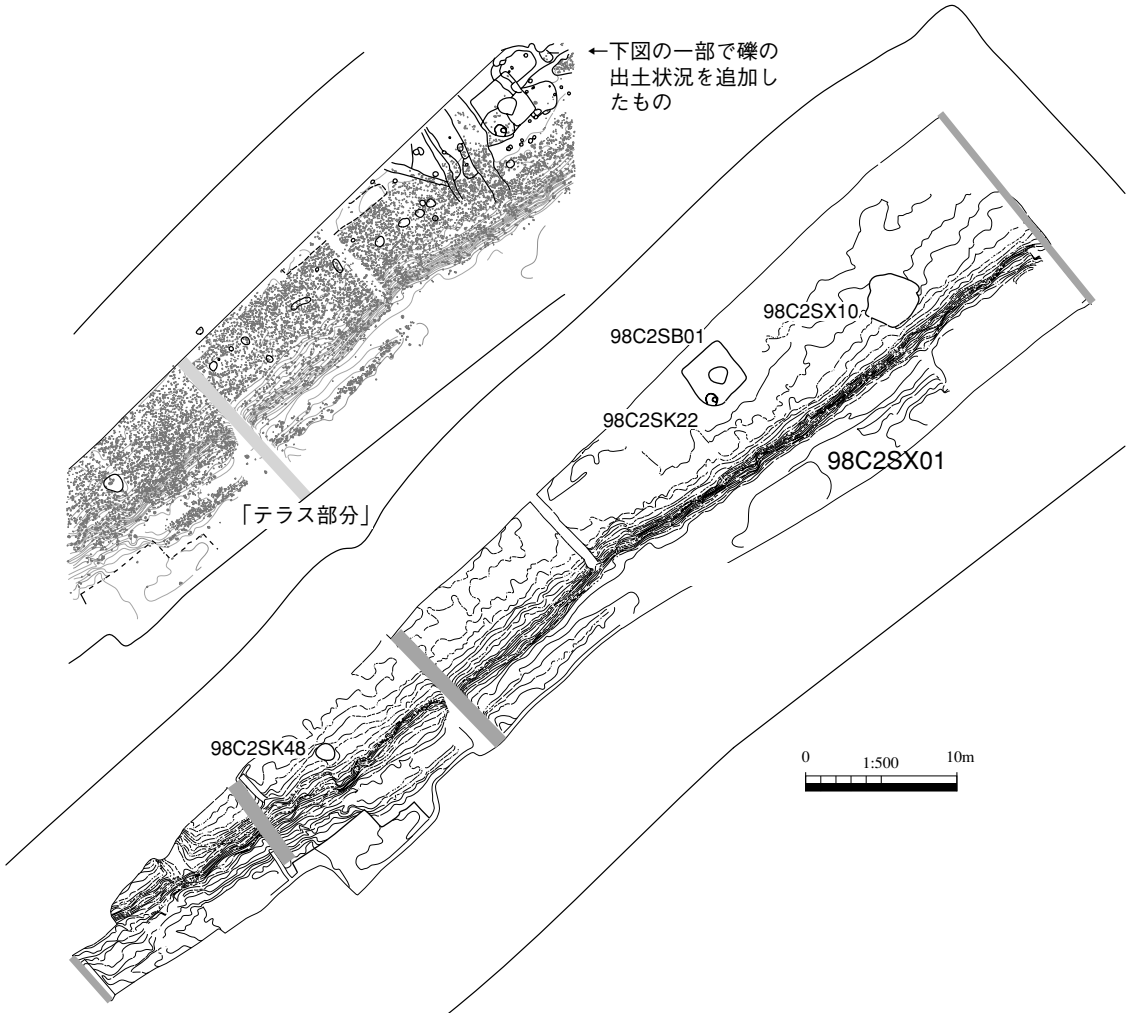
第5層　暗灰色で粘質の強いシルトが主体の層である。木質の混入は少ないが炭化物は多くみられる。この層においても流水痕跡であるラミナ構造は認められない。また掘り返しの可能性は残るが大きな形状変更はなかったと考えられる。この層の特徴は土器（須恵器・土師器）の大量廃棄で、ほとんどが大溝東側からなされたものである。土層堆積状況もこれを反映して東側壁面を中心に厚くなる。このような状況から推測すると、当該土層形成時には滞水状態にあったとは考えにくく、半ば陸地化した状態にあったと考えられる。第5層の形成は猿投窯産須恵器窯式で東山111号窯式～東山61号窯式を中心とする時期になされたが、窯式表示のできない6世紀後半の須恵器も含まれており、およそ5～6世紀代の堆積層とみてよいであろう。

（2）段丘崖

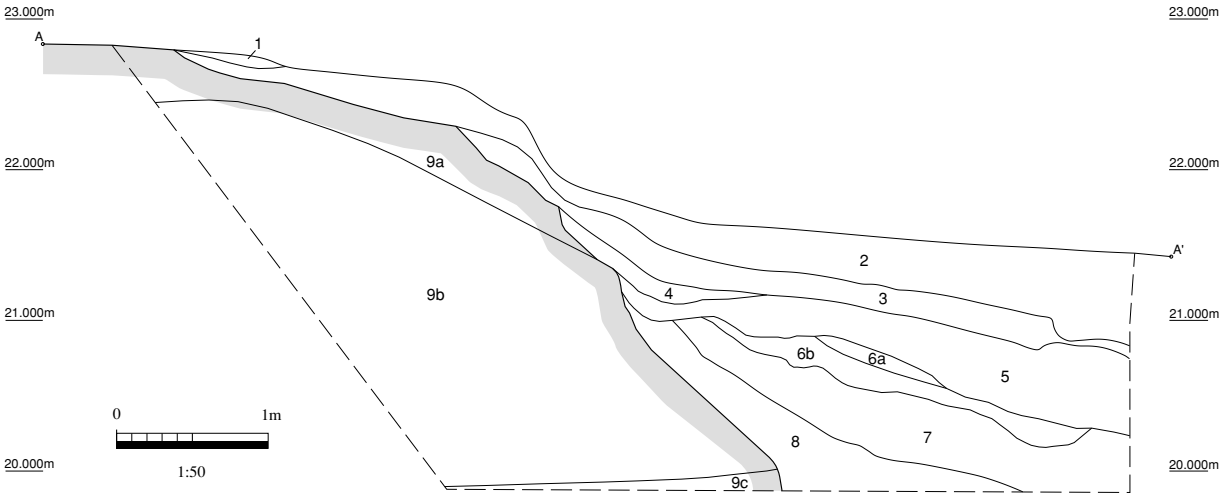
段丘崖の規模と形状　水入遺跡が展開する段丘が矢作川に向かって急激に落ち込む段丘崖は98C2・99A区で確認することができた。それぞれ98C2SX01・99ASX01とする。以下に述べるように矢作川とほぼ平行に南北約157m以上の直線的な崖があったことになる。98B2区では段丘面が東西方向だけでなく南北方向にも下り傾斜となっていることが確認されており、類推すると段丘崖は98B2区東側から南側へと大きくカーブしてそこから南西方向へとのびると考えられる。一方98C2区から北方では矢作川に流れ込



第68図　98C区調査区北壁土層断面図



第 69 図　段丘崖（98C2SX01）全体図



1　5Y5/2灰オリーブ色シルト。
2　7.5Y7/2灰白色細粒砂～極細粒砂。3 との間に灰白色細粒砂の堆積が明瞭に見える。
3　5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂。炭化物若干入る。2 よりやや暗い色調。
4　5Y2/1黒色シルト。炭化物入る。明瞭なラミナを形成。
5　10YR3/3黒褐色シルト。炭化物入る。円礫若干いる。植物質含む。ラミナを形成。
6　10YR1.7/1黒色シルト。炭化物非常に多い。5cm大の円礫入る。植物質、昆虫遺体含む。
　ラミナは見えない。6a は円礫が特に集中する。
7　5GY6/1オリーブ灰色細粒砂。植物質含む。明瞭なラミナを形成。
8　10YR1.7/1黒色シルト。炭化物多く入る。円礫入る。ラミナは見えない。
9　5Y7/4浅黄色砂礫層。低位段丘を構成する。9b は径20cm以下の円礫が密に見られ、
　9a は上方からの影響で黒褐色化、9c は円礫少なく極粗粒砂が主体。

（土層構成）
SX01　上層：1～4
　　中層：5
　　下層：6～7
　　下黒色層：8

第 70 図　段丘崖（98C2SX01 中央ベルト）土層断面図

む宝蔵川によって開析された谷地形（第6章第3節を参照）とそれに附随するさらに小さな谷地形が入り込むため、直線的な段丘崖は一旦途切れるかたちになる。そして谷地形北側では再び段丘崖が続くと想定されるが99K区などの調査区では確認されていない。

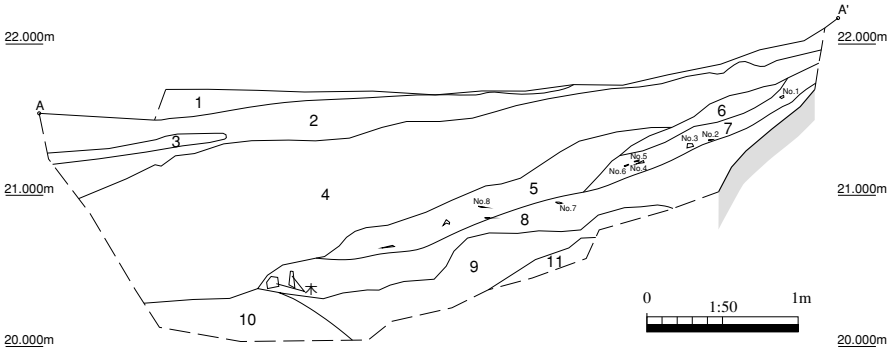
段丘崖は98C2中央ベルト南側での深掘りによって高低差約3m、傾斜角45～50°の規模であることが判明した。崖面を検出すると、その上端付近（標高22.8m）は段丘表層の粘質土層であるが、その下位からは礫層が露出する状態になる。その礫層露出面が表土化し、黒褐色土層を形成する。この礫層直上土層を調査時には「ガケ（崖）」と呼称し単独の層位として遺物を取り上げた。しかし「ガケ」そのものが後述する98C2SX01の上・中・下層などに対応して分層可能であることが判明したので「ガケ」遺物は一括資料ではない。

崖下端の状況は深掘り地点のみで知りうるが、段丘礫層は一旦粗粒砂層を挟んで（98C2SX01中央ベルト9c層：第70図）、再び円礫層となるあたりで崖下端となる。この標高は20mである。そこから円礫層の露出が緩傾斜のまま矢作川河床へと至ると推測され、ちょうど河原のような景観になると思われる。

段丘崖の堆積土層　「ガケ」については上述の通りで、矢作川の堆積作用による砂層と、崖上からの流れ込みおよび人間の廃棄行為による粘質土層が、段丘礫層露出面を直接覆うかたちで堆積土層が形成される。なお砂層形成に関しては矢作川による侵食作用も影響するので、一方向的な堆積の連続ではなかったことも考慮すべきである。しかし古墳時代に限ってみると砂層は部分的で大半は粘質土層であるので、矢作川の水際が著しく段丘崖に近づいていた期間は少なかったと考えられる。むしろ古代以降に砂層形成は顕著になるので、崖面に対する大きな侵食・堆積作用あるいは水際といった景観は古代以降に関わってくる事項であると思われる。

写真　98C2SX01下黒色層作業風景

下黒色層　段丘崖下礫層直上を覆う厚い黒色シルト層である。調査時に設定した下層よりさらに下で確認された遺物包含層であるためこのように呼称する。



1　10Y5/1灰色と7.5YR5/4にぶい褐色の極細粒砂が斑土状。
2　N4/　灰色極細粒砂主体。明瞭なラミナは見えず。色調は1に比べてやや暗い。炭化物若干含む。
3　10Y7/1灰白色極細粒砂。
4　N6/　灰色極細粒砂。下方は黒褐色。明褐色砂粒などとラミナ形成。炭化物（0.5cm以下）若干含む。
5　7.5Y4/1灰色シルトから極細粒主体。4同様にラミナを形成するも明瞭ではない。土器ほか木製品含む。炭化物（1cm以下）若干含む。植物質若干含む。
6　基本的には5が主体。但しラミナ形成せず粘性強い。炭化物若干含む。色調やや暗く、しまりある。
7　2.5Y3/1黒褐色シルト主体。ラミナ見えず。1.5cm以下の炭化物・赤色土粒多く混入する。1cm以下の円礫若干入る。土師器片多く含む。
8　N3/　暗灰色シルト。7と接するところは0.3cm以下の炭化物粒含む。下方は5YR4/1褐灰色シルト主体のラミナ形成。植物質含む。
9　10Y7/1灰白色極細粒砂。明瞭なラミナを形成。
10　10YR4/1褐灰色極細粒砂主体。灰白色細粒砂混じる。植物質多く含む。
11　N2/1黒色シルト。粘性・しまりともに強い。

（土層構成）
SX01　上層：1～7
　　中層：8
　　下層：9～11

第71図　段丘崖（98C2SX01調査区南壁）土層断面図

崖上からの流れ込みが主体で微細な草本類や炭化物が多く、崩落した円礫も多数含まれる。この層をさらに細分することはできなかった。堆積が一定期間連続していたことがうかがえる。層厚は最大で約60cmあり、98C2SX01中央ベルトでみると上面が砂層によって抉られるようなカーブになっているので、もともと形成された層はこれより厚かったと考えられる。

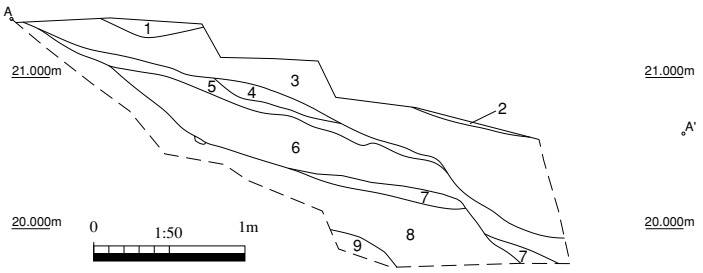
この層については各所で設定した土層ベルトで一部が確認され、それぞれで掘削をおこなったが、遺物が出土したのは98C2SX01中央ベルト付近のみであった。しかも約30m²の範囲を掘るとコンテナ10箱以上の遺物が出土した。この明瞭な偏差は当該層形成時における土器廃棄の特徴である。

下層　下黒色層を覆う細粒砂層（中央ベルト7層）とその上の黒色シルト層（同6a・6b層）を指す。砂層は植物質を若干含み、明瞭なラミナ構造がみられる。時間幅は特定できないが矢作川が崖に近づいたか水位が上昇した時期があったことがわかる。この砂層中からは顕著な遺物出土はみられず、このような状況は黒色シルト層でも同様であった。

黒色シルト層は土質が下黒色層に類似する。ただこの層は崖面に直接とり付くことはほとんどなく、また矢作川方向へもさほど広がらない。層厚は25～40cmである。

中層　下黒色層・下層を覆う粘質の強い黒褐～暗褐色シルト主体の層である。層厚は最大65cmで、部分的にラミナ構造をみせるが植物質の腐葉土が主体で砂の割合は少ない。水際であはあるが水流下ではなかったと推測される。

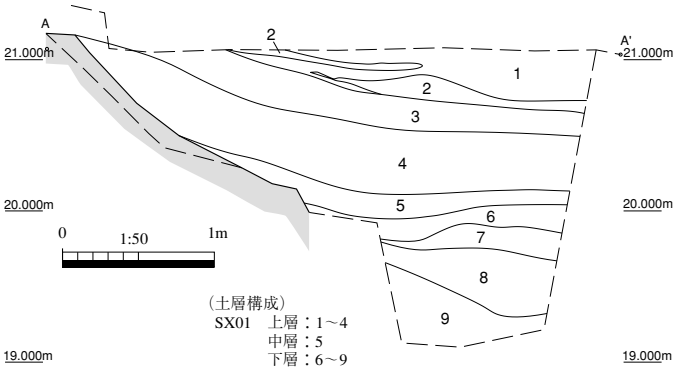
下層よりやや明るい色調なのは木質細片を多く含むためである。中層下部では大溝第6層でみられたのと同じような自然樹木が折り重なった状態が検出され、それに混じって木製品も多数残存していた。樹木は表面が焼けて黒焦げになったものが多く含まれ、この点も大溝の自然木と共通することから、これらが流木でなく崖上からの投棄されたものであったことを示している。また層中から土器（土師器）の出土が多数みられたのも特



1　2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト。小円礫を含む。堤状遺構もしくは撹乱。
2　2.5Y7/2灰黄色細粒～粗粒砂。3にみえる灰白砂層のなかで、とくに層厚が厚い部分。炭化物含む。
3　10YR4/1褐灰色砂質シルト。ところどころに灰白砂細粒砂がレンズ状に入る。炭化物粒（0.5cm）あり。
4　5Y7/1灰白色細粒～極細粒砂。3、5との境界は不明瞭。
5　5YR3/1オリーブ黒色粘質シルトに炭化物多く含むと見られる黒色土が混じる。
6　2.5Y7/1灰白色細粒砂と2.5Y6/1黄灰色極細粒砂の混合。ラミナを形成。植物質・炭化物含む。
7　5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト。混入物ほとんどみられない。
8　10Y3/1オリーブ黒色粘質強いシルト。しまりも強い。炭化物・植物質多い。3～20cm大の円礫含む。土師器あり。
9　2.5Y7/1灰白色細粒砂と2.5Y6/1黄灰色極細粒砂のラミナ。3～20cm大の円礫含む。

（土層構成）
SX01　上層：1～6
中層：7、8
下層：9

第72図　段丘崖（98C2SX01南ベルト）土層断面図



（土層構成）
SX01　上層：1～4
中層：5
下層：6～9

1　10Y5/1灰色極細粒砂とシルトの混合。一部で3と互層になっている。ラミナは見えず。
2　5Y7/2灰白色粗粒砂中心の砂。レンズ状の堆積。洪水等によるものか。
3　10Y4/1灰色シルト主体に細粒砂が混合。ラミナ状。1に比して色調は暗い。炭化物の混入多く、それらがラミナ状を呈す。炭化物粒（0.5～1.5cm大）。木質も含む。
4　2.5Y5/1黄灰色細粒～極細粒砂主体。崖から1mの範囲で明瞭なラミナ状を呈す。木質・炭化物含むが3ほどではない。
5　10YR3/1黒褐色シルト主体に極細粒砂含む。明瞭な黒色炭化物層（厚1cm前後）を中心に含む。植物質多く含む。しまり強い。
6　N3/　黒灰色シルト主体。炭化物含む。
7　基本的に6と同じ。1～5cm大の円礫多く含む。2.5Y6/1黄灰色極細粒砂含む。
8　基本的に6と同じ。但し5cm大の円礫若干含む。
9　5B6/1青灰色細粒砂。ラミナは見えず。混入物なし。

第73図　段丘崖（98C2SX01調査区北壁）土層断面図

徴で、比較的残存状況が良く流出した形跡がほとんどないことから、中層形成時には崖下の陸地化が進み崖上からの廃棄が盛んにおこなわれていたと考えられる。

98C2区調査時は中層を完掘して下層上面を検出し、遺物の出土状況を検討しつつ航空測量を実施した。それによると98C2SX01中央ベルトを挟んで南北約20mでは下層上面が最大幅約2mのテラス状となって弓形に張り出しているのが看取された。テラス縁辺は円礫が多くみられあたかもテラスを縁どっているかのようであった。このことは下層上部（黒色シルト層）形成の要因にもかかわる問題で、崖面が崩落した部分とも受け取れ、人工構造物かどうか一概に結論は出せない。ただ少なくとも、このテラスを中心として祭祀用と考えられるミニチュア土器や小型壺が集中して出土しており（第11章第605図）、関連づけて考えるべきであろう。

上層　中層上面は下黒色層上面と同様に一部が侵食によって抉られ、その後には砂層が堆積する。ほとんどの箇所でこの推移が確認されたが、砂層の堆積は観察地点によってさまざまで、水際における侵食・堆積作用が複雑に影響した跡がうかがえた。これらを一括して上層とした。砂層は段丘崖上端を越えさらに遺跡表土である青灰色砂層へと続くが、上層は98C2・99ASX01の覆土という理解なので青灰色砂層とは区別する。遺物は古代以降の土器が主体でわずかながら戦国時代の木製品も含まれる。そして崖上端のレベルでは戦国時代の土器・陶器が含まれており、戦国時代には段丘崖はほぼ埋没して水際から集落域までの間に顕著な段差がない状態が想定できる。しかもこのレベルでの堆積（調査区北壁1層、同南壁1層）をみると斑土状あるいはラミナ堆積がみえず、整地が行なわれたと考えられる。調査ではこの整地層に関連した遺構確認ができなかったが、戦国時代集落の範囲は段丘崖で終らないことを考慮しておかねばならない。ところで、ここに至るまでの堆積時間とこれ以後に遺跡全体が埋没する（青灰色シルト層）時間を比較すると後者が圧倒的に短く、江戸時代以降における加速度的な矢作川の天井川化を示している。

さて、98C2区南端から99A区では、中層上面と上層の間に黒褐色シルト層（98C2SX01調査区南壁土層断面5～7層）が存在する。この層は上層に含めているが、出土するのは古墳時代中期の土器である。

写真　テラス部分の遺物出土状況（左）と上空からみたテラス部分（右）

ただし中層では須恵器が含まれないのに対してこの層では初期須恵器が含まれる。中層形成後引き続き局所的な土器廃棄が存在したことが示される。98C2区南壁の南側に位置する段丘崖99ASX01では遺物の主体はむしろこの上層で、初期須恵器と椀状杯部高杯が主体となる土器の構成となっている。このことは、時期が変わると土器廃棄の中心となる地点も移動していることを示しており、そこから主生活域の移動も想定されるのである。

写真　98C2SX01作業風景（上：南東から、下：東から、奥に戦国時代土塁、崖下には円柱W26などの遺物がみえる）

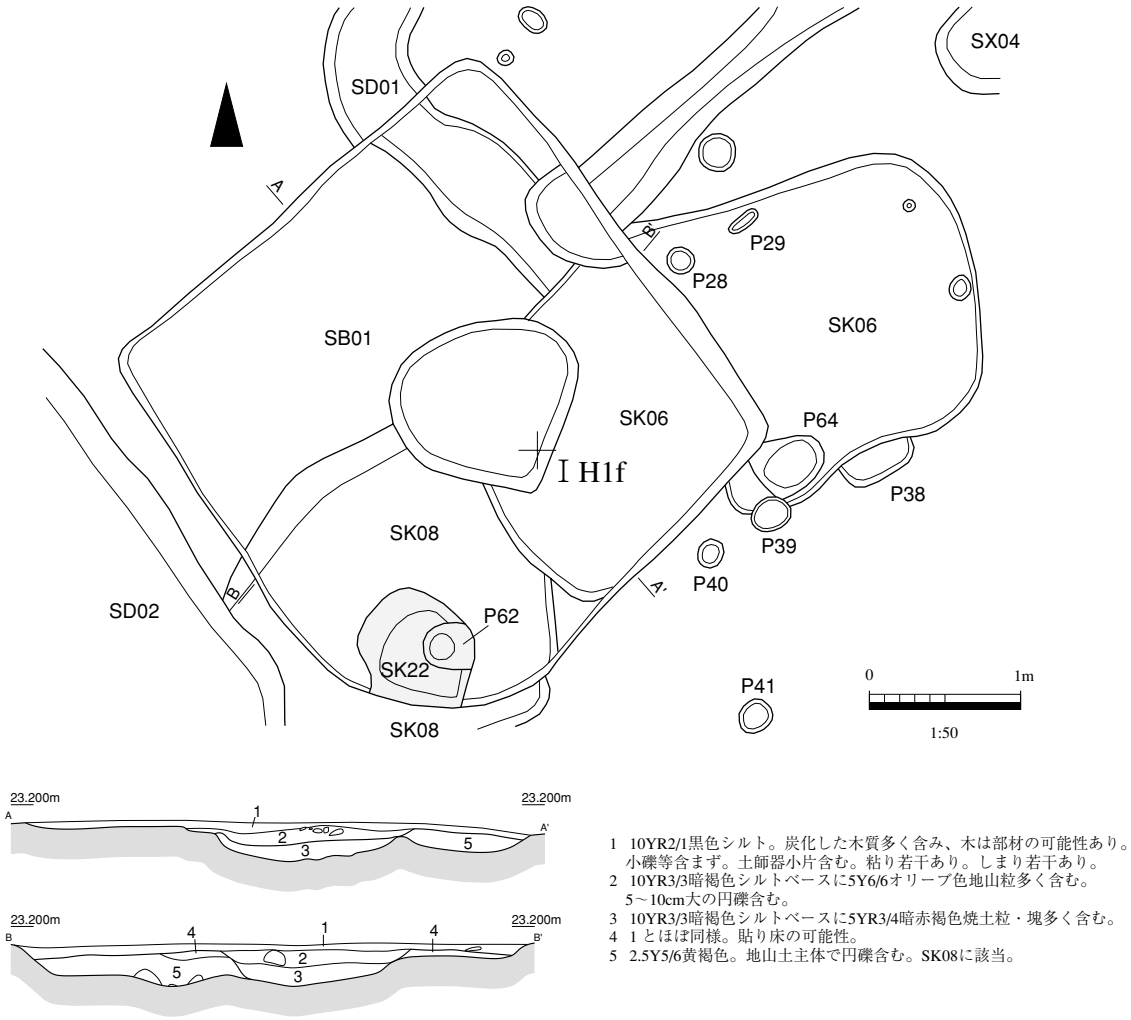
大溝堆積土層との対応関係　前項で述べた大溝の古墳時代の堆積土層は大きく流水層（第7・8層）、木質堆積層（第6層）、土器廃棄層（第5層）に3分される。これらと段丘崖堆積各層との対応関係は、出土遺物の時期や堆積状況の比較によって導き出すことができるであろう。その中で符合する要素が最も多いのが大溝木質堆積層（第6層）と段丘崖中層である。両者ともに木質を大量に含み、とりわけ焼け焦げのある自然樹木が出土していることが重要になる。土器については、大溝第6層は量が少ないものの有稜高杯・小型壺・ミニチュア土器を主体とする土師器のみで構成される点が同一である。これを基準に考えると大溝流水層（第7・8層）は段丘崖下層、大溝土器廃棄層（第5層）は段丘崖上層下部（局所的な黒褐色層）に対応することが想定できる。

ここで特に問題となるのは大溝機能（流水）時における溝底の標高と矢作川水位との関係であろう。前者が99A～B区において標高20.5～21.5m、99C区で標高20.8mであるのに対し、後者は段丘崖下層の砂層堆積状況から推測して標高21mをやや越える水位であったと考えられる。したがって、遺跡中央の谷地形を経由して矢作川の流水を大溝に流し込むことは充分に可能ではあるが、その水位は溝底から多くて数10cm程度であったと考えられる。

第３節　竪穴建物

98C2SB01　段丘崖（98C2SX01）まで約４ｍの位置で、方向は崖線と平行である。縄文時代と考えられる98C2SK06の上に重なる。北東辺3.25m、北西辺3.18mのほぼ正方形である。南西辺はグリッド北から西へ41°振れる。深さは10cmである。中央に直径125cm、最深で25cmの擂鉢状の炉がある以外は床面でピットは検出されなかった。炉壁は強く焼け赤く変色する。炉の覆土には炭化物・焼土塊が多く含まれるが土器の出土はなかった。建物跡の覆土は単一層で埋め戻しによる可能性が高い。古墳時代土師器高杯・小型壺が出土した以外はごく小片がみられるのみである。また、覆土を全て持ち帰り篩にかけたところ臼玉１点が出土した。さらに確認面において幅3～5cmの木材が燃えて炭化した状態のものが認められた。とり上げは不可能で確認状況を図化した（第75図）。一部が組み合ったような形状が見い出された。SB01の上屋に関わるものかどうかは不明である。

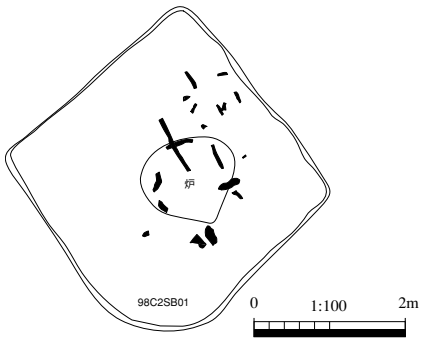
出土遺物から須恵器登場以前の竪穴建物と判断されるが、規模が小さい点とそのわりに大きな炉がある点が注目される。また段丘崖98C2SX01の中でもミニチュア土器が最も多く出土する地点に近い点も重視されよう。このことから日常居住用の施設ではなく特殊な用途を考えるべきであろう。



1　10YR2/1黒色シルト。炭化した木質多く含み、木は部材の可能性あり。小礫等含まず。土師器小片含む。粘り若干あり。しまり若干あり。
2　10YR3/3暗褐色シルトベースに5Y6/6オリーブ色地山粒多く含む。5～10cm大の円礫含む。
3　10YR3/3暗褐色シルトベースに5YR3/4暗赤褐色焼土粒・塊多く含む。
4　1とほぼ同様。貼り床の可能性。
5　2.5Y5/6黄褐色。地山土主体で円礫含む。SK08に該当。

第74図　98C2SB01平面・土層断面図

99BSB01　調査区中央よりやや北、南から続く上り傾斜の最高地点に位置し、大溝 SD01 の中心線から南東方向へ約17m の地点にある。精査の結果２棟（SB01a と SB01b）の重複が確認された。平面形は隅丸長方形で大溝と平行する辺の方が若干長い。両者の平面規模はほぼ同じであり、建て替えと考えられる。



第 75 図　98C2SB01 炭化材出土状況図

SB01aは南西辺長6.8m、深さ17cmである。南西辺はグリッド北から西へ 31°振れる。SB01b によって大部分が失われており、南西・南東壁付近が確認されたのみであるが壁にそって周溝が部分的に確認することができた。覆土はほぼ一層で出土遺物のほとんどない点が SB01b と対称的である。

SB01b は南西辺長 6.13m、南東辺長 6.9m、深さ 25cm で SB01a よりやや深く掘り込まれる。竪穴掘形は、SB01 より西へ若干ずれた位置で重複し、かつ西隅を共有するようなかたちにもみえ、そこを中心に若干規模を縮小したようでもある。南西辺はグリッド北から西へ30°振れる。周溝は南東辺のごく一部で確認されたのみである。SB01a・b ともに竪穴掘形はあまり丁寧に仕上げられているとはいいがたい。

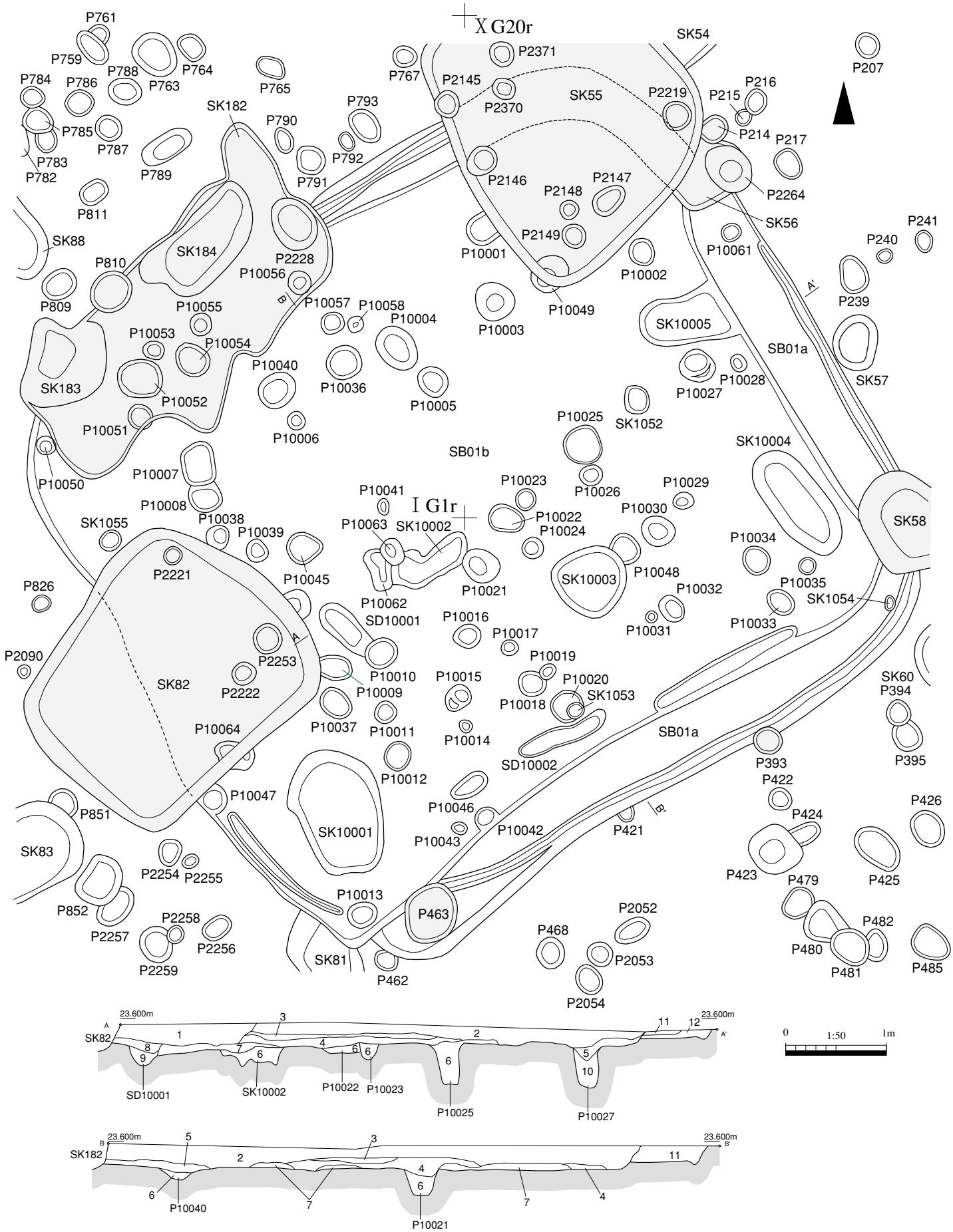
床面では多数のピット・土坑が確認された。しかも発掘現場で上屋構造に関わる柱穴を特定できるほど明瞭なものあるいはそれらも並びはなく、柱掘形の形状としてはまちまちであった。したがって柱穴の特定はさまざまに想定されるが、ここでは一案として２間×２間の総柱構造を考えてみた（第 77 図）。床面土坑・ピットのうち 99BSK10001・SK10003・P10004・P10008・P10009・P100012・P10030・P10032 からは建物の時期に関わるであろう土師器が出土した。このうち SK10001 からは椀状杯部高杯や椀が出土している。ただ須恵器の出土はなく、建物が建てられた時期はそこまで下らないとみられる。

土層断面をみると、3・4・7 層は SB01a を埋めた土が SB01b 再掘削後も残った（または残した）ものと考えられる。土器が多く出土したのはその上に堆積する 1・2 層で、南西辺近くで部分的にみられる 1 層は、あらかた埋まった覆土を掘り返して土器などを廃棄したものと考えられる。須恵器や土師器の多くは1層から出土した。ただ2層も遺物量は多く、SB01bが廃絶後、埋め戻しながら廃棄坑として使用されたとも考えられる。土師器高杯は椀状杯部・短脚タイプが主体である。甕は細片になったものがほとんどであるが一定量存在するであろう。特記されるのは須恵器把手付高杯（1018）や土師質の器台（1088）である。そして竪穴のほぼ中央の２層から勾玉１点が出土した。

写真　99BSB01 遺物出土状況（南から）

床面や壁面からは炉ないしは竈といった火処は確認されなかった。

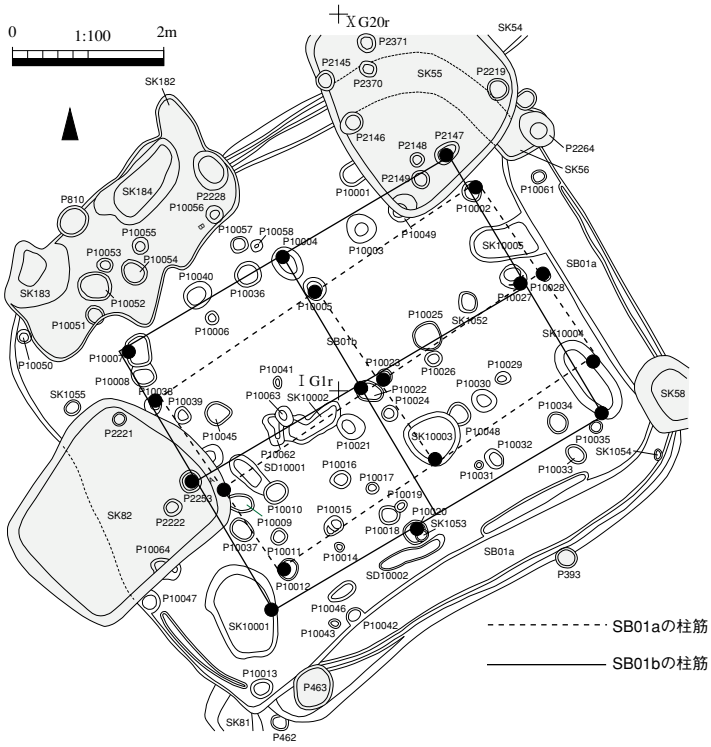
99BSB12・13　99BSB01 の北４ m に位置し、重



1 10YR3/1黒褐色砂質シルト。地山粒なし。炭化物粒（0.5cm以下）、土器片（須恵器含む）多い。
2 10YR3/1黒褐色砂質シルト。地山土なし。1 に比べて土器片少ない傾向。
3 10YR3/1黒褐色砂質シルト。地山粒多く入る。炭化物、土器片若干入る。
4 10YR3/1黒褐色シルト。地山土なし。炭化物入る。
5 10YR3/1黒褐色シルト。地山粒入る。
6 地山ブロックが多くを占める。黒色土は若干。
7 10BG3/1暗青灰色粘質シルト。地山ブロック入る。炭化物入る。
8 5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト。地山粒わずかに入る。炭化物入る。しまりあり。
9 8 に地山粒入る。しまりやや弱い。
10 5GY3/1暗オリーブ灰色粘質シルト。
11 10YR4/1褐灰色砂質シルト。地山土なし。
12 11 に地山粒入る。

第 76 図　99BSB01 平面・土層断面図

複関係からSB12→SB13の順と判断される。これらが古代の竪穴建物と異なるのは7世紀以降の遺物が全くないことであるが、壁面に火処が認められないのもポイントである。これらが建て替えであったとすると99BSB01a・bとの対応関係を想定することもできる。



第77図　99BSB01柱穴想定図

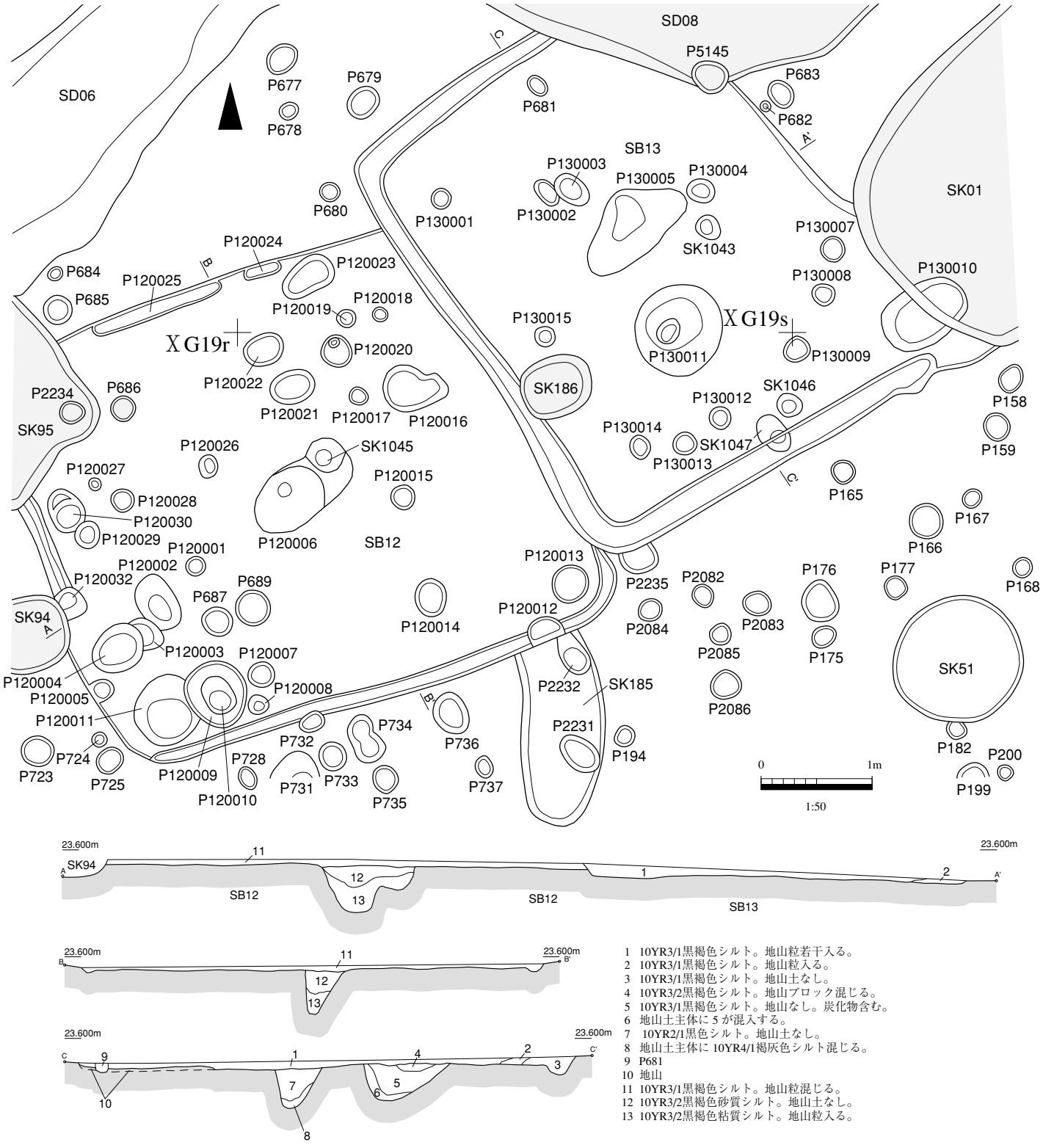
SB12は南東辺長4.69m、南北方向に4.0mの、大溝と平行する辺がやや長い隅丸長方形となる。南西辺はグリッド北から西へ23°振れる。深さは7cmと浅い。周溝は南西辺・北西辺で部分的にみつかった。床面ほぼ中央に炉穴の可能性があるピット（99BP120006）があるが炭化物・焼土などはなかった。他に床面では多数のピットが確認されたが、柱穴を特定するには至っていない。出土遺物がほとんどなく、時期の決め手にやや欠ける。

SB13はSB12の北東辺とわずかに重複する。南西辺長4.35m、東西方向に3.9mの規模であるが、北東辺の位置はもう少し外側にあった可能性もある。南西辺はグリッド北から西へ36°振れる。深さは最深で12cmと浅く、覆土中からの遺物出土はほとんどなかった。ただ床面ピットP130010からは直口壺胴部が出土した。

99KSB1071　調査区南部に位置し、周囲に古代の竪穴建物跡が群在し、覆土を掘り込んで8世紀代の竪穴建物99KSB1085が建てられる。平面形は隅丸正方形で、南西辺5.47m深さ24cmである。南西辺はグリッド北から西へ44°振れる。

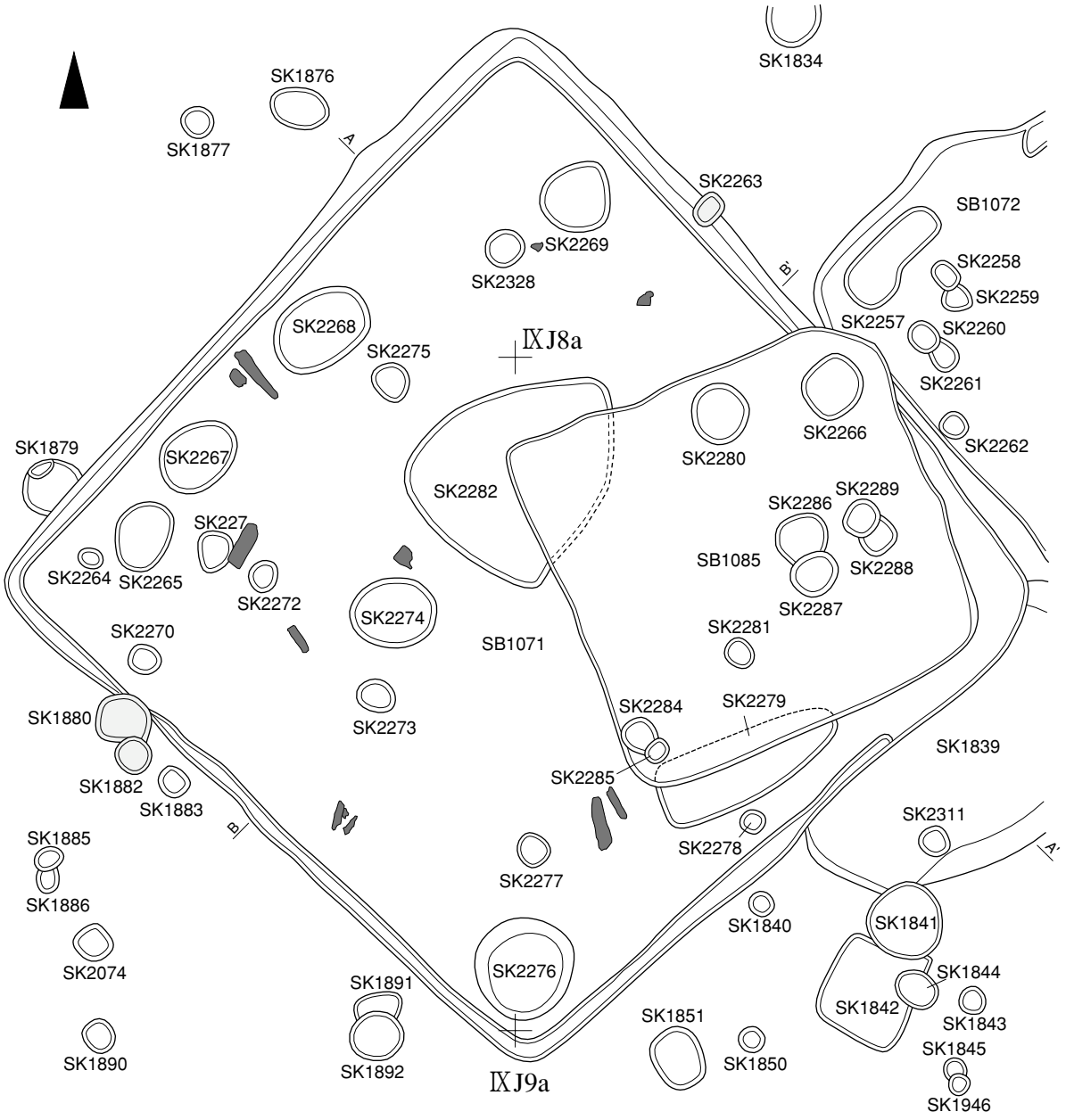
土層から貼床と考えられる（6層）。また覆土中（5層）から炭化材片がいくつか出土した。98C2SB01同様取り上げることはできなかったが、出土状況を図化した。上屋構造を燃やした可能性もあろう（焼失住居）。床面の土坑・ピットは少なく、柱穴の特定も容易である。すなわち西隅から時計廻りにSK2271・SK2275・SK2328・SK2280・SK2287・SK2284・SK2277・SK2273である。2間×2間の側柱からなる上屋構造が想定できよう。これは先の99BSB01も同様であるが後述する古墳時代中期の掘立柱建物の柱筋と共通するものである。

土器は完形に近いものが床面に散在していた（1112・1113など）。須恵器はなく、土師器屈折脚高杯の脚部内面を縦方向に指ナデしており、段丘崖（98C2SX01）中層の高杯に似る。時期も近いものと考えられ、すると98C2SB01と併行時期といえる。



1 10YR3/1黒褐色シルト。地山粒若干入る。
2 10YR3/1黒褐色シルト。地山粒入る。
3 10YR3/1黒褐色シルト。地山土なし。
4 10YR3/2黒褐色シルト。地山ブロック混じる。
5 10YR3/1黒褐色シルト。地山なし。炭化物含む。
6 地山土主体に 5 が混入する。
7 10YR2/1黒色シルト。地山土なし。
8 地山土主体に 10YR4/1褐灰色シルト混じる。
9 P681
10 地山
11 10YR3/1黒褐色シルト。地山粒混じる。
12 10YR3/2黒褐色砂質シルト。地山土なし。
13 10YR3/2黒褐色粘質シルト。地山粒入る。

第 78 図　99BSB12・13 平面・土層断面図



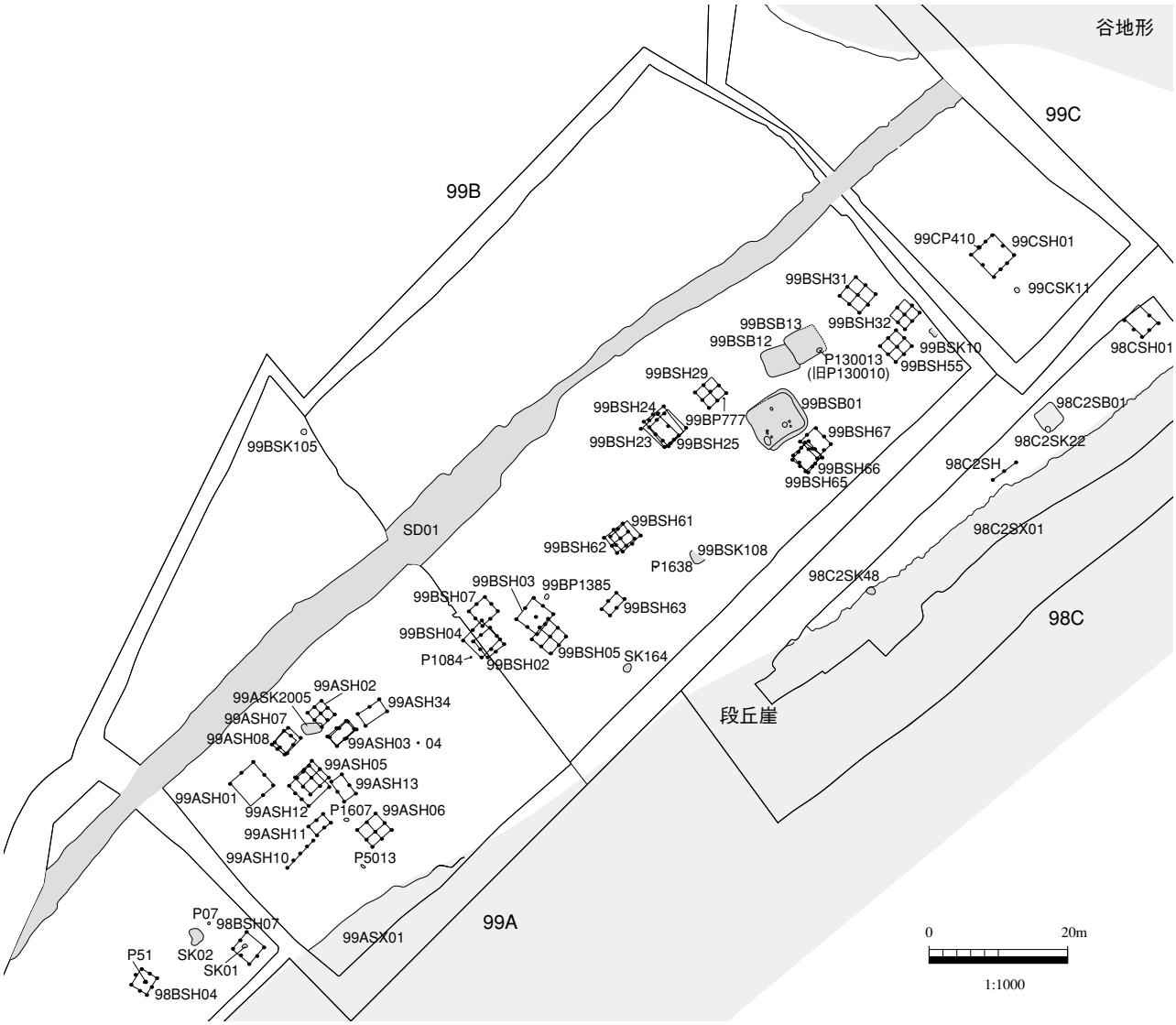
1 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
2 10YR3/2黒褐色粘質土（炭化物と10YR4/2灰黄褐色粘質シルトブロックを含む）。
3 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
4 10YR3/3暗褐色粘質シルト（5YR4/4の焼土と炭化物を含む）。
5 10YR2/2黒褐色粘質シルト（炭化物と10YR4/2灰黄褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
6 10YR3/3暗褐色粘質シルトと10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（炭化物を多く含む）。
7 10YR5/3にぶい黄褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
8 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト（炭化物をを含む）。
9 10YR4/1褐灰色粘質土と10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
10 10YR4/2灰黄褐色粘質土と10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
11 10YR3/3暗褐色粘質シルトと10YR4/2灰黄褐色粘質シルトの斑土状（炭化物を含む）。
12 7.5YR3/2暗褐色粘質シルト。
13 12と7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック。
14 7.5YR4/1褐灰色粘質土。

第 79 図　99KSB1071 平面・土層断面図

第 4 節　掘立柱建物

（1）概観

本節では掘立柱建物について記述するが、掘立柱建物につきまとう問題として、平面形（柱の並び）の妥当性と、それが認められたうえで所属する時期が不安定という 2 点が挙げられる。そこで本書では以下のように対処した。前者については、調査現場での認定が最優先ではあるが、時間的制約から認定のほとんどを図上で実施した。その際に、方画メッシュを用いて柱並びが直線的でかつ桁行梁行が直交することを条件とした。一方後者については柱穴（柱掘形と柱痕跡の総称）出土遺物による時期判定、すなわち上限の特定と下限の推定を最優先とし、平面形や柱穴覆土の傾向をもとにした建物遺構そのものからの時期想定を次位の根拠とした。柱並びについては、歪みや一部柱穴の欠如などが是認されるむきもあるが、当該遺跡における膨大なピット数からすると根拠のない想定が無数に可能となってしまう。したがって時期を問わず掘立柱建物として認定されたピット（柱穴）群は実在した建物のごく一部にす



第 80 図　大屋敷地区古墳時代主要遺構配置図

ぎず、逆に偶然に直交するピット列が不本意ながら建物と認定されるケースもありうる。

ところで古墳時代中期と考えられる掘立柱建物はほとんどが大屋敷地区に分布する。下槽目地区にも若干数認められるが、段丘崖および谷地形付近に限られる。これは当該期遺物の出土傾向とも符合する。大屋敷地区では、大溝（SD01）とほぼ平行に建ち、大溝～段丘崖間のほぼ全域に展開する。ただし段丘面上でも緩い北斜面となる 99C 区では 1 棟のみである。建て替えも含めた数棟ずつの群が看取され、99ASH01・12 とその周辺が特に密になる。

（2）各説

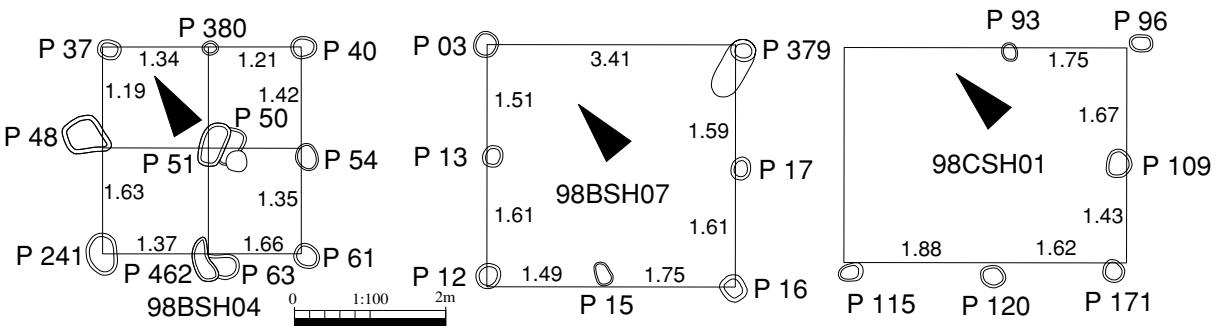
98B2SH04・07　98BSH04 は 2 間×2 間の総柱建物で 2.8m × 2.6m の平面形が正方形となる。古代の掘立柱建物 98BSH03 と重複し一部柱穴（P48）を共有する。SH03 は P51・462、SH04 は P50・63 とすると重複関係から SH04→SH03 となる。北西辺はグリッド北から東へ 30° 振れる。98BSH07 は 2 間×2 間の側柱建物で 3.4m × 3.2m、北西辺はグリッド北から東へ 39° 振れる。

99ASH01・SH12　調査区南側大溝から南東へ 7 m に 99ASH01 は位置する。北西辺が大溝東土塁にかかる。平面形は正方形で桁行 2 間（4.6m）梁行 2 間（4.5m）である。柱穴は直径 20 ～ 25cm の円形で深さ 10 ～ 38cm である。99ASH12 は SH01 の東 2m にあり、両者は雁行形の位置関係となる。平面規模もほぼ同一だが桁行 3 間（4.0m）梁行 3 間（4.3m）である。柱穴は直径 12 ～ 20cm の円形で深さ 7 ～ 34cm である。南端の柱穴（99AP30019）は古代（7 世紀代）竪穴建物の床面で確認されており、遺構での先後関係が把握できる一例である。

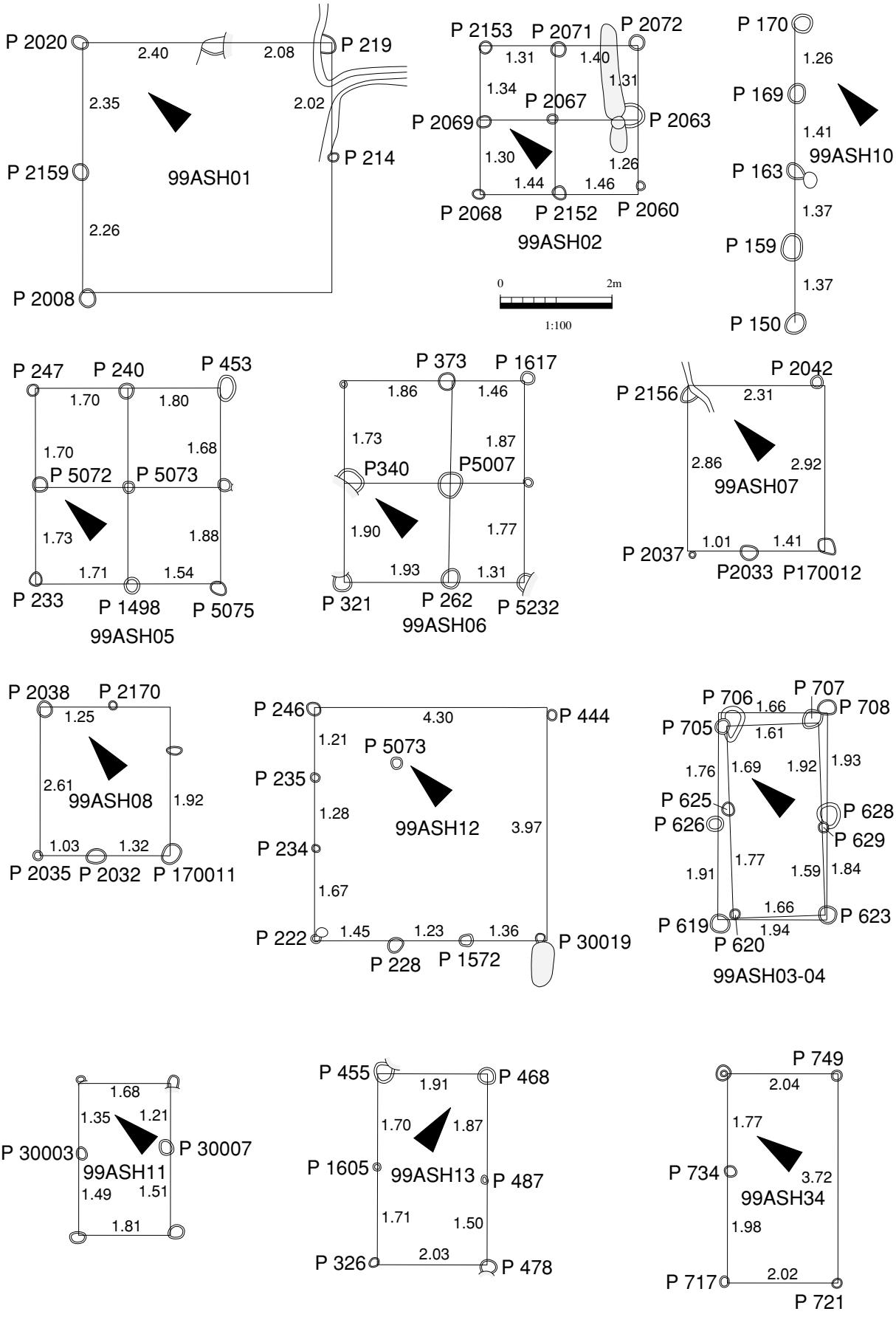
99ASH02・03・04・34　99ASH02 は、99ASH01 北東 10m に位置する 2 間×2 間の総柱建物である。平面形は一辺 2.75m の正方形で北西辺はグリッド北から東へ 45° 振れる。99ASH03・04 は SH02 の南東 2 m に位置する。いずれも 1 間×2 間で柱穴の重複から先後関係は SH03→SH04 となる。99ASH34 は SH03・04 の北東 2 m に位置する。1 間×2 間で北西辺はグリッド北から東へ 55° 振れる。

99ASH05　99ASH12 に重複する 2 間×2 間総柱建物であるが、直接柱穴は重複しないので先後関係は判明しない。平面形はほぼ正方形で南西辺 3.3m ×北西辺 3.4m である。柱穴は直径 15 ～ 35cm 深さ 20 ～ 30cm で、北西辺はグリッド北から東へ 43° 振れる。

99ASH06　99ASH12 の南東 7 m に位置する 2 間×2 間の総柱建物である。北西辺はグリッド北から東へ 47° 振れる。



第 81 図　98B2・C2 区掘立柱建物平面図（1：100）



第 82 図　99A 区掘立柱建物平面図（1：100）

99ASH07・08　99ASH01の北東4 mに位置する重複する2棟であるが柱穴の重複がないので先後関係は不明である。いずれも桁行1間梁行2間でSH07北西辺がグリッド北から東へ42°、SH08北西辺がグリッド北から東へ38°振れる。南隅の柱穴が古代の竪穴建物99ASB17の床面で検出されているのでこれ以前であることが判明する。

99ASH10　99ASH01の南東9.5mに位置する4間の柱列である。その方向はグリッド北から東へ41°振れる。土師器以外に顕著な遺物がないため時期が特定しがたい。古代の掘立柱建物99AASH35との関連も可能性はのこる。

99ASH11　古代の竪穴建物99ASB03と重複する。2つの柱穴がSB03の床面で検出されたことからこれに先行することが判明する。1間×2間で北西辺はグリッド北から東へ46°振れる。

99ASH13　99ASH12の東側に接して位置する。1間×2間で北西辺はグリッド北から東へ44°振れる。

99BSH02・04・07　99B区南端に位置する。99BSH02は2間×2間の側柱建物で平面形は一辺3.1mの正方形である。北西辺はグリッド北から東へ50°振れる。99BSH04はSH02と重複するが柱穴の重複がないので先後関係は不明である。2間×2間の総柱建物で平面形は一辺3.2mの正方形である。北西辺はグリッド北から東へ50°振れる。99BSH07はSH04と一部重複するがこれも柱穴の重複がなく先後関係は不明である。また古代の竪穴建物99BSB11とも重複するが、こちらは周溝の残欠が検出されたにすぎないので先後関係は明らかにしえない。しかし平面形態からSH07が先行すると考えられる。

99BSH03・05　99BSH02の東4 mに位置する重複する2棟であるが柱穴が重複しないので先後関係は不明である。いずれも2間×2間の総柱建物である。SH03は平面形が一辺3.7mの正方形で北西辺はグリッド北から東へ36°振れる。SH05も平面形は一辺3.6mの正方形で北西辺はグリッド北から東へ38°振れる。なおSH05は古代の竪穴建物99BSB07に一部重複するが、SB07が周溝の残欠が検出されたにすぎないので先後関係は不明である。

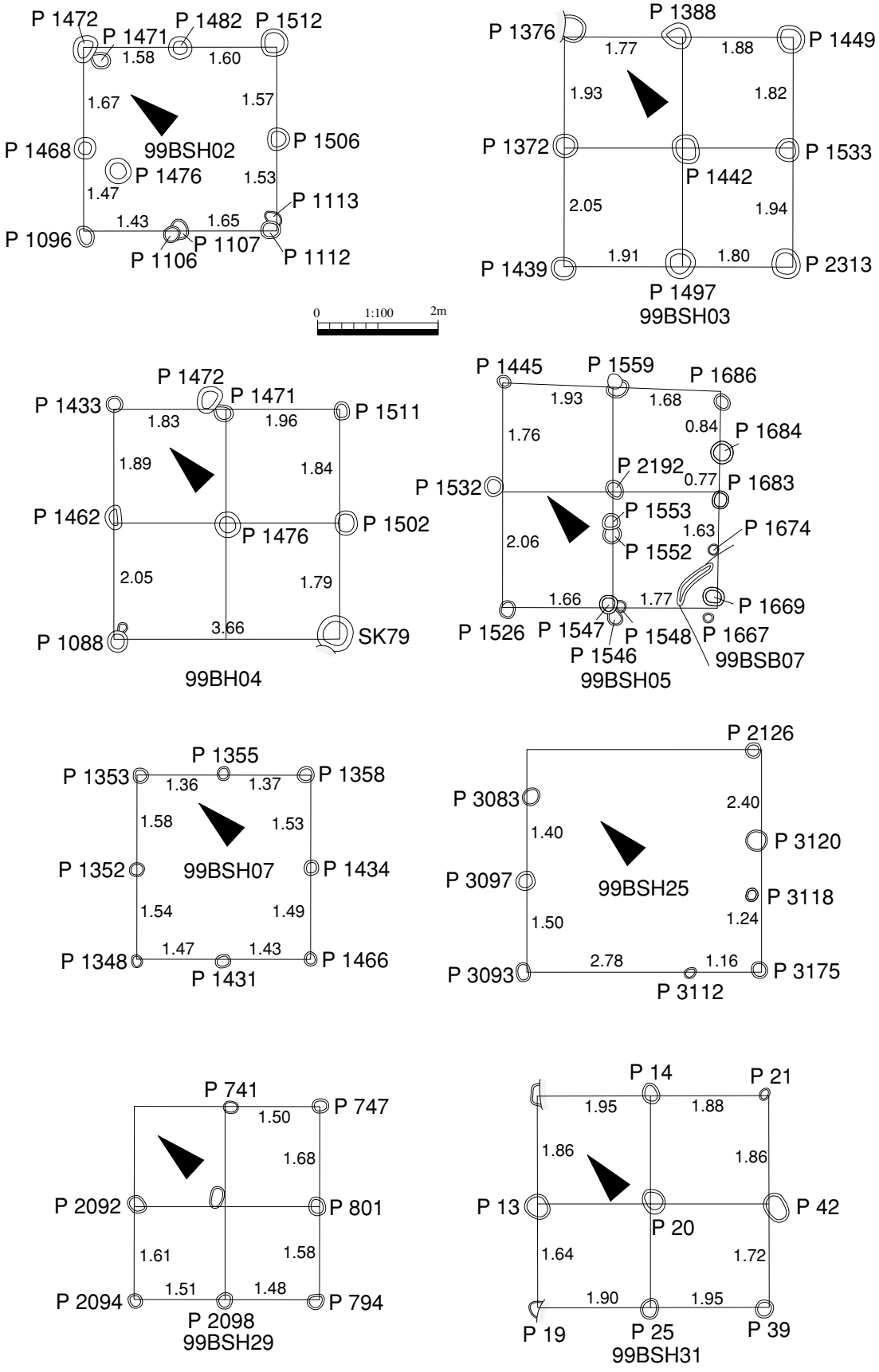
99BSH29　調査区中央部に位置する2間×2間の総柱建物である。平面形は一辺3.2mの正方形で北西辺はグリッド北から東へ45°振れる。この建物の東脇に土師器椀が底に置かれた状態で出土した99BP777が所在するが当該建物との関連は明らかでない。

99BSH31・32・55　調査区北端に位置する。重複関係はないいずれも平面形が正方形となる2間×2間の総柱建物である。若干規模の大きなSH31がやや1棟離れてある。SH31は一辺3.6m規模で北西辺はグリッド北から東へ39°振れる。SH32は一辺3.2mで北西辺はグリッド北から東へ41°振れる。SH55は一辺3.2mで北西辺はグリッド北から東へ45°振れる。

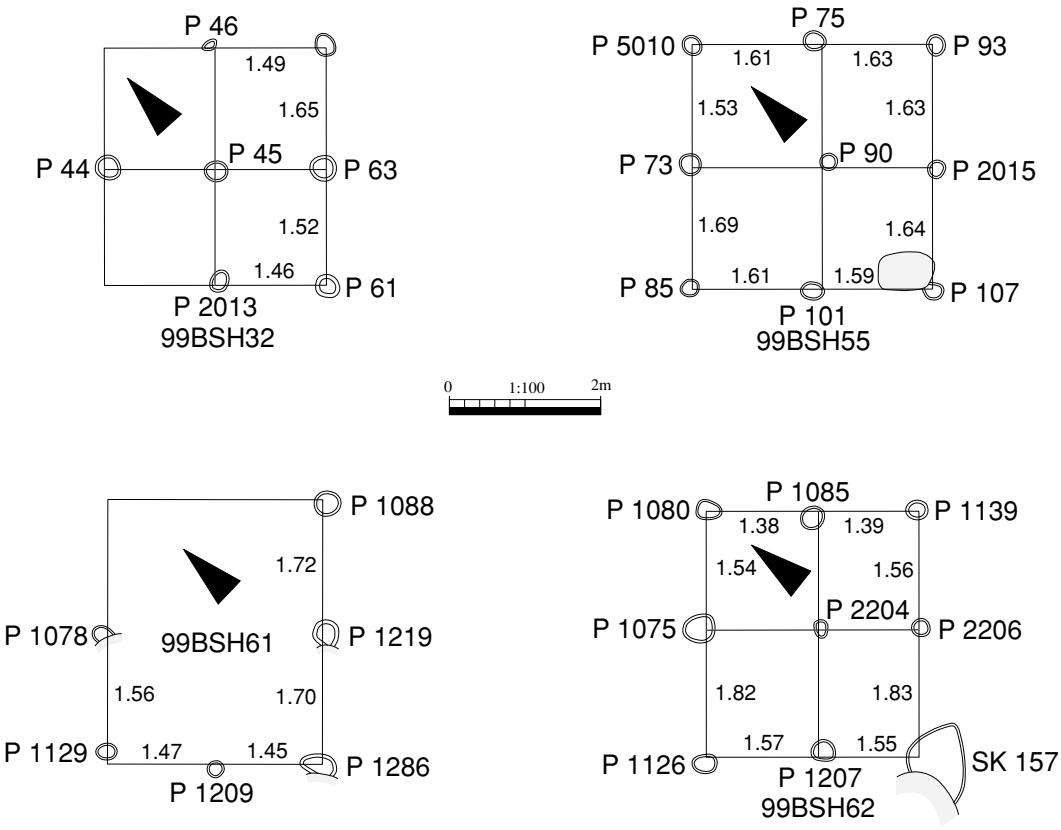
99BSH61・62　調査区中央部やや南で重複する2棟である。柱穴の重複はないので先後関係は不明である。SH61は2間×2間の側柱建物で平面形は2.9m×3.4mの長方形である。北西辺はグリッド北から東へ46°振れる。SH62は2間×2間の総柱建物で平面形は3.0m×3.4mの長方形である。北西辺はグリッド北から東へ53°振れる。

99BSH63　99BSH61の南へ5 mに単独で位置する。1間×2間で平面形は1.47m×3.2mの長方形で北西辺はグリッド北から東へ41°振れる。

99BSH65・66・67　調査区中央部の竪穴建物99BSB01の南東2 mに位置する重複する3棟である。い



第 83 図　99B 区掘立柱建物平面図（1、1：100）

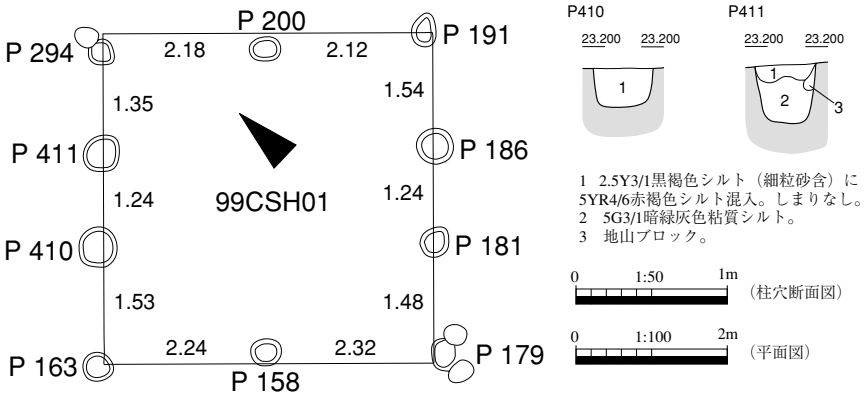


第 84 図　99B 区掘立柱建物平面図（2、1：100）

ずれも2間×2間の側柱建物である。SH65とSH66がほぼ同一地点で重複するが柱穴の重複がないので先後関係は不明である。SH65の平面形は一辺3.0mの正方形で北西辺はグリッド北から東へ35°振れる。SH66の平面形は一辺3.0mの正方形で北西辺はグリッド北から東へ30°振れる。SH67はこれらから少し北東へずれる。平面形は長辺3.3mで北西辺はグリッド北から東へ45°振れる。

99CSH01　大溝の南東17mに位置する。平面形は正方形に近い長方形で桁行3間（4.2m）梁行2間（4.5m）である。柱穴は直径35cm前後の円形で深さ15～33cmである。99CP410は古墳時代須恵器高杯が、P411からは土師器甕片が出土した。また平面形として重複する99CSK16からは東山11号窯式期須恵器杯身が出土しており、5世紀末～6世紀代と考えられる。なお、大溝内の土器集積99CSX13はこの建物から直線方向に位置しており関連が想定できよう。

98CSH01・02　98CSH01は98C2区北端に位置し、調査区壁で途切れるため北西方向へ延びる可能性もある。検出範囲では2間×2間で南東辺長3.5m南西辺長3.2mである。南東辺はグリッド北から東へ42°振れる。98CSH02は調査区中央部の崖際に位置する。2間（長4.4m）の柱列である。柱穴がやや大きく径70cmあるのが特徴である。これに直交する柱列は見当たらない。

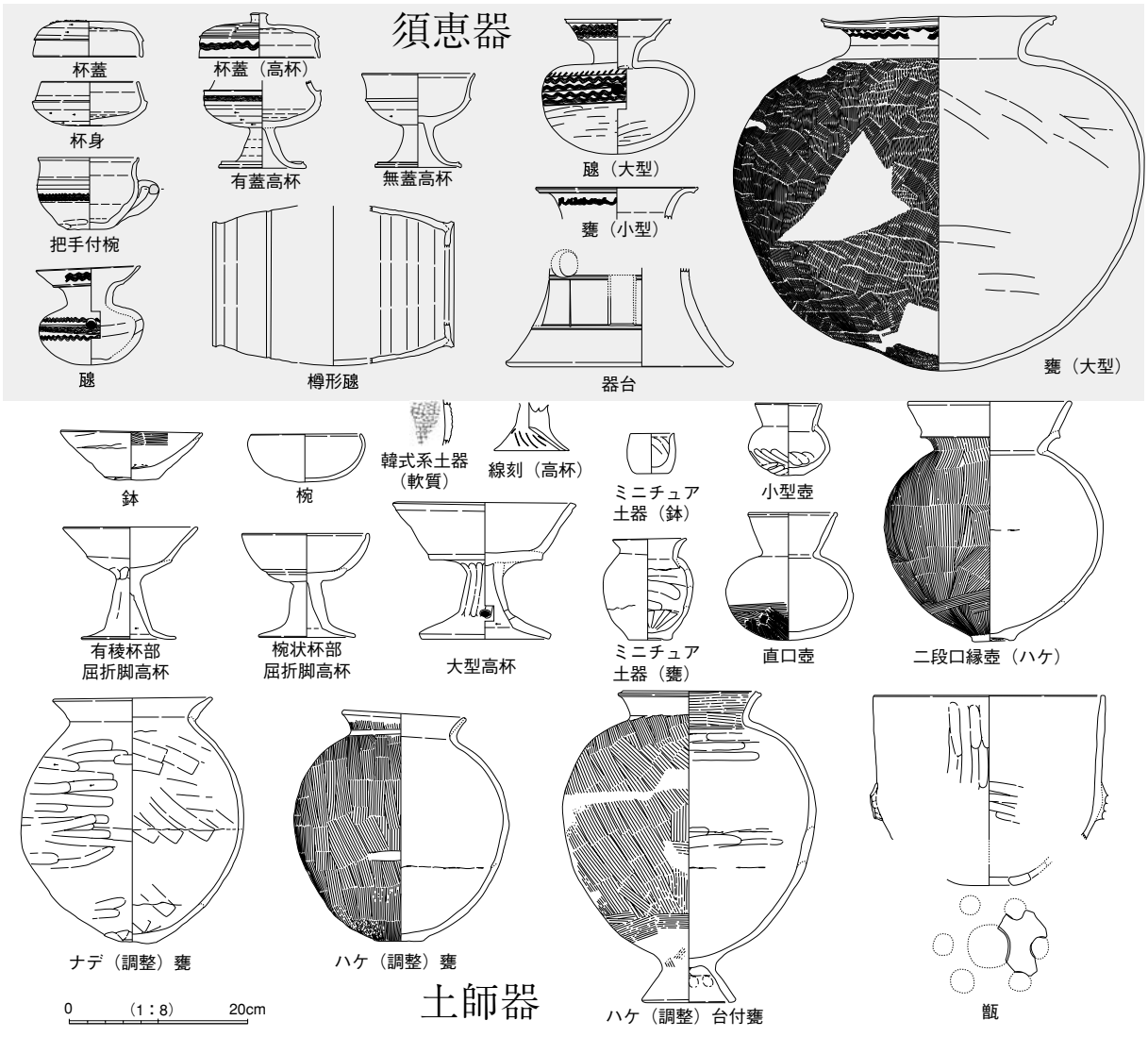


第85図　99C区掘立柱建物平面・土層断面図
（平面図は1：100、断面図は1：50）

第 5 節　古墳時代中期の土器

(1) 概観

土器の分類　本節では、水入遺跡から出土した4世紀～6世紀前半の古墳時代中期を中心とする時期の土器を提示する。「中心とする時期」と表現した理由は、遺構・層位ごとのまとまりで提示した場合一部古い時期のものが入るためなのと、西三河地域における6世紀代の土師器の様相が、およそその前半と後半を明瞭に峻別できる段階に至っていないためである。したがってここでは4～6世紀代の土器を古墳時代中期の土器として抽出することを目標とした。土器は大別して須恵器と土師器、そしてごくわずかだが韓式系土器がある。須恵器と土師器の主な器種については第86図に提示したとおりである。これら土器の大半は大屋敷地区から出土したものであるが、下糟目地区において確認された当該期の遺構が99KSB1071程度であったことを考慮すると、段丘崖および谷地形付近に未確認の遺構があった可能性を示している。



第 86 図　水入遺跡出土古墳時代中期土器主要器種分類図

(2) 大溝出土の土器

概観　大溝（98B2・99A ～ CSD01）からは大量の古墳時代に属する土器が出土した。実測図を提示したもの以外の破片の総重量は約200kgある。そのほとんどは土師器で、須恵器はそれほど高い割合を占めていない。ただ須恵器は年代などを考察する手がかりとなるので小片でも提示した。そしてわずか2点であるが韓式系軟質土器片が出土した（99BSD01）。

大溝は全長200m以上あり、大溝出土資料として一括してしまうには少々無理がある。大溝は複数の調査区にまたがっており、これは全くの任意的な設定にすぎないが調査区ごとで少しずつ様相に変化をみせる。この違いを提示する目的もありあえて調査区ごとに提示することにした。なお、大溝構築時期に関わる土層から出土した土器については別途一括して提示する。

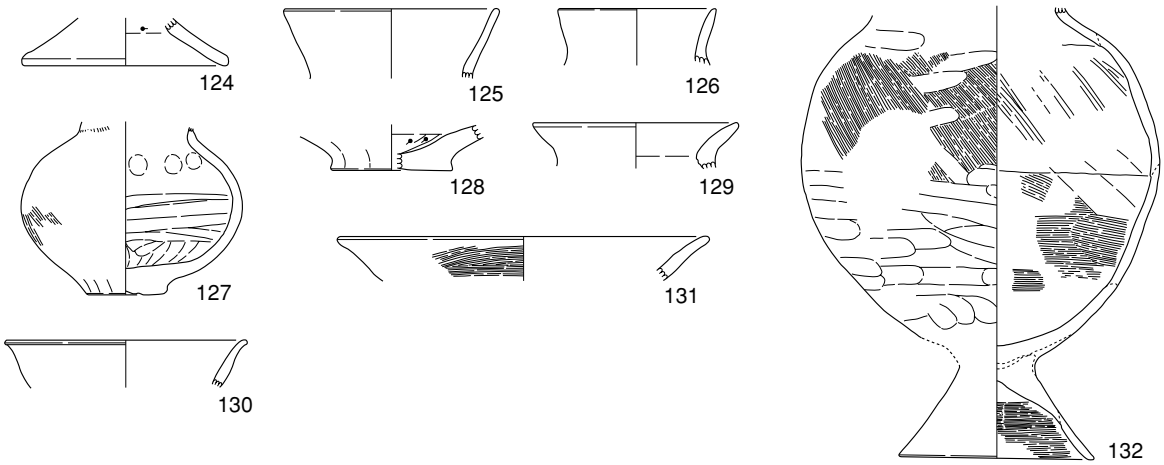
大溝最下層出土土器　大溝流水機能時の最下層となる第7・8層からは、全くといっていいほど遺物が出土しておらず第6層以上の状況ときわめて対照的である。また第6層以降の堆積層出土土器とは一見して大きな時期差があると判断される点や、それらが99BSD01に偏っている点から、むしろ第4章で提示した99B区に展開する、弥生時代末期の集落に関わる土器がほとんどと考えられる。ただその中でも132（第7層）や138（第8層）のように段丘崖（98C2SX01）下黒色層出土土器（後述）に類似するものが若干含まれ、しかも138はほぼ完形で出土している点は注目しておくべきであろう。すなわちこれら数点の土器に関しては、混入ではなく大溝への意図的な投入（投棄）があったことを推察させるのである。

次に底部埋め土である第9層の土器をみる。第9層については部分的な発掘しかおこなっていないため大溝全体の傾向については不明であるが、ごく小片ばかりである。遺物の時期も先述した弥生時代末期集落に関わるものばかりで、構築時の混入のみと考えるのが妥当である。したがって大溝開削時期に最も近い時期の土器は132と138になろう。

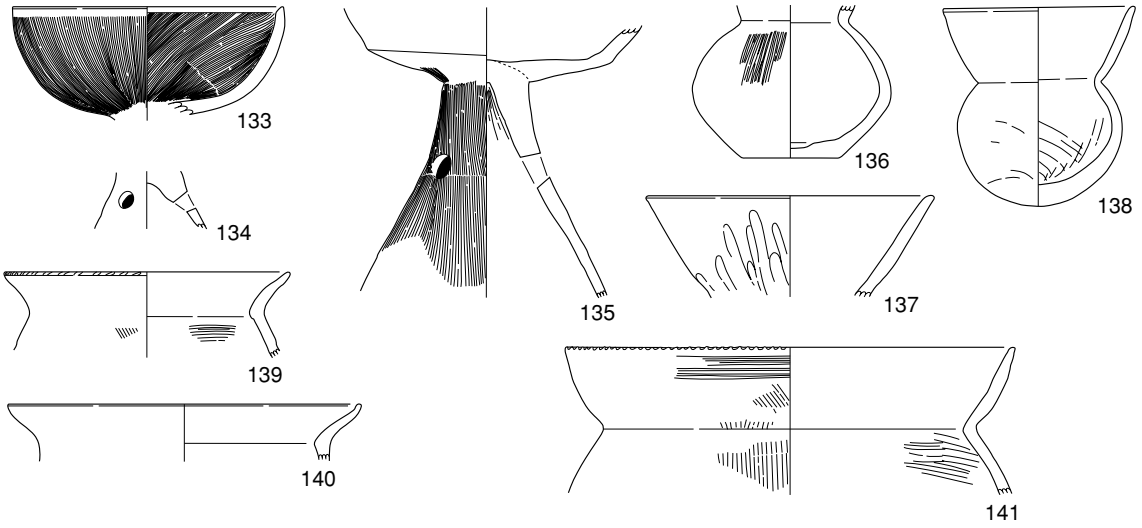
98B2SD01　大溝南端付近からは須恵器に比べて圧倒的な量の土師器が出土した。須恵器は99A区からの流下の可能性が考えられほとんどないといってよい。155は有蓋高杯で色は赤褐色、東山111号窯式であろう。156は軟質焼成で色は灰白色である。甑の把手であるが形状から古い時期が充てられよう。

土師器は高杯が主体であるが小型壺の集積もあり注目される。高杯は椀状杯部とその模倣形態で占められ強いて有稜杯部を求めれば160くらいであるが、161・163・164は杯部立ち上がりの屈曲が不明瞭な皿状杯部でこれらが古い土器群となるであろう。また170は有段脚部高杯で水入遺跡では全形を復元できなかったが西三河地域以東で分布するものである。脚部の大きさからみて171や185は大型高杯と考えられるが、185は脚部の屈折がなく全体に外反している。これに近い脚部形態は175・181・182など多数ある。椀（186 ～ 188）は口縁が外傾し内面に明瞭な面をもつ。小型壺(189 ～ 208)は完形品が多い。個体差が激しいが概ね以下のように区分できよう。(A) 口縁径が胴部径を凌駕するもの、あるいはその傾向があるもの（189 ～ 196）。(B) 胴部がその最大径で横に大きく張り出すもの（197・198）。(C) 明瞭な底面や極端に小さな口縁といったミニチュア的要素をもつ不整形なもの（200 ～ 208）。これら区分は詳細な要素で比較すると重複する部分があるが、概ね他の出土地点でも同様の傾向はうかがえる。壺はやや不整形なもの（209）は指ナデ調整仕上げ。一方210は小型壺形態（2）に対応するもので、丁寧なつくりである。胴部下半のハケ目調整が明瞭に残る。大型壺は有稜口縁で2態あるが、212は口縁の外

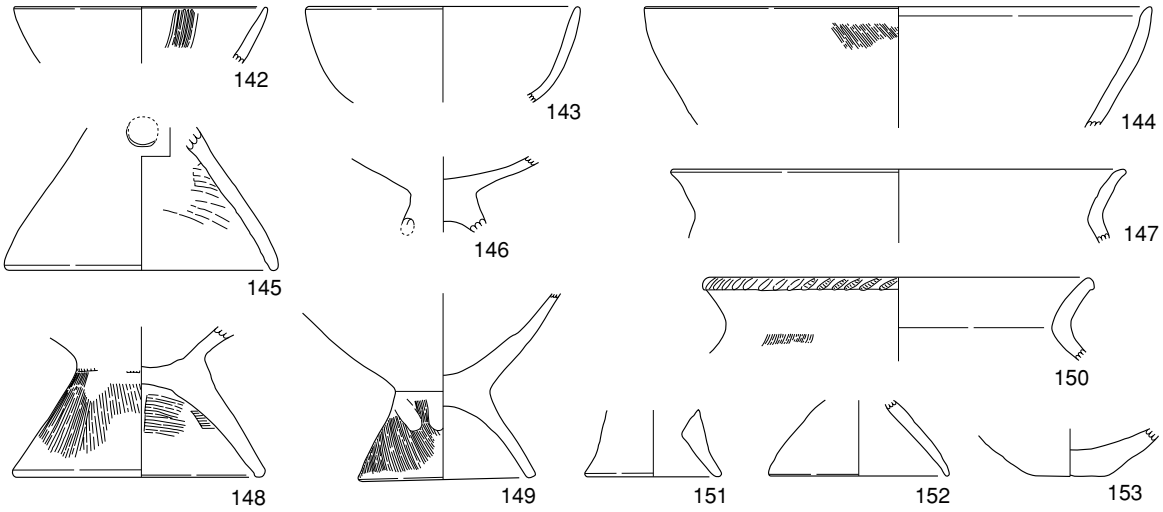
99BSD01-7層



99BSD01-8層



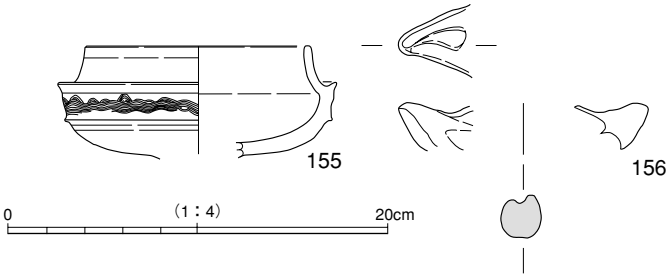
99BSD01-9層



99ASD01-9層

第 87 図　大溝最下層出土土師器実測図

反が大きくまた胴部上半部に最大径、明瞭な底面など特徴的である。甕はハケ目調整・指ナデ調整で大別して配列した。213・215・216は台付甕。215は口縁端部を面取りするように指ナデするため上端に少し摘まみ上げたような形状となる。216はハケ目調整後に胴部上端付近に1条の凹線が一周する。指ナデ調整甕（217～226）では223が完形状態で出土した。外面は明瞭な焦げがみえ、胴部半ばに外部から打ち欠かれた穿孔がある。口縁が「コ」字形に屈曲するのが特徴である。224は直線的な口縁で端部は内面側に肥厚させてある。色調も明るく98C2SX01下黒色層の甕に近いものがある。230は甑であるが7世紀代の可能性もある。



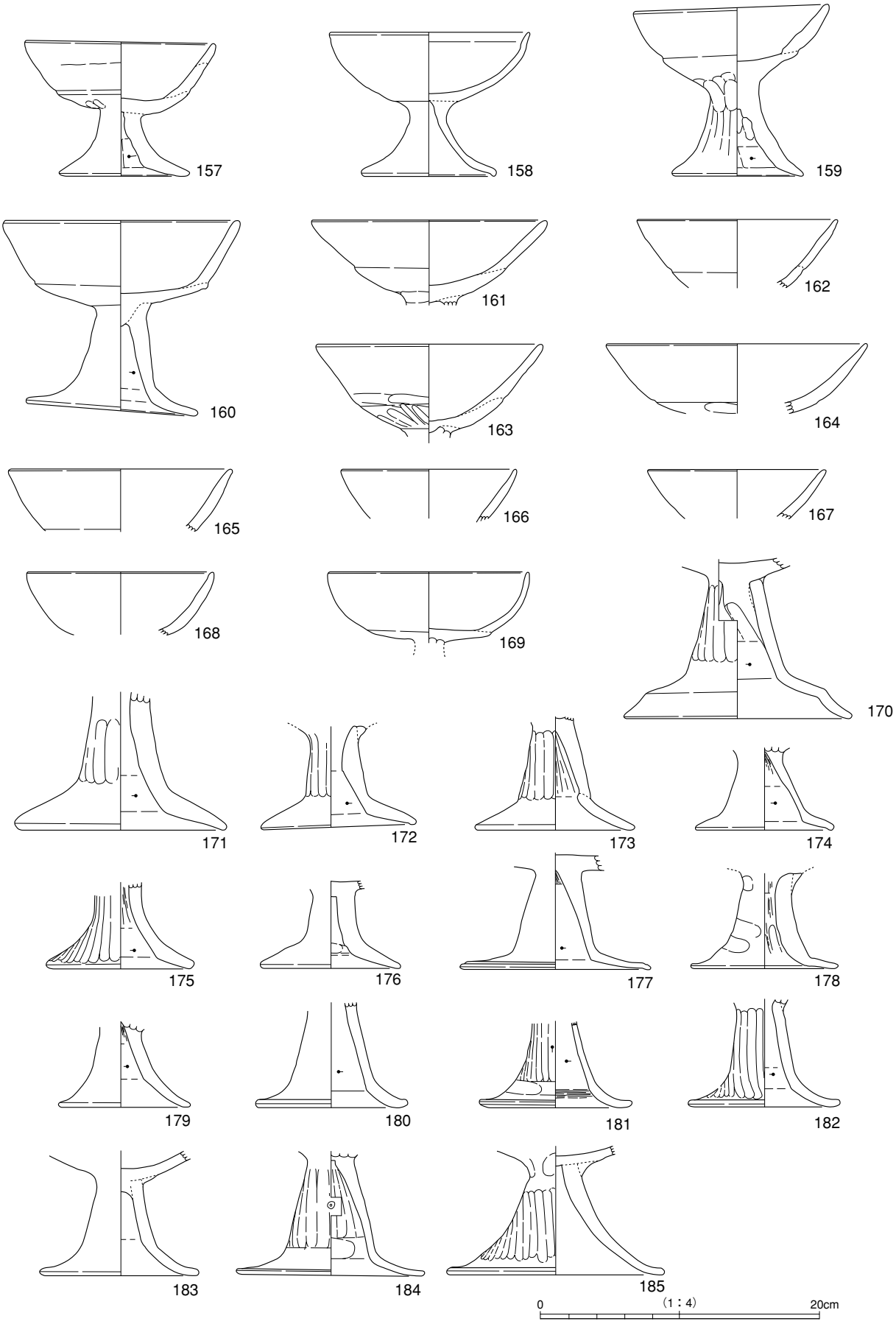
第88図　98B2SD01出土土師器実測図

99ASD01　大溝のうち約40mが該当する。ほぼ全域から大量の須恵器・土師器が出土したが、とりわけ調査区南部のグリッドでⅠH9a･10a付近が多かった。特に須恵器の集中がピークに達する地点でもある。

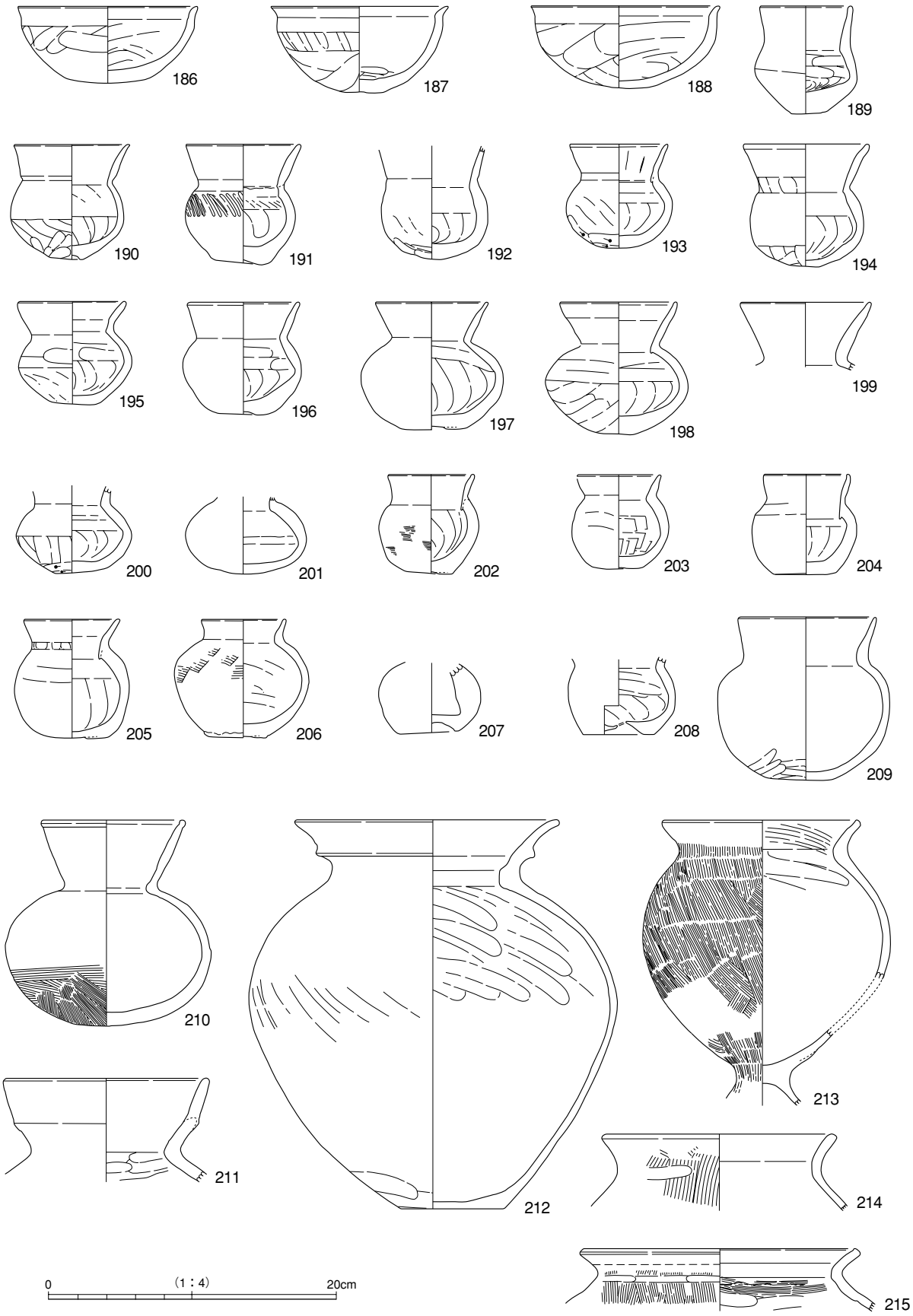
須恵器は杯蓋・杯身が主体である。時期幅は東山111号窯式～城山2・3号窯式で硬質な焼成、明灰色・明赤褐色で精良な胎土から猿投窯でも東山地区での生産が考えられる。しかし一部には248のようにきわめて軟質な焼成のものも含まれる。252・253は東山111号窯式の無蓋高杯。254は明赤褐色の有蓋高杯で238とセットかもしれない。255は甕の口縁だが波状紋がない。256は東山11号窯式の大型甕である259は別個体と判ぜられ大型甕は2個体あったことになる。257・258は通常サイズの甕。260は器台脚部である。意匠は円形・方形の透かしと凹線の組み合わせで構成される。脚端部は面取りするのみ。焼成はやや軟質で橙色である。窯式は不祥だが6世紀代と考えられる。

土師器の主体は圧倒的に高杯である。ただ杯部が古相を示すものが262くらいで、他は椀状杯部（263～）およびそれと皿状・有稜杯部を折衷したような杯部（289～300）である。ただ椀状杯部にもバリエーションは多く、比較的明瞭な杯部底面のあるもの（A類：263～282）と内面が全体的に内湾するもの（B類：283～288）とに大別され、さらに前者は口縁端部形状で細分される。それは（A1）特に加工せず直立させるもの（263～268）、（A2）端部に縁を作るように横方向へわずかにつまみ出すもの（269～275）、（A3）端部を外傾させ内面ナデもしくは面取りをするもの（276～282）である。これに対して脚部の変化は乏しいが、短脚（277・278）や脚端部を下方につまみ出すもの（266・279・281など）がある点は注目される。その他271は脚柱部に未貫通の孔がある。後者については284・285のように口縁端部に至るまで内湾傾向にある点が注目される。合成杯部とした一群についてはこれを細分すると個体差に行き着くほどである。ただその中でも295・296のようなハケ目調整痕が明瞭なものは口縁端部を上方につまみ上げており、甕口縁部の加工との共通性がうかがえる。

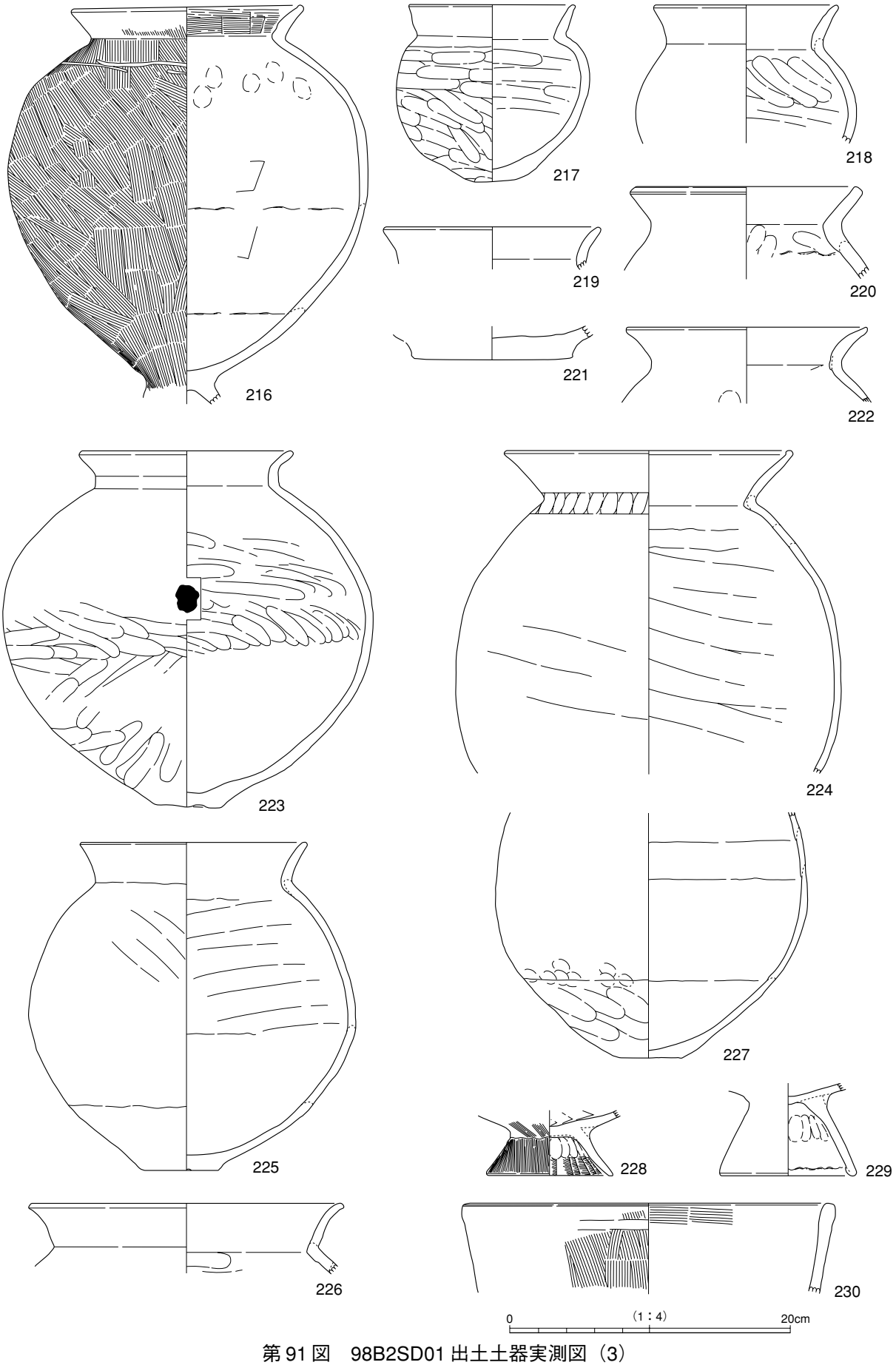
ところで99ASD01では大型高杯が多い点も特筆される。301と304は口縁・脚端部を面取りする他、杯部立ち上がりに突帯を表現する。突帯は305でもみられるがこちらはハケ目調整。明瞭なハケ目調整の306は口縁端部をつまみ上げており295・296と共通点があるが、杯部立ち上がりは明瞭で古相の高杯をイメージしているようである。このように随所に同時期の通常サイズ高杯と共通する点を有しながら、



第 89 図　98B2SD01 出土土器実測図（1）



第 90 図　98B2SD01 出土土師器実測図（2）

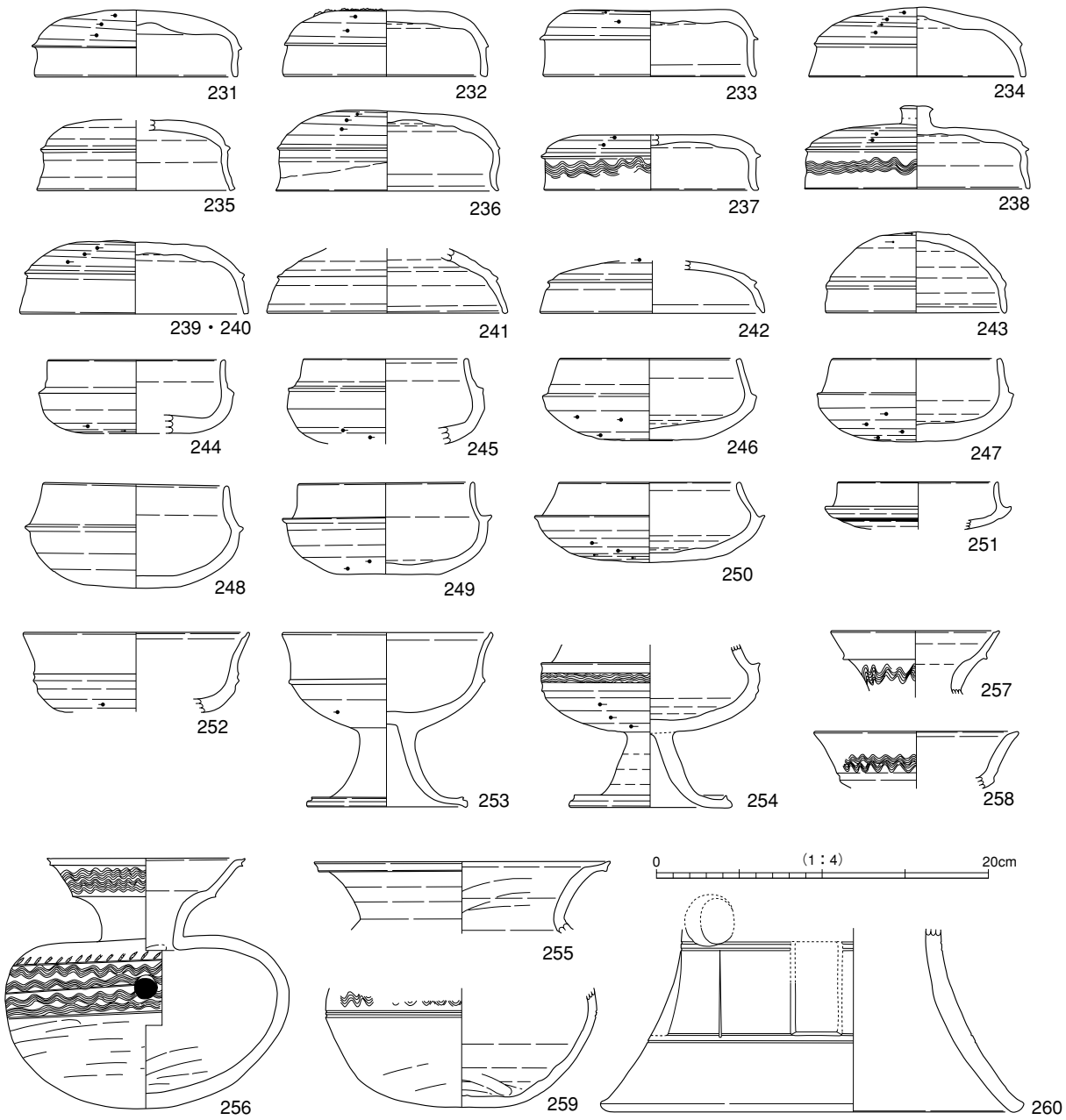


第 91 図　98B2SD01 出土土器実測図（3）

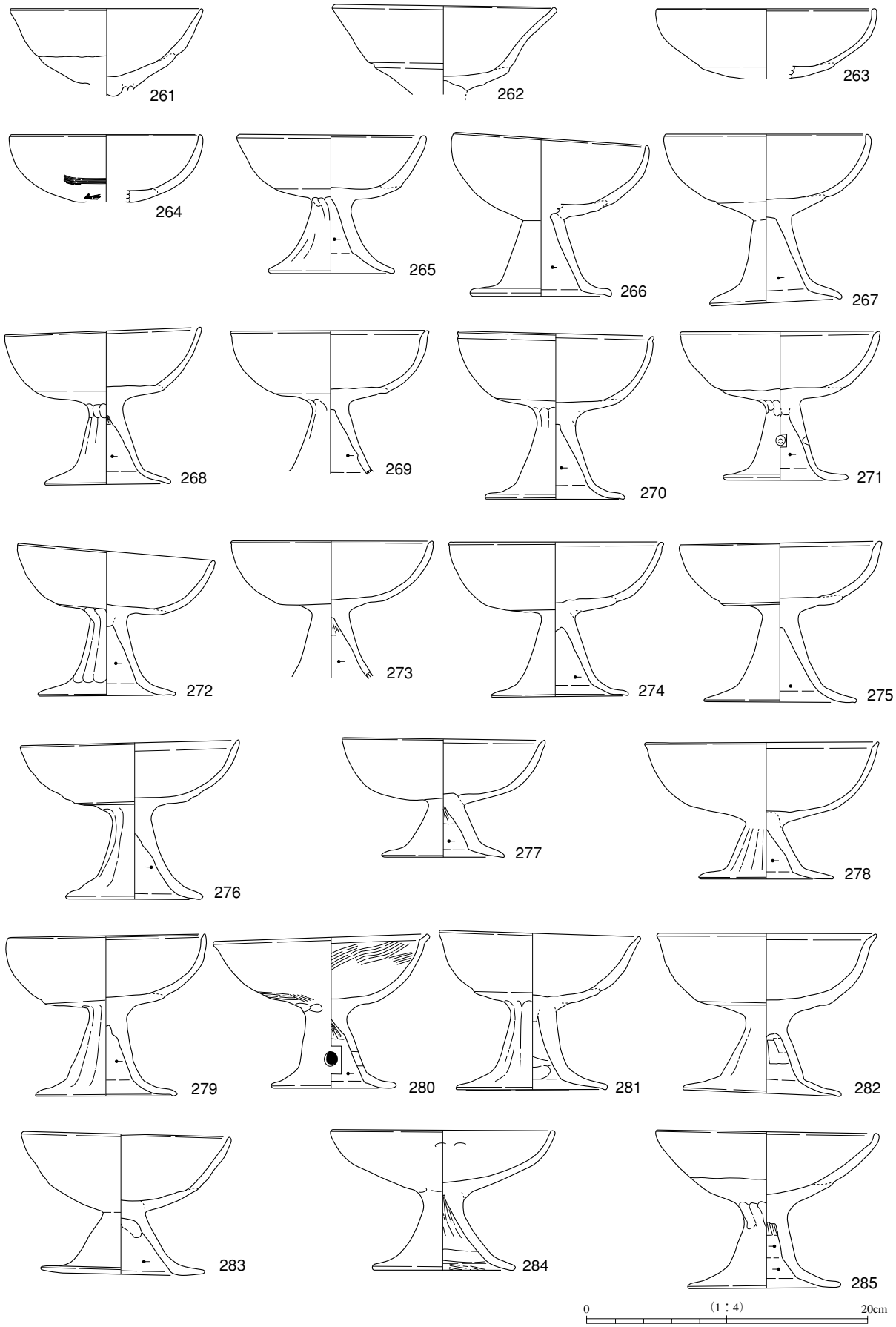
一時期前を彷彿とさせる意匠を採用するところに大型高杯の特殊性がうかがえる。

椀は椀形杯部高杯の口縁端部分類（1）～（3）が該当する他に（4）内湾口縁（313～316）がある。しかしこれはあくまで口縁部のみに注目した場合で、底部が明瞭な平底になるもの（308・314・316）と丸底あるいはその傾向があるものという分類も可能である。高杯よりも個体差が激しい印象が強い。317は小型の鉢。318はミニチュア土器で丸底椀をイメージしたもの。319は蓋もしくは器台。

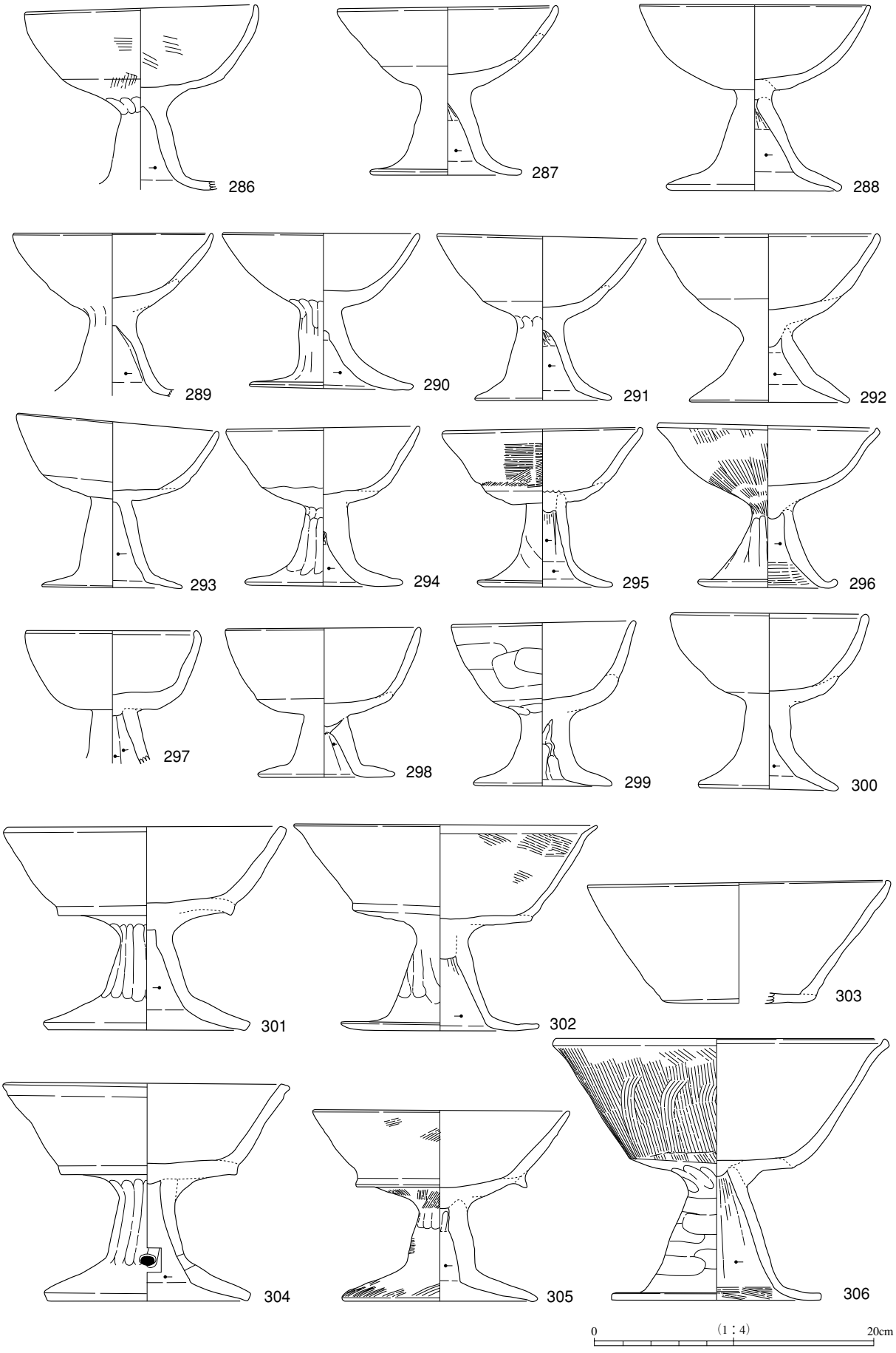
壺類は小型壺より中型壺が目立った。まず小型壺では98B2SD01で提示した3分類以外にハケ目調整で口縁端部つまみ上げという個体（338）がある。また324は胴部半ばに焼成前穿孔があり、口縁が全体に外反する点が注目される。より須恵器の瓶に近い形状である。中型壺は、(1) 口縁が大きいもの（341）、(2) やや平らな胴部に直立する口縁のいわゆる直口壺（342～344）、(3) それに比べてやや短い口縁に



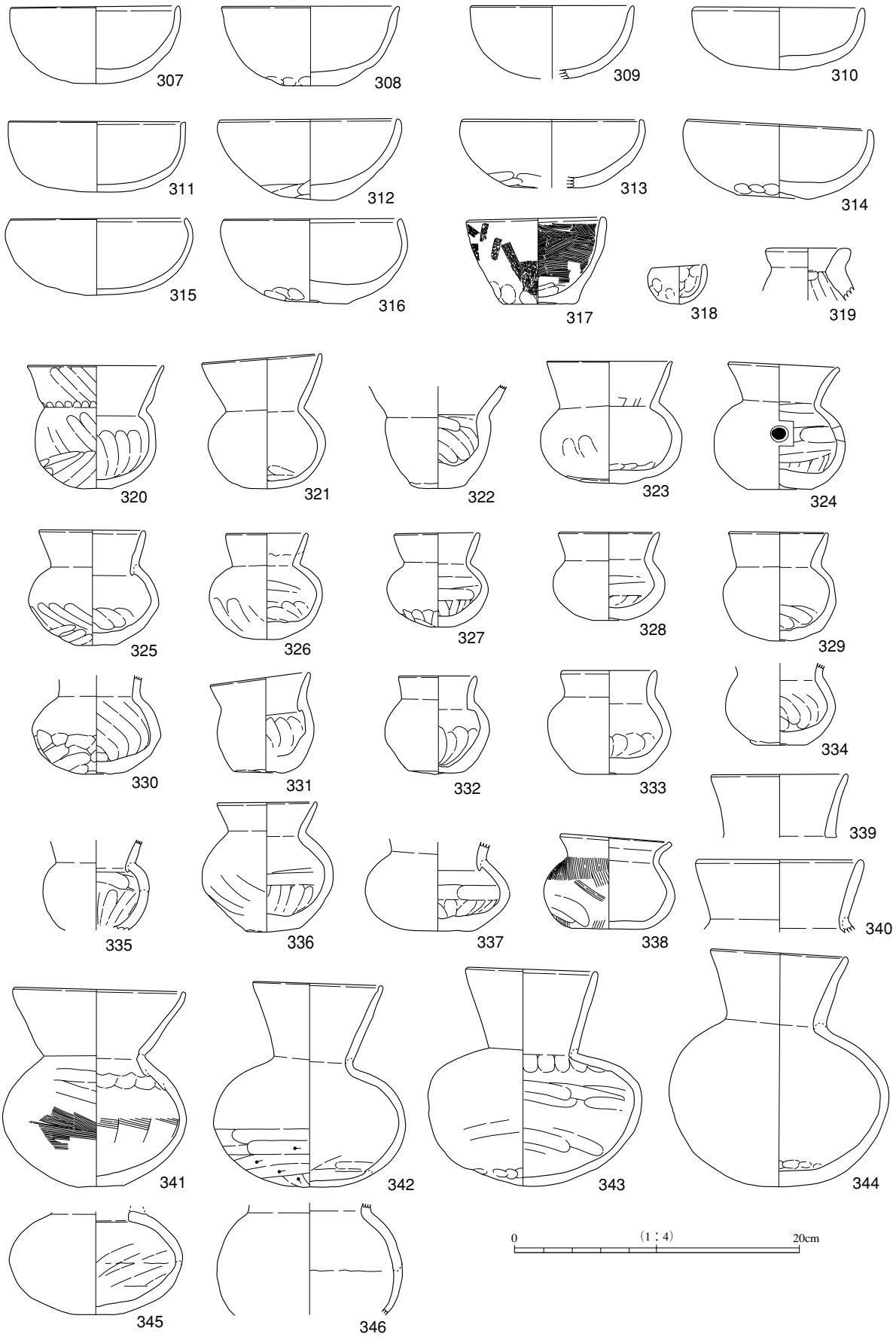
第92図　99ASD01出土土器実測図（1）



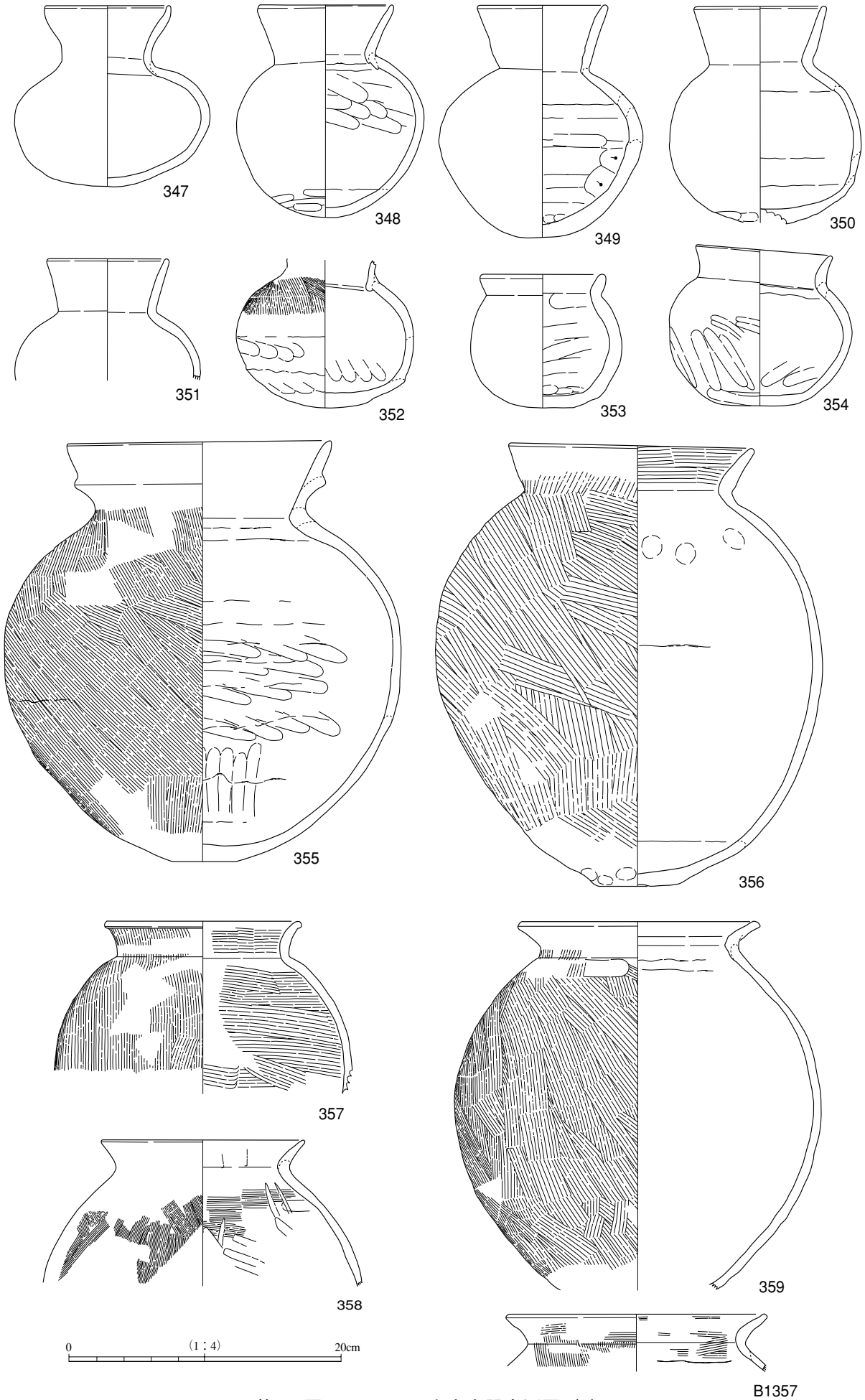
第 93 図　99ASD01 出土土器実測図（2）



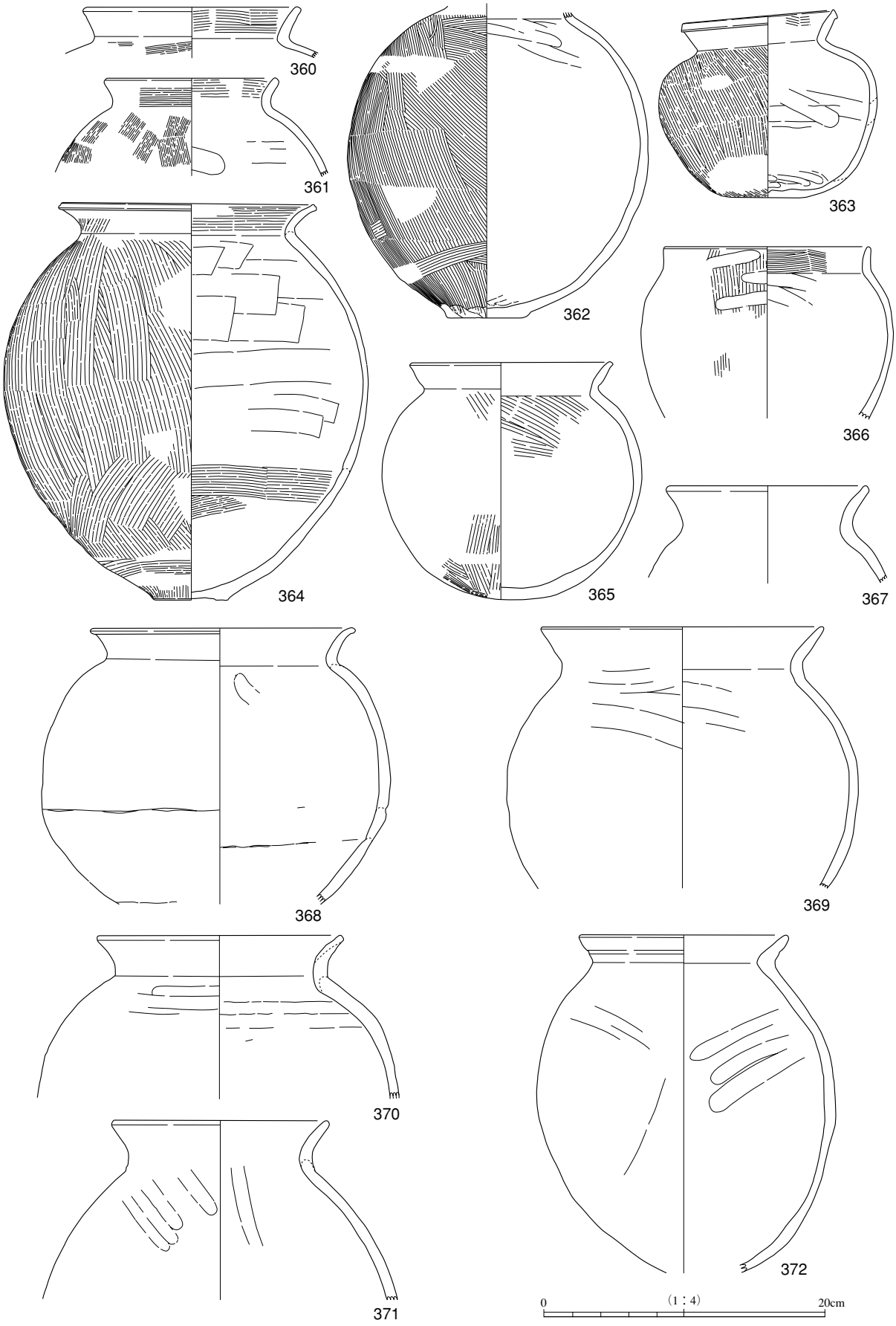
第 94 図　99ASD01 出土土器実測図（3）



第 95 図　99ASD01 出土土器実測図（4）



第 96 図　99ASD01 出土土器実測図（5）



第 97 図　99ASD01 出土土器実測図（6）

球形胴部の組み合わせ（348 ～ 351）が基本である。広口短頸壺（353・354）もあるが、むしろこれは広口・平底の小型甕（363）の影響が考えられる。大型壺では有段口縁壺（355）がある。系譜上 99BSD01 出土の 537 に後続するとみられる。

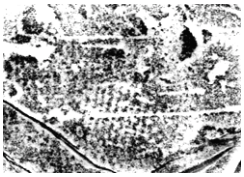
甕類で特筆されるのが韓式系土器の影響を受けたとみられる小型甕（363）である。広口な口縁端部外面を面取りして上方へつまみ上げ、底部は平底から丸みのある立ち上がり、胴部上半で肩が張ったような形状である。それ以外には「く」字形口縁のハケ目調整甕（359・364）があるが、本来台付きとなるところを省略したのが364である。これらハケ目調整甕と指ナデ調整甕（367 ～ 372）の時期的併行関係は単純に決しがたいが、例えば370の緩い口縁端部つまみ上げに364との共通項を見出すことが可能である。

99BSD01　該当する大溝は約 80m 分である。99ASD01 に比べて標高が上がるためその分堆積層厚が薄くなる。遺物包含量もやや減るが、時期幅が先後に広がる点が特徴である。加えて注目される遺物も含まれ、当該地点が長らく古墳時代中期における集落域の中心であったことをうかがわせる。

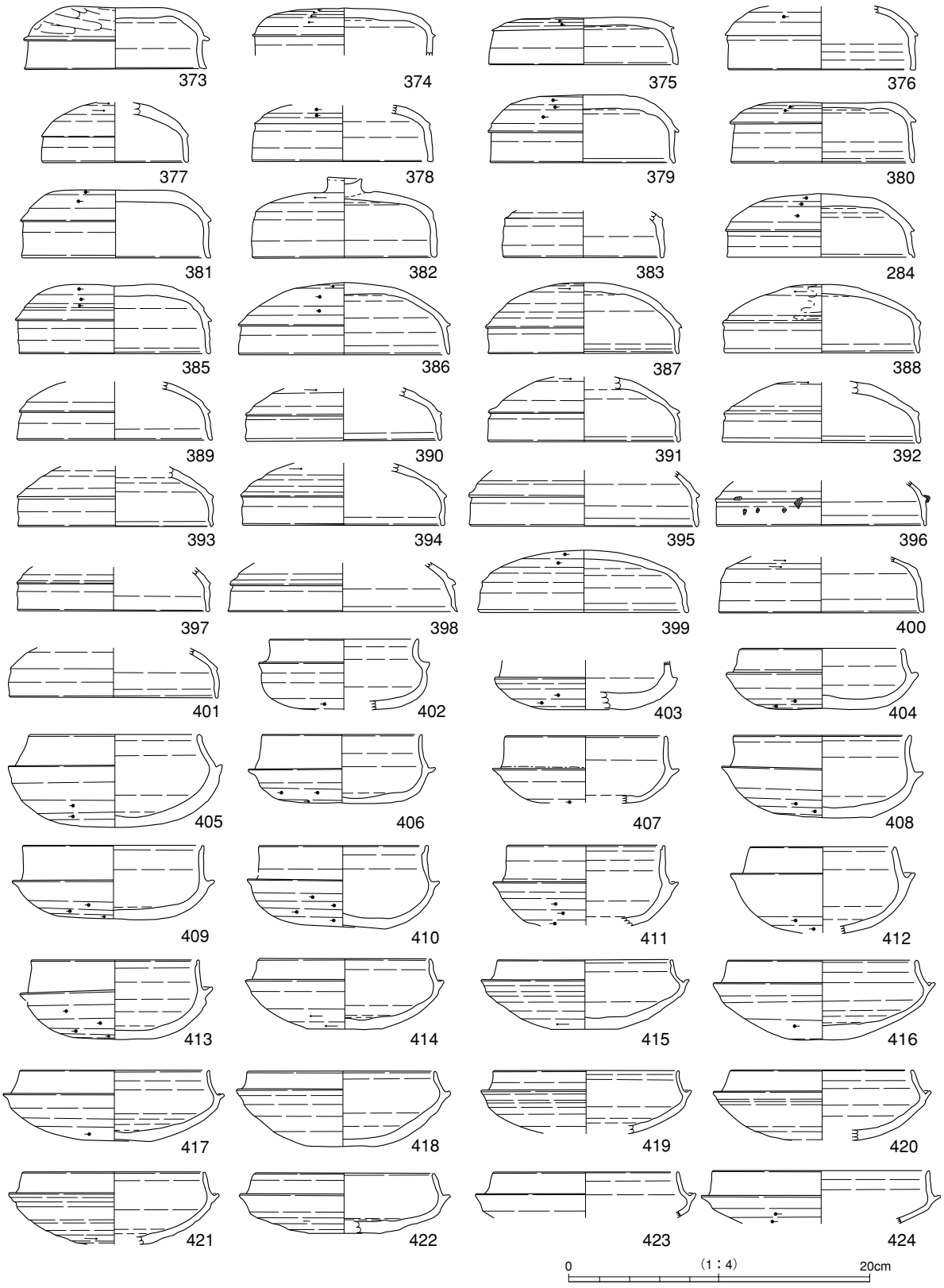
須恵器の時期は東山 111 号窯式～ 6 世紀後半代で、99ASD01 に比べて 6 世紀代の須恵器が充実している点が重要である。杯蓋・杯身の出土量は遺跡内で最も多い。注目されるのは 373 である。胎土は精良だが軟質焼成で、特に外面は吸炭処理をしたかのように黒色である。蓋部は全面静止へら削りである。形態から東山 111 号窯式と判ずるが、生産地も含め検討を要する。425 は無蓋高杯。 6 方に透かしが入る。時期は東山 111 号窯式である。瑤も数個体分出土したが時期が少しずつ異なる。428 は 6 世紀後半代。大甕は 2 個体分ある。431 は一部に歪みが生じているが精緻な平行タタキや内面の丁寧なナデ消し、焼成は硬質で明灰色である。東山 111 号窯式の大甕で全形をうかがい知る稀少な例である。432 は 6 世紀代の大甕である。

韓式系軟質土器は竪穴建物99BSB01の西方で小片が確認されたがそれぞれ別個体である。3225は黄褐色で内面指ナデ調整、3226 は明赤褐色で 3225 よりやや硬い。いずれも明瞭な正格子タタキ痕がある。

土師器高杯は99ASD01に比べて古相のものが若干ながら混じる。433は大振りな有稜杯部外面に横方向のハケ目が一周する。その他有稜杯部の一群（433 ～ 440）のうち 439 は脚柱部に未貫通の孔がある。椀状杯部の一群は 99ASD01 で示した分類がほぼ合致するようであるが、99ASD01 では A 類が主体を占めていたのに対しこちらではB類がややA類を凌駕する印象がある。これは須恵器の該当する時期幅が99ASD01よりも長くなるのと対応する事象と考えられ、椀状杯部B類の時期が6世紀代を主体とすることをうかがわせるものである。特に口縁端部に至るまで内湾するもの（476・478）の存在は椀状杯部高杯の編年を考えるうえで要点になると思われる。その他、480 は有稜脚部と椀状杯部が組み合わさった事例である。482は大きめの脚端部内面の一部に布目が残る。杯部は不明だが脚柱状部は筒形に造る。土師器椀は99ASD01と同様に個体差が大きいが、493・494・497のように内湾指向が強い一群もみられる。ミニチュア土器（498・499）も 99ASD01 同様に少量である。ただしこちらでは厚みが増しており異なる印象を受ける。


第 98 図　482 脚部内面布目拓影

小型壺は 98B2SD01 での分類で（A）が 501 ～ 506、（B）が 507 ～ 519、（C）が 500 にそれぞれ該当する。それ以外には、520では胴部半ばに焼成後に礫のような

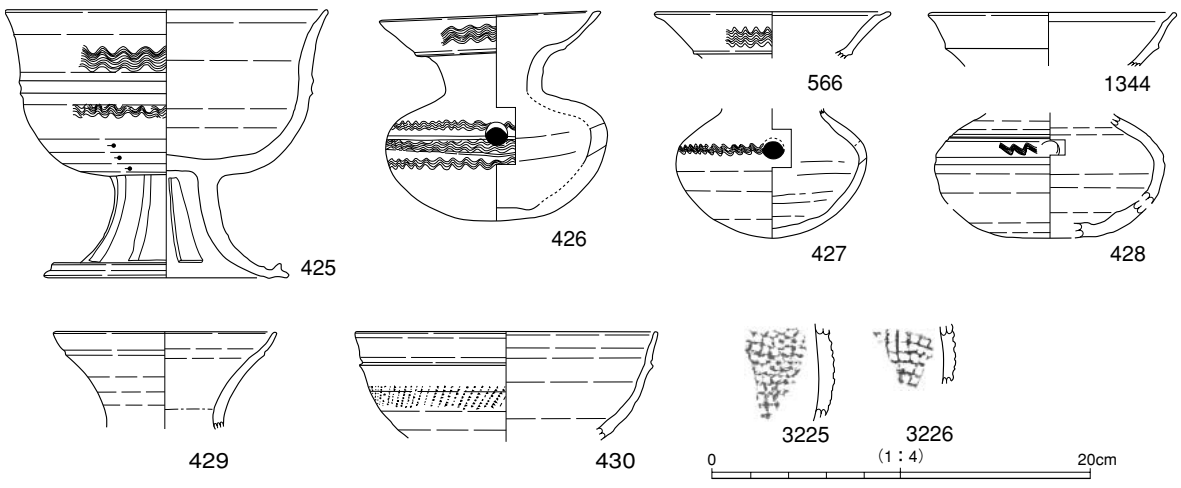


第 99 図　99BSD01 出土土器実測図（1）

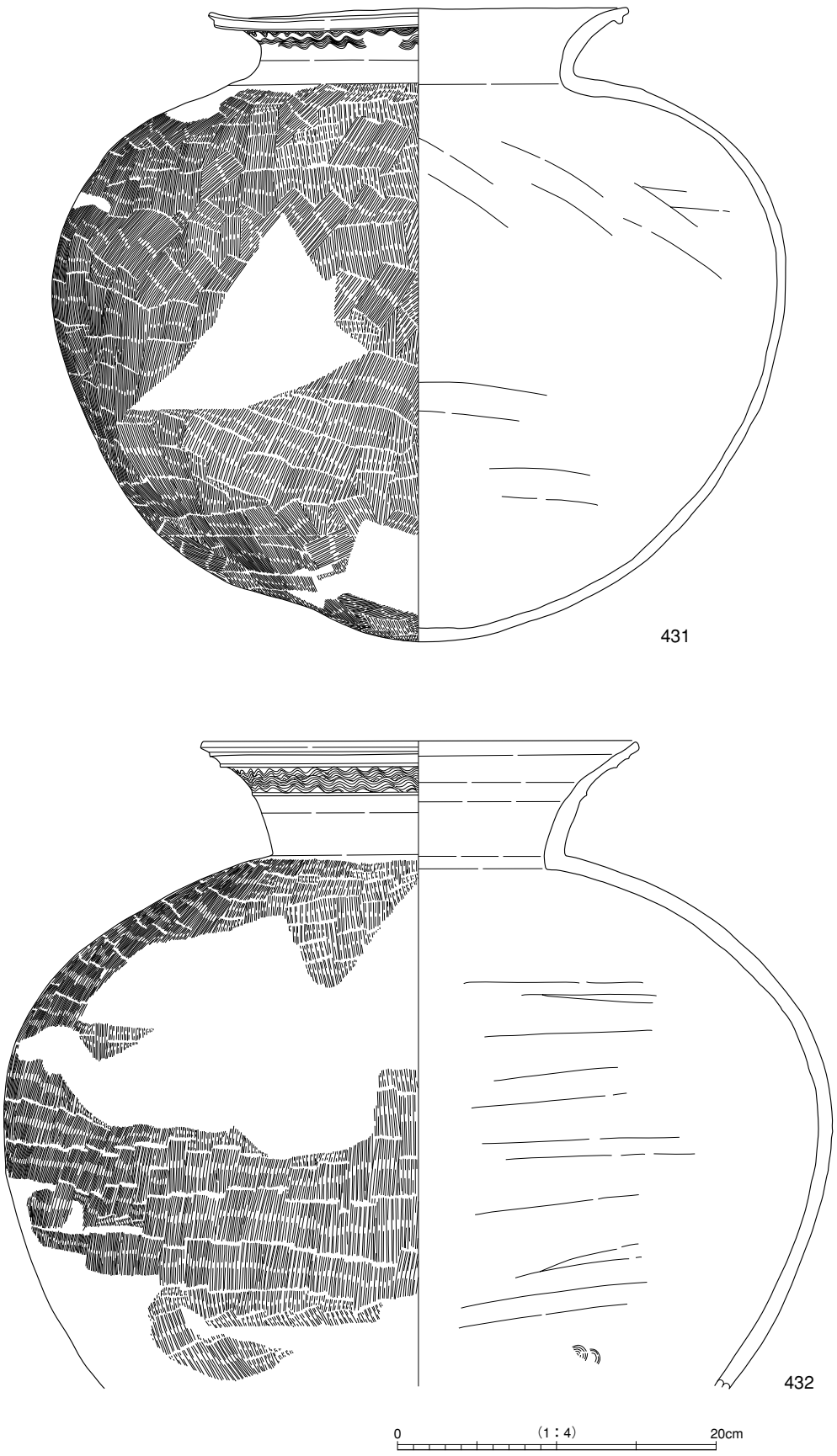
硬いもので孔をあける点、522は有段口縁壺をモチーフにしている点が注目される。中型壺は直口壺タイプ（524～528）とそれ以外に区分できるが後者はさまざまである。大型壺（536～541）では有段口縁の系統が目立つ。537は355に先行するハケ目調整壺で、538は口縁直立、539と540は口縁外反でそれぞれ別れる。541は「コ」字状口縁の壺または甕である。

甕では台付甕口縁に2形態ある。ひとつは口縁端部が平らに面取りしたようになるもの（553）、もうひとつは尾張・美濃地域の宇田型甕口縁の影響下にあるもの（554・555）である。いずれも宇田式併行期の尾張東部～西三河地域に分布する（早野2003）。548は平底甕だが口縁部形状は宇田型甕のそれに影響されたとみられる。558は伊勢型甕である。明黄褐色で胴部内外面の細かいハケ目調整が特徴で、伊勢地域から搬入された可能性が高い。伊勢型甕も、口縁端部を上方につまみ上げさらに外面を面取りするように仕上げるという特徴があるが、その影響を受けたとみられるもの（559）もある。その他、韓式系土器の影響を受けた小型甕（563）は363よりも撫で肩な胴部形状でより後出的か。564・565は6世紀後半代と推定されるが、厚手の胴部にくびれの少ない「く」字形の頸部そして直立気味の口縁が特徴的で、前代の甕に比べて粗製という印象が強い。指ナデ調整甕は古相を示す胴部下半が直線的な立ち上がりのもの（567～569）、胴部肩の張りが強いもの（578～580）などあるが、いずれもハケ目調整甕のような直接的ともいえる外部地域産甕の影響はうかがえない。むしろ578の肥厚した頸部は565のような長胴甕の頸部へ通じるものがあり、在地産甕の系統を示していると考えられる。575は椀状杯部高杯の可能性もある。内面に焼成前の線刻がある。

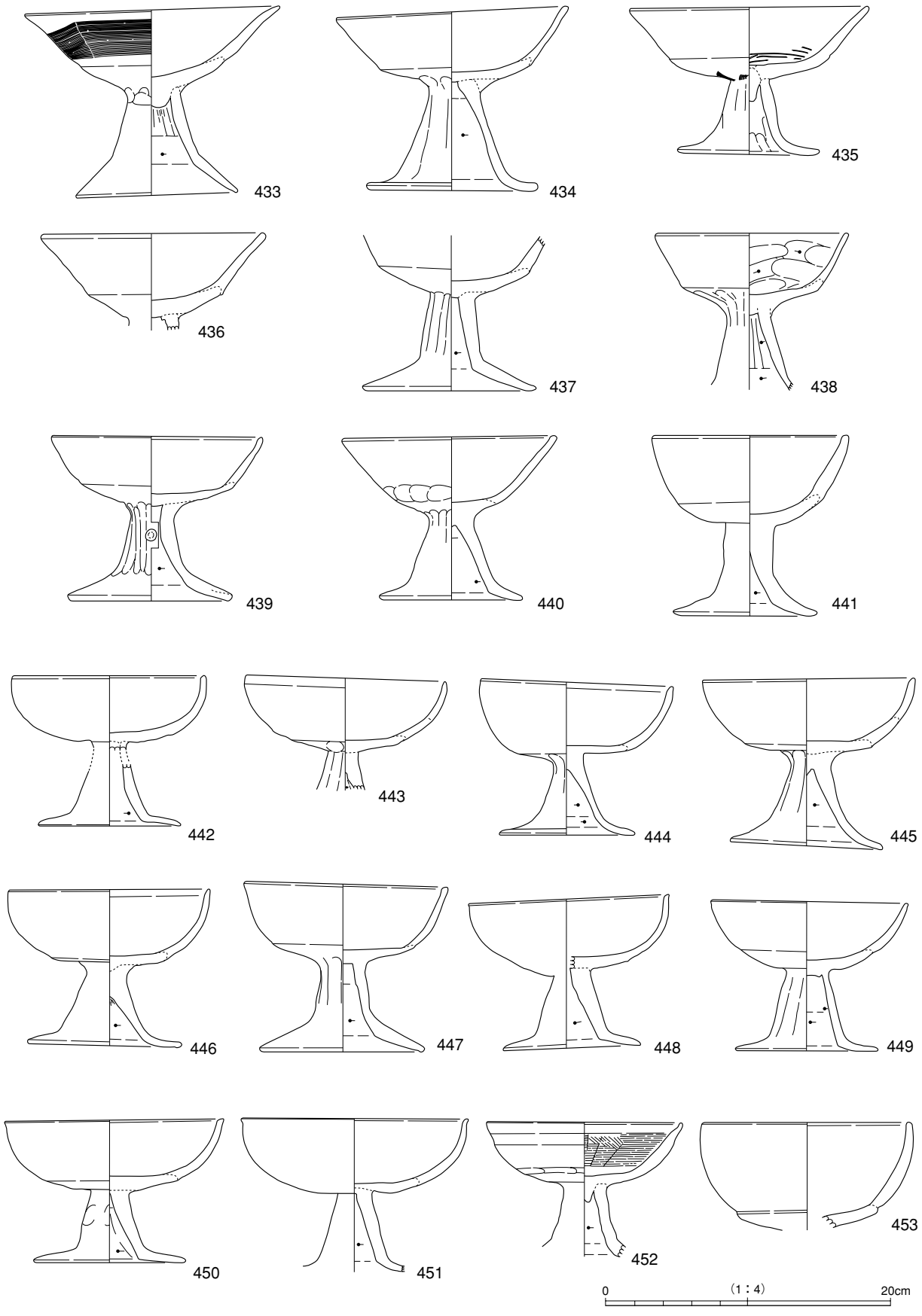
99CSD01　大溝北端部約20m分にあたる。局所的に集中した廃棄土器群（99CSX13）は区分して提示するが、遺構内遺構という性格上両者の採取区分は厳密ではない。まずは99CSD01であるが、古相を示すもの（587～590）は少ない。椀状杯部高杯が主体で、短脚化も顕著である。大型高杯（604）は復古調で屈折脚高杯のイメージをよく伝えているが、脚端部を下方につまみ出し口縁端部もつまみ上げるなど、椀状杯部高杯の製作手法が表れている。606は焼成後に胴部を破孔した小型壺である。台付甕（619）は直線的に外傾する口縁端部が肥厚する。台部との接合方法は別作りの甕本体部に台部を接着するもので



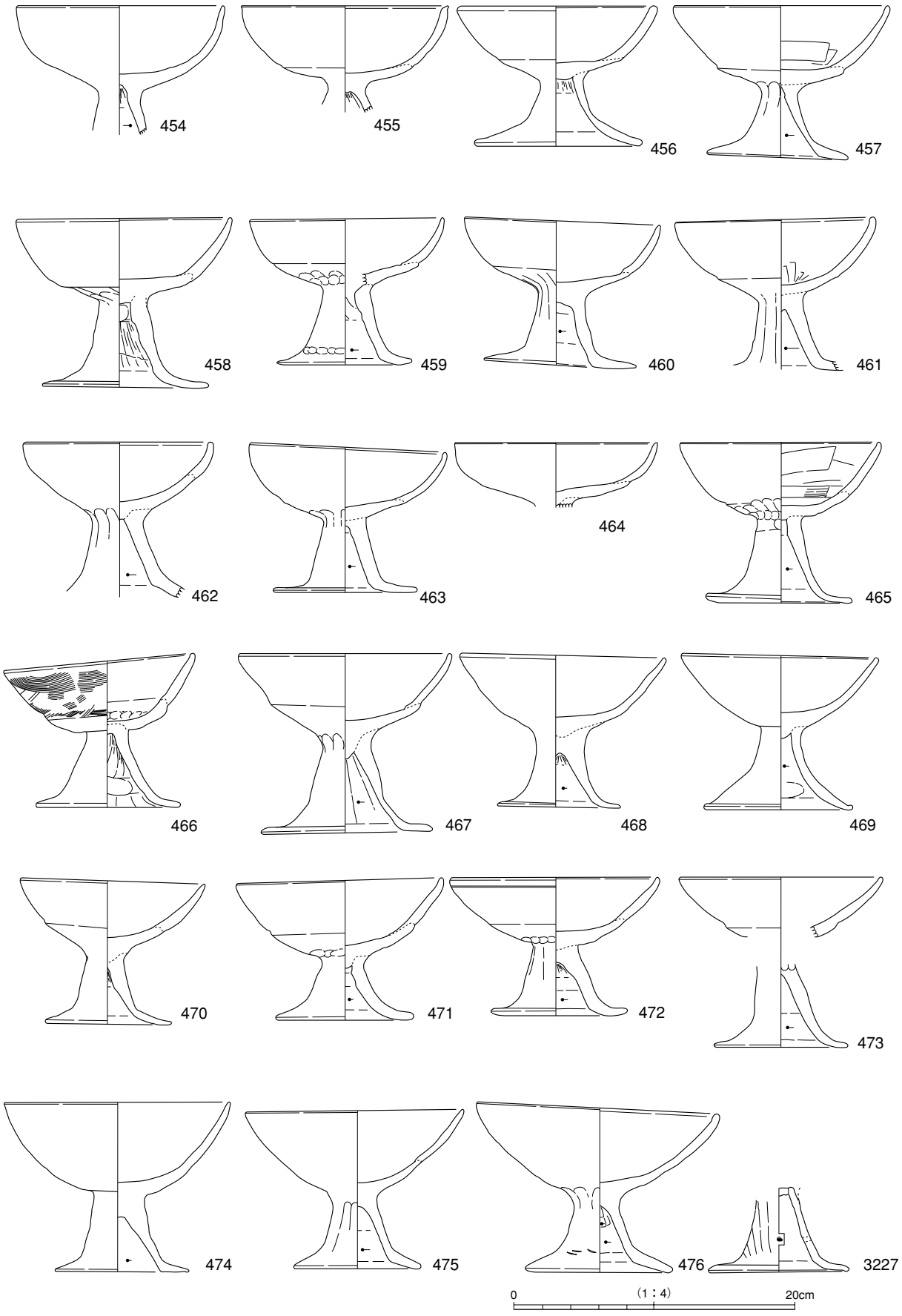
第100図　99BSD01出土土器実測図（2）



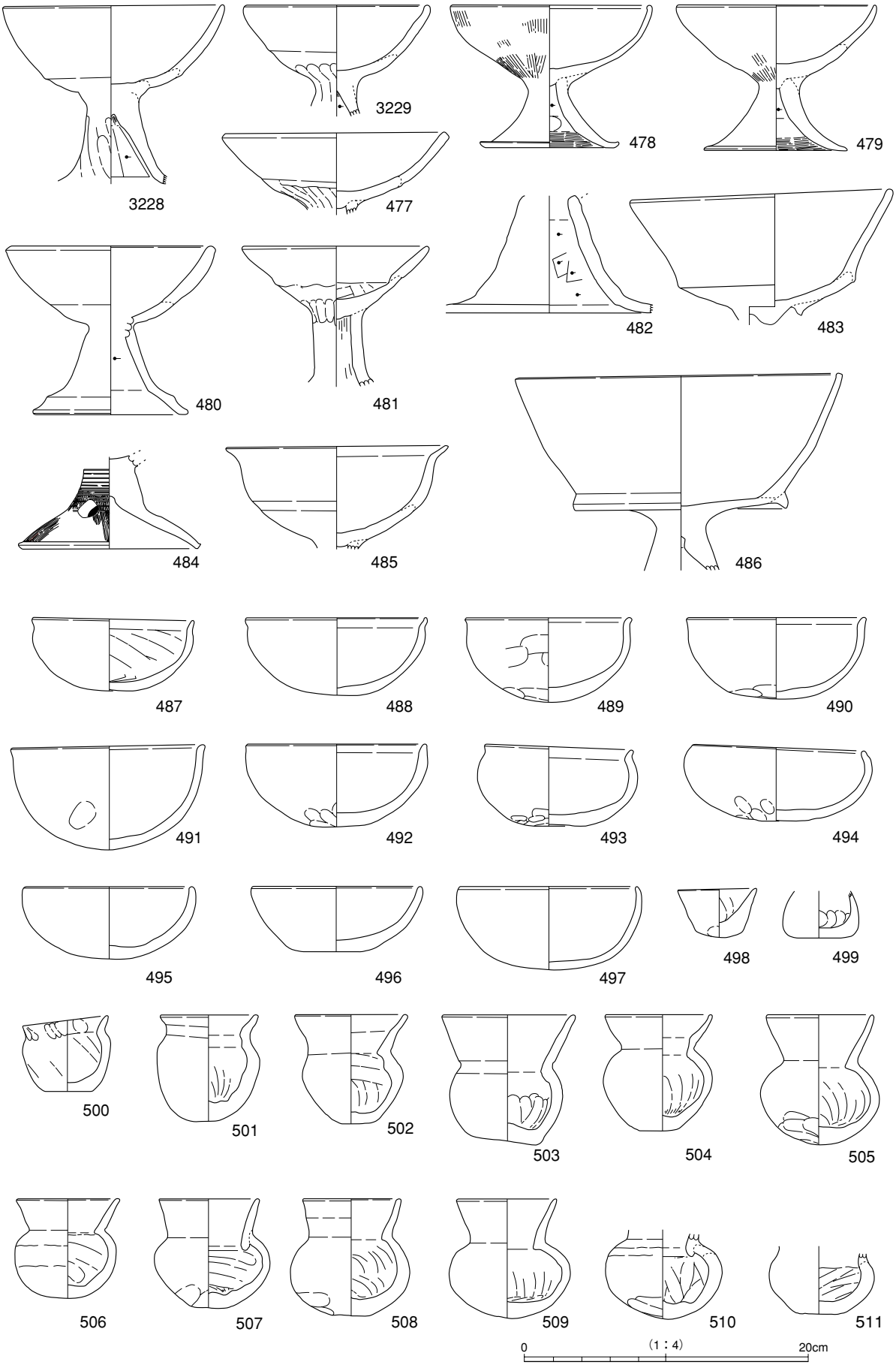
第 101 図　99BSD01 出土土器実測図（3）



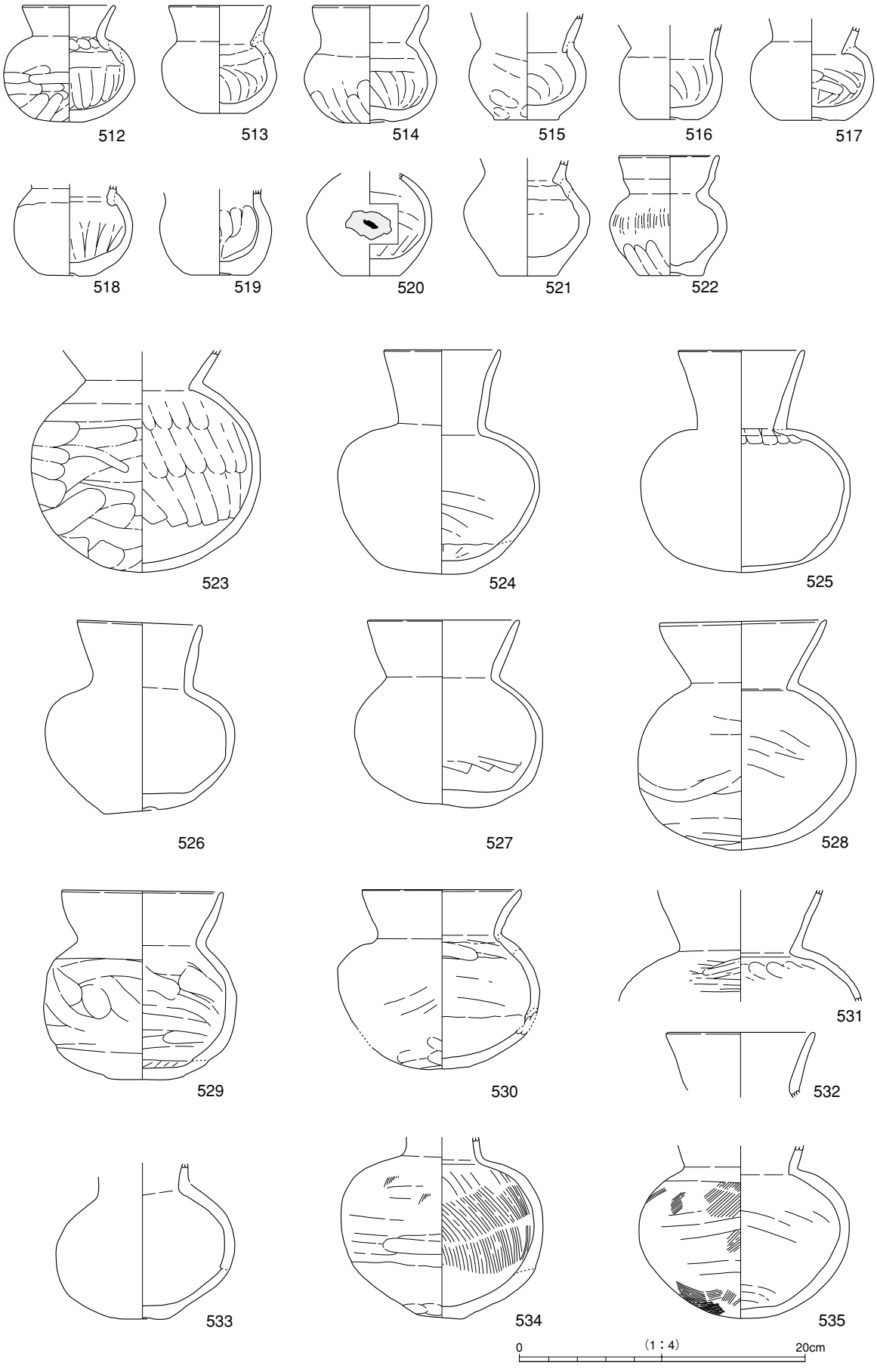
第 102 図　99BSD01 出土土器実測図（4）



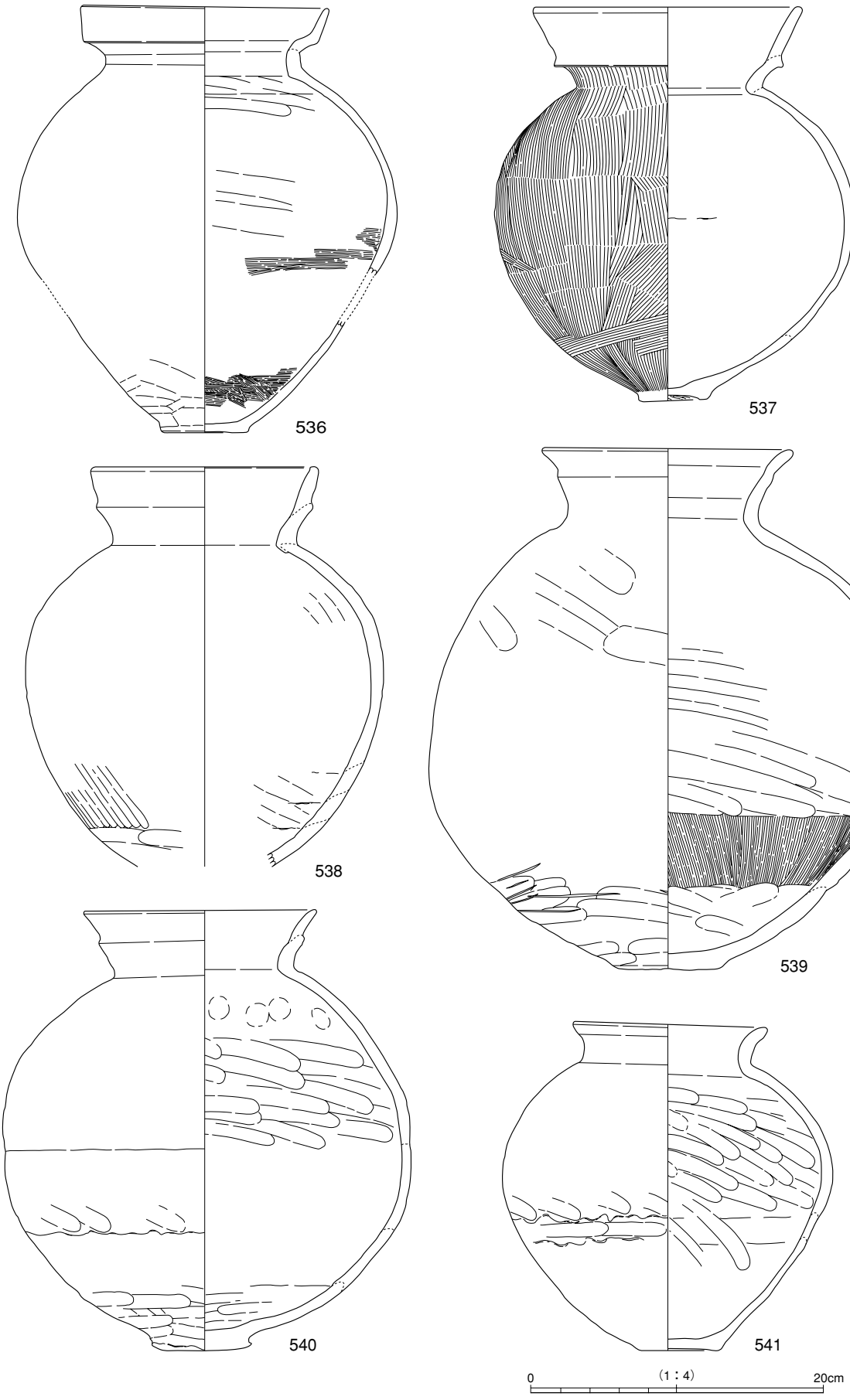
第 103 図　99BSD01 出土土器実測図（5）



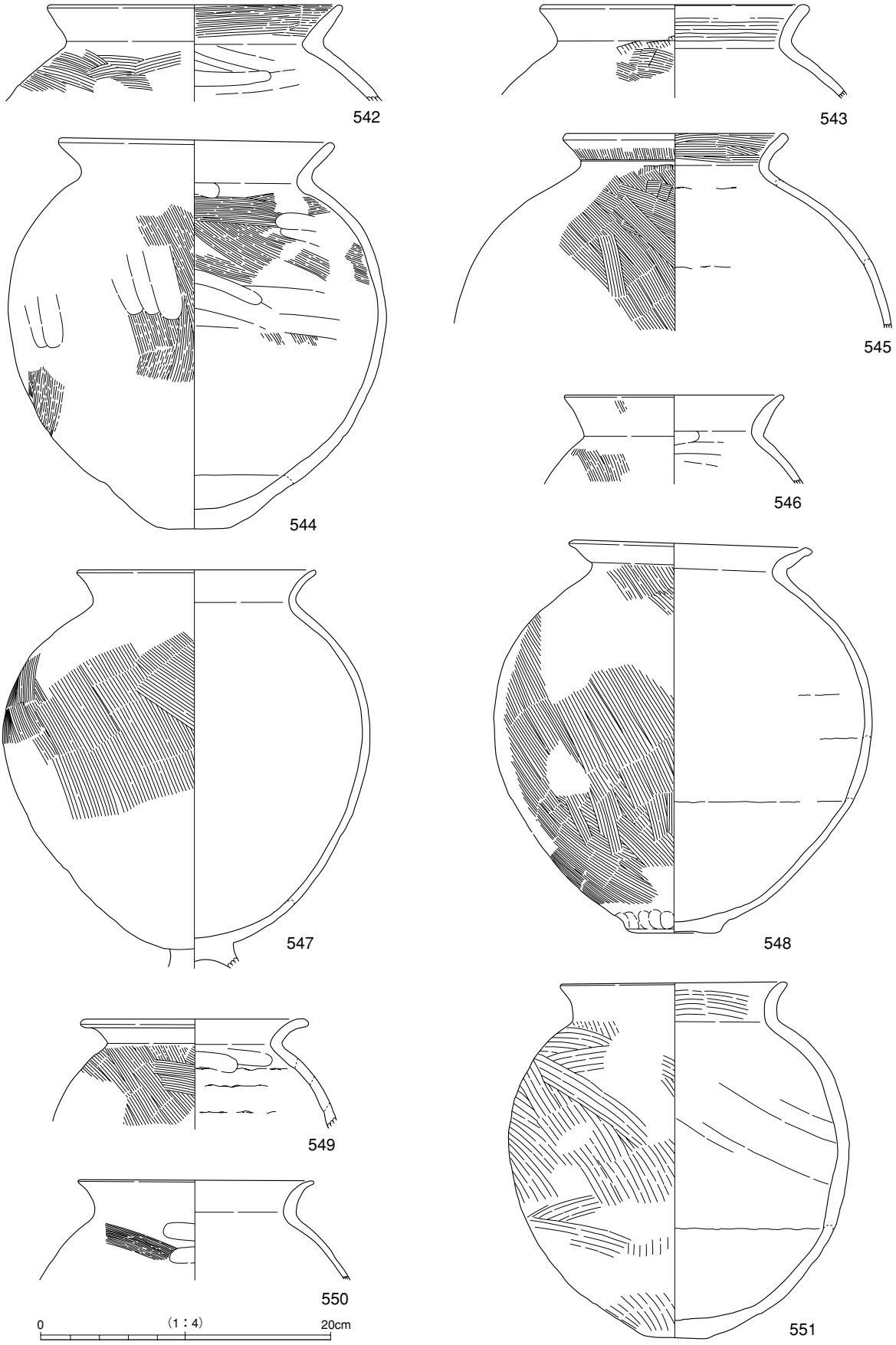
第 104 図　99BSD01 出土土器実測図（6）



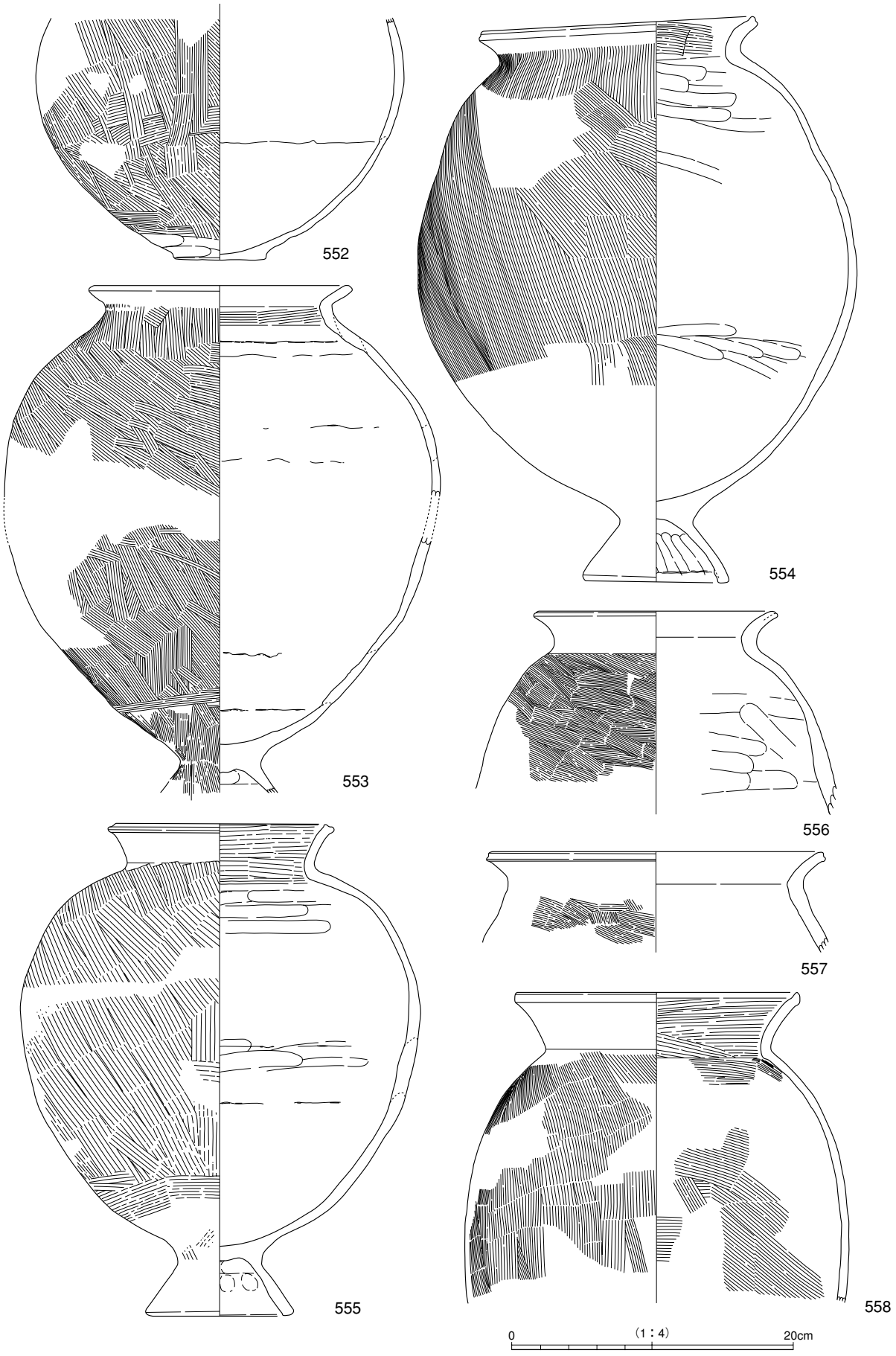
第 105 図　99BSD01 出土土器実測図（7）



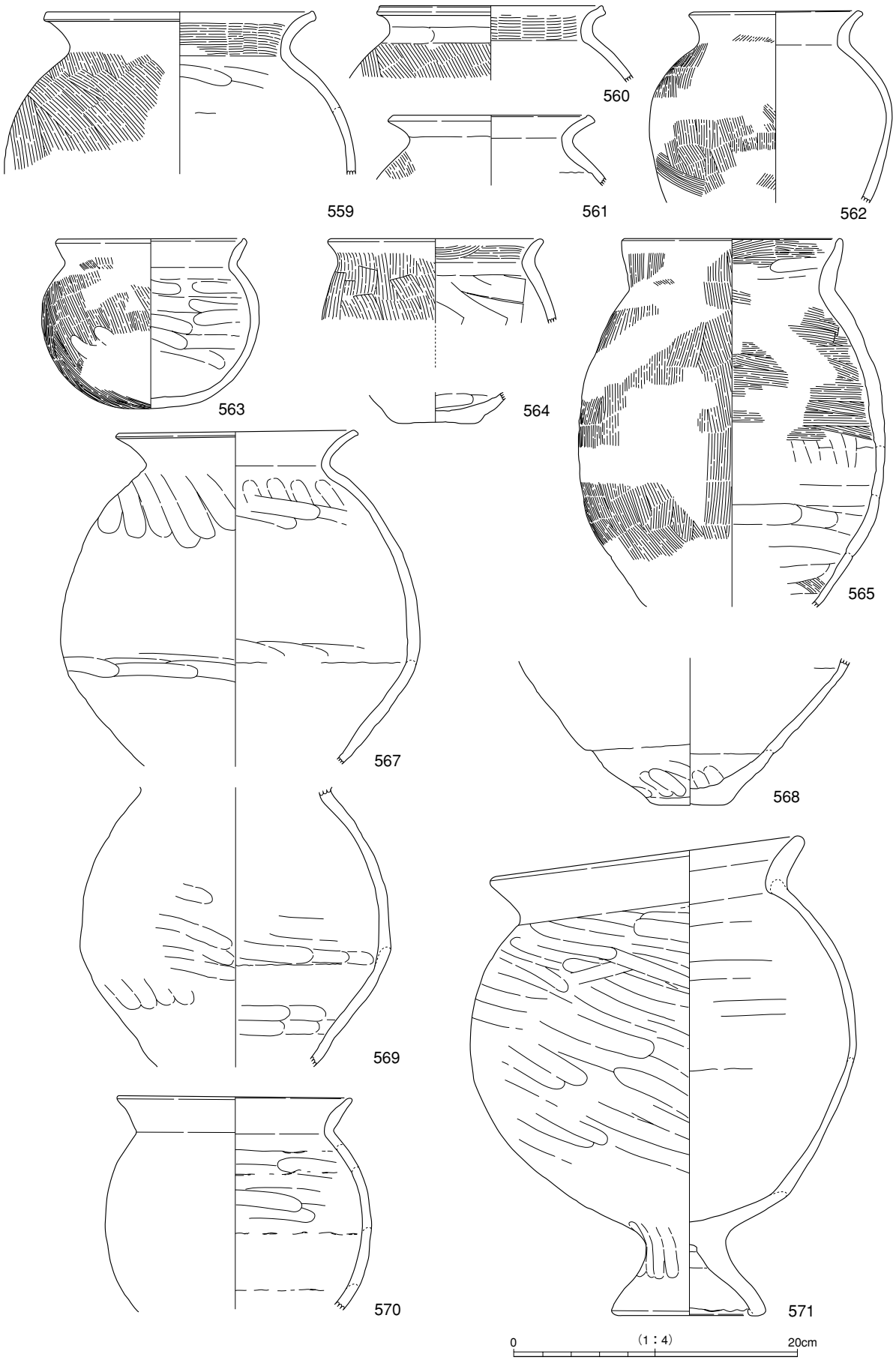
第 106 図　99BSD01 出土土器実測図（8）



第 107 図　99BSD01 出土土器実測図（9）



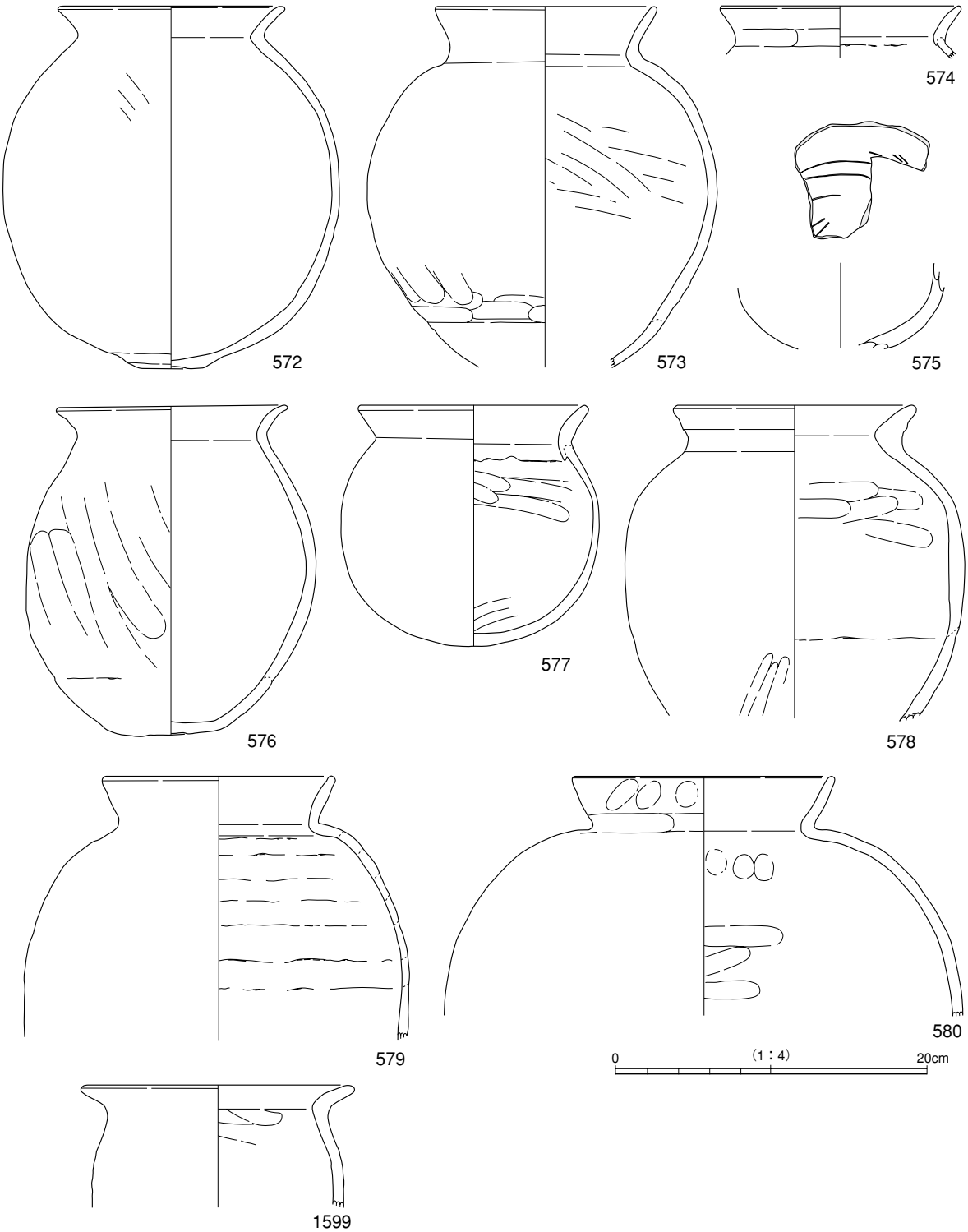
第 108 図　99BSD01 出土土器実測図（10）



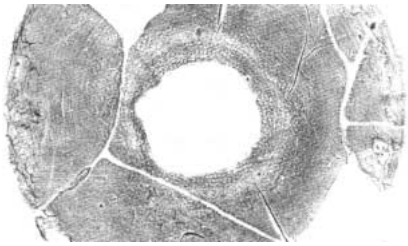
第 109 図　99BSD01 出土土器実測図（11）

ある。623は指ナデ調整甕であるが底部から胴部への立ち上がりにやや丸みがあり新しい要素がみられる。

99CSX13　99CSD01内にある土器集積で、面的な広がりを一括してとり上げたが、一部その下層に位置するものを含む可能性がある。須恵器2点、高杯の他壺・甕といった器種構成である。須恵器把手付椀（624）は完形である。焼成は硬質で赤褐色で胴部に波状紋が1段廻る。口縁端部をつまみ上げたように



第110図　99BSD01出土土器実測図（12）



第 111 図　630 脚部内面布目拓影

薄く仕上げるのが特徴である。類例は猿投窯で見当たらないが、東山111号窯式からやや下る時期と推定される。甕(625)は焼成は硬質で明灰色を呈するが、口縁の屈曲がなく猿投窯にみられない形状である。高杯は有稜杯部高杯の系統にある 626 や 627 があるが、627 は脚部が「ハ」字状に開いており新しい要素がある。主体は椀状杯部高杯（628 ～ 636）であるが、629・630 のように厚手でシャープさにやや欠けるものが目立つ。631 は未貫通の脚部穿孔がある。椀（637）は全体に内湾し内面に放射状の磨きがなされる。壺（639）は球胴の直口壺であるが、肩部に屈曲がみられるなどの特徴がある。同様に指ナデ調整甕も球胴形であるが肩部屈曲が目立つ。642 は口縁の屈曲に二重口縁壺の系統を見出せる。甕は多様である。643 は口縁端部を上方やや内向きにつまみ上げ、平底の底部の縁は丸みがある。644 は直線的に外傾する口縁の端部内面が面取りされ、胴部は薄く仕上げられる。近畿地方の布留式甕の系統にあると考えられる。645 は明瞭な平底をもつことから在地系と考えられる。646 は台付甕になるであろう。指ナデ調整甕は外傾する口縁部が肥厚するもの（647・649）がある。特に 649 は長胴平底甕の系統ながら底部縁に丸みがあるなど新しい要素がみられる。

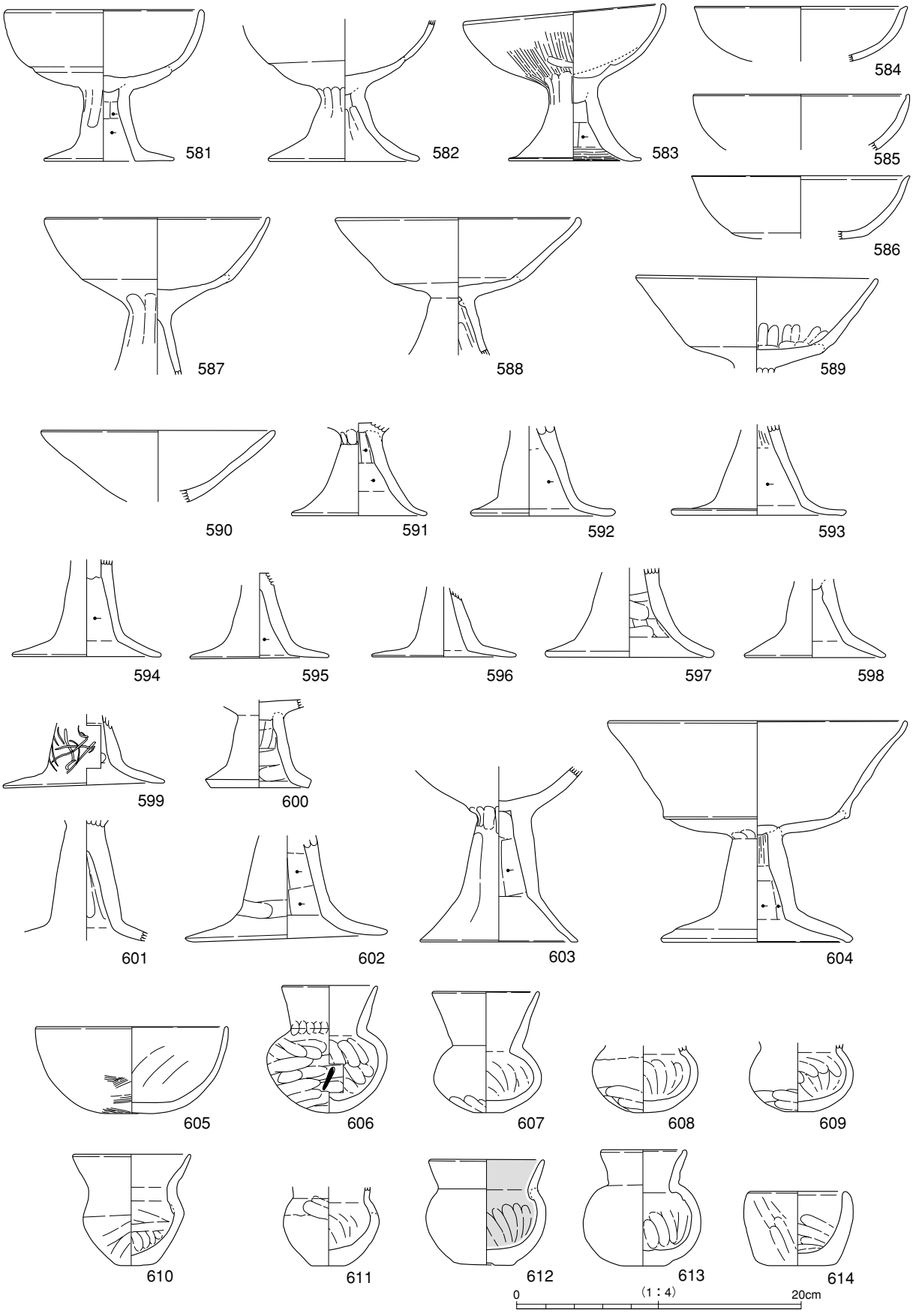
(3)段丘崖出土の土器

概観　段丘崖（98C2SX01・99ASX01）からは大溝同様大量の土器廃棄が確認された。土器廃棄はほぼ無遺物層である下層下部砂層を挟んで上～下層の土器群と下黒色層の土器群に大別され、前者が後者に混入した可能性はほとんどない。本節ではこの大別で土器を提示する。上～下層土器群は特に大溝との差異に着目すると、須恵器の量が少ない一方でミニチュア土器や小型壺の量が多いという傾向がある。その分布には偏在性が認められ、まとまった量のそれら器種を使用したのちの廃棄が想定される。なお、上～下層は 98C 区と 99A 区で調査しており、大溝同様に区分して提示する。

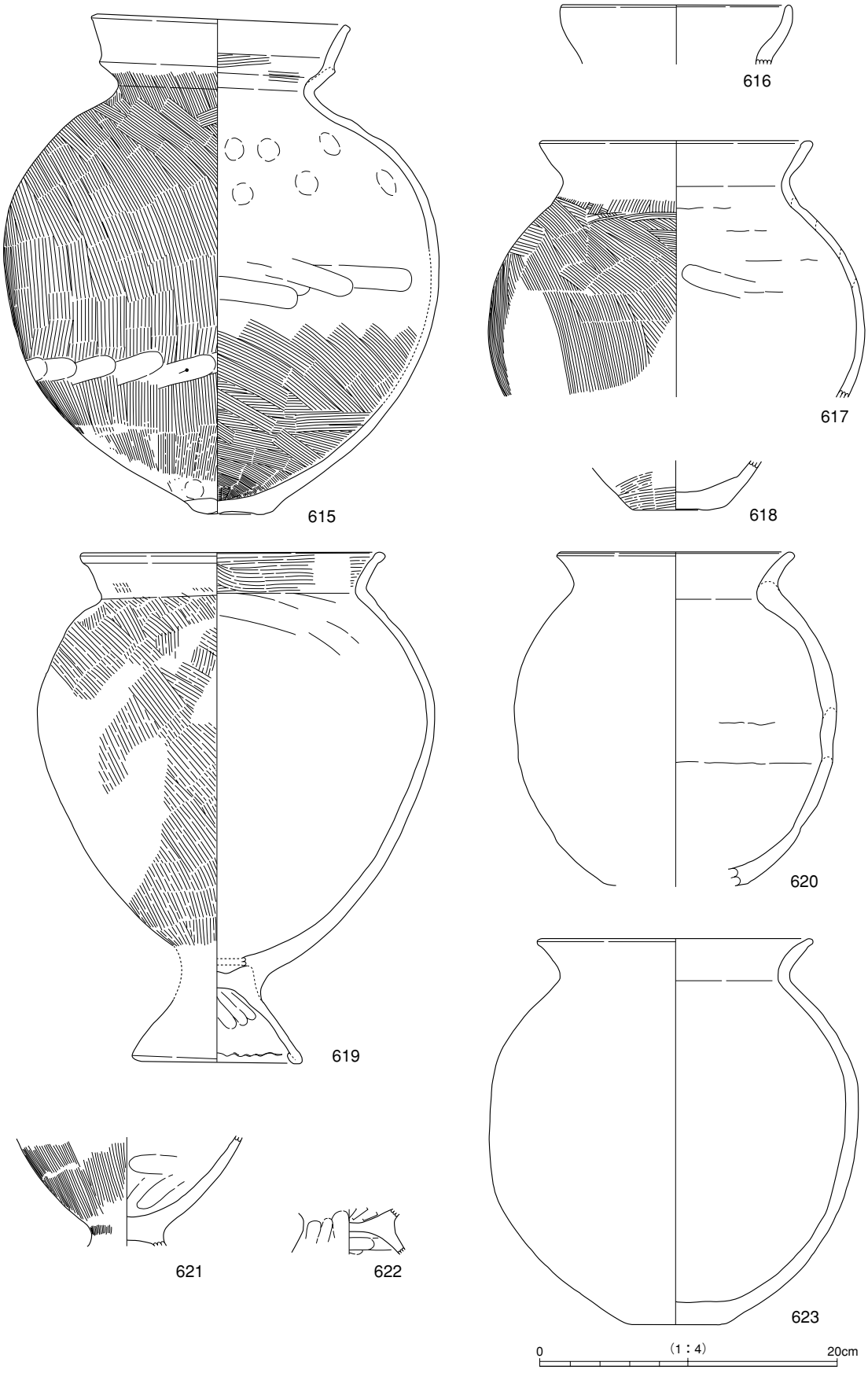
98C2SX01下黒色層　水入遺跡の古墳時代中期土器群の中で最古に位置付けることが可能な土器群である。須恵器はなく、器種は有稜杯部高杯、皿状杯部高杯、小型壺、鉢（椀）、壺、大型壺、甕からなる。段丘崖上～下層および大溝出土土器に比べて器面の状態が良く硬質な印象がある。事実胎土分析の結果内容もやや異なる（第 11 章第 6 節参照）。

土師器の中心は高杯である。有稜杯部高杯（652 ～ 663・665）と皿状杯部高杯（664）は杯部口径が 16cm 以上と大きく脚部も長い（7.7 ～ 9.0cm）。有稜杯部の形状に着目すると 653 や 655 のなどように直線的に口縁に至るものと 652 や 656 のように上半部が若干外反するものがある。また 663 のように皿状ともとれる中間的な形状も存在する。なお665は内外面に緻密なミガキがあるうえに朱色に塗装される。脚部では 652・654・655 で脚柱部外面の縦方向ミガキ、製作技法的には 654 で脚柱部と脚端部の接合が確認される。脚柱部内面は 653・654 が縦方向の指ナデ、656 で横方向へらナデがみえ 2 通りの調整手法を認める。脚部上端の形状では、652～656は上端が閉じているが、658～664をみると上端が筒状であったことがわかり、これも 2 通りあることになる。674 は短脚ながら有段脚部である。

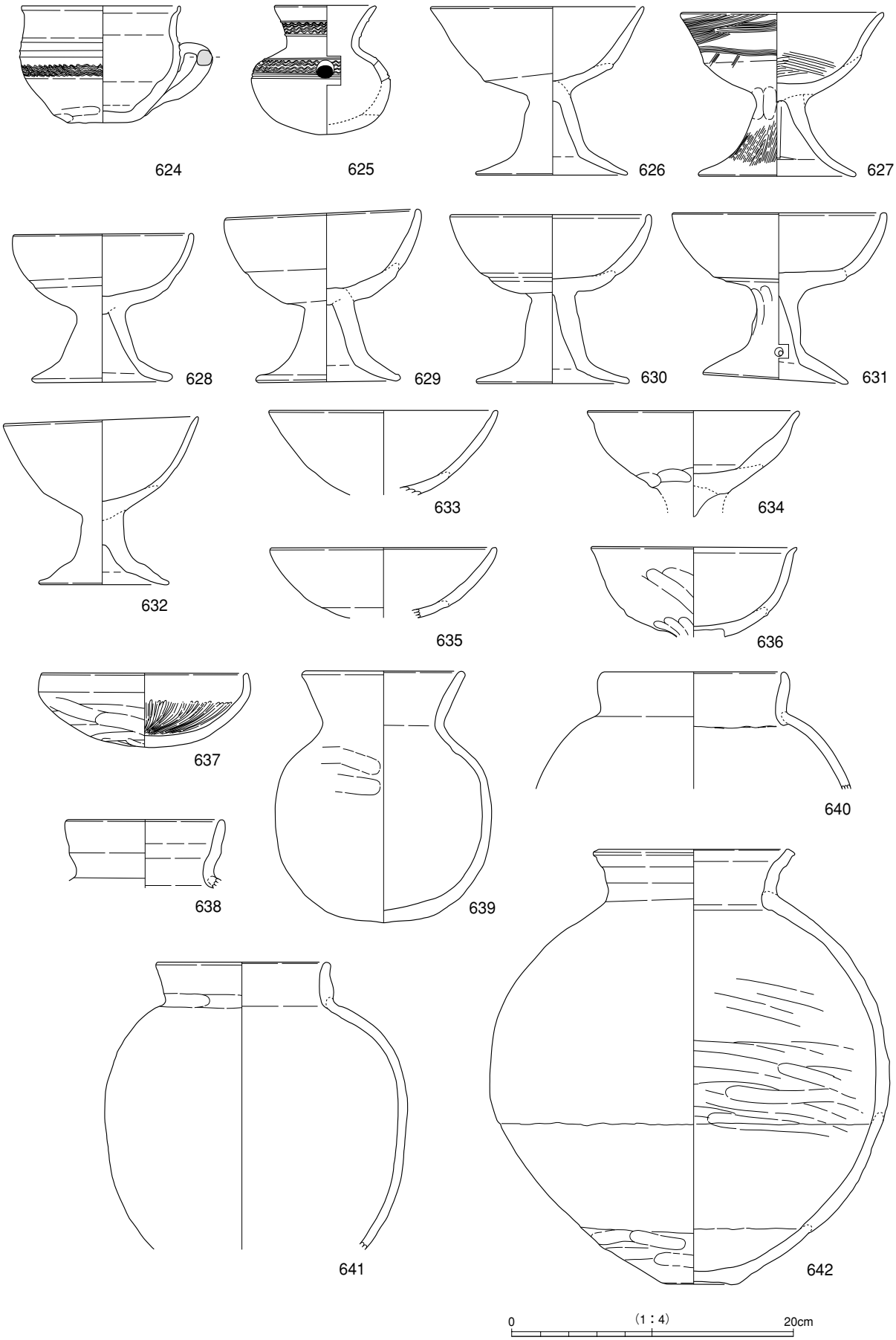
小型壺は数点にとどまった。677・678 のような丸底で球胴形、口縁は端部が若干内湾傾向にあるもの



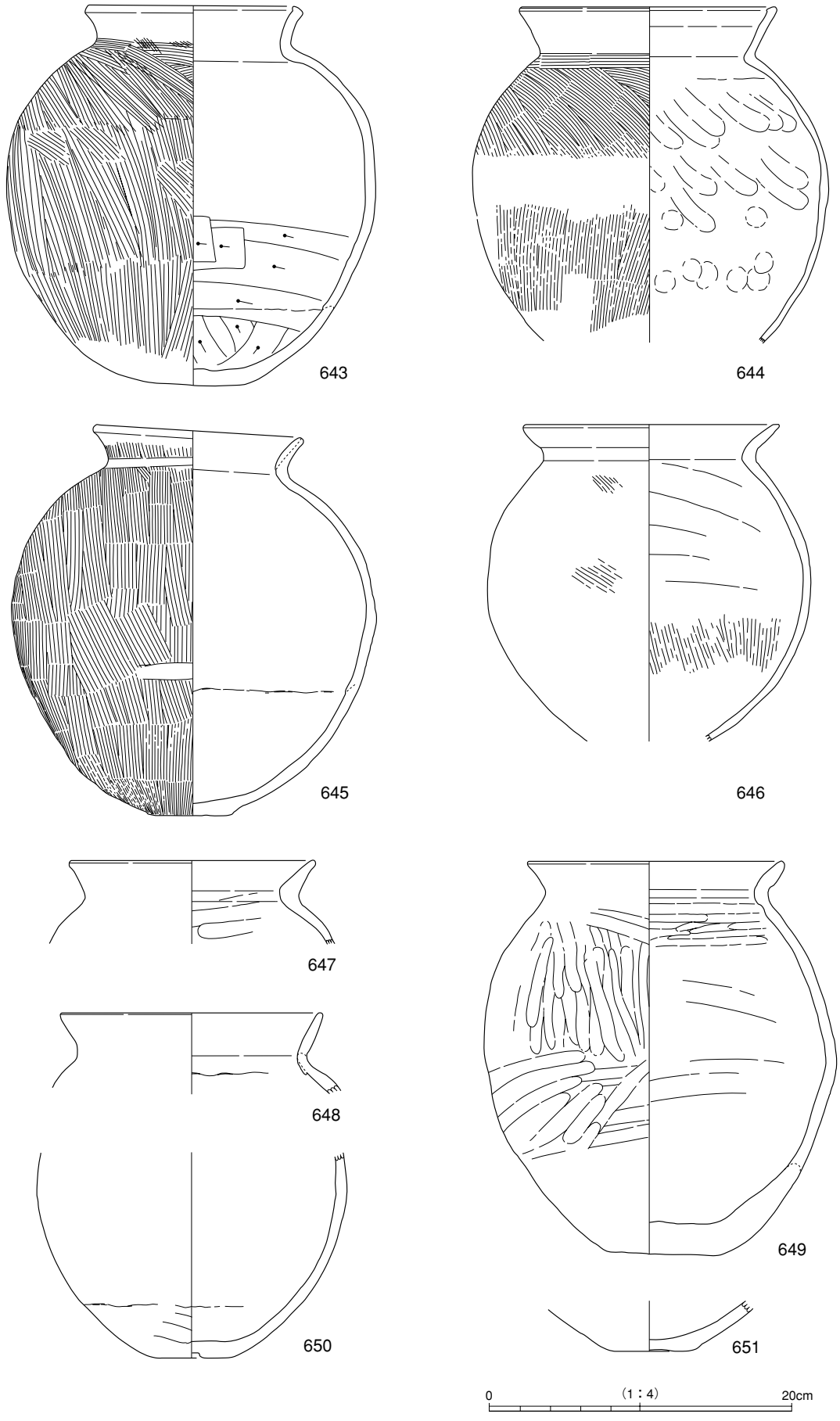
第 112 図　99CSD01 出土土器実測図（1）



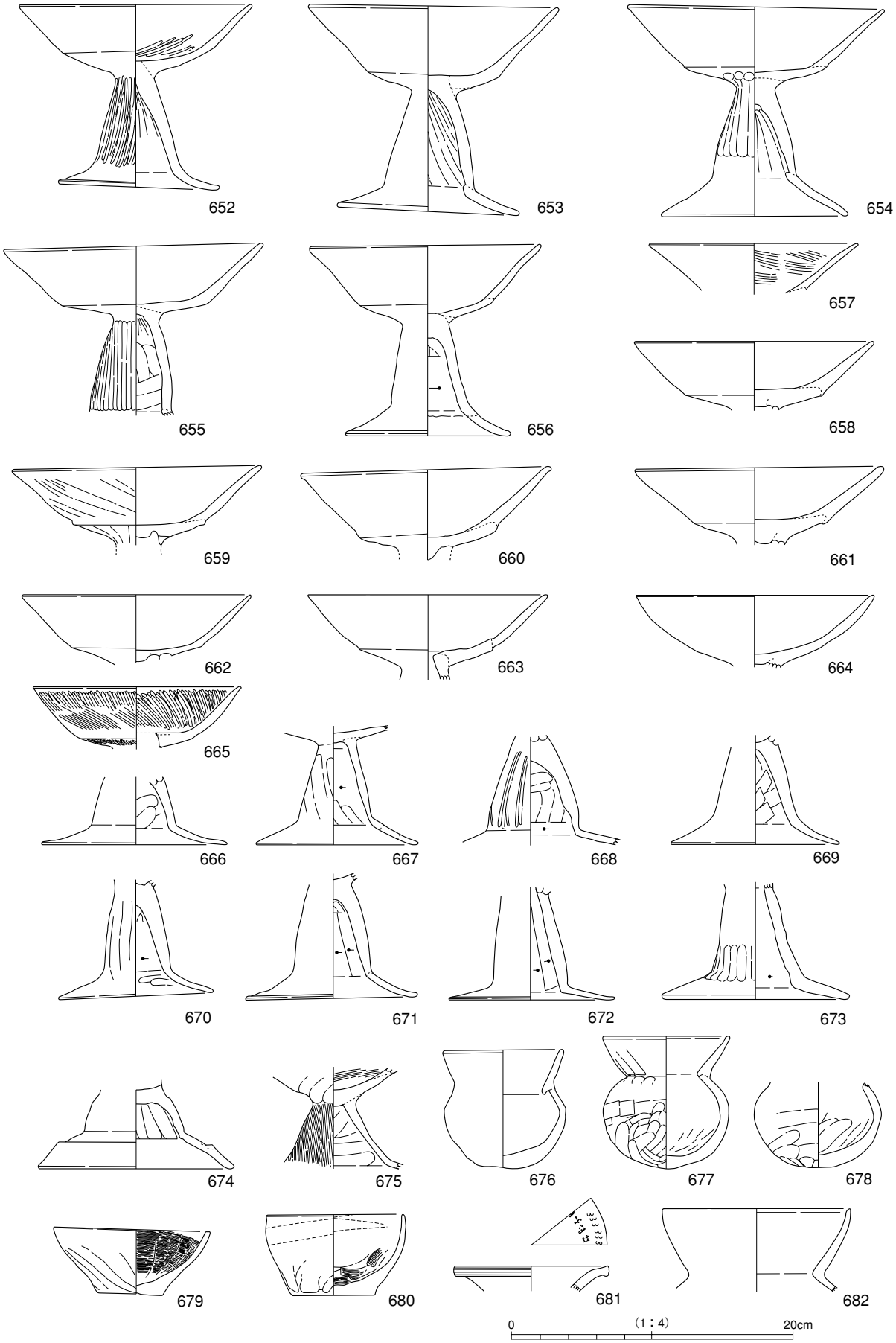
第 113 図　99CSD01 出土土器実測図（2）



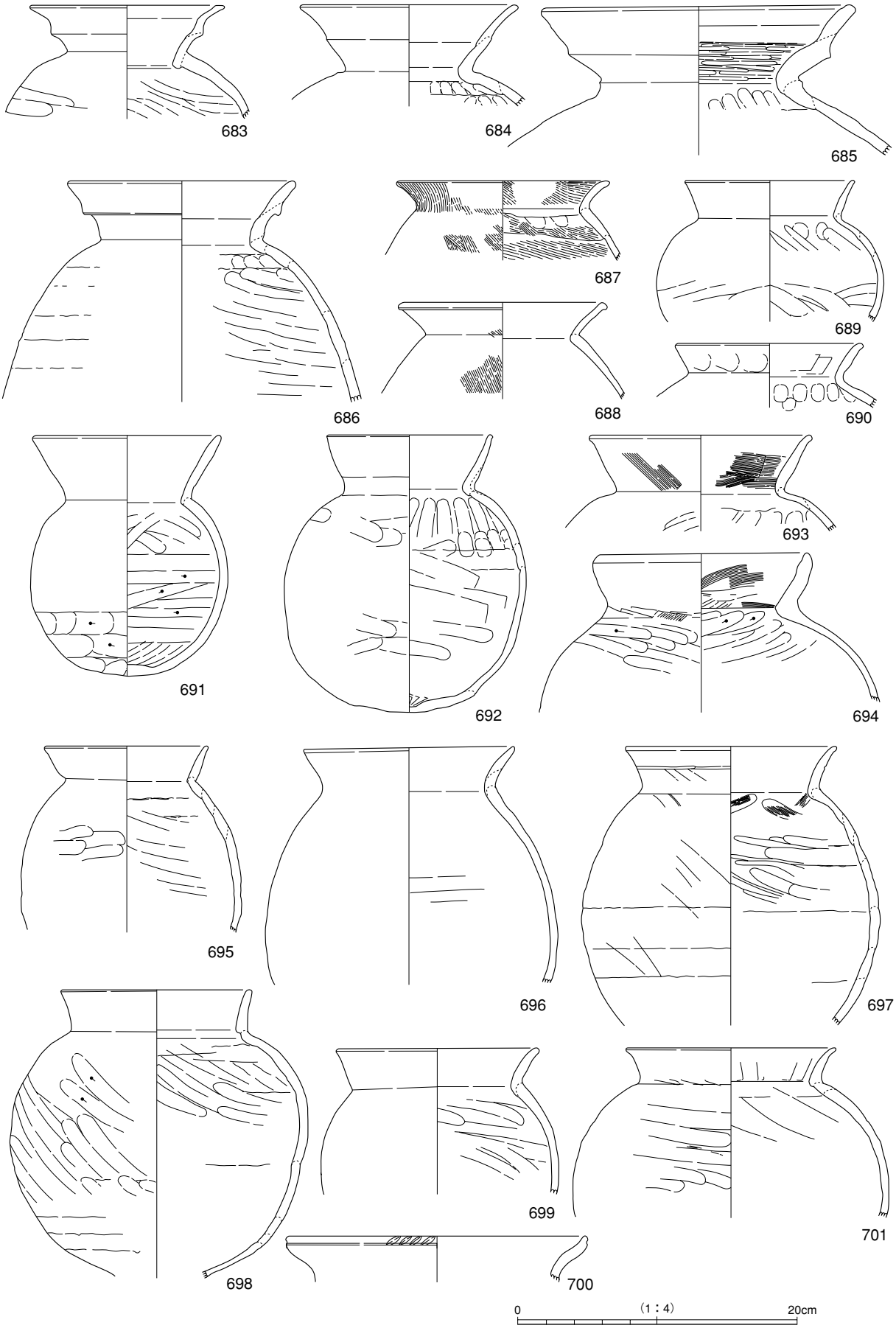
第 114 図　99CSX13 出土土器実測図（1）



第 115 図　99CSX13 出土土器実測図（2）



第 116 図　98C2SX01 下黒色層出土土器実測図（1）

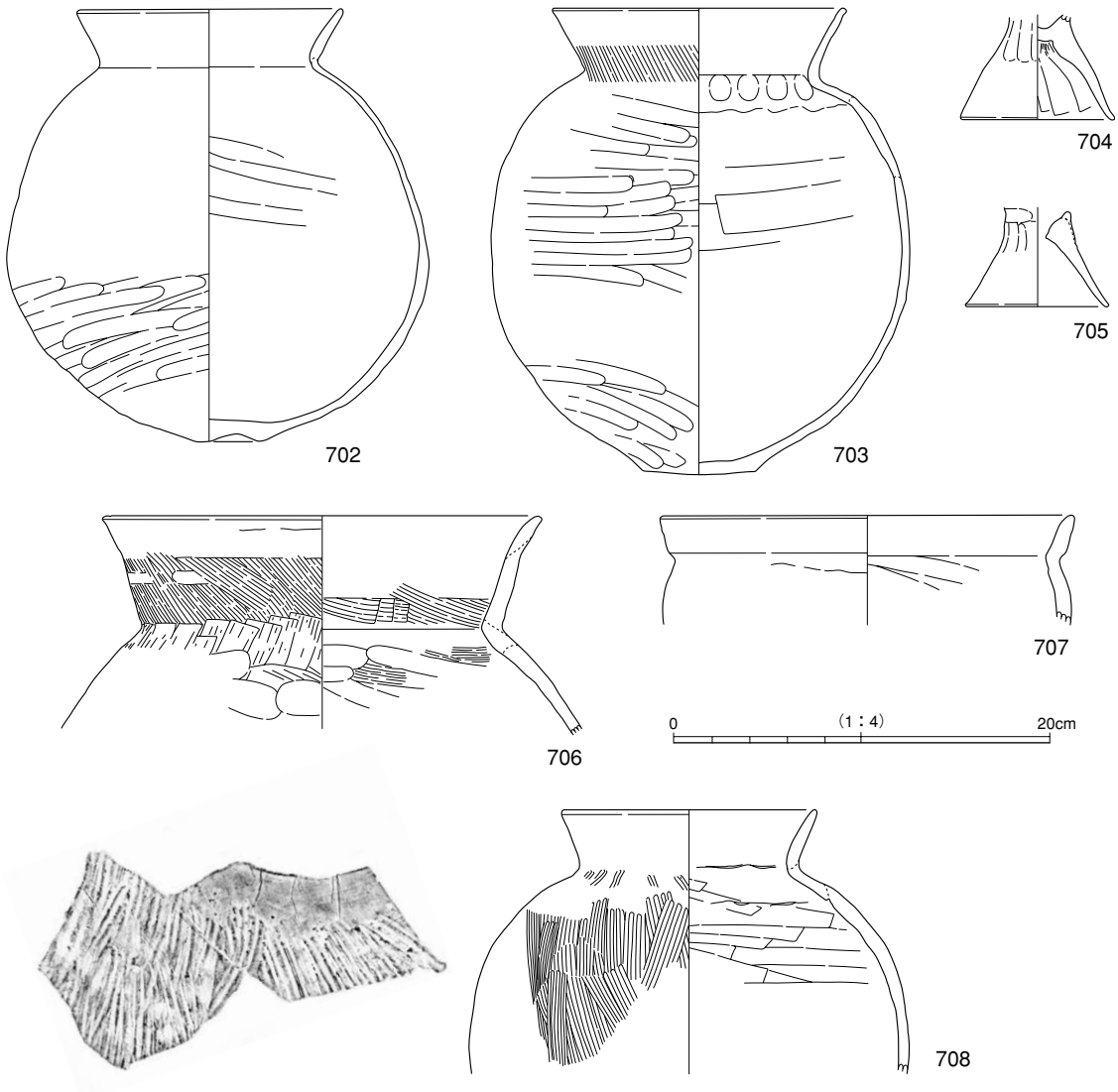


第 117 図　98C2SX01 下黒色層出土土師器実測図（2）

が主体である。上～下層のものと比較してあきらかに丁寧なつくりである。鉢（椀）は平底で内面が横方向にハケ調整。壺は口縁内湾傾向と（682）、胴部形状が丸底・球胴の「甕」ながら直立する長い口縁部をもつもの（691・692）がある。大型壺は有段口縁壺（683 ～ 686）で占められる。

甕は口縁部にハケ調整痕がみられる他は指および板ナデ調整仕上げである。底部は 702 や 703 でみられる平底、もしくは 704・705 の台部を付した台付甕なるであろう。形状は 698 のような球胴形、697 のようなやや下方に最大径のある卵形の 2 系統がある。702 も球胴であるが最大径が胴部下半にあって混合した様相をみせる。口縁部形状は外反するもの（696・697・699・701）もあるが直線的あるいは内湾傾向にあるものが目立つ。ハケ調整を混在させる 693・703・706 は外傾する直線口縁でその端部が玉縁状につくられ、他より丁寧な印象がある。とくに 706 はひとまわり以上大きい「大甕」である。708 は外面調整に貝殻を用いたとみられる条痕が明瞭にみえる。

98C2SX01　上層出土遺物は砂層中から古代以降の遺物と混在して出土しており層位的に安定していない。中層は河川の影響が少ない時期の堆積であり土器群としても比較的安定している。ここでは中層出

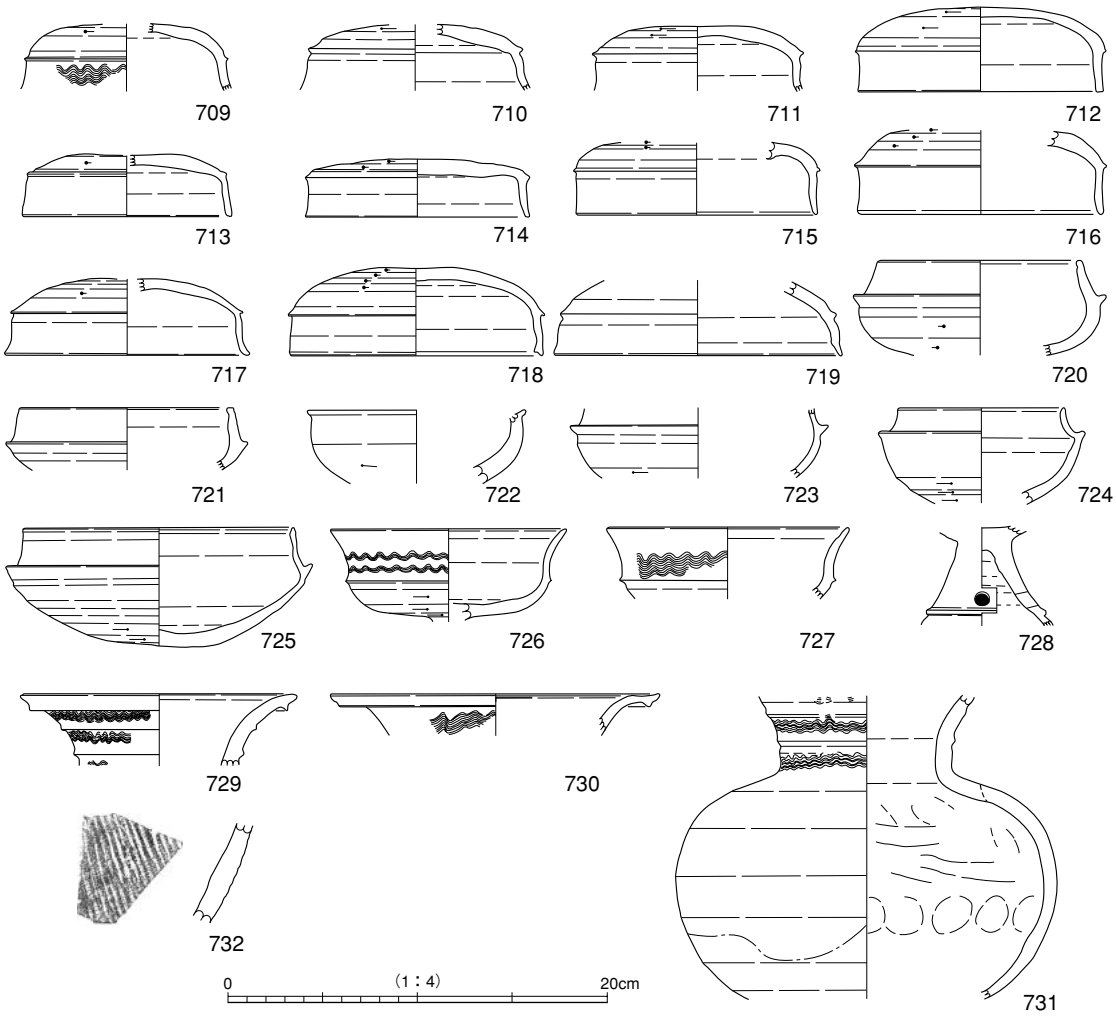


第 118 図　98C2SX01 下黒色層出土土師器実測図（3）

土分については遺物番号にトーンを付しておく。また、下層は逆にほとんど遺物がない。段丘崖直上出土分（一覧表では「崖」とする）は上・中層両者がからむため上層として扱った。

須恵器は杯蓋・杯身・高杯・壺・甕である。東山111号窯式～東山61号窯式（725）である。注目すべきなのは728で、脚部に正円形の透かしが入る高杯である。焼成は硬質で断面はやや青みがかった灰色である。近隣の豊田市神明遺跡でも出土しており、陶邑など東海地域以外での生産が考えられる。732は甕胴部片。平行タタキが交差して擬格子状になる。

土師器高杯は有稜杯部が主体で皿状杯部（746・757）も若干ある。椀状杯部高杯（769～771）は大溝と比べても少なく、あっても比較的古相を示すものがほとんどである。有稜杯部は口縁が外反するものがほとんどで、733・747のように皿状杯部と中間的様相をみせるものもある。短脚・小口径となるものは椀状杯部同様少数である。上・中層通じてこのような状況であり、土器群の時期幅は大溝より短く見通すことができよう。むしろ主体は先行しているといったほうがよい。739のように杯部の稜線が大きく発達して突帯のようになるタイプが出現する点は下黒色層土器群の後続土器群の特徴として挙げられよう。その突帯であるが、大型高杯と考えられる766や767では稜線の位置に粘土帯を貼付けている。大型高杯そのものの登場もこの土器群の時期であろう。また755はその製作工程が判明する例であるが、筒



第119図　98C2SX01出土土器実測図（1）

状の脚部上端に一旦詰め物をした上に杯部底面となる円板を接合し突帯ならびに補強粘土を付加する。

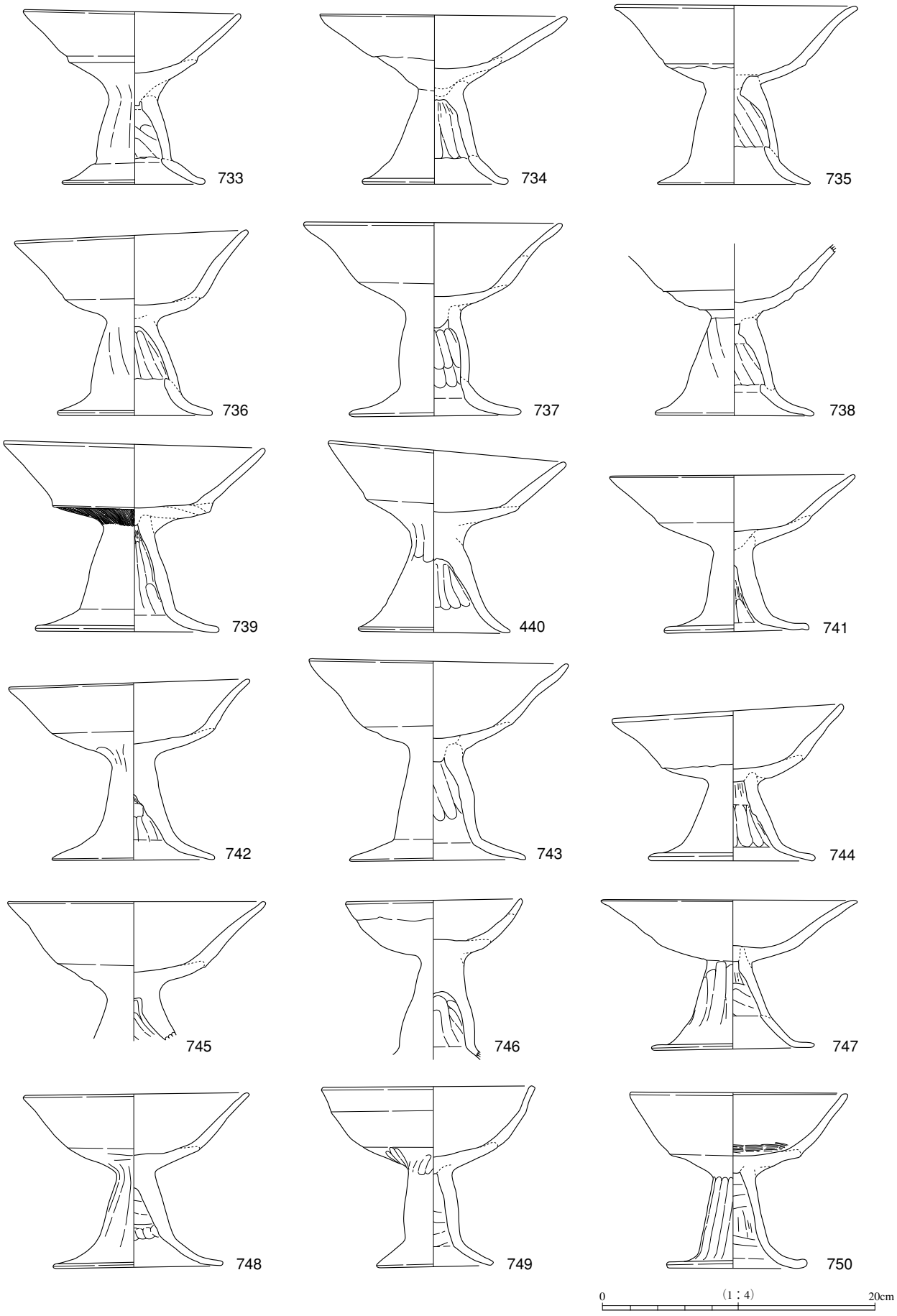
墨書土器の可能性があるのが772で、杯部外面に筆による墨痕と判断した。今後検討が必要な遺物のひとつである。また773は高杯脚部に焼成前に施された線刻で、上方からみると右回りに渦を巻いたようにみえる。脚部の製作技法そのものが他の高杯と全く異なっており、ミニチュア的に特別に作られたものかもしれない。

鉢・椀はここでも各個体差が大きい。776～783が平底の鉢で、ハケ調整の入る776が古相であろう。777～783は椀の要素も付加されてより一層鉢と椀の区分が明瞭でなくなる。784～790は平底・丸底の椀で口縁端部を外傾あるいは直立させるもので占められる。

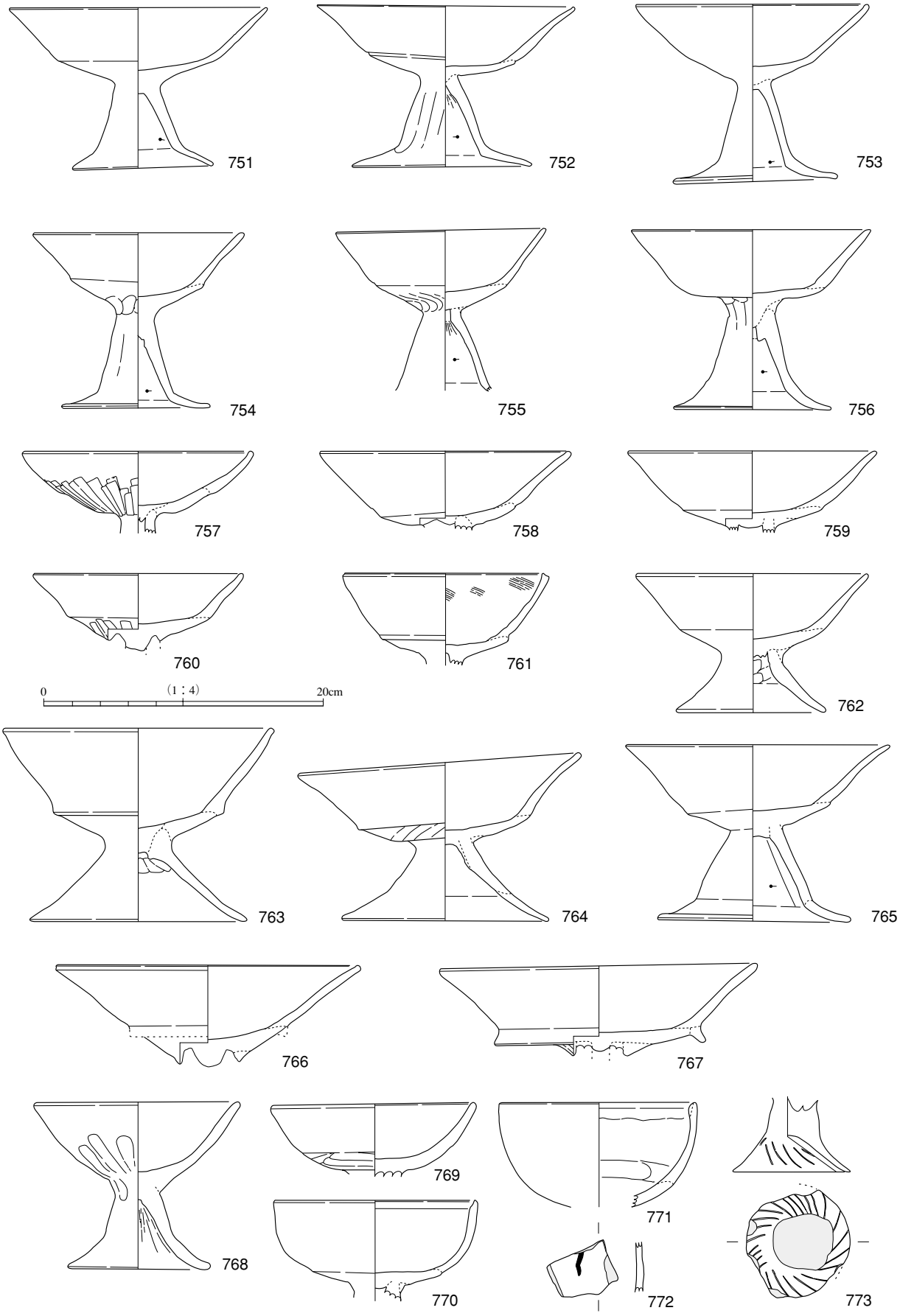
ミニチュア土器は、793がやや大きいがほとんどは高さ3cmほどで平底筒形になる。794～798のように全体に内湾するものと802～805のように口縁端部が外傾するものに分かれる。806～809は高杯もしくは台付甕のミニチュアである。こちらは一定した形状はないのが特徴である。

小型壺は98B2SD01での分類に沿うとＡタイプ（811～822・828・829）、Ｂタイプ（823～827・830～837）、Ｃタイプ（838～858）である。Ｃタイプは個体差が大きくそれだけミニチュア化にあたって「ちいさなツボ」のもつイメージが一定せずに多様であったことをうかがわせる。当然Ａ・Ｂタイプとしたものの中にもミニチュア土器として製作されたものがあったかもしれない。ここでそれを不問にすると、単純にＡタイプの方がＢタイプより目立つ点が指摘しうる。これは大溝での傾向とは逆で、それぞれの土器群間での変化として注意しておきたい。810は特に丁寧なつくりで、下黒色層の土器群でも古い段階に位置づけられる可能性もある。822はＡタイプの胴部に焼成前穿孔がなされた例である。98C2SX01では小型壺のなかでも一回り大きなもの（859～862）もある。859・860は直口壺であろう。861・862は有段口縁壺で、特に861は胴部上半に横方向のミガキがなされる。壺（直口壺）であるが胴部形状がやや扁平な球胴となるもの（直口壺Ａ）と球胴（直口壺Ｂ）に分けられる。直口壺Ａは平底と丸底があり、直口壺Ｂは丸底で占められる。壺には広口壺（877・878）もあって甕との区分ははっきりしない。そのうえ直口壺のいくつかには煮沸時についたとみられる焦げがみられるもの（872・879）もあり、用途としての両者の区分はあいまいであったと考えられる。

甕は指ナデ調製仕上げが圧倒的に多いが、まず注目しておくべきは超小型甕（882～886）であろう。いずれも瓜形の胴部で平底（882・883・885）、丸底（886）が存在する。884は口縁部形状が359や553と似ておりこれらをモデルとした可能性も考えられる。超小型甕はその大きさからミニチュア土器の範疇で把握した方がよいと考える。それらより一回り大きい小型甕（887～890）はいずれも広口であり実用品と考えられる。891～899はハケ調製仕上げが一部でもみられるものである。891～894・898・899が直線的に外傾する口縁で下黒色層の土器群に連なる一群である。895は359と同型の口縁でこのタイプの甕が一定量存在したことをうかがわせる。901～926は指・板ナデ調整甕である。胴部は球形・瓜形、底部は平底・丸底あり、口縁部形状が直線的なものと外反するものに大別される。918は甕とも大型壺ともとれる。919は一部ハケ調整が残るが指ナデで仕上げる。特徴的なのは胴部上半に焼成前に開けた円形と推測される開口部（円窓）をもつことである。923は球形胴部の甕に台部が付いた台付甕である。926も同様の製作手法の台付甕であるが、平行する2本線の間に斜線をいれた紋様的線刻が施さ



第 120 図　98C2SX01 出土土器実測図（2）



第 121 図　98C2SX01 出土土器実測図（3）

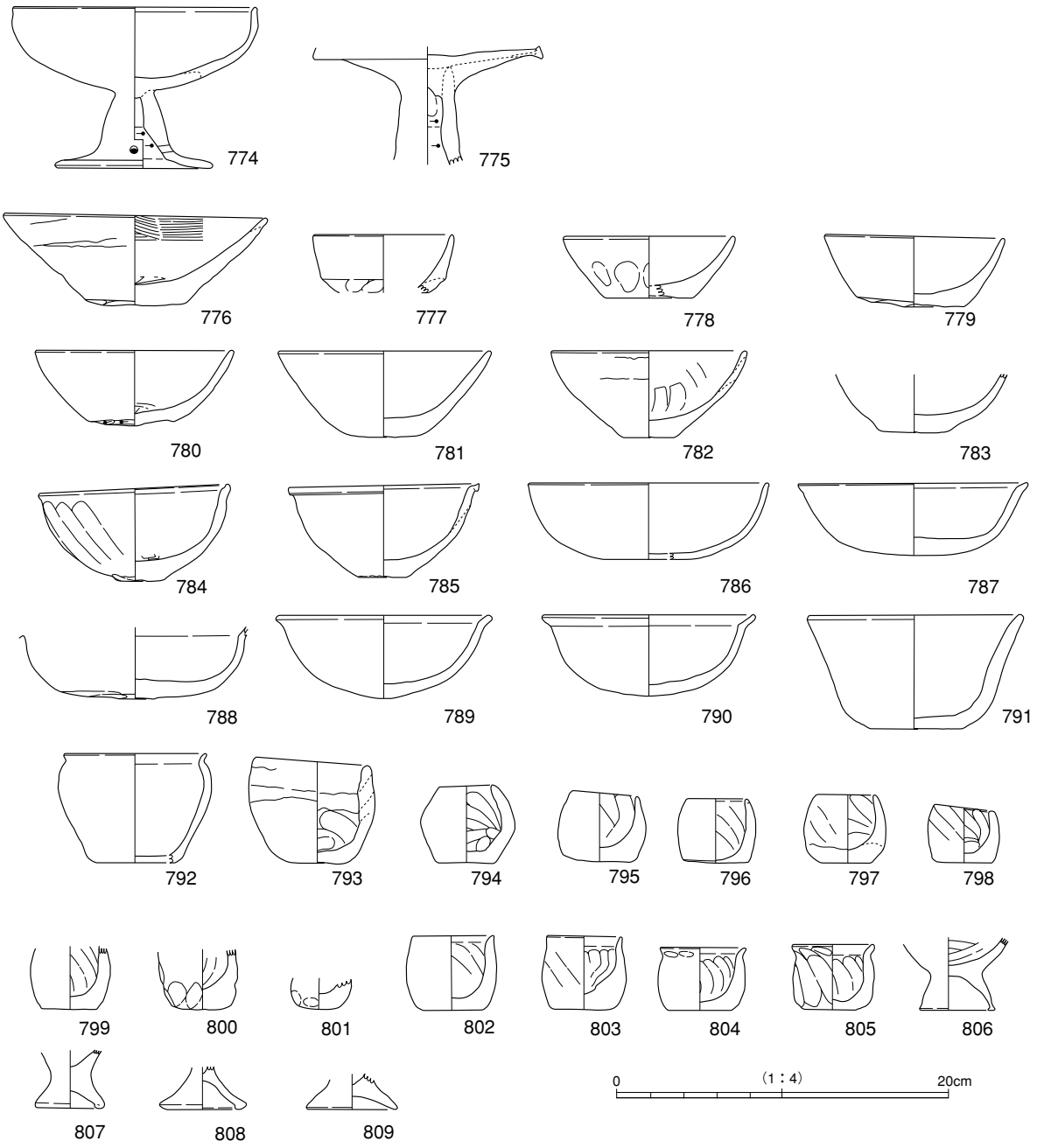
れる。

927 は筒形をした甑の底部桟である。一方鉢形をした甑（928・929）ある。

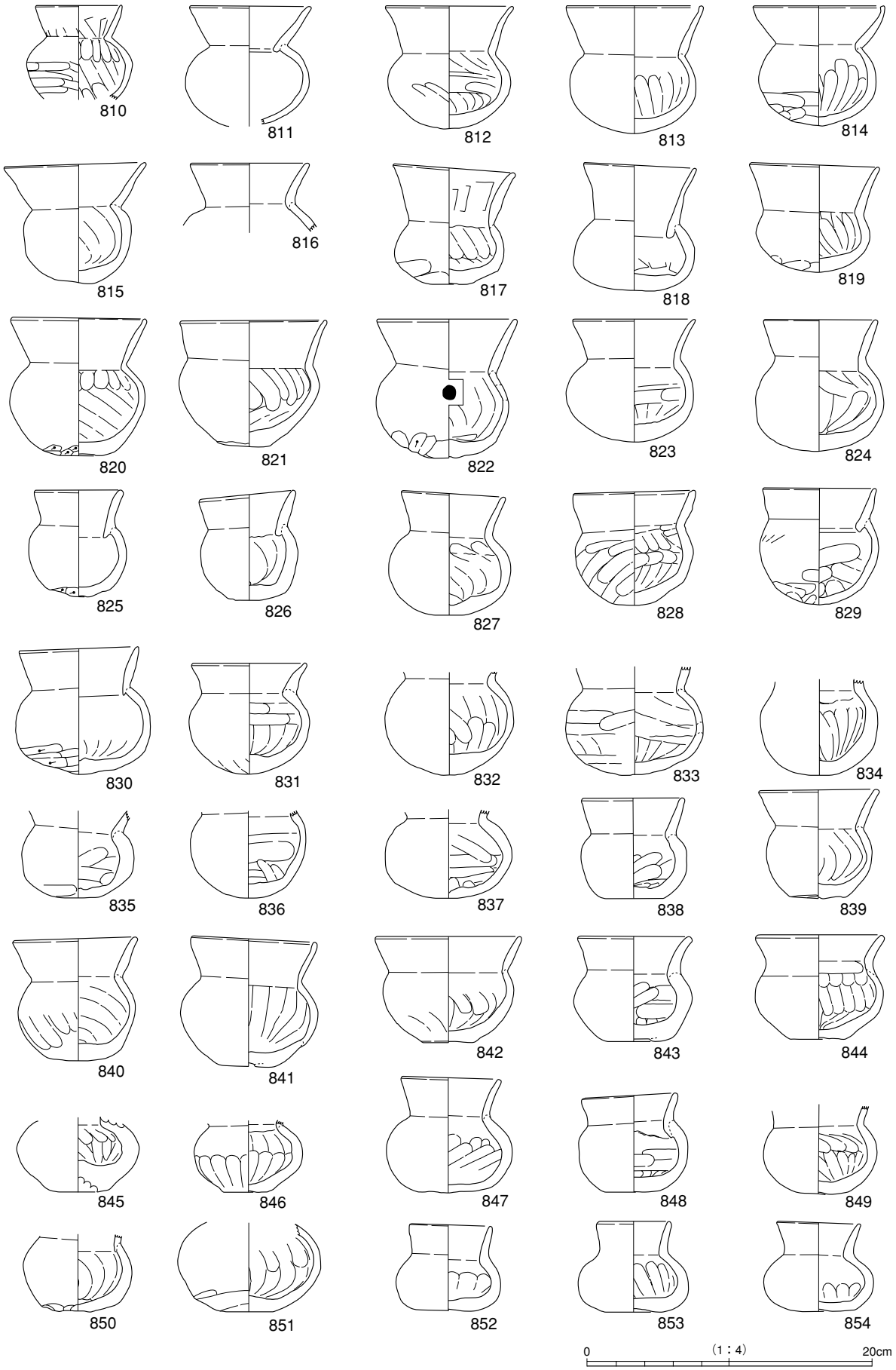
98C2SX10　段丘崖上端で出土した。933 はハケ調整の鉢である。

99ASX01　調査時に掘削できた範囲は98C2SX01に比べて小さく、下黒色層に対応する層位には達していない。しかし出土土器の量は遜色ないといえよう。ただ98C2SX01の土器群に多かった小型壺・有稜杯部高杯は目立たず、むしろ全体の印象は大溝出土土器群に近い。

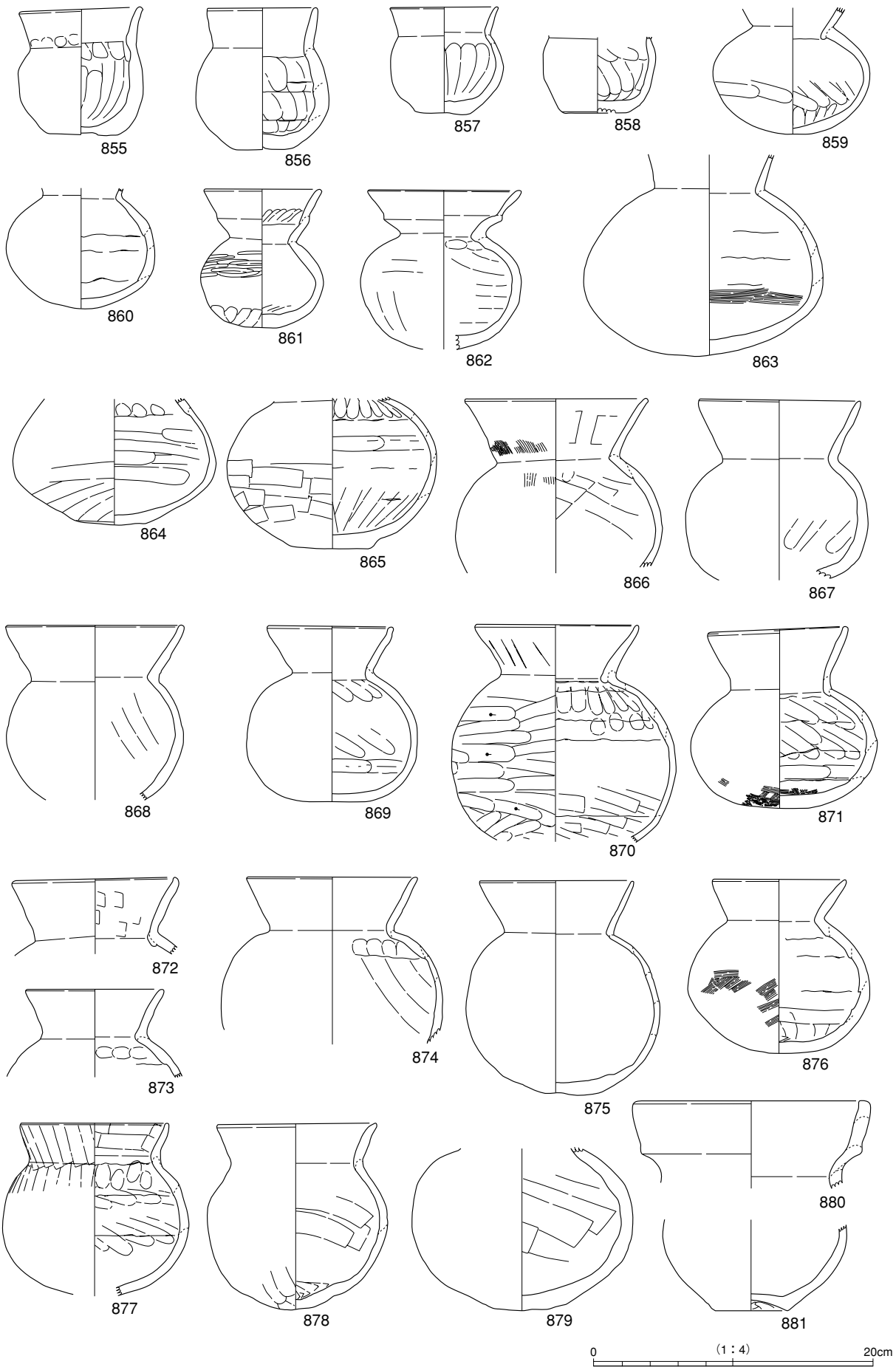
須恵器は東山111号窯式を主体とする時期であるが、器種は杯蓋・杯身に限られ、特殊なものに樽形瓶(940) がある。凹線が一周する胴部片が出土したのみだが、集落遺跡からの出土が少ないだけに注目される。焼成は硬質で断面は青みがかっている。猿投窯東山地区産の須恵器にはない特徴がみられ、産



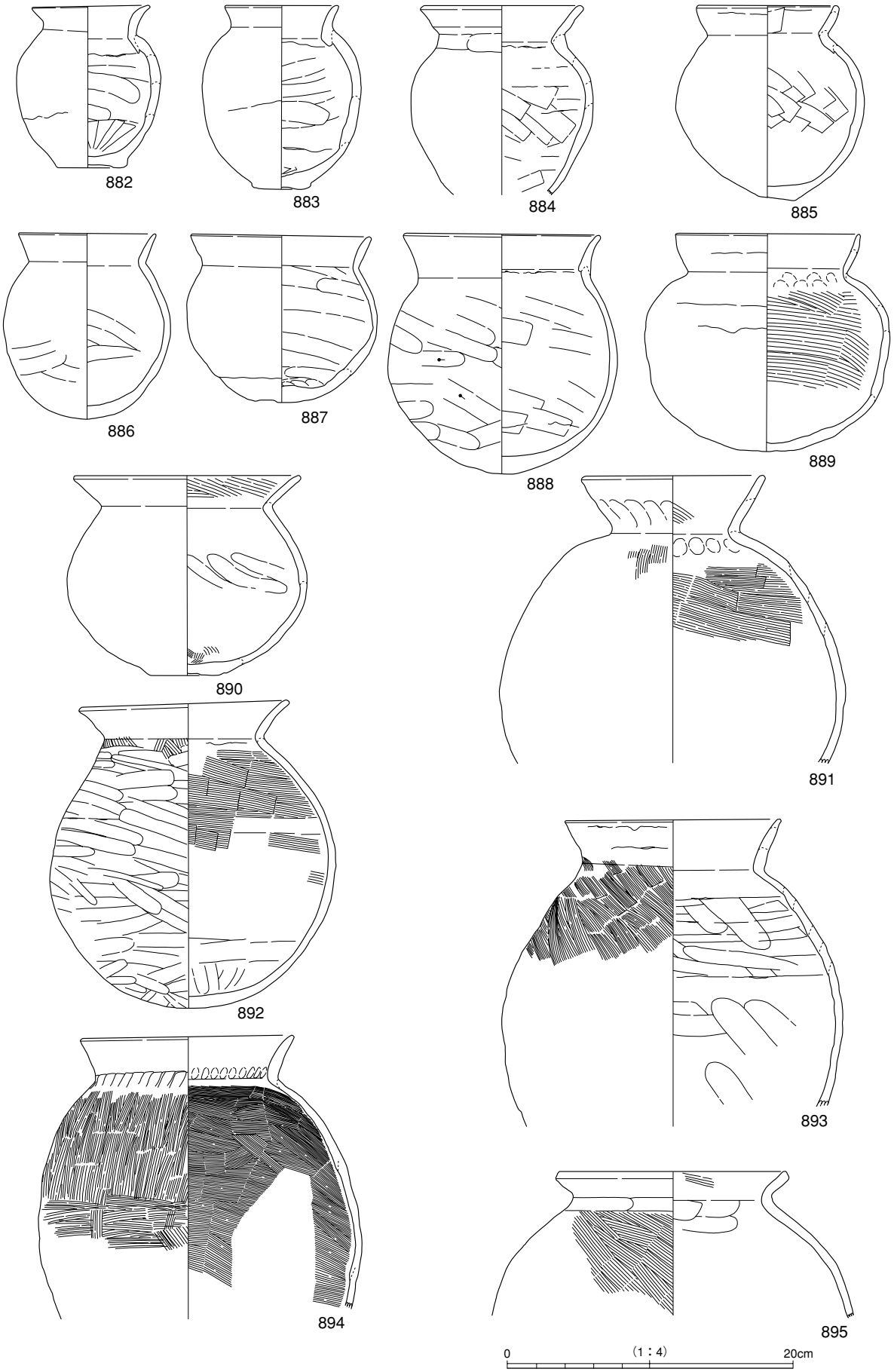
第 122 図　98C2SX01 出土土器実測図（4）



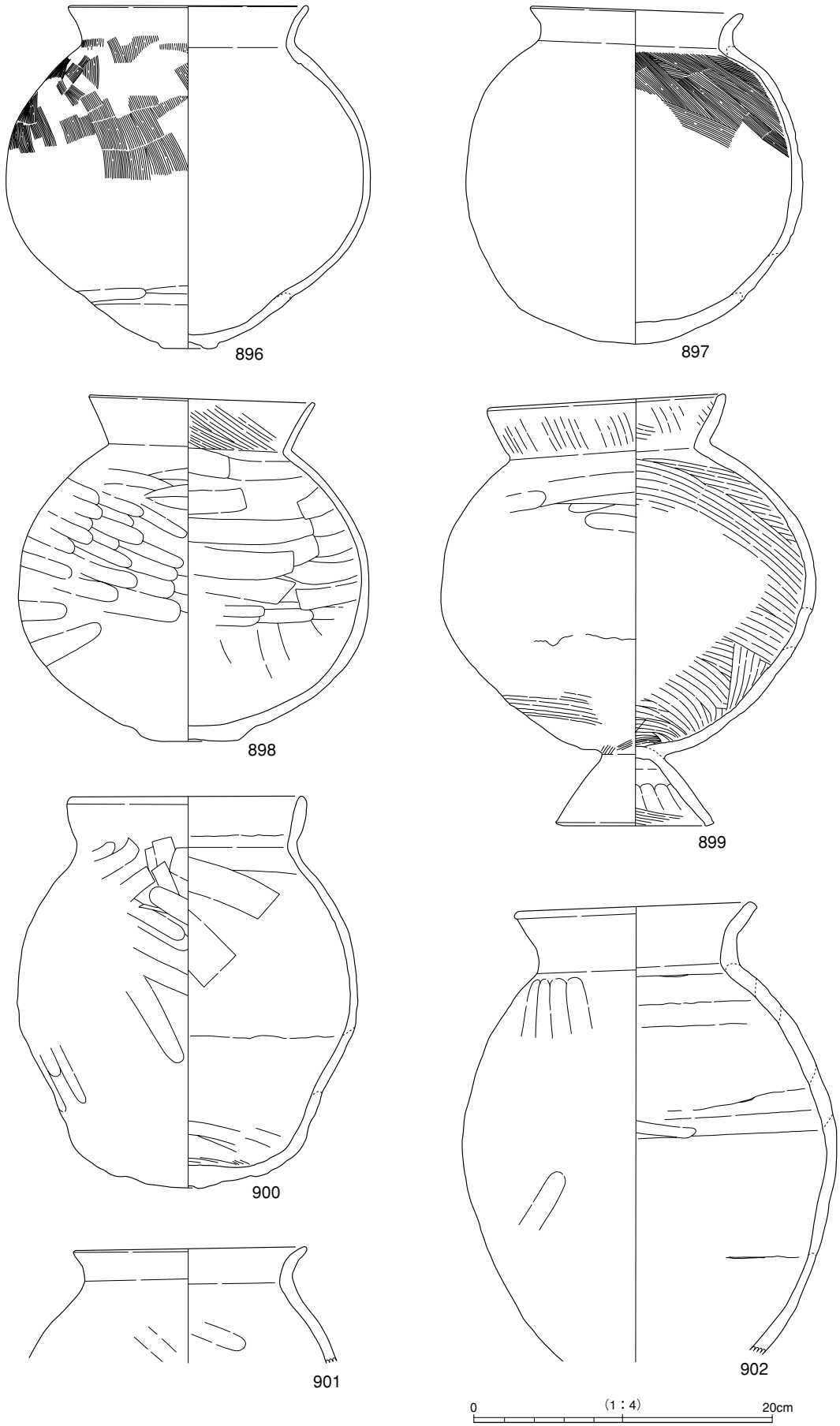
第 123 図　98C2SX01 出土土器実測図（5）



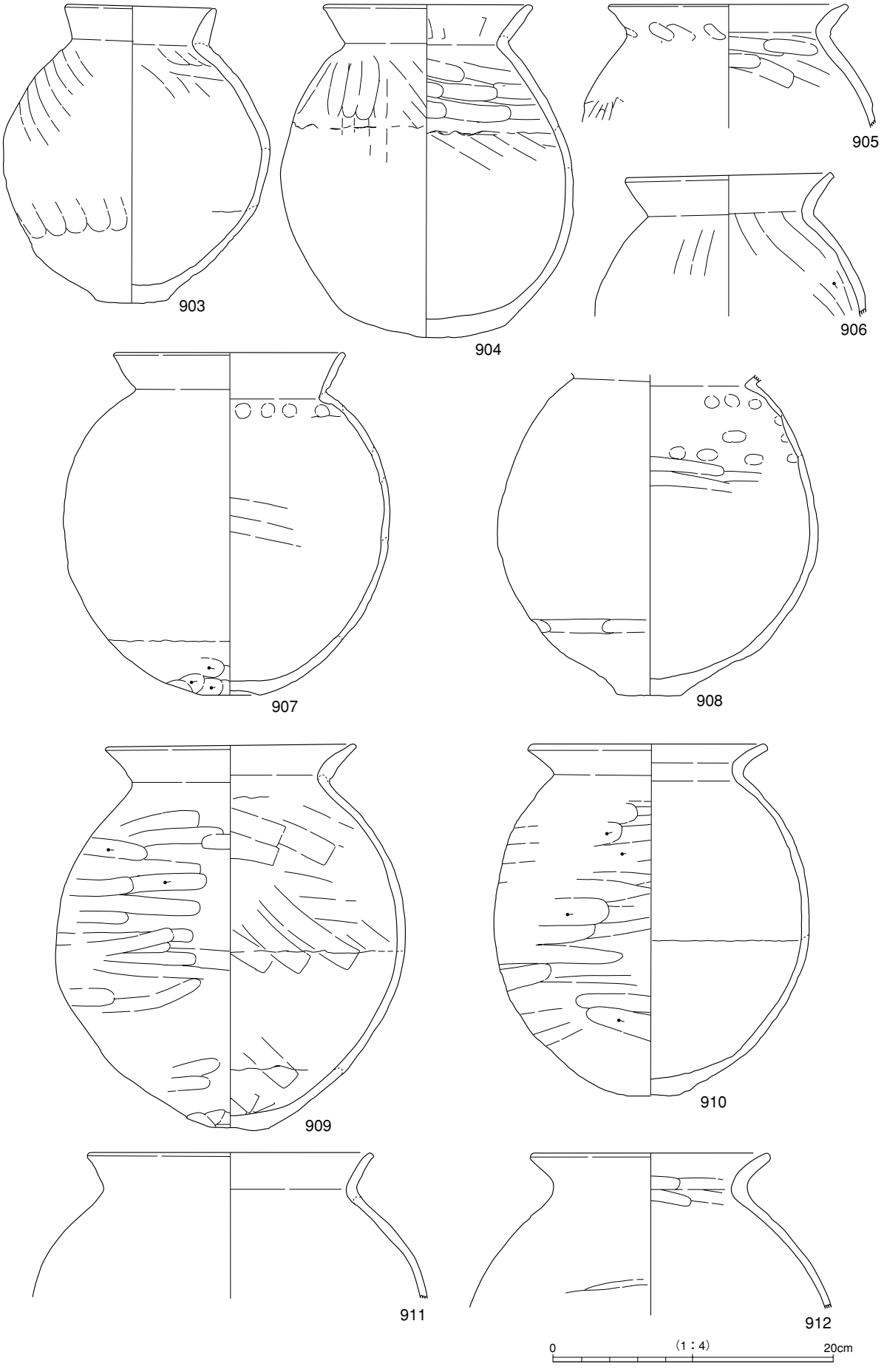
第 124 図　98C2SX01 出土土器実測図（6）



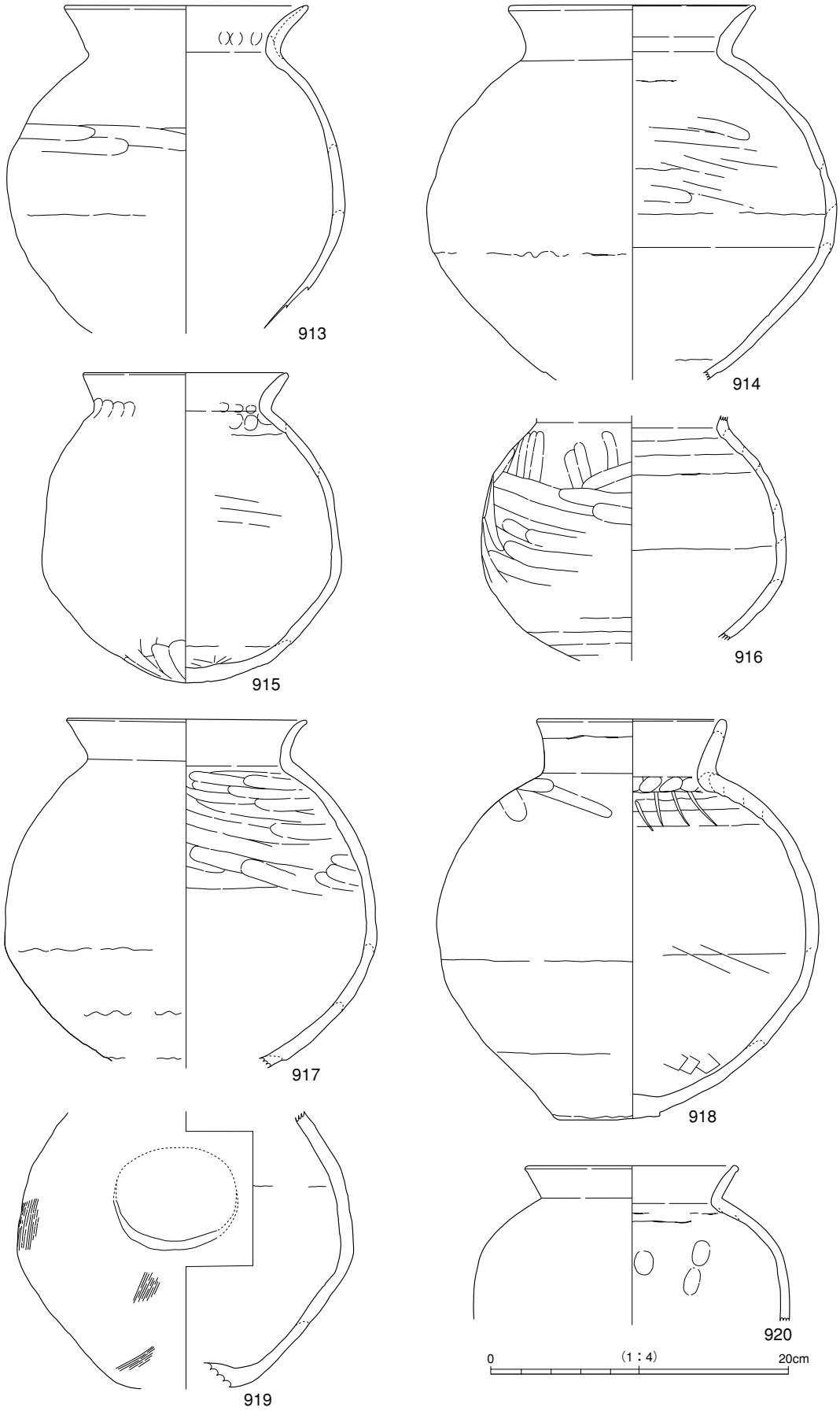
第 125 図　98C2SX01 出土土器実測図（7）



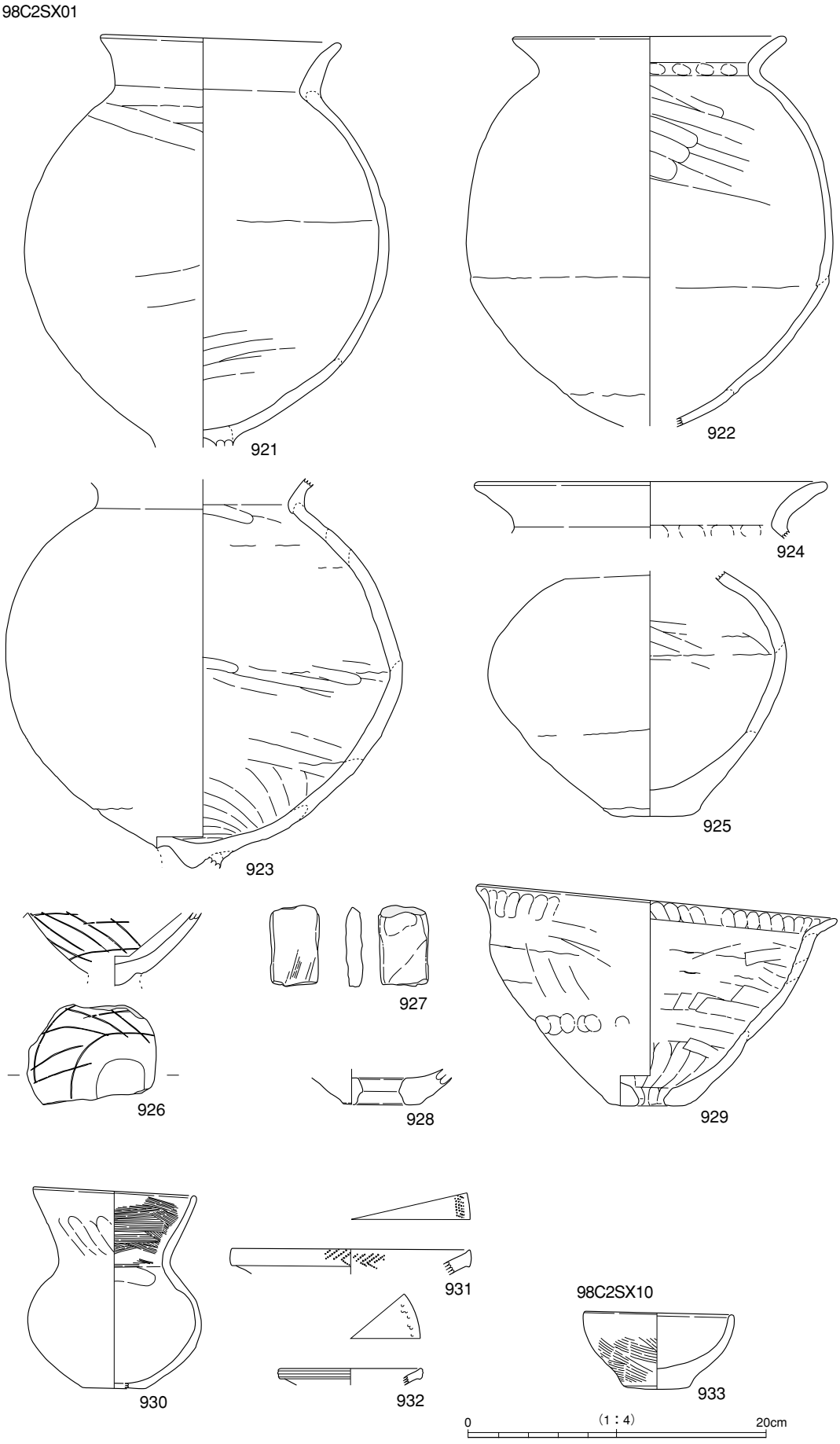
第 126 図　98C2SX01 出土土器実測図（8）



第 127 図　98C2SX01 出土土器実測図（9）



第 128 図　98C2SX01 出土土器実測図（10）



第 129 図　98C2SX01 出土土器実測図（11）

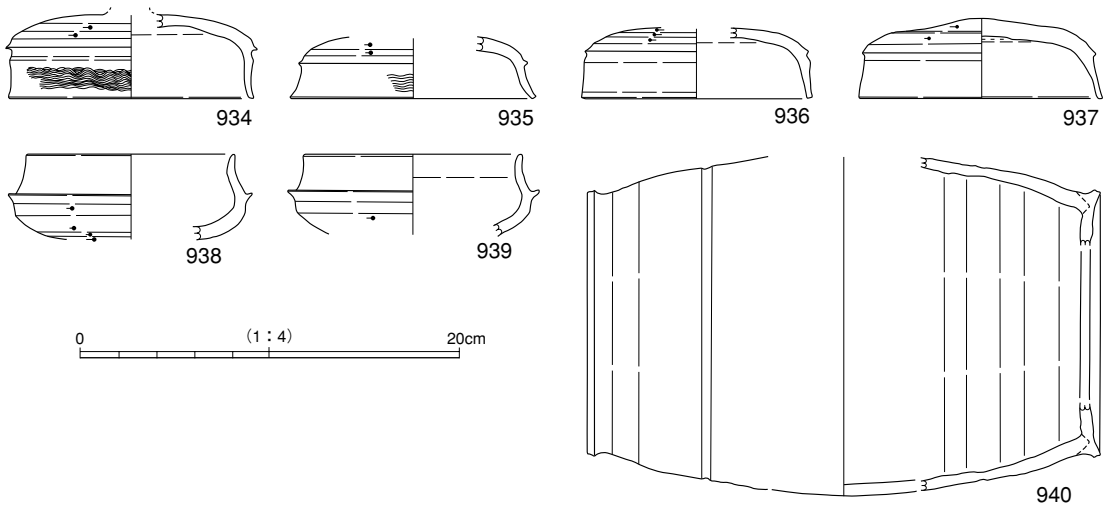
地については今後の検討課題である。

土師器高杯は椀状杯部高杯（941・950～953）椀状杯部高杯の影響を受けたとみられる有稜杯部高杯（942～949）が主体である。全体に小型化が進み口縁はあまり外反・外傾しなくなる。このような椀状杯部と有稜杯部の融合が進んだ形状として954・956・957が考えられる。99ASD01同様、大型高杯（958～961）が複数出土したことも特徴である。杯部に突帯のあるもの（958～960）とないもの（961）がある。椀は口縁内面が斜めに面取りされるもの（962）、ただ直立するもの（963）、内湾するもの（964）とある。965はミニチュア土器もしくは7世紀代の鉢の可能性もあろう。小型壺も98C2SX01とは形が異なり967は広口かつ口縁上端をつまみ上げており新しい要素が加わる。また968はむしろミニチュア土器の範疇である。

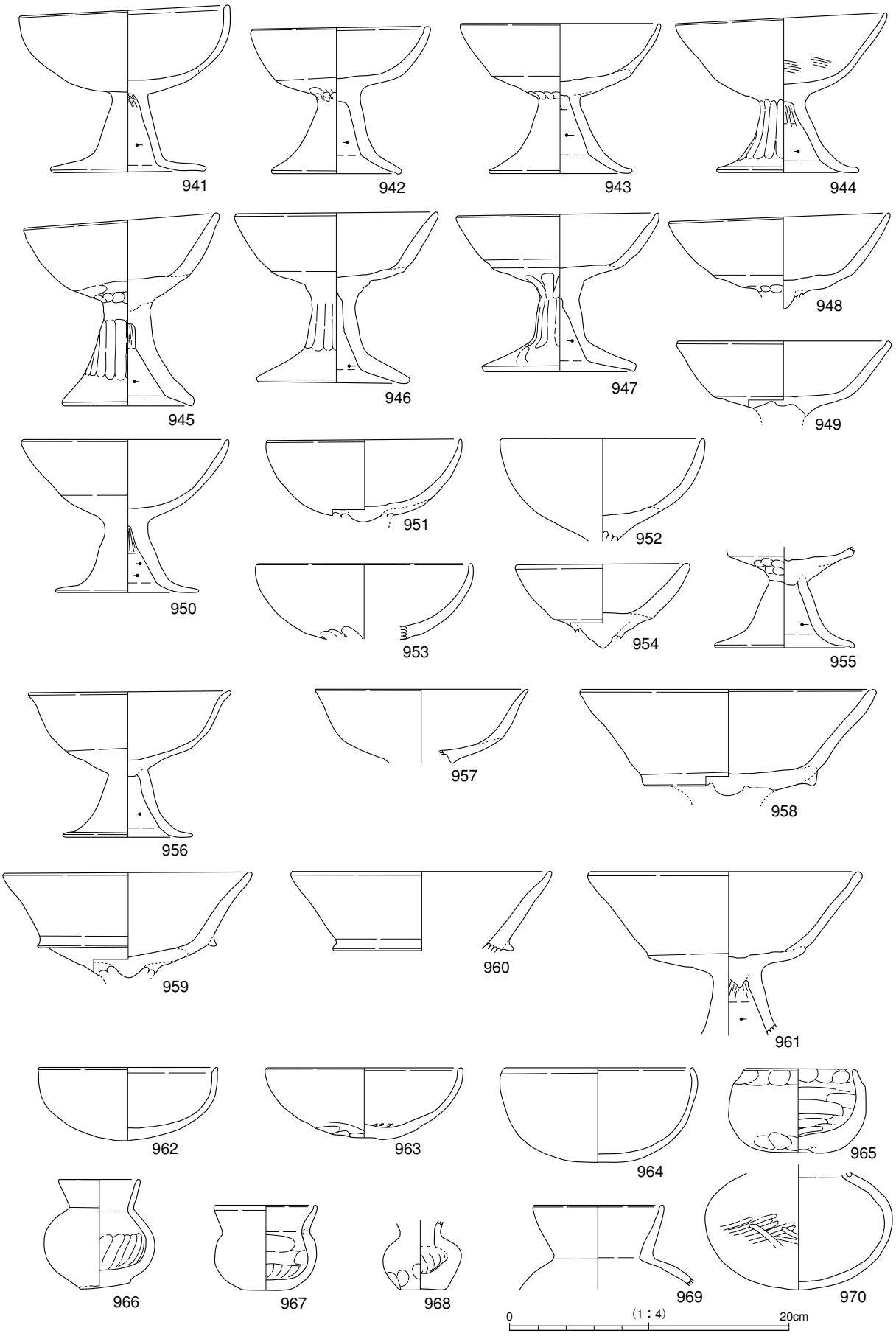
ハケ調整甕（980～989）にも特徴が出ている。985・986は球形の胴部に端部をつまみ上げる外反口縁がある。大溝のハケ調整台付甕は瓜形の胴部なので対照的である。985は台部を甕本体に接合する製作手法をとる。993は外面板ナデ調整甕で、胴部上端にある横方向のハケ痕は調整というより紋様的に入れたようである。ナデ調整甕（993～1007）は球形・瓜形というより弥生土器の壺を思わせるしもぶくれな印象を伝える。ただ口縁は外反し端部をつまみ上げており、新しい要素が随所にうかがうことができる。

1008・1009は多孔（1＋6か）で丸みのある底部の甑である。1008は指ナデ調整で器面は丁寧に仕上げられ、穿孔も内外面両側から面取りする。硬質で全体に黒い色調である。それに対して1009は厚手、軟質である。1010はミニチュア土器の把手である。指ナデで先端をやや尖らせるように成形する。甑・鍋・移動式竈いずれかの一部であろう。

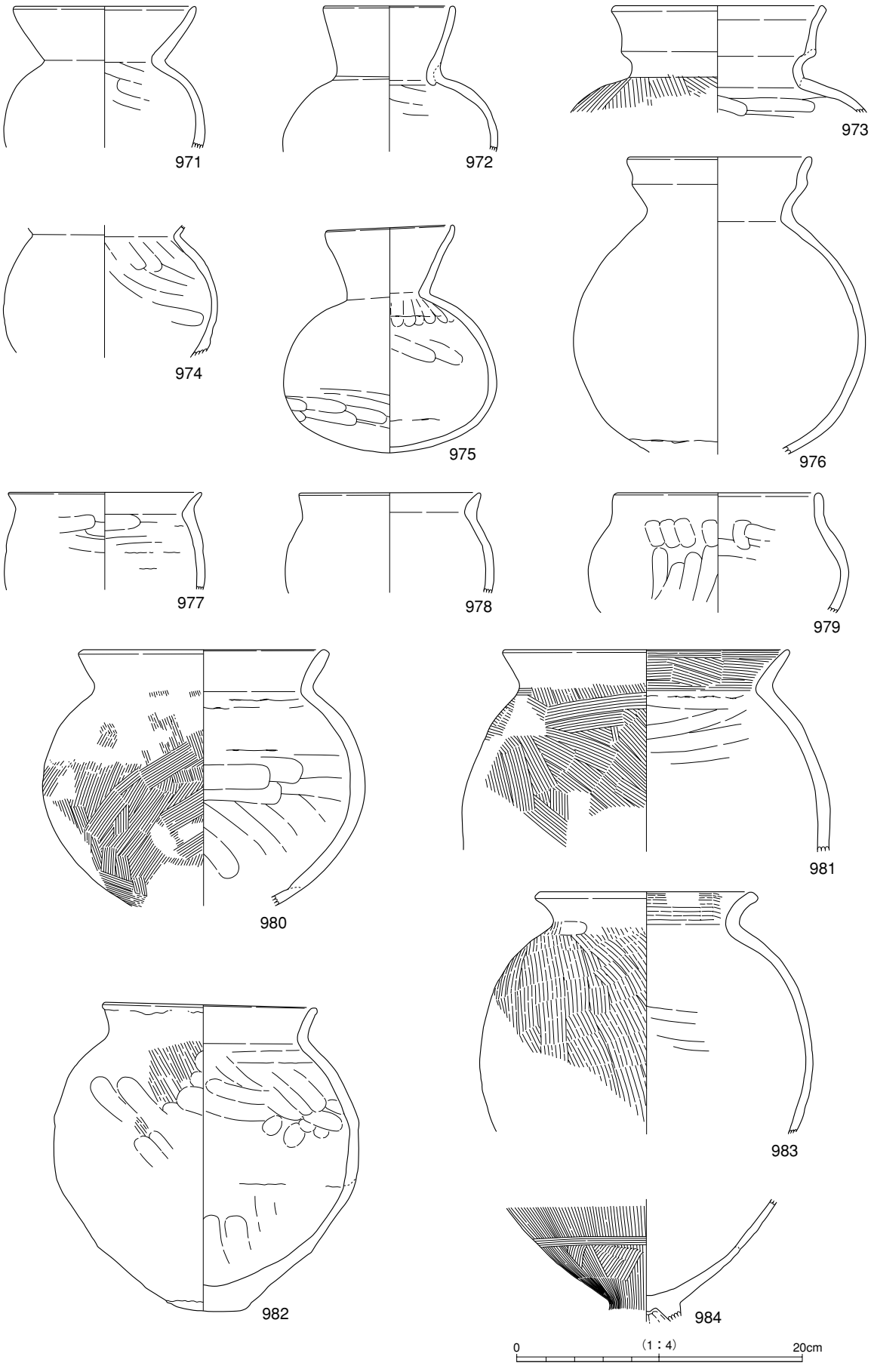
99BSX02　99B区における大溝東土塁からは中世までの遺物に混じって古墳時代の土器が出土した。1012は須恵器高杯である。1013は瓶で、胴部肩の張りが少なく波状文もやや力強さに欠ける。6世紀代に下るか。



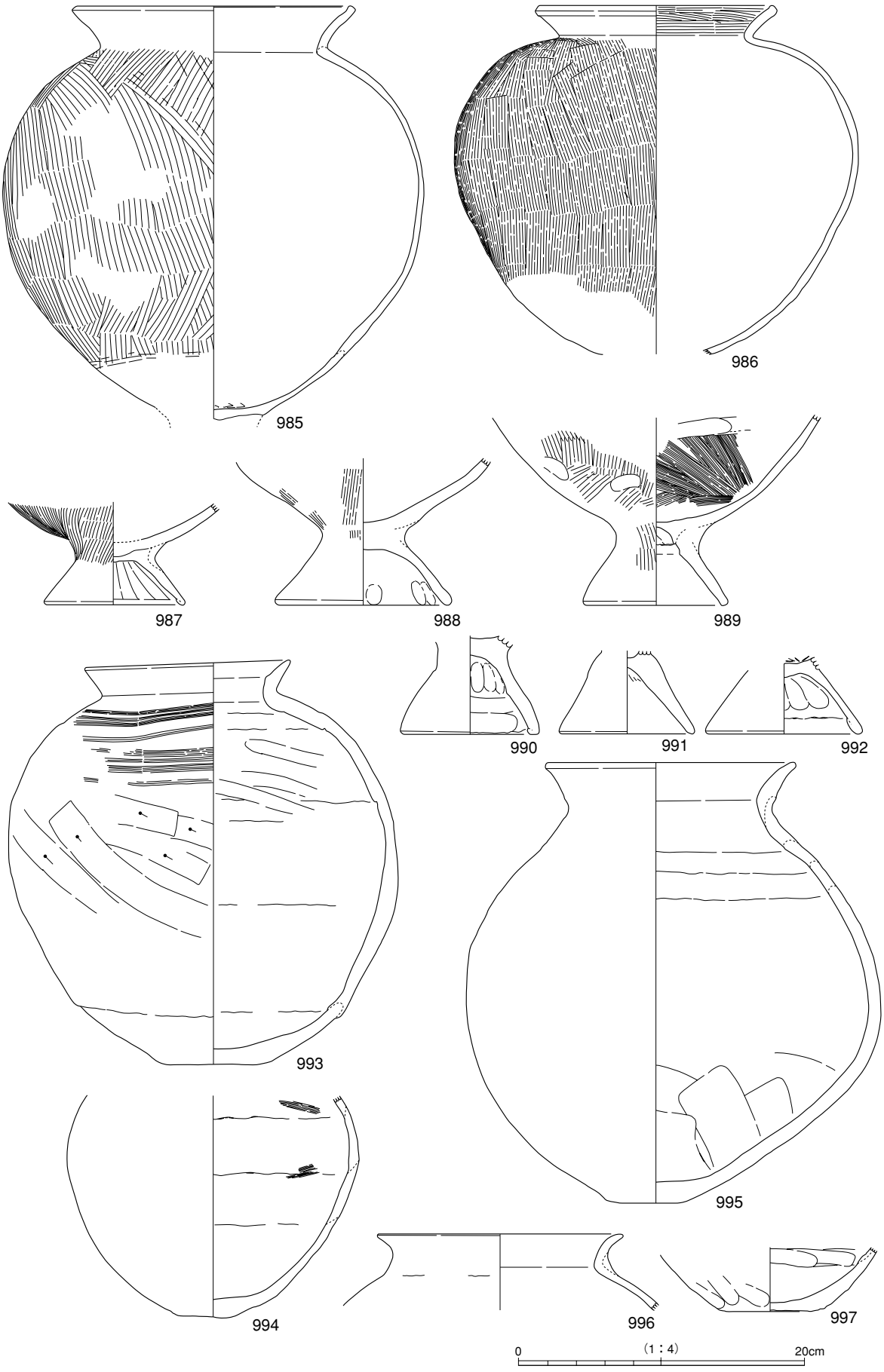
第130図　99ASX01出土土器実測図（1）



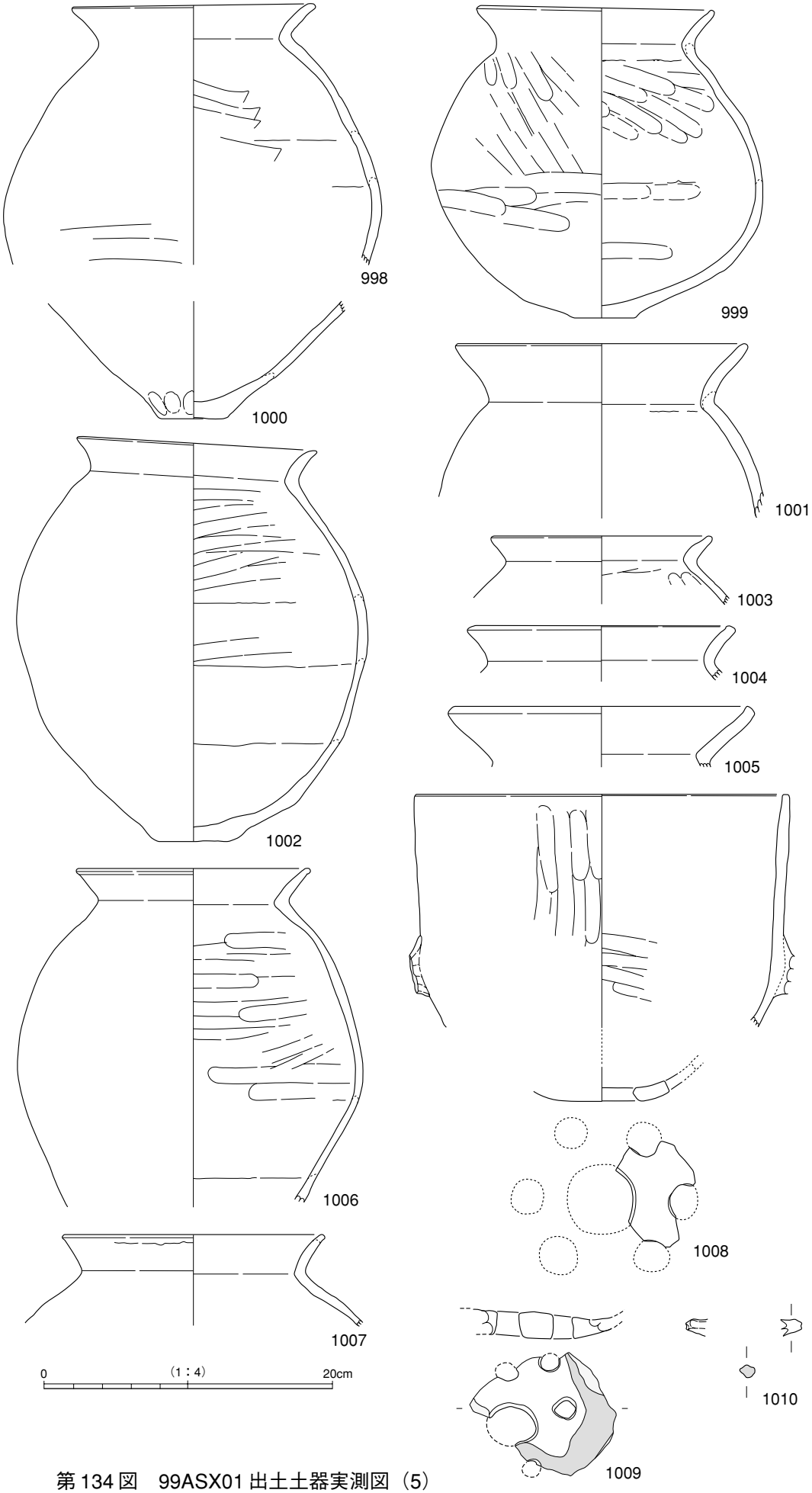
第 131 図　99ASX01 出土土器実測図（2）



第 132 図　99ASX01 出土土器実測図（3）



第 133 図　99ASX01 出土土器実測図（4）



第 134 図　99ASX01 出土土器実測図（5）

（3）竪穴建物出土の土器

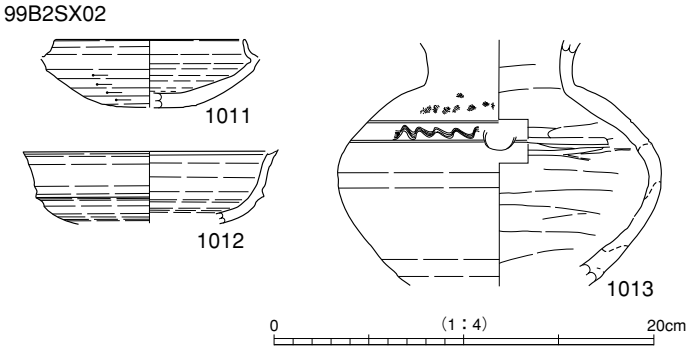
98C2SB01　出土したのは土師質の土器小片ばかりであったが、器種が特定できるものとして土師器高杯と小型壺の2点が出土した。高杯（1014）は脚柱部で上端が閉じ、内面に縦方向指ナデがみえる。小型壺は口縁部が短いもの。いずれも段丘崖（98C2SX01）上～中層出土のものと類似する。須恵器の共伴がないことも考えあわせると、段丘崖中層の土器群に近い時期と想定できる。

99BSSB01　建物は2棟重複するが、先行するSB01aの覆土からは実測可能な土器片は出土していない。一方SB01bは廃絶後土器捨て場となっていたようだがほとんどの出土箇所が中央部に偏っており一括廃棄分が多数を占めると考えられる。

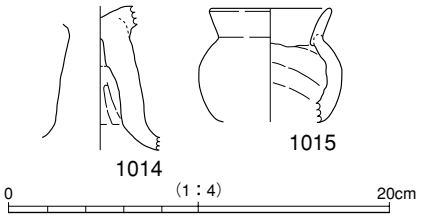
須恵器（1016～1022）のうち1016・1019は東山11号窯式であろう。1018は透かし入りの脚部と1箇所に把手をもつ高杯である。1021甕、1022は鍋の口縁と考えられる。

土師器は高杯が主体である。有稜杯部高杯（1023～1027）、椀状杯部の影響を受けた有稜杯部高杯（1028～1031）、椀状杯部高杯（1032～1044）である。椀状杯部は口縁端部内面が斜めに面取り外反するものが中心である。1042は鉢のような形状である。これらに対応するであろう脚部（1046～1062）はいずれも短い。ただ全体が「八」字形になるものはなく、屈折脚で占められる。1061は脚端部外面に数本の線刻、1062にも同様の線刻がある。1063は高杯あるいは壺の外面に線刻があるもの。しかも仕上がりが赤色になるように化粧土を表面に塗布している。

小型壺はほとんどない。甕はハケ調整・指ナデ調整あり、形は瓜形が主である。1084は口縁端部つまみ上げ、1086は口縁外反・丸みのある平底で

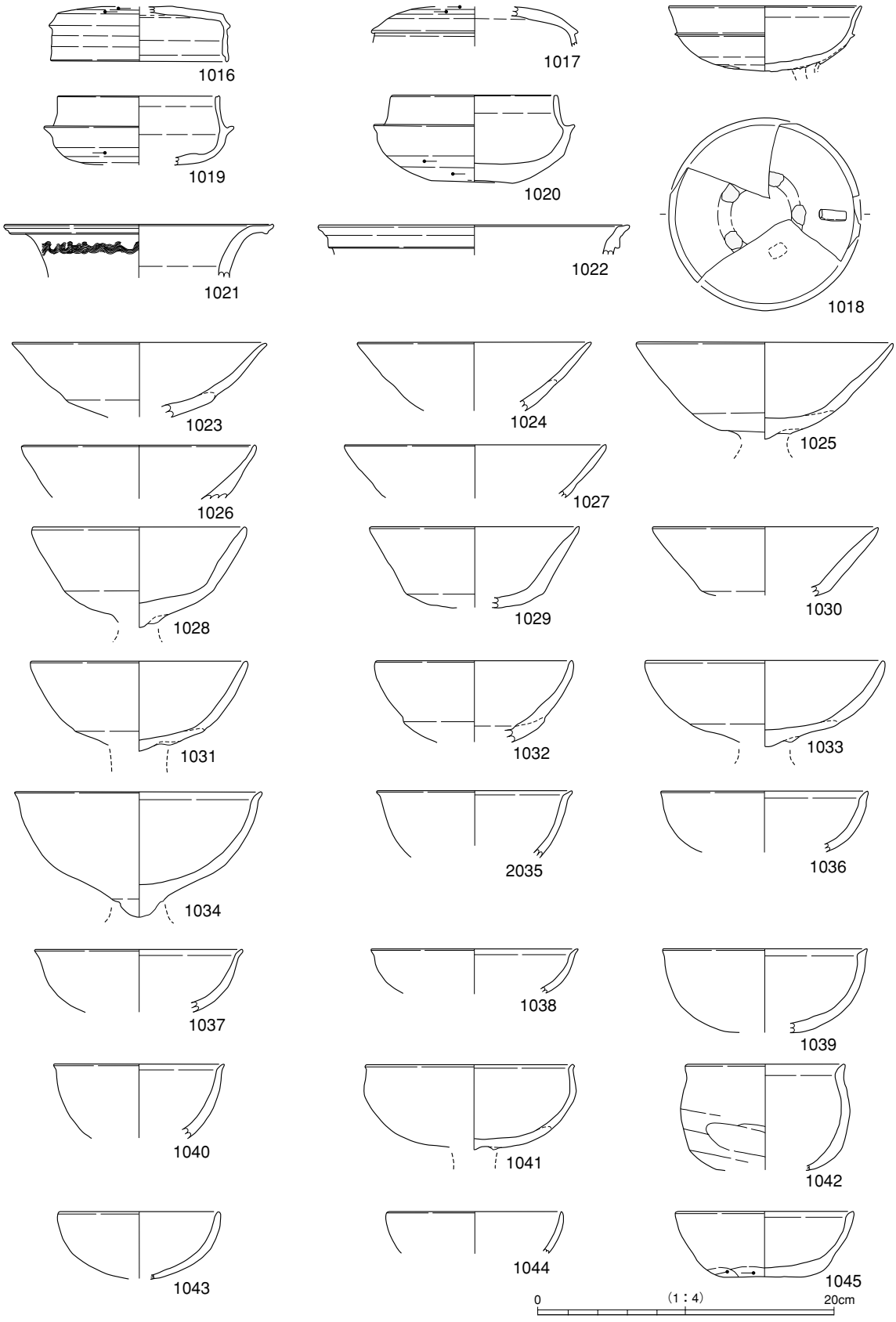


第135図　99BSX02出土土器実測図

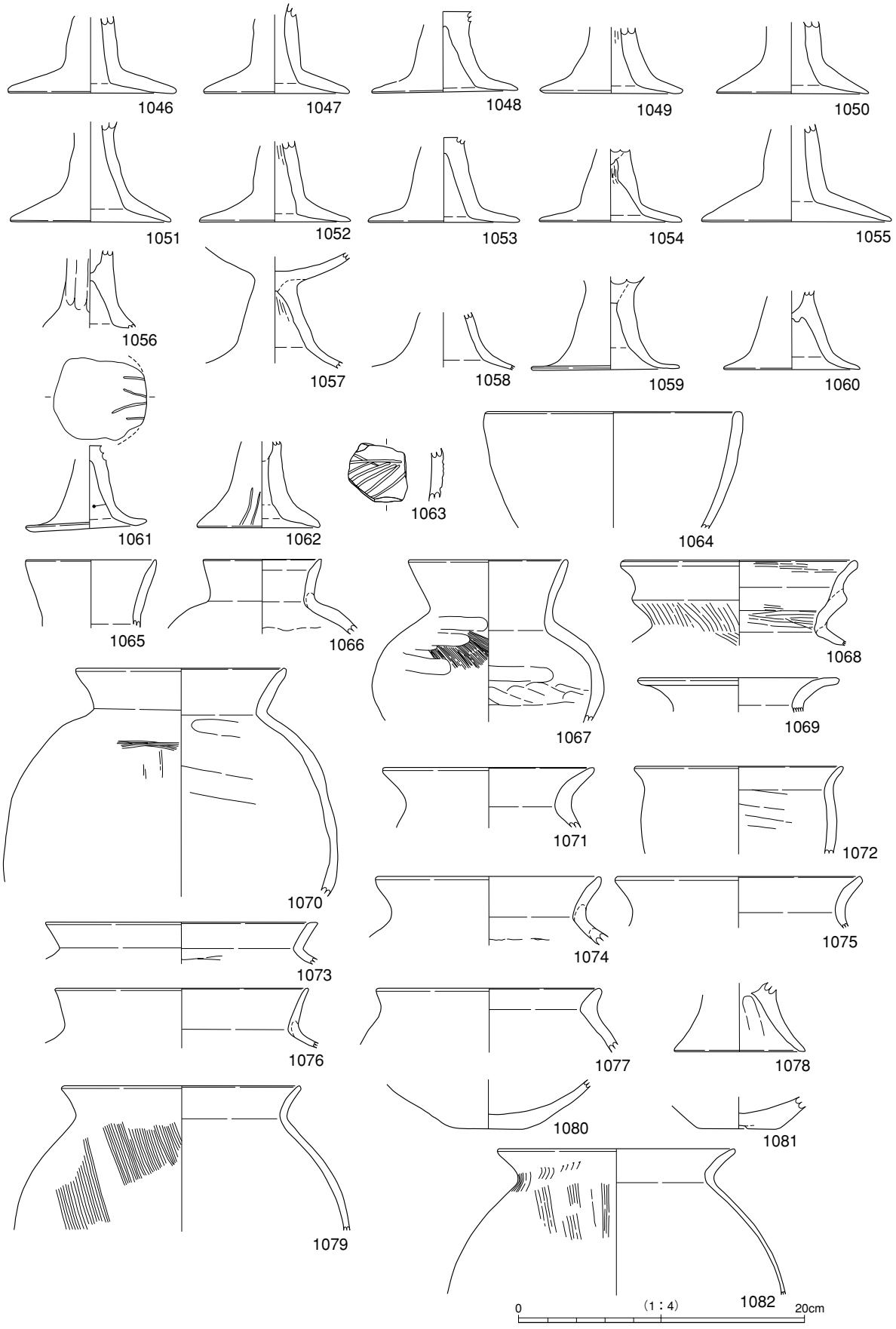


第136図　98C2SB01出土土師器実測図

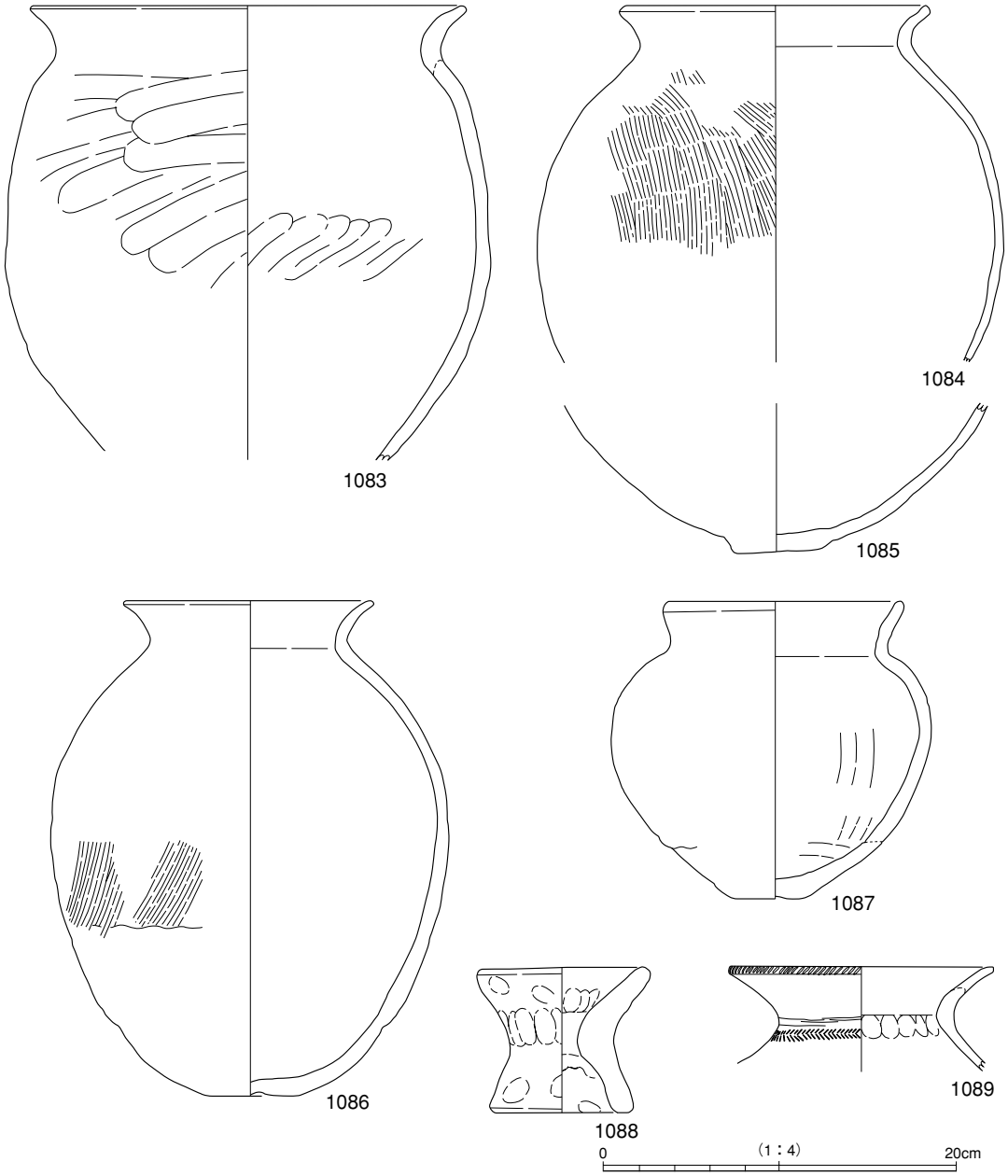
写真 99BSB01遺物出土状況（上：南から、下：1層の出土状況）



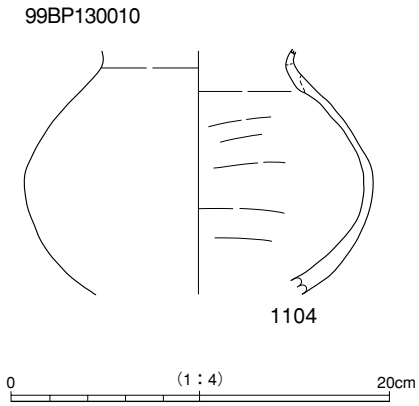
第 137 図　99BSB01 出土土器実測図（1）



第 138 図　99BB01 出土土器実測図（2）



第 139 図　99BSB01 出土土器実測図（3）



第 140 図　99BP130010 出土土器実測図

ある。1088は器台（支脚）と考えられる。あまり火を受けた痕跡はみえないが、竈・炉に甕を据える際に使用した可能性があろう。

99BSK10001ほか　99BSB01床面の土坑・ピットからも土師器が出土した。椀（1095）が入るなど全体的に建物跡覆土と変わらない時期だが、高杯（1090）や壺（1102）はやや古相を示しており、SB01aの時期に関しては若干遡らせて考えるのが妥当と考える。

99BP130010　古墳時代中期の竪穴建物と想定した99BSB12・13の覆土からはほとんど遺物が出土していない。唯一SB13床面のピットP130010からやや下膨れな土師器壺の胴部片（1104）が出土した。

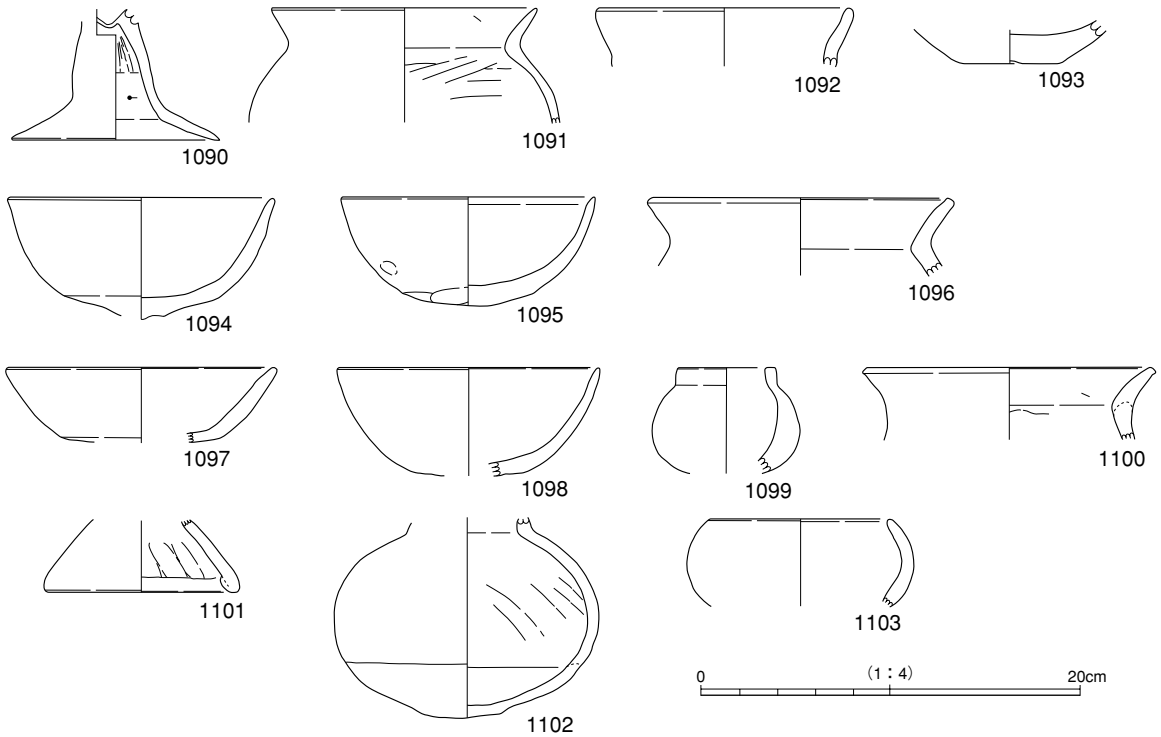
99KSB1071　須恵器は出土せず、土師器有稜杯部高杯を主体とする。土器群としての様相は段丘崖98C2SX01に類似する。高杯は脚柱部上端が開きその内面はシボリ痕と縦方向指ナデが認められる。したがって脚部のつくりが簡易な1128・1129はミニチュア土器ともいえる。1112は杯部底のと筒型脚柱部上端を連結する詰め物粘土が抜けた状態である。1113は口縁に焼成後の穿孔がある。

小型壺は2点にとどまった。1135・1136は直口壺。これら壺類はやや成形が雑な印象を受ける。甕は指ナデ調整甕のみで薄手の口縁が直線的外傾する1141・1143と全体に肥厚する1142が対照的である。ただいずれも明瞭な底部をもつ平底である。1139・1140は台付甕。

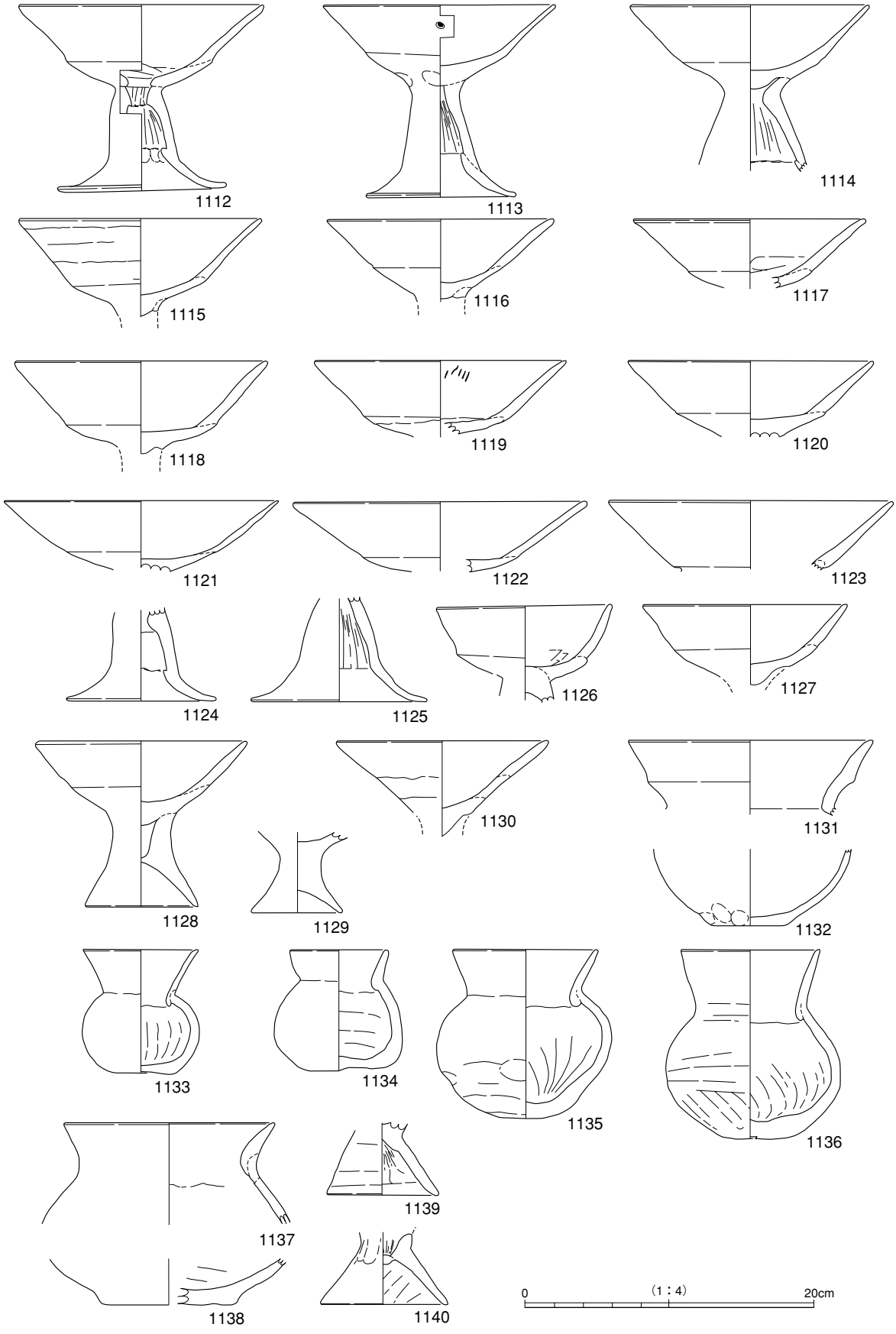
99KSK　99KSB1071床面の土坑から出土した高杯（1145）は一見すると椀状杯部の影響を受けた小型のものと思われるが、1128・1129と同様ミニチュア的な高杯であろう。

（4）その他の遺構出土土器

98B・98C区土坑・ピット　1148は東山111号窯式の杯身、1149はミニチュア土器の椀であるが時期は



第141図　99BSB01床面土坑・ピット出土土器実測図



第 142 図　99KSB1071 出土土器実測図（1）

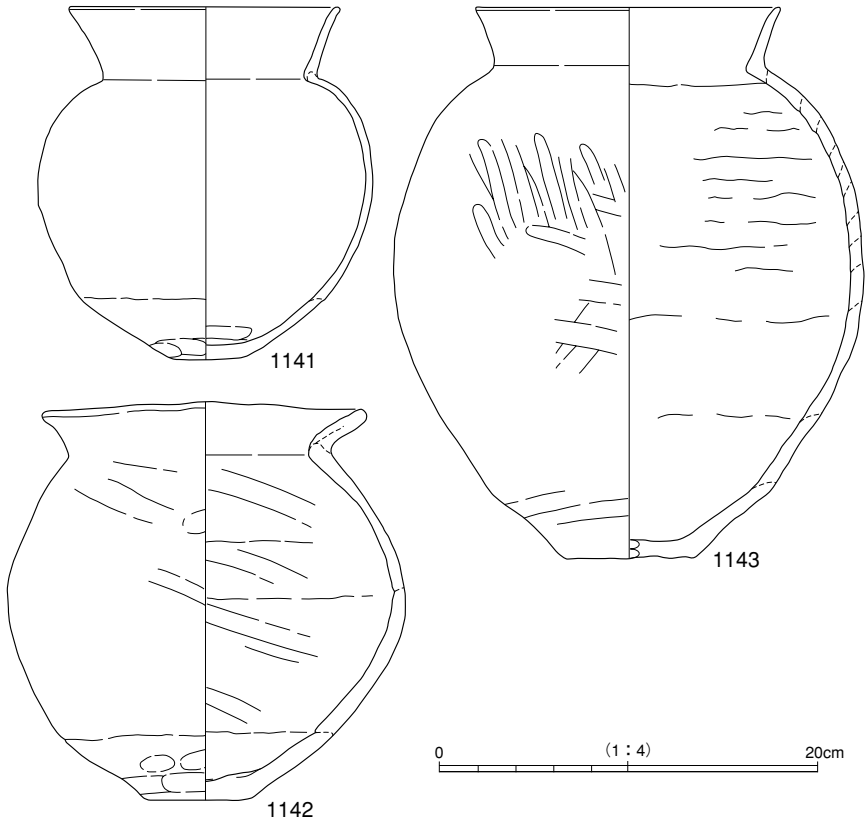
特定できない。1150は有稜杯部高杯、1151は壺で横方向へらミガキ。98C2SK22は98C2SB01の後に掘られた土坑であるが、1152と1153は組み合わさるものか。

99ASK2005　大溝東側土塁に掘られた土坑出土土器はかなり細片化したものばかりであったが、一括廃棄されたと考えられる一群である。ここで比較的形の整った椀状杯部高杯（1155）に伴出する器種の一端を知ることができる。1157・1158は大型高杯で口縁端部は面取り。1163はやや古相の高杯脚部。それ以外（1159～1162）は短脚化・「八」字形化が進む。壺類はなく、甕は指ナデ調整甕（1164～1167）、ハケ調整甕（1168～1172）である。なおこの土器群に須恵器は共伴しない。したがって須恵器が大量に流入する直前の土師器の器種構成を示していると推測される。

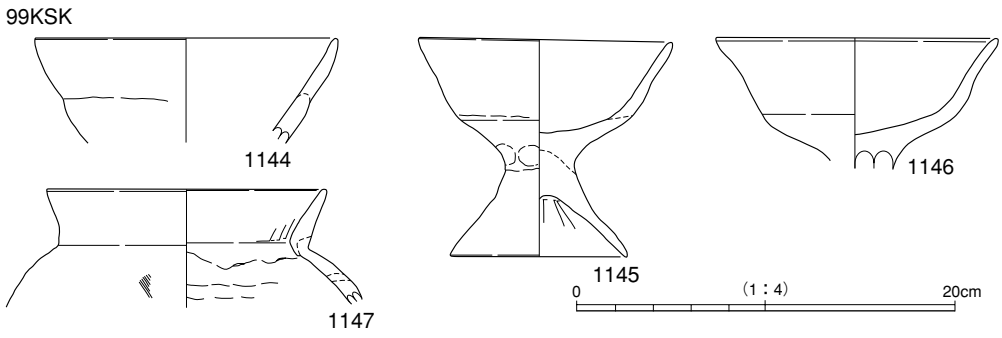
99BSK10　調査区北壁で途切れて確認されたやや崩れた長方形の土坑である。1173・1174は東山11号窯式の杯蓋・身のセットである。土師器はこれと併行する時期のものと考えられる。1175は粘土帯積み上げ痕が明瞭に残るナデ甕。1177は外面に疎らかつ不規則なハケ調整痕がみえる。瓜形の胴部に頸部が肥厚する口縁部という特色がある。

99A～99B区その他

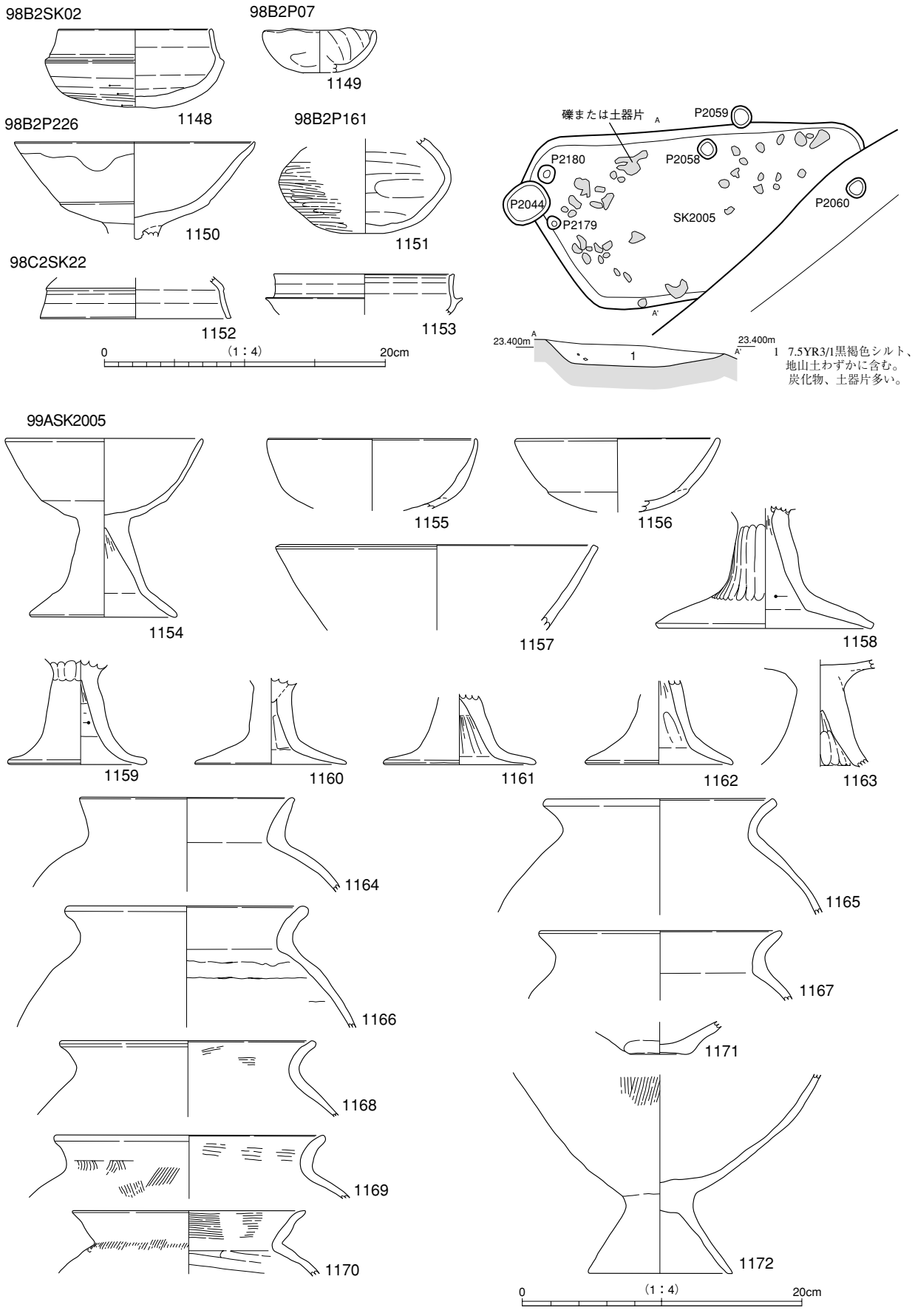
1180は鉢。底部の丸みが強くなり胴部上半もなで肩である。1181は甑の把手で中空である。それに伴う1182はミニチュア土器の甑・鍋または竈の把手。同様のものは



第143図　99KSB1071出土土器実測図（2）



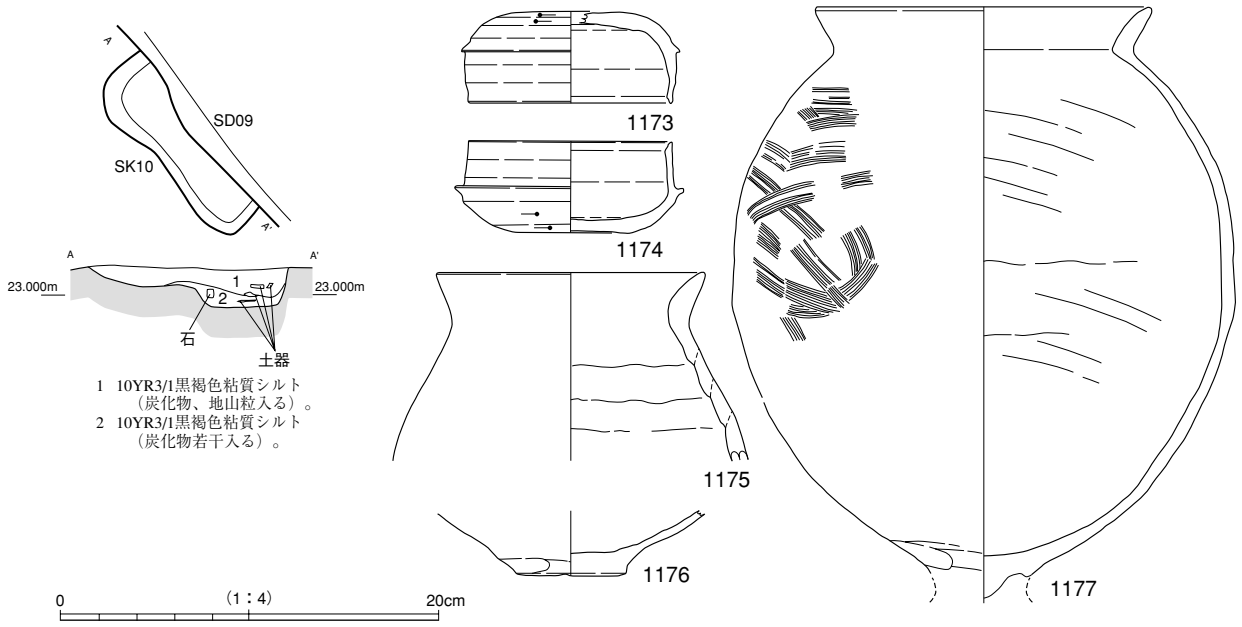
第144図　99K区土坑出土土器実測図



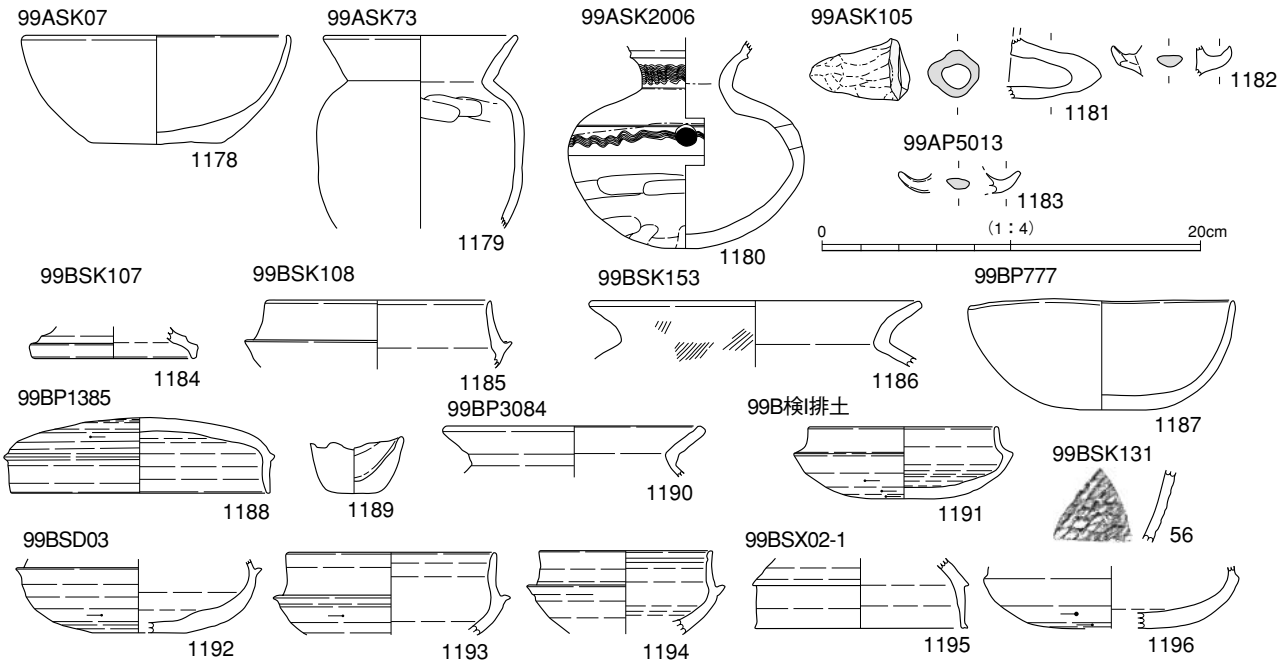
第 145 図　99ASK2005 平面・断面図と 98B2・C2・99A 区土坑出土土器実測図

99AP5013からも出土した（1183）。1187は99BP777の底部に正位置で据えられるようにして出土した。99BP1385では東山61号窯式の須恵器杯蓋（1188）にミニチュア土器（1189）が共伴する。56は須恵器甕小片だが斜格子がみえる。

99C区　99CSK11は掘立柱建物99CSH01の柱筋と一部重複する直径75cm深さ15cmの円形土坑である。ここから東山11号窯式の杯蓋（1198）・杯身（1199）がセットで出土。なお99CSH01柱穴の一角をなす99CP410からは無蓋高杯（1200）と小型甕（1201）が出土した。遺跡中央の谷地形では、古墳時代の堆



第146図　99BSK10平面・土層断面図と出土土器実測図

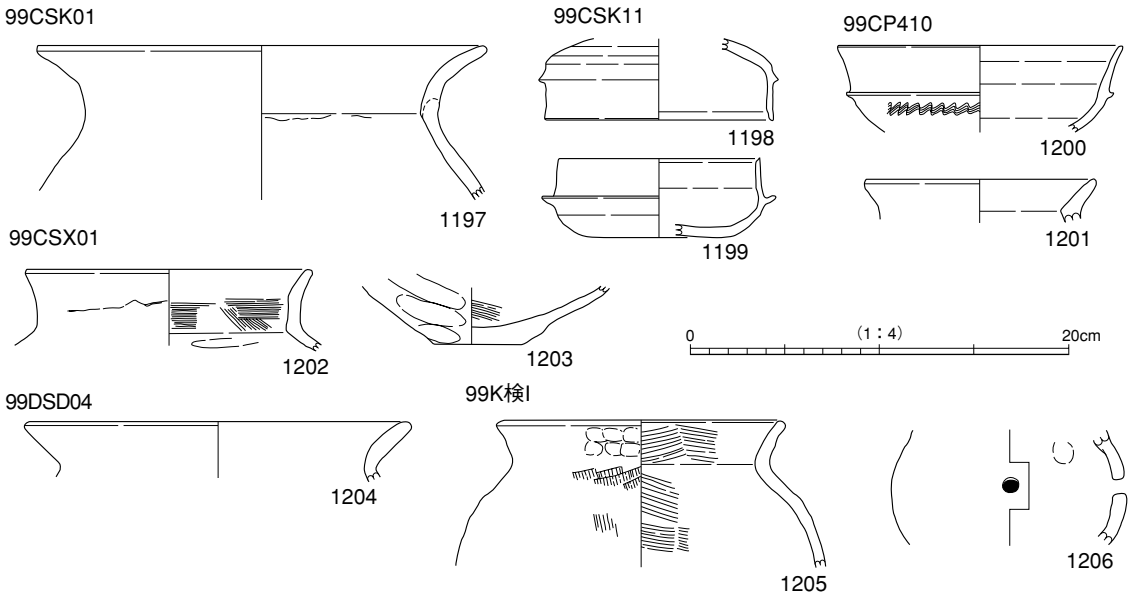


第147図　99A・B区土坑その他出土土器実測図

積層と考えられる黒色シルト層まで調査したが、その遺物出土量はごくわずかであった。同じ段丘崖98C2SX01上層と比べても格段に少ないといえ、当該期にあっては主たる土器廃棄の場ではなく、主生活域からも離れていたと推察される。1202・1203は外面指ナデ、内面一部ハケ調整の甕である。

写真　谷地形99CSX01の土層断面
（南東から、奥の森が糟目春日神社）

下糟目地区　谷地形の北側である下糟目地区では、99KSB1071以外からはほとんど当該期の遺物は出土していない。1204も大きく外反する口縁は古代の可能性もあり。1205・1206は99KSB1071付近での出土でこれに関係するものと考えられる。1206は鬲を模した土師器小壺で、焼成前の穿孔である。



第148図　99C・D・K区土坑その他出土土器実測図

第 6 節　古墳時代の木製品

(1) 概観および出土状況

概観　水入遺跡では一部低湿地にかかることから植物質・木製品が比較的良好に残存する遺構がある。特に大溝や段丘崖下では古墳時代中期にかかわる層位、すなわち98C2SX01中・下層および大溝SD01第５・６層から多数の木製品や自然木の出土をみた。しかし一定量の木製品が出土するのはこの以外では戦国時代以降に関わる層位からで、古代・中世全般にわたって顕著な木製品の出土はなかった。これは古墳時代中期の水位などの環境にもよるが、その後この堆積層が上からの堆積で密封に近い状態になったこととも関連すると考えられる。

出土傾向　以上の通り木製品の出土には偏りがあり、一概にその分布について述べることはできない。特に農耕・掘削作業にかかわる道具（大足・鋤・鍬など）や建築部材（柱・板材など）は散漫な分布である。ただ出土地点で注目されるのは刀形（W26）で、これは後述する（第７節）石製模造品の出土集中地点からの出土である。祭祀行為に関連して一括して廃棄（もしくは供献）されたと考えられる。

(2) 各説

耕作に関わる道具　W1は曲柄鍬の未製品である。刃部の一部は朽ちて欠く。長さ64.4cm、最大幅21.5cmである。樹種はアカガシ亜属。W2は段丘崖（98C2SX01）中層出土の曲柄二又鍬である。残存長50.6cmである。W3は鋤で全長95.2cmで刃部が朽ちて欠く。W4は大足の縦枠材で、残存長51.9cm、高5.2cm、厚さ2.6cmである。横桟挿入孔の４つに横桟の一部が装着状態で残る。W5・6は耕作具の柄であろう。断面楕円形である。W7は各所に傷がある不明品。板状なのでなんらかの未成品の可能性もある。

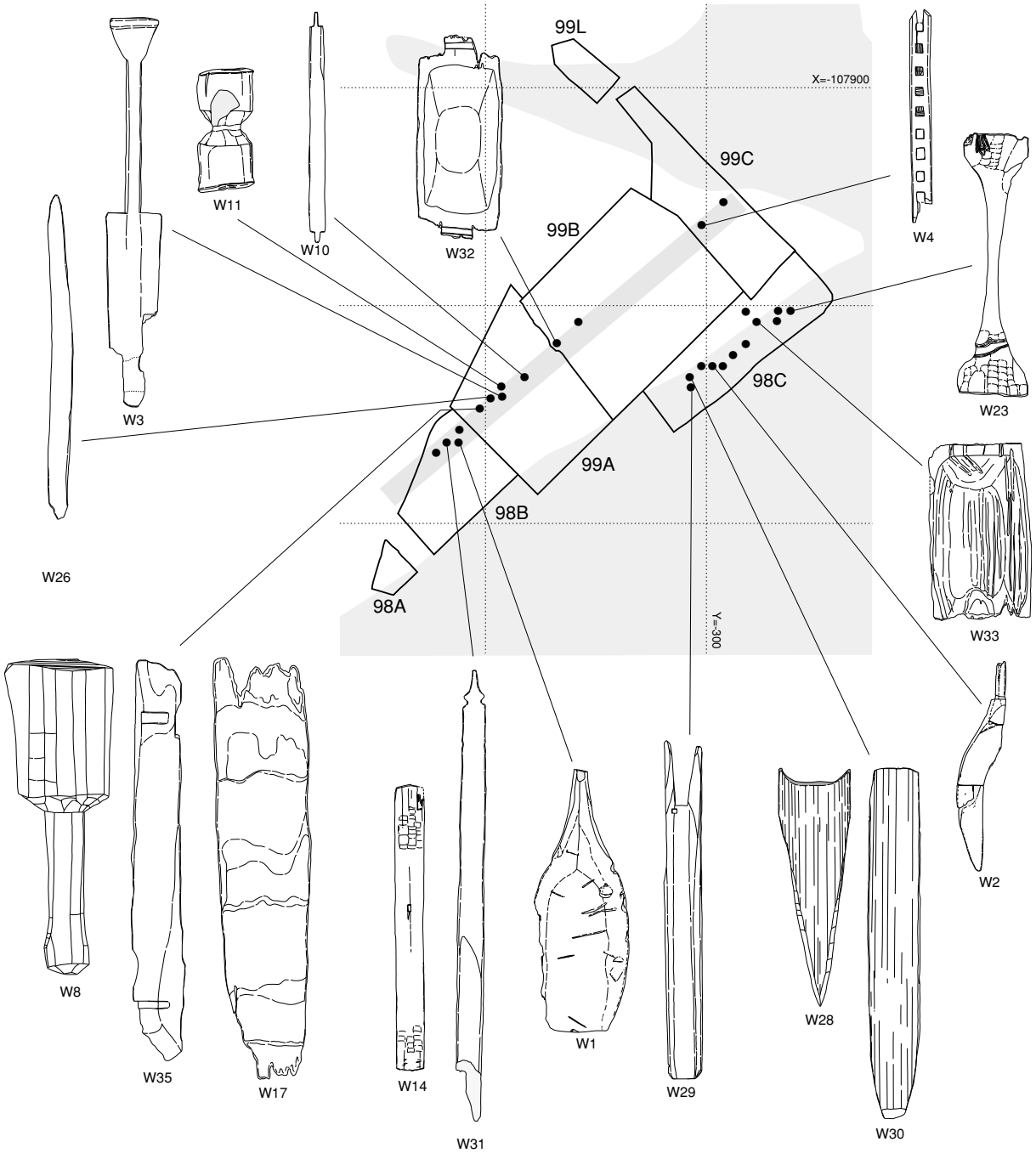
室内作業に関わる道具　W8・9は横槌。W8は全長38.4cm最大径11.2cmで、各部の面取りが明瞭である。一方W9は全体に面取りがあまりみられない細身である。残存長39.6cm、最大径7.0cmである。W10は機織具とみられ平たい棒状を呈する。全長28.4cm、幅16.8cm。片面がやや丸みがあって。両端は1.2～1.5cmの角柱状の突起となる。W11～W13は木製錘。W11・12は大溝出土で、それぞれ全長14.8cmと16.3cm、最大径6.3cmと7.7cm。W13は段丘崖中層出土で残存長16.0cm、最大径6.3cm。W12・13は樹種はクリである。

写真　99ASD01 窪地 E での木製品出土状況（西から）

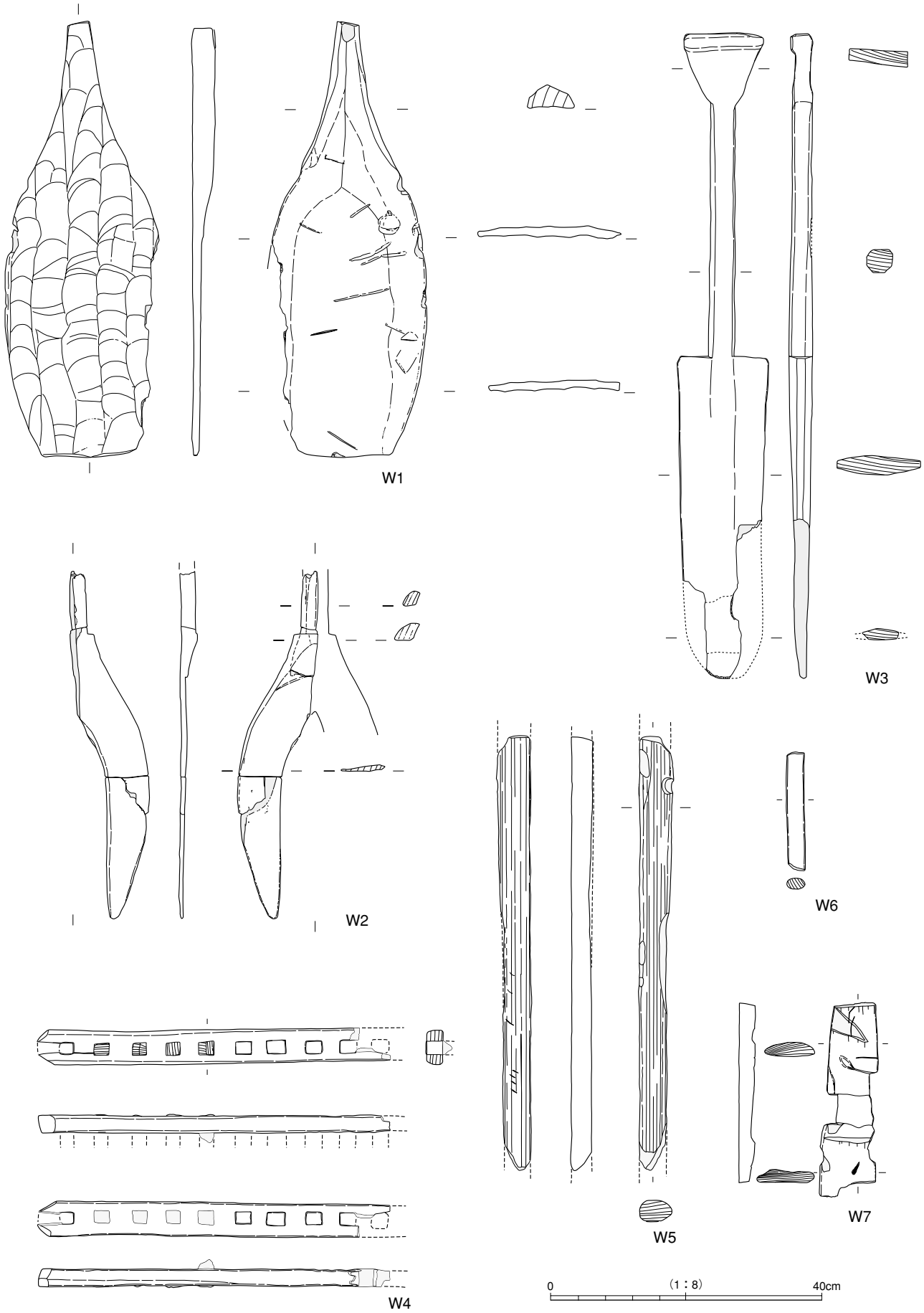
建築部材　W14は98B2SD01出土の全長140cm幅13.6cm厚さ2.7cmの板材。中央からややずれた位置に長方形の穿孔がある。両端を中心に加工痕がある。W15は最大幅4.0cmの角棒。W16は中央に圧痕のある板で先端が地面に突き刺したのか斜めに面取

りする。W17は腐朽が激しいが高床建物の階段である。残存長102cm幅22.4cm、3段分確認できた。W18は両端が若干腐朽しているが全長198cm幅21.6cm厚さ2.0cmの板材である。W19・20も板材の一部であるが、地面に突き刺すためか端部を斜に面取りする。W23は扉板の把手か。全長63.8cm、撥形に開く両端での幅16.8cm、握りとなるであろう部分は一辺2.4cmの角柱状。表側の面は丁寧な仕上げである。樹種はヒノキ。W24も戸口に関わる部材か。残存長109.6cm幅26.4cmで断面は凸形になる。その凸部に両側からの四角い抉りが入る。樹種はクリ。W25は円柱。残存長299cmで下端にいくにつれやや径が増し最大径14.4cm。下端は両刃石斧のように面取りし、上端は直径4.7cmのホゾを造り出してあったが欠損する。

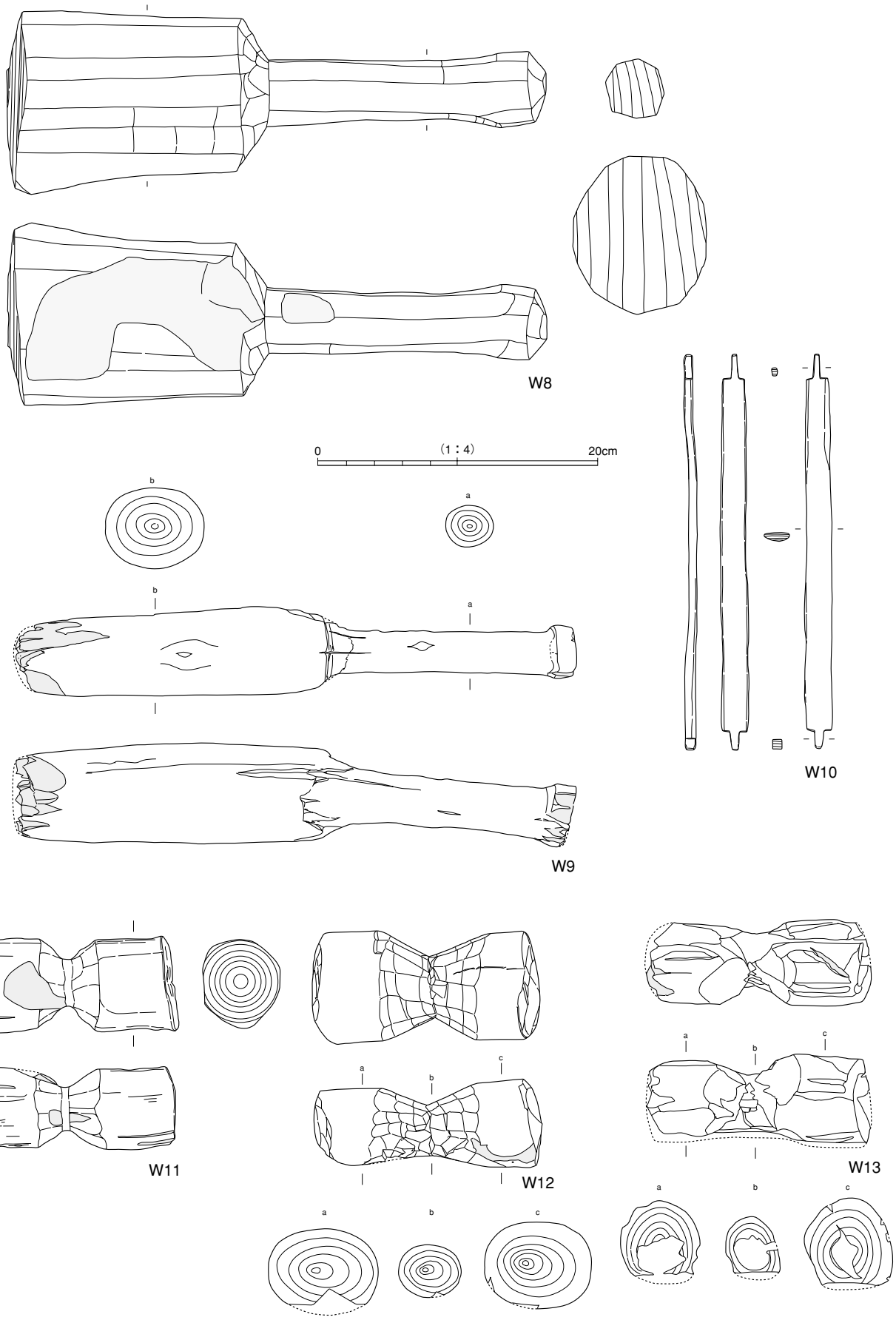
その他　W26は刀形。半ばで曲っており刃の造り出しも甘い。残存長39.8cm、最大幅2.5cm。W27はね



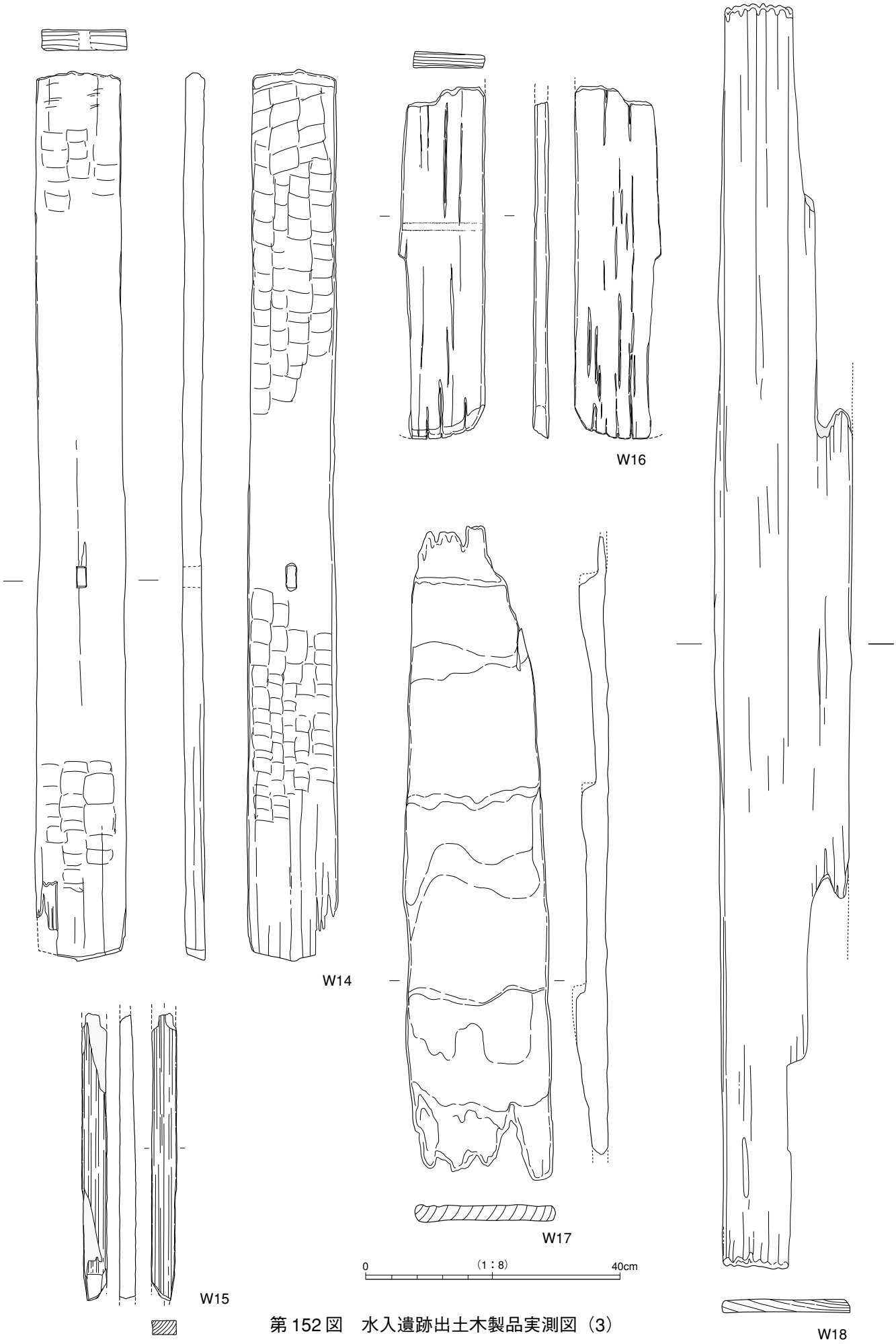
第149図　水入遺跡古墳時代主要木製品出土地点分布図



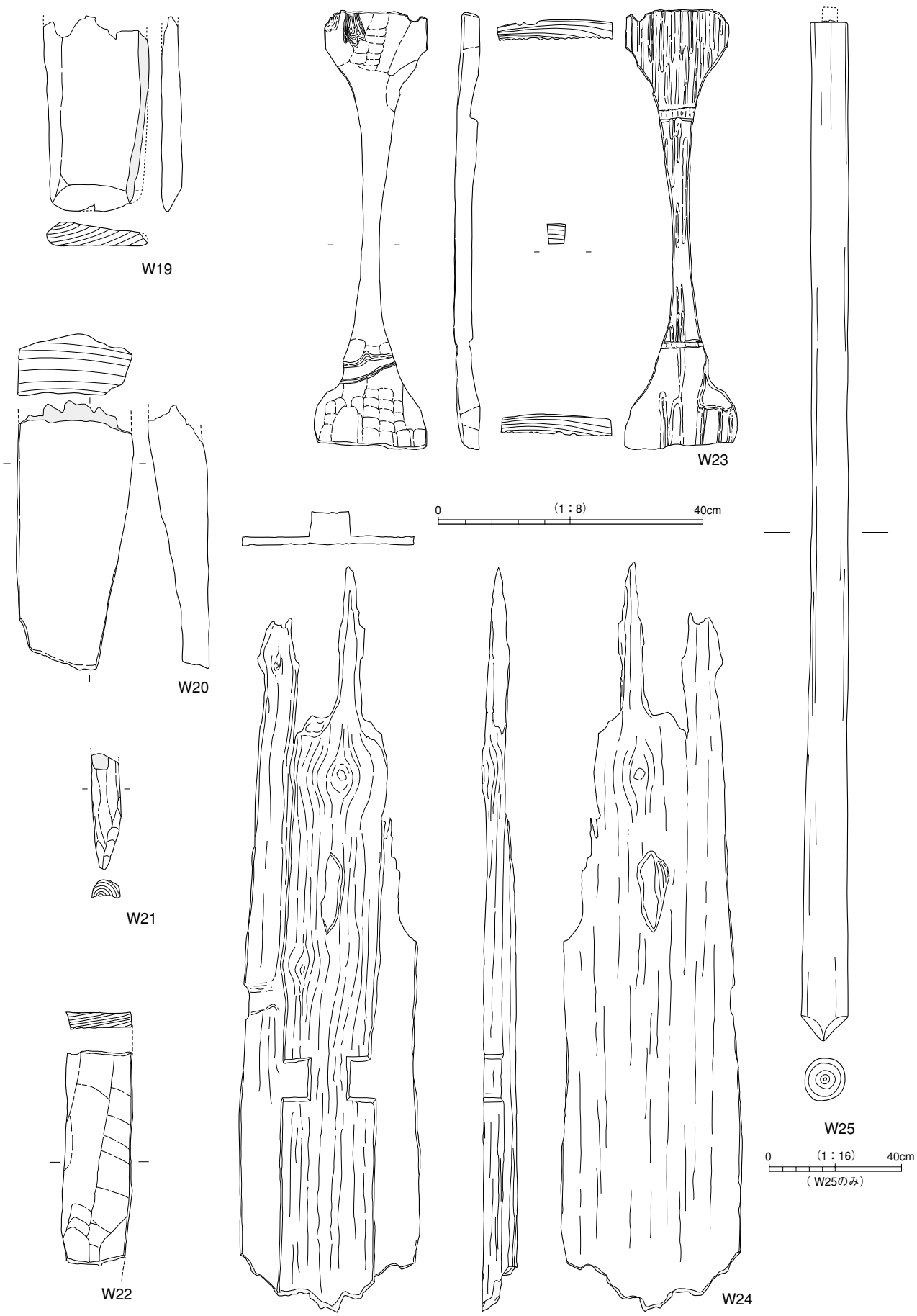
第 150 図　水入遺跡出土木製品実測図（1）



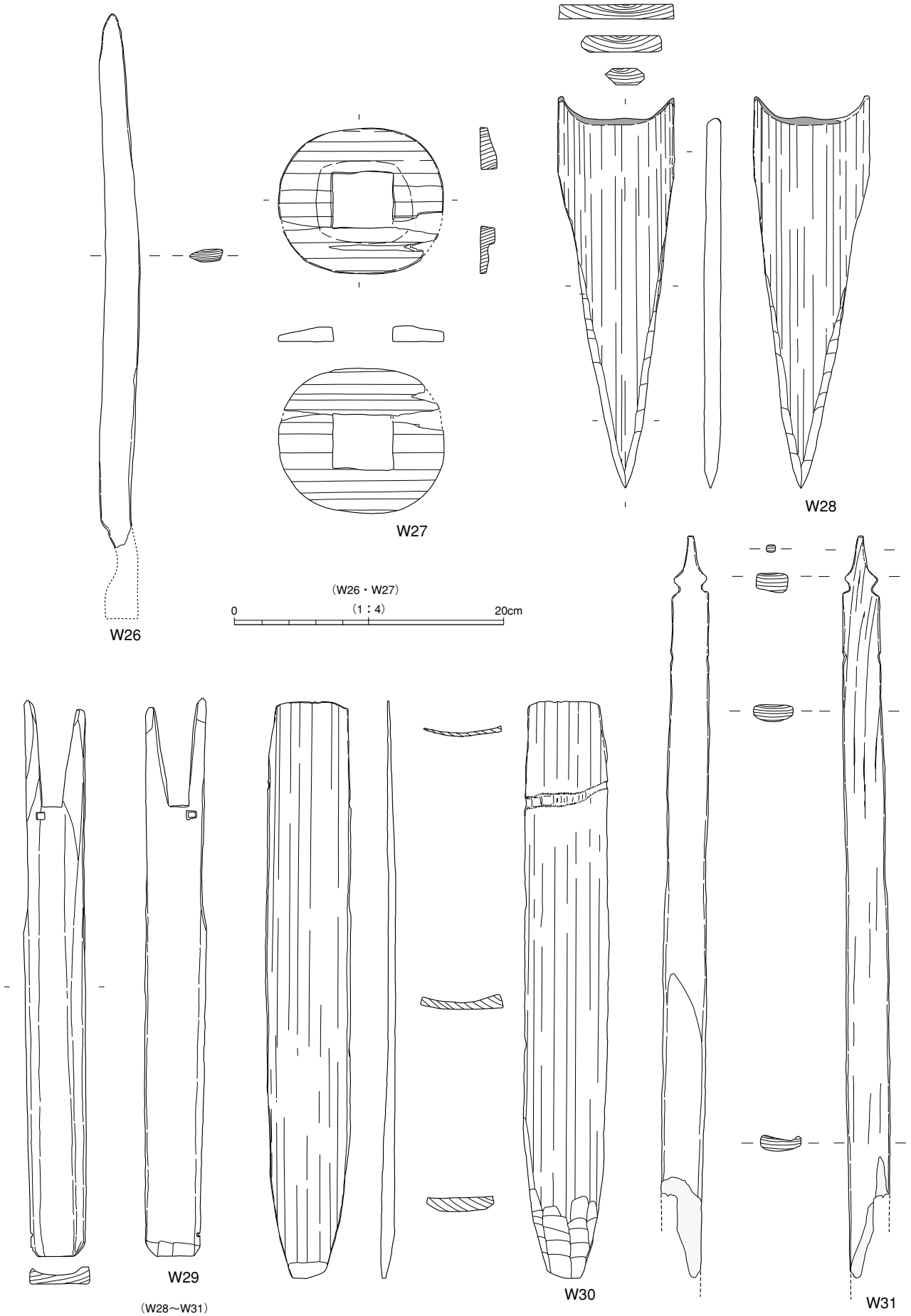
第 151 図　水入遺跡出土木製品実測図（2）



第 152 図　水入遺跡出土木製品実測図（3）



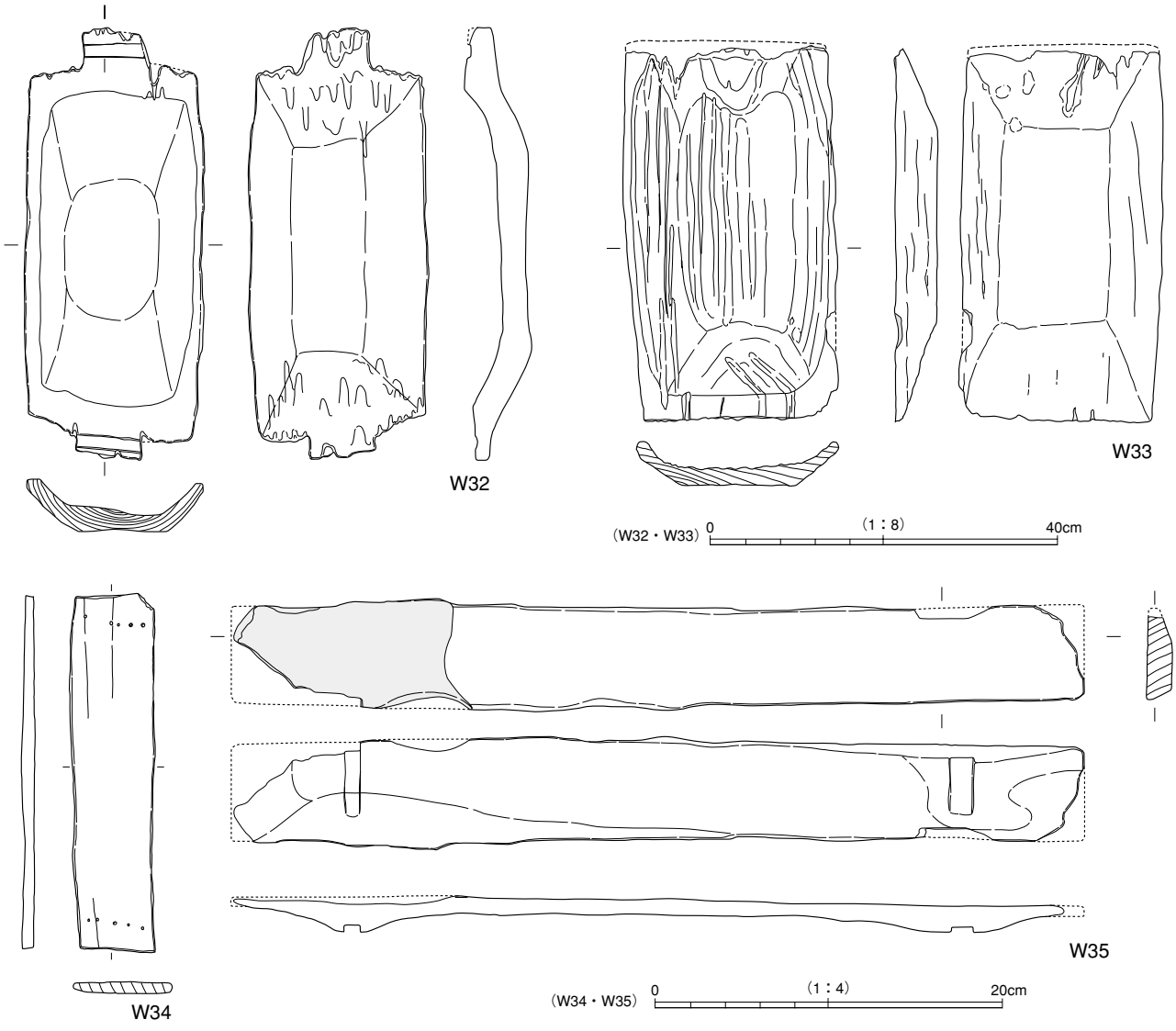
第 153 図　水入遺跡出土木製品実測図（4）



第 154 図　水入遺跡出土木製品実測図（5）

ずみ返しのような形状である。中央部でやや厚みを増して1.1cm、直径12.2cmの円形である。樹種はヒノキ。W28～30は段丘崖中層で比較的まとまって出土した。用途は断定しがたいが、板状のW29・30は凹んだ面をもつのが特徴である。またW28の上端はw30が載せるかのような加工がある。このことからW29・30は樋、W28はその支柱ではないかと推測される。W28は全長24.0cm最大幅8.6cm、W29は全長10.4cm幅4.4cm、W30は全長43.0cm幅6.3cmである。樹種はいずれもヒノキ。W31は98B2SD01出土で卒塔婆のような形状の用途不明品。概ね板状であるが片面は丸みをもつ。残存長55.2cm最大幅3.3cm。樹種はヒノキ。

W32・33は盤（槽）。W32は99BSD01出土で両端に把手があり、さらに把手上面に溝状の凹みがある。全長49.5cm幅19.9cm。W33は段丘崖中層出土。全長43.4cm幅24.0cmで、樹種はヒノキ。W34も段丘崖中層出土で箱の部材。両端近くに木釘の通った孔が5箇所ずつあく。樹種はヒノキ。W35は机の天板で、上面の一部焼失（実測図のトーン部分）。下面は脚の差し込む幅1.7～2.5cmのホゾがある。ホゾの位置からみて2～3枚の天板を横につなげて1枚としたと考えられる。99ASD01出土。



第155図　水入遺跡出土木製品実測図（6）

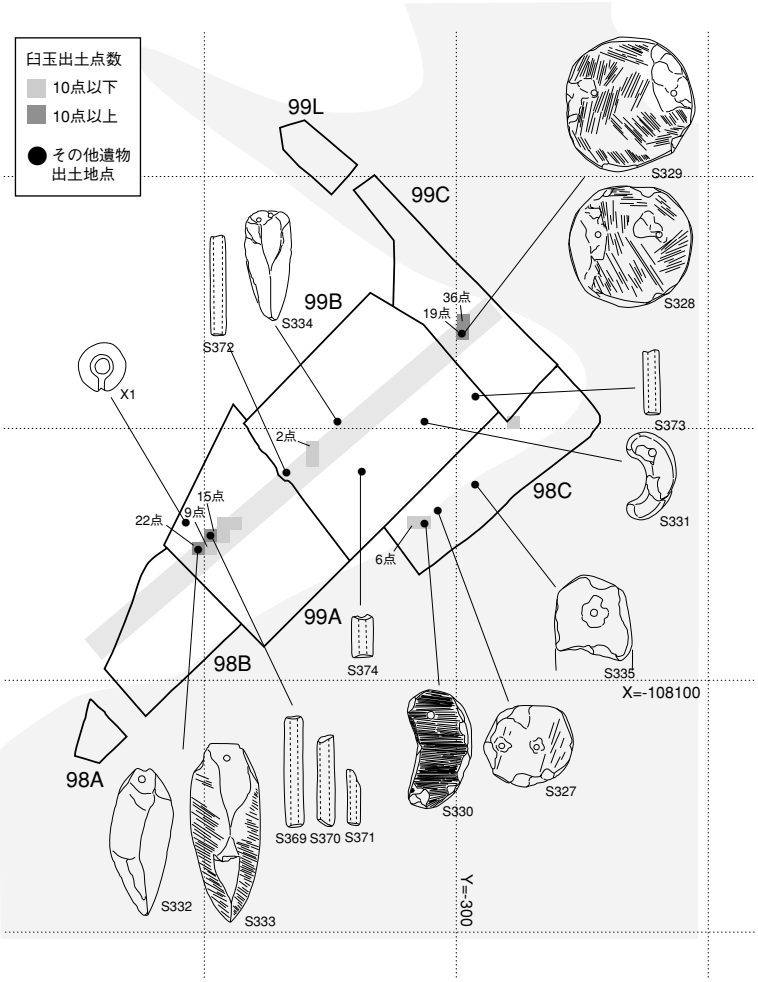
第７節　古墳時代の石製品

（１）概観と出土状況

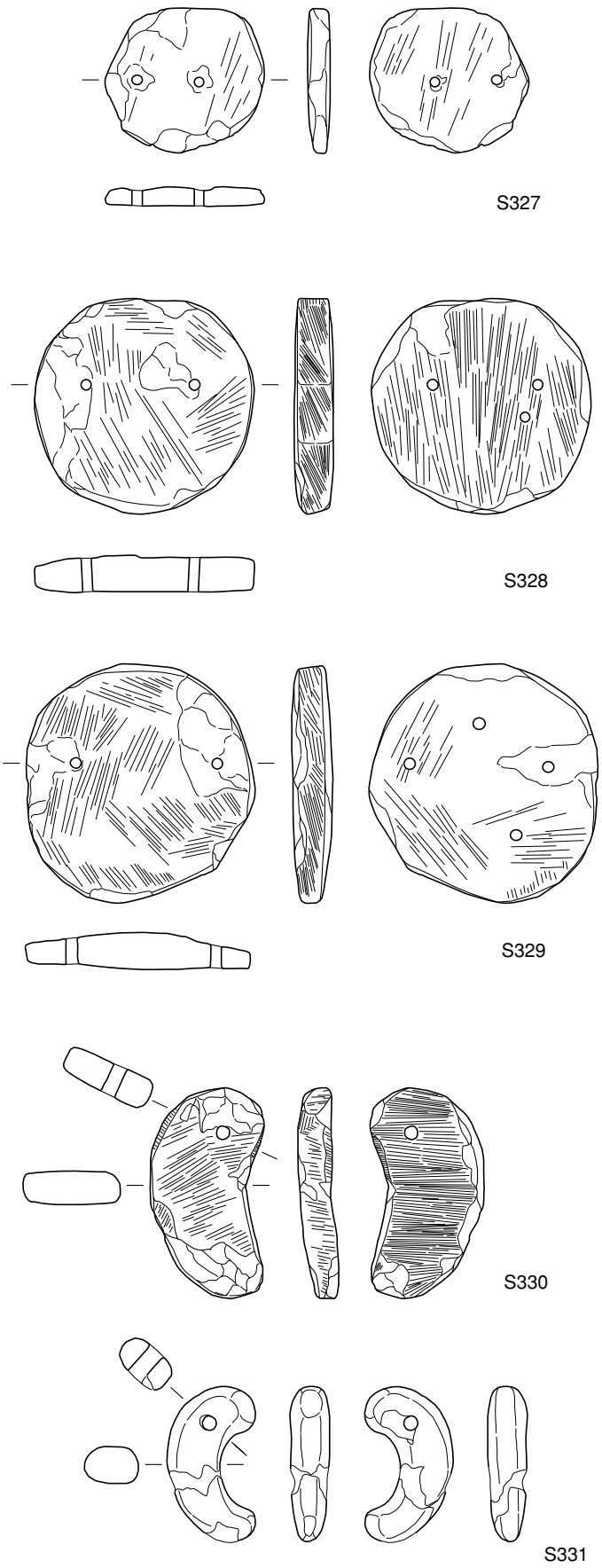
概観　水入遺跡では大溝と段丘崖から古墳時代中期の石製模造品を中心とする石製品が多数出土した。内容は臼玉が最も多く117点、他に勾玉形１点、剣形４点、有孔円盤３点、管玉６点が出土した。ただし調査時に確認された臼玉はごくわずかで、遺構覆土をサンプルで持ち帰ったものをふるいがけして検出したものがほとんどである。その土壌サンプリングであるが、まず98C2SX01では勾玉形が出土した付近で急遽土嚢30袋分を帰参してふるいがけを実施した。次に99A・BSD01についてはグリッドごとに5・6層からそれぞれ土壌10袋ずつを持ち帰って同様にふるいがけをおこない、99CSD01については土器集積（SX13）周辺の土壌サンプリング（土嚢約60袋分）のふるいがけをおこなった。それ以外の石製模造品で大溝から出土したものは調査時に確認されたものである。したがって臼玉は完全に拾い上げられたとはいえず、特に段丘崖下で他に出土がなかったという確証は得られていない。

写真　水洗によるふるいがけ作業

分布状況　石製模造品の分布状況を大溝のみで検討しておきたい。その結果注目されるのは、同様にしてサンプリングした99A・B区ではあるが、臼玉が検出されたのが99A区南端付近のＩＧ10ａとその付近で49点、そして99B区のIG1i・2iで３点、99CSX13から55点と限られることである。以上の結果は、臼玉が流水によって原位置から下流へ拡散することはあまりなかったことを示しているといえよう。見方を変えれば上記３地点での臼玉を使用した祭祀もしくはその後の廃棄があったということになる。しかもこれら臼玉の分布に剣形や有孔円盤・管玉が付随している点も重要で、これらのセット関係を知ることができる。



第156図　水入遺跡出土石製模造品出土地点分布図



第 157 図　水入遺跡出土石製模造品実測図

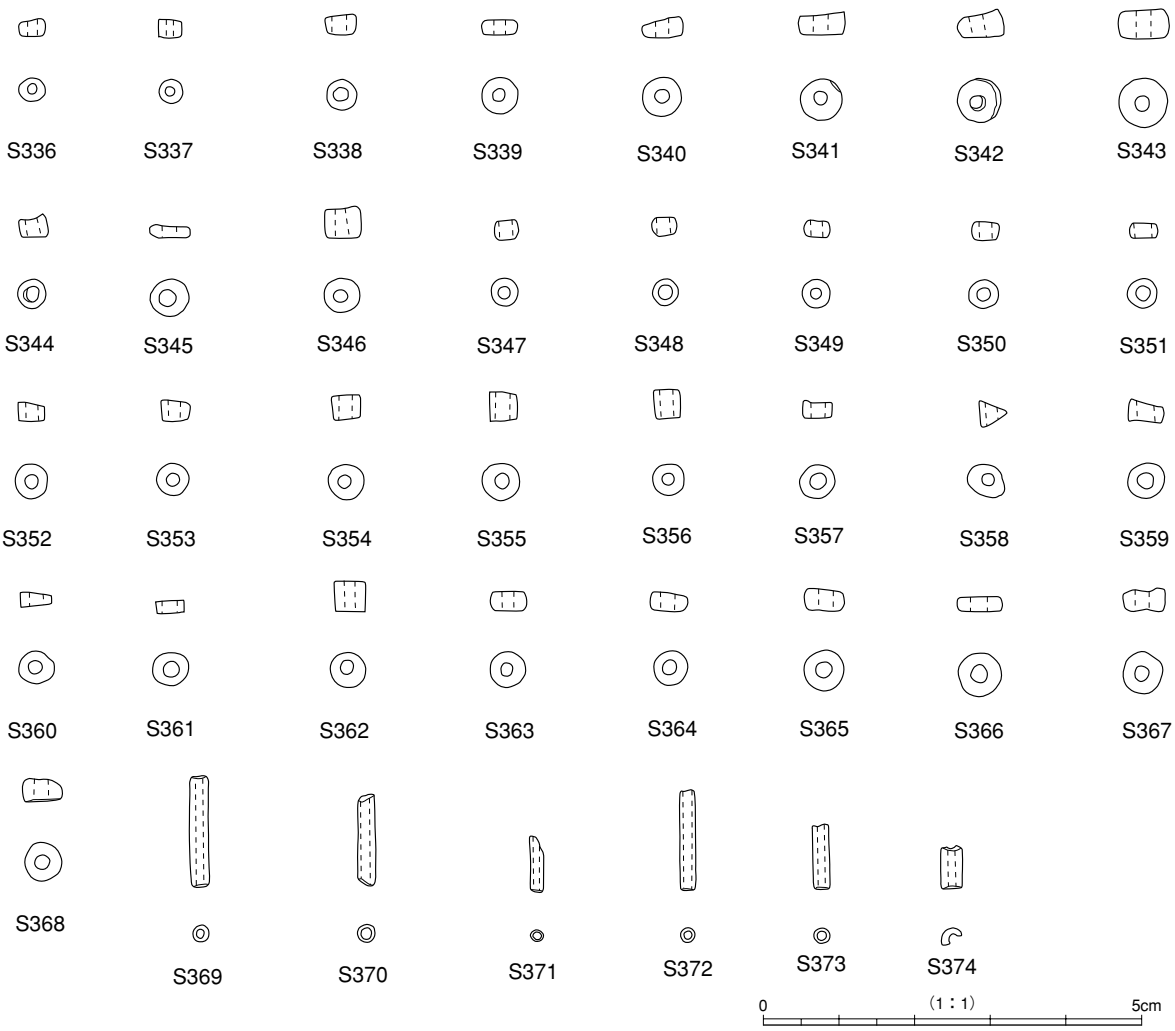
（２）遺物各説

S327 ～ S329 は有孔円盤である。孔が2箇所にあく。S327 は段丘崖出土でやや成形が粗い。直径2.5cm。S328・S329 は 99CSX13 で出土。直径 3.4cm で円く成形される。共に穿孔中断した痕がある。S330 は勾玉形。全長 1.8cm 反りは少ないが全体に丸みのあるシルエットである。S332 ～ S334 は剣形。それぞれ長さ 4.0cm、4.8cm、3.0cm である。上端に穿孔あり（S334 は２つある）。S335 も剣形と推測される。

S331 は99BSB01 覆土ほぼ中央で出土した勾玉。白色で鈍い光沢がある。全体に丸みが出ており整った形状に仕上がっている。

S336 ～ S368 は臼玉。直径 0.3 ～ 0.6cm、長さ 0.1 ～ 0.4cm とまちまちな形状である。S369 ～ S374 は管玉で、S369・S372 以外は一部を欠損する。

なお、石製模造品の石材は S327 が緑色片岩、S328・329 が蛇紋岩である以外は滑石で、99BSB01 出土の勾玉は蛇紋岩、管玉は泥質疑灰岩である。



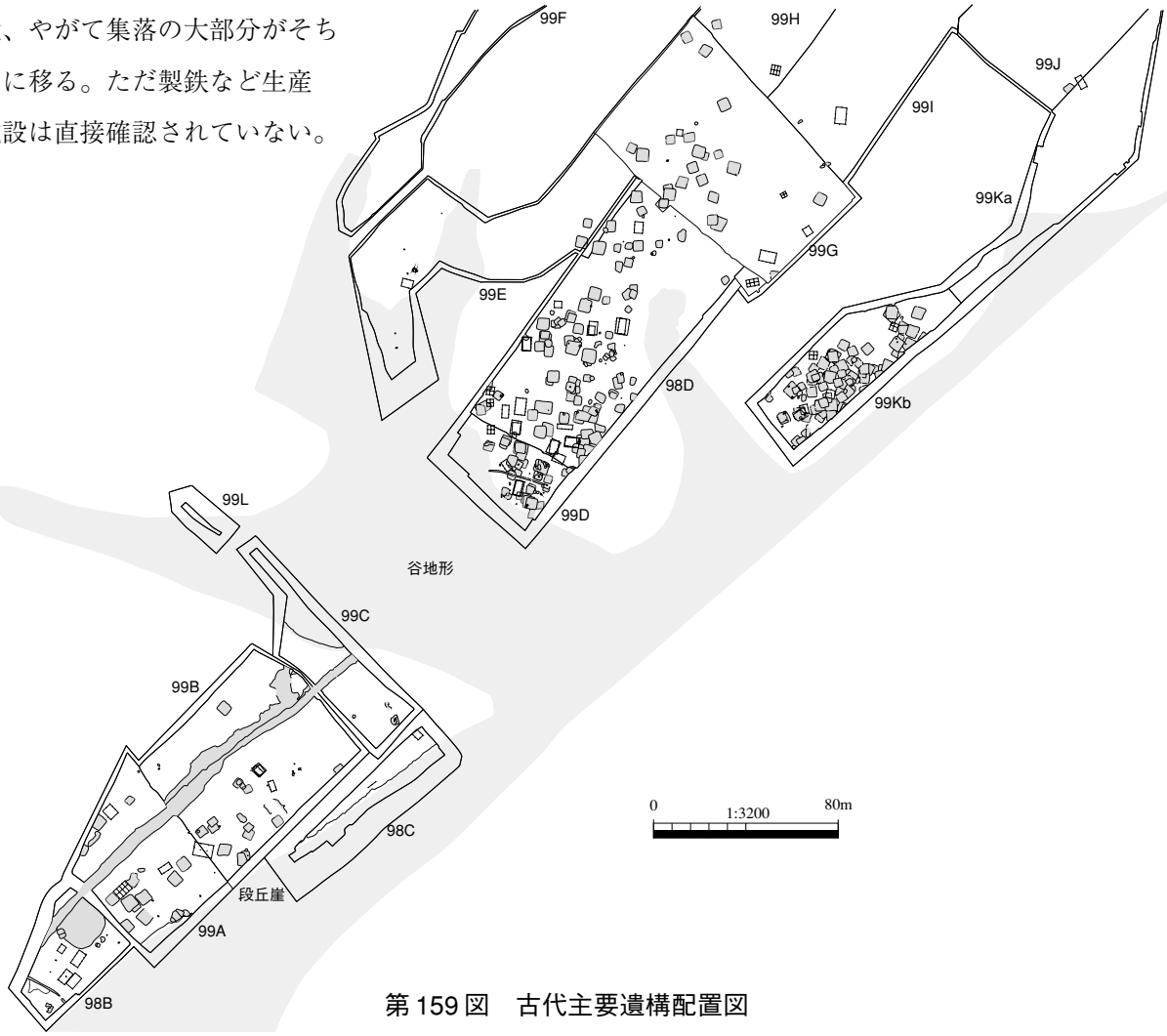
第 158 図　水入遺跡出土臼玉・管玉実測図

第６章　奈良・平安時代の遺構と遺物

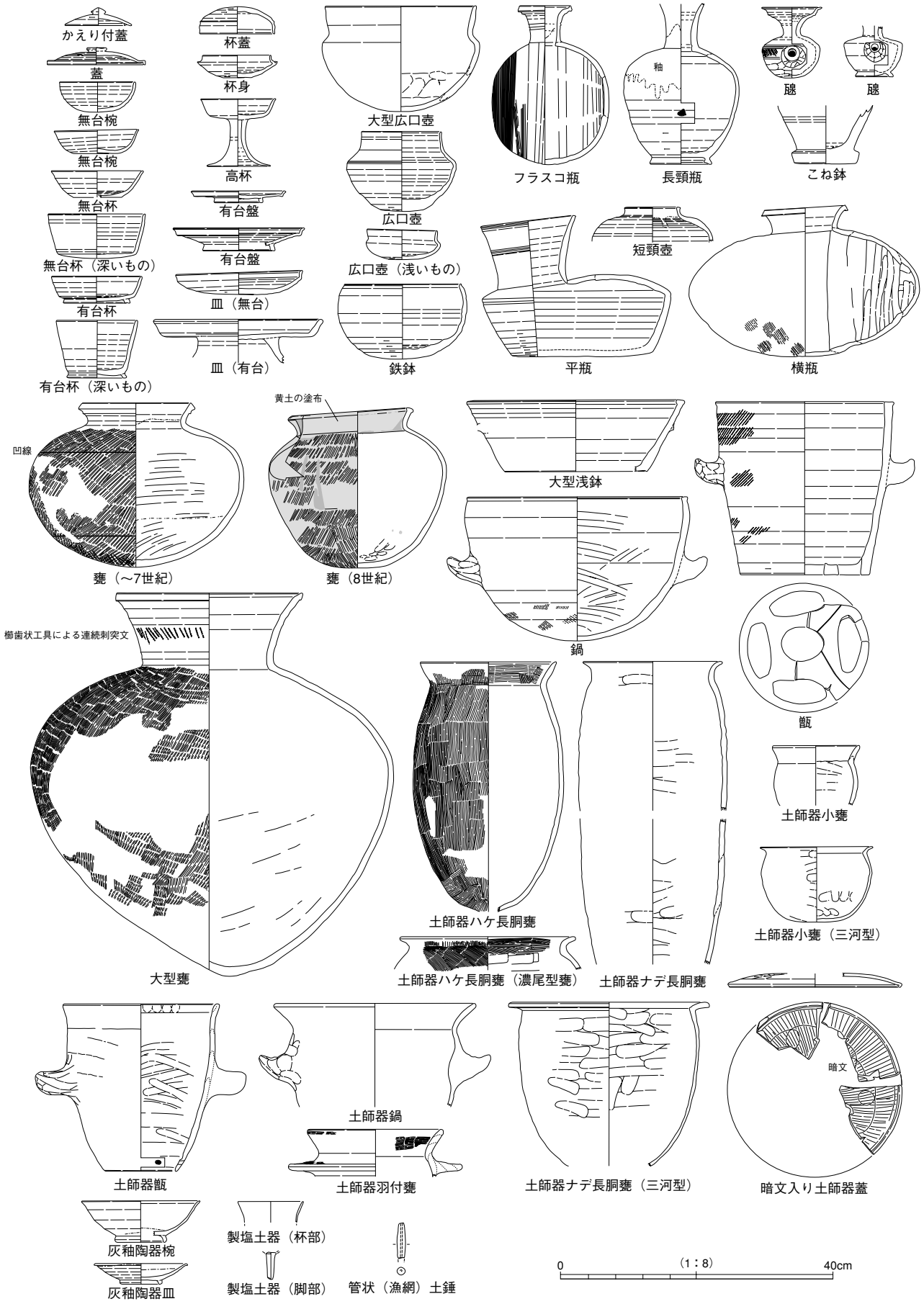
第１節　概観

はじめに　本章では奈良時代～平安時代の遺構・遺物を提示する。当該期は水入遺跡において古墳時代中期や鎌倉時代とともに遺物量がピークに達する時期のひとつである。なお、当該期遺物の年代は猿投山西南麓古窯跡群（以下猿投窯）出土須恵器の窯式編年に依拠する。東海西部地域において本編年が最も定着しており他遺跡との比較を容易にするからである。ここでは斉藤孝正の成果に基づくが（斉藤・後藤編 1995）、尾野善裕による編年も提示されている。両者の対応関係は第７図を参照されたい。

概観　当該期の遺構・遺物は調査区ほぼ全域で認められ、偏りをみせた古墳時代中期の様相と大きく変化する。しかし遺跡北部（99F・H～J区）では希薄な点は変わらない。集落景観は竪穴建物中心で掘立柱建物が混在する。７世紀代は大屋敷地区で集落が形成され、７世紀末～８世紀前葉に下糟目地区に拡大、やがて集落の大部分がそちらに移る。ただ製鉄など生産施設は直接確認されていない。



第 159 図　古代主要遺構配置図



第 160 図　水入遺跡出土の古代の土器主要器種

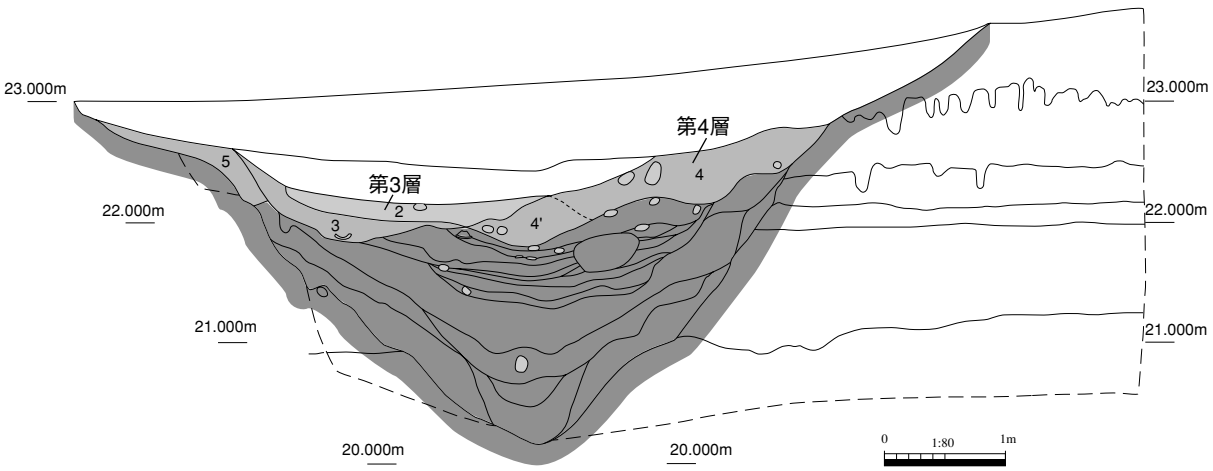
第２節　古代における大溝と段丘崖の状況

（１）大溝

大溝第４層　古墳時代中期に開削された大溝（98B2・99A・99B・99CSD01）は５世紀後半以降になると水に流れはほとんどなくなって土砂堆積が進行し、加えて集落側から廃棄が続き本来の機能は全く失われていた。しかし７世紀代に入ってからその堆積層の一部を再掘削したもようである。その痕跡はほとんど残っていないが、例えば99BSD01中央および南ベルトにみる土層断面では、西側壁の粘土層を削り幅約80cmの犬走り状の平場をつくる。ちなみに南ベルトではその掘削後の堆積層（断面Ｅ５層）をさらに掘り込む造作があったとみられ、その上から７世紀代以降の遺物が出土する層（断面Ｅ３層）が堆積する。

第４層は概ね厚さ10～50cmの灰色強粘質土で直径10～30cmの円礫が多く混入する。木製品および植物質の残存は認められなかった。７世紀～８世紀前半の須恵器・土師器が多数出土する。大溝東西両肩から廃棄されたようで偏りなく分布する。強粘質土や円礫は東西土塁から崩落したものと思われる。ラミナ層が全くないのでこの時期は水流がなかったと判断される。

大溝第３層　第４層と鎌倉時代の遺物を包含する第２層の間に厚さ20cm以下の薄い堆積層がある。この堆積層は黒色の砂粒や円礫がほとんど入らず、そのため上下の層と明瞭な区分が可能であった。この層は99B区南ベルト・99A北ベルトでラミナ層が確認され、99B区南端付近から南方で緩い水流があったものと判断される。また98B2区ではラミナ層そのものが厚く（第62図２層70cm）その上に黒色土層が堆積しており、99A区南端付近での急激な状況変化がみられる。98B2区ではこれらの層を上層として扱っている。出土遺物は99A・99B区では少なく、折戸10号窯式以降の須恵器や灰釉陶器が出土する。一方98B2区では量が増え、遺物の点からも偏りが認められる。



2 10YR2/1黒粘質シルト3cm以下円礫若干入る、不明瞭ながらラミナあるもよう、炭化物多い。（第3層）
3 10Y4/1灰砂質シルト主体に粗粒砂～1cm以下の円礫入る、地山粒若干入る。（第4層）
4 5Y5/2灰オリーブ砂質シルト細粒～粗粒砂多く入る、2cm以下円礫入る、炭化物あり、(4')には7.5Y4/1灰粘質シルトに粗粒砂入る。（第4層）
5 5Y5/3灰オリーブ粘質シルト1cm大地山粒多く入る、円礫なし、粗粒砂若干入る、地山主体に流れ込み。（第4層）

第161図　99BSD01南ベルト土層断面図（濃いトーンは奈良時代以前に埋まった部分）

98B2SD01　大溝南端にあたる98B2区では、須恵器が主体を占め若干の土師器を認めるが、灰釉陶器が他の調査区に比べてやや目立つ点が注目される。須恵器は7世紀後半～8世紀前葉、8世紀後葉～9世紀前葉が多く、特に後者については、後述する船着き場や仏教関連施設との関わりが考えられる。須恵器は蓋・杯・椀・盤などの供膳具と壺・甕などの貯蔵具にわけてみておく。

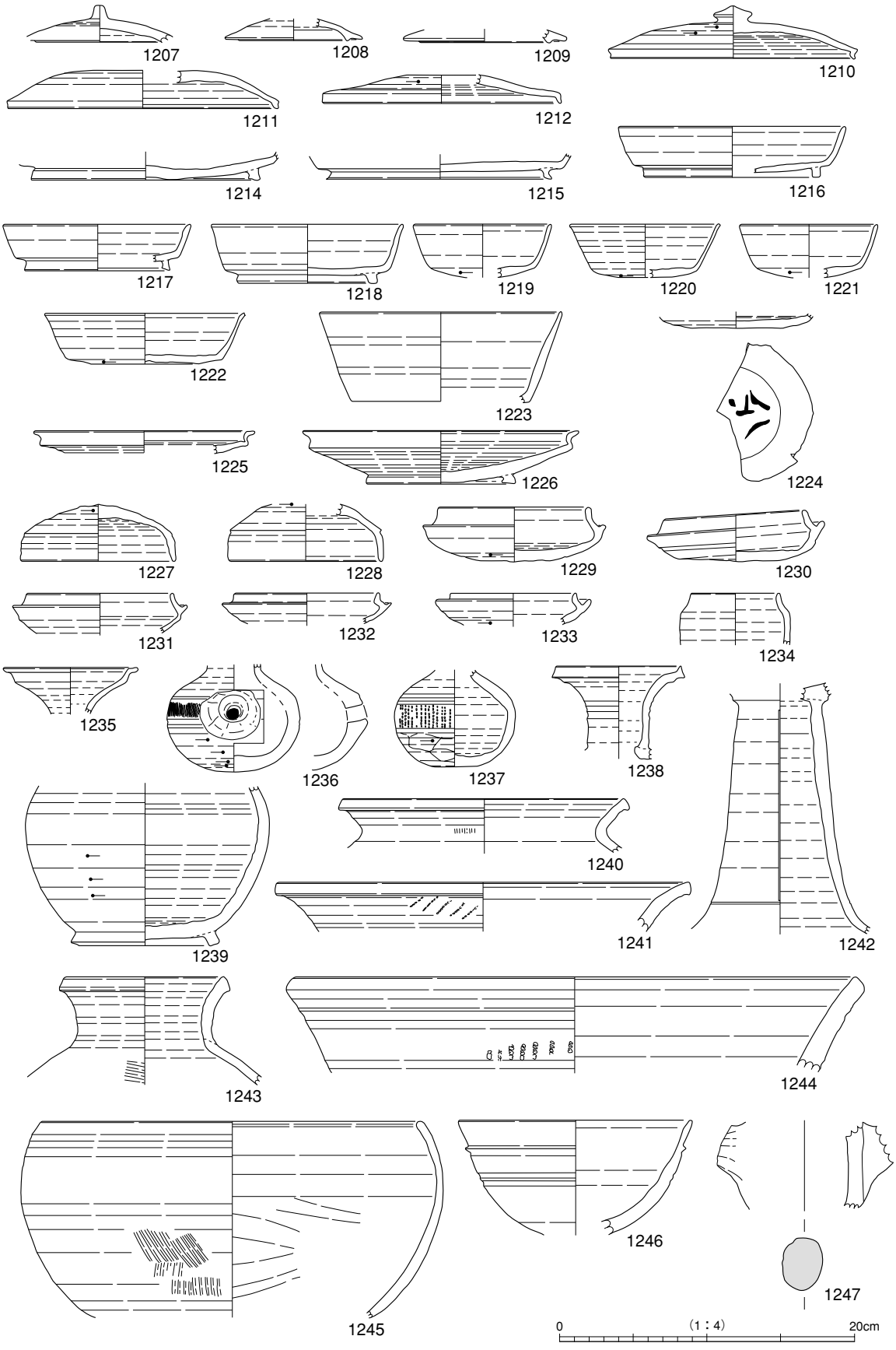
供膳具は7世紀代に古墳時代的なものから律令時代的（奈良・平安時代的）な形態へ変化するが、大溝ではその両方が出土する。蓋はかえり付き蓋（1208・1209）とそれがない蓋（1210～1212）がある。前者は岩崎17号窯式を中心とする。杯は有台杯（1214～1218）と無台杯（1219～1222・1224）がある。有台杯は8世紀前葉以前、無台杯のうち丸みのある底部の1219～1221は同時期だが1222・1224は直が下る。特に1224は底部外面に「公□」と墨書があり、船着き場98B2SX01から数点が出土した「公寺」「公」墨書がある須恵器蓋・杯のひとつであろう。折戸10号窯式で8世紀末～9世紀初頭。盤（1225・1226）も墨書土器と同時期になる供膳具のひとつである。高盤（1242）は脚部のみで、透かしが入る。古墳時代的蓋・杯（1227～1233）は矮小化する岩崎17号窯式が目立つが1227～1229はやや東山50号窯式で7世紀前半である。1246は外面に緑色の釉が掛かる。高杯というより器台で。7世紀前半か。

貯蔵具・煮炊具に瓶（1235～1237）を含める。底部が丸く肩があまり張らないので7世紀前半か。1239は長頸瓶。1240・1241・1244は甕である。1245は鉄鉢で外面にタタキ痕跡がわずかに残る。全体に丸みがあるので古いタイプとみられ、折戸10号窯式の供膳具とは時期が異なる可能性が高い。1252は平底甕で9世紀代か。

土師器は煮炊具のみで、1248は濃尾型甕（長胴ハケ甕）で、8世紀前葉。1250・1251は後期三河型甕（ナデ甕、いわゆる清郷型甕）である。後者は灰釉陶器に伴うものであろう。1258は鍋の把手。漁網用の土錘は少ない（1259）。灰釉陶器（1213・1253～1257）は黒笹90号窯式以降の椀・皿で瓶類はない。特殊なものとしては漆とみられる付着物のある須恵器椀（1260・1261）がある。底部糸切痕があって大きく外反するやや浅めの器形が特徴である。99ESK475でも同様の椀が出土したが、そこでの共伴須恵器から折戸10号窯式と考えられる。1262は須恵器甕の胴部片だが破断面が磨耗しており図中破線内で墨を摺ったようである。転用硯の可能性を考えておきたい。

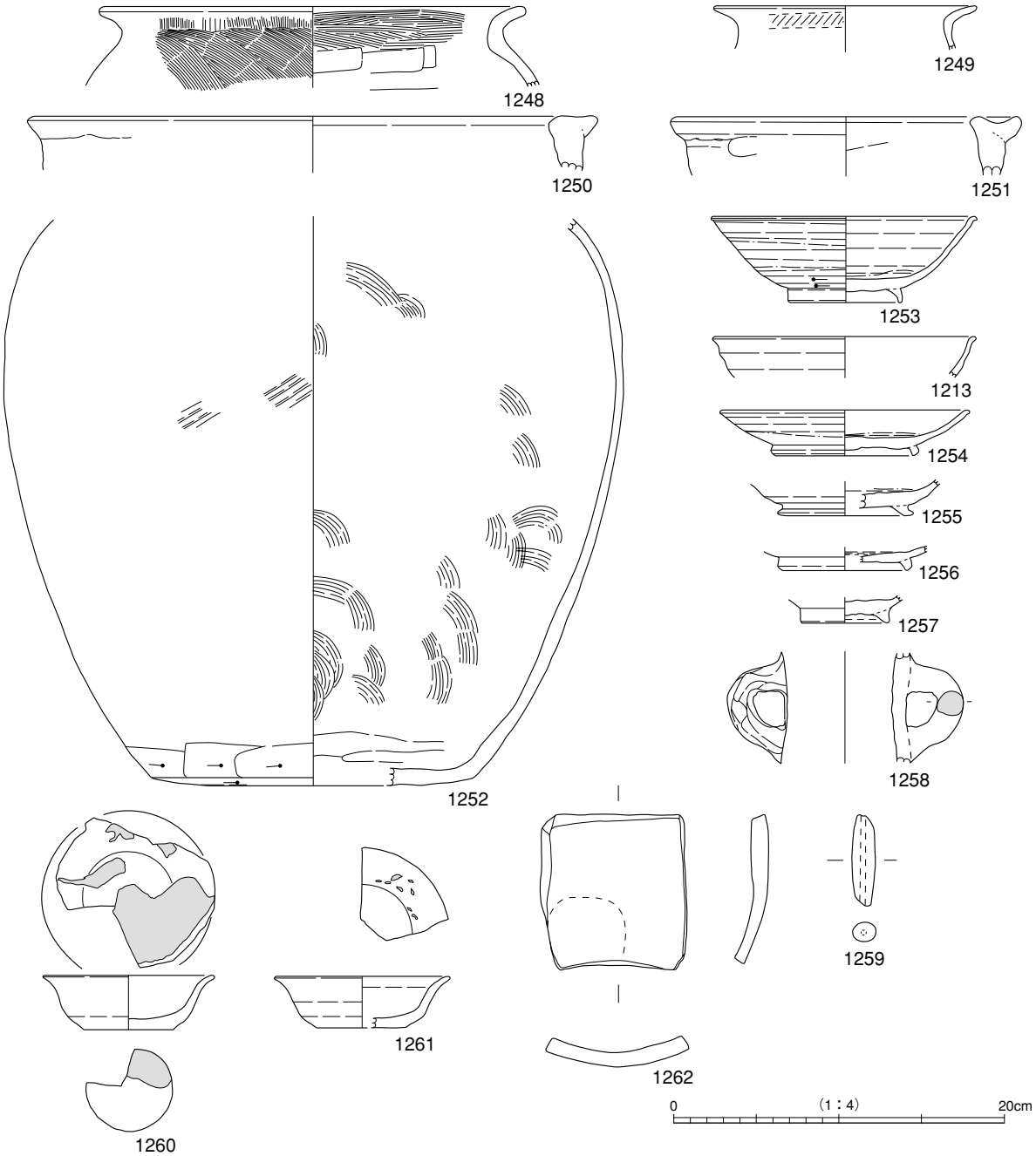
99ASD01　大溝の周辺に7世紀代を中心とする古代集落が展開するため、そこから廃棄された土器が大量に出土する。竪穴建物跡からはさほど多くの土器は出土しないので、大溝（と段丘崖）が主たる廃棄場所となっていたのであろう。須恵器は供膳具・貯蔵具ともに多いが大型甕が目立つ。これに対して土師器甕は少ない。このことは土師器甕が竪穴建物の造り付け竈に固定して使用されたことと関連があると思われる。つまり竈解体とともに甕も破砕されてしまうため、大溝に廃棄される機会が少ないと考えるのである。

須恵器供膳具は律令時代的な蓋・杯・椀と古墳時代的な蓋・杯・高杯などで構成される。まず前者からみると、蓋にはかえり付きとかえりがないものに区分される。かえり付き蓋（1263～1269）は1263が大きく突出したかえりをもつことから東山50号窯式でやや古く、やがて小さな突帯となっていく。それ以外は岩崎17号窯式～岩崎41号窯式でおよそ7世紀後半。1269は口径の大きなかえり付き蓋でまれにある存在。かえりのない蓋（1270～1277）は高蔵寺2号窯式を中心とする8世紀前葉。器形が単調な

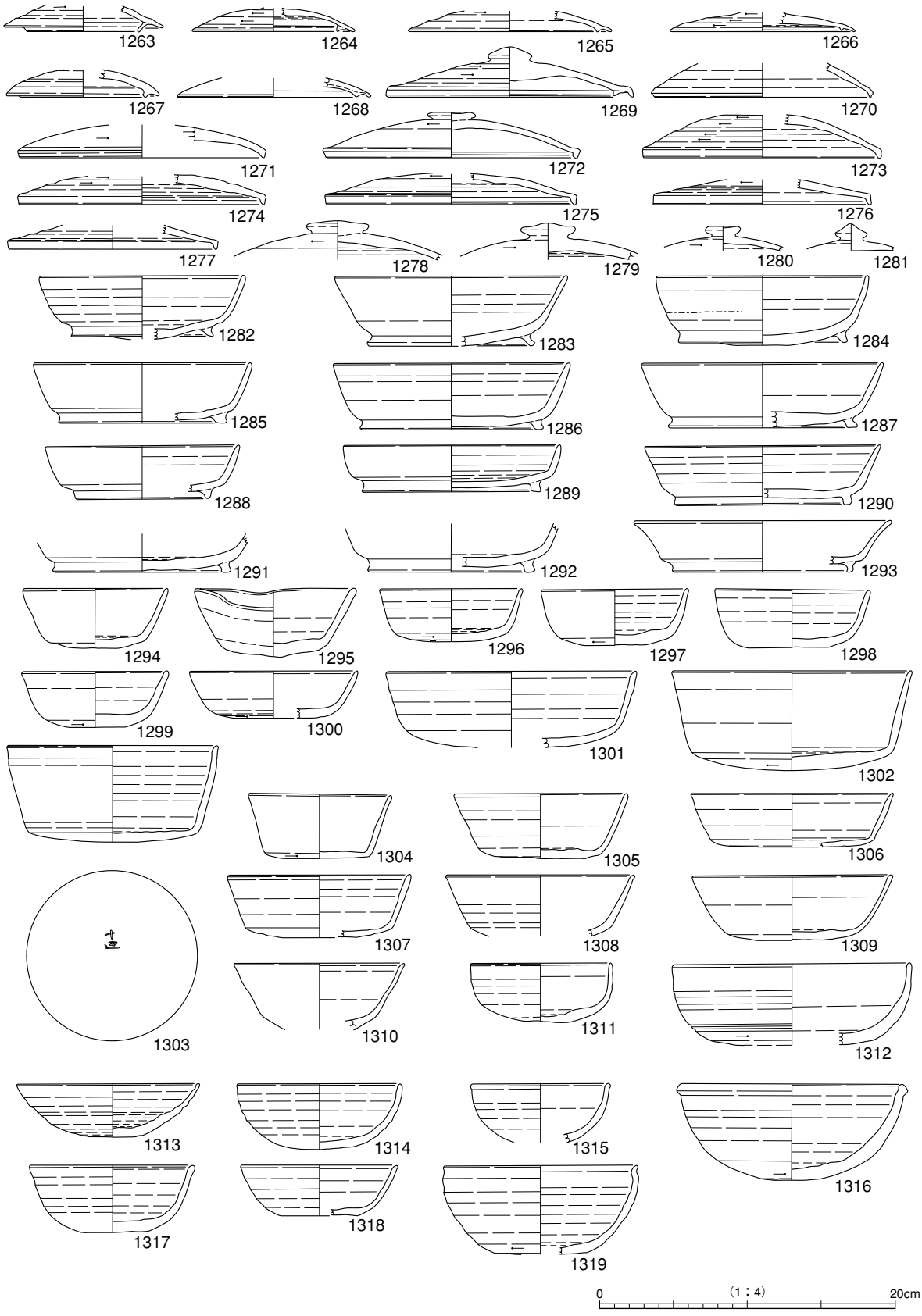


第 162 図　98B2SD01 出土遺物実測図（1）

丸みのあるカーブを描くのが特徴である。杯は有台杯と無台杯がある。有台杯（1282～1294）は岩崎17号窯式～高蔵寺2号窯式で、かえりのない蓋と組み合うかあるいは無蓋となる。一方無台杯（1294～1309）は口径が10～12cm前後のものが中心で、かえり付きの蓋と組み合うかあるいは無蓋となる。時期は有台杯と併行する。1295のように硬質な焼成だが歪みの大きな製品も集落に流通している。無台杯にはやや大型のもの（1301～1303）もあって、特に1303は底部外面に焼成前の刻書があり、「十皿」もしくは「十四」と判読される。これは高蔵寺2号窯式である。無台椀（1310～1319）で無台杯と区分しがたい点もあるが、概ね丸底（1311・1314・1316）は高杯の脚部がないものといえ、東山50号窯式の7世紀中葉から後葉である。1311は壺の蓋の可能性もある。その底部外面には成形時についたであろう板目状の



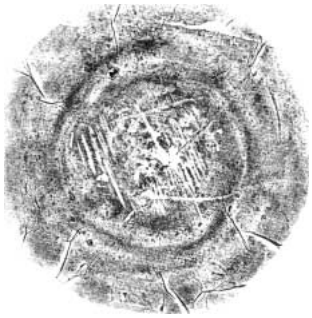
第163図　98B2SD01出土遺物実測図（2）



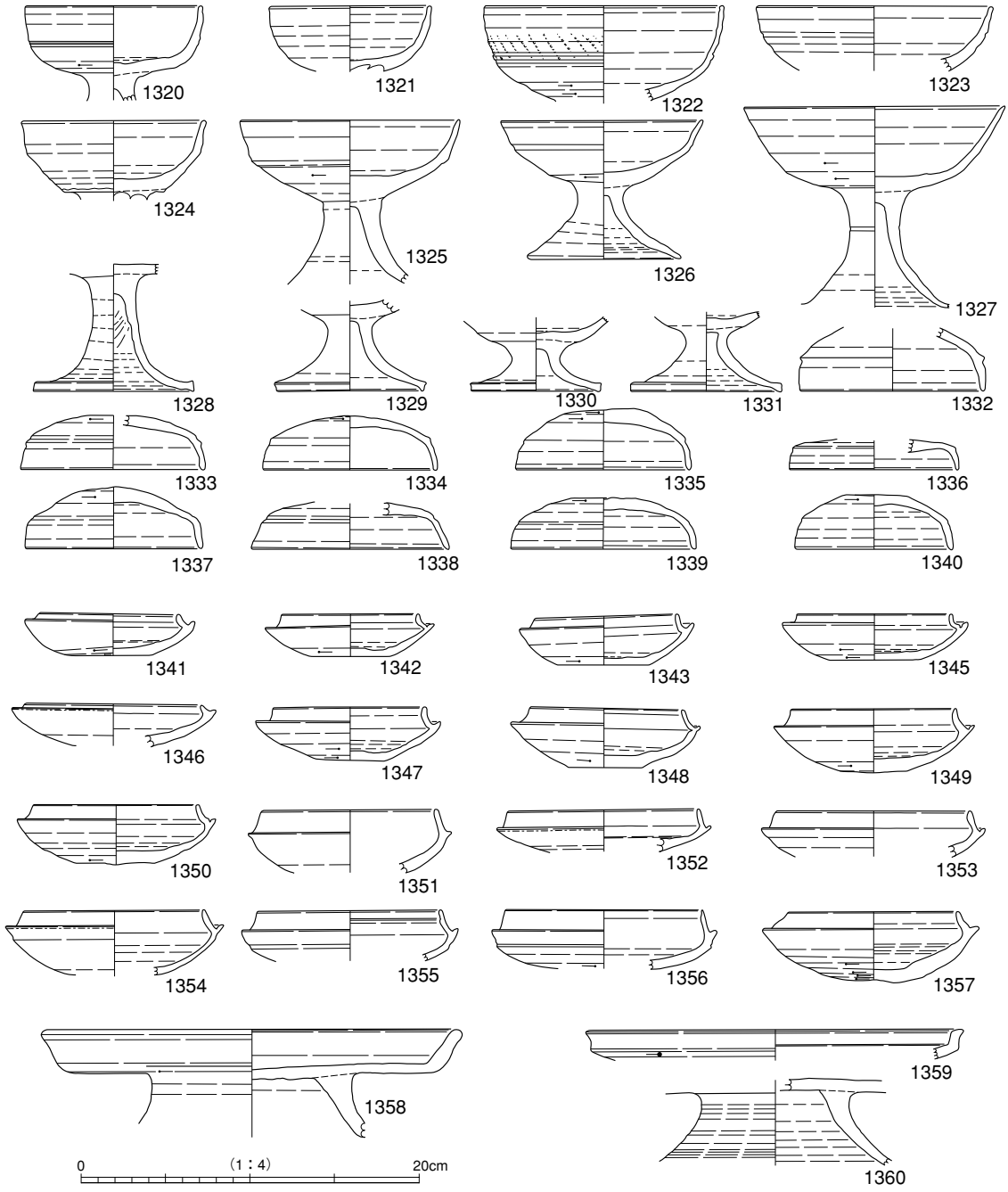
第 164 図　99ASD01 出土遺物実測図（1）

圧痕がみられる（第 165 図）。1317・1318 のように平底になると高蔵寺 2 号窯式で 8 世紀前葉となる。

次に古墳時代的な蓋・杯・高杯をみる。高杯（1320 ～ 11331）は岩崎 17 号窯式が中心で透かしは失われ短脚化が進行する。蓋（1332 ～ 1340）は東山 50 号窯式～岩崎 17 号窯式で 7 世紀中葉～後葉である。これと組み合う杯（1341 ～ 1357）もほぼ併行期で、1342・1347 は岩崎 17 号窯式、1348 はやや古く東山50号窯式である。口径の大きくなるものはさらにさかのぼるとみられ、本来ならば第5章で提示すべきところであるが1353は6世紀



第 165 図　1311 底部外面拓影（1/2）

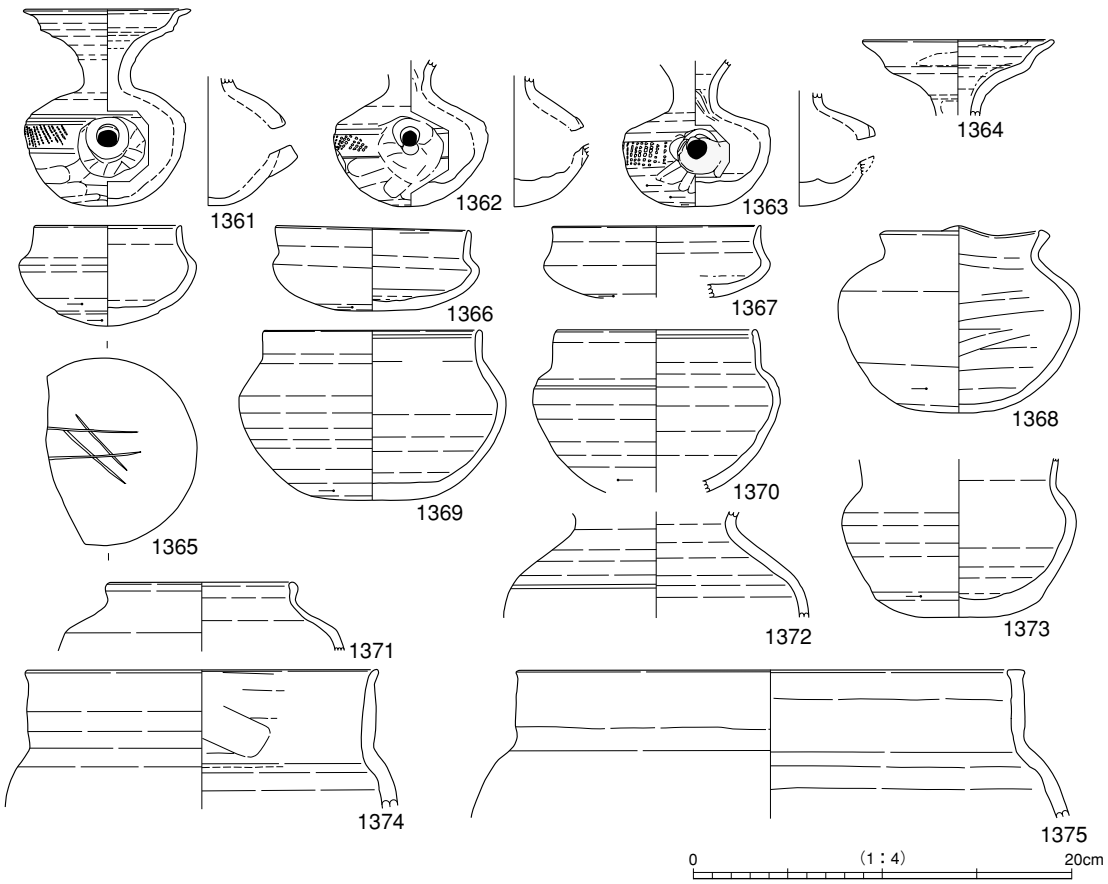


第 166 図　98ASD01 出土遺物実測図（2）

後半、ちなみに猿投窯以外の生産地のようである。盤（1358 ～ 1360）のうち 1358・1360 は脚部上端の径が大きく、岩崎 17 号窯式であろう。

須恵器貯蔵具も多様な器種がみられる。甕（1361 ～ 1364）は古墳時代的な器種であるが、胴部肩の張りが明瞭で頸部も短いことから岩崎 17 号窯式であろう。広口壺は小型で浅いもの（1365 ～ 1367）、小型で深いもの（1368 ～ 1371・1373）、大型（1374・1375）に区分される。概ね 7 世紀代である。1376 は台が付く壺であろうか。1377 ～ 1384・1386 は壺（小型の甕）である。1385 は提瓶である。1394・1396 も台付壺で、1396 は櫛歯状工具による連続刺突文が顕著である。7 世紀前半とみられるが猿投窯ではあまりみられないタイプであるという。1397 も台付壺の可能性がある。7 世紀前半であろう。ところで 1395 は壺（瓶か）胴部片であるが「大」のような焼成前の刻書がある。1398・1399 は平瓶。1398 が全体に丸みがあって 1399 が明瞭な肩の張りを有する。1400 はフラスコ瓶。1403 はフラスコ瓶に把手が付いたもの。1404 はフラスコ瓶の底部に台が付く。フラスコ瓶から律令時代的な長頸瓶（1405 ～ 1408）へと移行する段階を示している。長頸瓶は当初その名残りで底部が張り出すが（1407）、やがて平底（1405・1408）になっていく。1409 ～ 1412 は横瓶。1410 は片方に平らな面をもつのが特徴でほぼ完形で出土した。1411 の胴部外面のタタキは平行タタキを直角に組み合わせて擬格子タタキとしている。なお同資料の口縁内面には逆位「大」の焼成前刻書が対称となる位置で 2 つ確認された。

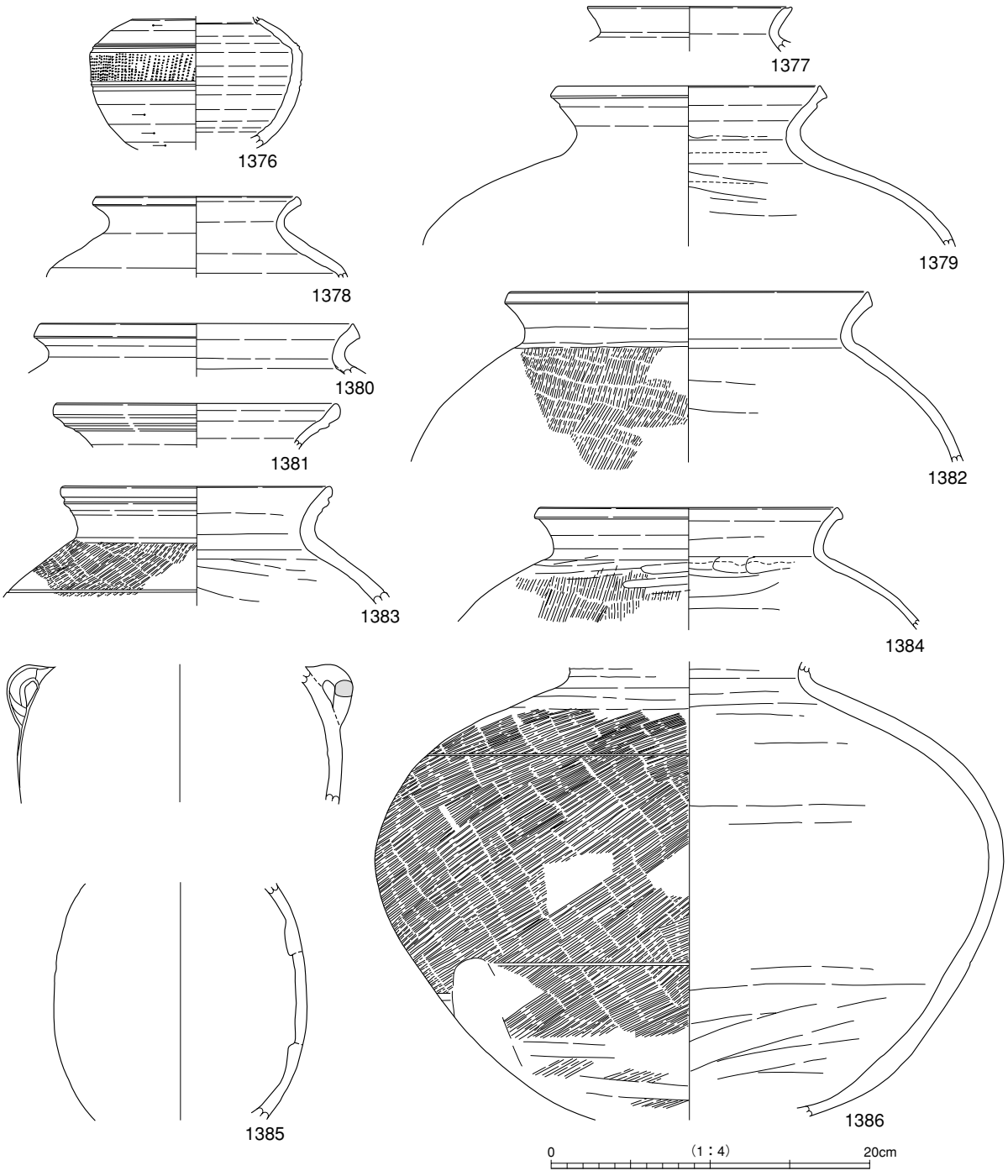
1413は中型の甕。外面はタタキの後横方向のカキメを疎らに入れる。外面全面に濃緑色の釉がかかる。



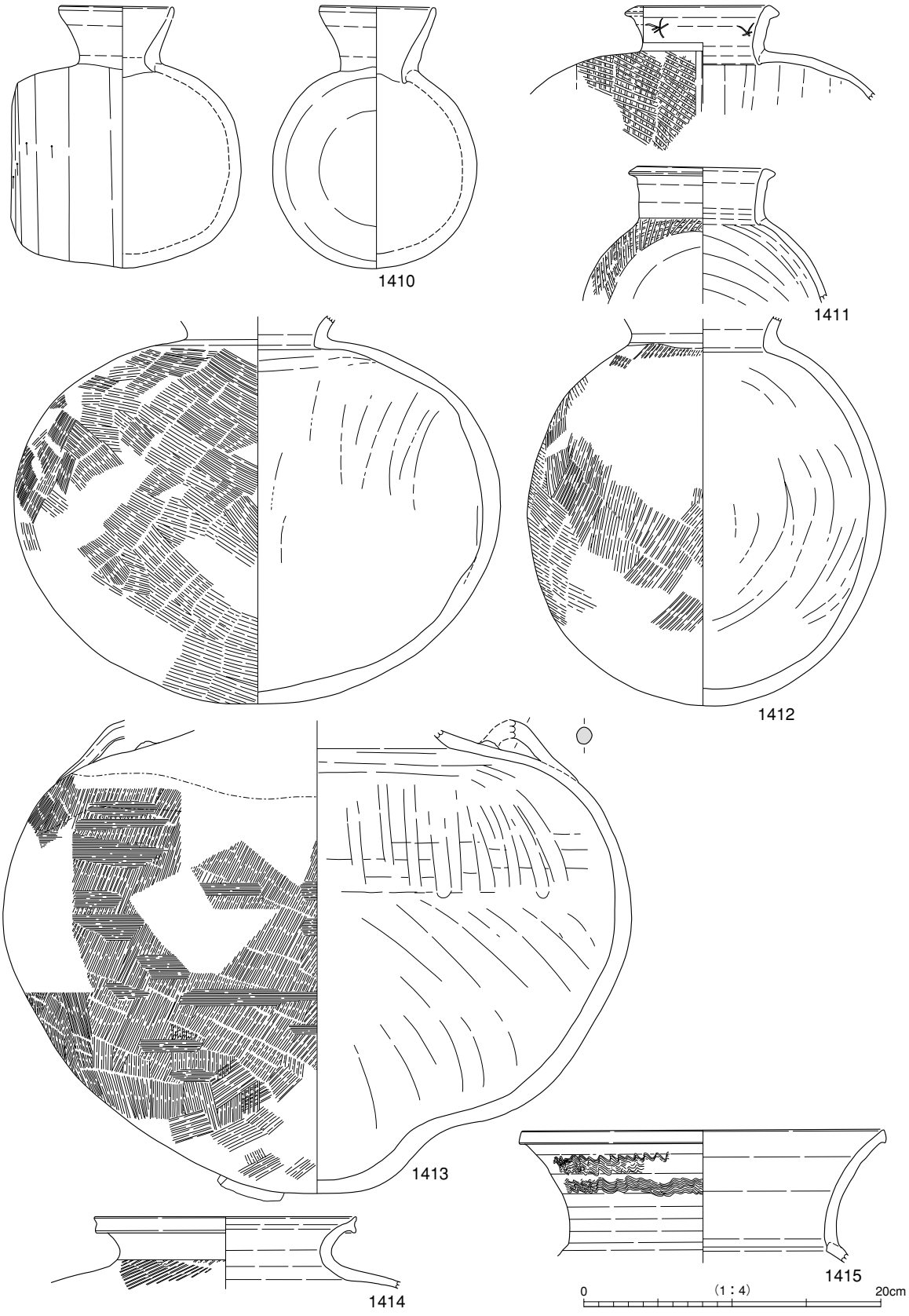
第 167 図　99ASD01 出土遺物実測図（3）

また胴部上方に把手（耳）が付く。ちなみにこの甕は底部に別個体の破片を融着させている。1414・1415は中型甕の頸部。1416～1418は大型甕の頸部で7世紀代である。1417・1418は凹線の区画がない。1419は大型甕の尖った底部である。1420・1421は鍋である。

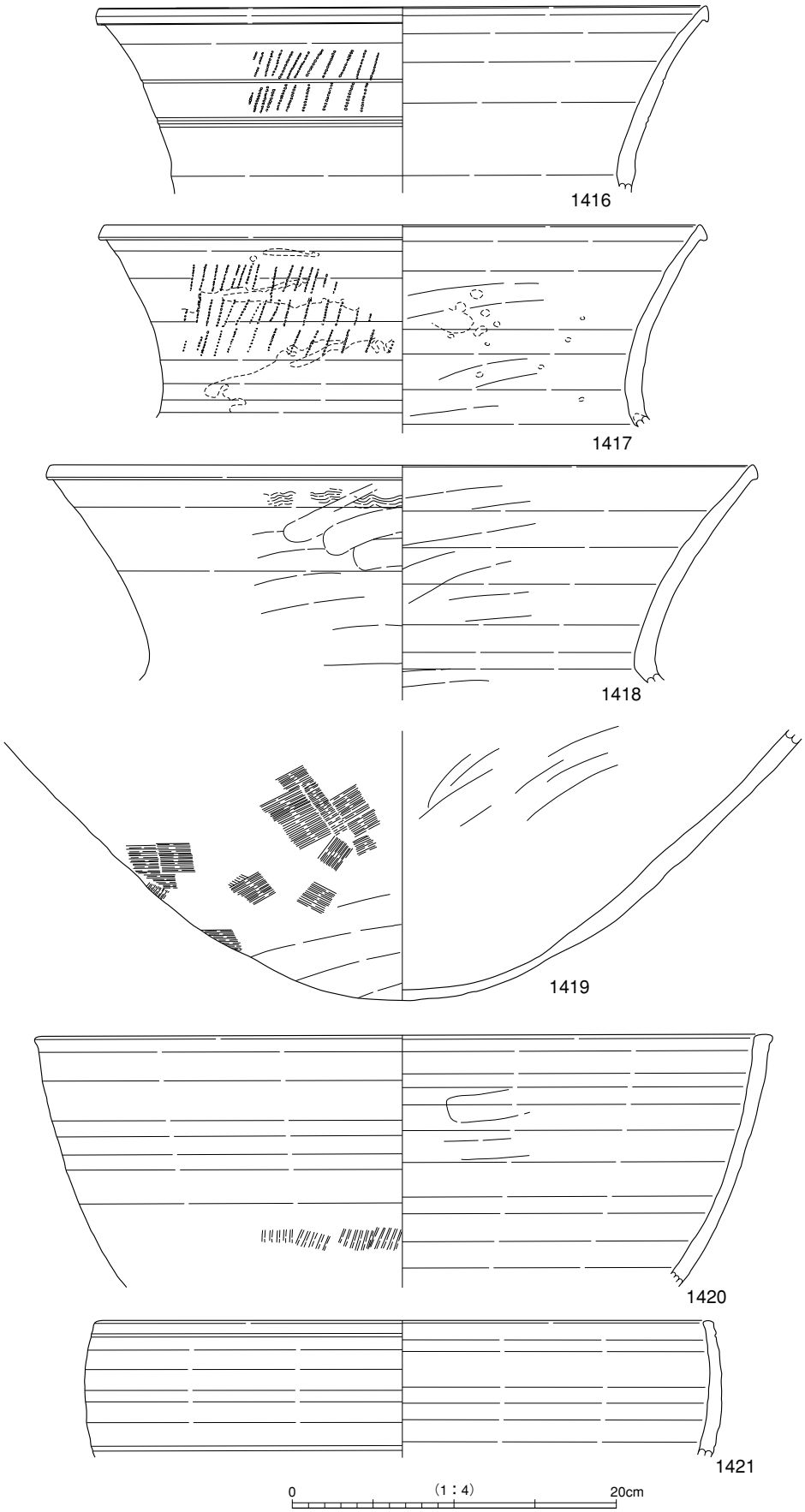
残存率が比較的良かった大型甕（1422～1424）をみる。1422は頸部に凹線で区画したなかに櫛歯状工具で文様を施す。1424は連続する刺突文（下段）と波状文（上段）という組み合わせである。底部は丸底というより尖った形状である。これら施文のある長い頸部・尖った底部が7世紀代の大型甕の特徴



第168図　99ASD01出土遺物実測図（4）



第 169 図　99ASD01 出土遺物実測図（5）



第 170 図　99ASD01 出土遺物実測図（6）

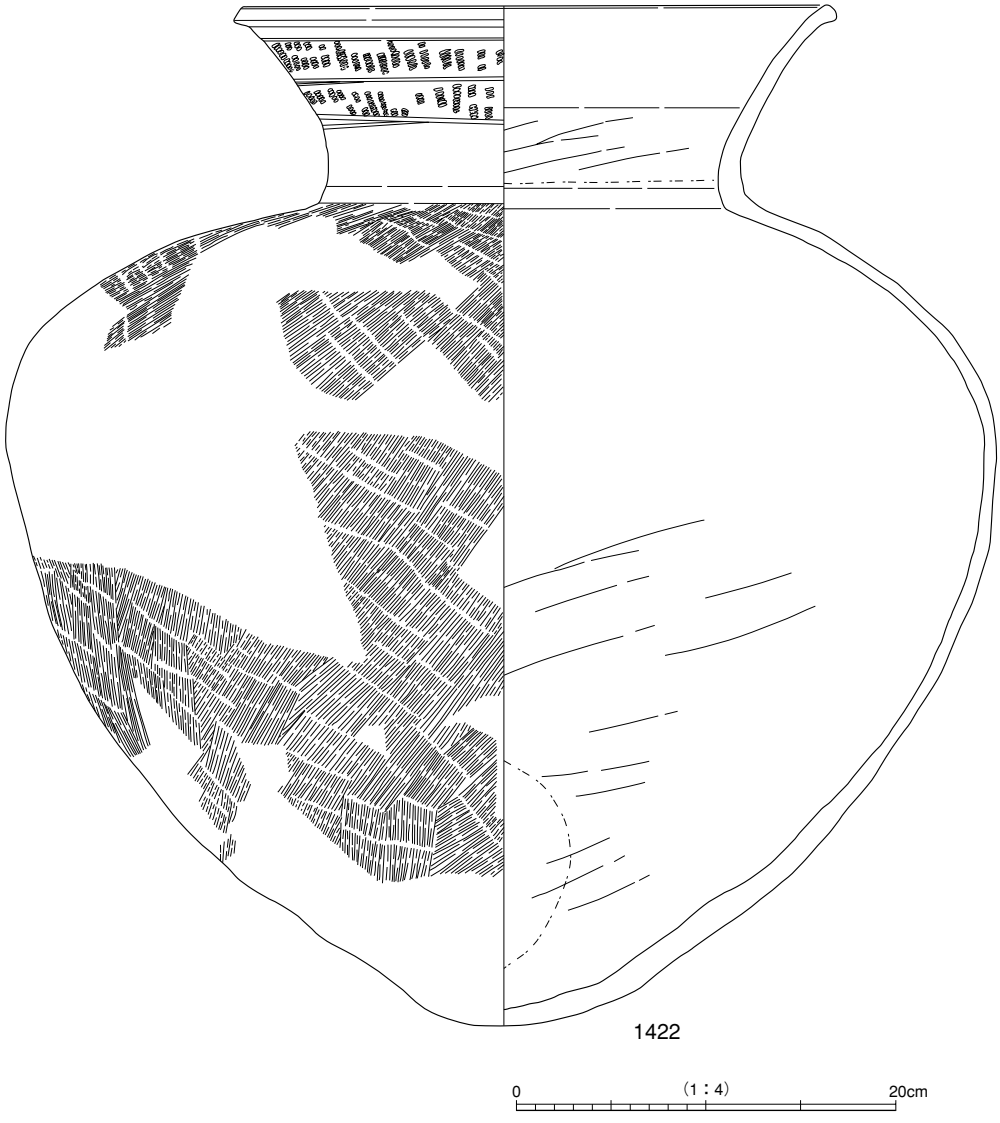
であるのに対して、1423は8世紀前葉とみられる。頸部は短く大きく外反する。底部の形状はより平底に近くなる。胴部外面は細かい格子タタキで灰白色という色調も猿投窯のものとしては異質である。美濃須衛窯からの搬入の可能性も考えられる。荻野氏算出の容量は1422が444.55ℓ、1423が302.55ℓである。

1425は鍋でわずかに片口となる。1426は鍋もしくは鉄鉢。

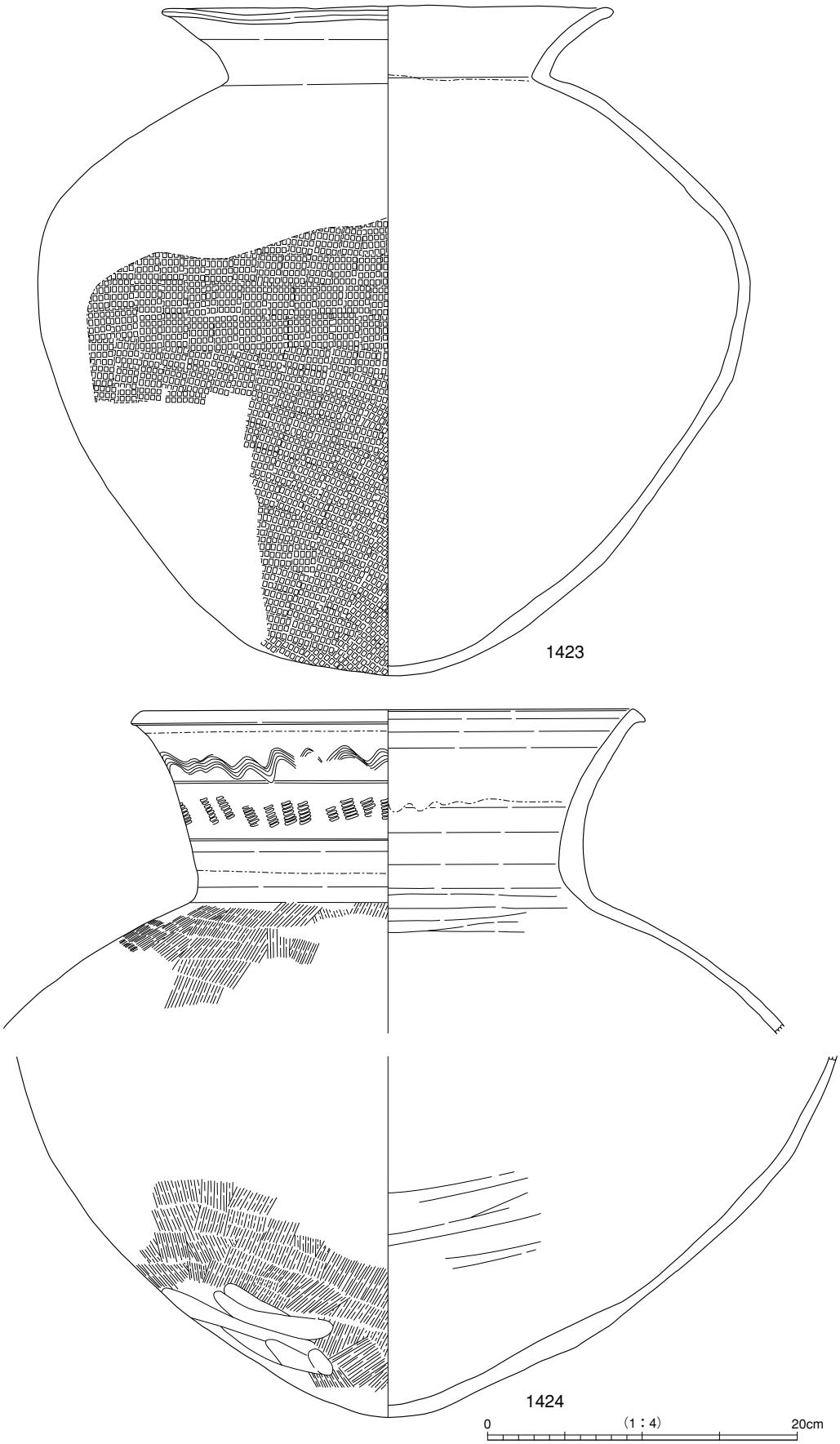
灰釉陶器は98B2SD01と同じような構成で黒笹90号窯式以降の椀・皿が少数出土した。1443は平底の瓶類である。

土師器甕は折戸10号窯式併行期の三河型甕（1436・1437）、7世紀～8世紀前葉の須恵器に共伴する甕（1457・1458・1460・1461）がある。1457は内外面にハケ調整がみられるがその外反する形状は三河型甕へとつながる可能性があろう。口縁部外面はナデ調整が入っており、調整の混在した状況がうかがえる。1458は濃尾型甕成立直前の形態を残す長胴甕である。1460は時期不詳のナデ甕もしくは鉢。1461は頸部のくびれが少ないハケ長胴甕で、器壁が厚いのが特徴である。1459は甑だが須恵器の可能性がある。

特殊なものでは製塩土器の脚部がある（1438～1441）。知多4類が主だが1438はやや古いか。1442は

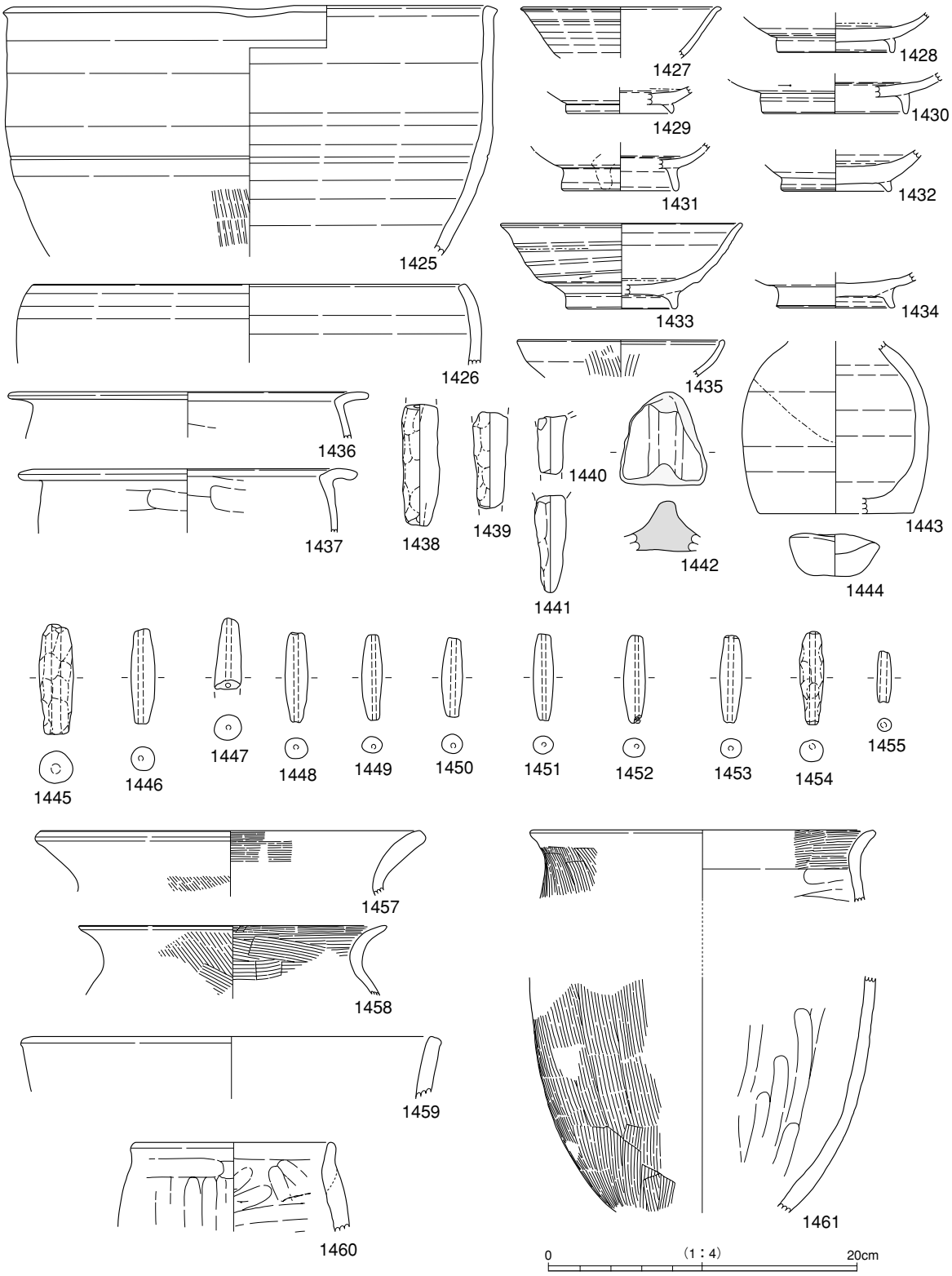


第171図　99ASD01出土遺物実測図（7）



第 172 図　99ASD01 出土遺物実測図（8）

移動式竈の一部と考えられる。1444は厚手の椀状になる手捏土器である。祭祀用のミニチュアの可能性もあるが、甕の支脚（台）であったかもしれない。ただしこの資料には顕著な被熱痕はない。土錘（1445～1455）は河川投網用漁網に付けるタイプであろう。長さが5cm前後で7世紀代と考えられるが1445はその中でもやや長くて端部が明瞭な面取りをする。逆に1455は細身で8世紀代であろうか。

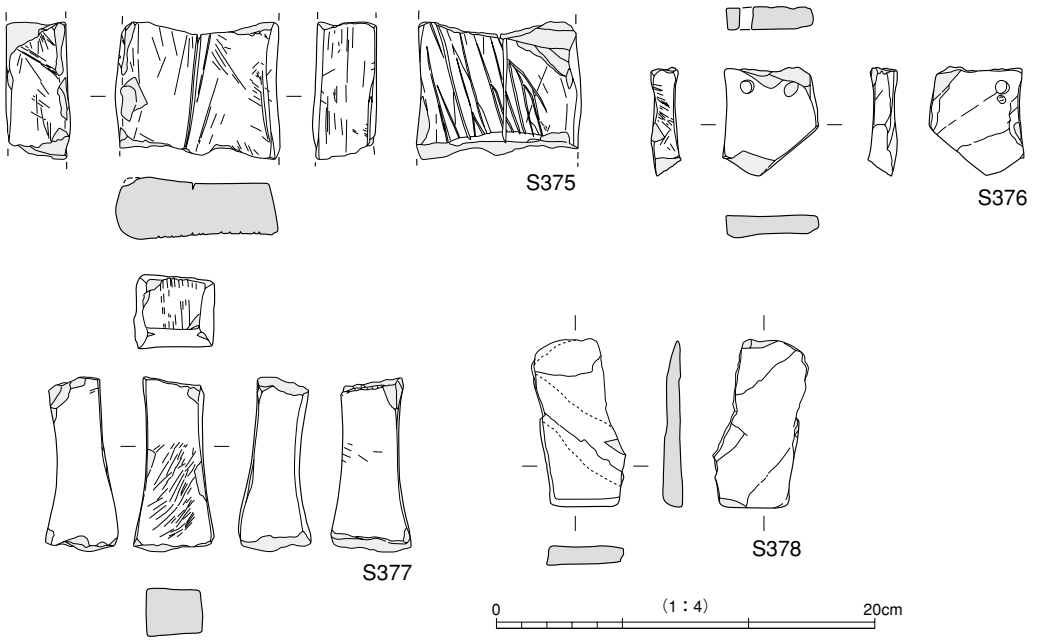


第173図　99ASD01出土遺物実測図（9）

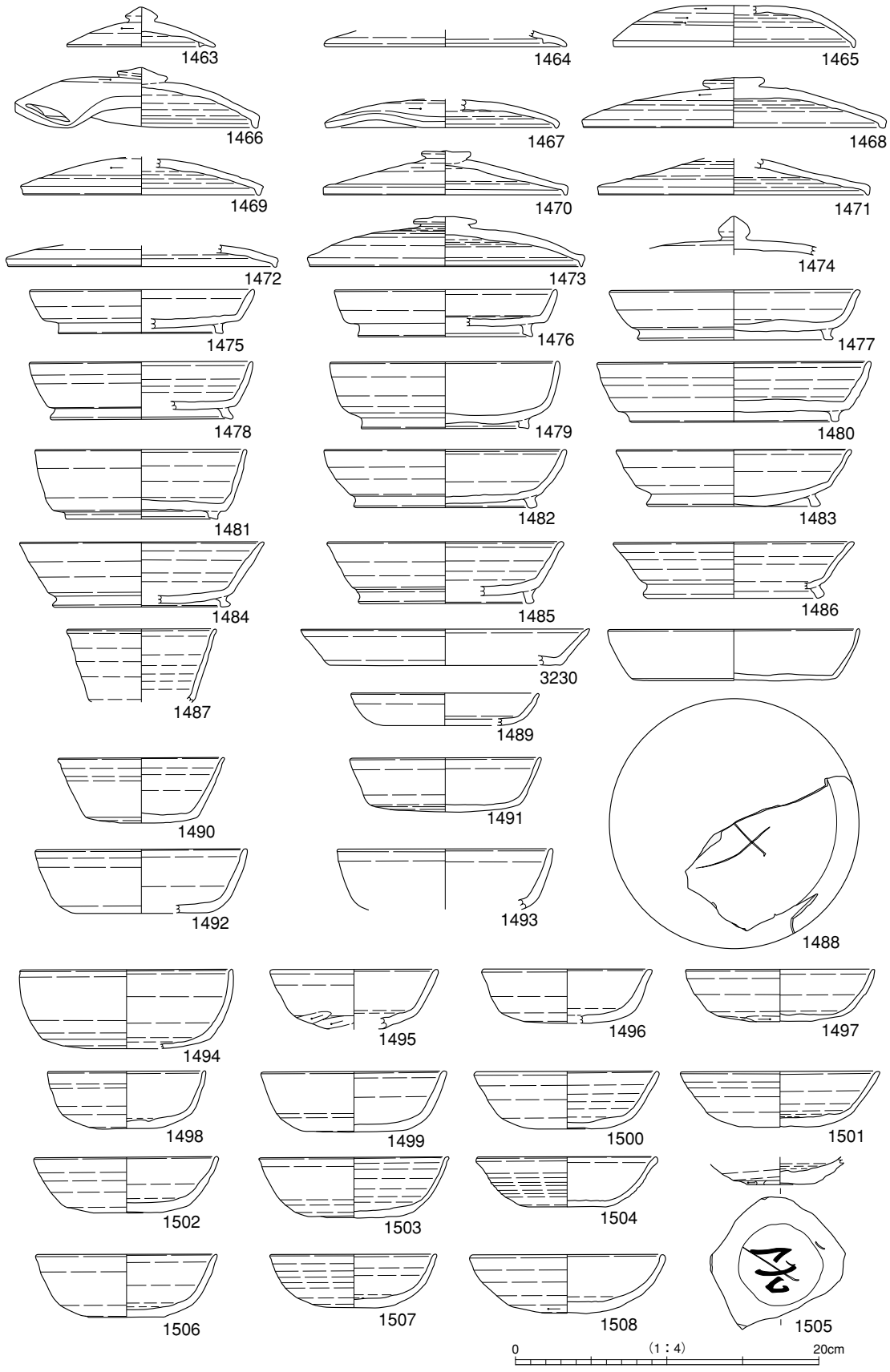
砥石はほぼ全調査区から出土したが、そのほとんどは角柱状のものを使い込んだ両端撥形となる戦国時代のものである。しかし99ASD01の第4・5層からはそれらとはやや異形な砥石が出土した。砥石は重量物であるためより深い土層へと沈み込む可能性が高い。例えばS377は戦国時代の砥石によくある形態で、下層への混入と考えられる。S375はやや広い面をもつ角柱状の砥石で、細い研ぎ溝が多くはしる。これと同じ石材のS376は板状を呈し、隅に丸い穴がある。紐でも通したものか。

99BSD01　99ASD01北側にあたる99BSD01の周辺では99A区から引き続き多数の竪穴建物が確認されたが、その多くは削平を受けて出土遺物がほとんどない状態であった。しかし99ASD01第4層の土器のが付近の竪穴建物跡出土土器と同じ時期のものを含んでいることが判明したことから、99BSD01第4層出土土器も同様に集落からの廃棄が多く含まれると判断することができる。その概要は99ASD01と似ているが、貯蔵具がさほど目立たないことと、99ASD01では岩崎17号窯式のものが顕著にみられたのに対し、当該地点ではそれ以前（東山44号窯式～東山50号窯式）と以後（高蔵寺2号窯式）が増えたような印象がある。また折戸10号窯式の供膳具も少ない点が指摘しうる。このことから、周辺の竪穴建物の時期は古墳時代中期からの延長となる7世紀前半と、その後間が空いて8世紀前葉とに該当すると想定できよう。

須恵器供膳具は律令時代的な蓋・杯からみる。かえり付き蓋（1463・1464）は岩崎17号窯式であるが、99ASD01に比べてわずかである。かえりのない蓋（1465～1473）は高蔵寺2号窯式を中心とする。1466は縁が激しく歪んでいるうえに別個体片が融着する。このような一見「粗悪品」でも集落にまで到達する。杯は有台杯（1475～1486）、無台杯・椀（3230・1488～1508）があり、前者は口径14cm前後で浅いものが多い。これと蓋が組み合わさる。岩崎41号窯式～高蔵寺2号窯式が中心となろう。一方無台杯にも大口径もの（3230・1488）があるが、多くは口径11～12cmである。無台椀は全体に丸い1508が古く、1507などは平底で8世紀前葉、1504は口縁が外反しており折戸10号窯式となろう。1505は底部外



第174図　99ASD01出土砥石実測図



第 175 図　99BSD01 出土遺物実測図（1）

面に判読不能な墨書がある。この調査区では唯一の古代文字資料である。

高杯（1509 ～ 1520・1522・1523）は透かしのあるもの（1518）は 6 世紀代か。杯部が椀状（1509 ～ 1511）から平底状のもの（1520）へと推移する。盤（1523・1524）や低めの脚部をもつ高盤（1525）がある。

古墳時代的な蓋・杯は 6 世紀後半（第 5 章）からの連続となる資料で、東山 44 号窯式～東山 50 号窯式主体である。

貯蔵具・調理具は甕・広口壺・瓶類・大型甕・鍋・こね鉢がある。甕（1541 ～ 1544）は肩が張った形状化が進む。1545 は台付壺か。広口壺は 99ASD01 と比べて少ない。小型で浅いもの（1546・1547）、小型で深いもの（1549・1550）で、1550 は 8 世紀中葉か。1548 は短頸壺。1552・1553 は鉄鉢で全体に丸みのある 1553 から平底で上半部に最大径がくる 1552 へと推移しこれがやがて尖った底部へと変化すると思われる。1558 ～ 1560 は平瓶。1560 は台が付くので 8 世紀代になる。1561・1564・1565 はフラスコ瓶。1561 は突帯状となる口縁部から 7 世紀前半を中心に考えておきたい。1562・1563・1566・1567 は長頸瓶。1562・1563 は頸部半ばに 2 条の凹線が廻り胴部は肩が張る 7 世紀代のものである。1568・1569 は横瓶。1569 は胴部内面は円形当て具痕、外面は平行タタキ痕がみえるが、平行タタキ具は木目に直交する平行線が彫り込まれているため細かい格子にもみえる。1571 ～ 1575 は長頸となる中型～大型甕の口縁部である。頸部外面の文様は笹葉状の凹線を連続するもの（1571・1572）、櫛歯状工具による連続刺突文（1573 ～ 1575）がある。これら典型的な 7 世紀代の甕に対して、短頸の中型甕（1576 ～ 1580）は窯式を特定するするのが難しい。古墳時代中期からおよそ変化に乏しいからである。念入りなタタキ調整によって丸底に仕上げ凹線の 2 条施すもの（1577・1578）は東山 11 号窯式～ 6 世紀代の可能性もある。1581 は丸底の鍋。外面は底部にタタキ痕がわずかにみえる。この資料では火に直接かけた痕はみられなかった。1582 はこね鉢。底部内面は使い込まれて磨耗する。底部外面には焼成前にあけた小穴がいくつかある。鍋・こね鉢といった調理具の出土は貯蔵具に比べて少数で、この傾向は 8 世紀中葉～後葉の竪穴建物でも同じである。

灰釉陶器（1583 ～ 1587）は椀・皿のみで、黒笹 90 号窯式以降である。1588 は初期段階の山茶碗で、9 世紀後半から 11 世紀半ばまで細々とした感ではあるが陶器の搬入はあったようである。

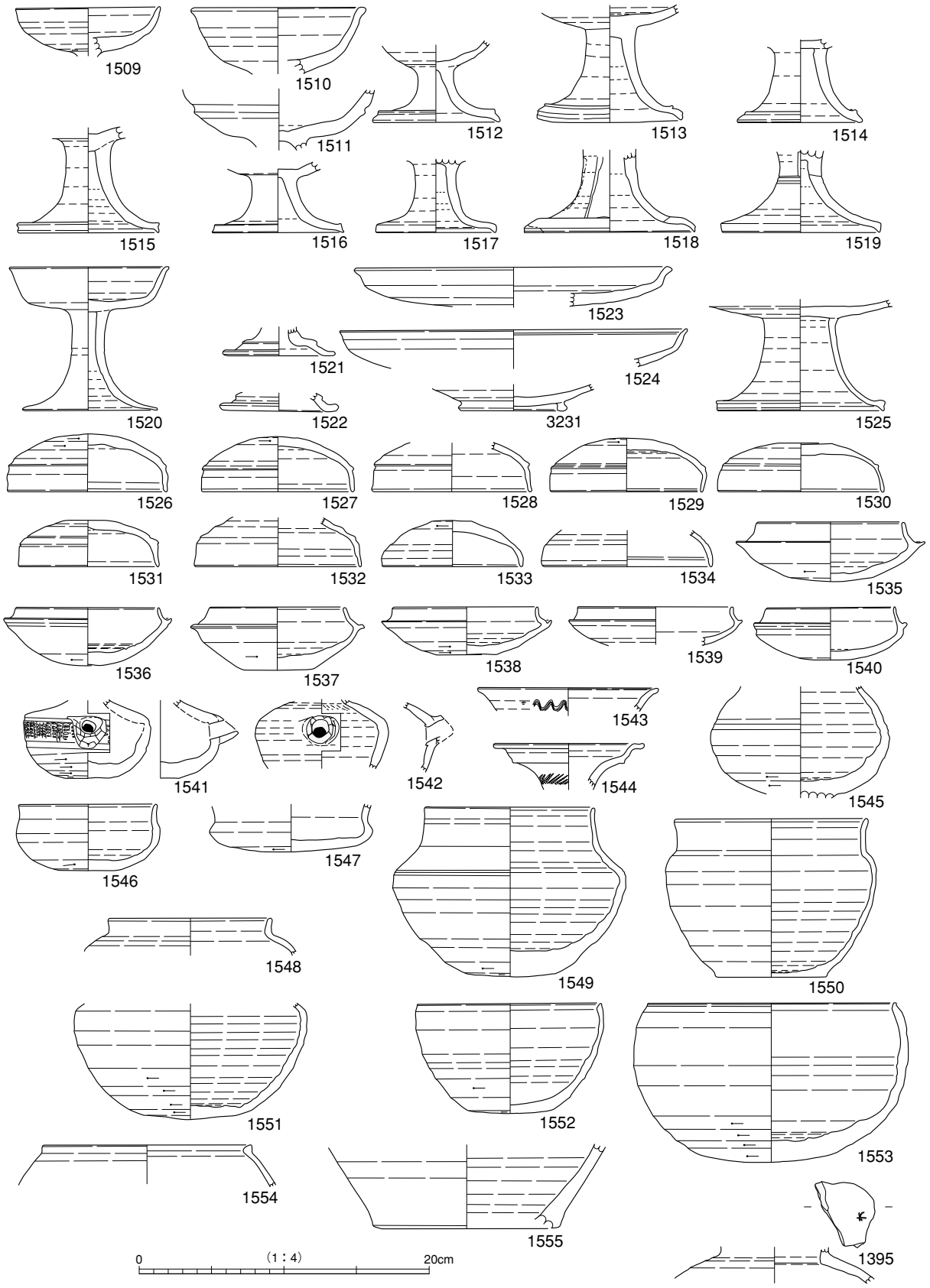
1589 は東山 50 号窯式の須恵器杯蓋で、外面に焼成前の線刻がある。二本線と「×」の組み合わせで線刻が確認されるのも 7 世紀代が最も多い。

製塩土器はわずかだが、1590 は杯部片、1591 は脚部である。知多 4 類で 7 世紀～ 8 世紀前半。

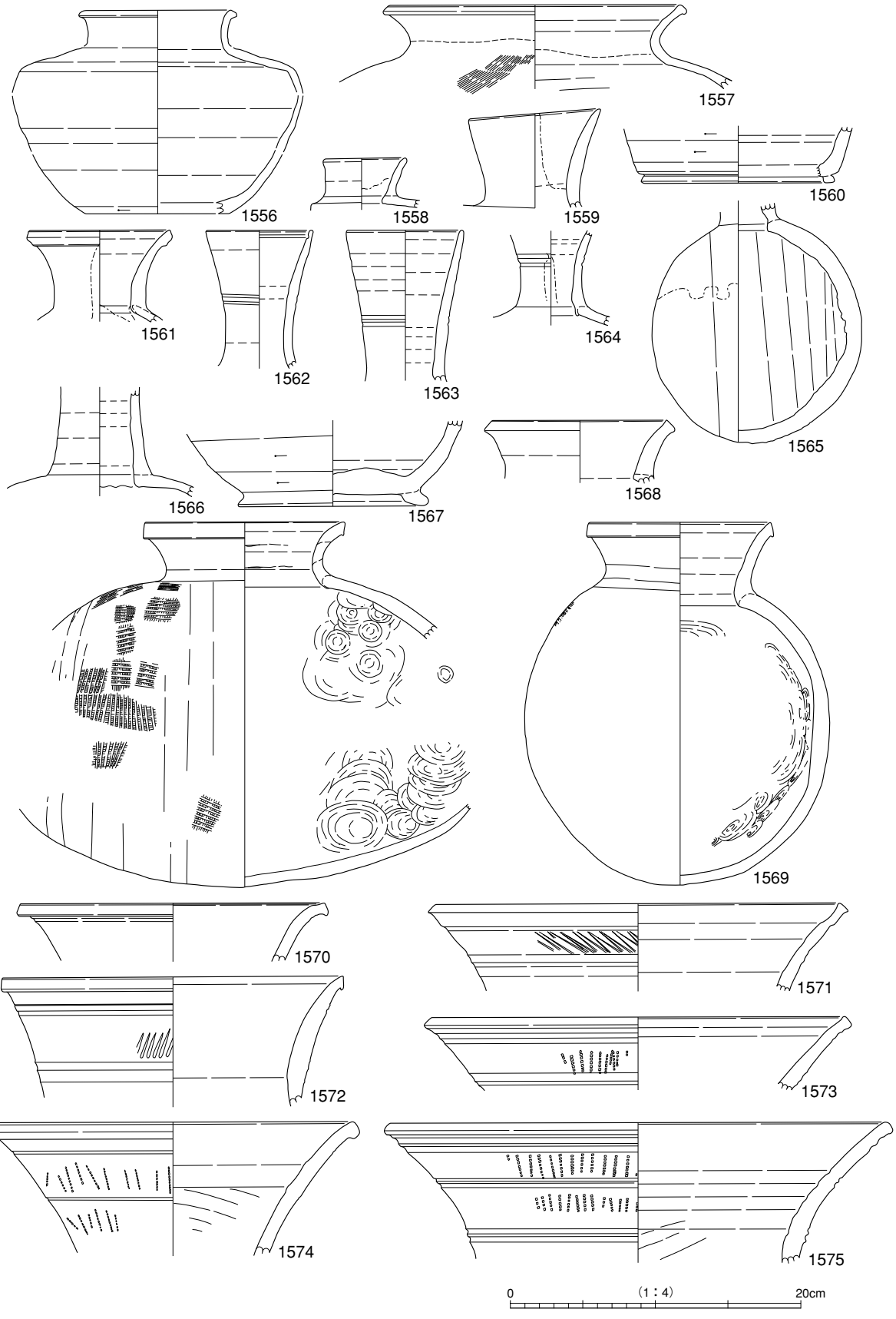
土錘（1591 ～ 1597）は全て管状、5 ～ 6cm の長さで胎土に粗い砂が混じる。

瓦塔（1598）は 99B 区で唯一のものである。SX8002 の資料と接合した。灰色で硬質な焼成で屋蓋部の軒先にあたる。丸瓦列と平瓦列を表現するが丸瓦列に節は入らない。垂木は地垂木と飛焔垂木の 2 段構成でヘラで削り出す。そこから奥まった部分は垂木表現は省略され、本例では葉脈痕がみえる。葉の上にのせて製作したことを示しており、最近では西尾市古新田遺跡出土瓦塔でも確認されている。瓦塔の出土は 99A 区で集中しており、本例もその一部とみて差し支えない。後世に移動したものであろう。

土師器甕は、典型的な三河型甕がほとんどない。1599 は口縁が大きく外反し長胴甕とみられる。指ナ

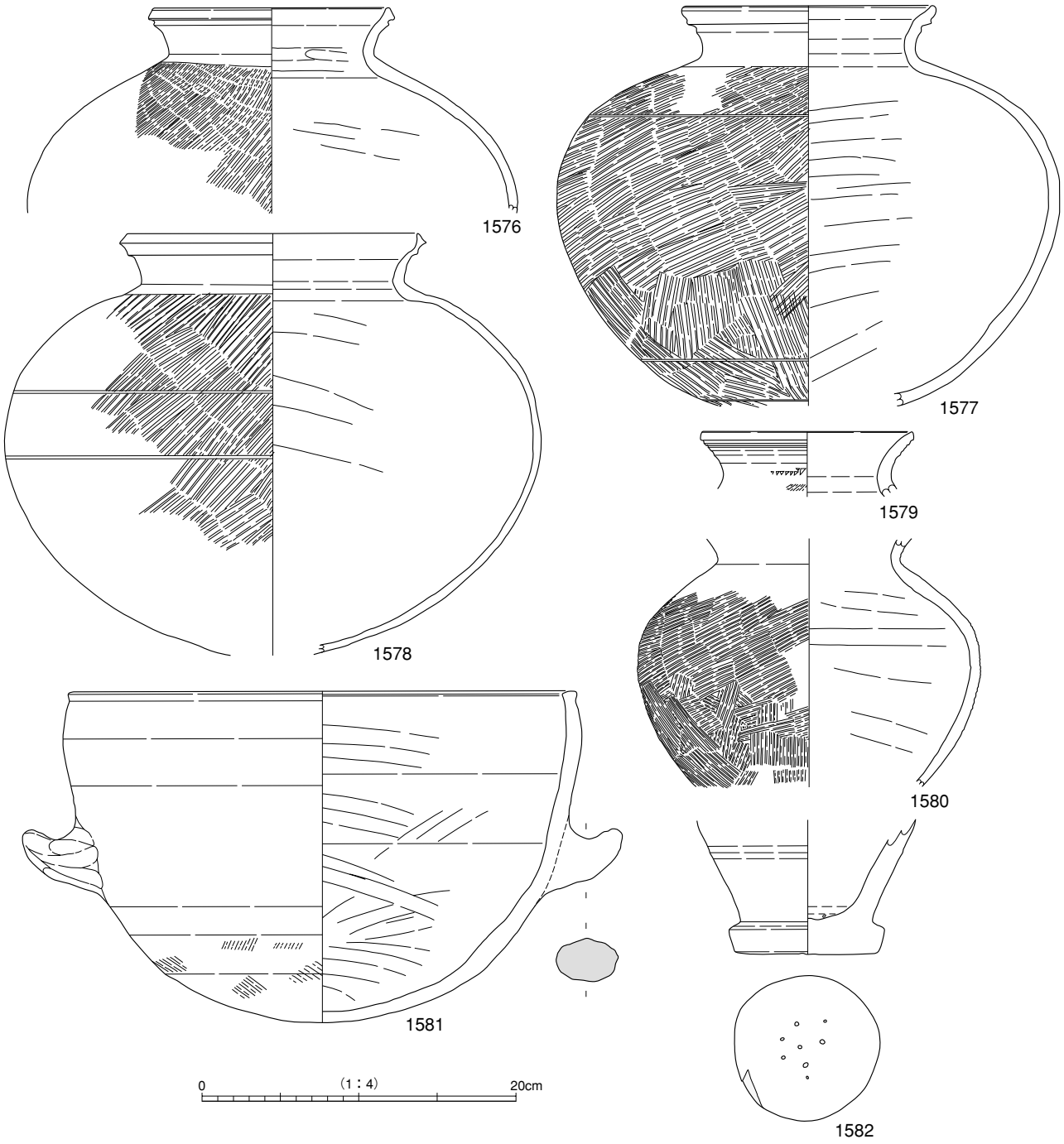


第 176 図　99BSD01 出土遺物実測図（2）

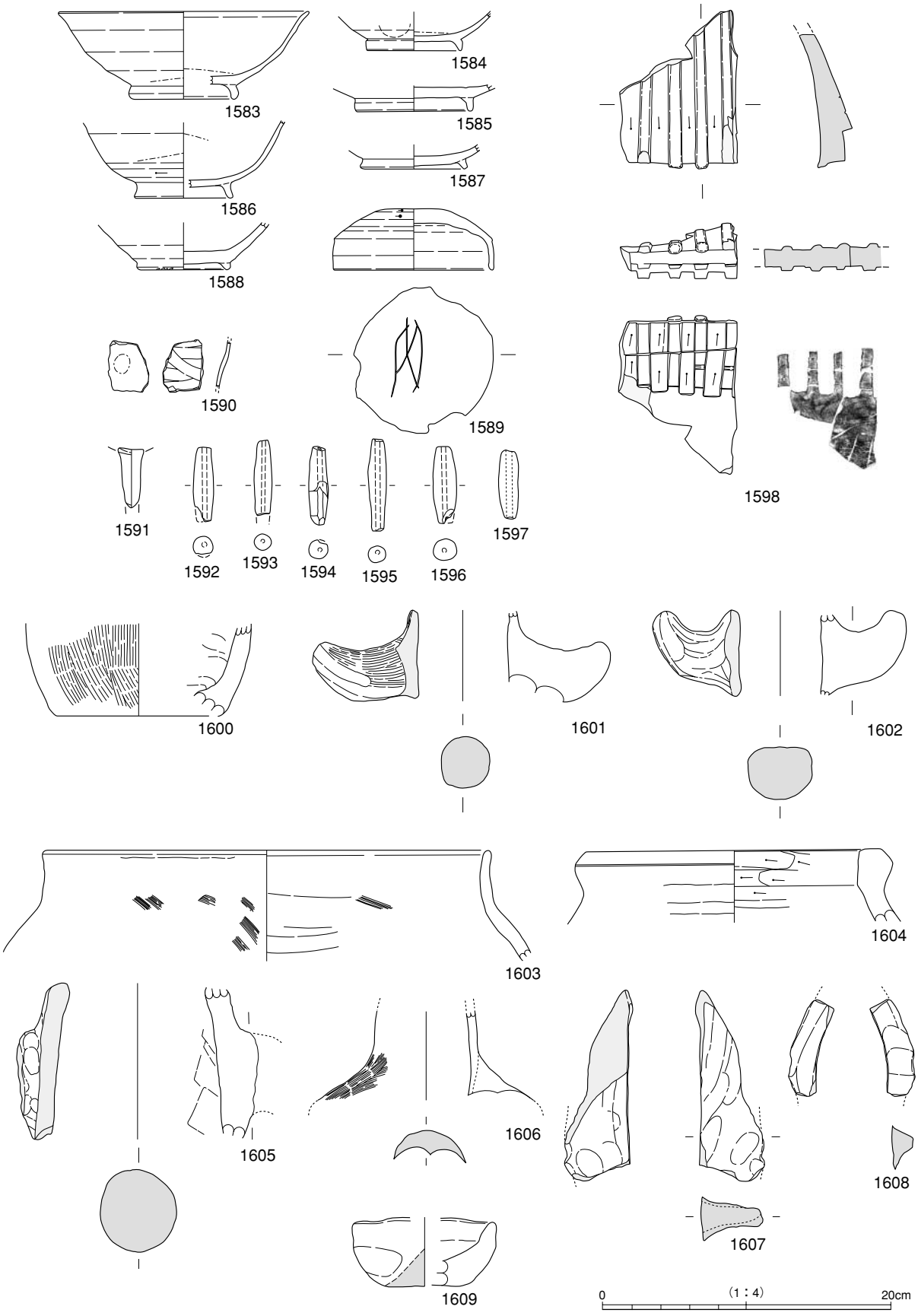


第 177 図　99BSD01 出土遺物実測図（3）

デ調整で器壁も厚い。薄形長胴甕が定着する以前のものであろう。1600は平底の甕もしくは鍋の底部。外面ハケ調整であるが器壁が厚く、98C2SX01出土の一群に通ずるものがある。1601・1602は甑または移動式竈の把手。1601はハケ調整で1602は指ナデ調整である。1603は鍋であろうか。最終器面調整は指ナデであるが棒状工具によるハケ調整痕もあずかにみえる。1604は移動式竈の懸け口である。1605はその把手が付くあたりで内面は板状工具による指ナデ、1606もその可能性があるがやや器壁が薄いか。1607・1608は鰭状となる竈の一部である。1609は椀状の手捏土器であるが、椀とするには内面が雑である。外面に被熱痕があり2847・1444のような竈に甕を据える支脚であった可能性もあろう。



第178図　99BSD01出土遺物実測図（4）

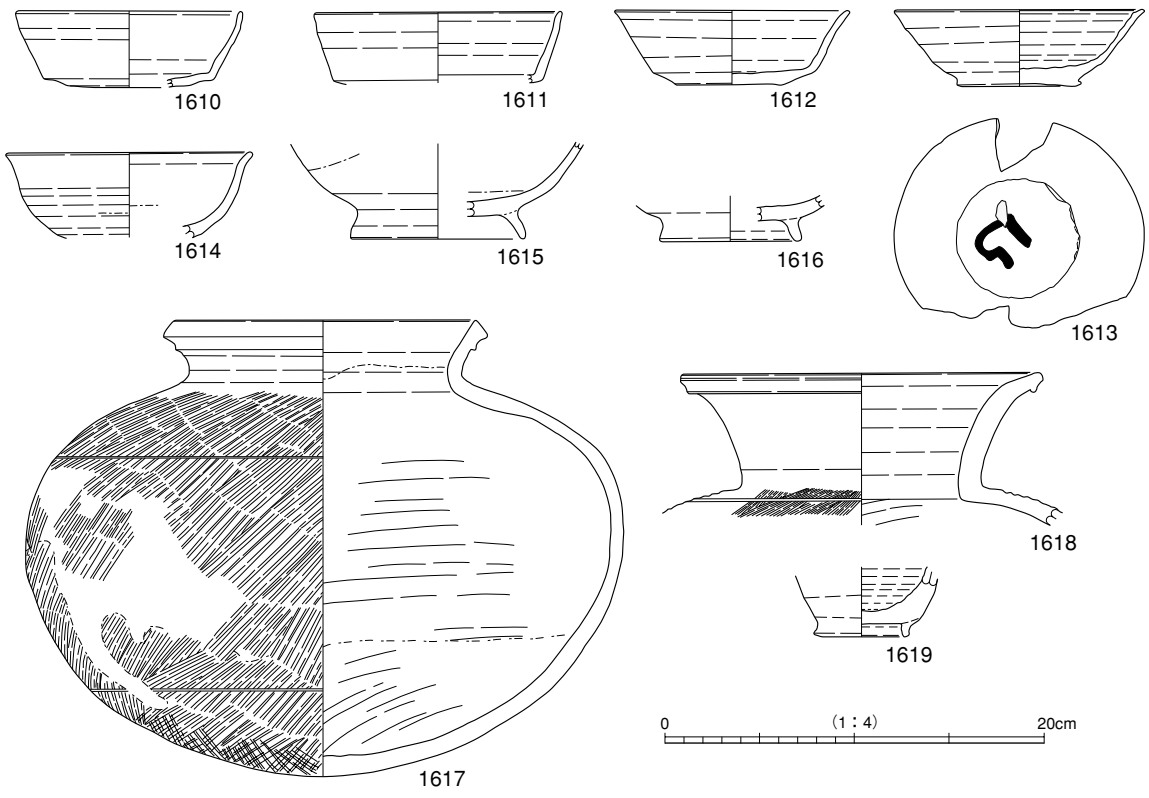


第 179 図　99BSD01 出土遺物実測図（5）

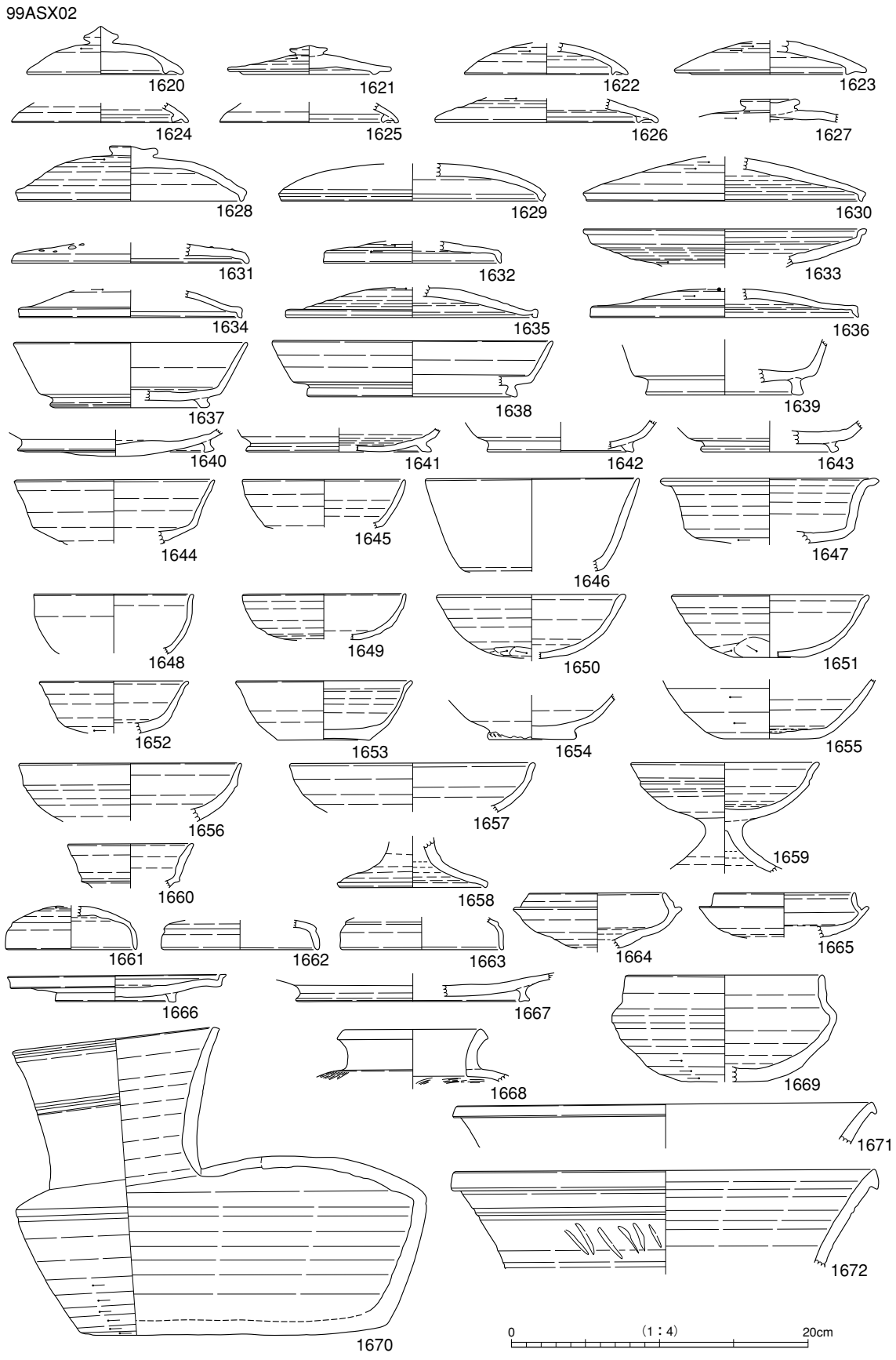
99CSD01　大溝北端に位置する当該地区では古代の竪穴建物はなく、集落域外であった可能性がある。それを反映するのか古代土器の出土は少ない。土師器はなく、須恵器杯（1610～1612）と椀（1613）は折戸10号窯式である。1613は底部外面に記号のような墨書がある。1614～1616は灰釉陶器椀・皿で折戸53号窯式。1617は須恵器甕だが先述したように6世紀代に遡る可能性もある。破砕されていたがほぼ完存しており、外面は濃緑色の釉がかかり2条の凹線がめぐる。1618はやや長頸の甕でこれも肩のところに凹線がめぐる。1619は鉢で、かなり崩れた形状から折戸10号窯式の杯・椀と併行するものと考えられる。

99ASX02　大溝東側土塁の上に堆積した古墳時代中期から室町時代の遺物を含む黒色土層である。細分はされず、中世の遺物が層下部で出土することもあり、中世段階で撹拌された可能性がある。99A区は全体的に南方向へ傾斜しているため後世の削平の度合いが少なく、特に調査区南半部では青灰色シルト（洪水・水田層）を除去すると厚さ20cm以上の堆積が認められる箇所もあった。古代集落が矢作川を正面にしていたとするとその後背にあたり、大溝とともに廃棄場所とされていたと考えられる。現に1670などのように99ASD01出土の破片と接合する場合もみられる。

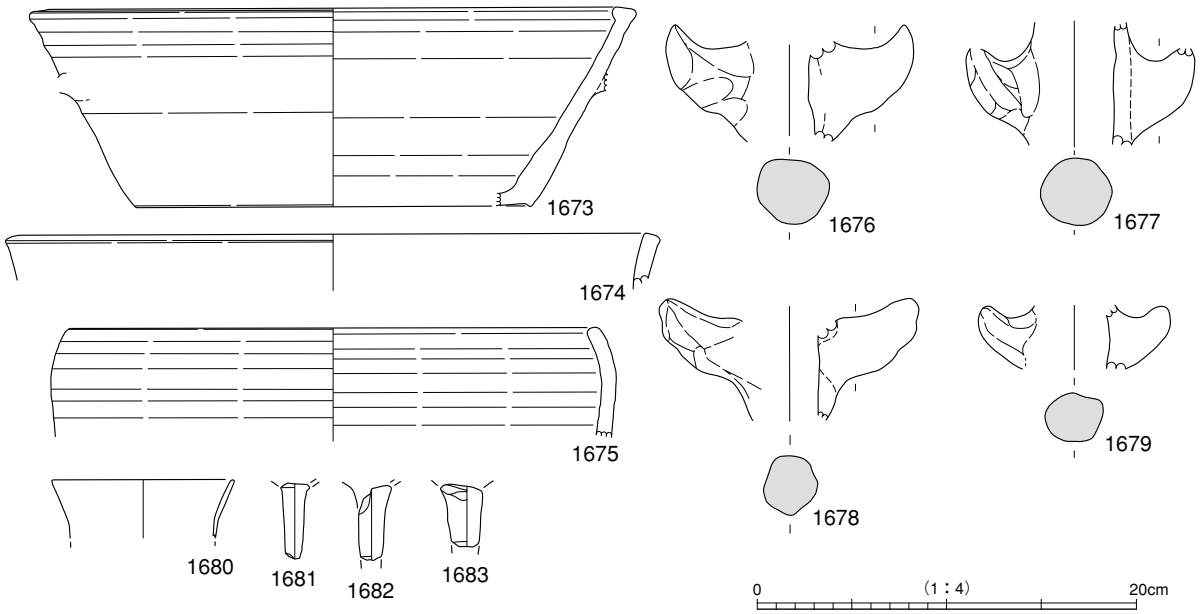
したがって出土土器の構成は99ASD01とさほど変化はない。7世紀～8世紀前葉の須恵器が主体で、若干の土師質遺物がみられる。須恵器蓋はかえり付き蓋（1620～1626）は岩崎17号窯式を中心とする時期。かえりのない蓋（1627～1636）は8世紀代、1635はさらに新しく井ヶ谷78号窯式であろうか。有台杯（1637～1643）は8世紀前葉が中心。1647は無台杯だが口縁が外反したうえ面をつくるもので水入遺跡では唯一例。無台椀（1648～165）のうち1649は須恵器杯蓋の可能性もある。1650・1651は体



第180図　99CSD01出土遺物実測図



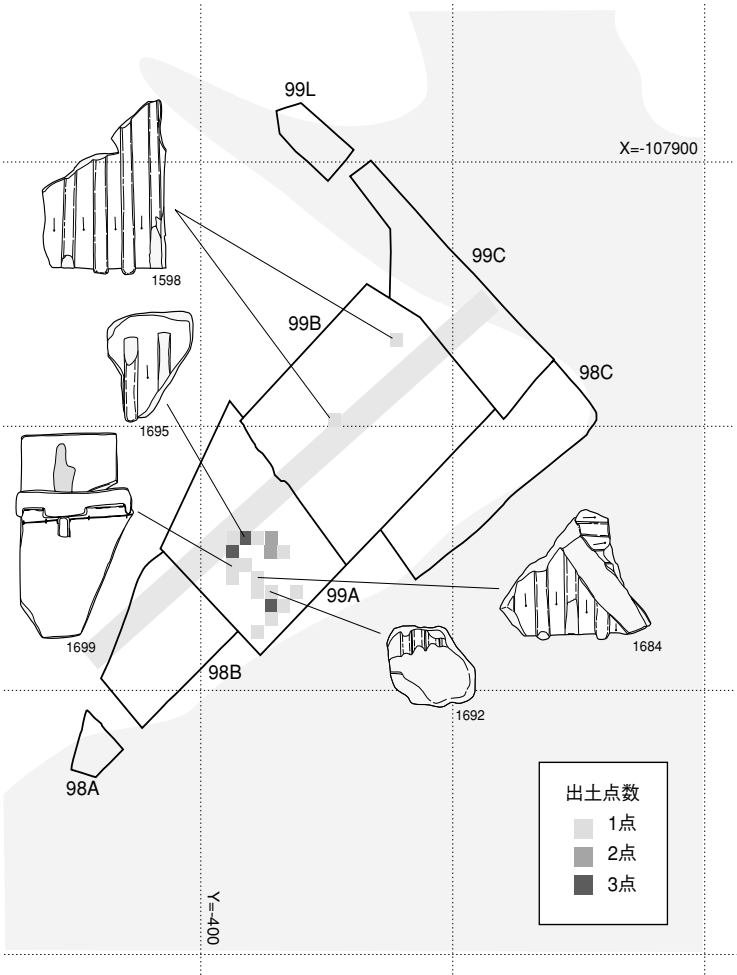
第 181 図　99ASX02 出土土器実測図（1）



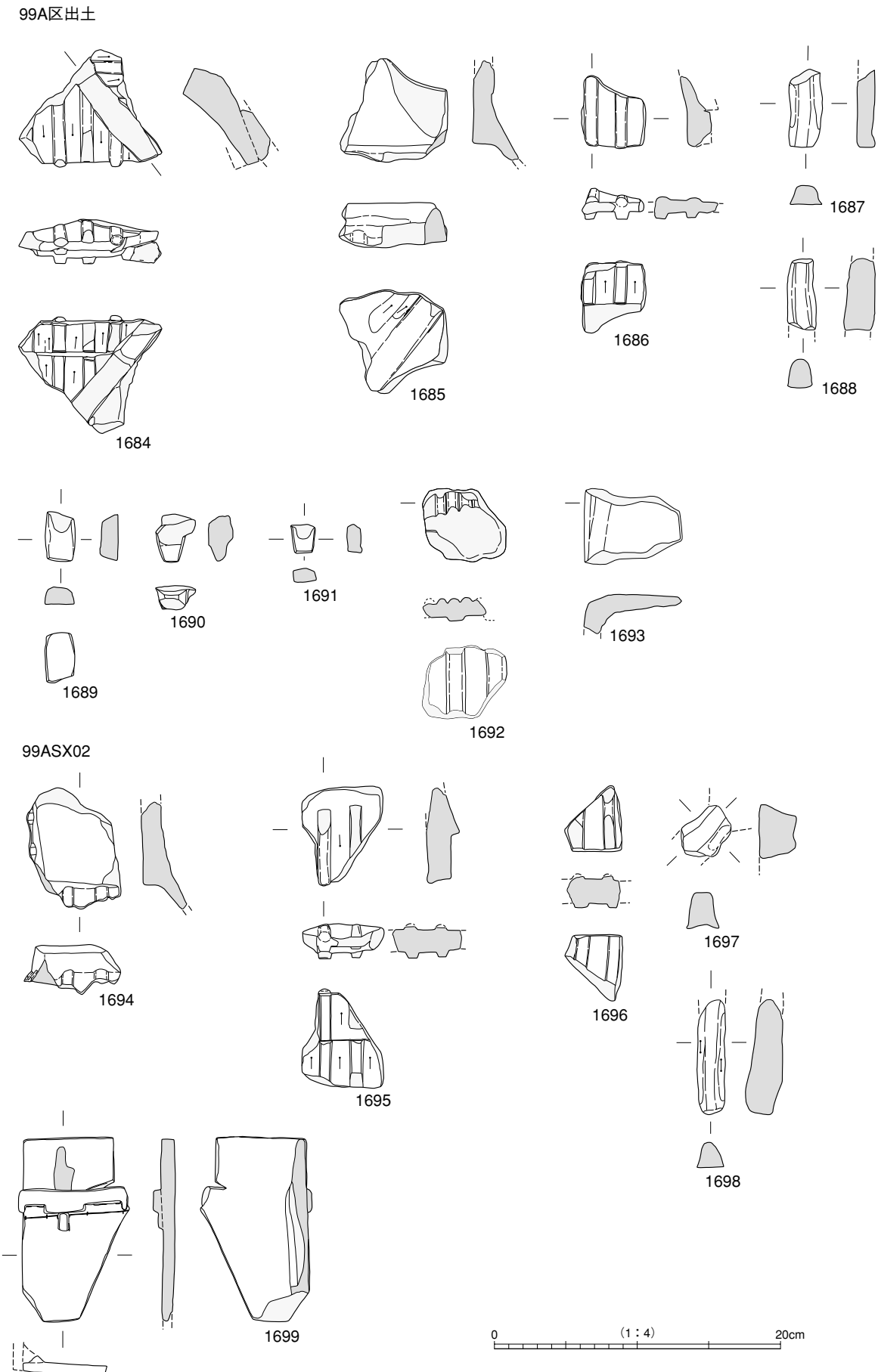
第 182 図　99ASX02 出土土器実測図（2）

部下端にヘラ削りがあり 8 世紀中葉、1653 は後葉段階か。1656 ～ 1659 は 7 世紀代の高杯。1660 は古墳時代中期の甕。杯蓋（1661 ～ 1663）、杯身（1664・1665）は東山 50 号窯式～岩崎 17 号窯式。1666・1667 は有台盤で井ヶ谷 78 号窯式か。1668 は横瓶、1669 は広口壺である。1670 は平瓶で頸部に 2 条の凹線がある。岩崎 41 号窯式で 7 世紀末であろう。1671・1672 は大型甕。1673 は大型鉢で把手が付くようである。口縁端部が内面に突出しその上に面をつくる。1675 も鉢であろう。

土師質のものでは甑の把手（1676 ～ 1679）がある。ここに示したものは全て指ナデ調整である。1676 ～ 1678 のようにやや大振りで端部がやや尖る傾向のものと、1679 のように小さめで全体に丸みのあるものがある。前者は 7 世紀代、後者は 8 世紀以降の三河型甕（鍋）に伴うものであろう。製塩土器は杯部（1690）、脚部（1691 ～ 1693）があり、いずれも知多



第 183 図　99A 区瓦塔出土地点分布図



第 184 図　99A 区出土瓦塔実測図

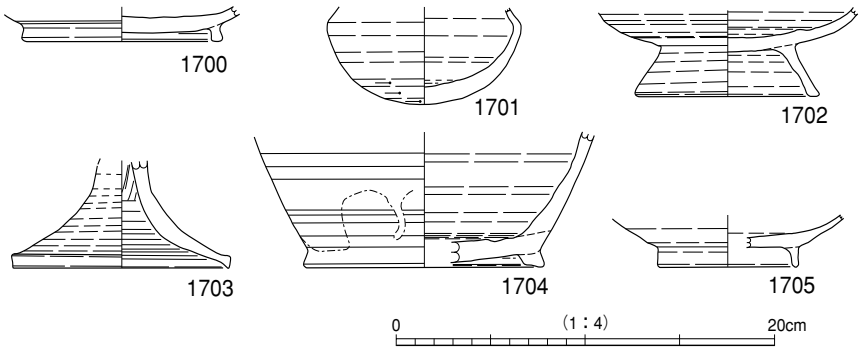
4類である。

99A区の瓦塔　99A区ではSX02を中心に古代～戦国時代の遺構から瓦塔片が出土した。そのい分布傾向をみると（第183図）、グリッドⅠH11b・11cに該当するSX02に最も多く、そこから南東方向へ広がる。SX02については中世にかき寄せられた可能性が高いのでここが瓦塔の建立されたもしくは廃棄された地点とするのはやや難しい。しかしそれ以外の破片がその南東側一帯に限られる（99BSD01出土の1598を除く）ことや、竪穴建物がない空閑地であることを考えると、ここに瓦塔が建っていてそのまま廃絶した可能性が高い。

瓦塔は屋蓋部と軸部、基壇部、相輪部などの各部品ごとに成形・焼成され、現地でそれらを積み上げて多層塔として完成される。水入遺跡では屋蓋部（1598・1684～1688・1692・1694～1698）と軸部（1689～1691・1693・1699）が確認された。そのうち屋蓋部の形態によって2個体分の瓦塔があったと推測される。ほとんどの破片は赤褐色で軟質焼成あるいは灰色で硬質焼成のもので丸瓦列と平瓦列を表現するタイプである。しかしながら1692は丸瓦列のみ表現されるタイプで灰白色で軟質焼成である。近隣の類例は豊田市伊保白鳳寺跡、岡崎市丸山廃寺跡で出土している。これら寺院は7世紀末～8世紀前葉に創建にあたって瓦が供給されたのみで、機能時期は短かったようである。このことから類例瓦塔もその時期にあたるとみられる。

1692以外の瓦塔は先述のような特徴であるが、このタイプは折戸80号跡例から折戸10号窯式と判断される。1684は屋蓋隅部で降棟は年度貼付け面で剥がれる。隅垂木も角柱状粘土を張り付ける。1685・1694は屋蓋基部。上の軸部を受ける突帯などはなく平坦である。1687・1688・1698は降棟部分。1699は軸部本体である。粘土板を組み合わせて箱状にしたものに斗栱部分を粘土帯で貼付けする。特に1699では斗栱粘土帯の下に焼成前に入れた目盛のような線刻がある。粘土帯はこれにそって欠き取られており、成形時の目印であったことが判る。粘土帯の上には板状の持ち送り表現が付いたのであろう。1689～1691は尾垂木表現。1693は軸部本体の可能性がある破片で、1699とは異なって一枚の粘土板と折り曲げる。

99BSX02　大溝東土塁は99B区へと続くが、99A区より高所にある当該地点では黒色層はかなり削られてしまっていた。したがって遺物の出土量は少ない。1700は須恵器有台杯。1701は広口壺。1702はやや高い台の有台盤か。1703は高杯脚部で7世紀代。1704は長頸瓶で8世紀代。1705は灰釉陶器皿で折戸53号窯式か。



第185図　99BSX02出土遺物実測図

（3）船着場

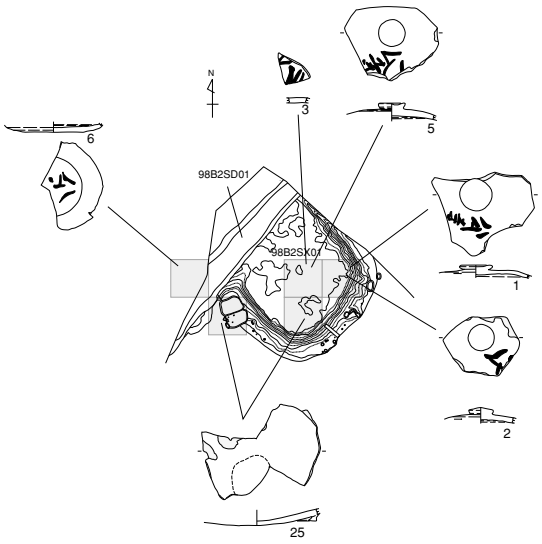
平場状遺構　98B2区では大溝SD01の確認と同時にその南東側に接して段丘を掘りくぼめた平場状遺構が検出された。その規模は上端で大溝に対して垂直方向に長さ16m、さらに大溝と平行に幅を測ると9mで、南東隅で50cmの深さである。平面形は楕円形が大溝でカットされたような形状である。底面はほぼ水平が保たれ平滑に掘られている。その規模は上端と同じ地点で計測すると長さ13m、幅6.5mである。このことからわかるように上端から底面までは緩い傾斜面となっている。さらにその傾斜面を注視すると1段が約5cmの階段状となる。階段は横方向に連続し傾斜面をほぼ一周する。ただそれが大溝に取り付く98B2SB01・02付近で途切れる。そこから傾斜面は内側に張り出して入口を絞り、平場がやや袋状になるようになっている点が注目される。

土層　SX01の堆積土層は大きく上層と下層に区分される。その境界は底面とほぼ平行で水平である。上層は灰色粘質土で大溝第2層、すなわち中世の堆積層に連続する。遺物も同様で古代の土器から灰釉系

1 2.5Y3/2黒褐色粘質土層、粘性大しまり弱い、炭化物若干、遺物包含。
2 5Y3/1オリーブ黒粘質土層、中～粗粒砂若干混じる、粘性大しまり弱い炭化物若干、ところどころにこぶし大の礫混じる。
3 2.5GY5/1オリーブ灰色粘質土層、極粗粒砂～1mm大の小礫多く混じる、碧海層、ベース。

第186図　98B2SX01平面・断面図

陶器までが出土し戦国時代までは下らないもようである。下層は黒褐色土層で厚さ10cm前後と薄い。この層からは中世の遺物は出土しない。ただ古代の土器も出土するものの量はさほど多くない印象である。上記のことから２層間には時期的な隔たりが看取され、当該遺構の形成が古代であった可能性が高い。



第187図　98B2区墨書土器出土分布図

出土遺物　SX01出土遺物について古代に属するもののみ提示する。特徴的なのは遺跡内で１点のみの緑釉陶器皿（1752）があることと、墨書土器（1723～1725・1743・1749）がまとまって出土したことである。緑釉陶器は調査区北壁近くで出土した。墨書土器および須恵器杯を転用した硯（1726・1770）の出土分布は第187図のとおりである。墨書は全て蓋外面に「公寺」（1723・1724）、「公」（1725）とあり、筆致から同時に記されたものと考えられる。時期は折戸10号窯式である。

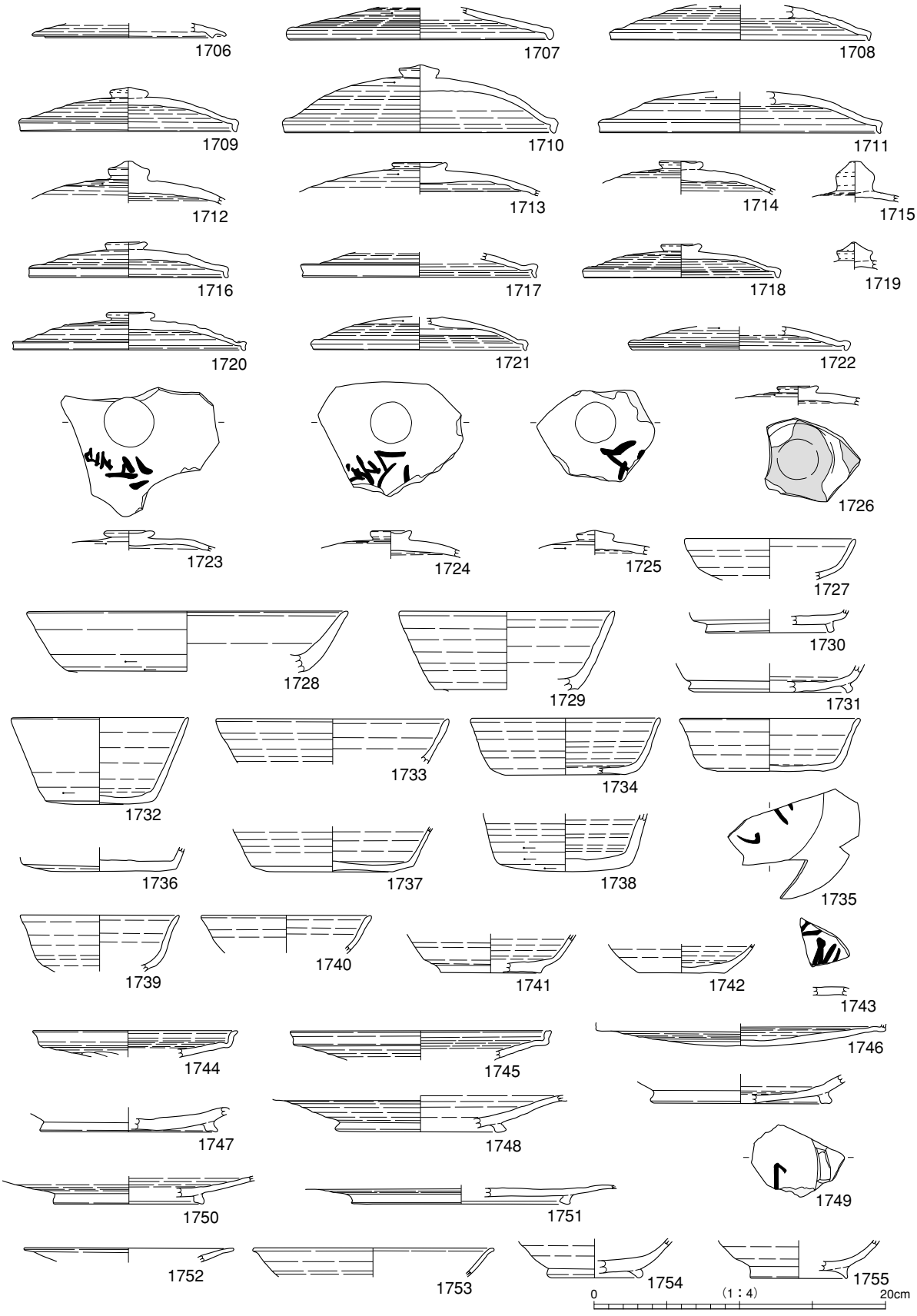
全体の構成は須恵器供膳具が中心で、ほぼ同じ頃の99DSX01と比べて土師器甕が少ない印象がある。また盤（1744～1751）が多いのも注目される。また仏器的なものとして鉄鉢（1756）、水瓶（1759）があるのも特徴であろう。。台付壺（1757）・広口壺（1758）は７世紀代。1760は平瓶の把手で８～９世紀代。1764は平底の甕で９世紀代か。1767は移動式竈の一部で焚口であろう。漆とみられる付着物のある無台杯は98B2SD01でも出土（1260・1261）している。1768は軟質焼成で口縁が外反しないなど1260とは形状が異なる。

98B2SX01の一部を掘った調査区北壁トレンチでは岩崎17号窯式の盤（1771）やフラスコ瓶に台が付いた長頸瓶（1773）があり、およそ７世紀後半である。

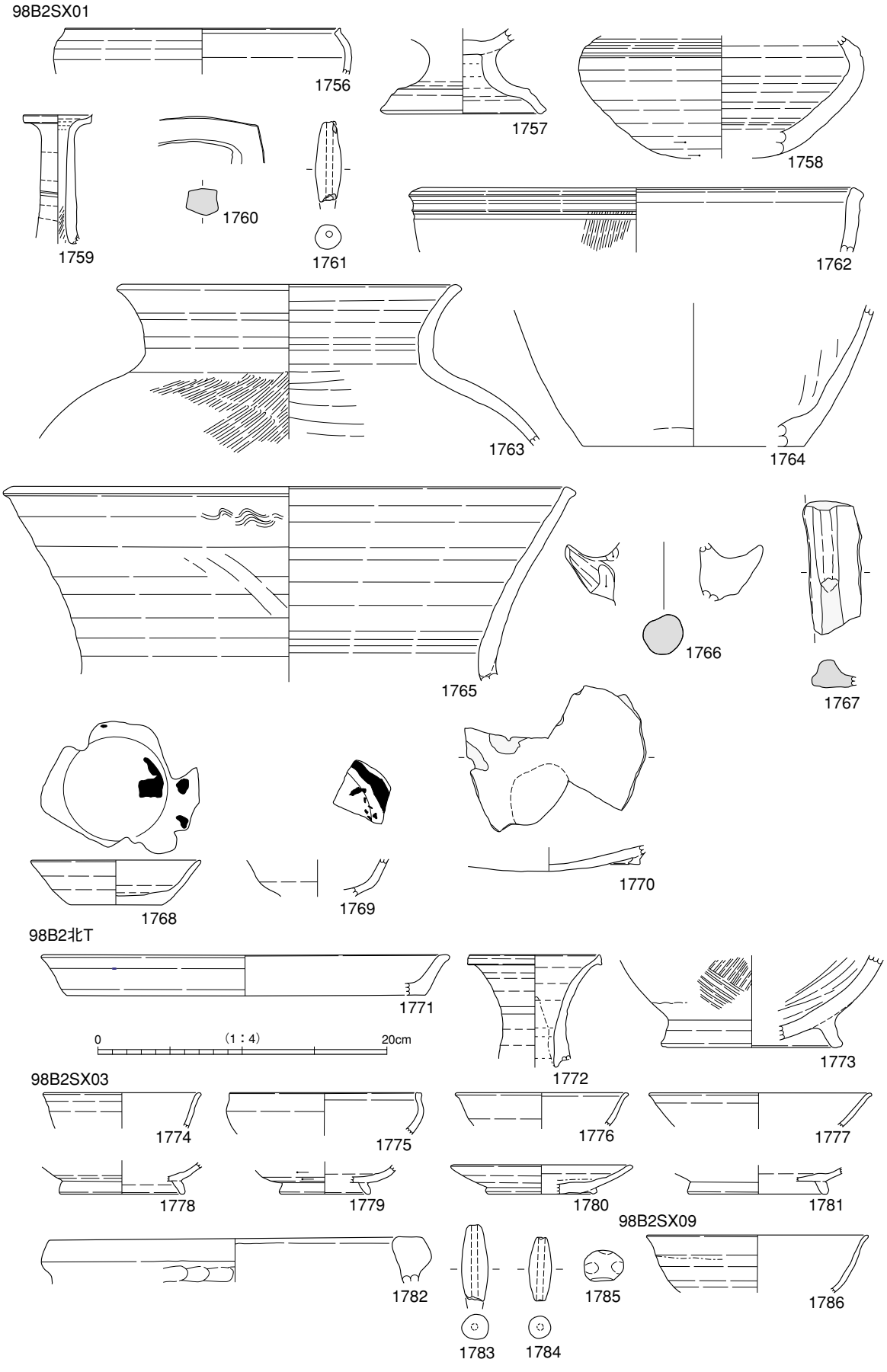
遺構の性格　SX01が古代に開削されたという前提でその目的や機能について言及したい。最大の特徴は掘りくぼめられた平坦面が大溝側に開いているという点である。このことは大溝との連続性を示す。また、98B2SD01で上層とした奈良時代末～平安時代の厚い砂の堆積層は、ここから上流の大溝ではみられない。したがってここだけ水路として機能していたことを示している。以上の点からSX01は水路に関わる施設、可能性として船着場であったと考えられる。しかし出土遺物はむしろ仏教施設に関わるものが多く、船着場に直接関わるものは見当たらない。

98B2SX03・09　段丘面は調査区南方へいくにつれて下降する。そして98B2SD02（後述）より南側では灰色粘質シルトが全体を覆っ湿地帯の様相を呈していた。この灰色シルトを98B2SX03・09とした。ここからは古代末期～中世の遺物が出土した。1774～1781・1786は灰釉陶器椀・皿で折戸53号窯式以降か。1782は移動式竈の懸け口。土錘２点は5cm以上あるもので７世紀代か。1785は粗製な土製玉。

灰色シルトの下からは遺構が確認されず、古墳時代中期から通じて集落域外であった可能性が考えられる。しかし平安時代に限ってみれば、船着場とも関わって川湊のような場所になっていたとも考えられる。



第 188 図　98B2SX01 出土土器実測図（1）



第 189 図　98B2SX01 出土土器実測図（2）

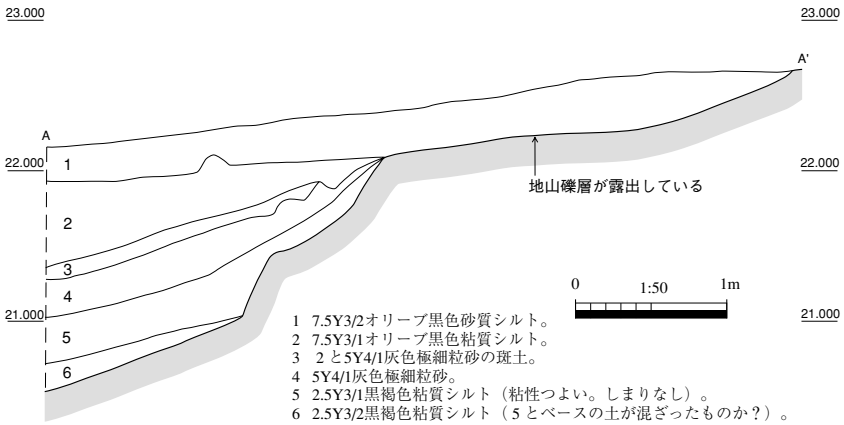
（2）段丘崖

段丘崖上層　大溝に対して段丘崖の方は7世紀以降の造作や利用の痕跡を見出せなかった。段丘崖中層の上には流水によってもたらされたと思われる砂層が堆積しており、これを上層とした。上層は戦国時代までの遺物を包含しているが、その入り込み方は地点によって異なり一貫したものはない。したがって古代以降少しずつ堆積が進んだのか戦国時代になって急激にそれが進行したのかは判然としない。しかし段丘面とほぼ同じ標高では水成堆積は観察されず、やや黒色がかったシルトの混入もあった。また戦国時代までの土器・陶磁器が小片となって出土した。このことから、戦国時代に段丘上に大型の掘立柱建物が多数建てられた頃に、既に段丘と連続する平坦面を形成していた砂層上面を整地したものとみられる。98C2区調査時にはこの整地について把握することができずSX01上面での遺構確認は実施していない。

古代の遺物には流されて磨耗した須恵器（1847）もあるが、ごく一部でありほとんどは廃棄地点から大きく移動していないようである。遺物量は古墳時代中期のそれに比べると格段に減少する。しかし地点によっては集中するところもあり、98C2区の南部、グリッドⅠH7aとその周辺からは古代の土器が多く出土した。特に器壁が厚いハケ調整長胴甕（第194・195図）や暗文のある土師器蓋（1896）・皿（1897）など、他の調査区ではみられないものが集積している点が注目される（第196図）。

99ASX01　当該地点は99ASB13～16南側に位置し、これらとの関わりが考えられる。7世紀代が中心であるが1797は8世紀三河型土師器甕の底部である。1790は高杯で東山50号窯式。1792は広口壺。1793は鍋で内傾する口縁とその外面下部に緩い凸線が廻るのが特徴である。1794はハケ調整ののち指ナデ調整を部分的に施した平底小型甕。1795はハケ調整は認められない。両者ともに底部外面に木葉痕がみられ、葉の上で成形したことが判明する。1796は甕口縁部だがハケ調整がナデ消されたようになっている。第194図の土師器甕・鍋の一群に属するか。土錘（1798）は5cm以上ある7世紀代のものであろう。

98C2SX01　須恵器供膳具は古墳時代的な杯蓋（1799～1810）と杯身（1811～1823）が多く、時期は東山44号窯式～岩崎17号窯式で中心は後者である。1811は東山44号窯式、1814は東山50号窯式の古段階、1815は猿投窯ではあまりない形態である。1817は生産窯不明。この時期の杯蓋・杯身には線刻が目立ち、1810・1819・1820に認められる。岩崎17号窯式では律令時代的な蓋・杯も登場するが、99ASD01に比べて当該遺構においては特にかえりの付いた蓋（1824）は少ない。1827は時期が新しく折戸10号窯



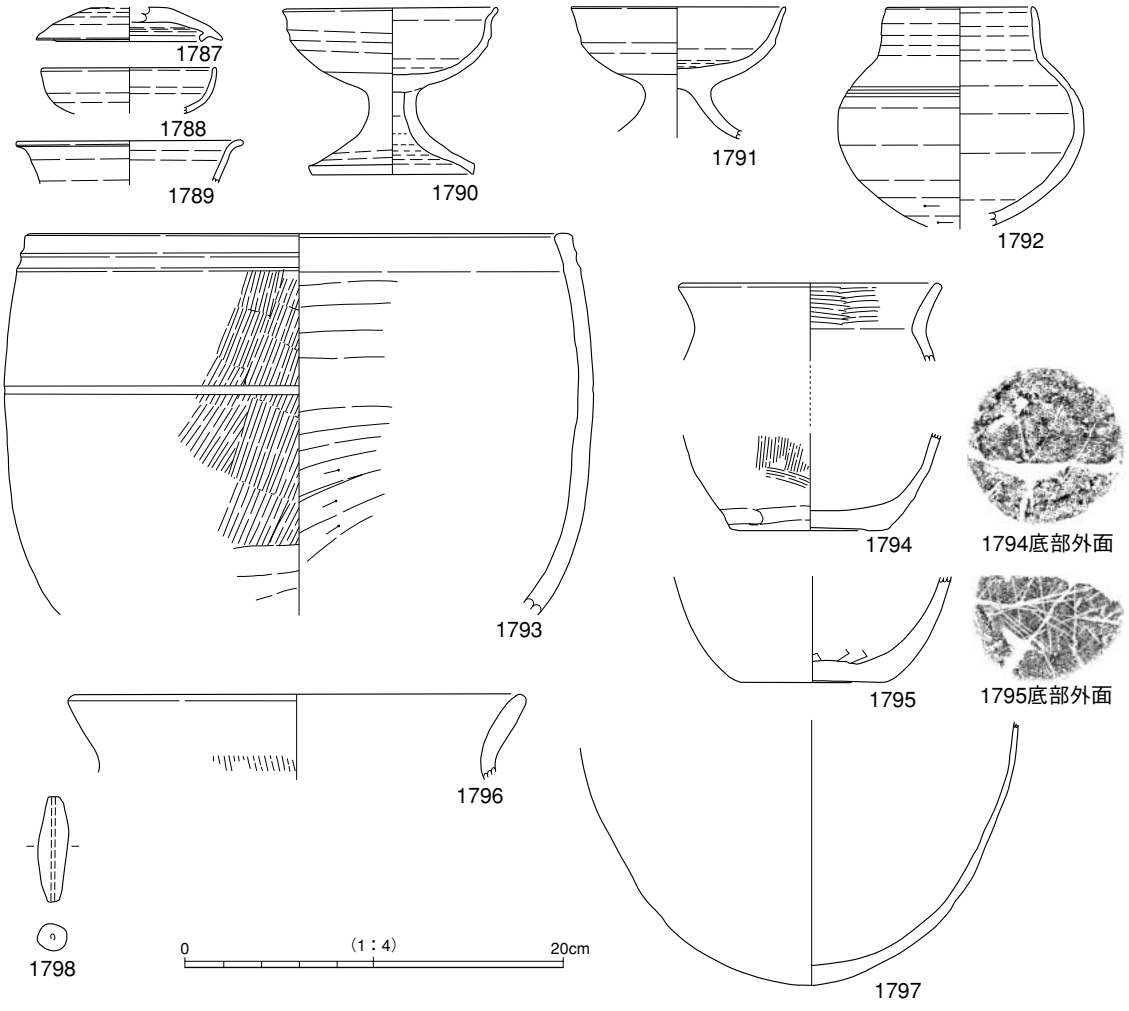
（土層構成）
SX01 上層　1　（中世・戦国期の遺物含む）
　　2　（古墳中期（須恵器以降）の遺物含む）
　中層　3　（古墳中期（須恵器以前）の遺物含む）
　下層　4　（灰色砂層。古墳中期。水位上昇時か）
　　5、6（古墳中期（3よりやや古い土器）の遺物含む）

第190図　99ASX01土層断面図

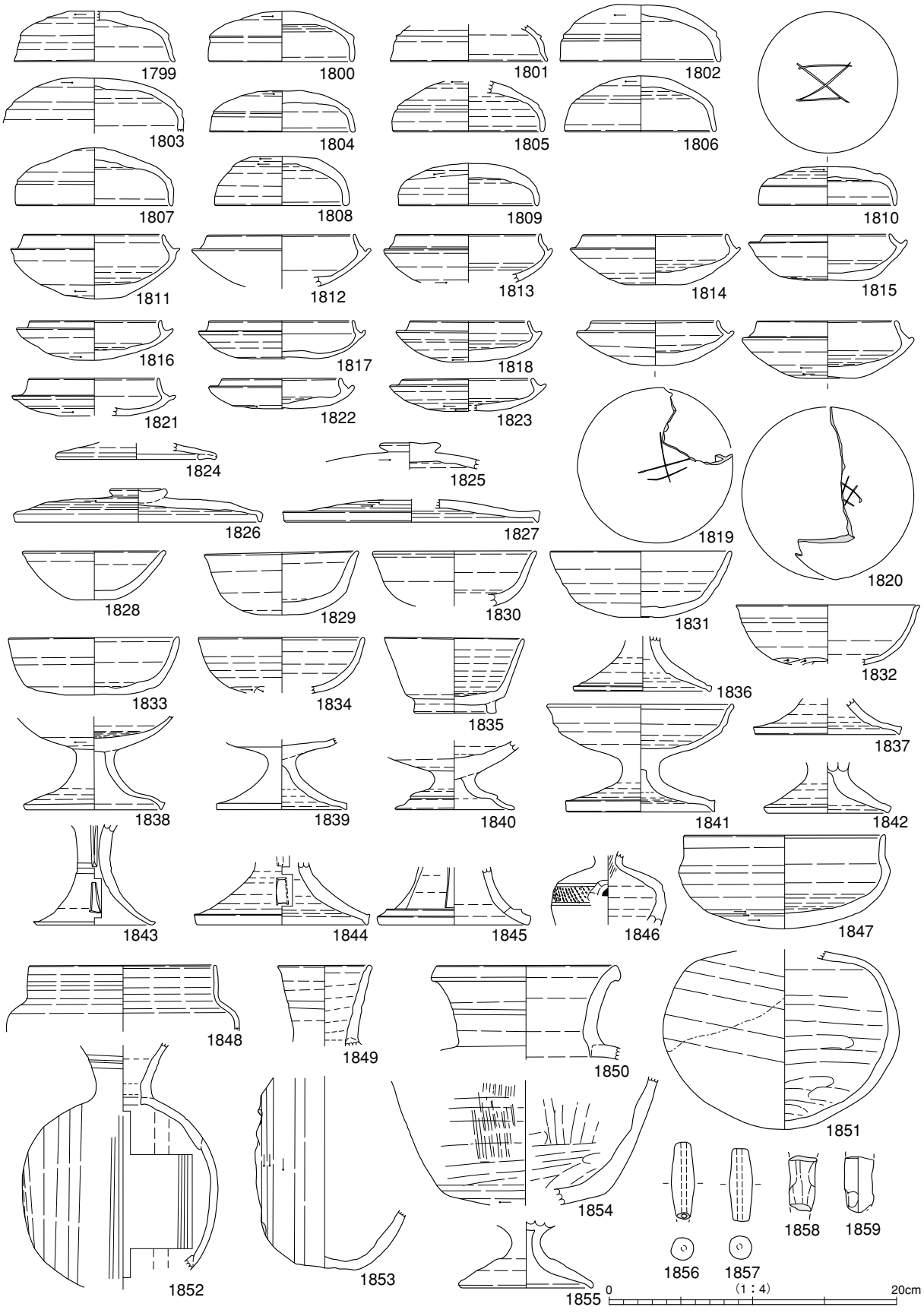
式である。同様に有台杯（1835、鳴海32号窯式）も少数派である。目立つのは無台杯で、1831が岩崎41号窯式、1828・1833が高蔵寺2号窯式である。中でも1829は内面全面に黒褐色の付着物がありこれは漆の可能性がある。高杯（1836～1845）のうち短脚のものは杯蓋・杯身と同じ時期で長脚2段透かしのもの（1843・1844）は6世紀代のもの。1845は古墳時代中期の高杯か。

須恵器貯蔵具では瓶（1846）が7世紀代。1847・1848は広口壺で1848は口縁がやや内傾するのが特徴である。1849は平瓶。1851は提瓶か不整形なフラスコ瓶。1852はフラスコ瓶で頸部の他胴部にも凹線が廻る。1853は提瓶。焼き膨れが破裂しているが流通したもの。1854は甕・広口壺・横瓶の可能性があるが器種不明。胴部外面を平行タタキの後横方向指ナデする。

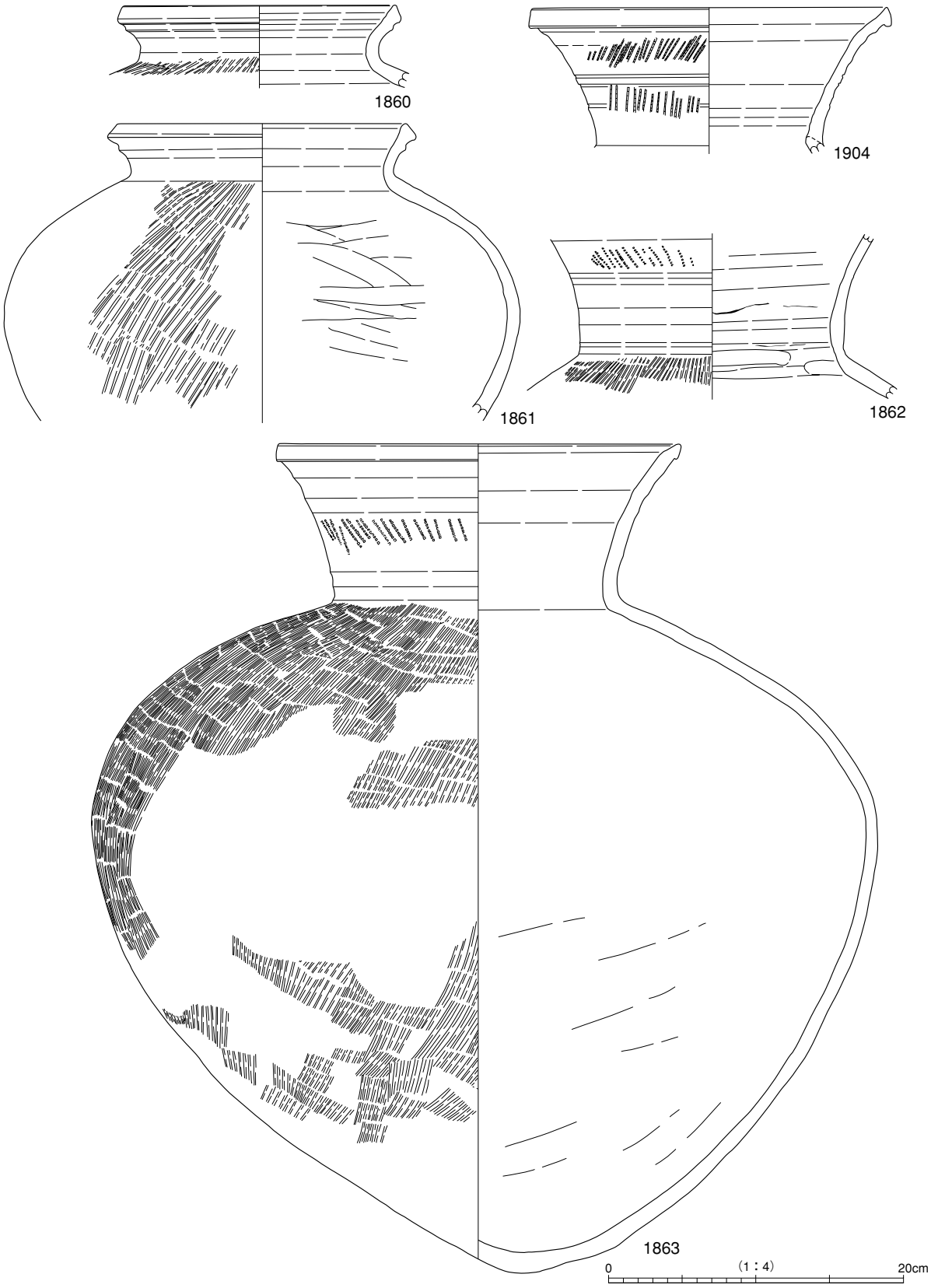
土錘（1856・1857）は全体的に太い筒形（全長5cm）で端部と面取りするなど丁寧な仕上げである。製塩土器脚部（1858・1859）もある。中型甕（1860・1861）は6世紀代からあまり形状が変化しないので時期特定しにくいがおよそ7世紀代を下限とする。大型甕は多数破片があるが、復元できたのは1863のみである。長い頸部には櫛歯状工具で連続刺突文を施す程度で凹線はない。時期は7世紀代である。底部近くにいくにしたがって軟質焼成の傾向があり、底部は明灰色を呈する。そのため底部は磨耗が進んでタタキ痕などは見当たらなくなる。内面は丁寧な指ナデで仕上げる。荻野繁春氏の計算によると容積



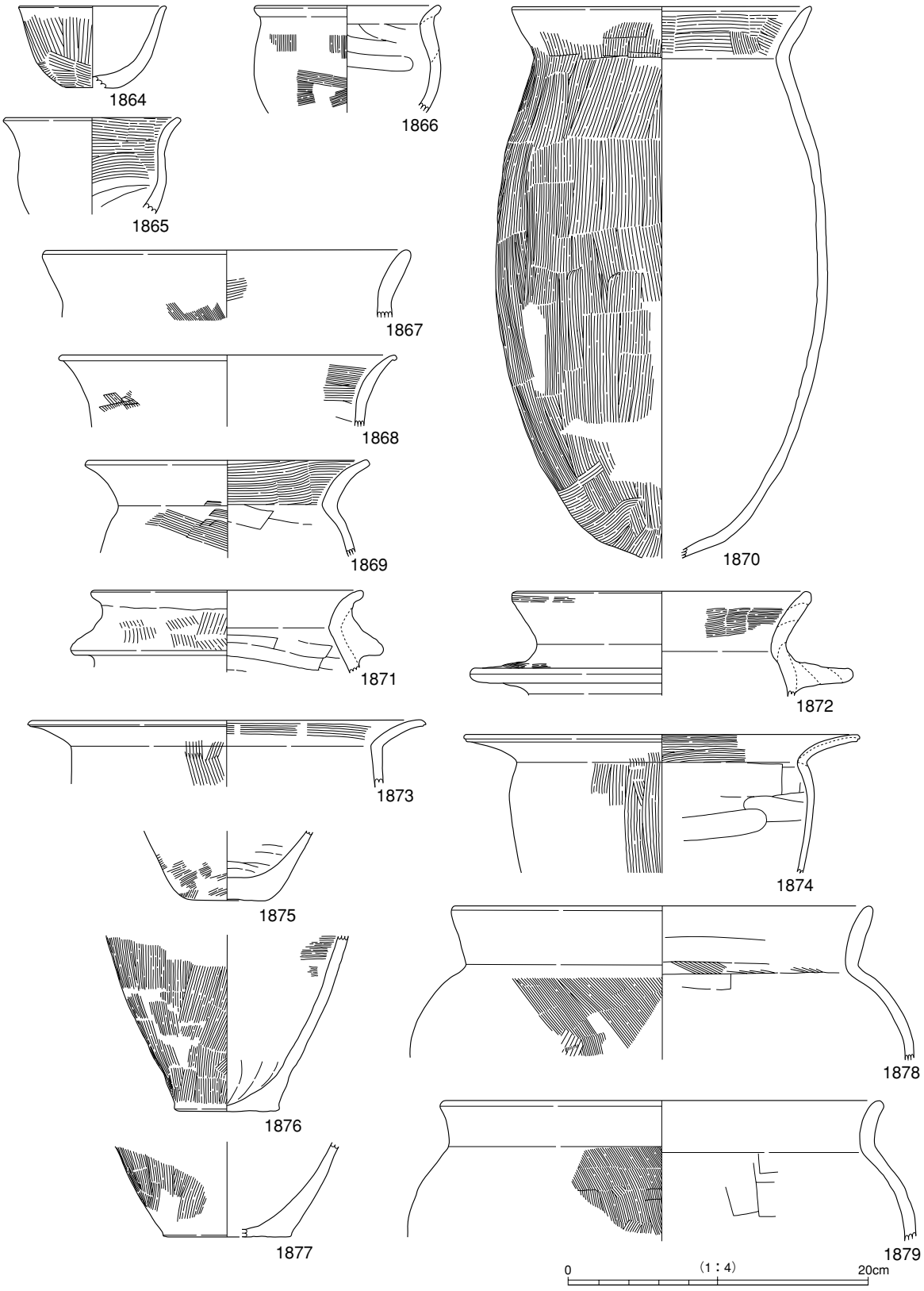
第191図　99ASX01出土土器実測図



第 192 図　98C2SX01 出土土器実測図（1）



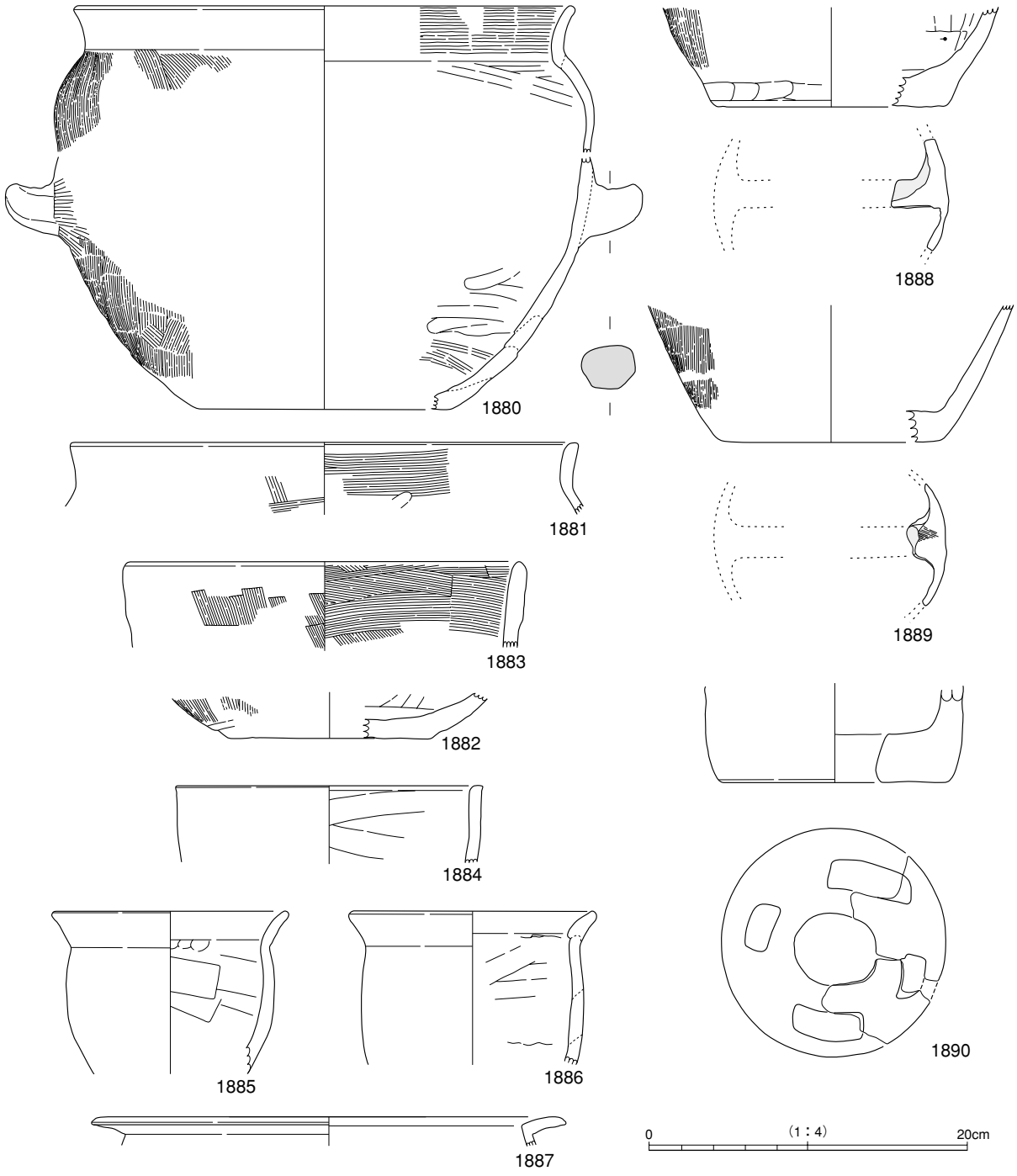
第 193 図　98C2SX01 出土土器実測図（2）



第 194 図　98C2SX01 出土土器実測図（3）

は推定459.56ℓになるという。ただし、歪みが大きいため実際は少し減るものとみられる。

土師器はハケ調整の一群と指ナデ調整の一群に大別される。前者は煮炊具が中心だが、椀（1864）もある。表面にきめの細かい粘土を塗布しているとみられ、砂粒の目立たない器面で比較的硬質焼成である。煮炊具では長胴甕・小型甕・鍋・甑があり、なかでも長胴甕の器形は多様である。まず丸底（1870）と平底（1875～1877）がある。平底の底面には木葉痕がある。また平底には立ち上がりに丸みのあるもの（1875）と手を加えてないもの（1876・1877）がある。次いで口縁部形状をみると外傾直線型（1867・



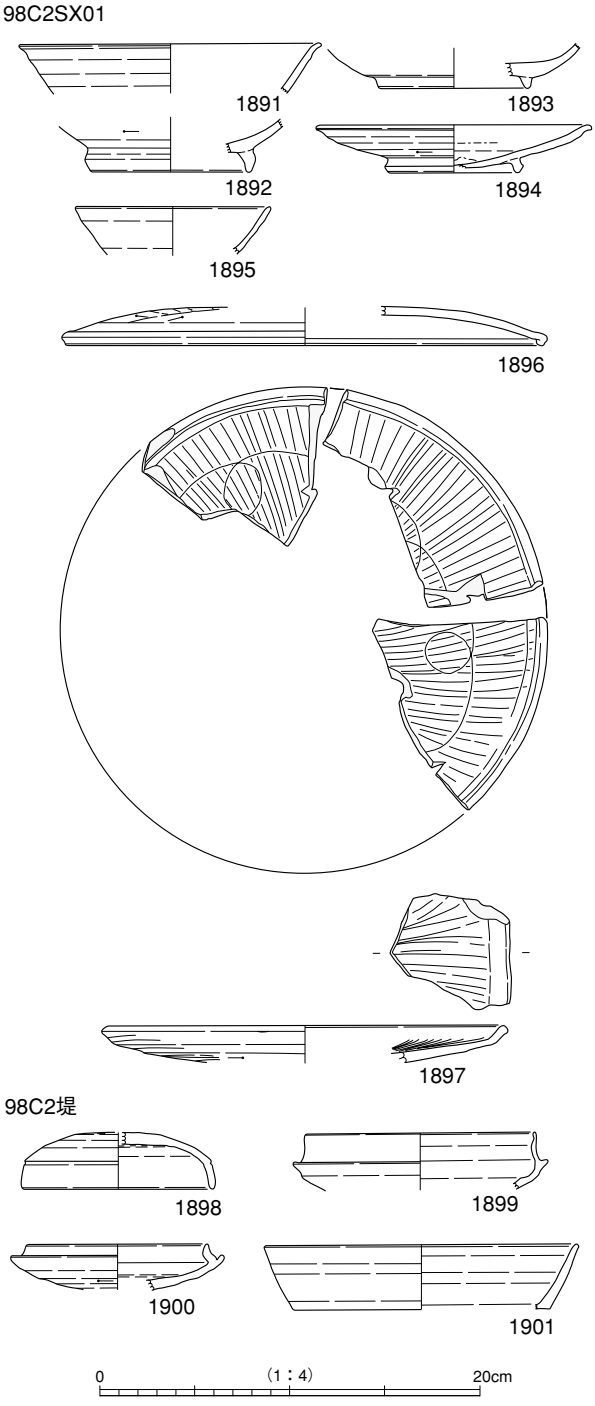
第195図　98C2SX01出土土器実測図（4）

1870）と緩い外反型（1868・1869）、強い外反型（1872・1873）がある。頸部に鍔が付く羽付甕は口縁が緩い外反型（1871）と外傾直線型（1872）があり焼成は似る。鍋（1878～1881）は口縁が直立気味となり、胴部内面は横方向の板ナデ。甑は直立する口縁（1883）に横1本もしくは十字に交差する桟をもつ平底の組み合わせ（1888・1889）だが、1890のような例もある。ただ1890は6世紀以前かもしれない。次いで指ナデ調整甕だが、99A・B区の竪穴建物では多数みられるが崖下では若干数である。器壁は厚い小型甕（1885・1886）は7世紀後半である。1887は三河型長胴甕で8世紀後半～9世紀初頭である。

暗文土師器は2個体分にとどまる。1896は胎土分析の結果在地産と判断される。放射状篦ミガキで器面と平滑に仕上げる。外面は手持ち篦ケズリ。時期はその器形から7世紀後葉～8世紀前葉であろう。

灰釉陶器も若干数出土した。1893は黒笹14号窯式の椀、それ以外は黒笹90号窯式である。

以上の他、戦国時代に構築された土塁のなかにも古代の遺物が混入する（1898～1901）。



第196図　98C2SX01出土土器実測図（5）

第３節　遺跡中央の谷地形

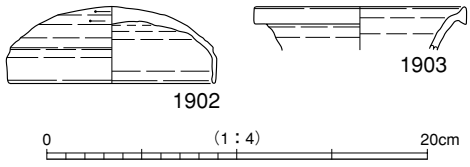
（１）地形

大屋敷地区と下糟目地区を隔てる谷地形は、矢作川に直交からやや上流向きに開くことが98C2区北方で実施したトレンチ調査で確認された。99K区側の肩が不明ではあるが概ね谷地形の開口部は幅約80mの規模と推定される。谷地形は開口部から南西方向へ向い、99C・99D区で南北両肩が確認され（99CSX01・99DSX01）、その間の直線距離は約105mである。そしてその付近で谷地形は枝分かれする。本体となるのはかつて宝蔵川の流路となっていた99C区から99L区を通って現在の糟目春日神社へ至る谷である。一方分岐した谷はさらに２つに枝分かれして99E区で検出されている。すなわち99E谷Ａと99E谷Ｂである。

確認された谷地形はいずれの調査区でも可能な限り発掘をおこなったが、黒褐色粘質土層を中心とする堆積層のかなり下層においても中世～戦国時代の遺物が出土した。したがって古墳時代から古代にかけての堆積はさらに下方になると考えられる。

（２）土層と出土遺物

99CSX01　段丘の傾斜面まで発掘したが、確認面レベルから40cm下までは中世以降の遺物が混入していた。下層では遺物そのものがほとんどない状況で、古墳時代同様に古代の遺物の出土は少なかった。

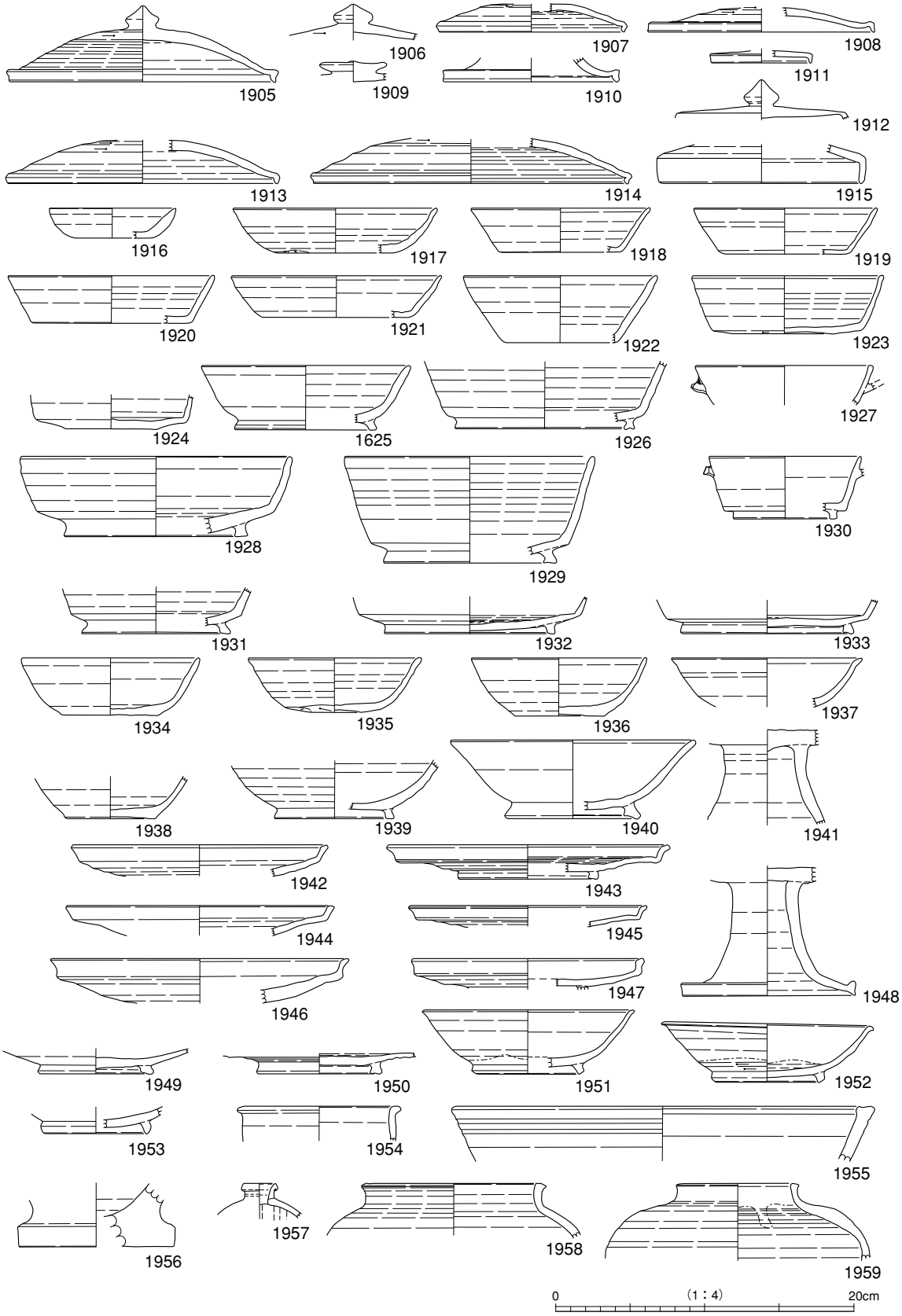


第197図　99CSX01出土遺物実測図

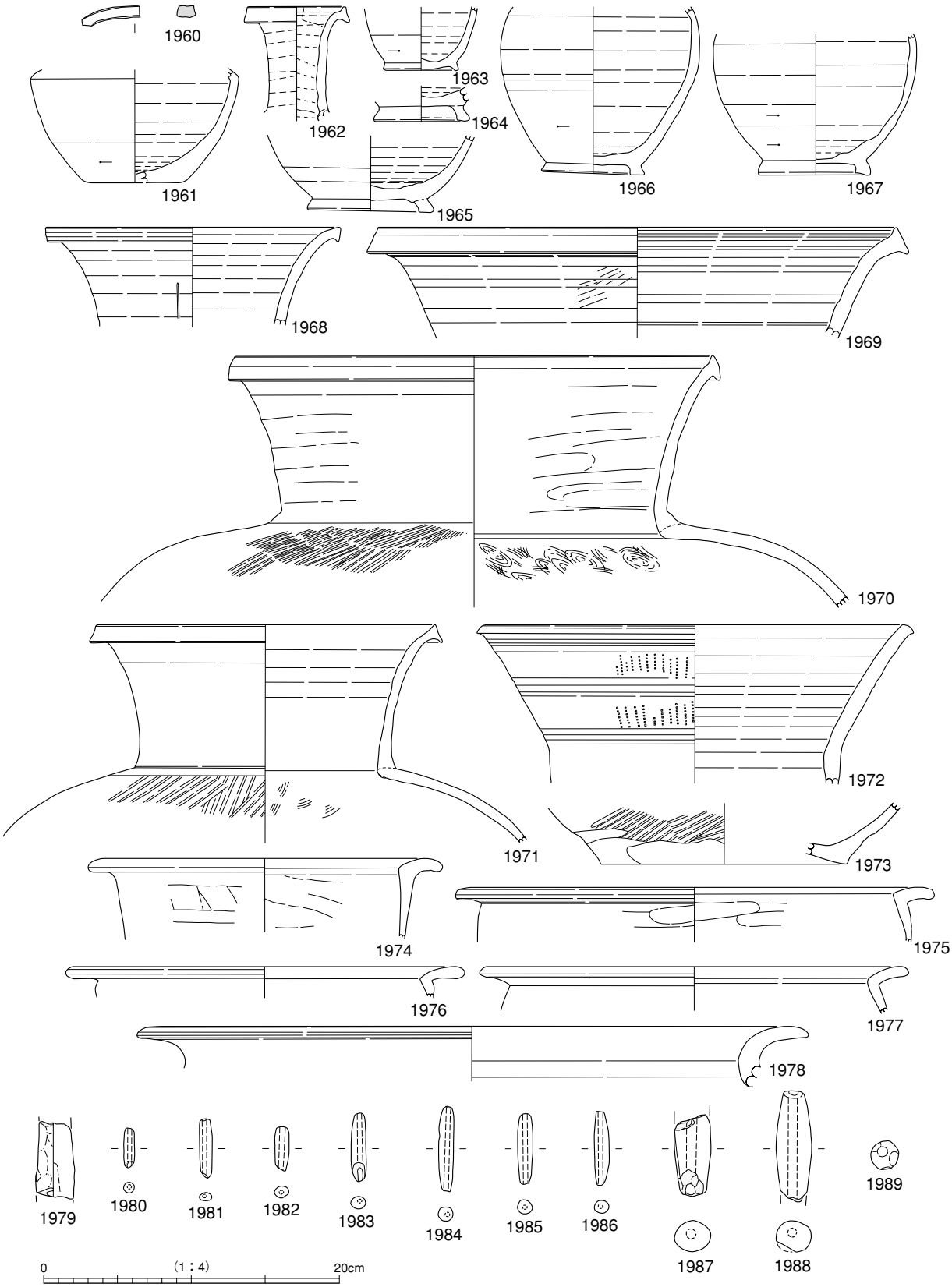
99DSX01　段丘の傾斜面を検出しながら堆積層を発掘したが、湧水が激しく確認面から約70cm掘り下げたところ（99DSX01第７層）で中止した。この段階でもなお中世以降の遺物が混入しており、古代以前の堆積層はさらに下層となることが判明した。しかしながら上層といえども古代以前特に奈良時代後半～平安時代前期の須恵器・土師器は大量に含まれ、総重量で約58kgあった。

出土土器は須恵器・土師器で占め、灰釉陶器はごく少数である。須恵器ではやや供膳具（蓋・杯・椀・盤）の割合が高いと思われる。須恵器蓋は鳴海32号窯式～井ヶ谷78号窯式で中心は折戸10号窯式と考えられる。1911・1912・1915は短頸壺の蓋。杯は概ね蓋と同じ時期である。1927・1930は把手付杯で黒色がかった色調で井ヶ谷78号窯式か。水入遺跡ではここでのみ出土した。盤は有台・無台の判別がつかないが相当数あり、高盤（1941・1948）もある。これら供膳具は焼成が堅致で色調は暗灰色～黒褐色、一部明赤褐色である。1953・1955は鉢。1957は小型の横瓶である。1958・1959は短頸壺。水瓶は大小のサイズがあるようである（1962～1967）。甕は全形が復元できたものはない。1970は鳴海32号窯式、1972は古く７世紀代。1968・1971が折戸10号窯式か。1973は平底で９世紀代。

土師器甕も大量にあり総重量約25kgであるが、ほとんどが三河型甕で北村2001分類のＢ類に相当する。焦げや煤が付着しており使用後の廃棄であることがわかる。1978は中世で常滑産の甕であろう。製塩土器は図示した１点（1979）のみである。知多式２～３類で古墳時代となる。土錘は一定量あり、径



第 198 図　99DSX01 出土遺物実測図（1）

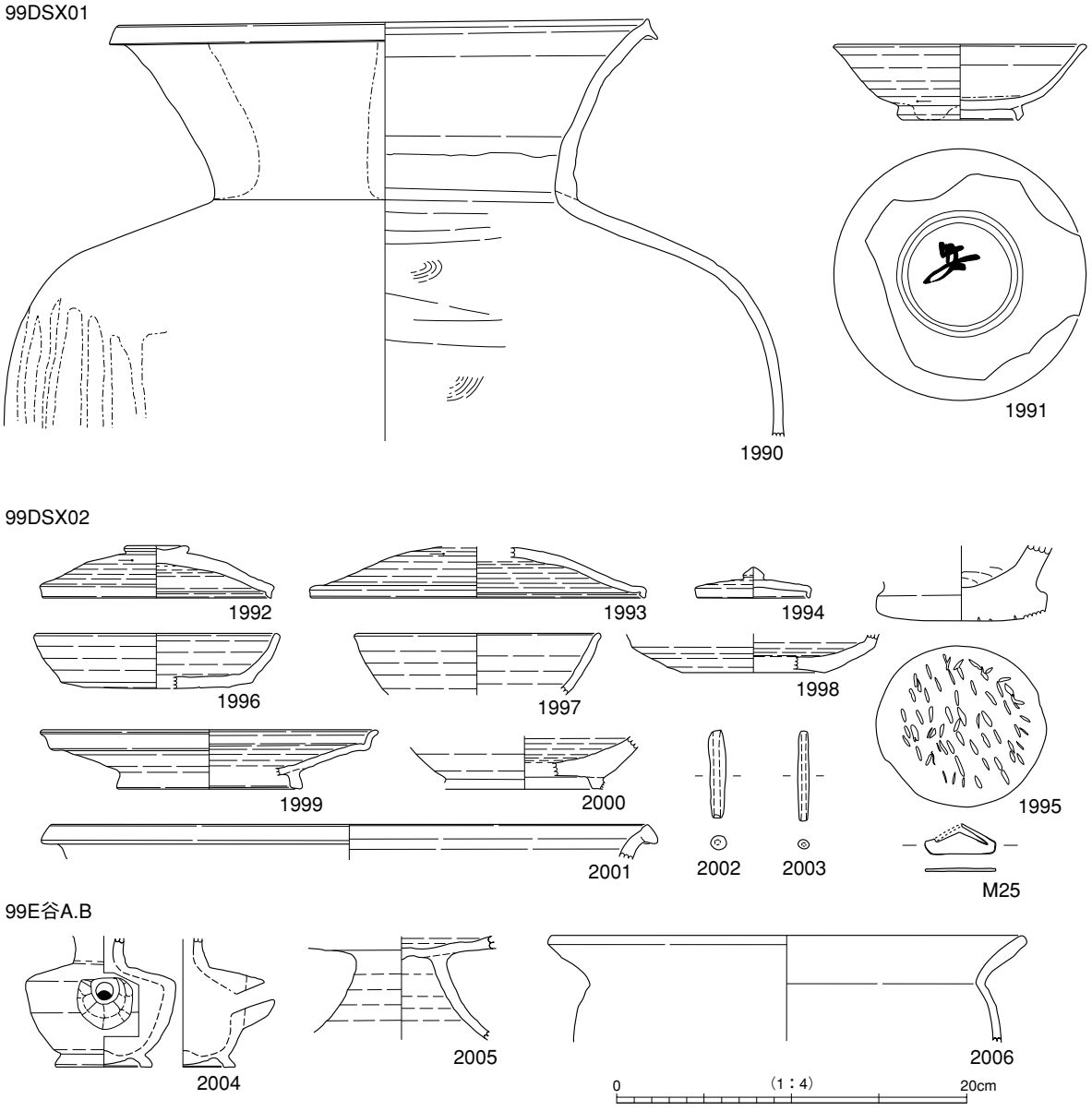


第 199 図　99DSX01 出土遺物実測図（2）

の細いタイプ（1980～1986）と全体に太く端部の面取りがあるもの（1987・1988）に分かれる。須恵器や土師器の時期に合うのは前者のタイプであろう。1989は土製玉。灰釉陶器はごく少数である。1991は三日月高台で黒笹90号窯式であろう。底部外面に「安」の墨書がある。ほぼ同じ時期の98B2SD01・SX01と比べて須恵器に墨書がない点が注目される。

99DSX02　99DSX01と同様の遺物構成である。1994は小型短頸壺の蓋。1957とともに小物・ミニチュア的なものが増えるのもこの時期の特徴である。1995はこね鉢で底面外面に焼成前の刺突があり、内面はよく使い込まれている。土錘は約5cmあって水入遺跡では大きい部類になるが最大径が細く、胎土が精良であることから、8世紀以降のものと考える。

99E谷A・B　分岐したこれら谷では遺物量そのものが極端に減少する。2004は台が付く甑で8世紀前葉～中葉。2005はやや高めの有台盤。2006は土師器鍋で指ナデと薄い器壁から8世紀前葉段階とみられる。



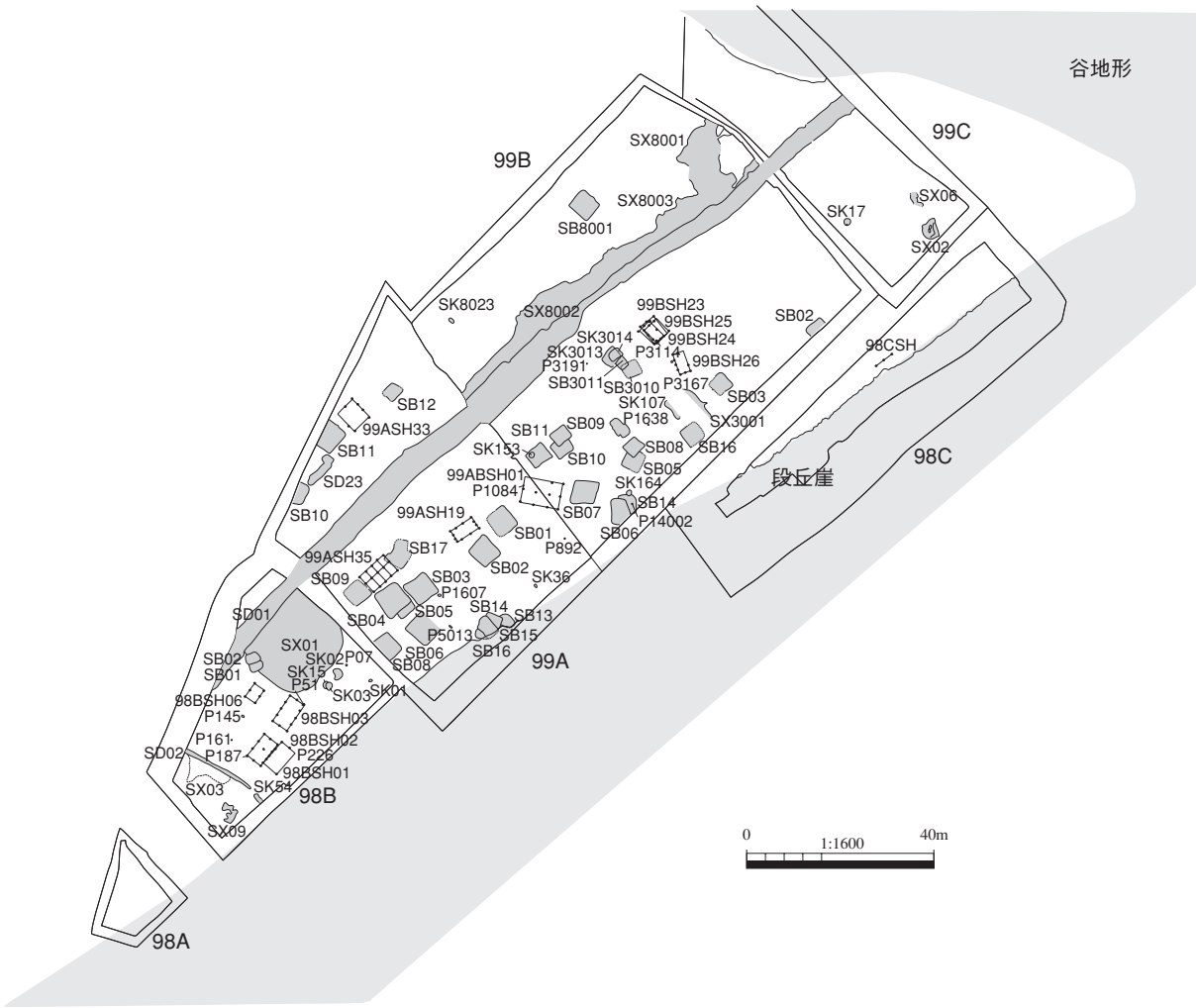
第200図　99DSX01・02出土土器実測図

第 4 節　竪穴建物

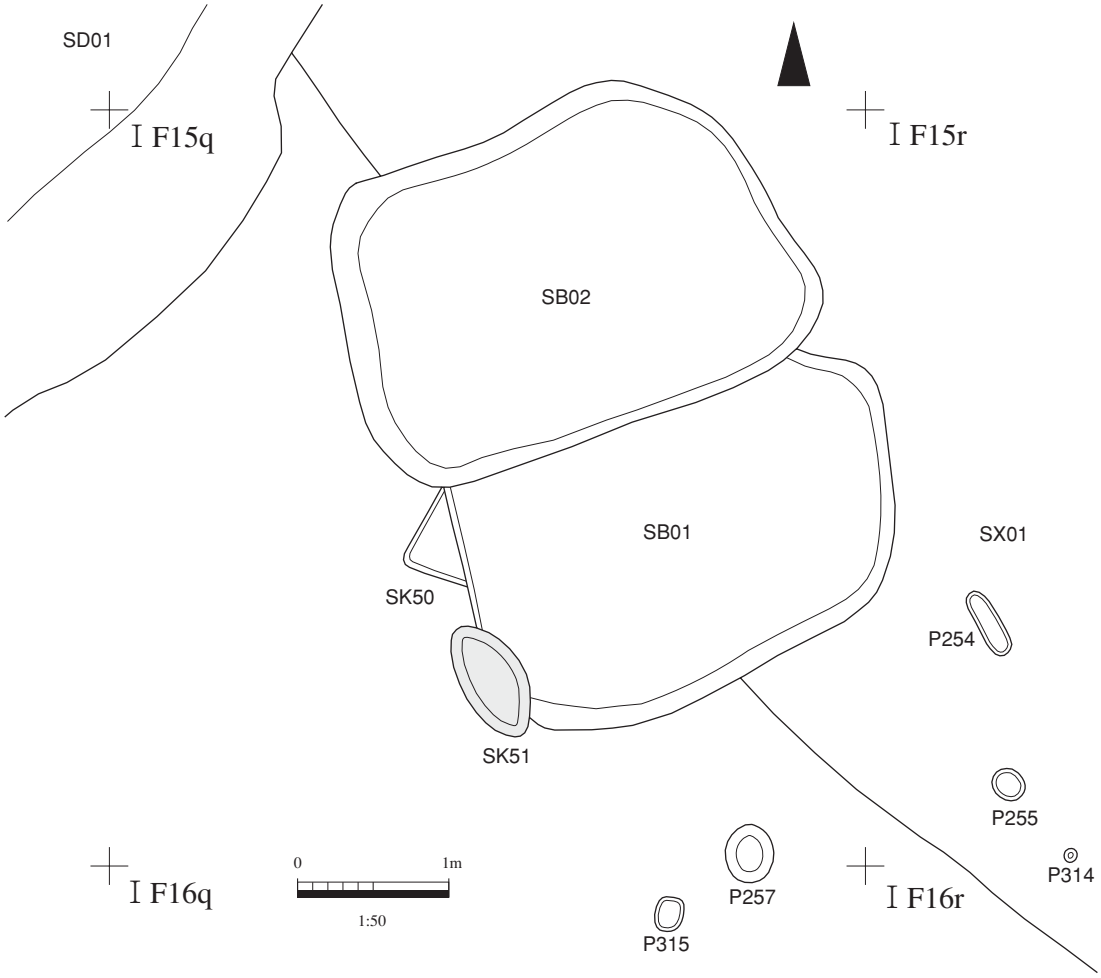
（1）概観

水入遺跡では、調査時に検出しSB番号を付した竪穴建物の総数は322棟であった。このうち精査・掘削で古墳時代や鎌倉時代以降と判ぜられたものや、遺構認定そのものが困難な事例を除外すると224棟になる。しかし各説で述べるように同一地点での重複が土層によって判別できた事例が実に多く、結果的には240棟以上の竪穴建物が存在したと推定される。

竪穴建物の分布は大屋敷地区と下糟目地区に大別すると、大屋敷地区では7世紀～8世紀前葉を主体とし、下糟目地区では8世紀前葉～9世紀前葉を主体としている。特に下糟目地区では膨大な数に上る。そこで下糟目地区に入り込む小さな谷地形で区分し、99D・98D区などがある舌状台地を下糟目A地区とし、99K区がある矢作川寄りの台地を下糟目B地区として、次項で解説する。



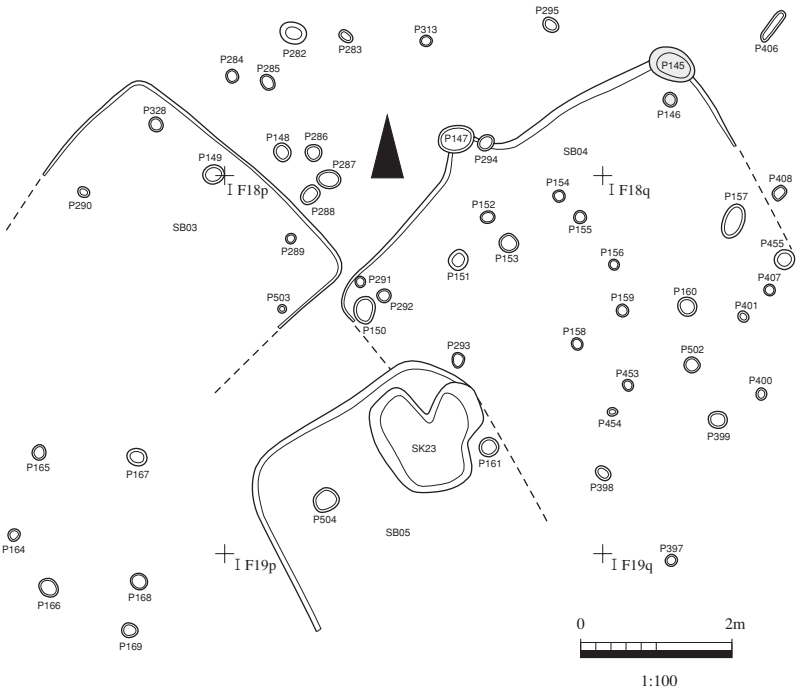
第 201 図　大屋敷地区古代竪穴建物・掘立柱建物配置図



第 202 図　98B2SB01・02 平面図

（２）遺構各説（大屋敷地区）

98B2SB01・02　98B2SD01 の脇に位置し、98B2SX01 の上端に一部がかかる。98B2SX01 の青灰色覆土層の下より検出された。98B2SB02 とは重複関係にあり、こちらが先である。長軸 2.55m、短軸 1.68m 以上、確認面からの深さ 32cm の楕円形に近い隅丸長方形である。地山を若干掘り込んだだけの浅い皿状である。遺物は須恵器・土師器の小片が覆土中からわずかにあった。98B2SB02 は SB01 の北側にて重複しこちらが後になる。長軸 2.95m、短軸 2.1m、深さ 6cm で、形状は

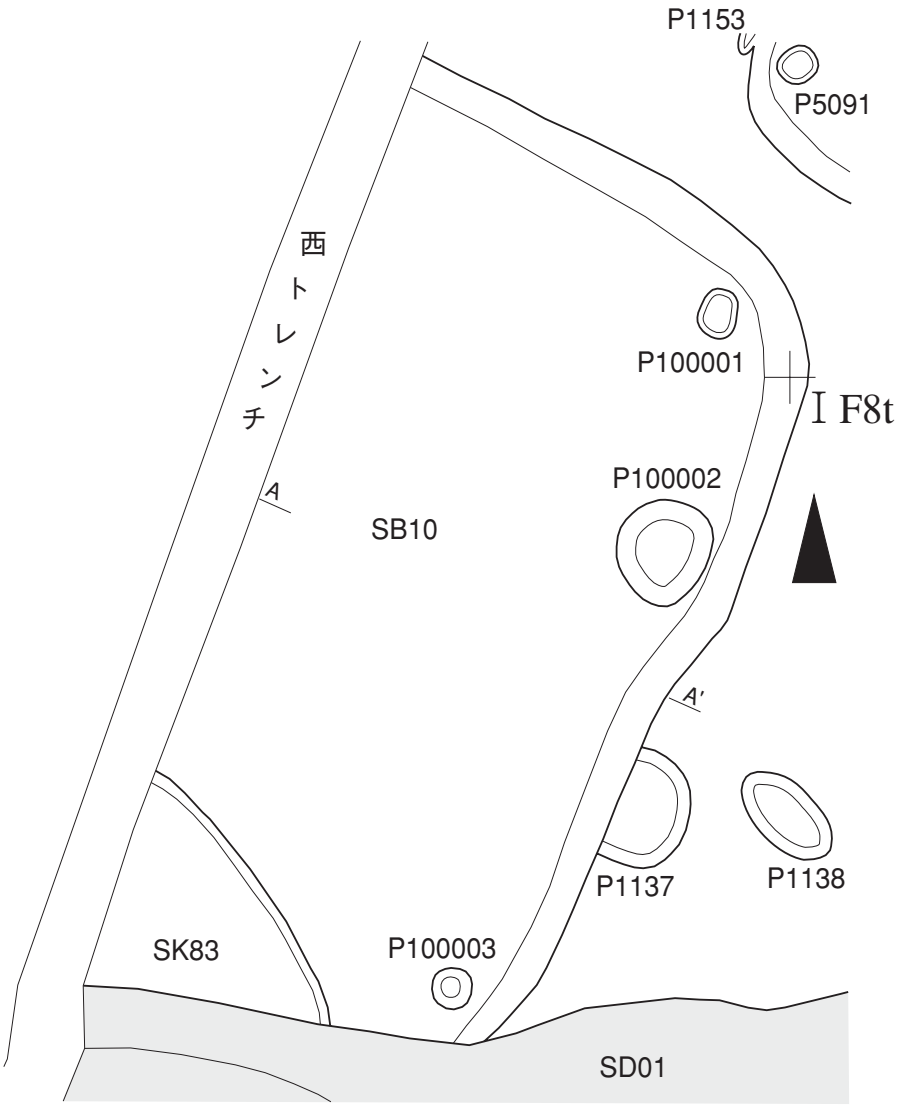


第 203 図　98B2SB03 ～ 05 平面図

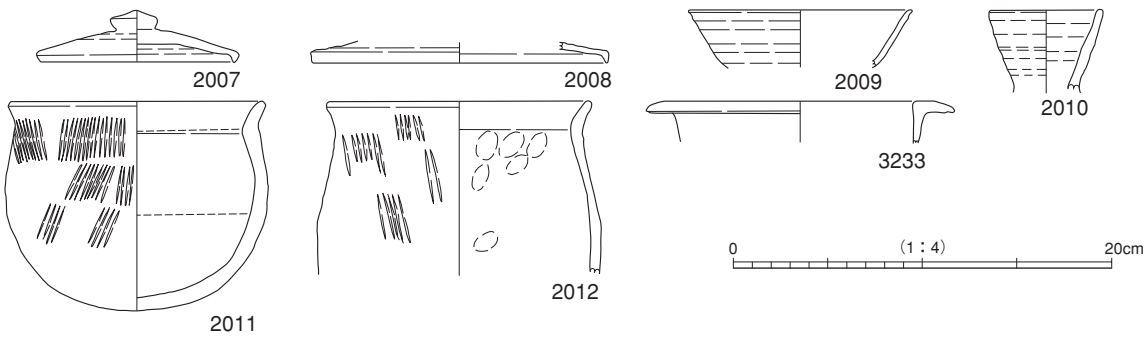
98B2SB01 と変わらない。建て替えたものと考えられる。遺物は確認面から古代の土器小片が多数出土したが SX01 に関わるものとみられる。

98B2SB03〜05　SB01･02 の南側で竪穴建物の可能性があるかすかな痕跡があった。覆土は全くなく遺物の出土もなかった。

99ASB01　調査区中央やや 99B 区寄りに位置する。戦国時代の溝 99ASD03 によって南西半分が壊され、その他溝･土坑が上に重なる。他の竪穴建物との重なりはない。北東辺はグリッド北から西へ 39° 振れる。平面形は隅丸正方形と考えられ、北東辺 6.3m、深さ 20cm である。東北辺中央部以外は周溝があり、その途切れるところの床面にて円形（直径約40cm）の被熱



1　10YR3/1黒褐色シルト。地山土ほとんどなし。円礫、炭化物若干含む。



第 204 図　99ASB01 平面・断面図と出土遺物実測図

による赤色変化が認められた。竈の痕跡と考えられるが、造り付け竈特有の袖や煙道の痕跡が床面や壁面に全くみられないことから、移動式土製竈が据えられていた可能性が高い。床面ではいくつかのピットが確認されたが、そのうち柱穴の位置として好適なのが99ASK1038（直径34cm、深さ15cm）である。覆土層は単一層（1層）で埋め戻しによるものとみられ、周溝に埋め戻し以前の流れ込みがわずかに認められる。

遺物は1層から土器が出土した。8世紀後半の土師器甕（3233）もわずかに混じるが、他は7世紀後半を中心とする時期と考えられる。須恵器蓋（2007）は、床面より出土し、当該建物の廃絶時期に直接関わる遺物である。2011はハケ調整土師器小型甕で厚手ながら丸底である。

99ASB02　99ASB01から南西2mに位置する。中世土坑墓などが上に重なる。建物の向きは99ASB01とさほど変わらず、南西辺はグリッド北から西へ47°振れる。平面形は隅丸正方形であるが、後世の削平が著しく、周溝によって平面形を導き出した。北西辺は4.9mである。周溝は北・南隅で確認された。また北西辺ほぼ中央にて周溝が途切れ、ここで円形（直径約50cm）の赤変箇所が認められたので、移動式土製竈が据えられた可能性が高い。柱穴は4つとなろう。遺物は土師器甑または土製竈の把手があり、およそ7世紀代と考えられる。

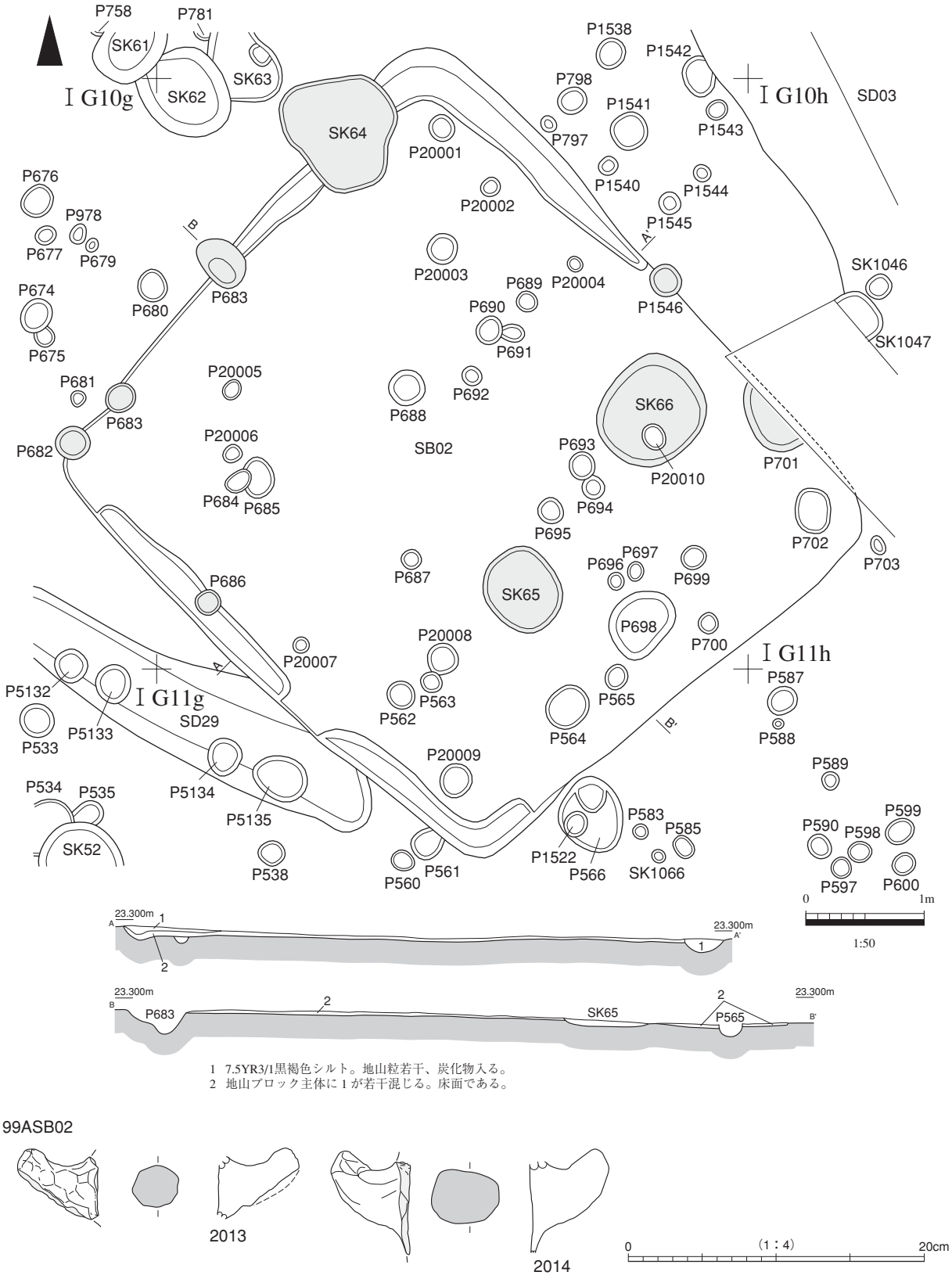
99ASB03　99ASB02から南西10mに位置する。中世以降の溝・土坑が上に重なる。建物の向きは、南西辺でみるとグリッド北から西へ40°振れる。平面形は隅丸正方形で南西辺5.5mである。99ASB02同様、覆土層がほとんど残っておらず、確認面からの深さ10cmである。周溝はほぼ全周する。ただし、北西辺中央部の竈設置位置では、周溝を一旦埋めた上に竈（造り付けか否かは不明）を設置したものと思われる。覆土層は単一層（1層）で、周溝下半は地山粒が多く締まっており、壁を立てるために埋めたのであろうか。遺物はわずかだが、2015は須恵器蓋で岩崎17号窯式であろう。4423は製塩土器の杯部である。

99ASB04・SB05　99ASB03の南西側に隣接する。中世以降の溝・土坑が上に重なる。規模の小さな竪穴建物(99ASB05)の上に99ASB04が重なる。99ASB04の向きは、南西辺でみるとグリッド北から西へ36°振れる。平面形は隅丸正方形で南西辺6.25mである。覆土層はほとんど残っておらず、確認面からの深さ2cmである。周溝は西隅を中心に一部みられない箇所がある。竈の痕跡は認められなかったが、北隅に貯蔵穴（99ASK40003・99AP40013）がある。長軸90cm、深さ12cmの楕円形である。柱穴は4つが考えられる。覆土層（1層）はほぼ単一層と考えられる。

99ASB05は向きが99ASB04とほぼ同じである。周溝が巡り、床面までの深さは99ASB04と変わらない。平面形は隅丸正方形と推定され、南東辺3.9mである。

遺物は土器・鉄製品が出土している。須恵器はかえりのある蓋（2017）や広口壺（2025）が岩崎17号窯式期で、杯（2018・2019）が岩崎41号窯式と考えられる。鉄製品（M1）は断面が長方形の棒状のもの（残存長8.2cm）が周溝より出土した。99ASB05からは須恵器杯身（2028）が出土した。

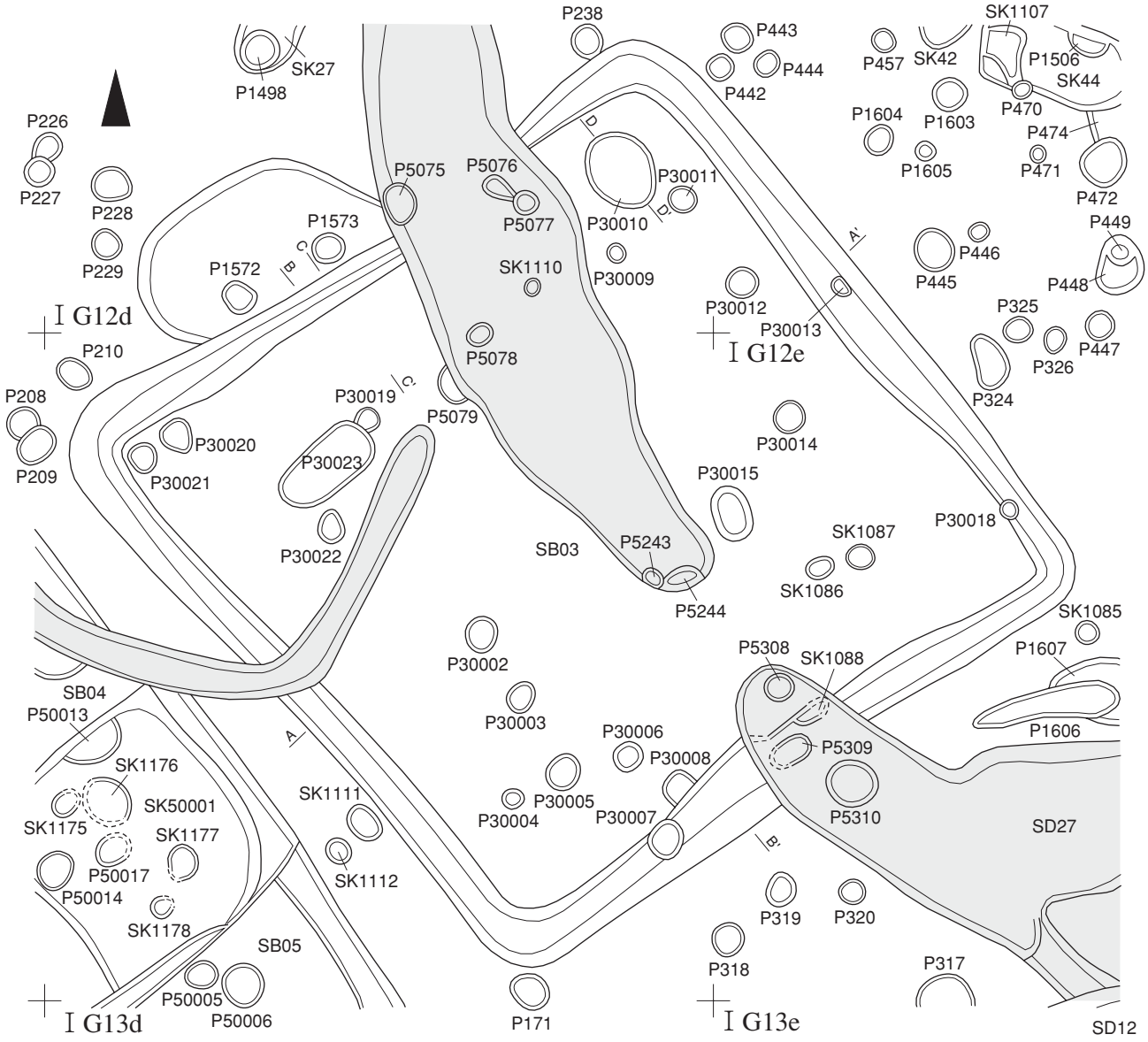
99ASB06　99ASB05の南東側に隣接して位置する。中世以降の溝（99ASD12・20）・中世竪穴建物（99ASB07）が上に重なる。ただしSB07との重複関係を遺構で明瞭に確認することができなかった。建物の向きは北西辺でみるとグリッド北から東へ41°振れ、周辺の竪穴建物と変わらない。平面形は隅丸

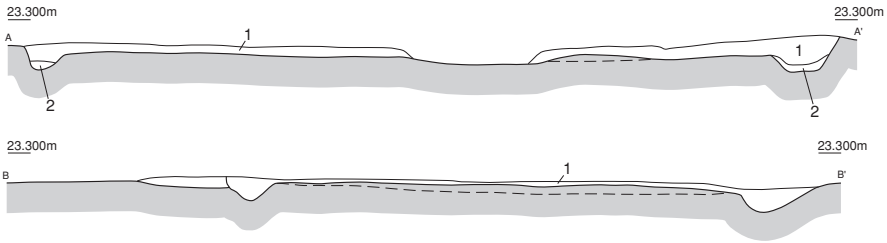


1 7.5YR3/1黒褐色シルト。地山粒若干、炭化物入る。
2 地山ブロック主体に 1 が若干混じる。床面である。

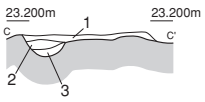
99ASB02

第 205 図　99ASB02 平面・断面図と出土遺物実測図

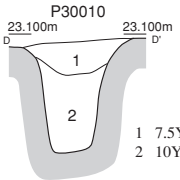




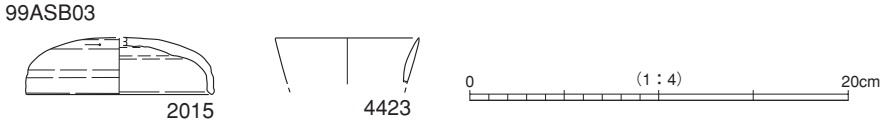
1 7.5YR3/1黒褐色シルト。炭化物入る。地山土ほとんどなし。
2 7.5YR2/1黒色シルト。地山粒若干入る。



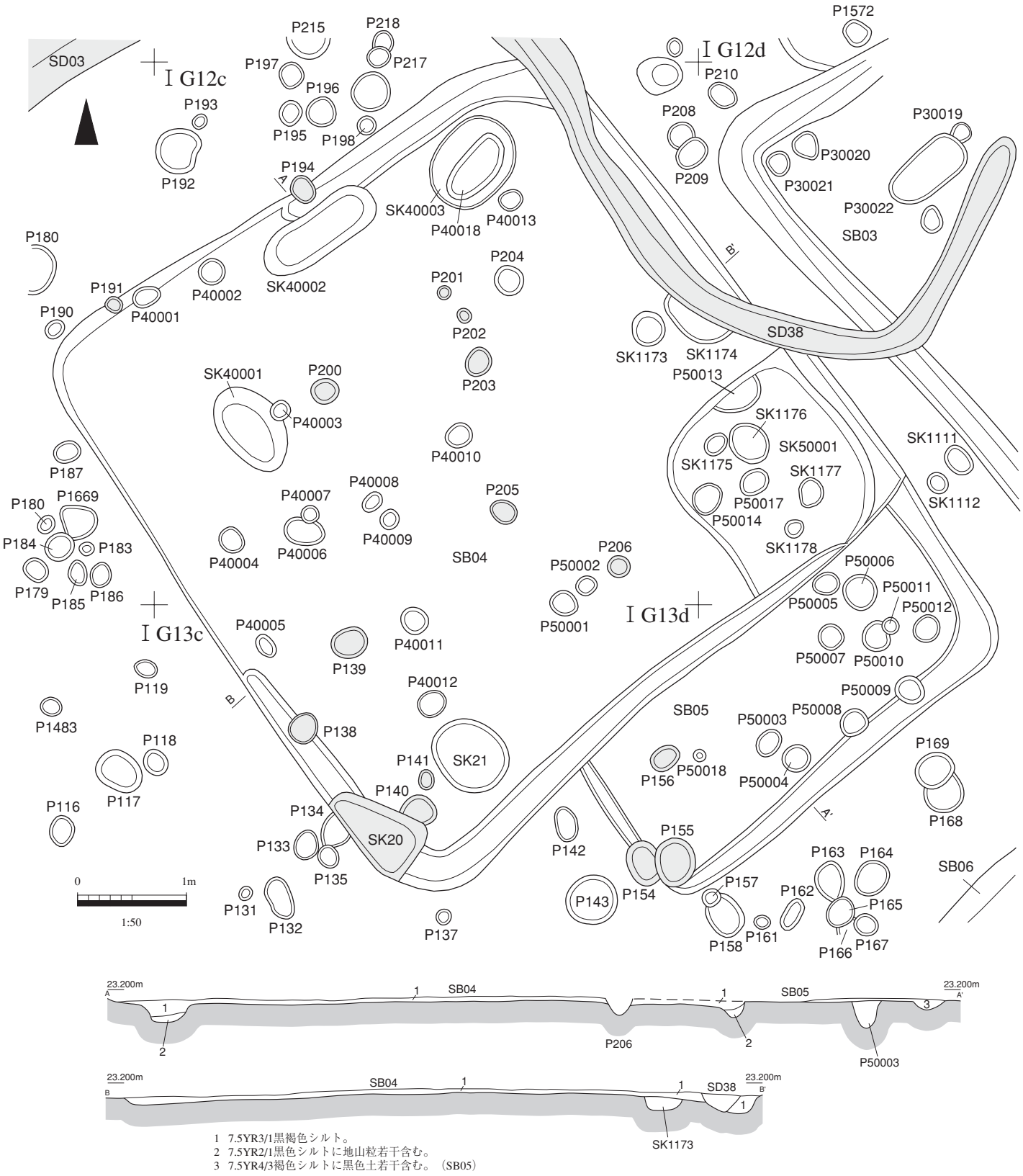
1 7.5YR3/1黒褐色シルト。炭化物入る。地山粒ほとんどなし。焼土粒を多く含む。
2 1に地山土多くが混合。周溝を故意に埋めたようである。焼土は含まない。
3 7.5YR2/1黒色シルト。地山粒若干。焼土なし。



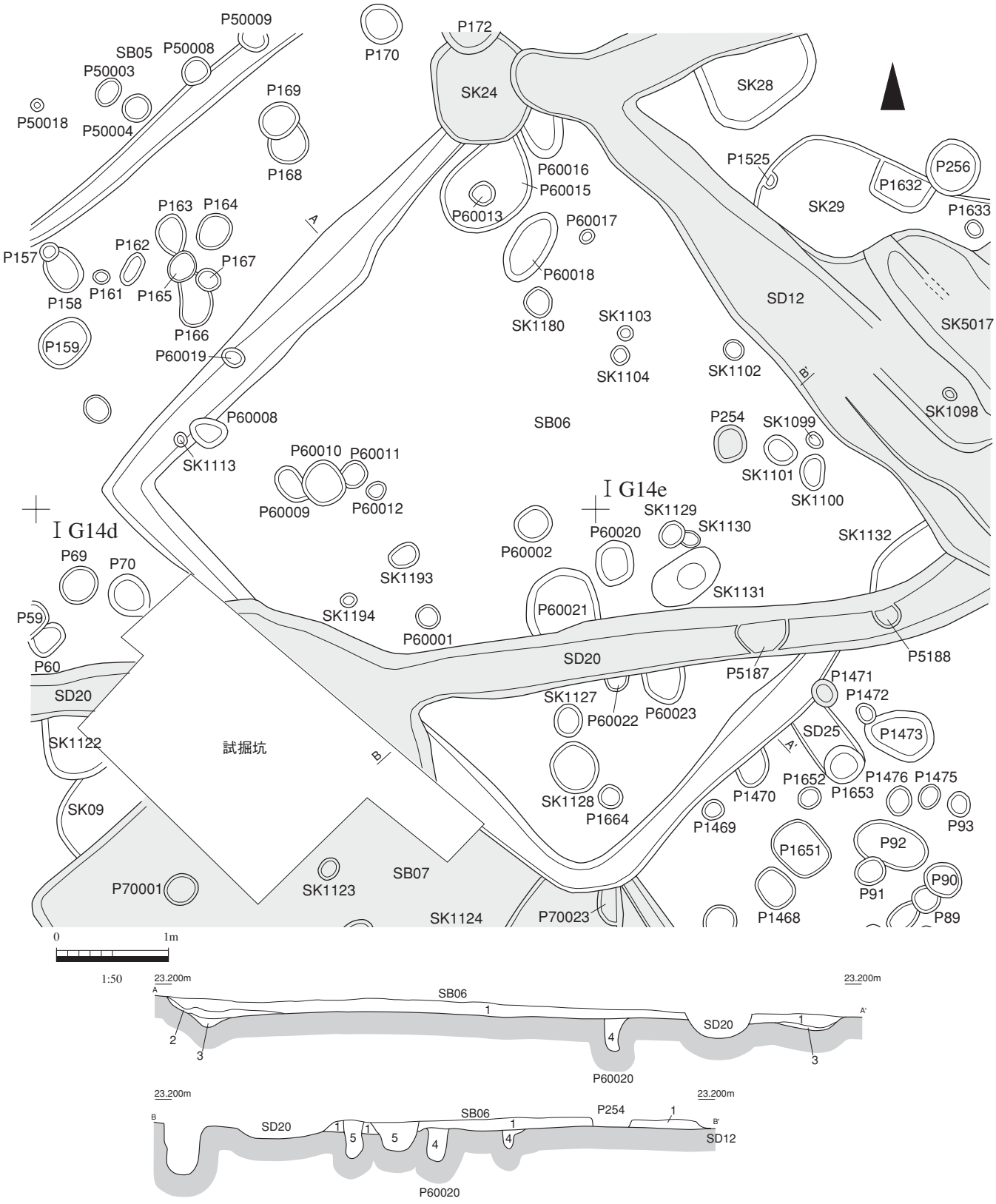
1 7.5YR3/2黒褐色シルトに地山粒混入
2 10YR3/1黒褐色シルトに地山粒若干



第 206 図　99ASB03 平面・断面図と出土遺物実測図



第 207 図　99ASB04・05 平面・断面図

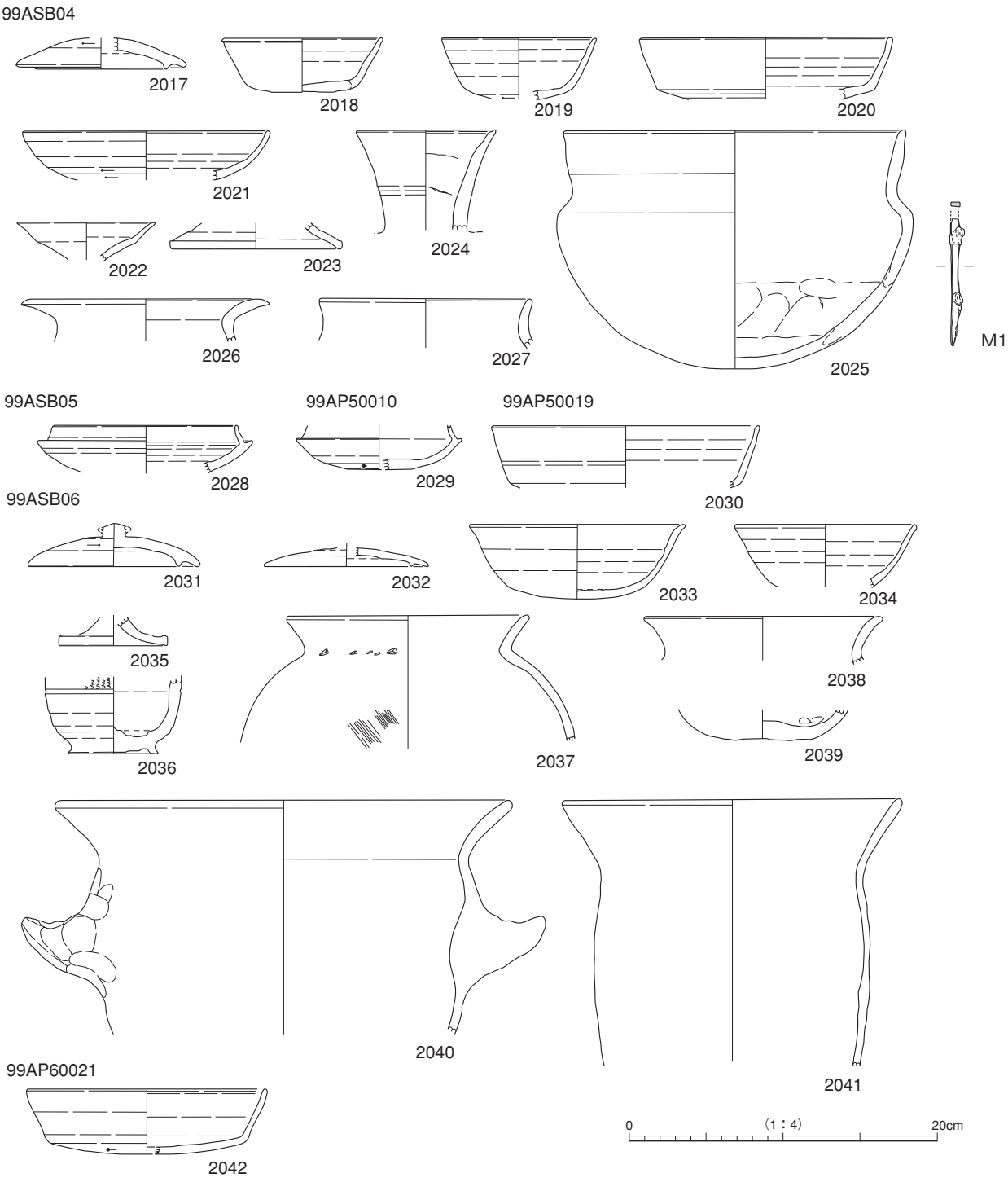


1 7.5YR3/1黒褐色シルト。炭化物若干。礫なし。西壁付近に若干焼土粒。
2 7.5YR2/1黒色シルト。炭化物入る。
3 7.5YR2/1黒色シルト。地山粒（2～3cm）若干入る。炭化物・焼土なし。
4 7.5YR2/1黒色シルト。炭化物粒、地山粒～ブロック（2～5cm）入る。ブロックは下方に多い傾向。
5 7.5YR3/1黒褐色シルト。炭化物若干。地山粒は下方に若干あり。

第 208 図　99ASB06 平面・断面図

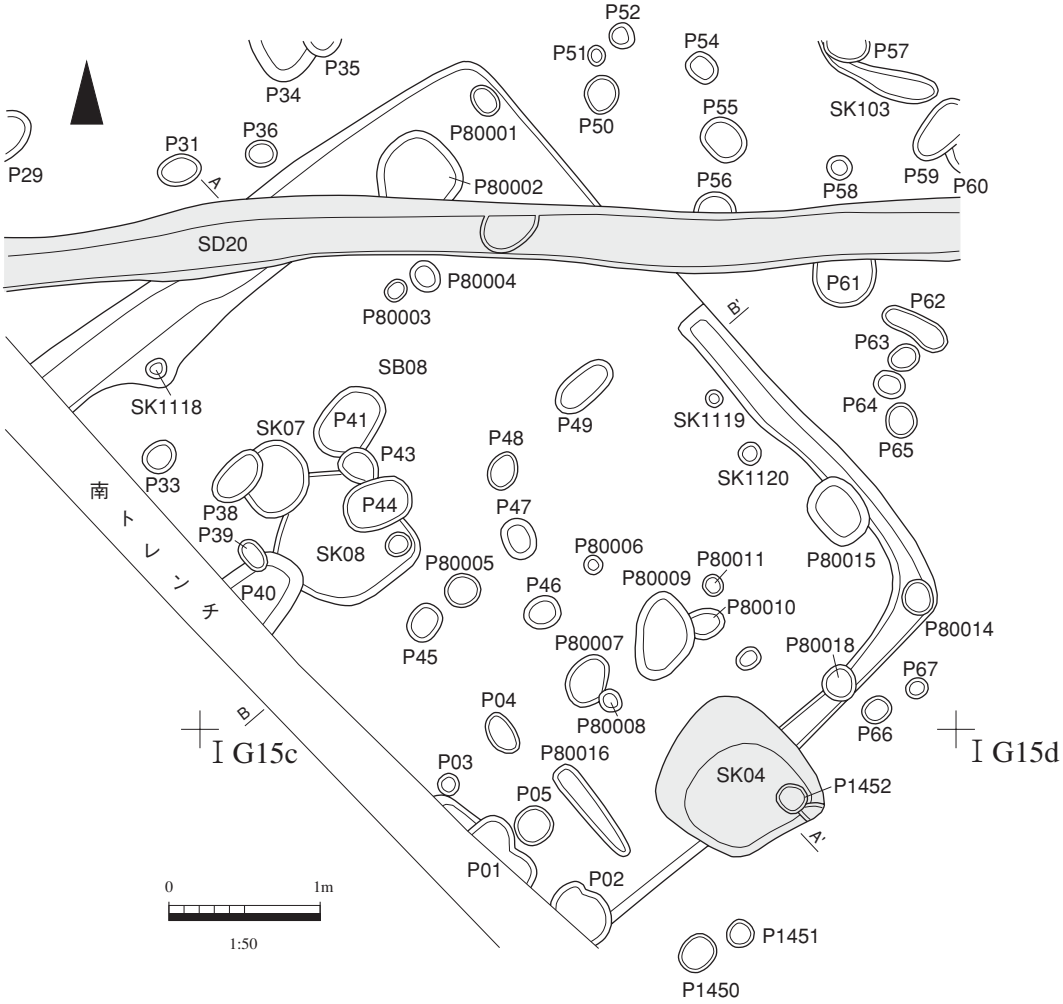
正方形で、北西辺 5.3m 以上、深さ 13cm である。周溝は不明の北東辺以外は全て全周するとみられる。竈については不明であるが、北隅に長軸 90cm 深さ 56cm の楕円形の貯蔵穴（99AP60015）がある。柱穴は 4 つとみられるが P60010 と P60018 以外は特定できない。覆土層（1 層）は単一層である。

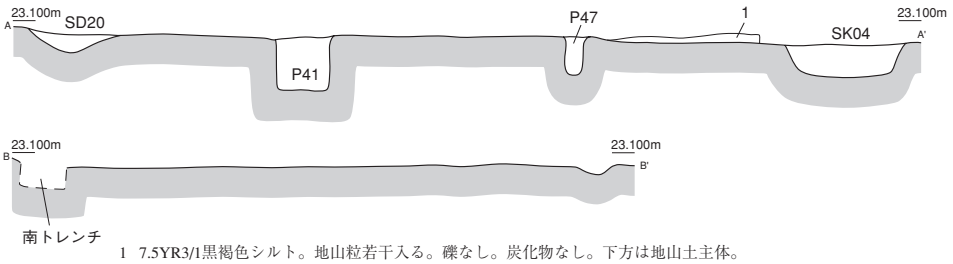
遺物は土器がある。かえりのある蓋（2031・2032）、瓶（2036）がある。これら須恵器は岩崎 17 号窯式～同 41 号窯式である。土師器鍋（2040）や頸部のくびれが小さい指ナデ調整長胴甕（2041）もこれに併行するとみられる。2037 は古墳時代中期の土師器甕。



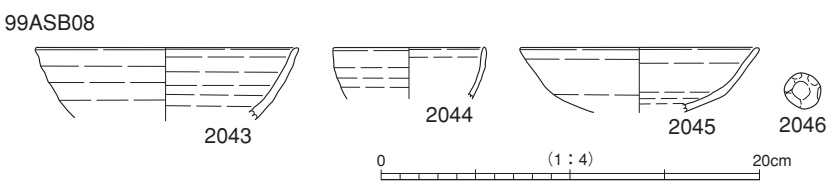
第 209 図　99ASB04・05・06 出土遺物実測図

99ASB08　99ASB04の南3mに位置する。調査区南壁で途切れるが、平面形は隅丸正方形であろう。北東辺長4.88mである。建物の向きは北東辺でみるとグリッド北から西へ42°振れる。削平によって覆土層は全くといっていいほど残っていない。竈の痕跡は認められなかったが、北隅に貯蔵穴とみられる円形（直径55cm、深さ30cm）の土坑（99AP80002）がある。柱穴は4つと推測されるが特定できていない。遺物は当該遺構に属するかどうか根拠に乏しいが須恵器小片の出土をみた。2045は7世紀代の高杯





1　7.5YR3/1黒褐色シルト。地山粒若干入る。礫なし。炭化物なし。下方は地山土主体。



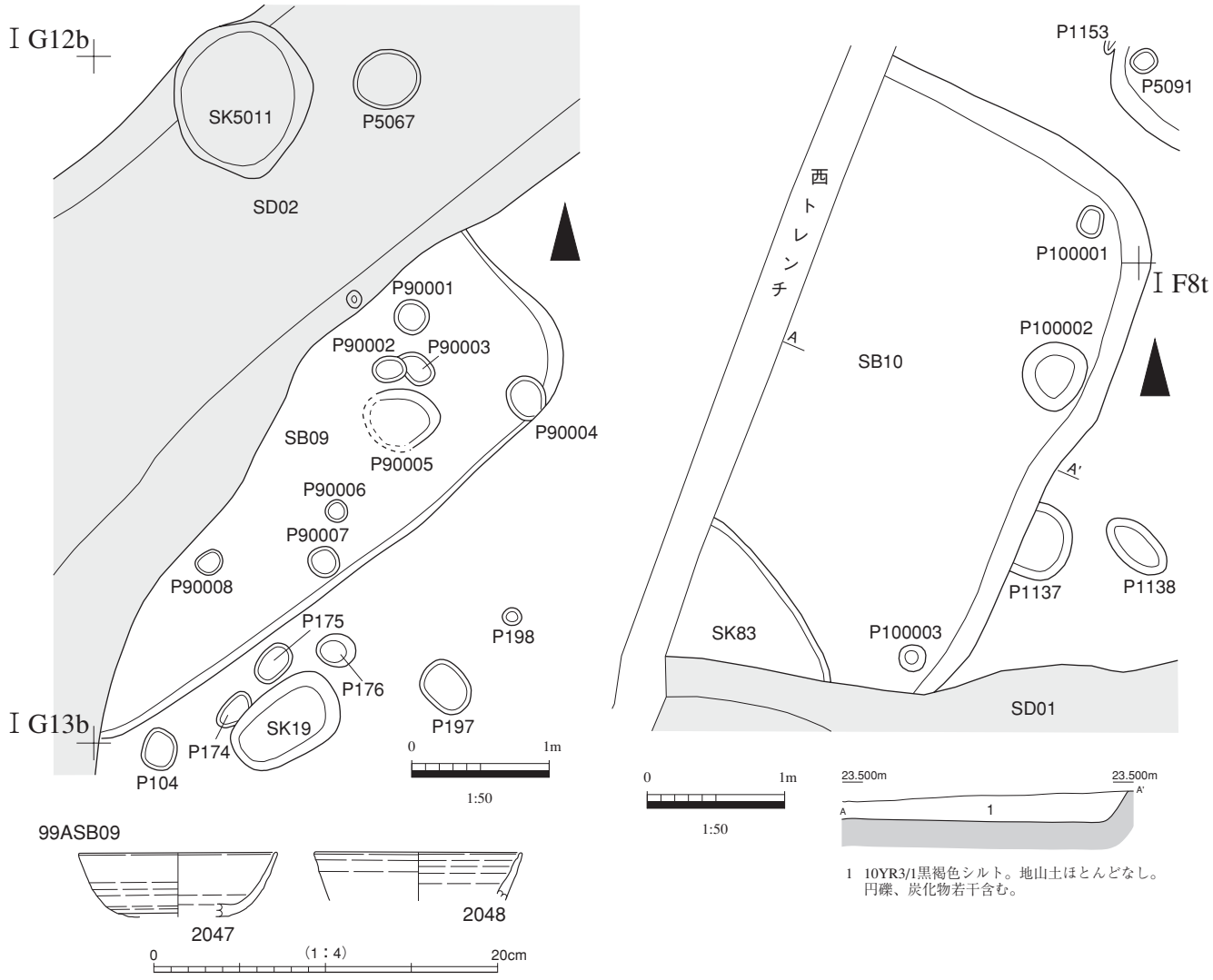
第210図　99ASB08平面・断面図と出土遺物実測図

であろう。2046は土師質の土玉で三河型土師器甕に似た胎土である。

99ASB09　99ASB04の西1mに位置する。戦国時代の区画溝99ASD02に大部分が壊される。南東辺長4.4m以上の規模とみられ、この辺はグリッド北から東へ50°振れる。周辺の竪穴建物と変わらない向きである。確認面からの深さは13cmで、周溝は確認されなかった。遺物は8世紀前半代の須恵器小片が出土した。

99ASB10　大溝（99ASD011）より西側に位置する。調査区西壁で途切れ拡幅後の大溝にも壊されるが、平面形は隅丸正方形と考えられる。南東辺長4.15m以上で、グリッド北から東へ29°振れる。確認面からの深さは21.3cmで、覆土層（1層）は単一層である。周溝はなく、竈の痕跡も認められなかった。柱穴は北東・南東隅にピットがあるので、四隅に配置されるタイプであろう。

遺物は須恵器杯蓋・身、土師質の把手や土錘がある。杯蓋（2049）は6世紀代だが杯身（2050）は岩崎17号窯式とみられる。当該建物廃絶の時期もそのころと考えられる。なお西トレンチ掘削中に出土した直径1.2cmの水色のガラス玉（X1）はこの竪穴建物の覆土中から出土したものとみなす。製作時に軸の周りにつけた剥離材が孔に残り、一部がはみだしたようになっているためガラスは完全形になってい



第211図　99ASB09（左）・SB10（右）平面・断面図と出土遺物実測図

ない。このようなガラス玉は後期古墳の副葬品であり、竪穴建物跡から出土する点はやや奇異な印象がある。しかしSB10の東に隣接して6世紀末～7世紀前半の須恵器が出土する不定形な溝（99ASD23）があり、この遺構との関連も視野に入れておくべきであろう。

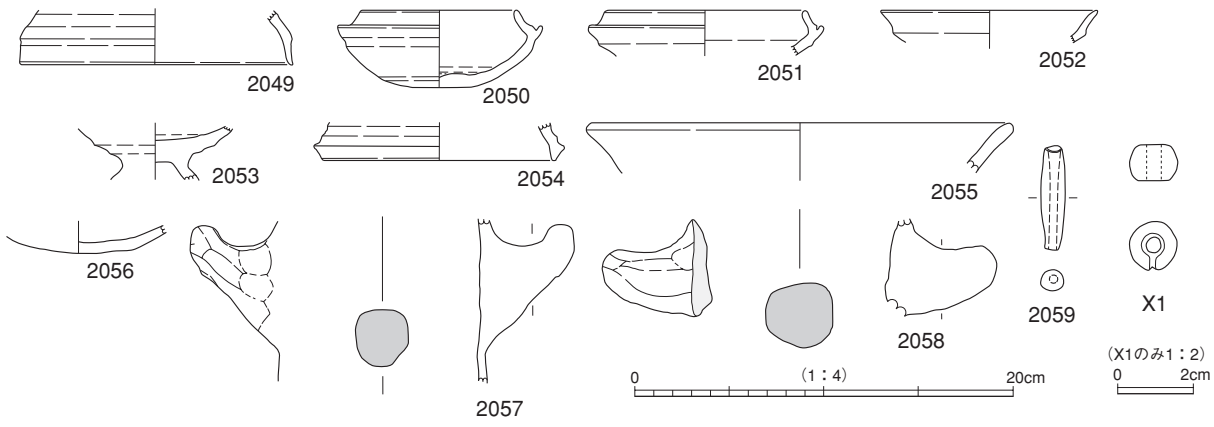
99ASB11（99ASB11a・11b）　99ASB10の北東8mに位置する。調査区西壁で途切れるが、平面形は隅丸正方形と考えられる。南東辺長5.5mで、この辺はグリッド北から東へ38°振れる。確認面からの深さ15cmである。周溝はなく、北東辺の中央となるとみられる箇所に造り付け竈がある。柱穴はP110004、110005、110010が該当するとみられる。

覆土層（1～5層）は皿状の堆積で、壁近くの5層（黒褐色土）の堆積とそれ以外の地山土主体の堆積の間に画期があり、2時期の可能性がある。その場合、2時期目（1～4層：SB11b）は一辺約4.8mの規模と想定される。99AP110007・P110008がその柱穴として考えられ、P110007が竈を壊して掘られている点やSB11bの覆土層に焼土・炭化物がほとんど混じらないことから、竈はSB11aにのみ伴うと判断される。したがって竈は基部のみが検出されたことになる。竈の煙道は短く若干の出張りになるだけである。焚口は周囲の床面に比べて数cm低い。支脚を据えた痕跡はなかった。また焚口は激しく被熱を受けた印象はなく、焼土や炭化物は竈から南西方向へ約3mまでの範囲で拡散する。竈の構築材は残っておらず竈解体時全て持ち去ったか、SB11b構築に伴って再掘削した際に失われたと考えられる。

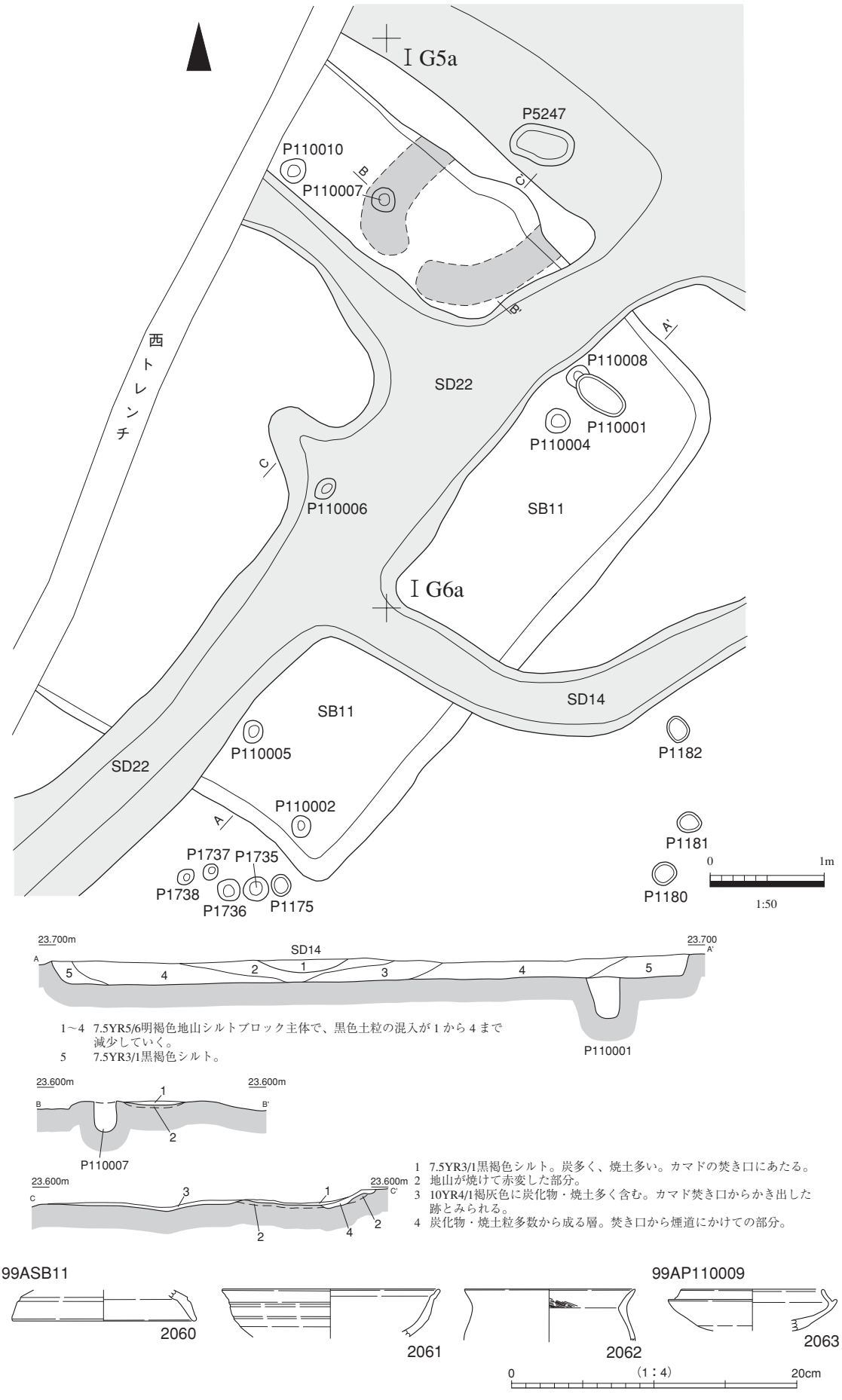
遺物はごくわずかで、小片がSB11b覆土層からの出土した。2062は古墳時代中期の土師器甕が混入したものである。時期の決め手になるものはないが、8世紀代まで下るものがなく、建物の時期が概ね7世紀代と推測させる。

99ASB12　99ASB11の北東11mに位置する。戦国時代区画溝が上に重なる。平面形は崩れた正方形で、南東辺長3.75mで、この辺はグリッド北から東へ43°振れる。確認面からの深さ3cmで、周溝など床面施設は確認できなかった。出土遺物もなく、時期を特定しえない。中世以降の竪穴建物の可能性もある。

99ASB13～16　段丘崖99ASX01の上端近くに位置する。小規模な竪穴建物が複雑に重複する。SB16の上に重なるSB15、さらにその上に方位の異なるSB14が重なる。SB14の北側にはSB13があり、SB14より先行するのは明らかであるがSB15・16とは直接重複しない。SB13の平面形は、隅部が大きくカーブするややいびつな方形で北東辺は一辺3.0m以上、グリッド北から西へ35°振れる。深さ10cmで、段丘



第212図　99ASB10出土遺物実測図

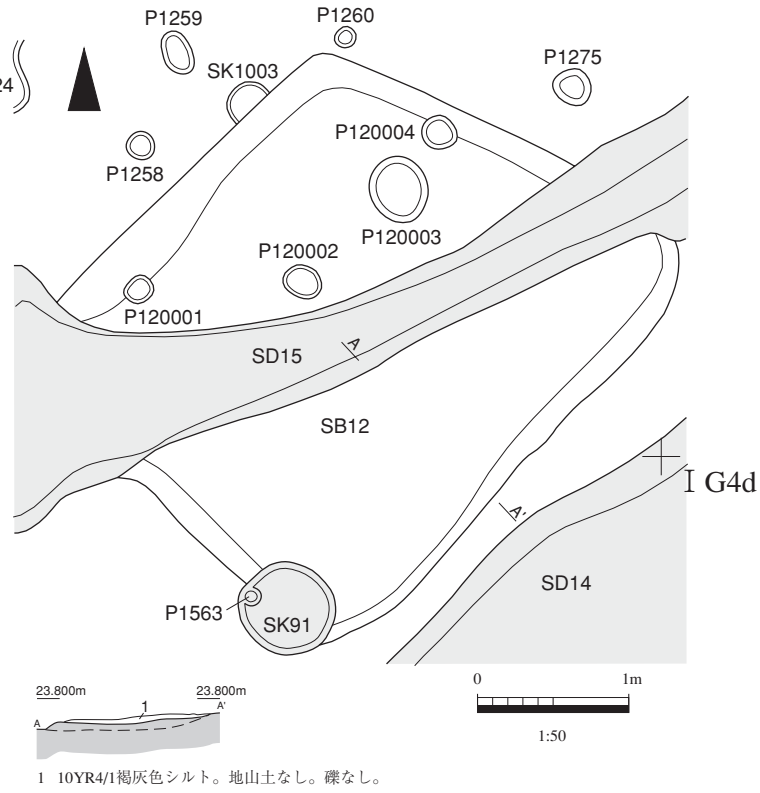


第213図　99ASB11平面・断面図と出土遺物実測図

礫層上面まで掘り込んでいる。周溝や柱穴は不明である。遺物は古墳時代中期の土師器有段脚部高杯（2064）と7世紀代とみられる土師器小甕口縁（2065）がある。前者は三河～遠江地域の地域色が強い形態である。

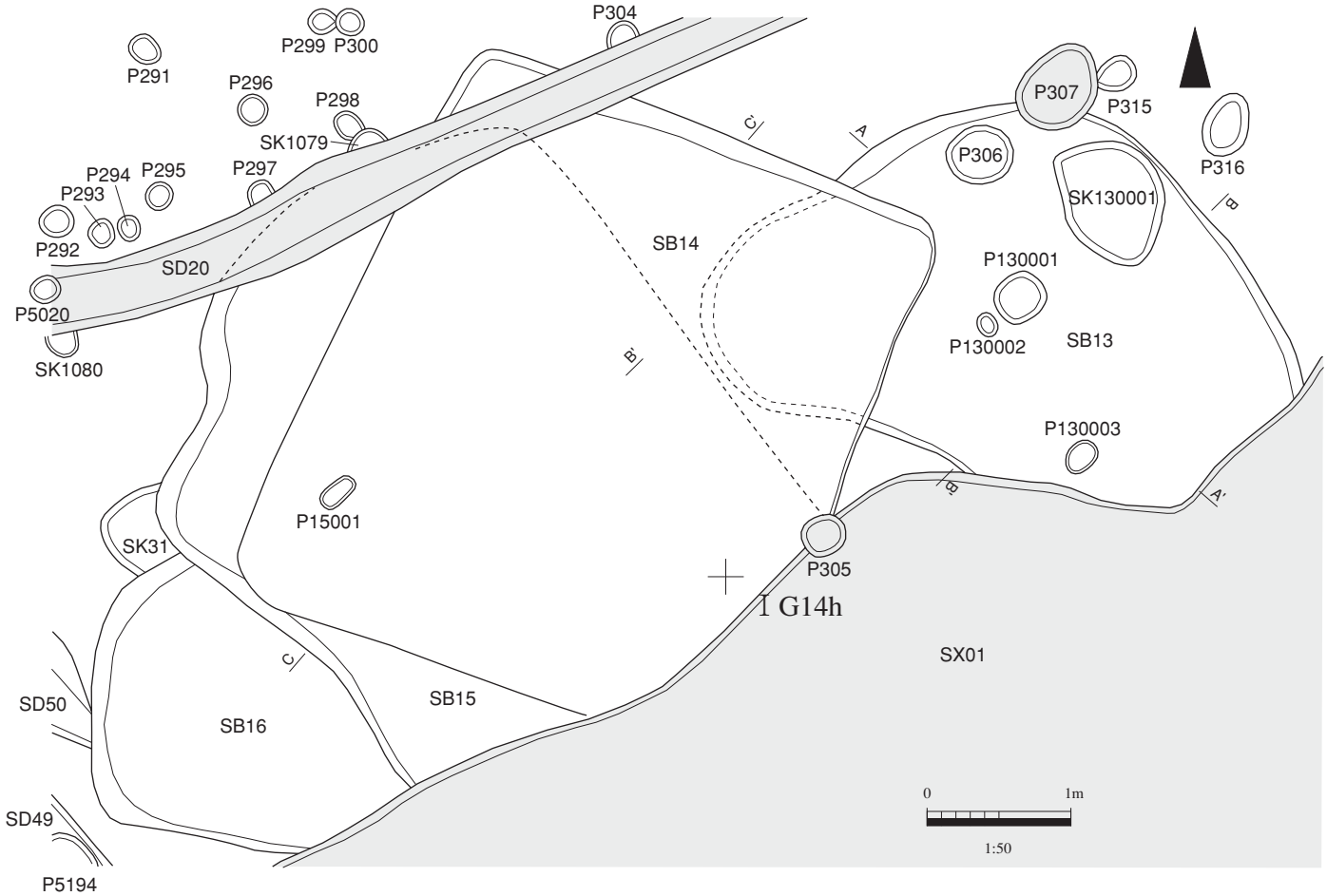
SB16は円形に近く土坑の可能性もある。北西辺は1.75mでグリッド北から東へ8°振れる。深さ20cmあり比較的明瞭な掘形である。SB15も平面形はくずれた隅丸方形で、南西辺は3.75m以上でグリッド北から西へ39°振れる。

99ASB15覆土層からは土師器ナデ小甕が多数出土した。器壁が厚く



1　10YR4/1褐灰色シルト。地山土なし。礫なし。

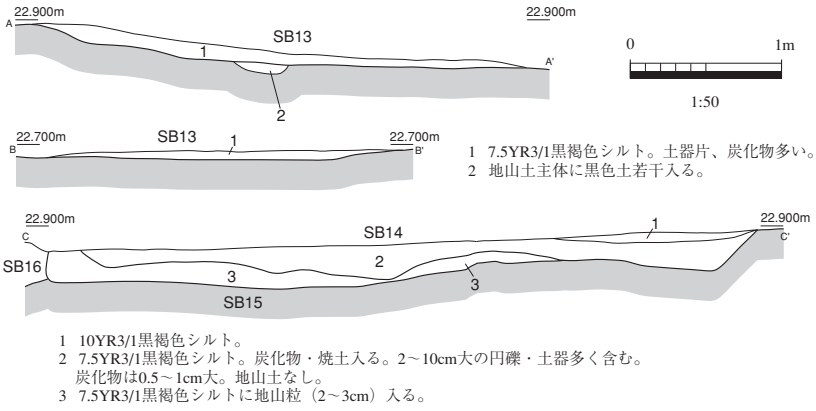
第214図　99ASB12平面・断面図



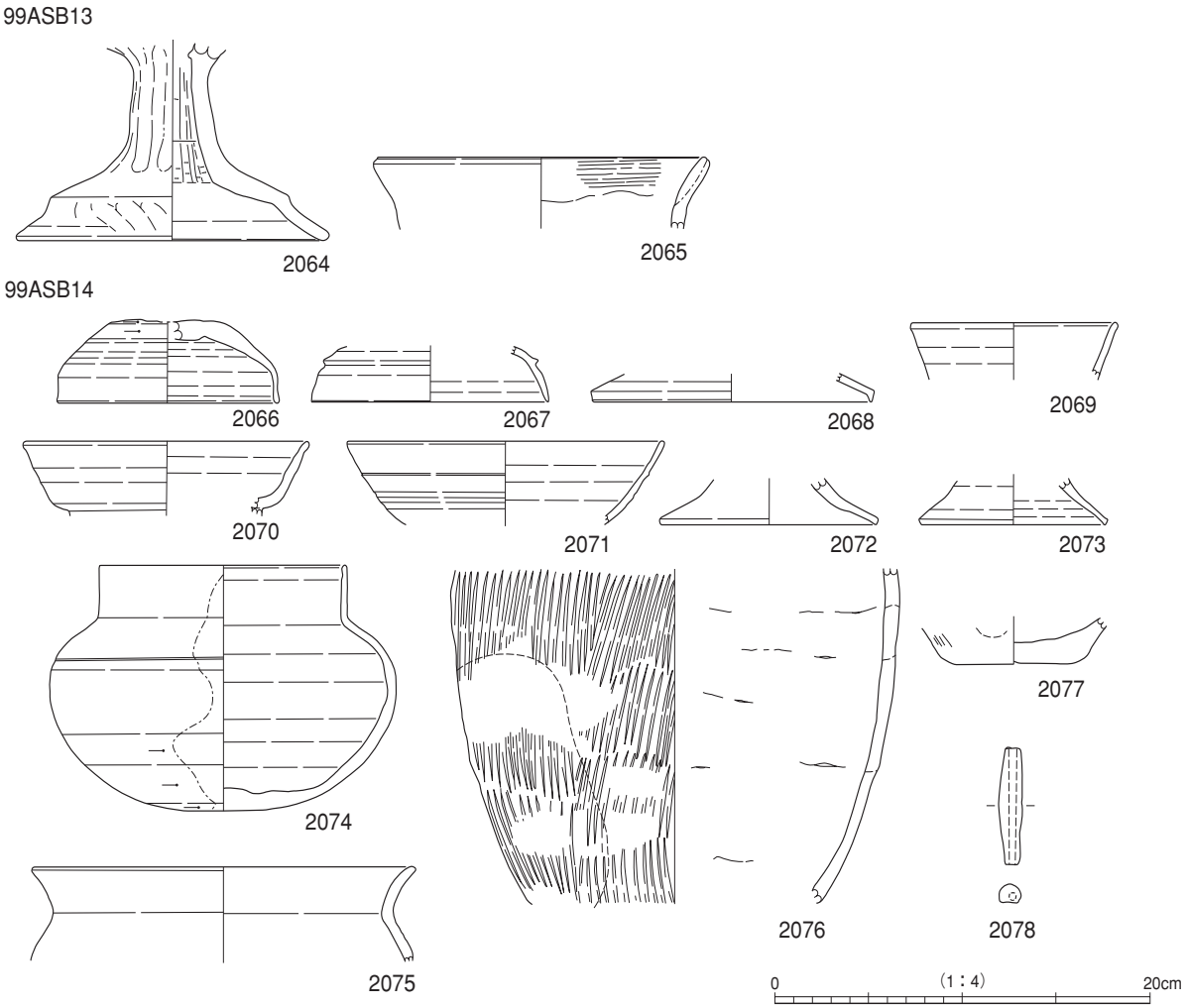
第215図　99ASB13・14・15・16平面図

平底で底部外面に木葉痕が認められるものがあるのが特徴である。ただその中にあって2103は2102に比べて器壁が薄く、外反する口縁の屈曲が小さい甕である。ナデ甕において器壁薄形傾向がこの段階から始まっていることを示す資料として注目したい。共伴する須恵器は東山44号窯式～岩崎17号窯式で比重は7世紀前半から中葉である。2112・2113は土師器椀で厚手の簡単なつくり。とくに2113は口縁が底面に対してあらかじめ傾斜のある形としてつくられている。2116は椀の可能性もあるが甕をのせる器台と考えた。管状土錘（2117～2123）が多いのも特徴である。

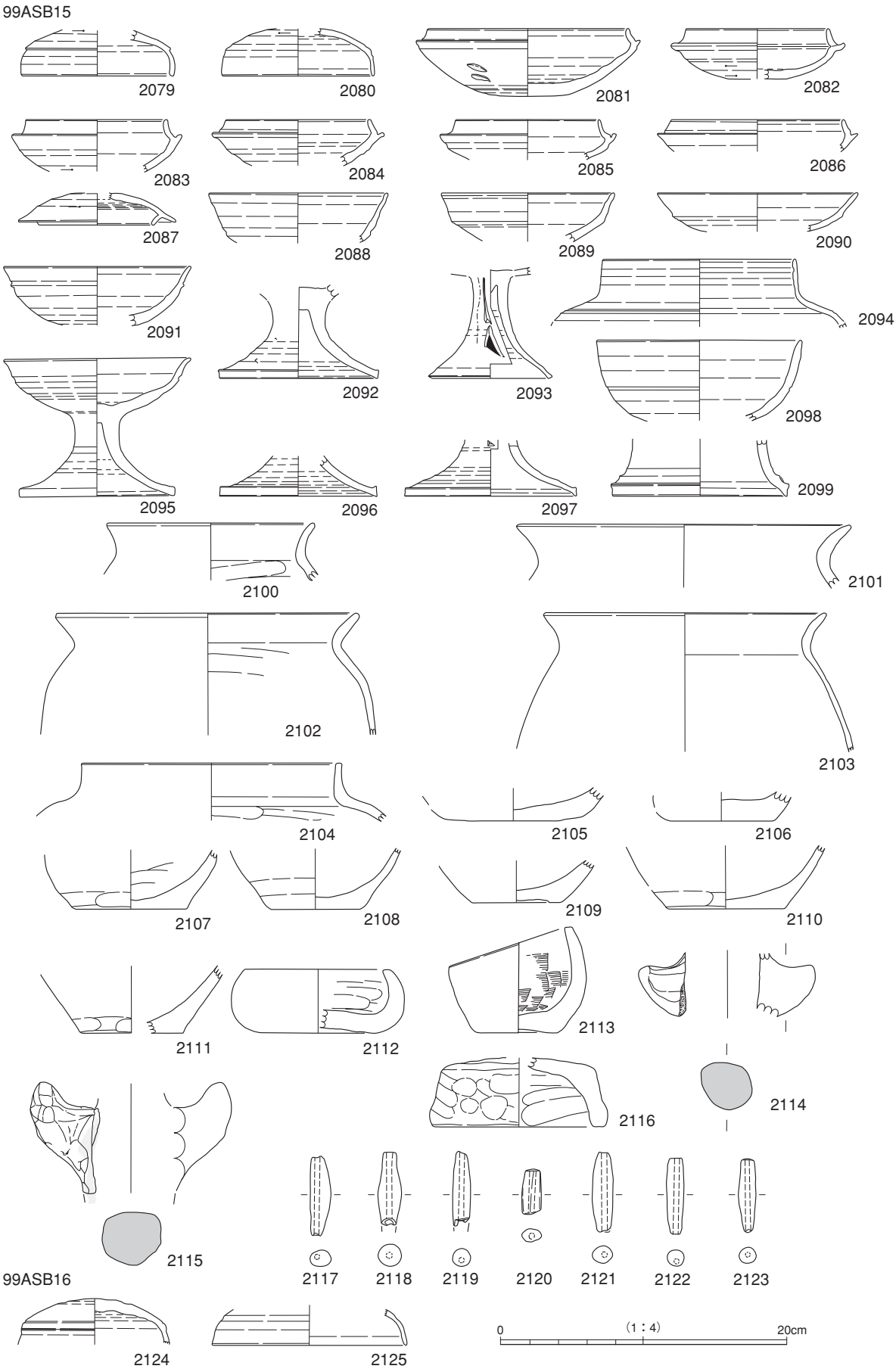
SB14は整った隅丸正方形で北西辺長4.2m、グリッド北から東へ24°振れる。深さは22cmで



第216図　99ASB13・14・15・16断面図



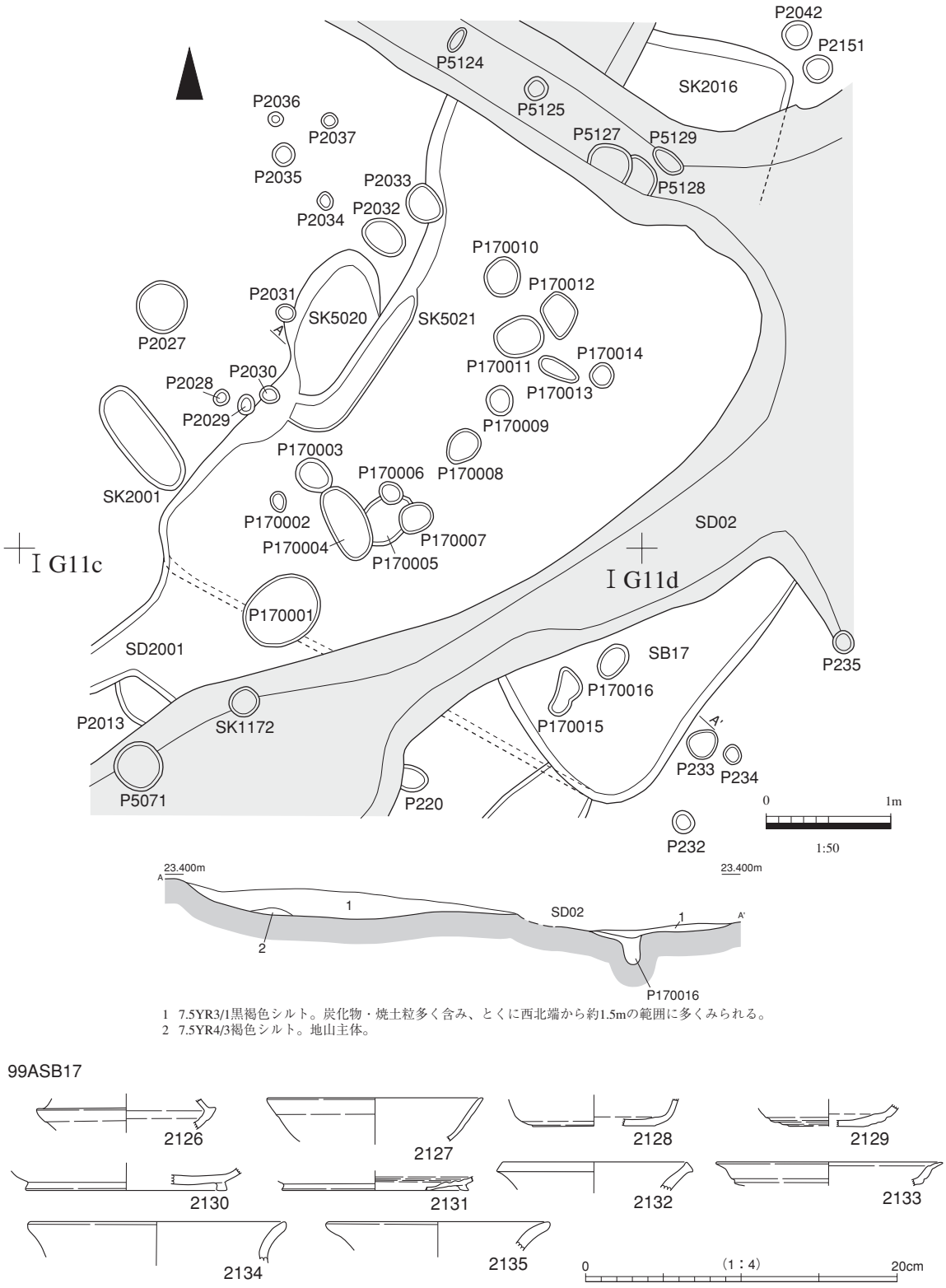
第217図　99ASB13・14出土遺物実測図



第 218 図　99ASB15・16 出土遺物実測図

ある。覆土は焼土・炭化物が混じり細片化した土器が多い。2074は広口壺で時期は7世紀後半か。2076は土師器長胴甕で刷毛目調整痕が明瞭な濃尾型である。

99ASB17　大溝(99ASD01)付近に位置する。一部は大溝東側土塁（99ASX02、中世以降の推積部分）の下から確認された。良好な検出ができなかったが平面形は隅丸正方形とみられ一辺約4.5mの規模と考え



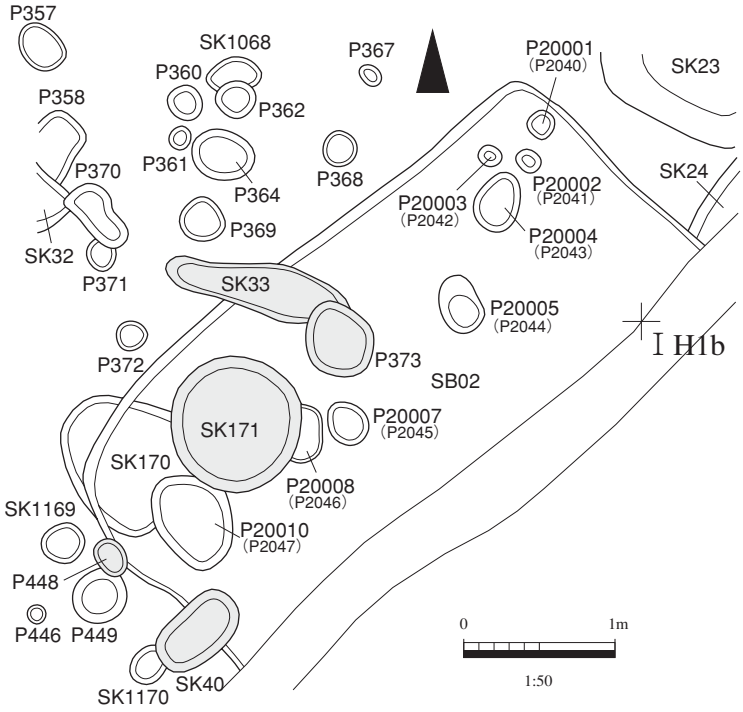
第219図　99ASB17平面・断面図と出土遺物実測図

られる。北西辺はグリッド北から東へ36°振れる。確認面からの深さ22cmで、壁の立ち上がりは緩く周溝はない。柱穴を特定するのは困難である。覆土層（1層）は単一層で、北西隅近くで焼土が比較的多かったところから竈の存在をうかがわせるものがある。遺物は須恵器・土師器の小片が多数ある。概ね7～8世紀で、下限が高蔵寺2号窯式と考えられる。

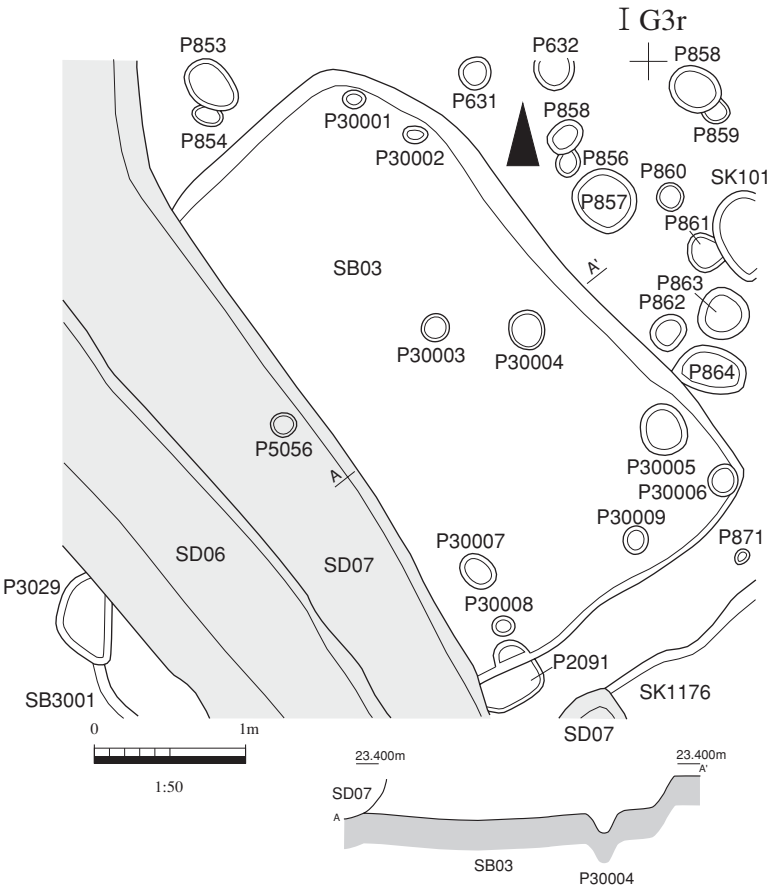
99BSB02　調査区東壁で途切れた状態で確認された。北西辺は4.15mで隅丸正方形と推定される。北西辺はグリッド北から東へ48°振れる。確認面からの深さ7cm、周溝はなく、竈も不明である。検出状況が良好でなく、覆土層にかかわる情報はない。縄文時代と推定される土坑99BSK170の上に重なる。遺物はない。

99BSB03　戦国時代の区画溝99BSD06が上に重なり、覆土もやや混じる。一辺4.0mの隅丸正方形とみられ北東辺はグリッド北から西へ39°振れる。竈や周溝はない。床面にピットがあるが柱穴と限定するのは難しい。遺物は中世以降のものが入り古代のものはなかった。中世以降の可能性も残る。

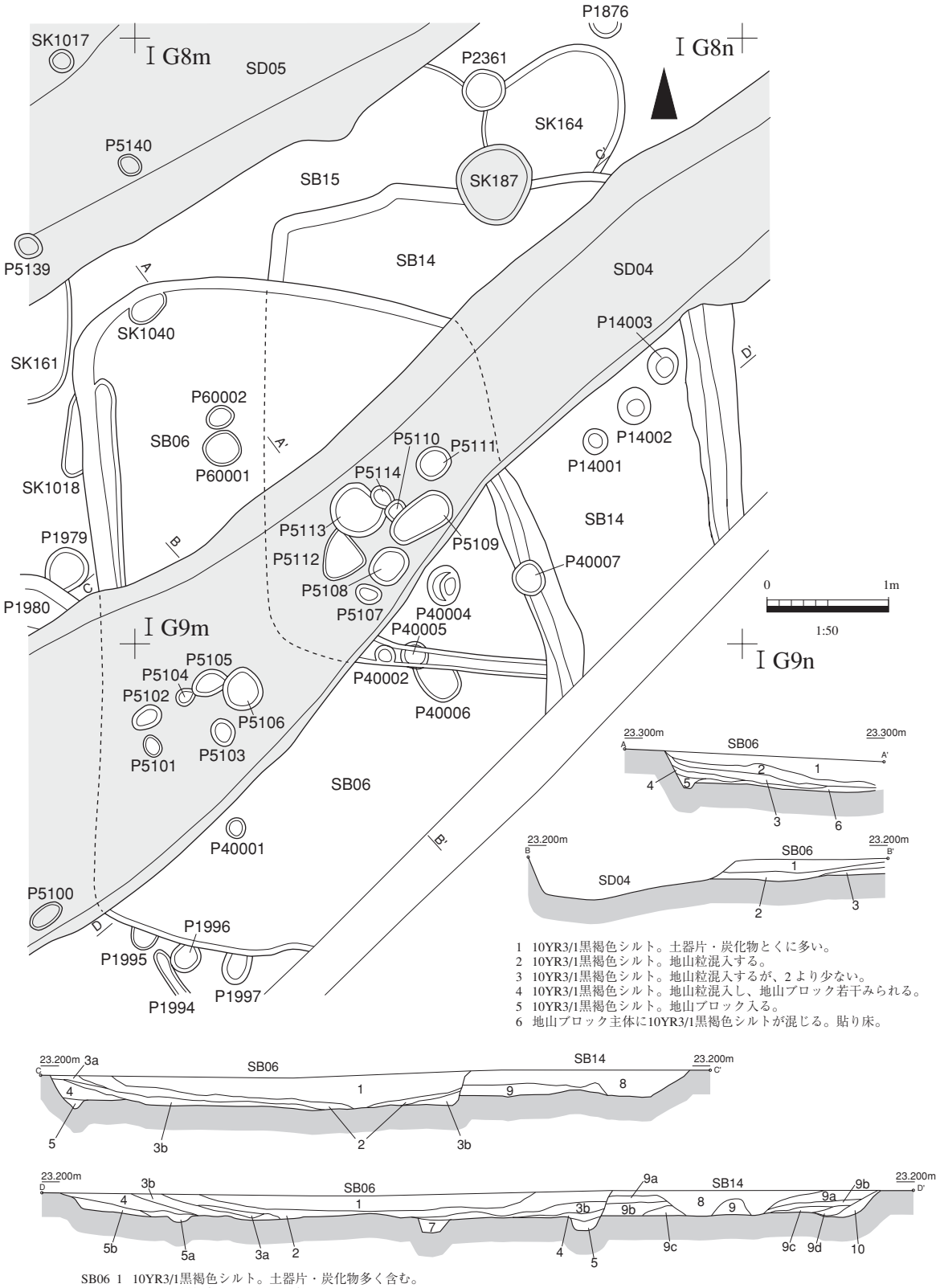
99BSB04(99BSB06・14)　調査区東壁で途切れる建物跡同士の重複を99BSB04とした。確認面での重複関係はSB04（SB06・14）とSB15については判明したが、戦国時代の溝



第220図　99BSB02平面図



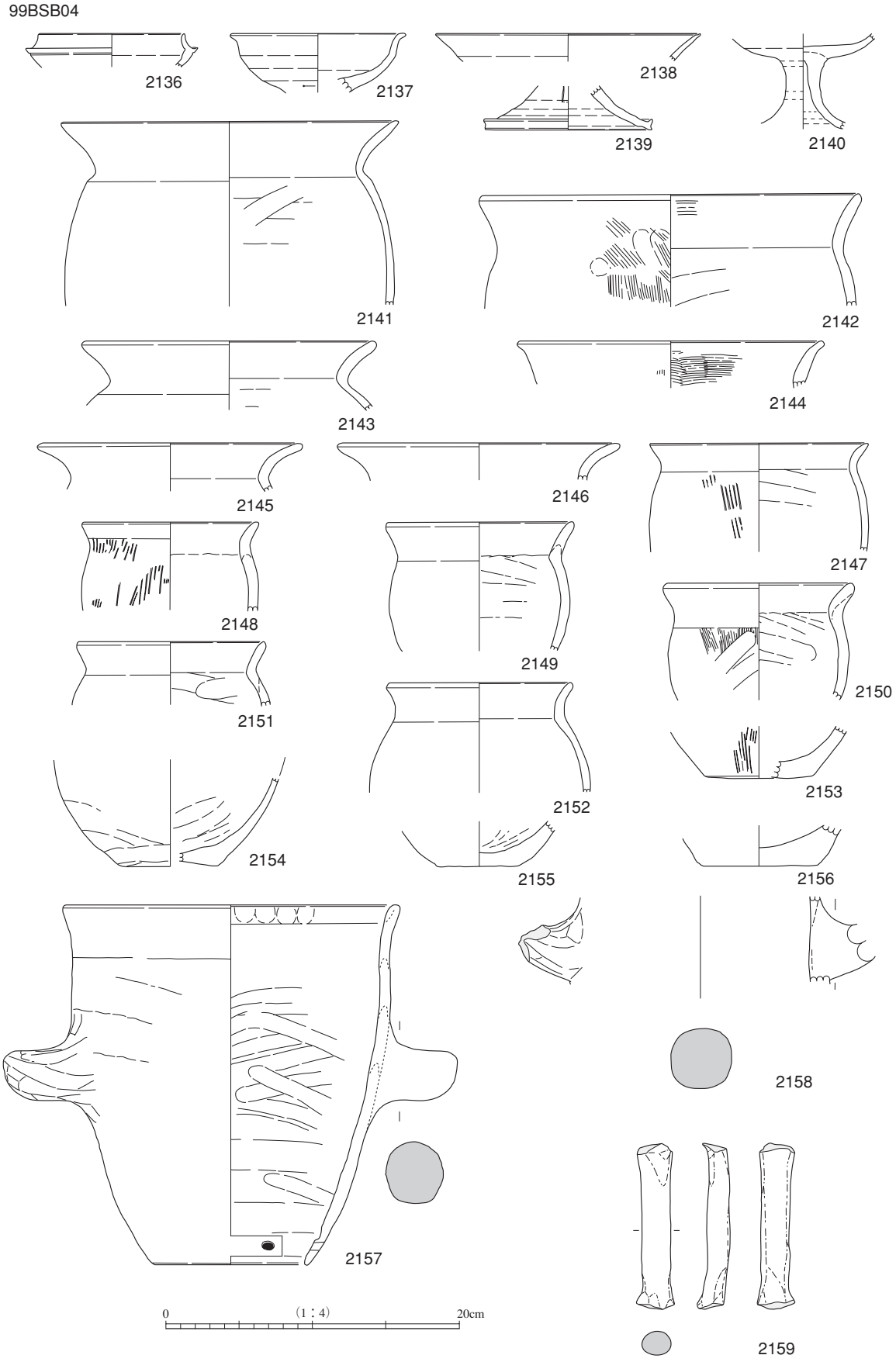
第221図　99BSB03平面・断面図



1 10YR3/1黒褐色シルト。土器片・炭化物とくに多い。
2 10YR3/1黒褐色シルト。地山粒混入する。
3 10YR3/1黒褐色シルト。地山粒混入するが、2 より少ない。
4 10YR3/1黒褐色シルト。地山粒混入し、地山ブロック若干みられる。
5 10YR3/1黒褐色シルト。地山ブロック入る。
6 地山ブロック主体に10YR3/1黒褐色シルトが混じる。貼り床。

SB06 1 10YR3/1黒褐色シルト。土器片・炭化物多く含む。
2 10YR3/1黒褐色シルト。地山粒混入する。
3 10YR3/1黒褐色シルト。地山粒混入するが、2 より少ない。3a は黒褐色シルトやや多く、3b は黒褐色シルトやや少ない。
4 10YR3/1黒褐色シルト。地山粒混入し、地山ブロック若干入る。
5 10YR3/1黒褐色シルト。地山ブロック混入する。5a は黒褐色シルトやや多く、5b は黒褐色シルトやや少ない。
7 10YR2/1黒色シルト。地山粒なし。
SB14 8 10YR3/1黒褐色シルト。土器片・炭化物含む。
9 10YR3/1黒褐色シルト。9a は地山粒がやや多く、9b は地山粒がやや少なく、9c は地山粒やや多い。9d は地山粒のほか、地山ブロック若干混じる。
10 10YR3/1黒褐色シルト。地山ブロック混入する。

第 222 図　99BSB04・06・14 平面・断面図

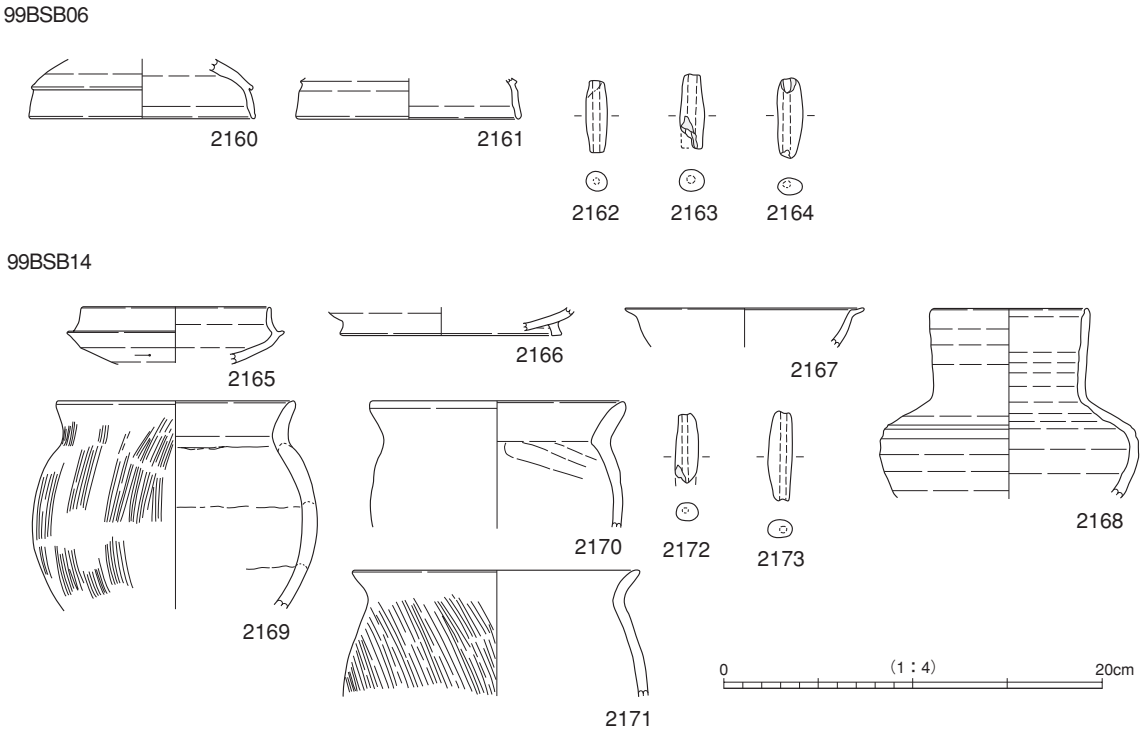


第 223 図　99BSB04 出土遺物実測図

99BSD04より南側では不明瞭であった。しかし全体掘削後に周溝とみられる溝の重複が検出され、SB14→SB06という変遷が判明した。したがって遺物の大半はSB04出土となっている。SB14は一辺3.8mの隅丸正方形で深さ21cm、西辺はほぼグリッド北と平行である。東・南辺で周溝が確認され、貼床はない。床面ピットが多く柱穴は特定できない。覆土は下層（9・10層）の後に掘り込まれた上層（8層）からなる。SB14に特定できる遺物は須恵器杯身（2165）や長頸壺（2168）があり7世紀前半を中心とする。SB06は西辺長5.33m北辺長3.38mの隅丸長方形を想定したがもう1棟重複している可能性もある。西辺はほぼグリッド北と平行である。深さは27cmでSB04とほぼ同じである。東・西辺の一部に周溝がある。床面およびSD04の下から多数のピットが検出されたが柱穴は特定されていない。覆土（1～5層）は徐々に堆積したようで、窪地となっていたところに1層が堆積した。この1層からの出土遺物が最も多く、SB04とした遺物のほとんどがこの層に含まれる。SB06と特定できる遺物は少ないが、須恵器杯蓋（2160）には稜線が残っており、SB14とあまり変わらない時期といえよう。

SB04として採取された土器は土師器甕を中心とする。2141は長胴甕になるか。口縁が直立気味の2142は鍋とみられる。2145と2146も長胴甕だが口縁が大きく外反する。2147～2156は平底・厚手の小型甕である。ハケ目調整ののち若干の指ナデがなされる。2153は底部に木葉痕がある。2157は底面が全くないタイプの甑である。胴部下端に焼成前の穿孔あり。2159は土師質棒状土製品で把手のような形状が考えられる。SB06・14は須恵器に顕著な時期差がみられないことからおよそ7世紀前半と考えられる。

99BSB05・08　調査区南部に位置する。戦国時代の溝99BSD05に壊され、削平によって床面のほとんども失われた状態で周溝のみが確認された。周溝の重複関係からSB05→08という変遷がたどれる。SB05は隅丸正方形と推定され、北西辺長4.5m、グリッド北から東へ30°振れる。SB08はやや小規模な隅丸



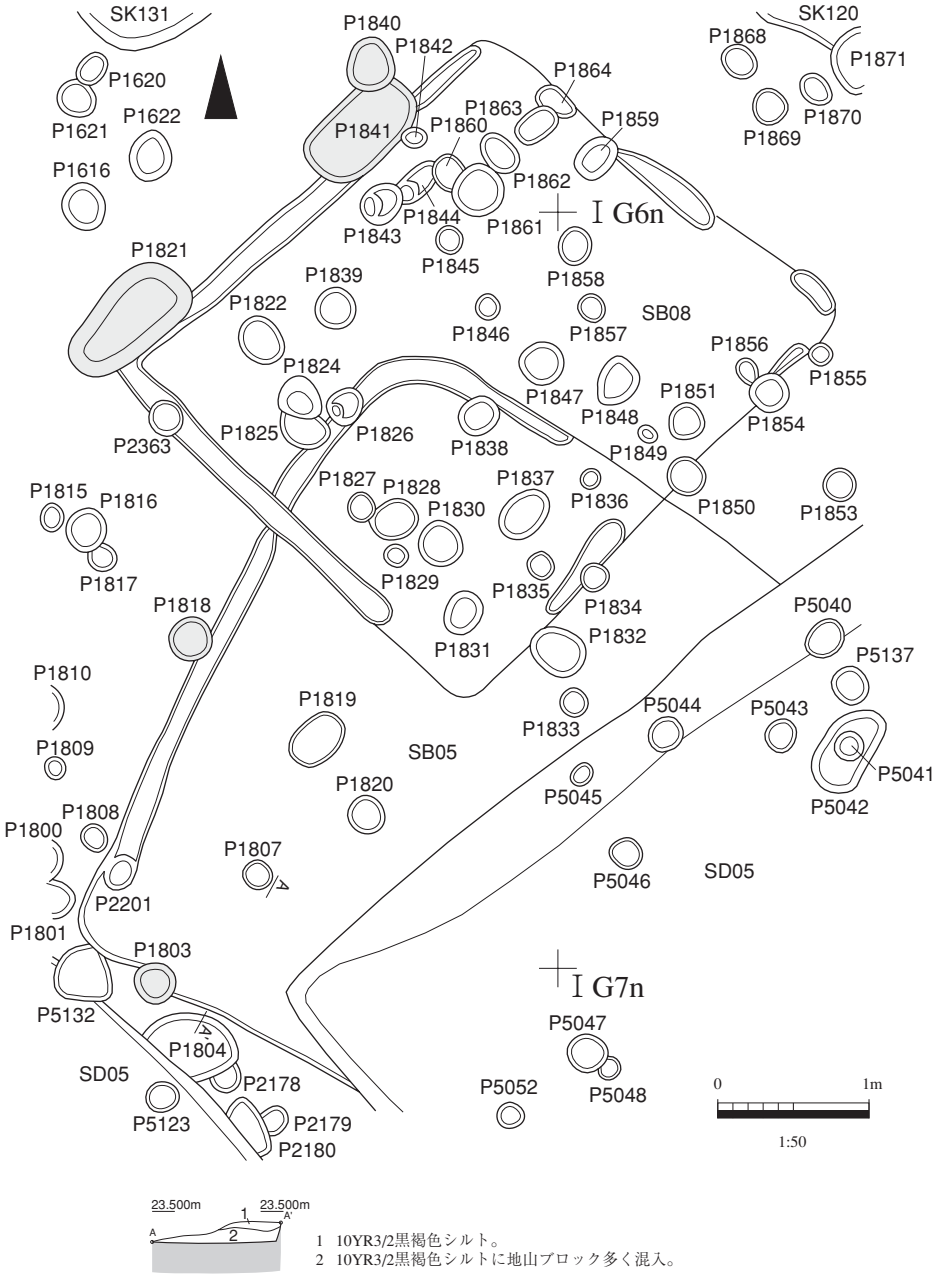
第224図　99BSB06・14出土遺物実測図

正方形で北西辺長3.33m、グリッド北から東へ41°振れる。遺物はない。

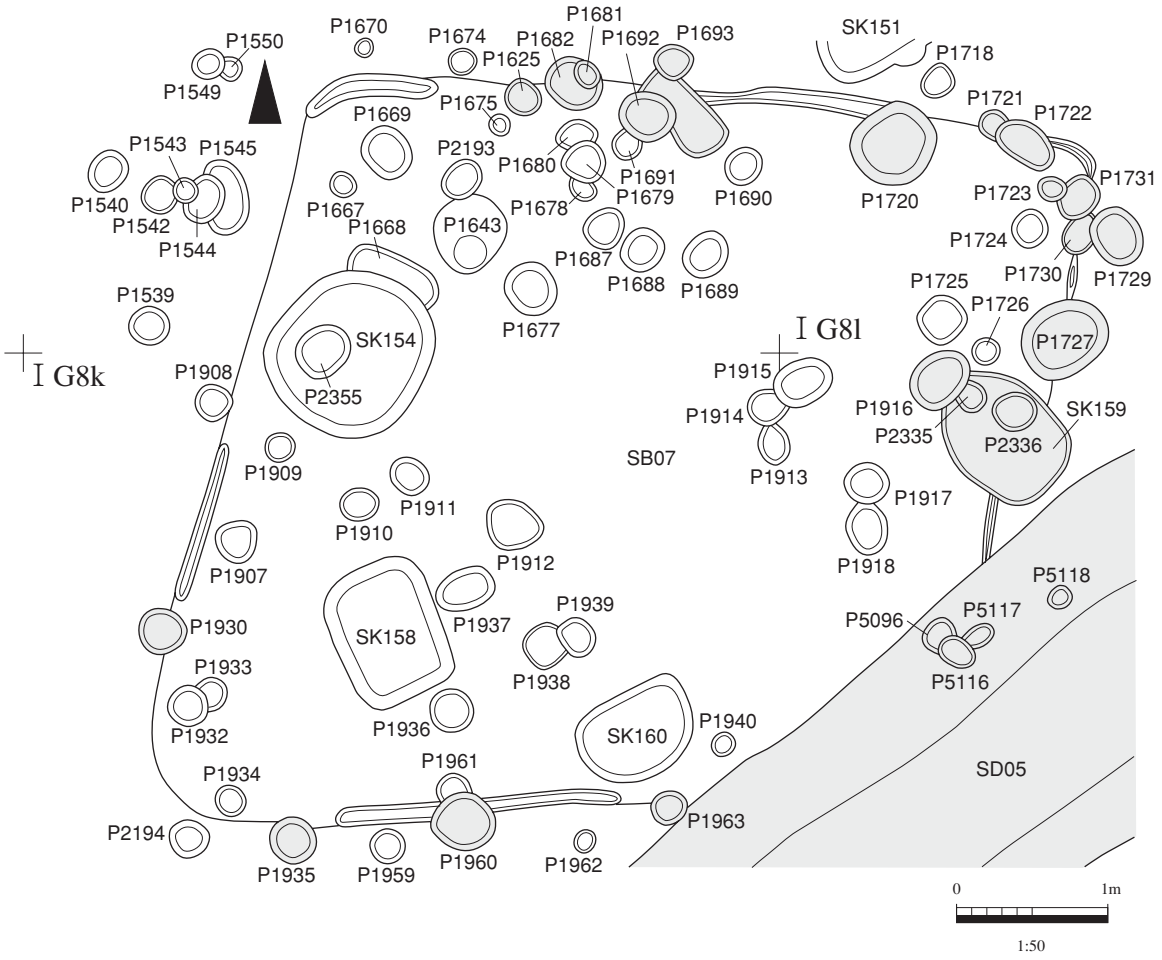
99BSB07　調査区南部に位置する。99BSB05同様の残存状況で、周溝からやや崩れた隅丸正方形の平面形を推定した。北辺長5.2m、グリッド北から東へ9°振れる。遺物はない。

99BSB09・10　調査区南部に位置する。99BSB05同様の残存状況で、周溝から平面形を推定し、SB10→SB09と変遷することが確認された。SB09は隅丸長方形で北西辺長3.9m、南西辺長3.1m、北西辺はグリッド北から東へ50°振れる。遺物はない。SB10はそれが崩れた隅丸長方形で、南東辺長4.0m、南西辺長3.55m、南東辺はグリッド北から東へ55°振れる。南東辺の周溝に直角に接続する間仕切りとみられる長さ1.0mの溝が2本ある。溝どうしの間隔は0.7mである。こちらも遺物はない。

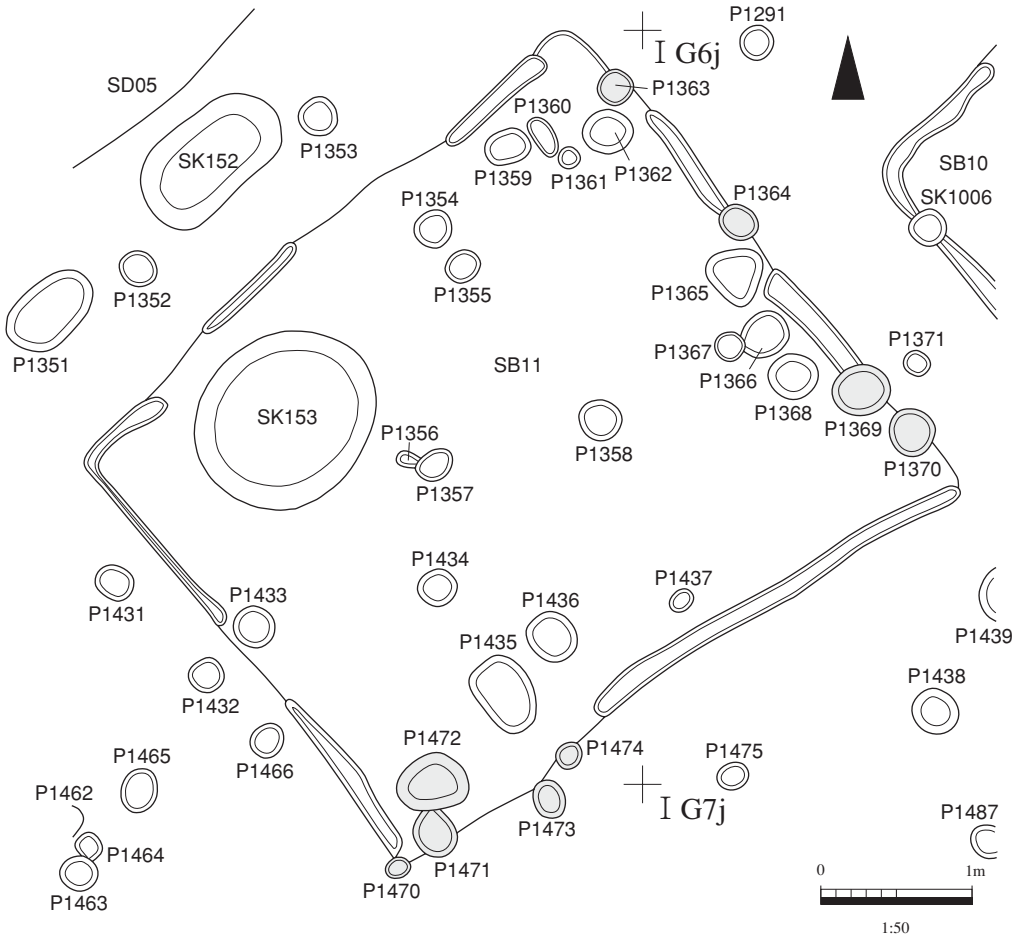
99BSB11　99BSB10の南西に隣接する。99BSB05同様の残存状況で、周溝から平面形を推定した。やや



第225図　99BSB05・08平面・断面図



第 226 図　99BSB07 平面図

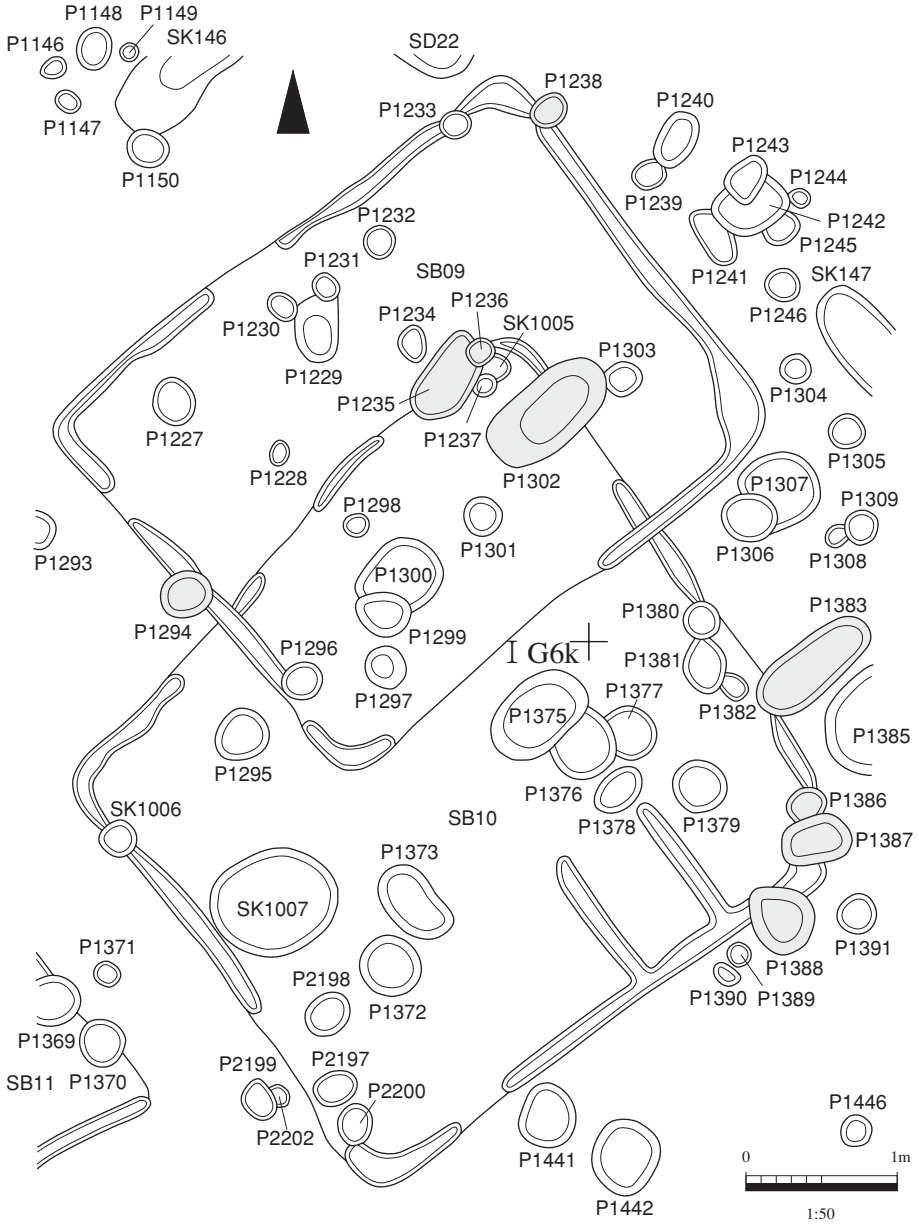


第 227 図　99BSB11 平面図

崩れた隅丸長方形で北西辺長 4.4m、南西辺長 3.5m、北西辺はグリッド北から 49° 東へ振れる。遺物はない。

99BSB16　調査区東壁際にあり、戦国時代の溝(SD03)に半分が壊される。西隅の周溝から平面形が推定される。南西辺長 4.1m 以上でグリッド北から西へ 38° 振れる。遺物はない。

99BSX3001　SB16 と同様に溝（SD03）に大半が壊されるかたちで検出された不明遺構である。戦国時代の土塁 99BSX01 下層となる。規模は SD03 と平行に 9.5m 深さ 18cm、北西端は大きくカーブを描く。側壁は傾斜し、それに寄りかかるようにして土師器長胴甕（2174）が出土した。土師器甕は底部が完全 b に欠損し、口縁の 4 分の 1 で縦割りにした状態のものを重ねてあった。意図的にここに置いたものであろう。器壁は薄く、ハケ目調整ののち胴部下半を中心に横指ナデをする。他いに伴出遺物がないので当該遺構の時期を示す遺物である。



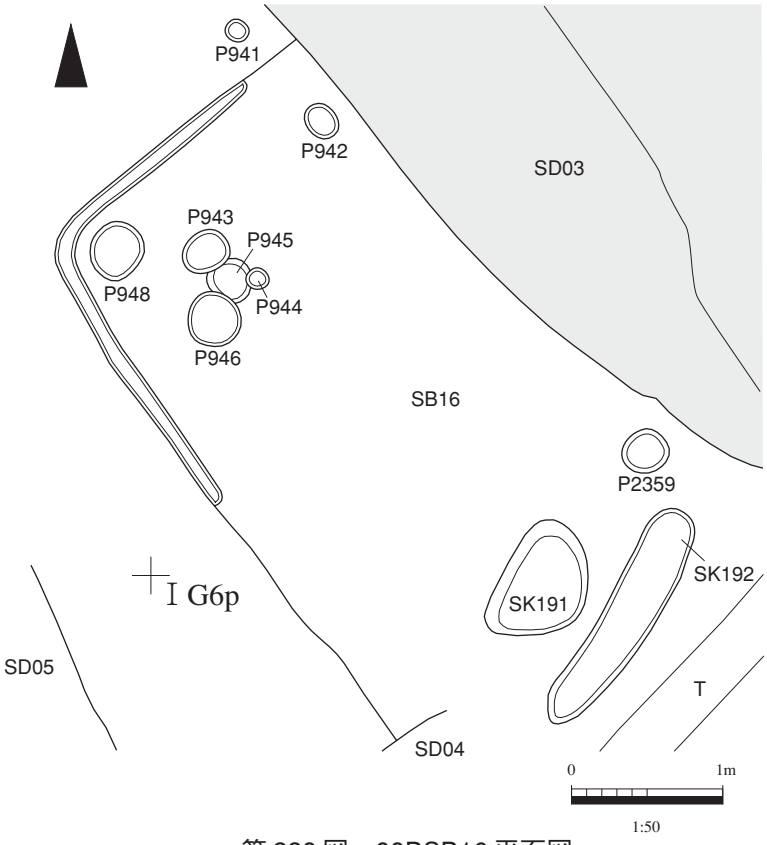
第 228 図　99BSB09・10 平面図

そしてSD03を挟んだ南西側には方形土坑（99BSK107）の残欠がある。SD03と平行に4.8m深さ6cmである。土師器甑片などが出土した。床面レベルは一致しないがSX3001とSK107は1棟の建物もしくは複数棟の重複であった可能性を示しておく。

99BSB3010・3011・SK3013　99BSB3011は大溝(99BSD01)から南東13mに位置する、竪穴建物の可能性が考えられる平面形が長方形の遺構である。99BSB3014が上に重なる。北東辺長3.0m、北西辺長3.6mで、北西辺はグリッド北から東へ41°振れる。確認面からの深さ35cmである。周溝や柱穴はなかった。

覆土層は礫が多く入る。5～7層は貼り床であろう。遺物は古墳時代前期以前の土師器（2177・2178）があるが、平底甕（2180）があることから7世紀代であろう。2181は羽付甕で、2182は須恵器甑である。

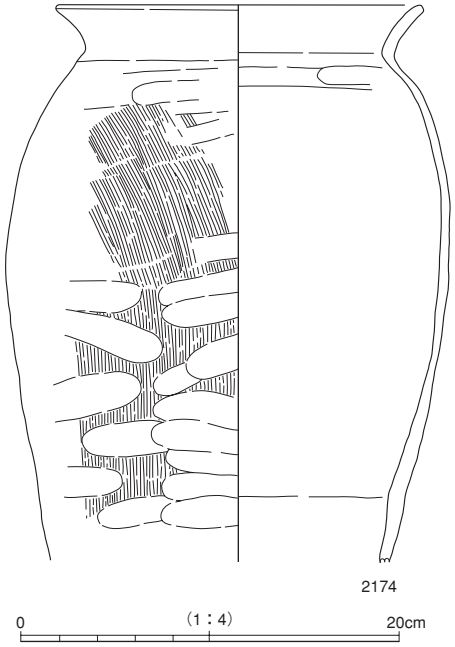
99BSK3013はSB3011に先行する南東辺1.9mの方形土坑である。5～6世紀の須恵器が主体であるが4036が7世紀代である。さらにこれに先行するSB3010は南東辺しか把握できていないが出土遺物から6世紀末～7世紀前葉と考えられる。



第229図　99BSB16平面図

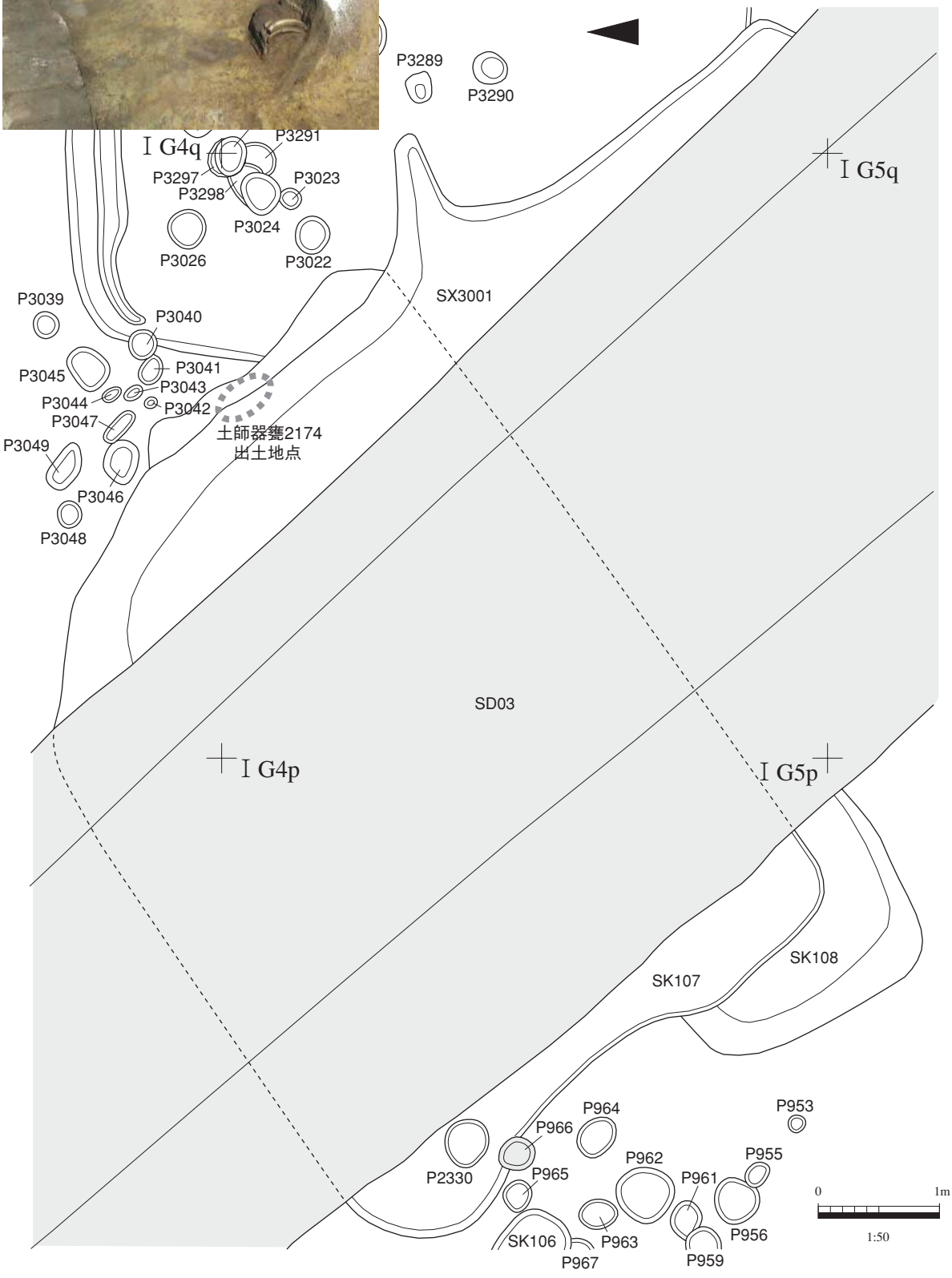
99BSK3014　99BSB3011の上に重なる位置にある。平面形はやや不整な隅丸長方形で、南東辺長2.8m、北東辺長2.0mで、南東辺はグリッド北から東へ52°振れる。確認面からの深さ10cmで、床面に周溝や柱穴はない。壁面の立ち上がりは緩く皿状の床面である。覆土層は大溝3層に近い黒褐色土層で、遺物に折戸53号窯式の灰釉陶器椀（2176・4430）があり、それ以外は混入と考えられる。

99BSB8001　99B区の大溝(SD01)西側で唯一確認された竪穴建物である。竈とその周辺が残存していた。削平で失われた南西辺の位置は特に根拠がないが、平面形は隅丸正方形と考えられる。南西辺長5.1m以上、北西辺長4.75mで、北西辺はグリッド北から東へ42°振れる。覆土厚は数cmであった。周溝は残存辺で確認

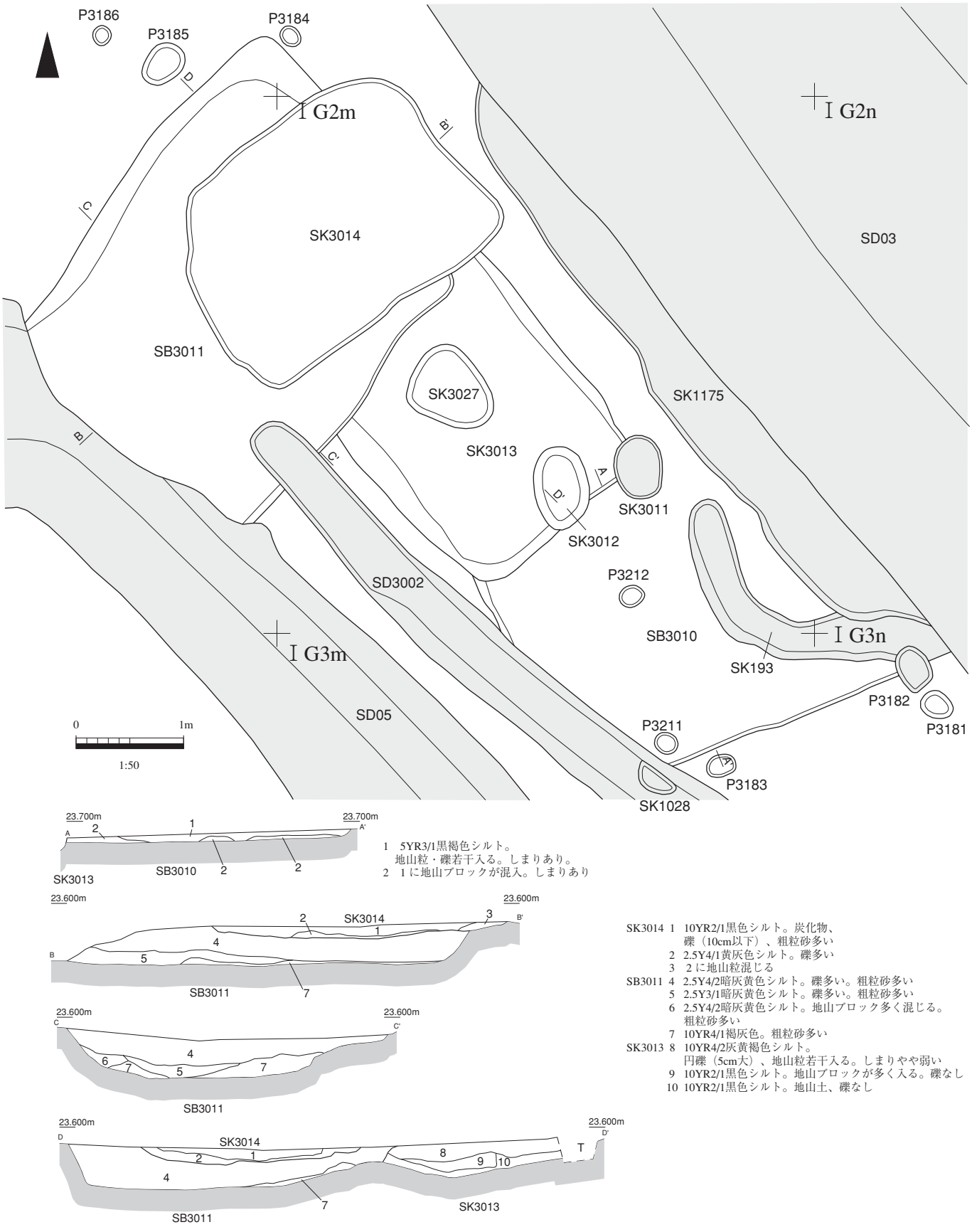


第230図　99BSX3001出土遺物実測図

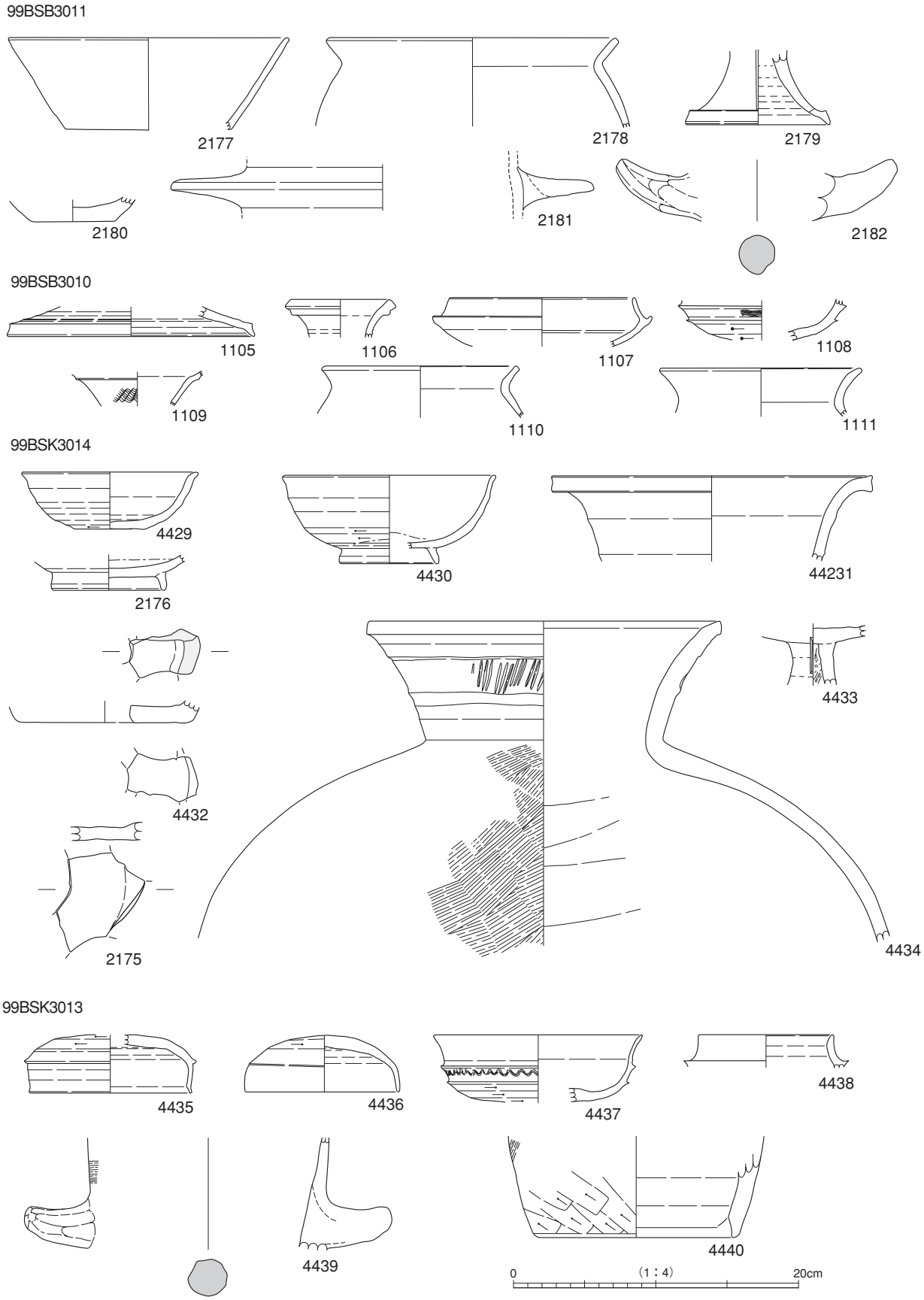
写真　99BSX3001 土師器甕出土状況（東から）



第 231 図　99BSX3001 平面図

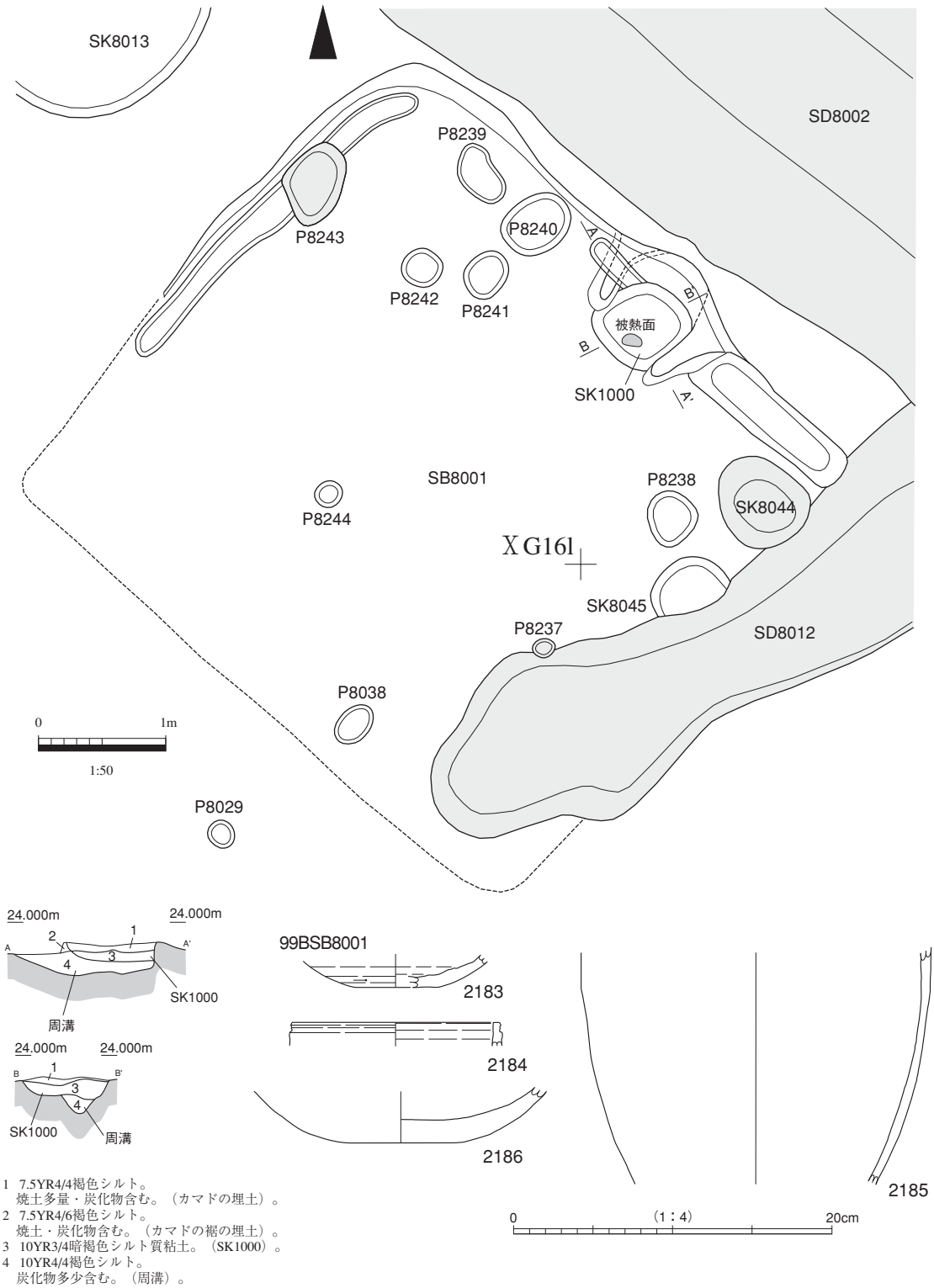


第 232 図　99BSB3010・3011・SK3014 平面・断面図



第 233 図　99BSB3010・3011・SK3014・3013 出土遺物実測図

でき、北東壁中央に位置する竈は周溝の上からつくられている。つまり竪穴掘り下げ時に竈予定位置を定めずに周溝を全周させていた可能性が考えられる。柱穴はP8238・8242あたりが該当するであろう。須恵器（2183・2184）は8世紀とみられ、器壁の薄い土師器長胴甕（2185）もある。

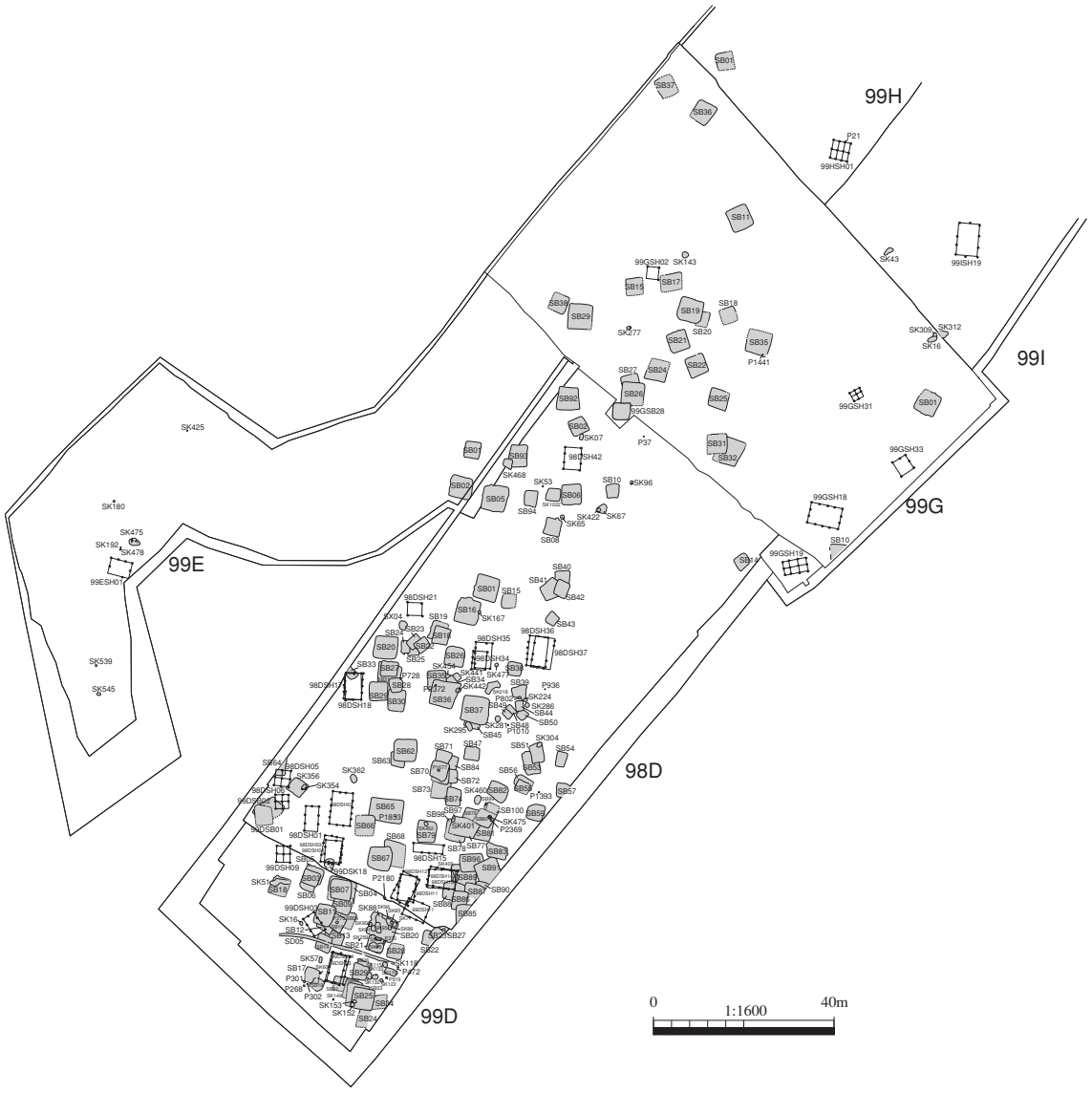


第234図　99BSB8001平面・断面図と出土遺物実測図

（３）遺構各説（下糟目Ａ地区 99D・98D・99E・99G・99H 区）

99DSB01・02　98D 区南西隅に位置する。重複関係（SB02 → SB01）にある両者の上に戦国時代の溝(98DSD30)が重なる。また掘立柱建物 98DSH06 とも重複するが該当する柱穴は SB02 の床面で検出されており、98DSH06 → 99DSB02 と判明する。平面形は共に隅丸正方形とみられ、SB02 は北西辺長 5.6m でグリッド北から 56° 東へ振れ、SB01 は西辺長 3.75m 以上でグリッド北から西へ 4° 振れる。竈および柱穴は判明しなかった。周溝は SB01 の土層観察によると西壁にそってわずかな凹みがみられる。出土遺物はほとんどなかった。

99DSB03・05・06　98D 区に接する位置にある。重複関係にあり SB05・06 → SB03 という先後関係が判明するが SB05 と 06 の関係は不明である。いずれも平面形は隅丸正方形で SB03 は西辺長 3.05m、SB05

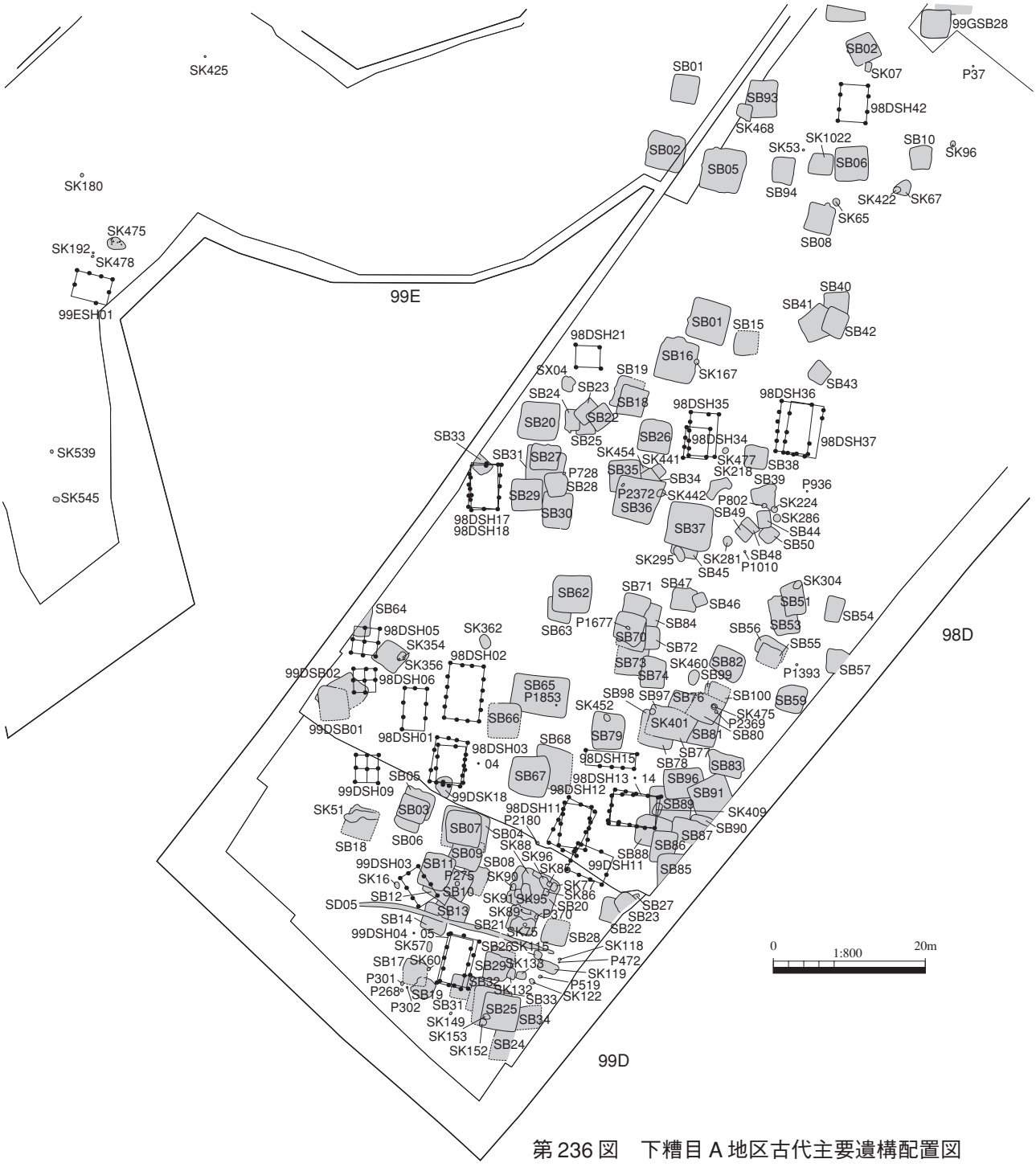


第 235 図　下糟目地区古代主要遺構配置図

は東辺長3.4m、SB06は南辺長3.4mである。建物方位はほぼ同一でSB03西辺がグリッド北から東へ21°振れる。竈および周溝は確認されなかった。柱穴についてはSB03ではP127・132が該当すると考えられる。覆土はいずれも単一層で貼床はなさそうである。出土遺物はSB03からのみで須恵器が折戸10号窯式期から井ヶ谷78号窯式期で土師器甕（2190）はこれらに併行する時期である。

99DSB04・07・09　SB03の東2mに位置する複数棟の重複関係の上に戦国時代の溝(SD03)が重なる。重複関係は広範にわたるがひとまず標題の3棟についてはSB07→04→09という先後関係が判明した。

SB04は北辺長6.1m、東辺5.3mの平面形が東西にやや長い隅丸長方形である。西辺はグリッド北から



第236図　下糟目A地区古代主要遺構配置図

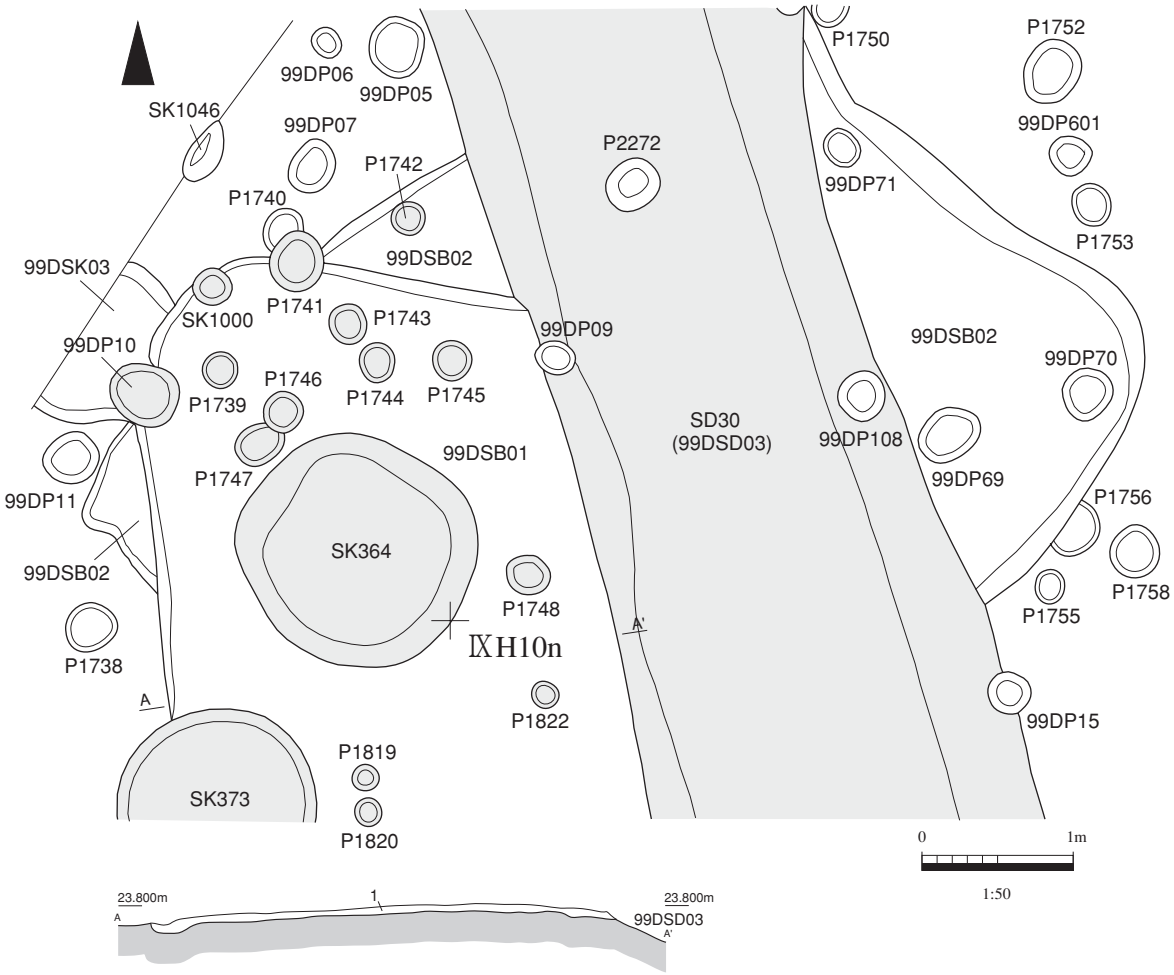
東へ10°振れる。深さは18cmで埋没したSB07の上に規模を拡大して掘られる。柱穴は土層断面図からP143がふさわしいことがわかるがそれ以外は不明である。遺物はSB07に由来する8世紀前半のもの(2192・2196)以外は折戸10号窯式にあたるとみられる。

SB07は北辺長4.75mの隅丸正方形で、建物方位はSB04と同一である。深さ33cmで周溝が西・北壁直下にあることが土層観察で確認された。部分的な貼床（5層）が認められる。竈は確認されず柱穴は特定できていない。土師器長胴甕（2198）は8世紀前半～中葉にかけてのものである。

SB09は南辺長4.15mの隅丸正方形と想定される。西辺はグリッド北から東へ21°振れる。深さ25cmで東・南壁にそって周溝がみられる。掘形はやや凹凸が目立ち、厚さ10cm前後の貼床がなされる。SB04との重複関係は土層観察では見いだせていないものの、出土遺物がやや新相であることから後に位置づけた。須恵器は折戸10号窯式期であるが、土師器長胴甕（2203）は2197に比べて口縁が短小化しているのが特徴である。

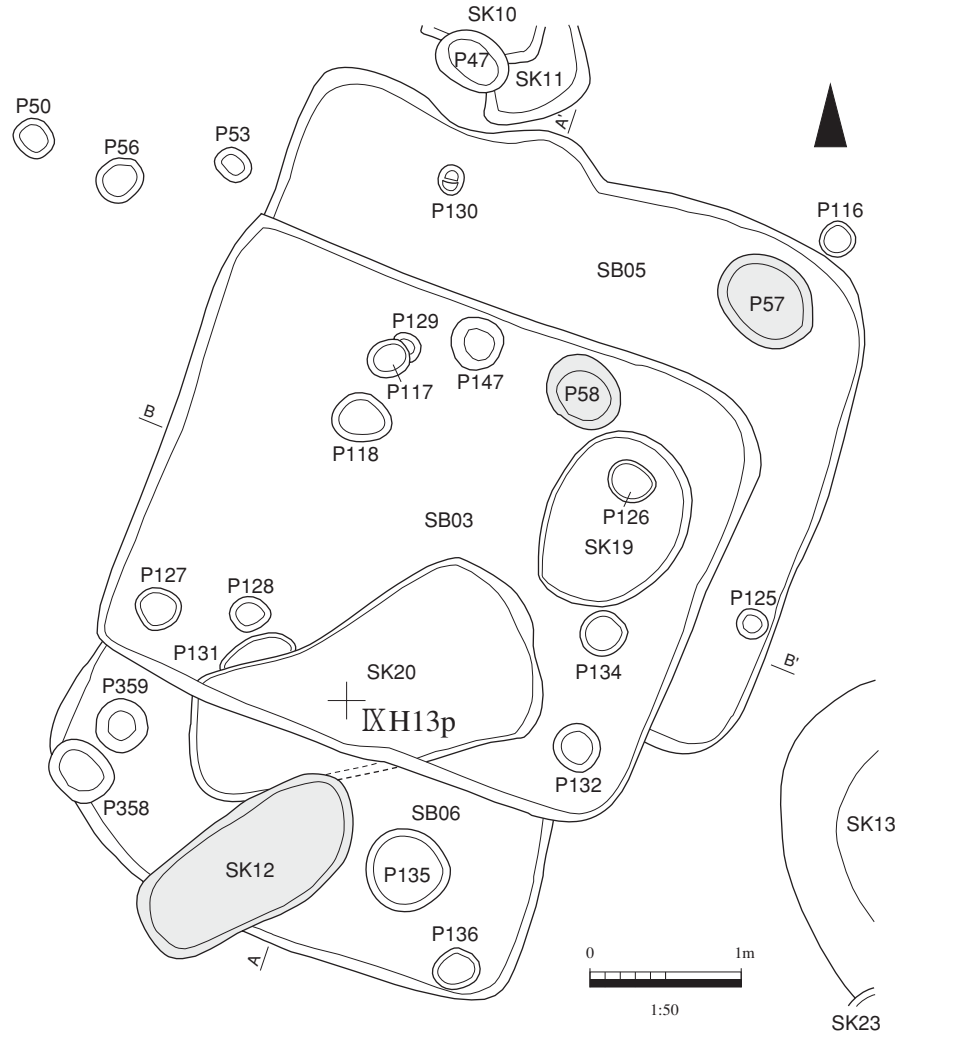
99BSB10・11　SB09の南に一部重なる複数棟の重複である。SB09との先後関係はSB11→SB09が判明している。2棟の先後関係はSB11→SB10である。

SB10は平面形が北西辺長3.5m、北東辺長4.1mのやや角の明瞭な隅丸長方形である。北西辺はグリッ

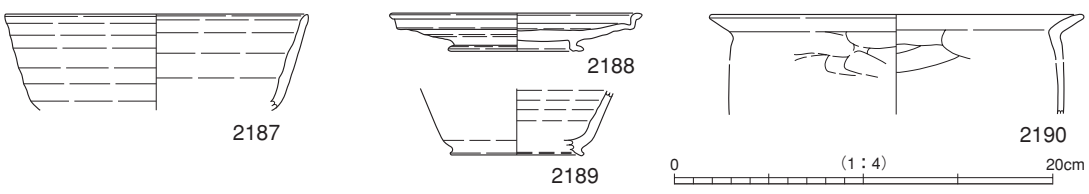


1　2.5YR5/6明赤褐色粘土（2.5YR4/1赤灰色粘土ブロック混じる）。

第237図　99DSB01・02平面・断面図



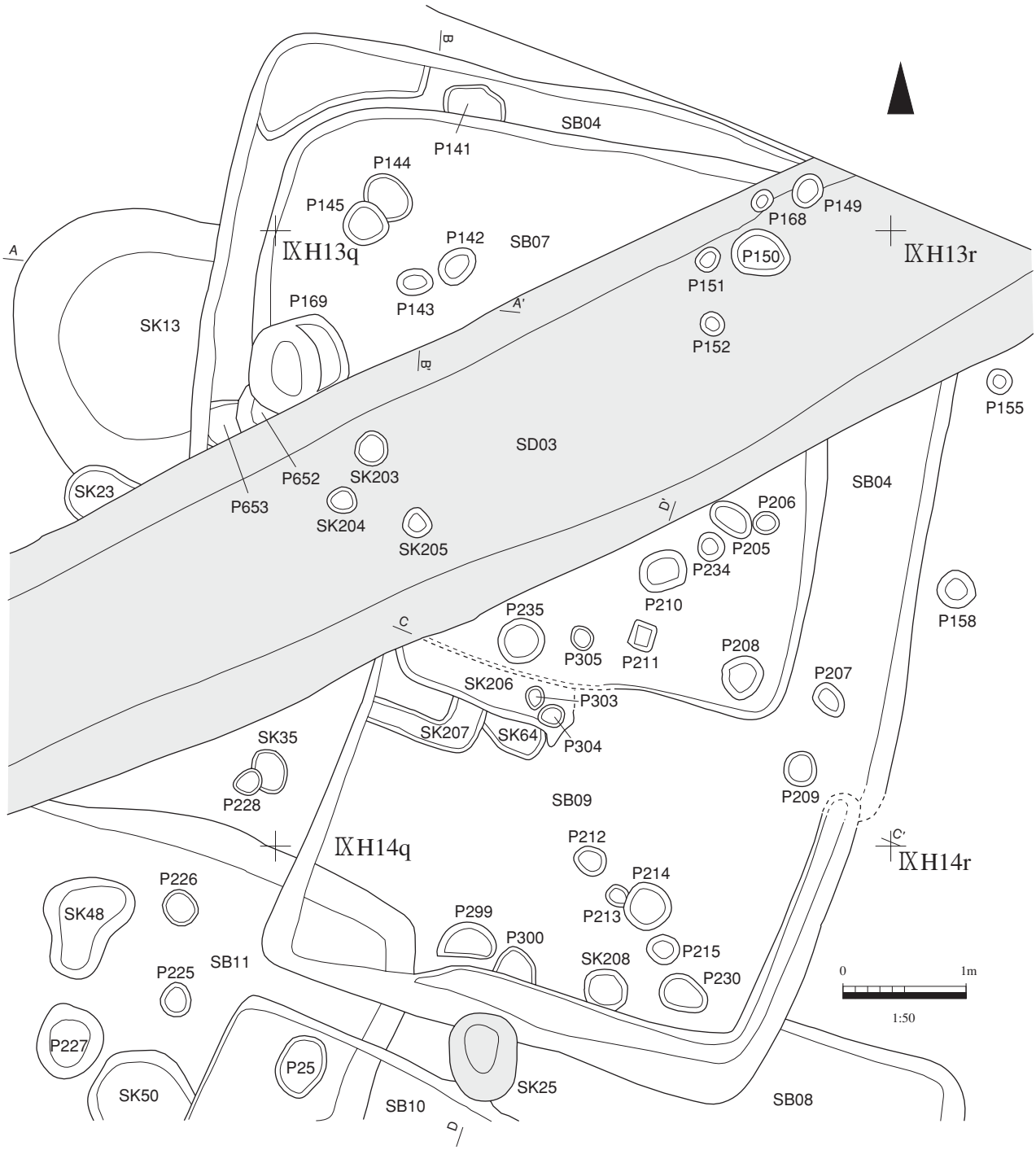
1 10YR3/1黒褐色シルト。
2 10YR5/2灰黄褐色シルト。
3 10YR5/1褐灰色シルトと7.5YR5/6明褐色シルトの斑土。
4 10YR5/1褐灰色シルト（7.5YR5/6明褐色シルトブロックを多少含む）。
5 7.5YR3/1黒褐色シルト（7.5YR5/6明褐色シルトブロックを下部に多く含む）。
6 5Y4/1灰色粘質シルト（7.5YR5/6明褐色シルトブロックを上部に多く含む）。
7 10YR5/1褐灰色シルト（7.5YR5/6明褐色シルトブロックを下部に多く含む）。



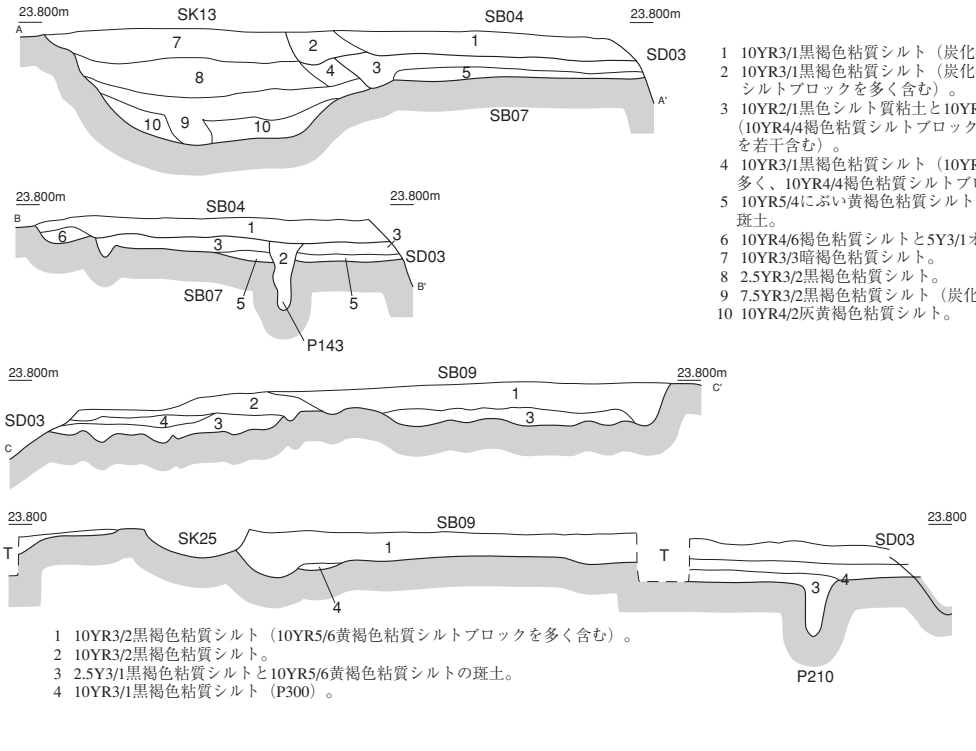
第 238 図　99DSB03・05・06 平面・断面図と出土遺物実測図

ド北から29°東へ振れる。深さは13cmである。周溝は東壁の一部に伴う。柱穴は特定しにくいが土層観察からP282が該当するであろう。また覆土層をみると2層が貼床になると考えられる。北壁中央付近の床面では「8」字形の被熱痕が認められ、竈が想定される。出土遺物は折戸10号窯式の須恵器（2210～2218）と土師器長胴甕（2220ほか）がある。しかし後述するSB11出土土器の時期よりは遡るため、混入した可能性が高い。建物の時期はやや下ると考えられる。

SB11は東辺長4.6mの平面形が隅丸正方形である。西辺はグリッド北から東へ22°振れる。深さは18cmある。竈、周溝はなく、柱穴も特定しにくい。貼床も特に実施していないようである。出土遺物は多く、

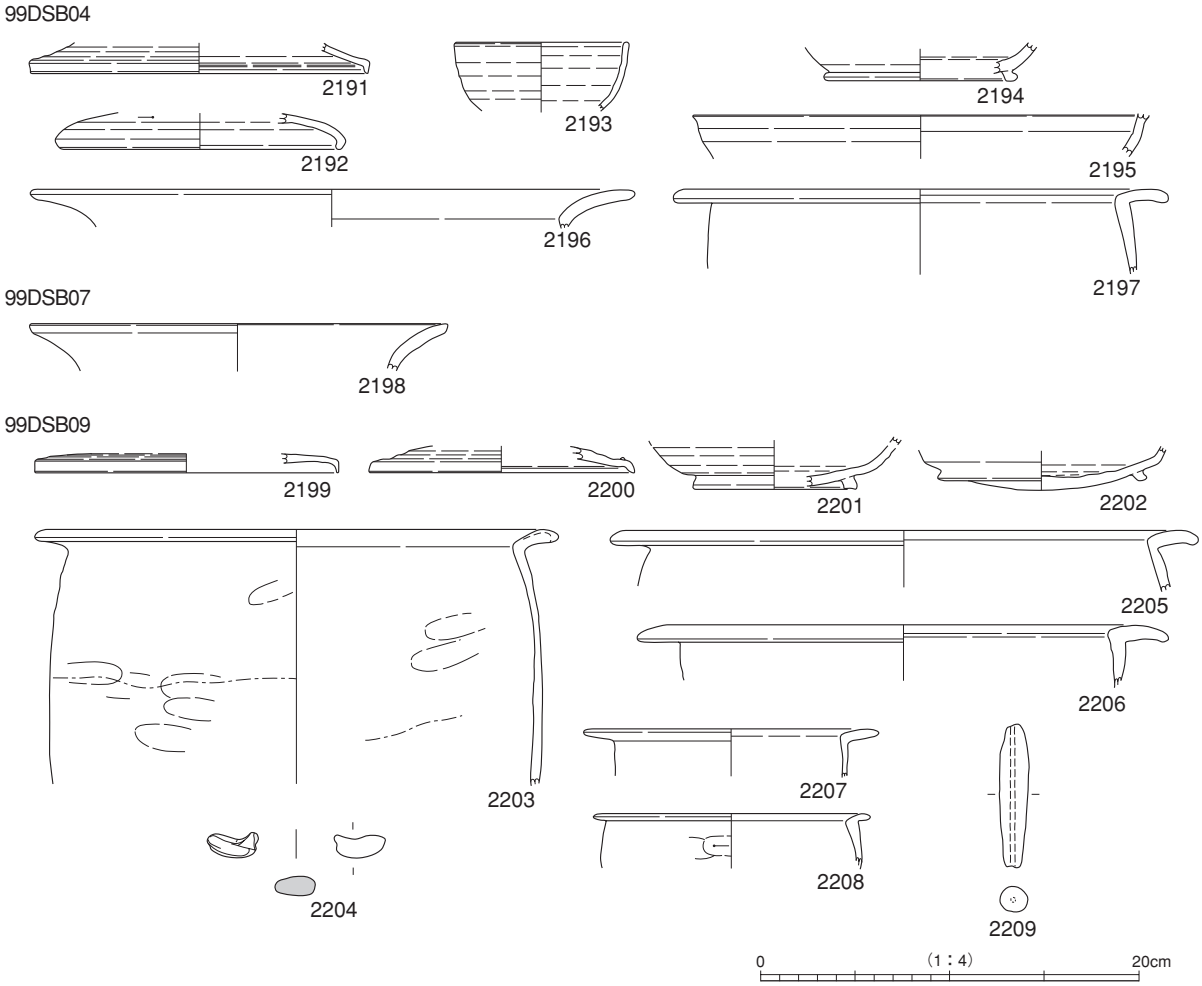


第239図　99DSB04・07・09平面図



1 10YR3/1黒褐色粘質シルト（炭化物・焼土ブロックを多少含む）。
2 10YR3/1黒褐色粘質シルト（炭化物を若干、7.5YR5/6明褐色粘質シルトブロックを多く含む）。
3 10YR2/1黒色シルト質粘土と10YR4/1褐灰色粘質シルトの斑土（10YR4/4褐色粘質シルトブロックを多少、炭化物・焼土ブロックを若干含む）。
4 10YR3/1黒褐色粘質シルト（10YR2/1黒色シルト質粘土ブロックを多く、10YR4/4褐色粘質シルトブロックを多少含む）。
5 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトと10YR3/1黒褐色粘質シルトの斑土。
6 10YR4/6褐色粘質シルトと5Y3/1オリーブ黒色粘質シルトの斑土。
7 10YR3/3暗褐色粘質シルト。
8 2.5YR3/2黒褐色粘質シルト。
9 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を若干含む）。
10 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト。

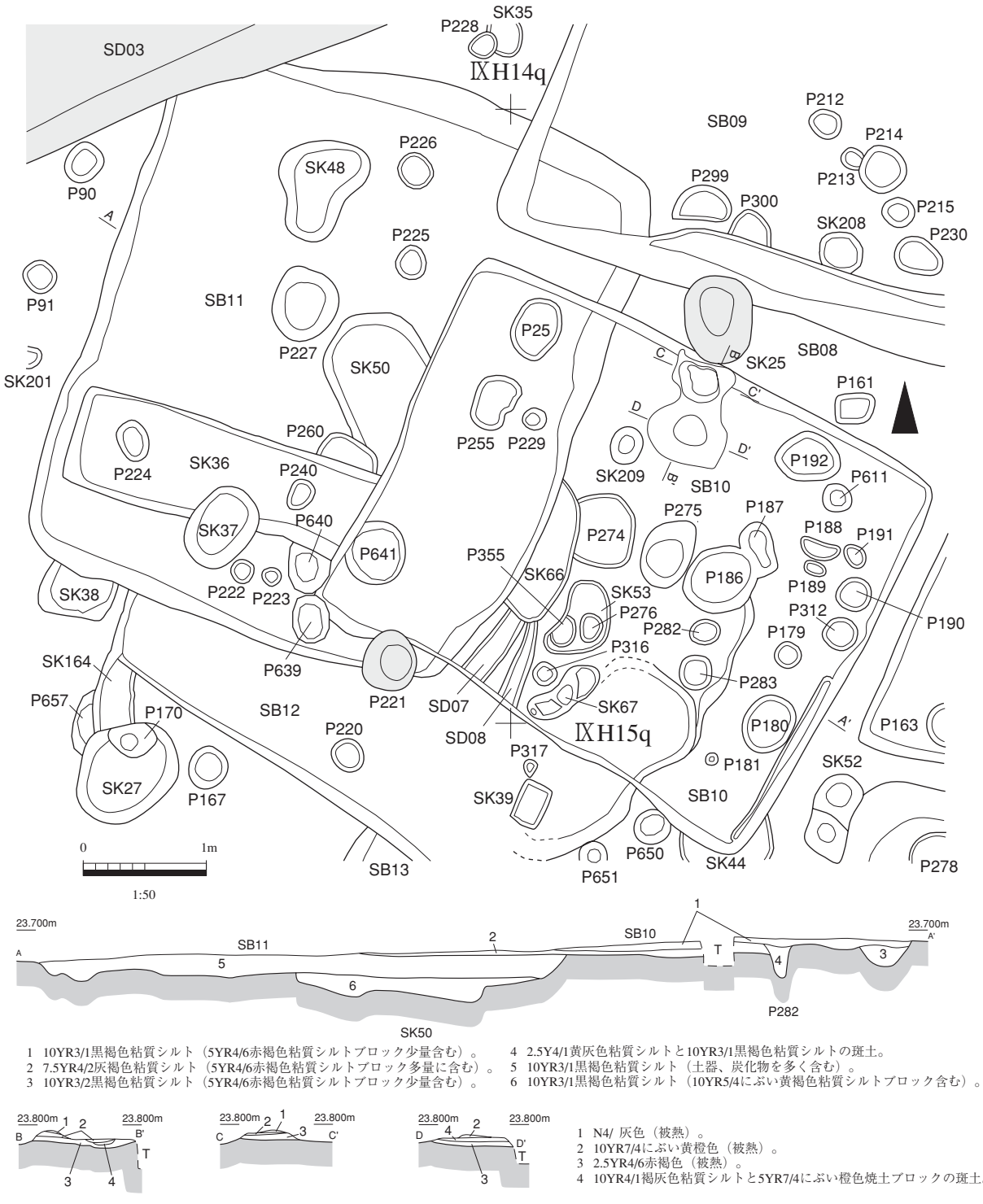
1 10YR3/2黒褐色粘質シルト（10YR5/6黄褐色粘質シルトブロックを多く含む）。
2 10YR3/2黒褐色粘質シルト。
3 2.5Y3/1黒褐色粘質シルトと10YR5/6黄褐色粘質シルトの斑土。
4 10YR3/1黒褐色粘質シルト（P300）。



第 240 図　99DSB04・07・09 断面図と出土遺物実測図

土器捨て場の様相である。須恵器は井ヶ谷78号窯式期が中心である。土師器甕には長胴甕と小型甕がある。2249や2250のような口縁が長めの長胴甕がある一方2247や2252のような口縁が上向きで底部にかけて細くなる傾向の甕はやや後出的と考えられる。また2249には把手（2255・2256）が付いていた可能性もある。土錘（2257 ～ 2260）は最大径が1.0cm程度と細く胎土に砂粒が少ないのが特徴である。

99DSB12・13・14　SB10の南側で複数棟が重複する。平面形が明瞭でないSB12はSB11に先行し、SB13



第241図　99DSB10・11平面・断面図

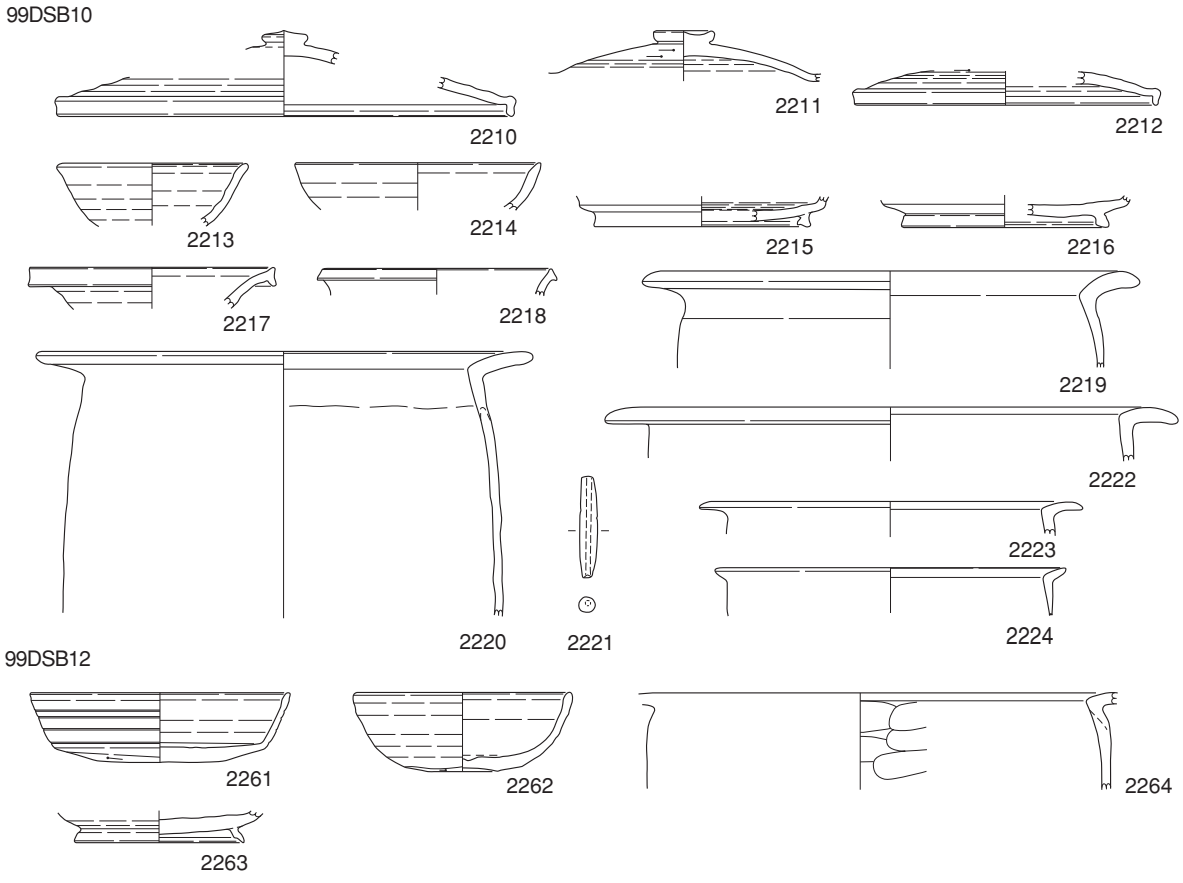
より後となる。またSB14はSB13より後となる。

SB12は南壁の一部が確認されたのみで規模は不明である。出土した須恵器は古相の杯（2262）と新相の高台付杯（2263）が混在している。SB13は東西長4.1m、深さ6cmで平面形は隅丸正方形と想定される。SB14は西辺長3.5mで平面形は隅丸正方形である。深さは15cmで竈や周溝、柱穴は確認されていない。

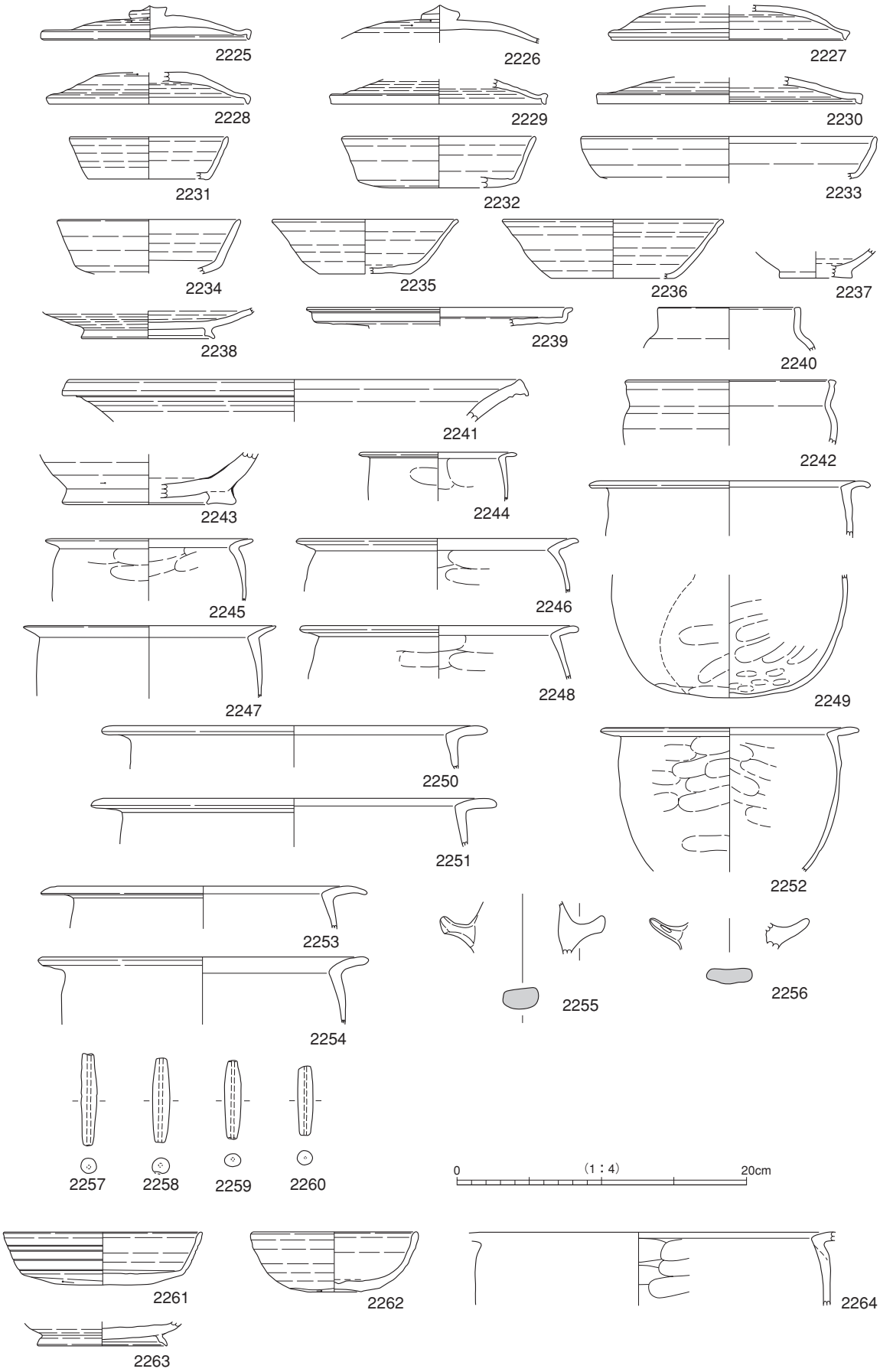
99DSB18　SB03の西2.5mに位置する。北西隅を中心に残存していた。西辺長3.9m以上でグリッド北から東へ20°振れる。深さ10cmで周溝は北西隅でわずかにみられた。柱穴は特定できない。覆土層は単一層で下層に99DSK51がある。ここからは折戸10号窯式の須恵器蓋が出土している（第396図-3037）。出土遺物は須恵器が折戸10号窯式～井ヶ谷78号窯式で、特記されるのが金属製紡錘車（M2）である。

99DSB17・19　谷地形（99DSX01）の上端近くに位置する。SB17は縄文時代の竪穴建物（99DSB16）と一部重複するが、周溝のみが確認された。東西長3.2mで平面形は隅丸正方形と想定される。西辺はグリッド北から東へ14°振れる。次にSB19であるが、SB17とは重複する可能性が高いものの具体的には判明していない。北東辺長2.6mで平面形はややくずれた隅丸正方形である。北西辺はグリッド北から東へ20°振れる。深さは25cmで、ある。出土遺物は須恵器の比較的完形に近いものが主体で鳴海32号窯式（2265・2269・2271）と折戸10号窯式（2266～2268・2270）がある。状態から一括して廃棄された可能性が高い。

99DSB20・21　調査区中央よりやや東よりに位置する。両者は重複関係にあり、SB20がSB21に先行す



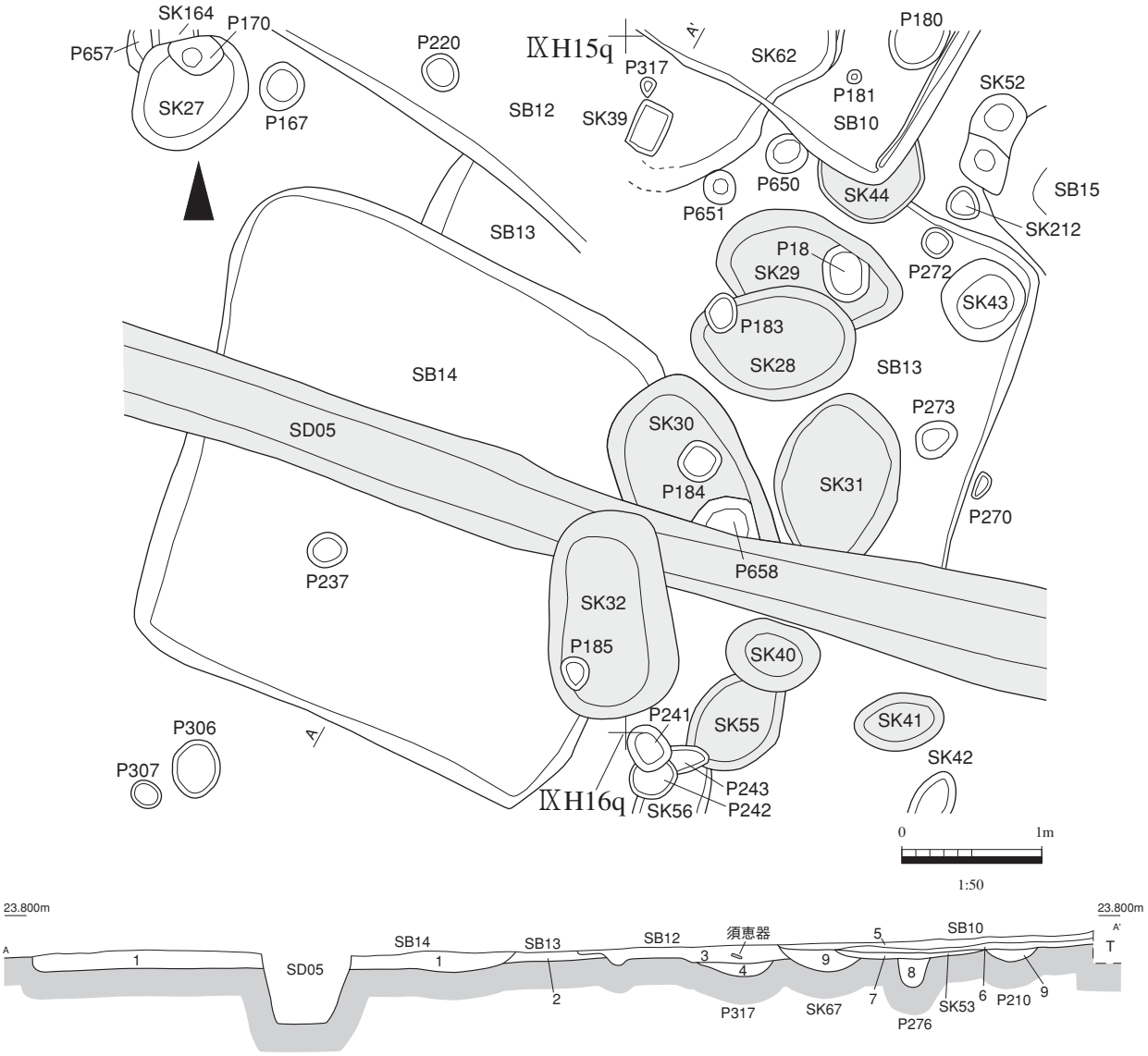
第242図　99DSB10・12出土遺物実測図



第 243 図　99DSB11 出土遺物実測図

る。99DSB20の西辺はグリッド北から東へ21°振れる。平面形は隅丸長方形で、西辺長5.05m、北辺長6.15mとやや東西に長い。確認面からの深さは15cmである。床面では多数の土坑が確認された。そのいずれもがきわめて不整形な平面形である。SB20床面ほぼ全域にわたる99DSK88は、SB20以前にあった99DSK95があったために調査時に必要以上に掘り下げてしまったものである。SK78同様にSB20の掘形を埋めた貼床部分と考えられる。

SB20では北・西壁付近に大小6つの炉の痕跡とみられる被熱箇所が確認した。炉20A・20Cは一部が西壁から突出する一方、炉20B・Dは壁に接していない。また炉20E・Fは竈のような位置でもある。こ

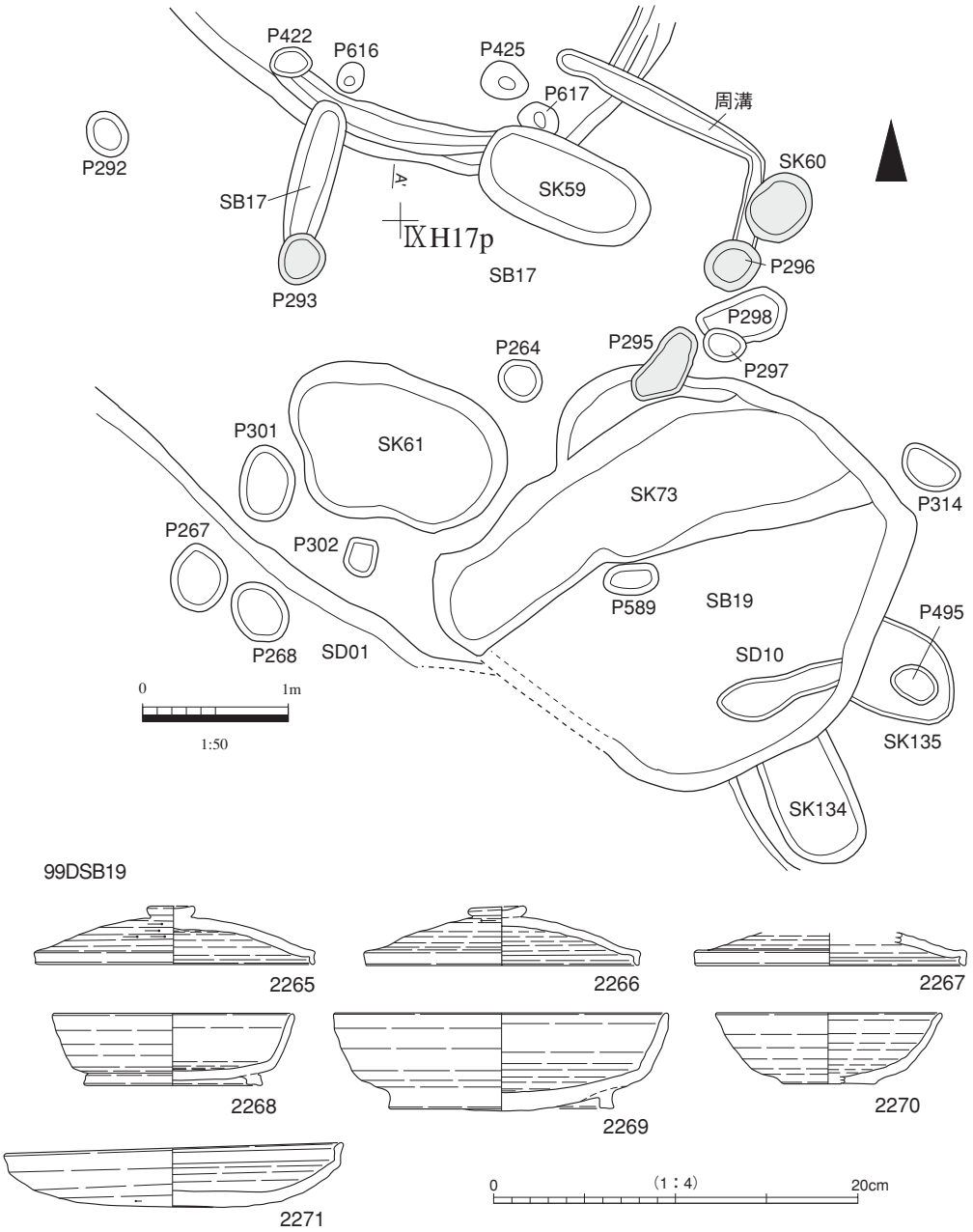


1 5YR3/2暗赤褐色粘質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロックを多く含む）。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロック含む）。
3 10YR3/1黒褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。
4 5Y4/1灰色粘質シルト（5Y5/2灰オリーブ色粘質シルトブロック少量含む）。
5 10YR3/1黒褐色粘質シルト（5YR4/6赤褐色粘質シルトブロック、炭化物含む）。
6 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（5YR4/6赤褐色粘質シルトブロック含む）。
7 7.5YR3/1黒褐色粘質シルト（5YR4/6赤褐色粘質シルトブロック含む）。
8 5YR4/1褐灰色粘質シルト。
9 7.5YR4/1褐灰色粘質シルトと5YR5/4にぶい赤褐色粘質シルトの斑土。

第244図　99ASB13・14平面・断面図

れらの被熱の度合いは後述するSB21の炉ほどではない。しかし1棟の建物内で5つ以上の被熱痕がみられる例は水入遺跡ではここだけである。鍛冶炉の可能性については出土遺物からは肯定しがたい。むしろ多数出土した土師器甕の存在から、厨房的な施設だったと推測される。

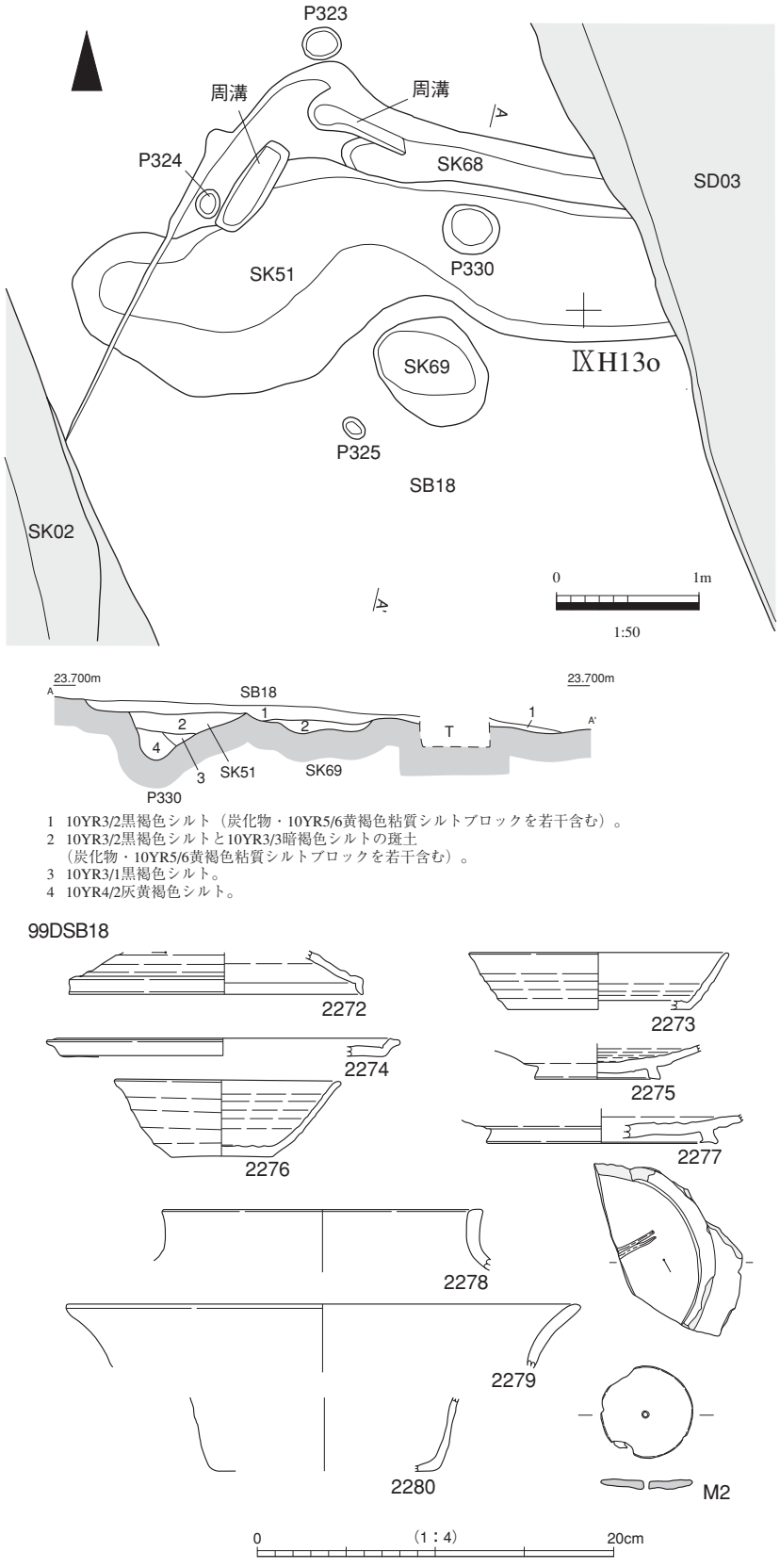
遺物は貼床（SK88）からも多数出土しているが、覆土層出土のものと概して時期は変わらない。ただし99DSK95出土土師器の方が新しくなるのが確実で、SB20・21出土土器の年代観は概ね折戸10号窯式～井ヶ谷78号窯式と判断される。SK95出土の土器は土師器甕が主体である。須恵器蓋（2337）と盤（2339）は井ヶ谷78号窯式である。土師器甕は大型（長胴）甕が2タイプある。2342は口縁が上向きで端部が面取りされる。2345は口縁が長く端部がやや垂れる。後者がやや古相、前者が新相となろう。中型甕（2343・2344）および小型甕（2340・2341）は2342を小さくしたものである。



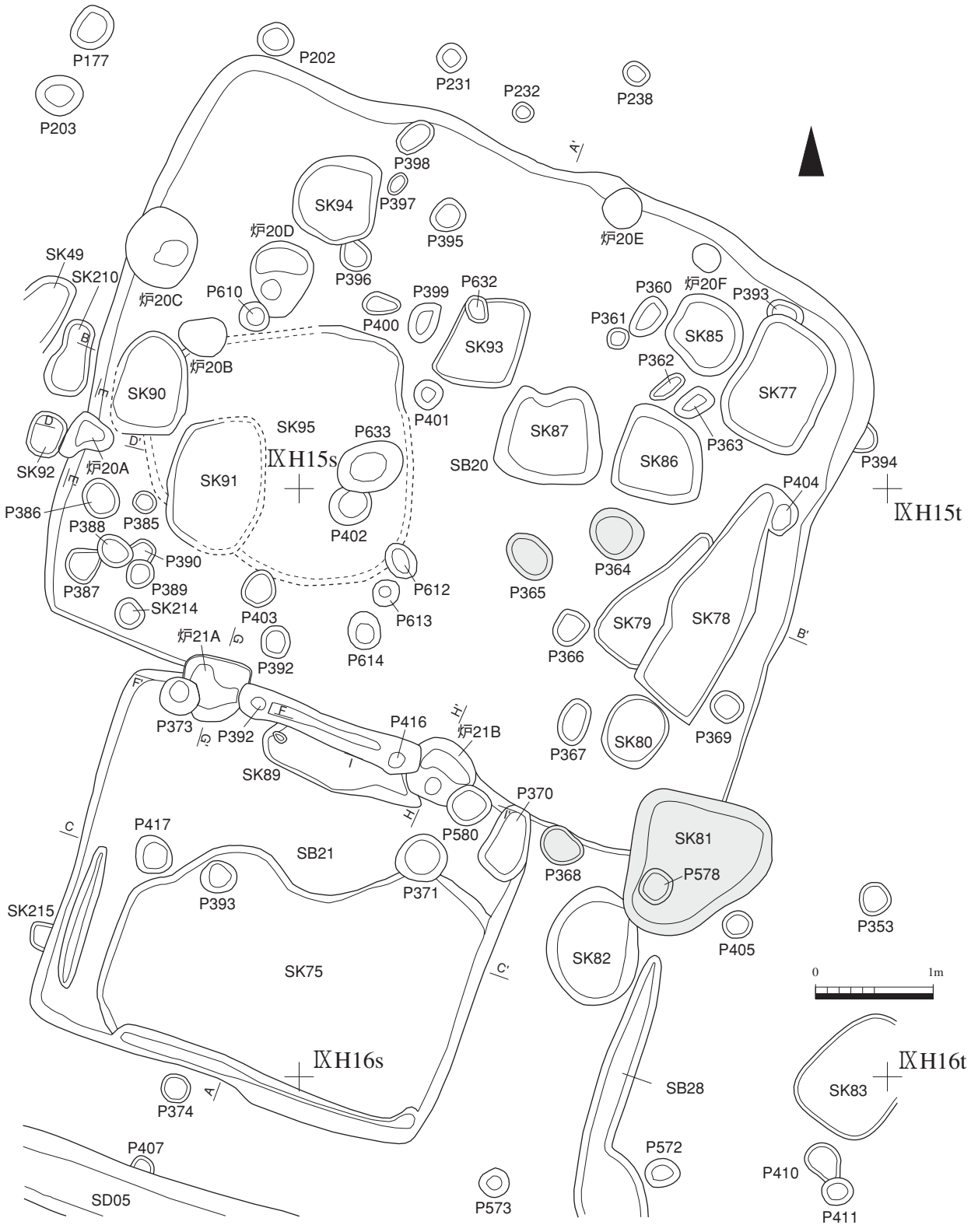
第245図　99DSB17・19平面図と出土遺物実測図

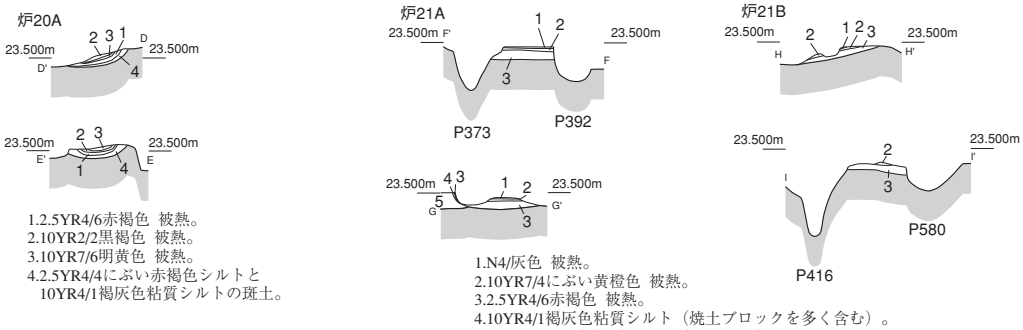
99DSB21の西辺はグリッド北から東へ20°振れる。平面形は隅丸長方形で、西辺長3.15m、南辺長3.55mとやや東西方向に長い。確認面からの深さ7cmである。床面では深さ10～15cmの土坑（99DSK75・89）が確認されているが、おそらくSB21の掘形と考えられる。該当部分には貼床（7層）がなされる。周溝は北・西・南壁直下で確認されたが、これらは繋がっていない。柱穴は北西隅（99DP373）・北東隅（99DP580）があり、隅部に柱穴が配置されるタイプである。

この竪穴建物の北壁北西隅付近が15cm突出する丸みの強い一辺55cmの方形炉がある（炉21A）。この方形張り出し部は壁面が焼けて赤変しきわめて硬くなっている。通常の竈とするにはかなり強い火力であり疑問が残る。これと同様の規模のものが北壁北東隅付近にもある（炉21B）。これらの炉は位置関係からSB21に伴う可能性が高いのだが、柱穴（P373・P580）に一部が壊されている点は注意を要する。すなわち2基の炉を壁面に設置した段階



第246図　99DSB18平面・断面図と出土遺物実測図





1.2.5YR4/6赤褐色 被熱。
2.10YR2/2黒褐色 被熱。
3.10YR7/6明黄色 被熱。
4.2.5YR4/4にぶい赤褐色シルトと
10YR4/1褐灰色粘質シルトの斑土。

1.N4/灰色 被熱。
2.10YR7/4にぶい黄橙色 被熱。
3.2.5YR4/6赤褐色 被熱。
4.10YR4/1褐灰色粘質シルト（焼土ブロックを多く含む）。
5.10YR4/1褐灰色粘質シルト（SB20埋土）。

第247図　99DSB20・21 平面・断面図

とその使用停止後におそらく通常の居住用に改変した段階があると考えられる。炉の用途については鍛冶関連遺物が全く出土しなかったので鍛冶炉の可能性は低い。なお炉については熱残留地磁気年代測定を実施し、西暦780年を中心とする年代が推定されている。土器は覆土中出土のものが井ヶ谷78号窯式である。SK89からは一部重なるように3点の須恵器・灰釉陶器椀が一括で出土した。灰釉陶器は黒笹14号窯式である。

99DSB22・23・27　調査区東壁で一部途切れるかたちで確認された重複する複数棟である。確認された範囲の少ないSB27は土坑の可能性もある。それ以外はSB22→SB23という先後関係が判明した。

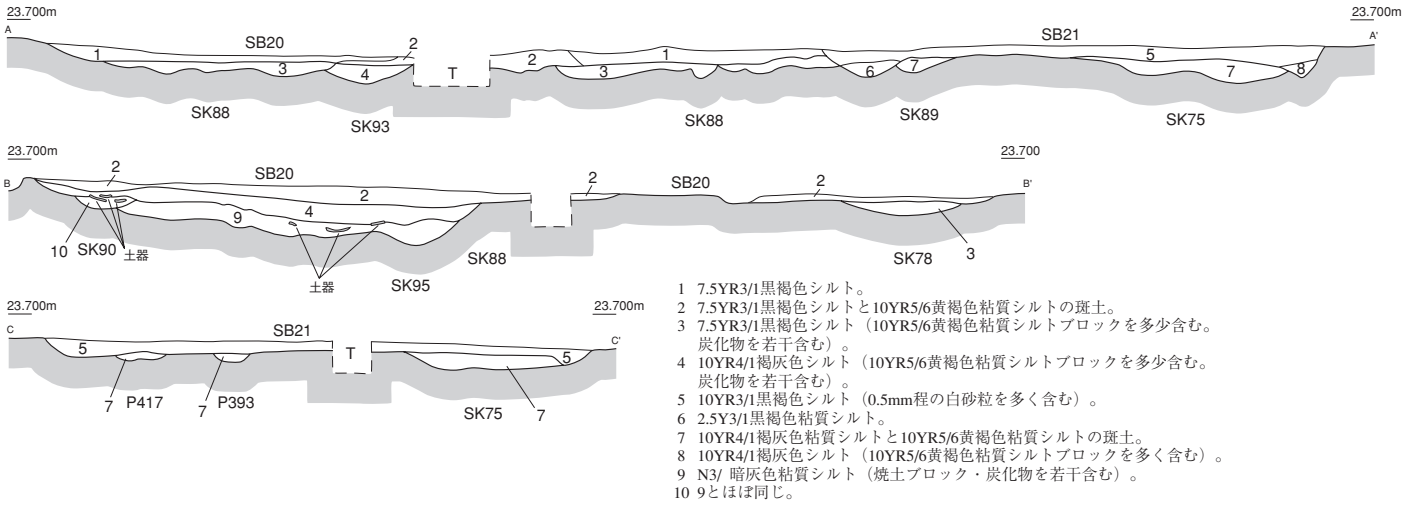
SB22は西辺長3.2mの平面形が隅丸正方形である。西辺はグリッド北から東へ18°振れる。深さは10cmである。竈や周溝は確認されていない。柱穴は四隅に配置されるタイプで99DP563・564が該当する。出土遺物は須恵器盤（2349）と土師器甕（2350・2351）がある。

SB23は北西辺長2.25mの丸みの強い隅丸正方形で北西辺はグリッド北から東へ49°振れる。深さは9cmである。

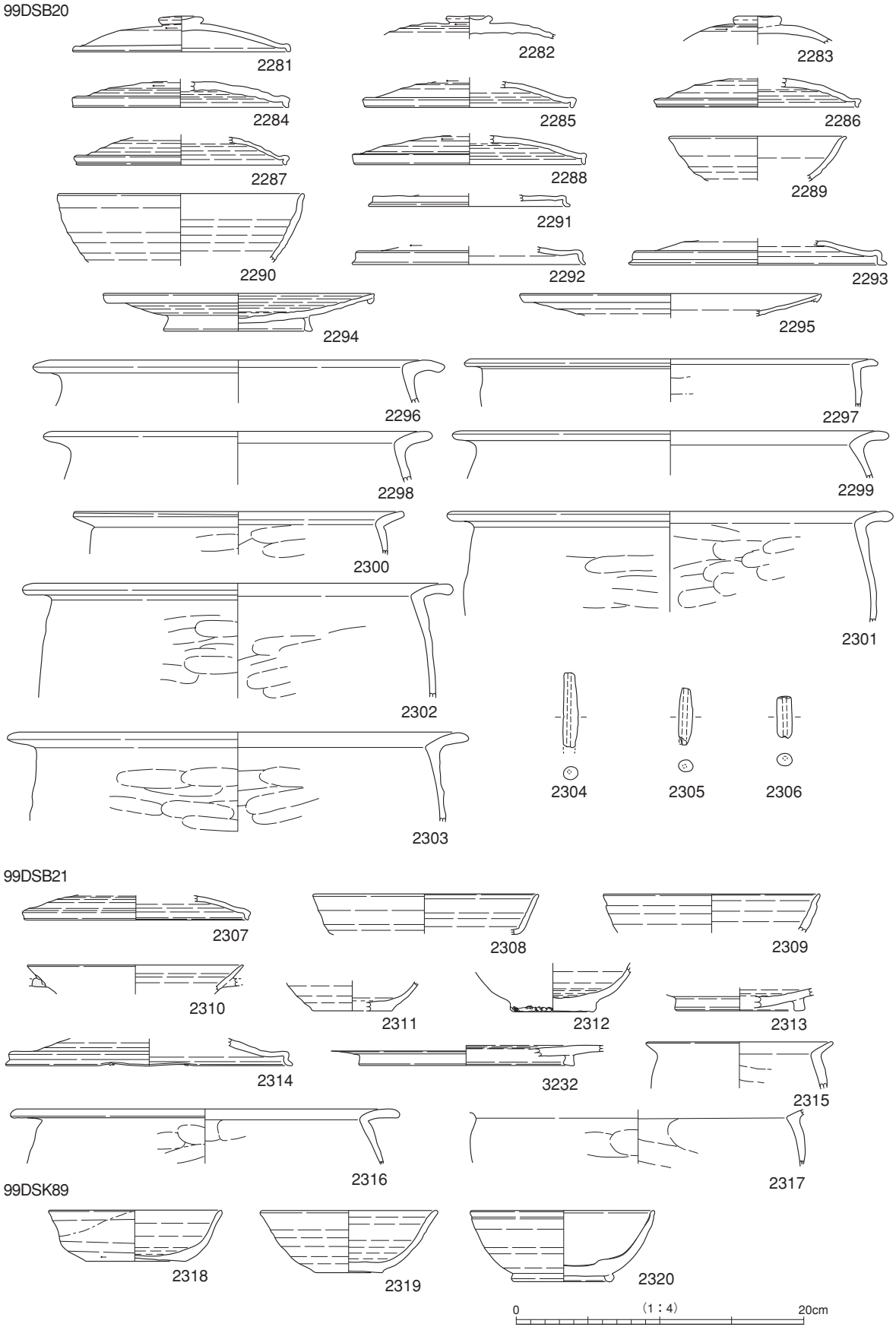
99DSB24　谷地形（99DSX01）上端付近に位置し、99DSB25に先行する。北西辺長3.7m以上の平面形が隅丸正方形と推定される。深さ12cmだが、西壁から約1mまでの床面は数cm高い。周溝はない。

99DSB25　重複関係では99DSB24より後になる。西辺長4.65mの平面形が隅丸正方形である。西辺はグリッド北から東へ11°振れる。深さは13cmである。東・南壁にそって周溝状の凹みがみられるが埋めて床が整えられており、掘形であろう。ただ西壁際は床面が数cm高くなってそこに凹みがあってこちらは周溝かもしれない。竈はなく、柱穴も特定しにくい。覆土層は単一層で地山ブロックが入ることから埋め戻しと考えられる。出土土器は須恵器供膳具が折戸10号窯式～井ヶ谷78号窯式で、土師器甕も当該期である。

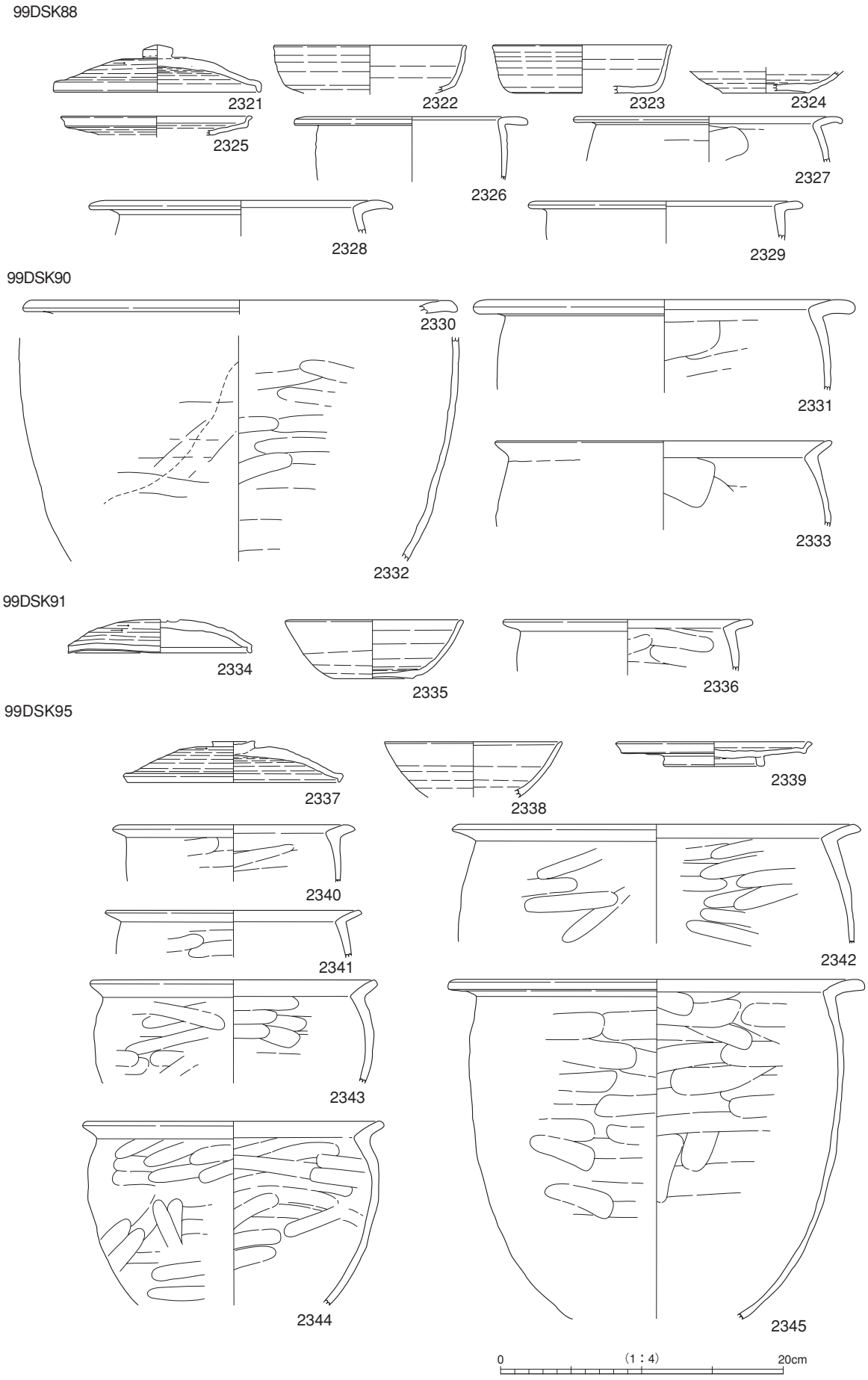
99DSB28　SB21の東1mにてこれと並列する位置にある。周溝のみが検出された。それによると平面形は南辺長3.28mの隅丸正方形と推定され、西辺はグリッド北から東へ15°振れる。規模が99DSB21と似



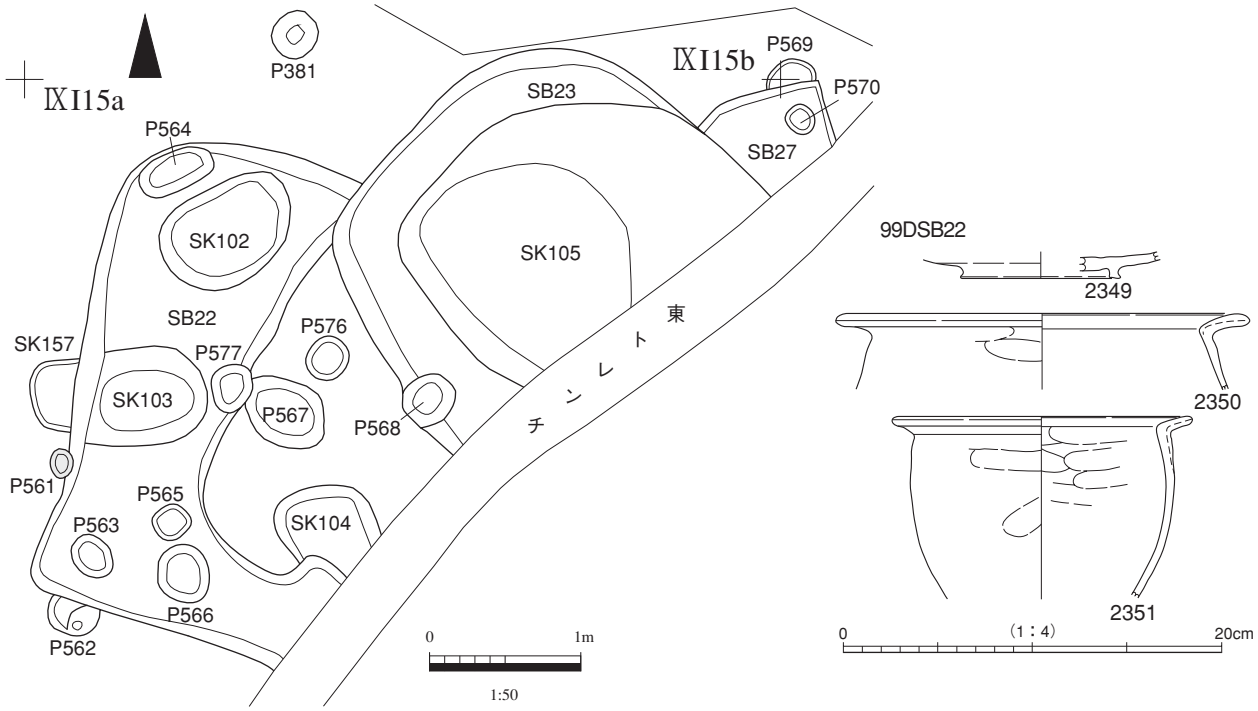
第248図　99DSB20・21断面図



第 249 図　99DSB20・21・SK89 出土遺物実測図



第 250 図　99DSK88・90・91・95 出土遺物実測図

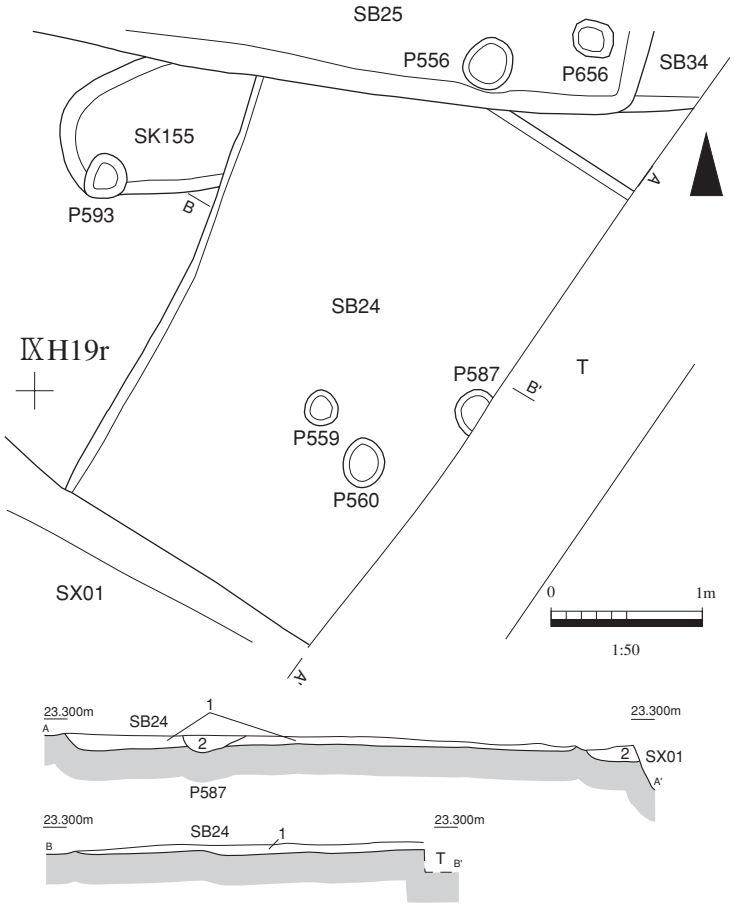


第 251 図　99DSB22・23・27 平面図と出土遺物実測図

ており一連のものとも考えられる。ただこちらは竈（あるいは炉）が確認できなかった。また柱穴も特定できていない。出土遺物はない。

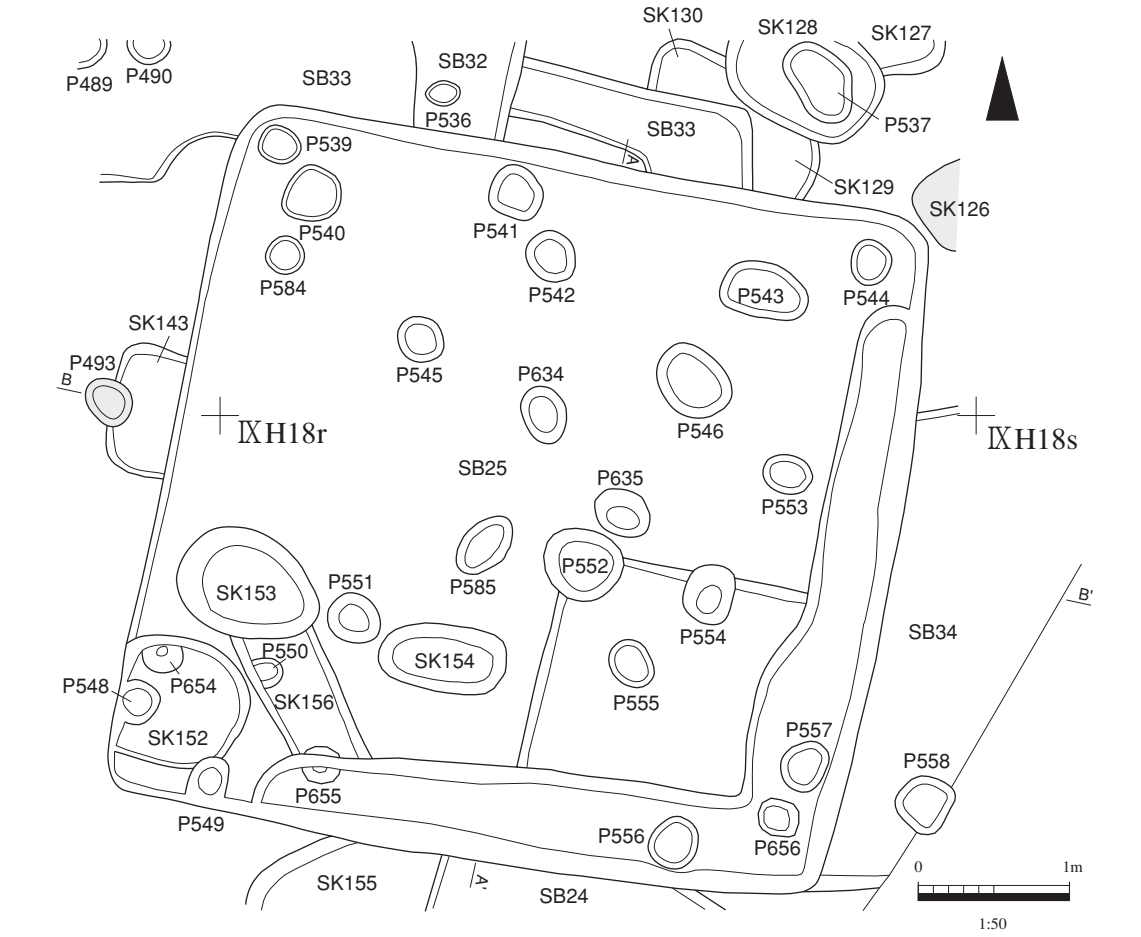
99DSB26・29　99DSB25 の北 2m に位置する重複する複数棟である。縄紋時代の竪穴建物（99DSB30）の後に SB26 → SB29 という先後する。SB26 は北辺長 3.1m の平面形がやや不整な隅丸正方形である。西辺はグリッド北から東へ 20° 振れる。深さは 20cm である。竈や周溝は確認されておらず遺物の出土もなかった。

99DSB29 は西辺長 3.55m の平面形が隅丸正方形で西辺はグリッド北から東へ 15° 振れる。削平が著しく掘形の深い部分が残るのみである。したがって竈は不明で柱穴も特定できていない。覆土層は最深で 20cm の貼床（1・2 層）がみられる。遺物は

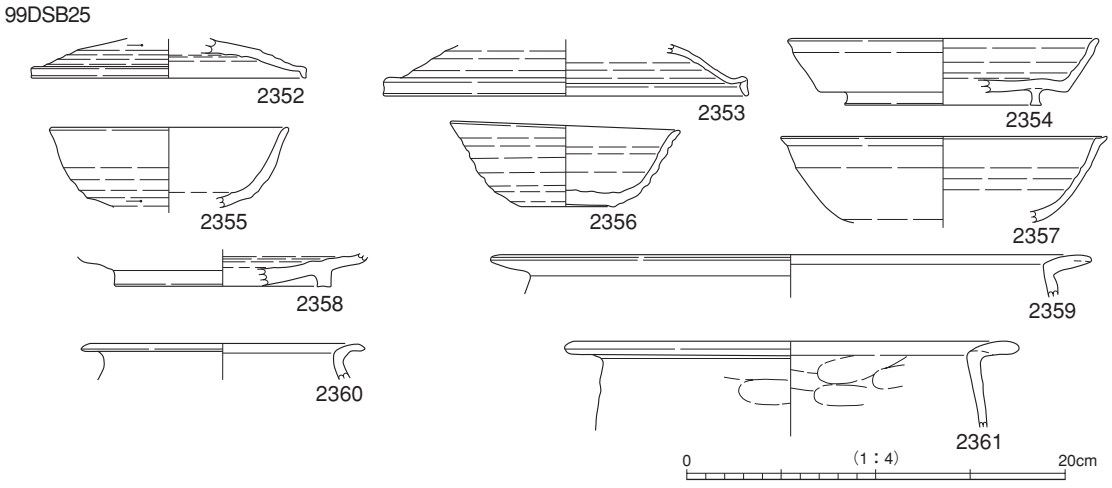


1　2.5Y2/1黒色シルトと2.5Y5/1黄灰色シルトの斑土。
2　10YR3/1黒褐色シルト（2.5Y5/1黄灰色シルトブロックを多く含む）。

第 252 図　99DSB24 平面・断面図



1 10YR2/1黒色粘質シルト（10YR5/6黄褐色粘質シルトブロックを多少含む）。
2 10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトと10YR3/1黒褐色粘質シルトブロックの斑土。
3 N3/ 暗灰色粘質シルト。
4 10YR4/1褐灰色シルト。
5 10YR3/1黒褐色シルト。
6 5YR3/4暗赤褐色シルト。焼土塊。

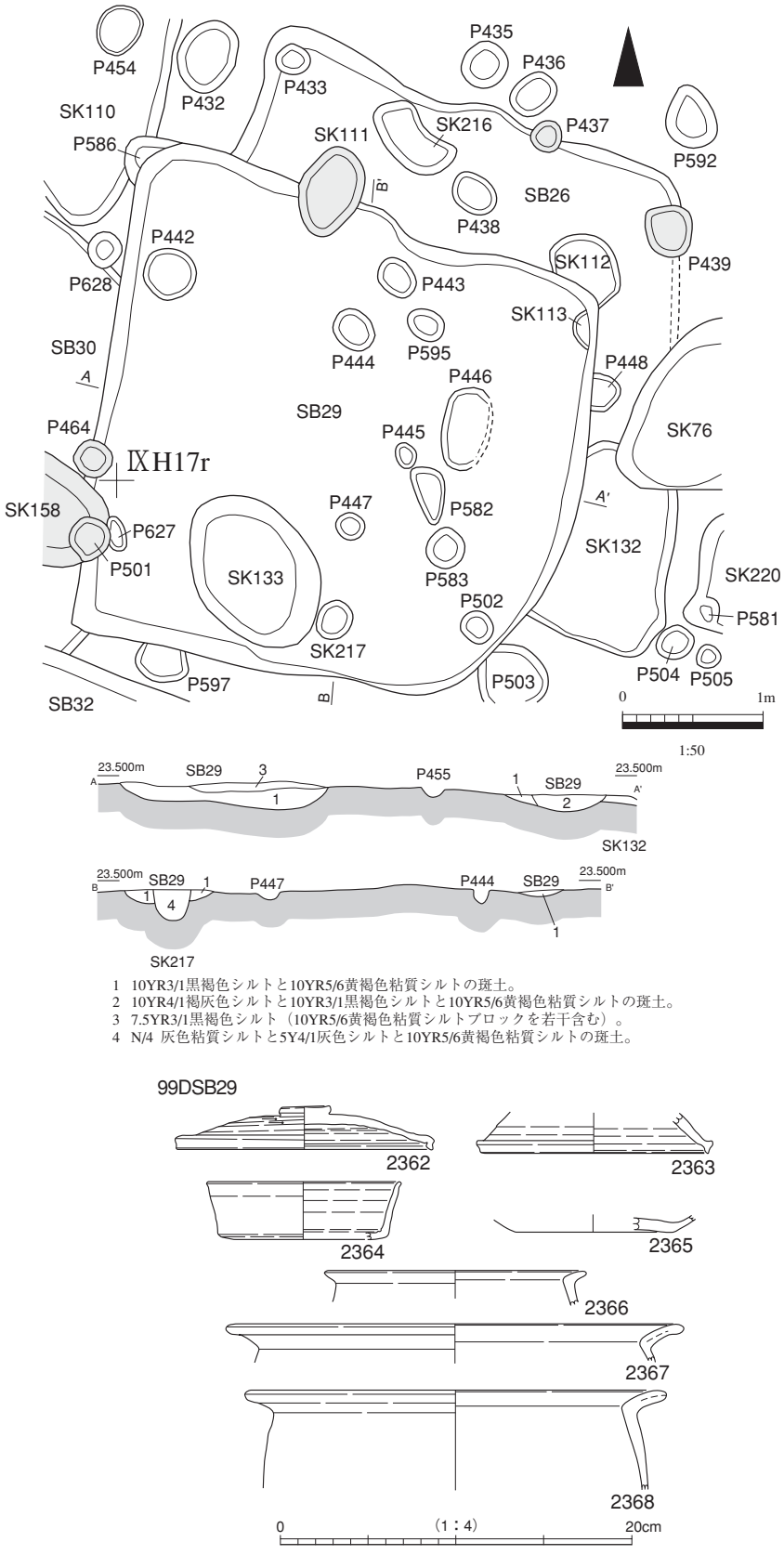


第 253 図　99DSB25 平面・断面図と出土遺物実測図

この貼床層からの出土で須恵器は折戸10号窯式、土師器甕は口縁が短小化傾向にあってやや時期が新しくなるであろう。

99DSB31・32・33　99DSB25に先行する複数棟の重複であるが、谷地形に向って緩傾斜が始まる地点でもありいずれも北壁とその周辺のおそらく掘形に該当する部分しか検出されていない。それら先後関係はSB31・33→SB32となる。SB31は北辺長2.75m以上の隅丸方形で西辺はグリッド北から東へ11°振れる。SB32は北辺長3.68mの隅丸方形で東辺はグリッド北から東へ21°振れる。SB33は北辺長4.9mの隅丸方形で西辺はグリッド北から東へ9°振れる。遺物はSB31掘形を埋めた土（貼床か）から出土した。須恵器蓋（2346・2347）は鳴海32号窯式期～折戸10号窯式期、灰釉陶器皿（2348）は角張った高台から黒笹14号窯式と考えられる。

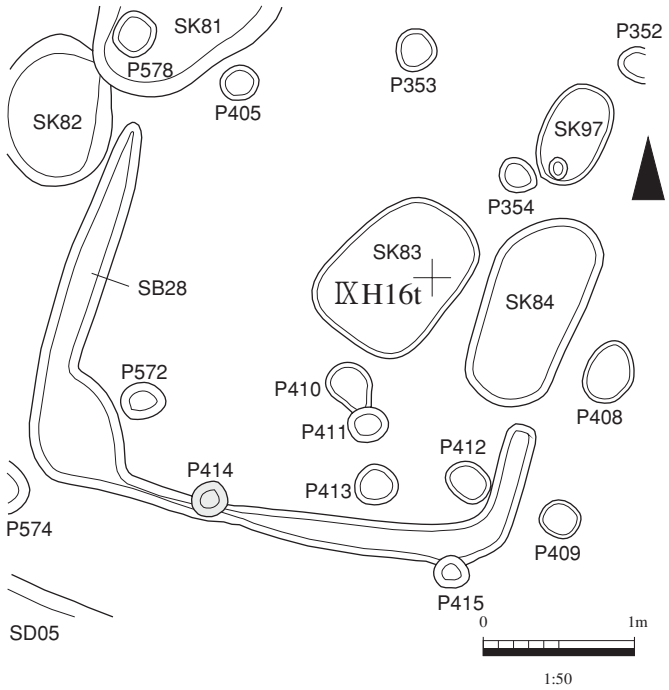
98DSB01　調査区のほぼ中央に位置する。北東隅を98SD01に壊される以外は他の竪穴建物との重複関係はない。西辺はグリッド北から東へ15°振れる。平面形はほぼ隅丸正方形で、南辺長5.15m、西辺長5.2mで、深さは25cmである。



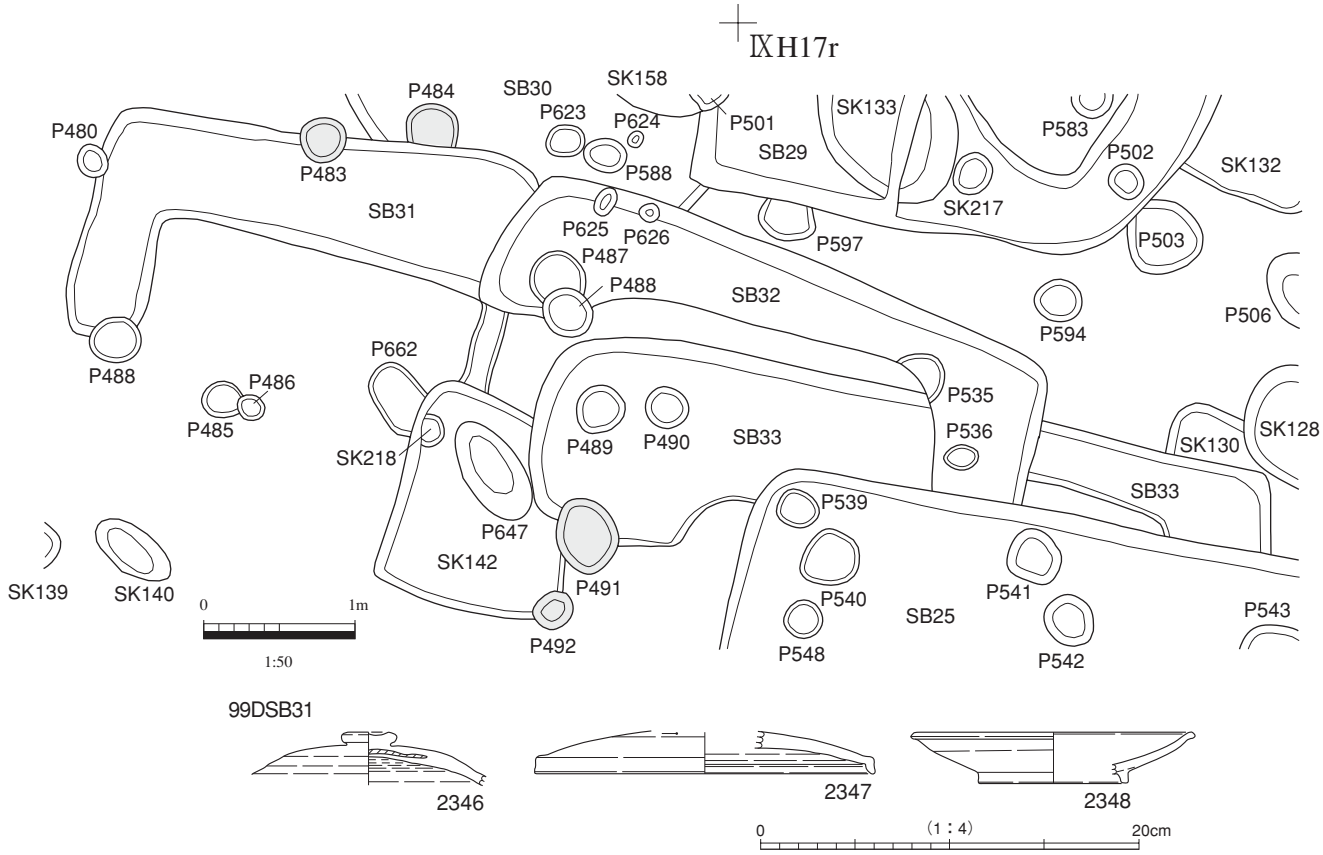
第254図　99DSB26・29平面・断面図と出土遺物実測図

西壁に造り付け竈の痕跡がある。貼床はないとみられる。覆土はほぼ単一層とみられ、一気に埋め戻されたと考えられる。遺物は床面からの出土はほとんどなく、覆土中から小片が出土した。須恵器蓋（2369・2370）は高蔵寺2号窯式である。他に土師器長胴甕口縁部（2377）や製塩土器脚部（2378）がある。

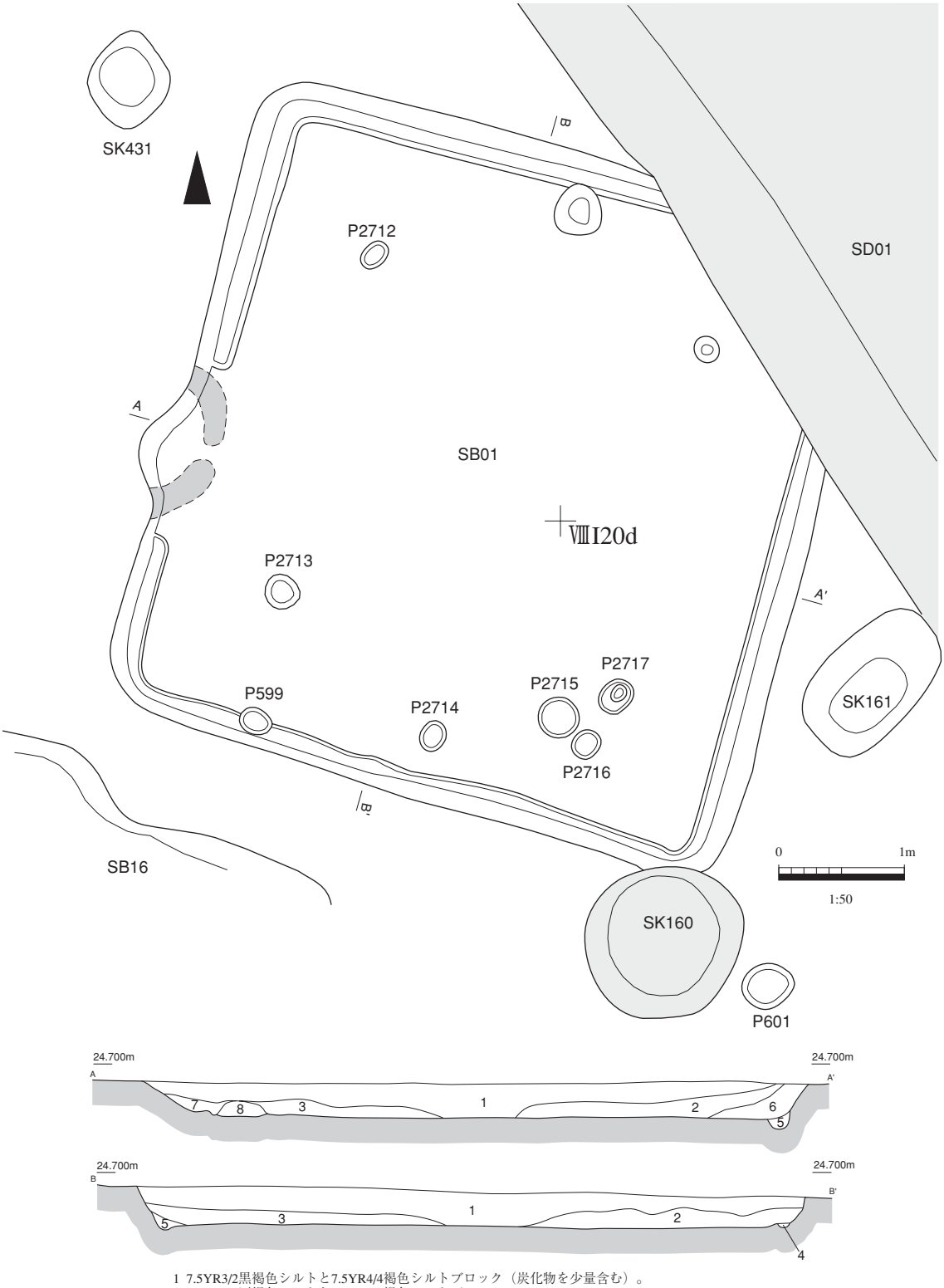
98DSB02　調査区のほぼ中央に位置する。中世の土坑墓などが上に重なる。北東辺はグリッド北から西へ27°振れる。平面形は隅丸正方形で、南西辺長3.6mである。確認面からの深さは20cmである。竈の痕跡はなかった。遺物は確認面近くで岩崎17号窯式の須恵器甕（2379）がほぼ完形の状態で出土した。注口部周辺に融解した金属の付着が認められる。また



第255図　99DSB28平面図

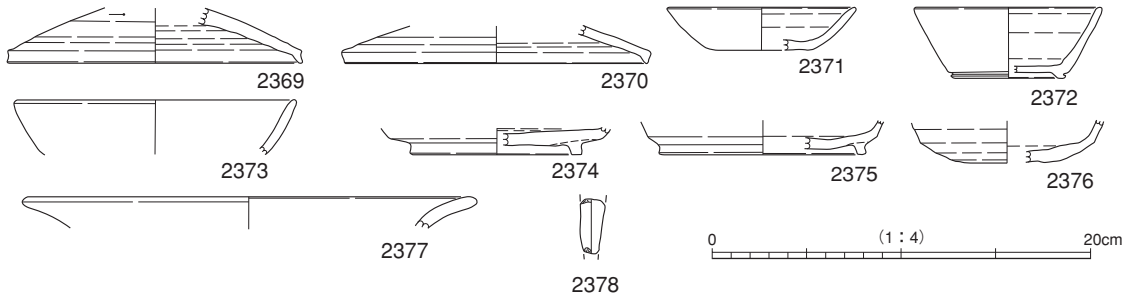


第256図　99DSB31・32・33平面図と出土遺物実測図



1 7.5YR3/2黒褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック（炭化物を少量含む）。
2 7.5YR4/2灰褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック。
3 7.5YR4/2灰褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック（但し、ブロックが2層より多く含まれる）。
4 5YR4/2にぶい赤褐色シルトと7.5YR4/4灰褐色シルトブロック。
5 7.5YR5/3にぶい褐色シルトと7.5YR4/2灰褐色シルトブロック（極少量混入）。
6 7.5YR3/2黒褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック（径1～2mmの砂粒を少量含む）。
7 5YR4/2灰褐色シルト（炭化物を少量含む）。
8 5YR3/2暗赤褐色砂質シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック。
炭化物を含み、固くしまっている。焼土はあまりみられない。土全体に砂質感がある。

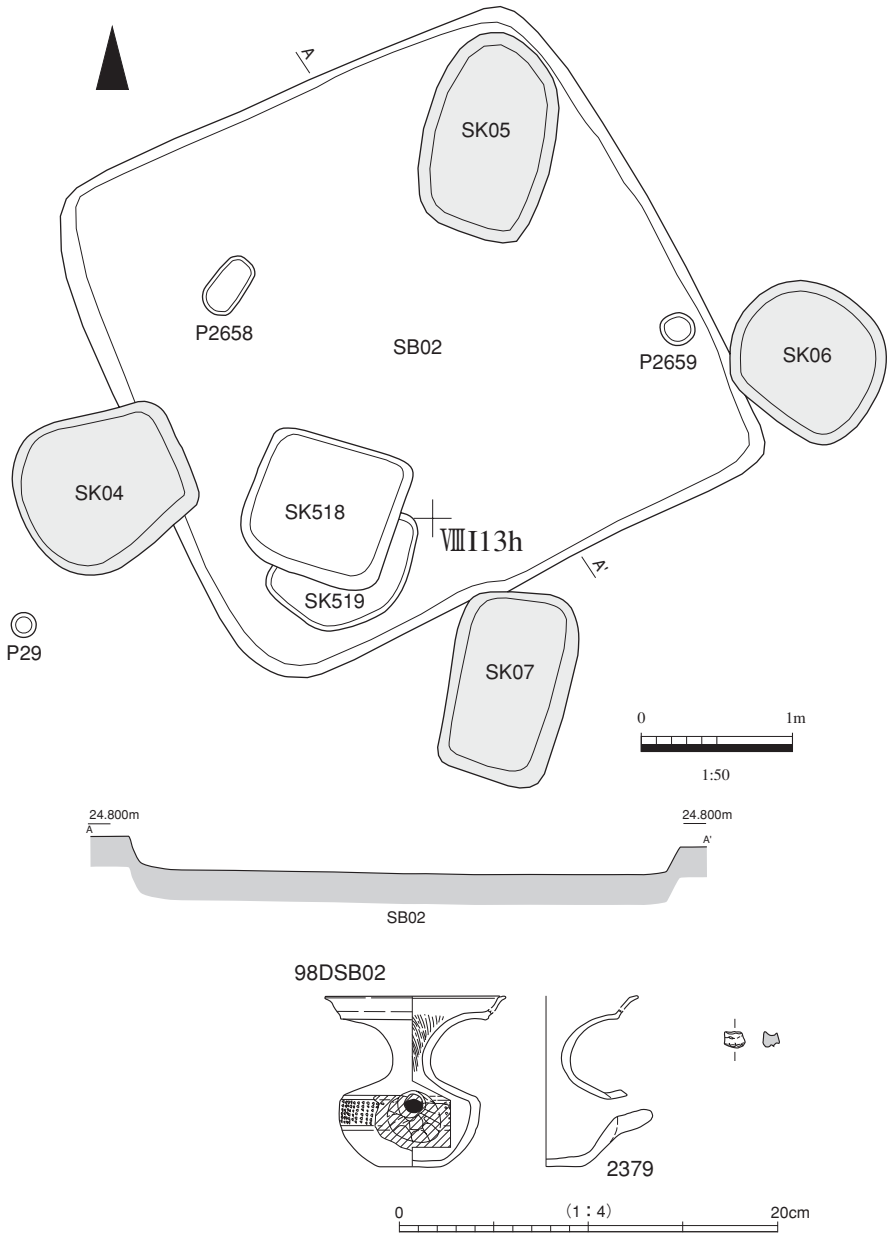
第257図　98DSB01平面・断面図



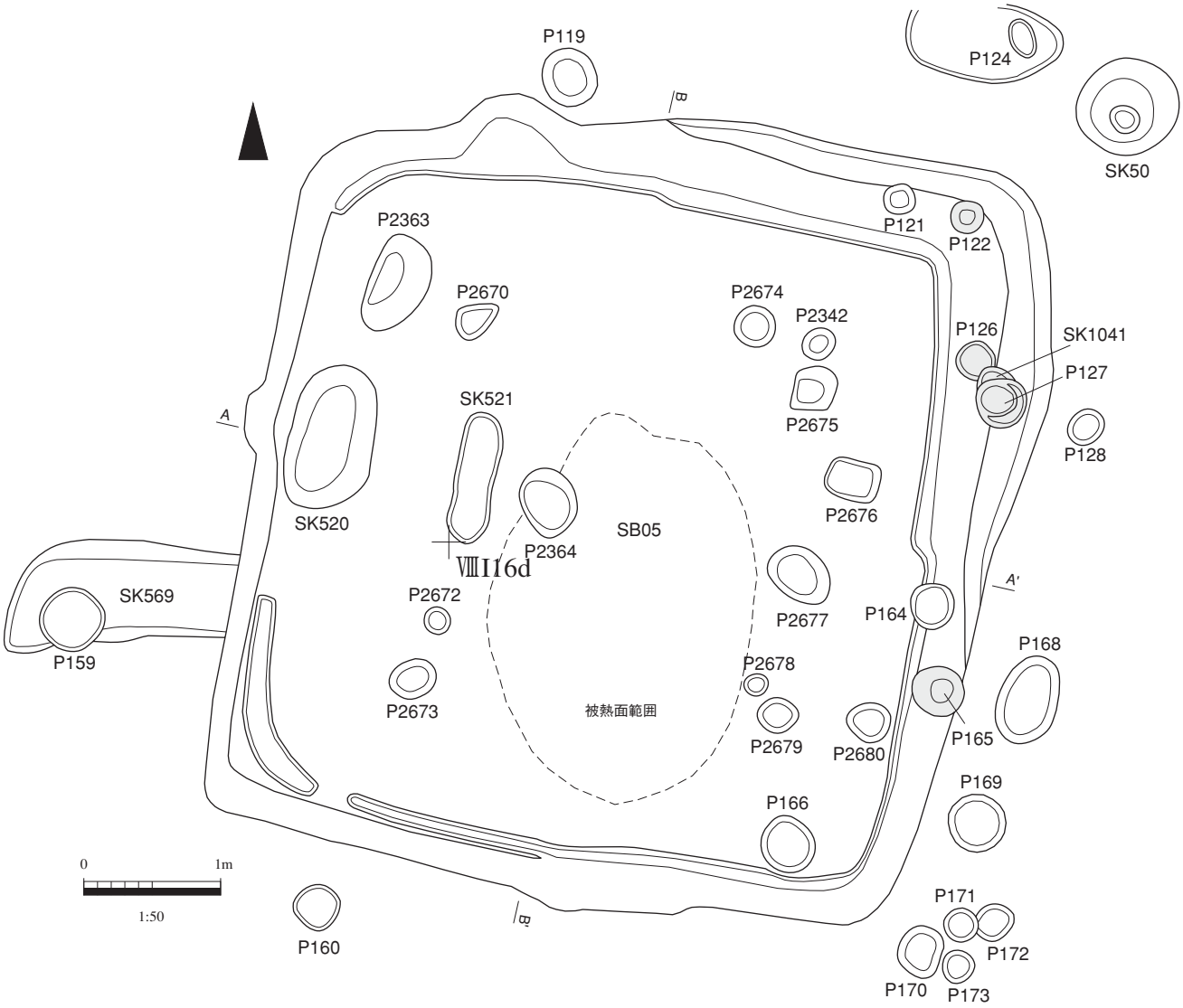
第 258 図　98DSB01 出土遺物実測図

その胴部内には注口部をくり抜いた際に出た滓が残存していた（2379 右）。

98DSB05　調査区の北部に位置する。西辺はグリッド北から東へ14°振れる。平面形はやや崩れた隅丸正方形で、西辺長 5.1m、南辺長 5.13m である。確認面からの深さ 43cm である。覆土は大別して 2 層ある。最上層（1 層）よりその下層（2 層～）の方に炭化物が多く含まれる。この土層の差異や1層下面が平坦であることから 2 時期の可能性が高い。すなわち2層以下が SB05a、1 層が SB05b に該当する。SB05b 再掘削時に北東隅を中心に若干拡張しているが、それ以外では基本的に SB05a の壁を踏襲している。SB05a は深さ 42.5cm で西壁の

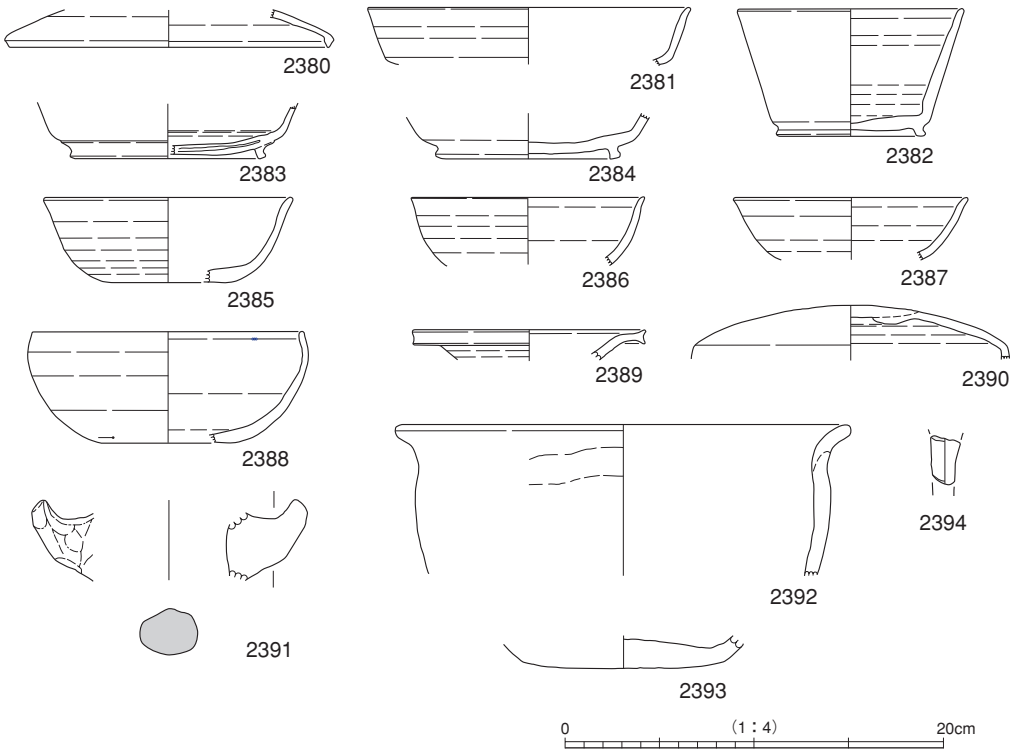


第 259 図　98DSB02 平面・断面図と出土遺物実測図



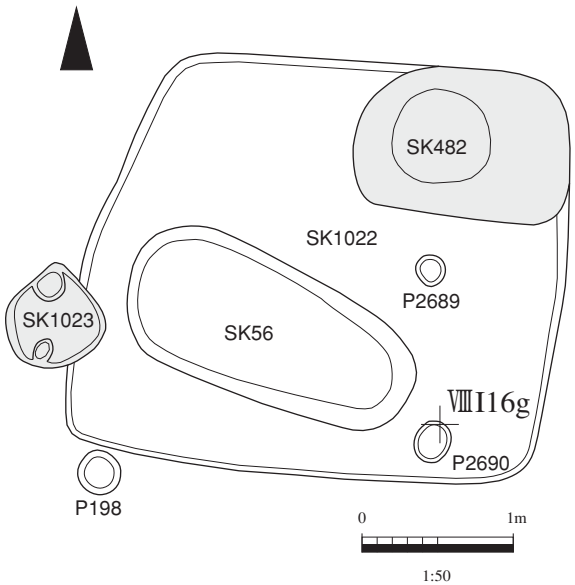
1 7.5YR3/4暗褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック（径1～2mmの砂粒含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック（径1～2mmの砂粒含む。炭化物を比較的多く含む）。
3 7.5YR4/6褐色粘質シルト（地山の崩落土）。
4 7.5YR3/3暗褐色シルト（径1～2mmの砂粒含む）と5YR4/4にぶい赤褐色の焼土粒（炭化物を含む）。
5 5YR3/3暗赤褐色シルトと5YR4/4にぶい赤褐色の焼土粒と炭化物（焼土、炭化物は4層より多い）。
6 7.5YR3/3暗褐色シルト。
7 10YR4/4褐色粘質シルト（地山の崩落土）。
8 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック（ブロックは極少量）。
9 7.5YR4/6褐色粘質シルト（地山ほりすぎの可能性あり）。
10 7.5YR3/4暗褐色シルト。
11 7.5YR4/3褐色シルトと7.5YR4/6褐色シルトブロック。
12 7.5YR4/3褐色シルトと7.5YR4/6褐色シルトブロック。
13 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック（径1～2mmの砂粒、炭化物を含む）。
14 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト。
15 7.5YR4/6褐色粘質シルト（地山と同じ）。
16 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック（径1～2mmの砂粒、炭化物を含む）。

第260図　98DSB05平面・断面図



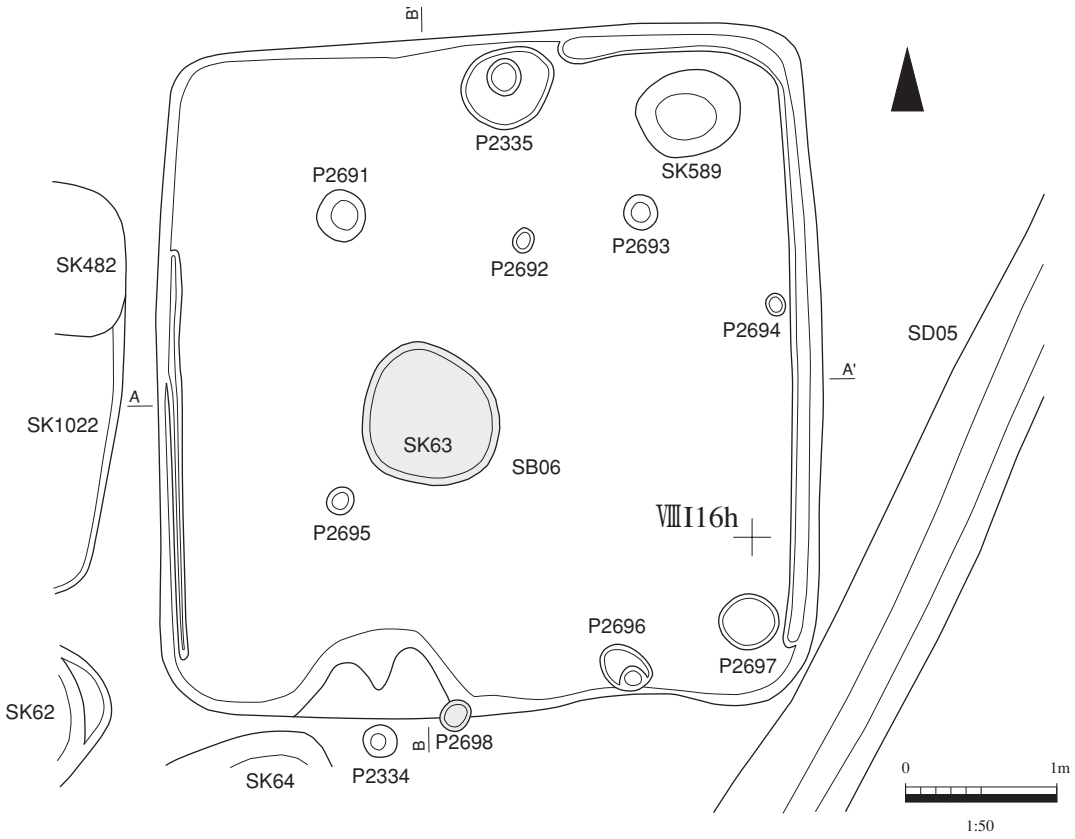
第 261 図　98DSB05 出土遺物実測図

写真　98DSB05 作業風景（北から）

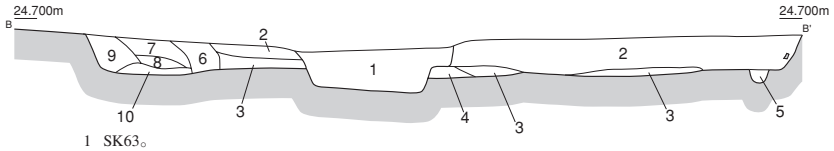


第 262 図　98DSK1022 平面図

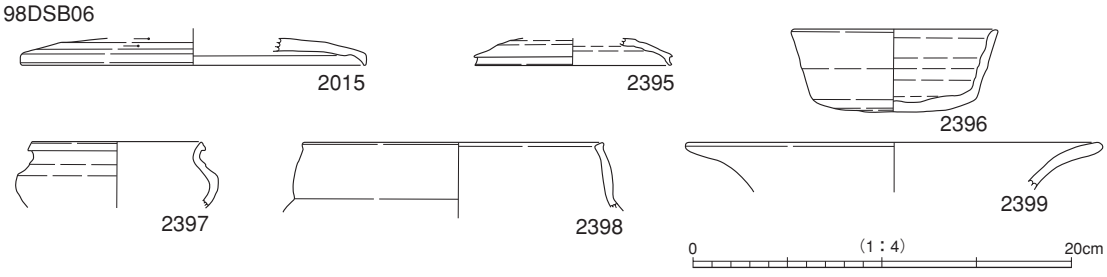
一部を除き周溝がめぐる。北壁やや西よりに竈痕跡とみられる突出があるが、顕著な焼土・炭化物は認められなかった。柱穴は4つ（98DP2670・2673・2675・2679）がある。床面中央部から南壁近くにかけて長径2.9mの被熱によると考えられる楕円形の赤変箇所がある。SB05bは深さ22.5cmで土層観察でも竈や周溝は認められなかった。柱穴はSB05a床面に達した3つ（98DP2342・2672・2678）が判明する。出土遺物はSB05a・bともに小片が主体である。須恵器は高蔵寺2号窯式～鳴海32号窯式である。土師器甕（2392・2393）は厚手・平底で7世紀代の甕といえよう。他に製塩土器脚部（2394）が



1 SK63（10YB3/3暗褐色シルト、径1～2mmの砂粒含む。砂っぽい。炭化物も含む）。
2 7.5YB3/4暗褐色シルト（径1～2mmの砂粒含む。炭化物が微量混入）。
3 7.5YR4/4褐色シルトと5YR3/4暗赤褐色シルトブロック。
4 5YR3/4暗赤褐色粘質シルト。



1 SK63。
2 7.5YR3/4暗褐色シルト（径1～2mmの砂粒含む。炭化物も微量に含む）。
3 7.5YR3/4暗褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック。
4 7.5YR4/4褐色シルトと7.5YR3/4暗褐色シルトブロックを少量含む。
5 7.5YR4/3褐色シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルト。
6 7.5YR4/3褐色シルト（砂粒含む。但し、しまった感あり）。
7 7.5YR4/3褐色シルト（6よりも固くしまった感じがある）。
8 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（しまった感じあり）。
9 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色シルトブロック。
10 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/4暗褐色シルトブロック。



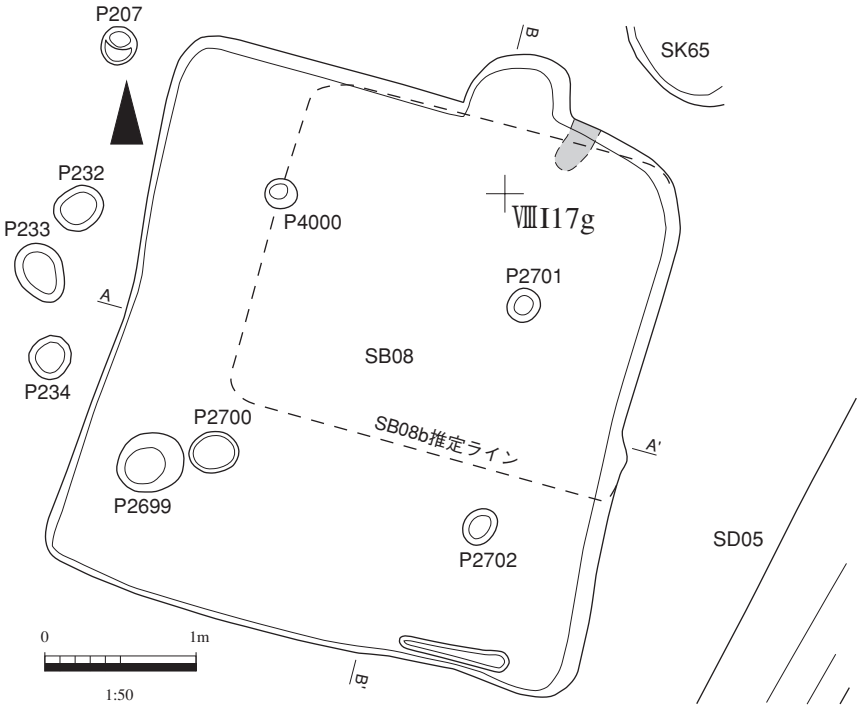
第 263 図　98DSB06 平面・断面図と出土遺物実測図

ある。

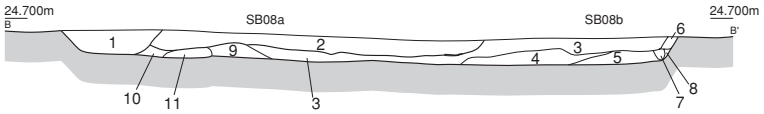
98DSB06　調査区北部に位置する。他の竪穴建物と重複せず、中央に覆土上から土坑（98DSK63）が掘り込まれる。西辺はグリッド北を向く。平面形は隅丸正方形で、西辺4.33mで、確認面からの深さ27.5cmである。北辺中央に竈焚き口痕跡とみられる土坑（98DP2335）がある。北東隅には直径65cm、深さ28cmの円形貯蔵穴がある（98DSK589）。柱穴は３カ所で認められた。周溝は南辺と北西隅以外で確認された。覆土はほぼ単一層（２層）で、一気に埋め戻されたものと思われるが、その前に竈を切り崩しており構成土である地山土ブロックが床面に広がる（３層）。

この竪穴建物で注目されるのが、南壁中央からやや西寄りに設けられた土盛で、当初南壁の竈かとも思われた。南壁約1mに貼り付き、北側へ最大約40cm張り出す。床面からの高さは23cm以上ある。しかし断ち割って調査したところ、焼土や炭化物は全くなく、地山ブロックが硬くしまった状態にあることがわかり、その可能性はなくなった。土の硬化状況から埋め戻し時に関わる可能性は低く、建物機能時の構築物と判断した。以上のことから出入口となる階段ではないかと推測する。遺物は

写真　98DSB06 南壁階段（北から）



1　7.5YR3/2黒褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック。
2　10YR4/3にぶい黄褐色シルト（砂っぽい感あり）。
3　7.5YR3/4暗褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック。
4　7.5YR4/4褐色シルトと7.5YR3/4暗褐色シルトブロック（少量）。
5　7.5YR3/4暗褐色シルトと焼土塊（5YR4/6赤褐色）。
6　10YR3/4暗褐色粘質シルト。
7　10YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック。



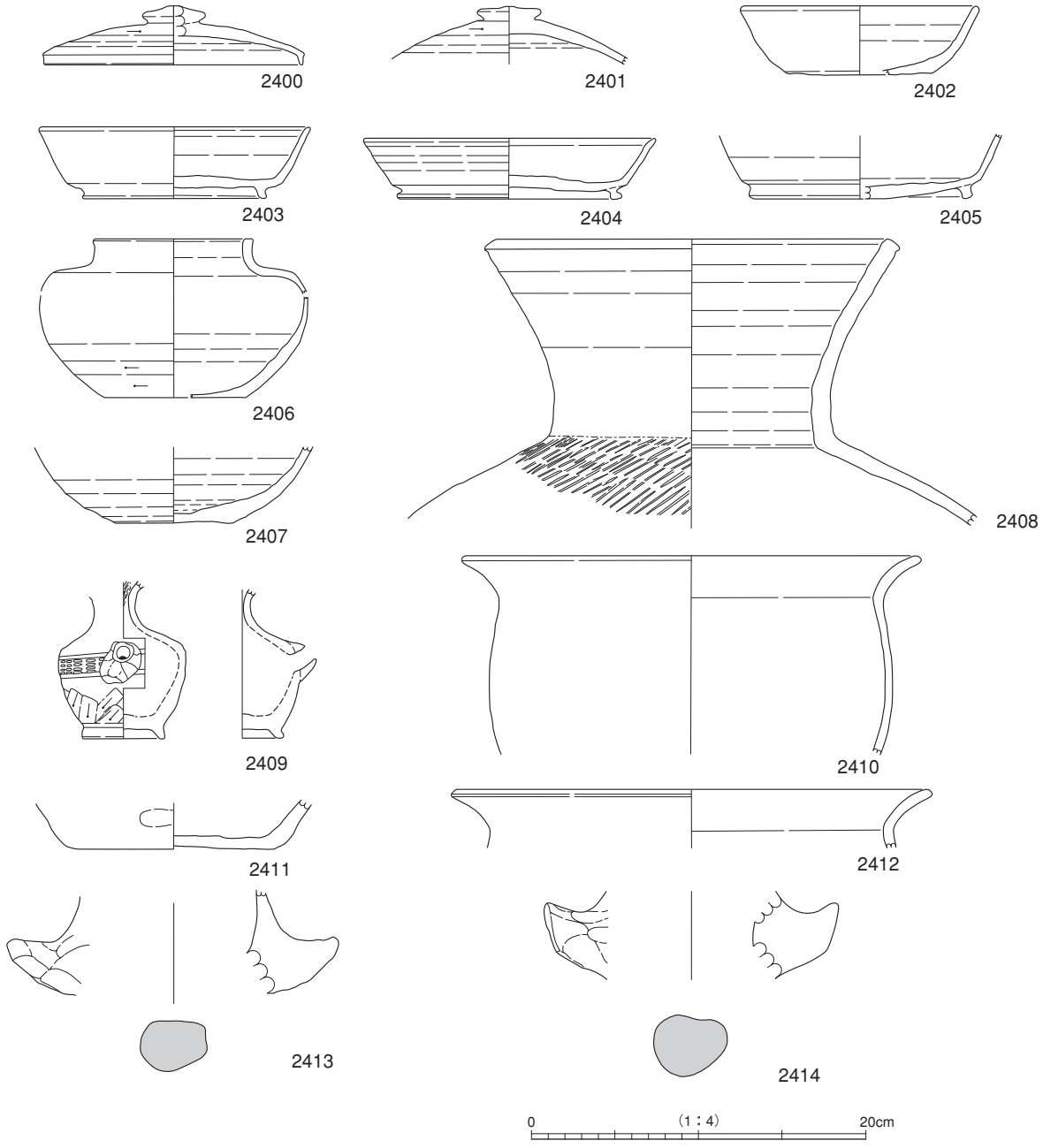
1　7.5YR3/2黒褐色シルト（径1～2㎜の砂粒及び微量の炭化物を含む）。
2　7.5YR3/2黒褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック。
3　7.5YR3/4暗褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック。
4　7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
5　5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒含む）。
6　10YR4/　にぶい黄褐色粘質シルト。
7　10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック。
8　7.5YR4/4褐色シルトブロック。
9　7.5YR4/4褐色シルトと7.5YR3/4暗褐色シルトブロック。
10　7.5YR4/4褐色粘質シルト。
11　7.5YR4/3褐色粘質シルト。

第264図　98DSB08 平面・断面図

小片主体で、須恵器は高蔵寺2号窯式期を中心とし、土師器長胴甕（2399）は大きく外反する口縁部が特徴である。

98DSK1022　98DSB06西側に接するように位置する。南辺長3.15mの隅丸正方形である。東辺はほぼグリッド北を指す。深さは28cmで、竈・周溝・柱穴は検出されていない。遺物の出土もなかった。当該遺構の西2mには火葬墓の可能性もある98DSK53があり、これとの関わりも考える必要がある。

98DSB08（SB08a・b）　調査区北部に位置する。他の竪穴建物と重複しない。西辺はグリッド北より東へ15°振れる。平面形は隅丸正方形で西辺長3.65mである。北辺の中央からやや東のところに竈の煙道とみられる突出があるが、土層（SB08-02）によると、これは重なる遺構を誤認したものである。覆土は

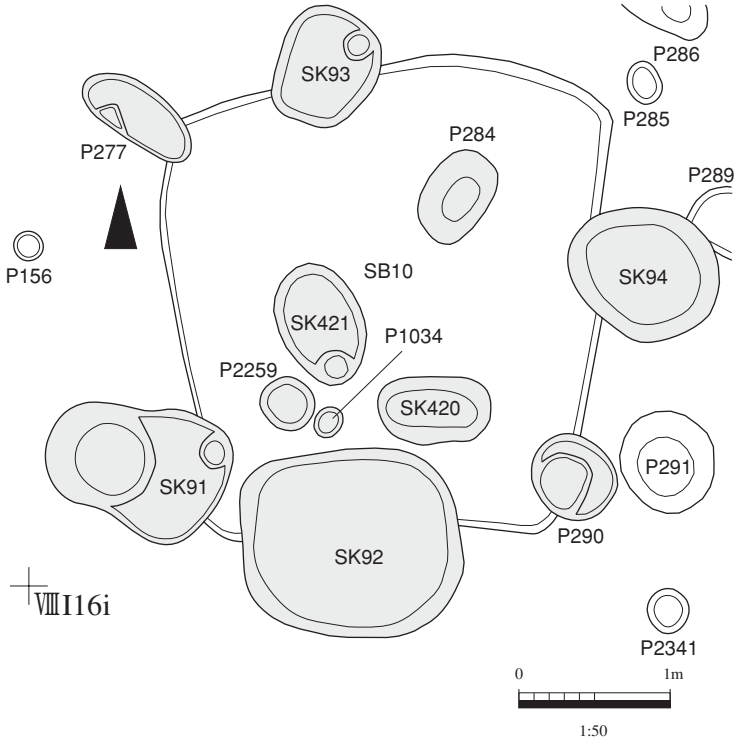


第265図　98DSB08出土遺物実測図

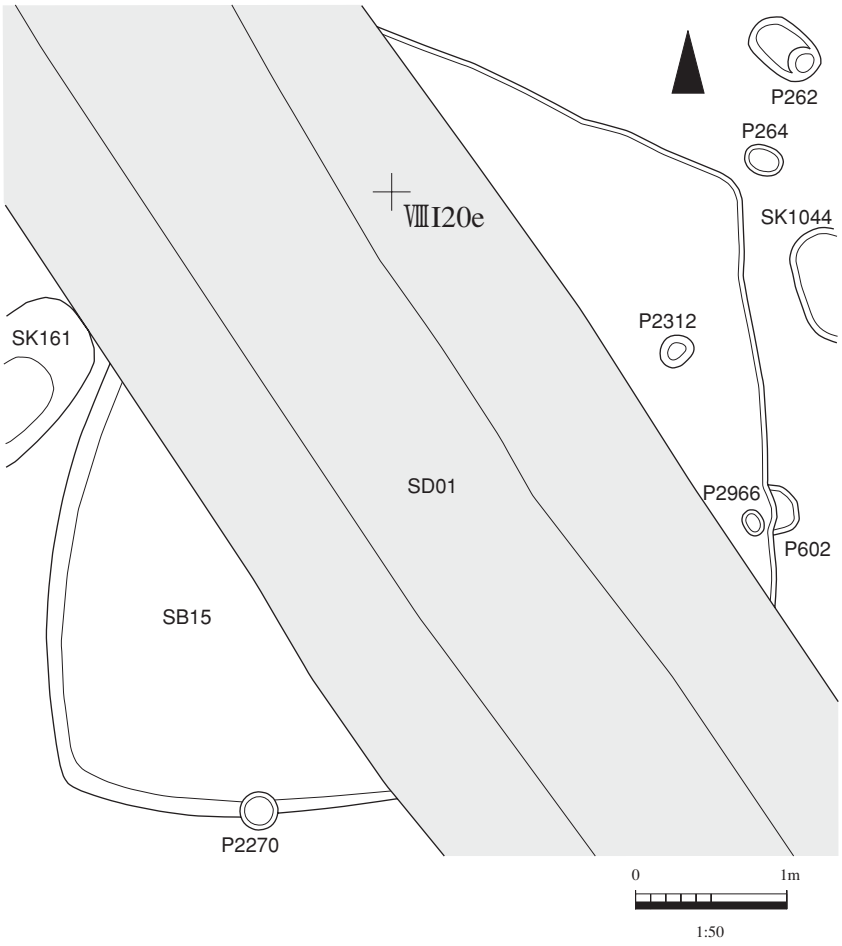
大別して上層（断面A-A'の1層）と下層（同2～11層）がある。上層の下面が平坦なので、2時期が想定可能である。その場合下層建物を一辺2.5～2.7mのSB08aとし、これと東壁を共有する隅丸正方形のSB08bを想定する。SB08aは深さ10cmで柱穴は4つで、SB08bは深さ16cmで床面施設は確認できていない。遺物はSB08a・bいずれからも一定量出土した。。須恵器蓋（2400・2401）杯（2402～2405）は高蔵寺2号窯式。大型甕（2408）はやや古い口縁形状である。鉢は台付で8世紀代のものである。土師器鍋（2410・2412）などは口縁が大きく外反する。

98DSB10　調査区北端近くに位置する。多数の中世土坑墓などが上に重なる。平面形はやや崩れた隅丸正方形で、全体としてグリッド北からの振れはほとんどない。東辺3.0m、北辺2.8m、深さ10cmである。

98DSB14　調査区の北東隅に位置する。調査区東壁から入り込むごく小さな谷地形98DSX01の東側に位置する。調査区枠を超えて東7mには総柱の掘立柱建物



第266図　98DSB10平面図



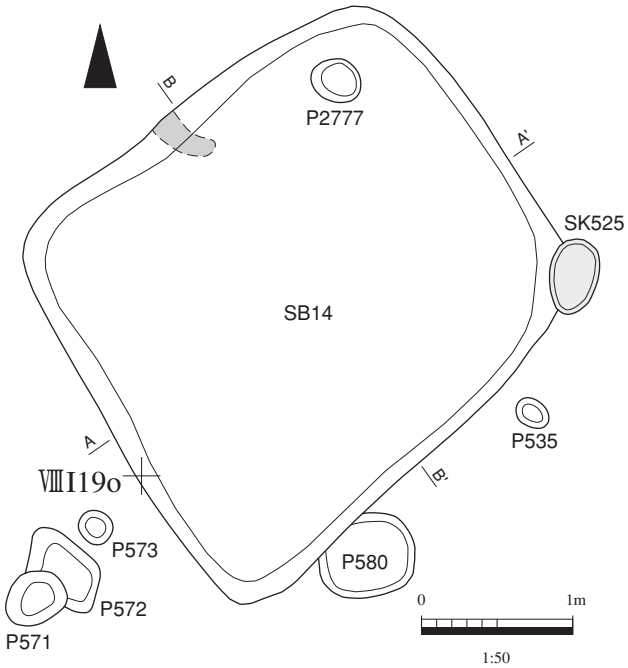
第267図　98DSB15平面図

99GSB19が所在し、これとの関わりが考えられる。他の竪穴建物と重複しない。北西辺はグリッド北から56°東へ振れる。平面形はやや崩れた隅丸正方形で、北西辺3.9m、南西辺2.9m、深さ13cmである。竈は土層観察から北西壁中央北隅にあったと推測される。北隅床面でピットが確認され、四隅に柱穴を配するタイプと考えられる。覆土はほぼ単一層だが、一部に焼土を含む層がある。遺物は須恵器の小片で高蔵寺2号窯式である。

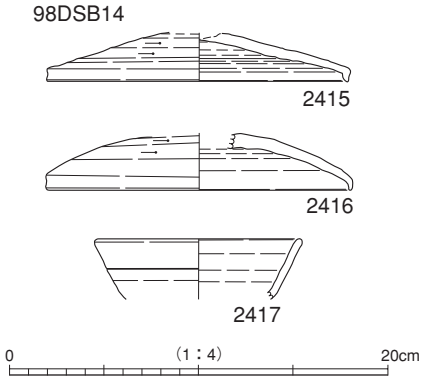
98DSB15　調査区中央部、SB01の東1.5mに位置する。戦国時代溝SD01が大きく横切りそのほとんどが失われていた。平面形は各辺が直角で交わらないなどいびつである、東辺を基準にするとグリッド北からの振れはほとんどない。東西4.8m南北4.1mの規模が想定される。周溝はなく、竈の痕跡もなかった。また出土遺物はほとんどなかった。

98DSB16　調査区中央部、SB01の南1.5mに位置する。西辺はグリッド北から東へ17°振れる。平面形は隅丸方形で東辺5.2m北辺4.6m、確認面からの深さ40cmである。北辺中央に造り付け竈の張り出しがある。貼床（4・5・7・9層）がなされるが、4層の状況から南西隅を共有する先行竪穴建物(SB16a)が想定され、その規模は3.7m四方とみられる。西壁をみると半ばほどに幅約10cmの段が生じており、一度埋没したものを再掘削した可能性が考えられる。柱穴はP2538・2539・2544が確認されたSB116（SB16b）のもの、P4003・2545はSB16aのものと考えられる。覆土層はほぼ単一層（1層）だが、竈部分はその前に埋まっている。

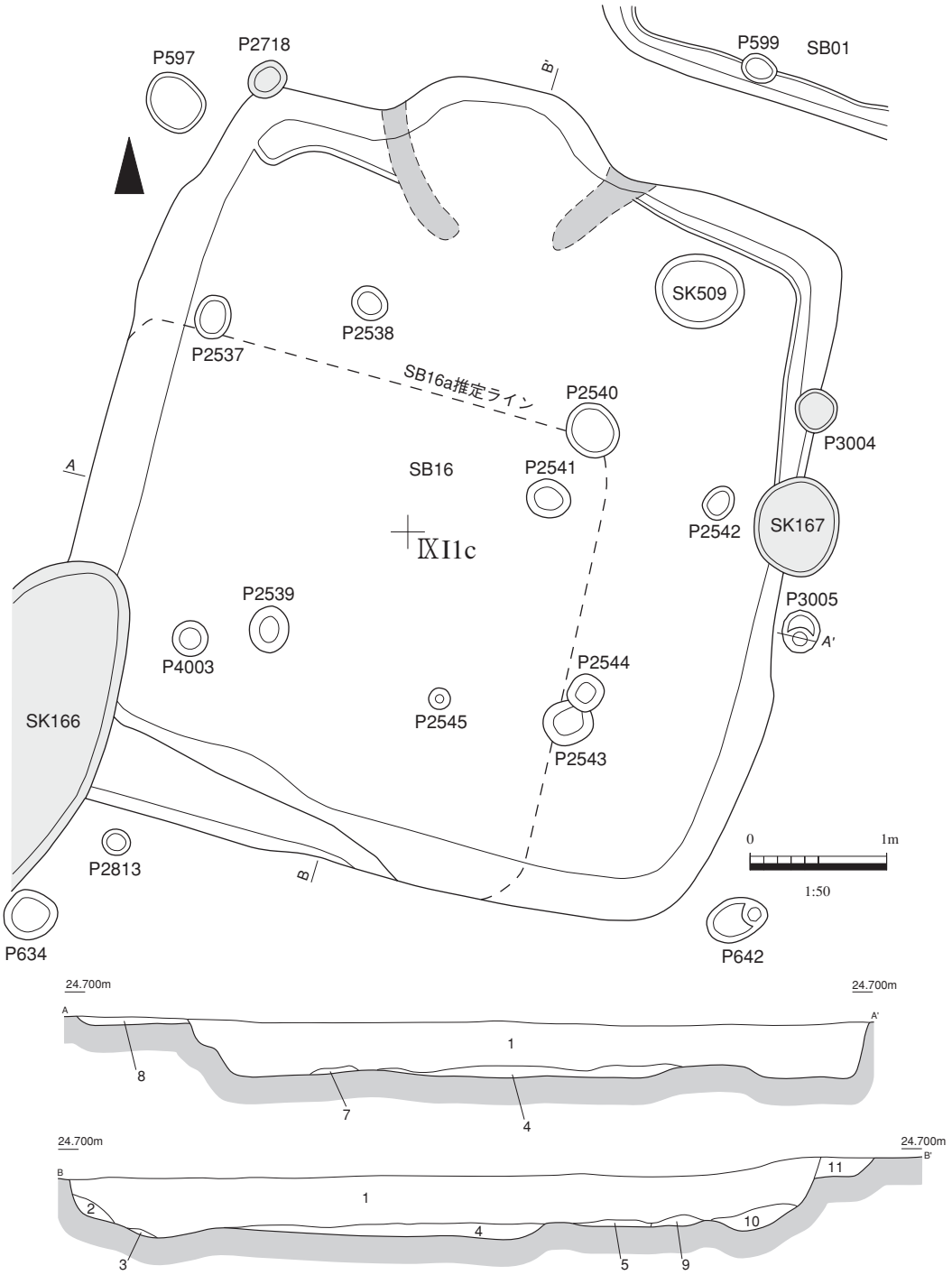
遺物は、出土状況（写真図版参照）からすると床面から浮いた
状態にあるため先行する
SB16aに関わるものではないといえる。またまばらで小片ばかりであることから、埋め戻し時に入り込んだものが主体である。須恵器蓋・杯の他に　などがあるが、多数の製塩土器が注目される（2436～2443）。ただ脚部ばかりで杯部片がほとんどない点も注意してお



1　5YR3/2暗赤褐色シルト。
2　7.5YR4/3褐色粘質シルト（少量の1層がブロック状に混入）。
3　7.5YR4/4褐色シルトと7.5YR4/6褐色シルトブロック（少量焼土として含む）。
4　7.5YR4/4褐色粘質シルト。



第268図　98DSB14平面・断面図と出土遺物実測図



1 10YR3/3暗褐色粘質シルト。径5mm前後の小礫が混入。炭化物を少量含む。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと10YR3/3暗褐色粘質シルトブロック。しまり強く、階段か。
3 10YR4/4褐色粘質シルト。地山よりもしまり弱い。
4 10YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR3/3褐色粘質シルト。斑土状を呈し、しまりはあまり強くない。
5 10YR5/1褐灰色粘質シルト。微量の炭化物と7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロックを含む。
6 10YR3/2黒褐色粘質シルト。径1～2mmの砂粒含む。
7 7.5YR4/4褐色粘質シルトと10YR3/3暗褐色粘質シルト。
8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルト。
9 10YR3/3暗褐色粘質シルトと5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト。炭化物を含む。カマド。
10 10YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトの斑土。焼土粒と炭化物を多く含む。
11 不明。カマドの煙道か。

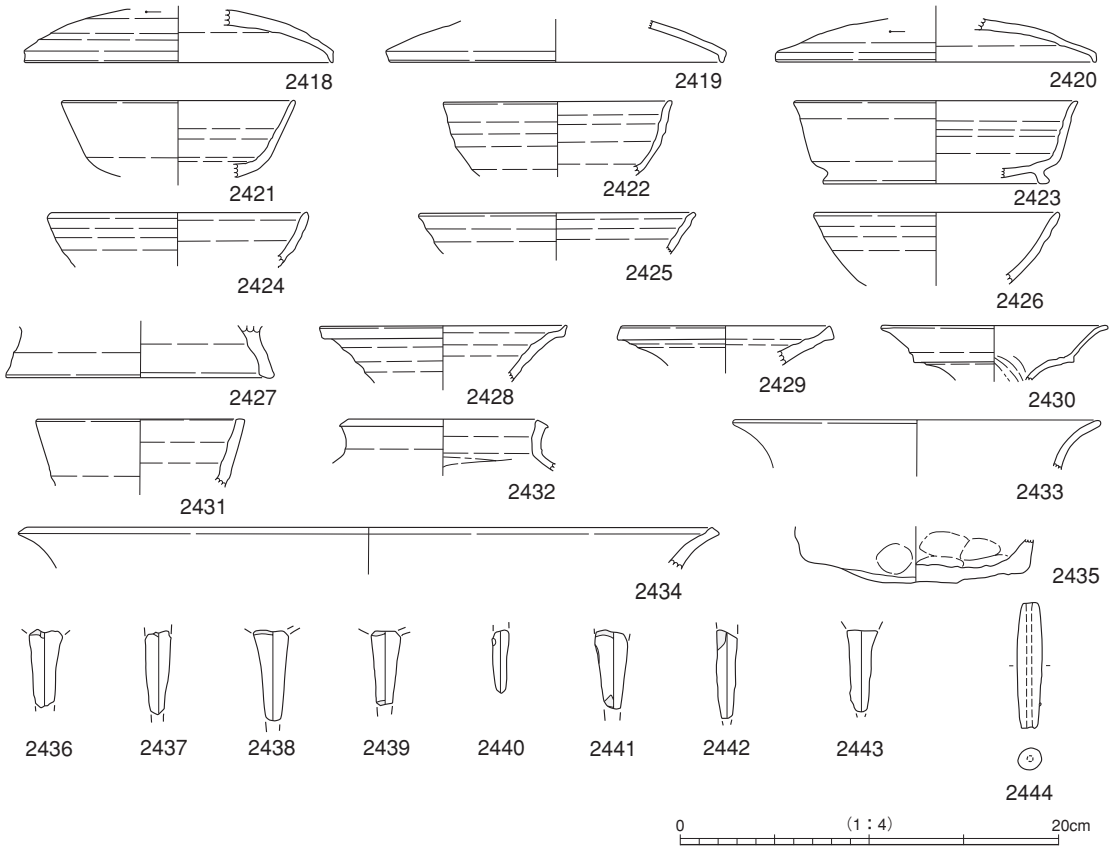
第 269 図　98DSB16 平面・断面図

くべきであろう。集落内における製塩土器の廃棄のあり方を示す。須恵器蓋（2418 ～ 2420）は高蔵寺 2 号窯式だが瓩(2430）は 7 世紀後半と考えられる。2427 は有台の皿脚部。2434 は須恵器大甕の口縁か。2433 は土師器長胴甕口縁、2435はその底部で、指ナデ調整だが平底である。管状土錘は長さ 5cm 以上最大径 1.5cm あり、大屋敷地区で多くみられ 7 世紀代に多いタイプである。

98DSB18・19　SB16 の南西 2m に位置する。2 棟が重複しSB119が先行する。いずれも西辺はグリッド北から 16° 東へ振れる。隅丸正方形と判断され、SB18 南辺は 3.4m、SB19 西辺は 4.2m である。確認面からの深さ SB18 が 8cm、SB19 が 18cm である。覆土層や遺物に関する情報はない。

98DSB20　調査区中央部西壁ぎわに位置する。西辺はグリッド北から東へ 10° 振れるが、全体としてほ

写真　98DSB16 竈（上）とその断ち割り観察状態（下）



第 270 図　98DSB16 出土遺物実測図

ぼグリッドに沿う。平面形は隅丸正方形で、西辺4.83mである。床面で確認されたピットのうち4つが柱穴になると考えられる。北辺ほぼ中央に造り付け竈の痕跡が確認された。

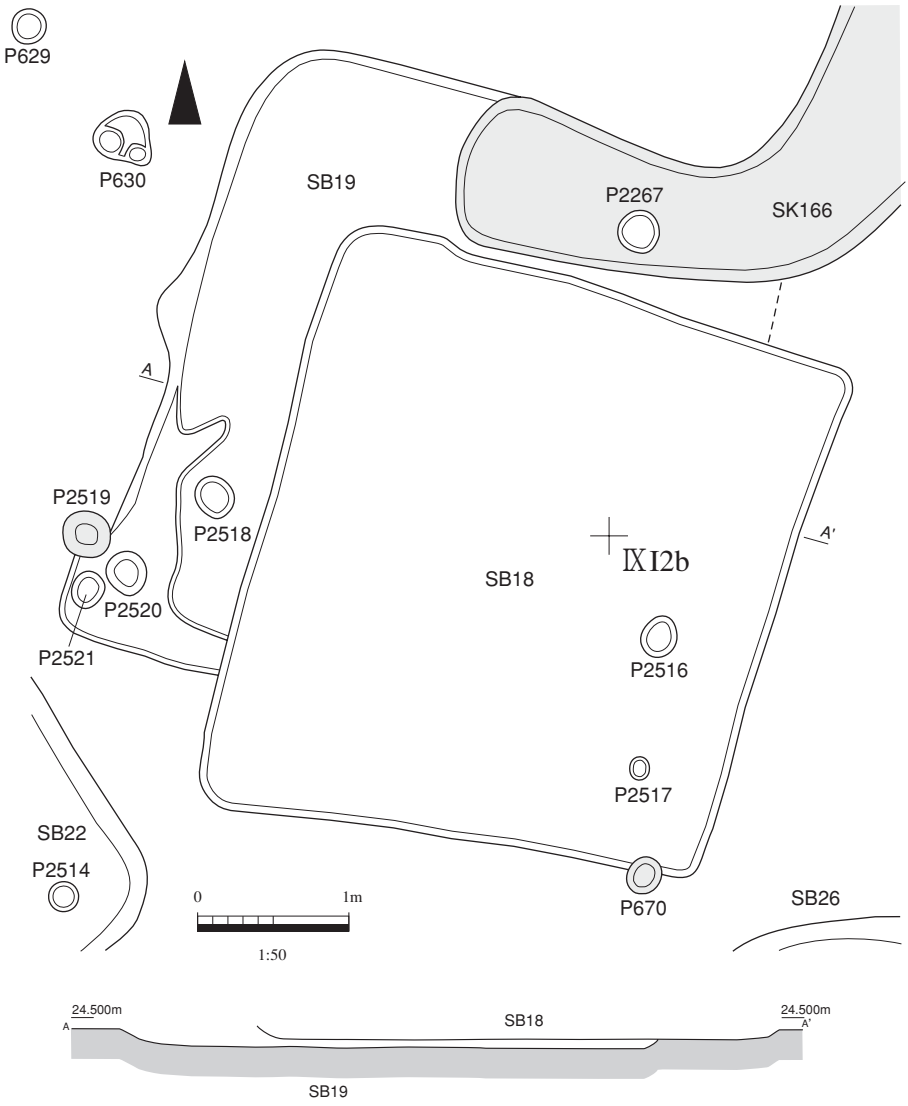
覆土はほぼ単一層で1･2層の区分は地山ブロックの多少による。ただ1層は土坑を掘り返したとも考えられる。竈を切り崩した7～9層は、赤変した地山粘土が主体で炭化物はごく少量である。

遺物は1･2層より須恵器が出土しており、その時期は鳴海32号窯式である。その他製塩土器（2454・2455）が出土している。

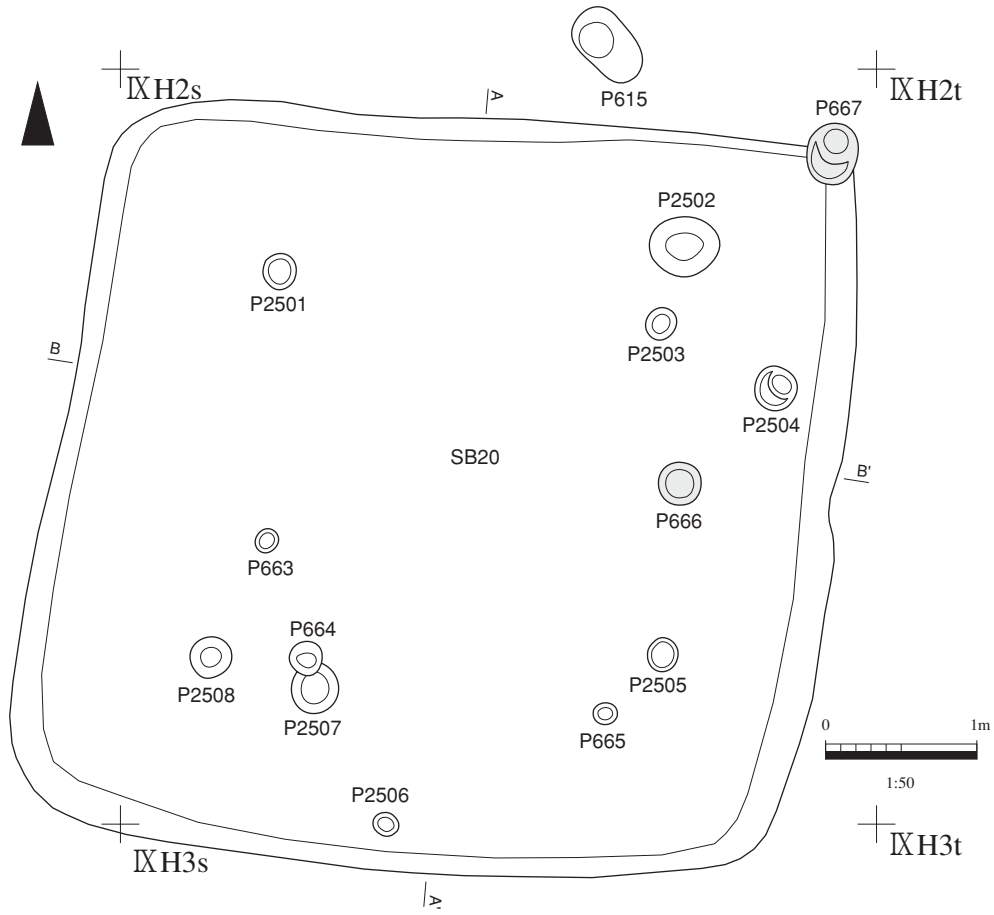
写真　98DSB18・19全景（南から）

98DSB22～25　SB20の東2mに位置する重複の激しい竪穴建物群である。SB25→SB24→SB23→SB22の順と判断される。いずれも一辺が2.5～3.0m規模の隅丸長方形で、確認面からの深さはSB23が8cmでそれ以外は10～15cmである。建物方位はSB24･25がほぼグリッド北と同じで、SB22･23がグリッド北から西へ35°振れる。覆土層は不明で出土遺物はない。

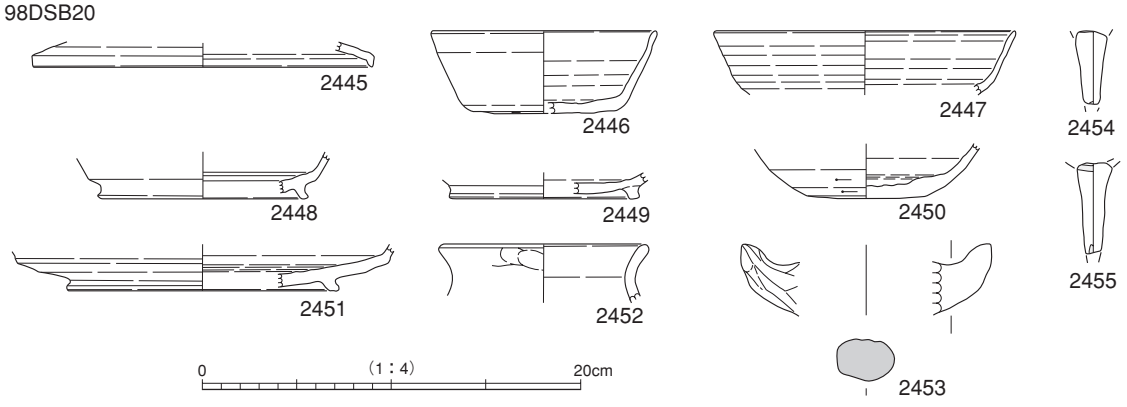
98DSB26　調査区中央部、SB18・19の南東1mに位置する。他の建物との重複はない。西辺はグリッド北から東へ7°振れる。平面形は隅丸正方形で、南辺4.2m、確認面からの深さ30cmである。周溝は南東隅以外で途切れながら確認されている。6層は貼床で5層はその上から掘り込まれているので、98DSK508は床面施設と考えられる。柱穴はP2533・2534が相当するであろう。覆土層のうち2層は地山粒の混入



第271図　98DSB18・19平面・断面図



1 7.5YR3/3案褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック（炭化物と径1～2mmの砂粒含む）。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック（1よりブロックが少ない）。（炭化物を少量含む）。
3 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/2黒褐色粘質シルトブロック（少量）。
4 10YR4/1褐灰色粘質シルト（木の根でやられている可能性あり）。
5 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/2黒褐色粘質シルトブロック→階段状遺構？　他の埋土とはりに大差なし。
6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
7 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
8 5YR3/3暗赤褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒含む）。
9 5YR3/4暗赤褐色粘質シルト（粘質強く、焼土粒をやや多く含む）。

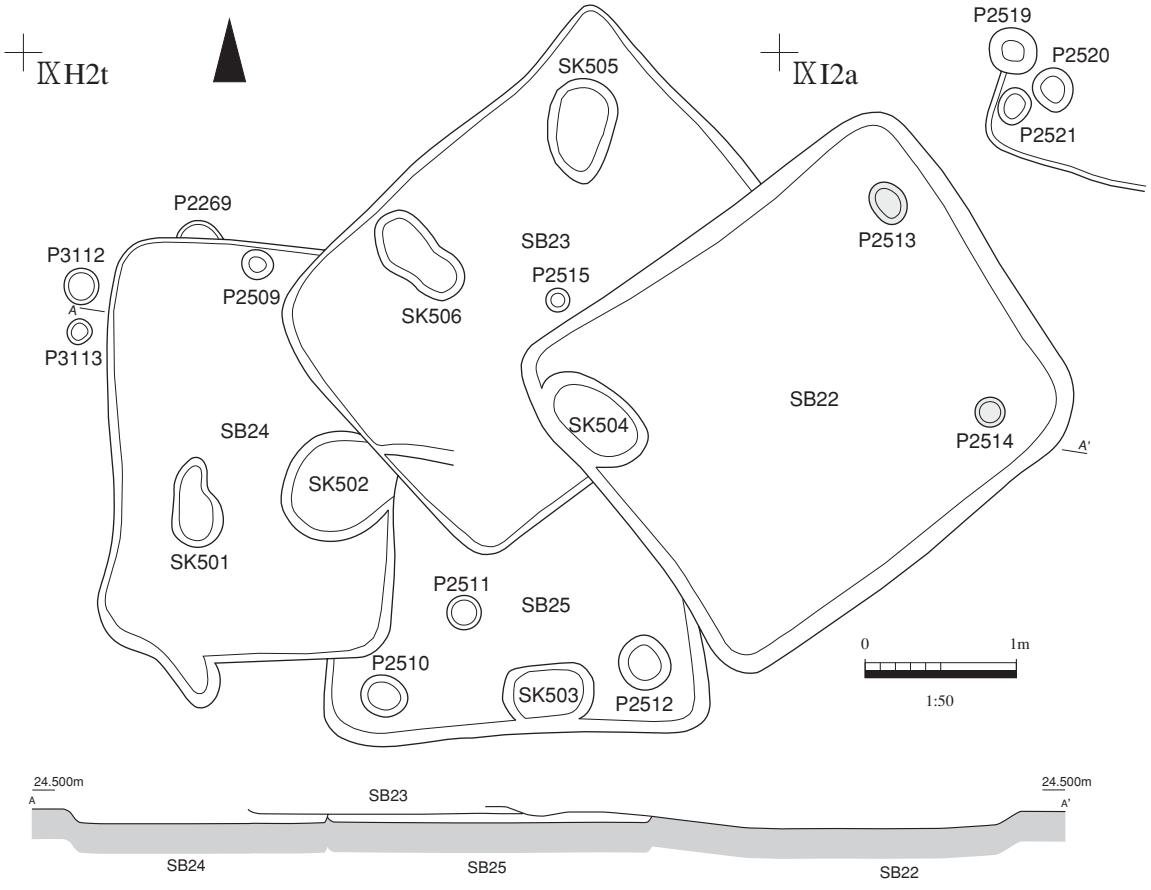


第 272 図　98DSB20 平面・断面図と出土遺物実測図

はあまりないようであるが埋め戻しによるものであろう。出土遺物は2458が鳴海32号窯式、2456・2461・2465が折戸10号窯式で、土師器鍋（2469）、長胴甕（2471・2475・2476）は後者に対応すると考えられる。2468は内面がよく摩耗しており須恵器擂鉢か。また製塩土器脚部（2473・2474）がある。

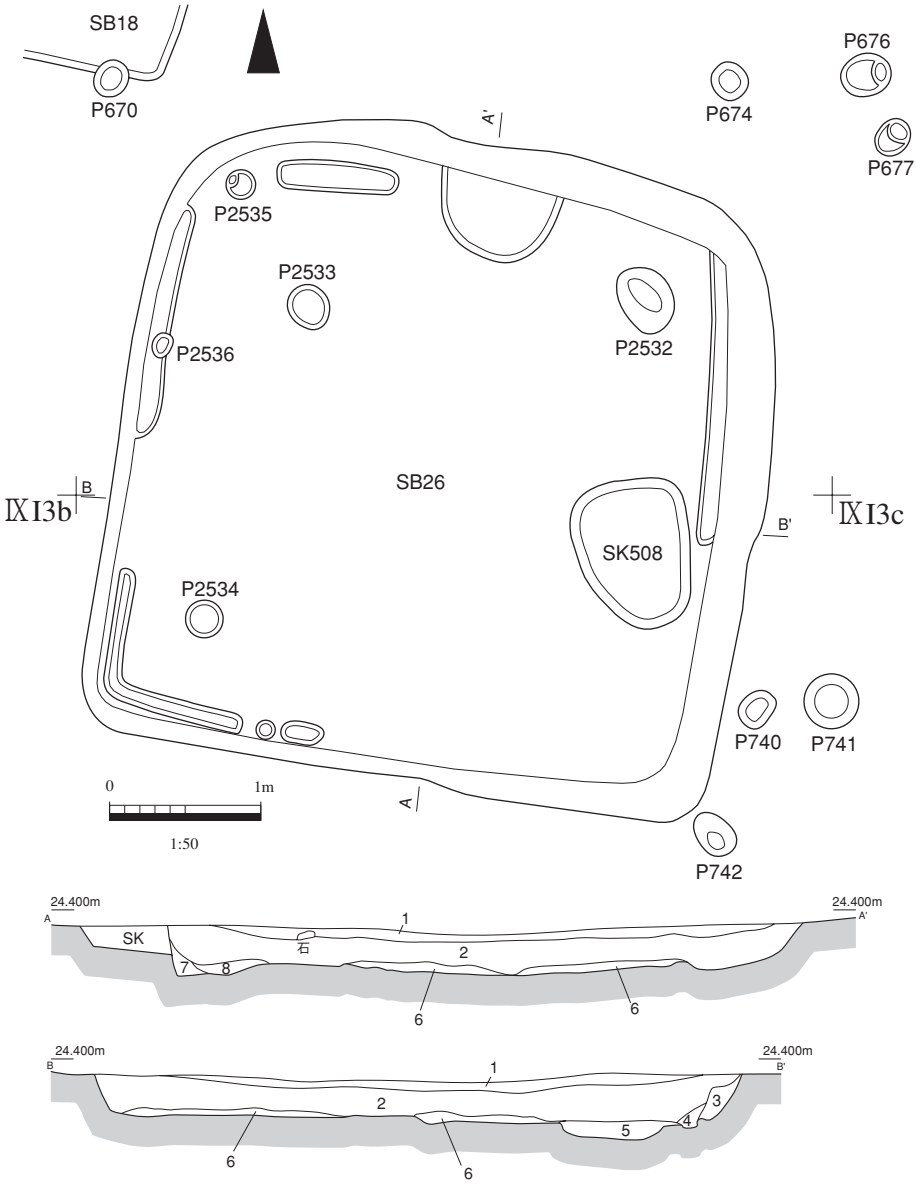
98DSB27　SB20の南1mにSB27～31が重複して検出された。重複関係ではSB31より後になる。西辺はグリッド北から東へ7°振れる。平面形は隅丸方形で西辺3.45m、北辺3.63m、確認面からの深さ23mである。北壁中央は造り付け竈の張り出しのようであるがこれ以外に目立った痕跡はなかった。2層はベッド状遺構の可能性がある。出土遺物は小片のみであるが、平瓶（2477）ほかがある。

98DSB28　重複関係ではSB30・31よりも後になる。西辺はグリッド北から西へ6°振れる。平面形はややくずれた隅丸長方形で西辺長3.15m、北辺長2.65mで、確認面からの深さ25cmである。壁面立ち上がりが緩やかにカーブする点と床面が平らでなく凹凸が残る点が特徴である。周溝・柱穴はない。建物規模から厨房などを想定しがちだが、竈の痕跡は全くなかった。むしろ倉庫だったかもしれない。覆土層は地山ブロックを含む2層は埋め戻しとみられるが、1層はその上から掘り返したものかもしれない。遺物は2層の上面近くから北壁近くで集積して出土した。したがって埋め戻した後の窪地に北側から土器を廃棄した様子が想像される。須恵器（2483～2493）は鳴海32号窯式である。2487～2489はセットになっていたとみられる。底部糸切離しののちヘラ削りする。2490は有台盤。口縁部が横方向に屈曲し上端に面をもつ。2491は横瓶で、大型のものとしては最終的なタイプであろう。胴部は粘土帯積み上げ



第273図　98DSB22・23・24・25平面・断面図

で成形し、内面には指ナデ痕跡が明瞭にみえる。外面は平行タタキののち全体を指ナデする。内面に押え具痕跡がないことから口を閉じた状態でタタキをおこなう「風船技法」であることが考えられる。しかし7世紀代の横瓶に比べて粗雑な印象が強いのは否めない。2492は平底の広口壺。底部には回転糸切離痕がある。2493も広口壺だがやや古相である。焼成がやや軟質で灰白色である。土師器長胴甕（2498）は、薄い器壁・明瞭な口縁の屈曲・指ナデ調整が特徴である。それ以外にも口径から土師器小型甕と考えられる2495・2496がある。2494はそれらの胴部でこれも指ナデ調整である。2497は製塩土器の脚部。これら土師器は須恵器と共に廃棄されたと考えられ、8世紀中葉の西三河地域における土器一括資料の



1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒を含み、炭化物も少量混入する）。
3 7.5YR4/3褐色粘質シルト（7.5YR3/3暗褐色粘質シルトのしみこみ状の堆積）。
→階段としての可能性あり、又はテラスか？
4 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト。
5 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック混入）。
6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック混入）。
7 10YR3/3暗褐色粘質シルト。
8 10YR3/4暗褐色粘質シルト。

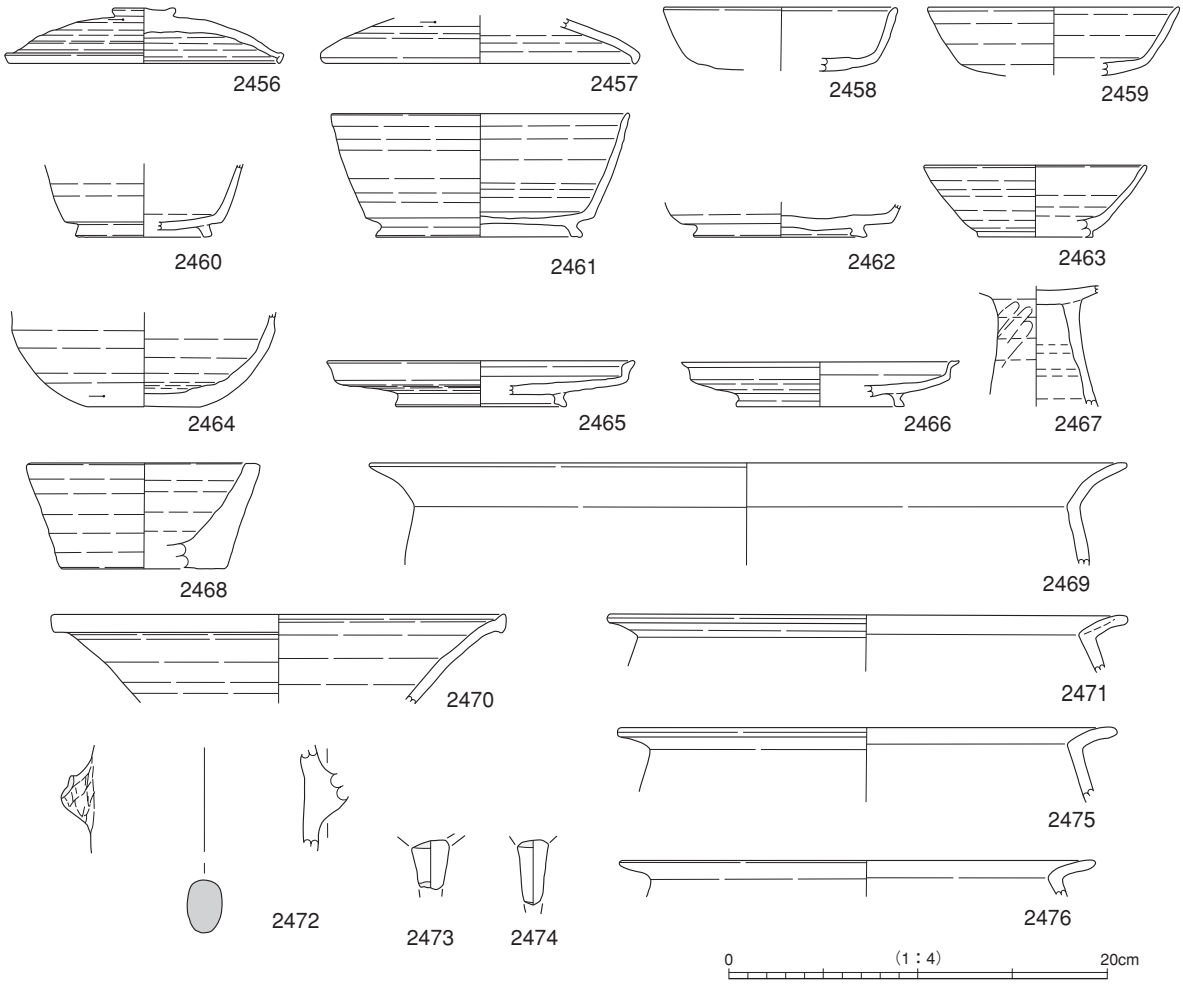
第274図　98DSB26平面・断面図

好例といえる。

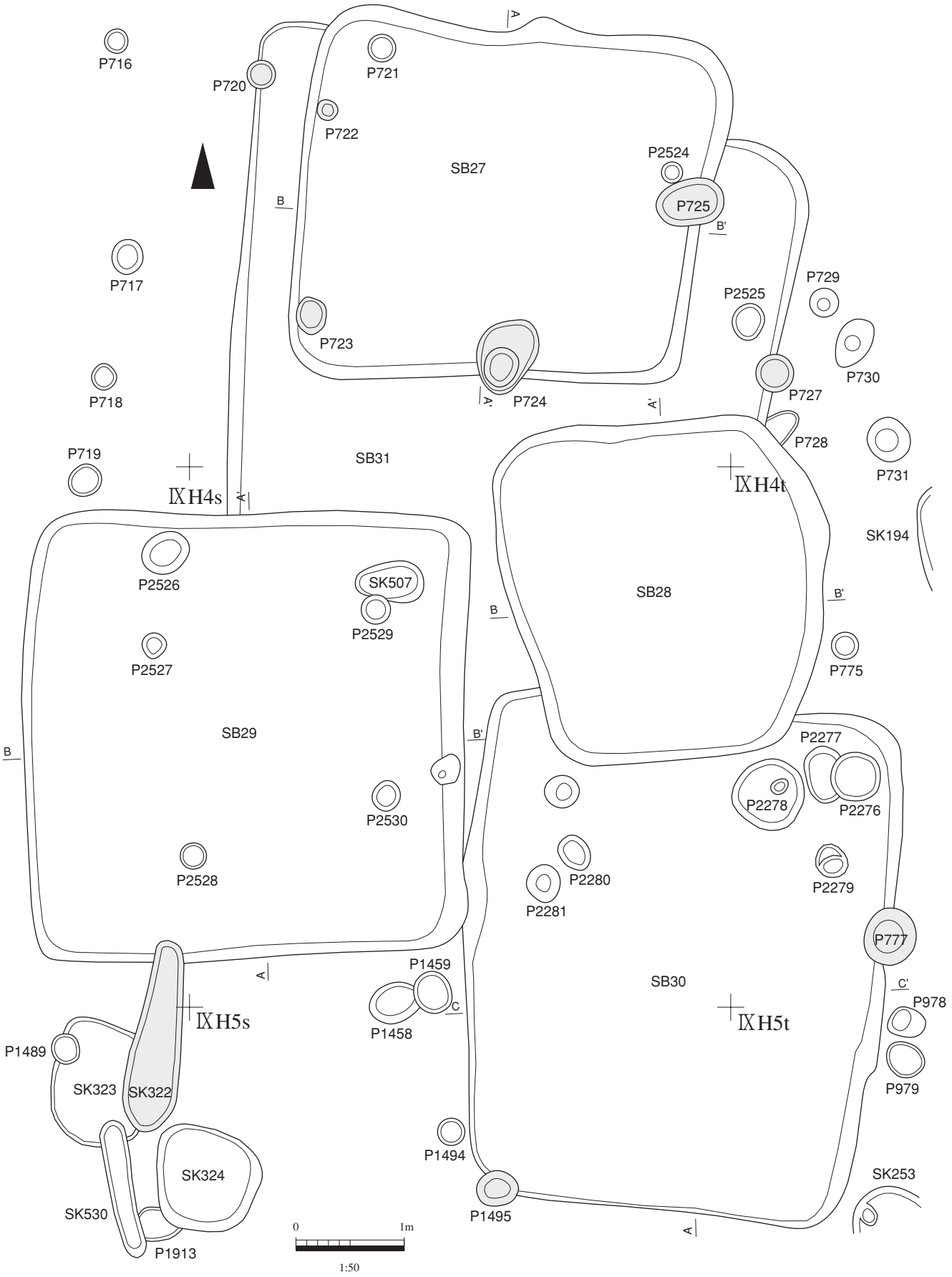
98DSB29　重複関係ではSB30・31よりも後になる。西辺はほぼグリッド北からの振れはない。平面形は隅丸正方形で西辺は4.15m、確認面からの深さ13cmである。床面一部で貼床（3層）がみられる。周溝・竈はなく、柱穴はP2527～P2530が考えられるが、検出した平面形と向きが異なる。覆土層は黒褐色土層（1層）と褐色土層（2層）があり、2時期の可能性も考えられる。すると先の柱穴は2時期目（1層）に対応する可能性も考えられる。出土遺物は須恵器杯（2480）が鳴海32号窯式、および製塩土器の杯部（2481）がある。

98DSB30　重複関係はSB31の後、SB28・29に先行する。東辺はグリッド北から東へ4°振れる。平面形は隅丸方形で西辺4.6m南辺3.45m、確認面からの深さ10cmである。周溝・竈はない。柱穴はP2279・2280が考えられ、P2278が貯蔵穴であろうか。7・8層は貼床ともとれる。覆土層は地山ブロックの混入があり埋め戻しと考えられる。顕著な出土遺物はなかった。

98DSB31　SB27～31の重複関係で最も先行する。西辺はグリッド北から東へ9°振れる。平面形は隅丸方形と推定される。東西5.0m以上西辺4.55m以上。確認面からの深さ20cmである。明瞭な検出ができず、施設などは不明、遺物はなかった。



第275図　98DSB26出土遺物実測図

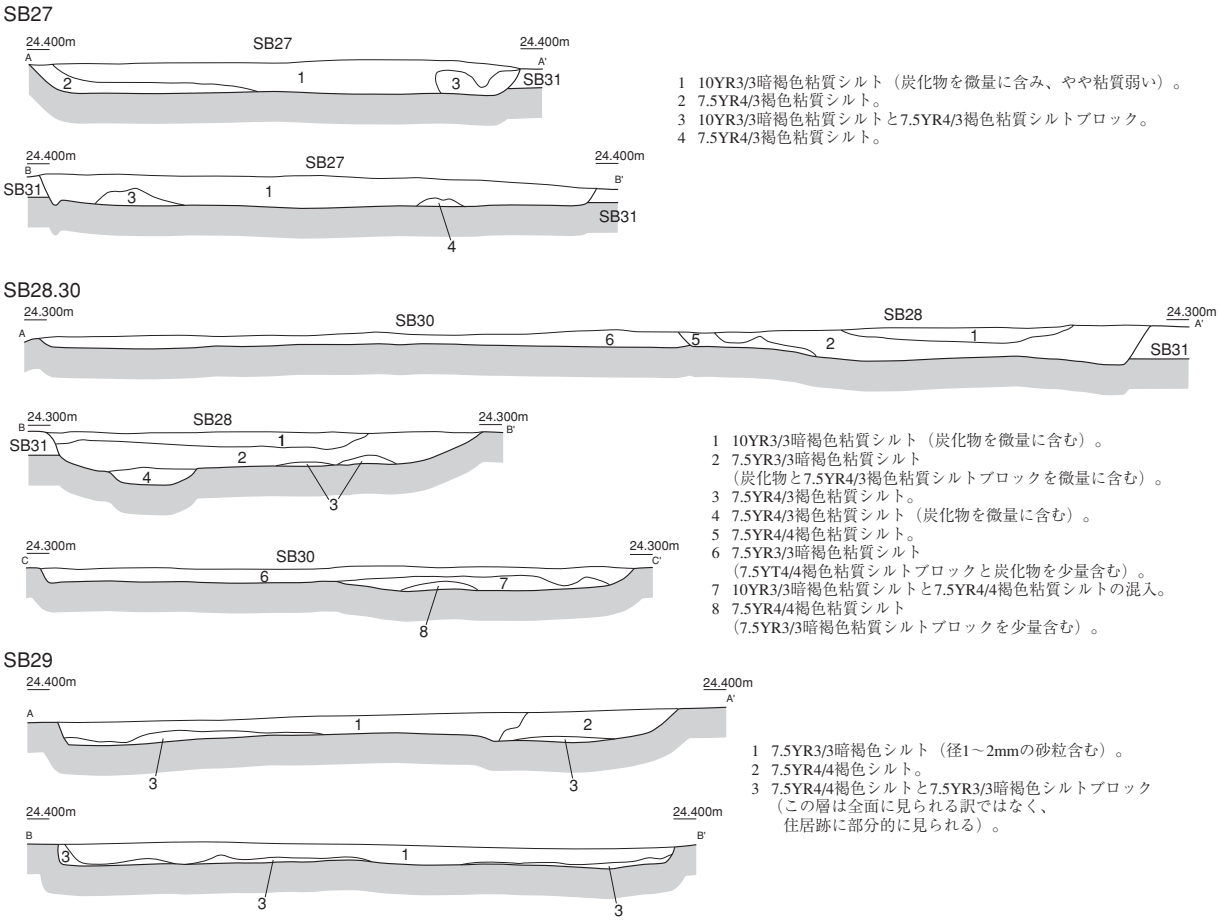


第 276 図　98DSB27・28・29・30・31 平面図

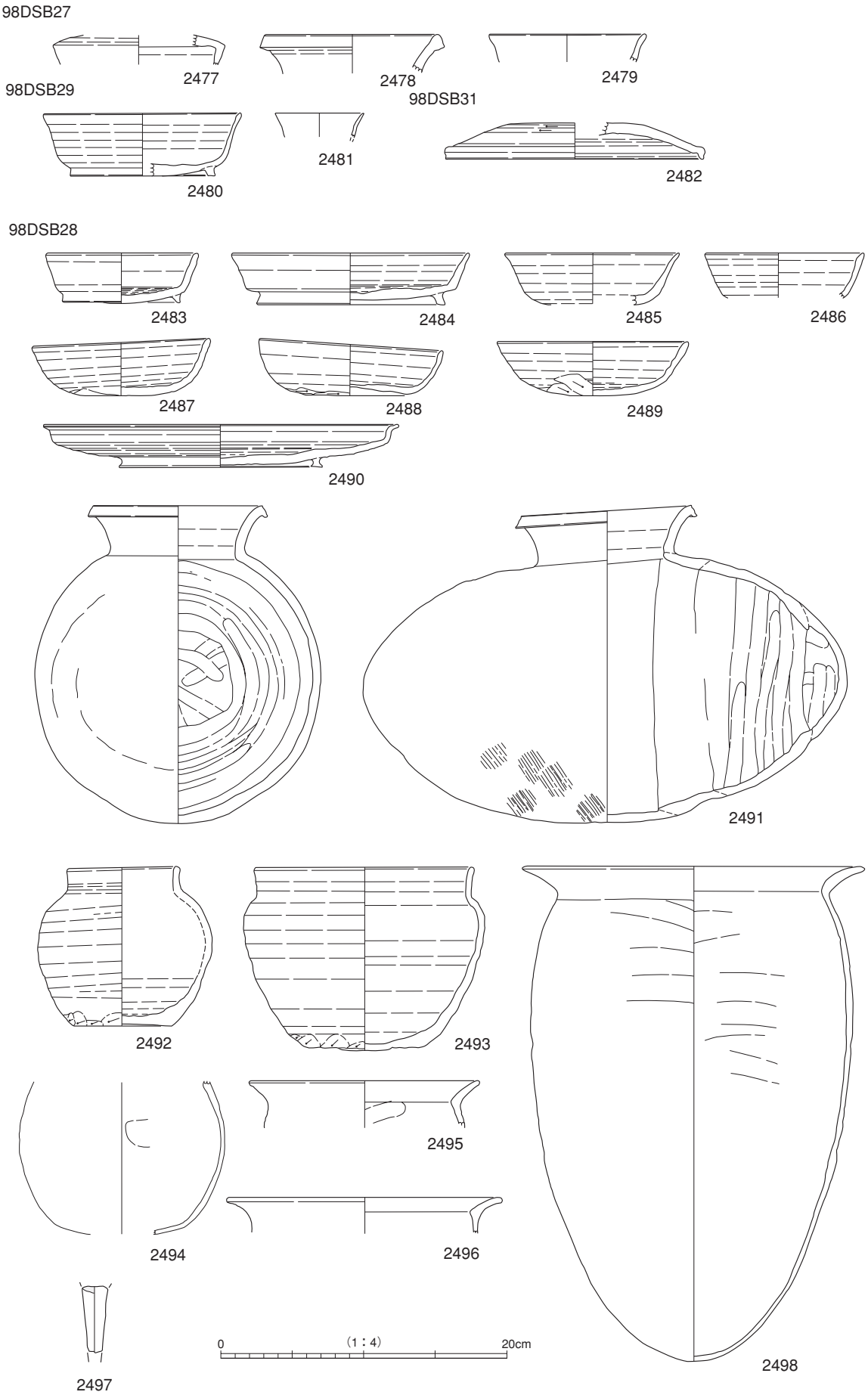
98DSB34　98DSB26の南2.5mで98DSB34～36などが重複して検出された。重複関係では最も後になる。SB34の西辺はグリッド北から東へ50°振れる。平面形は隅丸正方形で北西辺は2.45m、確認面からの深さ38cmと深い。壁面の立ち上がりは緩く（35°）直線的である。2・3層は貼床である。周溝・竈はなく、隅にあるP2291・2292が柱穴と考えられる。出土した須恵器のうち無台杯（2501）は鳴海32号窯式である。

98DSB35　先後関係はSB36→SB35→SB34の順になる。SB35の西辺はグリッド北から西へ2°振れる。平面形は隅丸正方形で北辺は4.0m、確認面からの深さ25cmである。周溝はないが、東西土層断面の西壁近くで、床面から凸になる地山ブロックが多く入る層（6層）があり、造り付け竈の可能性がある。柱穴は不明である。出土した須恵器（2508～2514）のうち蓋（2509）は鳴海32号窯式の可能性があるが、他は高蔵寺2号窯式である。

写真　98DSB28土器出土状況（南から）

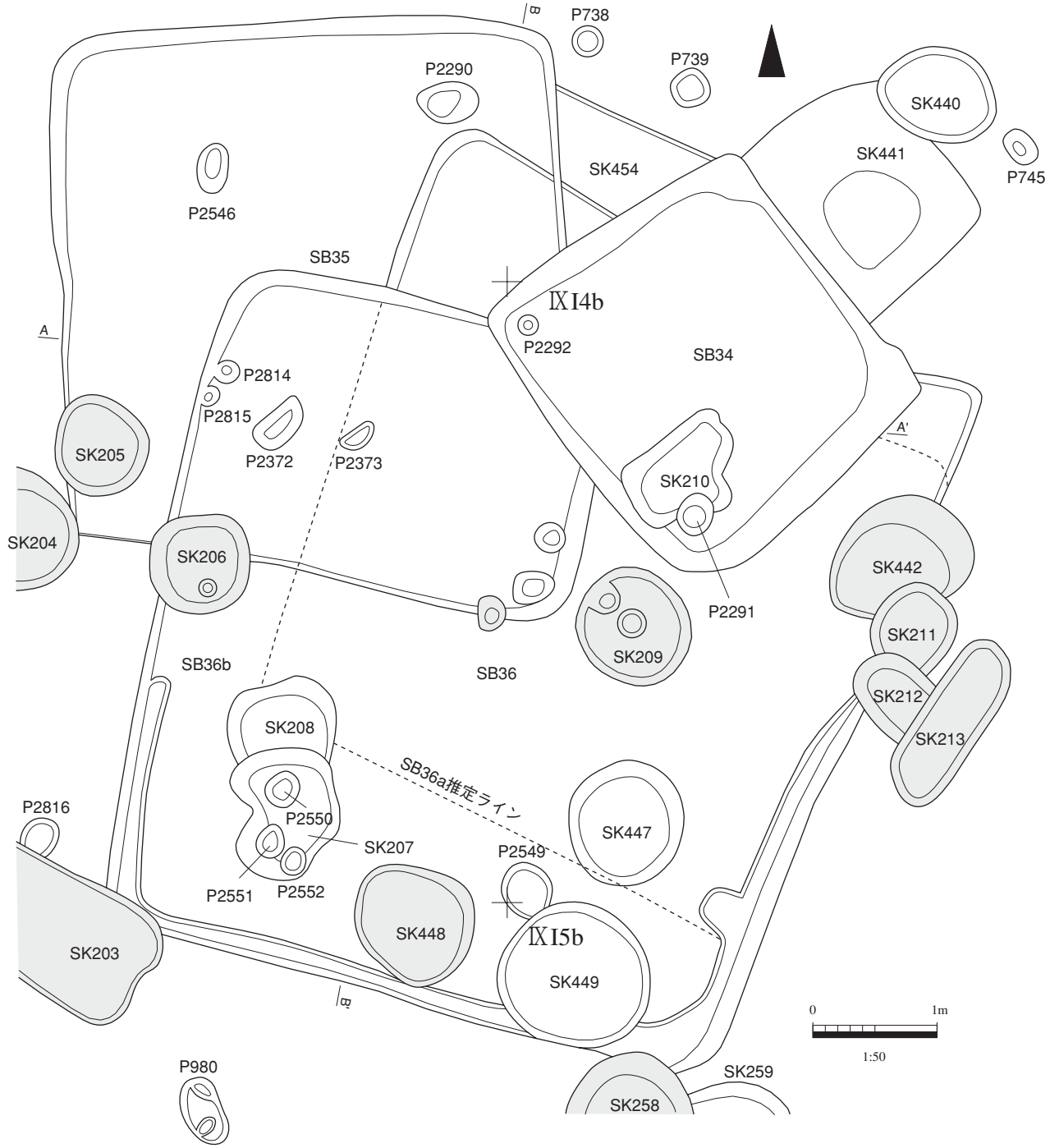


第277図　98DSB27・28・29・30・31断面図

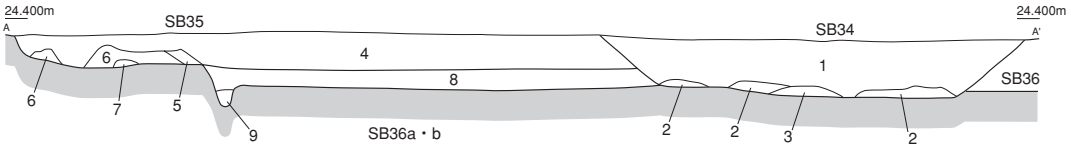


第 278 図　98DSB27・28・29 出土遺物実測図

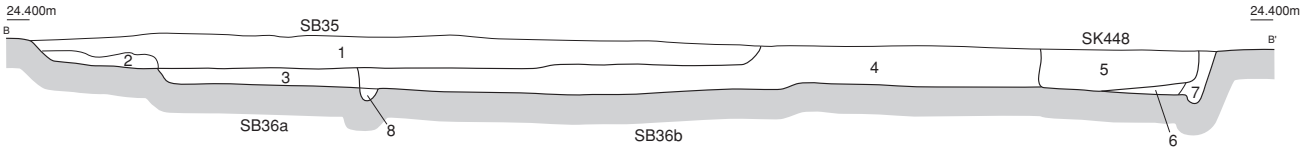
98DSB36　重複関係では最古の建物である。東・南辺の状況から当初1棟とみられていたが、2つの北西隅が確認されたので2棟の重複と判明したのでSB36a（古）とSB36b（新）として報告する。SB36aはSB36bにほとんど壊されるのでほとんど残存しないが西辺はグリッド北から東へ17°振れる。平面形は隅丸正方形と推定され、北辺長は4.85m、確認面からの深さ38cmである。周溝はなく、竈や柱穴については不明である。覆土層は地山ブロックが入るので埋め戻しによると考えられる。次にSB36bであるがこの西辺はグリッド北から東へ19°振れる。平面形は隅丸正方形で南辺長5.15m、確認面からの深さ



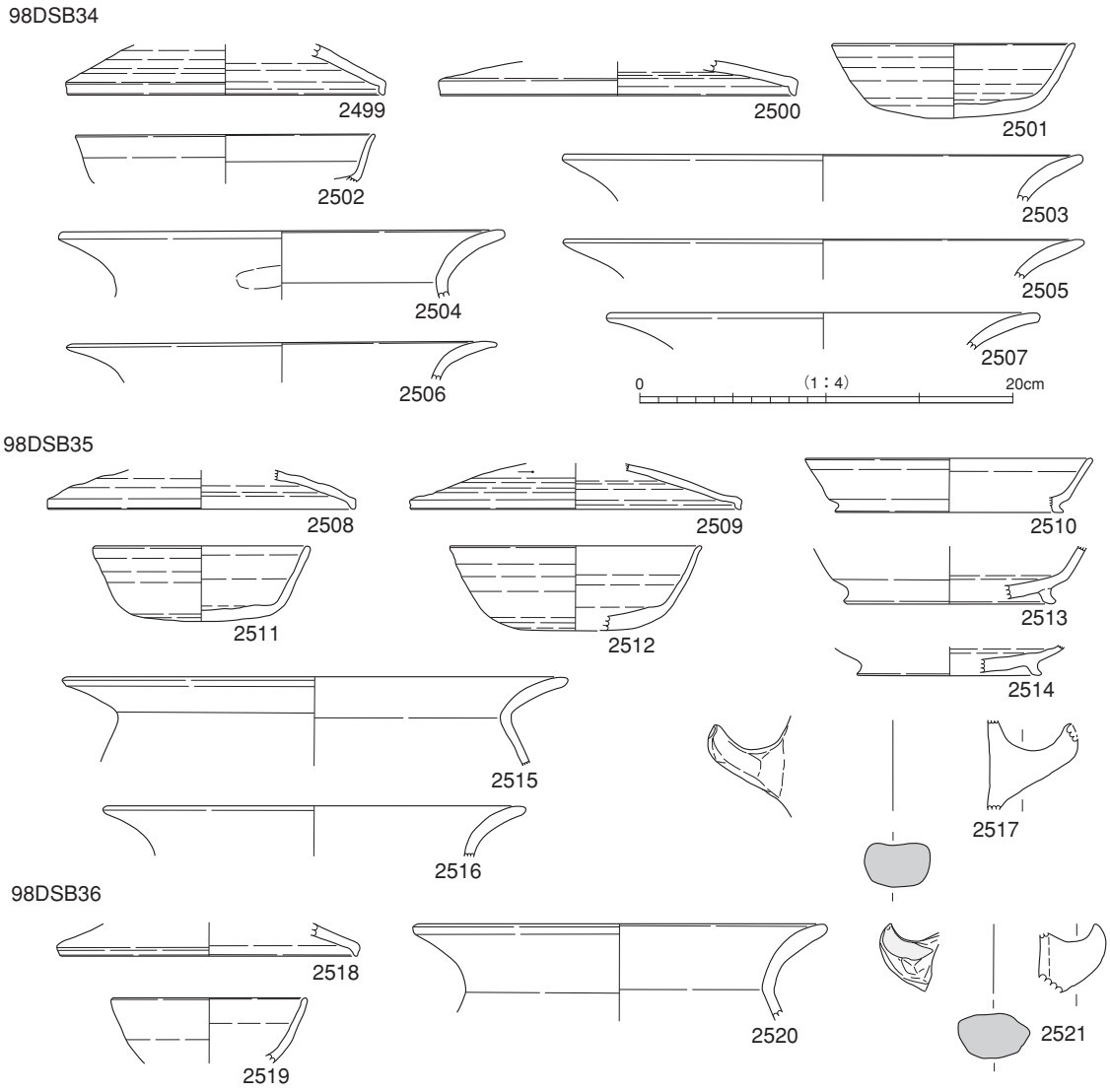
第279図　98DSB34・35・36平面図



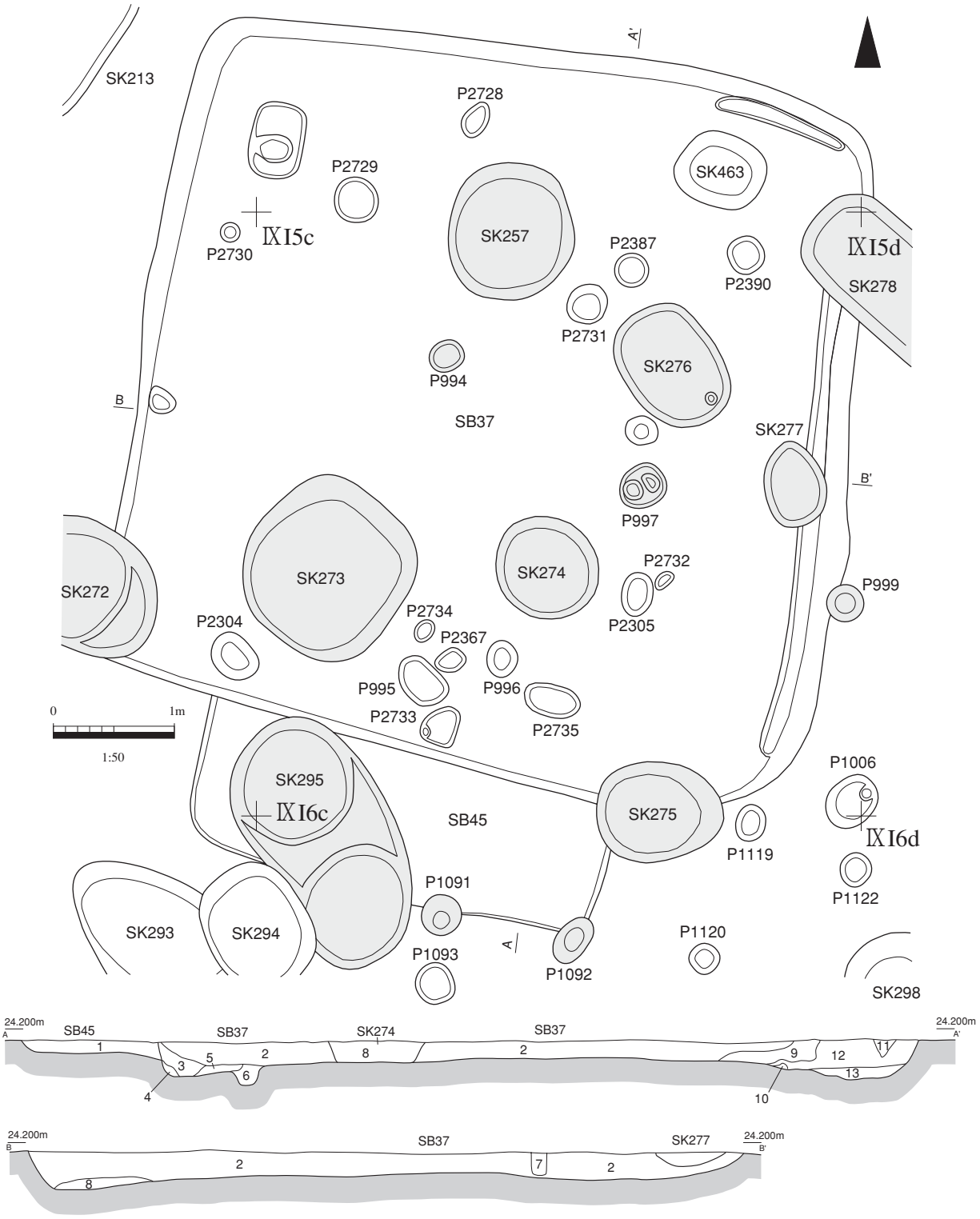
1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（径5mm前後の小礫を多く含み、少量炭化物を含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
3 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロック。
4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（炭化物を少量含む）。
5 7.5YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（炭化物を少量含む）。
6 5よりも7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックが多く混入する。
7 7.5YR4/3褐色粘質シルト。
8 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物と7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含む）。
9 10YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色シルト。



1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（炭化物を少量含む）。
2 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロック。
3 10YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物と7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含む）。（SB36a）。
4 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物と7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含む）。
5 98DSK448を参照。
6 10YR4/4褐色粘質シルトと10YR4/1褐灰色粘質シルト。
7 10YR4/1褐灰色粘質シルト（微量に炭化物を含む）。
8 7.5YR4/4褐色粘質シルトと10YR3/3暗褐色粘質シルト。



第280図　98DSB34・35・36断面図と出土遺物実測図



1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック（ブロックは微量）。（SB45）。
2 10YR3/4暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物が少量混入する）。
3 10YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（2よりブロックが多く混入する）。
4 7.5YR4/4褐色粘質シルト。
5 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルト。
6 10YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量に含む）。
8 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルト（SK274）。
9 10YR3/6暗褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒を含む。炭化物を微量に含む）。
10 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルト質ブロック。
11 10YR4/1褐灰色粘質シルト。
12 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックと炭化物を含む）。
13 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物と焼土粒を微量に含む）。

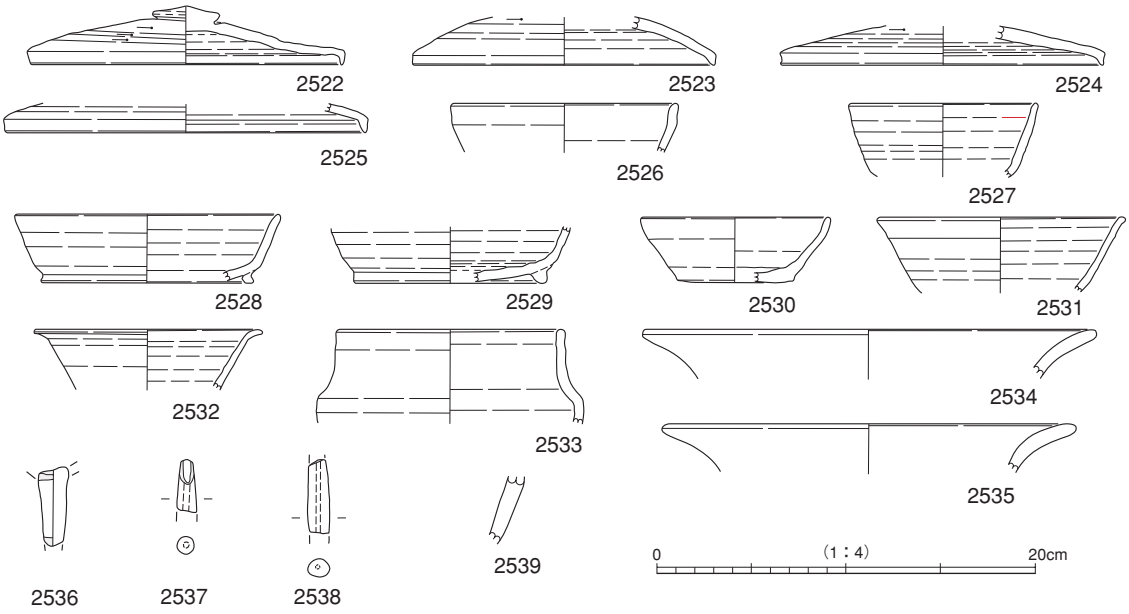
第281図　98DSB37・45平面・断面図

35cmで、SB36aとほぼ同じ深さまで掘り込んでいる。周溝は西辺中央～南辺～東辺中央にかけて確認された。貼床はないとみられ、竈は残存部分では確認できなかった。柱穴は床面ピットが多く特定しがたい。遺物は土器小片が出土したが、時期は概ね高蔵寺2号窯式とみられる。

98DSB37・45　SB36の東2mで98DSB37・45が重複する。重複関係ではSB36が後である。SB36の西辺はグリッド北から東へ12°振れる。平面形はややくずれた隅丸正方形で北辺長5.6m、西辺長5.5m、確認面からの深さ18cmである。周溝は東辺と北辺の一部で確認された。竈は、南北土層断面の北壁直下で壁面から幅75cmの落ち込み（13層）があり、焼土粒が入っておりその可能性がある。貼床はなく、柱穴は床面ピットの中でP2279・2387・2305がその可能性がある。出土遺物は須恵器（2522～2533）、土師器長胴甕（2534・2535）、製塩土器（2536）、土錘（2537・2538）がある。須恵器は概ね高蔵寺2号窯式とみられる。

98DSB45はSB37に北半分が壊される。西辺はグリッド北から東へ14°振れる。平面形は隅丸正方形と推定され、南辺長3.45m、確認面からの深さ11cmである。周溝などの施設はなかったと考えられる。出土遺物もなかった。

98DSB38　調査区中央部、掘立柱建物98DSH34～37に東西両脇を囲まれるようにして位置する。西辺はほぼグリッド北を指す。平面形はやや崩れた隅丸正方形で北辺長3.0m、確認面からの深さ24cmである。北壁中央に造り付け竈がある。竈は焚口を若干掘りくぼめる。竈構築土はほとんど失われていた。周溝や貼床はない。柱穴は隅部のP2722・2723・2726が該当するであろう。覆土層はやや細かく分層できたが西辺側からを中心とした埋め戻しの後にできたとみられる窪地への堆積（1層）という流れが推移が考えられる。出土遺物は須恵器（2540～2542）、製塩土器の杯部（2543）、土師器皿（2544・2545）と土師質の手捏ね土器（2546）がある。須恵器は鳴海32号窯式であろう。土師器皿は赤褐色の薄手で口縁端部を面取りする。暗文はなかった。手捏ね土器はこれとは異なる焼成で、椀のような形状をしてい

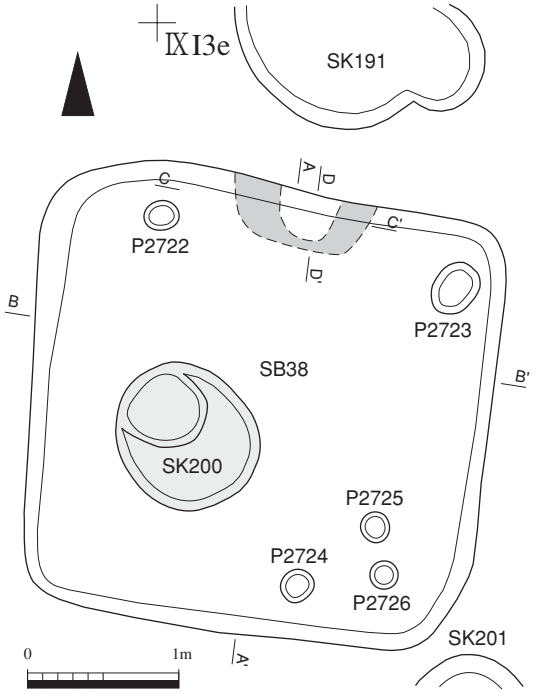


第282図　98DSB37出土遺物実測図

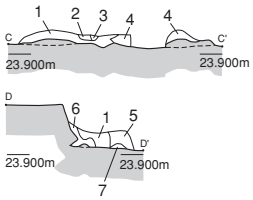
る。これらの遺物は1層からの出土で、ゴミ穴に投棄された感が強い。

98DSB39　SB38の南2 mに位置する。かなり崩れた形状で確認されたが、土層から竪穴建物3棟の重複に土坑などが加わっている可能性が想定される。3棟は古いものから98DSB39a・b・cとする。いずれも竈・周溝・柱穴はない。SB39aは東辺がほぼグリッド北を指す。平面形は隅丸正方形と考えられ、西辺長2.2m、確認面からの深さ27.5cmである。SB39b・cはほぼ同一地点で重複しており、西辺はグリッド北から西へ17°振れる。平面形は隅丸正方形と考えられる。土層断面でSB39bは2～4層が該当する。この深さは15.0cmである。3・4層は埋め戻しによる土層だが、2層はその再掘削後の自然堆積のようでもある。その2層堆積後の再掘削でできたのがSB39cで、深さは10.0cmである。出土遺物は各層からあり土器小片がほとんどであるが、2層から入れ子状態で出土した完形の須恵器椀（2552・2553）は鳴海32号窯式である。またSB39b底面（3層底）からは銅製袴帯具の巡方（M3）が出土した。長辺が3.8cmで、孔は開いていない。

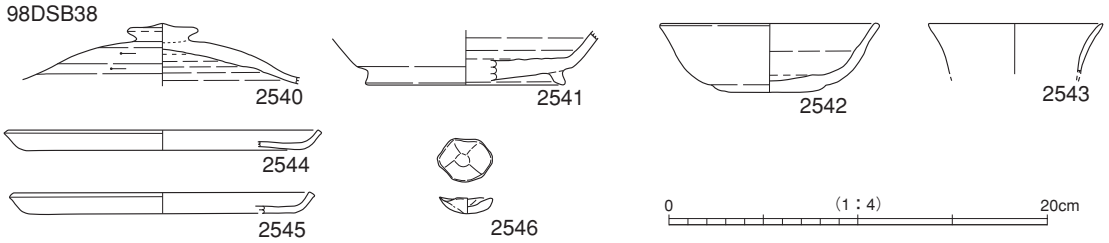
98DSB40　SB01の東10mにて98DSB40



1 10YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を含む）。
3 10YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
4 10YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（3よりブロック多い）。
5 10YR3/4暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を少量含む）。
6 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物と焼土粒を含む）。
7 10YR4/1褐灰色粘質シルト（炭化物を多く含み、焼土塊を少量含む）。
8 7.5YR4/3褐色粘質シルト。
9 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒を多く含み、7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
10 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒を多く含み、7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
11 7.5YR4/3褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロック（炭化物を少量含む）。
12 7.5YR4/3褐色粘質シルト。



1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量に含む）。
2 1+5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルトブロック（焼土塊）。
3 焼土(5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト）。
4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（焼土片と炭化物を多量に含む）。
5 7.5YR4/4褐色粘質シルト+焼土片。
6 10YR4/1褐灰色粘質土（炭化物を微量に含む）。
7 焼土+炭化物。

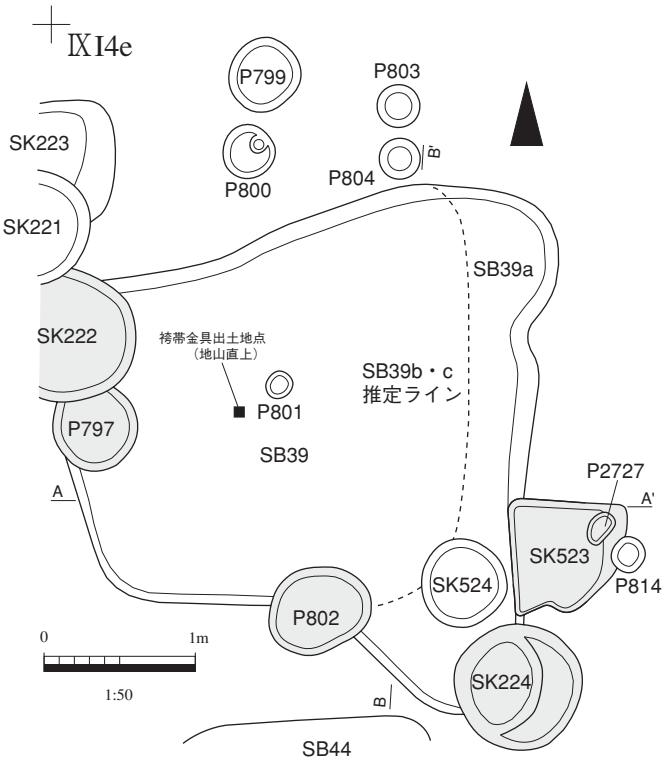


第283図　98DSB38出土遺物実測図

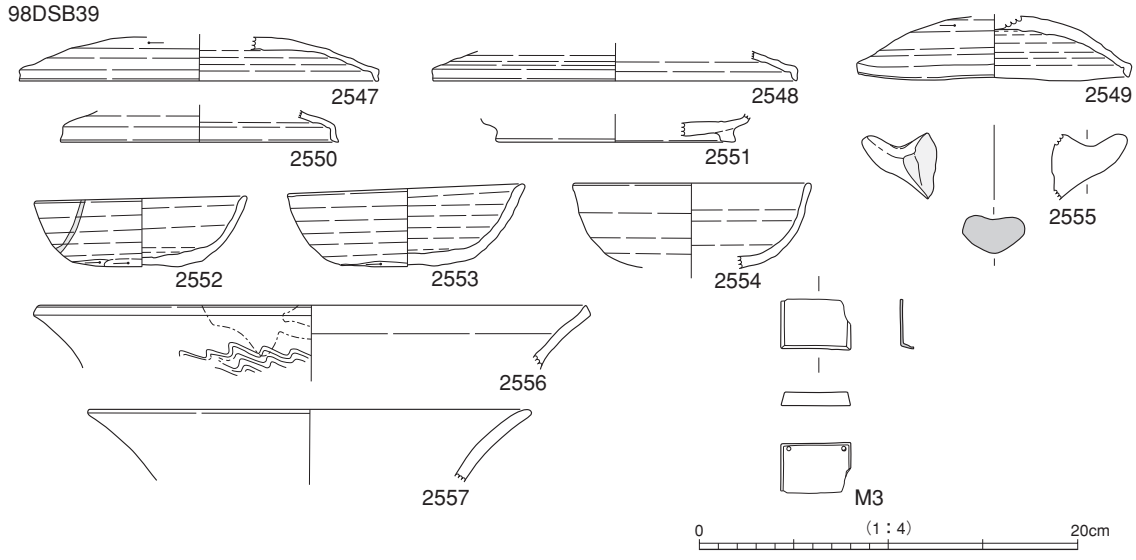
～42が重複する。SB40はその最古段階となる。東辺はグリッド北から東へ2°振れる。平面形は隅丸正方形と考えられ北辺長3.3m、確認面からの深さ9cmである。周溝などの床面施設はなかった。特記すべき出土遺物はなかった。

98DSB41　重複関係はSB40→41→42となる。SB41の南西辺はグリッド北から西へ26°振れる。北隅付近が南西辺などとやや対応せず、別棟が重複している可能性もある。平面形は隅丸正方形とみられ南西辺長3.25m、確認面からの深さ10cmである。周溝などの床面施設はない。床面でピットを複数確認したが、柱穴は特定できていない。なお出土遺物はなかった。

98DSB42　SB41の後から深く掘り込んでいる。西辺はグリッド北から東へ22°振れる。平面形は隅丸長方形で南西辺長3.4m北東辺長2.8m、確認面からの深さ35cmである。周溝・竈はない。



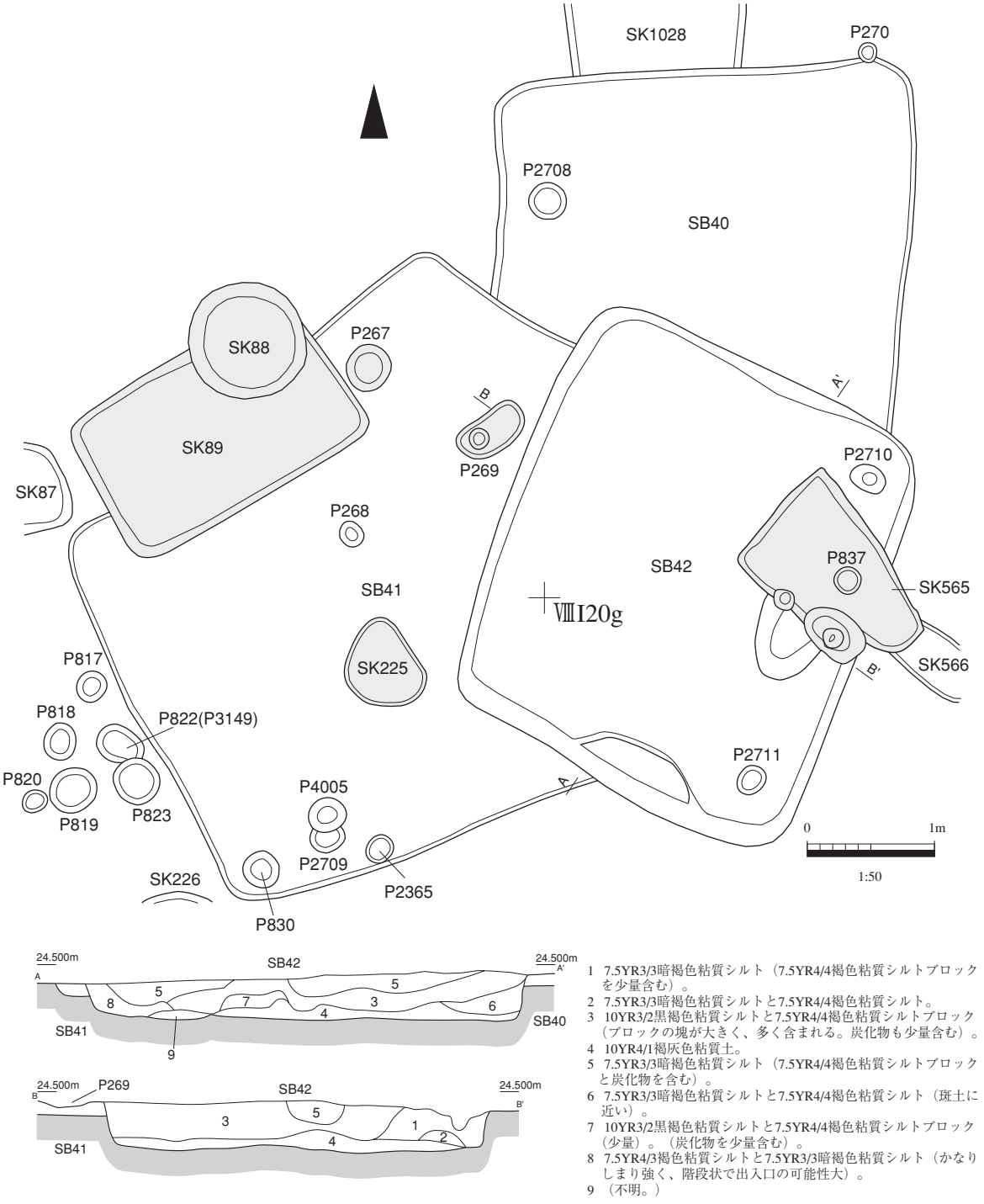
1　7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。（SB39c）。
2　7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む。粘質が1より弱い）。
3　7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
4　10YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
5　7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物と7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
6　7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルト。
7　7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（焼土塊、炭化物を含む）。
8　7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
9　7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
10　7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
11　7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（他に比してブロック多い。炭化物を少量含む）。
12　7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（SK523）。



第284図　98DSB39平面・断面図と出土遺物実測図

ほぼ全面に貼床（4・9層）がなされる。南壁中央には地山土を盛った階段がありここが出入り口と考えられる。柱穴は四隅に配置されたとみられP2710・2711が該当するであろう。覆土層は3層で大きめの地山ブロックが入るなど掘り返しと埋め戻しが繰り返された可能性がある。ただし顕著な出土遺物はなかった。

98DSB43　SB41の南3mに位置する。北東辺はグリッド北から西へ53°振れる。平面形はやや崩れた隅丸正方形で北東辺2.4m、確認面からの深さ13cmである。周溝・竈・柱穴はないが北隅床面に土坑



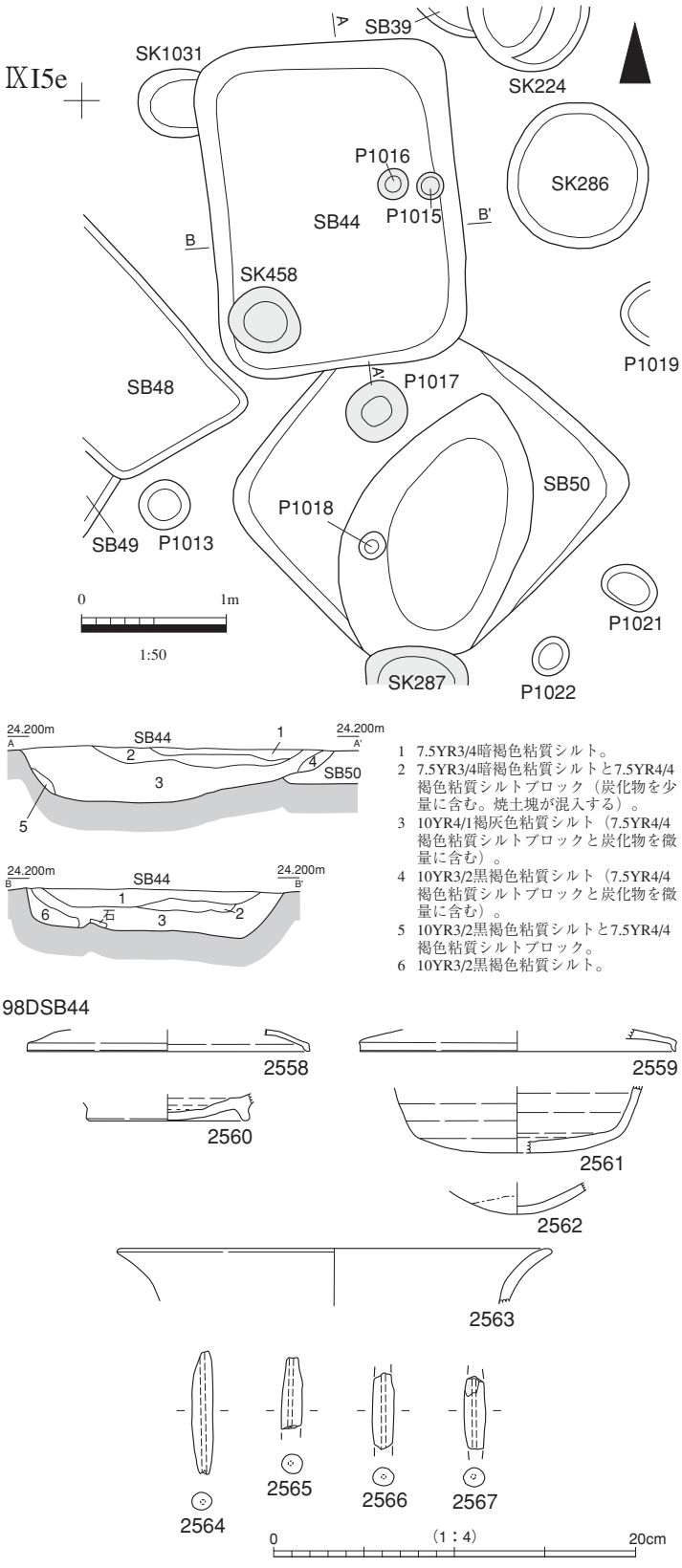
第285図　98DSB40・41・42平面・断面図

（98DSK1030）があり、貯蔵穴の可能性もある。出土遺物はなかった。

98DSB44　SB39の南1mで98DSB44・50が重複する。SB44が後である。西辺はグリッド北から西へ3°振れる。やや南北に長い隅丸長方形で西辺2.28m、南辺長1.7m、確認面からの深さ40cmである。西壁以外の立ち上がりは緩くカーブする。床面施設はない。土層断面からは埋め戻しによるとみられる3層に対し掘り込んだようなかたちで1・2層が堆積する。極めて小規模（1.5×1.45m）な竪穴建物の可能性もあるが、廃棄坑だった可能性もある。出土遺物のほとんどは1・2層から出土しており、須恵器（2558～2562）は概ね高蔵寺2号窯式であろう。また土錘4点がまとまって出土していることが特記される。

98DSB50　SB44とは重複関係で先行する。南西辺はグリッド北から西へ48°振れる。平面形は隅丸正方形で南西辺長2.0m確認面からの深さ23cmである。床面施設はないが、床面の半分ほどを占める楕円形土坑がある。おそらくSB50に先行する土坑とみられる。出土遺物はなかった。

98DSB47　調査区中央部SB45の南4mに位置する。戦国時代の竪穴建物SB46と重複する。西辺はグリッド北から東へ12°振れる。やや東西に長い隅丸長方形で西辺長2.9m南辺長3.35m、確認面からの深さ19cmである。一部に貼床（2・3層）がなされ、それによると東辺に周溝がある。北

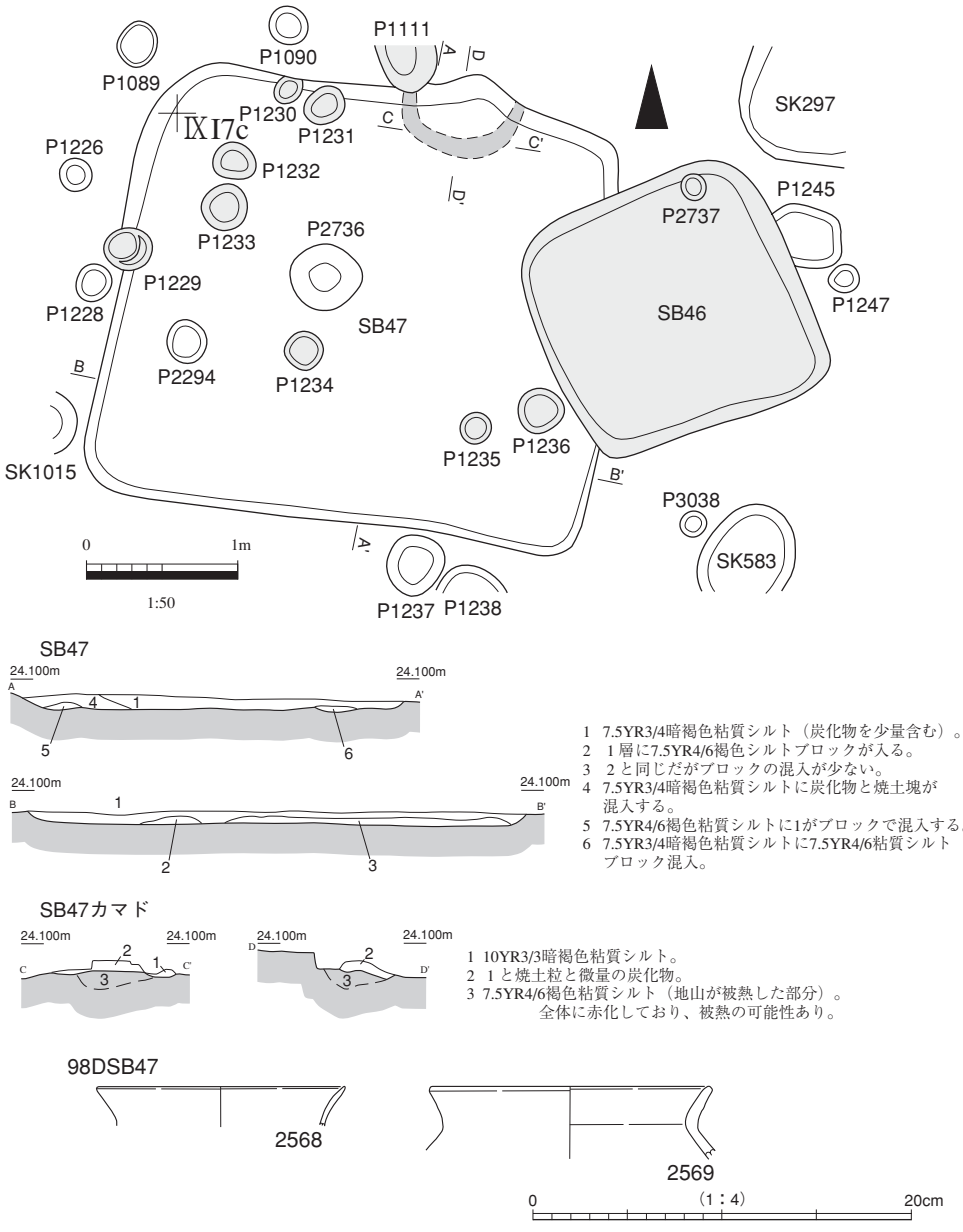


第286図　98DSB44・50平面・断面図と出土遺物実測図

壁中央よりやや東に造り付け竈がある。焚き口は直径40cmの円形に床面が焼けて赤変する。貯蔵穴や柱穴に該当する床面ピットはない。覆土は2層が竈破砕に伴い、1層は地山土が多く埋め戻しによるものと考えられる。遺物は土師器甕2点で2569は古墳時代のものと考えられる。しかし建物に関わる遺物とは考えにくい。

98DSB48・49　調査区中央部SB44の西側に接するようにして2棟が重複する。先後関係はSB49→SB48である。いずれも西辺がグリッド北から東へ46°振れる。平面形はSB48が1.25m×2.38mの長方形、SB49は2.1m×1.35m以上の方形である。深さは6cmである。1棟分の可能性もある。遺物はSB49から土師器が出土したが縄文土器の浅鉢の可能性もある。

98DSB51・53　調査区中央部SB47の東8mで2棟が重複する。先後関係はSB53→SB51である。いずれも西辺はグリッド北から西へ16°振れる。平面形は南北に長い長方形でSB51は西辺長3.95m南辺長

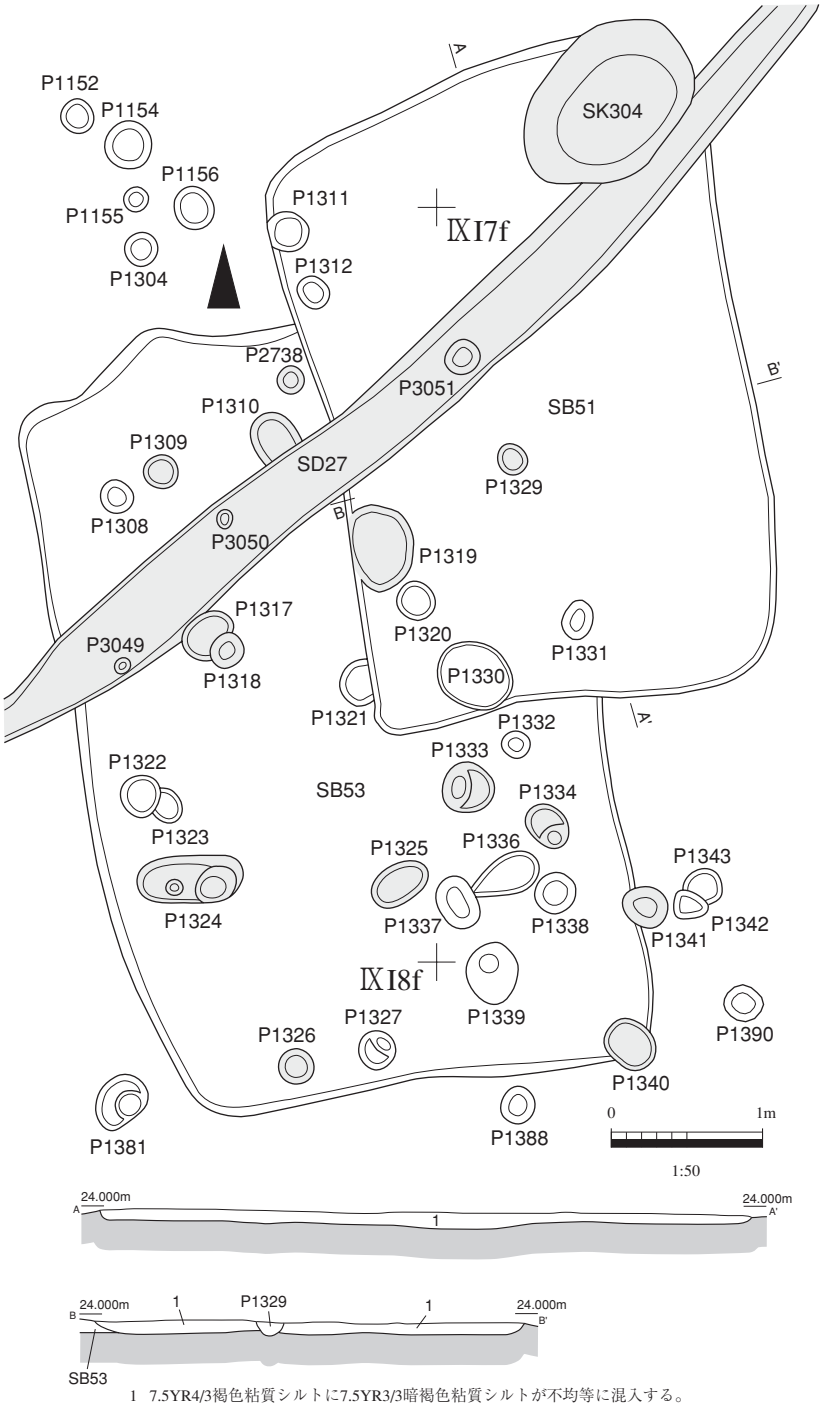


第287図　98DSB47平面・断面図と出土遺物実測図

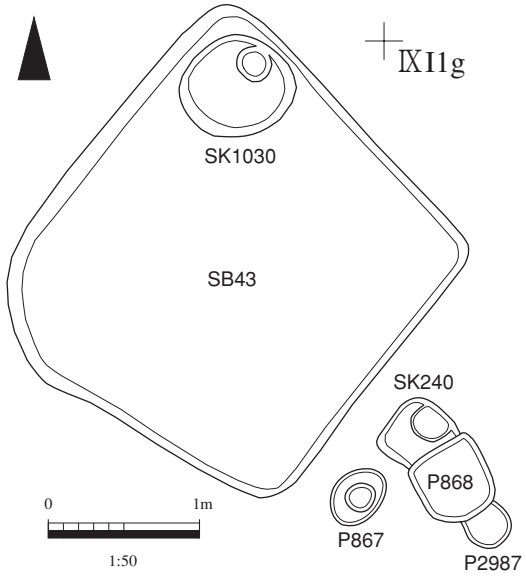
2.65m、確認面からの深さ9cm、SB53は西辺長4.9m南辺長3.15mで、確認面からの深さ10cmである。周溝・貼床・竈はなく、柱穴も特定しがたい。遺物はなかった。

98DSB54　SB51の東3mに位置する。他の建物との重複はない。西辺はグリッド北から東へ14°振れる。平面形は南北に長い隅丸長方形で西辺長3.38m北辺長2.25m、確認面からの深さ11cmである。周溝は土層断面で北辺にあることがわかる。貼床は壁面近くに部分的にあるとみられる（2・3層）。竈・柱穴はない。覆土層（1層）は地山ブロックが多く埋め戻しと考えられる。遺物は1層からで須恵器蓋（2571）は高蔵寺2号窯式期、有台杯（2572）は同時期か体部立ち上がりが明瞭でやや下る可能性もある。土師器甕（2573）はナデ調整仕上げで一部に縦ハケが残る。8世紀前葉から中葉と考えられる。

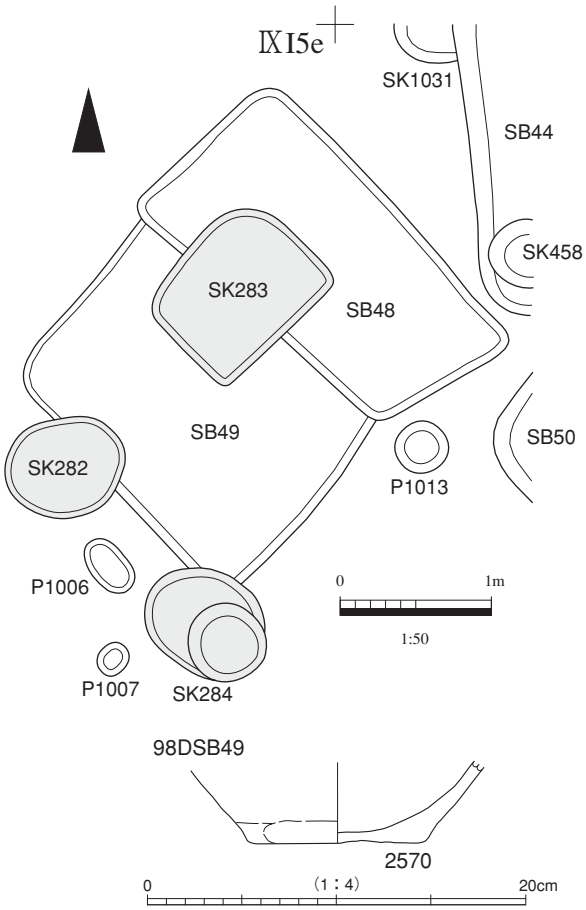
98DSB55・56　調査区中央部SB53の南2mで2棟が重複する。戦国時代の溝98DSD02に南東部分が壊される。先後関係はSB56→SB55である。いずれもグリッド北から東へ20°振れる。平面形はSB55がやや角張った隅丸長方形と考えられ、北西辺長2.53m北東辺長2.35m以上、確認面からの深さ13cmである。一方SB56は緩いカーブの隅部がある隅丸長方形と考えられ、西辺長2.5m北東辺3.45m以上、確認面からの深さ8cmである。ともに竈・柱穴はない。ただSB55は貼床（2・3層）があり、それによると西壁直下に周溝がある。遺物はSB55から須恵器杯が出土し、2574は折戸10号窯式であろう。したがって建物は8世紀中～後葉と考えられる。



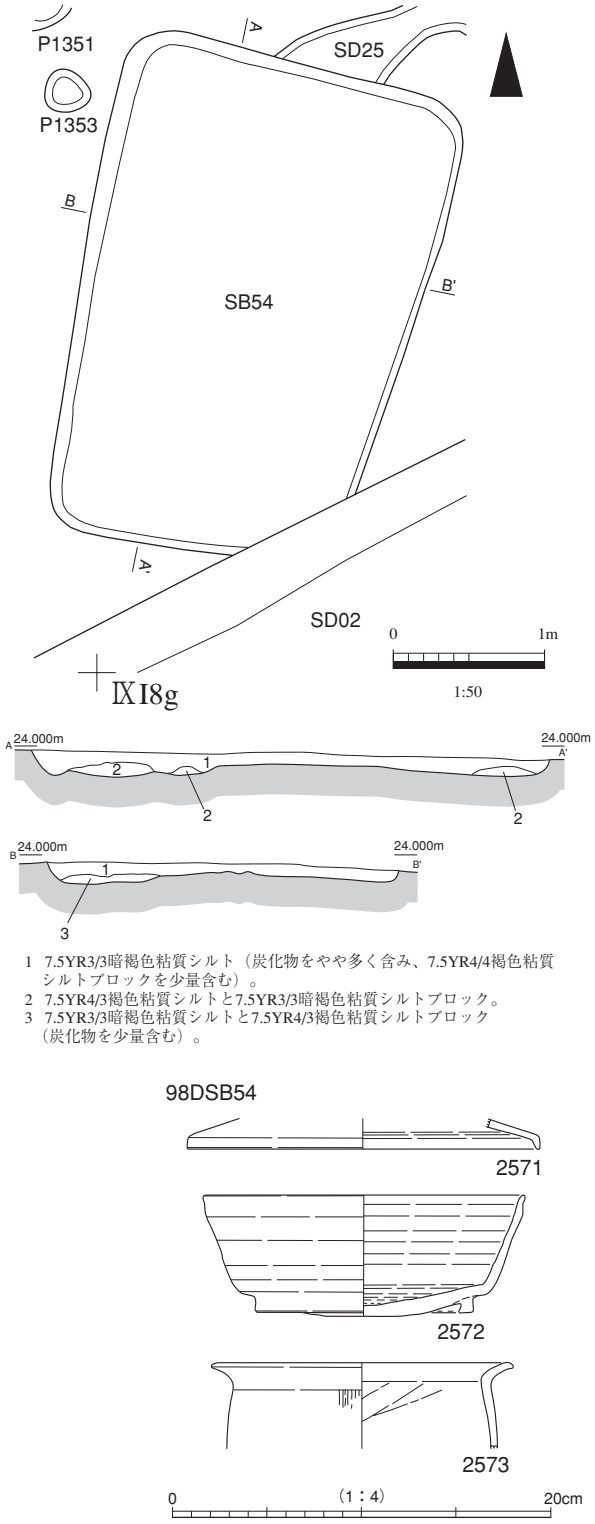
第288図　98DSB51・53平面・断面図



第 289 図　98DSB43 平面図



第 290 図　98DSB48・49 平面図と出土遺物実測図



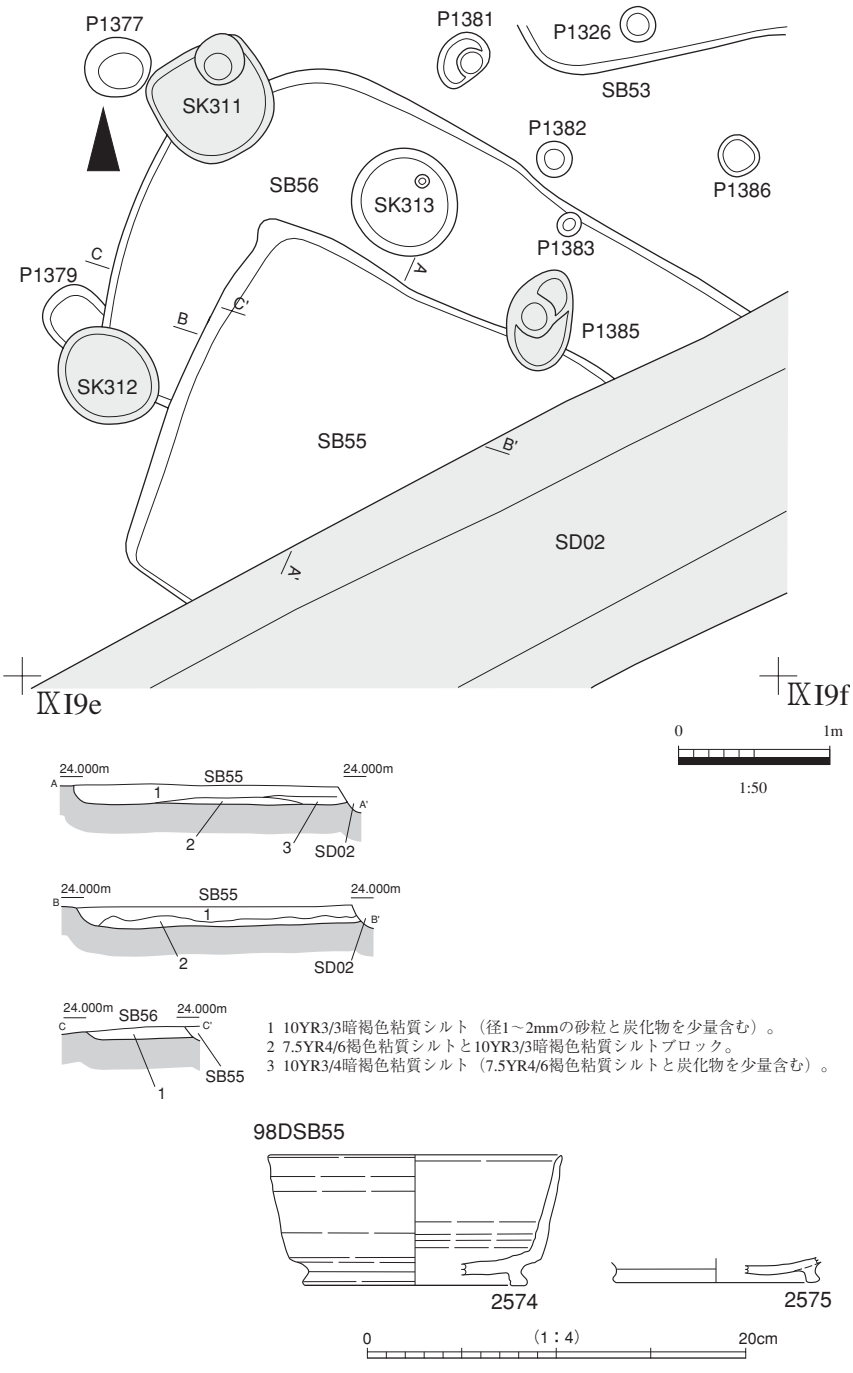
第 291 図　98DSB54 平面・断面図と出土遺物実測

98DSB57　調査区中央部SB55の東5mに位置し、東壁で途切れる。西辺はグリッド北から東へ3°振れる。平面形はやや不整な隅丸正方形と考えられ、西辺長3.15m確認面からの深さ8cmである。周溝・竈はなく、壁面の立ち上がりの緩やかである。部分的な貼床（2層）がある。床面ピットから柱穴を特定できていない。遺物は覆土層（1層）からで須恵器蓋（2576）は鳴海32号窯式である。

98DSB59　調査区中央部SB55の南3mに位置する。土層から2棟が重複することが判明した。いずれも西辺がグリッド北から東へ17°振れる。先行するSB59aは西辺長2.95m南辺長3.5m、確認面からの深さ15cmの隅丸長方形である。その後にやや北東方向へずれて建てられたのがSB59bで周溝などから推定すると東辺3.3m南辺長2.9m、確認面からの深さ15.0cmである。床面で検出された溝の状況から共に周溝が認められるが柱穴の特定はしがたい。

SB59aでは西壁近くに幅約50cmの盛り土による段（11層、ベッド状遺構）がある。竈はSB59b構築時に失われた可能性が高い。次にSB59bであるが、北壁近くに幅約40cmの盛り土による段（7層）がある。また東壁中央の張り出しに竈があったと推定される（12層）。覆土層は2・4・5・9層だが4層は炭化物が多く埋め戻し前に床面中央で何かを燃やしたようである。出土遺物はa・bのいずれに属するか不明であるが、概ね折戸10号窯式であろう。2584・2585以外はごく小片である。土師器甕（2590～2593）もほぼ併行期であろう。

98DSB62・63　調査区の中央部やや南に位置する。2棟の重複である。先後関係は



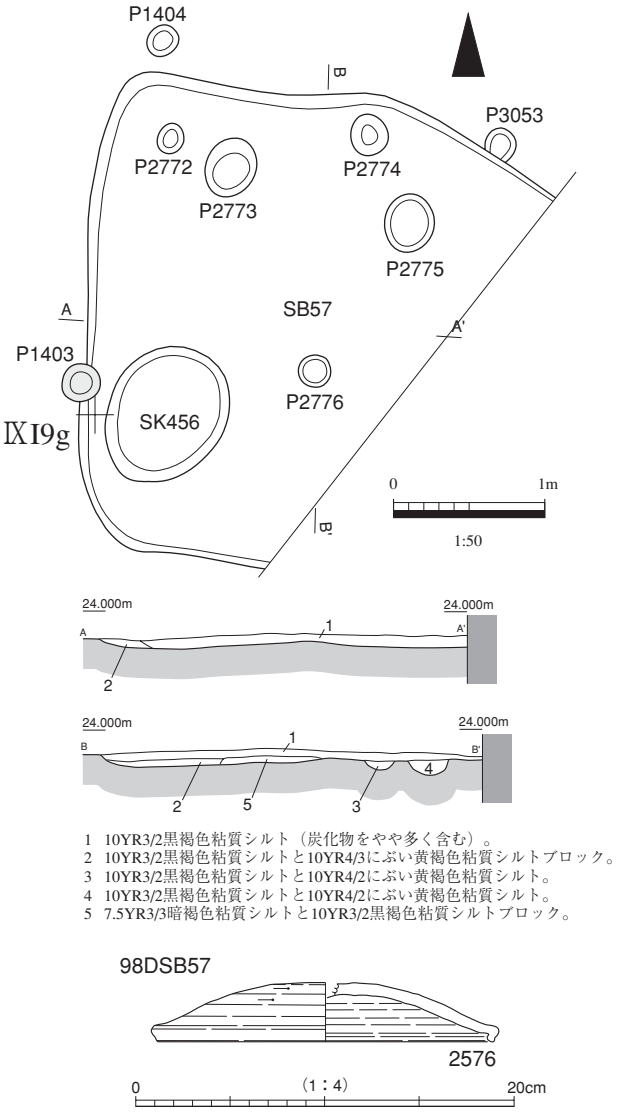
第292図　99ASB55・56平面・断面図と出土遺物実測図

SB63→SB62である。SB62は西辺4.8mの平面形が隅丸正方形で西辺はほぼグリッド北を指す。深さは24cmである。周溝は西辺と南辺に若干認められる。柱穴は一部98DSK432に隠れて不明であるが4本であろう。その場合、直径25cm前後のP2555・P2256・P2560が対応し、直径20cm以下のP2554・P2557が対応するであろう。すなわち柱穴から2時期が推定されるが、土層その他からはこれを積極的に肯定するものはない。土層断面から北壁中央に造付け竈が想定できるが規模は不明。また9層は貼床とみられる。

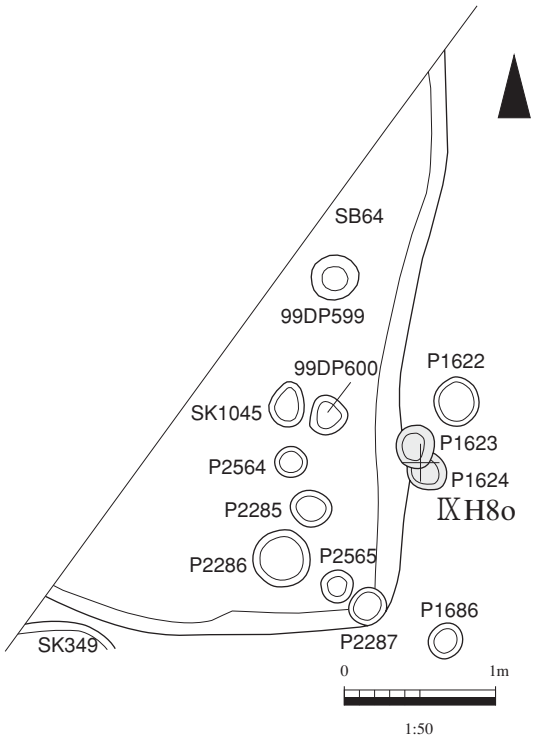
98DSB63は西辺長3.0m深さ13cmの平面形が隅丸正方形である。周溝はなく、他に床面でピットなどは確認されなかった。

98DSB64　調査区西壁で途切れて確認された。東辺長3.3m以上で東辺はほぼグリッド北を指す。周溝はなく床面で多数のピットが確認されているが柱穴は特定できない。顕著な出土遺物はなかった。

98DSB65　調査区中央部で確認された。平面形は東西方向に長い長方形である。東辺長5.2m北辺長7.4mで東辺はグリッド北から東へ8°振れる。土層から2棟の重複が想定される。すなわちP2838・P2569・P1853を柱穴とする98DSB65aと、それの南・北辺を共有しつつ西方向へスライドした地点で重複するSB65bである。SB65bはP2566・(P2567)・P2568とP2838の西脇で検出されたピットを柱穴とする。土層は中央部で上に重なる98DSK371の西側では6・7層で7層が貼床、一方東側では貼床がない。このことから両者が一体であった可能性は低いが、先後関係は決定できない。柱穴の位置からするとSB65a・b共に隅丸正方形と推定され、SB65bは西辺長4.9mでやや小さい規模が考えられる。深さはSB65aが20cm、SB65bが18cmである。

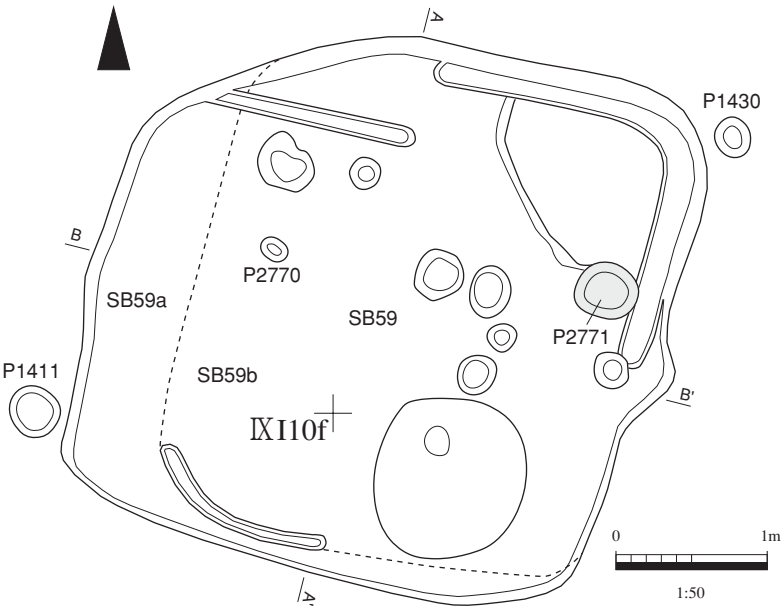


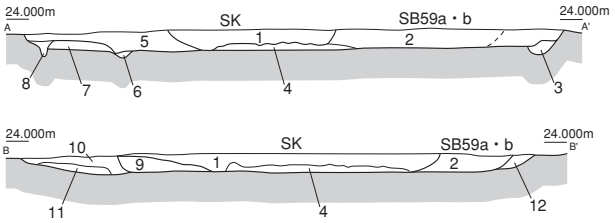
第293図　98DSB57平面・断面図と出土遺物実測



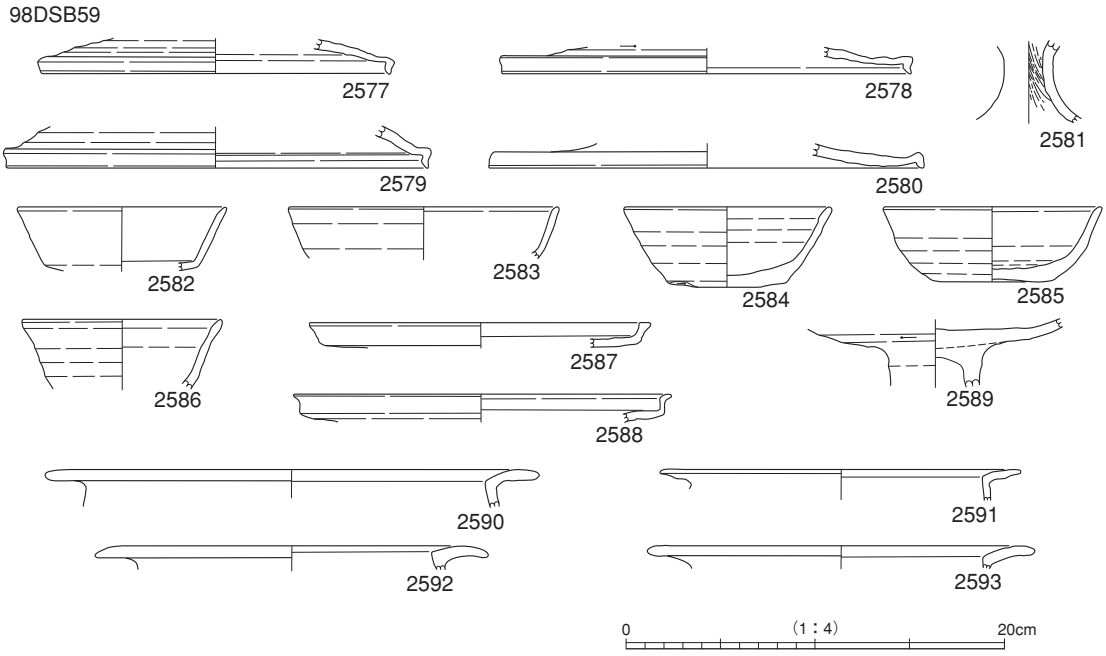
第294図　98DSB64平面・断面図と出土遺物実測

98DSB66　SB65（詳細にはSB65b）と北東隅が重複する。平面形は北辺長4.0m 西辺長3.25mの東西に若干長い隅丸長方形である。隅部のカーブが強く丸みがある。西辺がほぼグリッド北を指す。深さは19cmである。北壁中央部に造り付け竈の裾部の痕跡が確認され、幅1.4m、南北長63cmの規模が考えられる。ただ東西ベルト土層断面によると東壁付近に焼土塊を含む4層があって、竈との関連が注意される。しかし東壁付近には造り付け竈裾部の痕跡はなかった。周溝はなく、床面で多数のピットが確認されたものの柱穴は特定しづらい。覆土層は概ね単一層で、一気に埋め戻したと考えられる。土層

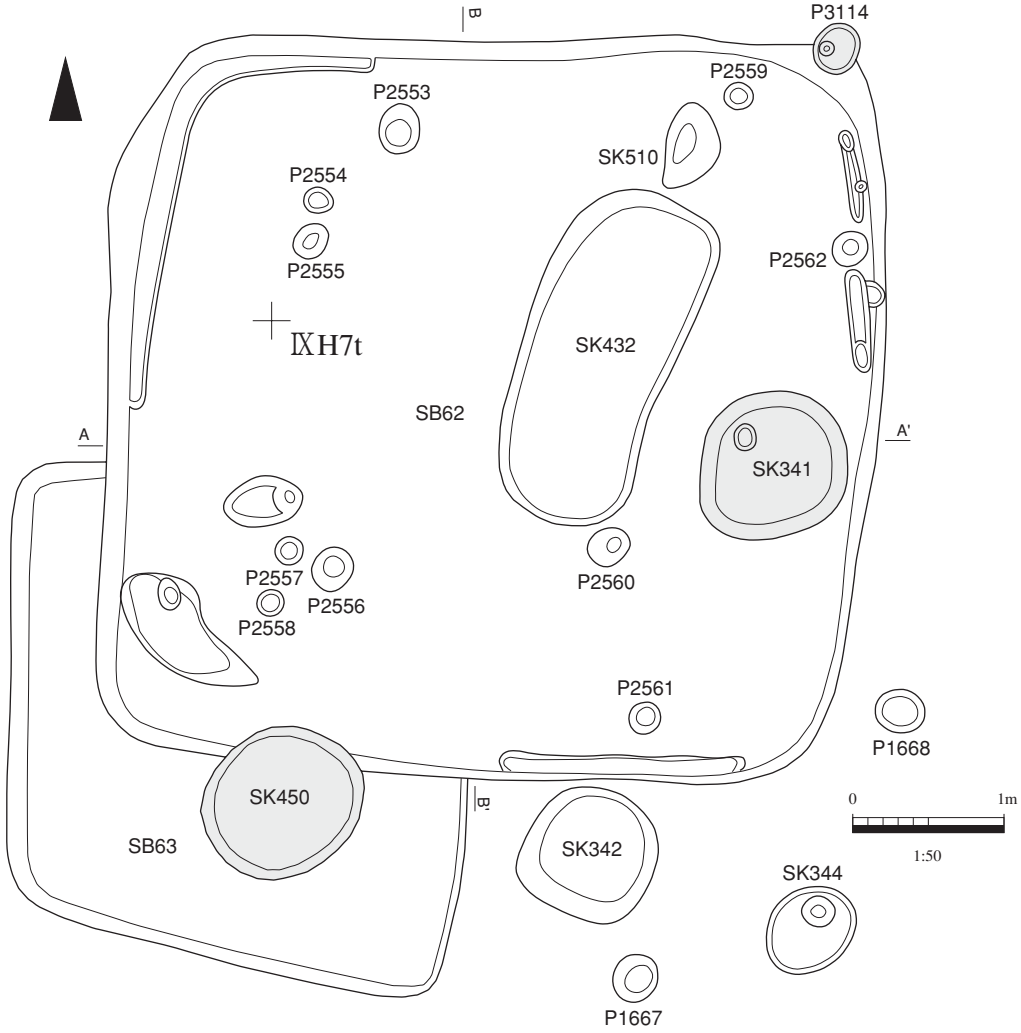


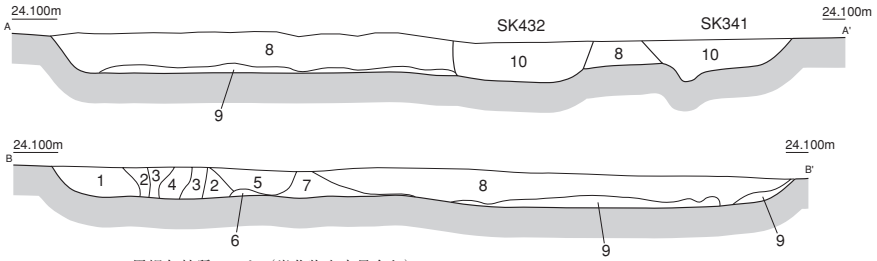


1　10YR3/2黒褐色粘質シルト（10YR4/4褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
2　10YR3/1黒褐色粘質シルト（10YR4/4褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
3　10YR3/1黒褐色粘質シルトと10YR4/4褐色粘質シルト。
4　10YR4/1褐色粘質シルト。炭化物を多く含み、特に1層との境界部分に広がる。
5　10YR3/1黒褐色粘質シルト。
6　10YR3/1黒褐色粘質シルトと10YR4/4褐色粘質シルトブロックが少量混入。
7　6と同じだが、ブロックを多く含む。しまりは強い。
8　10YR4/1褐灰色粘質シルト。
9　10YR3/3暗褐色粘質シルト。
10　10YR3/4暗褐色粘質シルト。
11　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト。
12　7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を少量含む）。

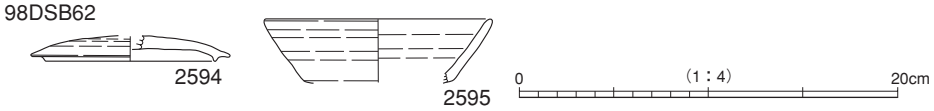


第295図　98DSB59平面・断面図と出土遺物実測図





1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
3 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト。
4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
5 7.5YR4/3褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒と炭化物を微量に含む）。
6 10YR3/2黒褐色粘質シルト。
7 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック（少量）。（炭化物を少量含む）。
9 7.5YR4/3褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（しまりはよい。斑土状）。
10 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック（炭化物を少量含む）。
（斑土状に近い）。（SKの埋土）。



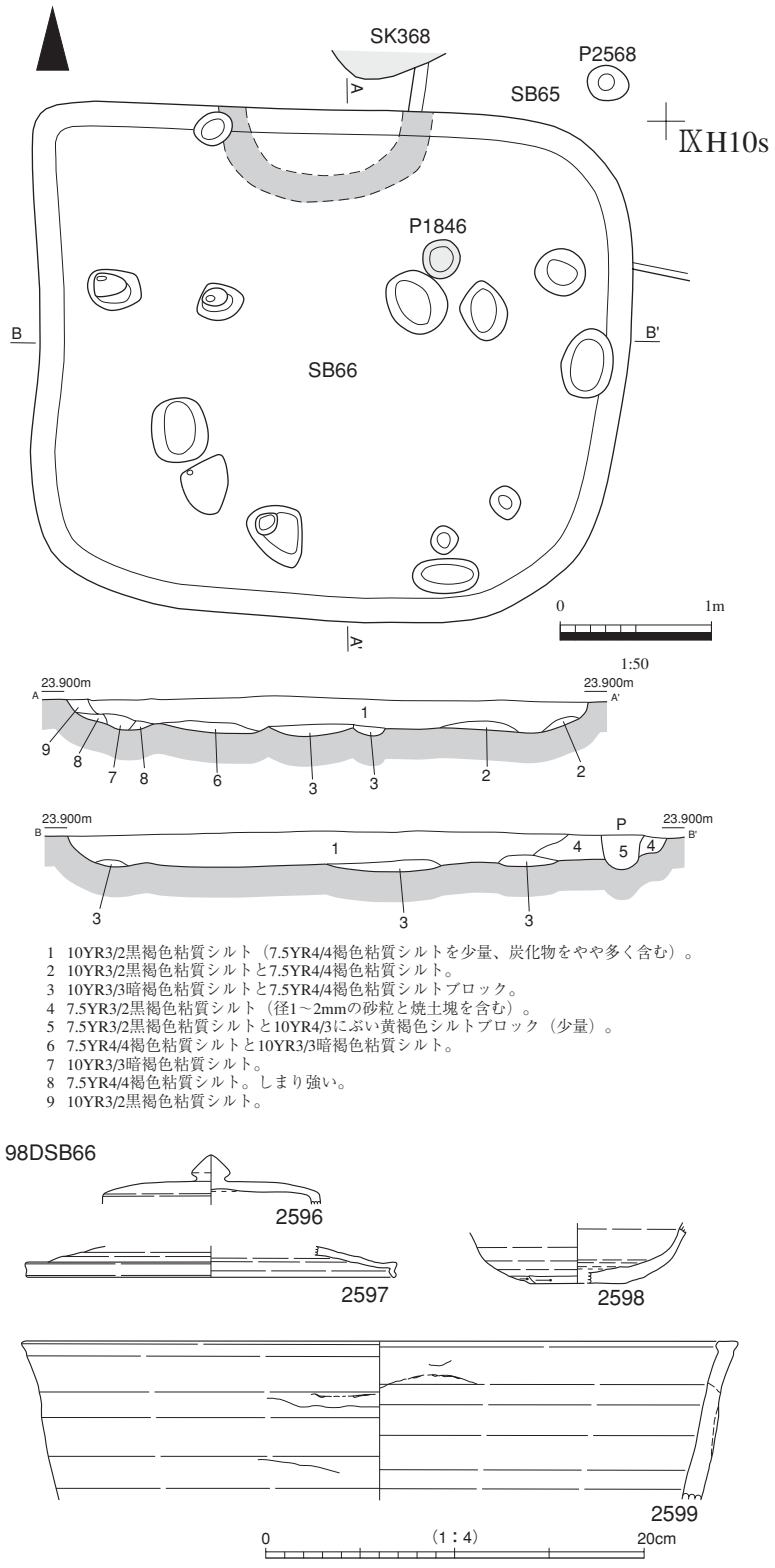
第 296 図　98DSB62・63 平面・断面図と出土遺物実測図

断面の3層は部分的な貼床である。遺物は、2599がこね鉢である。

98DSB67　調査区南部で確認された。戦国時代の溝98DSD02に南東隅部を壊される。検出された平面形は南辺と西辺が直角にならないなどややいびつで、床面にある多数のピットから複数棟の重複も考えられよう。なお1棟と想定した場合の計測値は西辺長4.4m北辺長4.8mで西辺はほぼグリッド北えを指す。深さは30cmである。周溝は南西隅部と東辺に認められる。柱穴は4つが想定されるが先述したように多数あって特定はしづらい。竈は確認されなかった。出土遺物はなかった。

98DSB70（SB70a・b）・71・72・84　調査区中央部にある5棟の重複である。先後関係はSB73・84→SB71・72→SB70b→SB70aである。SB84は東辺長2.8m以上の隅丸正方形と推測され、東辺はグリッド北から東へ16°振れる。深さは8cmである。周溝はなく、柱穴は特定できていない。

SB71はSB84の西側に重なる。西辺長2.6m以上で隅丸正方形を推測されるが、東辺はややいびつに確認されており、8世紀代に増加する小規模竪穴建物のひとつであろう。西辺はグリッド北から東へ10°振れる、深さ15cmで壁面の立ち上がりは12°と緩い。周溝はなく、柱穴も隅部で確認されな



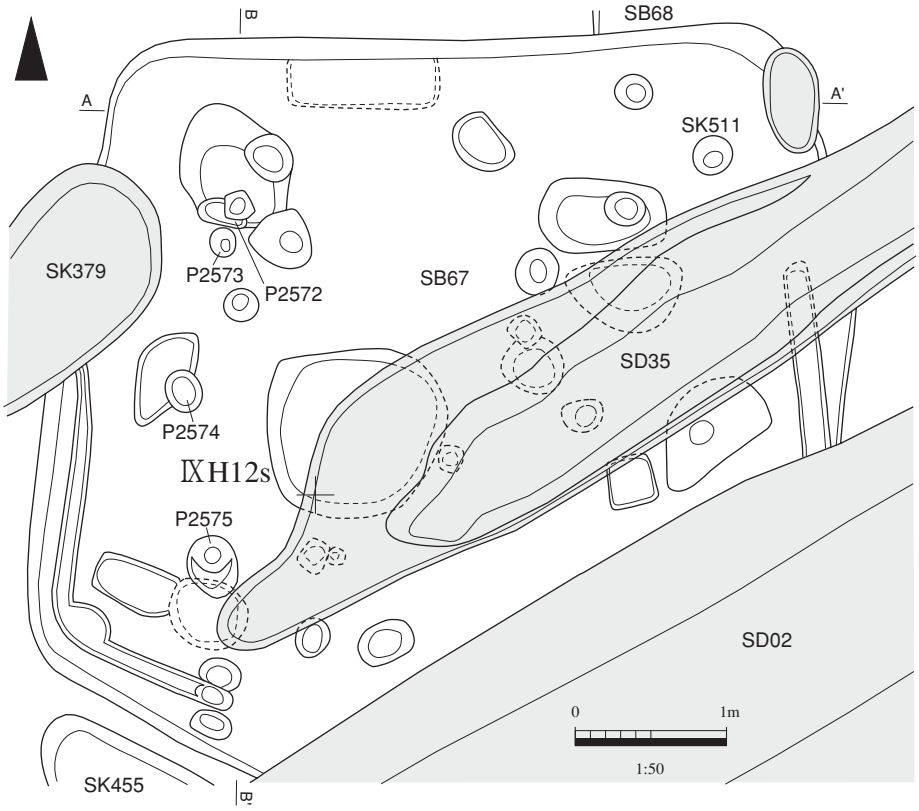
第297図　98DSB66平面・断面図と出土遺物実測図

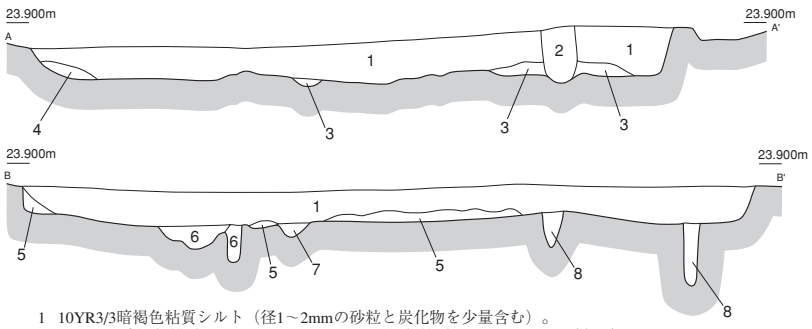
いなど特定は難しい。竈の痕跡はなかった。覆土層は単一層で、遺物はその上層近くで多く出土した。

SB72はSB84の南側に重なる。東辺長2.95mで平面形は隅丸正方形と推定される。東辺はほぼグリッド北を指す。深さは8cmで周溝はなく、床面でピット3つ（P2590～2592）が確認された程度で竈の痕跡はなかった。覆土層は2層に分けられるが、下層（2層）が貼床とは決しがたい。出土遺物はなかった。

SB70bはSB71・72に重なる。東辺長4.55mの隅丸正方形と推定される。東辺はほぼグリッド北を指す。深さ18cmで周溝はない。これより深く掘り込んだSB70aによってほとんどの部分が失われる。したがって東西土層断面の3層が該当するのみで床面の状況もほとんど不明である。

SB70aはSB70b・71・84に重なる。北辺長3.75mで平面形は隅丸正方形である。西辺はグリッド北か





1 10YR3/3暗褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒と炭化物を少量含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトブロック（少量）。
3 10YR3/3黒褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
4 10YR4/1褐灰色粘質シルトと7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック（極少量）。
5 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトと10YR4/3暗褐色粘質シルトブロック。
6 10YR4/1褐灰色粘質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトブロック。
7 10YR4/1褐灰色粘質シルト。
8 10YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。

第298図　98DSB67平面・断面図

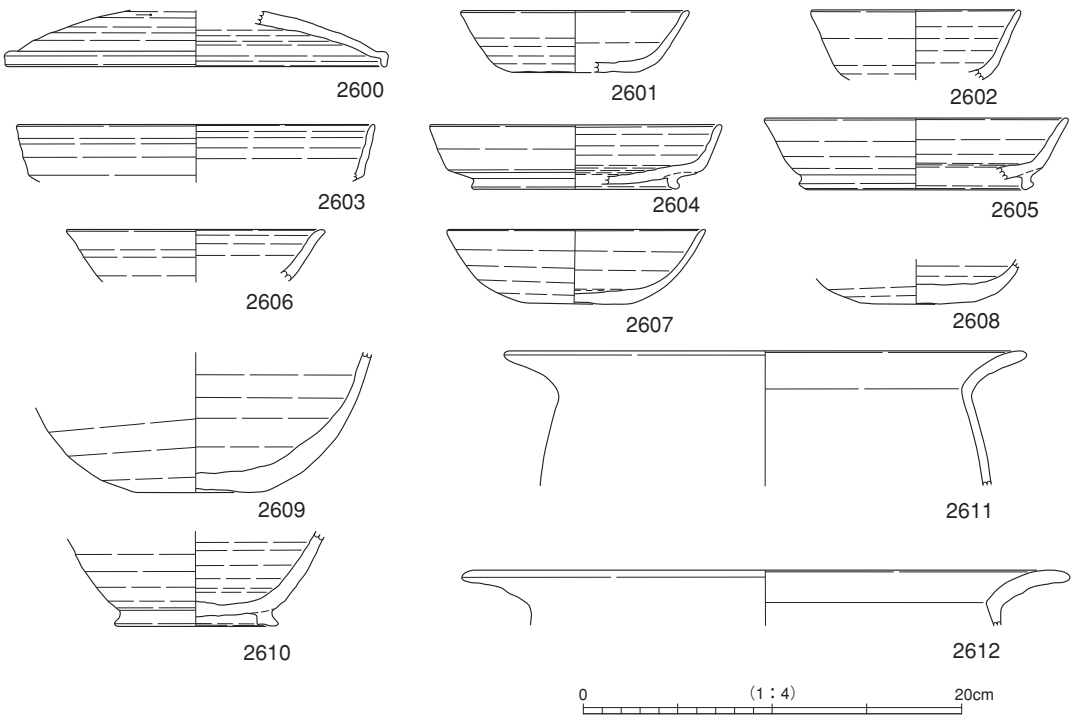
ら東へ12°振れる。深さは38cmあり、一連の重複関係にある建物の中で群を抜いて深い。周溝はなく、比較的明瞭な壁面の立ち上がりは60°である。竈の痕跡は確認されず、床面でのピットもなかった。覆土層はほぼ単一層で地山ブロックが多いことから埋め戻しによると考えられる。

98DSB73・74　98DSB72の南側に一部重複して位置する。98DSB73はSB72に先行するが、南北方向に3.9m以上の規模である。深さは5cmで検出範囲では周溝はないと思われる。

98DSB74はSB73の東側に重なる。西辺長4.15m南辺3.15mの平面形が隅丸長方形である。西辺はグリッド北から東へ4°振れる。深さ10cmで周溝は明瞭なものはない。竈の痕跡はなかった。床面に複数のピットがあるが柱穴を特定するには至らない。出土遺物は須恵器・土師器が若干ある。

98DSB76　調査区南部で複数棟の重複する中にある。ここでは戦国時代の溝98DSD02によって中央部が失われていたために建物群の先後関係は掴みきれていない。また溝を挟んで東西に異なる番号を付してあるが、後述するように同一の可能性が高いものもある。SB76もそのひとつで南東方向に位置する98DSB81と同一の可能性がある。さてSB76は、98DSB97に先行する。北辺長2.6m以上で西辺はグリッド北から東へ14°振れる。出土遺物は若干あり8世紀前葉の須恵器有台杯（2642・2643）がある。

98DSB77　複数棟の先後関係の中で最も新しく位置付けられる。SD02を挟んで西側に98DSB97が存在するが、同一視するにはややいびつである。さてSB77であるが東辺長3.6mで隅丸正方形の可能性が高い。また東辺はグリッド北から東へ15°振れる。深さは16cmである。なお南辺の一部に周溝がみられるが、そこから西側で途切れる部分が確認面であきらかにしえなかったSB97の部分と考えられる。これは土層断面でもうかがえ、SB77の覆土層は上下2層で下層が貼床と推測されるが、南北方向にはこれが途切れてしまう。この途切れるあたりでSB97に移るとも考えられる。出土遺物はSB77からは顕著な

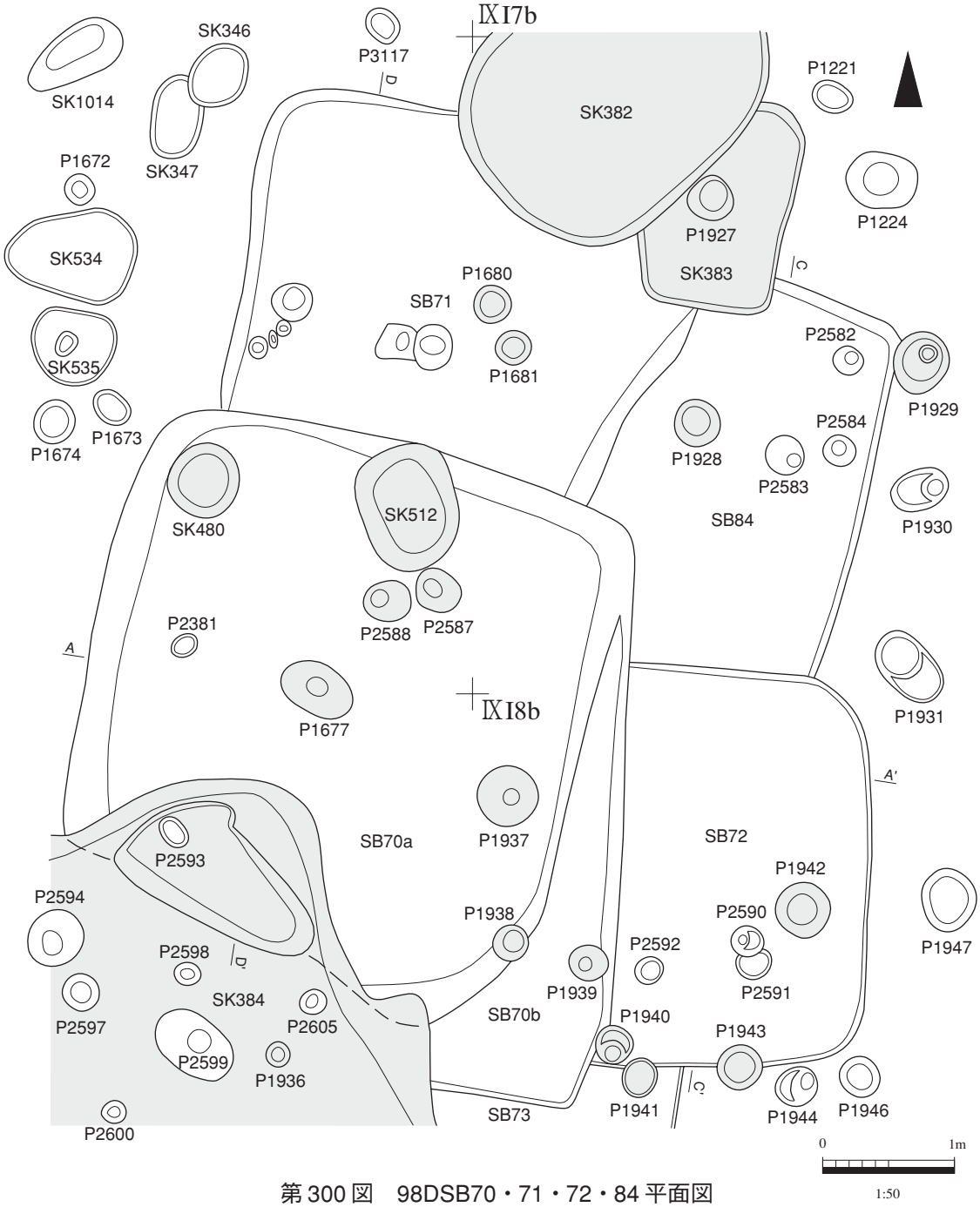


第299図　98DSB67出土遺物実測図

ものはなかったが、SB97 からは 8 世紀中～後葉の須恵器（2640）と 8 世紀後葉となる三河型土師器甕（2641）が出土した。

98DSB78　SD02 を挟んで 98DSB98 と同一と考えられる。すると西辺長 4.5m の隅丸正方形が想定される。西辺はグリッド北から東へ 10° 振れる。深さは 28cm である。周溝は南東隅部で部分的みえる。柱穴は P2619 が良好な位置にあるがそれ以外は不明である。出土遺物に顕

写真　98DSB70 完掘状況（南から）



第 300 図　98DSB70・71・72・84 平面図

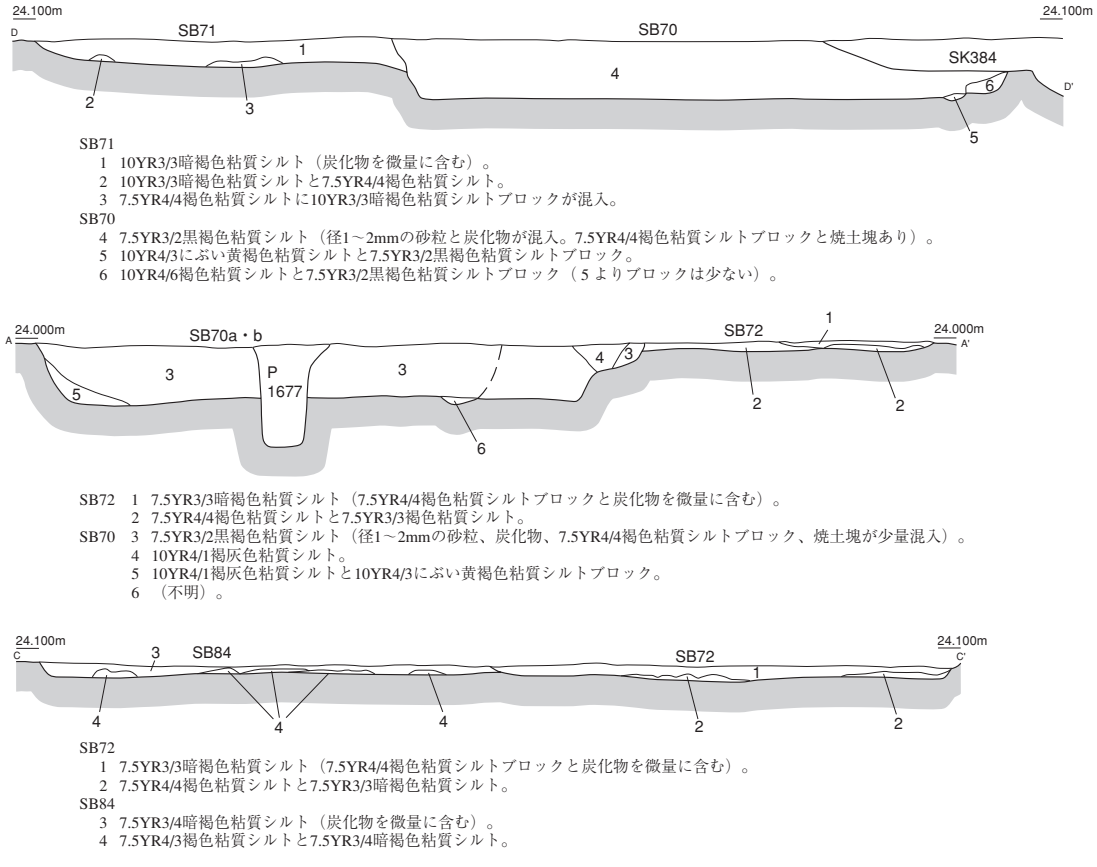
著なものはなかった。

98DSB80　SB76の東側に位置する。平面形が最も把握しにくかった建物である。SB81とに後続することは確認でき、南辺３ｍ以上で東辺はグリッド北から東へ27°振れること以外は不明である。小規模なものを想定すべきであろう。出土遺物はは須恵器小片が若干あって８世紀前葉～中葉とみられる。

98DSB81　SB77・80に先行する。SD02を挟んで西側のSB76を北西隅部と想定するとやや大きめの平面形が隅丸正方形となろう。その場合南北方向に4.9mの規模で東辺はグリッド北から東へ12°振れることになる。深さは15cmで東・南辺には周溝がある。覆土層からの出土遺物はなかったが、SB76から8世紀前葉の土器が出ている点や両者を合わせた場合平面規模がやや大きい点を考慮すると、8世紀前葉段階の建物としては同一視するのに問題はないといえる。

98DSB79　調査区中部に位置し、98DSD02に南東隅部が壊される。西辺長5.0北辺長4.05mの平面形が隅丸長方形である。西辺はほぼグリッド北を指す。深さは28cmあって土層断面によると北壁下に周溝がある。また壁面に対応しない周

写真　98DSB71遺物出土遺状況（西から）



SB71
1　10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
2　10YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルト。
3　7.5YR4/4褐色粘質シルトに10YR3/3暗褐色粘質シルトブロックが混入。
SB70
4　7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒と炭化物が混入。7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと焼土塊あり）。
5　10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトと7.5YR3/2黒褐色粘質シルトブロック。
6　10YR4/6褐色粘質シルトと7.5YR3/2黒褐色粘質シルトブロック（５よりブロックは少ない）。

SB72　1　7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量に含む）。
2　7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/3褐色粘質シルト。
SB70　3　7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒、炭化物、7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック、焼土塊が少量混入）。
4　10YR4/1褐灰色粘質シルト。
5　10YR4/1褐灰色粘質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトブロック。
6　（不明）。

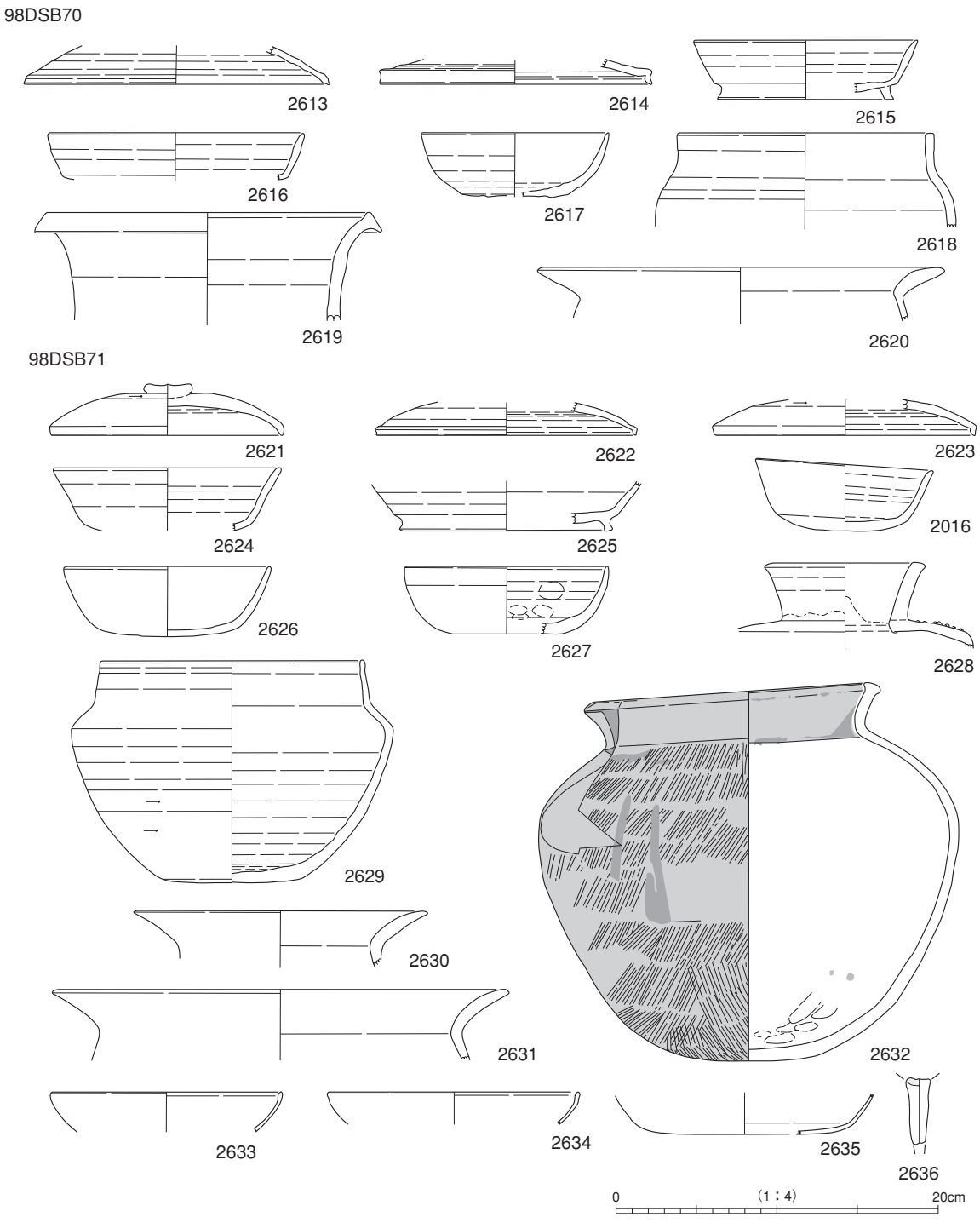
SB72
1　7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量に含む）。
2　7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
SB84
3　7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
4　7.5YR4/3褐色粘質シルトと7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。

第301図　98DSB70・72・84断面図

溝状の溝があって、南北方向の土層断面でみると覆土層1層がここで終っていることから、当該建物には2時期あったことが考えられる。その場合2時期目の規模は北辺は共通として西辺長3.8mとなる。

覆土層は上記の点からみても2時期目が1層、その下層である2層は1時期目の埋め戻しによって形成されたと考えられる。

竈の痕跡はなく、床面で複数のピットが確認されているが柱穴は特定できない。



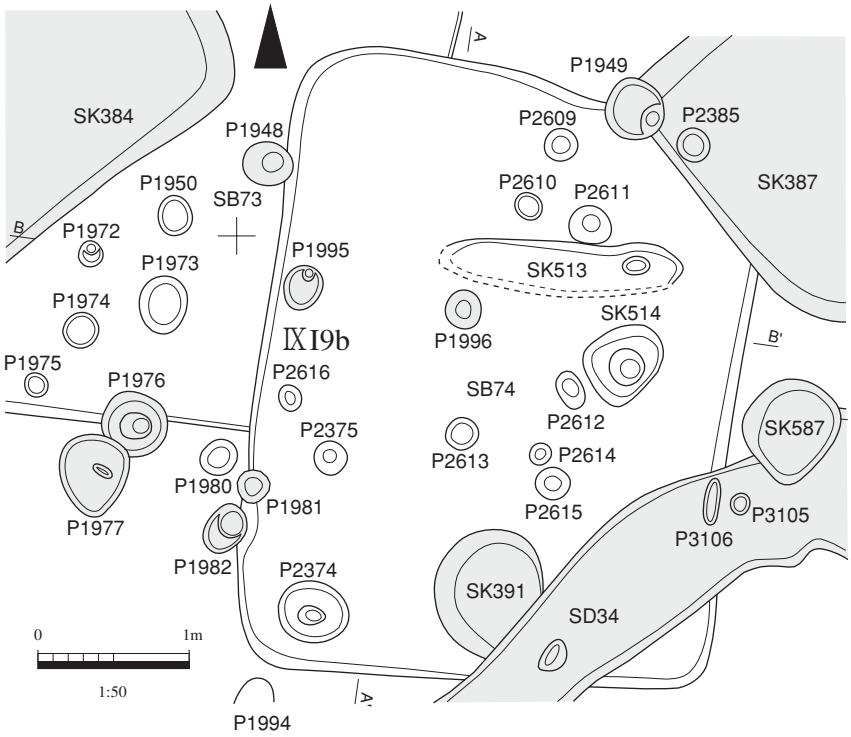
第302図　98DSB70・71出土遺物実測図

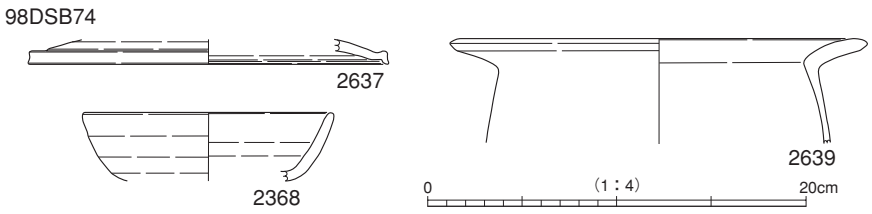
遺物は概ね1層からの出土である。須恵器蓋（2649）、無台椀（2650～2652）、有台盤（2655）は鳴海32号窯式。2656は深めの有台杯だがやや時期が遡るか。2658は長頸瓶でラッパ形の口縁部には肩が屈曲する角張ったシルエットの胴部がくるであろう。これも上の椀にくらべるとやや古相である。2659・2660は土師器長胴甕で口縁が大きく外反する。8世紀前葉か。2661は小型甕とみられるが、外面は短いハケ調整がある。これも8世紀前葉であろう。

98DSB83　調査区南東隅部に位置する。南辺で98DSB91に重なる。他に遺構の重複があるのか平面形がやや不整形な隅丸長方形である。南辺長4.1m東辺長2.75mで東辺はグリッド北から東へ6°振れる。深さは8cmで、周溝はない。床面でピット2つを確認したが柱穴に該当するのかどうかは不明である。遺物は8世紀代の土器・管状土錘（2667）が出土した。2662は8世紀後葉、2663は8世紀前葉の蓋。2665・2666は8世紀後葉～9世紀前葉の三河型土師器甕で、大小の組み合わせである。

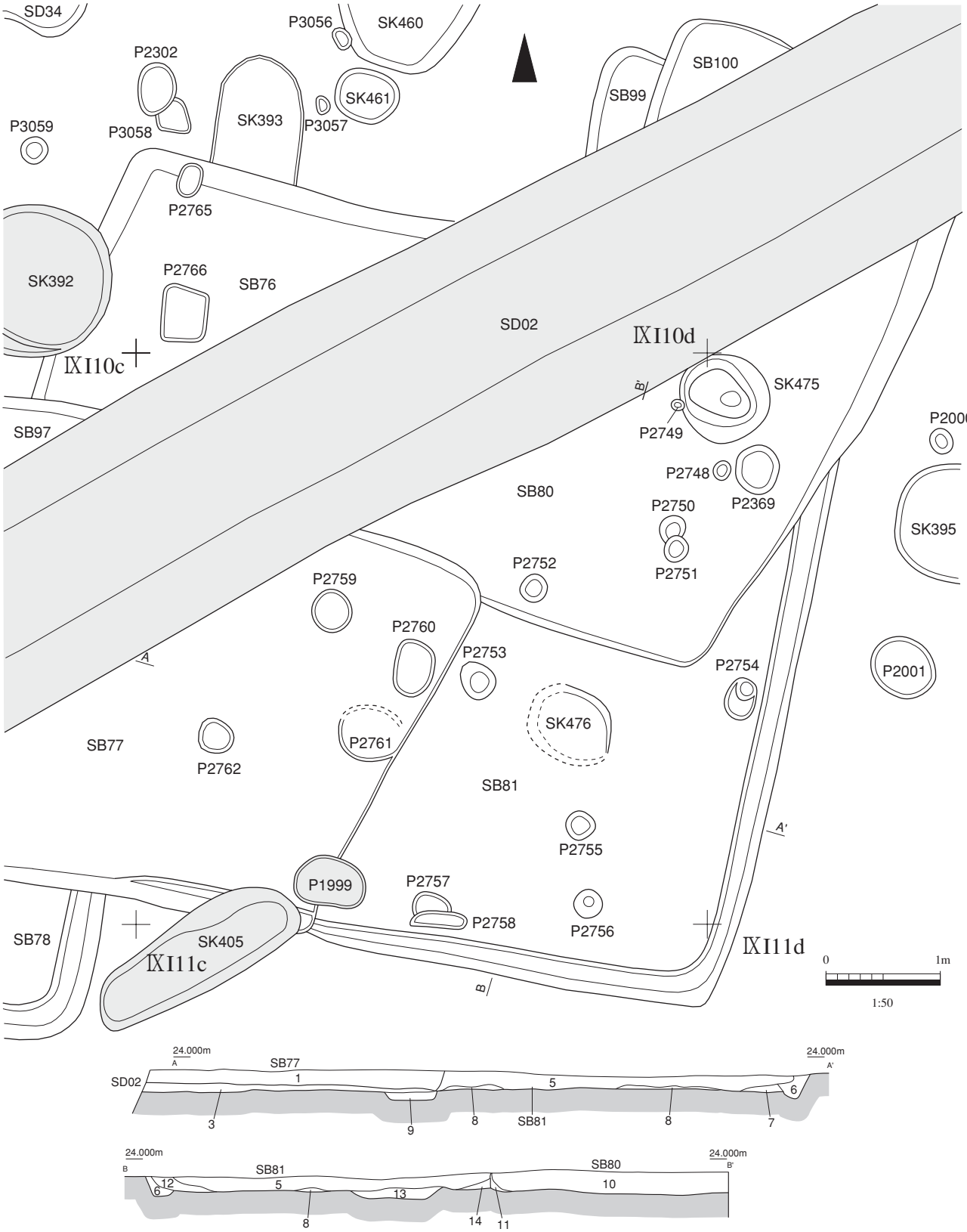
98DSB85　調査区南東隅部に位置する8棟の重複関係の1つである。先後関係はSB89→SB96→SB91→SB90→SB87→SB88→SB86→SB85となる。

SB85は西辺長4.15m以上あり西辺はほぼグリッド北を指す。深さは18cmで周溝はなかった。床面でピットは確



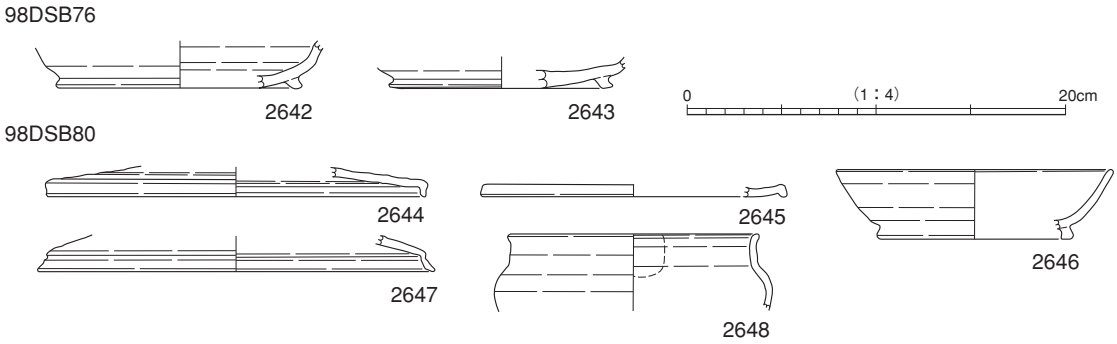


第303図　98DSB74平面・断面図と出土遺物実測図

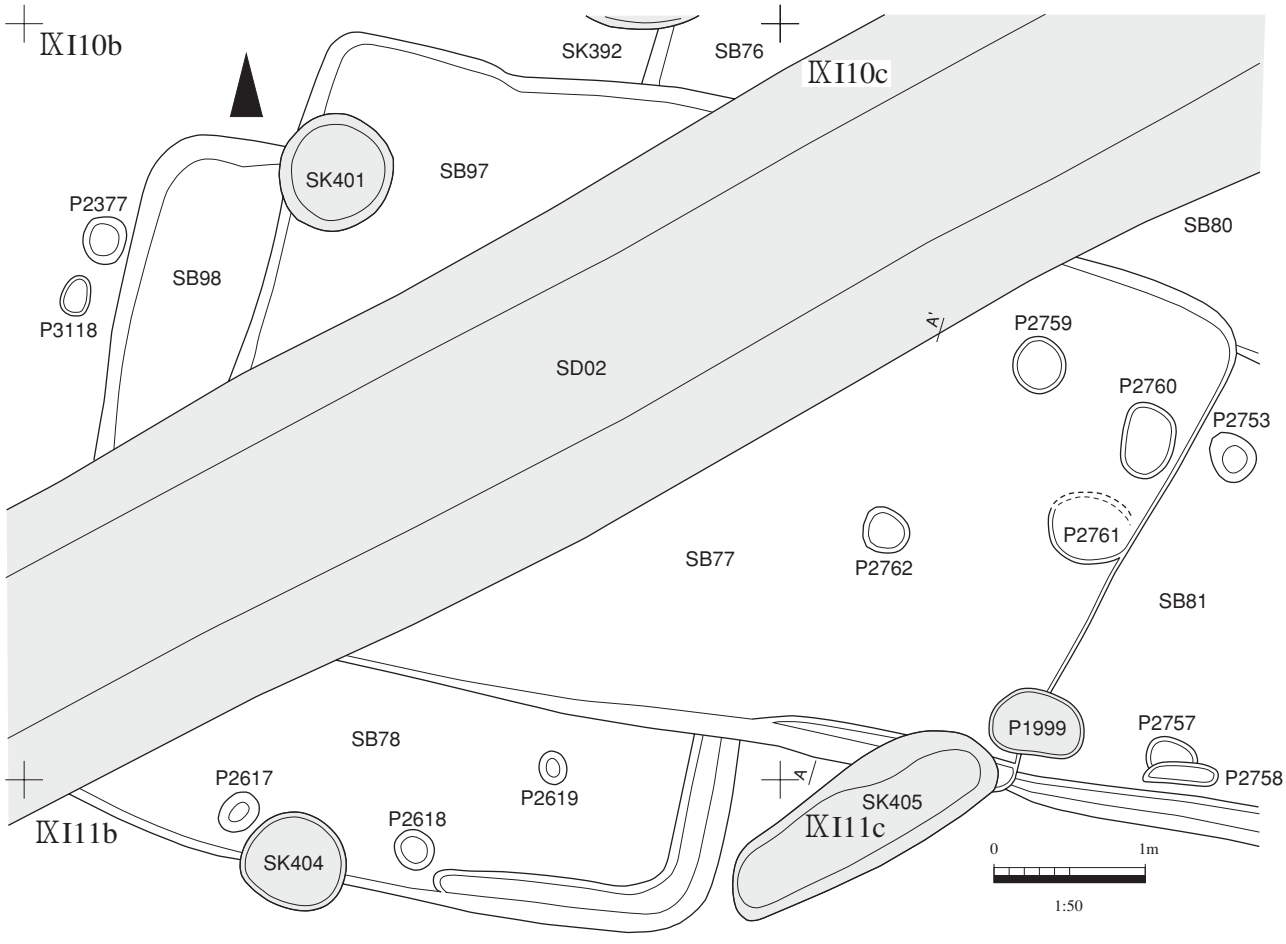


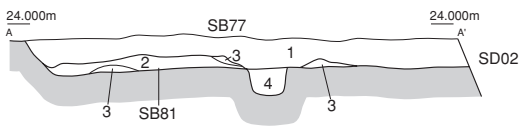
1 10YR3/3暗褐色粘質シルト（径1～2㎜の砂粒、炭化物、7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含む）。…SB77。
3 10YR3/2黒褐色粘質土と7.5YR4/4褐色シルトブロック（ブロックが 2 より多い）。…SB81。
5 10YR3/4暗褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒、炭化物を少量含む）。…SB81。
6 10YR4/2灰黄褐色シルト。…SB81。
7 10YR4/2灰黄褐色シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。…SB81。
8 10YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。…SB81。
9 10YR3/2褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（炭化物を微量に含む）。…SB81。
10 10YR3/1黒褐色粘質シルト（炭化物片をやや多く含み、少量の7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）。…SB80。
11 10YR4/1褐灰色粘質シルト。…SB80。
12 10YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。…SB81。
13 10YR3/4暗褐色粘質土と7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（少量）。…SB81。
14 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。…SB81。

第 304 図　98DSB76・77・80・81・99・100 平面・断面図

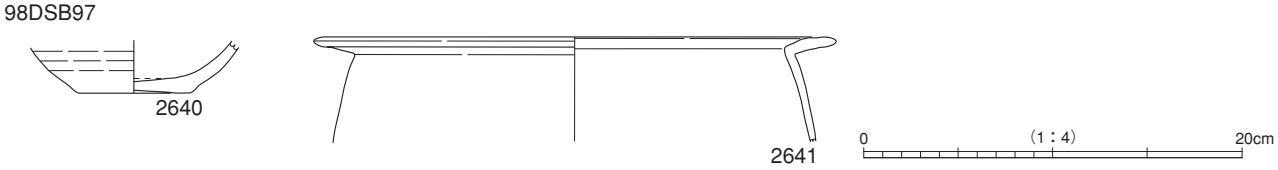


第 305 図　98DSB76・80 出土遺物実測図





1　10YR3/3暗褐色粘質シルト（径1～2㎜の砂粒、炭化物、7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含む）。…SB77。
2　10YR3/2黒褐色粘質土（1より粘質強い。炭化物と7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含む）。…SB81。
3　10YR3/2黒褐色粘質土と7.5YR4/4褐色シルトブロック（ブロックが2より多い）。…SB81。
4　10YR4/1褐灰色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。…SB81。



第 306 図　98DSB77・78・97・98 平面・断面図と出土遺物実測図

認されなかった。出土遺物はわずかで須恵器椀（2677）がある。

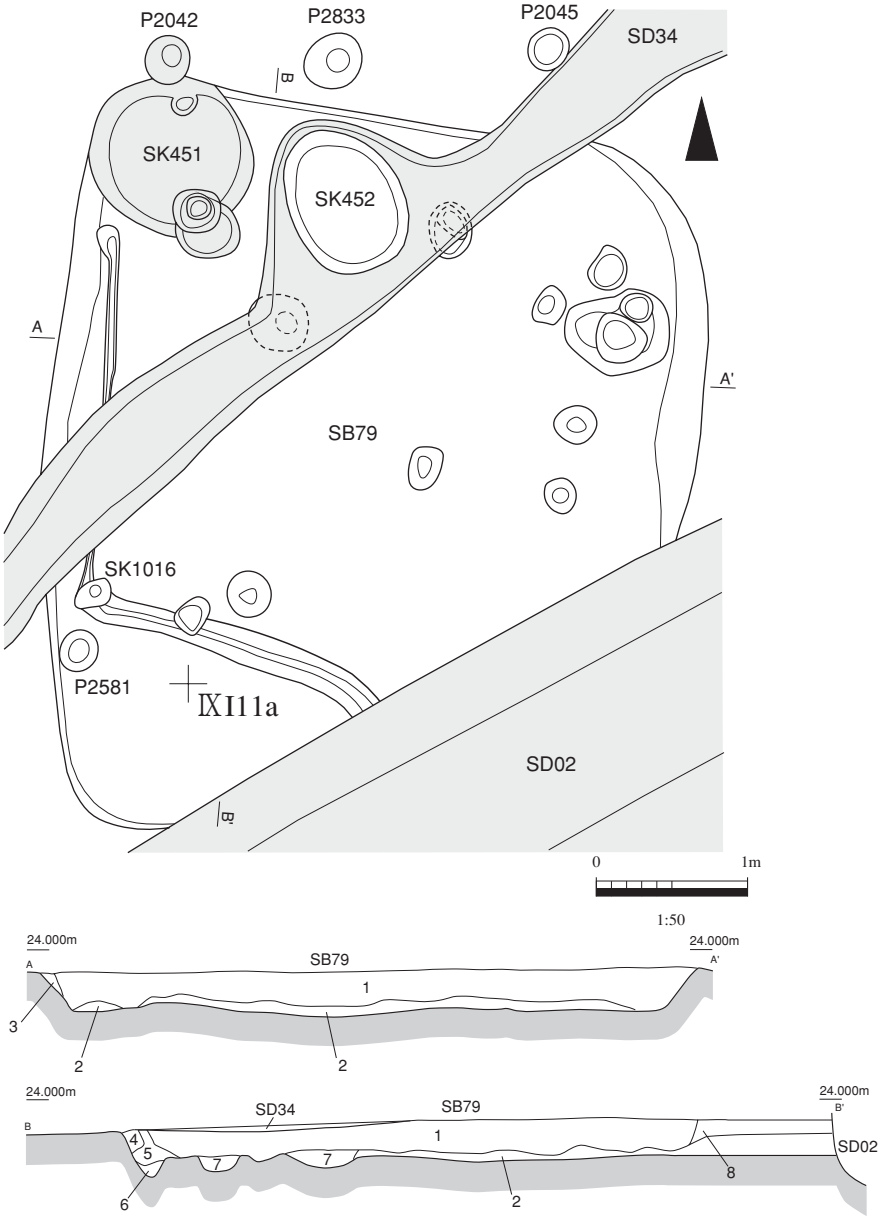
98DSB86　SB85 北で重なる。西辺長 4.05m 北辺長 3.23m で西辺はグリッド北から東へ 10° 振れる。深さは 20cm で周溝はない。床面でのピットはみられなかった。また竈の痕跡はなかった。

遺物は 8 世紀後葉～ 9 世紀前葉の土器がある。2678 は折戸 10 号窯式の須恵器蓋、2679 はやや下って井ヶ谷 78 号窯式か。2680 は折戸 10 号窯式の椀か。土師器は概ね折戸 10 号窯式に対応すると考えられ、2681 は三河型甕、2682 も三河型の範疇に入る鍋もしくは甑の把手である。先行する建物跡からも折戸 10 号窯式の須恵器が出土することから、当該建物の時期は井ヶ谷 78 号窯式までを範囲に考えておく。

98DSB87　SB85・86・88 に先行する。北辺長 4.45m 以上。西辺はグリッド北から東へ 18° 振れる。深さは 20cm であるが、竪穴中央部でさらに凹む箇所があり、土層断面の観察（第310図参照）によると、SB87 の下位にもう 1 棟あることが判明した（同図では平面形を破線で図示）。この建物は西辺長 4.15m 北辺長 3.3m の平面形が南北にやや長い長方形である。

さて SB87 であるが、周溝は確認できず、床面でのピットもなかった。竈は、北壁中央に床面の凹みがあり、ここにあったかもしれないが肯定できる痕跡はなかった。

遺物は折戸 10 号窯式を中心とする須恵器蓋（2668）、無台杯（2669）があり、土師器甕も三



1　7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物と7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）。
2　7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルトの混合（炭化物を微量に含む）。
3　7.5YR4/3褐色粘質シルト。
4　7.5YR4/3褐色粘質シルトと10YR3/3暗褐色粘質シルトブロック。
5　10YR3/2黒褐色粘質シルト。
6　10YR4/1褐灰色粘質土。
7　10YR4/1褐灰色粘質土と7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック。
8　7.5YR4/3褐色粘質シルト。

第 307 図　98DSB79 平面・断面図

河型で（2607 ～ 2672）で時期的に符合するであろう。

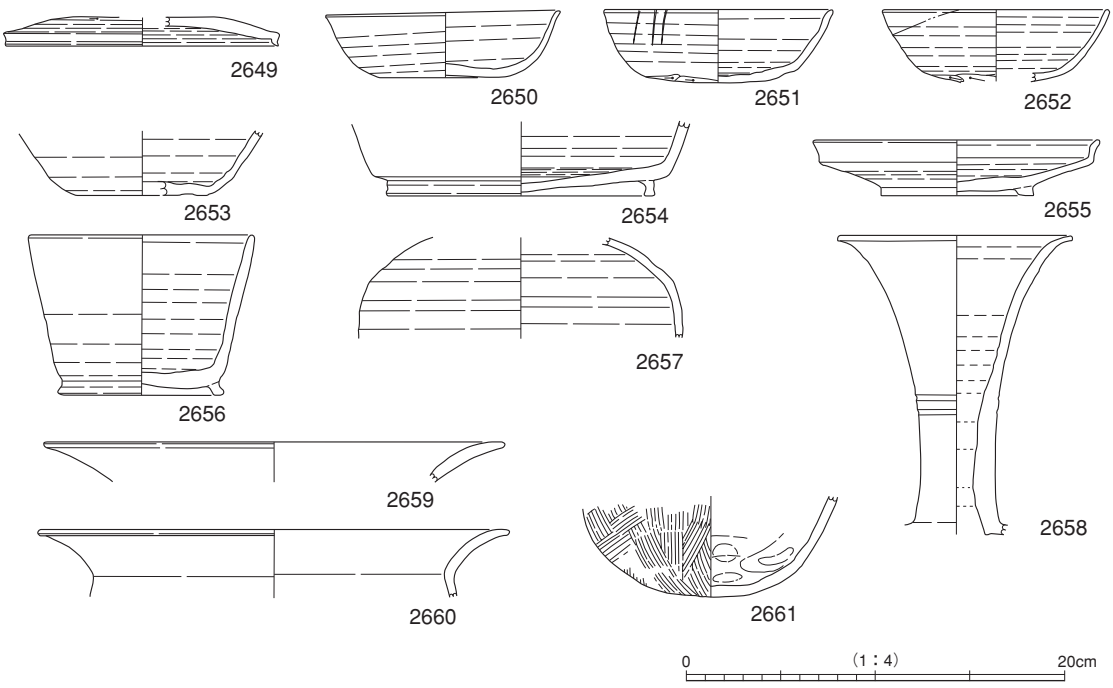
98DSB88　SB86の北西に位置しこれに先行する。西辺長4.05m、北辺長4.78mの平面形が東西にやや長い隅丸長方形である。西辺はグリッド北から東へ4°振れる。深さは15cmで周溝は南辺と北辺から南へ40cm離れた床面で確認された。この北周溝は土層断面の観察によると、1時期目のものと考えられ（南北土層断面の5層）、確認面で見い出された平面形は南・東辺を共有しながら拡張したものであろう。したがって拡張にあたっては特に周溝を掘削していない可能性もある。竈の痕跡はなく、床面でほとんどピットは確認されなかった。

遺物は8世紀後葉の土器が出土したが大方は小片である。2688は長頸瓶の底部、2690は三河型土師器甕で口縁部が横方向へ屈曲する。折戸10号窯式に併行するものであろう。

98DSB90・91　98DSB87の北側に位置する。重複関係ではSB87に先行する。SB90は北辺長2.65m以上で西辺はグリッド北から東へ10°振れる。深さは17cmである。出土遺物はなかった。SB91は北辺長5.25mで隅丸正方形と推測される。西辺はグリッド北から西へ20°振れる。深さは15cmで周溝はない。竈の痕跡はなく、床面で複数のピットが確認されたが柱穴を特定するには至らない。また顕著な出土遺物もなかった。

98DSB89　98DSB90の西側に位置する。重複関係では最も先行する。東西方向に5.5mで平面形は隅丸正方形と推測される。西辺はほぼグリッド北を指す。深さは5cmで周溝はなかった。床面で複数のピットを確認したが柱穴を特定するには至らない。出土遺物はごくわずかで須恵器椀（2691）があるのみである。

98DSB96　SB89に後続しSB90に先行する。西辺長3.8m北辺長4.88mで平面形は東西にやや長い隅丸



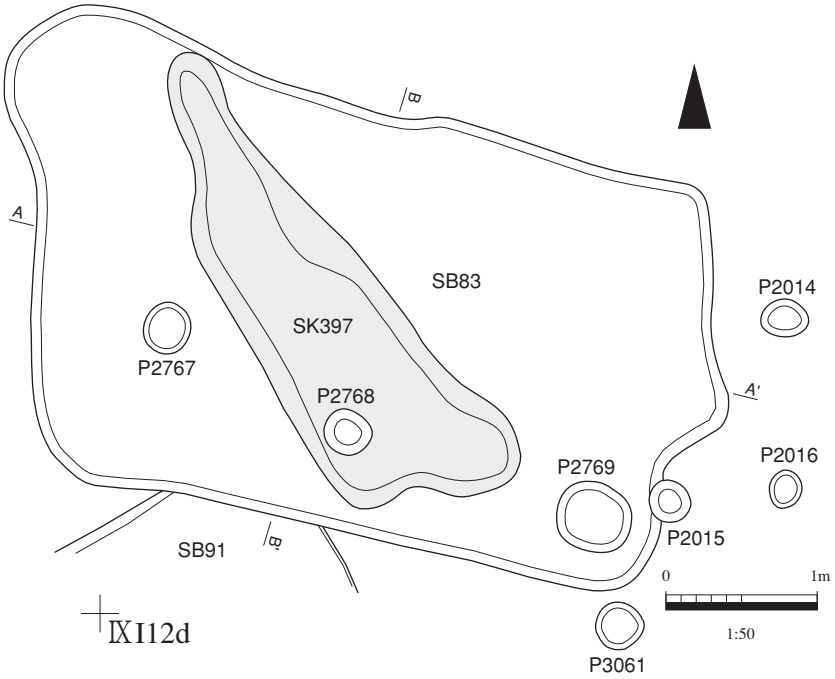
第308図　98DSB79出土遺物実測図

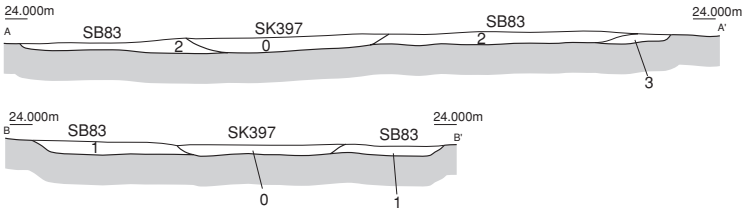
長方形である。西辺はほぼグリッド北を指す。深さは5cmで周溝はなかった。竈の痕跡はなく、柱穴も特定されていない。

98DSB92　調査区北隅に位置する。他の竪穴建物との重複はない。西辺4.25m北辺4.75mで平面形はやや不整形な隅丸正方形である。深さは12cmで周溝はない。竈の痕跡はなく、柱穴の特定もできない。出土遺物はほとんどなく製塩土器の脚部片がある。知多4類で概ね8世紀のものであろう。

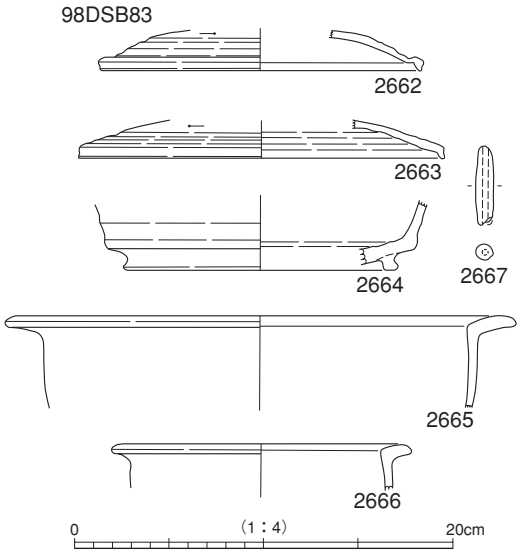
98DSB93　98DSB05の北4mに位置し一部が調査区西壁で途切れる。中世土坑の98DSK468に南西隅部が壊される。東辺長4.8m北辺長3.7mで平面形は南北にやや長い隅丸長方形である。東辺はほぼグリッド北を指す。深さは8cmで周溝はない。竈の痕跡はなく、床面で複数のピットが確認されたものの柱穴を特定するには至らない。出土遺物はなく、時期不詳である。

98DSB94　98DSB05の東4mに位置する。他の竪穴建物との重複はない。西辺長3.3m南辺長2.9mで平面形は南北にやや長い隅丸長方形である。東辺はグリッド北から東へ7°振れる。深さは21cmで周溝はない。竈の痕跡はなく、柱穴も特定できない。覆土層についての情報がないが、まとまった

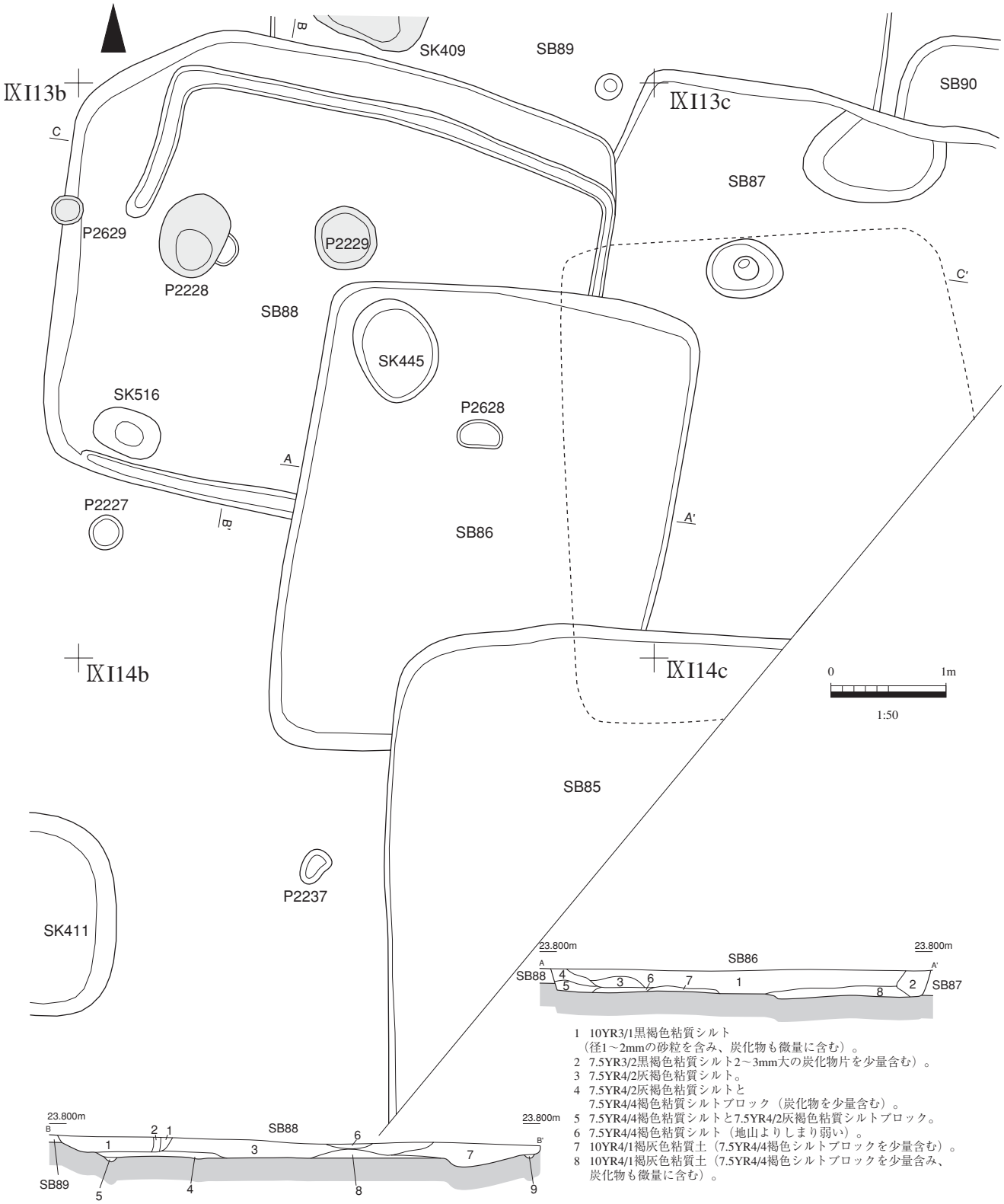




0　10YR5/1褐灰色粘質シルト。…SK397の埋土。
1　10YR3/1黒褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒を含み、炭化物が微量に混入）。…SB83。
2　10YR5/1褐灰色粘質シルト。…SB83。
3　7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（焼土塊と炭化物が混入。カマドの残骸の可能性大）。…SB83。

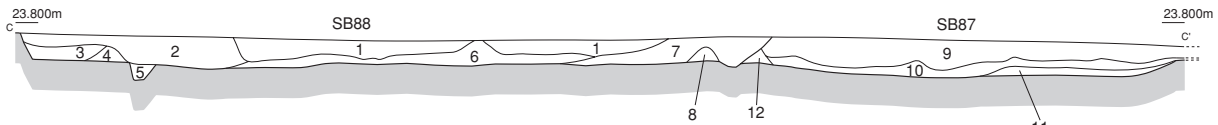


第309図　98DSB83平面・断面図と出土遺物実測図



1 10YR3/1黒褐色粘質シルト
（径1～2mmの砂粒を含み、炭化物も微量に含む）。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト2～3mm大の炭化物片を少量含む）。
3 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト。
4 7.5YR4/2灰褐色粘質シルトと
7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック（炭化物を少量含む）。
5 7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR4/2灰褐色粘質シルトブロック。
6 7.5YR4/4褐色粘質シルト（地山よりしまり弱い）。
7 10YR4/1褐灰色粘質土（7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含む）。
8 10YR4/1褐灰色粘質土（7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含み、
炭化物も微量に含む）。

1 10YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック（炭化物を微量に含む）。
2 2.5Y4/1黄灰色粘質土。
3 7.5YR4/1褐灰色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック（炭化物を微量に含む）。
4 10YR4/1褐灰色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック（炭化物を微量に含む）。
5 7.5YR4/6褐色粘質シルトと7.5YR4/1褐灰色粘質シルトブロック。
6 2.5Y4/1黄灰色粘質土。
7 10YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック
（炭化物を微量に含む）。
8 7.5YR4/1褐灰色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルト
（炭化物を微量に含み、斑土に近い）。
9 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。

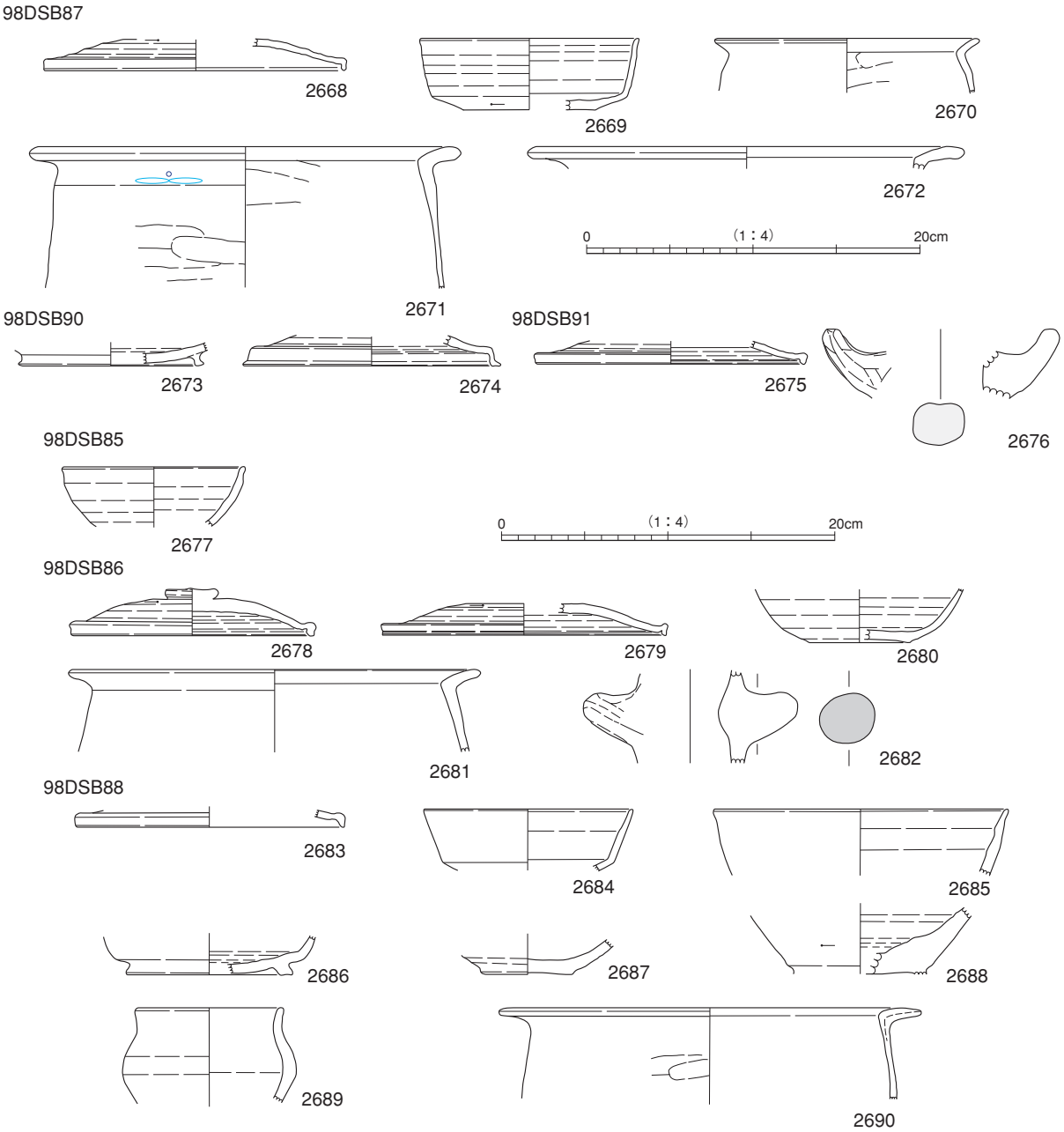


1 7.5YR4/1褐灰色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック（炭化物を微量に含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックと炭化物を微量に含む）。
3 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト。
4 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト。
5 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトブロック。
6 7.5YR4/1褐灰色粘質シルトと7.5YR4/6褐色粘質シルトブロック（炭化物を微量に含む）。
7 10YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。
8 10YR3/3暗褐色粘質シルト。
9 SB85、86、88の層と同じ。
10 SB85、86、88の層と同じ。
11 7.5YR4/6褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロック。
12 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。

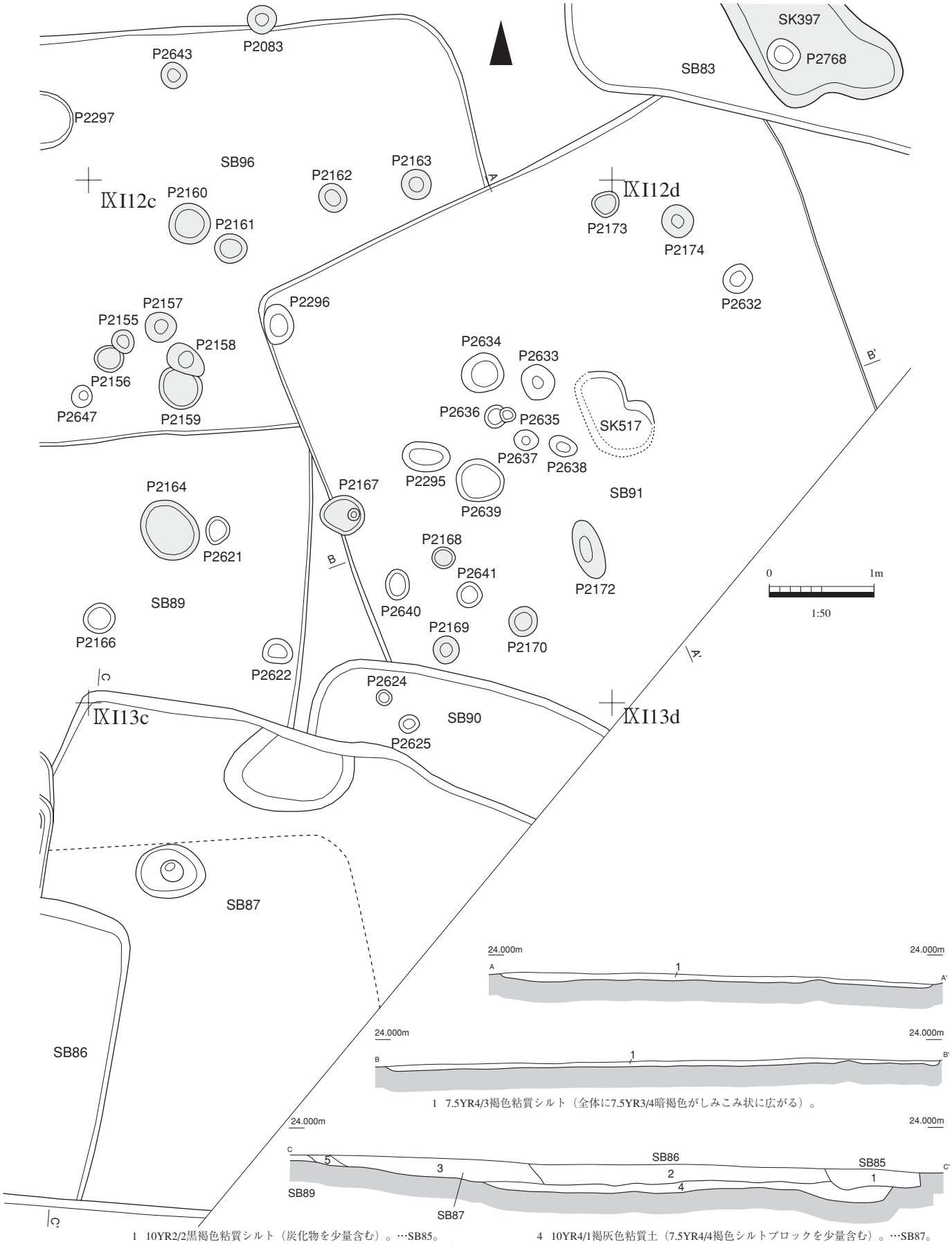
第310図　98DSB85・86・87・88平面・断面図

遺物の出土があり注目される。2693は須恵器杯蓋だが、短頸壺の蓋とも考えられる。2694は蓋で7世紀末～8世紀前葉であろう。有台杯（2695・2696）は岩崎41号窯式、無台杯（2697）も同窯式であろう。2698は指ナデ調整で器壁の薄い土師器長胴甕であるが、長い口縁部が緩く外反し頸部のくびれが少ない。共伴須恵器から7世紀末を中心とする三河型土師器甕成立前の状況を示す事例として注目される。

98DSK356　調査区西隅に位置し99DSB02の北東3mに位置する。他の竪穴建物と重複関係はない。遺構確認時に土坑の番号が付されたが、掘削後古代の竪穴建物の可能性が出てきた。東南辺長3.45m南西辺長3.75mの平面形が隅丸長方形である。南東辺はグリッド北から東へ41°振れる。深さは7cmで周溝はない。竈の痕跡はなく、床面のピットのうちP2289が隅部にあるので柱穴の可能性もある。出土遺物は若干あり、三河型土師器小型甕（3117）がある。口縁がやや肥厚し上向きになることから9世紀代に



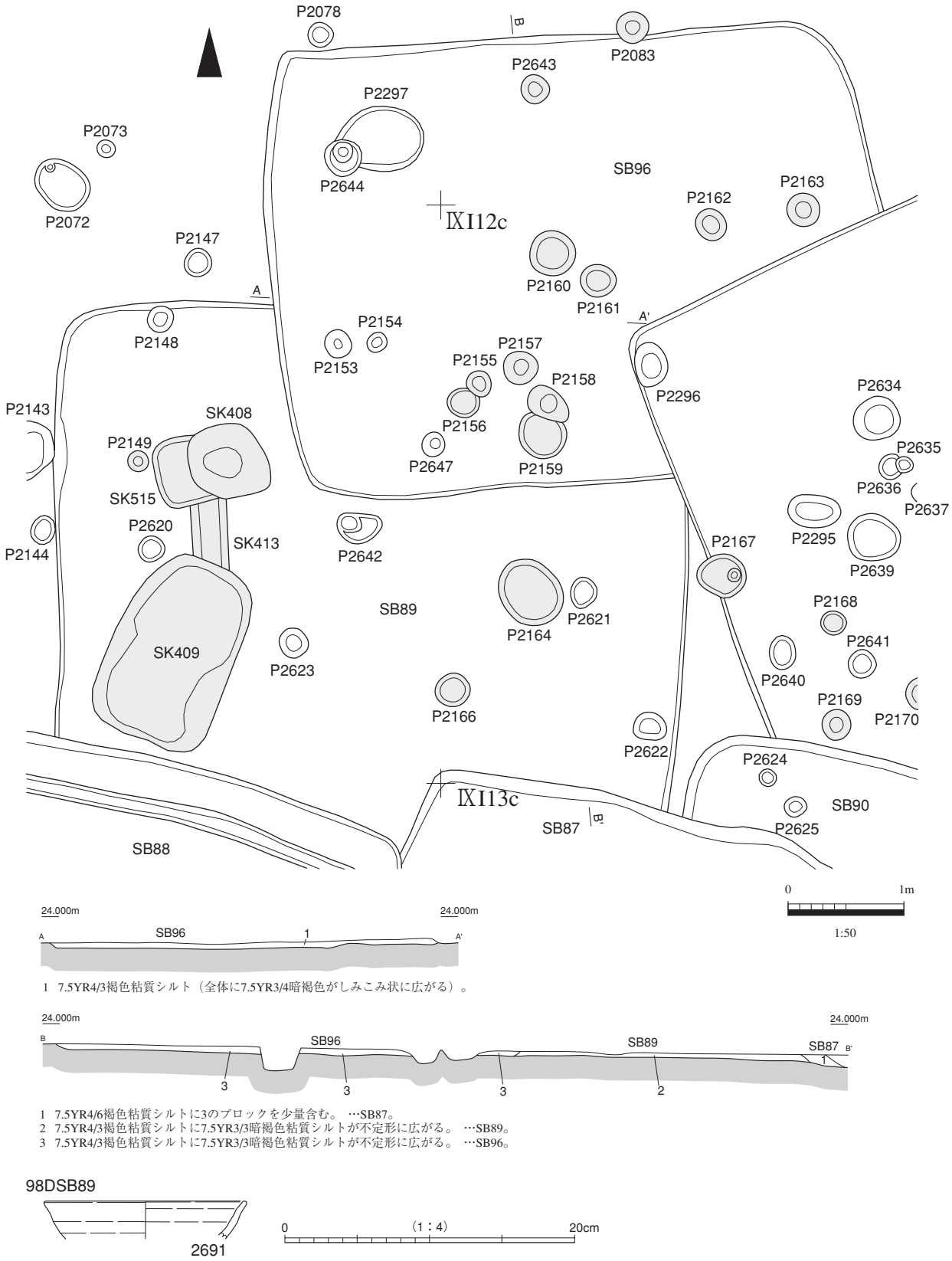
第311図　98DSB87・90・85・86・88出土遺物実測図



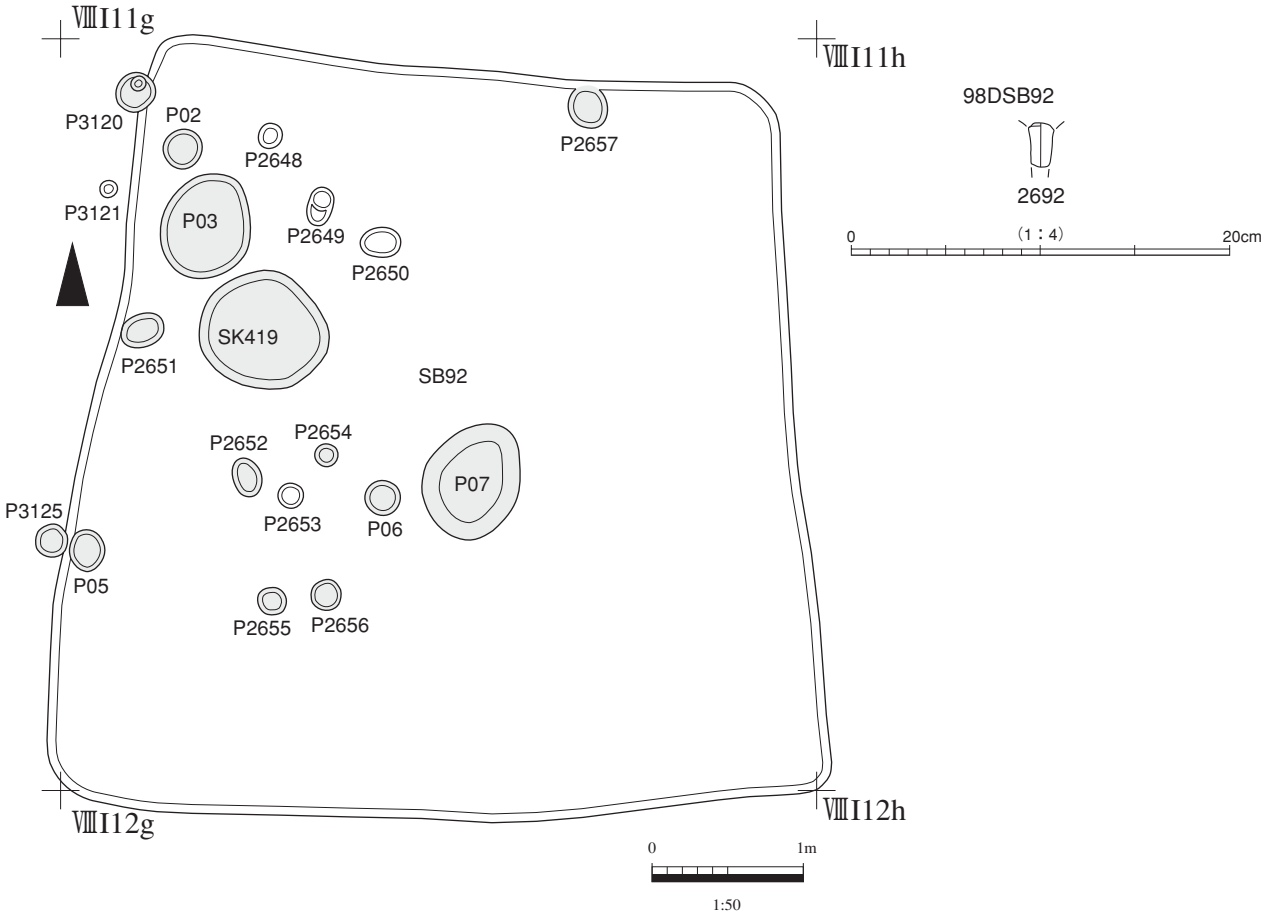
1 7.5YR4/3褐色粘質シルト（全体に7.5YR3/4暗褐色がしみこみ状に広がる）。

1 10YR2/2黒褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。…SB85。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（2～3mm大の炭化物片を少量含む）。…SB86。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を少量含む）。…SB87。
4 10YR4/1褐灰色粘質土（7.5YR4/4褐色シルトブロックを少量含む）。…SB87。
5 7.5YR4/6褐色粘質シルトに3のブロックを少量含む。 …SB87。

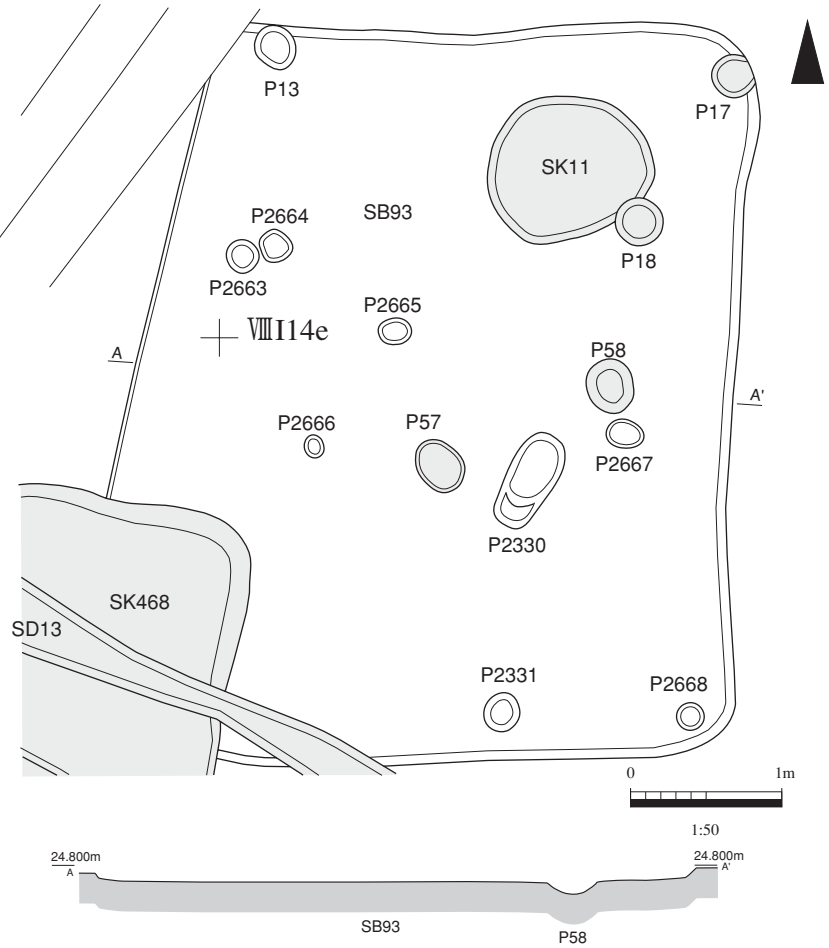
第312図　98DSB86・87・90・91平面・断面図



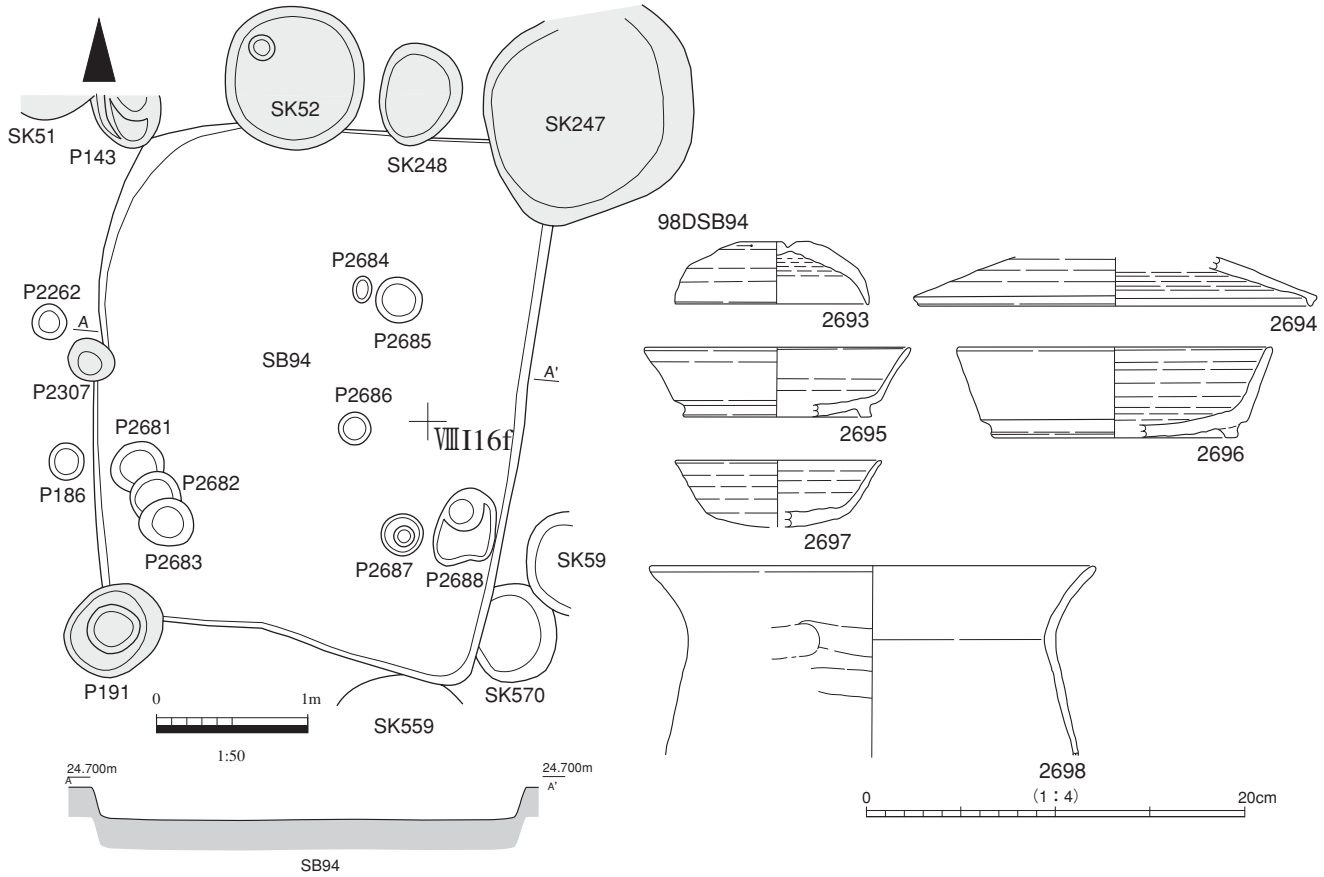
第313図　98DSB89・96平面・断面図と出土遺物実測図



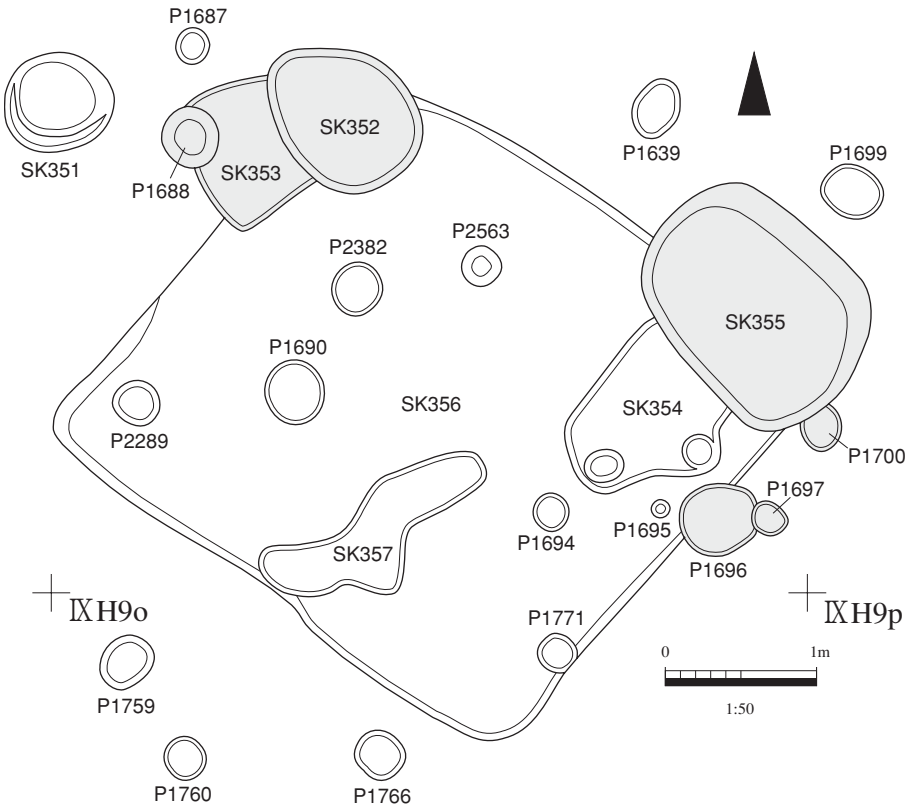
第 314 図　98DSB92 平面図と出土遺物実測図



第 315 図　98DSB93 平面・断面図



第 316 図　98DSB94 平面・断面図と出土遺物実測図



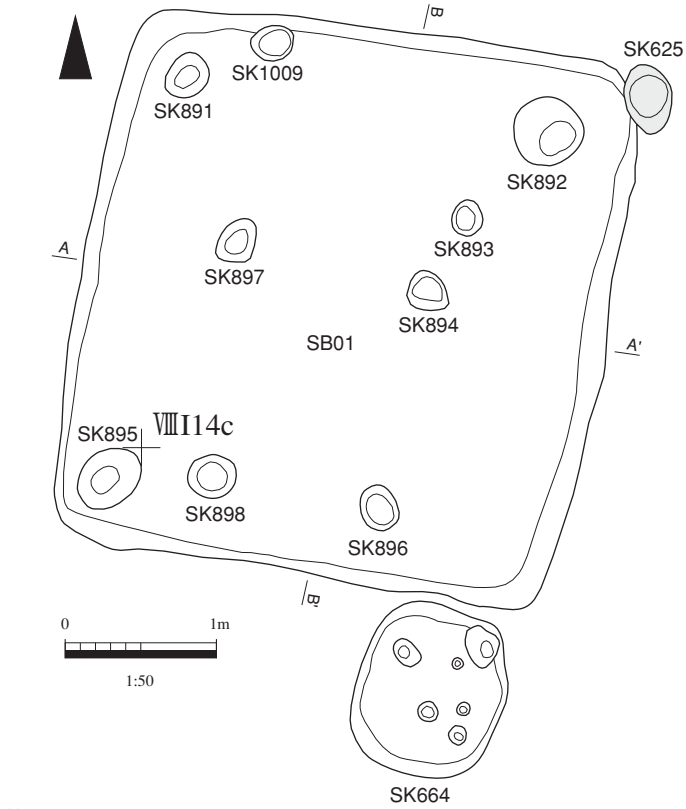
第 317 図　98DSK356 平面図

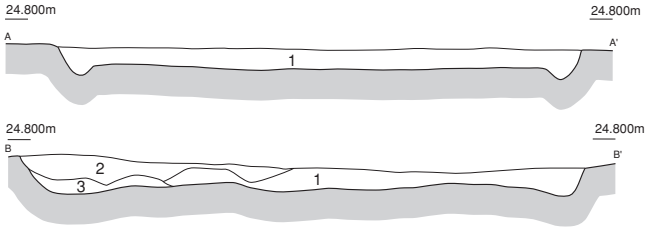
下るであろう。

99ESB01　98D区と接する調査区東端に位置する。他の竪穴建物との重複はない。西辺はグリッド北から東へ9°振れる。平面形は隅丸正方形で、西辺長3.55m、北辺長3.3m、確認面からの深さ15.0cmである。周溝は東・西辺に若干認められ、柱穴は四隅に配置するタイプで、3つ（直径35～45cm、深さ5～28cm）が確認できた。竈はない。覆土層（1～3層）は大略1層であるが、埋め戻し時に南北両辺から土を入れたと考えられる。遺物は少なく、覆土層から7世紀後半から8世紀中葉までの土師器甕の口縁がある。

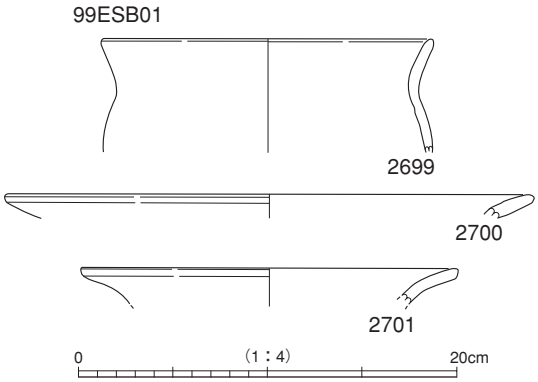
99ESB02　99ESB01の北5mに位置する。他の竪穴建物との重複はない。西辺はグリッド北から東へ13°振れる。平面形は隅丸長方形で、西辺長4.78m、北辺長4.5mで、確認面からの深さ35.0cmである。周溝、竈はないが、柱穴（直径25～50cm、深さ7～40cm）4つが認められた。覆土層は1～8層に分層されているが、大略1層とみてよい。遺物は覆土層中に高蔵寺2号窯式の須恵器蓋や高台付杯、鉄鉢などがある他、同時期とみられる土師器甕、製塩土器の脚部があり、比較的まとまっており、建物の時期もそのころと考えられる。

99GB01　調査区の東隅にある。北西隅を99GSD03に壊される。東辺はグリッド北から東へ27°振れる。平面形は隅丸正方形で、東辺長5.36m、確認面からの深さ15cmである。北辺ほぼ中央に造り付け竈の煙道とみられる突出がある（99GSK30）が、焼土などの痕跡は確認していない。その南東側に直径51cm深さ30cmのピット（99GP1287）があり、貯蔵穴と推定される。ほぼ全面に厚さ9cmの貼床（3～8層）が施されそれによって





1　7.5YR3/4暗褐色粘質シルトに7.5YR4/6褐色細粒砂を含む（炭化物を含む）。
2　7.5YR4/3褐色粘質シルトに7.5YR5/6明褐色細粒砂を含む。
3　7.5YR3/2黒褐色粘質シルトに7.5YR5/6明褐色粘質シルトを含む。

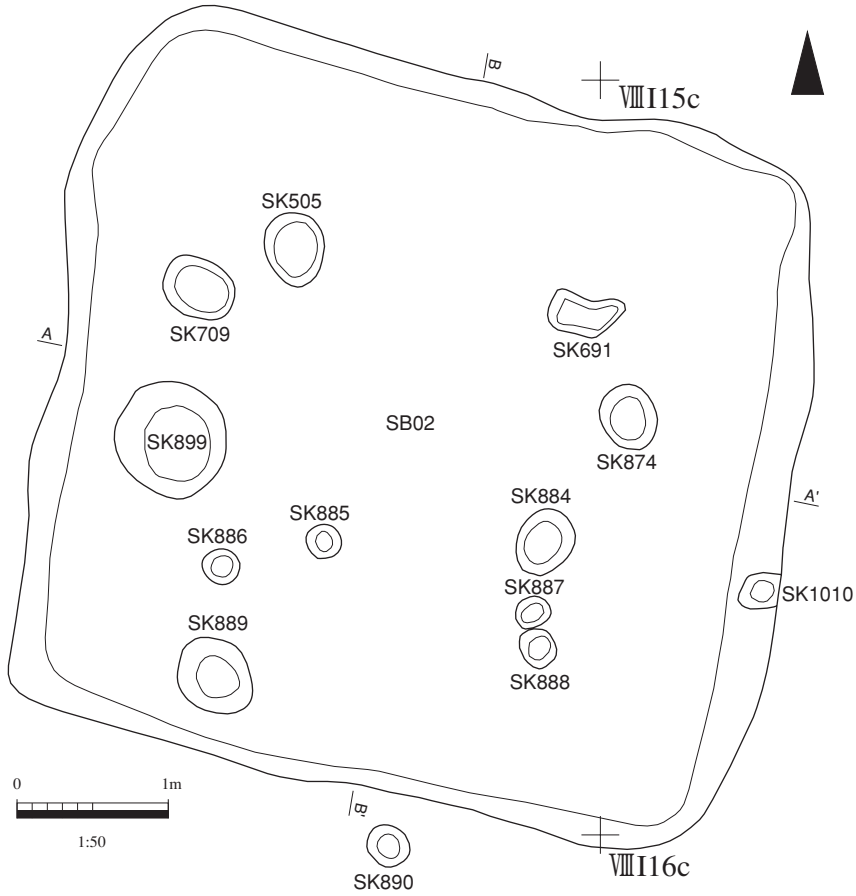


第318図　99ESB01平面・断面図と出土遺物実測図

周溝がつくられる。柱穴は4つある。覆土層（1層）は単一層で一気に埋め戻されたようである。遺物は覆土層中より須恵器が出土したが、概ね鳴海32号窯式に属するであろう。

99GSB10　調査区東壁で途切れる。西および北に掘立柱建物2棟（99GSH18・19）が近接する。北辺長3.7m以上で隅丸正方形であろう。西辺はほぼグリッド北をさす。深さは7cm（第335図）。

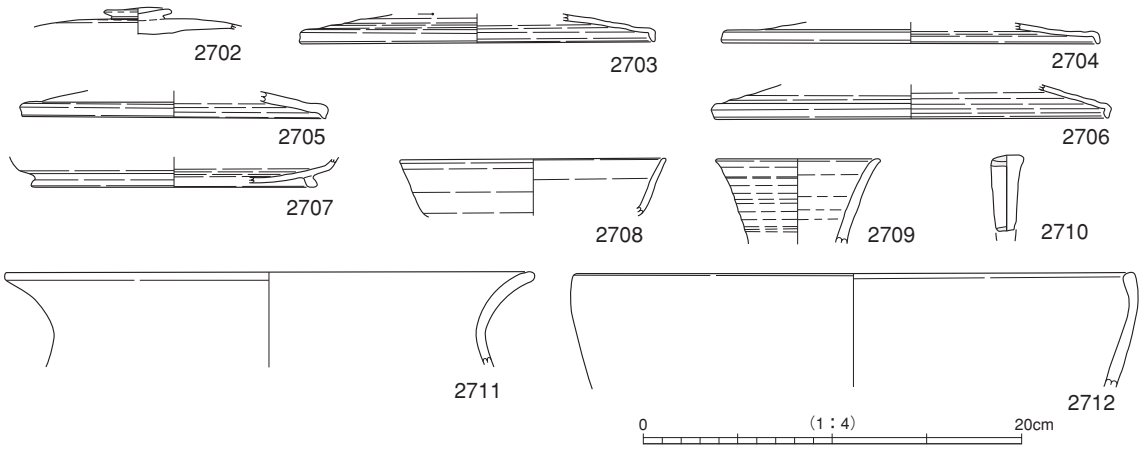
99GSB11　調査区の北部にある。他の遺構との重複はない。西辺はグリッド北から西へ25°振れる。平



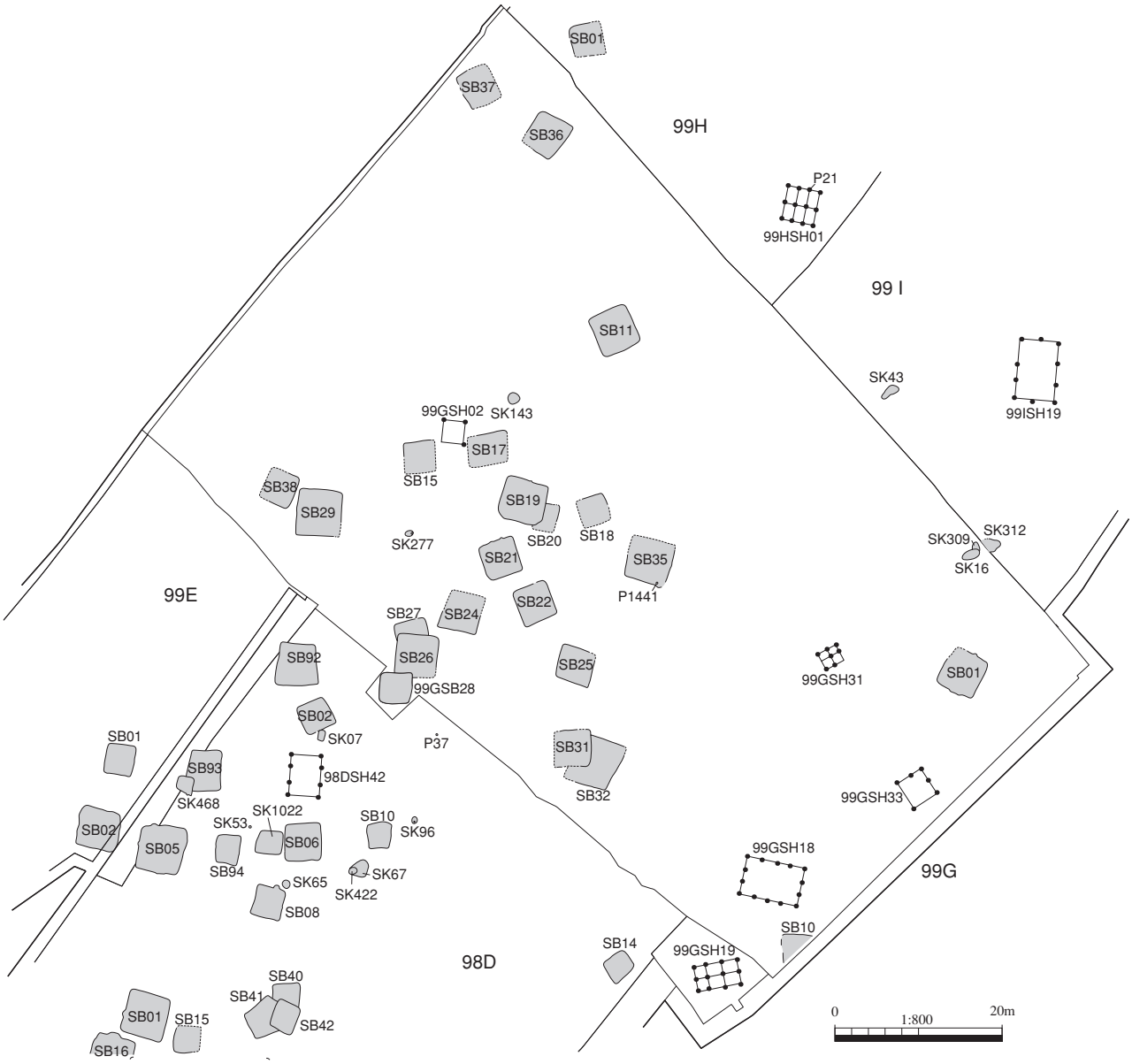
1　7.5YR4/3褐色粘質シルトに7.5YR5/6明褐色粘質シルトを含む（炭化物を含む）。
2　7.5YR4/4褐色粘質シルトに7.5YR5/6明褐色粘質シルトを含む（礫を含む）。
3　7.5YR2/2黒褐色粘質シルトに7.5YR5/8明褐色粘質シルトを含む（炭化物を含む）。
4　7.5YR4/3褐色粘質シルト。
5　10YR3/3暗褐色細粒砂に7.5YR5/8明褐色粘質シルトを斑点状に含む（炭化物を含む）。
6　10YR4/6褐色粘質シルトに7.5YR5/6黄褐色粘質シルトを含む。
7　7.5YR4/6褐色細粒砂（炭化物を含む）。

1　7.5YR4/4褐色粘質シルトに5YR4/6赤褐色粘質シルトを含む（炭化物を含む）。
2　7.5YR4/6褐色粘質シルトに5YR4/6赤褐色粘質シルトを含む（微量の炭化物を含む）。
3　7.5YR4/6褐色粘質シルト。
4　7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
5　7.5YR4/6褐色細粒砂。
6　7.5YR4/4褐色粘質シルト。
7　7.5YR4/3褐色細粒砂に5YR4/6赤褐色粘質シルトを含む（炭化物を含む）。
8　7.5YR4/3褐色粘質シルトに5YR4/6赤褐色粘質シルトを含む（礫を含む）。

第319図　99ESB02平面・断面図

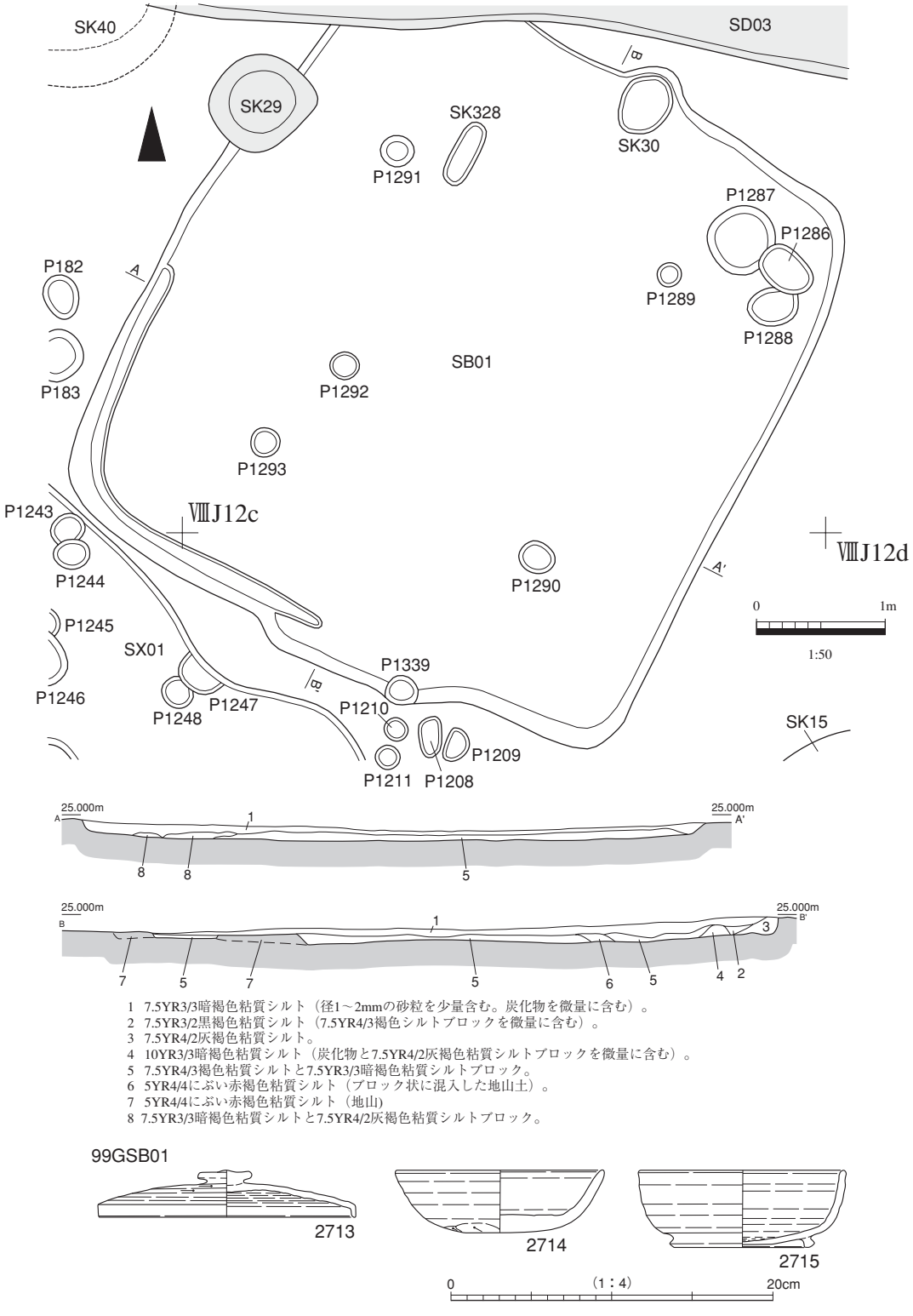


第 320 図　99ESB02 出土遺物実測図



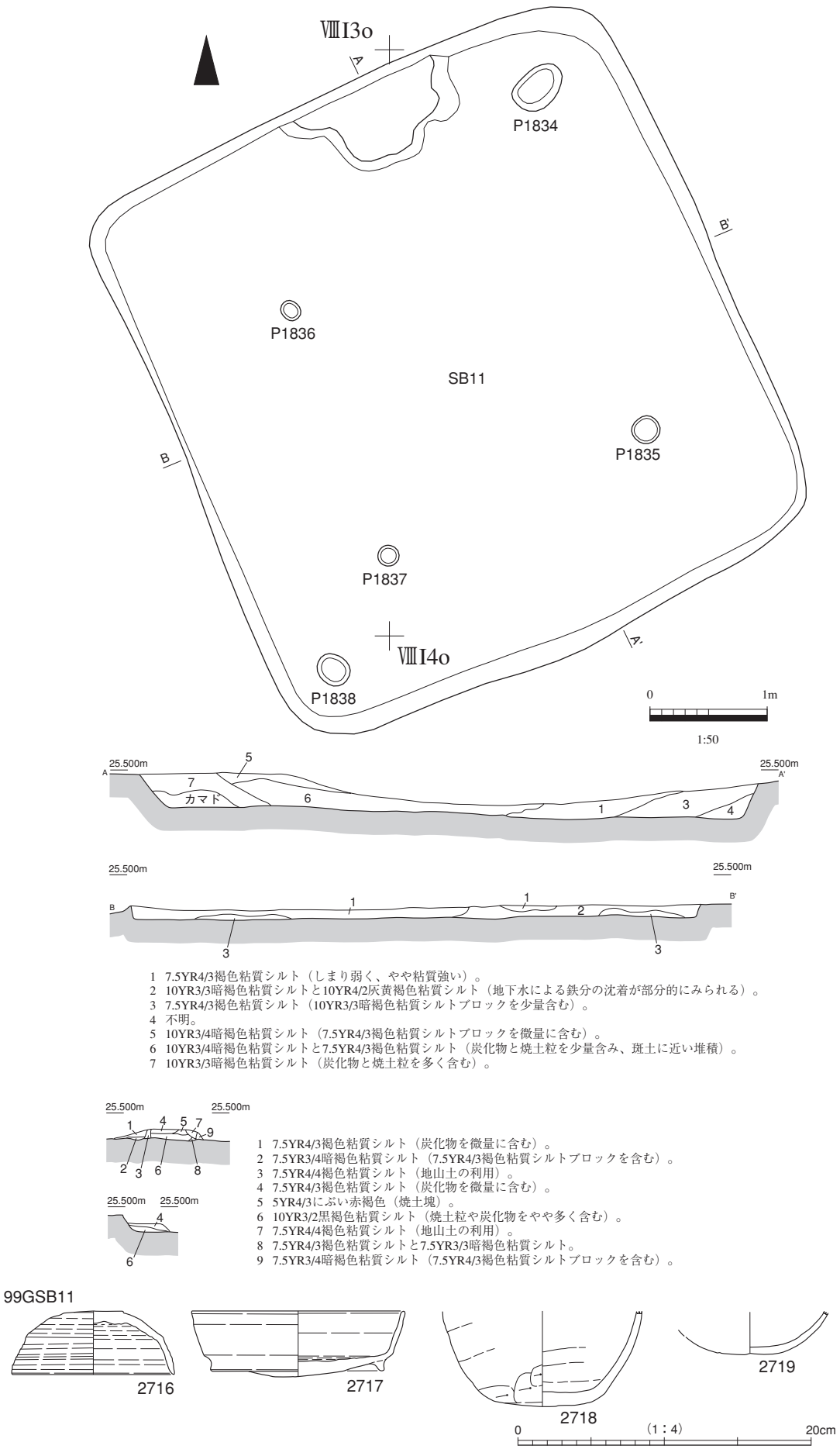
第 321 図　下糟目 A 地区北部古代主要遺構配置図

面形は隅丸正方形で、西辺長5.2m、確認面からの深さ31cmである。北辺ほぼ中央に造り付け竈があり、その東側に直径45cm、深さ27cmの貯蔵穴（99GP1834）がある。貼床、周溝はない。柱穴は3つある。竈は地山土でできた袖の基底部がのこる（竈土層断面3・8層）。その間に焼土・炭化物の堆積層（同6層、厚さ8cm）がある。覆土層は連続する皿状堆積で4→3→1→5→6→5層の順に、主に南辺側から



1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒を少量含む。炭化物を微量に含む）。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色シルトブロックを微量に含む）。
3 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト。
4 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物と7.5YR4/2灰褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
5 7.5YR4/3褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルトブロック。
6 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト（ブロック状に混入した地山土）。
7 5YR4/4にぶい赤褐色粘質シルト（地山）
8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/2灰褐色粘質シルトブロック。

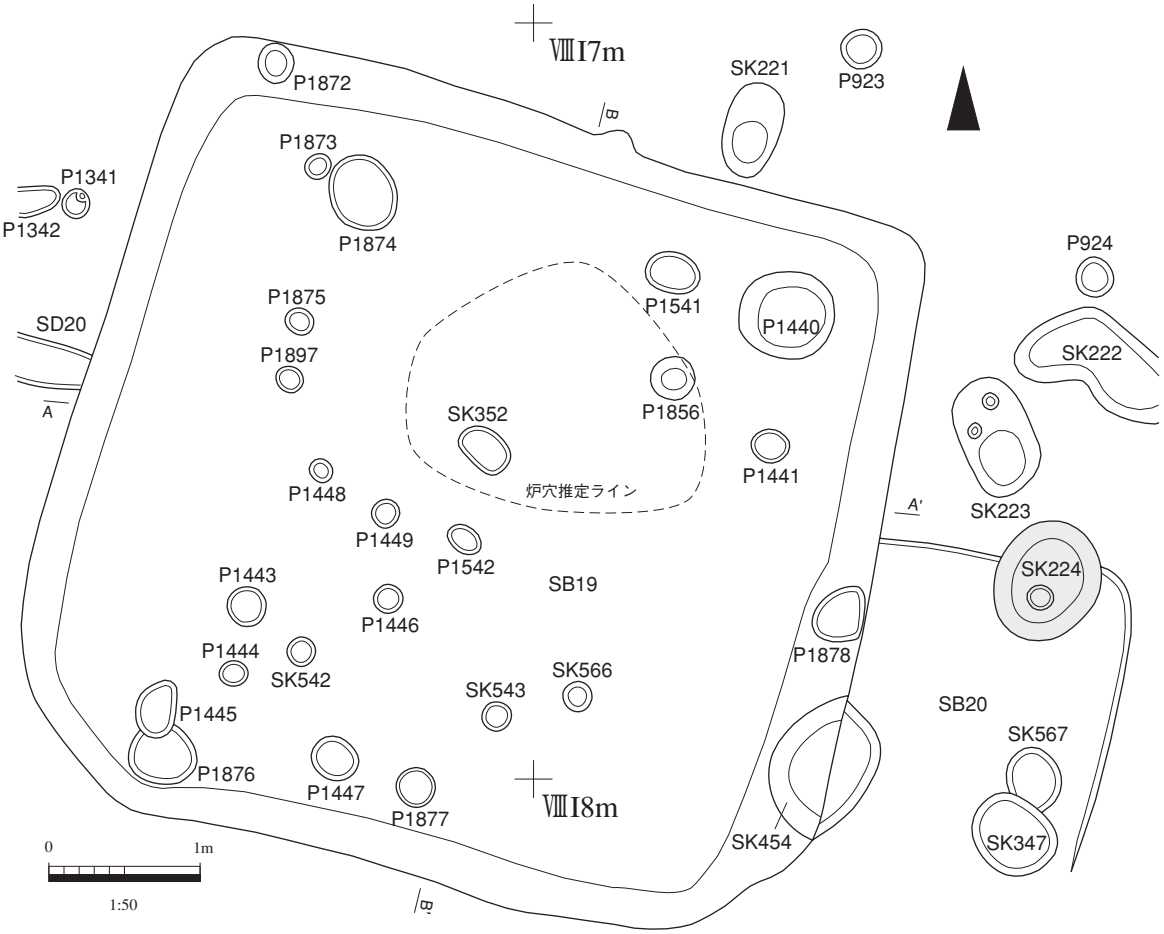
第322図　99GSB01平面・断面図と出土遺物実測図

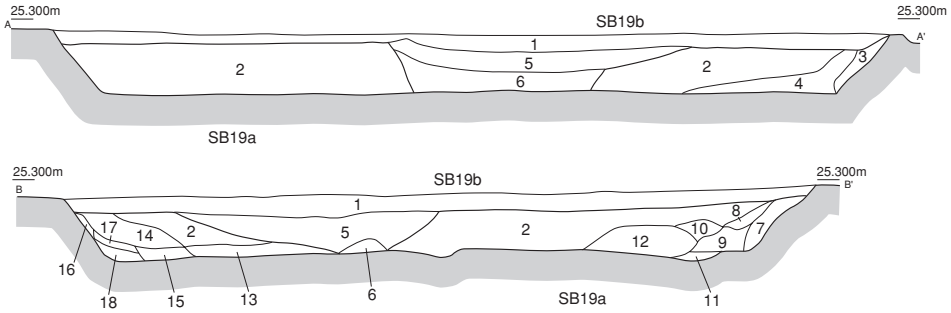


1 7.5YR4/3褐色粘質シルト（しまり弱く、やや粘質強い）。
2 10YR3/3暗褐色粘質シルトと10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（地下水による鉄分の沈着が部分的にみられる）。
3 7.5YR4/3褐色粘質シルト（10YR3/3暗褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
4 不明。
5 10YR3/4暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
6 10YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/3褐色粘質シルト（炭化物と焼土粒を少量含み、斑土に近い堆積）。
7 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物と焼土粒を多く含む）。

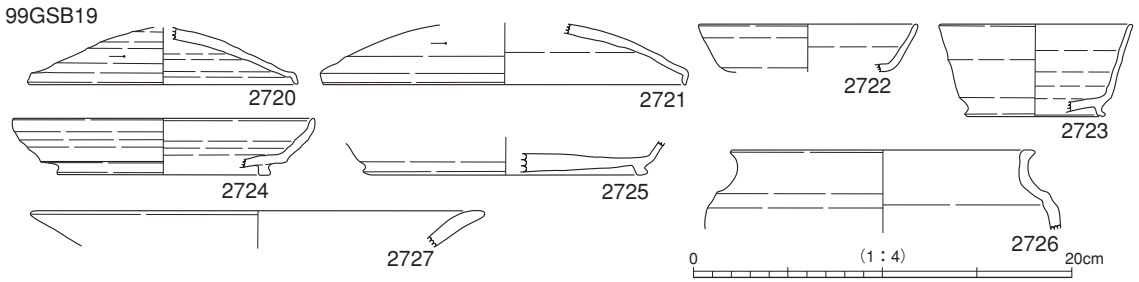
1 7.5YR4/3褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを含む）。
3 7.5YR4/4褐色粘質シルト（地山土の利用）。
4 7.5YR4/3褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
5 5YR4/3にぶい赤褐色（焼土塊）。
6 10YR3/2黒褐色粘質シルト（焼土粒や炭化物をやや多く含む）。
7 7.5YR4/4褐色粘質シルト（地山土の利用）。
8 7.5YR4/3褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
9 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを含む）。

第323図　99GSB11 平面・断面図と出土遺物実測図





1 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（径1～2mmの砂粒と炭化物を微量に含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトと7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック（斑土状に近いが、しまりは普通）。
3 7.5YR4/4褐色粘質シルト（地山と同じ。やや掘りすぎの感あり）。
4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックと炭化物を少量含む）。
5 10YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を多く含む）。
6 10YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色シルトブロックを少量含み、下部に炭化物の堆積が集中する）。
7 7.5YR4/3褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
8 10YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物と7.5YR4/3褐色シルトブロックを微量に含む）。
9 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物と7.5YR4/3褐色シルトブロックを微量に含む）。
10 7.5YR4/4褐色シルト（7.5YR3/4暗褐色シルトブロックを少量含む）。
11 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック（少量）。
12 10YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックと炭化物を少量含む）。
13 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（床面直上に炭化物が薄く層状に堆積する）。
14 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物と焼土粒が微量に混入）。
15 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（14より焼土粒が多くなる）。
16 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
17 10YR3/2黒褐色粘質シルト（5YR4/3にぶい赤褐色の焼土粒を多く含む。炭化物は混入しない）。
18 10YR3/4暗褐色粘質シルト（焼土粒を微量に含む）。



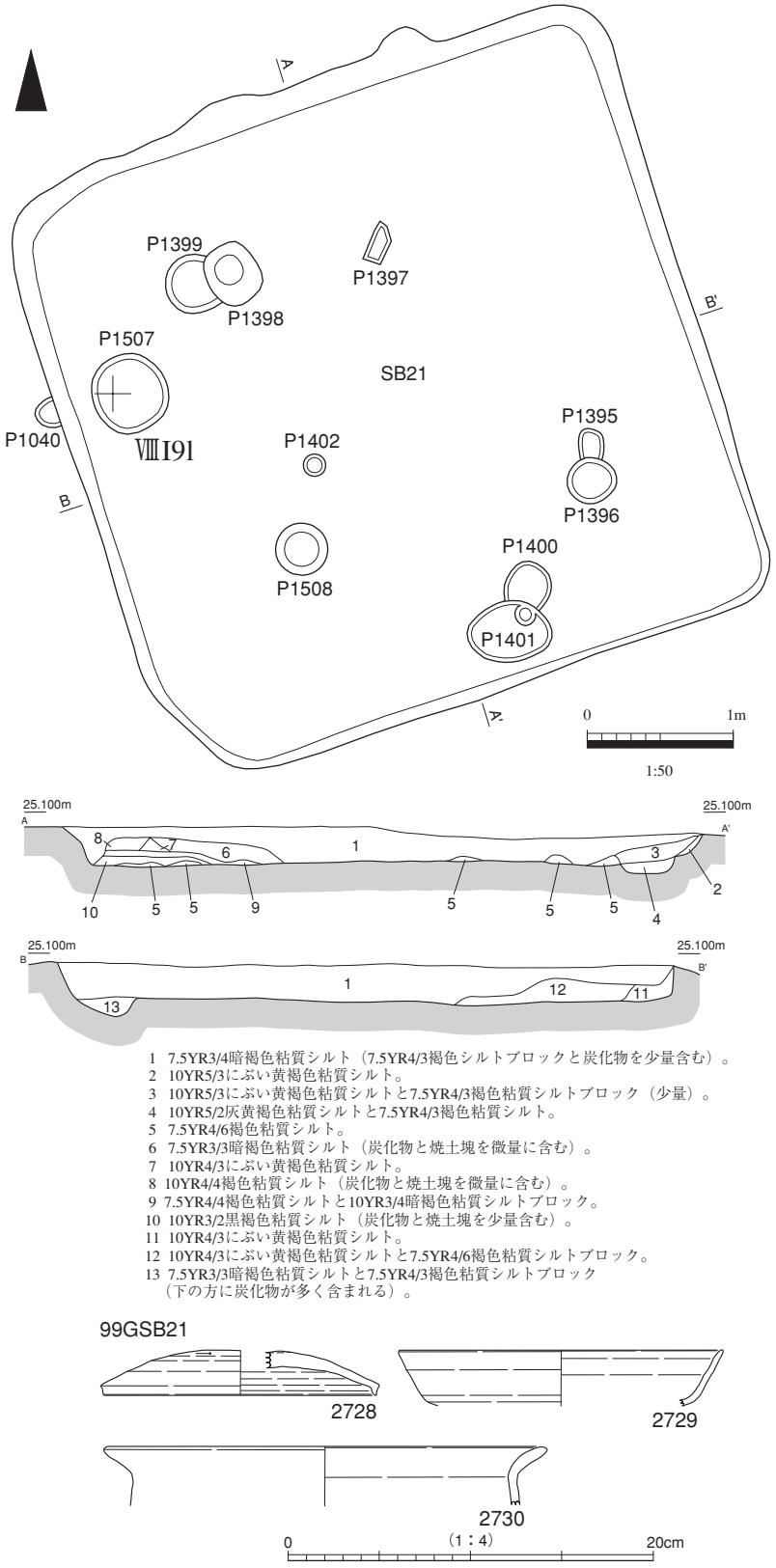
第 324 図　99GSB19 平面・断面図と出土遺物実測図

の埋め戻しがなされたと考えられる。遺物は覆土層より土器が出土した。2716は壺の蓋であろうか。2717は高蔵寺2号窯式であろう。概ね8世紀前半の土器が占めていると考えられる。

99GSB19（SB19a・b）・20

調査区中央部に位置する。かすかな痕跡しかない99GSB20の上に99GSB19が重なる。SB19の西辺はグリッド北から東へ15°振れ、平面形は隅丸正方形である。SB20もほぼ同じ方向、隅丸正方形と考えられ、東辺長2.0m以上である。SB19の北辺長は5.4mである。

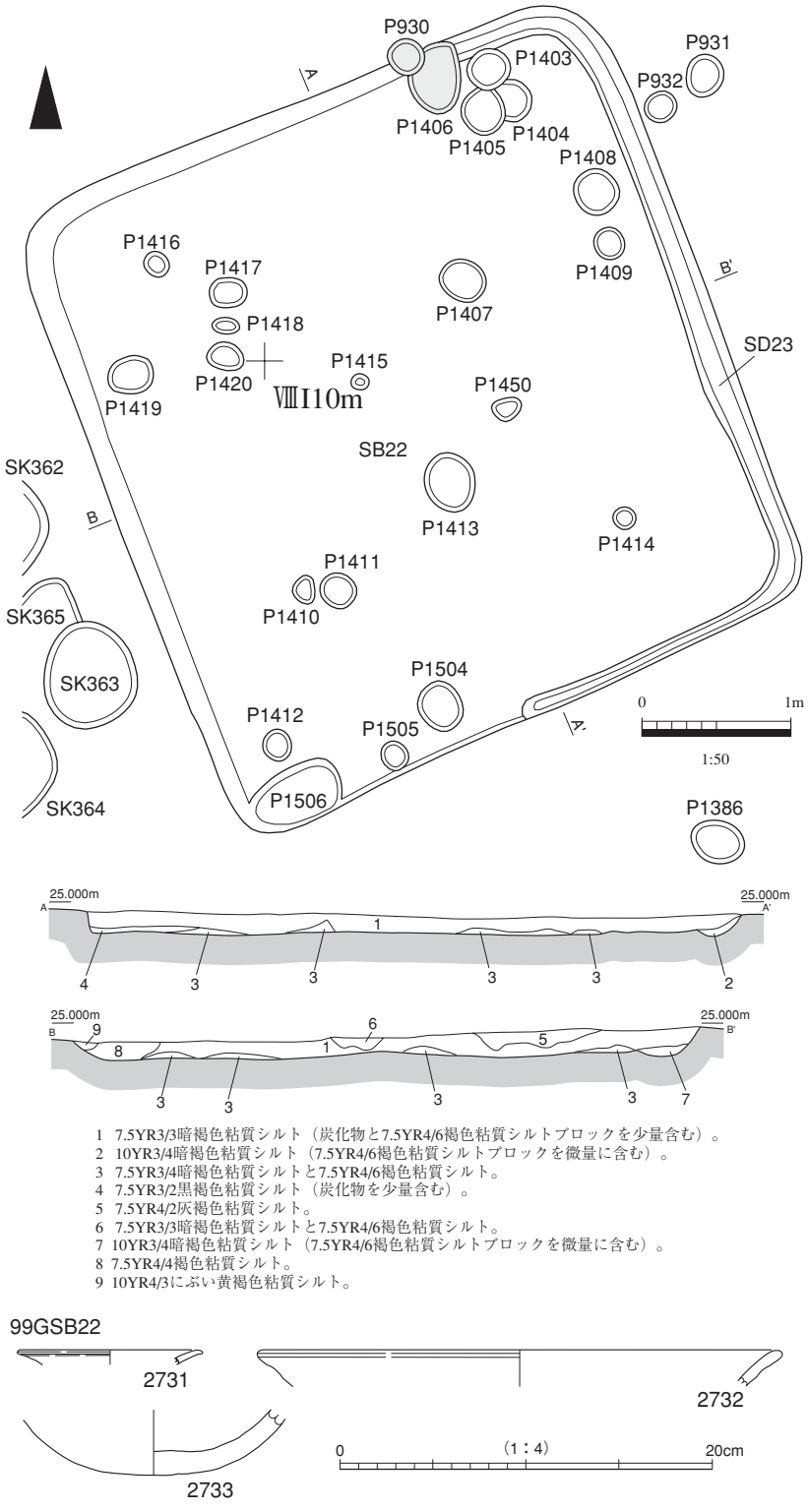
土層から、SB19は2時期あり、1時期目の建物（2～18層）をSB19aとし、2時期目（1層）をSB19bとする。SB19aは確認面からの深さ40cmで、SB19bは同9cmである。平面形の大きな改変はない。SB19aは貼床・周溝はなく、北壁ほぼ中央に造り付け竈がある（13～18層）。また、南壁ほぼ中央には地山土を積み上げた階段（7～12層）が設けられ、ここが出入口となっていたと考えられる。ただし両者とも平面で検出はできていない。この竪穴建物は一旦竈を壊して埋め戻し（2層）、後に浅く掘り直して建物としたのがSB19bである。これ



第325図　99GSB21平面・断面図と出土遺物実測図

には周溝、竈は確認されず、床面中央よりやや北に直径1.8m深さ30cmの炉と推定される掘込みのあることが土層（5・6層）から確認された。底に厚さ5cmの炭化物の堆積層があるが焼土はない。覆土層（1層）により一気に埋め戻されたことが考えられる。遺物は出土した土層がわかるものがないのが難点であるが、概ね高蔵寺2号窯式に属する須恵器によって占められる。

99GSB21　調査区中央部に位置する。他の竪穴建物との重複はない。東辺はグリッド北から西へ18°振れる。平面形は隅丸正方形で、東辺長4.36m、深さ24cmである。周溝はなく、貼床は部分的になされる（5層）程度である。北壁ほぼ中央に造り付け竈があるが、煙道部分が大きく張り出してはいない。崩落した竈の土層（6～10層）のうち、7・9層は崩落した竈本体、10層は焚き口から煙道の堆積土と判断される。土層で注意されるのが、11・12層で、西壁にそって高さ13cm、幅1.5mの段（いわゆるベッド状遺構）が設けられていた可能性が指摘されよう。ただ平面的にこれを検出はできていない。覆土層（1層）は一気に埋め戻されたものとみられる。遺物は須恵器（2728・2729）が概ね高蔵寺2号窯式である。



第326図　99GSB22平面・断面図と出土遺物実測図

99GSB22　調査区の中央部にある。東辺はグリッド北から西へ22°振れる。平面形は隅丸正方形で、東

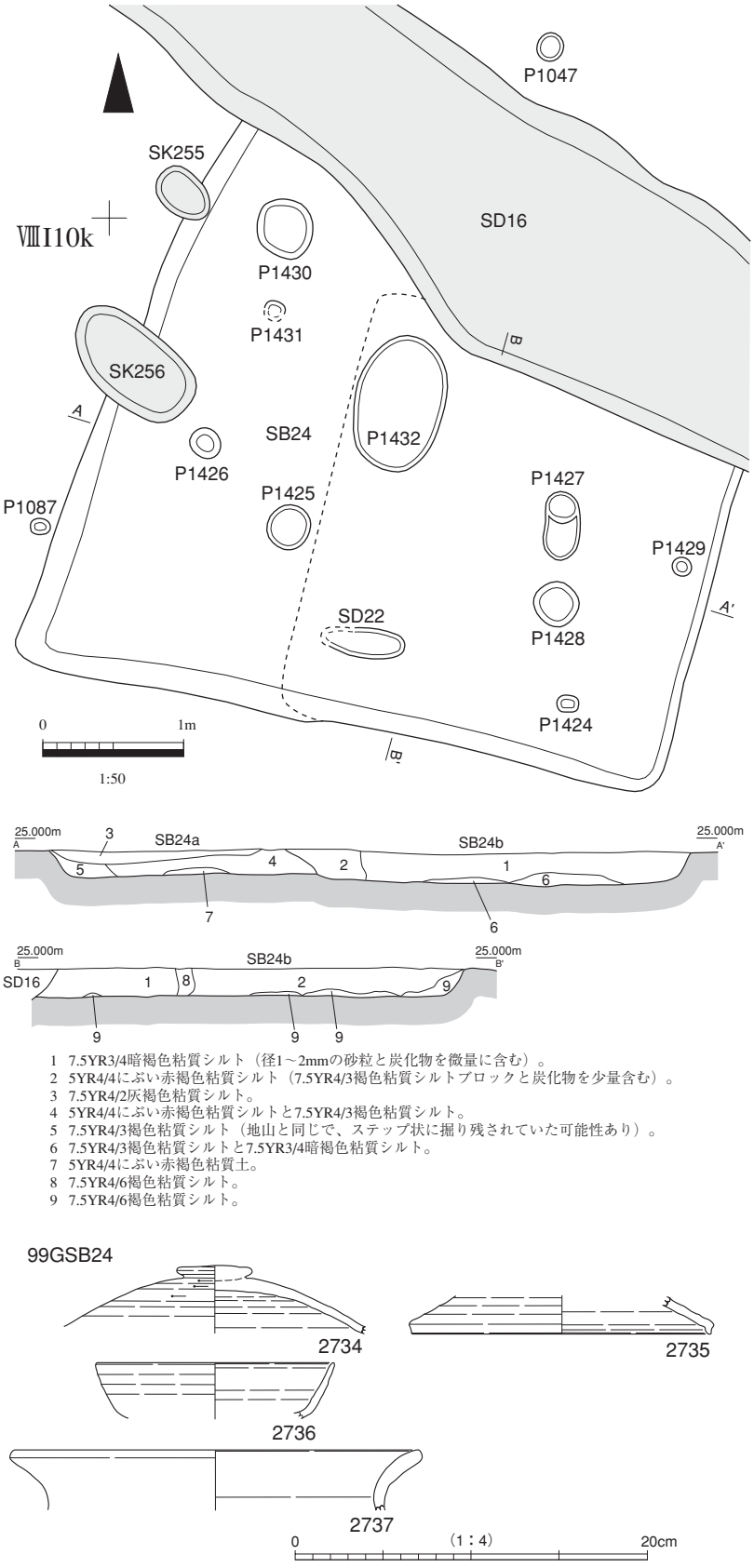
辺長4.48m、確認面からの深さ20cmである。周溝は東壁と北壁の一部、南壁の東半分の直下にある。竈はない。床面ピットは多数あるが柱穴4つと仮定すれば99GP1407、P1420、P1411が該当するだろう。貼床（3･4層）は部分的になされる。覆土層（1層）は一気に埋め戻されたものとみられる。遺物は土師器の小片しか出土していないが、概ね8世紀前半でまとまると考えられる。

99GSB24（99GSB24a・b）

99GSB22の西3mに位置する。北側1／3を溝（SD16）に壊される。西辺はグリッド北から東へ22°振れる。土層から2時期（SB24a･b）あることが判明した。

SB24aは当初確認された正方形と推定される平面形と考えられる。そうすると南辺長4.5m、確認面からの深さ20mである。東辺はグリッド北から東へ15°振れる。竈、周溝はない。東壁には階段状の出入口と考えられる粘土層（5層、地山を削り出した可能性もある）がある。

SB24bはSB24aを埋め戻して整地した状態（3・4層）を再掘削したものである。その平面形はSB24aと南西隅を共有し、東西長はおよそ半減し

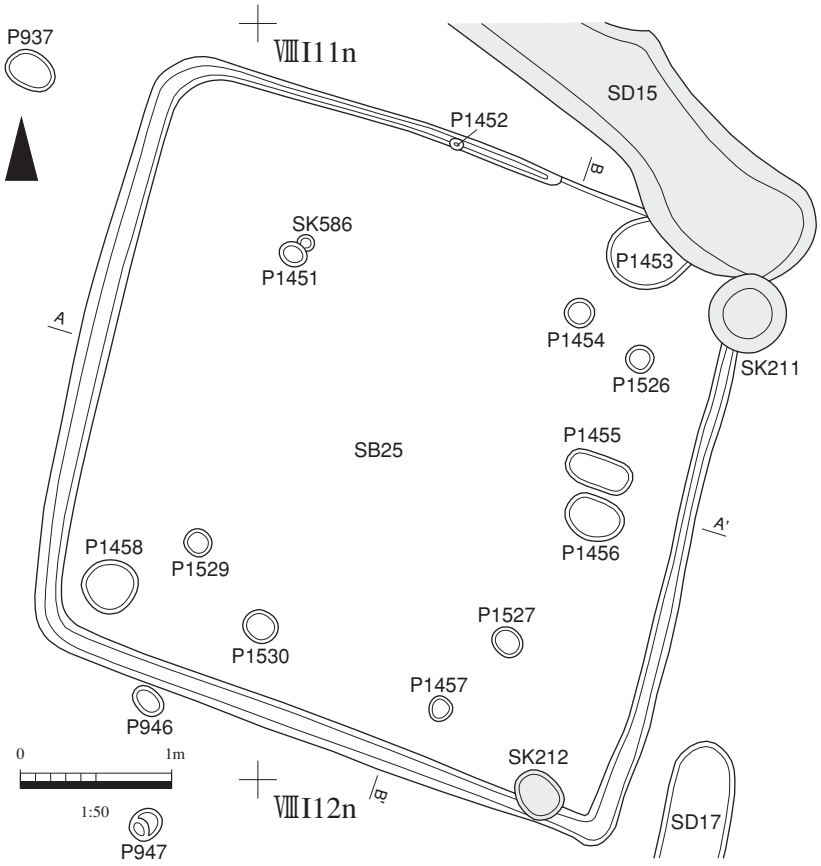


第327図　99GSB24平面・断面図と出土遺物実測図

た規模である。こうしてできた平面形は東西に2.8m、南北に3.05m、確認面からの深さ24cmである。6・9層は貼床とも考えられる。SB24bに竈・周溝・柱穴は認められなかった。遺物はSB24a・bのいずれに属するのか判明しないが、須恵器（2734～2736）は概ね高蔵寺2号窯式である。

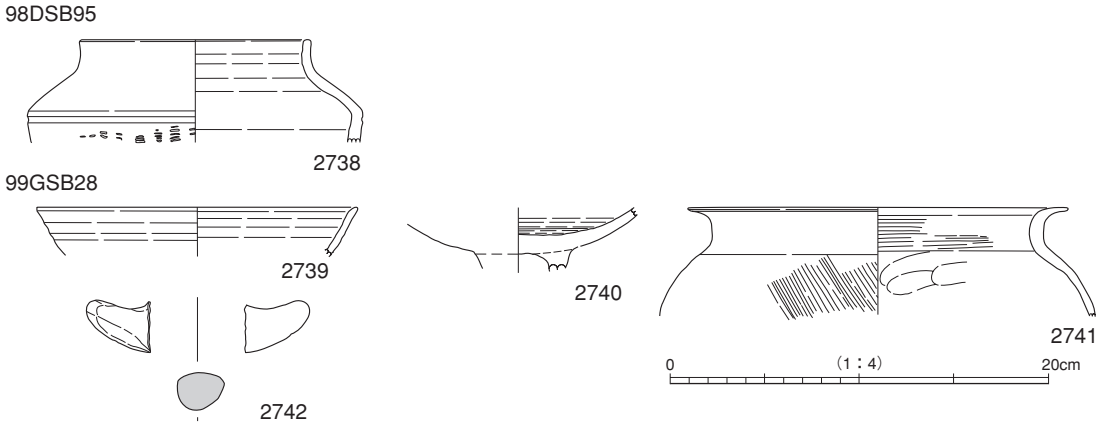
99GSB25　調査区の中央部からやや南に位置する。北東隅に溝などが上に重なる。西辺はグリッド北から東へ16°振れる。平面形は隅丸正方形で、西辺長4.14m、確認面からの深さ10cmである。周溝は北東隅以外を廻る。竈はない。柱穴は4つある。覆土層の主体は1・4層だが、埋め戻しの単位ととられ、南東隅から土を流し込んだ状況が想定される。出土遺物はなかった。

99GSB26・27　調査区の南部、98D区との境に位置する。

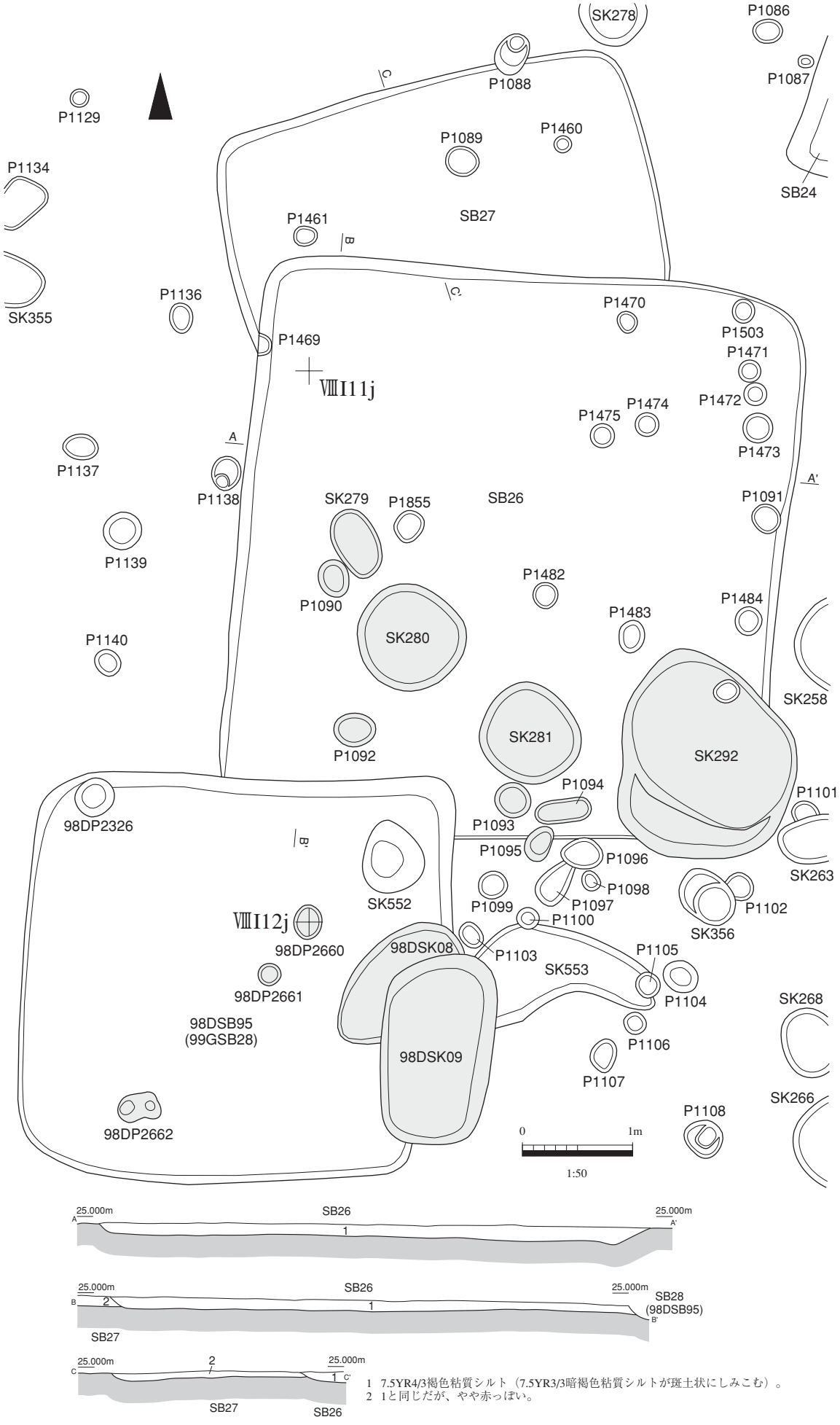


1　7.5YR3/3暗褐色粘質シルト
（径1～2mmの砂粒と7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
2　7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（しまり弱い）。
3　7.5YR4/3褐色粘質シルト（地山に近い色調。しまり弱い）。
4　7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを多く含む）。
5　7.5YR4/3褐色粘質シルト。
6　7.5YR4/3褐色粘質シルト（7.5YR3/3褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
7　7.5YR4/3褐色粘質シルト（地山に近いが、しまり弱い）。
8　7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（しまり弱い）。

第328図　99GSB25平面・断面図



第329図　99GSB28（98DSB95）出土遺物実測図

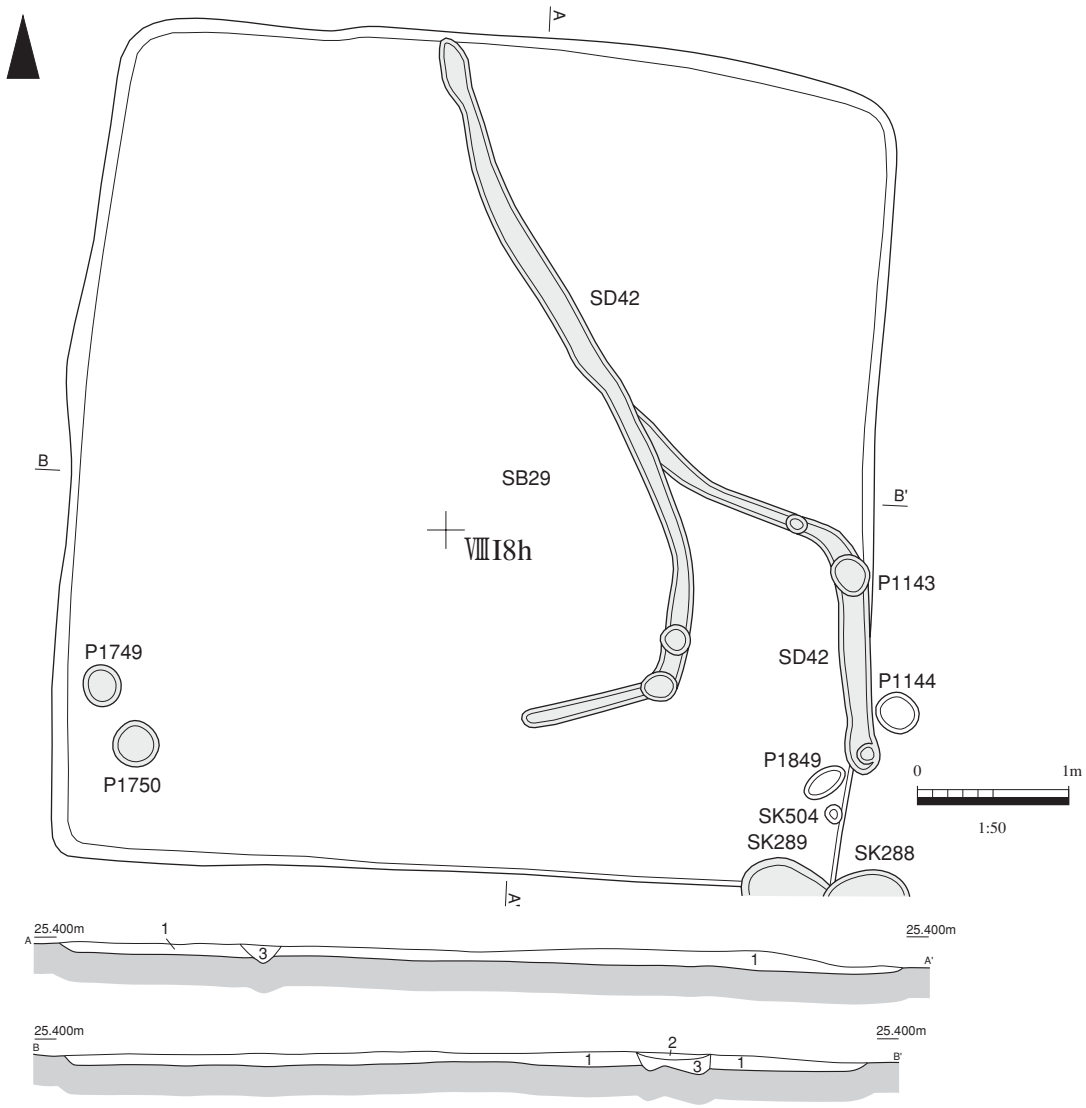


第 330 図　99GSB26 ～ 28（98DSB95）平面・断面図

中世土坑墓群と重複する。竪穴建物どうしの関係は99GSB27→99GSB26→98DSB95（99GSB28）である。SB26は西辺がグリッド北から東へ14°振れる。隅丸正方形で北辺長5.0m、確認面からの深さ15cmである。竈や周溝はなく、柱穴は特定しにくい。SB26・27ともに覆土層が斑土状なので一気に埋め戻したものと思われる。SB27は東辺がグリッド北から西へ14°振れる。隅丸正方形と考えられ、北辺長は3.95m、確認面からの深さ7cmである。竈や周溝はみられなかったが、柱穴4つのタイプを想定できよう。いずれも出土遺物はなかった。

99GSB29　調査区南西部に位置する。他の竪穴建物との重複関係はない。西辺はグリッド北から東へ4°振れる。平面形は隅丸正方形で、西辺長は5.56m、確認面からの深さ12cmである。竈・周溝・柱穴は確認できなかった。出土遺物はなかった。

99GSB31・SB32　99GSB25の南5mに位置する。SB32→SB31という重複関係がある。ただしいずれ



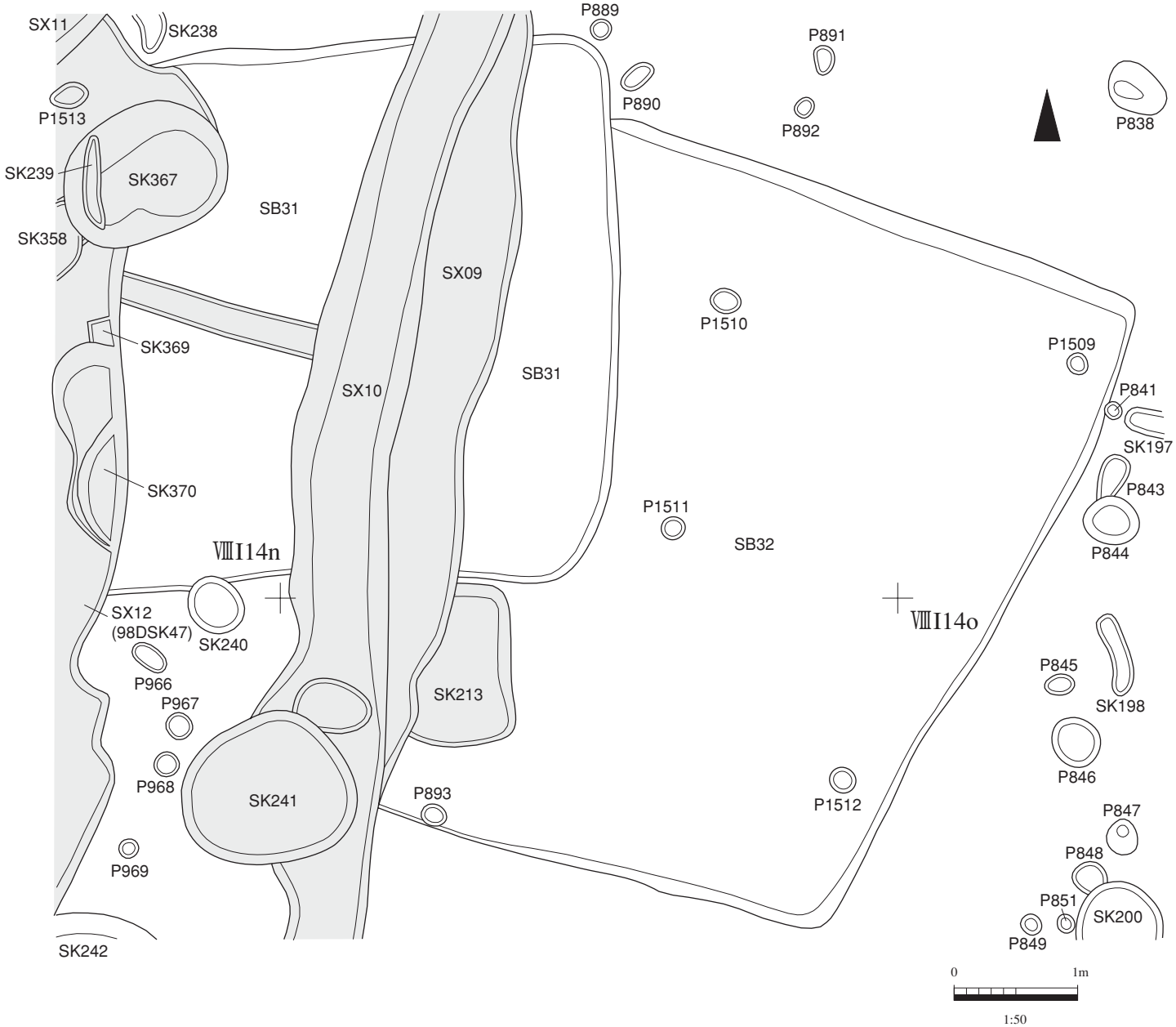
1　7.5YR4/3褐色粘質シルト（全体に7.5YR3/4暗褐色粘質シルトの混入がみられる）。
2　7.5YR4/4褐色粘質シルト。
3　5YR4/2灰褐色粘質シルト（粘質弱い。不整形の堀形の溝の埋土）。

第331図　99GSB29平面・断面図

も検出状況があまり良好でないので、竪穴建物遺構としての可能性に疑問は残る。SB31は東辺がグリッド北から西へ2°振れる。平面形は隅丸正方形と考えられ、東辺長は4.44mである。竈・周溝・柱穴は認められない。SB32は東辺がグリッド北から東へ21°振れる。平面形は隅丸正方形と考えられる。竈・周溝・柱穴は認められない。SB31・32からは出土遺物がなかった。

99GSB35　調査区中央部に位置する。北側を中世以降の溝に壊される。東辺はグリッド北から東へ15°振れる。平面形は隅丸正方形と考えられ、南辺長は5.4m、確認面からの深さ9cmである。竈と周溝は認められなかった。柱穴は特定しにくいが、99GSK578・583が該当すると考えられ、すると柱穴4つのタイプとなろう。出土遺物はなかった。

99GSB36　調査区北西部に位置する。北東辺はグリッド北から58°西へ振れる。平面形は隅丸正方形で東辺長は4.9m、深さ8cmである。覆土層に関する情報はなく、出土遺物もなかった。

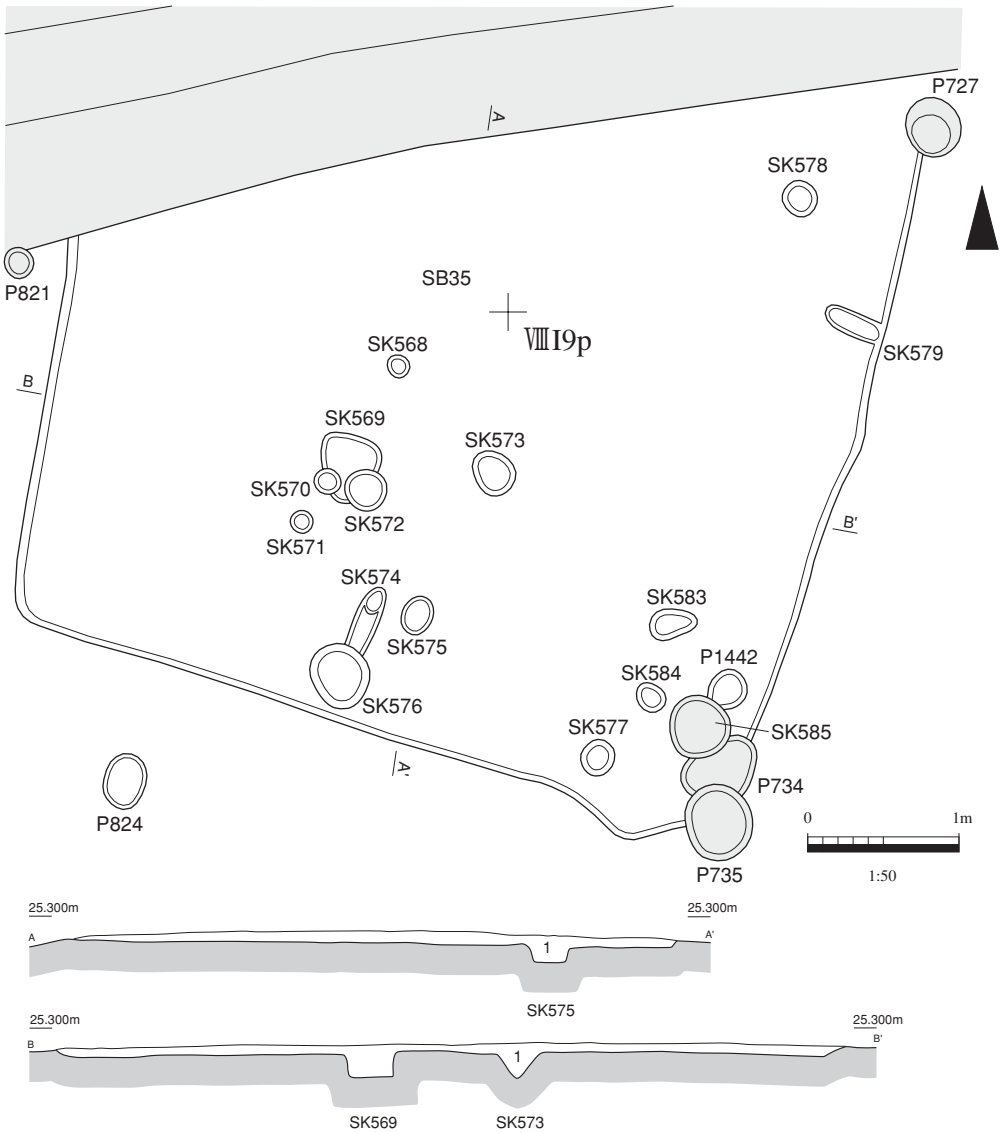


第332図　99GSB31・32平面図

99GSB37　99GSB36の北西6mに位置する。遺構の大部分は中世以降の溝によって失われていた。西辺はグリッド北から27°西へ振れる。平面形は隅丸正方形と考えられ、西辺長は4.32m、確認面からの深さ5cmである。竈や周溝は確認されず、出土遺物もなかった。

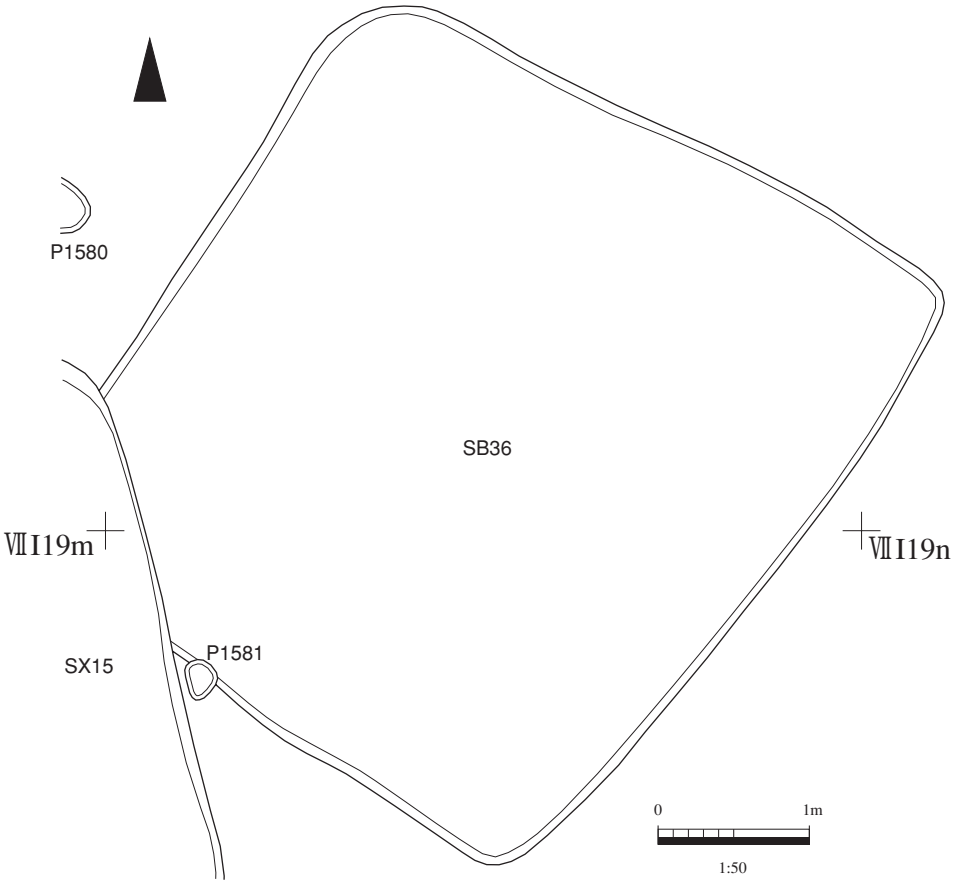
99GSB38　調査区の西部、SB29付近にある。おおよそ西半分が検出されなかった。東辺はグリッド北から東へ23°振れる。平面形は隅丸正方形と考えられ、東辺長は4.04m、確認面からの深さ12cmである。竈・周溝・柱穴は確認されず、出土遺物もなかった。

99HSB01　調査区西隅、99GSB36の北7mに位置する水入遺跡で確認された古代の竪穴建物の中で最も北になる。確認面が全体に南東方向へ下る緩い傾斜を生じているので、北西隅を中心とした一部しか検出されなかった。西辺はグリッド北から13°西へ振れる。南辺の一部が確認されているので平面形は隅丸正方形と判断され、南北長4.0m、確認面からの深さ8cmである。竈はなく、周溝は北東隅では壁に沿

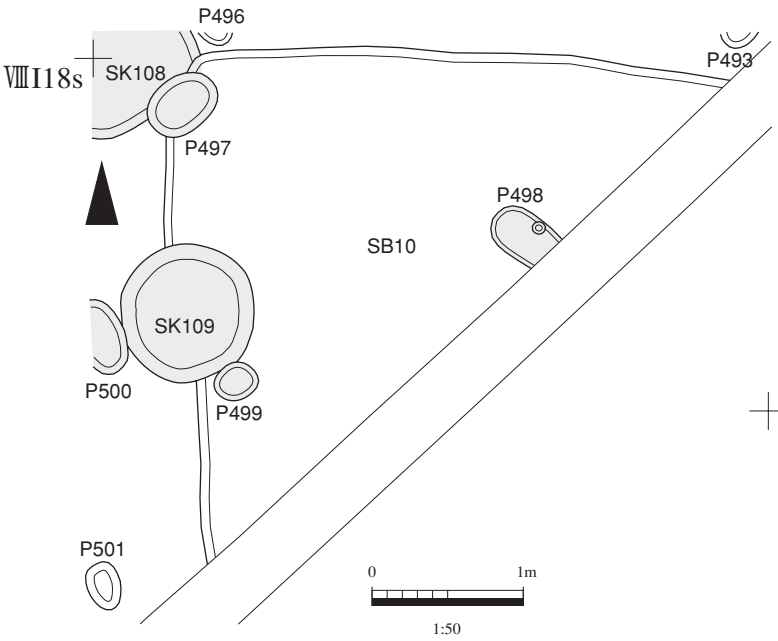


1　7.5YR4/3褐色粘質シルトに7.5YR3/3暗褐色粘質シルトが混入。

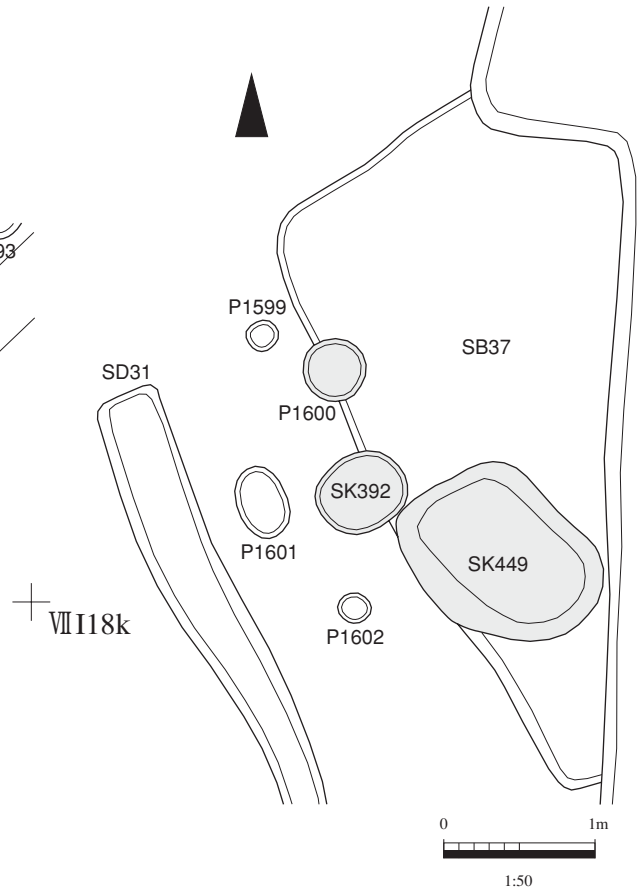
第333図　99GSB35平面・断面図



第 334 図　99GSB36 平面図

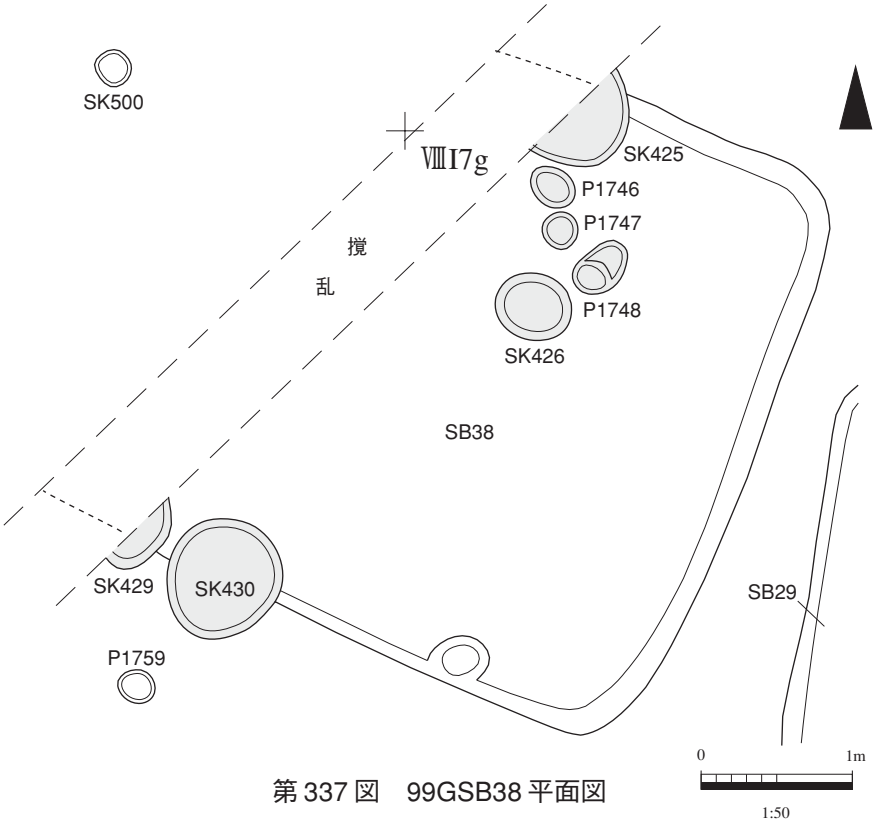


第 335 図　99GSB10 平面図

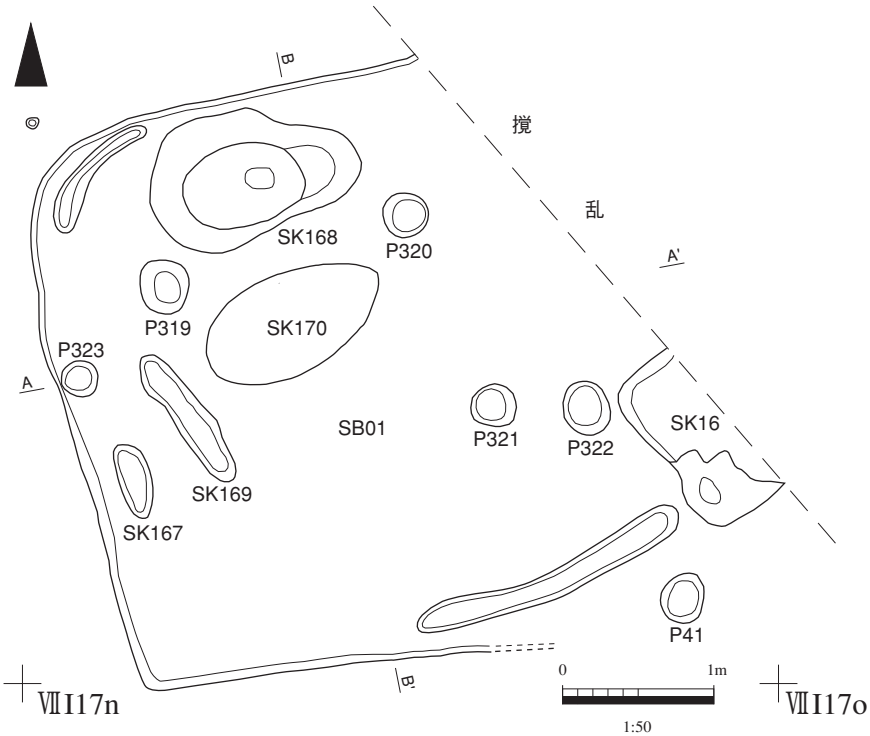


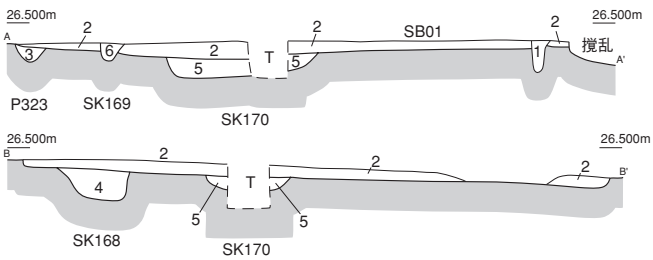
第 336 図　99GSB37 平面図

うようにしてあるが、平面形と対応しない溝状遺構もある。99HP319・320（直径36cm、深さ16～22cm）が柱穴になるであろう。床面では土坑（99GSK168・170）が確認されたが、位置的にみてこれは当該竪穴建物に付属するものではないと考えられる。覆土層（2層）は単一層で、一気に埋め戻されたと考えられる。出土遺物はなかった。



第337図　99GSB38平面図





1　7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
2　7.5YR4/3褐色粘質シルト（5mm以下の小礫を多少含む。炭化物を若干含む）。
3　7.5YR3/6暗赤褐色粘質シルト（炭化物を若干含む。沈鉄あり）。
4　7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（沈鉄あり）。
5　7.5YR4/4褐色粘質シルト（5mm以下の小礫を多少含む）。
6　7.5YR2/3極暗褐色粘質シルト（炭化物を多く含む）。

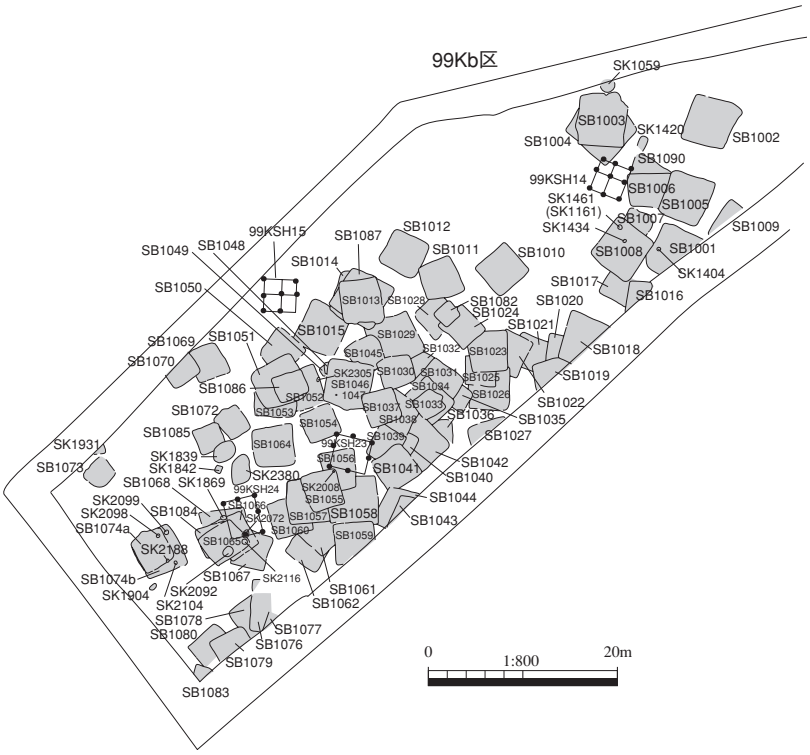
第338図　99HSB01平面・断面図

（4）遺構各説（下糟目B地区 99J・99K区）

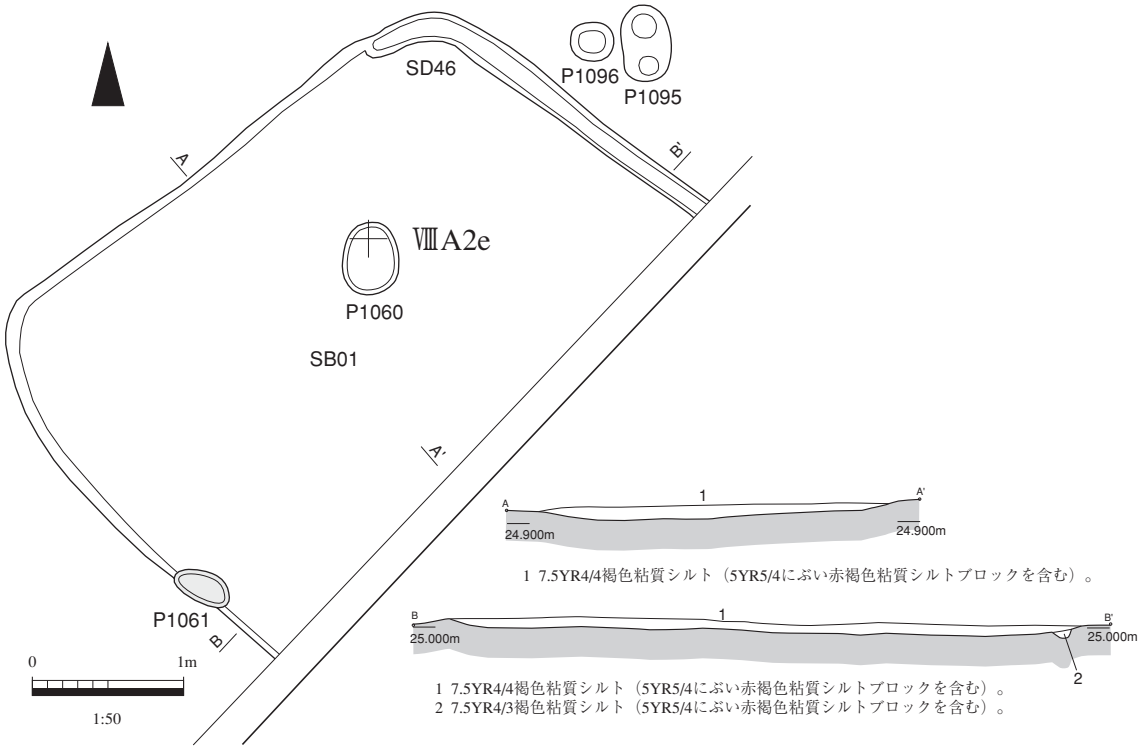
99JSB01　調査区東壁で途切れるが、平面形は隅丸正方形と考えられ、北西辺長4.16mである。北西辺はグリッド北から東へ43°振れる。竈・柱穴はなく、周溝は北東辺のみで確認された。土層に関する記録はない。また出土遺物もなかった。

99KSB1001（99KSB1001a・b）

調査区東壁で途切れるが、平面形は隅丸正方形と考えられる。南西隅に99KSB1008が上に重なる。北西辺はグリッド北から東へ27°振れる。北西辺長5.31mである。この竪穴建物の遺構は土層観察の結果、複数時期に区分される。2時期区分案は、2・3・6～8層が第1期とし、

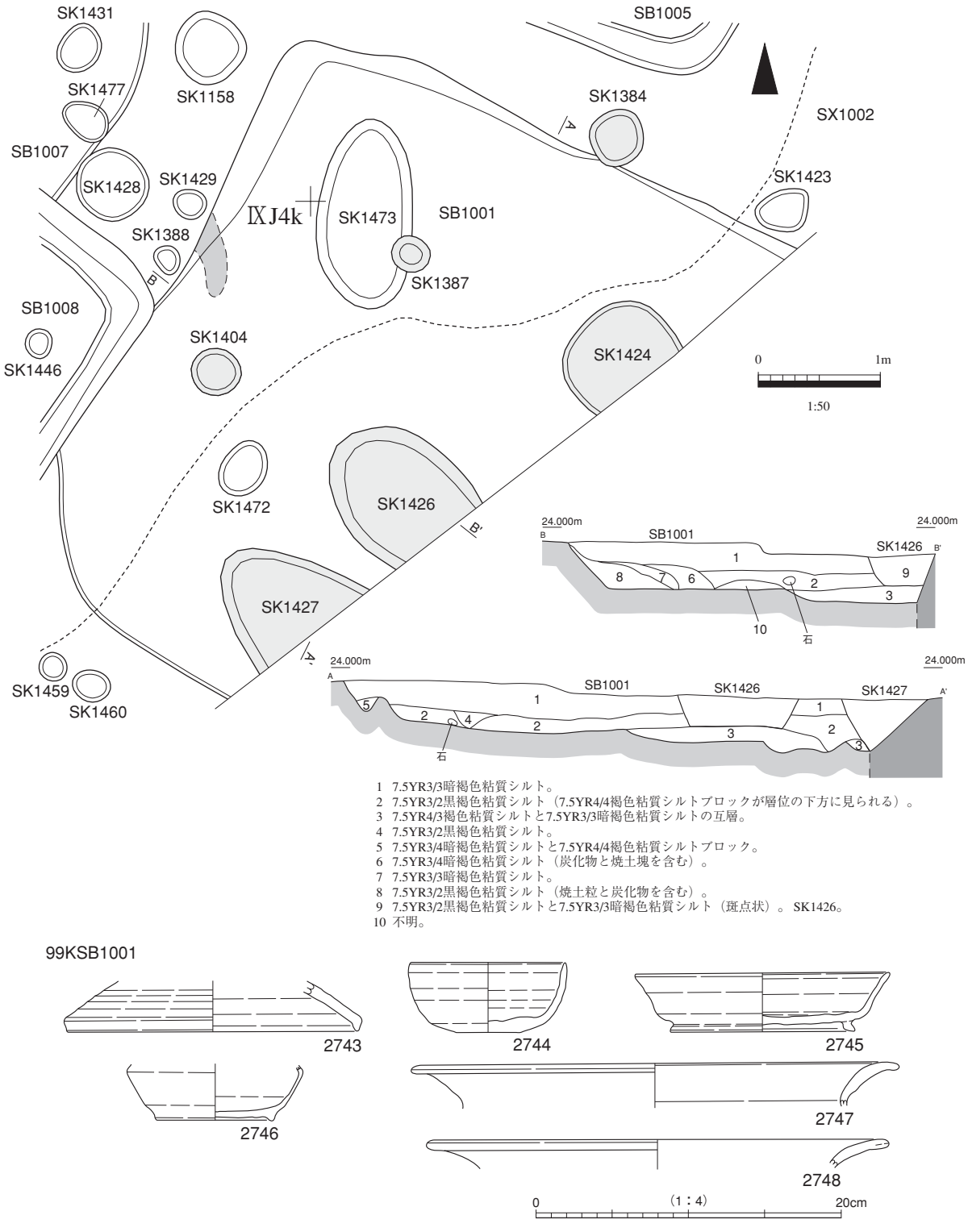


第339図　下糟目B地区（99Kb区古代主要遺構配置図）

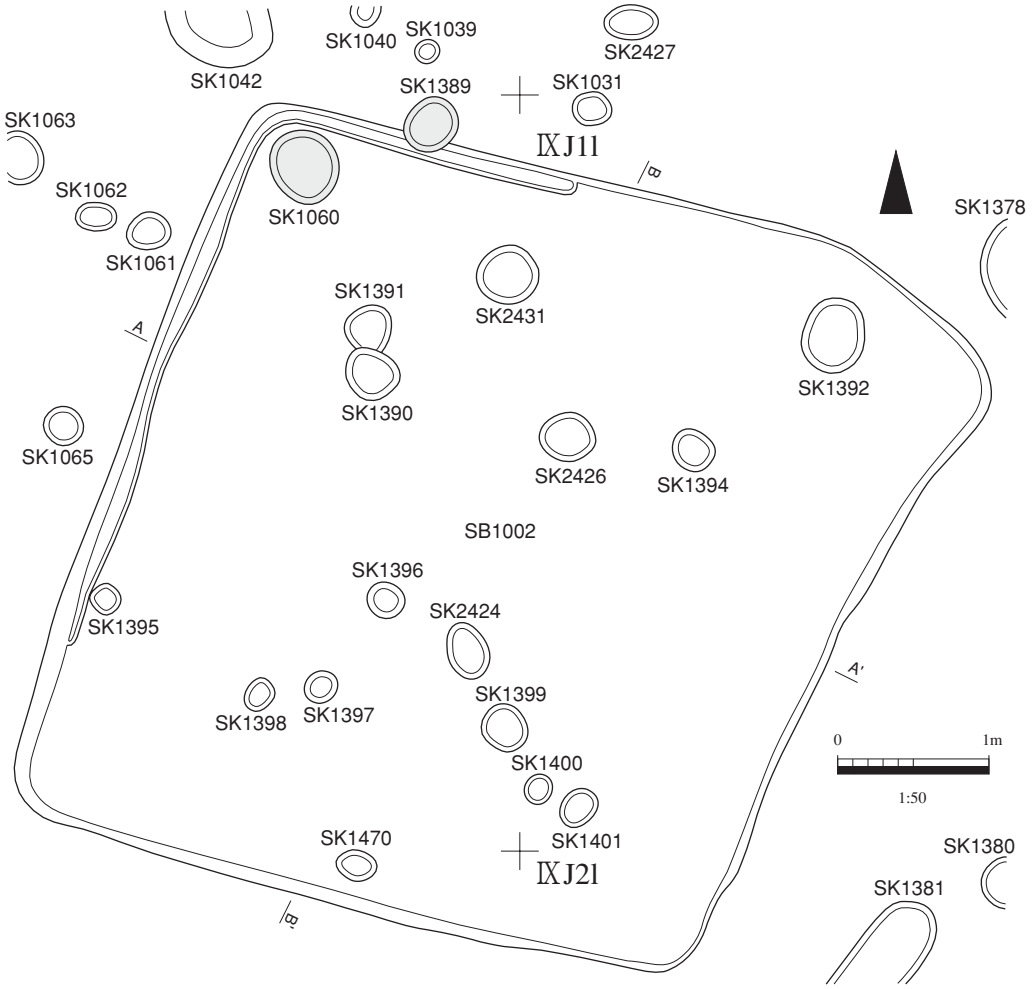


第340図　99JSB01平面・断面図

3層を貼床とみる。北壁近くの6～8層は造り付け竈となる。そして1・5層を第2期とし、5層は周溝となる。3時期区分案は、3層を第1期、2・6～8層を2期（先述の1期と同じ）、1・5層を第3期とする。4時期区分案は、3層を第1期、2・6～8層を第2期、4層を第3期（周溝とみる）、1・5層を第4期とする。検出状況が良好でないので土層と平面的に確認しうる現象の対応関係が不明であり、いずれの案と



第341図　99KSB1001平面・断面図と出土遺物実測図



1 SD1003埋土。
2 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト。
3 7.5YR4/3褐色粘質シルトと7.5YR3/2黒褐色粘質シルト。

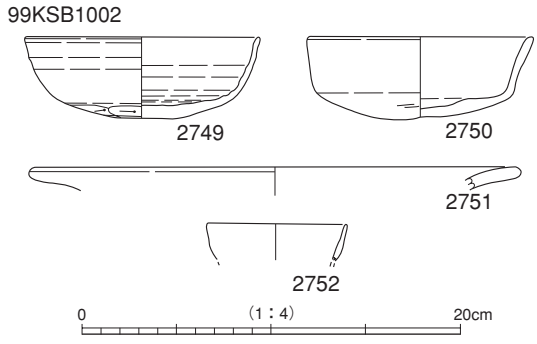
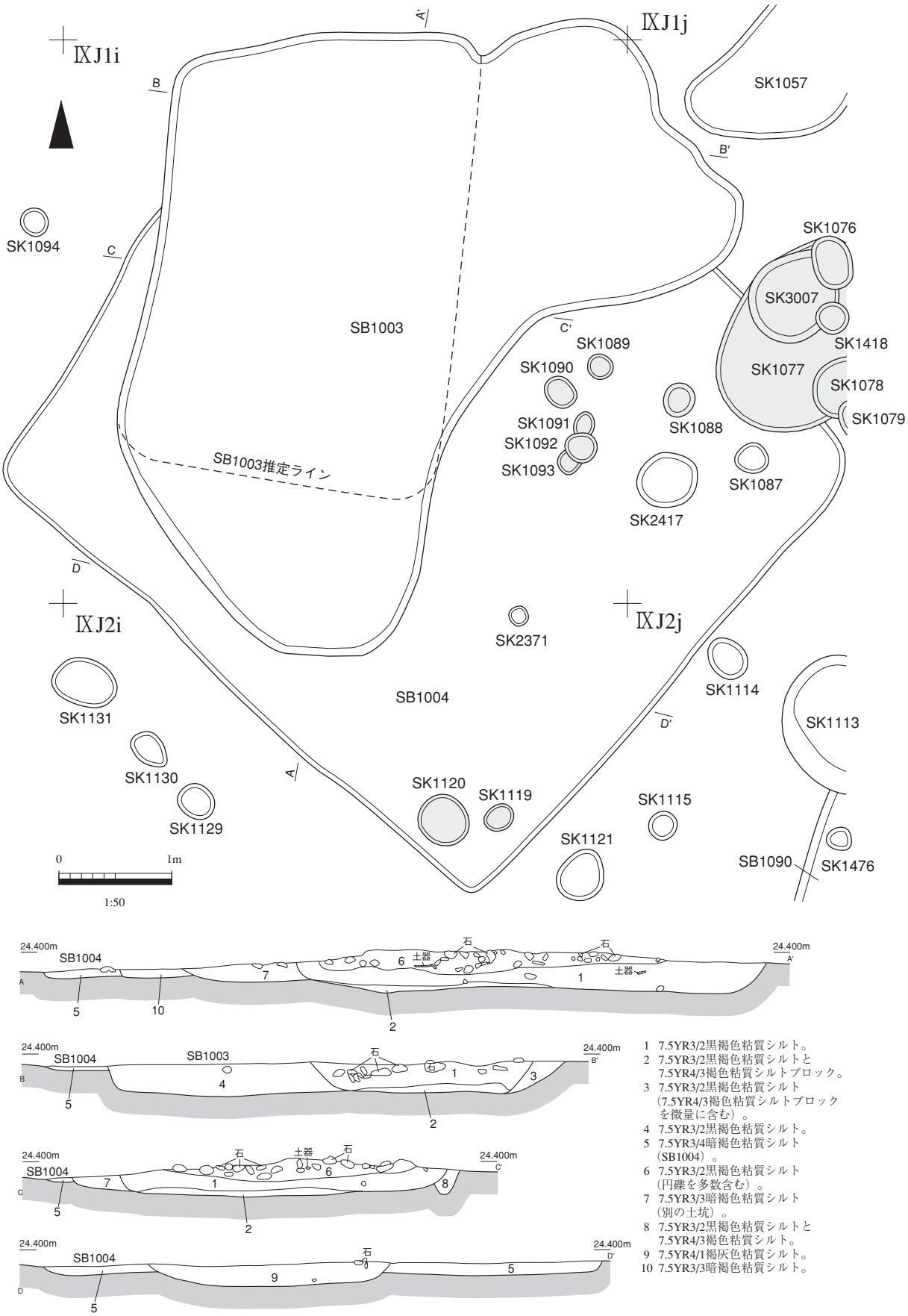
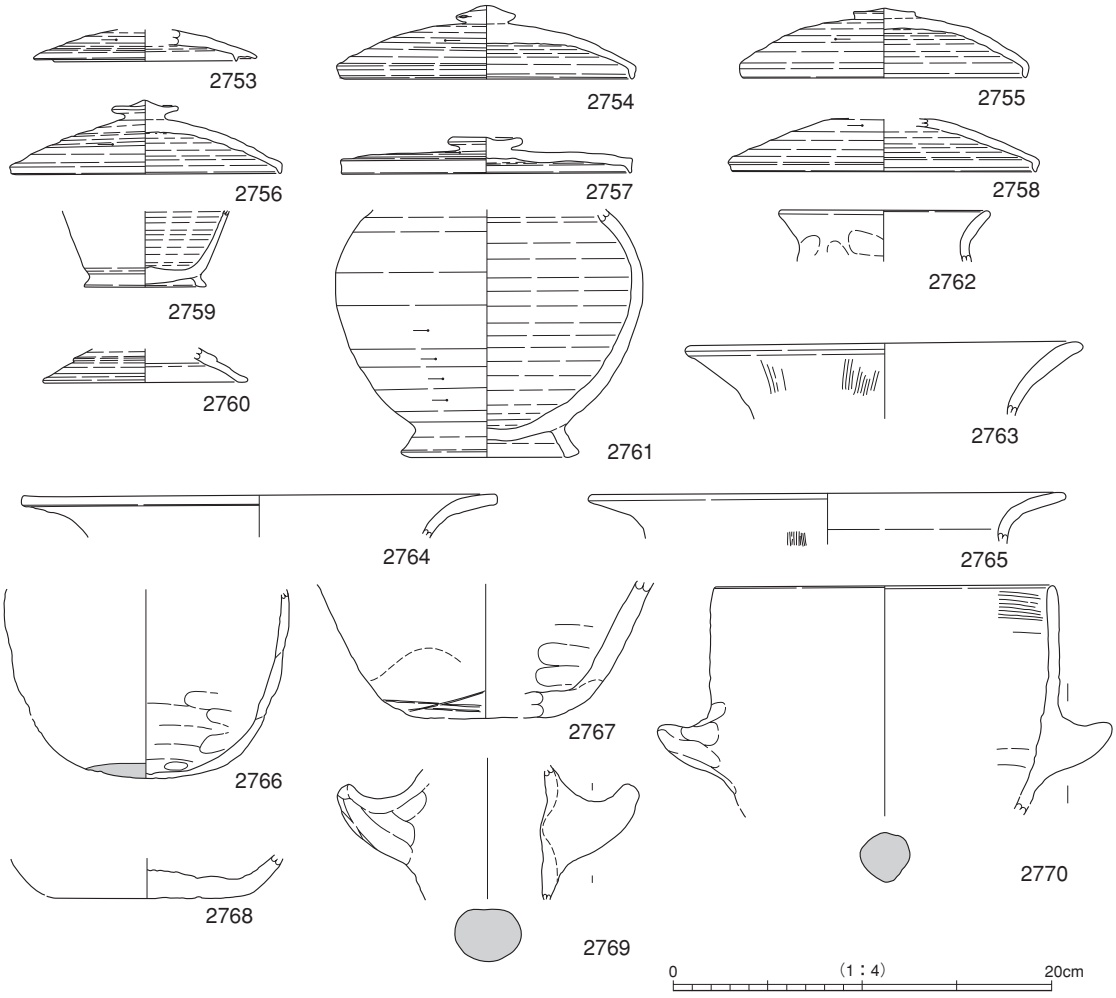


写真　99KSB1002 作業風景（西から）

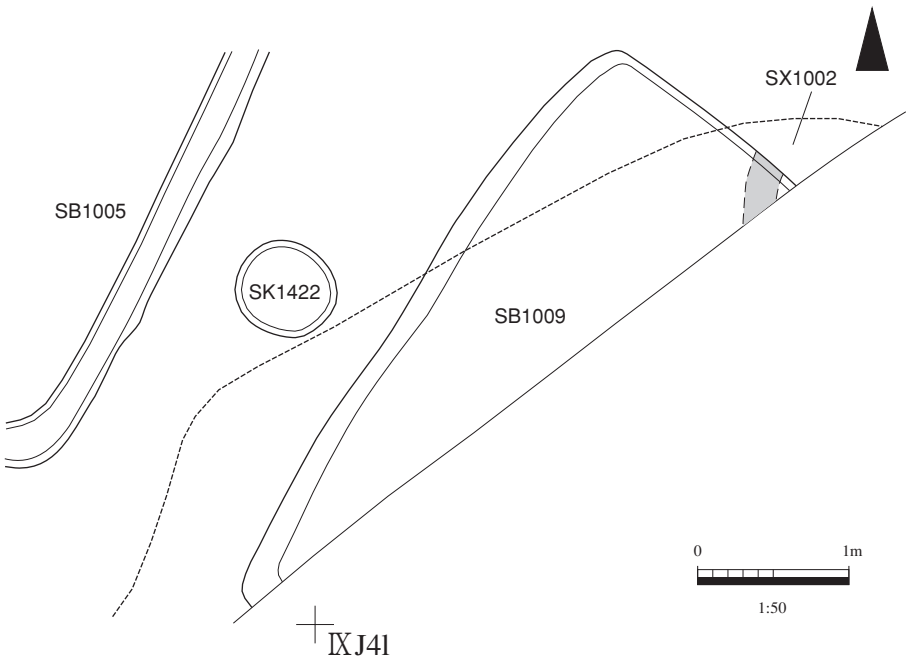
第 342 図　99GSB1002 平面・断面図と出土遺物実測図



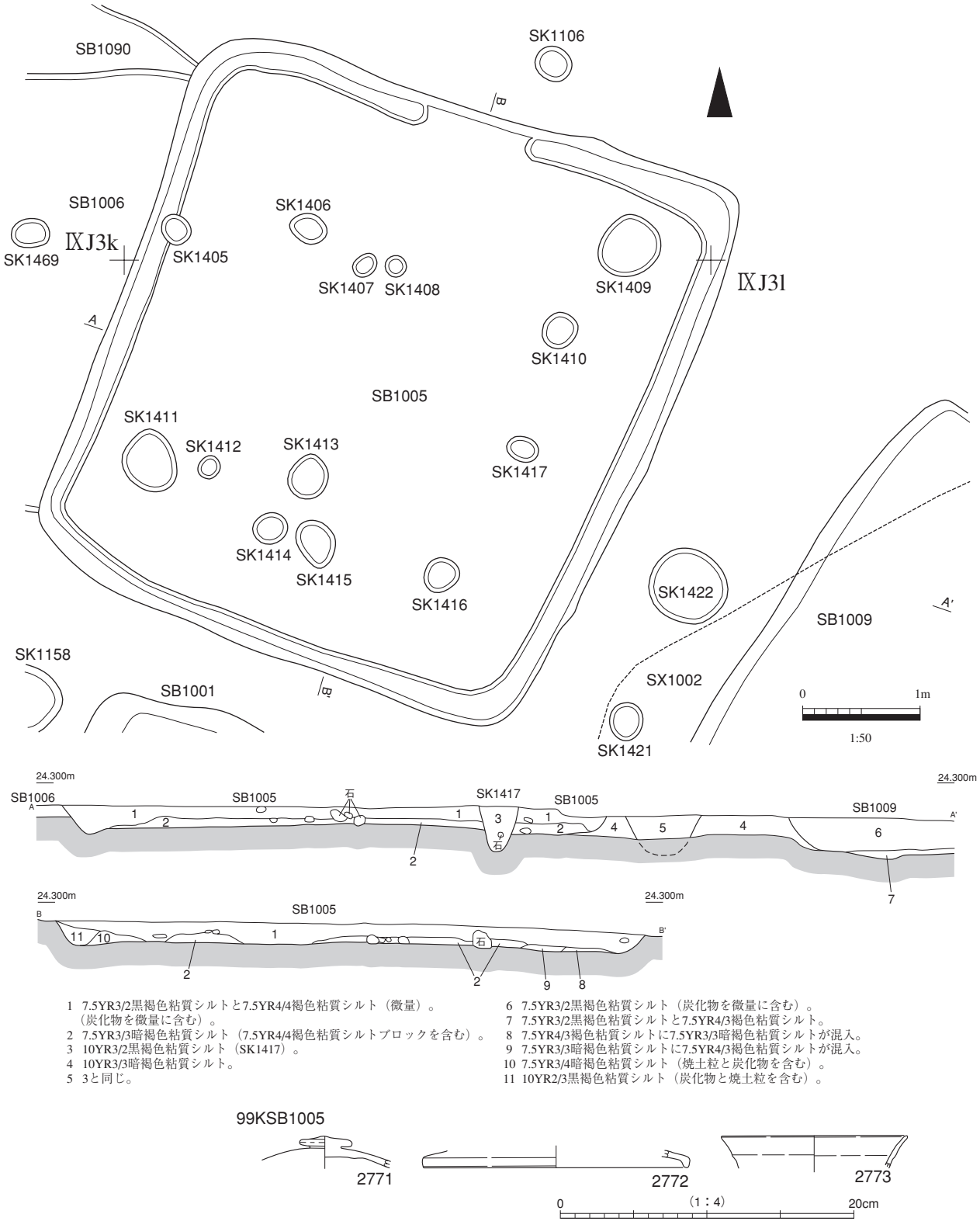
第 343 図　99KSB1003・1004 平面・断面図



第 344 図　99KSB1003 出土遺物実測図



第 345 図　99KSB1009 平面図



1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルト（微量）。（炭化物を微量に含む）。
2 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを含む）。
3 10YR3/2黒褐色粘質シルト（SK1417）。
4 10YR3/3暗褐色粘質シルト。
5 3と同じ。
6 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
7 7.5YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR4/3褐色粘質シルト。
8 7.5YR4/3褐色粘質シルトに7.5YR3/3暗褐色粘質シルトが混入。
9 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトに7.5YR4/3褐色粘質シルトが混入。
10 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（焼土粒と炭化物を含む）。
11 10YR2/3黒褐色粘質シルト（炭化物と焼土粒を含む）。

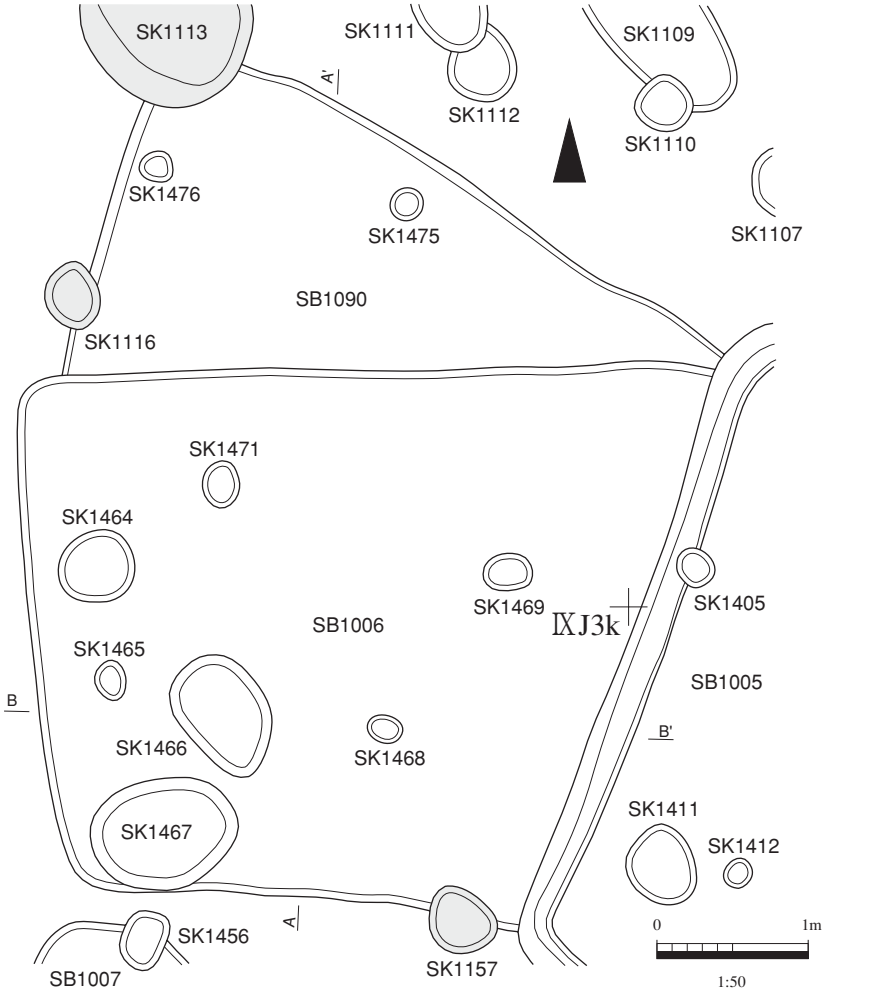
第346図　99KSB1005平面・断面図と出土遺物実測図

も限定しがたい。しかし竈と壁面立ち上がりが明瞭な2･6～8層と1･5層による2時期区分（99KSB1001a･b）が最も確実視され、本書ではこれを採用する。

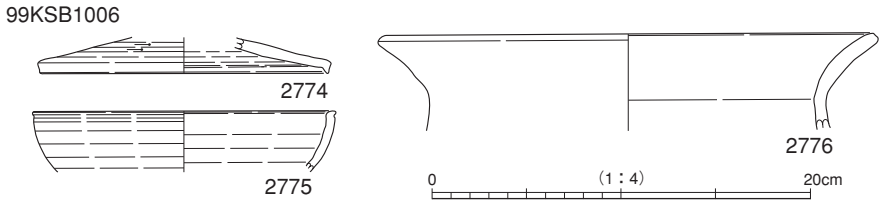
SB1001bは、確認された平面形が該当する。確認面からの深さ27cmで、西壁には周溝がある。造り付け竈はない。それに先行するSB1001aは、南西辺の状況が不明であるがSB1001bより一回り小さい一辺約4m規模の隅丸正方形と推定され、確認面からの深さ41cmである。西壁ほぼ中央に造り付け竈がある。A･bともに覆土層は1層で、一気に埋め戻されたと考えられる。

遺物は属する層が不明ではあるが、須恵器2744と2745は岩崎17号窯式～岩崎41号窯式、それ以外は高蔵寺2号窯式、土師器甕は口縁形状から後者の時期が考えられる。

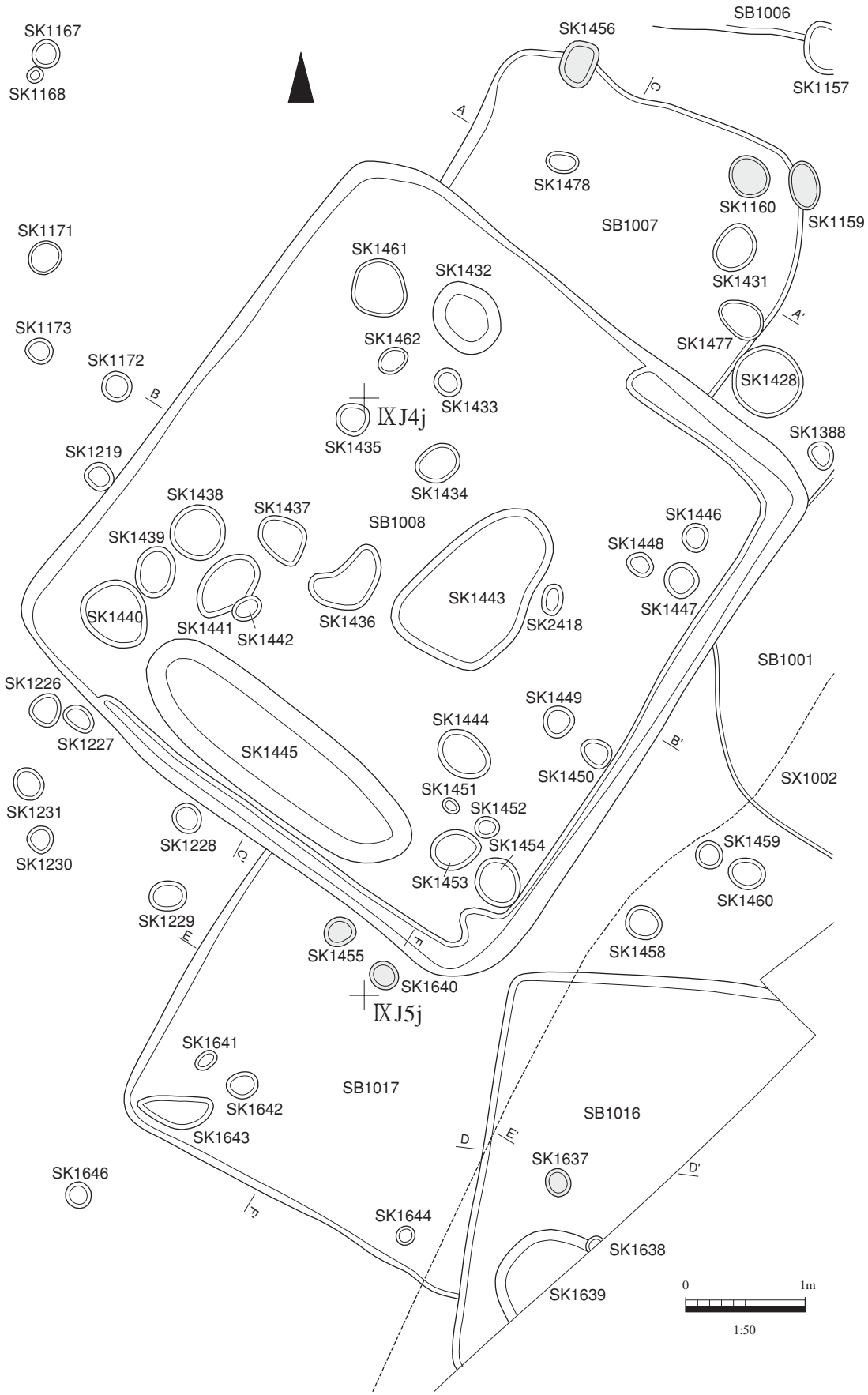
99KSB1002　調査区（Kb区）の北端に位置する。ほぼ中央部分をSD1003が上に重なる。西辺はグリッド北から19°東へ振れる。平面形は隅丸正方形で、西辺長は5.12m、確認面からの深さ11cmである。北壁ほぼ中央に竈痕跡とみられる床面の赤変が認められたが、移動式竈の可能性が考えられる。周溝は北壁の竈の西から西壁にかけて



12 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（SB1090）。
13 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
14 7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。



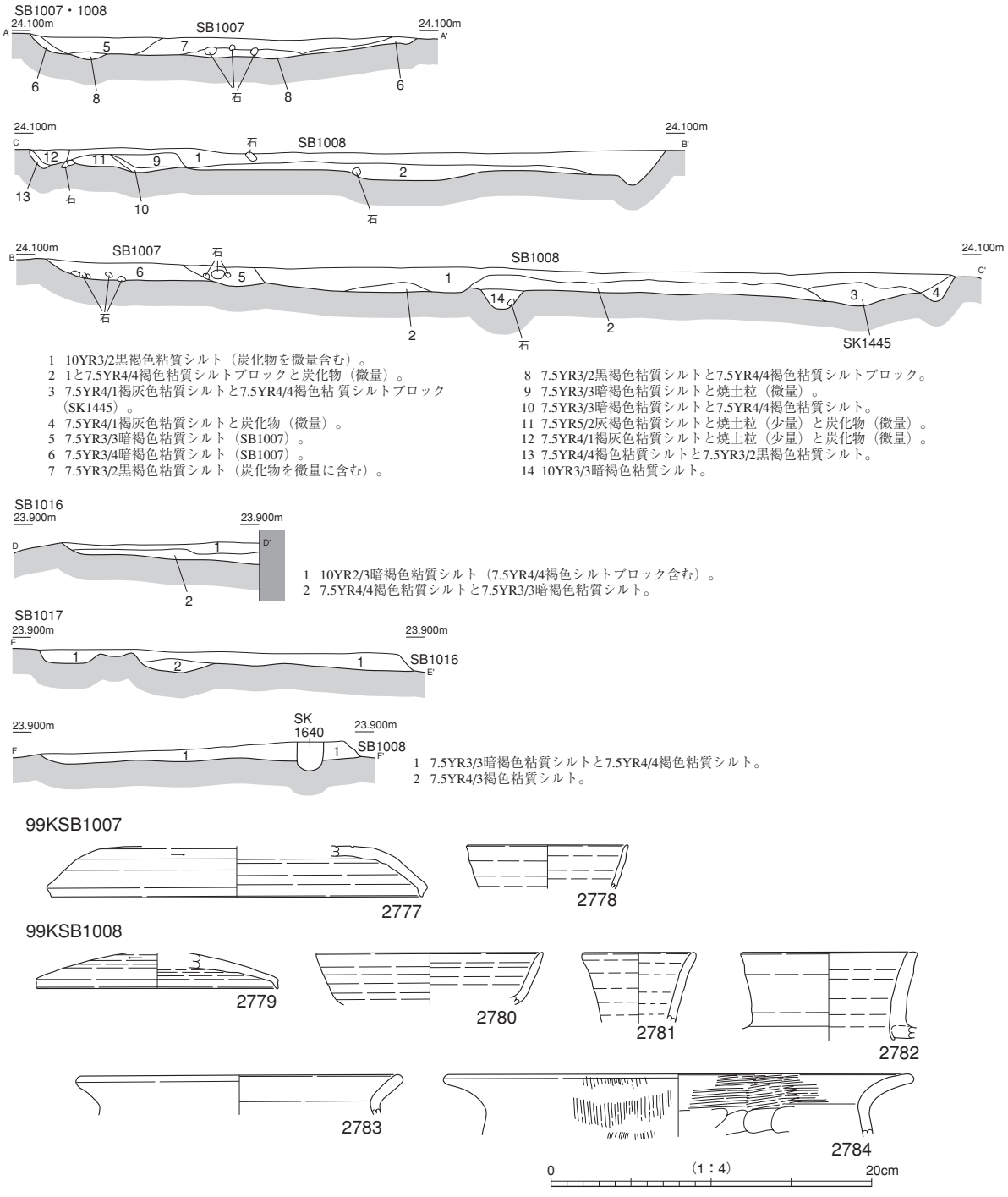
第347図　99KSB1006平面・断面図と出土遺物実測図



第 348 図　99KSB1007・1008・1016・1017 平面図

ある。貼床はなく、柱穴はピットが多数あって特定しにくいが、柱穴4つが妥当と思われる。また、土層のみで確認されたのが東壁に沿う幅1.2m、高さ5cmの段（ベッド状遺構）である。覆土層は1層である。遺物は須恵器2749・2750が高蔵寺2号窯式とみられる。他に土師器甕（2751）や製塩土器杯部（2752）がある。

99KSB1003・1004　99KSB1002の西6mに位置する。2棟重複の上に中世以降と考えられる円礫が充填された不定形な土坑が重なり様相を複雑にしている。SB1003の平面形は土層観察からの推測になる。そ

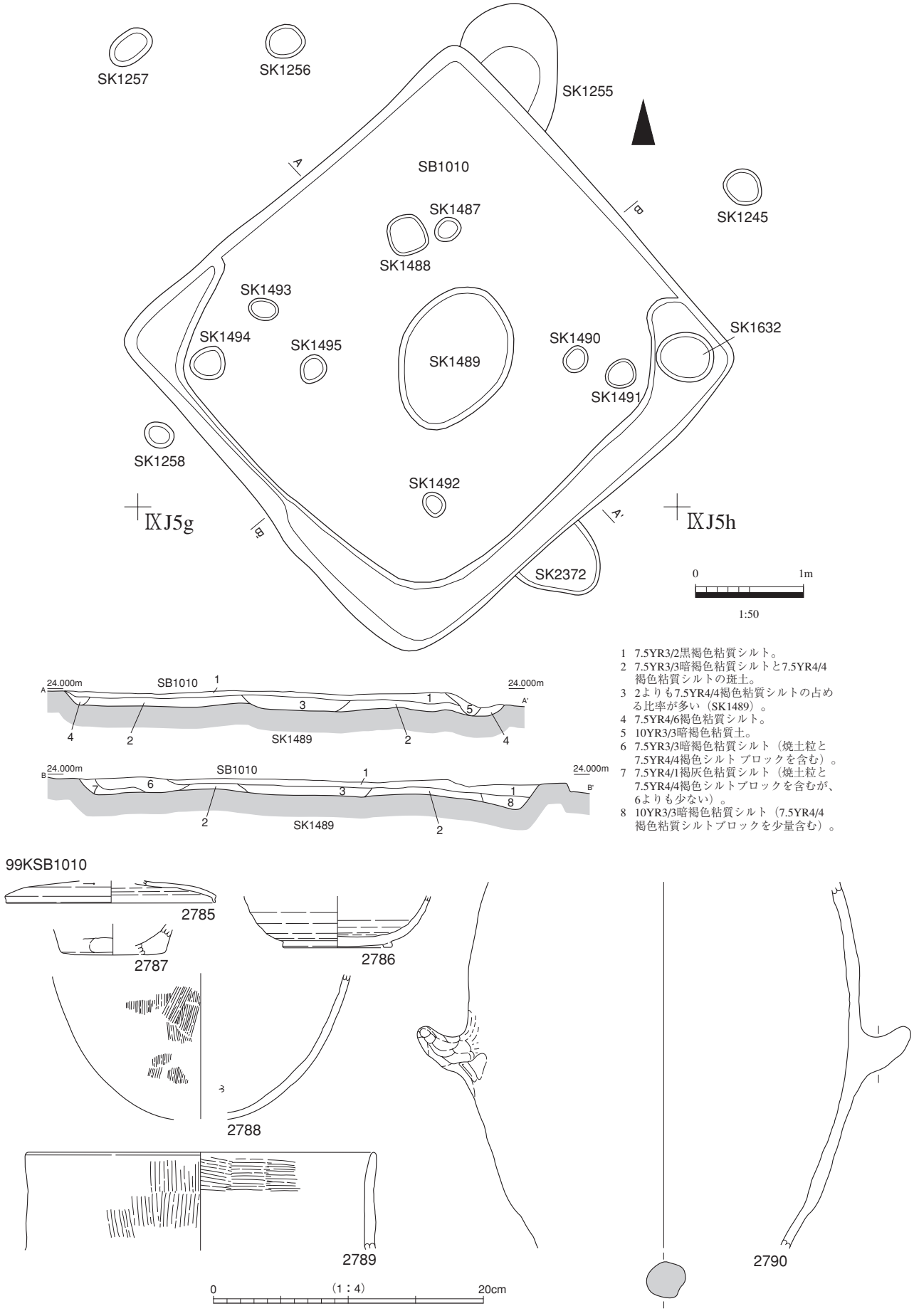


1　10YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を微量含む）。
2　1と7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックと炭化物（微量）。
3　7.5YR4/1褐灰色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘 質シルトブロック（SK1445）。
4　7.5YR4/1褐灰色粘質シルトと炭化物（微量）。
5　7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（SB1007）。
6　7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（SB1007）。
7　7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
8　7.5YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
9　7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと焼土粒（微量）。
10　7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルト。
11　7.5YR5/2灰褐色粘質シルトと焼土粒（少量）と炭化物（微量）。
12　7.5YR4/1褐灰色粘質シルトと焼土粒（少量）と炭化物（微量）。
13　7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/2黒褐色粘質シルト。
14　10YR3/3暗褐色粘質シルト。

1　10YR2/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色シルトブロック含む）。
2　7.5YR4/4褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。

1　7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルト。
2　7.5YR4/3褐色粘質シルト。

第349図　99KSB1007・1008・1016・1017断面図と出土遺物実測図

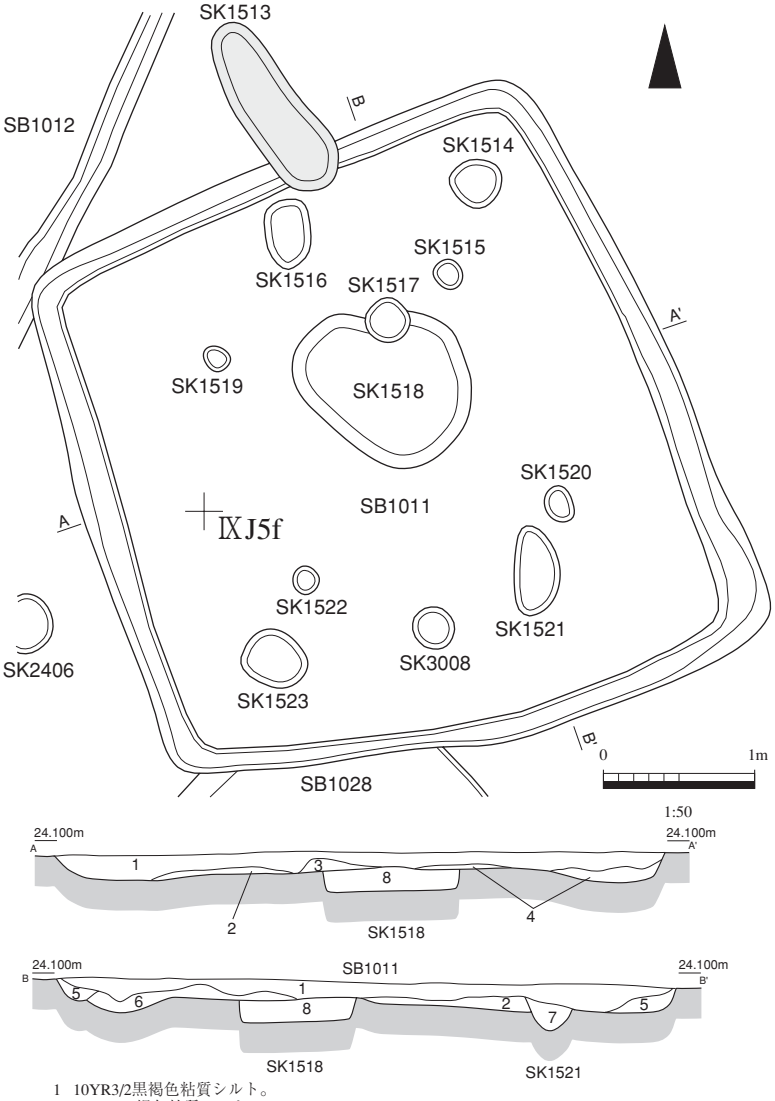


第 350 図　99KSB1010 平面・断面図と出土遺物実測図

れによると西辺長3.6m、北辺長2.7mの南北に長い隅丸長方形で、西辺はグリッド北を指す。深さ24cmである。竈や周溝はない。部分的に貼床がなされる（2層）。SB1004は当初確認された通りで、南西辺長6.19mの隅丸正方形である。北西辺はグリッド北から東へ43°振れる。深さ6cmで周溝はない。柱穴の特定もできていない。出土遺物は当初SB1003の平面形を大きくとっていたのでほとんどがSB1003で採取されている。須恵器蓋（2753）はかえりが付くが末期的な形状である。その他の蓋は岩崎41号窯式～高蔵寺2号窯式である。土師器長胴甕はハケ目調整痕が若干ある口縁は大きく外反する（2763～2765）。また平底底部（2767・2768）は濃尾型であろう。2770は甑である。

99KSB1005　調査区の北部にある。99KSB1006の上に重なる。北西辺はグリッド北から東へ21°振れる。平面形は隅丸正方形で西辺長は4.68m、確認面からの深さ10cmである。北壁ほぼ中央に造り付け竈がある（10・11層）。その竈以外を周溝がほぼ全周する。また床面ほぼ全面に貼床がなされ（2・8・9層）、それによって周溝が作られている。竈の東側には貯蔵穴（99KSK1409、直径55cm）がある。柱穴は4つである。覆土層は1層であるが、地山ブロック・粒のない黒色土で占められており、自然堆積した可能性も考えられる。遺物は須恵器の小片が若干あるが、SB1006出土遺物との先後関係からすると、建物廃絶時期を反映しているとは考えにくい。

99KSB1006　99KSB1005が上に重なり、下に99KSB1090がある。北西辺はグリッド北からわずかに西に1°振れる。平面形は隅丸長方形で西辺長3.66m、北辺長4.5m以上である。確認面からの深さ15cmである。竈・周溝は確認されておらず、柱穴も特定しがたい。床面は部分的に貼床がなされる（14層）。遺物は須恵器蓋（2774）、椀（2775）、土師器甕（2776）がある。椀は鳴海32号窯式であろう。

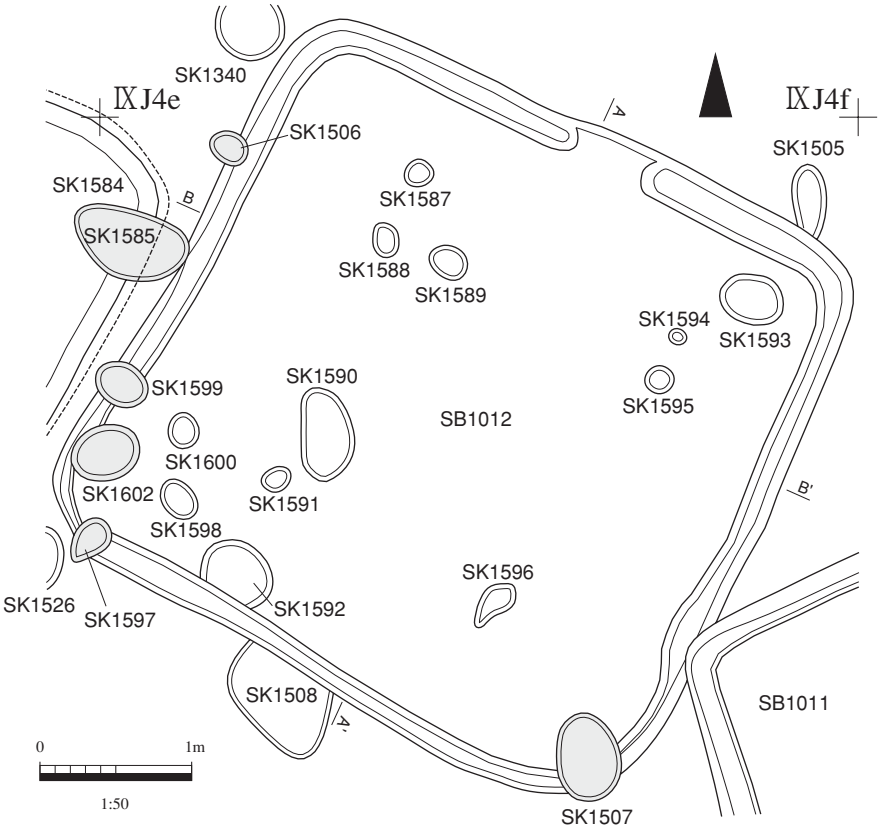


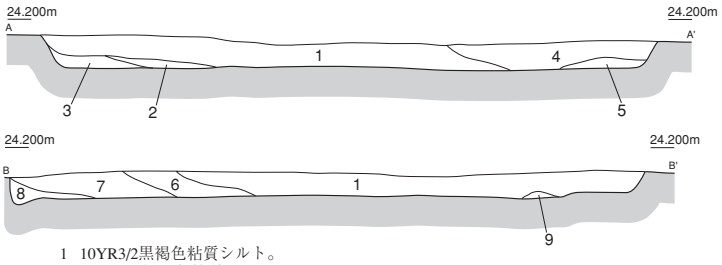
1　10YR3/2黒褐色粘質シルト。
2　7.5YR4/4褐色粘質シルト。
3　10YR3/2黒褐色粘質シルト（10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
4　10YR3/3暗褐色粘質シルト。
5　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト。
6　10YR4/2灰黄褐色粘質シルトと10YR3/3暗褐色粘質シルトの斑土（焼土粒含む）。
7　10YR3/3暗褐色粘質土（SK1521）。
8　7.5YR3/2黒褐色粘質シルトに地山ブロックが混じる。

第351図　99KSB1011平面・断面図

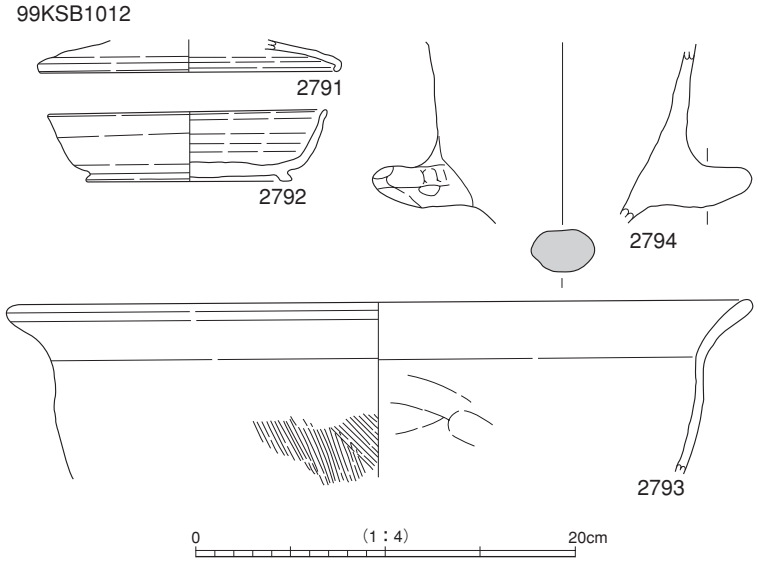
99KSB1007　調査区の北部にある。99KSB1008に南半分が壊されるかたちとなる。北西辺はグリッド北から東へ29°振れる。平面形はやや崩れた隅丸正方形と考えられ、北東辺長3.0m、確認面からの深さ25cmである。竈・周溝はない。柱穴は99KSK1478とSK1431が考えられる。中央部付近に貼床とみられる層（8層）がある。覆土層（6・7層）の上から一度掘り返したような形跡（5層）がある。これらは全て99KSB1008以前の土層である。遺物は須恵器蓋（2777）があり、岩崎41号窯式とみられる。

99KSB1008　北辺にて99KSB1007の上に重なり、南東隅では99KSB1017の上に重なる。北西辺はグリッド北から東へ37°振れる。平面形は隅丸正方形で、北西辺長5.29m、確認面からの深さ17cmである。造り付け竈は西壁にあり（9～11層）、北西辺および北東辺西半分以外で周溝が確認された。貼床（2・3層）はほぼ全面になされる。3層が99KSK1445として範囲が捉えられる。

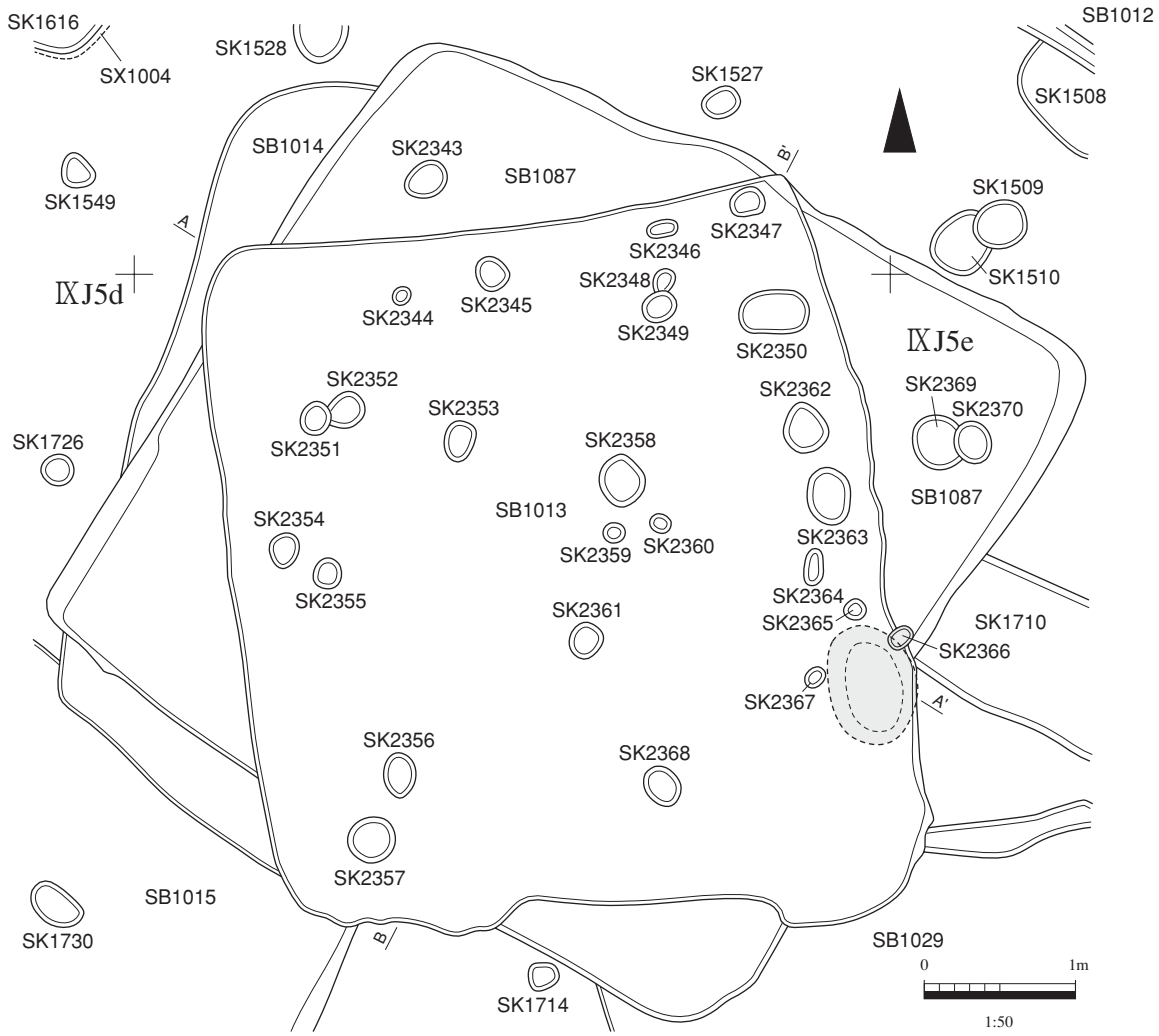


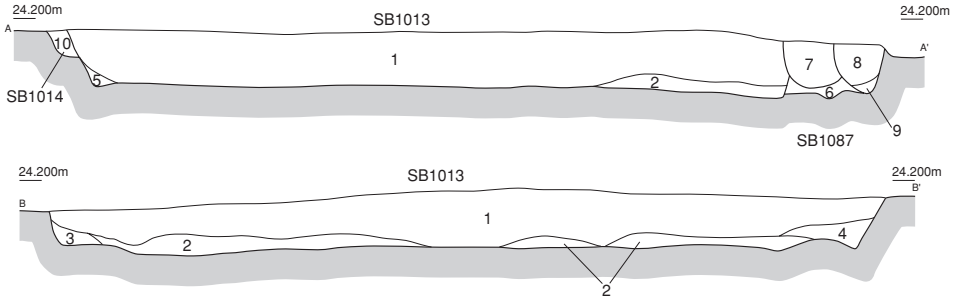


1　10YR3/2黒褐色粘質シルト。
2　7.5YR4/1褐灰色粘質シルト。
3　7.5YR4/6褐色粘質シルト（焼土粒を含む）。
4　10YR4/1褐灰色粘質シルト（7.5YR4/4褐色粘質シルトブロックを少量含む）。
5　7.5YR4/1褐灰色粘質シルト。
6　10YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
7　10YR2/3暗褐色粘質シルト。
8　7.5YR4/6褐色粘質シルト。
9　7.5YR4/6褐色粘質シルトと7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。

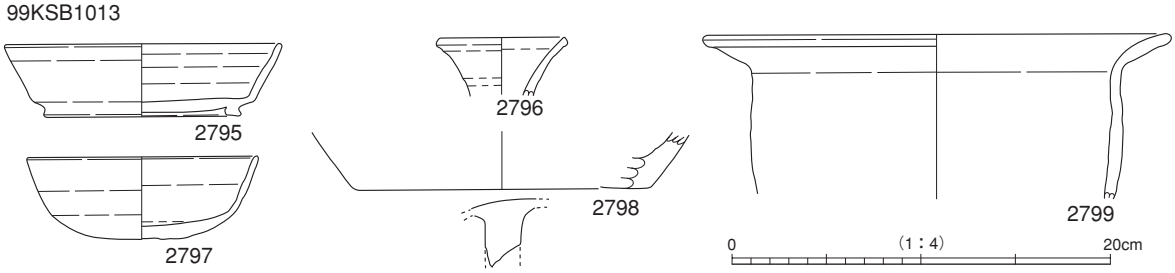


第352図　99KSB1012平面・断面図と出土遺物実測図





1 7.5YR3/2黒褐色粘質シルト（7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックと炭化物を含む）。
2 10YR4/1褐灰色粘質シルト（炭化物と7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
3 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物と7.5YR4/3褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
4 3に2のブロックが混入。
5 1と7.5YR4/3褐色粘質シルト。
6 10YR4/1褐灰色粘質シルト（SB1087）。
7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
8 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
9 7.5YR4/1褐灰色粘質土。
10 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（SB1014）。

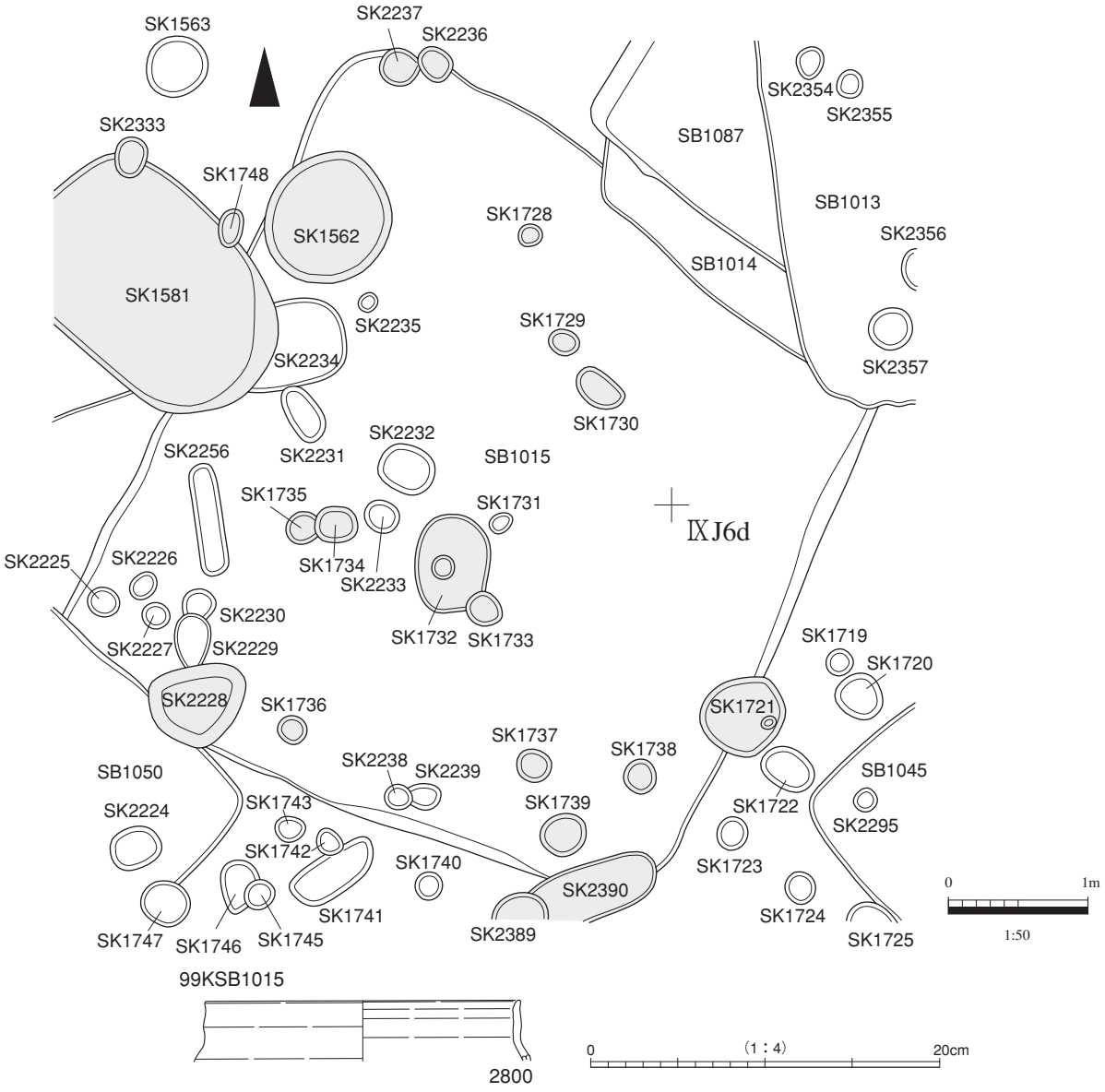


第353図　99KSB1013・1014・1087平面・断面図と出土遺物実測図

貼床工程が中央部→周縁部へと行われたことが判る。床面では多数のピットが確認されており、柱穴を特定するのは少々無理があろう。なお、中央の99KSK1443は貼床で埋められるが、何らかの意図があって周辺より深く掘り下げられたものであろうか。覆土層は単一層である。遺物は層位を特定できないが、須恵器（蓋・杯・平瓶）・土師器甕がある。甕は口縁付近の内外面に刷毛目痕跡が残っており8世紀前葉以前で濃尾型の可能性もある。須恵器は概ね岩崎41号窯式である。

99KSB1009　調査区の東辺で途切れごく一部だけ確認された。北西辺はグリッド北から東へ37°振れる。平面形は隅丸正方形と推定され、北西辺長は4.46m、確認面からの深さ21cmである。施設、土層、遺物に関わる情報は全くない。

99KSB010　調査区中央部に位置する。北西辺はグリッド北から東へ49°振れる。他の竪穴建物との重複はない。平面形は隅丸正方形で、北西辺長4.3m、確認面からの深さ5cmである。北東壁には造り付け



第354図　99KSB1015平面図と出土遺物実測図

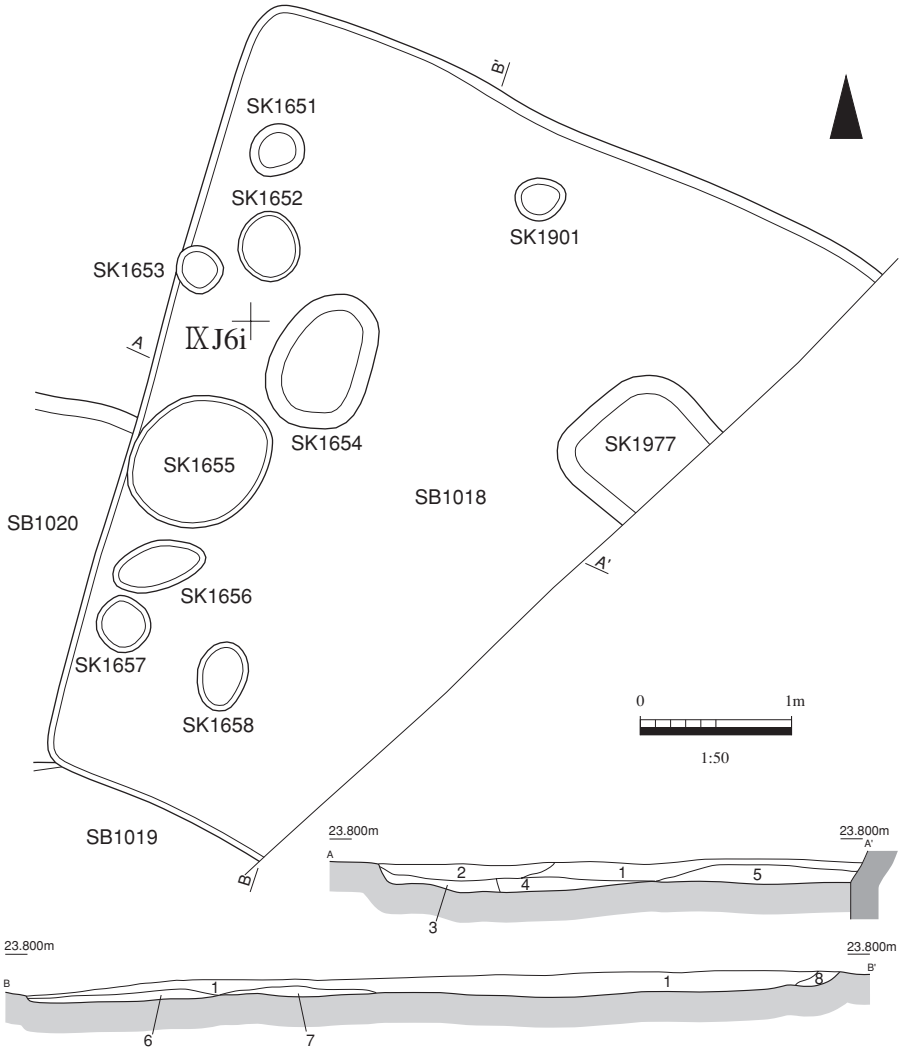
竈（6・7層）がある。周溝（4・8層）はほぼ全周するものと思われる。また中央には長径135cm、短径105cm深さ12cmの皿状土坑がある（SK1489）。炉であったかどうかは判然としない。これら施設を作るに先立って貼床（2層）が施される。竈や周溝はこの貼床を掘り込むかたちで作られる。柱穴は4つである。東隅にある99KSK1632（別名SK2410）は直径52cmの貯蔵穴の可能性がある。覆土層（1層）は単一層である。遺物は層位を特定できないが、岩崎41号窯式の須恵器蓋（2785）や、刷毛目痕のある丸底甕（2788）や甑（2789・2790）がある。竈屋的な使用であったのかもしれない。

99KSB1011　99KSB1010の西2mに位置する。99KSB1012・1028と一部分が重複する。西辺はグリッド北から19°西へ振れる。平面形は隅丸正方形で、西辺長4.16m、確認面からの深さ16cmである。北壁中央に造り付け竈がある。周溝は全周し、それは貼床（2～4・6層）の上から掘り込む。柱穴は4つでこれらと貼床との関係は不明であるが、99KSK1521は貼床上から掘られた床面施設である。99KSK1513は竈煙道に該当する箇所にある。覆土層は単一層で、図化可能な出土遺物はなかった。

99KSB1012

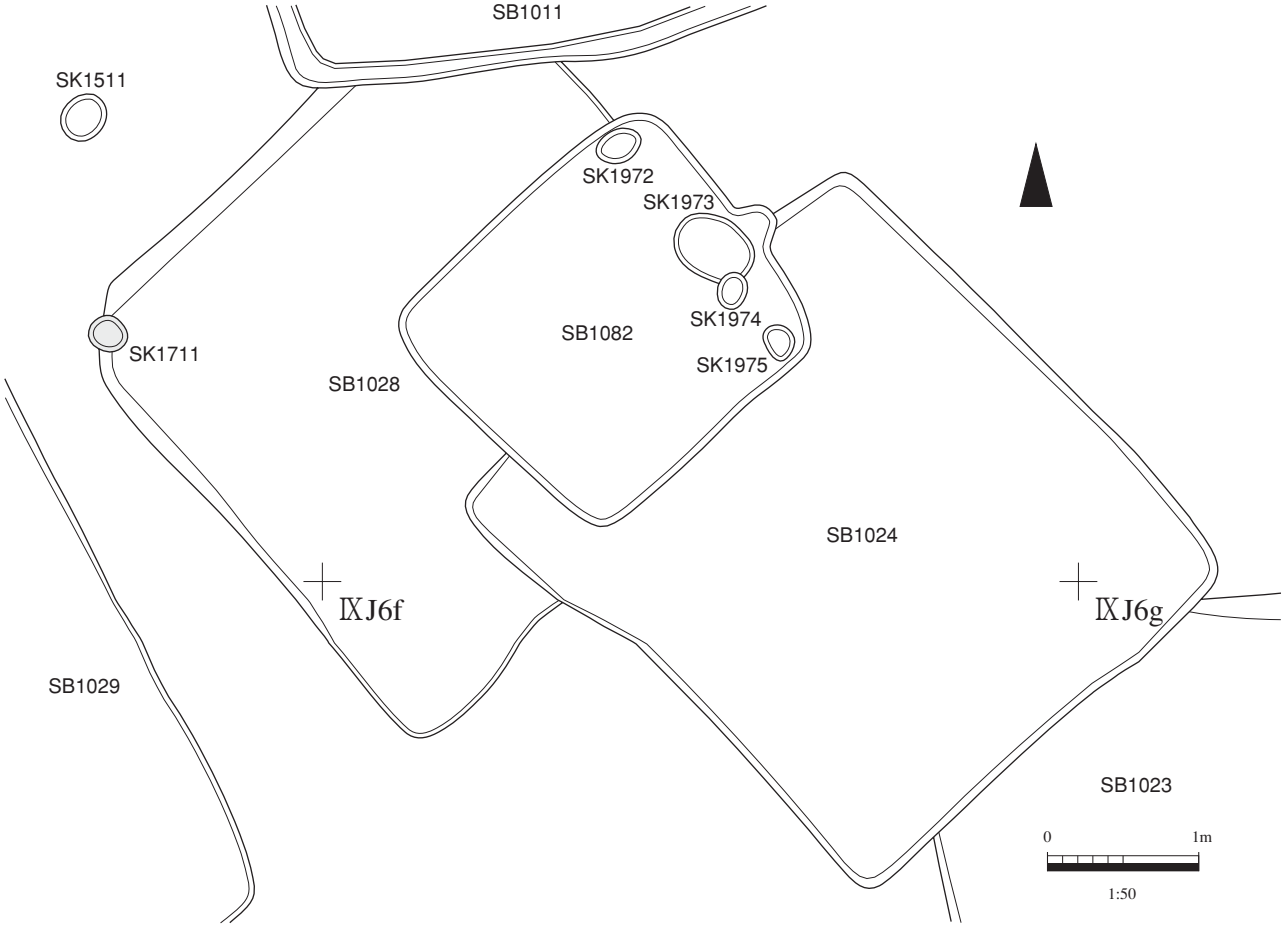
99KSB1011とのわずかな重複によりこちらが先と判断される。北西辺はグリッド北から東へ27°振れる。平面形は隅丸正方形で北西辺長4.23m、確認面からの深さ25cmである。北東壁中央に造り付け竈があり（2・3層）、周溝が全周する。柱穴は4つである。覆土層（1・6～9層）は主に西辺からの土砂の流入もしくは埋め戻しによって堆積したことがうかがえる。遺物は須恵器蓋（2791）高台杯（2792）が岩崎41号窯式で、他に土師器鍋（2793・2794）がある。

99KSB1013・SB1014・SB1087

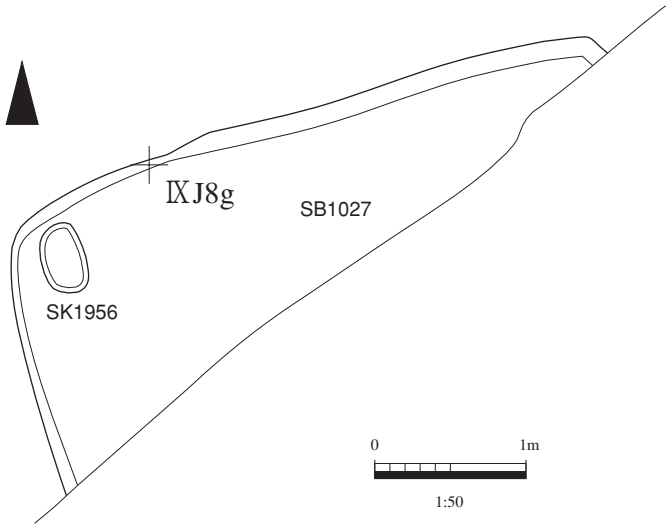


1 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（部分的に10YR3/1黒褐色粘質土ブロックを含む）。
2 7.5YR4/1褐灰色粘質シルト。
3 7.5YR4/1褐灰色粘質シルト（7.5YR3/4暗褐色粘質シルトブロック含む）。
4 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
5 7.5YR4/3褐色粘質シルト（部分的に7.5YR3/4暗褐色に変色）。
6 7と7.5YR4/3褐色粘質シルトブロック。
7 7.5YR4/1褐灰色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
8 7.5YR4/4褐色粘質シルト。

第355図　99KSB1018平面・断面図



第 356 図　99KSB1024・1028・1082 平面図



第 357 図　99KSB1027 平面図

99KSB1011 の西 4m に位置する。遺構が複雑に重複する一帯にあり、その先後関係で一番後になる竪穴建物である。SB1013の北辺はグリッド北から西へ7°振れる。平面形は隅丸長方形で、西辺長4.54m、北辺長4.33mで若干南北に長い。確認面からの深さ 41cm である。竈については不明。周溝は微少な窪みが認められる。貼床（2 ～ 5 層）の上面はやや凹凸があるように思われる。ピットが多数あって、柱穴を特定しにくい。覆土層（1 層）は単一層で、地山ブロックが入ることから一気に埋め戻されたものと考えられる。遺物は須恵器高台杯（2795）、椀（2797）が岩崎 41 号窯式で、瓶類や甑がある他、口縁が大きく開く土師器甕もしくは鍋（2799）がある。

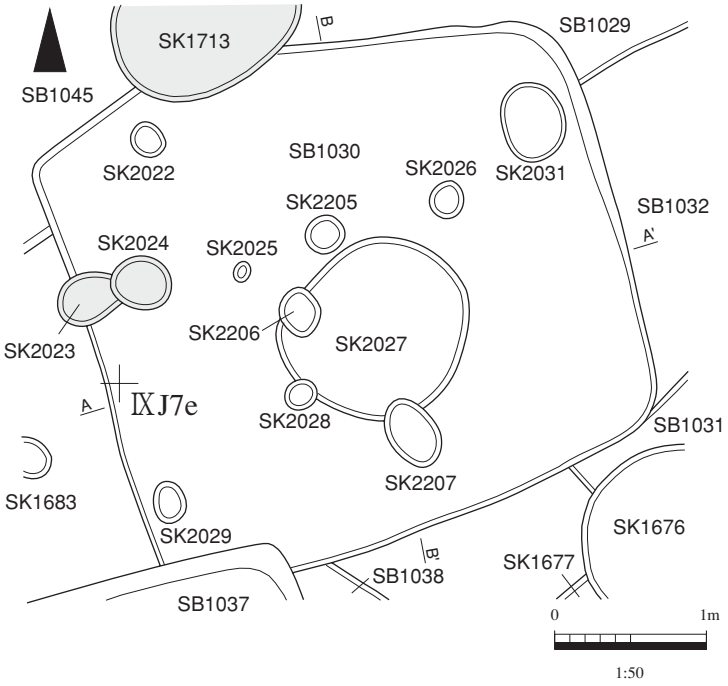
99KSB1087 の北西辺はグリッド北から 31° 東へ振れる。平面形は隅丸正方形で、北西辺長 4.9m、確認

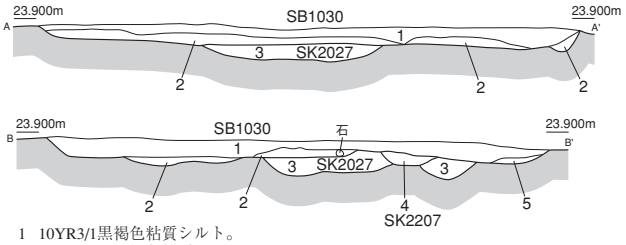
面からの深さ34cmである。竈・周溝については不明。柱穴は4つある。貼床については、床面がほとんどSB1013の再掘削で失われていたため不明である。図化の可能な遺物はなかった。

99KSB1014はそのほとんどがSB1087の下となっている。北西辺はグリッド北から東へ20°振れる。平面形は隅丸正方形と考えられ、北西辺は2.5m以上ある。確認面からの深さは17cmであるが、SB1013がそれよりも深く掘削しているため、平面で確認できる部分以外については全く不明である。

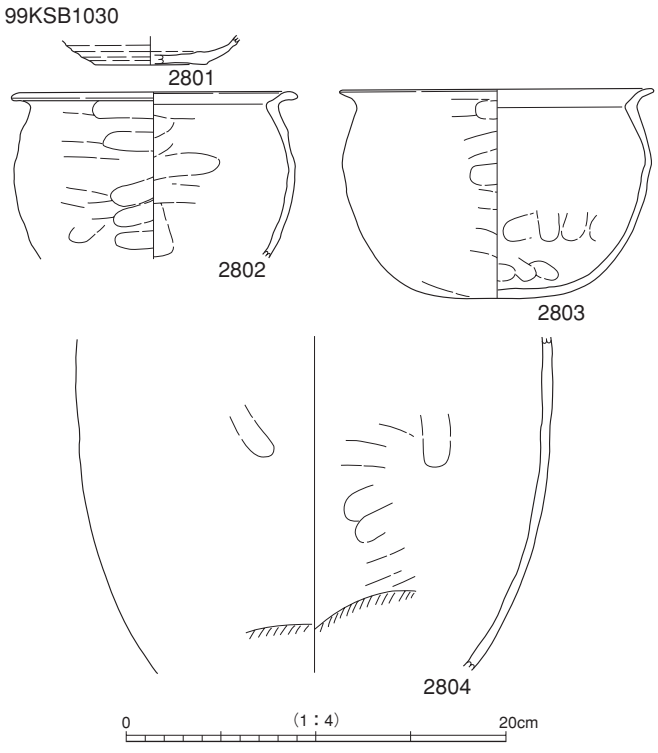
99KSB1015　99KSB1014の南側に位置する。竪穴建物99KSB1014・1050よりも先になる。北西辺はグリッド北から東へ26°振れる。平面形は隅丸正方形で、北西辺長4.87mと推定され、確認面からの深さ24cmである。竈・周溝・貼床は不明である。覆土層に関する情報はなく出土遺物は須恵器広口壺（2800）がある。

99KSB1024・1028・1082　99KSB1011の南側で複数棟が重複する。99KSB1028→1024→1082と判明する。SB1024は北西辺長3.44m、北東辺長3.79mの平面形が隅丸長方形である。深さは13cmである。SB1028は南西辺長3.56mの平面形が隅丸正方形である。深さは13cmである。SB1082北西辺はグリッド北から東へ48°振れる。北西辺長2.26mで平面形は若干歪んだ隅丸正方形で、深さ10cmである。北東壁ほぼ中央に造り付け竈があり、煙道部が壁面より25cm突出する。周溝はなく、貼

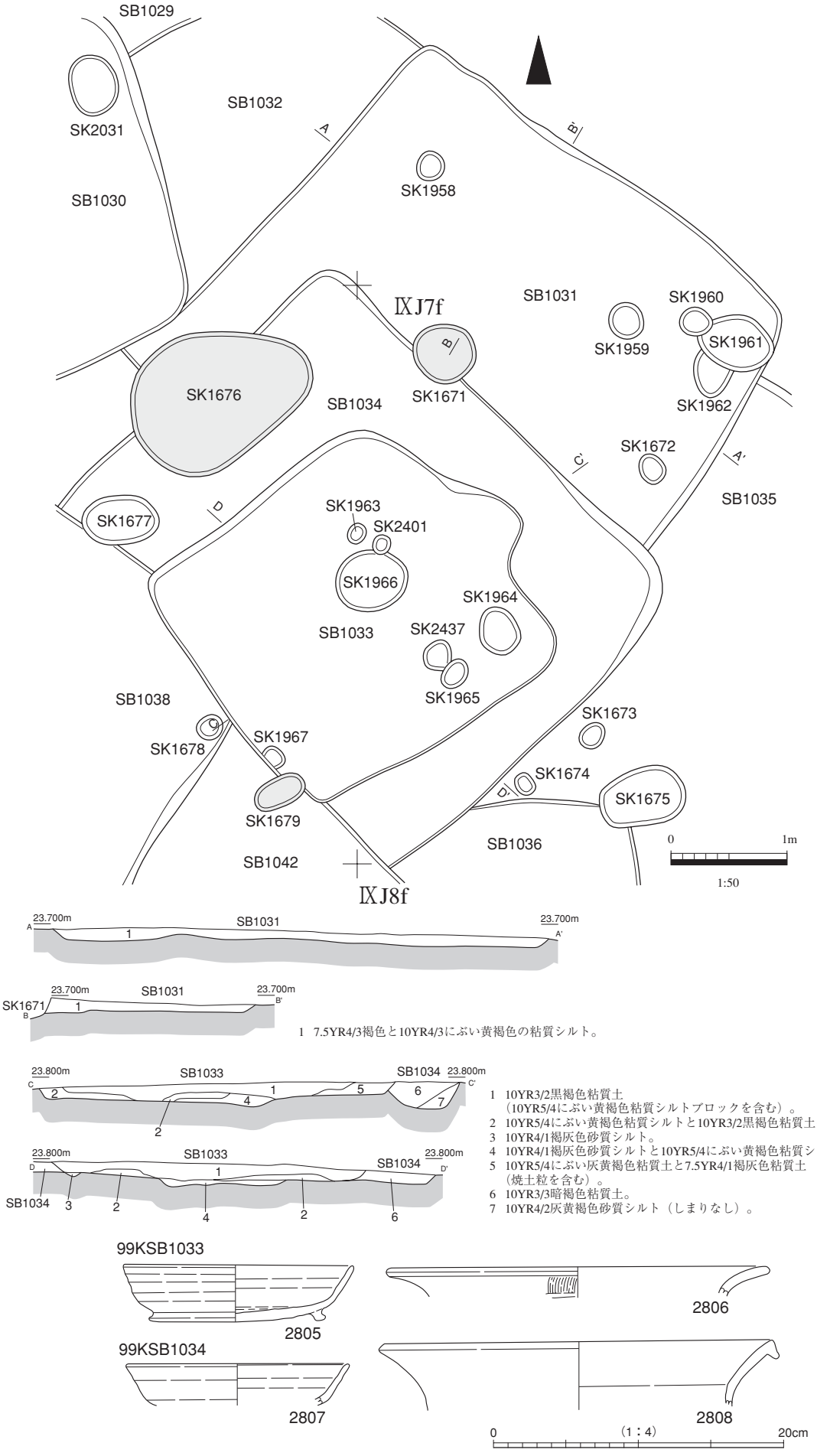




1　10YR3/1黒褐色粘質シルト。
2　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト。
3　10YR3/3暗褐色粘質シルト（砂粒を含み、砂質感有り）。（SK2027）。
4　7.5YR3/3暗褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック（炭化物を含む）。（SK2207）。
5　7.5YR4/3褐色粘質シルトと10YR3/1黒褐色粘質シルトブロック。



第358図　99KSB1030平面・断面図と出土遺物実測図



第 359 図　99KSB1031・1033・1034 平面・断面図と出土遺物実測図

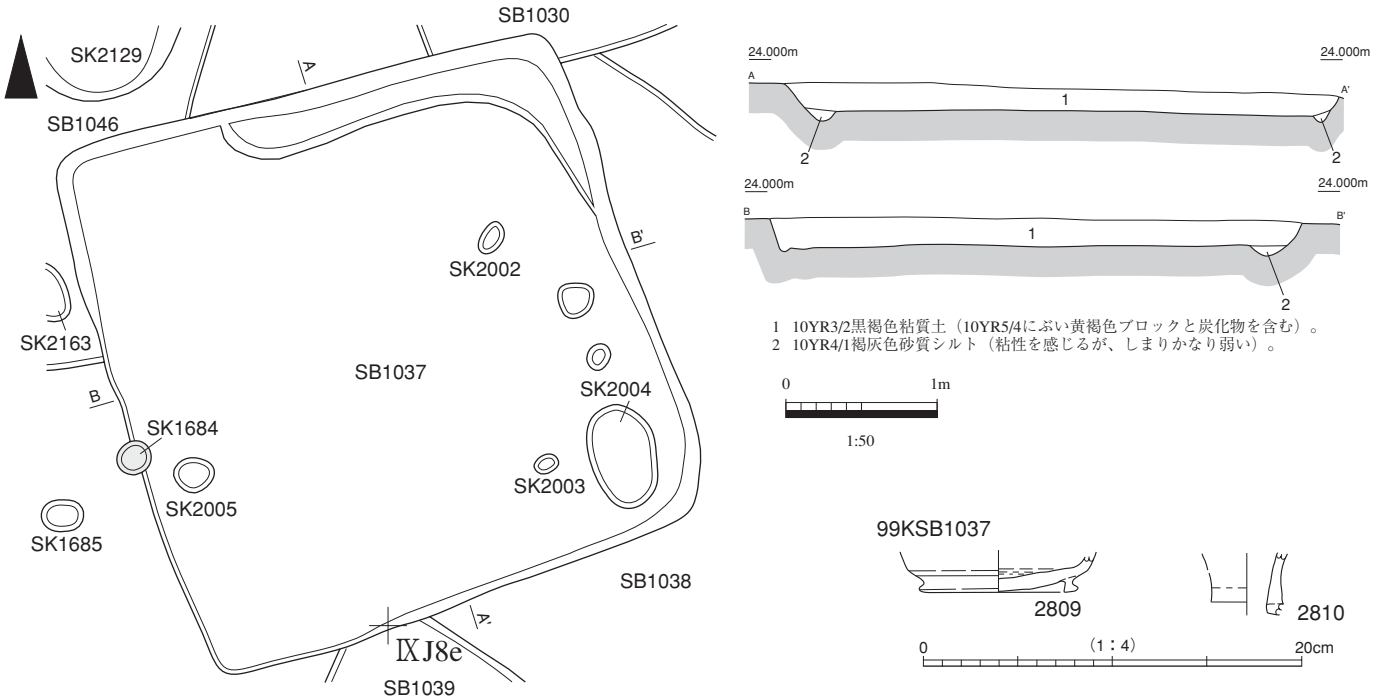
床については不明である。東・北隅に柱穴がある。これらは覆土層についての情報がなく、また図化可能な遺物の出土もなかった。

99KSB1027　調査区東壁に途切れる。西辺はグリッド北から西へ16°振れる。平面形は隅丸正方形を推定され、北辺長4.15m、確認面からの深さ14cmである。竈・周溝・貼床・柱穴・覆土層などの情報がなく、図化可能な遺物の出土もなかった。

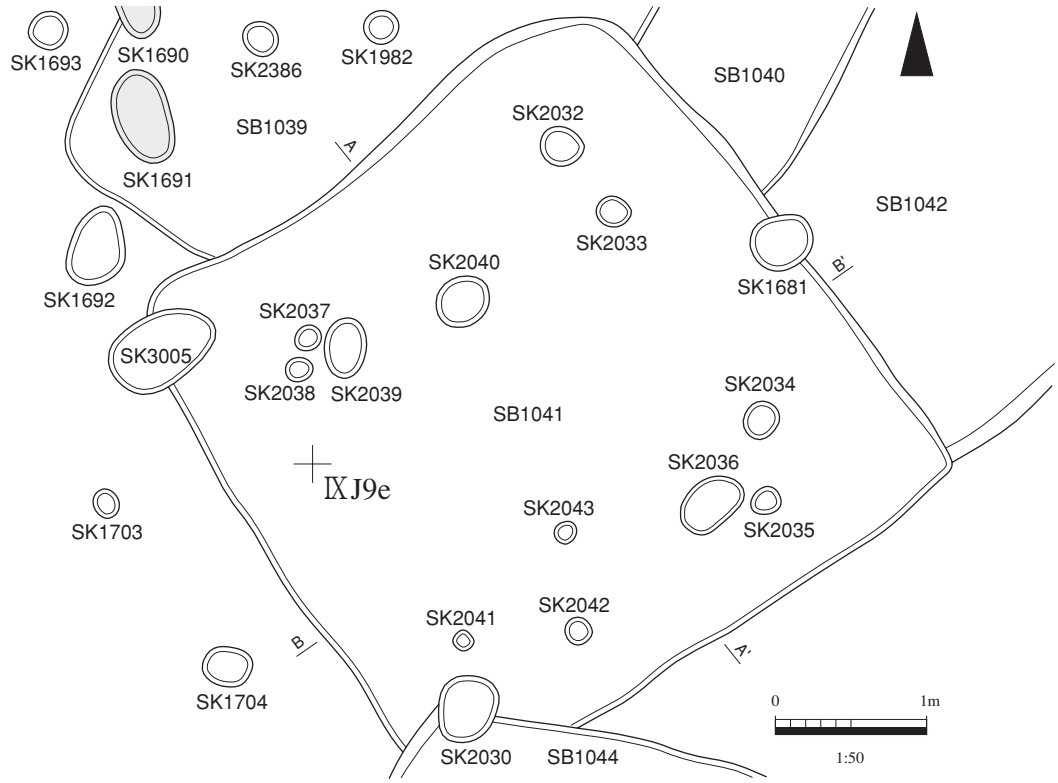
99KSB1030　調査区中央部に位置する。複雑な重複関係にあり、99KSB1029・1032・1031・1038・1045より後で99KSB1037より先になる。西辺はグリッド北から西へ17°振れる。平面形はやや歪んだ隅丸正方形で、北辺長4.2m、深さ14cmである。北壁ほぼ中央に造り付け竈があったと推定されるが、土層からはそれを追認できない。貼床はほぼ全面になされており、その下層になる99KSK2027・2207は当該建物とは関係がない。周溝はなく、柱穴の特定も困難である。覆土層は単一層で一気に埋め戻したと考えられる。出土遺物は鳴海32号窯式の須恵器椀と考えられるもの（2801）と、土師器小型甕（2802・2803）と長胴甕（2804）がある。土師器甕は指ナデ調整仕上げである。

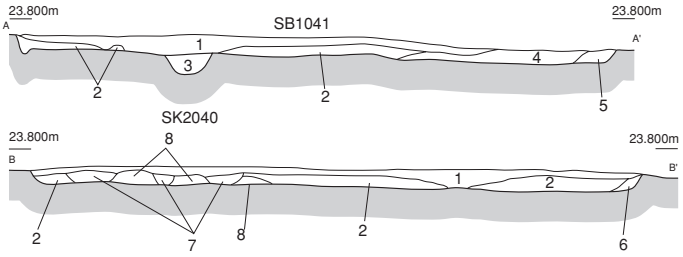
99KSB1033・1034　調査区中央部に位置する。99KSB1033は複雑な重複関係の中で最も後に位置づけられる。北西辺はグリッド北から東へ57°振れる。平面形は隅丸正方形で、北西辺長3.08m確認面からの深さ19cmである。北東壁ほぼ中央に造り付け竈（5層）がある。竈の東側に長径43cm、深さ17cmの貯蔵穴がある（SK1964）。周溝はない。ほぼ全面に貼床がなされる。柱穴を特定しにくいが、99KSK1963・2437が候補として挙げられる。また、中央で確認された99KSK966と当該建物との関連は不明である。覆土層は単一層でいっきに埋め戻されたのであろう。出土遺物は須恵器杯（2805）が高蔵寺2号窯式、土師器甕（2806）もほぼ同じ頃のものと考えられる。

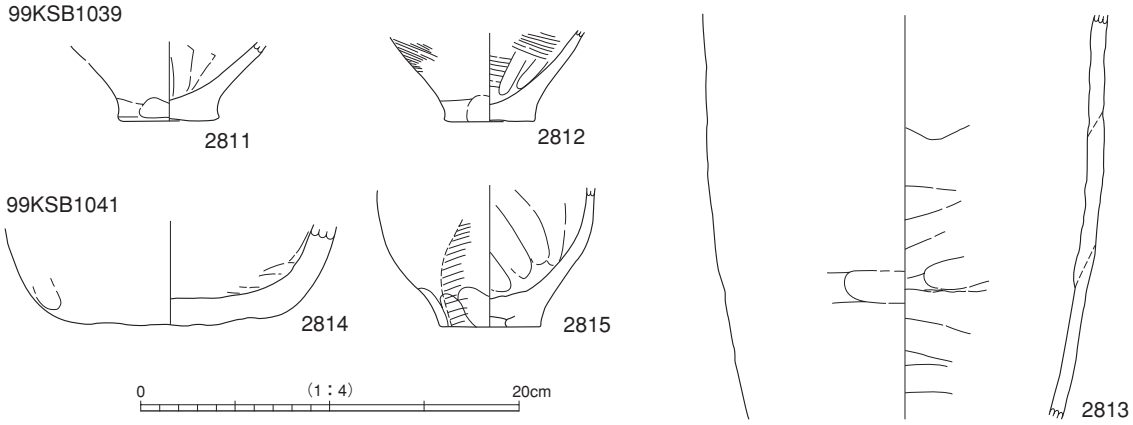
99KSB1034はSB1033より先行し、北西辺はグリッド北から東へ46°振れる。平面形は隅丸正方形で、



第360図　99KSB1037平面・断面図と出土遺物実測図







第 361 図　99KSB1039・1041 平面・断面図と出土遺物実測図

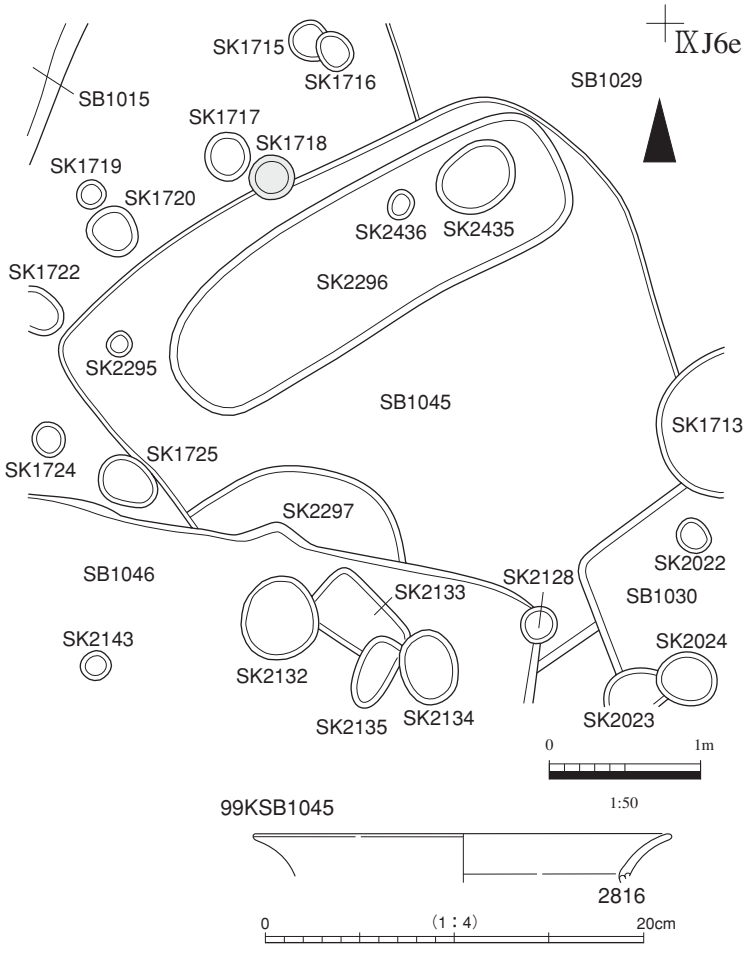
北東辺長4.18m、確認面からの深さ10cmである。竈・周溝・貼床・柱穴については不明である。覆土層（6層）は単一層である。遺物は須恵器杯（2807）が岩崎41号窯式と考えられる。

99KSB1037　調査区中央部に位置する。複雑な重複関係のなかで最も後に位置づけられる。西辺はグリッド北から西へ18°振れる。平面形は隅丸正方形で、西辺長3.68m、確認面からの深さ19cmである。東壁中央に竈があったとみられるが土層による説明はできない。ただその南方に楕円形の貯蔵穴（SK2004長径70cm）がある。周溝はほぼ全周するものと考えられる。貼床は認められなかった。柱穴は確認されていない。覆土層（1層）は単一層で一気に埋め戻されたものと考えられる。遺物は須恵器杯（2809）と瓶類頸部（2810）がある。8世紀前葉と考えられる。

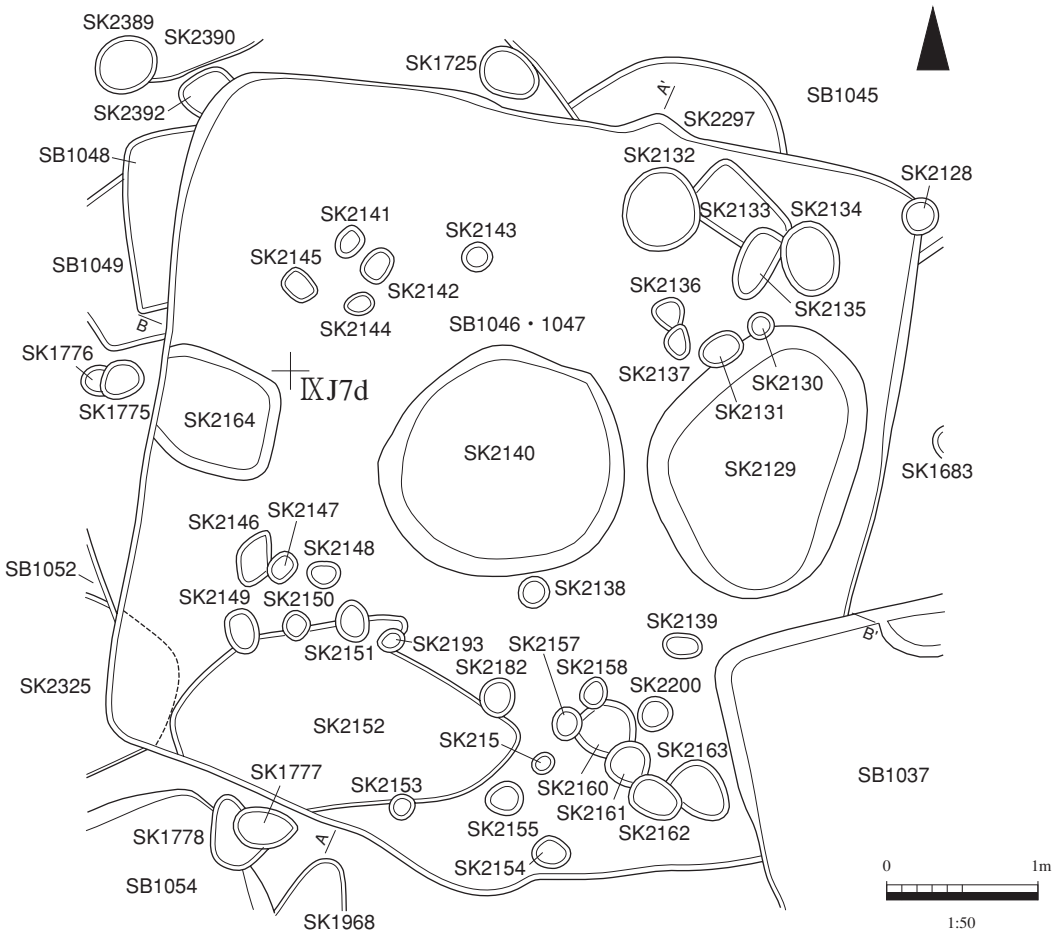
99KSB1041　調査区東壁近くに位置する。重複関係は99KSB1039・1040・1042より後で99KSB1044に先行する。北西辺長3.85mで平面形は隅丸正方形である。北西辺はグリッド北から東へ55°振れる。深さ17cmである。土層観察から2時期の可能性が考えられる。すなわち1層がSB1041b、2層以降がSB1041aと想定できる。その場合SB1041bは土層断面A-A'方向に3.15mの長方形になろう。出土遺物は器壁が厚い土師器長胴甕（2813）がある。内外面ともに指ナデ調整仕上げである。また99KSB1039からは古墳時代前期にかかるとみられる土器（2811・2812）が出土した。

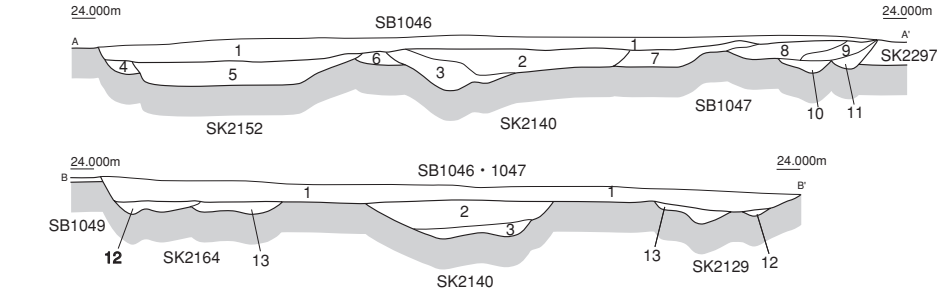
99KSB1046・1047　調査区中央部に位置する。土層観察により2時期と判断され1時期目を99KSB1047、2時期目を99KSB1046とした。西辺はグリッド北から東へ11°振れる。平面形はやや歪んだ隅丸正方形で西辺長4.58mである。99KSB1047は南北セクションで造り付け竈崩落土（8～10層）および覆土層（4・6・7層）が該当する。覆土層には地山土ブロックが含まれ、一気に埋め戻されたと推測される。ただし東西セクションでこれらの土層を見出すことはできない。

99KSB1046は、埋め戻されたSB1047の再掘削によって造られた。壁近くにある99KSK2129・2152・2164はその時の掘形であろう。竈・周溝は認められなかった。ほぼ中央に直径155cm深さ32cmの皿状の断面形を呈する円形土坑がある（SK2140）。覆土層中に焼土・炭化物が認められず炉とするだけの根拠に乏しく、掘形の一部とも考えられる。いずれにせよSB1046床面施設のひとつ

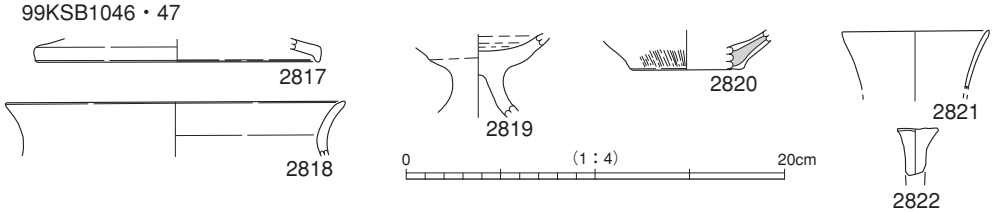


第362図　99KSB1045平面図と出土遺物実測図

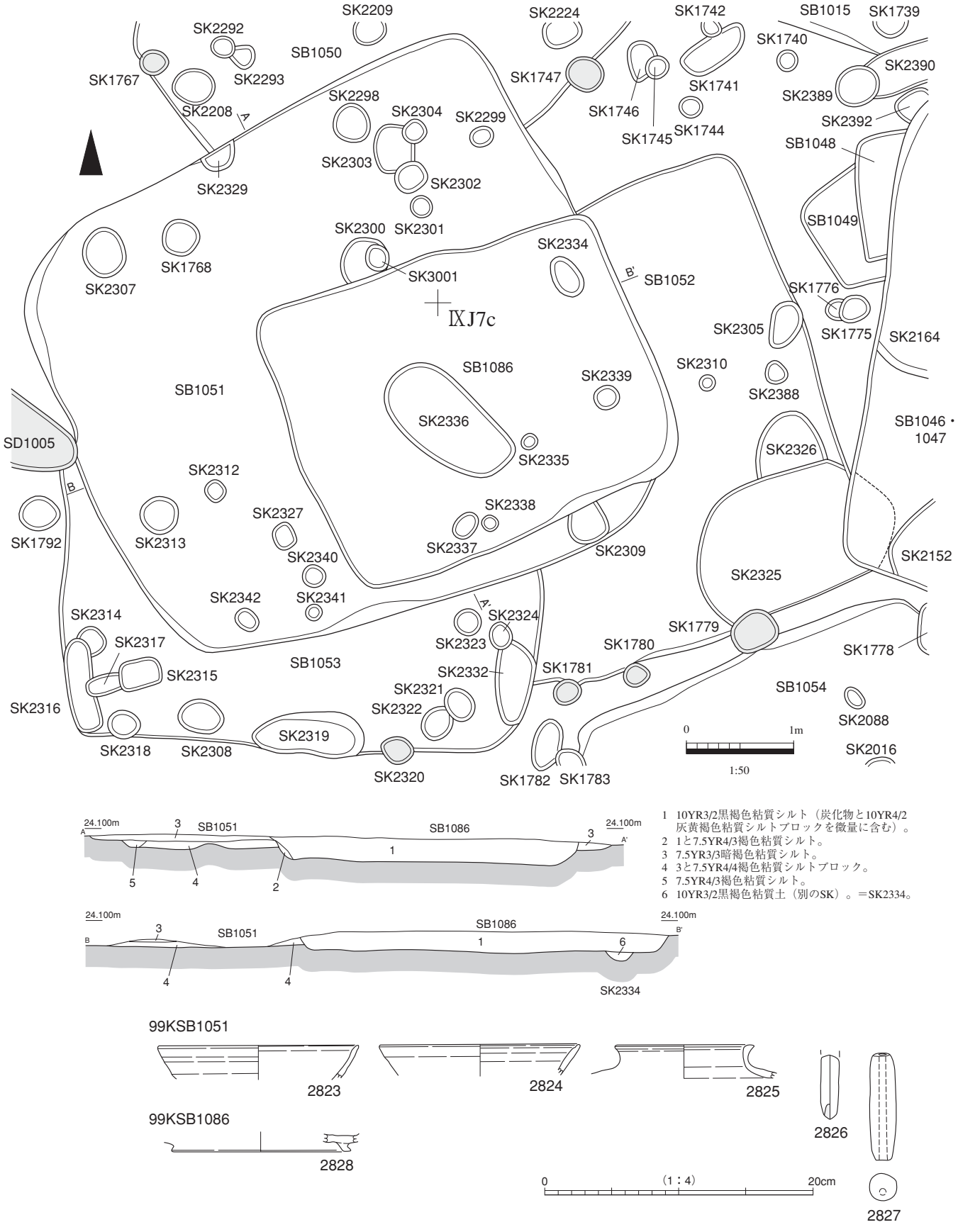




1 10YR3/3暗褐色粘質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロックを微量に含む）。
2 1と10YR4/3にぶい黄褐色シルトの斑土（SK2140）。
3 10YR4/1褐灰色粘質土（SK2140）。
4 10YR4/1褐灰色粘質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロックを微量に含む）。
5 10YR3/2黒褐色粘質土（炭化物と10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロックを微量に含む）。… SK2152。
6 5と10YR4/3にぶい黄褐色シルトの斑土。
7 10YR3/3暗褐色粘質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルトの斑土（焼土を含む）。
8 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（炭化物と焼土粒を微量に含む）。
9 5YR3/4暗赤褐色の焼土層（炭化物を含む）。
10 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロックと焼土を微量に含む）。
11 10YR3/3暗褐色粘質土。
12 13より10YR4/3にぶい黄褐色シルトが少ない（斑土ではない）。（SK2129、SK2164）。
13 10YR3/2黒褐色粘質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトの斑土。（SK2129、SK2164）。
※ 数回（おそらく3回）の建て直しがおこなわれており、プラン、床面がかなり不整形になっている。SK2140も別遺構としたが、同一住居である可能性も考えられる。



第363図　99KSB1046・1047 平面・断面図と出土遺物実測図



1 10YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物と10YR4/2灰黄褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
2 1と7.5YR4/3褐色粘質シルト。
3 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
4 3と7.5YR4/4褐色粘質シルトブロック。
5 7.5YR4/3褐色粘質シルト。
6 10YR3/2黒褐色粘質土（別のSK）。＝SK2334。

第364図　99KSB1051・1052・1086平面・断面図と出土遺物実測図

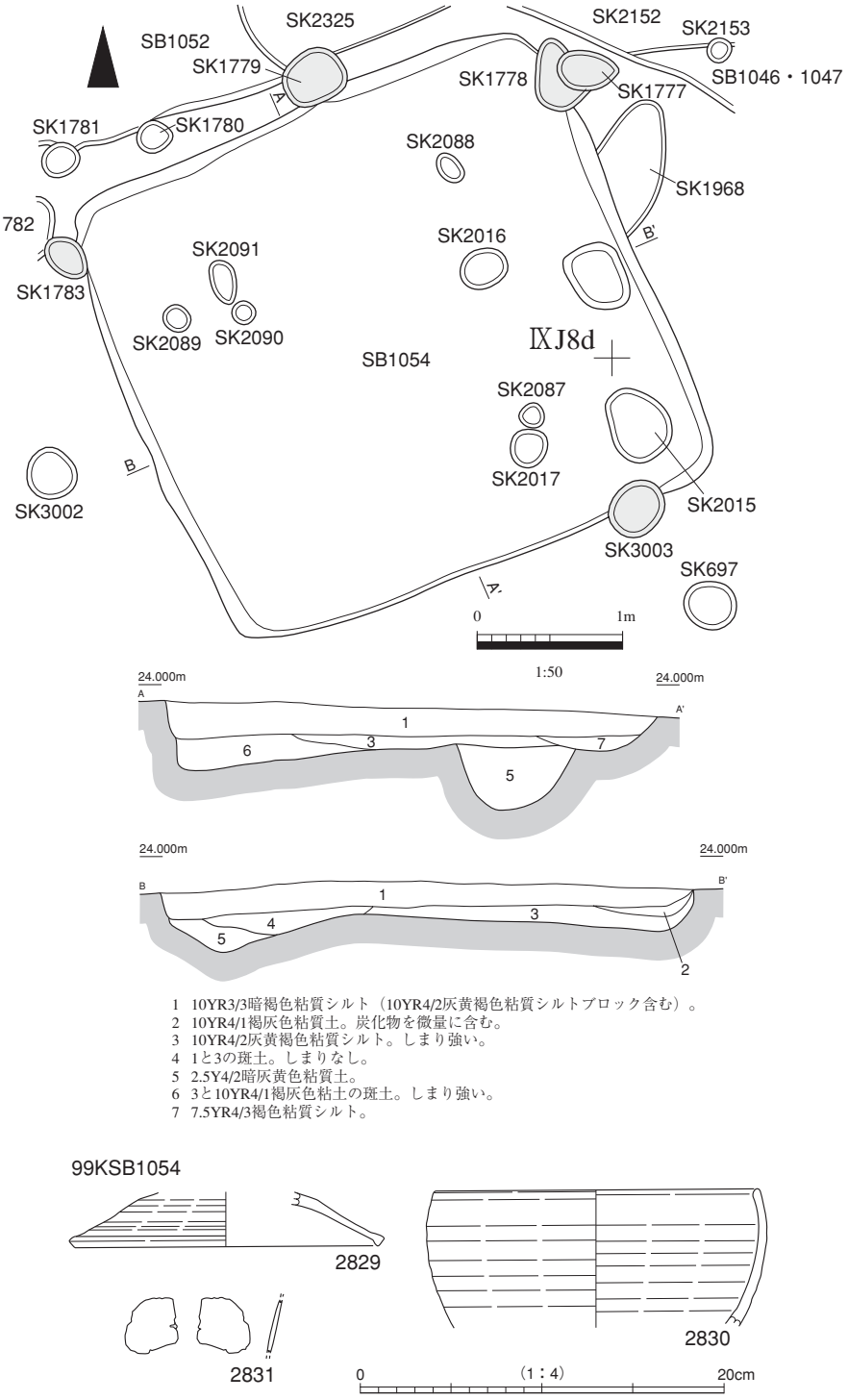
である。覆土層は単一層で一気に埋め戻されたものであろう。遺物はいずれに所属するのか不明であるが、小片が出土している。須恵器高杯（2819）や平底の土師器甕（2820）があり、7世紀代まで遡るものが主体を占める。また製塩土器の杯部（2821）が残存していたことが特記されよう。脚部（2822）とともに知多式分類の4類に相当すると考えられる。

99KSB1050　99KSB1046の西3mに位置する。99KSB1051に先行する。北西辺長3.72mで平面形は隅丸正方形である。北西辺はグリッド北から東へ43°振れる。深さ16cmであるが、遺構は明瞭でない。

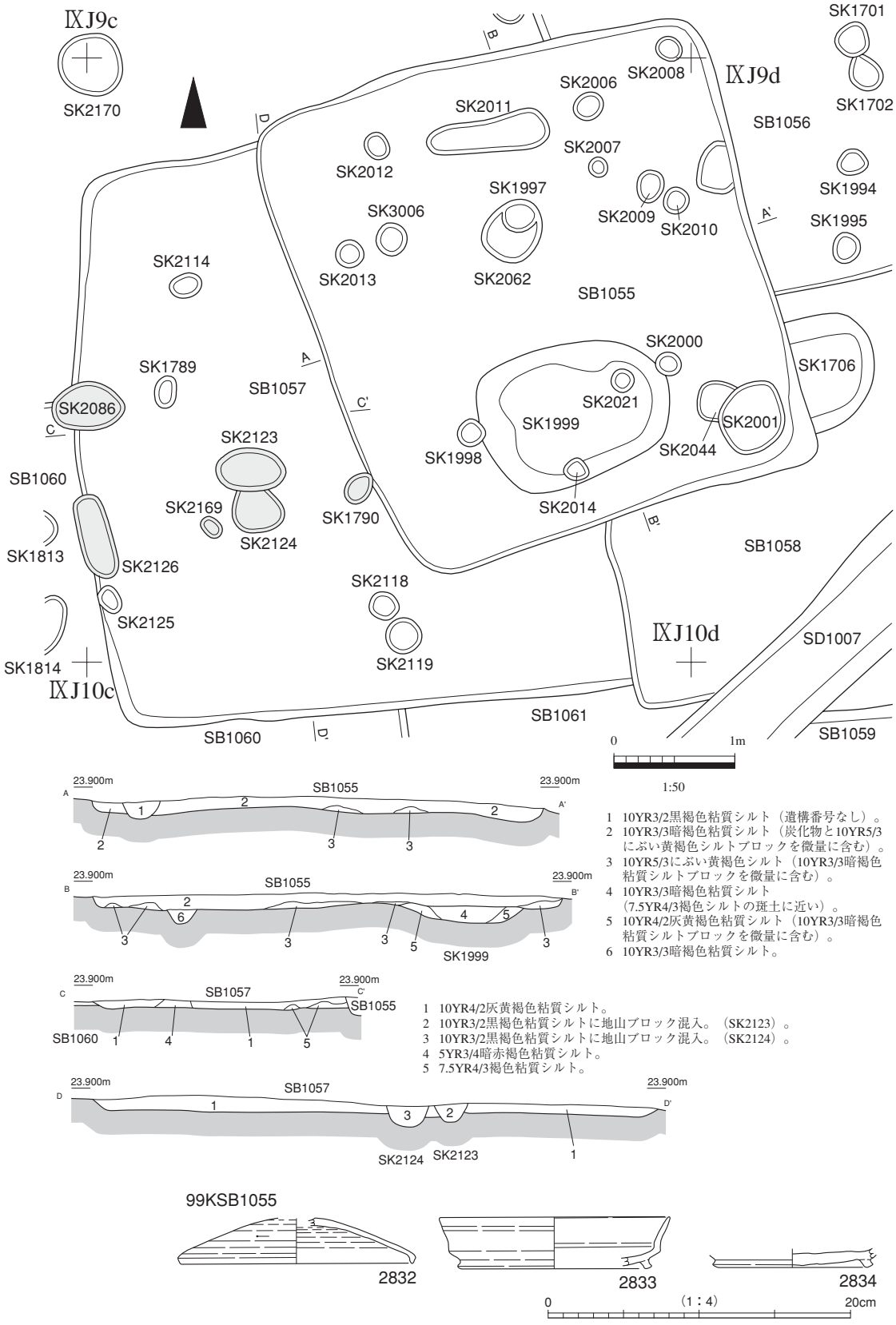
99K1051・1052・1053・1086

99KSB1046の西1mに位置する。複数棟が重複し、SB1052→SB1053→SB1051→SB1086という先後関係となる。

SB1051は北西辺長5.0mで平面形は隅丸正方形と想定される。西辺はグリッド北をさす。深さは15cmで、土層観察によってかなり広範囲に厚さ7cmの貼床（4・5層）が認められた。出土した須恵器（2823～2825）はおよそ8世紀前半とみられる。SB1052は東辺長4.2mで平面形は隅丸正方形と想定される。東辺はグリッド北から西へ18°振れる。深さ11cmである。SB1086は西辺長2.8m、北辺長3.35mで平面形は東西にやや長い隅丸長方形である。深さは23cmあり、SB1051などより深く地山を掘り込む。覆土層は単一層であるが地山ブロックが微量なため自然堆積であろう。



第365図　98DSB1054平面・断面図と出土遺物実測図



第366図　98DSB1055・1057平面・断面図と出土遺物実測図

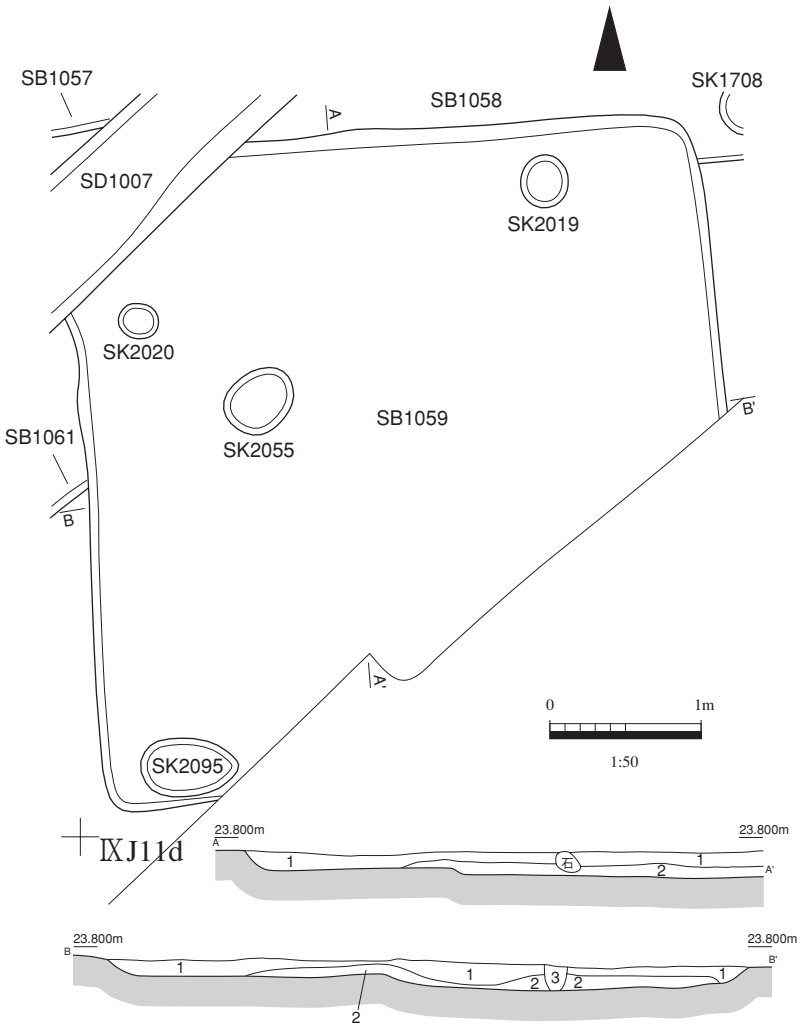
出土遺物は少なく8世紀前半代の須恵器杯小片（2828）ぐらいである。

99KSB1054　調査区中央部に位置するが他の竪穴建物との重複はない。西辺長3.3mで平面形は隅丸正方形である。西辺はグリッド北から西へ22°振れる。深さは20cmで、竈や周溝はない。柱穴は特定できていない。覆土層は上下2層に大別され、下層（3～7層）は貼床である。出土土器は須恵器蓋（2829）が高蔵寺2号窯式である。また製塩土器杯部（2831）がある。

99KSB1055・1057・1058　99KSB1054の南東5mに位置する。複雑な重複関係にあって、SB1057→SB1058→SB1056→SB1055という先後関係になる。SB1055は西辺長4.05mで平面形は隅丸正方形である。西辺はグリッド北から西へ19°振れる。竈や周溝はない。床面で土坑SK1999が確認されたがSB1055との関係は不明である。柱穴の特定はできていない。遺物は高蔵寺2号窯式の須恵器蓋（2832）と杯（2833・2834）である。SB1057は西辺長4.6mで平面形は隅丸正方形と推測される。西辺はグリッド北から西へ7°振れる。深さ13cmで、竈は未確認ながら周溝はなさそうである。柱穴は特定できていない。SB1058は西辺長3.2m以上で隅丸正方形と推測される。西辺はグリッド北から西へ6°振れる。深さは2cmである。

99KSB1059　調査区東壁で途切れる。西辺長4.35mで平面形は隅丸正方形である。西辺はグリッド北をさす。深さ17cmで土層観察によって厚さ8cmの貼床（2層）がなされていることがわかる。特記すべき出土遺物はなかった。

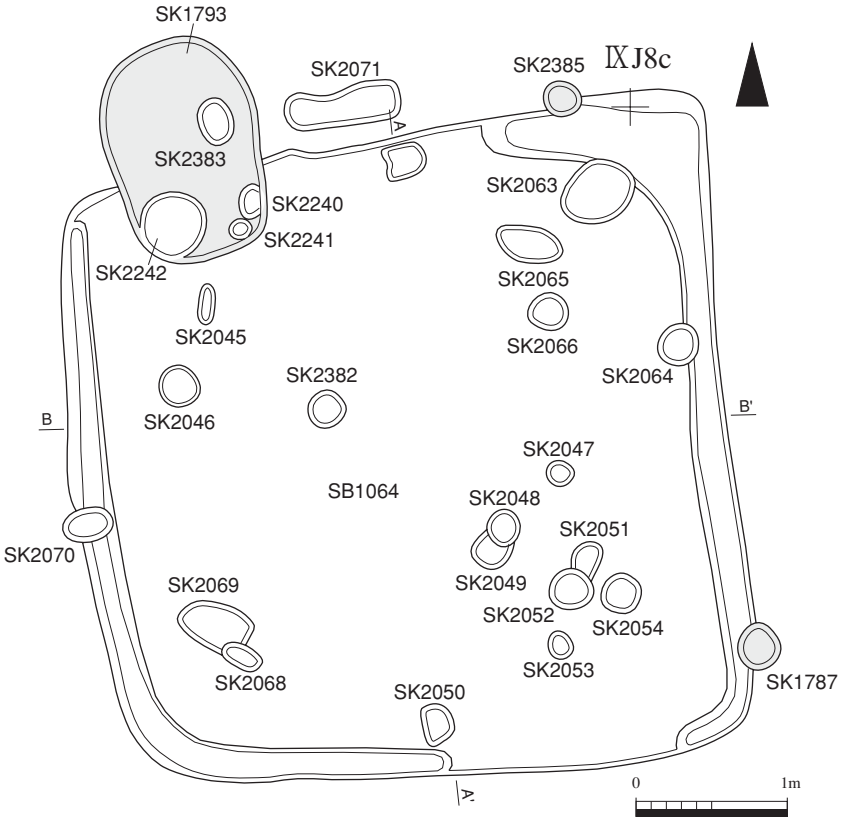
99KSB1064　調査区中央部、99KSB1054の西2mに位置する。東辺長4.4mで平面形は隅丸正方形である。東辺はグリッド北から西へ7°振れる。深さ13cmで、東・西壁を中心に周溝が部分的に確認される。竈は、北壁中央部の地山ブロックの多い土層が問題であるが、ないと思われる。床面にピットが多数あるが柱穴は特定できていない。出土遺物は土師器甕（もしくは鍋）がある。口縁部内面を横ハケ目調整、外面を縦ハケ目調整し、7世紀代的な要素がある。



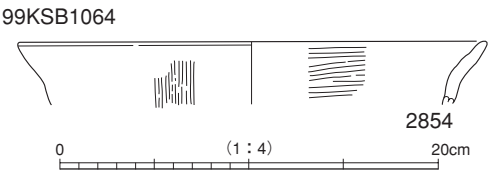
第367図　99KSB1059平面・断面図

99KSB1065・1066・1067・1068・1084　調査区南部で重複する５棟の竪穴建物である。SB1067→SB1068→SB1066・1084→SB1065という先後関係が判明するが、SB1066とSB1084の関係は明瞭でない。SB1065は南西辺長3.5m、北西辺長4.1mの隅丸長方形である。南西辺はグリッド北から西へ37°振れる。深さは10cmである。土層観察で周溝（3・9層）があることがわかる。出土遺物は、須恵器蓋（2835）は鳴海32号窯式、それ以外は折戸10号窯式である。土師器甕は口縁端部が下り傾向のもの（2844）があるのが特記される。2847は甕を竈に据えるための支脚とみられるが顕著な被熱痕はない。

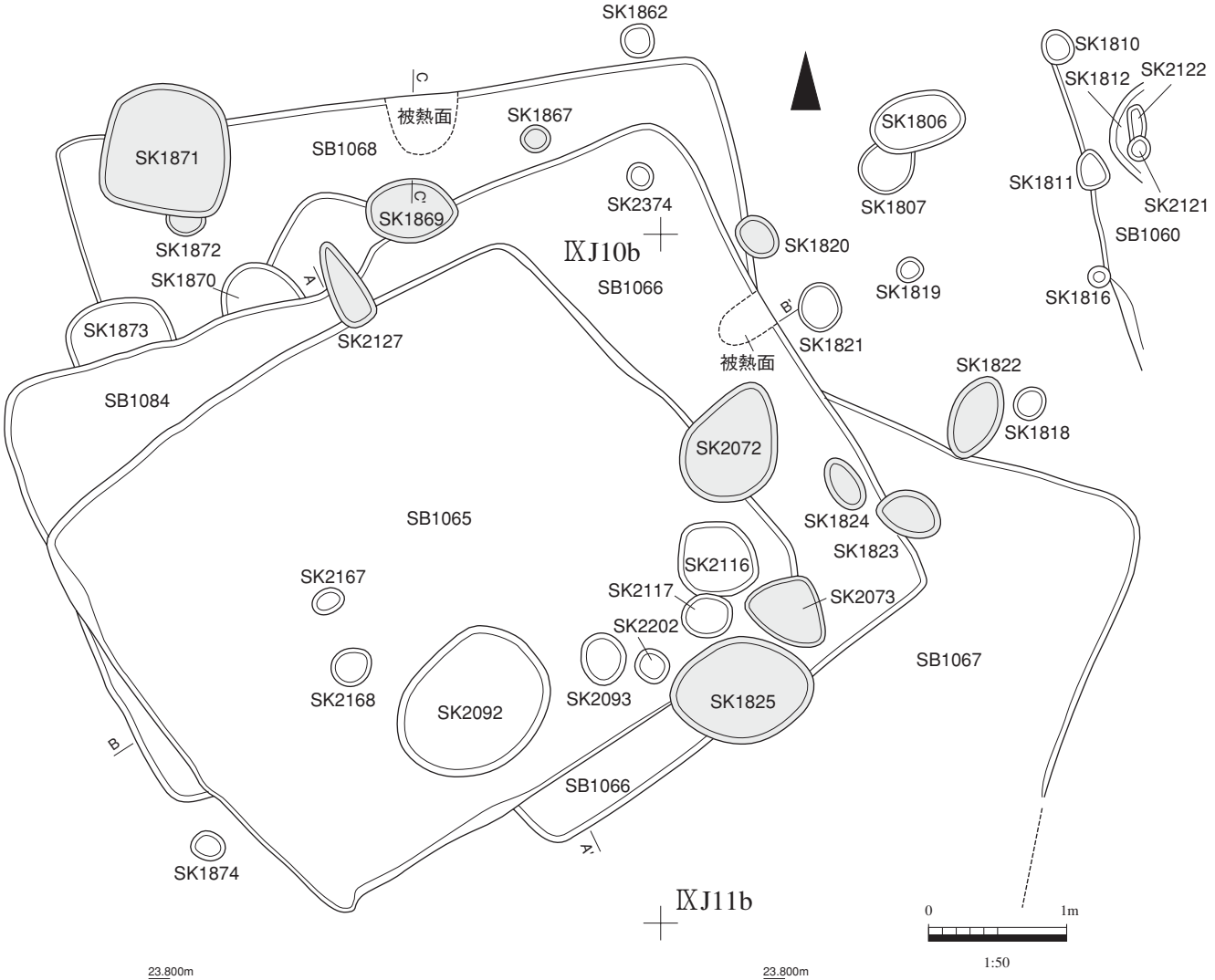
SB1066は南東辺長3.45mで北東辺長4.0mとなり隅丸長方形と推測される。北東辺はグリッド北から西へ29°振れる。深さ8cmで周溝はないようである。北東壁中央部竈があったとみられその床面が径約40cmにわたって被熱して赤変する。柱穴は特定できていない。遺物は小片ばかりであるが須恵器は折戸10号窯式以降とみられる。SB1067は南東辺長2.4m以上あるが平面形を想定するには至らない。深さは5cmである。竈は未確認で周溝・柱穴などは検出できていない。SB1068は北辺長4.8mで平面形は隅丸正方形と推測される。西辺はグリッド北から西へ8°振れる。深さは18cmである。北壁中央部に竈があったとみられSB1066同様に直径約50cmにわたって床面（貼床上面）が被熱して赤変する。SB1084は南西辺長3.3mで平面形は隅丸正方形と推測される。南西辺はグリッド北から西へ24°振れる。

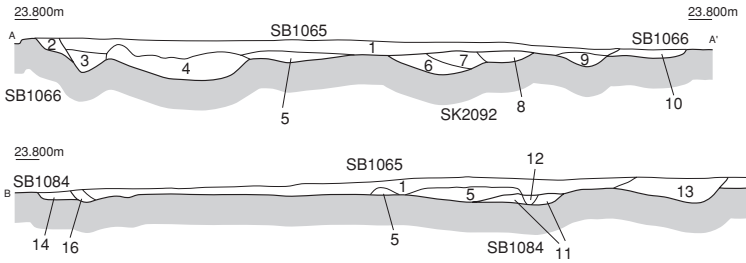


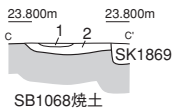
1　10YR3/3暗褐色粘質シルト（10YR5/2灰黄褐色粘質シルトブロックを微量に含む）。
2　10YR3/3暗褐色粘質シルトと10YR5/2灰黄褐色粘質シルトブロック。
3　10YR5/2灰黄褐色粘質シルトと10YR3/3暗褐色粘質シルトブロック。
4　7.5YR4/4褐色粘質シルトと10YR3/3暗褐色粘質シルトブロック。
5　10YR3/4暗褐色粘質土（炭化物を微量に含む）。SK2050。
6　5YR4/3にぶい赤褐色粘質シルト（一部、10YR5/2灰黄褐色粘質シルトが混入する）。
7　10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（炭化物を微量に含む）。
8　10YR4/2灰黄褐色粘質シルトと10YR3/3暗褐色粘質シルトブロック。
9　10YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物と10YR4/2灰黄褐色粘質シルトブロックを含む）。
10　10YR4/1褐灰色粘質土。



第368図　99KSB1064平面・断面図と出土遺物実測図







1 10YR3/3暗褐色粘質シルト。
2 1と7.5YR4/4褐色シルトブロックと5YR4/4にぶい赤褐色の焼土粒。
3 10YR3/2黒褐色粘質シルトと7.5YR4/4褐色シルトブロック（微量）。
4 3とほぼ同じ。
5 10YR4/1褐灰色粘質シルト（炭化物と焼土粒を含む）。
6 10YR3/2黒褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色ブロックを微量に含む）。
7 1と焼土と7.5YR4/4褐色ブロックの斑土（炭化物を含む）。
8 7.5YR4/4褐色粘質シルトと10YR3/3暗褐色粘質シルトブロック。
9 3に焼土を含む。
10 7.5YR4/3褐色粘質シルト。
11 5YR4/4にぶい赤褐色の焼土と10YR4/1褐灰色粘質シルトブロック（炭化物を含む）。
12 10YR4/1褐灰色粘質シルト。
13 10YR3/3暗褐色粘質シルト（7.5YR4/4褐色シルトブロックと焼土粒・炭化物を含む）。
14 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト（部分的に7.5YR5/2灰褐色に変色）。
15 5YR4/4にぶい赤褐色の被熱面。
16 10YR3/3暗褐色粘質シルト（10YR4/2灰黄褐色粘質シルトブロック含む）。

1 5YR4/4にぶい赤褐色の被熱面。
2 7.5YR4/6褐色粘質シルト。

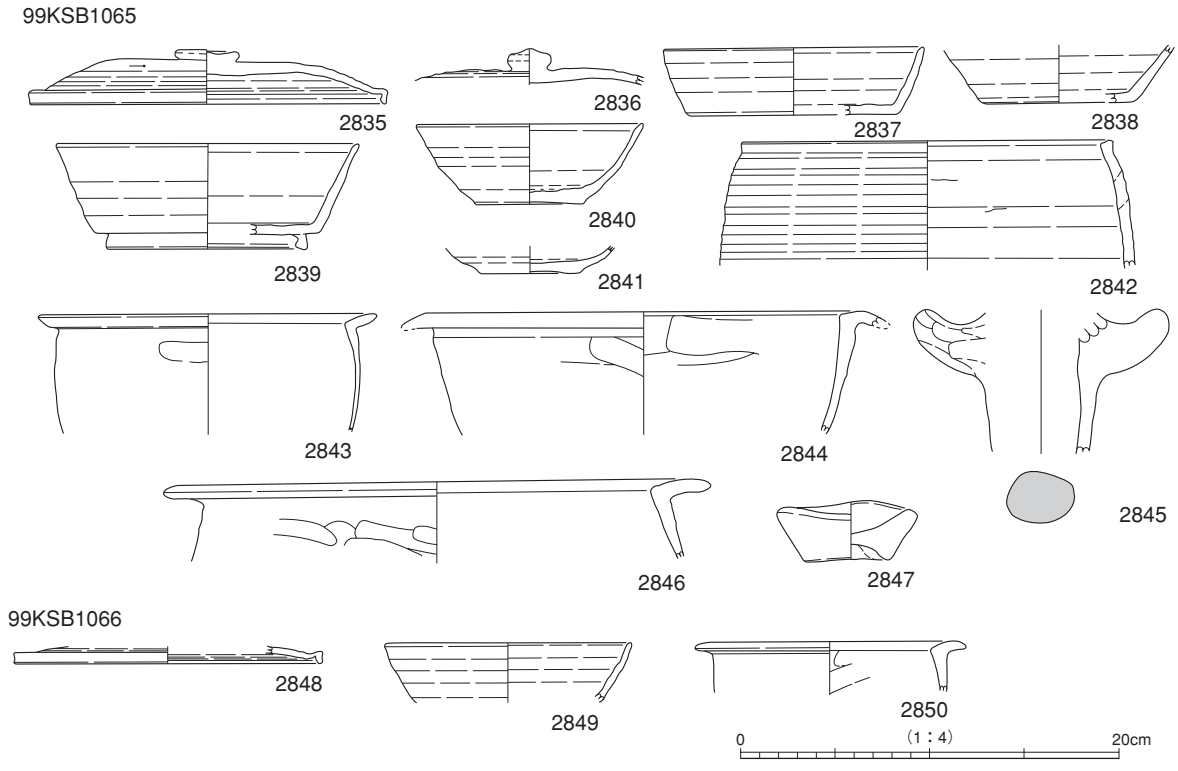
第 369 図　99KSB1064・1065・1066・1067・1068 平面・断面図

深さは5cmである。部分的な検出なので詳細は不明である。

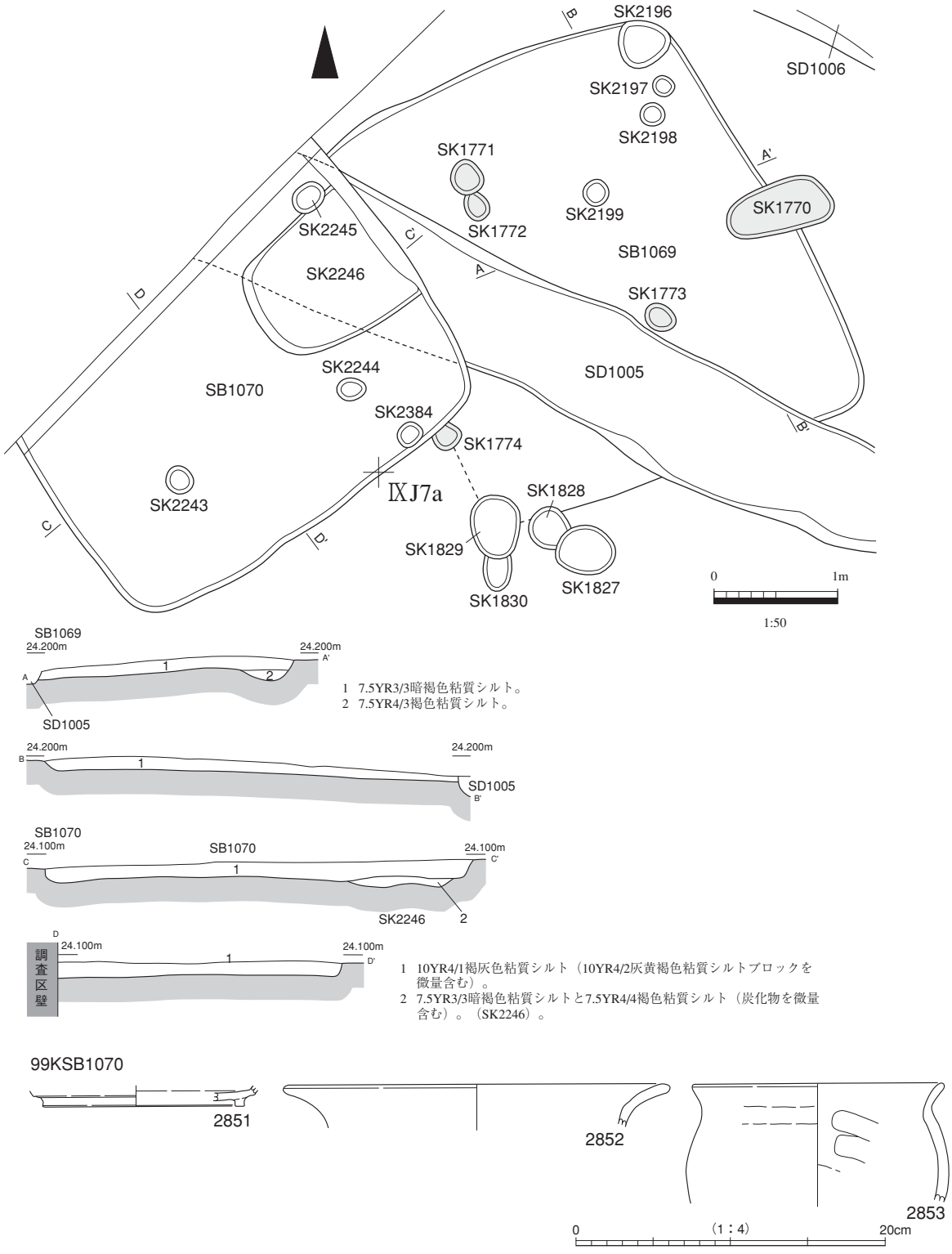
99KSB1069・1070　調査区西壁でSB1070は途切れる。先後関係はSB1069→1070である。SB1069は北東辺長3.6mで平面形は隅丸正方形である。北東辺はグリッド北から西へ23°振れる。深さ8cmで土層断面A-A'では周溝らしき凹み（2層）がみられるが、部分的な貼床であろう。竈はなく、柱穴も特定できない。SB1070は南東辺長3.4mで平面形は隅丸正方形と推測される。北東辺はグリッド北から西へ34°振れる。周溝はなく竈は未確認である。柱穴はSK2243・2244が程よい位置にあり該当するかもしれない。出土遺物は須恵器杯（2851）と土師器甕（2852）は7世紀末～8世紀前葉で、土師器甕（2853）はやや遡って7世紀後半とみられる。

99KSB1072　99KSB1070の南東5mの位置にあり、古墳時代中期の竪穴建物99KSB1071と一部重複する。北東辺長3.0mで平面形は隅丸正方形である。南西辺はグリッド北から西へ36°振れる。深さは13cmである。北西壁中央に造り付け竈があるが、焚口相当位置にある土坑（土層5・6層）は関係ないようである。また床面で確認した土坑99SK2250との関係も不明である。周溝は北西壁にそってみられる。土坑SK2247は貯蔵穴の可能性もあろう。柱穴は特定しにくいがSK2251・2255・2249・2260が該当すると推測される。覆土層は単一層で、竈を壊したのち（3・4層）は自然堆積（1層）であったと考えられる。出土遺物は概ね鳴海32号窯式の須恵器（2855～2857）と時期不詳の土師器鍋（2858）がある。

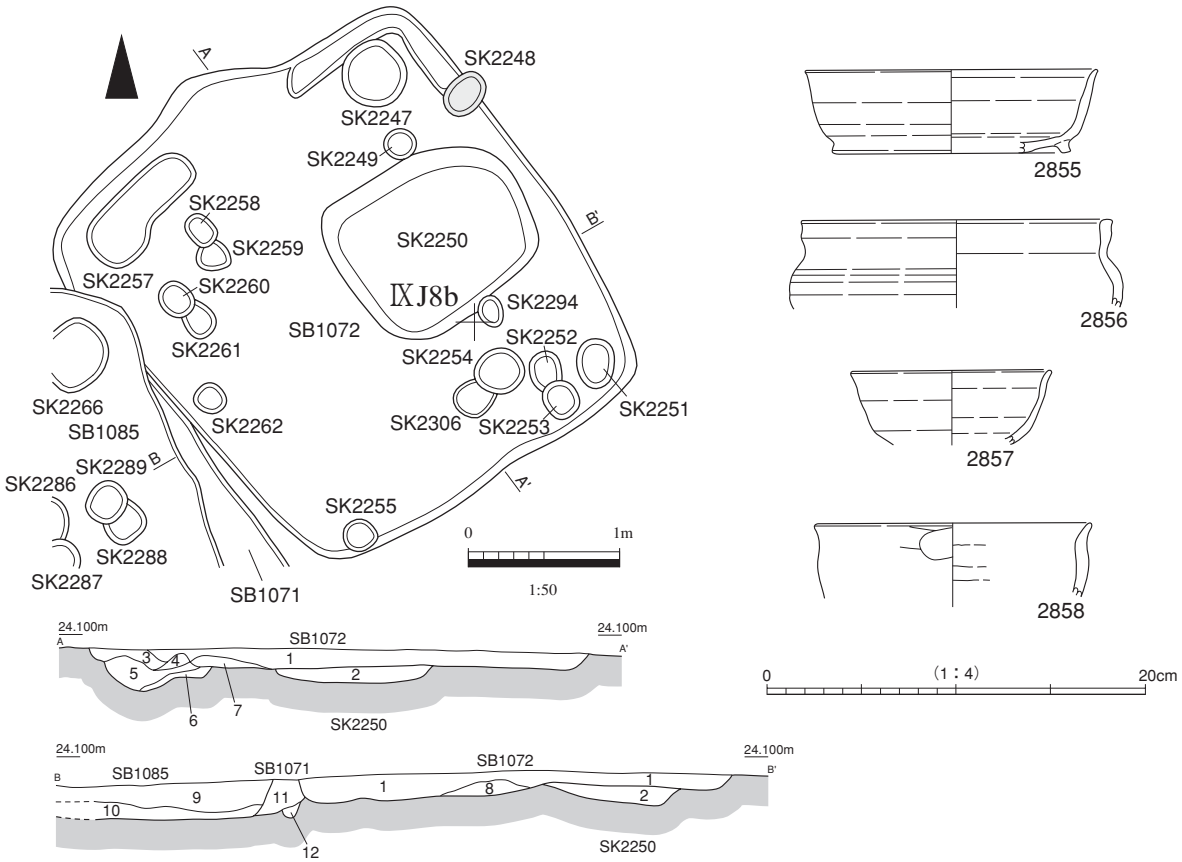
99KSB1073　調査区西隅に位置する。北西辺長2.95mで平面形はくずれた隅丸正方形である。北東辺はグリッド北から西へ46°振れる。竈や周溝はなく、南東壁面が42°という緩傾斜になっている点が特徴である。床面でピットがわずかしか検出されなかった。出土遺物は8世紀中葉以降の須恵器（2859）が



第370図　99KSB1065・1066出土遺物実測図

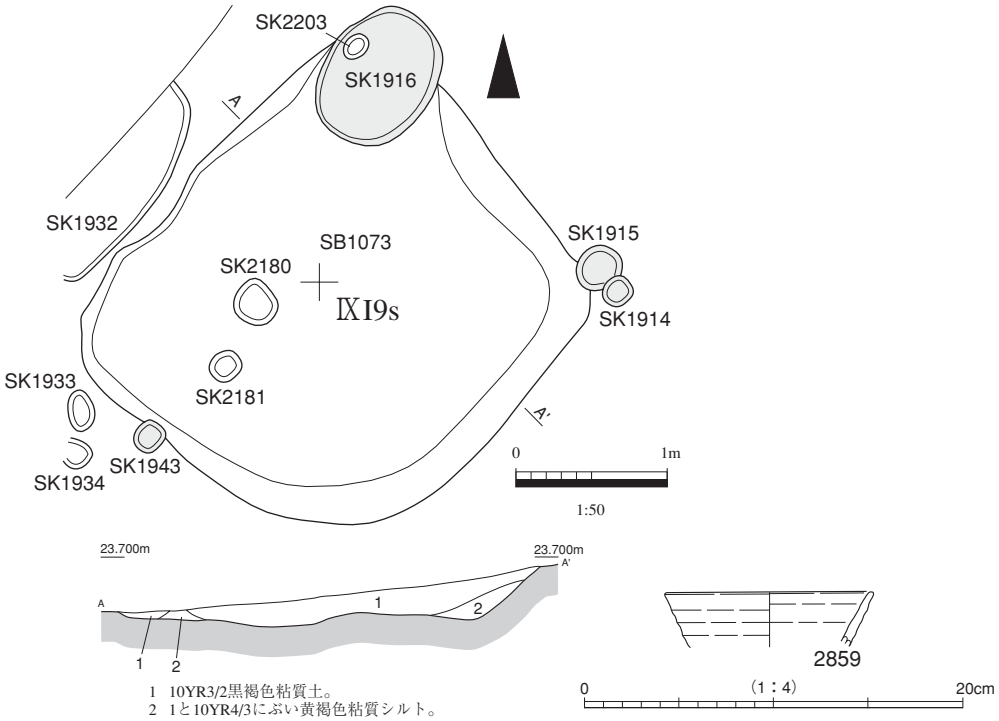


第 371 図　99KSB1069・1070 平面・断面図と出土遺物実測図



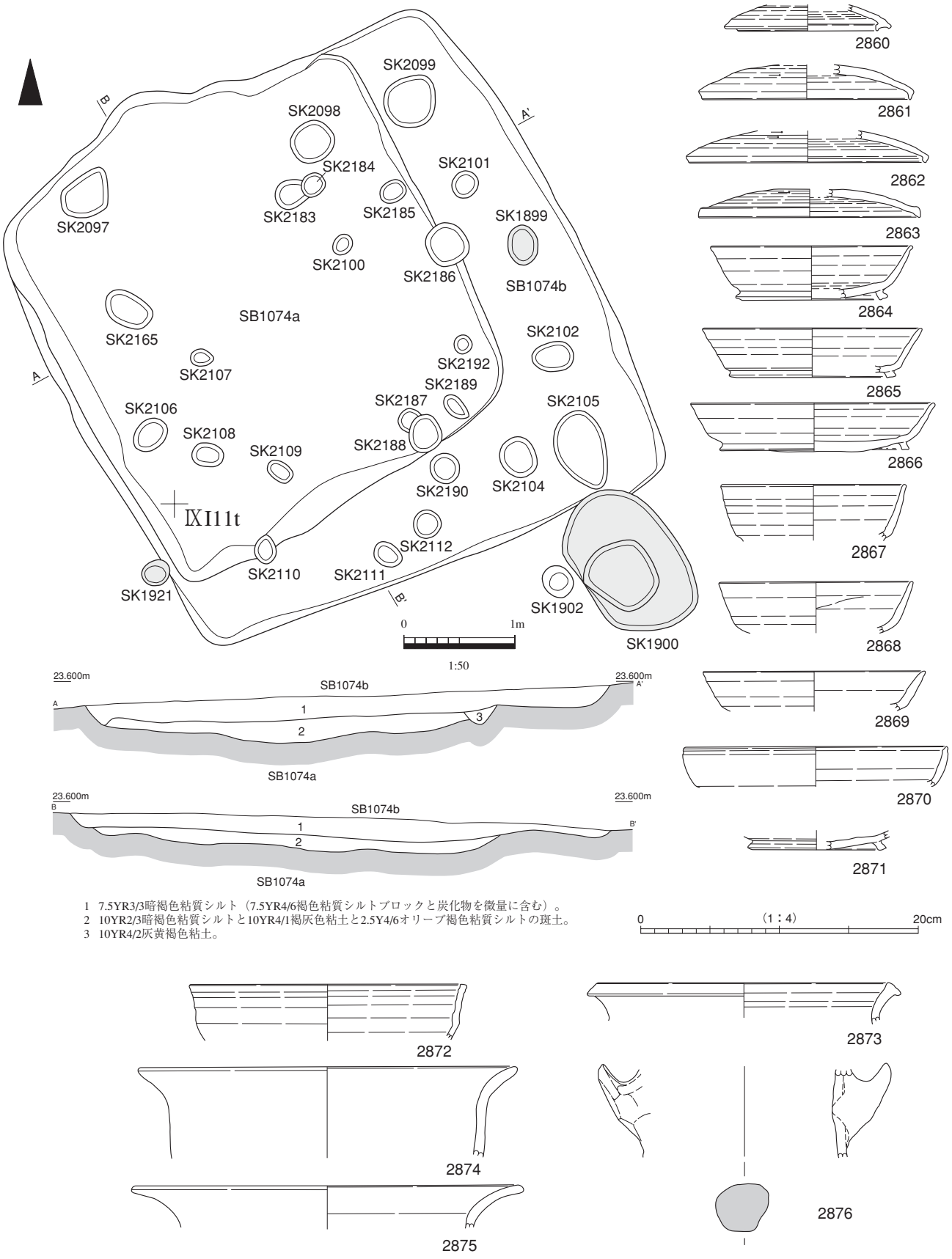
1 10YR3/3暗褐色粘質シルト（炭化物含む）。
2 10YR3/2黒褐色粘質シルト（炭化物と10YR4/2灰黄褐色粘質シルトブロック含む）。
3 7.5YR4/2灰褐色粘質シルト（焼土と炭化物含む）。
4 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト（焼土微量に含む）。
5 7.5YR4/2灰褐色粘質土。
6 10YR3/2黒褐色粘質土。
7 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト。
8 1と10YR4/4褐色粘質シルトブロック。
9 10YR3/3暗褐色粘質シルト。
10 10YR3/2黒褐色粘質土。
11 7.5YR3/3暗褐色粘質シルト。
12 7.5YR3/2黒褐色粘質土（周溝）。

第 372 図　99KSB1072 平面・断面図と出土遺物実測図



1 10YR3/2黒褐色粘質土。
2 1と10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト。

第 373 図　99KSB1073 平面・断面図と出土遺物実測図

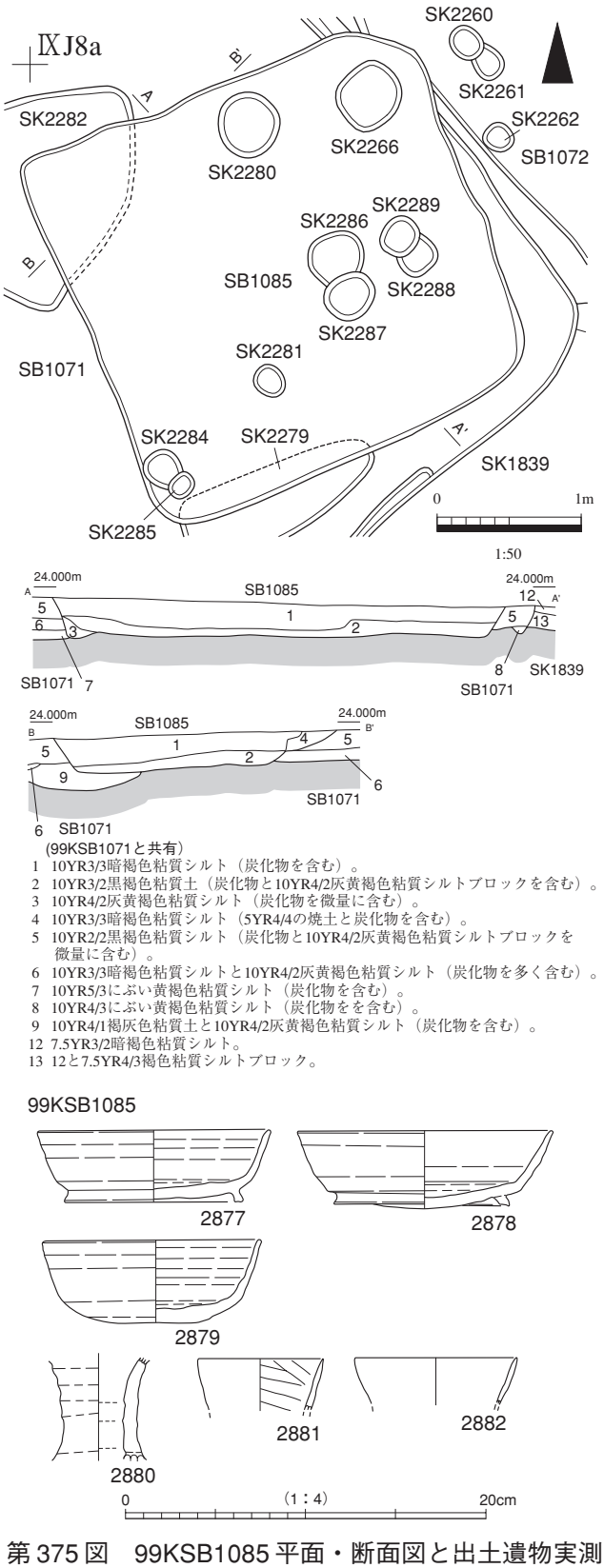


第 374 図　99KSB1074 平面・断面図と出土遺物実測図

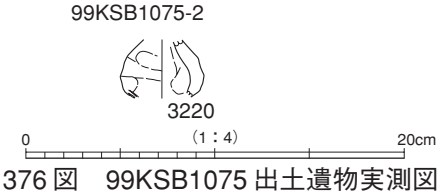
ある。

99KSB1074a・1074b　調査区南端に位置する。大小2棟の重複で小さい方（SB074a）が先行し、北・西壁を共有するSB1074bが再掘削される。SB1074aは南西辺長3.75mで平面形は隅丸正方形である。南西辺はグリッド北から西へ29°振れる。深さは40cmで、竈や周溝はないとみられる。また柱穴は特定できていない。覆土層（2層）から埋め戻しが想定できる。次にSB1074bは北東辺長4.83mで平面形は隅丸正方形である。南西辺はグリッド北から西へ26°振れる。深さは23cmである。北西壁中央に張り出しがあって竈の痕跡と推測されるが、土層には顕著な痕跡が認められなかった。周溝は土層断面A-A'で西壁直下に一部あるようである。柱穴は特定できていない。出土遺物はかえりの付いた須恵器蓋（2860）は岩崎17号窯式、それ以外の蓋（2861～2863）は高蔵寺2号窯式で、杯（2865～2872）も高蔵寺2号窯式であろう。土師器鍋（2874）と長胴甕（2875）も同時期であろう。

99KSB1085　古墳時代中期の竪穴建物99KSB1071に重複する。SB1071の覆土層を掘り込んで地山まで達している。南西辺長2.8mで平面形は隅丸正方形である。深さは25cmで、床面全面は貼床（2層）である。貼床は中央部分が若干凹んでいる。竈や周溝はなく、柱穴も特定しにくい。出土遺物は杯（2877・2878）、無台杯（2879）ともに高蔵寺2号窯式で、特記されるのは製塩土器杯部（2881・2882）が共伴していることであろう。



第375図　99KSB1085平面・断面図と出土遺物実測



第376図　99KSB1075出土遺物実測図

第５節　掘立柱建物

（１）概観

古代の掘立柱建物跡は、古墳時代同様、調査現場で確認できたものを優先し、メッシュによる図上復元ができたものを加えて提示する。全体的になおこの時期と考えられる建物は柱並びが明瞭で現場で確認されやすい傾向にある。時期限定の根拠は他遺構との重複関係はもとより、柱穴覆土が概ねやや赤みをおびた黒褐色の粘質土という点および柱掘形から出土した遺物の時期によっているが、一部については想定根拠の弱いものもあり、建物復元可能性の一案として提示することを断っておきたい。

古代の掘立柱建物分布域は該期の竪穴建物の分布とおよそ重複するが、柱並びの良好な長方形平面のものは98B2区および98D区に集中する傾向がある（配置は第201、236、321、339図参照）。

（２）遺構各説

98BSH01　調査区ほぼ中央に位置する南北棟で、98BSH02と重複関係にあるが先後関係は不明である。桁行３間で梁行２間と推定される。南東辺は１箇所で柱穴を確認するにとどまる。主軸はN-X°-Eである。

98BSH02　98BSH01の西側に位置し南東辺が重複する。梁行２間桁行３間の南北棟である。平面積は98BSH01とほぼ同じである。主軸はN-41°-Eである。柱穴P183から土師器小片が出土している。

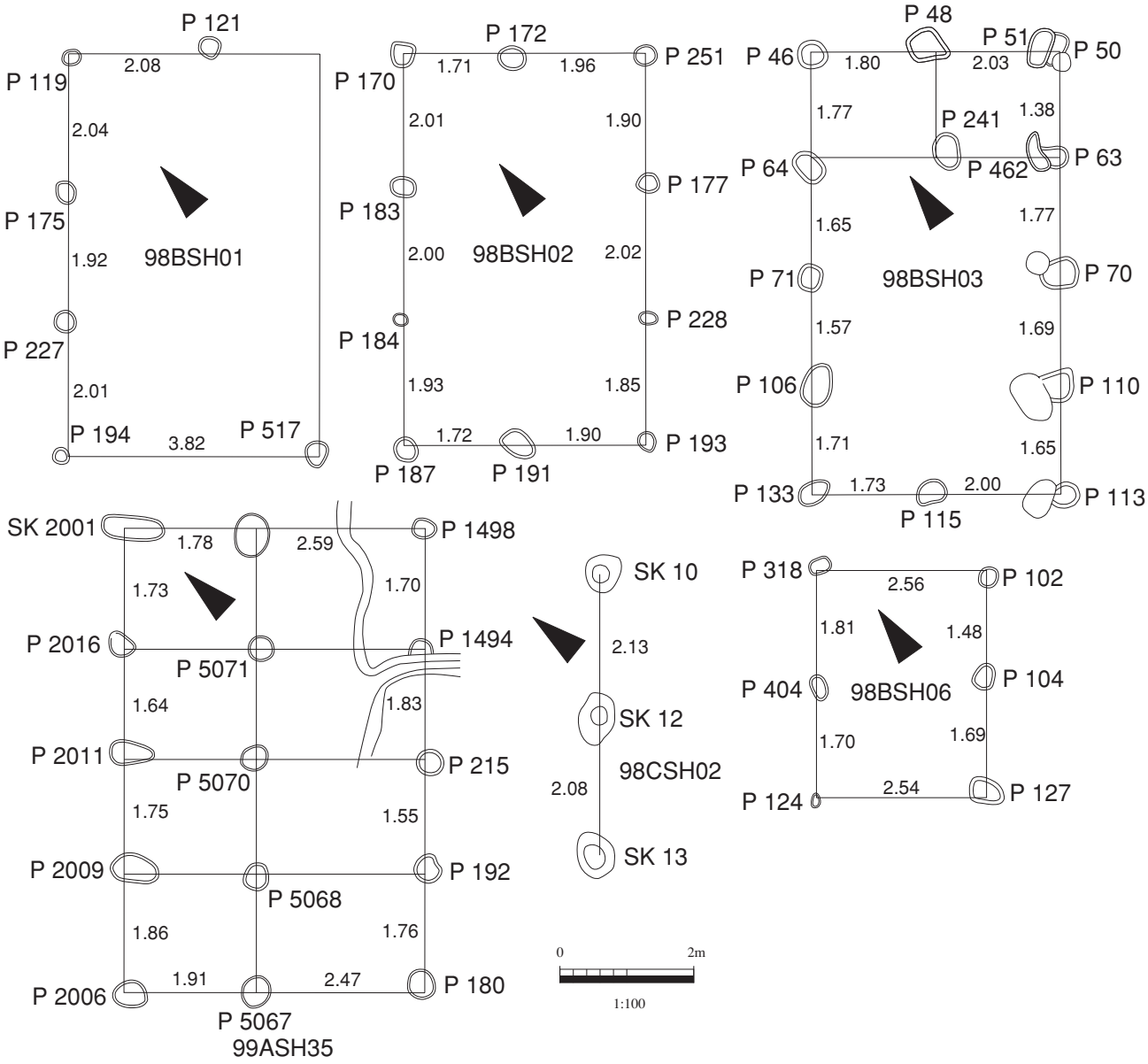
98BSH03　98BSH02の北側に位置し、主軸方位（N-39°-E）がほぼ同じの南北棟である。梁行２間桁行４間で平面積は22.5m²でSH02よりやや大きい。古墳時代の掘立柱建物98BSH04と重複するが、柱穴の重複関係は不明瞭である。位置関係からSH02と２棟で併存していた可能性が高い。柱穴からは土師器小片が出土している。

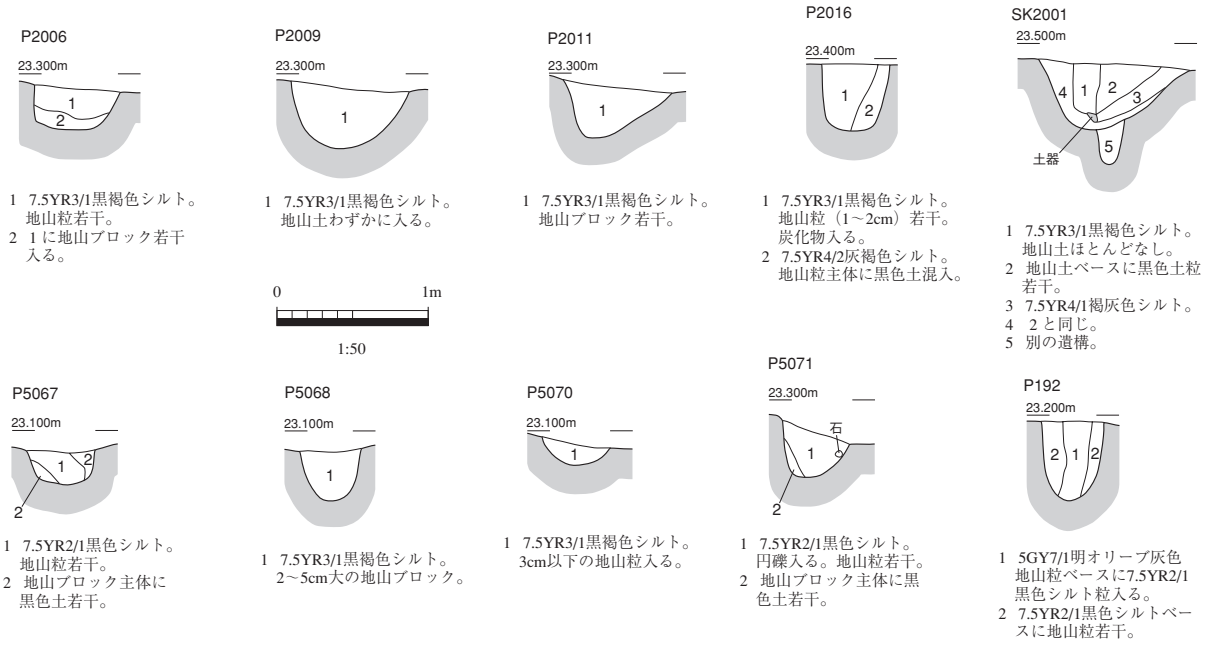
98BSH06　98BSH03の西側4mに位置する梁行1間桁行2間の南北棟である。主軸方向はN-39°-EでSH03とほぼ同じで、これの付属的施設の可能性もあろう。

99ASH35　大溝SD01の南東7mにそれと平行する梁行2間桁行4間の総柱建物である。棟通りがグリッド北から46°東へ振れる。規模は北東辺4.5m南東辺6.9mで平面積は31m²である。柱穴は直径40～95cm深さ10～40cmある。南西辺は柱穴がやや細長く、抜き取られた跡なのかもしれない。ほとんど柱穴から古墳時代～古代の土師器片が出土したが、P2009からは黄土を塗布した須恵器鉢片が出土しており、これが概ね８世紀前半以降と考えられ、該期以降の建物と判断する。

99ASH19　調査区ほぼ中央に位置する梁行３間桁行３間の側柱建物である。北東辺2.75m、南東辺5.4mと細長い。棟通りはグリッド北から55°東へ振れる。古墳時代と判断した99ASH34の南東辺と重複するが柱穴の重複はない。南東辺柱穴が中世土坑墓P758より古く、古代と判断した。遺物から時期を特定できないが、99BSH26と同様に細長い平面形をしているので平安時代と想定した。

99ABSH　99A区から99B区にまたがる梁行２間桁行３間の総柱建物である。東西棟で主軸方向はN-11°-Eである。柱間間隔がいずれも2.3m以上あり、古代のものとしてはやや異例であることから、中世の可能性も十分考えられる。出土遺物がなく、並立する該期の建物も想定しがたいので積極的に時期を下げ



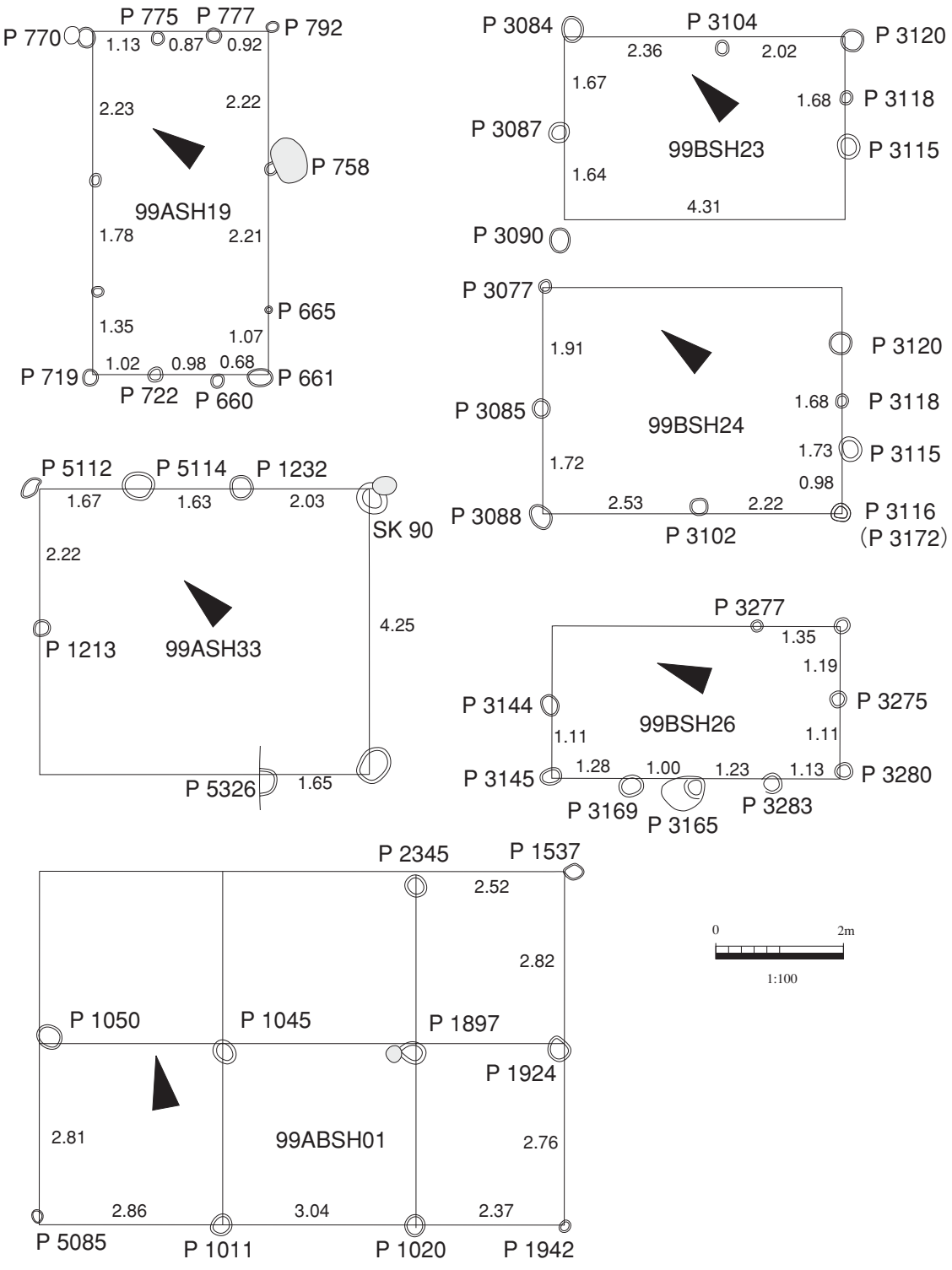


第 377 図　98B2・99A 区掘立柱建物平面図と 99ASH35 柱掘形断面図

て考えることもできない。

99BSH23・24　戦国期溝99BSD01に伴う土塁SX01の下層で確認された。ほぼ同規模の建物が重複するが柱穴の重複がなく両者の先後関係は不明である。いずれも梁行2間桁行2間だが南東-北西方向に長軸となる。平面積はSH23が12.8m²、SH24が16.5m²である。柱穴からの出土遺物がなく時期特定は難しい。

99BSH26　SH23・24と同じく土塁99BSX01の下層で確認されたピットから復元される南東－北西方向



第378図　99A・99B区掘立柱建物平面図

に細長い側柱建物である。梁行2間（北西辺で2.4m）桁行4間（南西辺で4.5m）である。柱穴からは古墳～古代の土師器小片が出土している。細長い平面形や付近に灰釉陶器が出土するSK3014の存在から平安時代と想定しておく。

99DSH03　古代の竪穴建物SB11・12と重複する梁行2間（北西辺で2.8m）桁行3間（北東辺で4.6m）の側柱建物である。柱穴P220・222がSB11の床面で検出されたので、SB11より先となる。建物方位は99D・98D区で唯一グリッド北から西へ33°大きく振れる。柱穴P91などから奈良時代の須恵器蓋・椀や土師器甕が出土しているので、SB11とはさほど時期が変わらないものと考えられる。

99DSH04・05　谷地形SX01北岸近くで重複する2棟の側柱建物である。古代の竪穴建物99DSB31との重複関係からこれより後と考えられる。建物方位はほぼ同じでグリッド北から東へ14°振れ、平面積もSH04 22.7m²、SH05 22.1m²と変わらない。ただ柱間間隔が異なっており、SH04が梁行2間（北辺で3.6m）桁行4間（東辺で6.3m）、SH05が梁行2間（北辺で3.4m）桁行3間（東辺で6.5m）である。遺物はSH04の柱穴から須恵器と土師器が出土した。

98DSH01　調査区南端に位置する。98DSH02や98DSH03・04と並立する。梁行2間（北辺で2.9m）桁行3間（西辺で5.4m）の南北棟側柱建物である。他の建物との重複はない。建物方位はグリッド北から4°東へ振れる。柱穴は直径20～40cmである。

98DSH02　SH01から東2mに位置する。さらに東1mにはSB66が位置する。梁行3間（北辺で4.6m）桁行5間（西辺で7.3m）の南北棟側柱建物である。他の建物との重複はない。建物方位はグリッド北から東へ6°振れる。柱穴は直径50～60cmである。時期を特定する遺物は出土していないが、柱通りが明瞭であることなどから古代のものと考えられる。

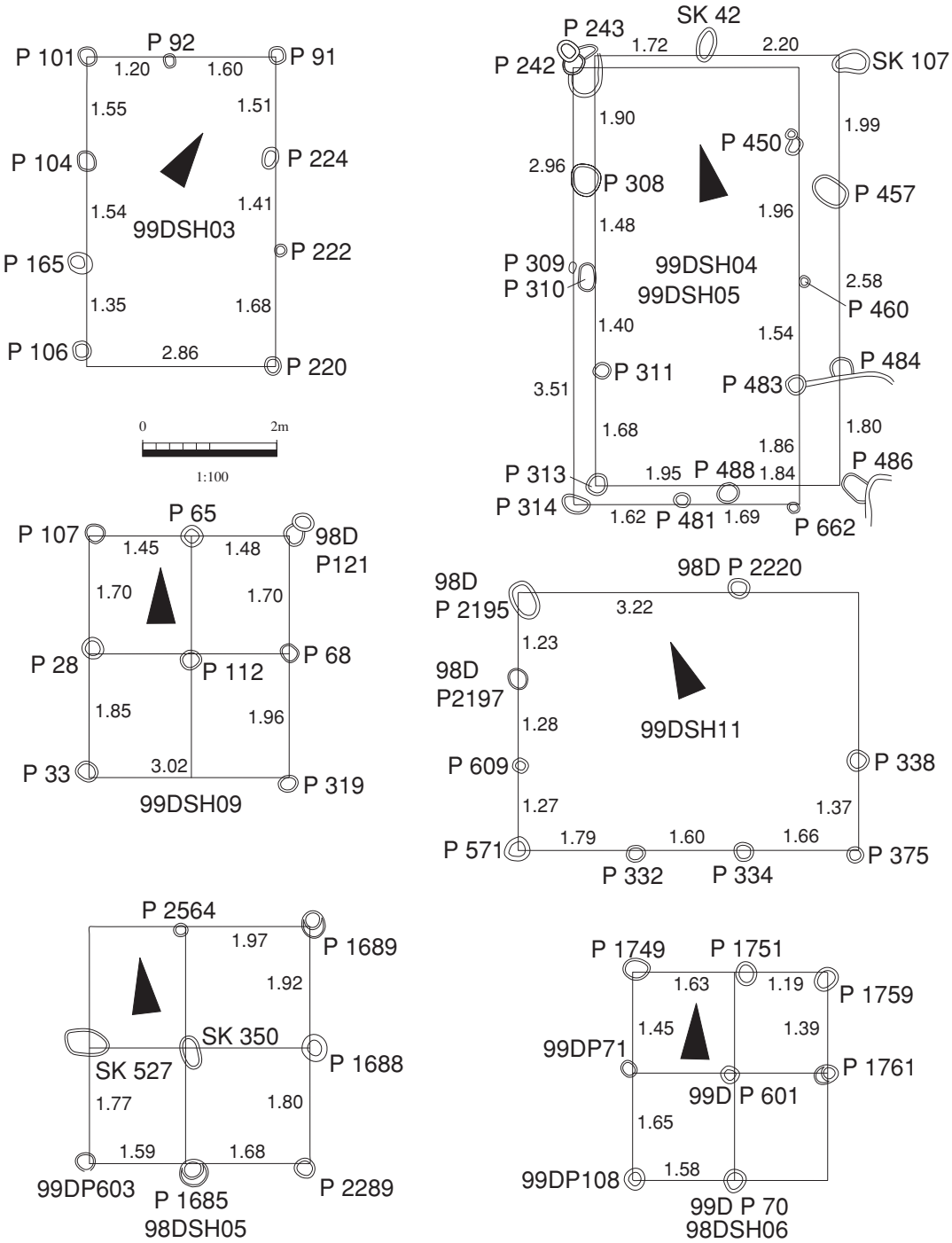
98DSH03・04　SH02から南へ2mに位置する。2棟が重複するが柱穴の重複関係はない。いずれも南辺で土坑99DSK18と重複し、これより後であることが判明している。SH03は梁行3間（北辺で4.1m）桁行4間（東辺で5.8m）、SH04は梁行2～3間（南辺で3.5m）桁行3間（西辺で4.9m）の南北棟側柱建物である。建物方位はグリッド北から東へSH03は10°SH04は3°振れる。99DSK18で折戸10号窯式の須恵器蓋が出土しており、それ以降の時期と考えられる。

98DSH11・12　調査区南東隅に位置する。98DSH13・14とL字形配置となる。2棟が重複するが柱穴の重複関係はなく先後関係は不明である。いずれも西辺で中世土坑墓98DSK410と重複し、SH11の柱穴P2183がそれに壊されるので、該期以前と判断される。SH11は梁行2間（北辺で3.9m）桁行4間（東辺で6.3m）、SH12は梁行2間（北辺で3.6m）桁行4間（東辺で5.7m）の南北棟側柱建物である。建物方位はグリッド北から東へSH11は26°、SH12は8°振れる。

98DSH13・14　SH11・12とセットになるとみられる東西棟側柱建物である。竪穴建物98DSB88・89が埋まった後に建てられている。柱穴の重複関係が一部で矛盾しており結果的に両者の先後関係は不明である。SH13は梁行2間（西辺で4.1m）桁行4間（南辺で6.3m）、SH14は梁行2間（西辺で4.1m）桁行4間（南辺で6.1m）でほぼ同一規模である。建物方位はグリッド北からSH13は9°、SH14は1°東へ振れる。柱穴直径が25～75cm、深さ10～50cmで比較的明瞭である。柱穴からの出土遺物はほとんどないが、先行するSB88が折戸10号窯式とみられるので、該期以降の時期が考えられる。

98DSH15　98DSH113・14の北側3mに位置する東西棟側柱建物である。他の建物との重複関係はない。梁行1間（東辺で2.0m）桁行4間（北辺で6.5m）である。建物方位はグリッド北から東へ4°振れる。柱穴からの出土遺物はなかった。

98DSH17・18　調査区西壁際、竪穴建物SB27～31の西2 mに位置する南北棟側柱建物である。中世の竪穴建物SB33と重複しこれ以前と判断される。柱穴P2522とP2523が重複し、SH17→18という先後関係となる。SH17は梁行2間（南辺で4.9m）桁行4間（東辺で5.9m）、SH18は梁行2間（南辺で4.6m）桁行4間（東辺で5.8m）である。建物方位はグリッド北からSH17が東へ4°、SH18は0°振れる。柱



第379図　99D区掘立柱建物平面図

穴からの出土遺物はSH17の柱穴P711、P1439から土師器と須恵器が出土した。

98DSH21　SH17・18から北東へ15mに位置する1間四方の掘立柱建物である。建物方位はグリッド北から東へ1°振れる。東辺2.9m南辺3.4mの規模である。

98DSH34・35　調査区ほぼ中央に位置する南北棟側柱建物である。2棟が重複するが柱穴の重複はなく先後関係は不明である。SH34は梁行1間（北辺で3.1m）桁行3間（西辺で4.1m）、SH35は梁行2～3間（北辺で3.7m）桁行5間（西辺で5.7m）である。平面積はSH34が12.7m²に対しSH35が21.1m²と差がある。建物方位はグリッド北から東へSH34が5°、SH35が4°振れる。

98DSH36・37　SH34・35の東8mに位置する南北側柱建物である。2棟が重複するが柱穴の重複はなく先後関係は不明である。SH36は梁行3間（南辺で4.15m）桁行5間（西辺で6.6m）、SH37は梁行3間（南辺で4.4m）桁行は不明瞭だが5間（西辺で6.9m）と推定される。ほぼ同一規模で建物方位はグリッド北から東へSH36が8°、SH37は7°振れる。

98DSH42　調査区北端近くに位置する南北棟側柱建物である。他の建物との重複はない。梁行1間（南辺で3.6m）桁行3間（西辺で4.9m）で、建物方位はグリッド北から東へ5°振れる。

99ESH01　99DSX01に続く谷地形の北岸近くに位置する。梁行2間（東辺で3.5m）桁行3間（北辺で3.8m）の東西棟の側柱建物である。付近に折戸10号窯式の須恵器や付着物のある皿が出土した土坑SK475などがある。建物方位はグリッド北から東へ14°振れる。柱穴は直径45～50cmで深さ17～49cmで、比較的大きい。柱穴からの出土遺物はないが、SK475などの付近の遺構から鳴海32号窯式～折戸10号窯式の時期と考えられる。

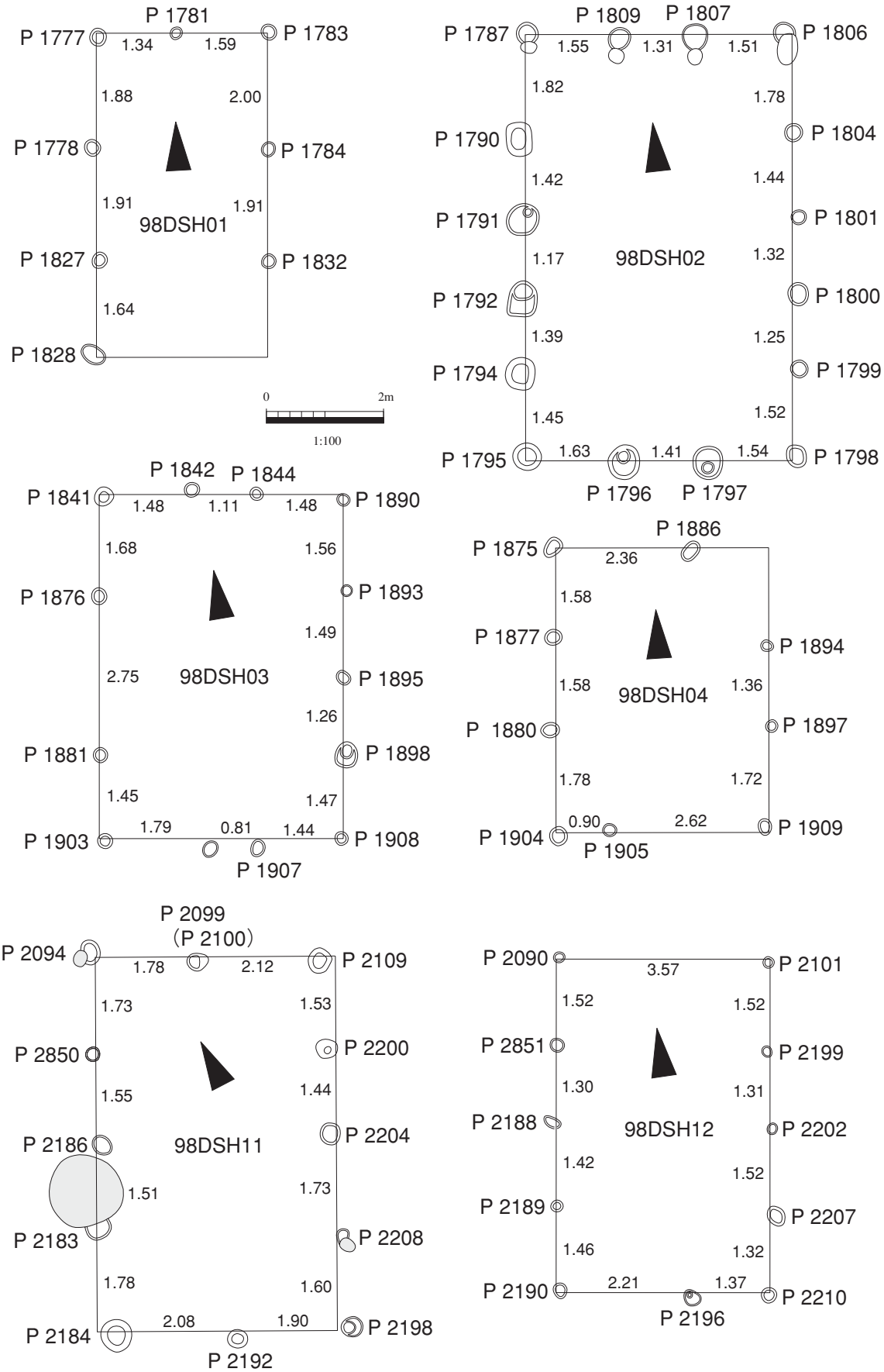
99GSH18　調査区南東隅で確認された梁行3間（西辺で4.6m）桁行4間（北辺で7.0m）の東西方向に長い側柱建物である。建物方位はグリッド北から11°東へ振れる。柱穴が直径40～50cm、深さ20～30cmで比較的大きいのが特徴である。他の建物との重複はない。柱穴からの出土遺物がないのが難点だが、明瞭な平面形と覆土の状況から古代と判断した。

99GSB19　99GSH18の南7mに位置する梁行2間（西辺で3.0m）桁行3間（北辺で5.2m）の東西に長い総柱建物である。平面積はSH18が32.2m²に対し15.6m²と小さい。他の建物との重複はない。柱穴からの出土遺物がなく、時期が特定しがたいが、西7mのところに8世紀前葉の須恵器が出土する竪穴建物98DSB14がある。

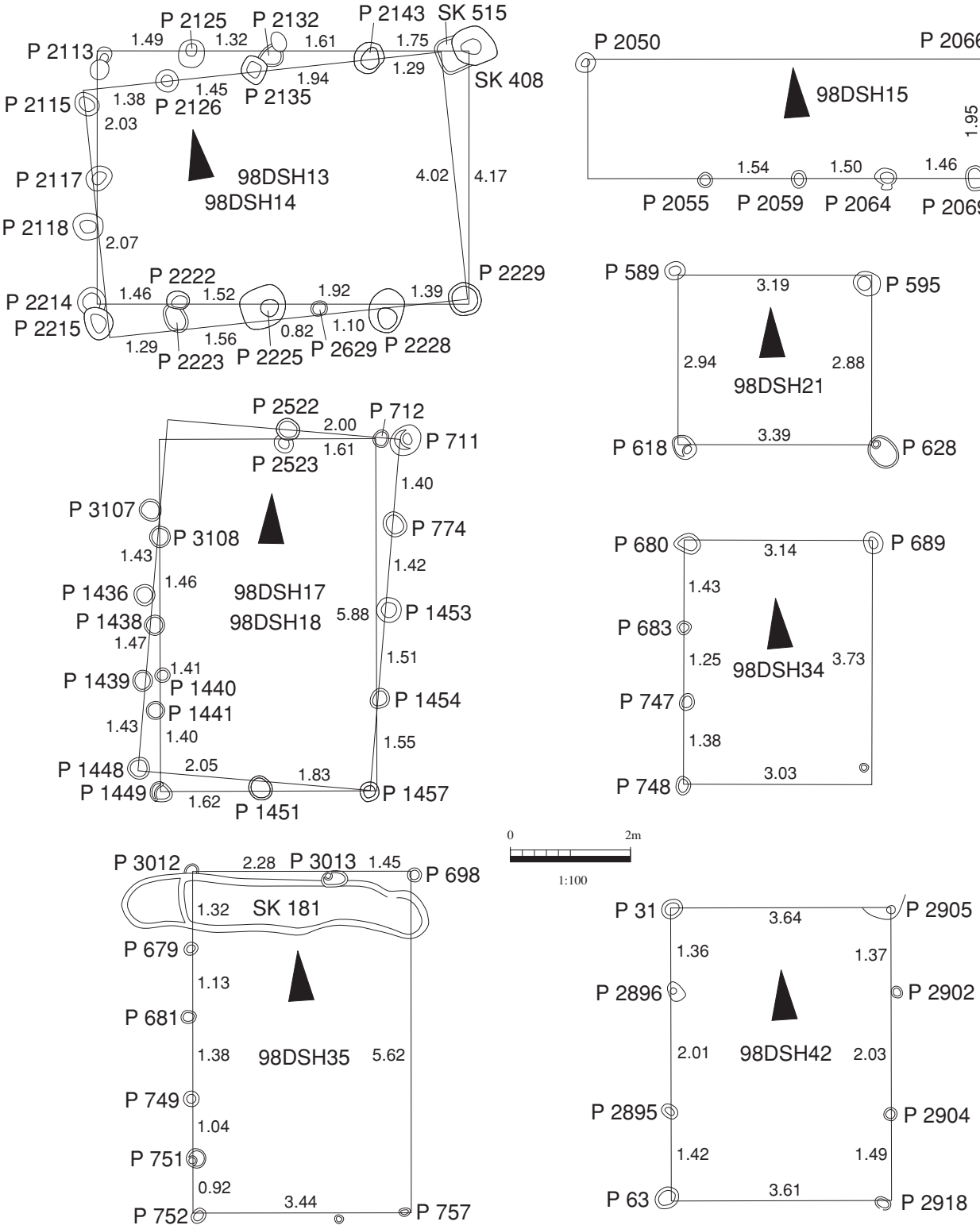
99HSH01　調査区南東隅に位置する平面形がほぼ正方形の総柱建物である。規模は梁行2間（東辺で4.1m）、桁行3間（北辺で3.9m）である。柱穴P20が中世の土壙墓99ISK05より先にあるためそれ以前と判断される。柱穴P21から8世紀中葉とみられる須恵器杯（3189）が出土しており、該期より後と考えられる。この平面形は遺跡内唯一であり、その性格が注目されよう。

99ISH19　調査区南寄りで確認された梁行2間（南辺で4.7m）桁行3間（東辺で7.1m）の南北棟の側柱建物である。建物方位はグリッド北から東へ5°振れる。柱間間隔が平均2.3mで古代のものとしてはやや間延びする点が問題であるが、柱穴出土遺物から積極的に中世とする根拠はない。

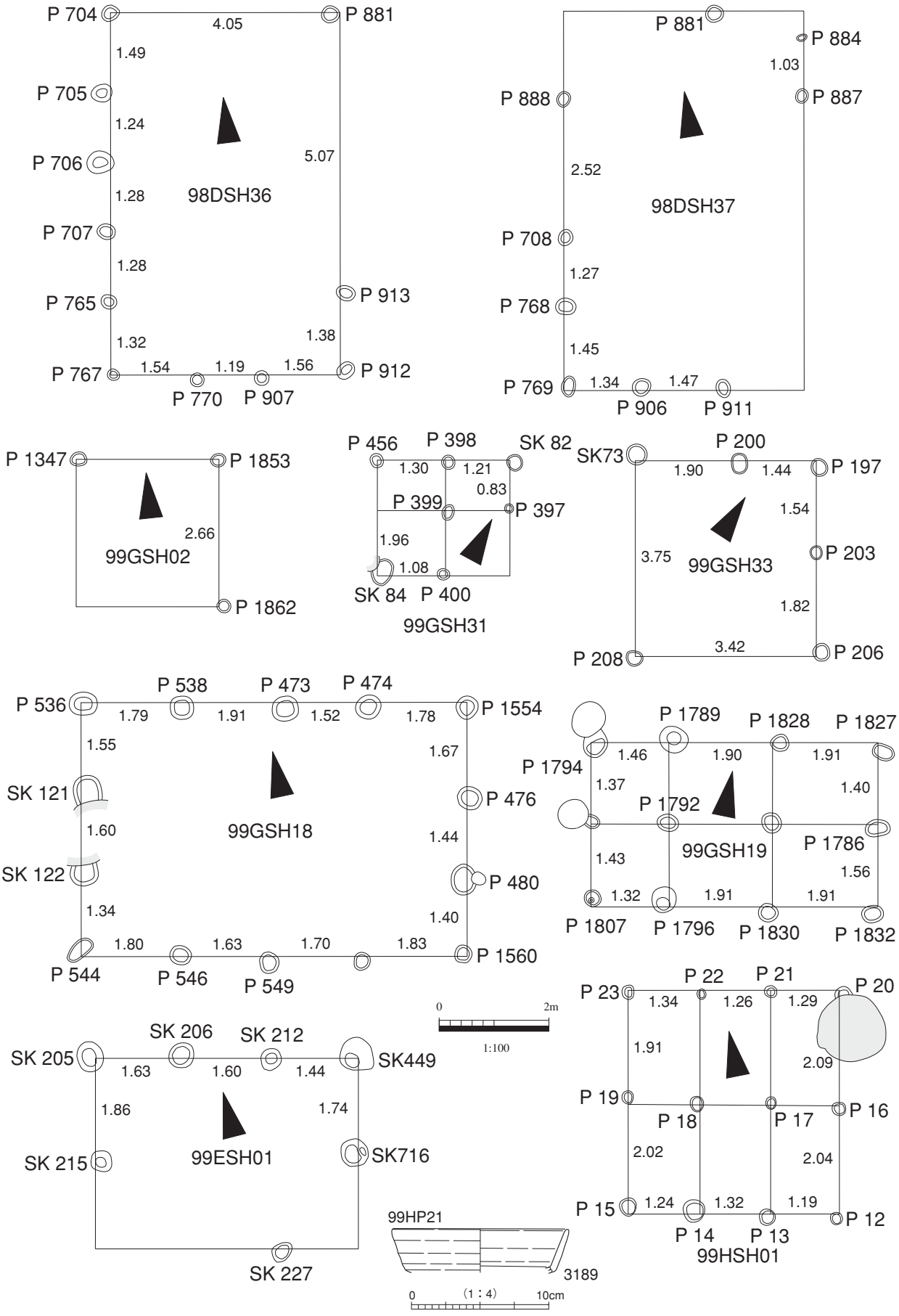
99KSH25　梁行1間（南辺で2.8m）桁行3間（西辺で5.6m）の南北棟側柱建物である。柱穴からの出土遺物がなく、柱間間隔がやや長いが、古代（平安時代）のものと推定した。



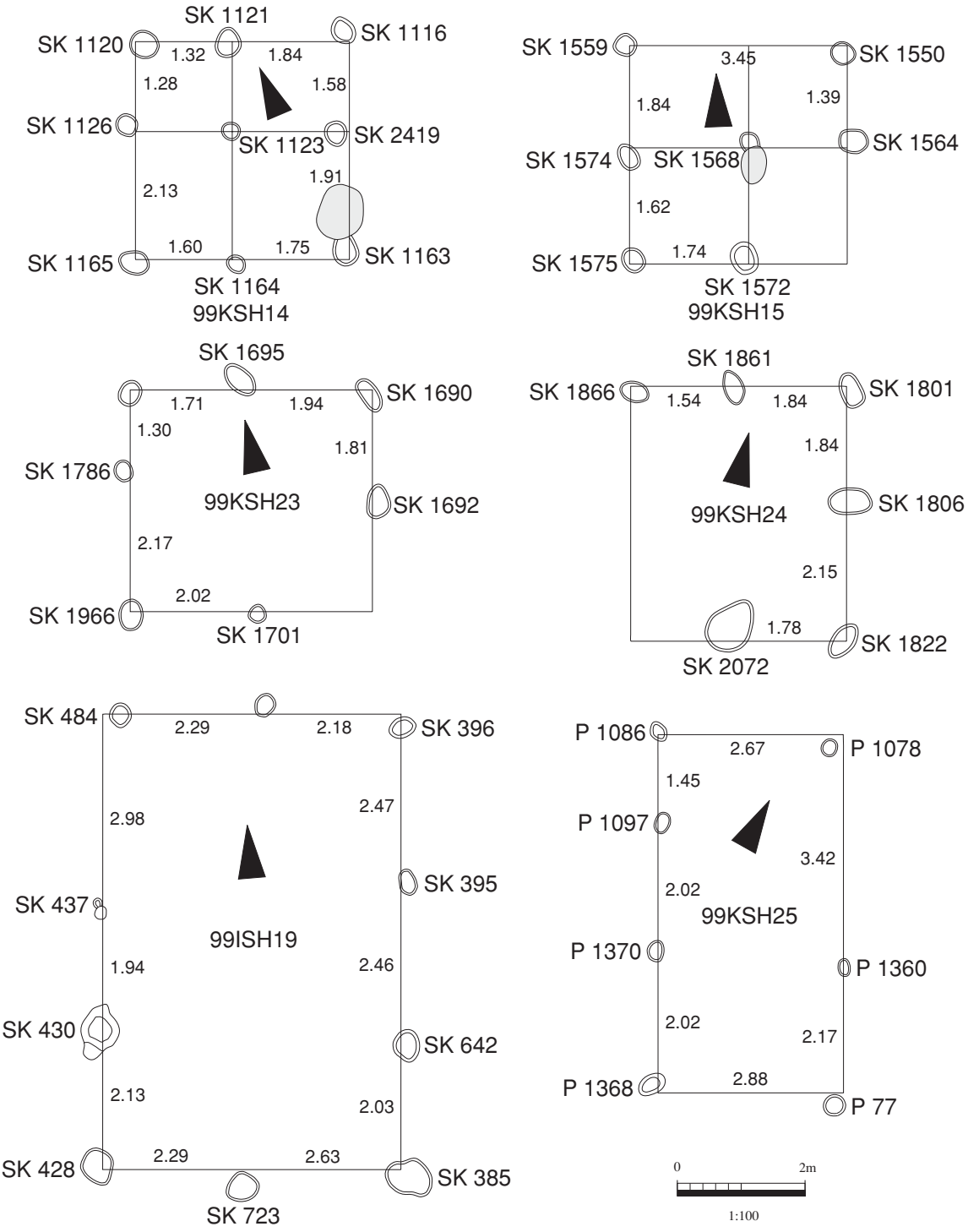
第 380 図　98D 区掘立柱建物平面図（1）



第 381 図　98D 区掘立柱建物平面図（2）



第 382 図　98D・99E・99G・99H 区掘立柱建物平面図と出土遺物実測図



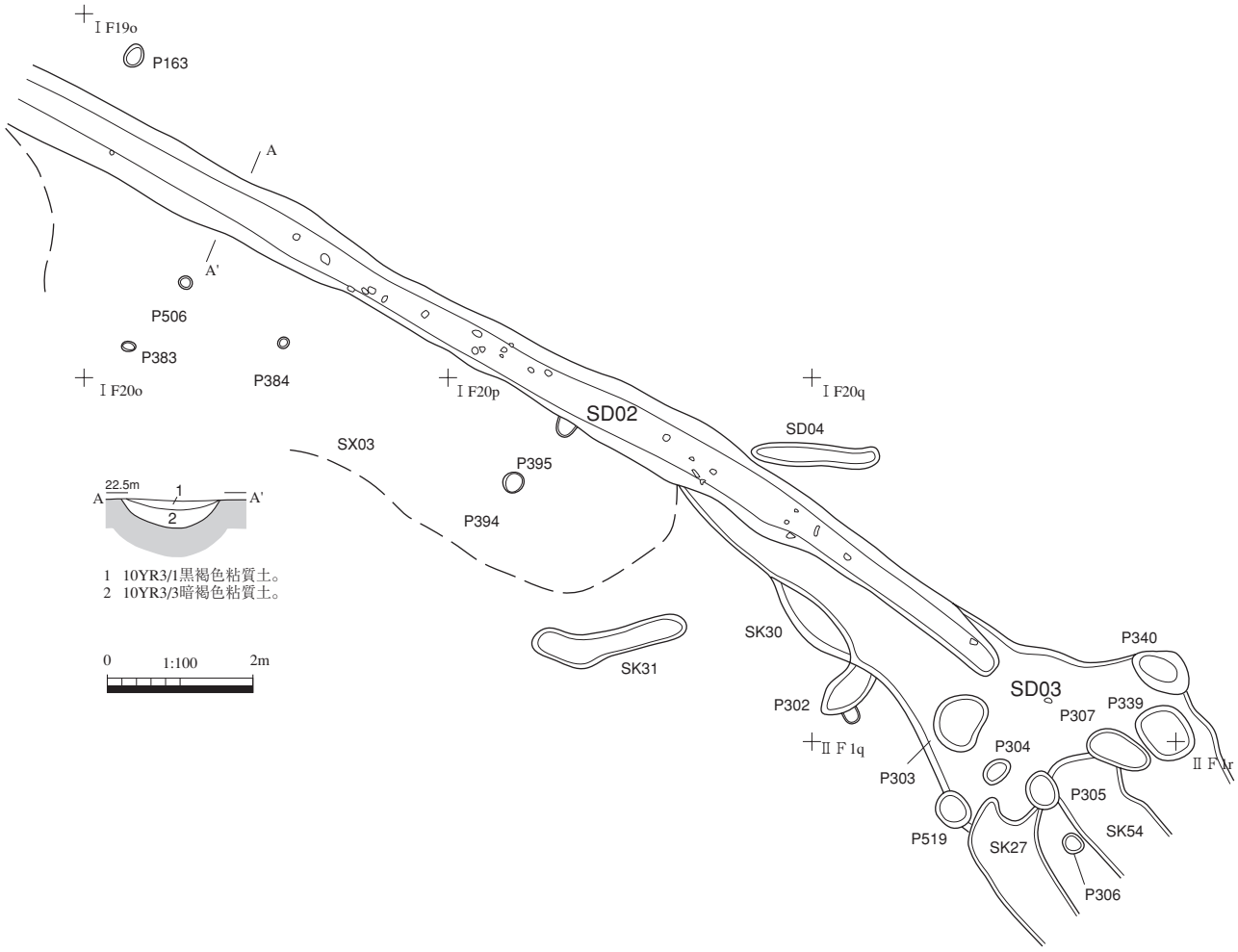
第 383 図　99I・99K 区掘立柱建物平面図

第 6 節　その他の遺構と遺物

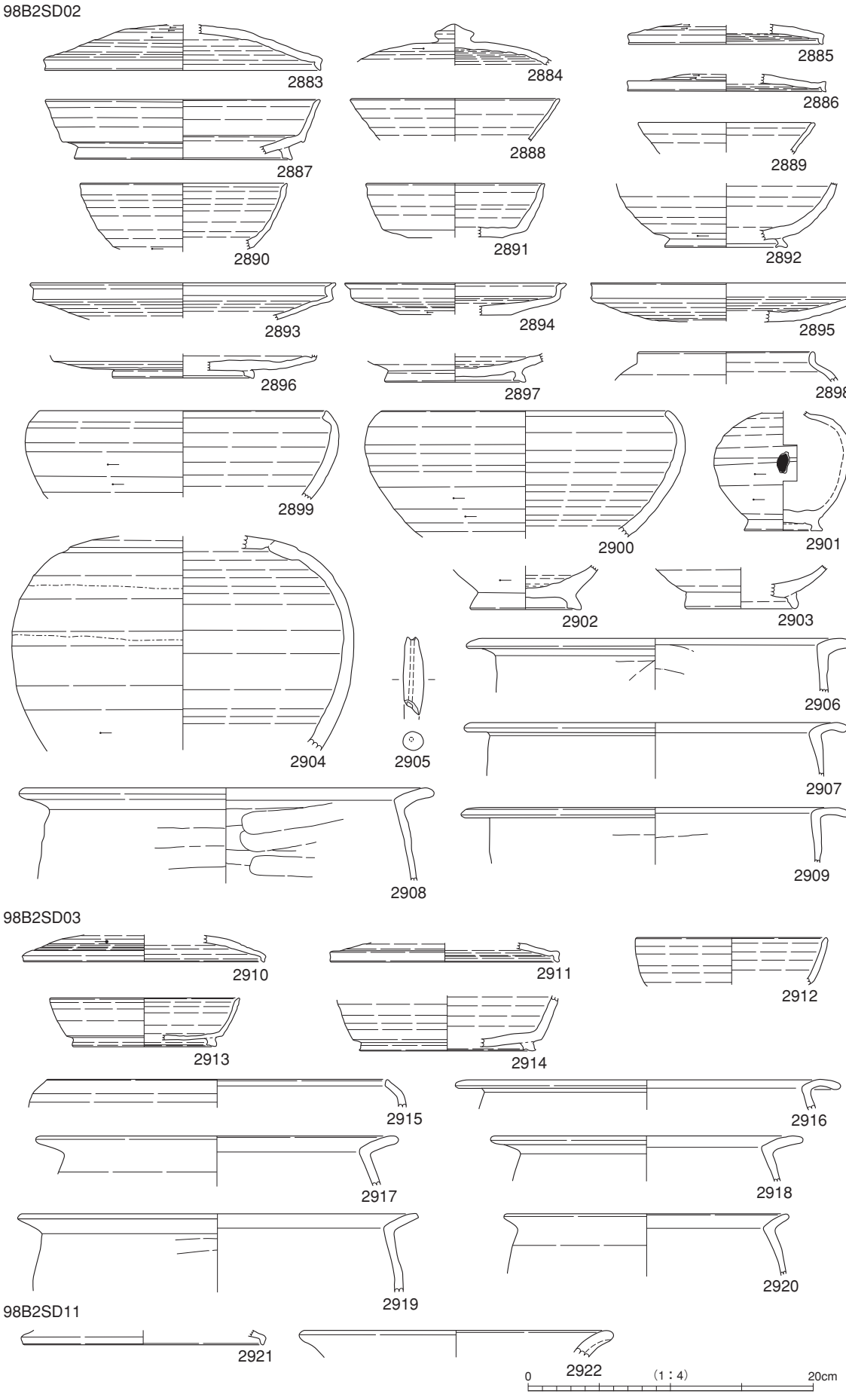
(1) 溝

98B2SD02　先述したように98B2区では大溝（98B2SD01）と付属する船着き場（98B2SX01）そして柱列びの明瞭な掘立柱建物（98B2SH01 ～ SH03）が調査区北西隅から順に配置される。その掘立柱建物群の南西約4mに大溝や建物とは直交する方向に1条の溝が確認された。調査区西壁に発し確認された規模は長さ16m以上幅0.8m深さ38cmで断面は緩いU字形である。この溝は南東壁近くで途切れ、約1.5mほどの土橋となって再び現れる（98B2SK54）。なお北西壁を一部掘削したところ98B2SD01と接続することが確認された。この溝は上下2層に分かれ、下層が溝機能時に堆積したものである。上層はその後湿地化が進行したころの堆積とみられ、SD02に連続する98B2SD03はこの上層の延長に該当する。

遺物は奈良時代後半の須恵器供膳具と同時期の土師器甕が主体である。須恵器供膳具は蓋（2883 ～ 2886）、杯・椀（2887 ～ 2892）、盤（2893 ～ 2897）で折戸10号窯式。2898は短頸壺。鉄鉢（2899・2900）、水瓶（2901）、長頸瓶（2904）と仏器があるのも特徴である。2901は頸部を欠き胴部には外側から故意に開けた穴がある。2904は上から緑色～半ばは透明な釉が掛かる。2903は灰釉陶器。2906 ～ 2909は三河型土師器甕で折戸10号窯式併行期。SD03も同様な構成であるが、土師器甕は口縁がやや上向きで新



第384図　98B2SD02・03平面・断面図

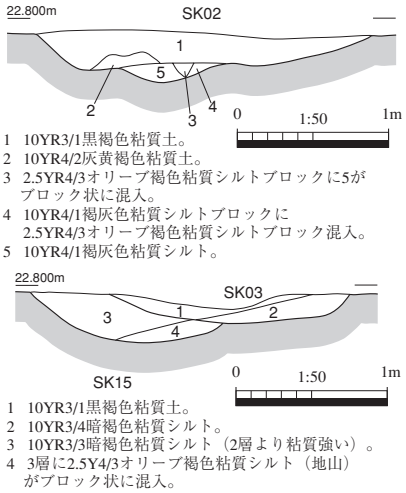


第 385 図　98B2SD02・03・11 出土遺物実測図

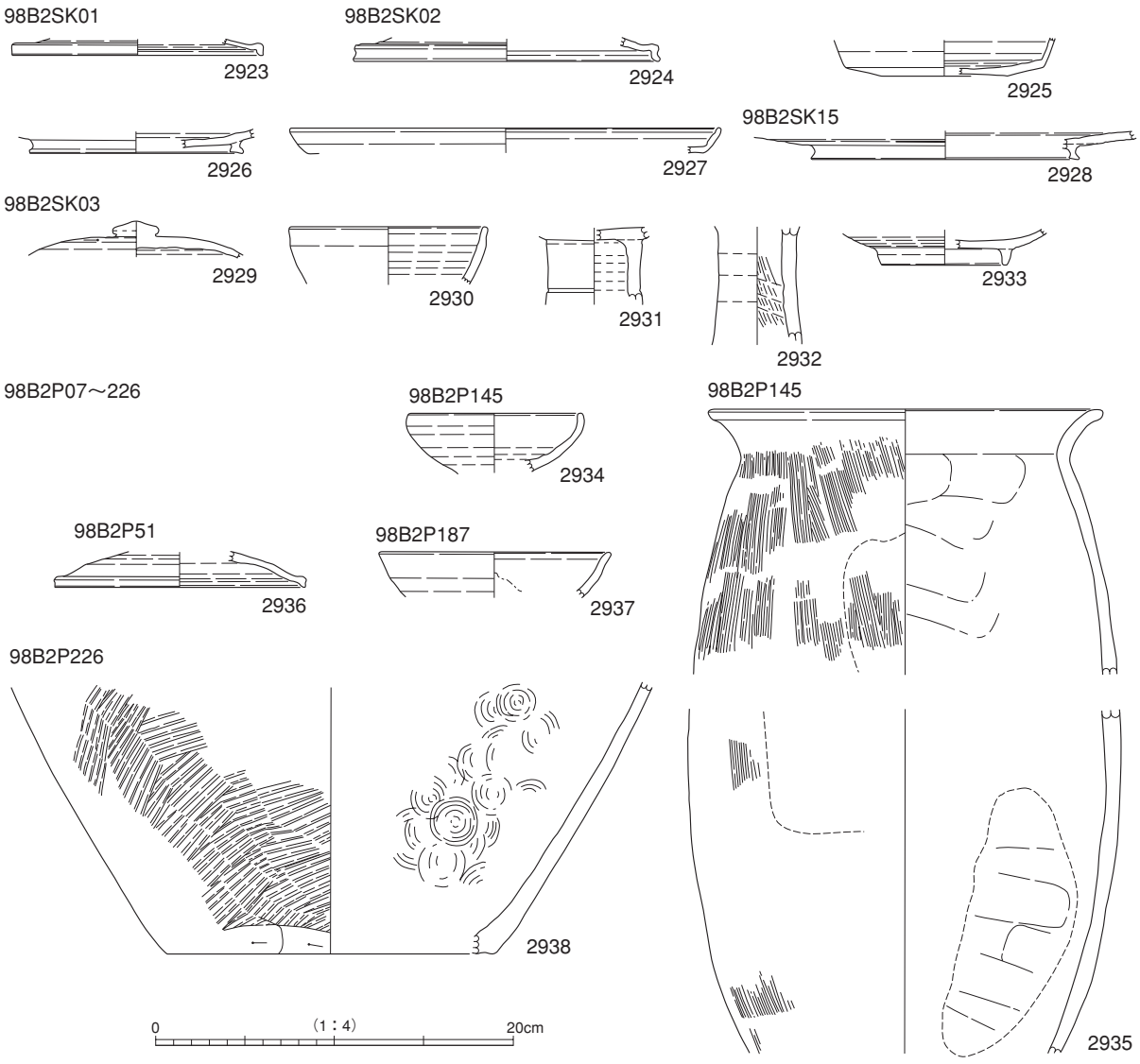
しいタイプである。なお両遺構とも墨書土器はない。

98B2区土坑　各土坑からは7～9世紀代の土器が出土した。2938は須恵器甕。注目されるのはP145で、7世紀中葉の須恵器高杯（2934）とハケ調整主体に若干指ナデ調整が混じった長胴甕（2935）が共伴する。甕胴部半ばには大きな四角い黒斑が付く。内面は表面に精良な土を塗って仕上げており、それが遺った部分に幅広な指ナデ痕がみられる。またP51は掘立柱建物98BSH03の柱掘形の上に重複する土坑である。須恵器蓋（2936）は折戸10号窯式。表土除去中には完形の須恵器蓋（2939）などが出土した。調査区南トレンチでは硯として使用された無台盤（2945）が出土した。

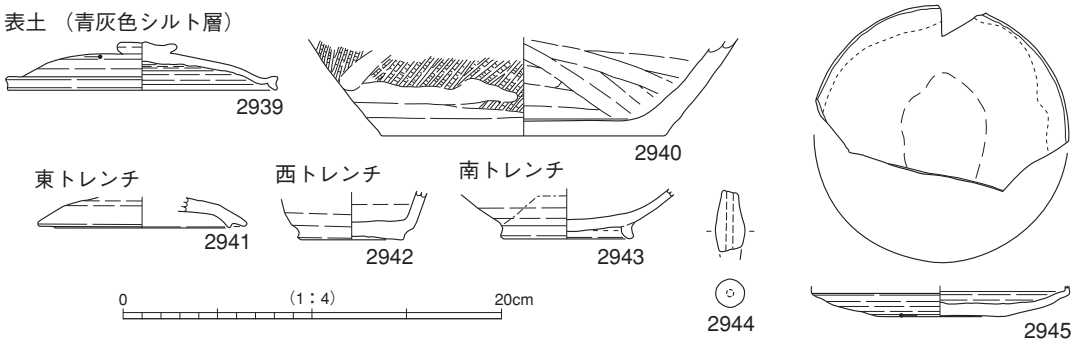
99ASD23　99ASB10の東側1mに位置する南北方向にのびる不整形な溝状遺構である。長さ3.8m幅1.9m深さ28cmで、底部も凹凸



第386図　98B2SK02・03・15断面図



第387図　98B2区土坑・ピット出土土器実測図



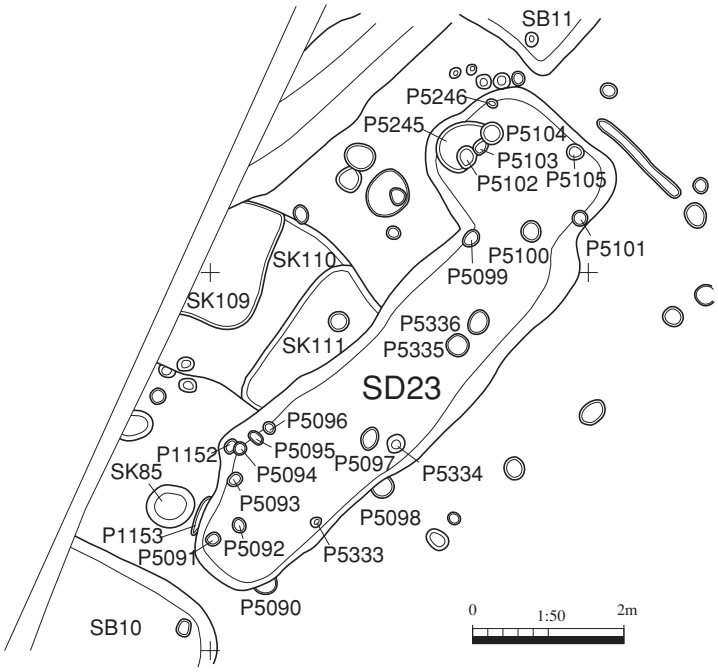
第 388 図　98D 区掘立柱建物平面図

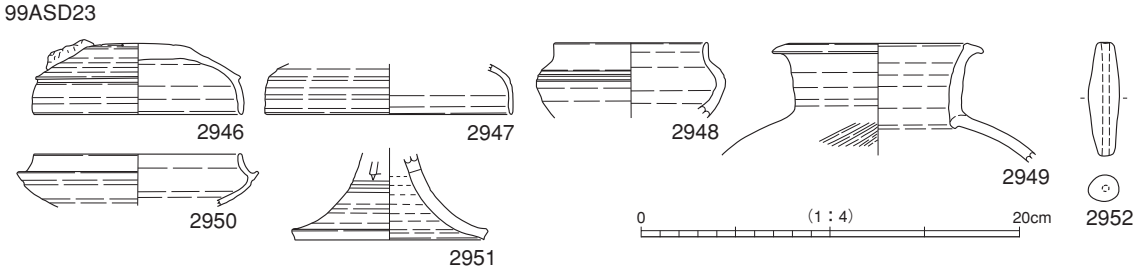
あって覆土は黒褐色シルトである。遺物は須恵器と土錘である。須恵器杯蓋（2966）は東山 44 号窯式 2947 は 6 世紀後半かもしれない。杯身（2950）も同時期であろう。したがって遺構の時期は 7 世紀前葉と考える。遺構そのものから性格をうかがえる事実は得られなかったが、SB10からガラス玉が出土したことや土坑の規模から、古墳（墳丘墓）の周溝という可能性も考えられる。

99A区土坑　2953は土師器ナデ調整長胴甕で、薄型長胴甕の創始段階のものである。2955は瓶もしくは広口壺であるが胴部肩のところに焼成前の線刻がある。蜘蛛の巣のような線刻である。製塩土器は脚部が各地点で出土した。知多 4 類である。2961 は土錘だが長さ不明ながら太い最大径が特徴である。

99A区溝　戦国時代の区画溝から出土したものである。2967 は岩崎 17 号窯式の盤で、波状文がかすれ気味に施される。1462 は灰釉陶器で底部内面に黒色の付着物がある。2969 も内面に付着物がある須恵器。無台で皿とみられる。

99A区その他　遺構確認作業中に出土したものを提示する。2980 は須恵器の甑で、粘土積上帯の痕跡がみえる。2978は古墳時代中期の小型甕の口縁で波状文が入る。2979 は土師器長胴甕の口縁端部を面取りする。内面にハケ調整、外面は



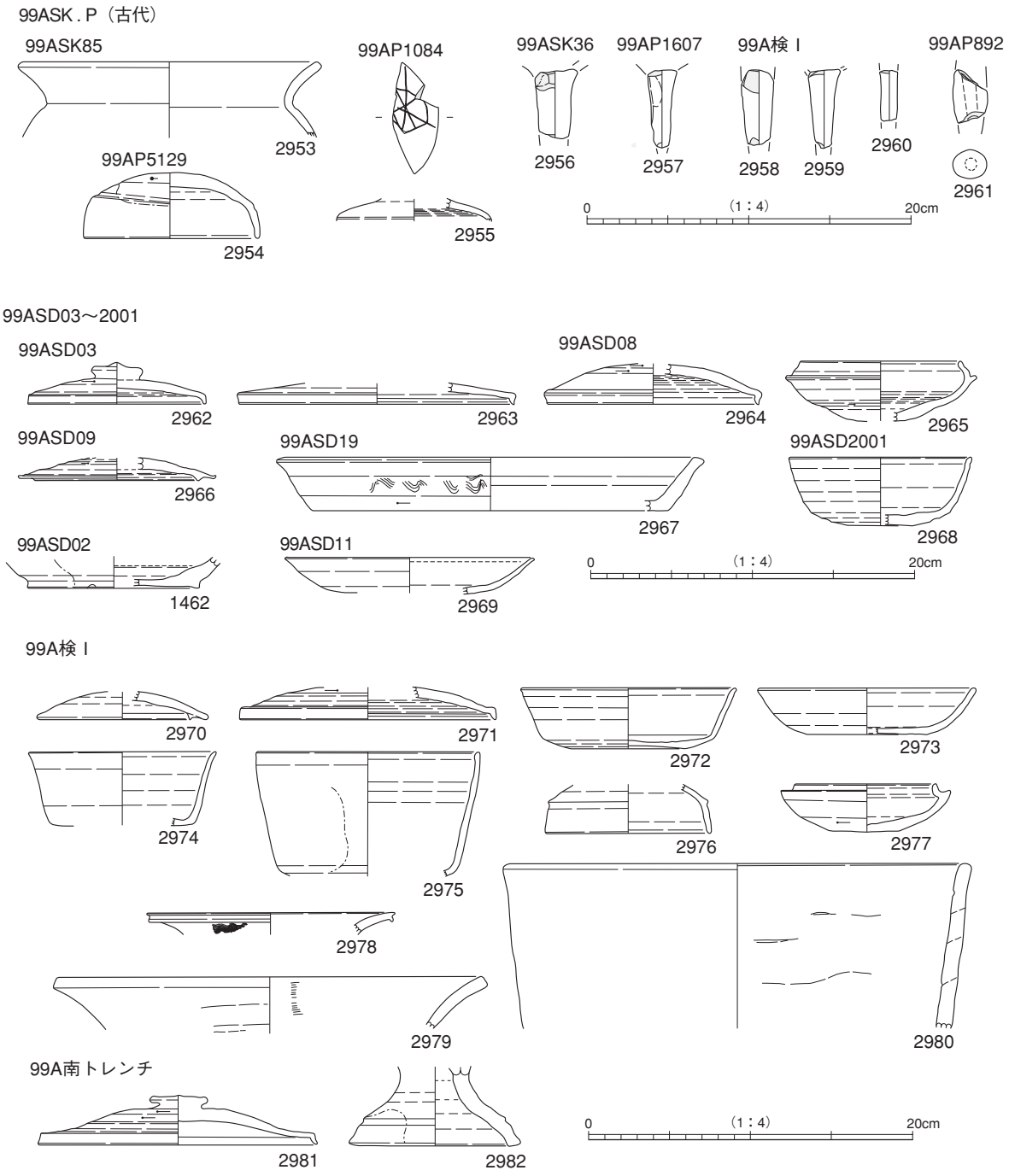


第 389 図　99ASD23 平面図と出土土器実測図

指ナデ調整である。南トレンチは98B2SX01の北縁部分に該当する箇所である。須恵器蓋は折戸10号窯式、2982は台付壺で7世紀代か。

99B区SD05・16・8015・8016・8022　99B区における戦国時代屋敷地区画溝から出土した古代の遺物である。8000番台は大溝西側の区画溝である。7世紀代が中心であるが2985は8世紀後半の長頸瓶。2991は5～6世紀代の鍋とみられる。

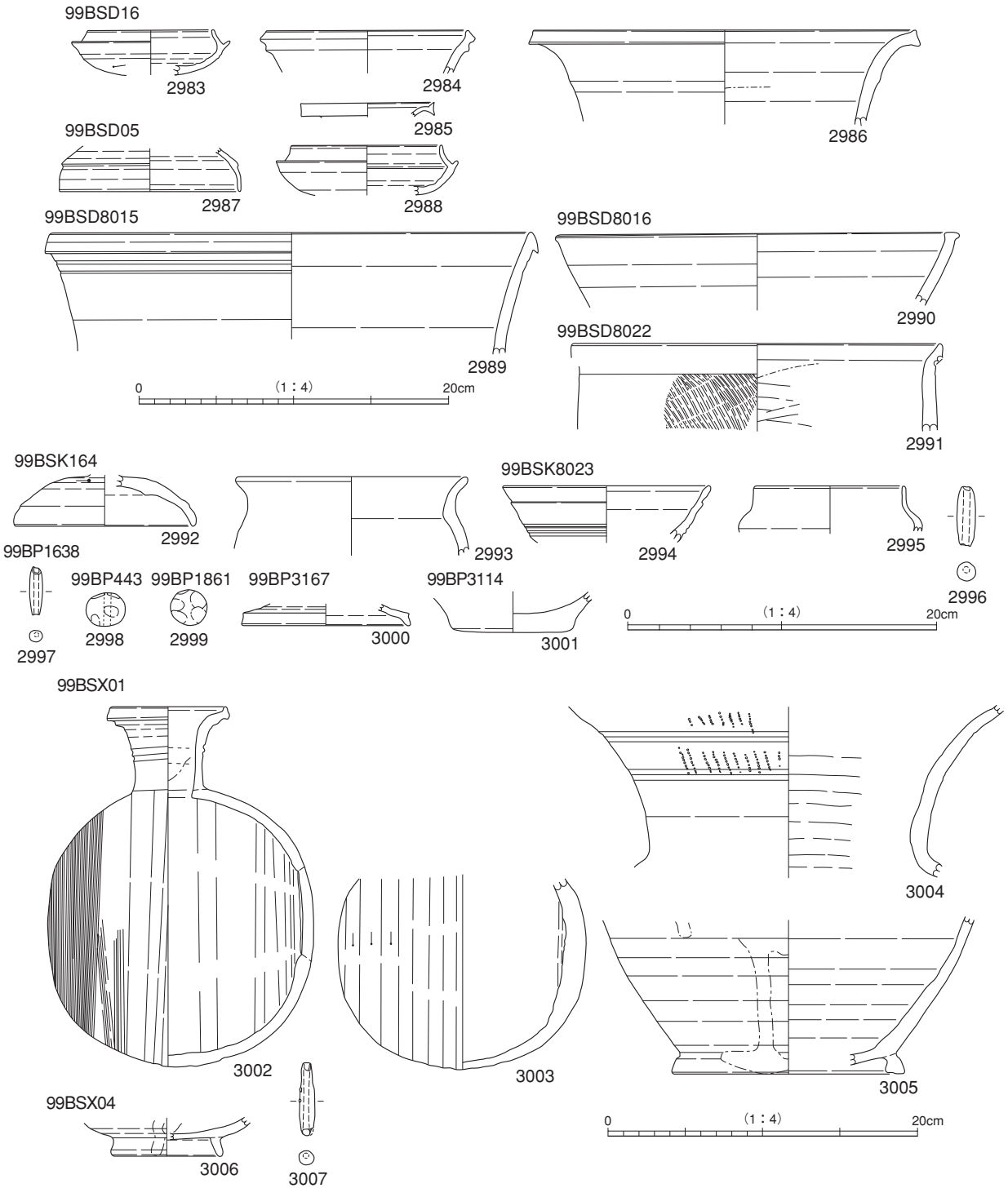
99B区土坑・ピット　998BSK164では須恵器杯蓋（2992）と土師器甕（2993）が共伴する。土師器甕は指ナデ調整か。99BSK8023は戦国時代の土坑であるが、古代の土器も多数みられる。2994は7世紀代の



第390図　99A区土坑・溝・その他出土土器実測図

高杯である。2996は管状土錘。土錘は99BP1638でも出土した。長さが5cm、最大径が1cmあり、7世紀代であろう。2998・2999は土製の玉（土玉）。直径約2cmで2998は孔が貫通しており土錘の可能性もある。指ナデとオサエで成形するが、2998は完全な球体ではない。3000は高杯脚部。3001は土師器甕の平底底部。

99BSX01　戦国時代の溝99BSD03に並行する東西土塁の上にかきあげられた土の中から出土した。したがって古代の廃棄地点からかなり移動しているとみられる。3002は比較的残存率のよいフラスコ瓶。



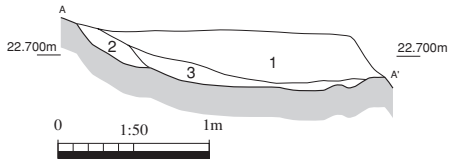
第391図　99B区土坑・ピット・SX01出土土器実測図

頸部に凹線1条が廻る。3003もフラスコ瓶。3004は大甕頸部で3002～3004は7世紀代。3005は長頸瓶で8世紀後半代。

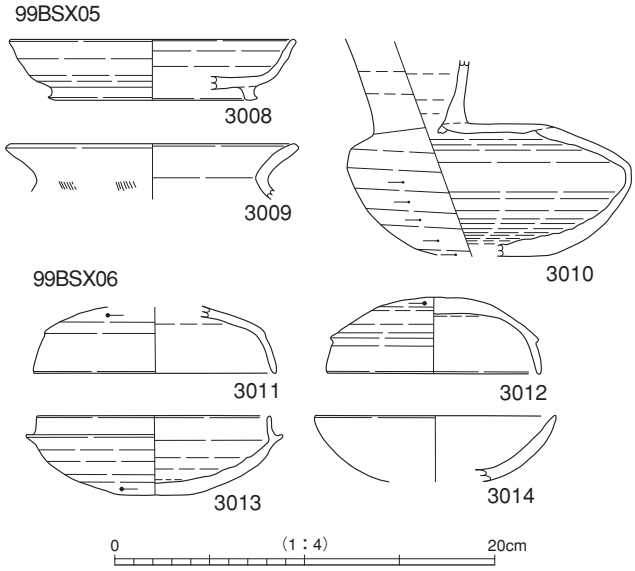
99BSX04　遺構は99BSD03を挟んで99BSX01とは対になる戦国時代の土塁。土塁の下層からは灰釉陶器椀（3006）と管状土錘（3007）が出土した。灰釉陶器はSK3014と関わるか。

99BSX05・06　99BSX05は大溝99BSD01とSD03の交差部にできた土坑で、戦国期の改作に伴うものであろう。古代の遺物も若干みえ、3009は土師器長胴甕にハケがわずかに残る。3010は須恵器平瓶で、近い時期と考えられる。99BSX06は大溝東土塁に掘られた土坑だが戦国期改作で上部が失われた。須恵器（3011～3014）は7世紀前葉が中心となろう。3014は土師器椀もしくは高杯。

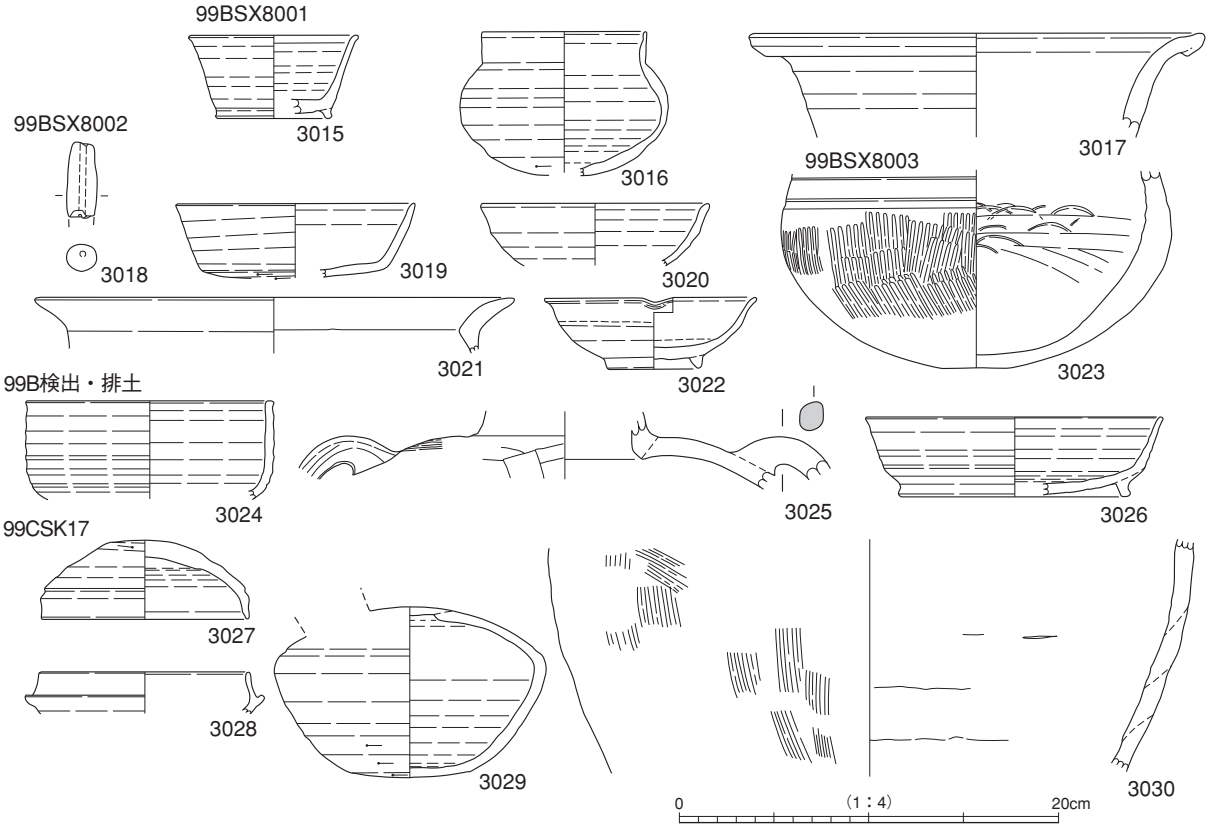
99BSX8001・8002・8003　大溝99BSD01西土塁を壊すように掘られた中世以降の溝状不明遺



1　2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルト
（粘質やや強し、円礫を多く含む）。
2　10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト。
3　5Y4/2灰オリーブ色粘質シルト（円礫を多く含む）。



第392図　99BSX05・06断面図と出土遺物実測図



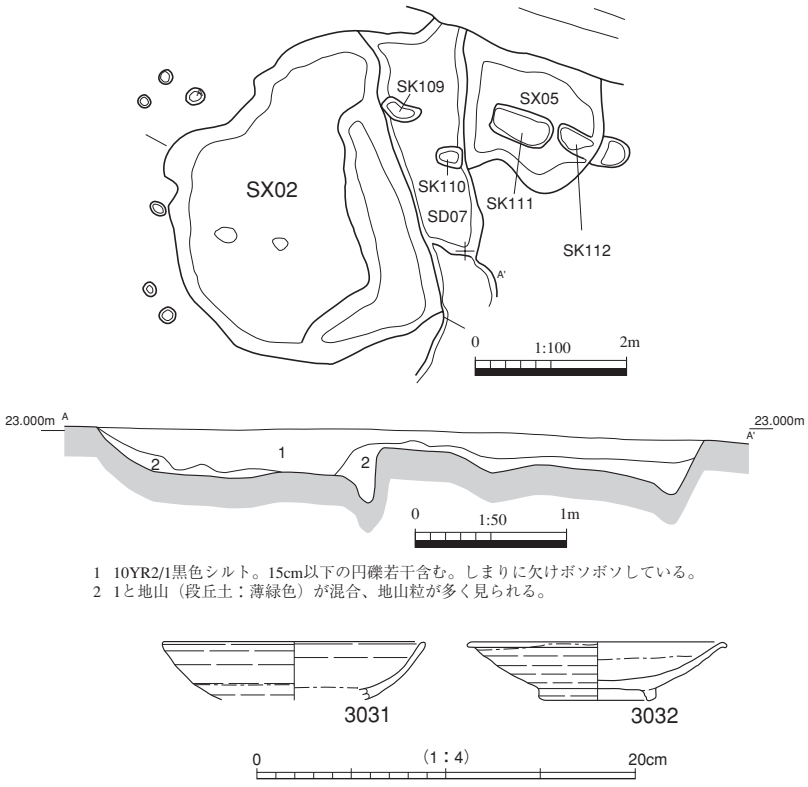
第393図　99BSX8001～8003・その他・99CSK17出土遺物実測図

構である。したがって古代の遺物は時期的にも雑多な入り方をする。3018は土錘だがやや太め。3022は完形の灰釉陶器椀で百代寺72号窯式。

99B検出・排土　遺構確認時に出土したなかには提瓶の把手部分がある（3025）。

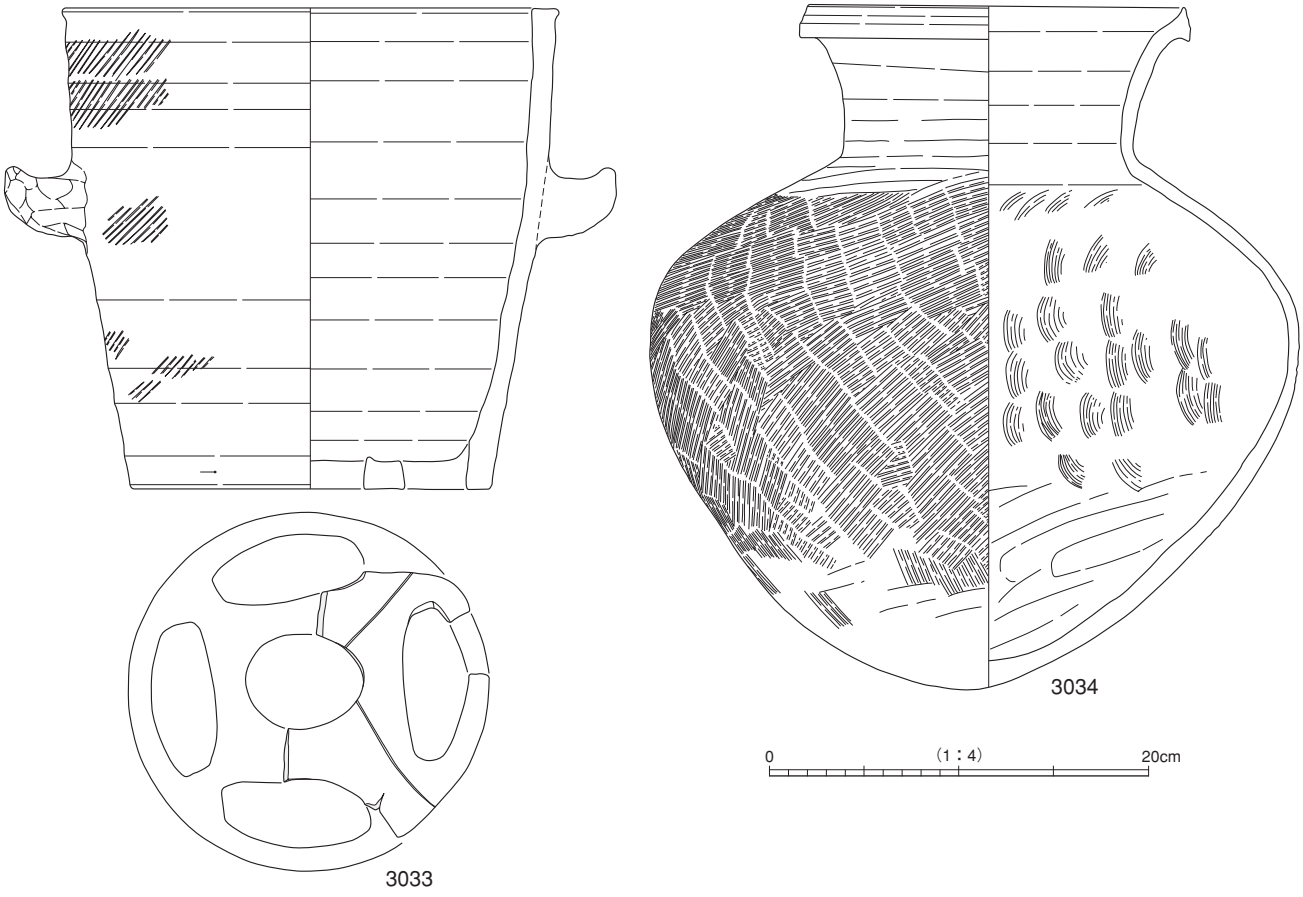
99CSK17　直径150cm深さ15cmの浅い皿状の土坑からは東山50号～岩崎17号窯式の須恵器が出土した（3027～3029）。3030は疎らなハケ調整甕もしきは甑。

99CSX02　調査区北東部にある不整形な土坑。遺物そのものは



第394図　99CSX02平面・断面図と出土土器実測図

99CSX06

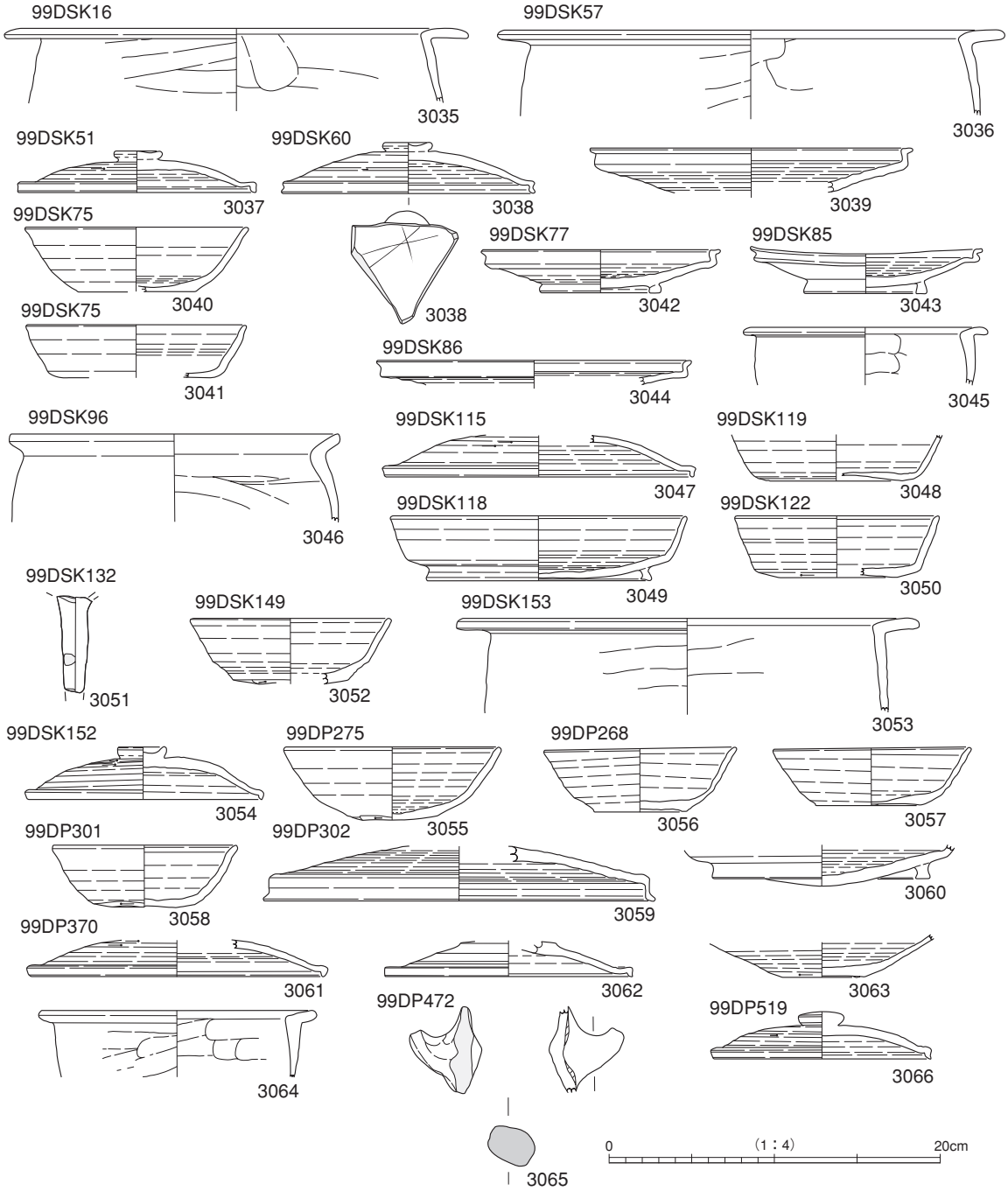


第395図　99CSX06出土土器

少なく灰釉陶器があるのみ。3032は玉縁口縁の皿で黒笹14号窯式である。

99CSX06　99CSX02の北約4mにある溝状の不整形な土坑である。須恵器甑（3033）と甕（3034）が混在して出土した。3034はほぼ完存状態で復元できた。大甕のような長めの頸部に対しやや小さめの胴部である。釉は全くない。一方甑は底部に5つの蒸気孔をもつ。穿孔前の目安線が引かれる。やや太めの胴部はタタキ痕がわずかにみえる。両者とも岩崎17号～高蔵寺2号窯式と考えられる。

99D区土坑・ピット　99D区では竪穴建物跡の他に土坑が多数見つかり、そこからも良好な状態の古代の遺物が出土した。概ね8世紀後葉～9世紀前葉である。99DSK86や99DP370では井ヶ谷78号窯式の

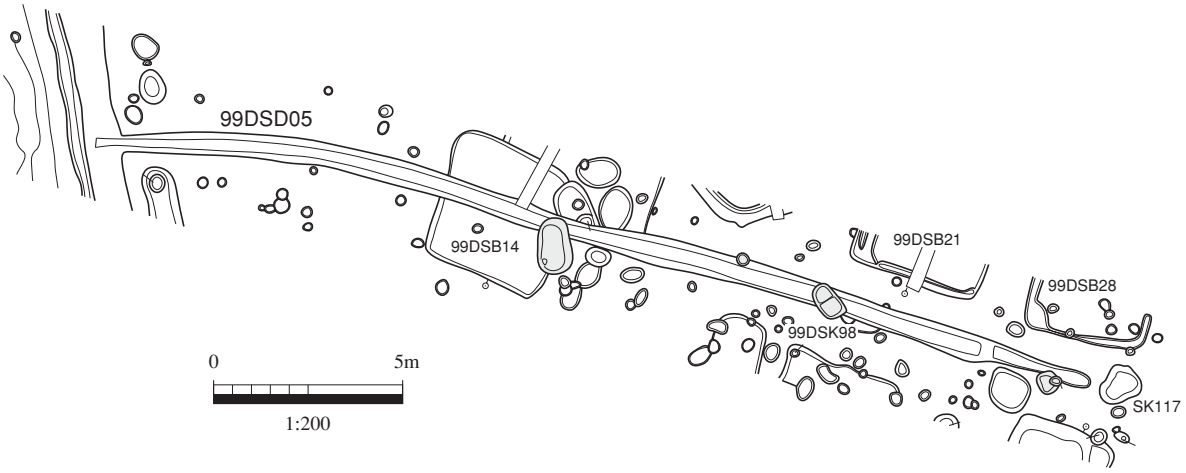


第396図　99D区土坑・ピット出土土器実測図

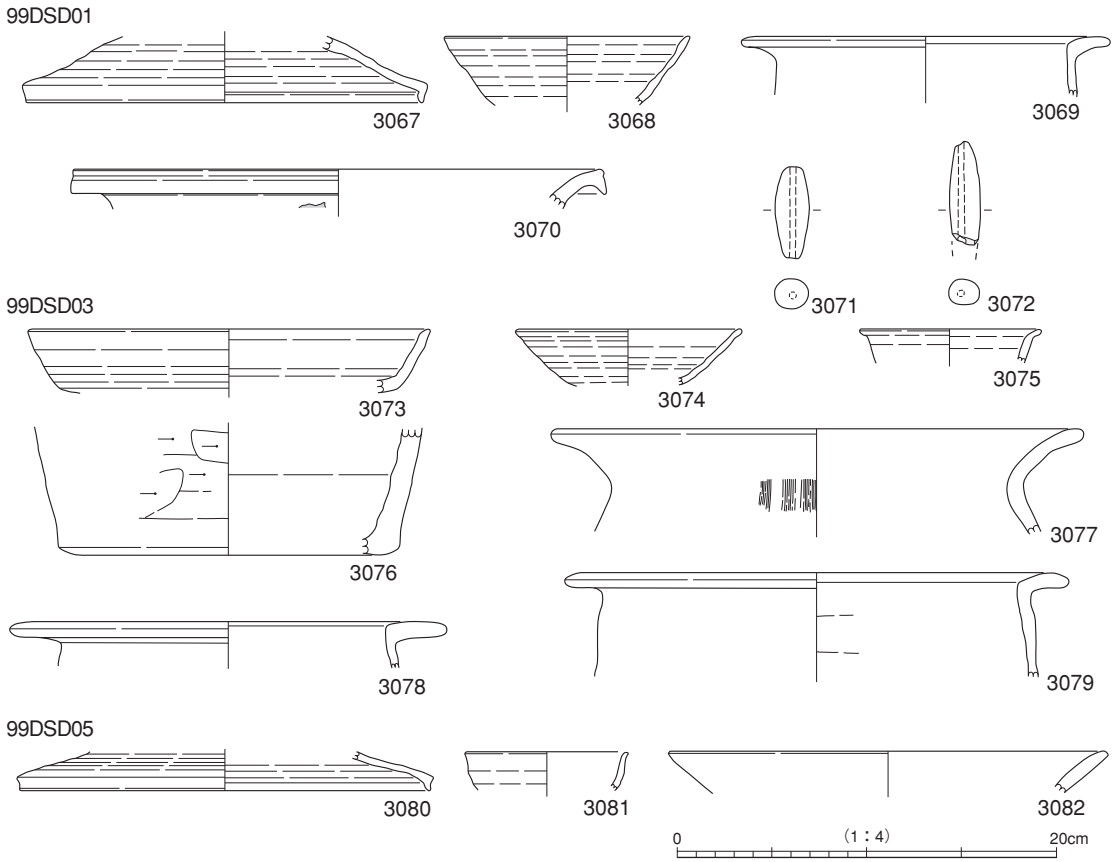
須恵器とやや口縁が短い三河型土師器（ナデ）甕の共伴が確認される。

99DSD01・03　99DSD01・03はどれぞれ98DSD02・35に続く戦国時代の区画溝である。竪穴建物を切り込むので古代の遺物を多数含む。3077は初現的な長胴甕で大きく開いた口縁にハケ調整が残る。

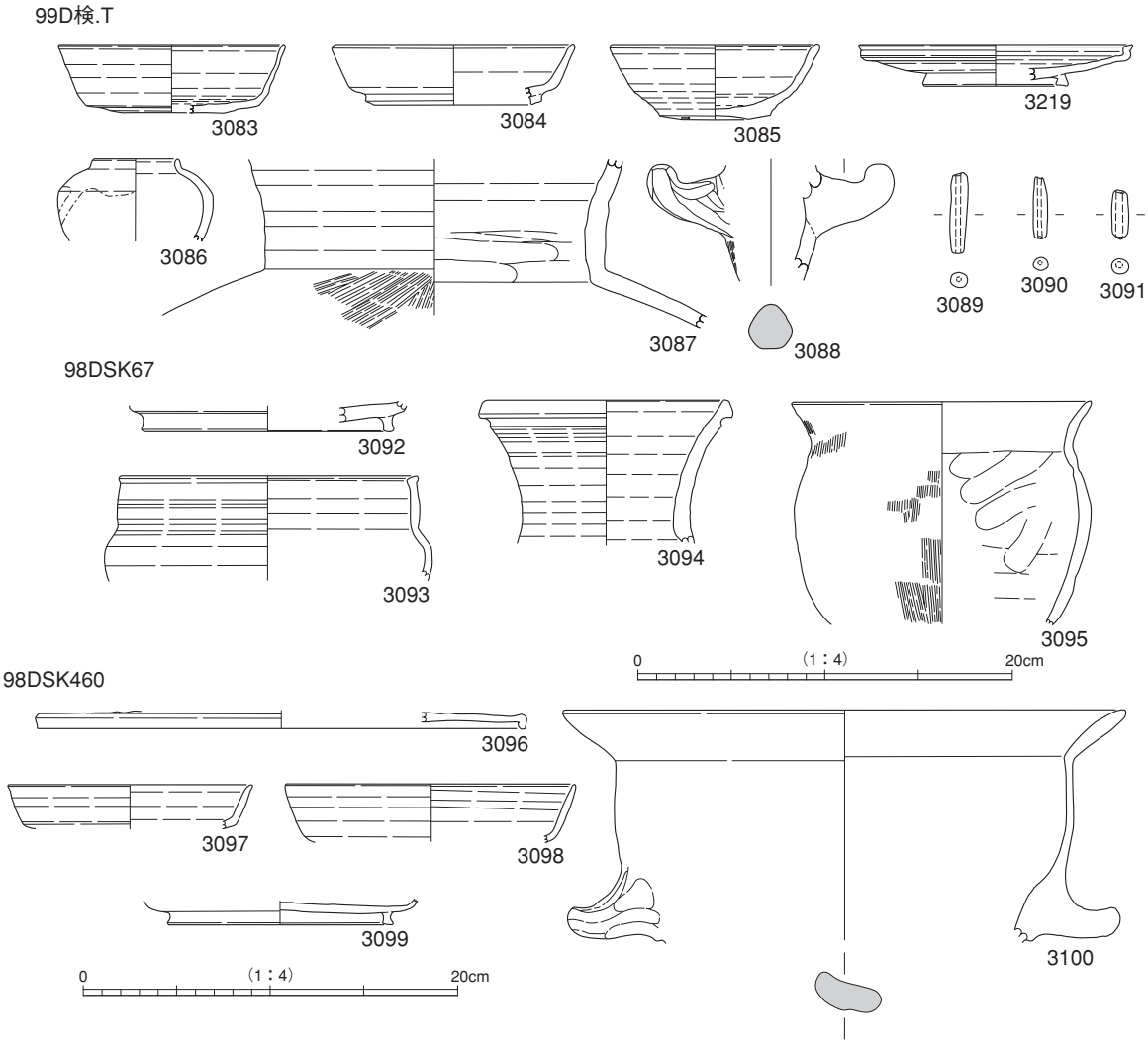
99DSD05　調査区の中央を東西に横切る全長26.6mの溝である。幅約1m深さ40cmの長方形に近い断面の素掘り溝で、状況から比較的短期間に埋没したものと考えられる。溝は99DSB14を切り込み、99DSB21・28の南約1.5mのところを通る。西端は谷地形99DSX01に接続し、東端は99DSB28付近で収



第397図　99DSD05平面図



第398図　99DSD01・03・05出土遺物実測図

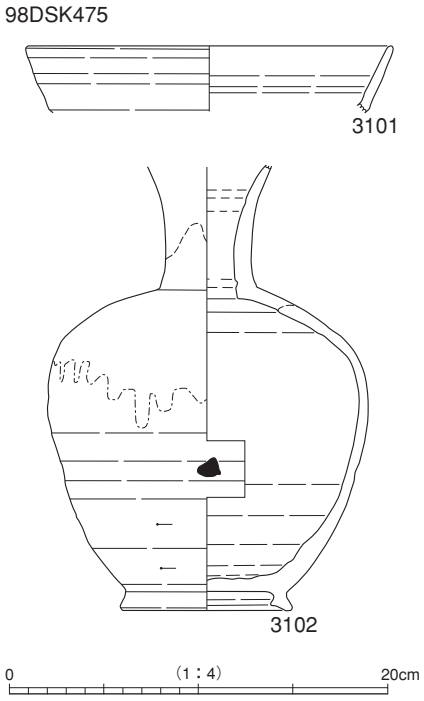


第 399 図　99D 区検出面・98DSK67・460 出土遺物実測図

束する。このことからSB28付近に出入口を設けた区画溝のひとつと考えられる。出入口の北には掘立柱建物群があり、これとの関わりが想定されよう。出土遺物がほとんどなく、図示した程度（3080 ～ 3082）で、中世に下らず 9 ～ 10 世紀代が想定できよう。

99D 区その他　遺構確認中に出土した遺物である。3086 は小型の短頸壺（薬壺）で上半に釉がかかる。3088 は甑把手でＬ字形に曲がるのが特徴。3089 ～ 3091 は管状土錘で、長さは 5cm 近くあるが最大径が 1cm に満たずに細長く、胎土中の砂粒が少ないのが特徴である。8 世紀後半以降の土錘と思われる。

98DSK67　調査区の北部で確認された土坑である。7 世紀末～ 8 世紀前葉を中心とする土器が出土した。3095 は小型甕でくびれの少ない口縁と胴部外面のハケが特徴で



第 400 図　98DSK475 出土遺物実測図

ある。

98DSK460　調査区の南部で確認された土坑である。8世紀前葉の須恵器に土師器鍋（3100）ががが共伴する。鍋は指ナデ調整で、口縁が大きく外反するのが特徴である。

98DSK475　調査区中部東壁近くにある土坑である。3102は表土除去時に出土したもので、出土時は横位で胴部は内容物がなく空洞であった。頸部上端を欠き胴部に穿孔が認められる。諸特徴から鳴海32号窯式の長頸瓶と判断される。本調査区では古代の土器は細片化して出土する傾向にあり、後述する98DSK53と同様意図的な埋納が想定できよう。3101はその長頸瓶の下から出土した須恵器杯小片で、直接関わりはないと思われるが近い時期のものである。

98D区土坑　98D区の土坑には中世の竪穴建物や土坑墓も含まれる。古代の一括性の高い遺物は先に示した通りだが、それ以外にも良好な状態で出土したものが多数ある。3104は98DSK53から正位で置かれたような状態で出土した。SK53は竪穴建物SB02の覆土に掘られた土坑である。頸部は付け根できれいにカットされる。高蔵寺2号窯式である。胎衣壺もしくは火葬墓の可能性が考えられる。SK354（3114～3116）では折戸10号窯式の須恵器と三河型土師器甕の共伴事例がある。3116に比べて3117（98DSK356）は口縁が上向きになりこれがより新相であろう。3122は高蔵寺2号窯式の平瓶である。98DSK477の土師器甕2点（3130・3131）は指ナデ調整仕上げの大小の甕である。長めの口縁が大きく外反するのが特徴で竪穴建物でも事例から8世紀前葉と考えられる。3133は杯の底部外面になされた焼成前刻書で、稲妻のような記号である。

98DP37　8世紀前葉を中心とする土器が出土した。3136は瓶であろう。3137は当該期の土師器長胴甕である。

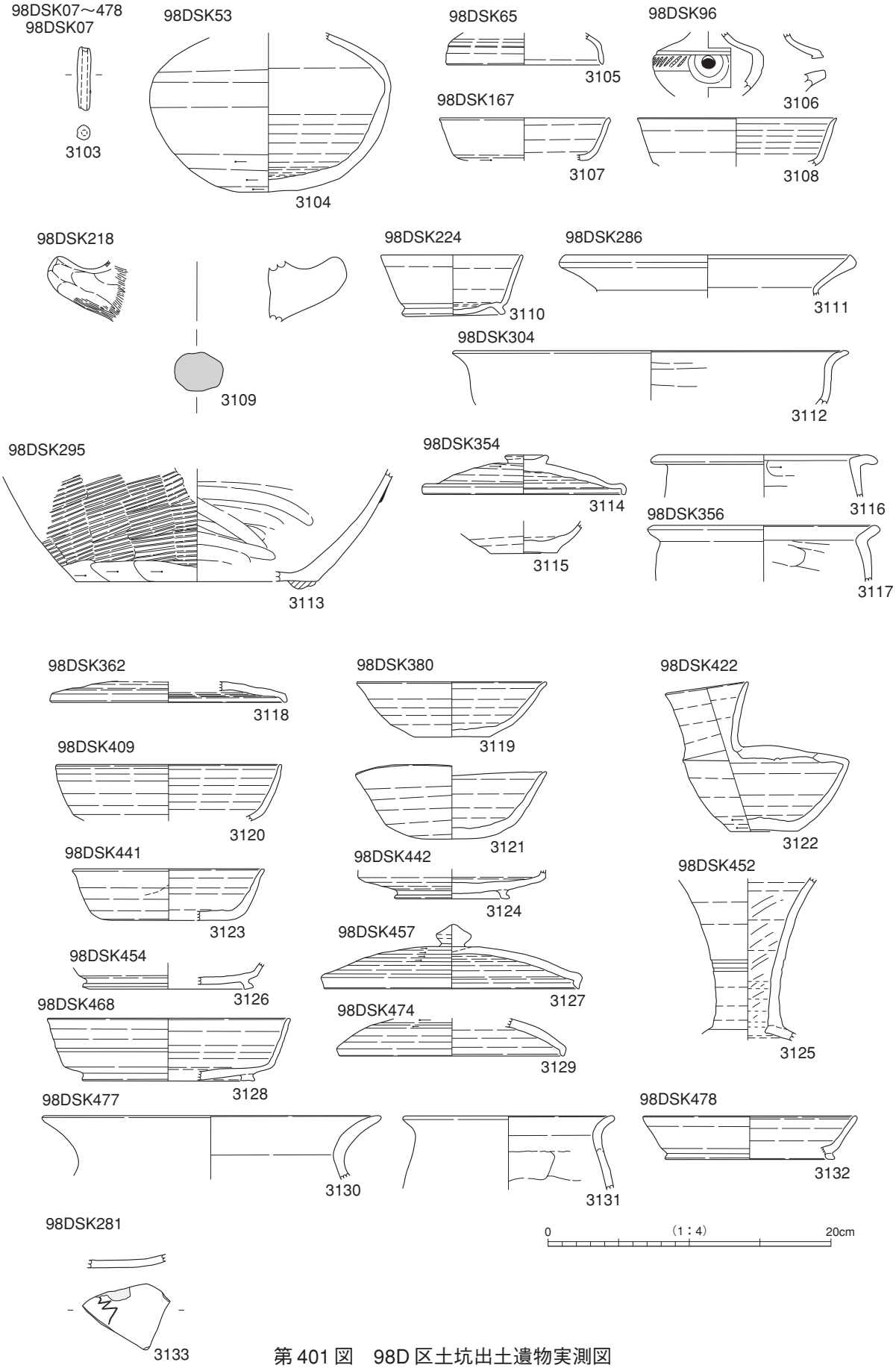
98D区ピット　土坑より小さい穴からの出土である。3138は有台盤で鳴海32号窯式。3139も同じ頃のものであろう。98DP2180ではほぼ完形の蓋（3147）と有台盤（3148）が共伴する。出土状況から柱を抜き取った跡に投棄されたような状態である。折戸10号窯式である。3146は高盤脚部。水入遺跡では高盤の出土は少数とみられる。3141～3143は管状土錘。3143は太いうえに不整形とあって異質な印象がある。製塩土器（3144・3145）は竪穴建物覆土からまとまった量の出土（98BSB16など）とは違いピットや検出面からの出土は少ない。

98DSD01・02・34・35　古代集落や中世墓域を切り込む戦国時代に掘削された方形区画溝である。したがって古代の遺物も多い。3150は盤。3152は長頸瓶で8世紀中葉。3160はこね鉢もしくは甑である。

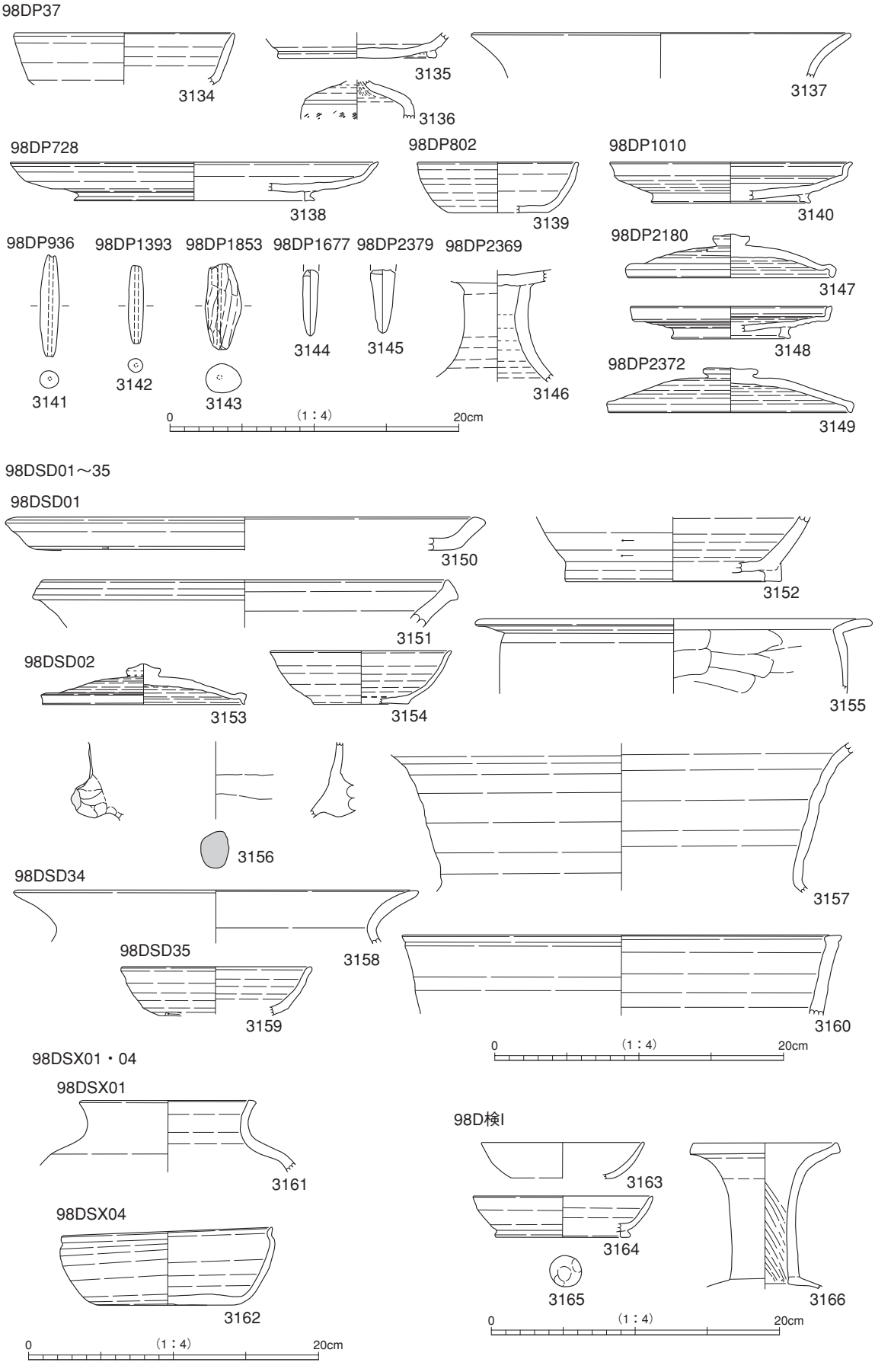
98DSX01・04　98DSX04は調査区中部東壁近くで確認されたごく小さい谷地形である。古代集落に面していることから集落からの廃棄物が多いかと予想されたが意外に少なく、集落の「オモテ」であった可能性も考えられる。古代土器では鉢（3162）が出土した程度である。鳴海32号窯式とみられる。

98D検出面　検出面における古代の遺物はごく細片がほとんである。3166は長頸瓶、3165は土玉である。

99ESK475　99ESH01の北で確認された長軸2.6m短軸1.6m深さ32cmの不整形な土坑である。古代の廃棄坑と考えられ、一括性の高い土器が出土した。3167・3168は有台杯、3170は高盤、3171・3172は三河型土師器甕である。須恵器は折戸10号窯式である。注目されるのは3173・3174で、内面に黒色の付着物がある。分析はおこなっていないが漆の可能性が考えられる。共に軟質な焼成であるが須恵器であろ



第 401 図　98D 区土坑出土遺物実測図

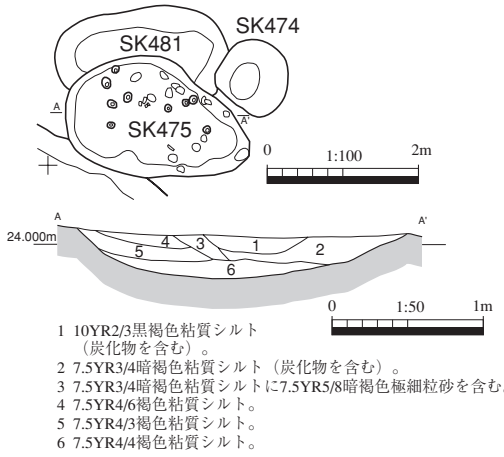


第 402 図　98D 区土坑・ピット・その他出土遺物実測図

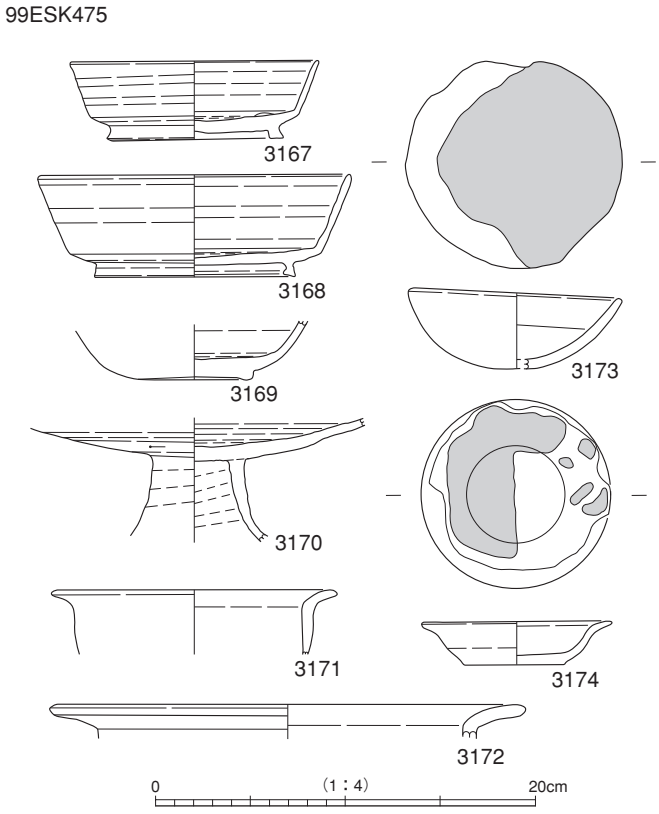
う。3173は丸底の椀で付着物は厚い。3174は98B2SD01の1260・1261と同様口縁が外反する皿で底部は糸切痕のままである。こちらの付着物はややかすれ気味である。ちょうど3173が容器で3174がパレットのような組み合わせになるのではないか。いずれにせよ99ESH01の性格とも関わってこよう。

99E区土坑　3176は金属器写しの椀で高蔵寺2号窯式～鳴海32号窯式。3179は円面硯脚部で、折戸10号窯か。水入遺跡では唯一の円面硯である。3177は高蔵寺2号窯式、3178は8世紀中葉で、全体的に99E区では9世紀代まで時期が下るものはないと考えられ、集落の展開から8世紀代に限定されるであろう。

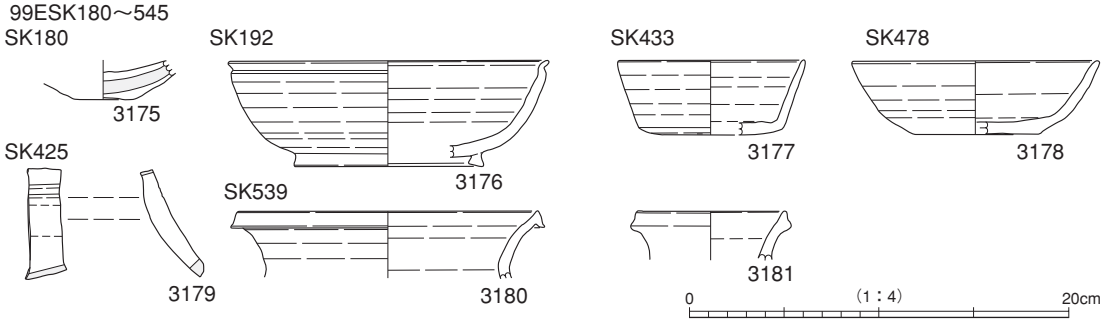
99GSK16　濃尾系の土師器ハケ調整長胴甕（3182）と須恵器（3183・3184）の共伴事例である。3183は高杯の杯部かもしれない。須恵器は7世紀後半と考えられる。濃尾系長胴甕そのものは水入遺跡では少数に過ぎず、7世紀後半～8世紀前葉に時期も限定されるようである。3182は外面に縦方向ハケ、内面は口縁下部に横方向のハケで、胴部は指ナデである。口縁部で肥厚し緩く外反する。99G区ではここ以外にも



1 10YR2/3黒褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
2 7.5YR3/4暗褐色粘質シルト（炭化物を含む）。
3 7.5YR3/4暗褐色粘質シルトに7.5YR5/8暗褐色極細粒砂を含む。
4 7.5YR4/6褐色粘質シルト。
5 7.5YR4/3褐色粘質シルト。
6 7.5YR4/4褐色粘質シルト。



第403図　99ESK475平面・断面図と出土土器実測



第404図　99E区土坑出土土器実測図

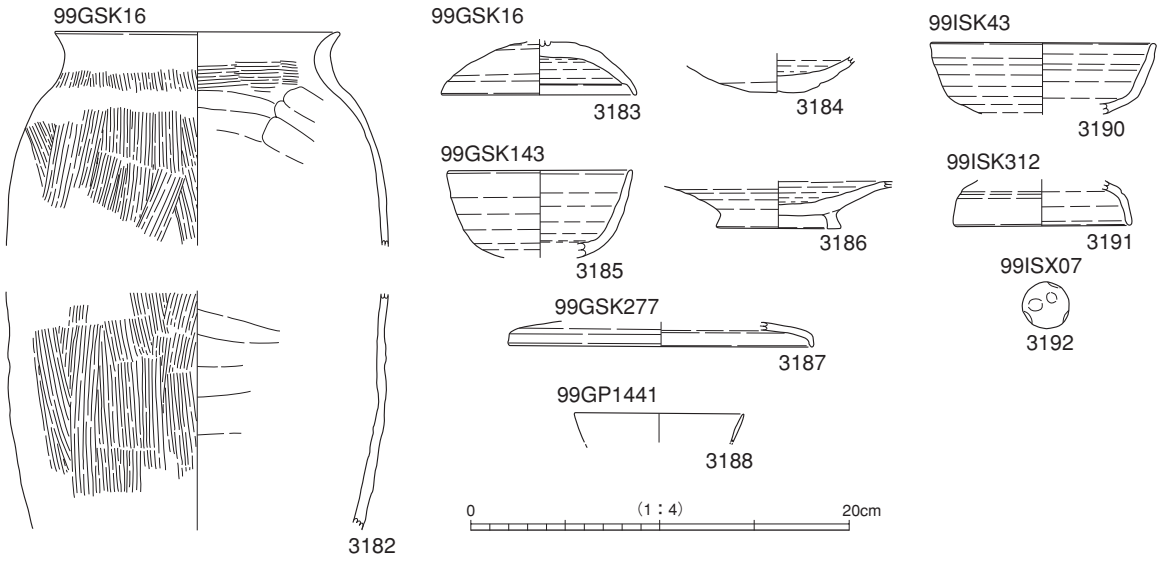
99GSB28で濃尾系長胴甕が出土しており、下槽目地区全域をみても限定的であるのは注目できよう。

99G区土坑　3186は有台盤で8世紀中葉とみられる。3187は蓋で8世紀前葉。3188は製塩土器の杯部である。水入遺跡で出土した製塩土器杯部はいずれも熱を受けて赤褐色～ピンク色に変色している。

99I区　99H・I・J区では古代の遺構・遺物ともに希薄になる。特に99H区は近現代に工作機械によって削平され98D区や99I区と一連の平坦地のようになっていて、古代～中世の遺構は全く検出されなかった。当該期にあっては、集落の後背のより高位な地点となっていたと推測されよう。99I区では中世の遺物に混じって古代の遺物が若干出土した。3191は杯蓋で7世紀中葉か。このように99G・I区では、7世紀後半の遺物が散見されるのが98D区や99K区との違いである。ただその数量はわずかで、当該期の竪穴建物跡は検出されていないことから、集落域となっていた可能性は低い。3192は土玉であるが、中世の可能性もあろう。

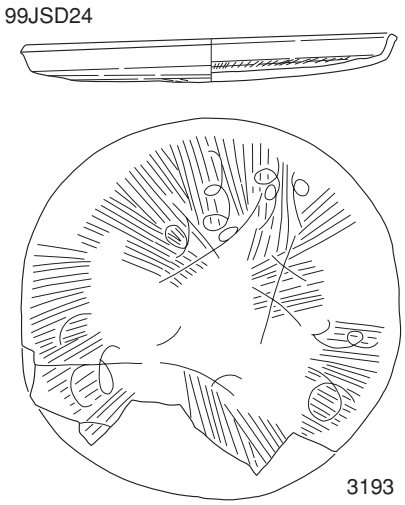
99JSD24　近世の溝であるが、ここから古代の土器が1点だけ出土した（3193）。出土状況は破砕されてはいたがまとまって出土し、70%以上復元できた。3193は須恵器皿（盤）であるが、その最大の特徴は内面の暗文にある。放射状の暗文の上に不規則な配置の暗文がある。形状は直立気味の口縁端部をやや丸みをのこして面取りする。焼成は硬質であるが胎土がマーブル状を呈する。8世紀代と推測されるが類例に乏しく確証がない。出土地点近くには99JSB01や掘立柱建物もあり、これらとの関わりも考えられる。

99K区土坑　下槽目B地区となる99K区は竪穴建物跡以外からも多数の古代土器が出土した。一部は中世土坑墓に混じったものもある。3194はかえり付き蓋で、7世紀末。99K区の中では古相に位置する。3196はハケ調整の土師器鍋で7世紀末か。3200は鉄鉢である。99KSK1931では8世紀前葉～中葉の須恵器椀（3203）に三河型土師器甕（3204）が共伴する。3208は折戸10号窯式とみられる。8世紀後葉の遺物は少数である。3210は製塩土器杯部である。。3213は土師器長胴甕の初現的なタイプであろう。外面にハケ調整と指ナデ調整が混在する。3215～3218は8世紀前葉。3219は管状土錘。しかし最大径が太

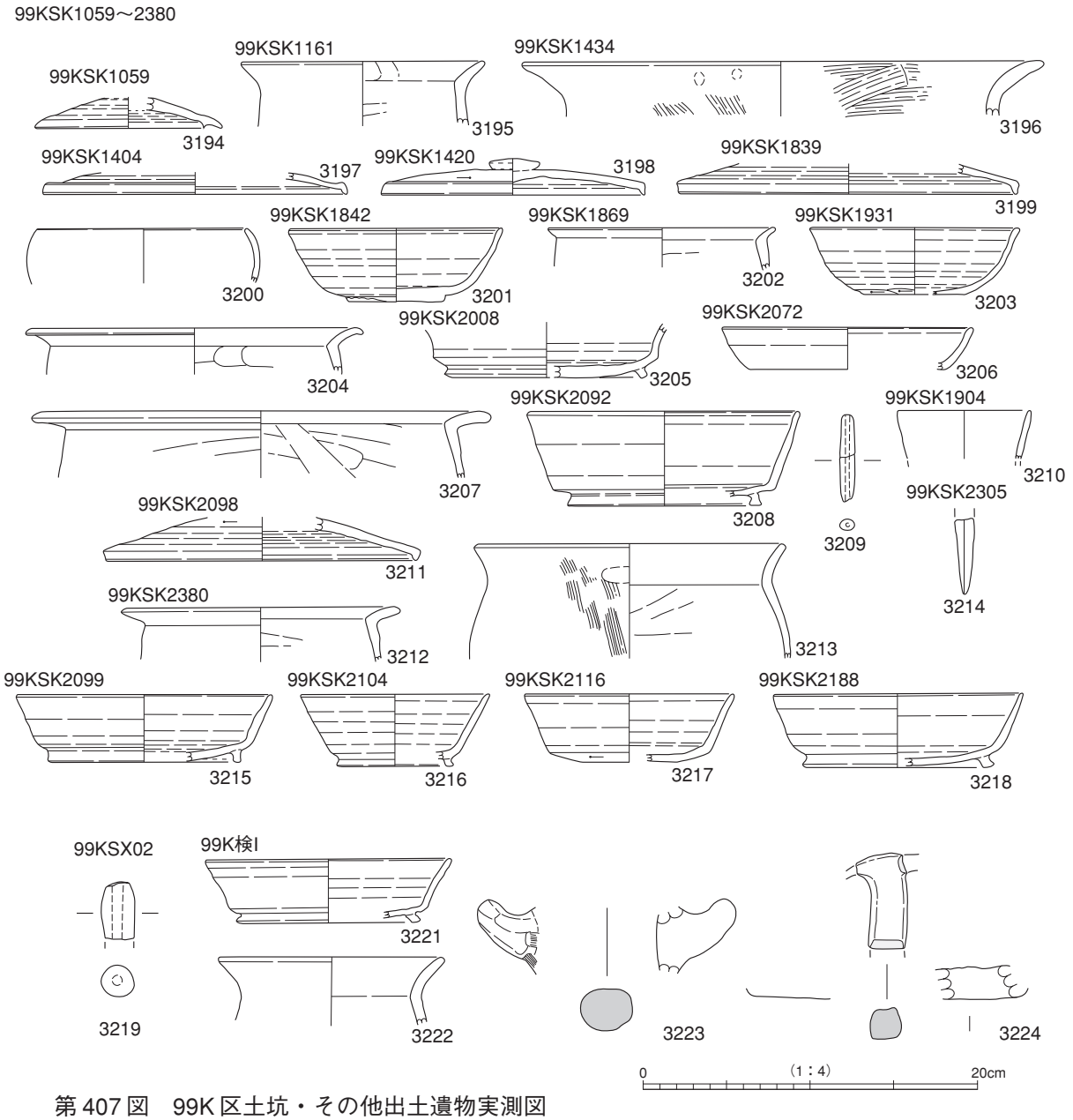


第405図　99G区土坑出土遺物実測図

く（2.0cm）、標準的な長さ5cm最大径1cm前後のタイプとは異なる。太めのタイプは矢作川下流で多い。3224は甑の底部（蒸気孔の横桟）である。



第406図　99JSD24出土遺物実測図



第407図　99K区土坑・その他出土遺物実測図